

樋口慶千代著

傑作淨瑠璃集

隆盛時代

大日本雄辯會講談社版

凡例及び底本

一、本書は近松時代篇（本書では之を上卷とする）の後を受けて、淨瑠璃の隆盛時代を含み、古來大衆に最もよく親しまれてゐる優秀な曲の中から、余が観る所に從つて拔萃し、之を時代順に排列したものである（之を下卷とする）。

一、それ等の名曲に就いて、解題・作者傳・實説（又は出處）・影響・登場人物・梗概・評註・追考などの項目に分けて、所要の事項を詳説した。中でも最も力を注いだのは註釋である。勿論一篇の趣意を把握するのも大切な事であるが、其の基礎をなす語句を正しく深く理解する事は、更に大切な事であると信ずるからである。

一、地名には變遷があつて、殊に支那の地名などは、之を現今の地名に當てては、却つて分りにくい場合もある。よつて必らずしも現今の地名に限らず、最も分り易いと思ふ地名に從つた。

一、院本の用字例は甚だ蕪雜である。卽ち當字・誤字や、假名遣などの語法の誤がざらにある。送り假名も不足がちである。ここに於て誤字、及び誤解を招き易い當字を訂した。そして誤讀の慮がない限り假名を漢字に當て、振假名を施したりしたものもある。また會話の文には「　」を附加へた。そして註釋を極めて多くした。斯くしたのは丁寧親切を旨として、大衆に愛讀して戴く事を希ふからである。

一、假名遣・語法は總て底本を尊重して改めない。假名を漢字に書替へても、底本の假名を其の儘振假名にして殘して置いた。これは其の昔の讀癖を粗略にせぬ爲であり、且はさかしら事といはれるを氣遣つたからである。故に本書は大體底本の姿を其の儘に存せるものである。

一、句切も底本に從つた。これは語り物として間隔を示し、其の間に人形の所作の入る場合もある。然るに讀物として

句切を改めては、淨曲としての價値を毀損するからである。

一、地・フシ・三重、其の他種々の音曲上の語なども、總て底本の通りにしようとして苦心したものである。故に一見錯雜に見えても、それは決して疎略にしたものではない事を知つて戴きたい。本書は總て印刷の許す限り、底本を嚴守したものである事を重ねて申して置く。

一、本文中に※を附けた語句は之を拔出し、○を附して頭註を施した。◉を附けたものは、之を卷末に五十音順に排列し、更に詳解を加へて追考とした。◇を附けたのは、其の下の本文に對する評である。

一、頭註に拔出し、又は追考とした語句は、本叢書全般の索引中に五十音順に編入した。この別卷索引は江戸時代語の辭書たらしめようとしたのである。

底本は次の書に據り、他の古院本をも參考した。

逆櫓松 矢箙梅 ひらかな盛衰記　文耕堂等撰　竹田出雲掾淸定正本　七行本

卷末に「元文四己未歳四月十一日　作者連名　文耕堂、三好松洛、淺田可啓、竹田小出雲、千前軒」とある。

團七九郎兵衞 釣船三婦 一寸德兵衞 夏祭浪花鑑　並木千柳等撰　竹本重太夫重政正本　七行本　加嶋屋清助版

卷末に「延享第二孟秋十六日　作者　並木千柳、三好松洛、竹田小出雲」とある。そして竹本重太夫重政の跋文と版元とが刻してある。

菅原傳授手習鑑　竹田出雲、並木千柳等撰　竹本筑後掾高弟直傳　七行本　吉川宗兵衞新版

卷末に「延享三年寅八月廿一日　作者連名　並木千柳、三好松洛、竹田小出雲」とある。そして竹本筑後掾高弟

及び竹田因幡掾清宜の跋文と、版元とが刻してある。

大物船矢倉
吉野花矢倉 義經千本櫻　竹田出雲等撰　正本　十行本　菱屋治兵衞新版

巻末に「延享四丁卯年霜月十六日　作者　竹田出雲、三好松洛、並木千柳」とある。そして跋文に太夫直の正本を以て版行した事を記し、版元が刻してある。

假名手本忠臣藏　竹田出雲等撰　正本　七行本

巻末に「寛延元年辰八月十四日　作者　竹田出雲、三好松洛、並木千柳」とある。そして太夫の跋文と版元とが缺損してゐる。

一谷嫩軍記　並木正三等撰　豐竹越前少掾　豐竹筑前少掾直傳　十行本　菊屋七郎兵衞版

巻末に「寶曆元辛未天臘月十一日　作者　淺田一鳥、浪岡鯨兒、並木正三、難波三藏、豐竹甚六、故人並木宗輔」とある。

武田信玄
長尾謙信 本朝廿四孝　近松半二等撰　竹本筑後掾直傳　七行本　玉水源次郎新版

巻末に「明和三年丙戌正月十四日　作者近松半二、三好松洛、竹田因幡、竹田小出、竹田平七、竹本三郎兵衞」とある。

關取千兩幟　近松半二等撰　竹本義太夫博敎正本　七行本　紙屋與右衞門版

巻末に「明和四年亥八月四日　作者連名　近松半二、三好松洛、竹田文吉、竹田小出、八民平七、竹本三郎兵衞」とあつて、淨瑠璃太夫連名を載せてある。そして竹本義太夫博敎の跋文と、版元とが刻してある。

傾城阿波の鳴門　近松半二等撰　正本　十行本

巻末に「明和五年戊子六月朔日　作者連名　近松半二、八民平七、寺田兵藏、竹田文吉、竹本三郎兵衞」とある。

近江源氏先陣館　近松半二等撰　竹本義太夫博教正本　七行本　山本九兵衛等版

巻末に「明和六己丑年十二月九日　作者　近松半二、八民平七、三好松洛、竹本三郎兵衛」とあつて、淨瑠璃太夫連名を載せてある。そして竹本義太夫博教の跋文と、版元とが刻してある。

神靈矢口渡　福内鬼外撰　豊竹新太夫直傳　七行本　大坂北堀江市之側綿屋喜兵衛板

巻末に「明和七年寅正月十六日　福内鬼外戯作　補助　吉田冠子　玉泉堂　吉田二一」とある。

（十三鐘　絹懸柳）妹背山婦女庭訓　近松半二等撰　竹本義太夫博教正本　七行本　山本九菓亭等版

巻末に「明和八辛卯年正月二十八日　作者連名　近松半二、松田ばく、榮善平、近松東南、後見行年七十六歳三好松洛」とある。そして博教の跋文及び版元が刻してある。

（美濃や三勝　あかねや半七）艶容女舞衣　竹本三郎兵衛等撰　豊竹嶋太夫、豊竹岡太夫直傳　七行本　阿波屋平七新板

奥に「安永元壬辰年十二月二十六日　作者連名　竹本三郎兵衛、豊竹應律、八民平七」とある。

（おはん　長右衛門）桂川連理柵　菅専助撰　豊竹此太夫正本　七行本　佐々井治郎衛門版

巻末に「作者菅専助　安永五丙申歳十月十五日」とある。

（おそめ　久松）新版歌祭文　近松半二撰　正本　七行本

巻末に「安永九庚子年九月二十八日」とあつて、淨瑠璃太夫竹本組太夫等十五名を載せてある。

伊賀越道中雙六　近松半二、近松加作撰　竹本義太夫博教正本　七行本　加嶋屋清助版

巻末に「天明三癸卯年四月廿七日　作者　近松半二、近松加作」とあつて、淨瑠璃太夫役割が載せてある。そして竹本義太夫博教の跋文と、版元とが刻してある。

伽羅先代萩　松貫四等撰　豊竹若太夫等正本　七行本

巻末に「天明五年巳正月　作者松貫四、高橋武兵衛、吉田角丸」とある。

おしゅん伝兵衛　近頃河原の達引　豊竹此太夫正本　七行本

巻末に「右浄瑠璃は天明二の春云々　天明五乙巳年九月九日　中村重助再撰」とある。

七行の別本は、「巳五月五日　作者　為川宗輔、筒井半二、奈河七五三助」の跋文がある。

御陣九州地理八道　彦山権現誓助剱　梅野下風、近松保蔵撰　竹本義太夫博教正本　七行本　加嶋屋清助版

巻末に「天明六年午閏十月十八日　作者　梅野下風、近松保蔵」とあつて、浄瑠璃太夫連名を載せてある。そして竹本義太夫博教の跋文と、版元とが刻してある。

絵本太功記　近松柳等撰、豊竹若太夫、豊竹此太夫正本　七行本　西澤九葉軒等版

巻末に「寛政十一年未七月十二日　安政二年卯八月再版　作者當豊竹東竹田兩座兼帯近松やなぎ、近松湖水軒、千葉軒」とある。

増補生写朝顔話　山田案山子遺稿、翠松園主人校補　竹本重太夫直傳　七行本　加嶋屋清助版

巻末に「嘉永三載戌正月發板　清書和田正兵衛、同幸次郎筆」とある。

傑作淨瑠璃集 下

目次

凡例及び底本

ひらかな盛衰記（逆櫓松　矢箙梅）……一

夏祭浪花鑑（團七九郎兵衛　釣船三婦　一寸德兵衛）……三九

菅原傳授手習鑑……八五

義經千本櫻（大物船矢倉　吉野花矢倉）……一二五

假名手本忠臣藏……二〇一

一谷嫩軍記……二四一

本朝廿四孝（武田信玄　長尾謙信）……二八三

關取千兩幟……四〇七
傾城阿波の鳴門……四二九
近江源氏先陣館……四五三
神靈矢口渡……四八七
十三鐘 絹懸柳 妹背山婦女庭訓……五一九
美濃や三勝 あかねや半七 艶容女舞衣……五七一
おはん 長右衛門 桂川連理柵……五九九
おそめ 久松 新版歌祭文……六二三
伊賀越道中雙六……六四五
伽羅先代萩……七〇七
おしゆん 傳兵衛 近頃河原の達引……七二九
[illegible] 彦山權現誓助劔……七六一

繪本太功記 …… 八〇一

増補 生寫朝顔話 …… 八三一

追考 …… 八七一

題簽　安田靫彦

裝幀　小村雪岱

逆櫓松
矢箙梅

ひらかな盛衰記

解題

元文四年四月十一日から初めて大阪の竹本座に上演された。作者は文耕堂・三好松洛・淺田可啓・竹田小出雲・千前軒である。

本曲は五段に分れ、源平の戰を戯曲に仕組んだものの中で「一谷嫩軍記」と共に最も名高いものである。殊に第三は詞章麗しく技巧の妙を得て、本曲中壓卷の場面である。

作者

文耕堂は松田和吉の號である。竹本座の淨瑠璃作者で「戯財錄」に當時紀海音・千前軒(竹田出雲)・並木宗輔と共に淨瑠璃作者の四天王と稱された由が見えてゐる。彼が名を記した最初の物は「河内國姥火」(正徳三年正月二日から初めて竹本座に上演)で、其の終りの物は「新薄雪物語」(寛保元年五月十六日から初めて竹本座に上演)であつて、作者として彼一人の記名あるもの五種、他の人と共に名を連ねたもの十九種ある。其の中で「大塔宮曦鎧」「須磨都源平躑躅」「鬼一法眼三略卷」「壇浦兜軍記」「敵討襤褸錦」「ひらかな盛衰記」などは有名な作である。

三好松洛の傳は後の「夏祭浪花鑑」の所に述べてある。

竹田小出雲は千前軒(竹田出雲)の子であつて、佳作に「新薄雪物語」「軍法富士見西行」「日高川入相花王」などもある。

千前軒(竹田出雲)の傳は「菅原傳授手習鑑」の所に述べてある。

出處

本曲は宇治川の先陣、粟津が原の戰、樋口兼光の最期、生田の森、一谷の戰、逆艪の議等の軍記物語を材料として戯曲に仕組んだものである。

主要人物の略傳

源義經は義朝の第九子、元暦元年正月兄賴朝の命を受け、木曾義仲の軍を宇治川に破り、進んで京都に入つた。二月平氏を一

谷に攻め、鵯越の險を越え突撃して之を陷れ、文治元年正月平氏を鎭西に討たうとして、舟師を渡邊福島に治めた時、梶原景時の逆艣の議を黜けたので、景時これを銜み、義經は將帥の器ではないと誹つた。義經怒つて景時を拔打にしようとした所を、三浦義澄等の執成しで事無く濟んだが、遂に景時の讒言に陷れられることとなつた。

梶原平三景時は賴朝の寵を恃んで義經の心に逆ひ、元暦元年二月範賴に屬して平氏の居城一谷の東門生田の森に向ひ、敵を切捲り兵を斂めて退いた。是時梅花を折つて箙に挿してゐたので、（箙の梅は「源平盛衰記」などには景時になつてゐるが、謠曲「箙」には景季の事になつてゐる）見る者その風流を稱した。文治元年正月福島で義經に逆艣の法を勸めて怒に觸れ、之を銜んで遂に義經を賴朝に讒訴した。

梶原源太景季は景時の長子。義經の軍に屬して宇治川の戰に佐々木高綱に先陣を越された。元暦元年二月一谷の東門生田の森の戰に、父と共に力戰して敵將菊地高望を斬る。

梶原平次景高は景季の弟、一谷の戰に城門に薄つて力戰した。

木曾義仲は世に朝日將軍といふ。壽永二年平氏を追落して京師に入り、狂暴の行が多かつたので後白河法皇の厭ひ給ふ所となつた。元暦元年正月範賴・義經の軍漸く逼つたので、諸將を分つて之を宇治・勢多に防がしたが利なく、遂に粟津が原の戰に敗れて、今井兼平等と共に自刄した。行年三十一。

山吹御前は義仲の妾である。「平家物語」木曾の最期の條に、「木曾は信濃を出でしより巴・山吹とて二人の美女を具せられたり、山吹はいたはりあつて都に留りぬ、中にも巴は色白う髮長く容顏誠に美麗なり」とある。（「源平盛衰記」巴關東下向の條には、「木曾殿には葵・巴とて二人の女將軍あり、葵は去年の春礪竝山の合戰に討たれぬ、巴はまだありと聞く」とある）

樋口次郎兼光は木曾義仲の四天王の隨一。義仲の命を受けて源行家を河内國石川城に攻めて之を破り、京都に上る途中淀の大渡で義仲の戰死を聞き、網城兒玉黨（黨は一族集つて編成せる團體）に勸められて降服したが、朝議これを赦さず、朱雀で斬罪に處した。

影響

本曲が初めて操人形芝居に演された時、大衆の好評を博したものである。曲中の無間の鐘に就いては、「歌舞伎年代記」享保十六年春中村座「傾城福引名護屋」の事をいへる條に、「その後大坂竹本筑後掾座にて元文四年未四月十一日ひらかな盛衰記といふ新淨瑠璃初日なり、是福引名護屋の菊之丞の無間の鐘を取組み、淨瑠璃の文句にも袖引きちぎり三百兩、包むにあまる喜び泪」とある事、瀬川の家の藝代代の譽なり」とある。其の後も屢々上演されて現今も壽命を保つてゐる。

歌舞伎では元文五年九月十三日から大阪角の芝居に上演され、其の後も屢々諸方に上演されて今日に及んでゐる。

第一（射手明神。義仲館。粟津合戰）

登場人物の主な者

源義經（賴朝の弟）　梶原平三景時（賴朝の臣）　佐々木四郎高綱（賴朝の臣）
木曾義仲（朝日將軍）　巴御前（義仲の妾。兼光の妹）　山吹御前（義仲の側室）
駒若（山吹御前の幼兒）　お筆（山吹御前の侍女。清次の娘）　井上次郎（木曾義仲の臣なるが、梶原景時に內通せる惡漢）

梗概

元曆元年正月二十日源義經は兄賴朝から木曾義仲討伐の命を受け、搦手の軍の大將となつて佐々木高綱・畠山重忠・和田義盛・梶原景時等と共に、二萬五千餘騎を率ゐて伊勢路にかかり、關・加太を經て伊賀國阿山郡射手明神に詣でた。時に景時は義經の白旗を射、其の無禮によつて切腹と極つたが、高綱の執成しで穩便に事濟んだ。その後義經の軍は義仲の軍と宇治川に戰つて之

を破り、長驅して京都に上る。

巴御前は京都の義仲の館に駈付け、味方の急を告げたので、山吹御前は駒若を抱きお筆と共に、桂の里（京都市右京區）なるお筆の親鎌田隼人清次を便つて身を忍び、義仲は巴と共に戰場に赴いた。かくて粟津が原の戰に義仲。今井兼平等は討死し、巴は敵將內田三郎家吉と組打して首を掻取り、和田義盛に生捕られて、暴惡と誤られた義仲の爲に大いに辯じた。後に義盛の妻となる。

井上次郎は兼平の自刄した首を取れるを、景時は之を以て井上次郎が兼平を討取り、功名を立てたものと偽り申立てて、義經等に斥けられた。

第二（桂の里楊枝屋。梶原館。源太勘當）

登場人物の主な者

鎌田隼人清次（桂の里楊枝職人。お筆の父）　お筆（山吹の侍女。清次の娘）　山吹御前（義仲の側室）

駒若（山吹御前の子）　番場忠太（景時の郎等）　千鳥（お筆の妹。景季の愛人）

梶原平次景高（景時の次男）　梶原源太景季（景時の嫡子）　横須賀軍內（景時の家來）

延壽（景時の室）

梗概

鎌田隼人清次は鎌田兵衛政清の弟で、もとは立派な武士であつたが、浪人となつて桂の里に住み、店に簾を繋ぎ楊枝を作つて貧しう暮してゐる。そこへ娘のお筆が山吹御前と駒若君とのお供をして便つて來た。之を知つた番場忠太は、夜陰に隼人の家主

に案内させて隼人の伏屋を取圍む。隼人は猿に衣を着せ、駒若のやうに見せて忠太に渡し、敵を欺いて四人共に逃げ去つた。

隼人の末女千鳥は、梶原景時の館に奉公し、景季と相思の仲となつた。景時・景季の父子は義經の軍に從つて都に上つたが、景高は虚病を構へて家に殘り、千鳥に懸想して口說いてゐる。折節、景季が横須賀軍內と共に戰地から戻つて來た。その時景高は軍內が差出した景時の手紙で、景季が佐々木高綱に宇治川の先陣を越された爲、父が怒つて景季を戻したものであることを知る。そして之を幸に景季をなき者にして千鳥を奪はうと工み、景季に宇治川の先陣を語らせ、之を揶揄して辱かしめた。其の場に居合はせた延壽も千鳥も、これを聞きかねて景季を庇ふ。

源太は千鳥を招いて「己が佐々木に先陣を越されたのは理由がある。父が射手明神で義經に無禮があつた爲自害に及ばうとする所を、佐々木の執成しで助けられた、其の恩返しに先陣を彼に讓つたのだ。しかしこれを言分に命を惜しむのではない」とて、切腹をしようとしたが母の情で思ひ止る。そして軍內の首を刎ね、勘當の身となつて布子に着替へ、千鳥を連れて「きつと功名を立てて恥を雪ぎまする」と母に誓ひ、別れを惜しみながらしをしをとして出て行く。

第　三（道行君後紐。大津清水屋。笹引。船頭權四郎內。逆艪）

登場人物の主な者

山吹御前（義仲の側室）　駒若（山吹御前の子。三歳）　鎌田隼人満次（お筆の父）
お筆（山吹の侍女。隼人の娘）　權四郎（福島の船頭。六十歳。およしの父）　およし（松右衛門の妻）
槌松（およしの子。三歳）　番場忠太（梶原景時の郎等）　松右衛門（義仲の四天王の隨一樋口次郎兼光の變名）

又　六（景時一味の船頭）　九　郎　作（景時一味の船頭）　富　藏（景時一味の船頭）
畠　山　重　忠（頼朝の名將）

梗　概

山吹御前・駒若・鎌田隼人・お筆諸共に桂の里を遁れ、木曾路を志して旅に出た。粟田山・日の岡峠・諸羽宮を過ぎ、義仲が戰死した粟津が原を望んで涙に暮れ、逢坂の關の清水。追分を越えて、大津八町の清水屋に泊つた。

順禮姿の色黒い老人（權四郎）が娘およし・孫槌松を連れ、これも清水屋に來て、山吹御前の隣室に泊る。そして兩室の幼兒が同時に泣き出したので、その機嫌を取る間に互に懇意になつた。そして色黒い老人は攝州福島の船乘りであつて、槌松の父が死んだので後婿を迎へ、西國順禮に出たものであることが知れ、常談交りの話に興じながら晝間の疲れで皆寢入つた。

その後暫くして駒若・槌松の兩兒が共に目覺めて室内を歩き廻り、行燈を引張り合ふ拍子に燈火が消えて、兩兒共に泣出した。その聲に眠れる者どもが目を覺した折柄、番場忠太が大勢を引連れて亂れ入つた。旅舍に寢てゐる者どもは何事が起つたかと驚き、逃げ出ようとして闇の中を物に當り惑ひ、大騷ぎとなる。（これからが次に載せた原文に續く）

〔笹引〕　空曇つて風烈しい夜道を踏んで、山吹御前の一行は相宿の者と諸共に逃出でたが、お筆が寄手を追拂ふ間に、隼人も山吹御前の抱いてゐる幼兒も殺された。お筆は跡戻りして愁歎に暮れる。そして山吹御前をいたはりながらよく見れば、殺された幼兒は槌松なので、喜んで山吹御前に之を知らせる。山吹御前は「あまりうろたへて相宿の子と取違へたか」と、いふ聲も細り行き、驚怖と過勞との爲に絶命した。

お筆は當惑に暮れながら路傍の藪の笹を切つて死骸を乘せ、急いで之を引き行き、心ばかりの野邊の葬りを濟す。かくて死兒の笈摺に記してある居所を便りに、駒若を尋ねて福島さしてたどり行く。

〔權四郎内〕　福島の船頭權四郎は近所の人達を招き、およしの前夫の三年忌の佛事を營み、嘗て大津に泊つた夜の大騷動の爲

に、うろたへて相宿の稚子と取違へたことを語つて嘆く。この日入婿松右衛門は梶原景時にお目見えを請ひ、逆艪の法を説明して我が家に歸つた。



ひらかな盛衰記　畠山重忠（五世 市川左團次）
船頭松右衛門　實は樋口次郎兼光（中村吉右衛門）

折柄、お筆が駒若君を尋ねて來た。松右衛門はお筆の言葉に耳を傾け、初めて取違へた子は己が亡君木曾義仲の子であるを知る。ここに於て、己は其の實樋口次郎兼光であつて、景時に逆艪の法を教へ、義經の船頭となつて之を海に沈め、以て亡君の仇を報じようとする計畫である事を打明けて、若君の無事を喜んだ。お筆もその言葉に安心して妹千鳥を尋ねに出た。

〔逆艪〕景時は松右衛門を見て樋口であると氣附いてゐたので、彼の謀の裏をかかうとして船頭の又六・富藏・九郎作に言ひ含めて、逆艪の見習に樋口の所へよこした。樋口はその三人と共に逆艪の練習に出で、三人が樋口の油斷を狙つて撲殺さうとしたので、奮鬪して三人を殺した。

是時敵の大軍が攻寄せる音を聞いた樋口は、老松に攀登つて敵情を偵察し、親爺が訴人したものと思うて憤怨し、この上は死物狂ひに切捲つて屍の山を築いてくれうと切齒した。然し其の實親爺は駒若君を助けようとして心を碎いたものであり、又敵將畠山は樋口に同情して駒若君を助けさせようとしたものである。之を聞いた樋口は嬉し涙に暮れ、最早これまでと覺悟し、駒若君と名殘を惜しんだ。又、妻はたとの別れを悲しみ、權四郎は舟唄を歌うて之を慰めた。

かくて義仲の四天王隨一と雷名を轟かした樋口も、英雄の末路あはれに重忠の縄にかかり、物見の老松は後の世に逆艪の松の名を殘した。

評

この段は木曾義仲歿後の哀話を脚色して、麗しい同情の筆に成る。就中逆艪の詰に於て、樋口兼光と畠山重忠と何れも鬼をも拉ぐ勇將が、仁義に富んで思遣りの心深く、互に感服して讓り合ふところは、皇國武士道の精華を發揮して金玉の響がある。

森鷗外の「曾我兄弟」第四幕の詰、時致が頼朝の館にかかる場面はこの所を應用したものである。

第三の内（笹引。船頭權四郎内。逆艪の段）

風も烈しき、夜半の空星さへ雲に覆はれて、道もあやなく物凄さ裏は田畑を隔の大藪、押分ヶ掻分ヶ、忠義一途に甲斐甲斐しく、お筆は片手に若君抱き山吹御前の御手を引、駈け出て息をつぎ、扨もひあいや危ひ事、父様は多勢を防いで跡から追付ッ、早ふ逃よと有リし故、滅多無性に走つても、暗さは暗し勝手は知らず、何方へ逃てよかろふ」とうろつく向ふへ數多の人聲、又むら〳〵と駈け來り、遁さぬ遣らぬと無二無三打ッて掛かれば叶はじと、山吹御前に若君渡し、一腰拔てはつしはつし、打打翼の早業左足、飛違へ切開き左手になぐり右手に

○あやなし　文〔あや〕無しの義。理りの立たぬ、譯〔わけ〕の分からぬ、見分けのつかぬなどの意。

○ひあい　危ぶみぞつとすること。ひや〳〵することと。「ひらかた盛衰記」第四に「扨もひあいなだき[illegible]、中[illegible]か[illegible]思うて居た」「俚言集覽」に「ひあいなめに逢ヒ危キメニ逢フ也、ヒアイ者只ヒヤリトシタと云ふ事なるべし、オヒユと云言あり、ヒユはヒヤと同じ、ヒユ・ヒヤは寒慄の意也」。

○滅多無性　むやみやたら。

○腰　振〔ふり〕とも口〔くち〕ともいひ、刀を數へる稱呼語で、腰に佩くものなればいふ。

○發止々々打々　互に打合ふ音をいふ。

○左足　切つてかかる時まづ左足を踏出すこと。（これを「早速」とするはいかが）。

○はあ〳〵　恐怖におそはれて、喘ぐさま。
○袈裟にずつぱと切下げ　恰も僧侶が袈裟を掛けたやうに、肩から横腹にかけてざくりと切下げる。
○狼藉　亂暴。(見索引)
○敵の末は根を斷つて葉を枯らす　敵の子孫は生かして置かないで斷絶させるをいふ。近松作「百日曾我」に「敵の末は根を斷つて葉を枯らせ」
○かい　正しくは「かひ」で、價即ち價値の義。ここの文は、敵方に屬する者の價値もない意にいうた。「かい」を當て字にするは誤。
○生きとし生ける物　生きてゐるあらゆる物。「し」は意味を強める助詞。「古今集」假名序に「生きとし生ける物いづれか歌をよまざりける」。
○甘ちこい　甘つたるい、言葉のうまい、こまたるい意。
○當歳兒　その年生れた兒。本年生れの兒。

受ヶ、怯まず去らず戰へば、さしもの大勢たまりかね逃るを遣らじと追て行、跡にはあ〳〵山吹御前ニ「長追しやんな戻つてたも、此隼人は如何しやつた、アヽ氣遣ひや危なや」とあせる向ふへ打チ合切リ合切結び、追つ卷つつ駈け來る番場を相手に鎌田ノ隼人、忠義に冴へたる切ッ先キ乃先キ、受ヶつ流しつ上段下段、祕術と盡し戰ひしが、忠太が苛つて打ッ刀、受ヶ外して弓手の肩先キ袈裟にずつぱと切下げられ、心は鬼神と逸れども、腕も弱り目も眩み、足を立チかねたぢ〳〵〳〵、よろよろ〳〵とよろめく所を、附ヶ入附ヶ込たゝみ掛け留めの刀一ト刳り、はつと驚く山吹御前、逃しも立ず向ふへ突立ニ「サア女其忰渡せ渡せ」、「ヤア何者なれば此狼藉、樣子が聞たい合點が行ぬ」、「ヲヽ樣子は其方に覺有ル筈、朝敵謀反の義仲か忰、敵の末は根を斷て葉を枯す」、「ハア是非もなや、此子一ト人リ助たとてさまで仇にもかいにも成まじ、生とし生ける物毎に物の哀は知るものぞ、取リ分ヶ武士は情を知る、自は兎も角も此子が命を助ヶたい、慈悲じや功徳じや後生じや」と、涙と共に詫び給ふニ「ヤア甘ちこいならぬ〳〵、當歳兒でも男の餓鬼生ヶ置ては後日の仇、繰言はずとサア渡せ」と、飛掛かつて引キ取ゝば、ニ「わつ」と泣子を放さじ

○むしやぶりつく　「むさぼりつく」（貪附つい）訛。さばりつく。「武者振り」は當字。

と取ッ付キ給ふを捥ぎ放し、突飛せば又縋り付、撥除くれば武者振り附キ、遣らぬ遣らぬ」と泣給ふ。「ヤア面倒な女め」と肩先キ摑んで投付ヶれば、「うん」と計に息絶へ絶へ、其隙に若君を、宙に引提げ首はつしと打落し小脇に掻い込飛が如くに駈り行、山吹御前は夢心地、むつくと起て「ハア悲しや、西も東も辨へぬ此子に科は無きものを、惨や辛や胴慾や、返せ戻せ」の聲も遥にお筆か聞付ヶ、息を切ッて立歸りはつと驚き抱きかゝへ「コレお心は慥なか、若君樣は何處にござる、樣子をおつしやれさあ如何じや、如何じや」と急き切て、問へば答も苦し氣に、「ホホお筆か遲かつた、情なやたつた今追ッ手の者か此處へ來て、隼人も討れ駒若も殺された、ソレ首斬て逃たはいの」、「ヱヽ」と仰天狂氣の如く、呆れて詞も出ばこそ、胸も張裂く悲しさの、涙はら／＼立たり居たり、身を跪き齒を噛み緊め、「ヱヽ口惜や今一ト足早くばなあ、女でこそあれ闇々と討たしはせまいに、シテ其切た奴は何方へ逃た、顏見知つてござりますか、アヽ此暗さでは夫レも知れまい、名はお聞なされぬか」、「イヤ／＼顏も名も知らねど、梶原が仕業であらふ、可愛やわつとたつた一聲、泣たが此世の暇乞、父御と云イ子と云身に懸り果無き最期、剩是

○廻す　心に適はぬやうに従はすをいふ。もてなさす。「色道大鏡」に「まはす＝男の氣にちがはじと女の方より従ふ親なり、例へば風車の風にまかせてくるくると廻るやうに男の心に随ふなるべし」。
○いたいけな　かはゆげな。
◉笈摺　順禮者の背に着る袖のない服。

まで附添ひ、忠義を盡す隼人まで爰で死ねとの約束か、こはそも如何なる前生の報ひか罪か淺ましや」と、御身も絶ゆる叫び泣、お筆も有るにあられぬ思ひ、「父の最期はお主へ忠義悔心はなけれども、おいとしや駒若樣、今日の今迄愛らしう私を廻し、片時放さず抱かれて泣いつ笑ふつ※いたいけな、お顏をやつぱり見る樣な」と、口說き立口說き立聲も、惜ず歎きしが、涙の内に心付せめて一目若君の、お死骸なりとも見んものと、あたり見廻し尋る心も空も闇、怪しや血にそむ稚骸、手にさはるをかき抱き、涙と共に撫廻し撫廻し、「ハア、此着物はどふやら手ざはりも違ふ、そして何やらびら〳〵とこんな物は召さぬ筈、合點がいかぬ」とよく〳〵透し見、「ヤア是は違ふた、申申、こりや若君ではござんせぬ」、「ヤア何と言やる駒若でないとは、ハテ此死骸は※笈摺懸けて居るはいな、どれ〳〵ほんに代つたこりやどうじや、是は〳〵」と二度喫驚、「ムヽ、扨は今の騒動に、相宿の子と駒若と取違へたかハア悲しや」、「アヽこれこれそりや何おつしやる、悲しい事はござんせぬ、コレ取違へたのでな、若君のお命に氣遣ない、是則天の惠御運の强さ、アツア嬉しや〳〵有難や、コレお悦びなされませ、コレ申し申し、

○来たさふな　来たらしい。

○いなう　「い」は添加音。「近頃河原の達引」猿廻の段に「ホホウ道理いな尤もや」とある「い」もこれと同じ。「[illegible]」[illegible]、[illegible]に[illegible]れた[illegible]

○どんた　鈍たし　はかくさい　はあらしい。

是はしたり、何故物をおつしやらぬ、ハア、又眩暈が來たさふな、是は是はヱ、お氣の弱い、腑甲斐ない事では有ぞ、是々申シと、言へども弱る身の上に、悲しさ辛さ氣を揉上ゲ、又嬉しさにがつくりと引キ取ル息もあへなき最期、お筆は周章うろうろきよろきよろ、こりや何とせふどふせふと、脈取て見つ耳に口チ、「是々申シ、山吹様いなふ」と、言ふ聲さへ人を憚り、思ひ切て呼れぬか、ヱ、情ないヱ、どんなと、心は千々に碎け共、早色變り手足は氷と冷へ切て、押シ動かせど其甲斐も、涙先キ立魂も共に消入る憂思ひ、大地にかつぱと伏し轉び、聲の限りを泣盡す理り、とこそ聞へけれ、やゝ有て顔を上ゲ「ハアアそふじやそふじや返らぬ事、悔まじ歎くまじ、一ト先ヅ此場を立退て妹千鳥と心を合せ、御主の仇父の敵、逃隱るゝ共天地の間、命限り根限りやはか助ケて置クべきか」と、駈け出しが「イヤイヤイヤ、夫レより大事の大事の若君、片時も早ヤく取返さふア、いや待テ暫し」、死骸を此儘捨置カれず、無縁の此子父の骸諸共に、隱さんとは思へ共前後に滿たる多勢の追手、隙どらば却て妨、せめてお主の面影を、先ヅ先ヅ彼處へ葬らんと邊りに、茂る竹切ッて、舁き上乘する笹の葉は、亡魂送る輿車、轅も細き千尋

の竹、肩に打掛け引く足もしどろ、もどろに定めなき、淵瀨と變る世の憂を身一つに降る涙の雨の、小止みもやらで道の邊の草葉も、浸す袖袂泣く泣く、たどり行空の、難波潟蘆火焚家の、片庇、家居には似ぬ里の名や、福嶋の地はおしなべて世を海渡る船ォ長の、有ルが中にも權四郎とて年も六つを十返りの、松右衞門と云ふ通り名は養ひ婿に讓る、門に目當テの松一木所に蔓る親仁有、志ュ日に邊り近ヵ所の婆嚊達、お茶參れとて招かれて、「ナフ權四郎樣、今日は志の日じやお茶飲めと、およし樣の直にお使から共ない忝い、誘合せて參つた」と、どやどや內に入ければ、「能ふこそ能ふ今日は娘が前の連レ合、此槌松めが本ンの父が三年ンの祥月命ィ日に當々つた故澁ひ茶を焚ました、飲でゆつくりして下され、常なら箸でもとらせます筈なれど、知つての通り足弱な娘や孫を引連レて順禮の長ヵ道中、物入リの跡何ンにもしませぬ、とは言へ娘何ぞないか」、「何ぞと申たら人手はなし此子はせがむ、ほんの心計をば上つて御回向賴ます」と、霰交りの煎豆に花香持せて波出せば「もふ三年ンに成リますか、ア丶月日に關守据へざればこその、今の松右衞門殿は御ざつて間もなく、しみじみと附合ねば心入レは知らねど、死し

○淵瀨と變る　「古今集」雜歌下部、よみ人しらずの歌に「世の中は何か常なる飛鳥川、きのふの淵ぞけふは瀨になる」。
○道の邊　「の邊」に「野邊の送り」をいひかけた。
○三重　(見索引)
○片庇　片流に造つたひさし。ここの文は、「難波潟」からその緣語蘆につゞけて「蘆火」といひ、「焚く家の片庇」といひつゞけた。
○家居　住居。ここの文は、賤しい船方の住居する貧家に似合はぬ其の里を福と名のつく福島の地といふ意。
○福島　大阪市内で、大阪驛の西隣り福島驛あたりの地にこの名を存し、往時は蜆川・堂島川の下流北岸に沿うてゐた。この地昔は漁夫の貧家が多かつたので、「家居には似ぬ里の名や福嶋」といひかけた。
○うみ渡る　貧乏で世を倦んで渡るに、船方なれば海渡るをいひかく。
○六つを十返り　六つを十度繰返す意、即ち六十歳。「十返り」は松の緣語。松は百年に一返、千年に十返花咲くといふ。
○通り名　通稱。
○志す日　佛事を營む日。逮夜の佛事を營むことを「逮夜の志」などといふ。
○共ない　「誘ひ合せて伴ひ參つた」と續く、
○能ふ　能うこそよう出でなさいました、
○祥月命日　死者の一周忌以後の死亡したその月日。「祥」は「禮記」の小祥(一周忌)大祥(三周忌)から出た。

やつた此槌松の父御は丁度此人參の太煮の樣に、毒にならぬ人で有たにいとしやいとしや、南無阿彌陀、皆回向してお茶參りませ、鹿尾菜のお齏此蒲公英、扨も旨し」と舌鼓、茶請々に話嚙交せて徒口々のやかましさ、皆船ゝ頭の女房とて乘合ィ船の如くなり、「ヤアよい序じや權四郎樣お尋申す事が有、別の事でもない此※わるさ殿、連レて順禮なさるゝ迄は色黑に肥太りて、年より丈も大柄に、病ヒ氣無ふて眞の赤松走かした樣に、※門を家と遊びやるを見ては、あやかり者じやと羨んだ子が、何として又此樣に色白に瘦こけて、思ひなしか顏※のすまいも變つて、脊も低ふ弱々と外へとては一ッ寸ヶ出ず、あれが順禮の奇特か觀音樣の御利生かと、打チ寄ッては是沙汰※めんよな事や」と尋れば、「されば其事、ありや前の槌松じやござらぬ違ふた違ふた、違ふた譯思ひ出すものふ恐ろしや、聞て下され、娘よ、何日の夜やらで有たな」「はて二十八日の」「ヲヽ夫レ々、又跡の月の二十八日※三井寺の札を納て、※大津の八町に泊る夜、何かは知らず御上意じや捕つた捕つたと大勢の侍が、是見さしやれ咄するさへ身か顫います、ほんの世話に云ふ※うろたへては子を逆樣、如何負ふたやら娘が手を引ィたやら、走たやら飛ゝだやら漸う毒蛇の口を遁

○咎こもとらず　お勝立をして出す意。
○申したら　申されたら。
○花香　花やかな香味。一見字引。
○ひじき　ハジキの約音。海中の岩上に生ずる褐色の藻で食用となる。
○茶請　茶を飲む時に添へて食ふ菓子。
○わるさ　惡戲。いたづら兒。
○門を家と　戸外を家の内の如く、即ち家には居ないで門外にばかり出て居るをいふ。
○顏の住ひ　目・口・鼻などのおちつきどころ。顏の樣子。
○利生　利益衆生「りやくしゆじやう」の略。りやく。
○めんよ　名譽「めいよ」の訛。奇怪。不思議。◉「めんよう」を見よ。
○三井寺　近江國長等山園城寺をいひ、西國順禮第十四番の札所。◉「順禮歌」を見よ。
○大津の八町　近江國大津旅籠町をいふ。「東海道名所圖會」卷一「大津旅籠町の名を八町といふ」。この町には旅宿が多かつた。
○うろたへては子を逆樣に負ふ　諺。

れ、逃ヶて行先キは又狼谷、谷の水音松吹ク風も跡から追ッ手の來る樣に思はれ、扨も命は有物かな眞黒の夜に四里足らずの山道を、息一つ吐かばこそ、水一ト口飮ばこそ、命から〴〵伏見へ出て、初めて背に負た子の顏見れば南無三寶、相宿の襖越し、宵に話もした和郎が、連レた子と取違へたに極つた、大儀ながら一ト走往て、元元へ取換へて來てくれと娘はせがむ、ヲヽ尤取リ戻して來ふと思ふ程先キの怖さ、いかな〳〵一ト足も行カれるこつちやない、今には限らぬ取返す折が有ふ、先キの和郎も子を取違へ、人の子じやとてどろく〳〵にはして置かぬ筈、此子さへ大事に育て置ィたら、三十三所の觀世音のお力、枯たる木に花さへ咲じやないか、一先ッ内へ戻つて、潰した肝を冷してからの上の事と、艜船に飛乘て戻る中チ、乳呑ふと泣ク、持合たを幸に、娘が乳呑せたら夫レなりに月日も經テ、名も知らねば呼付た槌松槌松と言や我名と心得、祖父よ祖父よと馴れ馴染むいたいたしさ、今では眞の槌松めも同然に、可愛ござる」と言ふ聲も咽に、つまらす老心、娘も共に涙ぐみ、「時の災難とは云ながら、緣あればこそ此子が手鹽にかゝり、他人がましうもする事か、母樣母樣と此乳を、呑もすりや呑しもすれ、馴染

○狼谷（おほかめだに）　京都市伏見區、奈良線稻荷山と稻荷との間（練兵場と射撃場との間）にある。
○扨も命…かな　「新町なげぶし」の唄に、「歎きながらも月日を送る、さても命はあるものを」。
○わろ　「わらは」（童）の約訛。人。
○こつちやない　事ではない。
○どろく　盜の義。だらだらして締りのないこと。放埒。近松作「女殺油地獄」に「神佛の罰も思はぬごろく者」「ごろく者めがしたい甲斐に踏付ける」。
○三十三所　西國觀音三十三の札所。[illegible]を見よ。
○枯れ木に花さへ咲く　「千手觀音尼經」に[illegible]
○潰した肝を冷す　非常に驚くを「肝を潰す」といひ、また驚き怖れるを「肝を冷す」といふ。ここは[illegible]心をさらにする意にいう。
○手鹽にかかる　自分ら手づからの世話になること。[illegible]

ば我子も同じ事、此子憎では夢いさゝかなけれ共、今日の亡者の手前も有成らふ事なら手つ取り早ふ、元々へ取り戻し度ござんす」と語るを聞て婆嗅達、「夫レで疑ひ今晴た、大願立の西國廻り現世未來の觀音様の引合せ、彼方から槌松を連レて、やがて尋て見へましよぞいのふ、必きなきな思はぬがよい、サア皆の衆餘りお茶飲で結句お腹も晝さがり、いざござれお暇」と打チ連レ出る門ドの口、櫂の先に笠かつ附ケ、打擔げ立歸る婿の松右衞門、「ホこりや皆お歸りか、今日は前の婿殿の三年シ忌、内に居て共々御馳走申筈を、遁れぬ用事で罷出近頃の亭主振、まそつと緩りと話されゐで」、「まそつとの段かいの、緩り鑵子の底たゝいて歸ります、餘り茶には福が有ル飲でお休なされや」と住家住家に立歸る、「ハア親父樣今歸りました、茶子の間に合ふ釜の下でも焚ふと、氣が急いても相手は急かぬ大名のゆつたり、遲なはつた嘸お草臥女房共大儀て有たの」、「何の大儀な事はないお前こそ嘸おひもじかろ、坊よ、父樣お歸りなされたかと何故お傍へ行きやらぬ、どりや飯上ふ」と立上る「コレコレ女房、まだ欲うない望な時に此方から言ふ、扨申親父樣、大名の中に梶原殿は、取リ分ケの念シ者と申が違ひはない、お召シによつて船

○きなきな　惱みて心おちつかぬ樣。くよくよ。「俚言集覧」に「きなきな＝女などの物思ふ態を云、「雲井弄斎集」きなきなと花やあぶなく思ふらん根を離れたる岸の山吹」〔油粕〕かくせどもきなきなとするや戀心」。

○晝さがり　未の時、即ち午後二時頃。「お腹も晝さがり」とは、お八つの時でお腹も間食のいる時分との意。

○かつ附く　附くを強めていふ。

○まそつと　今少し。ますこし。

○話されいで　お話なさらないで。ここの文は、ますこし緩りと話して下さればよいに、さうはなさらなくてお歸りかの意。

○鑵子　茶釜。

○底叩いて　茶を飲乾しての意。大いに飲んだ事を強くいうたので、その實全く飲乾したのではなく餘り茶がある。

○餘り茶には福がある　殘り物に福があると同じ意の諺。「伊賀越道中雙六」にも「餘り茶に福がある、然らば今一つ」。

○原本「茶子」とあれど「茶事」であらう。

○念者　物事に念を入れる人。

頭松右衛門參シ上と奥へ言て行、や、暫くして御家老の彼の番場の忠太殿がお出なされ、先キ達ッて差シ上た逆櫓の事書、一トつ一トつ尋る程にける程に、問殺した其上て其通申あぎよ、暫く待テ、よふ暫くで有ふぞ、なゝの三時待タせて置ィて殿が直にお逢ィなさるゝ、是へお出なさるゝと其重々しさ物言ィの堅くろしさ、船頭松右衛門とは汝よな、智謀軍術逞しき義經へ、此景時が能ゥ存せしと云ふ逆櫓の大事、疎に聞請難し、汝舟に逆櫓を立ての軍、調練したる事や有ル、夫レ聞んと問掛けられ、此度親父樣に習ふて、逆櫓と云ふ事初メて知つた此松右衛門、返答に困るまいか、サ難儀せまいか、ほつとせしが分シ別致し、御意ではござれ共賣船の船頭風情、軍と云ふ物は夢に見た事もござらぬ、逆櫓の事は我等が家に傳へ、能ク存て罷リ有リまするなどと申て間に合を言ッたれば、ムゝさも有リなん、然らば汝覺有ル船頭を語らい、今宵密に逆櫓を立テ、船の駈引手練して其上に知らせよ、事成就せば御大將の召シ船の船頭は汝たるべし、御褒美は此梶原が取持チ、長く船頭の司として、莫大の財寶を下さりよと有直キのお詞、其嬉しさに初メの術なさ打忘れ、あたふたと歸りがけ、日吉丸の船シ頭の又六灘吉の九郎作、明神丸の富藏、こい

○ける程に　念を推す時重ねていふ詞を略して「ける程に」といふ。
○問殺す　問詰めるを強めていふ。
○あぎよ　あげよう。
○なな　「ただ」長くの音を躍らせた語であらう。
○三時　昔は一晝夜を十二分して時を示すにより、三時は六時間であらう。
○調練　操練、操縦に熟するやう練習すること。
○賣船　商ひ船。
○術なさ　せんすべなきことをいひ、轉じて胸の苦しいこと。
○あたふた　あわてふためく貌、ただはたと
○べべ　衣服をいふ小兒語。轉じ青海にべらべらとする故、べらべらの頭の一音を躍らした語であらう。
○われさま　「われさま」（我樣）の略

らは梶原様のお船の船頭、幸三人を相手にして日暮から、逆櫓稽古に此方へ参る筈、御教なされた手際を見せ付ヶ立身出世はたつた今、是と申スも御指南の御蔭忝い、坊主よ悦べ、結構な衣服着せて翫に飽しやうぞ、女房共親父様悦んで下され」と、語る婿より聞嬉しさ、「いやさ無器用な奴は千年萬年教ても埒や明かぬ、まんざら素人のわりさまが、入婿にわせられて一チ年ンも立ッや立タず、天下様の弟御の召ッる、御船の船頭する様に成ルと云ふは、おれが教た計リじやない、其身の器用がする事でおじやらしますよ目出度い目出度い、婿殿の草臥休め、娘十二文持ッて走らぬかい」、「イヤイヤイヤ御酒も歸りかけに九郎作か所で下された、一ッ生覺ぬ大名の附キ合、膝はめりつく氣骨は折る、播磨灘で南風に逢た様な目に逢ふて頭痛まじり、草臥たと云ふ段ではない、暮レ迄はまだ間も有ふ、親父様御許さりませとろ〳〵と一ト寢入、およし是見や、坊主めが眠は幸イ父が添乳せん、寢ん〳〵轉ろ」とかき抱き納戸の内にぞ入にける、「娘裾に何ンでも置たか、出世する、大事の體風ひかすな、祝ふて船玉様へ燈明もとぼせ、御神酒上たい買てくれぬかい」、「買迄もない是をお供へなされませ」と、棚からおろす難波燒「ちろり

ま」ともいふ。おま八様。「膝栗毛」八下に「わりさまわしが結ふ所で結はんせ」。

○わせる 「おはせる」(御座)の約つた語。ござる。こられる。

○天下様の弟御 頼朝の弟義經。

○おぢやらしますよ 「おぢやりはしますよ」のつまつた語。ござりますよ。

○十二文 十二銅又は十二燈ともいひ、燈明料として賽錢十二文を白紙に包み、捻りて神佛に捧げる。この文意は、神佛にあげる燈明の油を買ひに行けといふのである。次に「お酒も」とあるのも、神に供へる酒である。

○減付く 長く坐つてゐるので膝がへこむ。

○やらず 「物類稱呼」に「播磨邊又四國にて春南風にて雨を催す風をやらずといふ」。氣持ちの悪いなま暖かな風に吹かれて頭痛がするやうな。

○ねんねんころろ 幼兒を眠らす時にいふ子守唄の句。

○船靈様 海路の平安を祈る神。「倭訓栞」に「船靈の義、續日本紀に見えたり、住吉神の和魂を祭る、延喜式に見えたり」と(日本索引)

●難波燒 大阪高津邊から産出した陶器。

○ちろり ちよつとこの意と銚釐「ちろり」とをいひかけた洒落。銚釐は筒形で注口及び提梁(つる)がある、酒を温める金屬製の具。然しここは陶器製のものをいふ。

○鹿　筆は鹿毛で作つたのがあるから、それをきかせた。以下「硯の海」「磨る墨」「書く」は筆の緣語を以て文を飾り、お筆にいひつゞけて、お筆の出る場面となる。
○そんじよそこ　「そんぢやうそこ」（尊丈足下）が其義を轉じた語であつて、そこら、そのあたり、そこの意にいふ。詳しくは「近松語彙」を見よ。
○物越し　物言ひぶり。音聲。（見索引）
○ろく　「まんろく」の「ろく」と同じ語で、平、正、圓の義。碌は當字。
○興がる　滑稽味を帶びて變な面白みのあるをいふ。剽輕であるといふ程の意。

と用意があつたな」と、老の戲れ言輕口も神慮は重き、一ッ對の、徳利に餘る親心、妻は火燧の石の火に夫トの威光輝けと、油煙も細き燈明に、心を照らす正直キの神や、光リを添ぬらん、妻戀ふ鹿※の、果ならで、難儀硯の海山と、苦勞する墨憂事を數書クお筆が身の行方、何時迄果し難波潟、福嶋に來て事問へば門ドに、印シの※そんじよそこと、松を目當に尋寄り、「ハア御免ンなりましよ、松右衛門樣は此方か、お名をしるべに遙々尋參つた者、御逢なされて下さつたら忝ふ御ざんしよ」と、※物越しのしとやかさ、「アレ父樣、松右衛門殿に逢たいと女子が來た、※碌な事では有まい」と跡先キ知らで女氣の、早悋氣する詞の端、「※興がる嗜め、松右衛門に逢ふて姉じやと言ふても悋氣するか、夫レ程氣遣なら呼込ンで、逢せぬ先キに聞たがよい、何方じや女中、何處からござつた、松右衛門内に居まする遠慮せずと這入らしやれ」、「夫レはまあ〱お嬉しや」と、笠解捨て内に入、「お前が松右衛門樣かお近カ付でなければ、お顏見知らぬ樣はなけれ共」、「なけれ共なりや何故ござつた」、「サア申シ何がしるべにならふやら、攝州福嶋松右衛門子、樋松と書イた笈摺が緣に成て」、「ヤアそんなら此方は大津の八町で、父跡の月廿八日の夜の」、

○面目を凌いで　面目無きをたへ忍んで。

「アイお子様を取違ヵへた者でござんす」、「道理で見た様な顔じやと思ふた事、是は夢か現かいのふおよし悦べ、槌松を取違へた人じやとやい、此方からも行方尋て元々へ取戻す筈なれ共、何を證據に尋て行ヵふ手掛もなく、泣ィてばつかり居ました、其代りには取違へた其方の子供衆、兎の毛で突た程も怪我させず、蟲腹一チ度痛せず娘が乳が澤山な故、食物はあしらひ計リ乳一チ度餘させず、ヲヽ夫レよ風一チ度ひかさばこそ、親子が大事に掛けたに付ても、此方の息子めも嘸御厄介御世話で有ふ、能ふ連て來て下さつた忝い忝い、わるさよ我内を忘れたか何故這入らぬ」、「いや門にではござんせぬ」、「ヱヽ連の衆が跡から連レてお出なさるゝか、嘸御厄介忝い忝いはて早ふ逢たいな、娘お禮を申しやいの」、「アヽ父様せはしない、此お禮がちやつきりちやつとつい言って済事かいな、申此槌松は何故遲ひ、お連の衆が門ト違ヵへはなされぬか、此槌松は何故遲ひ、我子は如何に」「孫は如何にーと立代り入代り、門を覗つ禮言ィつゝそゞろに悦ぶ親子の風情、お筆が胸に燒鐵さす今更何と返答も、泣ヶも泣ヵれず差俯き、暫く詞もなかりしが、「お願ト申さねば叶はぬ譯有リて、耻を包ミ面目を凌で尋參りしが、そふお悦びなされては、

○下に居て下さんせ　坐つてゐて下さりませ。
○あぢきなし　味氣無し。不快な。氣味のわるい。
○原本「有リ」とあれど「有ル」の誤か。
○あだ　はかなきこと。無常。
○たべ　たまへ。
○女中　婦人。（見宗引）
○樊噲　前漢の高祖（沛公）の臣、剛勇である。沛公が項羽と鴻門に會した時、樊噲會場に突入して沛公の危急を救つたことが「史記」項羽本紀などに見えてゐる。
○ほつたらかす　うち捨ててその儘にする。

氣か後れて物が申されぬ、まあ※下に居て下さんせ」と、涙ながらに押鎮め、「改て申スも※あぢきなき其夜の騒、手ばしかふ逃隠れなされた、お前方は順禮の功德、此方は一ト人リは病人シなり、男とては※有リに甲斐なき年寄リ、逃るも隠るも心に任せず、取違へた其お子は其夜に敢なく成給ふ」と、聞て喫驚「とは何故に」「とは如何に」と、餘りの事に泣もせず仰天するこそ道理なれ、「人の身の※徒なりと豫ては聞ど其夜の悲しさ、能ふも今日迄は存へし、言イ譯ながらの物語聞て恨を晴て※たべ、高ふは言はれぬ事ながら、連の※女中と申スは私の御主人、騒に取リ違へしとは思ひも寄ぬ、若君は猶大切ッと私が掻抱き、御病人の女中は親が手を引き、一ト度は旅籠屋の憂目は遁れ出たれ共、追掛くる武士の大勢氣は※樊噲と防いでも、何を言ふも、老人の言イ甲斐なく討死し、若君は奪取られ氣も狂亂の様に成て、女中も※ほつたらかし、大事の若君取返さんと駈け廻る、月なき夜半の薬隠れ尋廻る笹垣の蔭、サア爰にこそ若君は有しと、取上て見たれば悲しやお首がもふ無かつた、よくよく見れば若君でない、證據は此笈摺、騒の紛れに取違へしたな、扨は若君のお命に恙なかりけりと、一ト度は安堵せしが、代りを戻さねば取返されぬ若

○背摘負ふ　背負ふこと（見索引）

○天王寺　大阪市天王寺區元町にある荒陵山敬田院四天王寺。

○祥月　忌日

○二世安樂　現世安穩後世善所の意。

○ほえる　聲をあげて泣く。（見索引）。泣顔するを「ほえづらかく」といふ。

背、元々へ取戻す種になる、人の大事の子を殺し、何を代リに若君を取戻ふ、悲しひ事をしやつたと夫レを苦に病み、主君の女中も其座ではかなく成給ひ、悲しみやら苦しみやら、私一ト人リが背たら負ふた身の因果、此笈摺をしるべにて尋參りしは、お果なされたお子の事は諦らめて、此方の若君を戻して下さるる樣の御願ヒ、大事に掛けて御世話なされたと物語聞ヶに付ヶ、面目ないやら悲しいやらあぢきなき身の上を、思ひやつてたべ親子御樣」とかつぱと伏して泣ければ、祖父は聲こそ立ね共涙を老に嚙交せて、咽につまれば噎せ返り身も浮く樣に泣ければ、娘は心も、亂る、計空しき笈摺手に取て「やれ槌松よ母なるは昨夜の夢にまざ〳〵と、前の父樣に抱れて天王寺參りしやると見たは、日こそ多けれ父御の三年ンの祥月なり、命イ日の今日の日に便リ聞ヶ告でこそ有リつらん、夫レとは知らぬ凡夫の淺ましさ、今日は連レて來るか明日は戻りやるかと待てばつかり居たものを、大キな災難に逢ふて笈摺に書イた詮もない、是が何の二世安樂順禮も當テにはならぬ、觀音樣も腑甲斐ない恨めしや懷しやあはれ此事が夢で有ッてしくれかし」と、顏に當テ抱き締めて、聲をはかりに身悶へし前ン後、不覺に泣キ居たる「娘はへま

い、泣ヶば槌松が戻るか、迷言言や二タ度坊主めに逢れるか、豫て愚痴なと祖父が叱るをどふ聞ィて一と、言ふ詞に縋り付キ、「夫レ々斯ふ申私も女子じやが、愚痴では濟ぬ祖父樣のおつしやる通り、如何程お歎キなされたとて、槌松樣の御歸りなされると云ふではなし、再び逢るゝと云ふではなし、さつぱりと思し召諦らめて、此方の若君を御戻しなさつて下さつたら、ア、有リ難い忝いと悅ぶ私が心がどこへ往かふ、槌松樣の未來の爲には佛千體寺千軒、千部萬部の經陀羅尼、千僧萬僧の供養なされたより一、「女子默れ、何ンの面の皮でがや〳〵頤叩く、耻を知れやい我子を我ガ育るには、少々の怪我させても不調法が有ても、親だけで濟ノども人の子にはな。義理も有リ情ヶも有ル、主君の若君のとお言やるからは、夫レ知らぬまんざらの賤人でもなさそふな、此おれは親代々舵柄を取て、其日暮シの身なれ共、お天道樣が正直ニ、大事にかけて置た其方の子見しようか、いや見せまい、見やつたら目玉がでんぐりがへらふぞ、人の子をいたはつて貰ふ代リ、大抵大事に掛けたと思ふかい、コリヤそんなら久何故、尋て來ぬと減らず口ぬかそふが、尋て行かふにも何もしるへの手がかりはなし、其

○迷言　かこつこと。不平をいふこと。

○陀羅尼（見索引）

○頤叩く　口をきく。しやべる。

○でんぐりがへる　眞逆樣にひつくりかへる。若君を大切に養育した爲に、若君は健全に成長して ゐるので、[illegible]、豫想外なのに吃驚するであらうとの意。

○大抵大事に掛けたと思ふかい　普大抵の大事にかけて育てたと思ふか、決してさやうな事ではない、[illegible]大切に育て[illegible]。

方には笈摺に所靑キが有、今日は連て來て取換へるか、明日は連て來て下さるか、逢ふたら何ント禮言はふと明ても暮レても待てばかり、コレ此襁を見をれ、可愛や槌松が下向に買へと言ふたを聞分ず、無理に買ふて三井寺三界、持て歩いて嬉しがつた、鬼の念ン佛に餓鬼外法殿の天窓へ、梯子差いて月代剃る大津繪、藤の花のお山も買居らず、外法殿の繪を買ふたは、彼の樣に髭の白髮に成迄、長ガ生キしをる瑞相、鬼の樣に達者で金持て世界の人を、餓鬼の樣に這屈し居らふ吉相じや、目出度い戾リ居つて見居つたら、嘸悅ばふと貼つて置て待たに、思へば梯子は外法天窓の下リ坂、鬼の傍に這いつくばふ、餓鬼に成てお念佛で助かる樣に成居つたか、思へば思ひ廻す程身も世も有ラれぬ、能ふ大それたためにあはせたなあ、夫レになんじや、思ひ諦らめて若君を戾して下され、町人でこそ有レ孫が敵、首にして戾さふぞ」とつつ立あがる、「のふ悲しや」と取附く、お筆を押退け撥退け、納戸の障子さつと明ればこは如何に、松右衛門若君を小脇に搔い込刀ぼつ込力士立チ、お筆驚き「ヤア此方樣は、あの樋口の」「コリヤ〳〵女、ムウ聞へた、最前ン歸りがけ下モの樋の口で、ちらと見た女中よな、若君は身が手に入て氣遣イ

○下向　神佛に參詣してかへること。ここは順禮の歸途をいふ。
○三界　界隈。あたり。（見索引）
○鬼の念佛　鬼が法衣を着、鉦を背負ひ、奉加帳・撞木を持つてゐる大津繪に現存してゐる。
○外法殿　人の頭を自在に行ふ魔術師
○大津繪　近江國大津附近で旅人などに賣つてゐた繪で、これを追分繪ともいひ、描法粗放簡朴で、その古拙な所に面白味がある。貞享頃からもてはやされたが、享保頃からあまりはやらぬやうになつた。
○藤の花のお山　藤娘というて、藤の花枝を擔いでゐる娘を描いた大津繪は現存してゐる。以上ここにいへる大津繪は何れもよく人の知つてゐるものである。
○大それる　大逸。見當の甚しく外れる義。途轍もない（見索引）
○力士立ち　金剛力士の如く嚴めしく突つ立つこと。仁王立ち。

○もやくや　もやつき。ごたつき。紛紜。
○死人　死は人を罵るに冠した語で、死女郎「しにめらう」などいふの類。
○水臭い　情愛が薄い。隔心がある。
○頭が高い　それでは横柄だ、頭をさげよ。

なし、言ふてよければ身が名乗る、ノ合點か、必樋の口を樋口などと麁相言ッまいぞ」と、目まぜで知らせば打領き、しづまる女聞ぬ祖父、「松右衛門出來したりな、先刻にからのもやくや寐られはせまい聞たで有ふ、其方が爲にも子の敵、其小死人寸斷寸斷に切刻んで女子に渡せ」、「いやそふは致すまい」、「何故致すまい」、「サア夫レは」、「サア夫レはとは、ヱヽ水臭い言いでも知れた、汝が胤を分ヶぬ槌松が敵じやによつて致さぬな、其根性では祖父が儘にもさしやせまい、もふ破れかぶれじや、おれが言ふ樣にせぬからは親でも子でもない、娘其處ら駈け廻つて、若ィ者大勢呼で來い」と氣を急いたり、「やれ待て女房人を集むる迄もなし、親父樣どふ有ッても、槌松が敵此子を存分になさるゝか」、「くどいくどい」、「ハア是非もなし、此上は我名も語リ仔細を明して上の事」と、若君をお筆に抱かせ上座に直し「權四郎頭が高い、天地に轟鳴雷の如く、御姿は見ず共定メて音トに聞つらん、是こそ朝日將軍、義仲公の御公達駒若君、斯く申ス我は樋口の次郎兼光よ」と、言ふに親子は荒肝取ラれ呆れ、果たる計なり、樋口お筆に打向ひ、「扨々女の甲斐甲斐敷、跡々迄御先途を見屆くる神妙さ、山吹御前も思ひ寄ッぬ御最期、御

○多田藏人行家　源行家は源爲義の第十子、義仲は爲義の孫なれば、義仲の子駒若には行家がおほをぢになる。元暦元年行家河内國石川城に據つて義仲に背く。義仲乃ち樋口兼光に命じて之を撃たせた。行家城を棄てて紀伊國名草に走る。兼光之を追ふて適〻義仲が粟津が原に討死したと聞き、兵を引いて歸る。

○粟津　近江國滋賀郡粟津野をいひ、木曽義仲が戰敗れて自殺した所。

○敵　樋松の敵、それは聞きなれない取替子ならば[illegible]、而も右衛門の詞に『孫の敵、首にして戻さうぞ』とある、その『敵』と併せ考へればよくわかる。

○御堪忍…申すとも　たとひ親父樣が御堪忍なされうとも、又女房が止しにしたがよいと申さうとも。

身が父の隼人もあへなく討死したりとな、力落思ひやる夫レに付ヶてもかくて有ル、樋口が身の上嘸不審、若君の爲には從祖父ながら、多田の藏人行家と云ふ、無道人ンを誅伐せよとの御意を請、河内ノ國へ出ッ陣の跡、鎌倉勢を引受ヶ粟津の一ッ戰、誤なき御身をやみ〳〵と御生害遂げ給ひし、我君の御最期の鬱憤直に駈け入、一ト軍とは存ぜしかど、思へば重き主君の仇、術を以ッて範頼義經を討チ取、亡君に手向ヶ奉らんと此家に入リ婿し、逆櫓を言立テ早梶原に近ヵ付キ、義經が乘船の船頭は松右衛門と事極る、追ッ付ヶ本ン意を遂ぐる樣になるに付ヶ、此若君の御在所は何國、如何ならせ給ふと心苦しき折も折、最前よりの物語障子越に聞ヶに付ヶ、見ればみる程面窶れ給へ共、紛もなき駒若君扨は思ひ設ず願はずして、所こそ有レ日こそ有レ其夜一所に泊り合せ、取換へられて助り給ふ若君は御運強く、殺されし槌松は樋口が假の子と呼れ、御身代りに立たるは一心なき某が、忠臣の存ン念天の冥慮に相叶ヒ、血を分ヶぬ子が子となりて、忠義を立し其嬉しさ、何に類の有べきぞ、是も誰が陰親父樣子ならぬ我を子となされ、親ならぬ我を親とする槌松、恩も有リ義理も有、餘所外ヵの子と取違へての敵ならば、其處に御堪忍なされふが

女房が止しにと申共、其敵安穏に置べきか、親父様の御歎我も不便さは身にせまれ共、相手に取れぬ主君の若君、※弓矢執身の上には願ふてもなき御身代り、※祖父親の名を揚た樋松、其名を揚た元はと問ば、私を子となされし※親父様の御厚恩、千尋の海※蘇迷盧の山、夫さへ御恩には中々比べ難けれど、まだ其上の大恩有主君の若君、孫の敵とて祖父様に切されうか、我手に掛けて主殺の悪名が取れうか、※花は三吉野人は武士、末世に残る名こそ耻かしけれ、御立腹の数々御歎の段々、申上ふ様はなけれ共、親と成子と成夫婦と成其縁に、繋がる、定り事と思召諦らめて、若君の御先途を見届まだ此上に私が、武士道を立させて下されば、生々世々の御厚恩聞分てたゞ親父様」と、身を遜り詞を崇忠義に凝つたる樋口が風情、兼平・巴が頭をふまへ木曾に仕へし※四天王、其随一の武士と世に名を取りしも理なり、權四郎はたと手を打て「そふじや、侍を子に持ばおれも侍、我子の主人はおれが為にも御主人、ハヽヽヽサアサア婿殿※お手上られい、※船玉冥利二度※丸額に成て、炊きする法も有、根も残らぬ悔もせぬ泣もせぬ、ハア、忝ない嬉
娘精出して早ふ父樋松を産で見せ居れ」、「扨は御得心参りしか、ハア、忝ない嬉

○弓矢執る身　武士の身。
○祖父親　權四郎・樋口兼光をさす。
○親父様　權四郎をさす。
○蘇迷盧の山　須彌山をいふ。其の高さ八萬由旬、大海中にあつて金輪の底の上に據り、最頂に帝釋天王が居るといふ。
○花は三吉野人は武士　諺。「花は櫻木人は武士」ともいふ。
◇樋口兼光は、前には「權四郎頭が高い」と高飛車に出で、こゝでは養父に對して「身を遜り詞を崇め」とある。忠と孝との二道にいそしむ武士の心のゆかしさよ。
○四天王　樋口兼光、今井兼平、根井行親、楯親忠を木曾の四天王といふ。
○お手あげられい　座に手をついてそんなに慇懃になさらないで、お手を膝に上げて樂「らく」にしなさいとの意。
○船靈冥利　自分の詞、偽るに於ては船靈様の冥加につきる意。
○丸額　額の處を剃上げて丸く作つたもの。以て召使の小わつぱの姿となるをいふ。

○もぎどう 「もぎどり」(捥取)の音便か。非道。邪慳。不専想。「むかだう」を無道或くは無義道なぞと書くは當字であらう。

○七面倒 甚だしく煩はしいこと。「しち」は「しちくどい」などの「しち」と同じ接頭語で、甚だしい意。

○逆様な事 子が親、又は祖父母などより前に死ぬることを逆様事といふ。

○あり様 實際。(日葡引)

しや」と互の心ほどけ合ィ、千里の灘の漂船湊見付し如くにて悦び合ふこそ道理なり、お筆嬉しく若君を樋口の次郎に手渡しし、「其處に斯くておはすれば此お子に氣遣ィなし、浮沈は世の習ひ、私が妹此津の國に勤奉公すると聞、夫レか行方も尋たし大津で討れし親の敵、討ッて亡者へ手向たし何やらかやら事繁き、私が身の上暫御暇」と立上れば、「そふ聞て留むるも無調法、ヱ、殘念ながら我等の身分ン、力にならふ共得申さぬ、御勝ッ手にお出なされ、婿殿はてもぎどふな、せめて二、三日足休め」、「夫レ々父様のおつしやる通ッ斯ふ心か解け合ば、初メ何のかのと申た程結句名殘有、平に」と留ても留まらぬ氣、涙に「くれ〲若君を頼まるゝの頼ムのと言ふ仲かいの、本ンの意を遂げて又御出さらば」「さらば」と門送り、見送る袂見返る袖お筆は別れ出て行、「扨々武家に育た女中は格別、娘今から彼れ見習へよ、こりや爰に七面倒な笈摺が有、何處へ成ととつとと棄てしまへ」、「親父様夫レは餘りな思召シ切リ、せめて佛前ンへ直し香花も取リ、逆様な事ながら、御回向なさつて取ッさつしやれましよ」、「侍の親に成て未練なと人が笑ひはせまいか」、「何ンの誰が笑ひましよ」、「ハア、嬉しや〲、有樣は先刻にからそふしたかつた、

娘納戸の持佛※へ火をともせ」と、手に取上る笈摺の、「千年も生さうと思ふたに、たつた三つで南無阿彌陀〳〵、槌松聖靈頓證菩提、婿殿ござれ娘も來い」と、見れば見かはす顔と顔、共に涙に、暮の鐘※かうかう、とこそ聞へけれ早約束の、黄昏時又六を先に立て、冨藏・九郎作三人連門口から用捨なく、「松右殿内にか、約束の通り參つた」と高呼はり、「ヲヽ待つて罷り居ります」と身輕に拵へ飛んで出、「御大儀〳〵這入つて煙草でも參らぬか」、「いや〳〵大事の急ぎの御用、一ト精出して跡での煙草、しつぼり※と先づやりませうぞや」、「ヲヽともかくも」と皆川岸に下り立て、繋げる手船の渡海造※纜、解き捨飛乘〳〵、「ナフ松右殿船で妻子を養ながら、恥かしいが終に逆櫓※と云ふ事は」、「ヲヽ知らぬ筈知らぬ筈、何事もおれ次第教てやる、サア九郎作と又六は、面舵※取舵※の艫櫓を立てた、冨藏是へお出なされ、おれがする樣に櫓を立た、是皆の衆、此樣に舳から艫へ向けて櫓を立る、是を逆櫓と云ふはいのふ、惣して陸の戰ひは敵も味方も馬上の働、駈けんと思へば駈け引かんと思へば引く事も、自由げに見ゆれ共船と云ふものは又格別、知つての通り汐に連、風に誘れ櫓拍子立てて押す時は、行事も早けれど、乘戻さんと思ふ時

○持佛　持佛堂。佛壇。
○聖靈頓證菩提　聖靈は精靈とも書き、死者の亡靈をいふ。頓證菩提とは、機會に遭遇してとみに心の迷闇を去り、佛道を成就して佛果を證得するをいふ。即ち槌松の亡靈は、早く佛の機緣を得てさとりを得よとの意。
○かうかう　鏗々であつて、梵鐘の鳴る音の形容語。「禮記」樂記篇に「鐘聲鏗々以立レ號」。近松作「心中天の網島」に「寺々の鐘の聲、かうかう斷うして何時までか」。
○しつぼり　しめやかなさまをいふ。しんみり。
○渡海造　遠航に耐へるやうに作り、普通五六反帆乃至十七八反帆の船で、旅客荷物を載せて海洋を航行するもの。
○逆櫓　船の進退を自由にする爲に、櫓を艫と舳とに立てること。艪は櫓が正しい。
○面舵　舵柄を左に取ること。左舵「おもかぢ」を取れば舳「へさき」右へ向く。
○取舵　舵柄を右に取ること。右舵「とりかぢ」を取れば舳「へさき」左へ向く。

○損交ふ　ねぢれもつれあふ。

○八萬奈落　八萬地獄。八萬は八萬四千の煩惱に相應させた大數である。奈落は梵語 Naraka. 地獄の意。

○段　丈。三段は三丈である。今昔物語に載つてゐる話を「宇治拾遺物語」に記して、「今昔物語」に「丈」とあるを「宇治拾遺物語」に「段」とし、その時代語に書き換へてあるに據れば、「段」は即ち「丈」である。

○存知　この語は普通に「存じ」と心得られてゐるが、思ふに此處にある如く「存知」とすべきであらう。

○尋常　未練なく立派。（見索引）

○眞物　麻絲を綯（な）へる綱。寺島「和漢三才圖會」卷二十四、百工具・綱「つな」の條に「綱以苧麻綯之、俗曰眞物」と。近松作「平家女護島」に「眞物をふつつと踏切れば」

○一番碇　淺海通りに用ゐる碇の最も大きなものをいひ、重さ百貫目前後に及ぶ。

は、面舵取舵の風波を考、取舵柄の手の内船をくるりと本トの如く、押シ廻て漕戻す、夫レさへ滿汐引ク汐に損交ふて、船に過チ有ル時は八萬奈落の憂目を見いとし可愛、妻子に再び逢はれぬじやないか」、「如何にもそふじや」、「其憂目を見まい爲の此逆櫓、サア其艫の櫓を押シたく」、「おつ」と心得「やつしつしゝやつしつし」三段計リ漕出す、「サア斯ふ船を漕寄セて、追つ卷つつ戰ふ時、謀に乘らるゝか敵に新手が加るか、すは負軍と見る時は、船押シ廻す迄もなくコレ此逆櫓押シ立て、「富藏合點か」「合點じや合點じややつしつし、ししやつしつし」元トの所へ漕戻す、隙を窺ひ富藏・九郎作、櫂おつ取リ、松右衞門が諸膝薙いで、打倒さんと右左よりはつしと打、心得たりと躍越へ陸へひらりと飛上ガれば、三人續いて駈け上り、「ヤア卑怯なり松右衞門、汝木曾が郎等樋口の次郎兼光と云フ事、梶原殿能ク御存知なされ、逆櫓の稽古に事寄セて、搦捕連來れと我々に仰付ケられた、尋常に腕廻すか打のめして繩掛けうか、腕を廻せ」と罵たり、樋口からからと打笑ひ「推量に違ぬ上は何をか包まん、朝日將軍義仲の御内に於て四天王の隨一チと呼れたる樋口の次郎兼光、汝等風情が搦捕らんとは、眞物附ケたる一チ番碇蟻の

○洒落臭い　生意氣臭い。生意氣めいた。
○さしつたり　心得た、おつと承知したといふ時にいふ。（しまつたといふ時にもいふ）。
○あいたしこ　あゝ痛い。「あ」は感動詞「嗚呼」、「いたし」は痛し、「こ」は添加した音で、判を「はんこ」などといふ「こ」に同じ。
○無理無三　無理に。「法華經」に「唯有一乘法、無二亦無三」とある。この無二無三の音が似通うて混合したもので、無理やりの意にいふ。
○究竟　究は理の極をいひ竟は事の極をいふ。轉じて極めて都合よきことの意にいふ。
○ござんなれ　「こそあるなれ」の音便約。
○目刺す　我が目を刺すも知らぬ即ち一寸先も見えぬ闇などの意に用ひ「目刺すも知らぬ暗き夜」などといふのであるが、ここは闇夜でなくて松葉に刺されるのであるから「目刺すはかりは闇からぬ」というた。
○海老江　大阪市西淀川區にて大崎の南岸。
○長柄　大阪市東淀川區にある。
○川崎　大阪市北區瀧川町のあたり。
○天滿村　大阪市北區にある。
○津村　大阪市西區靱津村北通・南通あたりの昔の町名。
○三つの濱　[illegible]の濱、

引クに異らず、ならば手柄に搦て見よ」、「ヤアしやら臭い廣言跡で言へ」と櫂振り上、なぐり立るを事共せず搔潜つて引ッたくり、先キに進みし冨藏が頭微塵に打碎けば、「一人リでは叶はぬぞ二人かゝつて手に餘らば、打殺せ」と立別れはつしと打、さしつたりと開く身に櫂と櫂とは相打に、互の眉間あいたしこ躊躇ふ隙に突と入、櫂引ッたくつて棄たりける、組ンで捕らんと無理無三取リ附ク一人を引寄ャ引寄せ、力に任せ「ゑいうん」と踏碎く天窓の皿、微塵に碎死てけりさあ安からぬ若君の一チ大事何とせん、我身も如何にと躊躇ふ胸にひつしと響く鐘太鼓、數百人の喚く聲、こは如何に〳〵と驚く、中チに心付、究竟の物見櫓ござんなれと駈け上る門の松、顏にべつたり蜘蛛の巢や松葉の針でお痛しこ、目刺す計は闇からぬ茂る梢の朧月、四方をきつと見渡せば、北は海老江長柄の地、東は川崎天滿村、南は津村三つの濱西は源氏の陣所陣所、人ならぬ所もなく天の焦せる篝の光、扨は樋口を洩すまじ取リ逃ガさじとの手配よな、さも有レ如何にと飛ンで下り、「女房ども親父樣親父樣」と呼立る、「イヱ父樣は納戸の壁を毀つて、何方へやら行かしやんした」「ヤア壁毀て失せたとは、ムウ讀めた訴人に失せたな、財寶を貪つて訴人

○船霊の誓言　[illegible]船霊に對してなる自誓の詞に譬へたる。
○飼犬に手を食はれる　諺。
○腰明り　腰提灯。
○存知　既出。
○秩父　秩父の庄司畠山重忠。
○彼方者　あの世の者。冥土の者。[illegible]

する、豫ての氣質では無けれ共、槌松が仇を忘れかね夫ェで失せたか、ハア樋口程の武士が、船玉の誓言に氣を奪はれ心を緩し、飼犬に手をくはれたエヘ口惜や無念や」と、拳を握り歯を鳴し萎れぬ眼に泣ク涙、磨き立テたる鏡の面テ、水を灑ぐが如くなり「お腹立は理ながら、父様に限つてよもやそふでは有ルまい」と、言宥むる折こそ有れ、組の捕手の腰明り武威輝かす高提燈、畠山の庄司重忠、權四郎に案内させて見へければ、娘は夫レと見「コレ父様恨めしい」と言はせもあへず「訴人の恨か言ふな言ふな、おれが訴人せいでも、松右衛門を樋口の次郎とは、梶原殿が能ク御存知なされて、冨藏や九郎作に、搦捕らそふとなされたじやないか、夫レ計リじやない、四方八方取圍んで樋口が命は籠の鳥、何ンぼ助けうと思ふても助からぬ、おれが秩父様へ訴人したは槌松めが事で」、「サア其槌松の事を言ふて松右衛門殿が腹立て」「何ンの腹立る事が有、親子と云ふ名に繋がれて、孫めが親と一所に、彼方者に成居ろふかと悲しさに」彼れは樋口が子ではござりませぬ、死ンだ前の入婿の、ナ松右衛門が子でナ合點がいたか、眞の親子でござらぬからは、訴人致した代り孫めが命、御助なされ下されと願ふたれば、段々聞

○御邊　對稱代名詞で同等に用ひる。そのもと。貴殿。

○結構　たくみ。計略。

○晋の豫讓　支那春秋戰國時代の刺客。晋人であつて、智伯に事へたが、趙襄子が智伯を滅したので、豫讓は復讎しようとし、身を變じて襄子を狙つたが遂に捕へられた。その事ここにいへる通りである。

し召シ分られ、天下晴て孫めが命はヲ、慮外ながら、此祖父が助けた、夫レに何シじや樋口が腹立た、ヤイ汝が子でも無い主君でも無い、若者でもない大事の大事の、おれが孫を一所に殺して侍が立ッか、若イ其大きな眼にも、祖父が碎く心の數は見へまいぞ、恨めしいとぬかす汝等が、結句祖父は恨めしい」と氣を急上て曇り聲、能ふ訴人なされた有リ難し共過分シ共、言ぬ詞は言ふ百倍嬉し涙にくれけるが、地ずつと立て重忠の傍近く、「天晴御邊※が梶原ならば太刀の目釘の續かん程、切死に死んずれ共、粟津の軍妹巴が身の上迄、志有しと聞ク重忠殿、情に刃向ふ刃はなし、腹十文字に搔切て首を御邊シに參らす」と、言はせも果ず「ヤア樋口、死首を取て手柄にする重忠ならず、とても叶はぬと覺悟あらば、尋常に繩かゝられよ」、「いや／＼運盡きて腹切ッは勇士の習ひ、繩掛ゝれとは此樋口に、生ナ恥かゝせん結構な、仁シ義有ル重忠の詞共覺へず」、「いや是樋口、木曾殿の御内に四天王の隨一チと呼れ、亡君の仇を報ん爲、權四郎が婿となつて弓矢に勝る櫓櫂を取て、大將の船を覆し鏖にせんず謀、恐ろしし頼もし、晋の豫讓は主の智伯が仇を報せんと、御邊シが如く姿を窶し、敵襄子を狙ふ其志を深く感じ、

着たる所の衣服を脱いで豫讓に與へ、其衣を切らせて彼が忠義を立させしは、敵ながらも襄子が情、木曾殿叛逆ならざる事は、書置に顯はれ御最期今更悔に甲斐なし、主人に科なき樋口の次郎、全恥を與ふるに非ず、忠臣武勇を惜給ふ、大將義經の心を察し、重忠が繩掛くる」とつつと寄つて、樋口が肘捻わぐればにつこと笑ひ、「關八州に隱なき勇力の重忠殿、力づくには劣らぬ樋口、取られし此腕もぎ放すは易けれど、智仁兼備の力には及びもない事相手にならず、ともかくも計らはれよ」と弓手の腕を押し廻せば、「ヤア愚々忠義厚き樋口殿の力に重忠が及んや、大手の大將範賴公搦手の大將義經公、兩大將の御仁政、文武二つの力を以て縛む此繩ぞ」と、掛くるも掛かるも勇者と勇者、仁義に搦む高手小手繩付を引立させ、「コリヤ女、樋口殿の血こそ分ね、槌松とやらんは大切な子でないか、暇乞を」と有ければ、およしは泣々納戸に臥たる子を抱上げ、「コレのふ暫し假初も親子と言し此世の別れ、コレ顔見せて」と差寄れば、「ハツア槌松に暇乞とは、四相を悟る重忠の御情、祖父の願を聞分け給ひ助け置かるゝ忝さ、誰彼の情も忘れぬ、コレ槌松、父と言ずに暇乞」、「樋口樋口樋口さらば」と稚子の、

○わぐれば　「綰ぐれば」で、曲げる意。

○大手　追手とも書き、敵の正面に向ふ部隊をいひ、搦手に對する語。

○高手小手　人を嚴重に縛ること。（見索引）

○四相（しさう）　我相、人相、衆生相、壽者相をいふ。四相は迷の根本であつて、これを悟るは智慧の超越しと言はれる。近松作「出世景清」に「景清は四相を悟り候へども、重忠は四相を悟る」

誰が教へねど呼子鳥我は名殘も鴛鴦の、番離るゝ憂き思ひ「やらんやらん」と縋り付く、「コレ娘よほえな、何ンぼやらんやらんと商賣の船歌で、留ても留らぬア、悲しや、假令死でも地獄へやらん、極樂へやる弘誓の船歌、思ひ切てやつて退けう、汐の滿干に此子が出來たとな、孫が身の上案じるな祖父が、賴 のんゑい〳〵汝が、代りに大事に育てゐいよほん、ほゝんほほんに何ンたる因果ぞ」と正體もなくどうと伏し、涙に噎ぶ腰折松餘所の千年は知らね共、我身に近き有爲無常、老は止り若きは逝、世は逆樣の逆櫓の松と朽ぬ、其名を福嶋に枝葉を、今に殘しける、

○呼子鳥　「古今集」秘傳三鳥の一。郭公であるとの說もある。ここは子が呼ぶをいひかけた迄である。
○ほえる　聲をあげて泣く。(既出)
○弘誓の船歌　弘誓の船に船歌をいひかけた。弘誓とは、佛菩薩が衆生を濟度しようとされる弘大な誓願をいふ。其の誓願によつて衆生が生死の苦海を渡つて涅槃の彼岸に達するを、船が人を渡すに喩へて「弘誓の船」といふ。
○汐の滿干…ほゝん　舟歌である。「のんゑい」「ゑいよほん、ほゝん」は拍子聲。舟歌に「のんゑい」の拍子聲のあるは「淋敷座之慰」の中の舟歌にも見えてゐる。
○腰折松　腰折歌にいひかく。腰折歌とは、上句と下句との意の相あはぬ拙歌をいふ。松の緣で千年といひつづけた。
○有爲無常　有爲とは、諸種の因緣和合して出來る諸現象といふ。この世に因緣によつて假に成り、衰變窮りなきを以て、之を「有爲無常」といふ。
⊙逆艪の松　大阪の上福島中・淨正橋附近(昔蜆川畔)にあつた名松で、今はその名を存するのみ。

第四(辻法印內、神崎揚屋、無間の鐘、景季出陣)

登場人物の主な者

梶原源太景季(景時の嫡子)　梅が枝(千鳥の遊女名)　辻法印(加島の山伏)
お筆(梅が枝の姉)　延壽(景時の妻、景季の母)

梶原景季は勘當を受けて千鳥と共に攝州に來り、千鳥は神崎（兵庫縣川邊郡）の遊女に身を沈めて梅が枝と名乘り、景季は加島（大阪市西成區）の辻法印の家に身を寄せてゐる。お筆は妹の行方を尋ねて辻法印の所に立寄り、占を請うて去る。後に景季に歸り、法印と言合はせて尼が崎大物浦の農夫から笈摺を詐取し、法印と共に之を擔つて神崎へ行つた。

梅が枝は神崎全盛の遊女となり、裕福な客に招かれて千年屋に行き、折から尋ね來た姉お筆に逢つて、父の非業の死を聞いて悲しみ、共に敵討を約して別れる。その後へ景季が來て、「今夜一谷に出陣するから、預けて置いた賴朝公から賜はつた產衣の鎧を出してくれ」といふ。然るに其の鎧は景季が梅が枝との遊興費三百兩の代りに取られてゐた爲、景季は失望して自殺しようとする。梅が枝は之を押止めはしたものの金の調達に窮し、手水鉢を小夜の中山無間の鐘に擬して打出さうと思ひ柄杓を振上けた時、二階にゐた裕福な客が三百兩を投出したので、景季は之を押戴いて鎧を取戾しに走つて行つた。

お筆は父の敵討に妹を誘ひに來たが、その敵といふは梶原父子であつたので梅が枝が當惑する。折節二階から放つた矢幹が姉妹の胸に中つて驚く。やがて裕福な客は二階から降りて來たが、それは景季。千鳥の身を案じて様子を見に來た景季の母延壽であつて、三百兩を投出したのも矢幹を射たのもまた延壽であつた。かくて延壽の執成しで、お筆も梶原父子を狙ふ事を思ひ止まつて和睦し、景季は產衣の鎧を着て箙に紅梅を挿し、一谷に出陣した。

梅が枝が手水鉢を無間の鐘に擬して柄杓で打つ所作は、これより以前にあつたのであるが、本曲に取入れられて益々名高くなり、「梅が枝の手水鉢、叩いてお金が出るならば」と唄はれるに至つた。歌舞妓年代記に享保十六年春「傾城福引名護屋」興行の事をいへる條に、「遠江國小夜の西山村に無間山觀音寺の釣鐘を撞けば、未來は無間地獄に墮つると雖も、此世にては富貴の身となるといへる事を狂言に取組み、元祿二巳年大阪荒木與次兵衞座にて、傾城小夜の中山といふ名題に、谷島主水といふ若女形、傾城裏室にて鐘を撞く所作始めなり。其後元祖芳澤あやめ、京都早雲座にて鐘を撞く。其時の所作は水木辰之助、即ち元祿十四年の事なり。又享保十三年春、京市山助五郎座にて、瀨川菊之丞、庄屋六右衞門娘おきくにて勤むる。此時趣向をかへ、手水鉢を鐘になぞらへ打ちしが始めなりといふ。同十六年亥春中村座にて高嶋にて勤む

る。初日舞臺にて金を包む物なき故、衣裳の袖をまことに引切りたりし其思ひ入りよかりし故、翌日より其通りにせしとかや。その後大阪竹本座後撲座にて元文四年未四月十一日ひらかな盛衰記といふ新淨瑠璃初日なり、是扇引名護屋の菊之丞の無間鐘を取組み、淨瑠璃の文句にも袖引ちぎり三百両、包むにあまる嬉し泪とある事、瀬川の家の藝、代々の興なり」とある。また「倒冠雜誌」寶曆九年七月刊」に、ひらかなの松右衞門、別して梅が枝の無間の鐘は古今無雙の事、尤も菊之丞の形とは言ふものゝ、舞子或は年忘れの座敷狂言にもして、持て囃すは世の人の知る所なり」と見えてゐる。

第五（生田森。一谷。大團圓）

登場人物の主な者

梶原源太景季（景時の嫡子）　源義經（賴朝の弟）　梶原平三景時（賴朝の臣）
樋口次郎兼光（木曾義仲の名將）　梶原平次景高（景時の次男）　お筆（鎌田隼人満次の娘、梅が枝の姉）
梅が枝（お筆の妹）　權四郎（福島の船頭）　駒若（義仲の子）
番場忠太（梶原景時の郞等）

梗概

梶原景季は箙に紅梅を挿して生田の森の戰に臨み、平家の軍兵を切靡け、菊地の一黨を討取り、武勳を立てて父景時から勘當を赦された。

義經が鵯越から攻入つて一谷を陷れた時、樋口兼光は捕はれたまゝ畠山重忠に引かれて出で、義經に罪を赦された。そこで梶原景高の首を打切り、番場忠太を捕へてお筆姉妹に殺させ、權四郎の孫として育ててゐる幼兒駒若の行末をくれぐれも賴んで自殺し、芽出度く義經の凱陣となる。

團七九郎兵衛
釣船三婦
一寸徳兵衛

夏祭浪花鑑

解題

延享二年七月十六日から初めて大阪竹本座に上演され、作者は並木千柳・三好松洛・竹田小出雲である。

本曲は世話物九段續きの嚆矢であつて、主として大阪俠客の立引を仕組み、操芝居の隆盛期に當り好評を博した傑作である。

作者

並木千柳は元祿頃大阪に生れ、通稱を松屋宗助といふ。戲作名を初めは田中千柳といひ、後に並木宗助（或は宗輔）と改め、倉柳・市中庵の別號がある。西澤一風に學んで豐竹座の作者となり、享保八年十一月一風と共に作つた「建仁寺供養」に田中千柳と署名してより常にこの名を用ひたが、享保十一年四月一風・安田蛙文と共に作つた「北條時賴記」に並木宗助と改名し、その後は宗助又は宗輔の名で多くの新淨瑠璃を作つた。その中で有名なのに「忠臣金短冊」「苅萱桑門筑紫𨏍」等がある。寛保二年八月「道成寺現在蛇鱗」の作を名殘に豐竹座を去つて江戶に下り、豐竹肥前掾座の作者となつて居ること數年で大阪に歸り、竹本座の客となつて並木千柳と改名し、延享二年七月三好松洛・竹田小出雲と共に「夏祭浪花鑑」を作る。之より以後他の作者と共に作つたものに「菅原傳授手習鑑」「義經千本櫻」「假名手本忠臣藏」「雙蝶々曲輪日記」等の名篇がある。寶曆元年再び豐竹座に歸り、並木宗輔の名で十月興行の「日蓮聖人御法海」を添削し、更に「一谷嫩軍記」の第三段目を作り、この年九月に歿した。並木永輔・並木丈助・並木正三などはこの門から出た。

三好松洛の傳は詳でない。大阪北新地の茶屋主人であつたといひ、或は大阪で醫を業としてゐたともいひ、その他異說もある。竹本座附の淨瑠璃作者となつて、竹田出雲・並木千柳・文耕堂・竹田小出雲・吉田冠子・近松半二等と共に創作に從事し、明和八年竹田出雲が後見に成る「妹背山婦女庭訓」は彼が七十六歲の時であるから、元祿九年の生れである。彼が他の作者と共に作つた物の中で著名なのに、「御所櫻堀川夜討」「夏祭浪花鑑」「戀女房染分手綱」「本朝廿四孝」「太平記忠臣講釋」「關取千兩幟」「近江源氏先陣館」などがある。

竹田小出雲の傳に「ひらかな盛衰記」の所に述べた。

出　處

大阪の名優片岡仁左衞門が、元祿十一年に片岡座に上演した「宿無團七」は彼の當り藝であつた。また「攝陽奇觀」卷之六に「長町裏舅殺事實　延享元年の冬泉州堺の魚うり博奕の出入にて長町の惡提を長町裏にて殺害す、折節其年は雪深く、殊に其頃は當世の如く人家もなき野原なれば、死骸を雪に埋み置し故、此事誰あつて知る者もなかりしが、翌年の春雪解て右の死骸出たれども、日數經し事なれば誰が所爲とも相知れざりしが、天網遁れ難く聊かの事より露顯に及び、召捕れて死罪に行はれし、此事實を竹本座の淨瑠璃作者並木千柳筆作して、其冬の雪中の事を轉じて時候を夏とし、其年の秋芝居に夏祭浪花鑑と題し、堺の魚うり團七九郎兵衞に舅の義理をからみて、長町裏の段は、高津祭の宵宮にて俄御輿に紛れ込みて札の辻八丁目へ歸る趣向は、これ作者の發明といふべし」と見えてゐる。これ等によつて本曲は作られたものである。

影　響

本淨瑠璃は「攝陽奇觀」卷之六に「延享二年七月竹本座にて夏祭浪花鑑の新淨瑠璃大當り、別して今度人形に帷子衣裳を着せ、初めて目新らしく其年の冬までも大入せり、中にも吉田文三郎團七九郎兵衞の人形第一の大當り、原來人形の頭の好みよく、今に團七の頭を用ひて惣名丸目といふ、また團七の人形の着たる帷子衣裳柿色の大格子めきたるを其時より團七縞と呼び、藍色の方を一寸の人形着たる故德兵衞といひならはせて、二色とも大きに流行す」と見えてゐる。寶曆七年七月十五日から京都蛭子屋吉郎兵衞座に上演され、其の後も度々諸方に上演されて今も壽命を保つてゐる。

歌舞伎では延享二年八月京都都萬太夫座に上演された。「攝陽奇觀」卷之六に「同年（延享二年）冬中之芝居嵐三右衞門座の顏見世後狂言「夏祭浪花鑑」を歌舞伎にて初めて出す、また同時に角の芝居市山介五郎座にても同狂言を出し、双方共大當り、また翌年卯の十月にも同座にて大當り」と見え「大歌舞伎外題年鑑」には、「夏祭浪花鑑」が延享二年十二月二日から角の芝

居（座本嵐三十郎）に顔見世、また延享二年十二月十五日より大西の芝居（座本嵐三十郎）に顔見世、また延享三年五月十日より中の芝居（座本市山助五郎）に上演されたことが見えてゐる。其の後も度々諸方に上演されて現今に及んでゐる。

第一（色の水上汲分けた御鱸茶屋の鹽竈）

登場人物の主な者

玉嶋磯之丞（泉州濱田の家中玉嶋兵太夫の子）　琴浦（堺港乳守の遊女）　大鳥佐賀右衞門（磯之丞の朋輩）

おかち（義平次の娘。團七の愛人）

梗概

玉嶋磯之丞は乳守の遊女琴浦と馴染み、戎島の御鱸茶屋に登り、茶屋の亭主・太夫琴浦・朋輩佐賀右衞門・太鼓持等と賴光跡目論の淨瑠璃狂言をして遊興してゐた。其處へ嘗て玉嶋家に奉公してゐたおかちが磯之丞の母の使者となり、豫め浮浪人等に言含めて打合はせをした後、御鱸茶屋に來つて磯之丞の朋輩介松主計と名乘つて取次を請うた。佐賀右衞門は眞面目な主計が意見に來たものと察して逃げ去つた。おかちは磯之丞に逢うて、磯之丞の母の詞として「父兵太夫は江戸からの歸國遲なはれば緩りと遊興せよ」と言傳へ、また己が愛人團七が佐賀右衞門の中間と喧嘩した爲に、入牢してゐるのを赦免されるやうに懇請する。

折柄濱邊の浮浪人等寄集り喧嘩を始めて「自分どもは放蕩の爲に資産を破り、遂にかかる詰らない身になり果てた」と、述懐する。これを聞いてゐた磯之丞は、我が身に思ひ當り遊興をやめて歸る。浮浪人等はおかちが言含めたことをうまく僞おほせたので、おかちから寒天に布子と金銀を貰ふ。（序に云、本曲の各段に、浮世草子などに倣つた題（文にした見出し）を附けたのも新しい試みであるが、以て作者が、かういふ事にも趣向を出さうとして技巧を凝らした事が窺はれる。）

第二(殿の謎意を巻込んだおやま繪の拜領物)

登場人物の主な者

玉嶋兵太夫(濱田藩士。國詰の藩士頭)　玉嶋礒之丞(兵太夫の子)　おかち(團七の妻)

介松主計(濱田藩家老職)　團七(堺の魚屋。おかちの夫)　市松(團七の子)

大鳥佐賀右衛門(濱田藩士)　駒形杢兵衛(濱田藩組下)　音羽浪之進(濱田藩組下)

羽根倉闇右衛門(濱田藩組下)

梗概

泉州濱田(堺の戎島を石州濱田に假托したもの)の城主が江戸から歸國されて城下町賑ふ。礒之丞は乘物で御鯛茶屋から歸宅する。おかちも其の後に附いて歸り、奧方に逢うて、己が魚賣り團七と密通した爲に玉嶋家から暇を出されたことを悔み、その團七は佐賀右衛門の中間と喧嘩し、傷を負はせたによつて入牢してゐることを嘆いて、藩主御歸國の喜びに何卒夫の赦免になるやうにお執成をと懇請した。

折節上使介松主計・大鳥佐賀右衛門の兩人來り、主君御歸國の土産として、兵太夫へは長船の一振を賜はり、二百石の加增を申し渡した。又、組下駒形杢兵衛には碁將棋を好むとて將棋盤を賜はり、音羽浪之進には能樂を好むとて小鼓一張を賜はり、羽根倉闇右衛門には相撲好きとて緞子三本と化粧紙とを賜はる。礒之丞には大和繪師西川の畫いた遊女姿繪の掛軸を賜はつて好色を諷刺した。佐賀右衛門は礒之丞が遊女琴浦に對する戀敵である遺恨を含み、時こそよけれと意趣晴しに散々罵つたが、瑕持つ礒之丞は爭ひかねて默つたら勘當を受け、兩腰を奪はれて放逐される。

折柄おかちは幼兒市松を連れて其の場に出で、夫團七が入牢した後は、大阪長町の親元三河屋義平次方に身を寄せ、難儀して

居ります」と述べて、夫の赦免を哀訴した。佐賀右衛門は「喧嘩の相手が入牢中に死んだのだから、團七は死罪にすべきだ」と主張した。そこで主計。兵太夫の計らひで、喧嘩の相手の死骸と團七とを引出して取調べ、喧嘩の負傷で死んだものでない事が知れたので、團七は赦免ときまつた。

其の時兵太夫は團七に對ひ、「磯之丞を勘當したから定めし彼奴はのたれ死するであらうが、大阪でつい遇ふやうな事があつても必らず情をかけてくれるな」と、言うた言葉の裏には頼む心の色も親の慈悲、上使は聞かぬ振して歸つた。

第三（出入の數をつまぐつた珠數三昧の男作）

登場人物の主な者

釣船三婦（俠客。團七の朋輩）　おかぢ（團七の妻）　市松（團七の子）
團七（堺の魚屋。おかぢの夫）　玉島磯之丞（兵太夫の子）　琴浦（堺乳守の遊女。磯之丞の愛人）
大島佐賀右衛門（濱田藩士）　一寸德兵衛（俠客）

梗概

團七が赦免されて、大阪長町に身を寄せてゐる妻を尋ねて來るを、釣船三婦。おかぢ。市松の三人連れ立つて迎へに出て、天下茶屋を過ぎた邊で、おかぢは市松を伴うて住吉神社にお禮詣した。釣船は路傍の石に腰掛けて之を待つてゐたが、その時駕籠舁が駕籠に乘せた客に駕籠賃を強請つてゐるのを見て、駕籠舁をたしなめて錢百文を與へた。ところがその客は磯之丞であつたので、おかぢが立寄つてゐる昆布屋を教へてそこへ行かせる。そして自らは例の髮結床の店先に憩ひ、團七が警固の武士に引か

れて來るのを見て、其の追放されるのを待受け、「ヤ團七さん、我々はお前を迎へに來た」と語り、二枚の辻札を讀んで、「今日は片岡仁左の日向丸の歌舞伎狂言、竹本義太夫の曾根崎心中の操芝居だ。さて磯之丞やおかち母子が其處の昆布屋にゐるから、お逢ひなされ。イヤそれよりかまづ此の床屋でちよつとその月代を剃つたがよい」と、團七を床屋に入れて、昆布屋に走つて行つた。

この時琴浦が磯之丞を慕うて來、その跡を佐賀右衞門が追掛けて來て、之を拉し去らうとする。床屋の内から之を見た團七は、躍り出て佐賀右衞門を投飛ばし、琴浦に磯之丞の居る所を教へて行かせる。そこへ佐賀右衞門に賴まれた一寸德兵衞が來て、團七と喧嘩を始めた。之を見たおかちは並んで立てる辻札を押取り、兩人の間に橫に仆して柵となし、相手を能く見れば、嘗て布子と錢とを遣つた浮浪者の一寸德兵衞である。さてはと驚いて互に話し合つた。その話によると、彼は玉島兵太夫とは同鄕備中玉島生れで、然も兵太夫は彼の親方筋であることまでも知れて、相共に磯之丞を助ける事を誓ふ。かくして時を費す間に、三婦・市松・磯之丞・琴浦は相伴うて既に歸つたので、殘る三人は其の跡を追うた。

第四（手代が戀を掘出した浮牡丹の箱入娘）

登場人物の主な者

孫右衞門（大阪西本町道具商）　傳八（孫右衞門の重手代）　お中（孫右衞門の娘）

清七（磯之丞の改名。孫右衞門の手代）　團七九郎兵衞（魚屋）　彌市（仲買）

侍（團七の舅三河屋義平次の變裝）

梗　概

磯之丞は團七の周旋で大阪内本町道具屋孫右衛門の手代となつて清七と名乘る。彼は主人の娘お中に愛せられ、一方重手代傳八はお中に懸想して戀の張合となる。團七は九郎兵衛と名乘つて魚を賣りに來り、清七に逢うて「國に歸參なされるまでは辛抱なされませ」と懇に戒め、魚荷を擔つて奥へ入る。（德兵衛には「一寸」を上に附け、三婦には「釣船」を上に附けていふので、九郎兵衛にも上に附けるにもとの名「團七」を以てし、團七九郎兵衛といふ）

折節彌市・侍・傳八の三人共謀して、浮牡丹の香爐の贋物を清七に賣付けて、清七から五十兩を詐取した。之を聞いた九郎兵衛は三人の去つた跡を追掛けて侍を捕へれば、己が舅三河屋義平次が侍姿に變裝したものなので、驚いて其の不心得を諫めた。義平次は居丈高になつて「いらぬ世話をしておれが仕事の妨げをする」と、不滿を並べ立ててゐる。

清七は主人から預かつた五十兩を奪はれた爲解雇された。清七を戀慕してゐる主人の娘お中はこれが爲に自殺しようとして、乳母に諭されて思ひ止る。娘の心を察した主人は、乳母の鍵を借りて態と金戸棚の鍵と取違へて返し、以て暗に乳母と娘と心を合はせて金戸棚の中の金を奪はせて、清七を救はせた。

この夜清七はお中を慕うて主人の門前に佇んで内の樣子を窺ふ。これを知つたお中は、門外に駈け出て清七に逢ふ。この時彌市が來て、清七から奪つた五十兩の分配額を傳八に與へ、お中を奪ひ去らうと企んだ。之を見た清七は躍りかかつて彌市を刺殺した。目刺すも知らぬ闇夜のこととて、彌市が殺されたのを知らぬ傳八は、清七を彌市と思ひ違へて金を渡す。清七は之を受取りお中と手を携へて駈落する。

第　五（道行妹背の走書）

登場人物の主な者

お中（孫右衛門の娘）　清七（磯之丞の改名。孫右衛門の手代）　釣船三婦（侠客。團七の朋輩）
傳八（孫右衛門の重手代）

梗概

時は夏の闇の夜、お中・清七の兩人は内本町から松屋町筋に出で、常盤町・兩替町・和泉町を彷徨ひ、瓦屋橋・極樂橋を渡り長町裏・寺町を過ぎて行く。その途すがら清七は彌市を殺したからには遁れぬ罪と諦めて書置を認め、安居天神の森に辿り著いて死を覺悟すれば、お中も共に死なうとする。折節清七を尋ねて來た釣船に見出され、諭されて死を思ひ止る。傳八等もお中を尋ね來つてこれを見付け、しなだれ寄つてお中の懷に手を入れ、財布に觸れて忽ち欲心を起す。そしてお中のいふが儘に切株に上つて、お中に縊死の方法を敎へてゐる時、隱れてゐた釣船に足を蹴放されて縊死を遂げる。釣船は清七の書置を其の死骸の側に置いて、彌市を殺した罪を塗附け、二人相共に夜明けぬ中に急いで去る。

第六（男の意地を立てぬいた燒鐵の女房作）

登場人物の主な者

玉島磯之丞（泉州濱田の家中玉島兵太夫の子）　琴浦（乳守の遊女。磯之丞の愛人）　釣船三婦（荷物運送業。侠客）
お次（三婦の妻）　お辰（一寸德兵衞の妻）　木端の權（もとは駕籠舁、今は獅子舞）
生の八（もとは駕籠舁、今は獅子舞）　三河屋義平次（團七の舅）　一寸德兵衞（侠客）

團七九郎兵衞（魚商）

梗概

大阪高津社夏祭の日、お辰はお次から「礒之丞を玉島に連れ歸つて預かつて下され」と、頼まれて之を引受け、礒之丞との情交の噂を立てられないやうに美しい顏に燒鐵を當てる。三婦は琴浦を奪ひ去らうとして來た木端の權・生の八をさいなめる。義平次は大島佐賀右衞門に頼まれ、お次を騙して琴浦を奪ひ去る。

この段、俠客の家庭と市井の任俠とを細かに寫した。それが固より匹夫の勇であるにもせよ、自己を離れて責任を全うする、彼等の道義心を回顧させる有名な場面である。

第六（男の意地を立てぬいた燒鐵の女房作）

賑しき、難波高津の夏神樂、練込む振込む荷ひ込む、てうさようさの伊達提燈門の揃へは地下町の、印を見世に伊豫簾、並ぶ家居の其中に、釣船の三婦が内、客は內證預りの乳守の太夫琴浦と、結び合たる礒之丞見世を揚屋の祭見に、口舌仕かけて摑合て焔の煙管打叩き、煙くらべのびんしやんは、火皿も湯に成るばかりなり、三婦の女房は料理拵へ火鉢にかけし燒物を、煽ぐ片手に「コレ琴浦樣、

○高津の夏神樂　「攝津名所圖會」卷四下に「高津社　西高津にあり、例祭六月十六日、祭神仁德天皇」。

○ちやうさようさ　「浪花方言」に「てうさやようさやてうさやようさや＝大阪にて山車（だんじり）を挽き歩く時囃子の言葉なり」。

○伊達提燈　[illegible]に出す提燈。

○地下町　[illegible]の町。

○伊豫簾　伊豫國[illegible]露峰の山中に産する篠[illegible]細い[illegible]上品な簾。

○乳守　[illegible]町の東にあり、[illegible]に通ずる街の名。

○見世を揚屋　[illegible]恰も遊女を[illegible]家のやうに見えるからかくいうた。

○口舌　ちわげんくわ。
○焔　火炎の義、瞋恚の焔にいひかく。
○びんしやん　物を意に留めないで、ぶんさしとするさまにいうた。
○火皿も湯になる　嫉妬の情熱に煙草の火皿も焼けて湯となる。近松作「大經師昔暦」に「姤の焔に提子の水が湯となつて」と、あるのと同じやうな意。
○ふし　五倍子の略をいひ、その中に含有する單寧タンニンは收斂味を有し、昔は齒黑めに五倍子の粉を用ひたから、その味は婦人によく知れてゐる。
○心中　情死。
○据膳　女の方から戀をもちかけられること。
○河豚汁　河豚を料理して味噌汁などにしたもの。極めて味のよいものなるによつてかくいうた。
○内入よき　機嫌よく内に入るをいふ。(「内入吉」は菅原傳授手習鑑」の中に說いた)。
○皮鱠　鯛・比目魚・鯏・海鰻などの皮身を刻込んだ鱠。

詞もふ好い加減に中直つたらよかろがの、道具屋の娘お中殿とやらを三婦殿が送つて往たも、悋氣辛氣な顔か嫌さに、それに何ぞや五倍子食た樣にお前も粋の樣にもない、男に勤奉公をさしたと思たがよいわいな」と、挨拶すれば、詞「アノお次樣の言はんす事はいの、お中殿と心中に出た清七男。中直つた迚面白ふもござんせぬ、自體娘の有る内へ奉公にやらんした、九郎兵衛樣が聞へませぬ」、「アコリヤ九郎兵衛に恨言ふ氣なら此清七男にいへ、三婦の世話して賜るのも九郎兵衛の賴みから」、「サ其恩の有る人を恨さするはお前の業」。「言ふなやい、据膳と河豚汁を食はぬは男の内ではない」、「ソレ其口が猶憎い」と、せり合中へ主の三婦珠數爪繰つて門口より、詞「女房共今戻つた、祭の料理出來て有るか」と、内入よきにお次もほれ〴〵詞「出來て有る〳〵。誂の鯵の燒物、磨立て汁に皮鱠」、「ヲツトそれで食へる〳〵」、「シテ道具屋の娘ッ女は戻して來てか」、「ハテ人の大事の娘勾引たと言はれては、礒殿の男が立ぬ。首縊つた傳八めに何もかも負せ金の事もさらりと濟み。中買の彌市を殺した事は、彼書置でしてやつたと思ふたが、いやな風說が有る、お二人も聞しやませ。其書置の手が傳八が手でないと、一門共が言

出し御詮議を願ふとの噂、スリヤ礒之丞様を大坂の地には置れまいと、九郎兵衛も言ふ己も思ふ。マア當分立退す相談と云ふて當所なしに遣られもせまい。よつ程な痃癖。マア端近へ出て人に顔見せるも悪い、殊に琴浦殿は目懸ける奴の有る身の上、女房共も女房共、なぜ表へ出しまするぞ」と、呵り廻せば「ソレ見さんせの、榮耀らしい悋氣どころか、事によつたら二年三年別れ〳〵にござろも知れぬ、暇乞と中直りの汗を一度にかいて置んせ。うぢ〳〵せずと琴浦様連れまして行かんせ」と、粋な女房の挨拶もよい折れ口と「コレ礒様、言ふ事がたんと有る、サアござんせ」と手を取れば、ふいと振切り「不行儀せまい、」三婦が乾度見て居やる」と、おどけをしほに二人連れ、手を引、合て入にける、「ドリヤ焼物を焼して、「下り荷物の世話なさんす。三婦様と云ふお方は、此處らではないかへ」と、立て祭進じよ」と立つ女房、表へ二十六七な所目馴れぬ笠の中、そこか爰かと見廻し問門内より「爰でござんす、どなたじや」「わしじや」「わしとはへ」「ヲヽ能ふごごつた、アリヤ徳兵衛のお内儀じや」「是はしたり、サアマアこちへ」と、挨拶を馴染にして打上り、「三婦様には先程九郎兵衛様でお目に懸り、何かのお禮を申

○けんひき　痃癖（「けんぺき」）の轉。頸から肩にかけて筋のつり痛む病をいひ癪の一種。よつて以て心配して肩が凝ることにいふ。

○たんと　たくさん。（見索引）

○祭　祭い進じい時。

○下り荷物　西國行きの荷物。

○爰で　どなたぢや　其次の詞。

○わしとはえ　お次の詞。わしぢやとは、ええはてどなたやら。

○ヲヽ能う　お内儀ぢや　三婦の詞。

○内儀　町人の主婦を呼ぶ稱。（見索引）

○是はしたり　こちへ　其次の詞。

○馴染にして　心やすだてにして。

○玉島　備中國玉島町。[illegible]
○荒こましい　「荒くましい」の轉。荒々しい。近松作「鑓田兵衛名所盃」に「物言ひなども荒くましい」
○肌刀差いた様な人　懐刀を持つてゐるやうな人の義であつて、危險な人の意。「武家義理物語」卷二に「懐中を探しけるに、案の如く肌刀さしてあり」
○橋詰へ出て貰ふ　瓦屋橋か九之助橋のたもとへ出て貰ふ。（大の仲間が來れば必らず喧嘩がはじまるので、それを外す爲である）。
○イヤお内儀　ますか　三婦の詞。
○サイナア　サレバイナア。（見索引）
○ひつしよなさ　容赦のないこと。（見索引）
○しほ　はずみ。機會。（見索引）

しましたが、お前には初て、私は備中の玉嶋に居りまする辰と申して、徳兵衛女房でござんする」、「コレハ〳〵能ふ上らんしたなア」、「アイまあ連合徳兵衛殿事は、僅な科で、國を立退かれまして、和泉とやらに居られましたを、皆さん方が世話にして暫らく大坂の住居、生れ付きが荒こましい喧嘩と云へば一番駈け、肌刀差いた様な人、定て何角お世話がち」と、一禮言へば、「ア餘所がましい何のお禮、イヤもふ荒こましいは何方にも覺の有る事、手前の人も十五六年以前迄は、夫れは〳〵喧嘩好でな、假初にもちよつと橋詰へ出て貰ふが毎日毎晩、夫も又直れば直るもの、今では蟲も踏殺さぬ佛性、アレあの様に片時も珠數を放さず、腹の立つ事が有れば念佛で消て居られます」、「噂が言ふ通り常住是じや〳〵」、「ハテナアそれは結構な事」、「イヤお内儀徳兵衛も同道で下られますか」、「サイナア女房の思ふ様にもない聞いて下んせ、お國の咎も赦て迎ィに來たを、ヤレ嬉しやといふ氣もなふて、マア四五日も後から下ろ先へ下れとひつしよなさ、未練そふに附きはつても居られず、是非なふ先へ下ります」と、咄の内に三婦が女房思ひ付いたる一つの頼み、言出すしほに茶を差出し、「イヤ申しお辰様、馴々しいがお

前へちつとお頼み申したい事がござんす、何と私に頼れて下んすまいか」と裏問へば。立直つて襟かき合せ、「玉嶋の田舎に住んでも一寸徳兵衛女房辰でござんす、頼むと有るを一寸でも跡へ寄ぬが夫のしにせ、引きはせまいマア言て見さんせ」、「マア忝いお禮から申ます、定メて徳兵衛様の咄で聞て御ざんしよう、和泉の國濱田の御家中。玉嶋兵太夫様といふお方の御子息磯之丞様と云が。様子有ッて町奉公なされてござつた所に、若氣の至りで人を。マア大坂に置れぬ首尾。今も今とてかけさせまする相談、此お方をどふぞマア」、「私が方へ預りましよ」、「アノ預つて下んすか」、「そこを引カぬが一寸が女房、殊に其親御の兵太夫様へ釣てはちつとこつちに由縁も有り。預つて連れまして歸りましよ」、「そんならそふして下さんせア落着いた〳〵」、「テヱ呼まして來ませう」と立を釣船「コリヤ待て女房、女さかしうして牛賣れぬといらざる汝が差配。頼んでよけりや己が頼む、磯之丞様をお辰殿へ預けては此三婦が顔が立たぬ」、「サアそこを外へ預るがあなたのお爲」、「マダぬかす男の一分ン捨さすか、面汚さすかたわけめ」と、呵り飛されもちもおうお〳〵、徳兵衛女房聞咎め、「イヤ三婦様、無理に頼れ度て言ふではない

○裏問ふ　心の中を問ふ。「うら」(裏)とは心をいふ。近松作「ひぢりめん卯月の紅葉」に「その心根が聞きたいと、騒がぬ顔で裏問へば」。
○しにせ　「爲似」であつて、夫の心を引繼ぐこの意にいうた。
○和泉の國濱田　堺の戎島を石州濱田に假托してかくいうた。
○人を　「人を殺した」と言ふを隱して略した。
○かけさせまする　「駈落「かけおち」させまする」の略。
○このお方　磯之丞をさしていふ。
○釣つて　「釣りて」の音便。系「つゞ」きて。兵太夫は一寸徳兵衛と同姓で親方筋に當ればかくいうた。
○テエ　「[illegible]テハ」の一音「テ」を延べた語。
○女さかしうして牛賣られぬ　女の怜悧なるは却つて事を仕損じる事があるとの意の諺。この言は近松作「[illegible]」にも出てゐる。
○差配　世話。とりなし。取扱き。

○ひぢり擦り　愚弄の意。ひぢりは俗人「ひぢいり」で俗でひれる義であらう。

○茶瓶頭　茶瓶頭　京阪地方では禿頭を茶瓶といふ。以下三婦の頭を形容した。ここの文、俠客等は辛い茶を飲む。第八に「茶は常の辛いを呑込んで…汲み」とある）によつて「辛い」「山椒」「茶」皆縁語。又「山椒」の語より「動かする」に「ひりり」の意を含めた。

○身に火の付く　身のあつさに堪へぬ義、以て窮迫するをいふ。

○分別の外　諺に「戀は分別の外」。

○戸が立てられぬ　諺に「人の口には戸が立てられぬ」。

が、私が其人預ればお前の男の立ぬはどうして。但し女でまさかの時役に立ぬと見据へてか、まんざらひぢりかすりを食ふ様なアイ女子でもござんせぬ。一旦頼ムの頼れたのと言ふたからは。三日でも預からねば私も立ぬぞへ。立て下んせ親仁さん」と、辛い女房の詞の山椒茶瓶頭を動かする。「詞イヤどふ言ふても預けては此三婦が男が立ぬ」。「サア其立ぬ譯聞かふ」、「如何様それには様子があろ」、「そりやマアどふして立ませぬ」。「ホ立ぬといふ譯は。内儀の顔に色氣が有る故。徳兵衛が思はふにも、三婦といふ者はよい年をして不遠慮な。身に火の付いたがせつない迚、若い女房に若い男を預けてやつたは聞へぬと、思ひはせまいか又思ふまいものでもない、あなかちこなたに限つて、そふした事は有るまいけれど。分別の外と云ふ事が有る、によつて又疑ふまいものでもないが。ない事じや／＼。ない事じやによつて結句戸が立られぬ、腹立つまいぞや／＼。いつそ此方の顔が歪んで有か半分削げても有ッたら。徳兵衛もなん共思ふまい又世間も濟む、俺や誓文コレ此珠數にかけ預けたい／＼、此方の根性を見据へたによつて、が萬々が一徳兵衛が立ぬ事が出來ると。俺は勿論九郎兵衛迄が、男が廢る、と云ふ事は有ま

○外　諺の「戀は分別の外」の「外」の語をとつていうた。
○下あれ　「下はれ」ともいひ、「下され」の訛。
○鐵灸　細い鐵條で格子の如く作つたものであつて、火の上にわたし、魚肉などを載せてあぶる具。
○横手を打つ　感じ入つた時などに兩手を打ち合はすをいふ。
○物　男の物。
○何のいな　何でもないよ。
○生熟れ　その道に熟達してゐないこと。未熟。
○立てるでもなし横に出る　男の義理を立

いけれど、外といふ字で預けにくい、マアそふ思ふて下あれ」と、事を分ヶたる一言に連添女房も理に服し。お辰は元より詞も出ず、差俯いて居たりしが、何思ひけん立ち直り火鉢にかけし鐵灸の、火に成たのを押取て、我レと我手に我顔へ、べつたり當テる燒鐵に「うん」とばかりに反返る、「是は何故何事」と夫婦は慌て抱か丶へ「藥よ水よ」と勞はれば、正氣付キしかむつくと起、「何と三婦樣こ、此顏でも分別の外といふ字の色氣が有ふかな」。「出來た、お内儀、磯之丞殿事を賴ます」「スリヤ預けて下さんすか」、「唐土迄なりと連れ立ッて下され」、「アヽ嬉しうござんすそれで私も立ッた、磯之丞樣の親御兵太夫樣は備中の玉嶋が御生國、德兵衞殿の爲にも、私が爲にも親方筋、其御子息樣を預からいではナ連合の男も立タず、私も主へ立ぬによつて、親の產付ヶた滿足な顏へ疵付ヶて預る心、推量して下さんせ」と、語るを聞てお次も涙三婦も涙の横手を打ニ。ハテ德兵衞は賴もしい女房を持たなア、なぜ男には生れて來ぬぞ、可惜物を落して來た、ソレ女房共、奥へ伴ひ礒殿にも引合せ備中へ下す心拵へ、お内儀、傷は痛はしませぬか」、「何のいな我ガ手にした事、ヲ恥し」と袖覆ふ、惜しき盛を散せしと、三婦が女房は勞はりて一間

へこそは連レて行早暮近く、生なれの立るでもなし横に出る、男仲間のはね出され木端の權、生の八、獅子に雇はれ赤頭、せんまの形を其儘に、「三婦殿内にか宿にか」と、つき聲やり聲躙り込ム、「ホこりや二人ながら祭の形、まだ仕舞ずか、飲ミに來たのか、今看經しかけて珠數の手が放されぬ、そこらに樽がある一杯せい、南無阿彌陀〳〵、膳棚に鮹があるぞ、南無阿彌陀佛〳〵、それを肴」と口ではぶつ〳〵、爪繰る珠數と挨拶を取交せ後生佛ヶ性、此方は牛頭馬頭惡鬼株膝打叩いてコレ八よ親仁に今のを言をかい」、「ハテぶつ〳〵を聞いて居より言出せ〳〵」、「コレ三婦殿、二人が連レ立ッて來たは、此方に貰ふ物が有ッて來た、花が欲しい花下はれ」、「ヤア〳〵何じや花をくれい、ヘヱ扨は留守の間へ樂車でも持て來たな」、「ヲ獅子持ッて來て美しい花を見付ヶて置いた、去ル侍に頼れ其花を貰ひに來た、ナ八よ」、「それ〳〵つゐ摑んで來て進じやうと言ふて、お侍を宮の内に待タして置イた、前なら腕づくで貰ふけれど、白髮の生へた人をそふも成ルまい、但シこみず言ふて見る氣か、金にでもする氣か」と、仕掛ける喧嘩を珠數で紛し、「ヱ若い者と云ふものはづは〳〵と嗜め〳〵、わいらは住吉で初めて逢ってそれからの

てるでもなしねおけて出る。
○獅子　獅子舞をいひ、正月又は祭禮の時などに來る門附の一種。
⦿せんま　背馬「せむま」であつて、獅子の背に[illegible]。
○つき聲　突聲。かんばしつた鋭い聲。
○やり聲　遣聲。とがり聲。鋭い聲。「世間手代氣質」に「ひよ人れて居ると、内儀がやり聲出して」。
○看經　[illegible]讀誦することであるが、[illegible]て鉦を鳴らし讀經することをいふ。（見案引）
○牛頭馬頭　[illegible]地獄で亡者を苛責する鬼の中には、牛頭の形せるのも馬頭の形せるのもある。「楞嚴經」巻八に「牛頭獄卒、馬頭羅刹」。
○花　纏頭。祝儀。ここは[illegible]。
○下はれ　「下あれ」ともいひ「下され」の訛。
○樂車　祭禮の時に車に飾物を載せて引廻すもの。だし。
○花　解語の花。
○宮　高津社。
○こみず言ふ　「向う見ず言ふ」の略訛で、浮[illegible]。
○ずは〳〵　べら〳〵言ふさま。ずば〳〵。近松作「津島年代記」[illegible]に「田舎者が何やらずは〳〵言ひ居る」。
○わいら　「われら」（我等）の音便。汝等。
○住吉　住吉で[illegible]文を與へてた[illegible]。

○わろ　「わらは」の約、人を罵つていふ。（見索引）

○臺座後光仕舞うてくれう　面目を丸潰しにしてくれうの意。臺座（佛像には臺座と後光とあつて、これを失ふことは威厳を損ずる）より出た言葉で、「臺無」「臺座」「別れ」「臺座後光を失ふ」などは、いづれもこれと同じ類の言葉である。「臺座の別れ」は「義經千本櫻」第三・椎の木の段に見え、「臺座後光を失ふ」は「伊賀越道中雙六」にも出てゐる。
○入身　勝負の時、對手の手許に我が身を入れるやうにかまへること。
○立身　立ちかかつて身構へすること。
○はつし〳〵　はたり〳〵。

出合、もふ根性が直つたと思ふたが、フム其侍と云ふは、大鳥佐賀右衛門と云ふ※わろで有らふがな」、「マアそんな物」。「コリヤ去んで言はふには、琴浦には儀之丞と云ふて、歴とした男がござると去んで云ふてくれ」、「コナ親仁は、俺らを子供の様に思ふそふな」、「ヲ俺が目からは蝗の様に思ふ」、「ドリヤそんなら摑んで去のか」と、立上つて兩人が、奥を目懸け駈入る所に、襖さつと押開け脇差提げて三婦が女房、「コレ此方の人私やさつきにから聞ィて居たが、こな樣ンもふ堪忍が成るまいがの」、「嚊五六年願ふた後生を無にして、いつそ斬て仕舞ざ成るまい」、「イヤこんな時斬ざ斬る時も有るまい」と、言ふに二人はうぢ〳〵きよろ〳〵、性根を据へて身を固め「面白い斬れう、脚腰立たぬ老耄斬外さして※臺座後光、仕舞てくれう」と兩方より「サア斬れ〳〵」とせがみ立。※入り身に成ッて待かくれば、三婦はすつくり※立身に成り「嚊モウ是非がない斬つてしまを」、「ヤそれは」「イヤおれが斬ハは此珠數」と、ふつつり切て後へ投げ、「サア是からが元トの釣船、うぬらに刄物がいらふか」と※はつし〳〵と踏倒し尻ひつからげ、「ドレ其脇差」、「ハテもふ刄

物は入ぬでないか」、「イヤ此がらくたは爪にも足らぬ、根ざしの侍奴をばらして仕舞ふ、男の丸腰も見苦しい」と、大だら腰にぼつ込む所を、どつこいそふはと右左、摑付ヶ腕ぐつと捩上げ、「嗅侍に逢って來ふ」、「ヲ行てごんせ」とやる女房行男より氣の强さ、外へ押シ出し門ぴつしやり、三婦は二人を引立て宮の內へと、連レて行、奥は暫しの、別れぞと、琴浦に呑込せ、酒酌みかはす折からに、表へ來るは九郎兵衞が舅三河屋の義平次が、駕籠釣らして戶をこと〳〵、「誰じや」と云ふて明ヶに出る、「ホ三婦殿の御內室此中は逢ィませぬ、いつ見ても健全でふな」、「お前も達者で珍らしい何シと思ふて」、「サ年寄ルと子に使はれます、九郎兵衞がいふには、此中から惡ル者共が賴れて、琴浦殿を盜まんと念がける、定めて三婦も心遣ひ、四五日此方へ取込で置いたら、燈臺下暗しと氣が付くまい、女夫の衆の氣休めに、迎ふて來いと言ふて駕籠迄おこしました、是迄はいかゐ世話」と取繕へば「ナンノお禮に及ぶ事、今も今迚いけず達がわつぱさつぱ、連合は其出入に行かれました、いかさま二三日此家を散け、あいつらに鼻あかすも魂膽、九郎兵衞樣も其胸で俄の迎ィでござんしやう、舅御のお前に渡すは慥、奥にじや呼んで

○がらくた　がら〳〵した芥〔あくた〕の義。「あくた」は「くた」(朽)の義。やくざもの。
○根差　原因。
○ばらす　殺害する。
○丸腰　腰の丸い儘である義、刀などの武器を帶びざること。
○だら　「だんびら」の略。徒廣の義。(平廣の義との說もある)。平たく廣い刀。近松作「持統天皇歌軍法」に「大だら差しこはらし」。
○燈臺下暗し　遠いことに明かで、近いのに暗いのを嗤へる諺。この諺は西鶴の「胸算用」にも出づ。
○迎ふて　迎へて。
○いけず　善からぬ者。ねぢけ者。
○わつぱさつぱ　何の彼のと喧しくいふさま。狂言「連歌毘沙門」に「何やらわつぱさつぱと仰せられ」。
○出入　紛紜。ごたごたもめ。喧嘩。
○あらく　散り〴〵になる。「倭訓栞」に「あらけぬ　神代紀に散兵をよめり、料別ぬの義也」。
○魂膽　たくらみ、計略。

來ましやう」とつゐ立入れば義平次は、「駕籠の衆待つて貰ふ」と、門につつぽり人顔の見へぬを首尾と待チ居たり、奧は盃取納め伴ひ出て琴浦が「そんなら私も三婦樣や九郎兵衞樣に譯言ふて、跡から行が合點か」「ハテそりや其時私が又迎ィに來る」と戻が挨拶、磯之丞も「倶々に一時には目立ッ故、猶以て連レては行かれぬ、兎角あの衆の言ふ樣に」と、宥めて別れ女郎は駕籠磯とお戻は船場へと、表へ出れば三婦が女房「義平次樣渡したぞ、お二人樣も御無事で」と、暇乞も挨拶も互の思ひ暮過ぎて又の便りを松屋町、南と北へ引別れ、足早にこそ歩み行。

宮には「喧嘩〱」と騷ぐ中若い者共聲々に「親仁殿もふよい〱、高が逃げる侍を相手にするは大人氣ない、マア去なれい戻られ」と、德兵衞・九郎兵衞諸共に三婦を宥めて歸る店先、女房立て「コレ皆樣、出入の濟口どふじや〱、此方のが負ではごんせぬか。年寄だけで氣遣な」と問ば德兵衞「いかな〱、昔にかはらぬ達者なわろ、八と權とを蓮池へ何の苦もなふどんぶりいはせ、侍はふけつた〱」「ヲヽそんなら這入らんせ。祝ふてわつと酒にせう」「コリヤ女房氣が付いた、德兵衞には取分けて內儀の事を咄さにやならぬ、九郎兵衞にも安堵させて、サア

○つゝぽり　しよんぼりと獨り立ちたるさま。近松作「大經師昔暦」に「玉は寢もせず寢所に、只ひとりつゝぽりと起き居たり」。

○松屋町　大阪市南區にある町名。

○わろ　「[illegible]」の約まり（或説）。多くは人を罵っていへど、ここは「お人」といふ程の意。

○ふけつ　[illegible]を食うてふけらかしたものであろう。

○そぶ〳〵　[illegible]

○息をはかりに　息のつゞく限りに [illegible]

まあ奥へ」と先に立つ「どりや内儀の御馳走を食べて去のか」と徳兵衛は伴ひ一間へ入りにける、跡に九郎兵衛立留り「お内儀琴浦殿や磯殿が見へぬが、どこへぞ行かれたか」「されば、いなどふやらそぶ〳〵言ふによつて、お袋様に預け磯様は備中へやる、琴浦様はたつた今お前の方から迎に来た」「ソリヤ誰が」「ハテ親仁様が見へて九郎兵衛が言まする、四五日戻して下されと駕籠迄持タして迎イにお出」、「ヤア〳〵アノ此九郎兵衛が言ふと言うて、舅の親仁が連レて去んだか」「ヲイノ」「シテ〳〵其駕籠はどつちへ」「慥南の方へ」「それやつては」と駈け出すを、「コレ待た気遣ひた、迎に来た事お前は知ずか」「知つた知らぬは跡での事」「イヤそれ聞かぬ中は」「エ面倒な」と跳飛し、舅の跡を九郎兵衛は息をはかりに追かくる

第七（舅が欲を止筆た紅粉絞の色入帷子）

登場人物の主な者

三河屋義平次（團七の舅）　琴　浦（乳守の遊女、磯之丞の愛人）　團七九郎兵衛（魚商）

梗　概

高津夏祭の夜、義平次は琴浦を乘せた駕籠を綱で絡めて附添ひ、下寺町を急ぎ行く。跡から九郎兵衛追掛けて長町の畠中で呼止め、琴浦を元に返して下されと懇請すれども、義平次は罵詈して聽入れない。詮方なく九郎兵衛は義平次に三十兩を渡す約束で琴浦を取戻した。然し手許にその金を所持してゐないので再び喧嘩となり、誤つて舅を斬り、舅から人殺しと叫ばれて、遂に之を殺して池に投じ、祭禮の群衆中に紛れ込んで札の辻へ逃げた。

この段、男の義理を立てようとして、無道な舅を殺すに至る血腥い場面がよく寫されてゐる。昔時男を磨くなどといふ俠氣肌の心理狀態は、斯樣なものであつた。

第　七（舅が欲を止兼た紅粉絞の色入帷子）

神と佛を荷ひ物囃し立てたる下寺町、高津宵宮の賑ひに紛て急ぐ舅義平次、駕籠の簾を細引でぐる／＼卷の俄網、追つ立て行くを跡よりも、「ヲ、イ／＼」呼びかけ飛來る聟の九郎兵衛、南無三寶と横切れに畔道行けば追つ〻き、駕籠の棒摑んで畠中どうど打据へどつかと坐りほつと一息つきあへず、「コレ申し親仁樣、此女中は知つての通り恩有る方からの預り人、夫れを此方が何處へ連れてござ

○神と佛を荷ひ物　高津宮夏祭の人出を當込み、神佛の道具を賣らうとして荷ひ物にすること。
○下寺町　大阪市天王寺區にある町名。町内及附近に寺院多く、神佛の道具を商ふ家が多い。
○高津　高津神社は今、下寺町電車停留場の東北にあつて府社。
○南無三寶　これはしまつたりの意にいふ。(見索引)
○女中　婦人。(見索引)

る、こりやてつきりと悪者に頼まれ金にする氣で有らふが、そふ仕られては此九郎兵衞が顔が立たぬ、悪いぞへ〳〵、此中も※内本町の道具屋で田舎侍に出立、贋香爐を以て五十兩の衒事、へヱ、見下げ果てた、重ねて急度と※言ふてからが嗜む心も有るまい、コレ駕籠の衆、大儀ながら其駕籠跡へ戻して」と舁上さすれば、

「コリヤ待て九郎兵衞、嗜む心が有るまい見下げ果てたとは忝い、其愛想盡しを待つて居たはい、六年以來俺が娘を女房にして、慰者にしてゐる、サア揚代囉ふ、ヤイ、爰な恩知らずめ、儕は元宿無し團七と云ふて、※粋方仲間の※小あるき、貰食ひで暮して居つたを引上げて、堺の濱で魚賣させ、まだ其上に娘のおかちを※でゝくり、市松と云ふ子迄※ひり出さし居つた、月々のあてがひ取るがよさに、目を眠つて居る中、※乳守の町で喧嘩仕出し、和泉の※牢へ構つて、百日の上女房子を誰が養ふたと思ふ」「サアそれは皆其許樣のお世話」「吐すな、せめて其入日を入合そふと思ふて、※儲け事にかゝれば、儕が道具屋の内に居つて、よふ※ぼく上さしたなア」「イヤ夫れは其場の※つゐ」「また吐すか、今日琴浦を※おまかして來たのは、惚て居らる、佐賀右衞門殿へ渡し金にする氣」「イヤサそれでは顔が」

○内本町　大阪の東區にある町名。
○言うてからが　言ったからとて。
○粋方　粋方には粋方のあるべき人情世態を享知し[illegible]方の人。
○小あるき　小使[illegible]。
○でゝくる　おちくる。男女密に情を通じる。
○ひり出す　「ひりだす」（放出）。産みだす。俗謡集」に「へる＝鄙俗に生産を子をへるといふ」
○乳守の町　遊廓
○わし　[illegible]
○儲け事にかゝれば　[illegible]
○ぼく上　[illegible]
○つい　[illegible]
○おまへまかす　[illegible]

「立たぬか、アノ長々頤を養ふてゐた此、此、此顔が立たぬか、但し此方の此、此、此頬桁が立たぬか」と、立蹴にはつたと蹴られても、舅は親と無念を堪へ、歯を食ひしばり居たりしが、兎角詫るに若くはなしと、揉手の上に膝折り屈め、「段々の仰せ、一つとして返す詞も御ざりませぬ、長々のお世話の上又しては金儲を妨げ、お腹の立つは御尤、もふふつつりとお邪魔は致しますまい、が彼の女中の事ばかりは」、「イヤならぬ」、「サア素手でお詫も申しますまい。友達共が頼母子を致してくれまして、爰に三十兩ござりますれば是をお前へ渡しましよ、身の代に取つたと思召し、琴浦殿を三婦が方へ戻して下され、外へやつては此九郎兵衛が顔がどふも立ませぬ、情じや慈悲じや親仁樣、一生の御無心、申々、コレ申」と、手引袖引膝を突き無念涙の男泣き親と、いふ字は是非もなや、義平次も三十兩當分取るに少しは和らぎ「琴浦をあつちへ渡せば百兩が物憎に有れ共、係りや繋がる娘の緣、たゞやつたと思ひ三十兩で戻してやろ、ヤイコレ駕籠の衆、今乘つて來た所迄駕籠を戻して、駕籠代も存分先で取れい」と、悪氣付くればこんな時よい強請取「サア來い」と、競ひ勇の駕籠の者來た道へ又荷ひ行く、「サア約束の

○頤を養ふ　食を與へて養ふ。頤は口の意。食はせてやつたといふのである。

○頼母子　頼母子講の略、朋輩同志申合はせて講をつくり、各人錢を出し合はせて、他日これを鬮などで分配し、或は講中の惱み、又は合力救濟の費にあてる。「たのもし」は頼もしの義で、即ち合力救濟の意であらう（一説に「田物代」であるともいふ）。

○才覺　工面。
○かんづか　[illegible]、かみづかの音便、柄〔つかさどり〕をいふ。
○一杯　「一杯食はされた」の略。
○まいす　「賣僧」の宋音。もと僧を罵つていふより轉じて、人を罵つていふ。
○擧句　連歌の初めの句を發句といふに對して、最後のしめの一句を擧句といつたのが轉じて、終末の意にいふ。
○びこつく　身體をふるはして擬勢を張るさまをいふ。[illegible]近松作「生玉心中」上之卷に「腕まくりしてねお寄れば、ヤアびこ／＼するない、[illegible]」とある。
○どこへ　「何處へ」の[illegible]で、相手の行くのを遮り止める時に發する辭。どつこい。
○赤鰯　赤錆〔あかさび〕刀をいふ。（見索引）
○持添へ　[illegible]
○竹鋸　江戸時代罪人は竹鋸で挽かれた者もあつたといふ。

三十兩受取ろ、渡せ」の催促に、「イヤ其金爰にはござりませぬ、宿へ歸つて才覺」と立んとするを飛かゝりかんづか摑んで引倒し「ヱヽ腹の立、／＼／＼／＼、むま／＼と一杯」「何の中左樣ではござりませぬ、內へ歸れば心當がまあまあ／＼爰を放して」「ヤアどこへ／＼、うぬが樣な賣僧めは斯ふして腹癒よふか、イヤ斯ふしてくれうか」と、捩廻し、引廻し、踏だり蹴たり擧句には、砂に摺付け石に打付け引廻し／＼、引廻されても手向のならぬも無念さ口惜さ、堪へかぬれば「其面付何じや、肩肘張つて其眼付何じや、コリヤヤイ、舅は親、ア、慮外ながら、親に向つて白眼蹴潰すぞよ、無念なか口惜いか、ムヽヽ泣か、かはいやなア、摩り歪めて遣ろふ、此雪駄の皮食へ」と、躙り付けられ齒ぎしみ齒切、透し眺めて「おのりや脇差さいてびこつくか、面白い、切られう、どこへ跡へ寄り居る」と、附け廻して引つ捉へ、「見事此赤鰯でやつて見るか」と持添へ引抜き、「サア是で切れ／＼、サア／＼切らぬかやい」、「何の私がお前へを」、「イヤ切る氣で有ふ、／＼／＼、切れう切て貰ふ、一寸切たら一尺の竹鋸で挽返す、サア切つて見よ突いて見よ」と、差付け突付け捥取らん／＼とせり合ふ中、思は

ず舅が耳の根ずつかり、「ヤレ人殺しよ親殺し」と、呼る聲に折よくも、祇園囃子の太鼓鉦、九郎兵衛は殺す氣もないに因果と舅が大聲、「切つた〳〵」と人寄せの、聲を止めんと又ざつぷり、あたりほとりを見廻してうろ付く中に掴み付、横に拂へば又すつぱり、人は來ぬかと氣もそゞろ、松の內行提燈の、明りが厭さにどつさりの、音は囃子に、紛れても紛れぬ命の終り際、「うん」と反れば是非なくも取て抑へて止めの刄、ぐつと刺込む其內に間近く聞へる御輿の太皷、死骸を池へ投込み〳〵、血汐を流す桔槔、汲む水卽ち三途八難、我身にかゝる罪科を洗ひ落せど濁り井の、水より清き夏神樂ちやうさよふさの御輿の俄、是幸と紛れ込み遁出でたる千歳樂、萬歳樂や極樂橋、命の瀬戸の札の辻八町、目へとぞ、紛れ行。

○「ずつかり」「ざつぷり」「すつぱり」「どつさり」　いづれも切放すを形容した副詞をよく用ひてある。
○祇園囃子　祇園會の囃子に似た高津社祭禮の囃子をいふ。
○三途八難　八難は地獄・畜生・餓鬼（以上三惡道卽ち三途）、盲聾瘖瘂・世智辯聰・佛前佛後・北俱盧洲・長壽天をいひ、以上は苦の故に難である。近松作「傾城反魂香」に「三途八難の惡趣に墮す」。
○俄　俄練物で洒落滑稽を旨とした。（見索引）
○千歳樂・萬歳樂　千歳樂にお仕舞ひの意をかけて萬歳樂につゞけた。千歳樂は盤渉調の雅樂。萬歳樂は平調曲の一種の舞樂。近松作「山崎與次兵衛壽の門松」に「福の神の御迎ひ、ちやうさやようさや、千歳樂萬歳樂」。
○極樂橋　生玉神社の北方、下寺町電車停留場附近にあつた橋名。
○瀬戸　狹門（せと）の義。さしつまつたこと。
○札の辻　大阪市上本町五丁目邊電車線路に當る町名。「攝陽奇觀」卷之十八に「大坂上八町目札の辻の町」とある。卽ち札の辻八町目へ逃行くのである。

第八（友達に心を碎た石割雪踏の合印）

登場人物の主な者

團七九郎兵衛（魚屋）　釣船三婦（俠客）　一寸德兵衛（團七の友人）
おかち（義平次の娘。團七の妻）　市松（團七の子）　捕手數多

梗概

三河屋義平次を殺した者の知れぬを幸ひに、團七は家に籠つて日を暮してゐる。三婦・德兵衛の兩人は、團七の舅殺しは隱しおほされぬものと察し、團七を備中玉島に逃さうとして、その旨をおかちに言ひ含めた。そして德兵衛は團七の宅を訪ひ、殺人の場に脫棄てゝあつた團七の雪踏の片足を見せて、得心させようとしたが彼が應じないので、せめては妻と緣を切らせて舅殺しの惡名を免れさせたいものと思ひ、德兵衛は態とおかちに懸想せるやうに見せた爲に、團七は之を眞に受け、怒つて喧嘩となる。折節三婦飛込んで喧嘩を鎭め、團七を諭しておかちへの離緣狀を書かせ、團七の妻子を連れ去らうとして、互に名殘を惜しむ。此時捕手に襲はれ、三婦は團七の妻子を連れて遁れ、德兵衛は捕手と共に團七を取押へるやうに見せながら、路錢を與へて玉島へ逍走させた。

この段、無教育な市井の俠客の間に存する信義の一面や、相互に助け助けられる團結心の強い有樣が強調されてゐる。

第八（友達に心を碎た※石割雪踏の合印）

地 日數さへ、早一七日田島町魚屋商賣ひれの有る、主は團七九郎兵衛迚昔と今の名を合せ、手強き業も五人前高津祭の其夜より、内へ歸りてゆつくりと何知ぬ

○石割雪踏　厚い裏皮の踵に鐵板を附けた雪踏。
○田島町　大阪市南區の町名。
○ひれ　振手、ふれこの訛であらう。羽振。幅勢力。この文句もいさゝか。近松作「今宮心中」に「譏りし人にいはせ、世にひれを付けうかと思ふた」。

○爲ぬ振　人殺しを爲ぬ振。
○惡足掻　兒童がいたづらをして跳ねまはること。
○性根　正念から出た語であらう。根性。
○わやく　いたづら。（見索引）
○せぶらかす　「せびらかす」ともいふ。强請し責める。からかふ。この語現今も、佐世保地方で用ひてゐる。
○おどれ　怒つて呼び掛ける時などに發する感動詞。おのれ。
○親に似ぬ子は鬼子　親に似ない子は人の子ではないとの意の諺。狂言「三千石」に「昔から親に似ぬ子は鬼子おやといふ」。
○長町　大阪市日本橋筋一丁目より五丁目にいたるあたりの稱。（見索引）

顔、爲ぬ振に、人は夫れぞと氣も付かず油斷枕の高鼾、子は友達と惡あがき切つつ叩つつも親に似て、負けぬ性根ぞ逞しき、妻のおかちは父親の、敢なき最期常からの、心故とは云ひながら悲しさ、餘り今日も亦、墓參りして立歸る、子供遊びのわやく同士「アレ市松の擲きやつた」、「私も打たれた切られた」と泣く〳〵表へ駈出れば、おかちはやがて抱とゞめ「又こりや市松がせぶらかしたか、堪忍しや〳〵、エヽ憎い奴じやの、私が擲きかへしてやろ」と宥め賺せば子供共、「此方の町へ來居つたら寄つてかゝつて縛つてやろ」と、口々言て歸るのも物か知らすか氣にかゝる、「おどれ其口止めてやろ」と竹提げて市松が、追つかけ出るをおかちは押とめ、「ヤレこな子よ、杖棒持てあの子供に、怪我さしたら何とする、ほんに〳〵親に似ぬ子は鬼子と、九郎兵衛殿の一徹に能ふ似たなア、祖父様が七日跡に、長町裏で殺され其斬人を御詮議、意趣有る者の覺はないかと、噂は毎日御前へ呼ばれ、心も心ならぬに、如何に子供じやと云ふてあんまりな、そしてマア父様は、そなたばかりを置て何處ぞへぞござつたか、よもやそふでも有るまいが、留守かや」、「イヤあの屛風の内に父様は寢てじや、おれは敵討の芝居事して

○ひよんな　凶變な。「ひよん」は凶の義。（見索引）
○金輪際　「金輪際信い」の略。金輪際は大地の底の金輪のある際の意より轉じて、底の底までもの意にいふ。
○澤山さうに　いかにも幾多もあるやうに粗末に。
○友鳥　友とつれて連れ添ふ者。旅鳥・雨夜鷹ののも為なさいふ詞なるもの。「鳴き」は鳥の縁語。
○貫錢　貫緡の錢。索引により「くわんざし」を見よ。
○出入　紛紜。喧嘩。ごたごたもめ。

居たれば彼奴等が、親の敵と言ふて擲き居つたによつて、祖父様の敵と言ふて擲かやした、母様祖父様を切つた奴が知れたら俺が殺してやるぞや」と、言を寝て居る九郎兵衛は、聞くに付ても胸塞がり是非も、涙にくれ居たり、おかちは咳き來る涙を押へ、「そなたさへそれ程に祖父様の事思やるに、私は常から愛想が盡き、疊の上ではヱ死にはさつしやるまい、ひよんな死をする人と思ふた故、切つた奴を金輪際其思はなんだ、思へば私は不孝な者、惡い人でも親は親、澤山さふに思たのが今では悔しい、悲しい」とくどき、涙の折からに、心の合た友鳥、鳴きに立寄る一寸德兵衛肩に貫錢引懸けて、「九郎兵衛内にか、玉嶋へ下る故暇乞にちよつと來た」と菅笠取つて内に入、おかちはちやつと泣顏隱し、「ホこりや今下らんすか、暑い時分に大儀な事や、したが日和續きもよござんしよ、コレお辰様へよう心得て下さんせ」、「イヤモウ言傳受取つても死人同前、ついに言ふた事がない、ヤ其死人で思ひ出した、親仁を殺した者はまだ知れぬか」、「サお上にも御詮議が強いけれどまだ知れませぬ」、「そふであろ／＼、あれが殺して物を取つたと云ふか、其晩に大きな出入でも有つたら詮議の手懸りも有ふ、あの親父に意趣有者と

いへば、大坂中に殘る者がないすりや知れぬ筈、定めて其事で九郎兵衞も心遣で御ざらふ」、「推量して下さんせ、主も※ほつとしたかして寢てばつかり居られます、どふで切つた者は知れまいし、地いとしや犬死で御ざんしよ」、詞「アレ又泣しやる、犬死でも馬死でも時刻じや〳〵、モウ諦めたがよいわいの、俺も九郎兵衞にちよつと逢て行きたい物じやが」、「ほんに起しませう」、「アコレ〳〵もふよござるは、可愛そふによふ寢て居るものを」、「イヤ〳〵又跡で叱られましよ」、地ソレ市松起しましや」と、言ふに立寄り屛風押明、詞「コレ父様伯父様が逢に來てじや、コレノウこれなふ」と、地ゆすり起され目を擦り〳〵、詞「伯父様とは、エ德兵衞か、旅立のなりで船にでも乘のか」、「ハレ起さずと置きはせいで、ヤ此間の取込みで嘸草臥で有らふ」、「推量してたも、※舅太夫が惡い死をしられた故、アヽフヽ身中がぶき〳〵いふ程草臥れた」、「ヲ道理〳〵」、「イヤモウ主のいかゐ氣扱ひ妾にかつて」、「ハテそりや其筈の事、舅は親、九郎兵衞が世話※仕内の事、したがそんな事はいかふ氣が揉めるものじや、何と氣休めにいつそ俺と連立つて下へ行きやらぬか」、「イヤ※何のいの」、「ハテそふでないぞや、そんな※もや〳〵した事の有つた

○ほつと　思案にくれてぼんやりした樣にいふ副詞。

○舅太夫　「しうとだいふ」の略。「太夫」は親しい意に用ひた一種の接尾語的用法で、公といふ程の意。[illegible]

○仕内の事　仕[illegible]。一家の中に[illegible]

○何のいの　何の行かうぞいの。

○もやもや　紛擾。胸のすつきりせぬこと。（霧を「もや」といふのも霧深く、もやもやとしてゐるからであらう）。

○おぢや　おいでなされ。ござれ。
○やくたいもない　埒もない。つまらない。「やくたい」は益體であつて、體は無體などいふ體と同じ語であらう。事の締りある義はいかが。
○三界　界隈。邊のあたり。三界は多く名詞と合して複合語となつて用ひる。
○ありさま　「それさま」「我様」の轉訛。對稱代名詞に用ひられてゐる。今の貴方。
○けつかれ　有れ、と居れの惡いひ、總て動作を卑しめていふ語。ゐやがれ。蓋し「かつつくばれ」の訛語であらう。

上では、必ず大煩が出るもの、俺がいふ様におぢやで下へ行こ」、「何をやくたいもない備中三界何しに行くもので」、「イヤまんざら用がないでも有るまい、俺が女房に磯之丞殿を預けて遣つたれば、見舞がてら下つても大事有るまい」、「ホ顔に燒鐵迄當てゝ預かつて去んだ内儀、覺束なそふに見舞にも往かれまい」、「コレそりや大事ない」、「イヤ殊に俺は海船は嫌じや、板一枚下は地獄、今年は取分け川船さへ怪我するに、海上はおりや厭じや怖い」、「ムウスリヤありさまは海船が怖いか、アノ海船が、ハヽヽヽヽこりや可笑しい、イヤこりや怖かろ、道理じや〳〵、ハテ人と云ふ物は見掛によらぬ命は惜しいものじやの」、「ヲ取分け此九郎兵衛は男じやによつて命が惜しい、大恩受けた兵太夫殿が餘所ながら、頼むと言はれた一言、磯之丞殿の歸参が叶ひ、親御の手へ渡す迄は大事の命」、「サア其大事の命じやによつて、彼大病の起らぬ中に下りやらぬかと言ふ事、ノウお内儀」、「そふで御ざんす共、主が煩はれますと、私や市松が狼狽まする、こりや徳兵衛様の言はんす通りに」、「何吐かす、大坂を放れては和泉の様子、磯之丞殿の歸参の程が知れぬ、女の出過ぎたすつこんでけつかれ」と、叱り飛せば徳兵衛引つ

○しほ　接合。鹽をいひかく。
○辛い　鹽辛い。[illegible]に鹽辛い茶を好んで呑んだものである。ここの文は氣性の辛い意をも含む。
○かたし　對なるものの一片をいふ。「し」は接尾語。片方。江島其磧作「世間子息氣質」卷一に「箸か[illegible]」
○あぢな　「味な」であつて、あぢはひのある意より轉じて、妙な。不思議な。變な。(見索引)
○練物　[illegible]
○けんもほろろ　無愛想に撥付(はねつ)けること。[illegible]けんけんと鳴き、ほろろと羽打つて撥ね飛ばすことから出た[illegible]。「[illegible]」に「[illegible]に、[illegible]はけいけいと鳴いてほろろと羽をうつといへり、今けんけんと呼べり」。
○腕引く　腕に刀を引いて血を出す意。誓に町人[illegible]、腕を[illegible]して血を出し、或は酒に注ぎ[illegible]。近松の「[illegible]」に「[illegible]」。
○ありさま　「[illegible]」[illegible]
○いたいけ　幼(いた)い氣(け)の義。[illegible]
○追從　人の後へつき從ふ義。輕薄。おべつか。

取り、「アコレお内儀、お茶一つ下され」と茶で紛らかす主の機嫌、「アイ」と返事を立しほの、常の辛いを呑込んで、勝手へこそは汲みに行、徳兵衛重ねてあたりを眺め、舅が最期の場に有りし雪駄かたし腰より出し、「コレ此山形に丸印の雪踏、見知りが有るか」と差出す、ぎよつとせしが、「ア是は俺が雪踏、それが又何とぞしたか」、「サア是が其方の雪踏じやによつて、下へ行きやらぬかと云ふ事」、「ムウそれが又俺が雪踏なれば、何で下へ行事ぞ」、「イヤコレ九郎兵衛、此雪踏をアあぢな所で拾ふたの、長町裏の畠中で、じやによつて下へ行きやらいでもと云ふ事」、「ムウイヤ其雪踏は、此中練物見よふと思ひ、小間物屋店へ上つたればかたし犬に取られた、定めてそれを畠中へ銜へて行た物であろ、仰々しい何ぞ事も有る様に」と、けんもほろゝに顔色も人を殺せし體もなし、徳兵衛は目も潤み流るゝ汗と俱に拭き取りゝ、「ヘヱ、聞へぬぞや九郎兵衛、其方とは住吉で、腕引く代りじや、片腕じやと取交した片袖、おりや大事にかけて持つて居るぞや、あり様は雑巾にかなしたであろ、是迄兄弟同前に心底明す友達中、なぜ物を隱してたもる、其方には市松と云ふ子も有、然もいたいけ盛り、伯父様々々といへば、追従

でない己も不便な、若しもの事が有つたらば女房子迄引出され、どんな憂目に遭ふも知れず、そなた一人の命は三人にかゝると思ひ、コレ是を見や、おれが雪踏も山形に九印、かたし見へぬがお上へ廻り詮議の種に成つた時、此德兵衞でござると身に引受ける覺悟、是程迄に思ふ己に、隱し包は曲がない、なせ明して倶々に相談してたもらぬ、但此德兵衞が性根魂が氣遣なか、腮叩くと思ふて言はぬか、そりやあんまり聞へぬ、己も男じや、〳〵〳〵」と、肩振り睚め肱張つて、親の時さへ泣ぬ目に恨の涙、はら〳〵と保ち、兼たる殊勝さよ、九郎兵衞も身の大事粗忽にも明されず差俯いて居たりしが、「一段々の志、惡ふは受けぬ過分な〳〵、そふ言やれば其雪踏が惡い所に有た物でがなあろ、マア能ふ思ふて見や、泣くと食はふと云ふ子は有、女房は若し、身を仕舞様な事仕出してよいものかいの」、「サアそこが有によつて、身に引受る覺悟の雪踏」、「サア其引受けさして、見て居るよふな九郎兵衞でもないわいの、元より身に覺のない事、必氣遣せずともふ船も出る時分、早ふ下つて礒殿の事世話してたも、夫がほんの命を貰ふた同然」、「スリヤどふ言ふても明して言ぬの」、「ハテ何にも言ふ事はないて

○かたし　片方。（既出）

○曲　曲折の義。なごやか。「曲がない」は愛想がない。すげない。謡曲「鉢の木」に「あら曲もなや、よしなき人を待申して候ものかな」。

○泣くと食はう　泣いても食はずにはおかぬ。

○見さした　見かけた。見かけて中止した。

○息　力、またはいきほひの義。

○一寸の蟲にも五分の魂　弱小な者にも侮り難きに喩へる諺。この諺は近松作「[illegible]天皇」にも出づ。

○捨ぶち　「すてばち」(捨鉢)の轉訛。自暴自棄。やけくそ。

○花香　茶の煮花のかをりのよいこと。(見索引)。「花」は「はなやか」の意。(煮花を煮端と書くは當字)。

○こなん　「こなさん」の略。お前さん。近松作「博多小女郎波枕」に「こなん一人が先立て長らへ物を思へとか」。

○なと　「なりと」の略。

や、目の肝けぬ中早ふ行きや、おれも見さした夢見る」と、入んとするを思ひ懸けなく、「九郎兵衛捕つた」と、聲かくる、はつと目を据へ見廻し〳〵、「徳兵衛何じや、何を取つた」、「イヤ今爰で蚤を取つた」、「ハテ仰山な」、「コレ見や〳〵、蚤と云ふ物は愚な物じや、忽ち命を取らるゝ事を知らいで、骸の内を、ノウコレ内を得放れぬ、なんぼ飛程の術を得ても、天下の息のかゝつた指で、ドフ押へられては叶はぬ〳〵、捕へられぬ内に此蚤めも高飛し居つたらよかつたにノウ九郎兵衛」、「何を言ふやらきよろ〳〵と、其蚤もじつと縫目の内に居れば、捕へられる事もない、なま中にうぢついて飛び歩く故押へられた、それも又其蚤に、コレ此級の様な針が有と、切つて〳〵切拂ひ、唐天竺へも一飛、一寸の蟲にも五分の魂、一寸の蟲にも、な、徳兵衛、其内に逢ふさらば〳〵」と、言ふてぞ入にける、茶を入かへて女房が、持出る此方は捨ぶちで、去にかけるのを「コレ茶を一つまいらぬか、花香一つ」と差出す、「イヤモウ茶も水もアお内儀面白ふこんせぬ、我等が志水の泡と成たじや、せめて此方なと悦んで下んせ」、「ヲヽ何じや知らぬが、常からお前の志妾や嬉しう思ふて居るわいな」、「ハテ九郎兵衛と念比

するも、堺の戎嶋でこなさんと出合ふてからふつと其時、テモあの女房は可愛らしい、それも何の役に立ぬ事で有た、去んで來ましよ」と立出る。「アこれ德兵衛樣、ソレお前の帷子は、何處も彼處も綻びて裾廻りがばら／＼、それ着て船へは乘れまい」と言ふに身内を「はんになア、綻びた所を括つて置たが皆解けた、一針やつて下んせぬか」、「ヲ安い事ちやつと脫がんせ」、「イヤつい斯ふして」、「ヲ辛氣、そふして夫が縫はれる物か」、「テモ内證北國じや」、「ムヽ自慢で加賀の下帯か、イヤ其隣の越中じや」と、袖無し襦絆一つに成。脫いで渡せば針刺の絲の、結ばれ縁の端、縫れかゝるや咽の下、穴の明く程顏打眺め、「いつ見ても／＼美しい御面相、九郎兵衛が大坂を離れぬも道理、憎い程靨が有」、「ヲ何じやいのじやら／＼と、國へ去んでお長樣にそふ言ふて悦ばさんせ」、「イヤモウそげの面は見たふもない、下地の杓子に燒鐵で、革足袋の焦げた樣な」、「デモ久し振でしつぽりと面白かろ」、「ムウ面白けりや何とぞ思ふ氣か、アノ爰なすつとの皮めが」、「ヲ何さんす痛いわいな」、「何の痛かろ、おりやこなんの綻べた所が縫ふてやりたい」、「コレ悪い事さんすと針で突ぞ」、「アヽ危い／＼」、「エ卑怯な男では有」

○身内を　「身内[illegible]」の略。

○辛氣　心のくさ／＼として浮き立たぬこと。じれつたいこと。

○北國　「北國の雷」といふ諺の略。北鳴りを著たなり（着のみ着のまま）にいひかけていふ。

○加賀　[illegible]の略。加賀國から産出する絹で、羽二重の類。「増補俚言集覽」に「加賀絹＝加賀は古へより好き絹を出す、今も加賀羽二重は名物なり」。

○越中　越中國に越中褌をいひかけて、前の「下帯」[illegible]。

○咽の下　「咽の下へ這入る」といふ諺の略。人をおだてて己が得をするをいふ。

○そげ　[illegible]

○杓子　中凹に反りしやくれた顏。諺に「一瓜實[illegible]」

○しつぽり　男女のなからひの、いと濃やかな[illegible]りといつ語らひし夜半もなし」。

○すつとの皮　「すつぱの皮」を訛つた語であらう。「すつぱの皮」は敵地に入る忍者の稱であつたの[illegible]、之を男取りの意[illegible]たものであらう。近松作「本朝三國志」に「そ[illegible]、おのれはよつぱの皮なりと、御[illegible]れ」。

と、あじやら高じる其中に、表へは釣船の三婦が來かゝり内よりは、夫が出かけて見る共しらず「有やうは九郎兵衞を下へくだした跡での事と、思ふたが圖へいかぬ、ソレ戎嶋で賴んだ時の約束」。「サア其時はそふ思ふたけれど」「けれどで濟むか」と抱き付くを、九郎兵衞飛出取て引退け。女房が持たる帷子捥取って、どうど打付く中にすつくり。ハットおかちは氣も上り、德兵衞はうぢ〳〵もぢ〳〵、そつと帷子引取て。着中もまだへらず口「アヽ去んでくりよ〳〵。大坂に居た迚花實の咲事も有ルまいっ。アヽ去んで女房の顏なと見て樂しまふかい、エヽ疾ふに船に乘ル物を、あた鈍臭い。綻べ一つ縫ふて貰ふて帶解いた。俺が着ル物俺が手に俺が着るから俺次第じや」と。滅多無性に帶引廻し「船が遲成ル去んでくれう」と行んとするを「コリヤ待テ德兵衞」と、つくりと帶締めて、其處へ直れ」と聲掛けられ、行も行れぬ命の際、破れかぶれと性根を据へ「何じや用が有ルか九郎兵衞、內儀との事ならぐず〳〵言に及ばぬ、疾ふから俺が惚て居れ共、友達の義理を思ひ齒節へも出さなんだ。時節も有ふ物じや、そつちから隔る樣に成ッて今では義理も瓢簞もない、サアいつそ內儀を俺にくれるか、さもなくば胸に有ル事其處

○あじやら　おどけ。たはむれ。「假名手本忠臣藏」第九に「夫婦仲睦じいとて、あじやらにも悋氣はしして去らるるな」。
○ありやう　ありのまゝ。實際。（見索引）
○圖　圖星（づぼし）。壺。
○戎島で賴んだ　堺の戎島の浮瀬で、おかちが一寸德兵衞等に、互に喧嘩して遺恨する所作をしてくれと賴んで、浮瀬者等がその所作をした事は、本曲第一に見えてゐる。それを、德兵衞がおかちと密通を約束した如く、いひなした。
○すつくり　「すつくり起つ」の略。九郎兵衞がすつくと起つてゐるのである。
○あた　嫌忌の意を示す接頭語。（見索引）
○どんくさい　馬鹿らしい。阿呆らしくてつまらない。近松作「曾我會稽山」第四に「どんくさい、又雨が延びて來た」。
○齒節　齒の根のある部分。はぐき。「齒節へも出さぬ」とは口外せぬ意。
○義理も瓢簞もない　義理を立てる必要もなければ、人が何と評しようと構はない。「瓢簞」は「評判」をいひかけた洒落であらう。

へまき出せ」、「ホヽヽヽ頼もしそふに言ふと思ふたが、女房欲しがる根性で樣子がさらりと知れた、欲しか女房も遣らふ、聞たか大事も言て聞そふ、見事われ聞たり貰たりせいよ」「ハテ二種共に望んだ事聞たり貰たりせうかい」「ヲ遣ろ」、「ヲ貰を」、「言をかい」、「聞ッわい」、「サア」「サア」「さあ來い」と身拵する表にも、三婦も身構へまさかの時走込んと控へ居る、女房おかちは「はあ〳〵」と氣を揉みあせれど女業何と詮方なき内に、九郎兵衛は袂より、取交したる片袖出し寸寸に引裂けば、徳兵衛も持合せ倶に引裂き一度に投付、「互の固を破たからは心は殘らぬ」、「ヲそれ〳〵」、「サア出い、出い」と搖ぎ出、ずつと立寄り額と額、目先き三寸肩先き四寸、じつと體を小疊に疊んで互に膝摺合。「思へばちつとの間の懇で有たなア徳兵衛」。「ヲ是迄はいかる世話」、「ソリヤ互に」、「サア貰かけふか」、「どふして貰ふ」、「ヲまつ斯うして」と切かける、丁ど受ヶ止め受ヶ流しばつし〳〵と討合ふ刄音。「コレ待って」と女房が支へる中に三婦は駈入、「コリヤ待ァ待ァ」と制しても、逸り切たる二人が勢ィ。どつこいさせぬはこりやさせぬと、彼方らを突退此方らを撥して來い止たと支たり「ヤア邪魔せまい危い〳〵」、「怪我

せぬ中に逃れい」と引退けても駈入〳〵「コリヤ切〳〵堪忍ならざ俺を切レ、サア此三婦を切レ〳〵。コリヤ、〳〵。切レ〳〵〳〵」と、胸打叩き膝叩き抜ヽ身をびく共思はね共。思ひ切たる刄にあぐみ入枕屏風を追ッ取って、合せた劔の眞中を押へて直ッに體を重り。どうと坐れば二人もへつたり。「コレ親仁。邪魔仕やるのは徳兵衛が肩持ッ心かサヽヽどふじや〳〵」「肩を持ッも背を持ッも樣子知らぬ上の事。知ッて非道に與せうか。最前より控へて居たも料簡思案を見よふばかり。討果そふとは若い〳〵」「ヤ女房を盗れ男が立ッふか。若ふても年寄りで此方は堪忍するか」「ヲ堪忍する共。コレ九郎兵衛。世界に堪忍のならぬと云ふは。腹寒いより外堪忍のならぬ事はない物じや、此三婦か此年迄見來りて來た中、密夫の行ひ樣に上中下三段有、若いによつて知ルまい〳〵。先ッ其中下の料簡と云ふは、今其方がする樣に討果すか、重て置イて四つにするを、極々下の下の下の思案、なぜといへ、男らしい事をしたと言はれうとすると、盗れた鼻毛の恥が世間へぱつと立、そこを思ふて内證で耳を殺ぎ、鼻を殺ぎ、坊主にするをよい樣に思へ共是がまた第二番めの中の思案、極上々の思案と云は、堪忍の胸をさす

○若うても　堪忍するか　「討果さうとは若い」と言はつしやるが、若いと言はれても私は堪忍ならぬのに、貴方は年寄であるからとて堪忍するか。

○腹寒い　韻、ひもじい。

○盗まれた　[illegible]

○鼻毛　[illegible]愚人であることもいふ。

○てんがう　戯言。じやうだん。(もと「癲狂」でこと」「手事」より出た語か。諸説あつて詳かでない)
○出入　損出
○うせい　来い。こつちへ来いの意。近松作「曾根崎心中」に「徳兵衛めがうせいさらせいといふても、必らず誠にしやるなや」。

つて、世間へも知らさぬ様に内證で、さらりつと暇やつて仕舞ふが、大極上々箱入の思案といふ、元より不義が有ッたではなし口先キのてんがう、※それを言立テ討果すは彼の、極々悪ルい下の下の思案、そこを思ふて此※出入貰に出た、サア俺にたも〳〵、白髪にたも」と只管に、貰ィかけられ九郎兵衛も、思ひ廻せば我身にも、大事抱へて是式に命を果す様なしと、片方に立て、硯箱、さら〳〵さつと書認め「コレ三婦殿、此方を立て、何にも言ぬ、それ渡して下され」と書ィた一ッ通投付けて、一間へこそは入にけり、女房取上開見て、「ヤアこりや去リ状暇の状」はつと、ばかりに泣しづむ、三婦は突つ立「何めろ〳〵、覚が有ふが有ルまいが此家に置れず立ッた〳〵」と、引立られて、「ノウ悲しや、せめて別レに市松に、一目合せて下さんせ、市松何處にじや市松」と呼聲慕走り来る、「ヤア面倒な」と突退け〳〵、「一寸には此三婦が相手に成ッて存分いふ、サア来い※うせい」と片手におかち、片手に徳兵衛引立ッて、「九郎兵衛見てか、腹癒に面恥かゝしてまつ斯う」と、門へ投出し跡ぴつしやり、「ノウコレ嚊様〳〵」と駈出る市松引ッ捉へ、「畜生の親慕ふからは、此奴が性根も見へた〳〵、九郎兵衛が爲には猶是手纏ひ、

○引かねばならぬ　「九郎兵衛を引かねばならぬ」とあるべきところ。

○不義　密通、姦通をいふ。

○他人同士の喧嘩　九郎兵衛とおかちとは夫婦でないといふ事になれば、義平次は九郎兵衛の舅でなく他人といふ事になる。さすれば九郎兵衛が義平次を殺したのは他人同士の喧嘩で殺したことになる。然しこれは勝手のよい理窟である。無學な者の考はこんなものであらう。

犬の母めと一緒にうせい、父親とは縁切た」と倶に突出し門口引閉め「何と九郎兵衛腹か癒たか。其代俺は草臥た。いつそ爰に寢て去のか」と、我身を横にやつころり、肘を枕の一休み。表に親子は、泣き倒れ、徳兵衛も打萎れ悄し、詞もなかりしが、思ひ合たか三人がじつと顔上邊を眺め三婦がそろ〳〵立寄ル戸口、表におかちは涙聲。「ノウ三婦樣。徳兵衛樣、お前方の言はんす通りに、連レ合を騙し暇の状を取ッたれば舅は親、九郎兵衛殿は親殺しに成はせぬか」とどうと伏し前後、不覺に取リ亂す、三婦も咳來る涙を抑へ、「舅は親、聟は子、親殺しに成ッた時は市松と此方が、竹鋸で引かねばならぬ。それが悲しいばつかりに徳兵衛に不義しかけさせ、俺も倶々口叩きつゝ、暇の状を書しました、此上に捕られ殺さる、共一思ひ、他人同士の喧嘩に成ッて、苦しい死はせぬではあろが、今日や顯れ捕に來るか、明日や繩目に及ぶかと案じて夜の目も合ィませぬ、こんな氣ではなかつたが、エヽ年寄つたればゞ心迄、只の親父に成ました」としやくり上れば徳兵衛も、「どふぞ備中へ連れて行か、明して言はゞ去リ状も、相談づくで書こふと、思ふて問へど根深ふ隱す、善謀盡きて言合せた通リ、心に思はぬ不義淫奔、嘸腹が

○内儀も因果　三婦の詞。

○下手人　自身に手を下して人を殺した者。

立と、憎からふ、どふした縁か、兄弟より親うして給つた人に、人でなしと思はるゝ、俺も因果〳〵。「内儀も因果〳〵、「因果同士の寄集り〳〵、「成程そふでござんす共、取分け女子は去ラれまい、暇取レまいとする筈を。愛想盡しは九郎兵衛殿、皆こなさんの爲じやぞや、コレ市松も能ふ聞てたも、わしは親を殺されても、憎い共聞へぬ共、思ふ心は微塵もない、よく〳〵腹の立ッ事が有ッての事と思へ共、情ないはお上の咎、今日も御前でお代官様が、コリヤ氣遣イするな、今の間に詮議仕出して下手人を。取ッてやるぞとおつしやつた、其時の私が悲しさ。泣イてばつかり居たればの、お町衆が腰押しにソレ有難いとお禮申せ、お禮申せとせり立られ、連添ふ夫を殺すと有ルを、有難ふ御ざりまするど、言た時の其苦しさ、死れる物なら其場で直ッに。死たかつた〳〵と咳上ケて歎ケば立チ聞九郎兵衛が、胸に鎔石熱鐵を、呑よりつらき血の涙。妻の心。三婦が情、徳兵衛が實氣をも、聞て遙に手を合せ泣て。禮いふばかりなり。盡きぬ歎キに三婦は手を取リ「此方が此家に居ては、夫婦の縁の切レぬも同然、萬一の時言譯もやかましい、兎角九郎兵衛が親殺しにならぬ樣。夫に名殘も惜かろけれど、俺が所へサアござれ」と、引立てられておか

○天の網　天の網は廣大で、その目疎なるがやうなれども、一人も漏すことなく、善をなした者には必ず善報があり、惡をなした者には必ず惡報がある。「老子」に「天網恢々疎而不レ失」。

○かたし　（既出）

ちは猶、しやくり上ゲ〳〵、歎けば倶に市松が、「母様何處へも行ヶ事いや、悪ルい事もしますまい、父様と一所に内に居て下され」と、縋れば思はず聲上ゲてわつとばかりに取亂す、三婦も德兵衞も諸共に、「ヲヽ道理じや〳〵道理〳〵」と泣しづむ、罪科遁れぬ。天の網四方を取卷ヶ人聲足音、德兵衞はつと三婦と喫驚、「コリヤ泣いて居ル所でない、アレ〳〵捕手と見へて大勢ィの人聲。先ヅ九郎兵衞を落そふか裏表を閉めふか」と、騷ぎ廻れば女房も市松連レて氣もそゞろ。德兵衞思案し、「暫しの間は隙どらん。其間に早ふ落した〳〵」。「合點がてん」と釣船は、親子の者を引連レて奥へ行間に程なく、所の代官捕手の大勢ィばら〳〵と亂れ入、「九郎兵衞は何處に居る、舅義平次を殺したる科明白に顯れたり、是へ出よ」と呼はつたり、德兵衞やがて差出で「コハ思ひ寄らぬ仰。それには何ぞ慥な證據」、「ヤア吐すまい。其節泥の中に。山形に九印の雪踏かたし殘り有ッたを、段々詮議をすれば九郎兵衞が雪踏成ル由、遁れぬ所是へ出せ」と、仰の中より、「イヤ其印は私迚も斯くの通り」と脱いで見せれば、「イヤサそればかりでない、義平次九郎兵衞喧嘩の場所より、女を乘せたる駕籠の者、立歸る擬にて見屆けたと只今役所

へ訴へ、何と夫レでも諍ふか」と退引ならぬ訴人には、言句も出ず赤面しながら、「さほど慥な證據御座れば九郎兵衛は科人、しかし、荒立ては中々お手に廻りますまい、私に仰付ヶられませうならば、騙し捕に捕て上ませう、夫レ共お疑ひあらば御勝手次第」と言放せば、「ヲ聞及んだる强力者迂濶には踏込れず、其方も倶々にお上の奉公働け」と、言付ヶて奥に目を付ヶ、「ヤア裏道へ行ヶが慥に九郎兵衛、それ逃すな」と大勢が「捕た〳〵」と亂れ入ル、ハット德兵衛見やる中三婦は妻子を引抱へ、走出て「モウ叶はぬ、若此市松を擒にしられては、氣が後れて九郎兵衛が思ふ様に働キ成ルまい、親子の者を何方へぞ頼ヶてくる中跡を賴む」、「合點じやござれ」と三人を見送ル中に奥の騷動、「それ〳〵九郎兵衛が屋根へ逃ゲたぞ、突て捕れ卷いて捕れ、突棒よ刺股よ」と騷に連れて德兵衛も、何とせん彼とせんと思ひ廻して表へ駈け出、梯子押取り尾垂に打掛け、登るも心板屋葺重ね重ぬる身の科も、爰ぞ絶體絶命と、九郎兵衛は屋根の上力士の如く拔身を提げ、寄らば斬らんづ其勢ひ、捕手の人數は後より駈上つて右左、捕たとかゝるを幹竹梨割車切はらり〳〵と薙倒す、德兵衛が捕繩は擔げて來たる路錢の貫緡、手繰つて向ふ

○突棒　往時罪人などを捕へるに用ひた三道具の一。頭部は鐵で作り、多くの尖齒があり、それに長い丈夫な柄を附けて、撞木の如き形をせるもの。鐵把。
○刺股　琴柱(ことぢ)のやうな形した鐵製のものに木の長い柄を附けたもの。
○尾垂　屋根端(びさし)をいふ。現今も關西地方で一般に用ひてゐる。近松作「堀川波鼓」に「をだれより飛上つて拔討に丁ど斬る」。「物類稱呼」に「庇(ひさし)=關西にてヲダレと云」。
○斬らんず　「ず」は語意を強める語で、多く「な」(ん)の下に用ひ、「とす」の約。
○幹竹　幹竹割の略。幹竹を割る如く、上から下へ眞直に切割ること。
○梨割　梨の果實を割るやうに切裂くこと。近松作「本朝三國志」に「武智が眞甲梨割に切れも切れたり不動國行」。
○車切　輪切。
○貫緡　錢一貫文をつらぬいた緡。緡は錢さし。
なほ

〇十手（目索引）

〇足（あし） 中古、錢のことを足といひ、なほ後にも「おあし」といひ、又それより錢を一足二足といふ。近松作「今川了俊」に「一百文のおあしを……」

〇尾垂（をだれ） 庇

へ立廻り。「ヤア卑怯なり九郎兵衛。迚も遁れぬ身の大罪。尋常に縄かゝれ」と高聲に呼はれば。「ホヽ徳兵衛か逢たかつた。何かの様子は皆聞た。コリヤ何ンにも言はぬ、禮も言ぬ。サアならば隨分捕て見よ」。「ヲヽ捕て見しよこりや捕た」と、貫緡肩へ打懸けて。「落よ逃よ」と突遣り捩合。屋根の上。踏拔く計めり／＼。「どつこいさせぬ」。「こりやさせぬ」と。拔身を取ッたり取られたり、下には捕手が取り卷いて落ば括らん十手早縄。一足突遣り二足歩み。逃ぐれば掴んで引戻し、又駈行くも七足八足。十足の貫緡首に懸けさせ、せり合行も角屋敷、横町越して隣り町。下は隱居の座敷前人なき所へ「コリヤ爰で。捕たはやい」と九郎兵衛を。尾垂の上より突落し。「コリヤ／＼落著く所は備中の玉嶋合點か」「合點じや過分」と九郎兵衛は飛が如くに遁れ行く

第九（親と子の縁を繋だ貫さしの捕縄）

登場人物の主な者

一寸徳兵衛（侠客。團七の友） 團七九郎兵衛（魚屋。舅殺し） 木端の權（無頼漢）
生の八（無頼漢） 大鳥佐賀右衛門（濱田藩士。礒之丞の讐敵） 介松主計（濱田藩家老職）
玉島礒之丞（濱田藩士兵太夫の子） 釣船三婦（侠客） おかち（團七の妻）
市松（團七の子） 捕手數多

梗概

一寸徳兵衛の郷里備中玉島の宅では、礒之丞を預かり又團七九郎兵衛を隱まつて居る。木端の權・生の八は佐賀右衛門に頼まれて、徳兵衛の家に忍び入り樣子を窺ふ。折柄介松主計も徳兵衛の家へ尋ね來て、藩主の秘藏の千手院力王の刀が紛失したのは、礒之丞が之を盜み出して賣り、其の金で遊女琴浦を請出したとの噂があるので、取調べの爲に礒之丞を渡してもらひたいと申込み、徳兵衛の同意を得て礒之丞を連れ去つた。

其の夜釣船三婦が團七の妻子を連れ徳兵衛を尋ね來て、礒之丞が殺した仲買の彌市は舊惡露見した爲に殺し手に罪なく、お中も琴浦も道具屋孫右衛門に引取られて、礒之丞の出世を待つて居る。又舅殺しの團七が捕縛されるまでは市松に手錠を嵌められたと、語つて市松の手錠を見せる。戸棚の内に隱れて之を聞いた團七は、我が子を苦しますに堪へられないで聽く。其の音を聞付けた木端の權は、團七の隱れてゐるを代官所に訴へた爲、佐賀右衛門が數多の捕手を引連れて徳兵衛の家を襲うた。團七は躍り出て權等を斬伏せて藪の中に逃込む。

其の時主計は縛つてゐる礒之丞を引連れて通りかゝり、佐賀右衛門の差してゐる千手院力王の刀を見て之を捕へ、礒之丞は殿の御刀の盜まれたのを尋ね出したから、國元へ歸參のこと叶ふ。團七も之に滿足して尋常に縛に就け」と呼ばはつた。之を聞いた團七は、藪の中から出て捕へられ、主計は礒之丞や罪人佐賀右衛門・團七九郎兵衛を引連れて泉州濱田の館に歸る。

菅原傳授手習鑑

解題

本曲は延享三年八月二十一日から初めて大阪の竹本座に上演された。作者は竹田出雲・並木千柳・三好松洛であつて、五段に分れ、其の中で「車引の段」と「寺子屋の段」とが最も名高い。

作者

竹田出雲掾清定は元祿四年竹田近江の二男として江戸に生れ、父と共に京都に移り、後に大阪千日前に轉住して千前軒と號し、父近江の前名出雲を襲うて出雲掾といふた。寶永二年十一月竹本筑後掾に代り、父の後見で竹本座の座本となつて、近松作の「用明天皇職人鑑」を上演した。時に年十五。正德五年十一月近松作の「國性爺合戰」の上演は古今の大當りを得た。彼は興行上の技術秀で、人形の衣裳の美や道具建などに新裝を凝らし、見物人の嗜好に投じて好評を博した。享保八年二月松田和吉と共に「大塔宮曦鎧」を創作し、近松に添削を乞うて上演し、それからは淨瑠璃作者を兼ね、自分一人及び三好松洛・並木千柳・長谷川千四・文耕堂等と共に作つた物を併せて三十三篇ある。彼は文章を近松に學んで近松には遂に及ばなかつたが、一篇の構成や對話や舞臺面の變化波瀾などは、さすが彼が淨瑠璃語りであつただけに、最も趣向を凝らして操芝居の面目を新たにした。彼の作中で、彼一人の作つた「蘆屋道滿大内鑑」、及び門下の者と共に作つた「菅原傳授手習鑑」「義經千本櫻」「假名手本忠臣藏」「雙蝶々曲輪日記」などは傑作と稱されてゐる。かくて興行主及び淨瑠璃作者として斯道に大きな功績を殘した彼は、寶暦六年十一月二十一日、六十六歳で歿した。辭世に「影涼し水に彌勒の腹ぶくろ」。

三好松洛及び並木千柳の傳は「夏祭浪花鑑」の所に述べた。

出處

本曲は近松門左衛門作の「天神記」を原據とし、時平の暴横非道、道眞の無罪左遷の史實に基き、梅・櫻・松の三つ子兄弟の架空人物の浮き沈みなどを錯綜させて、巧みに忠義・恩愛・犧牲・感激・同情などを高調し、麗しい文章で書き綴られてゐる。但

し各人の性格の描寫が不充分であり、見せ場の物足らない感を起させるのは、これ等の夢幻劇詩の中に多く見るその一である。

主要人物の略傳

右大臣菅原道眞は醍醐天皇に仕へし賢明の聞え高く、左大臣藤原時平は歳も若く才智も劣つてゐたから、天皇の思召も特に道眞の方に厚かつた。之が爲時平は心安からず、道眞は己が女婿齋世親王を皇位に立てようと企圖してゐると讒奏した爲、道眞は昌泰四年正月二十九日太宰權帥に貶されて太宰府に配流され、延喜三年二月二十五日歳五十九で配所に薨じ、時平は延喜九年四月四日歳三十九で夭折した。

政治家は今もさうであるが、種々な黨派などがあつて種々な事がたくらまれるから、道眞のやうな背景に勢力がなく、心の正直で圓滿な學者では、いかに手腕があつても到底無事に勤まるものではない。果然陰謀者の術中に陷つて、散々な目に遭はれたは是非もない。されど之が爲に世人舉つて道眞に同情して其の徳を慕ひ、北野に宮を建てて奉祀し、朝廷でも其の誠忠を嘉し給ひ、天皇も行幸され、贈官贈位などがあつた。

影響

本曲は竹本座不況の時、その挽回を計る意氣込みで上演され、大衆の好評を博したものである。舞臺の正面に天滿宮の社を安置して境内を摸倣し、竹本島太夫・竹本此太夫・竹本政太夫等が、神主の姿で禮拜して崇嚴を感ぜさせ、人形遣吉田文三郎は、菅丞相の装束に梅鉢・若松の縫をすることを考案して、その様式が今に傳へてゐる。

其の後淨瑠璃では、江戸の豐竹肥前掾の堺町操座で延享四年三月に上演して好評を博した。それから後大阪の操座でも度々上演して今に及んでゐる。又飜案物では「振袖天神記」が、明和六年正月二十七日から竹本座で初上演された。

歌舞伎では、京都の淺尾元五郎座で延享三年十月から上演し、大阪中の芝居座では延享四年八月に上演、江戸の市村座・中村座でも延享四年夏に上演し、その後も度々諸方に上演してゐる。又飜案物では「天滿宮菜種御供」が、安永六年に大阪の角座で

初上演された。

第一（大内。加茂川堤。菅公邸）

登場人物の主な者

藤原時平（左大臣）
八重（櫻丸の妻）
武部源藏（菅公にもと仕へた者）
梅王丸（菅公の舍人。白太夫の子）
菅原道眞（右大臣）
齋世親王（醍醐天皇の御弟）
戸浪（源藏の妻）
櫻丸（白太夫の子。齋世親王に仕ふ）
苅屋姫（菅公の養女　實母は菅公の伯母覺壽尼。齋世親王の[illegible]）
菅秀才（菅公の子）

梗概

延喜の御時、左大臣藤原時平謀反を抱いて專橫を極め、才學智德兼備の右大臣菅原道眞（時に五十七歳）を眼の上の瘤として惡んだ。菅公の恩顧を受けてゐる白太夫の子の櫻丸は皇弟齋世親王（時に十七歳）に仕へ、妻の八重と談合して、齋世親王と菅公の養女苅屋姫（時に十五六歳。實母は河内土師の里菅公の伯母の覺壽尼）との戀仲を加茂川堤で取持つた。時平はこれを以て、齋世親王を皇位に卽け、苅屋姫を后に立てようとする道眞の陰謀に出たものと讒奏した。この時菅公は參內しないで七日間引籠つてゐたのであるから、左樣なことが讒奏されたとはつゆ知らず、我が書道の秘事を武部源藏に傳授した（菅原傳授の題名は之に據る）。

武部源藏は四年前までは菅公に仕へてゐたが、戸浪と不義の契りを結んだので放逐され、鳴瀧村で子供を集め習字の教師をして、貧しい暮しをしてゐた。それを此の度尋ね出され、勘當の身に傳授を受けたのであるから、菅公の恩に感激し、無實の罪に

よつて閑門に遭はれた菅公の爲に、其の幼兒菅秀才(時に七歳)を何處までも守護しようと決心した。そして菅公の舍人梅王丸と密に謀つて、梅王丸が菅公の邸内から菅秀才を築地の上に持上げるを、戸浪が抱取つて夫婦共に逃げ去る。

第二(道行。汐待。道明寺。八聲鷄。菅丞相名殘)

登場人物の主な者

櫻丸(白太夫の子。齋世親王に仕へ飴賣となる)　齋世親王(醍醐天皇の御弟)　苅屋姫(菅公の養女。實母は覺壽尼。齋世親王の寵姫)
菅公(太宰權帥)　立田(苅屋姫の姉。宿禰太郎の妻)　輝國(院廳の判官代。菅公警固の役人)
覺壽尼(道明寺の尼。菅公の伯母)　土師の兵衛(時平一味の惡漢)　宿禰太郎(兵衛の子。立田の夫。時平一味の惡漢)

梗概

櫻丸は飴賣となり、加茂川堤ではぐれた齋世親王・苅屋姫の行方を尋ねて京都で廻り逢ひ、お二方を飴の荷の中に忍ばせ參らせし、河内土師の里を指して行く。途で菅公が左遷に遭はれたことを聞き、道を曲げて難波の安居に出で、汐待ちの爲に滯留されてゐる菅公を訪うて、苅屋姫の姉立田に逢ひ、ここで齋世親王とお別れする。

菅公は警固の武士院廳の判官代輝國の計らひで、土師の里道明寺の伯母覺壽の許に立寄つて暇を告げられる。

苅屋姫は齋世親王と別れてからは覺壽に身を寄せ、よそながら菅公と逢ふ。

立田の夫宿禰太郎は其の父兵衛と共に、時平の意を受けて菅公を害しようと工む。然るにその事を妻に豫知された爲、妻を殺して池に投げ込み、鷄を鳴かして菅公の出發を早め、偽つて菅公を駕籠に乘せ奪ひ去らうとしたが陰謀發覺し、宿禰太郎は覺壽

に刺され、兵衛は輝國に殺された。かくて菅公は輝國等に警固されて、覚寿と名残を惜しまれながら別れを告げられる（済明寺の段は三好松洛の作）

第三（車引・佐太村）

登場人物の主な者

白太夫（菅公の恩顧を受けた者）　梅王丸（白太夫の子。菅公の舎人であつたが浪人となる）　櫻丸（白太夫の子。齋世親王に仕へてゐたが浪人となる）

松王丸（白太夫の子。時平の舎人）　藤原時平（左大臣）　春（梅王丸の妻）

八重（櫻丸の妻）　千代（松王丸の妻）

梗概

菅公の領地佐太村を預かつてゐる百姓白太夫の三つ子梅王丸・櫻丸・松王丸は、いづれも菅公の世話で育てられ、梅王丸は菅家に、櫻丸は齋世親王に、松王丸は時平に奉公してゐたが、菅公が時平の讒奏によつて左遷に遭はれた爲に、梅王丸・櫻丸は浪人となり、主人同志の關係から松王丸と仲が悪い。

梅王丸は深編笠を被て菅公の奥方の行方を尋ね、吉田社頭の堤の並木の下で櫻丸に遭遇し、相共に父の古稀の祝ひの事を話し合うて、身の不遇を嘆く。折柄吉田社參の時平の車に伴して來る松王丸に出てはし喧嘩となり、車を遣る遣らぬで大いに爭ふ。車の中で擁られてゐた時平は腹にすゑかねて車を踏破り、互に罵聲を浴びせ睨み合うて別れる。

其の後、佐太村の白太夫の家では、白太夫古稀の祝ひに三子の妻お春・八重・お千代が會合する。白太夫は八重を伴うて齋土

神に参詣した留守中、かねて仲の悪い梅王と松王と喧嘩を始め、誤つて父が大切にしてゐる菅公遺愛の櫻の樹を折り倒したら、折柿白太夫が帰つたので喧嘩を止め、松王は時平の奉公人であるからとて、父に勘当を願うて許され、梅王は菅公の奥方や菅秀才の行方を尋ねる事となる。

櫻丸は齋世親王と苅屋姫との戀を取持つた事から、菅公が時平に讒奏されて無實の罪を負ひ、遠流となられたといふ責任を感じて自害し、父も泣く泣く鉦で介錯してやつた後、菅公を慕うて筑紫の配所に下る。（佐太村の段は並木千柳の作）

第三の口（車引の段）

鳥の子の巣に放れ魚陸に上るとは、浪人の身の喩種、菅丞相の舎人梅王丸、主君流罪なされてより都の事共取賄ひ、御臺のお行方尋んと笠深々と深綠、上手の並木に指かゝれば、向ふからも深編笠我に違はぬ其出立、互に夫ぞと近く寄り、

詞「梅王丸か」、「是は〳〵櫻丸、ヤレそちに逢たかつた、マア咄す事聞事有」と、

地兄弟木蔭に笠傾け、「扨先ヅ問はふ其方は日外加茂堤より、宮姫君の御跡慕ひ尋行しと、内方八重の物語、なんとお二方に尋逢たか」、「成程道にて追付奉り、菅丞相御流罪と聞より對面なさしめ奉らんと、安井の岸迄御供せしに御對面叶はず、

○鳥の子…上る　便（たよ）る所のない浪人の身に喩ふ。
○丞相　[illegible]大臣を丞相、右大臣を右丞相といふ。
○舎人　[illegible]
「梅王丸・櫻丸・松王丸　[illegible]
○御臺　[illegible]
○深々と深緑　[illegible]した所謂洒落[illegible]
○日外　[illegible]
○内方　[illegible]
○安井の岸　[illegible]

○土師　大阪府南河内郡道明村あたりをいひ、道明尼寺・道明寺天神がある。
○法皇　宇多法皇。
○佐太　大阪府北河内郡齋院村をいひ、京街道に當り、菅原道眞の遺蹟などあり、佐太天滿宮もある。
○七十の賀　古稀の祝。杜甫の「曲江」詩句に「人生七十古來稀」。
○詮　甲斐、價値の義。
○配所　配流された地。流罪所。
○とつおいつ　「取りつ置きつ」の音便。とやかくと心の迷ふさま。躊躇して。
○須彌　須彌山の略。須彌山をいひ、高さ八萬由旬、大海中にあつて金輪の上に據り、最頂に帝釋天王が居るといふ。須彌大海一」は無量無限の意。

輝國殿の計ひにて、御歸洛願の妨とお二方の御縁も切られ、姫君は土師の里伯母君の方へ御出、齋世の宮樣は法皇の御所へ供奉し奉り事治りしと言ながら、納らぬは我身の上。冥加に叶ひお車を引其有難い事打忘れ、賤しい身にて戀の取持終には御身の仇と成、宮御謀反と讒言の種拵へ、御恩請たる菅丞相樣流罪にならせ給ひしも、皆此櫻丸がなす業と思へば胸も張裂如く、今日や切腹。明日や命を棄ふかと、思ひ詰は詰たれど、佐太におはする一人の親人、今年七十の賀を祝ひ、兄弟三人嫁三人、並べて見ると當春より悦び勇みおはするに、我レ一人缺るならば不忠の上に不孝の罪、せめて御祝儀祝ふた上と詮なき命けふ迄も、長へる面目なさ推量有梅王」と、拳を握り齒を食しめ、先非を悔たる其有樣梅王も理りと暫し詞もなかりしが「ヲヽ道理〱、我とても主君流罪に逢給ふ上は、都に留まる筈なけれど、御館没落以後御臺樣のお行方知れず先ッ此方を尋ふか筑紫の配所へ行ふかと取つ置いつ心ははやれど、其方が言ふ如く、年寄つた親人の七十の賀の祝ひも此月、是も心に懸る故思はず延引、互に思ひは須彌大海、是非もなき世の有樣」と、兄弟顏を見合せて涙、催す折からに、片棒引て先拂ひ「先退いて片寄」

と雜色がいかつ聲、梅王立寄り「何方ぞ」と尋ねれば「本院の左大臣時平公吉田への御參詣。出しやばつて鐵棒くらふな」と言捨て急ぎ行。「何と聞たか櫻丸、齋世の宮菅丞相を憂目にあはせし時平の大臣、存分言はふじや有ルまいか」「成ル程〳〵、よい所で出つくはした」と、兄弟道の左右に別れ、尻ひつからげ身構へし今や來たると待居たる、程なく轟く車の音、商人旅人も道をよぎる時平の大臣が路次の行裝、さながら天子の行幸の如く、隨身青侍前後に列し大路狹しと輾らせたり、兩人木陰を飛ンで出「車やらぬ」と立塞る、「ヤア何者なれば狼藉する」と顏を見れば松王が兄弟。梅王丸・櫻丸「ム、聞へた、主に離レ扶持に離レ、氣が違ふての狼藉か、但シは又此車時平公と知つて留めたか知らいで留めたか、返答次第兄弟とて容赦はせぬ」と、白張の袖まくり上ゲ摑ひしがん其勢ひ、梅王丸冷笑ひ、「ヤア言ふな〳〵。氣も違はねば此車見違へもせぬ時平の大臣、齋世親王・菅丞相讒言によつて御沈落、其無念骨髓に徹し、出合所が百年目と思ひ設けし今日只今、櫻丸と此梅王牛に手馴し牛追竹。位自慢で食ひ肥た時平殿の尻こぶら、二つ三つ五六百くらはさねば堪忍ならぬ、謂れぬ主の肩持顏出しやばつて怪我ひろぐな」、

○雜色　雜役舉使に服する者、無位の者には服色定まらねば雜色といふ。
○いかつ聲　嚴(いか)めしい聲。
○本院の左大臣　「増鏡」左大臣時平の條に「左大臣時平の…延喜九年己巳四月四日うせ給ふ、御歳三十九、…本院大臣と申す」。
○吉田　京都帝國大學の東にある吉田神社、貞觀元年藤原山蔭が奈良の春日大明神を勸請祭祀したものといふ。藤原氏の氏神なので藤原時平が參詣した。
○參詣　神社又は寺院に參り、禮拜して崇敬すること。
○よぎる　避ける意、よける。
○路次　道すがら。
○隨身　近衞府の舍人が弓箭をつけ劍を帶して供奉護衞する者で、兵仗ともいふ。大臣大將は隨身八人で、即ち府生一人、番長一人、近衞六人である。
○青侍　「あをざむらひ」の音讀、公家衆の若侍。
○狼藉　狼の草を藉いて臥した跡の紛亂して居ることをいふ。よつて亂暴の意にいふ。（見索引）
○白張　「しらはり」の音讀。白張りの布製狩衣やうの服で、仕丁などの着用するもの。牛飼、馬の口取などはこの服を着た。
○百年目　運命の極まる時の意にいふ、運命の極み・運のつき。
○尻こぶら　尻こぶた。尻たぶら。
○謂はれぬ主の肩持ち顏　謂なくてもよい事を、餘計な主の助勢をする顏付

「ヤア法に過た案外者。アレ撲ちのめせ引くゝれ」と。供の侍聲々に前後左右に追取り卷ヶ。兄弟は事共せず。取つては投退け摑んでは打ち付ヶ／＼投付ヶれば傍に近付ヶ者もなし。松王苛つて、「ヤア命知らずのあばれ者、いづれもはお構有な。御主人の目通り御奉公は此時節。兄弟と一つでない忠義の働お目に懸けん。コリヤやい。松王が引かけた此車留めらるゝなら留めて見よ」と、鼻づら取つて引出す車。「ホゝウ櫻丸。梅王丸爰になくばいさ知らず。一寸なりとやつて見よ」と、兩人轅に手をかけて「エイ／＼／＼」と押し戻せば、牛も四足を立兼て跡へ／＼とすざり行松王車の後へ廻り、兩手をかけて力足やらんやらじの諍ひは。世にも希なる三つ子の舍人互ィに劣ぬ上思ひ。命限り根限り遣つつ戻しつ引合ッ車。大地は藥研と掘窪上ににへ込む車の轍。「ヤア面倒な畜生め」と、頸木を放せば逸散に牛は離て駈り行、車の内搖ぐと見へしが、御簾も飾も踏折り／＼踏破り、顯れ出たる時平の大臣、金巾子の冠を着し天子にかはらぬ裝束、赫々たる面色にて、「ヤア牛扶持くらふ青蠅めら。轅にとまつて邪魔ひろがば、輪にかけて敷き殺せ」、「ヤアさいふ大臣を敷き殺さん」と、三人が力に車を宙だめ、ひつくり返すを返

○案外者　慮外者。無禮者。

○鼻づら　鼻面の義。鼻端。鼻綱。

○轅　長柄の義。馬車又は牛車などの前へ長く差出てゐる左右二本の材をいひ、その前端に軛（くびき）を渡し牛馬に繋ぐるもの。

○藥研　藥種を粉にする具で、鐵又は銅で舟形に造り、器の中へ藥料を容れ、別に藥研車を以て粉碎するもの。以て車轍が大地に掘れ込むことに喩ふ。

○頸木　車の轅の先につける横木をいひ、その車を牽く牛の頸に掛けるもの。

○金巾子の冠　巾子は冠の頂の高く隆起せる所をいひ、[illegible]た檀紙で包んだのを金巾子の冠といひ、纓を巾子にはさみ置くもので、天子御内々の時召される冠である。

○牛扶持　牛飼を勤めて扶米をもらふこと。

○宙だむ　宙にさゝへる。宙に持ち上げる。

されじと、捻合ふ松王右へ押せば左りへ押し、上つおろしつ二三度四五度、爰を詮と揉み合しは祭の御輿に異ならず。時平は上より金剛力。どうど踏だる其響、車も心木も粉微塵。砕けし轅を銘々提げ大臣を打んと振上る。「ヤア時平に向ひ推參なり」と、くはつと睨し眼の光り。千世界の千日月一度に照すが如くにて、流石の梅王・櫻丸、思はず跡へたぢ／＼五體すくんで働かず「無念。／＼」とばかりなり。「何と我昔の御威勢見たか。此上に手向ひすると御目通りで一討」と。刀の柄に手をかくれば「ヤア松王待テ々」と、車より飛でおり、「金巾子の冠を着すれば天子同然。太政大臣と成って天下の政を執行ふ時平が、眼前血をあへすは社參の穢。助にくい奴なれ共下郎に似合ぬ松王が働。忠義に免じて助ケてくれる、ハレ命冥加なうづ蟲めら」と邊を、睨んで進み行ク振返つて松王丸。「よい兄弟を持て兩人共に仕合者。命を拾ふた有難い忝いと三拜せよ」と、言はれて兩人くはつとせき上。「エ、汝にも言分有レ共、親人の七十の賀祝儀濟迄、ナフ梅王」。「ヲ、其上では松の枝々切折て敵の根を斷葉を枯さん」。「ヲ、夫レは此松王も親父の賀を祝ふた跡で、梅も櫻も落花微塵。足元の明い中早く去レ／＼」。「ヤア推

○詮　極み。せんずは。
○金剛力　金剛力士の如き大強力。仁王力。
○推參　無禮なふるまひ。
○千世界　佛說に、千の須彌山、千の日月、千の四大洲、千の梵天、千の六欲天等の集合體を小千世界といひ、小千世界を千集めたものを中千世界といひ、中千世界を千集めたものを三千大千世界といふ。
○五體　總身の意。全身。（見索引）
○太政大臣　時平は左大臣で[illegible]太政大臣を贈[illegible]
○あへす　「あやす」の訛り。[illegible]血[illegible]「[illegible]」[illegible]
○うづ蟲　「うず蟲」とも書いてある。蓋し「うじ蟲」[illegible]
○松　[illegible]

慘な跡るを汝に習はふか」と、詰寄〳〵兄弟三人、互に殘す意趣意恨睨んで、左右へ別行

第四（筑紫の配所。安樂寺の飛梅。北嵯峨の隱れ家。寺子屋）

登場人物の主な者

白太夫（菅公の恩顧を受けた者）　菅原道眞（太宰權帥）　梅王丸（白太夫の子）

鷲塚平馬（時平の家來）　菅公の奧方　春（梅王丸の妻）

八重（櫻丸の妻）　星坂源吾（時平の家來）　山伏（松王丸の變裝）

武部源藏（菅公にもと仕へた者。寺子屋の師匠）　菅秀才（菅公の子。八歲）　春藤玄番（時平の家來）

松王丸（白太夫の子。時平の舍人）　千代（松王丸の妻）　小太郎（松王丸の子）

戸浪（源藏の妻）　長松・岩松等の寺子數多

梗概

白太夫は筑紫に下り、菅丞相に仕へて既に一年を過ぎ、延喜二年二月となつた。

或日菅公は白太夫を伴つて安樂寺に詣で、梅を慕うて「東風吹かば匂おこせよ梅の花主なしとて春な忘れそ」と詠まれたので、京から梅が一夜に飛んで來て、經首堂の左方に生ひ出た。二人が之を眺めてゐる時、突然都から來た梅王が、菅公を殺しに來た

時平の家來鷲塚平馬を追うて來り、格闘して之を縛り上げた。菅公は平馬の自白によつて時平謀反の企を知り、憤激されて高山に登り、帝釋天に祈願して雷神となられた。

北嵯峨の隱れ家では、菅公の奥方にお春と八重とが仕へてゐる。奥方が微睡まれて筑紫配所の出來事を夢みられた折節、時平の家來星坂源吾が部下を率ゐて、この隱れ家を襲うた。八重は敵と渡り合うて殪れ、危難が奥方の身に迫つた時、見知らぬ山伏が飛込んで來て源吾を投飛ばし、奥方を引抱へて去つた。（この山伏は松王丸であつた事が後に知れる）

武部源藏夫婦は、菅丞相の一子菅秀才（時に八歳）を保護して芹生の里に住み、村中の子供を集めて習字を教へてゐる。時平は菅秀才の行方を探して芹生にゐると知り、源藏をして菅秀才の首を討取らさうとし、其の命令と檢分とを春藤玄蕃と松王丸とに命じた

既に松王丸は親兄弟に惡まれて改心し、菅家の爲に盡さうとしてゐたので、妻お千代と相談して我が子小太郎を菅秀才の身代りに立てようとし、妻に小太郎を連れさせて源藏の寺子屋へ入學させた。お千代が小太郎を殘して去ると、入り違ひに源藏が戻つて「菅秀才の首を討つて渡せ」と命ぜられたとて、思案に暮れる。そして新入學の小太郎を見て、これはよい身代りが出來たと心密に喜ぶ。

やがて玄蕃と松王丸が來り、玄蕃は「早く菅秀才の首を渡せ」と言ひ、松王丸は机の數を檢めて我が子が入學してゐることを確かめた。間もなく源藏は首桶を持つて出て松王丸に渡した。そして松王丸が首を檢分して、意外にも異はないで菅秀才に紛れ



菅原傳授手習鑑　武部源藏（中村鴈治郎）
小太郎（片岡義直）源藏女房戸浪（中村魁車）

なしと承認したので、源藏夫婦はほつと一安心した。松王丸は玄番に對つて「これで拙者の役目が濟んだから、お暇給はり病氣保養を致したい」と言つて去つた。

やがてお千代が來て「小太郎を連れて歸りませう」と言ふので、源藏は窮して覺悟を定め、後から切付けるを、お千代は身をかはして文庫で受止めた。文庫は切られて中から經帷子が出たので、源藏ははつと驚く。其の時松王丸が來て、我が子を身代りに立てた苦衷を語り、門外に待たせた駕籠を舁寄せさせれば、その中から菅丞相の奥方が出られ、兩夫婦の内譯話に奥方も若君も交り、滿座涙に袖をしほりつゝ、小太郎の野邊送りをする。（寺子屋の段は竹田出雲の作）

評

非道な主に仕へて親兄弟に惡まれた松王は、親に勘當を願つて去つた。かくて飽くまで剛愎に見えた彼は、其の實斷腸の思ひに暮れ、最愛な我が子を殺して、主に對する責めを免かれ、孝悌の道を完うしようとする悲壯な決意をした。寺子屋の場は、これを中心として展開する犧牲的精神、親子の恩愛、夫婦の至情、君臣の情誼など美しい我が國民性が盛られて、麗はしい筆で描寫されてゐる。そして幕切れの「いろは送り」は、無常偈を譯したいろは今樣歌を巧みに織込んで、哀愁を添へた名文である。

○一字千金　一字が千金の價値ある義。非常に貴重な文章をいふ。「[illegible]」に「不[illegible]」
[illegible]也」「史記」呂不韋傳に「呂不韋[illegible]懸千金其上、延諸侯游士賓客、有能增損一字者予千金」。
○三千世界　大三千大千世界の略。一切の世界。「[illegible]」
○菅秀才　菅原道眞の子で、學問に秀でてゐるといふ意よりの名であらう。この時八歳。

第四の切（寺子屋の段）

一字千金、二千金三千世界の、寶ぞと、敎へる人に習ふ子の中に交る菅秀才、武部源藏夫婦の者いたはり傅き我子ぞと、人目に見せて片山家、芹生の里へ所替へ、

○武部源藏　建部傳内をもぢつたのであらう。傳内は元祿頃江戸の能書家で、御家流から出て一家をなし、幕府の書家となり、門人三千人を超え、傳内流を起した人。
○[illegible]山家　[illegible]山中の一家。
○芹生　京都大原の西方、[illegible]生井出の里の古名。
○人形書く子・見えにける　近松作「釋迦如來誕生會」第三に「文字一つ覺えぬ癖に當字書く、教ゆる人は頭搔く、世話をかくとぞ見えにける」。
○五作　田五作の語に據る。
○涎くり　涎を垂れるしだらない兒童。
○若者　[illegible]。
○三百六十字　[illegible]一年三百六十日たる[illegible]
○下　[illegible]
○ませ　「ませる」[illegible]「ませる」の[illegible]増の意。年齢の程より大人ぶること。老成。
○てうけかゝる　嘲戯掛かる。ふざけかかる。
○いがめる　[illegible]第一に「惡鬼が責めよかし、この婆がいがめてやる」。
○壓尺　卦算（けいさん）。文鎭。
○傳ふる筆　書道傳授を受けてゐること。
○疎ましや　面倒くさいなあ。うるさいなあ。
○振舞　饗應。もてなし。饗應に招かれること。
●寺入　寺入り子の略。寺子屋へ新入學する兒童。
○いろはに　[illegible]
○此中は御人被下　[illegible]
○[illegible]くの男　[illegible]

子供集て讀書の器用不器用清書を、顔に書ヶ手と手に書と人形書ヶ子は天窓搔。教ゆる人は取分ヶて世話をかくとぞ見へにける、中に年嵩五作が息子「コレ見ュな是見や、お師匠様の留守の間に手習するは大きな損。おりや坊主天窓の清書した」と、見せるは十五の涎くり若者はおとなしく、「一日に一字學べは三百六十字との教、そんな事書ヵず共本この清書したがよい」と、八つに成ル子に呵られて、「ませよませよ」と指ざしててうけかゝるを殘りの子供、「兄弟子に口過す涎くりめをいがめてやろ」と、手ン手に壓尺振り廻す自然天然肩持ッも傳る筆の威德かや、主の女房奥より立出「又こりや例の鬪諍か疎ましや／＼。今日に限つて連ヶ合の源藏殿、振舞に行てなれば戻りも知レぬ。ほんに／＼こなた衆で一時の間も待兼る。今日は取分ヶ寺入も有ル筈。晝からは休す程に。皆精出して習た／＼」、「ソリヤ又嬉しや休じや」と、筆より先キに讀聲高く、「いろはに」、「此中は御人被下」、「一筆啓上候」へ〆くの男が肩に堺重、文庫机をになはせて利發らしき女房の七つ許りな子

さいふ意につづけ[illegible]
○堺重　大内[illegible]、泉州[illegible]
○文庫　書籍又は雜品を納れる手箱。[illegible]
○利發　利口怜悧。賢いこと。

を連レて、「頼ませう」と言入る丶、内にもそれと早悟「こちへおはいり遊ばせ」と、いふもしとやか「アイ／＼」と※愛に愛持ッ女同士來た女房は猗笑面。「私事は此村はづれに、輕う暮して居る者で御ざりまする、此腕白者をお世話なされて下さりよかと、お尋申におこしましたれば。おこせ世話してやろと結構なお詞にあまへ。早速連レて参じました、内方にも、御子息様がござりますげなが、※どのお子でござりますぞ」、「アイ是が源藏殿※の跡とりでござります」、「コレハ／＼よいお子様や、外にも大勢の子達チ※いかいお世話で御ざりましよ」、「アイ御推量なされて下さりませ、シテ寺入は此お子で御ざりますか、名は何と申ます」、「アイ小太郎と申まして、腕白者でござります」、「イヽヤイヤ、氣高いよいお子や、※折悪ッう今日は連レ合源藏も、振舞に参られました」、「是はマアお留守かいな」、「お待遠なら私が呼にまいりましよ」。「いへ／＼幸ィ私も参つてくる所が有レば。其内にはお歸りでござりませう、コレ三助。其持て來た物あなたの傍へ上ヶませ」、「アツートー應へて堺重※折板に乘たる一ト包、※内儀の傍へ差出す、「是はまあ／＼※いはれぬ事を」、「イヤお※はもじながら此子が参つた印シ。此堺重は子達チへの土産」、※取リ弘

○愛に愛持つ　たつぷり愛嬌あるをいふ。「義經千本櫻」鮨屋の段にも「前垂ほや／＼と愛に愛持つ鮎の鮨」。

○どのお子　我が愛子を菅秀才の身代りたらしめようとして入學させるのであるから、菅秀才を見ようとして「どのお子」とまづ問うたのである。母親の心情が偲ばれる。

○殿　昔は己が夫に殿をつけてもいうた。

○いかい　嚴。きつい。夥しい。甚しい。大層。

○折板　へぎ板で作つた入物。

○内儀　他人の妻を尊んで称し、内方。

○いはれぬ事　下さる謂はない事。

○はもじ　恥かしいの文字詞。文字詞は、足利時代の末期、朝廷式微にして供御の物備はらない爲に、上宮仕の[illegible]、[illegible]何ぞといふ[illegible]言葉から起つたもので、「はもじながら」は、[illegible]ながらの意。

○取弘める　土産を披露して分配する。

めて下さりませといはねど知れし蒸物煮染。我子に世話を燒豆腐、粒椎茸の入たるはほんそ子とこそ見へにけれ。「是はマア何から何迄取揃へて御念の入た事、戻られたら見せませう」「イヤモほんの心許り宜しうお賴申上ゲます、コレ小太郎。ちよつと隣村迄行てくる程に、おとなしうして待ツて居や。惡ルあがきせまいぞ、御内證樣往て參じましよ」と、表へ出れば「母樣わしも行たい」と、縋付ツを振り放し「嗜めよ。大キな形りして跡追ふのか、御覽じませまだ頑是が御ざりませぬ」、「ソリヤ道理いなドリヤ叔母がよい物やりましよ」、つゐ戻つてやらんせと、目でしらすれば「アイ〳〵つゐちよつと一ト走」と、跡追ツ子にも引かさる、振返り見返りて下モ部引連レ急ギ行。「どりやこちの子と近ヅ付キに」と若君の傍へ寄。機嫌紛す折からに。立歸る主の源藏常に變りて色靑ざめ。内入惡ルく子供を見廻し。「エヽ氏より育といふに。繁華の地と違ひ。いづれを見ても山家育。世話甲斐もなき役に立ずの」と、思ひ有げに見へければ。心ならず女房立寄り。「いつにない顏色もわるし。振舞ィの酒機嫌か知らぬが。山家育は知て有ル子供。憎體口は聞へも惡ルい。殊に今日は約束の子が寺入して居まする。惡い人と思ふも氣の毒。機嫌直し

○蒸物　煮物の類。
○粒椎茸　椎茸の小さく細うて粒狀なしたもの。
○ほんそ　奔走。走りまはり世話する義より轉じて、愛しいつくしむこと。
○あがき　足搔。「あがく」の轉成名詞。馬が足で地を搔きにじる義より轉じて、兒童がいたづらして騷ぎ廻ることをいふ。近松作「鑓の權三重帷子」に「早う戻りや、あがき過し、書かいかいかいな萬病圓」。
○内證　人の妻を稱する語。内儀。
○ぐわんぜ　頑是と書けども、觀世であつて、即ち世の中の事を觀じ知る義か。
○内入り惡く　[illegible]、家の内に入り。
○氏より育ち　人の習性人品の高卑などは、家柄筋目よりも、躾方の如何によつて如何やうにもなるといふ意。
○とがない　[illegible]い、日がない、「[illegible]」に「[illegible]日本紀、[illegible]の字、性[illegible]に訓せり、直をスグとよみ、清をスガと讀むも皆通ぜり」。
○氣の毒　心苦しいこと。(見索引)

○いたいけ　勞はしげに憐れに愛らしきをいふ。
○公家　公家衆。堂上方。
○高家　武家の名族。武家の、歷々。
○お袋　母たる人。「倭訓栞」に「后宮名目に母だつ人を袋になぞらへ侍る事は、胎中に其子こもれる時、袋の中に物ある如くになれば、かぞへたる事にことぶきて申侍る也」。
○機嫌よう遊ばし召され　源藏が子供たちにいうた詞。若君菅秀才がゐるによつて、かく敬語を用ひた。

て逢てやつて下され」と。小太郎連レて引合せど差うつむいて思案の體。幼氣に手をつかへ。「お師匠樣今から賴上ゲます」と。言に思はず振り仰ぎ急度見るより暫くは、打守り居たりしが。忽ち面色柔らぎ。「扨々器量勝れて氣高い生れ付。公家高家の御子息といふてもおそらく恥しからず。ハテ扨そなたはよい子じやなふ」と。機嫌直れば女房も。「何ンとよい子よい弟子で。御ざんしよが」、「よい共よい共上々吉。シテ其連レて來たお袋はいづくに」。「サお前の留守なら其間に隣村迄往て來といふて」。「ヲヽ夫レもよし〳〵大極上先ツ子供」と奥へやり。「機嫌よう遊ばし召され」、「夫レ皆お隙が出た。小太郎倶に奥へ〳〵」と。若君諸共誘せ、跡先ト見廻し夫トに向ひ。「最前の顏色は常ならぬ氣相。合點の行ぬと思ふた所に、今又あの子を見て打てかへての機嫌顏。猶以ッて合點行ずといふそら樣子が有そふな。氣遣ひな聞して」と問ば源藏。「ホヽウ氣遣ひな筈。今日村の饗應と僞り某を庄屋の方へ呼付ケ、時平が家來春藤玄蕃。今一人は菅丞相の御恩を被ながら、時平に隨ふ松王丸。こいつ病氣ながら檢分の役と見ヘ。數百人にて追ッ取卷、汝が方に菅丞相の一子菅秀才、我子としてかくまふ由訴人有ッて明白、急ギ首打て出す

○屠所の歩　死地に[illegible]一歩一歩進みかねること。「摩耶經」の偈に「譬如旃陀羅(屠者のこと)驅牛就屠所、歩歩近死地、人命亦如是」と。
○烏を鷺　黒白を顛倒する意の諺。
○河内　河内の國土師の里、菅公の伯母覺壽の居所。
○三つ子　梅王丸・松王丸・櫻丸は三つ子兄弟。
○一かばちか　「一か八か」と書けど、「一か末か」の義か。一六勝負。伸るか反るか。
○ばら　接尾語。たち。ども。
○死出、三途　(見出索引)
○ちよつほくさ　世辭上手にちよつくらしやべるさまにいふ副詞。「春花五大刀」に「ちよぼくさやつても、一向きかぬかなてこ親ぢ」。
○大事は小事より顯はるる　「毛吹草」に「天下大事必作於細」

や否、但踏ん込請取ふや、返答如何にと退つ引ならぬ手詰、是非に及ず首討ッて渡さふと請合ふた心は、數多有ル寺子の內、いづれ成共身代りと思ふて歸る道すがら、あれか是かと指折ても、玉簾の中の誕生と、薦垂の中で育つたとは似ても似付ヵず、所詮御運の末成ルかいたはしや淺ましやと、地屠所の歩で歸りしが天道の控强きにや、詞あの寺入の子を見れば、まんざら烏を鷺共いはれぬ器量、地一ッ旦身代りで欺此場さへ遁れたらば、直クに河内へお供する思案、今暫くが大事の場所」と語れば女房「又待んせや、詞其松王といふやつは三つ子の內の惡ヶ者、若君の顏はよう見知ッて居るぞへ」、「サアそこが一かばちか、生キ顏と死顏は相好の變る物、面ざし似たる小太郎が首よもや贋とは思ふまじ。よし又夫レと顯れたらば松王めを眞二つ、殘る奴原切ッて棄、叶はぬ時は若君諸共、死出三途の御供と胸を据たが一トつの難儀。今にも小太郎が母親迎に來らば何とせん、地此儀に當惑指當つたは此難儀」、詞「イヤ其事は氣遣ひ有ルな。女子同士の口先キでちよつぼくさ騙して見よ」、「イヤ其手では行まい大事は小事より顯はるゝ、事によつたら母諸共」、「ヱ、イ」、「こりややい若君には替られぬお主の爲めを辨へよ」と、地いふに胸摺

へ「そふでござんす。氣弱ふては仕損ぜん。鬼に成ッて」と夫婦はつつ立テ。互イに顔を見合せて、「弟子子といへば我子も同然。サ今日に限て寺入したはあの子が業か母御の因果か。報ひはこちが火の車、追ッ付廻つて來ませふ」と、妻が歎ケば夫トも目をすり。「せまじき物は宮仕へ」と倶に。涙に暮れ居たる、かゝる所へ春藤玄番首見る役は松王丸。病苦を助る駕籠乘物門口に舁据れば、跡には大勢イ村の者附キ隨ふて「申上ゲます、皆是に居る者の子供が手習に參つて居ります。若取リ違へ首討れては取返しが成リませぬ。どふぞお戻し下され」と、願へば玄番。「ヤアかしましい蠅蟲めら、うぬらが餓鬼の事迄身共が知つた事か、勝手次第に連失せう」と、呵付れば松王丸「ヤレお待なされ暫く」と、駕籠より出るも刀を杖。「憚りながら彼等とても油斷はならぬ、病中ながら拙者めが檢分の役勤るも、外に菅秀才の顔見知りし者なき故、今日の役目仕果すれば、病身の願ト御暇下さるべしと、有難き御意の趣疎には致されず、菅丞相の所縁の者此村に置ッからは、百姓共もぐるになつて、銘々が悴に仕立テ助ケて歸る手も有ル事、コリヤやい百姓めら、ざは〳〵とぬかさず共一人宛呼出せ、面改めて戻してくりよ」と、

○弟子子といへば我子も同然　近松作「源氏冷泉節」にも「師弟は親子と申さぬか」とある。
○業　宿世の業。因果。
○火の車　地獄の罪人を迎接するに用ひる地獄の火焔の車。
○宮仕へ　仕官。奉公。
○がき　子供を罵つて餓鬼といふ。（見索引）
○ぐる　「ぐる〳〵」などの「ぐる」で、輪「わ」になる事。一説[illegible]

退つ引させぬ釘鎹、打ば響けの内には夫婦、豫て覺悟も今更に胸轟す計也、長松は居ぬか」と呼聲に「祖父様何じや」とはしごくで、出くる子供の頑是なき、顔は丸顔木みしり茄子「詮議に及ばぬ連レ失せう」と睨付ヶられ「ヲ怖や、嫁にも食はさぬ此孫を命の花落遁れし」と、祖父が抱て走行、次は十五の涎くり「坊よ坊よ」と親父が手招き「父よおれはもふ爰から抱て往の」と、あまへる顔は馬顔で、聲「ヲ泣な、抱てやらふ」と干鮭を、猫撫親が銜へ行、「私が悴は器量よしお見違へ下さるな」と、断言ふ呼出すは、色白々と瓜實顔「こいつ胡亂」と引捕へ、見れば首筋眞黒々墨か痣かは知らね共、「こいつでない」と突放す、其外山家奥在所の子供殘らず呼出して、見せてもく似ぬこそ道理土が産した量芋、子計りよつて立歸る、「スハ身の上」と源藏も妻の戸浪も胸を据へ、待ッ間程なく入來る兩人、「ヤア源藏、此玄蕃が目の前で討ッて渡そと請合た、菅秀才が首サア請取ふ、早く渡せ」と手詰の催促ちつ共臆せず「假初ならぬ右大臣の若君、搔

○打てば響け　聞いたら悟れよの意に、釘鎹の縁語を用ひた。
○はしごく　はしりごくらひ(走事競)の略、競走の義。かけつこ。駈足。
○木みしり茄子　「木毛〔むし〕り茄子」の轉訛、[illegible]い[illegible]な形の顔。
○嫁に食はさぬ　「秋茄子嫁に食はすな」といふ諺によつた洒落。
○花落　落命を茄子の縁によつた洒落。
○馬顔　ここの文、馬のやうな長面、ながづら」で、聲は猿の物哀れげなるは、如何にも間抜をあらはす。
○干鮭　鮭の腸（はらわた）を去つて素乾にしたもの。
○猫撫親　猫撫聲の甘い親。ここの文は、干鮭、猫、[illegible]、皆縁語によつた洒落。
○瓜實顔　瓜實に似た形のよい顔。「枕草紙」に「うつくしきもの。瓜〔ふり〕に書きたるちごの顔」。
○胡亂　怪しく疑はしいこと。
○土が産ました…立歸る　土百姓の兒であるから何ら錆のない凡くらばかり、その中から我が子[illegible]連れ歸る意を、芋掘りに喩へて面白くいつた。
○胸を据ゑ　度胸をすゑて。

○身代りの贋首それもたべぬ　我が子小太郎を菅秀才の身代りに立てさせようと思ひながら、首に疑はれはしまいとして之を言ふ。其の松王の心を源藏が知らぬも是非もない。かくてこそ贋首が疑はれずに是認されることとなる。

○權柄　權は秤の錘、柄は斧の柄。「前漢書」に「大臣操二權柄一持二國政一」。轉じて權力。威を振ふこと。

○餓鬼　人を罵つていひ、多く子供の賤稱に用ひる。(既出)。松王丸が机を數へていふ詞は强けれど、その心は泣いてゐる。

○寺イヤ寺參り　寺入りといひかけて、小太郎の寺に無常を感じてゐる心から、「イヤ寺參り云云」と口走る。寺入りと寺參りとは意味が非常に違ふのであるが、松王は之を聞いて、「何馬鹿な」と言つたのみで、追窮しなかつた。これにも深い意味があることが後に知られる。

○木地を隱した塗机　言ひくろめる意を含む。

○瀬戸際　運命の分かれる處。

○けしとむ　けしとぶ(消飛)の轉。魂消え飛ぶ程に驚き慌てあわてる。

○目通　目の前。正面。

首捻首にも致されず、暫くは御容赦」と立上るを松王丸、「ヤア其手はくはぬ、暫しの容赦と隙とらせ逃支度しても、裏道へは數百人を付ヶ置キ、蟻の這出る所もない、生顔と死顔は相好が變るなど、、身代の贋首夫もたべぬ、古手な事して後悔すな」と言はれてぐつとせき上ゲ、「ヤアいらざる馬鹿念、病ほうけた汝が目玉がでんぐり返り、逆樣眼で見やうは知らず、紛れもなき菅秀才の首追ッ付ヶ見せう」、「ヲ其舌の根の乾かぬ内に早く討テ、とく切レ」と玄番が權柄、ハット計リに源藏は胸を、据てぞ入にける。傍に聞入る女房は爰ぞ大事と心も空、檢使は四方八方に眼を配る中にも松王、机文庫の數を見廻し、「ヤア合點のいかぬ、先達て往んだ餓鬼らは以上八人、机の數が一脚多い。その伜はどこに居るぞ」と、見咎られて戸浪ははつと、「イヤこりやけふ初メて寺イヤ寺參りした子がござんす」、「何馬鹿な」、「ヲヽそれ〳〵、是が即ち菅秀才のお机文庫」と、木地を隱した塗机ざつとさばいて言拔ッる、「何にもせよ隙とらすが油斷のもと」と、玄番諸共つつ立上る、こなたは手詰命の瀬戸際、奧にはばつたり首討ッ音ト、はつと女房胸を抱踏ん込ム足もけしとむ內、武部源藏白臺に首桶乘てしづ〳〵出、目通リに差置、「是非に及

○大切ない　「ない」は甚しい意の接尾語。
○性根　根性。この語もと「正念」であらう。
○忍びの鍔元くつろげる　内々に刀の鯉口をゆるめること。
○虚　[illegible]の[illegible]「[illegible]」などいふの語によつたもので、嘘の意にいうた。
○淨玻璃の鏡　[illegible]水晶をいふ。水晶の[illegible]・物を[illegible]といひ、これで作つた[illegible]の廳にあつて、死者が前世で犯した[illegible]を映出するといふ。以て眞僞を見分ける眼力をいうた。
○鐵札、金札　[illegible]「十王經」に出て、[illegible]は[illegible]、[illegible]以[illegible]選別の意にいふ。
○十手　昔捕手の用ひた具。中程に鈎の附いた[illegible]これをもつて撃つ。じつてい。（見索引）
○一生懸命　いのちがけ。（見索引）
○曲者　ひとくせある者。わるもの。松王をさす。
○絶體絶命　體も命もきはまる義。逃るべき道なく、のつぴきならぬ場合。

ず菅秀才の御首討チ奉る、いはゞ大切ない御首、性根を据へてサア松王丸、しつかりと檢分せよ」と、忍びの鍔元くつろげて、虚といはゞ切リ付ケん實といはゞ助ケんと固唾を、呑ンで控へ居る。「ハ、、、、何ンの是式キに性根どころか。今淨玻璃の鏡にかけ、鐵札か金ン札か地獄極樂の境、家來衆、源藏夫婦を取リ卷キ召され」、「畏つた」と捕手の人數十手振て立チかゝる、女房戸浪も身を固め夫トは元よりイツ生懸命、「サア實檢せよ檢分ン」といふ一言も命がけ、後は捕手向ふは曲者玄番は始終眼ュを配リ、爰ぞ絶體絶命と思ふ内早首桶引寄セ、蓋引明ケた首は小太郎、贋といふたら一ト討と早抜かける戸浪は祈願。天道樣佛神ン樣憐給へと女の念ン力、眼ン力光らす松王がためつすがめつ窺見て、「ムウコリヤ菅秀才の首討たは、紛ひなし相違なし」といふにも恟リ源藏夫婦。傍きよろ〳〵見合せり。檢使の玄番は檢分ンの詞證據に「出かした〳〵よく討ッた」。褒美にはかくまふた科赦してくれる、イザ松王丸片時も早く時平公へお目に懸けん」、「いか樣隙取ッてはお咎もいかゞ、拙者は是よりお暇給はり病氣保養致たし」、「ヲ、役目は濟ンだ勝手にせよ」と首請取リ、玄番は館へ松王は駕籠に揺られて立歸る。夫婦は門ドの戸ぴつ

しやりしめ。物も得言はず青息吐息。五色の息を一時にほつと。吹出す計也。胸撫おろし源藏は天を拜し地を拜し。「ハア、有がたや忝や。凡人ならぬ我君の御聖德が顯はれて。松王めが眼が霞若君と見定て歸つたは。天成不思議のなす所。御壽命は萬々年悦べ女房」。「イヤもう〳〵大抵の事じやごんせぬ、あの松王めが目の玉へ菅丞相樣がはいつてござつたか。但首が黄金佛ではなかつたか。似たといふても瓦と金、寶の花の御運開きとあんまり嬉しうて涙がこぼれる」。「ハア、有がたや尊や」と悦び勇む折からに。小太郎が母息急きと。迎と見へて門の戸叩き「寺入の子の母で御ざんす。今漸歸りました」と。いふ聲聞より久喫驚。「一トつ遁て又一トつこりやマア何とどふせう」と。妻が騷げど夫は胴据へ、「コリヤ最前いふたは爰の事、若君には替へられぬ狼狽者め」と戸浪を引退。門の戸ぐはらりと引明れば女は會釋し「コレハまあ〳〵お師匠樣でござりますか、惡さをお賴申ます。どこに居やるぞお邪魔であろに」と、いふを幸。「イヤ奥に子供と遊んで居ます、連れ立て歸られよ」と眞顏でいへば「ヲ、そんなら連て歸りましよ」と、ずつと通るを後より只一打と切付る。女もしれ者ひつはずし進

〇五色の息　無量の歎息の意にいふ。「五色の溪」といふ文句もある。

〇聖德　天皇の御德を稱する語であるから、こゝに用ひるはよくない。

〇黄金佛　金色燦爛たる佛。佛菩薩が身代りに立たれたかといふのである。

〇瓦と金　小太郎と菅秀才とは似たというても、その身分に於て瓦と金と程の大差がある。

〇惡さ　いたづら。いたづら者。小太郎をさす。

〇しれ者　[illegible]者。

ても逃ガさぬ源藏が、及するとに切付るを我子の文庫ではつしと請ケとめ、「コレ待ッた待タんせこりやどふじや」と、撥る及も容赦なく、又切付る文庫は二つ、中カよりばらりと經帷子、南無阿彌陀佛の六字の幡顯れ出しはコハいかにと、不思議の思ひに劔もなまりす、兼てぞ見へにける、小太郎が母涙ながら、「若君菅秀才のお身がはり、お役に立テて下さつたか、まだか樣子が聞たい」といふに慟り、「シテ〳〵それは得心か」、「得心なりやこそ、此經帷子六字の幡」、「ムウして其許は何人の御内證」と、尋る内に門口より、「梅は飛、櫻は枯る、世ハの中に、何とて松のつれなかるらん、女房悦べ、悴はお役に立ッたぞ」と、聞よりわつとせき上て前後、不覺に取亂す、「ヤア未練者め」と叱付、ずつと通るは松王丸、見るに夫婦は一度慟り、夢か現か夫婦かと呆て、詞もなかりしが、武部源藏威儀を正し、「一禮は先ッ後の事、是迄敵と思ひし松王打て替つた所存はいかにいぶかしさよ」と尋れば、「ヲヽ御不審尤、存知の通り我々兄弟三人は、めい〳〵に別れて奉公、情なや此松王は、時平公に隨ひ、親兄弟共肉縁切、御恩請た丞相樣へ敵對、主命とは言ながら皆是此身の因果、何とぞ主從の縁切んと、作病構へ暇

○こりやどふじや これは[illegible]

○經帷子 [illegible]

○幡 [illegible]、亡者はその功德の七分の一を得るといふ。

○シテ〳〵 「サウシテ〳〵」の略。念を推す意を含んだ。

○得心 納得（なつとく）。

○内證 人の妻を稱する語。內儀。（既出）

・梅は飛び つれなかるらん この歌の意は、道眞の愛樹梅・櫻・松に梅王・櫻丸・松王の三人兄弟をきかせて、梅王は九州に[illegible]て來てくれ、櫻丸は自害した、何とて松王のみ不人情であらう[illegible]といふので、道眞の詠として[illegible]、松王が一子[illegible]身代りに立[illegible]できた、といふのである。

○不覺 覺悟ならぬこと。未練。

○夫婦 松王と其の妻千代。

○一禮は先づ後の事 御挨拶は後にする事としての意。

○兄弟三人 梅王、松王、櫻丸。

○肉縁切り [illegible]許された[illegible]

○作病構へ 病氣でもないのに病氣だと僞り。

の願ひ。菅秀才の首見たらば暇やらんと今日の役目。よもや貴殿が討ちはせまい、なれ共身がはりに立ッべき一子なくばいかゞせん。爰ぞ御恩報ずる時と、女房千代と言合せ、二人の中の忰をば、先へ廻して此身がはり。机の數を改めしも。我子は來たかと心の蓍。菅丞相には我性根を見込給ひ。何とて松のつれなからふぞとの御歌を松はつれない〳〵と、世上の口にかゝる悔しさ。推量あれ源藏殿。忰がなくばいつ迄も人でなしと言はれんに、持べき物は子なるぞや」と、いふに女房猶せき上ゲ。「草葉の蔭で小太郎が聞て嬉しう思ひましよ。持べき物は子成とはあの子が爲によい手向。思へば最前別れた時、いつにない跡追たを、叱つた時の其悲しさ、冥途の旅へ寺入と早蟲が知らせたか、隣村へ行といふて、道迄往んで見たれ共、子を殺さしにおこして置て、どふマア内へ往なるゝ物ぞ。死顔成り共今一度見たさに未練と、笑て下さんすな、包し祝儀はあの子が香奠。四十九日の蒸物迄持て寺入りさすといふ、悲しい事が世に有ふか、育も生れも賤しくば、殺す心も有まいに。死る子は眉目よしと美しう生れたか。可愛や其身の不仕合。何の因果に疱瘡迄。仕難た事じや」とせき上てかつぱと伏て泣ければ、倶に悲しむ

○貴殿　武部源藏をさしていふ敬稱。
○蓍　めどはぎ、蓍草または蓍木といふもので、宿根から數十の莖が出て枝なく、高さ四五尺に達する。この莖五十本で作つた筮(めどぎ)を以て占ひをする。後には竹で作り、筮竹といふ。「心の蓍」とは、心の中でひそかに占つて確めることの意。
○つれない　不人情である。
○人でなし　人非人。人間の道を辨へぬやつ。
○持つべき…ぞや　謡曲「刈萱」に「持つべきものは子にて候」。
○いつにない跡追うた　いつもさうはせぬにこの度に限つて、母様わしも行きたいと、別れを悲しんでなつかしがつた。
○冥途の旅へ寺入　身代りとなつて死ぬために寺子屋に入學するのであるから、かくいうた。
○見たさ　見たさに跡返りをして來ました。
○四十九日　中陰滿了の日。この日亡者が三界六道に生ずる日といはれて、饅頭などの蒸物を供へて佛事を修す。
○死ぬる子は眉目よし　「土佐日記」に「死にし子顔よかりき」。
○疱瘡　昔は種痘がなかつたから、誰でも一度は[illegible]の疱瘡まですまして非業の死を遂げねばならぬとは、何の業報かと歎くのである。

○連合ひ　妻が夫をさし、又は夫が妻をさしていふ。ここは戸浪が源藏をさす。源藏が小太郎を菅秀才の身代りと思ひ付いた。
○内證　戸浪をさす。
○女房　お千代である。
○ほえる　聲をあげて泣くことを罵り氣味にいふ語。
○いさぎよう首指のべ　我が武士道の精神敎育は、かくも立派な人物を作り上げるものである。そして小太郎のいぢらしい心根に泣かされる。
○利口…九つ　「利口立派」と頭韻を合はせ「やっ」を三つ疊みかけて押韻し、「奴」を「八つ」にかけた[illegible]。
○櫻丸　前世親王と菅公の養女苅屋姫との戀を取持つたことから、菅丞相流罪の事件を惹起したといふ責任を感じて自殺した人。この事は本書第三・佐太村の段に見えてゐる。
○けなりい　「氣の勝い」の轉訛。心にくいとうらやむ義。うらやましい。
○伯父御　櫻丸をさす。
○ひたする　袖を浸す。「浸す」は下二段活用でなくて、四段活用の他動詞であるから「ひたす有が」と[illegible]。我々は平安朝時代の語法を必らずしも金科玉條とするにも及ぶまい。

戸浪は立寄、「最前にナ、連合の身がはりと思ひ付た傍へ行て、お師匠様今から頼上ますと、いふた時の事思ひ出せば、他人のわしさへ骨身が砕ける、親御の身ではお道理」と涙添れば「イヤこれ御内證、コリヤ女房も何でほへる、覺悟した御身がはり。内で存じ分じほへたでないか、御夫婦の手前も有、イヤ何源藏殿、申付てはおこしたれ共、定て最期の節、未練な死を致したで御ざらう」、「イヤ若君菅秀才の御身がはりと言聞したれば、いさぎよう首指のべ」、「アノ逃隠れも致さずにナ」、「につこりと笑ふて」。「ム、、、でかし居りました、利口な奴立派な奴、健氣な八つや九つで親にかはつて恩送り、お役に立は孝行者手柄者と思ふから、思ひ出すは櫻丸、御恩も送らず先立し嘸や草葉の蔭よりも、羨しかろけなりかろ、悴が事を思ふに付思ひ出さるゝ〳〵」と、流石同腹同姓を忘れ兼たる悲歎の涙「ナウ其伯父御に小太郎が、逢ますわいの」と取付てわつと、許に泣沈む、歎も洩て菅秀才、一間の内より立出給ひ、「我に代ると知ならば此悲しみはさすまいに、可愛の者や」と御袖を絞り給へば夫婦ははつと、倶にひたする有がた涙。「序ながら若君様へ御土産」と松王つつ立て申付た用意の乗物早く〳〵」と呼は

○御臺所　貴人の奥方。（見索引）
○横手を打つ　我が意を得た時、或は思ひ當つた事のある時などに、兩手を打合はすをいふ。
○北嵯峨　京都嵯峨大覺寺の邊をいふ。ここの事は第四・北嵯峨の隠れ家の段に見えてゐる。
○河内の國　河内土師の道明寺の伯母覺壽の處を指す。菅公、並に苅屋姫もここに隠れて居る。
○野邊の送り　葬送。
○網代の乘物　檜の木又は竹の薄い片を斜に組んで筵の如くしたもので張つた駕籠。
○上着を取れば　[illegible]
○白無垢麻社杯　死裝束。
○親の身で子を送る法はなし　親子逆縁の野邊送りは、いまはしい風習になつてゐる。
○門火　葬式を出す時、又は[illegible]門で焚く篝火。再び後へ歸らないことを祈る心から[illegible]。（見索引）
⊙サハリ　他流の節廻しに觸れることの意。
○師匠は彌陀佛　冥途の旅の寺入だから、其[illegible]
○六道能化　[illegible]、能化とは、師となつて能く他を教化するもの。
○賽の河原　[illegible]

るにぞ、「ハッ」ト答て家來共御目通に舁据る。「早御出」と戸を開けば菅丞相の御臺所、「ノウ母様か」「我子か」と御親子不思議の御對面。源藏夫婦横手を打。「方方と御行方尋しにいづくにか御座なされし」、「サレバ〳〵、北嵯峨の御隱家。時平の家來が聞出し召捕に向ふと聞、某山伏の姿と成危い所奪取たり。急河内の國へ御供なされ、姫君にも御對面。コリヤ〳〵女房、小太郎が死骸あの乘物へ移し入、野邊の送り營ん」、「アイ」と返事の其中に戸浪が心得抱てくる。死骸を網代の乘物へ、乘て夫婦が上着を取ば、哀や内より覺悟の用意。下に白無垢麻社杯、心を察して源藏夫婦、「野邊の送りに親の身で子を送る法はなし。我々夫婦が代らん」と立寄ば松王丸、「イヤ〳〵是は我子にあらず、菅秀才の亡骸を御供申。いづれもは門火〳〵」と門火を、頼み頼まる、御臺若君諸共にしやくり上たる御涙、冥途の旅へ寺入の、師匠は彌陀佛釋迦牟尼佛、六道能化の弟子に成、賽の河原で砂手本、いろは書子をあへなくも、散りぬる命、是非もなや、あすの夜たれか添乳せん、らむ憂目見る親心、劔と死出の山けこへ、淺き夢見し心地して跡は門火に酔ひもせず京は故郷と立別れ鳥邊野さして連歸る、

○砂手本　指先や木片で砂の上に文字を書き習ふこと。
○砂手本の縁語として、詞文にいろは歌の所々を句中に讀み入れていひかけたり。卽ち、いろは書くの「いろは」にあたる「ち」「ぬ」、散りぬる中の「ちりぬるを」、夜半の添乳せんの「わかよたれそ」、らむ[illegible]の「のやまけこえあさきゆめみし」、及び「ゑひもせす」はいろは歌をいひかけたものである。
○あへなく　敢無。はりあひなく。はかなく。
○らむ　「添乳せん」の「せん」に韻を通はせて、いろは歌の縁で受けて句調をととのへたに過ぎぬ。
・劔　劔の山。劔林地獄をいふ。
○死出の山　冥途にある山。（見索引）
○けこへ　「今日越（けふこ）え」であらう。（或は「蹴越（けこ）え」か）。
○京　いろは四十七字の終に「ん」「京」を添へることがあるから、その縁でいひ、放等と脚韻法によつた文飾。
○鳥邊野　今の京都市五條坂邊六道の東南にあつて、古來京都の火葬墓地として有名な處。

第五（大内の場）

登場人物の主な者

雷神（菅公の怨靈）　法性坊の阿闍梨　三善清行（時平の一味）
藤原時平（左大臣）　春藤玄番（時平の家來）　菅秀才（道眞の子）
苅屋姫（菅公の養女。齋世親王の寵愛を受けた者）　齋世親王（醍醐天皇の御弟）　輝國（院廳の判官代）
・白太夫（菅公の舊臣）　櫻丸夫妻の怨靈　松王丸（白太夫の子）
梅王丸（白太夫の子）

梗概

水無月下旬大内山は連日雷光物凄く雷鳴轟き渡り、法性坊の阿闍梨が祈り立てても靜まる樣子もない。かくて時平一味の者どもは雷火に打たれて無慙の死を遂げ、時平一人生き殘つて櫻丸夫婦の怨靈に惱まされ、菅秀才や苅屋姫の手にかゝつて殺され、

齋世親王・判官代輝國・白太夫・松王丸・梅王丸も會して共に喜ぶ。菅秀才は菅家の遺跡を立て、菅丞相には正一位を追贈され、北野や天滿に社殿を建てて、天滿大自在天神と崇めることとなつた。

大物船矢倉
吉野花矢倉

義經千本櫻

解　題

延享四年十一月十六日から初めて竹本座に上演されて、大當りであつた有名な淨瑠璃である。作者は竹田出雲・三好松洛・並木千柳であつて、五段に分れてゐる。「淨瑠璃譜」に、「此時吉田文三郎役、渡海屋銀平・鮓屋彌左衛門・佐藤忠信二役なり、源九郎狐の人形廣袖にて、これに源氏車の模樣だんだらの丸ぐけ、人形頭素盞嗚にて、此時初めて耳の動く仕掛を思ひつきしなり、源九郎ゆゑ源氏車の模樣を附けしにはあらず、此趣向最初より狐と見せざる事ゆゑ玉も附けられず、色色に工夫をなし、右狐場を勤むる政太夫の紋所源氏車ゆゑ、源氏のゆかりにて源氏車の模樣附けしなり、今も歌舞伎などには長上下にて仕れども、どこぞのはづみにては此姿にならねば源九郎狐めかず、云々」と見え、この名人吉田文三郎の工夫は今も殘つてゐるのである。

作　者

竹田出雲の傳は「菅原傳授手習鑑」の所に述べ、三好松洛・並木千柳の傳は「夏祭浪花鑑」の所に述べた。

實　説

本曲は平家沒落の哀史と、頼朝に憎まれた義經主從が都を落ち延びて、吉野山の合戰に至るまでの史實とに基づいたものである。そして安德天皇の御入水をいたく悼み奉り、また平維盛とその妻子とに同情して、いづれも佛道に歸依されたものとし、又常に苦勞に終始した義經をも憐んで、情義に富んだものにしようとして、謠曲「船辨慶」、「ひらかな盛衰記」、近松作の「吉野忠信」、同作の「天鼓」などに據り、技巧を凝らして脚色したものである。

主要人物の略傳

源九郎義經は源義朝の第九子。平治元年に生れた。その年義朝敗死し、義經は死を赦されて鞍馬寺に入り、ついで奥州に走つて藤原秀衡に頼つた。兄頼朝が兵を伊豆に擧げた時來つて力を協せ、平氏を一谷に攻め、鵯越から肉薄して之を陷れ、屋島に轉戰し、遂に壇浦に平氏を殲滅した。然るに兄頼朝と不和となつた爲吉野山に隱れ、山法師に攻寄せられて漸う遁れ、奥州に下

つて父秀衡に投じ、文治五年閏四月晦日藤原泰衡に襲殺された。行年三十一。

靜御前は磯禪師の女。舞妓となり、後に義經の妾となる。義經が兄賴朝と隙を生じ、京都を去つて吉野山に隱れた時、靜之に從つた。既にして義經は山僧に來襲されようとするを聞き、財寶を靜に與へて相別れた。靜は山路に迷ひ、山僧に捕へられて六波羅に送られ、北條時政に調べられて鎌倉に送られた。末年詳かでない。

河越重賴は上野の士。宇治川の戰に源義經に從ひ、木曾義仲を攻めて戰功を立てた。

土佐房昌俊（本曲土佐坊正尊に作る）は、文治元年十月九日源賴朝の命を受け、八十三騎を具して鎌倉を出發し、十七日義經を京六條室町の亭に襲うて敗れ、鞍馬の山奥に逃げ入つて義經の家人に捕へられ、二十六日六條河原で首を刎ねられた。

佐藤忠信は陸奧の人。信夫の庄司元治の子に生れ、繼信の弟。源義經の臣となつて兵衞尉に任ぜられた。義經が兄賴朝と不和となつて賴朝の將士土佐房昌俊に襲はれた時、忠信等力戰して之を破り、義經に從つて吉野山に隱れ、吉野法師に攻寄せられて義經が自殺しようとした時、忠信は之を諫めて義經の鎧を著し、偽つて源判官と名乘り、敵と渡り合ふ間に義經を遁れさせ、攻手の大將横川覺範を殺し、谷を越えて逃げ去り京都に居る。敵糟谷有季之を探知し、兵を率ゐて來り圍んだので、忠信は從士二人と共に奮戰して自殺した。時に年二十六。

安德天皇は第八十一代の帝、御名は言仁。高倉天皇の第一皇子、御母は建禮門院德子。治承四年正月三歳で禪を受け、四月帝位に卽き給ふ。源平の合戰に平宗盛に擁せられて筑紫に赴き給ひ、壇浦の戰に義經の爲に平氏全滅し、天皇は三種の神器を抱いて、畏れ多くも海に投じて崩御し給はれた。時に文治元年四月。在位五年、寶算八歳。

平知盛は平清盛の子。壽永元年權中納言となり、二年兄宗盛に從ひ安德天皇を奉じて西海に走り、尋いで屋島に據つた。壇浦の戰に知盛は船首に立つて將士を激勵したが、遂に義經の爲に破られて、天皇は御入水し給ひ、兄宗盛は虜になつたと聞いて悲憤の涙を浮べ、叔父教盛と互に刺し合つて潔い最期を遂げた。行年三十四。

平維盛は重盛の嫡子。富士川に源頼朝の軍と對陣して脆くも潰え、また木曾義仲の兵と礪波山に戰つて大敗し、京都守を失するや、安德天皇に從つて西海に走つた。末路は詳かでないが、維盛はその後密かに屋島を遁れ、高野山に入つて剃髮し、更に熊野に赴き、那智の海に投身したといふ。

六代御前は三位中將平維盛の長子。平氏が壇浦の戰に滅んだ時、六代は母と共に京の遍照寺の側なる菖蒲谷に匿れてゐた。文治元年北條時政の爲に尋ね出されて母子共に擒にされたが、六代の乳母が神護寺の僧文覺に頼んだので、文覺から六代の救ひを頼朝に懇請して赦され、六代は文覺の弟子となつて名を妙覺と改めた。頼朝が薨じた後、文覺が流罪に處せられた時、六代も頼家に捕へられて相模の田越川で斬られた。墓はこの河畔の路傍小丘の上にあつて「六代御前墓」と刻んである。

影響

本淨瑠璃は其の後も屢〻操芝居に上演され、近くは昭和八年七月にも文樂一座によつて、東京劇場に上演されて喝采を博した。

歌舞伎では寛延元年正月伊勢の芝居に上演され、同年五月五日から江戸中村座に上演されて大當りであつた。同年八月六日より大阪中の芝居にも上演され、その後も諸方に屢〻上演されて今日に及んでゐる。殊に「道行初音旅」の段は舞踊劇として演じられ、操芝居と趣を異にして對立してゐる

第一（大序、禁中鼓讀し中、北嵯峨の草庵の堀川の館切、川越太郎上使）

登場人物の主な者

藤原朝方（左大臣左大將）　源九郎義經（頼朝の弟）　武藏坊辨慶（義經の部將）
猪熊大之進（朝方の配下）　若葉内侍（小松三位維盛の内室）　六代御前（維盛の子）
小金吾武里（小松内府重盛の遺臣）　靜（義經の妾）　卿の君（平時忠の養女。川越の娘。義經の内室）
川越太郎重頼（頼朝の臣）　土佐坊正尊（頼朝の臣）　海野太郎行永（頼朝の臣）

梗概

源義經は辨慶等を伴ひ、後白河法皇の御所に參内して平家討滅の情況を申し上げ、その恩賞として豫て望んだ初音の鼓を賜はり、朝方之を取次ぎ、院宣と稱して鼓に事寄せ頼朝を討てとの意を寓する。義經乃ち忠悌の道を全うする爲に、鼓は拜領しても打つまいと決心して退出する、その凛乎として溫雅な風姿は、一度に開く千本櫻（本曲の題名之より出る）の榮えにも似た。

若葉内侍。六代御前の母子は北嵯峨の草庵で、庵主の尼と共に隱棲してゐるを、佞人猪熊大之進が之を探知して來り襲ふ。折節來合はせた重盛の遺臣小金吾武里が防戰して敵二人を斃し、若葉内侍母子を菅笠の荷の中に匿して遁れた。

義經の堀川の館では舞樂の催などあつて賑ひ、靜の執成で辨慶の勘氣も赦された折、遠見の侍が、頼朝の命を受けて義經討伐に向つた土佐坊正尊。海野太郎が都に忍び入つた由を注進したので、辨慶勇んで飛び出すを、卿の君等に制止されて諸共に義經の前に出る。

「川越太郎上使」川越太郎は頼朝の名代として堀川の館に來り、義經を訊問し、引いて卿の君の自刃となる。折から土佐坊正尊等が押寄せたので、辨慶は之と戰つて正尊を殺した爲、義經は都を落ちねばならぬ事となる。

○評定　評定衆は執權と共に政所に列して、政事を議し吏務を執る役で、鎌倉幕府重要な職制の一である。

○大紋　素襖の長袴と大方同じもので、其の異つた點は家の紋の附け方と胸紐・菊綴を組緒にしてある。この服は近古以前にはなく、德川家服制によれば、諸大夫之を着用し、地布色定めず、家の紋を染め出し、下に熨斗目を着、風折烏帽子を被つたのである。

○廣廂　廂の下に板を敷いた廣間。

○判官　檢非違使尉をいふ。（[illegible]引）

○右大將　右近衛大將の略、源頼朝をいうた。

○申開く　いひひらく。辯明する。

○とても　副詞「とて」に「も」の添はつた語で、「どうあつても」などいつたやうな意を示す。いつそ。

第一の切（川越上使の段）

程なく入來る武士は、鎌倉評定の役人川越太郎重頼、大紋烏帽子爽に。年も五十路の分別盛り、廣廂に入來れば、御主九郎判官御裝束を改められ、しづしづと立出給ひ、「ヤア珍しや重頼。兄頼朝にも御變なく、百侯百司も恙なしや」と仰にはつと頭をさげ、「先づは御健體を拜し恐悦至極、右大將にも安全に渡らせられ、諸大名も毎日の出勤。賢慮安んじ下さるべし」と申し上れば義經公、「シテ其方は海野土佐坊同役にて上りつらん、但は外に用事有や」と尋に重頼「さればの儀、君に御不審三ケ條、一々お訊申上、御返答によつて海野土佐坊と同役、恐れながら過言は御赦免なされ、訊る仔細御返答」と申上れば「ホ面白し、此義經に不審あらば兄頼朝に成り代り過言は赦す、訊て見よ申開かん遠慮無用」と、仰に猶も平伏し、「冥加に餘る仕合、とてもの事に御座改め下されよ」と、席を立ば大將も末座へさがつて川越を、上座へこそは請ぜらるゝ、席改まつて川越太

○腰越　相模國鎌倉郡にあつて、片瀨の東南に接し、[illegible]。
○親兄の禮　親しい兄に對する禮儀。親は親身[illegible]に[illegible]重んじ[illegible]。
○陪臣　またげらい。
○赤旗　平家の旗。[illegible]、源氏は大旗腰小旗皆押し並べて白かりけるが」。
○小松　小松内大臣平重盛。[illegible]小松谷[illegible]にあつたので[illegible]小松といふ。
○治定　[illegible]
○似非者　いかがはしい者。曲者。くへぬ奴。[illegible]いひ、或は僻(僻「いせ」)の轉だともいふ。
○くつきやう　「くきやう」(究竟)の音便。至極の義。最も勝れて逞ましいこと。この語佛典の中に[illegible]、究は理の極を云ひ、竟は事の極をいふ。「三藏法數」に「究[illegible]」。

郎一如何に義經。平家の大敵を亡ぼし軍功を立ながら。腰越より追つかへされ無念にあらん、但さもなかりしか」、はつと義經袖かき合せ、「親兄の禮を重んずれば無念な共存せず」、「ヤア其詞虚言虚言。親兄の禮を重んずる者が平家の首の内新中納言知盛。三位の中將惟盛、能登の守教經、此三人の首は贋物、何故僞つて渡したぞ、まづ此通りの御立腹、サア御返答は」と訊れば。「ホヲヽ其言譯いと安し、贋首をもつて眞とし。眞を以て贋とするは軍慮の奧義。平家は二十四年の榮華、亡び失せても舊臣陪臣國々へ分散し、赤旗の翩飜する時を待つ。一門の中にも三位の中將惟盛は、小松の嫡子で平家の嫡流、殊に親重盛仁をもつて人をなつけ、厚恩の者其數を知らず。惟盛存へ有と知らば、殘黨再び取立るは治定、又新中納言知盛、能登の守教經は古今獨歩の似非者、大將の器量有りと招きに從ひ馳集る者多からん、さすれば天下穩ならず、何れも入水討死と世上の風聞幸ひに、一門殘らず討取りしと、贋首を以て欺きしは、一旦天下を靜謐させん義經が計略、と有つて捨置かれぬ大敵故、熊井・鷲尾・伊勢・片岡、究竟の輩を休息と僞り國々へ分け遣し、忍び〳〵に討取手筈。かゝ都に安坐すれ共。心は今に戰場

の苦しみ、兄頼朝は鎌倉山の星月夜と、諸大名に傅かれ、月雪花の翫び、同じ清和の胤ながら、晨には禁廷に膝を屈し、夕には御代長久の基を謀る、何時か枕を安んぜん淺ましの身の上」と、打萎れ給ふにぞ、實に理と重頼も、思ひながらも役目の切羽、「ムウ扨は其御述懷有故御謀叛思し立れしか」と、言はせも立ずくはつとせき上、「ヤア穢らはし、謀叛とは何を以て何を目當」と、御氣色變れどちつ共恐れず、「君鎌倉を亡ぼさんと院宣を乞ひ給ひしに、初音の鼓を以て裏革は義經、表革は頼朝打と云ふ聲有とて頂戴ありしとは左大臣朝方公より急の知らせ」と、聞て義經、「扨は朝方か讒言せしな、其鼓の事は、某豫ての懇望、下し置かるゝ場になつて叛逆に寄せたる詞の品、是朝方の計ひとは思へ共、院中より下さるゝ恩物、請納めずは綸命に背く、請ては兄頼朝へ孝心立ずと、望みに望みし一挺なれ共、打てば鼓に聲有とアレあの如く、床に飾りて眺むる計、神明佛陀も照覧あれ、打もせず手にも觸ず」と仰に川越「ハヽヽヽはつ」と三拜し、「其御誓言の上何疑ひ奉らん、二つの御分けられきつぱり明白去ながら、情なきは今一つ、御簾中卿の君は平大納言時忠の娘、平家に御縁組まれし心は如

○星月夜　星月の夜は木〔こ〕の間暗〔くら〕を鎌倉に通はした枕詞。索引により「鎌倉山の星月夜」を見よ。
○清和の胤　清和天皇の皇子貞純親王の御子經基に源氏の姓を賜はつた。この系統を清和源氏といふ。源義經はその裔である。
○禁廷に膝を屈し　朝廷に罷出ては平身低頭する。
○淺ましの身の上　面白からずの身の上。興のない境涯。
○切羽　切羽詰ること。拔差ならぬこと。
○述懷　思ふ所を述べること。轉じて遺恨の意にいふ。「平家物語」卷十一、腰越の條に「事新しき申條述懷に似たりといへども」と。
○謀叛　背いて兵を擧げること。謀反とはもと別義で、「大寶令」に謀反は八虐中の第一で、謀叛はその第三である。
○初音の鼓　この鼓のことは近松作「吉野忠信」第四に見えて、義經が靜に初音の鼓を形見として都へ送り歸すことになつてゐる。
○綸命　綸言命令の義。帝王の御命令。天子の御言葉。
○神明佛陀も照覧あれ　神樣も佛樣もみそなはせ、決して偽つたり非道なことは致しませぬといふ意で、強くいふ自誓の詞。神明に誓言、佛には[illegible]にいふ。
○きつぱり　全く。すつかり。
○簾中　[illegible]の敬稱。

何に、「ヤア愚かな訊、兄賴朝の御臺政子は北條か娘、時政氏は平家にあらずや」、「イヤそれは主君賴朝、伊豆の伊東に御座有時、北條一ッ家を味方に付ヶん計略の御緣組」「ヤア言ふな〳〵、もと卿の君は汝が娘平大納言へ貰はれ育てたは時忠肉身血を分けた親は其方、何故夫程の事鎌倉にて言譯せざるや、但義經と緣有と思はれては、身の瑕瑾と思ひ隱し包んだか、卑怯至極」と仰を聞より川越太郎、居たる所をどつかと居直り、詞「ヤアお情ない義經公清和天皇の末流九郎義經を婿に持たは恐らく日本の舅頭、五十に餘る川越が、名を惜んで祿を貪らふや、今肉緣をあかせば、此方の言譯するも暗く、緣者の證據となる故に、ヲ鎌倉では隱した包んだ、陰に成り日向に成り、言ひくろむれ共御前には讒者の舌は强くなり、智者と云はれし秩父さへ力に及ばぬ平家と緣組、今になつて川越が娘と言ふて得心有ふか、卑怯至極と思召す御心根も面目なし、皺腹一つが御土產」と、差添手早に拔放す、「なふコレ待て」と卿の君駈出て手に縋り、「其言譯は自」と刃物もぎ取我ヵ咽へぐつと突立どうど伏す、「是は」と驚く義經公靜も駈出抱起し、「藥よ、水よ」と狼狽て涙より外詞なし、川越は見向もせず、詞「出かされた時忠の娘、こ

○御臺　御臺所。大臣・大將・將軍家などの內室の敬稱。

○暗く　うしろ暗く。

○くろむ　くらます。ごまかす。糊塗する。

○秩父　畠山重忠をいふ。彼はもと武藏の秩父に住し、後に畠山に移る。

○力に及ばぬ平家と緣組　平家と緣組とあつては、最早義經を助けるに、重忠の力を以てしても[illegible]及ばない。

ふなうては御兄弟、御和睦の願ひも叶はず、とくに呼出し我手にかけんと思ひし
が、我と最期を遂げさして死後に貞女と云はせたく、わざと自滅と見せかけし、
よふ拔身を奪取た、あつぱれ健氣な女中や」と餘所に褒むるも心は涙、義經間近
く立寄り給ひ「かくあらんと思ひし故、わざと川越が血筋を顯はし、平家の緣を
除かんと、思ひし甲斐もなき最期、淺ましの身の果由なき契を交せし」と、御目
に餘る涙の色、靜御前も諸共に、彼方此方を思ひやり、泣しづみ給ふにぞ、手負は
君を戀しげに、打眺め、〳〵、「一つならず二つ迄、大切な言ィ譯立、殘る一つは
平家と緣組、其科私か皆なす業、戀慕ふ身をお見捨なう、是迄はいかゐお情、世
に無情とはかないは、明日を定めぬ人の命、短うお別れ申ます、靜殿我君樣を大
切に、賴むぞやいの」とせき上てわつと計に、泣きけるが、「サア川越殿、平大納
言時忠が娘の首、賴朝樣へお目に懸け、御兄弟の御和睦、それが冥途へ、よい土
產」と、首さし延ばす心根を、思ひやる程川越太郎、胸に滿ちくる涙をば呑込
呑込傍に立寄、「似合はざる喩なれ共、玄宗の后楊貴妃は馬嵬が原にて、哥舒翰
に討たれ、天下の煩ひ拂ふ、御兄弟確執とならば萬民の歎き、清き最期も天下

○女中　婦人の意にいひ、また仕官・奉公する女、又は下女の意にいふ。ここは婦人・女子の意。
○命　世に生きて苦をかけるつれない命と、明日をも知らぬはかない人の命とをかけた。
○玄宗　唐の玄宗明皇帝、名は隆基、女色に溺れ楊貴妃を寵愛して、遂に安祿山の亂を誘致した。
○楊貴妃　玄宗皇帝の寵妃、絶世の美人。安祿山の亂に玄宗の將士等の爲に馬嵬で殺された。
○馬嵬　支那陝西省興平縣西二十五里にある驛名、今馬嵬鎭又は馬嵬堡といふ。
●哥舒翰　玄宗皇帝の副元帥。國忠・安祿山の將史思明等の軍と戰ひ、敗れて賊に降る。本當は楊貴妃は哥舒翰に討たれたのではない。
○確執　固く己れの意見を執つて動かぬこと。論爭。不和。

○介錯（見索引）

○骸　首を討たれるよりも先に、思ひ餘つて事切れてゐる卿の君の骸と、川越の體とをかけた。

○さないと　さうでないと。

の爲、出來された適々。あかの他人の某が介錯して進じやう」と、刀するりと拔放す、「ノウ其あかの他人の、お手を借るも深き御縁。とてもの事にたつた一言」、「親子の名乘は未來でせう」、「さらば〳〵」「さらば〳〵」と討つ首よりも骸は先へ川越が、どうと坐してぞ悄れ居る心ぞ、思ひやられたり。靜御前も義經も歎きに沈み給ふ折から、耳を突拔く鉦太鼓、鬨をどつとぞ上にける。コハ如何にと靜は仰天君も驚き、「扨は海野土佐坊めが攻めかけしと覺たり、龜井駿河」と仰せの内より押取刀で兩人が、表をさして駈出るを「ヤレ待れよ」と太郎は呼留め、「仰分を聞迄はと留め置しを攻めかけたは、彼等も讒者と一味の輩、とは言へ兩人鎌倉殿の名代、過有つては敵對するも同然只速かに追返すか、威の遠矢で防がれよ、さないと忽ち義經の仇」と、言含むれば兩人は、「尤も道理」と呑込んで表をさして駈け行、義經公も川越が詞至極と猶も氣を付、「無分別の辨慶が心許なし、武藏武藏」と呼び給へば腰元立出「武藏殿は最前より打悄れ居られしが、鯨波を聞とはや、悅び勇んで行かれし」と、聞より「此奴事仕出さん、靜參つて急ぎ制せよ、矢先危しソレ鎧」、はつと腰元持出る、其間に長押の

長刀かい込み表へ走る女武者。堀川夜討に靜が働き末世に言ふも是ならん、如何と案じ給ふ所へ龜井・駿河馳戻り、「我々味方を制して的矢を射させ、追返さんと存せし所、武藏坊の無法者、玄翁掛矢を以て敵をみしやぎ大鋸にて人を引切、討手の大將海野太郎を、天邊から爪先迄叩き碎いて候」と、申上れは大將あきれ、川越太郎ははつと計りへヱしなしたりひろいだり、討手の大將討取ては御連枝和睦の願ひも叶はず、不便や娘も詮なき犬死、是非もなき世の有樣」と。悔涙に義經公、「古人は人を恨みず傾く運のなす業と思へば恨みも悔みもなし、武藏が無骨を幸ひに、都を開かば綸命も背かず、兄賴朝の怒りも休まる。是を思へば卿の君が最期。殘り多や」と御涙「皆夢の世の有爲轉變。我レも浮世に捨てられて驛路の鈴の音聞かん、龜井・駿河供せよ」と立出給へば、川越太郎惜れながら「暫し」と留め、床に飾りし鼓携へ、「昔多年御懇望有し重寶殘し置かれては、取落されしと申すも殘念、院勅に打と云ふ聲有とは、昔より識れし鼓の詞、打つを拙者が調べ換へ、再び御連枝ぐはいの取持、長路の旅の御物忘れ」と心を、こめて差出す、義經御手に觸れ給ひ、「親しき兄弟の因をば打切られ、も運の盡き、結び

○末世に言ふも是ならん　後世までも言ひ傳へられてゐるのは、この事であらう。
○的矢　的を射る稽古矢であつて、矢幹は黒漆で薄く塗り、三節あつて筈を節で作り、切斑(きりふ)の眞羽で矧いだのが普通なる由「高忠聞書」に見えてゐる。鏃は平題(いたつき)を用ひる。
○玄翁　「げんおう」の轉。石を割るに用ひる鐵鎚。殺生石を碎いた玄翁和尚の名より出たといふ。
○掛矢　大きな木槌。この「掛」は掛合の約。
○みしやぐ　拉。おしつぶす。
○てつぺい　「てつぺん」に同じ。頭の頂上。いただき。「東海道名所記」日坂(につさか)の記事に「三日目に夜中たてつぺいに、てつぺいを枕にぶつさげめされいといふ」。
○篤成したり　つまらぬことをしてしまつた。しまつたり。
○ひろぐ　罵、人の行爲を罵るとき「する」「行ふ」の意にいふ。「逆櫓伸」「世間娘容氣」に「繼爺ひろいでいなく」
故にこの人々に擬していふ。
○連枝　兄弟は木の枝を連ねて本を同じうするが故にいふ。蘇武の詩句に「況我連枝樹」。
○古人は人を恨みず　「古語」に「遠人不恨」。
○ぶこつ　「こなたの二言目には無骨といひて」。無風流、無作法。
○開く　落ちることをいふを忌んで言ひかへた武家詞。落ちるこのがれる。「開かば」は落ちのびたならばの意。

○有爲轉變　（見索引）
○驛路の鈴　古昔官使が諸國に赴く時、驛路の人馬を徴發する證に朝廷から賜はつた鈴。よつて以て驛から驛へ[illegible]る事にいうた。
○革より穢れし　[illegible]時、皮革にけがれた物と[illegible]、[illegible]度[illegible]賤民[illegible]するものであつた。
○ぐはい　ぐあひ(工合)の訛か。調子。
○漏れじ　[illegible]
○上帯　（見索引）
○下知　「令下知」の略。命令。指圖。
○弱腰　[illegible]
○曲者　[illegible]
○だんびら　（見索引）
○江戸　[illegible]

返せよ川越」と、駿河・龜井を御供にこすご／＼館を出給ふ、御心根の痛はしさ見送る、人も鎌倉へ是非無く／＼も立歸る世の成行ぞ、是非もなき、跡は貝鉦闐い聲震動するも理や、武藏坊辨慶が海野の太郎を討取って、序に土佐坊せしめてくれんと、追駈け廻つて正尊が、乘つたる馬の後方に乘り、追つ立蹴立て白洲の庭、館もゆるぐ撞鐘聲、「ヤア／＼我君や御座する、討手に向ひし海野は粉にして土佐坊めを生捕つたり、龜井・駿河は何處に居る、武藏が料理の食殘し賞翫せぬか」と呼ばはつても、館はひつそと靜まつて、答ゆる人もなき不思議、不思議不思議と見廻す内、坂東一の土佐坊が腰の上帯引切って、馬より飛下り大聲上、「者共來れ」と下知の内、兵具の兵數百人、「ソレ、討取れ」と追取卷く、武藏も馬より一足飛、太刀も刀も鷲掴み、鴨掴みの首の骨、握ると切る數萬力雨か霰か人礫、隙間を見て土佐坊が武藏が弱腰しつかと抱く、「シヤ小倅めが味をやる、腰の療治で捻るか揉むか、揉つておけ」のぶり／＼どさり、尻餅ついても怯まぬ曲者、四尺に餘る太刀物、討つてかゝればひらりとはづし、丁ど切れば柄先で、しやんと請止め、「ホヽ、出かす／＼、腰を揉つた其代り、首筋捻つてくれ

○投算　物を投げ、それによつて吉凶・方角などを判斷すること。
○ちよつぺい　御高祖頭巾（おこそづきん）（日蓮上人の像の頭巾に似てゐるよりの稱で、目ばかり出して他を包みかくす頭巾）をいふ。「物類稱呼」卷四、頭巾の條に「北國にて『ぼうし』と云、又『をくそづきん』をくづきん』と云、武州秩父にて『ちよつぺい』と云」。
○ごし　越。取去らないで其の儘の意。
○葛原　京都[illegible]葛原。
○大原　比叡山の西麓で、高野川の上流に沿へる村落。
○牛若　義經は幼時牛若丸といふ。「牛若丑の方」も頭韻法の文句で、
○吉野　大和國吉野。「よしや吉野」も頭韻法。
○寅の刻　午前四時。ここの文は、「弓一の文言」に「寅の刻、風を起し」とあるによつて、「風を起して」といひつづけた。

んず」と、ぱつしとはねて身をかはし、大太刀蹴落し素首摑みぐつと引寄せ、腰に引つ付ヶ、「我君樣、御臺樣、龜井やい、駿河やい」と引ずり廻り呼び廻り、尋ね廻れど人々の御行方も見へざれば、「扨は此家を落給ふか、コハ何故」と身の科と思ひ寄らねば云ふ人も、答ゆる人も梢の烏啼いて詫する土佐坊を、右を左へ持直し、「自體此奴が逃げ廻り、隙取ッた故お供におくれた、おのれが首の飛ぶ方が我君樣の御行方、よい投算」と引摑み、ちよつぺい頭を頭巾ごし、すぽりと拔いて空へ投げ、「轉けたる方は巽の間、葛原大原の方でも有ルまい、もとは牛若丑の方、巳午もよしや吉野も、氣遣ひ、爰に戌亥や酉ならで、程はあるまい追付かん」と、忠義と思ひせし事も、今になつては未申、思ひ違ひの荒者が、荒砂蹴立る響はどう／＼どろ／＼／＼、踏締め／＼踏鳴し、義經の、跡を寅の刻風を、起して追ふて行く

第二（口、伏見稻荷の森の中、渡海屋の場、大物浦矢倉）

登場人物の主な者

源九郎判官義經（賴朝の弟）　龜井六郎重淸（義經の臣）　駿河次郎（義經の臣）

靜（義經の妾）　武藏坊辨慶（義經の臣）　逸見藤太（土佐坊正尊の郎等）

佐藤四郎兵衞忠信（義經の臣。但しここに出るは源九郎狐の化けたもの）　眞綱銀平（渡海屋。實は平知盛）

おりう（銀平の女房、實は安德天皇の御乳母典侍の局）　お安（銀平の養女。實は安德天皇の御事）　相模五郎（北條時政の家來は僞り、實は銀平手下の船頭）

入江丹藏（知盛の手下）

梗概

［伏見稻荷の森］　義經は都を開き、龜井六郎・駿河次郎を伴ひ、伏見稻荷の森まで落ち延びた時、靜御前も辨慶も別れ別れに義經の跡を慕うて追付いたが、靜は伴はれないで形見に義經から初音の鼓を貰うて一人殘される。其後に逸見藤太郎下を率ゐて義經を追ひ來り、靜を見て捕へ去らうとする折節、豫て母の病氣の爲に歸國してゐた佐藤忠信が偶然思はれ、靜を助けて藤太を殺す。この時義經主從が木陰より出で、忠信にその褒美として源九郎の名と義經の鎧とを與へ、靜を預けて、互に別れを惜しみながら、義經主從四人は尼崎大物浦をさして出發した。

［渡海屋］　平家の勇將平知盛は、尼崎大物浦渡海屋の主人となつて眞綱銀平と名を替へ、安德天皇の御乳母典侍の局はおりうと名のり、安德天皇をお安と申し上げて守護し、表向は銀平の妻子と見せて暮してゐる。

そこへ義經主從が來て豐前尼形（本文の註を見よ）行の船出を請うた。銀平は仇敵の義經を討取るは此の時と窃に喜び、まづ手下の船頭を北條時政の家來相模五郎と僞らせて、義經を討ちに來たやうに見せ掛け、之を追拂うて義經に忠義な者と思はせた。そして荒天を見定めて義經主從に船出をさせた後、白糸縅の鎧を着込み、白柄の長刀を提げて其の跡を追うた

［大物浦（一）］　新中納言平知盛は大物浦で義經と合戰したが、敵に裏をかゝれて敗北した。入江丹藏の注進によつて之を知り

れた安徳天皇及典侍の局は色を失はれたが、遂に安徳天皇は義經が守護し奉ることとなり、典侍の局は自刃し、知盛は怨念をすてて悟を開き、碇を負うて海に沈んだ。

評

余は平家の哀史を讀んで、先帝御入水の條に至る毎に、卷を掩うて悲憤の涙に暮れるものである。頼朝はさすがに名分を辨へ、範賴を戒めて豐後に居らせたのも、平家の落ち行く先を慮り、神寳及び高貴の御方々に對し、人臣の道を誤らぬやうにとの深い志に出たものである。然るに義經主從が壇の浦に於ける暴戻は言語に絶し、武士道の精神に悖り、赦しておけない野猪の行爲である。是に於て彼が戰功また論ずるに足らず。腰越の狀以後彼が諸方に漂浪して輾轉反側、終に衣川の泥土に化したのも固より彼の自業である。彼の爲を思へば本曲にいへる如きものでありたい。

第二の中（渡海屋の段）

地よ 夜毎日毎の入船に濱邊賑はふ尼が崎。※大物の浦に隠れなき※渡海屋銀平。海を抱へて船商賣、店は碇帆木綿、上り下りの積荷物、運ぶ船頭舵子の者人絶のなき船問屋。世を※ゆるかせに暮しける。夫は積荷の問屋廻り内を賄ふ女房おりう、宿借り客の料理拵へ、所柄とて※綱の物料理たゝ、按排も、甘う育ちし一人娘、お安がつるの轉寝に風引か、さじと襦に物臭の裾をぐはらりと明け、風呂敷わいかけ旅の伽に

○大物浦　今は尼崎市内に入り、大物といふ。
○渡海屋　船に乗つて海を渡る家業。
○ゆるかせ　ゆつたり。裕福なさま。「倭訓栞」に「ゆるかせ＝緩き意也」。
○綱の物　綱で捕る魚類。
○わいがけ　「わきがけ」(脇掛)の音便。ここの[illegible]
○によき[illegible]

よき〳〵と立出れば「是はまあお客僧様、今御膳を出しますに何處へお出なさるるぞ」「されば〳〵西國への出日和待て、連れども迄もほつと退屈、只居よりは西町へ往て買物をして來ませう」「是は〳〵殘り多い、外のお客へは鳥貝鱠、御出家には精進料理分立つて拵へたに、つゐ食つてござらぬか」「イヤ〳〵愚僧は山ぶなれば精進せぬ。鳥貝鱠よかろぞや」「それでもお前、今日は二十八日で不動様の御縁日」「ほんにそふじや、大事の精進、ハテなんとしよしよ事がない、往て來ませう」とふいと立、「あ痛〳〵〳〵」「ハテお客僧様何ッとなされた」「イヤ別の事でもないが、寢て居るは爰のお娘か、此子の上を踏越たれば、俄に足が竦ばつて。ヱヽ聞へた小さうても女子なれば、蟲が知らしてしやきばつたものであろ。ヤ大降のせぬ内に、往て來ませう」と武藏坊、ばつてう笠引つ冠り何處共なく急ぎ行。母は娘の傍に寄り「コレお安、其樣に轉寢して風引てたもるなや」と、抱き起せば目を擦り〳〵「アヽ母樣、お前のなさるゝ事見て居て、つゐとろ〳〵と一ト寢入」「ヲヽそれならば目を覺して、今朝習ふた清書を、とつくりと能う書いて、父樣のお目に懸きや」と、子には目のなき親心、手を引き納戸に入にける、

○出日和　[illegible]
○殘多い　殘念なり。
○鳥貝鱠　鳥貝を入れた鱠。[illegible]
○分立つ　[illegible]
○山ぶ　「やまぶし」の略。山に伏し野に臥して修[illegible]
○不動樣の御縁日　二十八日は不動尊の縁日として現今も一般に行はれてゐる。
○しよ事がない　しかたがない。
○しやきばる　「しやつきばる」(緘氣張)であつて、[illegible]たから、足の竦ばつたのも當然である。
○ばつてう笠　緩竹の簾「たけのかは」で作り、徑二尺四五寸ばかりの粗製の笠。この笠もと坂東地方から作りひろまつたによつて、坂東笠といふのが[illegible]いうてゐる。詳しくは「近松語彙」を見よ。
○納戸　衣服・器財などを納め置く室。

○尾形　緒方三郎維義をいふ。豐後國（本文には豐前とある）大野郡緒方は中古、緒方氏居城の地であつた。

○ぼひまくる　「追〔お〕ひ捲〔ま〕くる」の訛。

○料簡　こらへること。勘辨。

○權附　權勢を以て押附けること。近松作「相模入道千疋犬」に、「今度上意を以て權附の祝言、父が心にそまぬ」

かゝる所へ誰共知らぬ鎌倉武士家來引具し、「亭主に逢はふ」と内に入レば、女房驚き走出「夫は他行何の御用」と尋れば「身は北條が家來相模五郎と云ふ者、此度義經尾形を頼、九州へ逃下るとの風聞によつて、鎌倉殿の仰を請け、主人時政の名代として、討手に只今下れ共、打續く雨風にて船一艘も調はず、幸ゐ此家に借置たる船、日和次第出船と、聞ク願ふ所なれば、其船身共が借請け艪を押切て下らんず、旅人あらばぼいまくり座敷を明て休息させい、早う〳〵」と、權威を、見せて伸上れば、女房はつと返答に當惑しながら傍に寄り「御大切な御用に船が無うて嘸御難儀、手前のお客も二三日以前より、日和待チして御逗留、今更船を斷言ふて、お前の御用にも立難し、殊に先樣も武士方なれば、御同船共申されず、何卒御料簡有て、今夜の所をお待なされて下さらば、其内には日和も直り何艘も〳〵、入船の中を借調へて上ませう」「默れ女、逗留がなれば汝等には言付ぬ、所の守護へ權附に言付くる、奧の侍が怖ふて汝らが口から言難くは、身共が直に言ふていゝと、ずんと立ッ袂に縋り、「おせきなさるは御尤なれ共、お前を奧へやりまして、直に御相談さしましては、旅宿の難儀、何か夫の歸らるゝ

○ひちくどい　しつこく、くだくだし。甚だうるさい。

○あらけなし　荒々しい。粗暴な。「なし」は意を強める接尾語。

○やらんと　「[illegible]やしらぬといふたを」の略

迄、お待なされて下され」と手をすり詫れど「ヤアひちくどい※女郎奴、奥の武士に逢はさぬは、察する所平家の餘類か。義經の所縁の者、家來ぬかるな油斷すな」と、止むる女房を撥退け突退け。又取り付ッをあらけなく※踏倒し蹴倒すを、戻りかゝつて見る夫、走り入てかの侍が手を取つて、「眞平御免下さるべし、即ち私此家の亭主渡海屋銀平、御立腹の樣子我等に仰下さるべし」と膝を折り手をつけば、「ムウ汝亭主なら言つて聞さん、身は北條の家來なるが、義經の討手を蒙り。奥の武士が借つたる船此方へ借らん爲。奥へ踏込身が直に其武士に逢はふと言へば。汝が女房が遮つて止むる故に今此仕儀」。「ヘヱ憚りながら。そりやお前か、御無理な樣に存られます、何故とおつしやりませ。人の借つて置いた船を。無理に借らふとおつしやりますは。ナア御無理じやござりませぬか、其上にまだ。宿借の座敷へ踏込ふとなされたを、※やらんとおつしやつて女房共を踏だり蹴たりなさるゝは。お侍樣には似合ませぬ樣に存ます、此家に一チ夜でも宿致しますれば商旦那樣、座敷の内へ踏込しましては、どうも私がお客人へ立ませぬ、何卒御料簡なされて、お歸りなされて下さりませ」。「イヤ素町人奴、鎌倉

武士に向つて歸れとは推參。是非奥へ踏込むと反打返して犇めけば、「ア、お侍樣、それはお前の御短氣でござりましよ。私も船問屋はして居ますれど、聞はつつて居りますが、總別刀脇差では、人切ル物じやないげにござります、お侍樣方の二腰は身の要害。人の麁忽狼藉を防ぐ道具じやとやら承りました、去によつて武士の武の字は戈を止むるとやら、書きますげにござります」、「ヤア小癪な奴め。嘲ける頬桁切裂かん」と拔打に切付クる。引つ外して相模が利腕むんずと取。「コリヤもふ料簡がならぬはい町人の家は武士の城廓。敷居の内へ泥臑を切込むさへ有ルに。此刀で誰を切。其上に平家の餘類の。イヤ義經の所縁なんど、旅人を威嚇すのか。よし又判官殿にもせよ、大物に隱れなき眞綱の銀平がお隱ひ申たら何ンとする。サア眞綱が控へた。ならばぴく共動いて見よ」と、素頭微塵にはしらかし命を取蛇此世の出船」と、刀捥取宙に引提げ持て出。門の軒居にもんどり打たせば、死に入ル計の痛みをこらへ頬をしかめて起上り、「亭主め能つく覺えて居よ。此返報には汝が首さらへ落す覺悟せよ」、「まだ頬げた叩くか」と、[illegible]なる碇をぐつと差上げ、微塵にせんと投付クれば、はやてに[illegible]小船

○推參　押しまゐる意、轉じて無禮の意。
○反打返す　刀の反を打返す意、拔刀の身構へするをいふ。
○聞きはつる　聞削。聞きかじる。「聞きはつつて」は「聞きはつりて」の促音便。聞きかじつて。
○要害　[illegible]
○狼藉　（見索引）
○さるによつて　さあるによつて。[illegible]によつて。
○武の字は戈を止むる　「左傳」宣公十二年の條に「楚子曰、…夫文止戈爲武」。
○泥[illegible]を切込むさへあるに　[illegible]
○判官　檢非違使の尉をいふ。「職原抄」に「尉、[illegible]
○はしらかす　罅「ひび」を入らす。割る。打碎く。[illegible]近松作「博多小女郎波枕」に「身では割れたさ[illegible]」といふは忌忌しい、頭の頭骨「さら」がはしつた」。
○取蛇　[illegible]といふ。取蛇を取れば蛇「へさき」は左へ向く。ここの文は「命を取り」にいひかく。
○[illegible]
いふ。疾風、

の如く、尻に帆かけて主従は跡を見ずして迯失せける。「ホヽウよいざま〳〵」
と煙草盆引寄せ、「何と女房、奥のお客人も今のもやくやお聞なさつたで有ふな」
と、女夫がひそめく咄し聲、襖開へてや一ト間の襖押開き義經公、旅の艱苦に窶
れ果てたる御容顔、駿河・龜井も跡に從ひ立出る。「こは存よりなや」と、夫も
俄に膝立直し夫婦諸共、手を下ぐれば「隠すより見はるゝはなし」と、兄頼朝の不
興を受け世を忍ぶ義經、尾形を頼み下らんと此所に一宿せしに、其方よくも量り
知つて、時政が家來を追退け、今の難儀を救ふたるは業に似ぬうい働き、我一チ
の谷を攻めし時、鷲尾といへる木樵の童に、山道の案内させしに、山樵には剛な
る者故、武士となして召使ひしがそれに優つた汝が働き、あつぱれ昔の義經なら
ば武士に引上召使はんに、有に甲斐なき漂泊の身」と、武勇烈しき大將の、身を
悔みたる御詞、駿河・龜井も諸共に無念の拳を、握りける。「是は〳〵有難い御仰、
私も此界隈では、直綱の銀平とて、人に知られて居ますれど高が町人。今日の働
きも畢竟申さば竈將軍。些細な事がお目にとまつて我々づれに御褒美の御詞冥
加に餘る仕合せ、殊に君を見覺へ、去るは屋嶋へ赴き給ふ時、渡邊福嶋より兵庫

○尻に帆かけて　急ぎ逃げるさまにいふ諺。帆に風をふくむからであらう。
○もやくや　紛擾。「もやくり」「もやつき」など同系統の語。
○存じよりなや　思ひがけぬことよ。
○隠すより見はるゝはなし　隠せば必らず顕はるゝ。「中庸」に「莫見乎隠」
○うい　けなげな。狂言「烏帽子折」に「一段うい奴ぢやな」
○一ノ谷　（目案引）
○鷲尾　鷲尾三郎が義經に一谷の案内をしたことは「源平盛衰記」巻三十六に見ゆ。
○竈將軍　竈一つを持つ小將軍の意、家の内で權勢を振ふ者をいふ。内辨慶。
○龜井　（前出）
○渡邊　大阪市内に入る。今の東横堀江口に當る。
○福島　今の大阪市福島一帯。

の役にさゝれ、拙者が手船も御用に達し、一度ならず此度も、不思議にお宿仕るも深き御縁、去によつてお爲を存申上たきは、北條が家來取て返さば御大事、一刻も早く御乘船然るべし」と、言ひもあへぬに駿河の次郎「我々も其心。此天氣にて御出船は如何あらん」、「アヽそれをぬかつてよござりましよか、弓矢打物はお前方の業。船と日和を見る事は船問屋の商賣。昨日今日は辰巳。夜中には雨もあがり。明方には朝嵐に變つて、御出船には引ん拔きの上々日和。數年の功にて見置いた」と見透す樣に言ひけるは其道々と知られける。龜井の六郎ずんど立「ヲヽ銀平でかしたり、其方が詞に付て雨の晴間に片時も早く、主君の御供仕らん」と申上れは義經公「船中の事は銀平が宜しく計らひ、得させよ」と、仰にはつと頭を下げ、「只今も申す通り、幼少より船の事は能く鍛錬仕れば、御見送りの爲拙者も手船で。須磨明石の邊迄參らん、本船の有所は五町餘り沖の方、船は即ち日吉丸思ひ立ッ日が吉日吉祥、我も雨具の用意を致し跡より追付キ奉らん女房、昔を御見立申せ」と言ひ捨て納戸に入ければ、妻は心得御身をは隱れ蓑笠參らする「ヲヽ心遣ひ忘れじ」と、龜井・駿河諸共に蓑笠取て被せ參らせ、二人も手早

○打物　（見索引）

○辰巳　辰巳（東南）風。

○引ん拔　上々。申分なきこと。近松作「丹波與作待夜の小室節」に「本小室のひんぬきは與作與作と小手招き」。

○本船　艀「はしけ」を從へる大船。

○見立て　見送り。

○隱れ蓑笠　着れば身を隱すといふ蓑と隱笠をいひかけ[illegible]正し、[illegible]といふ[illegible]あり」。

○忘れじ　御恩を忘れじ。

○いざさせ給へ　どれ諸共にまゐりませう。
○仕れ　漕出すやう致せ。
○舫　船と船とを併せ繋ぐこと。
○いきせき　喘いで息切れのすること。
○入相　「内へ入り」に入相をいひかく。(見索引)
○心せかれや　気いそがしや。
○御上　[illegible]の事で、主婦の居間をいふ。[illegible]「[illegible]」に「お前はおうへに結構な布團敷いて」。
○おきやらいで　止(よ)しにしないで。暮方になつても手習もやめないで能く勉強した。
○寝る迄　[illegible]
○とした事が　言動が不似合と思ふ時などに附添へる詞。(見索引)
○抑是は　幽霊なり　謡曲「[illegible]」にある文
○[illegible]　[illegible]「[illegible]」に、[illegible]
○一位の尼　平清盛の室時子。位が二位で出家してゐられるのでかくいふ。安徳天皇の御祖母。
○九[illegible]　九位の[illegible]、[illegible]であつた。

く紐引締め「いざさせ給へ」と主従三人、打連れ立て濱邊に出、兼て用意の端舟に召し給へば、両人も飛乗り／＼、「サア／＼船頭仕れ」と、舫解けば女房、門送りして船場に下り「御武運目出度く／＼まし／＼て、御縁もあらば重ねて御目に懸るべしさらば」、「さらば」に艪を押立沖へ出船女房は、いきせき内へ入相時、「アヽ心せかれや」と、燧鳴して油さし神棚お上に火を照し、「娘たお安／＼」と呼出し「暮方に手習もおきやらいで、今夜は父様侍衆を、本船まで送つてこなれば其方も寝る迄爰に居や、ほんに主とした事が、千里萬里も行やうに身拵へ、もふ日も暮た、用意がよく／＼ば行かしやんせ」と、呼べどぐつ共答なし「若し晝の草臥で轉寝では有まいか、銀平殿／＼」と呼立つれば「抑是は桓武天皇九代の後胤、平の知盛幽霊なり、渡海屋銀平とは假の名、新中納言知盛と實名を顯す上は、畏有り」と娘の手を取、上座に移し奉り、「昔は正しく八十一代の帝、安徳天皇にて渡らせ給へど、源氏に世をせばめられ、所詮勝べき軍ならねば、玉體は二位の尼抱き奉り、知盛諸共海底に沈みしと欺き、某供奉して此年月、お乳の人を女房と云ひ、一ツ天の君を我子と呼び、時節を待し甲斐有て、九郎大

○典侍の局　安德天皇の御乳母帥典侍をいひ、平時忠の妻。帥は父の官名を襲うたもの。典侍は内侍司の女官で禁色を許され、天皇の御乳母なる人は諸大夫の女でも典侍に任ぜられた。
○骨柄　ほねぐみのやうす。容姿。
○な　感動の助詞。
○わきて　「鋭き」にかゝる副詞。別して。ここの文は、義經は別して鋭敏な男であるから、彼に感附かれぬやうに注意して、どうか失策なさるなの意。
○ばし　或語に添へて語勢を强める接尾語。（見集引）
○左右　通知。「倭訓栞」に「俗に消息(おとづれ)をさうといふは左右の義也」
○[illegible]
○八つ　午後二時。「平家物語」卷十一、先帝御入水の條に「主上今年は八歳にならせおはします」とある。

夫義經を今宵の中に討取り。年來の本望を遂せんは、ハア、悦ばしや嬉しやな、典侍の局も悦ばれよ」と、勇める、顏色威あつて猛く、平家の大將知盛とは其骨柄に顯れし、「扨は常々の御願ひ。今夜と思し立給ふな。わきて九郎は鋭き男。仕損じばしし給ふな」。「ヲヽそれにこそ術有北條が家來相模五郎といひしは、我手下の船頭共。討手と僞り狼藉させ。某義經に加擔人の體を見せ心をゆるさせ、今夜の難風を日和と僞り。船中にて討取る術なれ共知盛こそ生殘つて、義經を討つたんなりと、沙汰有ては末々君を御養育もならず、重ねて頼朝に仇を報はれず。さるによつて某人數を手配り、端舟にて跡より追付キ、義經と海上にて戰はば、西海にて亡びたる平家の惡靈、知盛が怨靈なりと雨風を幸ひに、彼等が眼を眩ません爲、我形も此如く、怪しく見する白絲縅、此白柄の長刀にて、九郎が首取立歸らん勝負の合圖は大物の沖に當つて、提燈松明一度に消へなば、知盛が討死と心得、君にも御覺悟させまし、御骸見苦しなき樣に」、「ヲヽ御氣遣はずと好き左右を、知らせてたべ」、「知盛早う」と勅「ここは有難し」と龍顏を、拜し申せばおとなしき、八つの太鼓も御年の、數を象る合圖の知らせ、「早お暇」と

「夕浪に、長刀執直し、巴浪の紋あたりを拂ひ、砂を蹴立て、疾風につれて、眼を眩まし飛ぶか如くに駈けり行、跡見送て典侍の局、御傍に差寄つて、「今知盛のおつしやつたを能うお聞なされたか、稚けれ共十善の君、此さもしき御姿にては軍神への恐れ有。御裝束」と立上り、まさかの時は諸共に。冥途の旅の死裝束と心に籠めし納戸口、涙隱して入にける、

第二の切（大物船矢倉の段）

夜も早次第に、更け渡り、雨風烈しく聞ゆれば、「今頃は知盛の難儀しやらん不便や」と、ねびさせ給へば只管に、案じ佗びたる御氣色、程なく局は山鳩色の御衣冠、美々しく臺に載せ、其身も共に衣服を改め、一間を出、「片時も早く御裝束」と御傍に立寄り、賤の上着を脱ぎかへて、下の衣上の衣、御衣冠に、至る迄召さし替ゆれば高貴に、始めの御姿引かへて神の御末の御粧ひ、いと尊くも見へ給ふ、「サア是からは知盛の吉左右を待計り」と、そよとの音も知らせかと胸

〇夕浪に[illegible]　眼を眩まし　[illegible]に「夕浪に浮べる長刀執り直し、巴浪の紋あたりを拂ひ、潮（うしほ）を蹴立て颶風を吹きかけ、眼も眩み心も亂れて」。

〇巴浪の紋　巴は浪を圖案化した紋なれば巴浪といふ。以て長刀をくる／＼と振廻す形にいうた。

〇はやて　（既出）

〇十善　殺生・偸盜・邪淫（以上身業）、妄語・綺語・[illegible]（以上口業）[illegible]十善を積んだ者は來世に[illegible]帝王に生れるといふ。よつて天皇のことを十善の君といふ。

〇軍神（いくさがみ）　（見索引）

〇納戸口　[illegible]の「涙」にいひつゞけた所謂頭韻法。

〇ねぶ　老成する。ひねびる。年齢よりもおとな[illegible]給へは物事に耕へ深くおはしまし」といふのである。

〇山鳩色　[illegible]りやすなさ」・綠草・灰等で染めるといふ。「山鳩色」[illegible]

〇吉左右　[illegible]

〇そよとの音　[illegible]いふ。

〇せんど　先途。行くさきの極みの義で、最も大切な場合といふ意にいふ。
〇駈武者　駈け武者。寄せ集めの武者。「平治物語」義朝敗北の條に「諸國のかり武者ども」。
〇提燈松明星の如く　以下[illegible]を見聞して首尾いかにと案じ煩ふ趣向は、近松作「[illegible]」の、二子乗入の[illegible]に[illegible]たものであらう。
[illegible]する。
〇[illegible]　[illegible]「大[illegible]」の趣向はこれに據る。

とゞろかす太鼓鉦、すはや軍眞最中と君のお傍に引添ふて、知らせを今やと待折柄、知盛の郎黨相模五郎、息つぎあへず馳付けば、「樣子は如何に、早う聞せよ聞せよ」と局も急きに急き立たり、「されば豫ての術の通り。暮過より味方の、小船を乘出し乘出し、義經が乘つたる本船間近く漕寄せしに。折しも烈しき武庫山颪に連れて降り來る雨雷、時こそ來れと水練得たる味方の勢、皆海中に飛込み飛込み、「西國にて亡びし平家の一門、義經に恨をなさんと聲々に呼ばはれば、敵に用意やしたりけん提燈松明ばら〳〵と味方の船に乘移り、爰を先途と戰へば味方の驅武者大半討たれ、事危うく見へ候、某は取ツて返し、主君知盛の御先途を見屆けん」と、申もあへず馳り行、「サア〳〵大事が起つて來た、さるにても知盛の御身の上氣遣はし、沖の樣子はいかならん」と一ト間の戸障子押明れば、提燈松明星の如く、天を焦せば漫漫たる海も一目に見へ渡り、數多の小船やりちがへ〳〵、艫櫓を小楯に取、敵も味方も入亂れ端船を、飛違ひ跳越へて、追ふつ捲くつ互ひ〳〵聲にて切結ぶ、人影迄もあり〳〵と戰ふ聲々風に連れ、手に取る、樣に聞ゆるにぞ、「あれ〳〵御覽ぜあの中に知盛のおはすらん」、「そよいづくに」

と伸上り、見給ふ内に提燈松明、次第次第に消え失せて沖も、ひつそと靜まれば、是こそは知盛の討死の合圖かと、餘り呆れて泣かれもせず途方に、暮れて立たる所に、入江の丹藏朱になつて立歸り、「義經主從手いたく働き、味方殘らず討死まつた主君知盛も、大勢に取まかれ既に危く見へけるが、かいくれに御行方知れず、必定海に飛込んで御最期と存ずれば、冥途の御供仕らん」と言ひもあへず諸肌くつろげ、持ッたる刀腹に突立汐の深みへ飛込めば、「ヤア扨は知盛も敢なく討たれ給ひしか」、はつと計りにどうど伏し前後も知らず泣ければ、君を見る事聞事の、悲しさ怖さ取ませて共に、涙にくれ給ふ、局は歎の内よりも君を膝に抱き上、御顔つく〲と打守り、「二タ歳餘りは此見苦しき荒屋を、玉の臺と思召しての御住居、朝夕の供御迄も、下々と同じやうにさもしい物。それさへ君の心では、殿上にての榮華共思ふてお暮しなされしに、知盛お果てなされては賤が伏屋に御身一つ、置奉る事さへもならぬ樣に成果てて、終には此浦の土と成り給ふかや、上もなき御身の上に悲しい事の數々が、續けば續く物かいの」と、口說立〲身も浮く、計なげきしが、「アヽよしなき悔みごと、御覺悟急がん」と、

○まつた　「また」「又」に「つ」の添加した促音便。

○かいくれ　掻き暮れて見えぬ義、下方打消に應じる副詞。全く。まるで。近松作「平家女護島」に「明くる音かいくれに行方なく、……ただ影も見ることなし」。

○伏屋　地に伏したやうな低い家。賤家。いぶせき家。

○よしなし　由無。無益な。つまらない。

○尋常　すぐれたこと。立派なこと。（見索引）
○此の日の本には　「平家物語」先帝御入水の條に「この國は粟散邊土と申して物憂き境にて候、あの波の上にこそ極樂淨土とてめでたき都の候、それへ具しまゐらせ候ぞ」。
○二位の尼　（既出）
○みゆき　行幸、御幸、行啓、いづれも「みゆき」と訓むが、行幸は天皇に申上げ、御幸は上皇・法皇に申上げ、行啓は皇后・皇太子に申上げる。
○お乳　お乳の人。お乳母。
○なんなん　なみなみ（波波）の轉であらう。水の滿ち滿ちてゐるさま。
○未來の誓　[illegible]て念佛を唱へること。「平家物語」先帝御入水の條に「ま[illegible]東に向はせ給ひ、伊勢大神宮に御暇申させ給ひ、その後西に向はせ給ひて、西方淨土の來迎に預らんと[illegible]

涙ながら御手を取。泣く〳〵濱邊に出けれど。いと尋常成御姿此海に沈めんかと。思へば目もくれ心もくれ身もわな〳〵とぞ顫ひける。君は賢しくましませど。死る事とは露知り給はず「コレのふ乳母。覺悟〳〵と言ふて、何處へ連れて行のじやや」。「ヲヽそふ思召すは理。コレようお聞遊ばせや。此日の本にはな、源氏の武士蔓りて恐しい國。此波の下にこそ、極樂淨土と云ふて結構な都がござります。其都には。祖母君二位の尼御を始め、平家の一門知盛もおはすれば、君も其處へ御幸有て、物憂き世界の苦しみを、免がれさせ給へや」と。宥め申せば打悄れ給ひ、「あの恐しい波の下へ、只一人行のかや」。「ア、物體ない、このお乳が美しう育て上たる玉體を、あのなんなんたる千尋の底へ遣りまして、何と身も世もあられうぞ、此お乳もお供する、いとし可愛の養君。何とお一人遣られうぞ」、「それなら嬉しい、其方さへ行きやるなら、何處へ成共行わいの」、「ヲヽよふ言ふて給はつた」と、引寄せ引寄せ抱き締め、「火に入水に溺るゝも前の世の約束なれば、未來の誓ましく〳〵て、天照大神へ御暇乞」と、東に向はせ參らすれば美しき御手を合せ、伏拜み給ふ御有樣、見奉れば氣も消へ消へ、

〇平家　平家琵琶の曲節で語る。
〇今ぞ…都ありとは　この歌、「[illegible]」[illegible]二位禪尼入海の條に出づ。一首の意は、天照大神の御系統にましまし天皇に生れ給はれた御身[illegible]、現存とは知らなかつた[illegible]である。
〇御裳濯川　五十鈴川の別名。「[illegible]世紀」に[illegible]
〇門院様　[illegible]、高倉天皇の中宮、安德天皇の御母。
〇今は　臨終、最期。
〇口說く　くど〳〵しういふ。繰返していふ。
〇八大龍王　[illegible]
〇恒河　[illegible]ガンジス[illegible]この河の流域に起つたもので、[illegible]「恒河のうろくづ」とは「恒河[illegible]」
〇うろくづ　[illegible]「うろくづ」[illegible]「いろくづ」[illegible]「うろく[illegible]」[illegible]
〇大童　[illegible]する時、髮を亂いて[illegible]

「ヲヽようお暇乞なされたのふ、佛の御國は此方ぞ」と、指さす方に向はせ給ひ、「今ぞ知る、御裳濯川の流れには、波の底にも、都有とは」と詠じ給へば、「ヲヽお出かしなされた、ようお詠み遊ばした、其昔月花の御遊の折柄、斯様に歌を詠み給はゞ、父帝は申すに及ばず、祖父清盛公二位の尼君、取分けて母門院様。何程悦び給はんに、今はの際に是がまあ。言ふに甲斐なき御製や」とかき口說き〳〵涙の限り聲限り歎き口說くぞ道理なる、局は涙の隙よりも、御髮掻き上かき撫て「今は早。極樂への御門出を急がん」と、帝をしつかと抱き上げて、磯打波に裳を浸し、海の表を見渡し見渡し、「如何に八大龍王恒河の鱗。安德帝の御幸なるぞや。守護し給へ」と渦巻波に。飛入らんとする所に、何時の間にかは九郎義經。駈寄つて抱き留め給へば「のふ悲しや、見許して死なせてたべ」と、振返つて「ヤア此方は」。「聲立な」と帝を小脇に引ん抱へ、局の小鬢ぐつと捻上、無理無體に引立〳〵一間の内に入給ふかゝる所へ。知盛は大童に戰ひなし。鎧に立ッ矢は蓑毛の如く。鱗も朱に染めなして。我家の内に立歸れば、跡を慕ふて武藏坊表の方に立聞共。知らず知盛聲を上、「天皇は何處にまします。お

乳の人、典侍の局」と呼ばはり呼ばはりどうど伏し、「ヱヽ無念口惜しや。是はどの傷に弱りはせじ」と。よろぼひよろぼひ長刀杖に立上り、「お乳の人。我君」と。駈廻れば、一間を踏明ヶ九郎判官帝を左手の小脇に引ん抱き局を引付ヶ突立給へは、「あら珍しや如何に義經」、思ひぞ出る浦波に、知盛が沈みし其有樣に。又義經も微塵になさんと、長刀。執直し。「サアサア勝負」と詰寄れば義經。少しも騷ぎ給はず。「ヤア知盛さな急かれそ。義經が言ふ事有」と、帝を典侍の局に渡し、靜々と歩み出、「其方西海にて入水と僞り、帝を供奉し此所に忍び。一門の仇を報はんとは天晴天晴。我此家に逗留せしより、凡々ならぬ人相骨柄察する所平家の落人。辨慶に言ひ含め帝を探る計略。過つて踏越へしに、果して武藏が五體の痺れ、其上我に加擔人の體を見せ、心をゆるさせ討取ル術、我其事を量り知り、端舟の船頭を海へ切込み、浦海へ船を廻し疾くより是へ入込んで、始終委しく見屆け帝も我手に入たれ共、日の本をしろしめす萬乘の君、何ン條義經が擒にする謂れあらん、一旦の御艱難は平家に血を引給ふ故、今某が助け奉つたるとて不和なる兄頼朝も、我誤とはよも言ふまじ、必ず必ず帝の事に氣遣ひは

○あら珍しや…長刀執直し　謡曲「船辨慶」に「あら珍しや如何に義經、思ひもよらぬ浦波に、聲をしるべに出船の、知盛が沈みし其有樣に、又義經をも海に沈めんと、夕浪に浮べる長刀執直し」。

○義經少しも騷ぎ給はず　謡曲「船辨慶」に「義經少しも騷がず」。

○な…そ　禁止の意をあらはす助詞。勿れ。

○五體　總身。(見索引)

○萬乘の君　天皇をいふ。乘は兵車をいふ。天子は兵車萬を出すといふ意より天子をいふ。

○何條　「なにてふ」(何といふ)の詰つた語で、「何といふ」の意である。多く當字に何條と書けども、何條は「なんでう」で讀方が違つてゐる。

○そ　「な…そ」は禁止（勿れ）の意をなすは勿論、「そ」ばかりでも禁止の意をなす例は中古文にも往々ある。ここも「な」の意。
○段々の情　かずかずの情愛。
○恩に著る　恩をありがたく受ける。「恩に著るべきいはれなし」とは、人臣の道を知る者の言として誠に當然である。
○亡魂　平家一門の亡靈。
○辨慶押隔て　押揉んで　謠曲「船辨慶」に出てゐる文である。
○打物　刀劍などの武器をいふ。（見索引）。ここの文は、武器を持つて渡り合うたのでは、どうにもならぬとの意。
○船手　船の通路。
○惡念發起　惡心をひるがへして、悟を開くべく佛道信仰の心を發し起すこと。
○いらたか　いらたか珠數をいふ。修驗道にて、最多角數珠或は伊良太加念珠と書いて、算盤珠のやうに角立つた扁平な珠より成る珠數をいふ。「いらたか」は、「翻譯名義集」に、珠數を阿唎哆迦「ありたか」と云ふ、と見え、「世諺常言談」に「いらたか」は「あらたか」の轉で「あらたか」は念數の梵名であると見えてゐる。
○四姓　源氏・平氏・藤原氏・橘氏
○分ち　區別す

れぞ知盛」と、聞嬉しさは典侍の局、「ヲヽあの詞に違ひなく〳〵先程より義經殿。段々の情にて天皇の御身の上は、知邊の方へ渡さふと武士の堅い誓言、悦んでたべ知盛卿」と聞に凝つたる氣も逆立局を取て突退け、「ヱヽ無念口惜しや。我一門の仇を報はんと、心魂を碎きしに、今夜暫時に術顯れ。身の上迄知られしは天命天命、又義經帝を助け奉るは、天恩を思ふ故是もつて知盛が、恩に著るべきいはれなし、サア只今こそ汝を一太刀。亡魂へ手向けん」と、痛手によろめく足踏締め、長刀押取立向ふ、辨慶押隔て、「打物わざにて叶ふまじ」と、珠數さらさらと押揉んで「如何に知盛、斯くあらんと期したる故、我も今朝より船手に廻り、計略の裏をかいたれば、最早惡念發起せよ」と、持たるいらたか知盛の、首にひらりと投げかくれば、「ムヽ扨は此珠數かけたのは、知盛に出家とな、ヱヽ汚らはし〳〵、抑四姓始つて、討つては討たれ、討たれて討つは源平の習ひ。生き變り死に變り、恨をなさで置くべきか」と、思ひ込んだる無念の顔色。眼血走り髮逆立、此世から惡靈の相を顯はす計也。斯くと聞より龜井、駿河主君の身の上氣遣しと、追々駈付ヶ取廻せば、御幼稚なれ共天皇は始終の分ちを聞召し、知

○朕を　「朕に」とあるべきところ。
○麿　自稱の代名詞。われ。「倭訓栞」に「まろ＝自稱にもいへり、天子より諸臣に至り、或は女子もいひ、同じく稱する事、物語類に多し」。
○あだし心　徒心。實なく變り易い心。「あだし」の「し」は意を强める助詞。
○いみじかく　「いみじく」の延語。すぐれて。
○餓鬼道　（有財（うざい）餓鬼は膿血や人の遺落を食へども、無財餓鬼は食ふ物がない。（見索引）
○阿鼻　梵語アブキーチ、Avici. 無間と譯す。晝夜間斷なく苦痛を受ける無間地獄をいふ。
○修羅道　猜忌・戰爭の心盛んで常に闘戰を事とする世界をいひ六道の一。（見索引）
○六道　地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道をいふ。「六道輪廻」といひ、生死六道に輪廻して共の苦を受けるをいふ。
○外戚の望　天皇の外戚の望み。外戚とは母方の親類をいふ。

盛に向はせ給ひ、「朕を供奉し、永々の介抱は其方が情。今日又麿を助けしは、義經が情なれば、徒に思ふな知盛」と、物體なくも御涙を浮め給へば典侍の局共に涙にくれながら、「ヲ、能うおつしやつた、何時迄も義經の志必ず忘れ給ふなや、源氏は平家の仇敵と、後々迄も此お乳が。帝樣にあだし心も付かふかと人々に疑はれん。さあれば生てお爲にならぬ、君の御事くれ／＼も、賴置くは義經殿」と、用意の懐劍咽に突立、名殘惜げに御顏を、打守り／＼、「さらば」と計を此世の暇。敢なく息は絶にける、思ひ設けぬ局の最期。君は猶更知盛も、重なる憂目に勇氣も碎け暫し詞もなかりしが、天皇の御座近く涙をはらはらと流し、「果報はいみじかく一天の主と生れ給へ共、西海の波に漂ひ海に、臨めば共汐にて、水に渇せしは是餓鬼道。ある時は風波に遭ひ、お召の船を、荒磯に吹上られ、今も命を失はんかと、多くの官女が泣き叫ぶは、阿鼻叫喚。陸に源平戰ふは、取も直さず修羅道の苦み。又は源氏の陣所陣所に數多駒の嘶くは畜生道、今賤しき御身となり人間の憂き艱難、目前に六道の苦みを受け給ふ、是と云ふも父清盛、外戚の望有によつて、姫宮を御男宮と云ひふらし、權威を以て御位に卽

○判官（既出）

○龍顏　天皇の御顏（既出）

⦿三途　謡曲「藤戸」に「思へば三途の瀬踏なり」。

○名は引く汐に、なりにける　謡曲「碇潜」に「又引く汐にゆられ流れ、また引く汐にゆられ流れ、跡白波とぞなりにける」。

け、天道を欺き、天照大神に僞り申せし其悪逆、積り積りて一門我子の身に報ふたか、是非もなや。我斯く深手を負ふたれば、存へ果てぬ此知盛、只今此海に沈んで末代に名を殘さん、大物の沖にて判官に、仇をなせしは知盛が怨靈也と傳へよや。サア／＼息有ル其中チに、片時も早く帝の供奉を、賴む賴む」とよろぼひ立ツば、「ヲヽ我は是より九州の尾形方へ赴く也、帝の御身は義經が何處迄も供奉せん」と、御手を取て出給へば龜井。駿河。武藏坊、御跡に引つ添ふたり。知盛莞爾と、打笑みて、「昨日の仇は今日の味方。あら心安や嬉しやな、是ぞ此世の暇乞」と振返つて龍顔を、見奉るも目に淚、今はの名殘に天皇も、見返り給ふ別れの門出。留まる此方は冥途の出船。三途の海の瀬踏せんと碇を取て頭に被き、「さらば／＼」も聲計。渦卷く波に飛入て敢なく消へたる忠臣義心其亡骸は大物の、千尋の底に朽果てし、名は引汐にゆられ流レて　ゆられ流レて跡白波とぞ成リにける、

第三（ロ、椎の木。中、小金吾の忠死。切、鮨屋）

登場人物の主な者

主馬の小金吾武里（平重盛の遺臣。二十歳足らずの青年）　若葉内侍（平維盛の室。六代御前の母）
六代御前（維盛の子）　小せん（下市の茶屋権太の妻）　善太郎（小せんの子）
いがみの権太（鮨屋彌左衛門の子）　猪熊大之進（藤原朝方の臣）　彌左衛門（釣瓶鮨屋老主人）
彌助（釣瓶鮨屋下男。實は平維盛）　お里（彌左衛門の娘）　彌左衛門の妻
梶原平藏景時（頼朝の部將）

梗概

「椎の木」　主馬の小金吾武里は若葉内侍母子の御供して、維盛卿の隱れ居ると聞いた紀州高野山へと志し、大和街道下市に來て路傍の茶店に憩ひ、六代の痼疾を鎭める藥を所望する。小せんは「その藥を買つて來てあげます」とて、善太郎を連れて出て行つた間に、小金吾は六代等と共に椎・榧・栃の實を拾うて六代を慰めてゐる。折節歪の権太が歸つて之を見、大樹の枝に小石を投げ木の實を落して六代を喜ばせ、己が皮籠と小金吾の藤行李とを取替へて去る。やがて後戻りして來り「荷物を誤り取違へた」と詫び皮籠の中を改めて「人から預つて入置いた祠堂金二十兩が紛失した」と騙つて之を奪ふ。小金吾は無念を怺へ、内侍母子の御供して上市の宿へと急ぐ。

「小金吾の忠死」　歪の権太の騙るを蔭に隱れて見てゐた小せんは、権太の出で行くを遮つて夫の悪心を諫むれば、権太は昔の己が悪事までも豪語し、なほも母をゆすりに行かうとするを妻子は泣き縋つて之を取止めた。

小金吾の一行三人が上市村に差しかかつた時、豫て若葉内侍に横戀慕してゐる藤原朝方の追手に襲はれ、小金吾は奮戦して數

多の敵を殺し、敵將若黨大之進と格闘して之を殺した後深手の爲に仆れた。内侍母子は小金吾を撫でつゝ、悲歎の涙にくれて共に死なうとするを、小金吾は蟲の息の下から高野の道を教へて、「早く此所を去り遊ばせ」と語り、盡きぬ名殘を惜しみながら絶命する。

折から闇を辿り來る提燈の火影は、鮨屋彌左衛門等の村の五人組、互に「この村に入込んだ若葉内侍の一行を捕へて褒美に與からう」と、話しながら行く。その途中で彌左衛門は小金吾の死骸に行當り、「旅人さうながどうした變死か」と無常を感じ、口の内に念佛を唱へながら行き過ぎたが、何を思うたか一行と分れ、後戻りして人目なきを見定め、落ちてゐる刀を拾ひ提燈を吹消し、死人の首を刎ねて之を携へ、飛ぶが如く我が家をさして急ぐ。



義經千本櫻　いがみの權太（六世尾上菊五郎）
すしや彌左衛門（大谷友右衛門）　三位中將維盛（七世坂東三津五郎）

「鮨屋」彌左衛門は熊野浦から連れ歸つた平維盛を彌助と呼んで使ひ、お里はそれが維盛とは知らないで戀慕してゐる。或る夜、歪みの權太が來て、母親を騙して錢三貫目を取つて去らうとする所へ、彌左衛門が戻つたので、驚いて錢を鮨桶の中に隱す。彌左衛門は持ち歸つた小金吾の首を維盛の代りに立てようとして、これも鮨桶の中に隱し、彌助に「私は重盛公の恩顧を蒙つた者である」と身の上を語り、「梶原景時の詮索が急であるから、早く此處を去り給へ」と勸める。

折節若葉内侍は六代を連れて諸方をさまよひ、宿を借らうとして來り、計らずも維盛と邂逅し、相共に逃げ去つた。

その後に景時が維盛を捕へに來る。權太は小金吾の首を容れた鮨桶を、錢を入置いた鮨桶と取違へて持去り、景時が彌左衛門

と押問答してゐる所へ後戻りして、「維盛の首とその妻子である」と僞つて三つの首を差出したので、景時から褒美に頼朝の羽織を貰つた。彌左衛門は權太の仕打を深く惡んで之を刺すと、既に改心してゐた權太は己が心の中を懺悔し、「景時に渡したものはその實小金吾の首と己が妻子とであつて、維盛親子三人は落し申した」と、語つて合圖の笛を吹けば、維盛親子三人が立現はれる。維盛は景時が置いて去つた羽織を改めると、珠數・輪袈裟と維盛の命を助ける意を諷した歌の句が出たので、頼朝の情け心に感じ、權太が苦しむ斷末魔の哀れの中に、煩惱の絆を髻と共に斷つて高野に發足し、若葉内侍もお里も尼となつて六代を連れ、高尾の神護寺をさして別れる。

評

この段、各人の異つた性行によつて起る同情・惡業・忠義・恩愛・戀慕・悲哀・無常・懺悔・釋教などの錯綜した場面が、それ等にふさはしい背景の中に、麗しい筆にあやつられて、走馬燈のやうに變つて行く興味は、人の胸を打つであらう。但し景時が頼朝の意を體して維盛を助けようと思うてゐたので、權太が改心して苦節を立てたのを徒死に終らせたあたりの曲折は、餘り技巧に過ぎた弊を苦笑せずには居られない。

第三の口（椎の木の段）

三吉野は丹後・武藏に大和路やわけて、名高き金峯山、藏王彌勒の御寶物、御開帳とて野も山も賑ふ、道の傍に、茶店構へて、出花汲む青前垂の入花は、女房

●丹後・武藏　丹後にも武藏にも吉野といふ所あれば、大和の吉野と併せて、「三吉野」の「三」にきかせ。

○金峯山　大和國吉野郡にある高峰で、古來修驗道の靈場[illegible]高い。藏王堂は金峯山下にある。「[illegible]」[illegible]、大和[illegible]の[illegible]に「[illegible]藏王[illegible]」とある。（[illegible]五十六億七千萬[illegible]にして[illegible]に出現、[illegible]人天を化益し給ふといふ）。

盛りの器量好し、五つか六つの男の子、傍に附添ひ「母樣」と、いふ出花香も冷めにけれ、枯れ殘る、身はいとど猶、枝折りや、若葉の內侍・若君は、主馬の小金吾武里が、嵯峨を遁れて維盛の、若しや高野と心ざし、旅の用意の小風呂敷、背に忍海吉野なる下市、村に着きけるが、若君六代痢疾に惱み給へば幸の茶店、「暫く床几へお休み」と、內侍を誘ひ其身も背負ひし包をおろし、「お茶」と指圖に「あい／＼」と、愛想こぼれて差出す、內侍はつく／＼見給ひ、「コリヤ此方も子持ちよの、自も連合の忘れ形見を伴ひしに、道より惱みて貯へし、藥を殘らず飲みきらし俄の難儀、子持つた者は相見互、嗜みあらば所望したし」と仰に女房、「それはまあ嚴ゐ御難儀、私が子は生まれてより腹痛一つ起しませねば、何の用意もござりませぬ、ハテそれは氣の毒や、イヤ申しほんにそれ／＼、幸此村の寺の門前に、洞川の陀羅助を、請賣る人がござりますれば、お供の前髪樣、つゐ一走り」、「イヤ／＼身共は當所不案內、大儀ながら其方調へてくれまいか」、「ヲヽそれもお安い事、私が調へて來て上ませう、善太留守仕や、但は行か」、「おれも」と慕ふ子を連れて、器量好ければ心迄尊い寺の門前へ藥を買いに

○出花　（見索引）

○入花　茶器の中に湯を注いだばかりの花やかな煎茶。「出花」といひ「清」といひ、「入花」といひ、茶の縁語を用ひて女の色香にいひかく。

○冷む　子持ちであれば世話女房で、色香も冷むるをいひかく。

○枝折りや　女の操を手折りたくなる意をいひかく。「枯殘る」といふも夫を失へる意をいひかく。「枯殘る」「枝折り」「若葉」、いづれも縁語。

○主馬　[illegible]主馬署の首をいふ。かの者は主馬判官盛國の子である。

○忍海　大和國南葛城郡忍海村の村邑。忍海に負をいひかく。今は「おしみ」といふ。

○下市村　大和國吉野郡下市町。釣瓶鮨はこの地の名物。[illegible]維盛卿が世を忍んだ所と傳ふ。

○痢疾　[illegible]といひ、[illegible]をなす病氣。

○お茶　小金吾の詞。お茶を下され。

○嗜み　不時の用意に調へてゐること。

○洞川　大和國吉野郡天川村の村邑。下市の附近。

○陀羅助　[illegible]苦い。この藥はもと僧侶が陀羅尼を誦する時、睡氣をさますために口に含んだによつてこの名がある。

○前髪　[illegible]別に束ねたもの。小金吾をさす。

急ぎ行、「ハテ心好い女中や」と内侍は見やり、「コレ六代爰に大分木の實が有が、拾ふて遊ぶ氣はないか、金吾が拾ふが大事ないか」と、諫めの詞に引立られ、「おれも拾を」と若君の病もわやく半分の、起立給へば内侍も共々。「サアサア拾を」、「イヤ拙者が」と小金吾が、二十歳に近い大前髮大人氣無いも若君の、機嫌取かや栃の實を、拾い集むる折からに、若き男の草臥足。是も、旅立風呂敷包み、背負ふてふら／＼茶店を見付ヶ、「どりや休んで一服」と包をどつかり床几におろし、「御免なりませ火を一つ」と煙草吸ひ付ヶ、「コリヤ皆樣方は開帳參りでござりますか、和子樣は道草か。わし等が在所の子供と違ひ、御綺麗な生れ付や」と、褒めても咄仕掛けても、心置く身はそこ／＼に、詞數なく拾ひ居る。暫く休んで彼の男、「コレ／＼其落ちた木の實は蟲入で、見かけがようても皆空虚、木に有をお取なされ」と、言ふに金吾は、「こな男何をいふ、二丈餘りの高木、駈け上る蹴爪は持たぬ」、「サそれを心安う取やうがござります」、「こりやとふして」、「さらば鍛錬お目に懸けふ」と、小石拾ふて打つ礫枝に當つてはら／＼、若君悦び惱みも忘れ、「小金吾拾へ」、[illegible]の御機嫌に内侍も嬉しく、「ヲ、よい事して

○女中　婦人。(既出)
○諫め　慰めること。(見索引)
○わやく　「わうわく」(枉惑又は誑惑)の約訛。いたづら。むちやく。近松作「相模入道千疋犬」に「男犬はがんまくなわやくもの」。
○榧　一位科に屬する常綠喬木、山野に自生し又は觀賞用として庭園に栽ゑる。果實は秋熟し、楕圓形で長さ一寸弱、肉に兩端尖れる核を藏し食用となる。
○栃　七葉樹科の落葉喬木、果實は蒴果で果肉は黄白色を呈し食用となる。
○和子　貴人の子を親しんでいふ。坊樣「ぼつちやま」。「和」は和殿、和御前、和御料などの和と同じ意で、「わが」の義で、鎌倉時代の文書に多い。すべて親しい意の時には「わ」を用ひ、輕蔑の意には「な」を用ひる。
○道草　馬などが路傍の草を食ひなどして進みの遲いことの義より轉じて、人の道を行きながら隙を費すこと。
○こな　「この」の轉。「このやつ」(此奴)を「こなやつ」といふの類。

○過分（見栄引）
○冥加に餘る　冥加は貴い身分の者や内付の[illegible]であるから、冥加の身に餘つ[illegible]い。
○手の内　てなみ。伎倆。
○張皮籠　革又は紙で張り包んだ籠、つづら。
○藤行李　藤葛を編んで作つた行李。
○あたふた　慌[illegible]る[illegible]
○手摩り體貌　手摺する姿。拜む姿。
○おりない　[illegible]
「傳[illegible]」に[illegible]
○臺座の別れ　[illegible]
[illegible]花[illegible]、「[illegible]後光仕舞うてくれう」の註を見よ。
○げに　いかにも。「實」の字を當る。

貫そつた、「過分過分」と一禮も、冥加に餘ると知らざりし、旅の男は自慢顔「何と手の内御覽じたか、まそつと打て進ぜたいが、遠道か丶へお伽申ても居られず、我等は參る」と包を背負ひ、「御縁あらは重ねて」と、言ふて其場を行過ぐる、小倉吾木の實を拾い仕舞ひ、「サア是て堪忍なされ、扨々今の男は氣轉者」、と見やる床几の風呂敷包「同じ色でもどこやらが違ふた樣な」と走り寄、内改たむれば一覺へなき然も是は張皮籠、此方は衣類の藤行李、扨は木の實に氣を奪はせ、取換失せたか但は麁相か、何にもせよ追かけて取返さん」と駈出す所へ、向ふよりあたふた戻る以前の男、「麁相致した御免御免」と言ひつ丶包差出、「日暮も近し心は急く同じ色の風呂敷故。重い輕いに氣も付かず取違へた麁相、道にてふつと心付取てかへしてお詫言、眞平御免下され」と、顔に似合はぬ手すり體貌、小倉吾は胸落着、「麁相とあれば言分もおりないが、萬一紛失の物有と赦さぬか合點か」、「何が扨相違あらば臺座の別れ、御存分になされませ」、「ムウ其一言なら疑ふに及ばね共、中改めて請取ん」と包を開き、改め見れば相違もなし、「實麁相に極つた、申分なし其方の、荷物も持てお往きやれ」と、床几に殘る風

呂敷包、渡せば請取り不思議顔、「此中括の解けたは」、「イヤそれは最前替つた様には思へ共、若しやとちよつと見た計」と、言間に開く張皮籠、引散けて袷の袖、浴衣の間を探し見て、喫驚仰天行李打振ひ、「コリヤどふじやコリヤ無いは、無いは／＼」ときよろ／＼目玉、「何がない何見へぬ」と傍も氣の毒目を配れば、豫て工みの歪み男、腕まくりして「コレ前髪殿、此皮籠の中に人に頼れて高野へ上げる祠堂金、二十兩入置た、コリヤくすねたな／＼、サア出した／＼／＼、サア出しやいの」と、取ても付ヵぬ難題に、小金吾むつと反打かけ、「此奴下郎奴が武士に向つて何がなんと、今一言言つて見よ」と、氣相變れどびく／＼共せず、「盜人猛猛しいと、其高ゆすり食はぬ／＼、赤鰯をひねりかけ威嚇して此場を拔けるのかほろうまいそんな事春永になされ、僅か二十兩で首綱のかゝらぬ内、四の五の言はずに出した／＼」と、もがり歪みの強請者、「モウ堪忍が」と拔きかけしが、お二方の姿を見て、じつとこたへて胸撫でおろし、「コレサ若い人そりや其許の覺へ違ひ、見らるゝ通り足弱をお供したれば、假令何萬兩落散つて有ても、目を懸ける所存はなし、篤と其方を吟味めされ」と、言はせも果てず、「コレ其足弱

〇氣の毒　どうしたらよいかと己が心を痛めること。

〇祠堂金　祖先代代供養の爲に菩提寺に寄附する金。

〇くすねる　[illegible]「桂川連理柵」帯屋の段に「爲替の百兩は、兄貴が[illegible]くすねたに極「きはま」つた」。按ずるに「くすむ」「くろずむ」「くろめる」と縁ある語であらう。

〇反打かけ　「反打返す」（既出）を見よ。

〇盜人猛猛しい　人の物を盜みながら、如何にも正直さうに、却つて人にくつてかかるをいふ諺で、「毛吹草」にも見えてゐる。

〇高ゆすり　威壓的ねだり。威壓を加へておどすを「高おごしをくはす」といふ。

〇赤鰯　[illegible]「一見索引」[illegible]

〇ほろうまい　微甘い。ほんのりとうまい。

〇春永　[illegible]日の長い頃。「春永になされ」とは、そんなまだるい事は、春の日の長い頃に出直してござれとの意。

〇首綱　首に綱をかけられ縛られること。索引に「[illegible]」を見よ。

〇四の五の言ふ　とやかくと言ふ。かれこれと言うて障碍をつける意の諺。

〇もがり　「まがり」（曲）の轉。曲者の義。欺いて金錢をねだること。

〇堪忍が　[illegible]

連れたが盜する附ヶ目じや、よもやと思はせ爲て遣るが當世の流行物、何萬兩は入らぬたつた二十兩」、「スリヤどふしても身か盜んだとな」、「ハテ知れた事」、「ムウして其盜んだ證據は」、「コレ此皮籠の中紐何故解いた、※あり樣の荷物に紛失が有と赦さぬと言ふたでないか、理詰じや出しやいの〳〵」と、地迫詰められて小金吾も、「もふ是迄」と拔放す、內侍は周章抱きとめ、詞「尤じや道理じや、短氣な事を仕やつては、私も此子も共に難儀、無念にあらふ堪忍して、あの者の言ふ樣に料簡付ヶてやつてたも、地足弱連れたを災難と思ひ、胸を鎭めてたもいの」と、淚にくれて宣ふにぞ、血氣にはやる小金吾も見るに忍びず、詞※「世が世の時でござらふなら、寸斷寸斷に試しても飽き足らぬ奴なれ共、何を言ふても※茅花の穗にも怖ぢる身の上、御意の通りに致しましよ、ヘヱヽ口惜しうござりまする」と、此方は大事の二方を、お供の身なれば無念をこたへ奧齒嚙程附キ上り、詞「二十兩と云ふ金※暖まつておいて、其面何ンじや、ホウ怖いは〳〵、此※鰯で切ルか、此目で嚇すか、前髮を一筋づゝ拔くぞよ、但もふ金は※ふけらしたか、地連れの女郞から穿鑿」と、弱みへかゝるを首筋摑んで引キ戾し、用意の路金言ふ程出して睨み付ヶ、詞「大

○爲て遣る　騙、だましこを爲掛ける。だましてやる。

○あり樣　われ樣の轉訛。お前さま。「西鶴置土産」卷一「一說にありさまの智になる筈を、首尾せいでお仕合はせ」。

○世が世の時　今の世が我々の全盛の時。

○茅花の穗にも怖ぢる　茅花の穗の風にゆれるも、追手の我を招くかと怖れる。「すゝきの穗にも怖ぢる」ともいふ。「つばな」は「ちがや」（白茅）の異名。

○暖まる　懷が暖かに成る。儲ける。近松作「大經師昔暦」に「二里の間を一貫四百、七百づつあたたまつた」。

○鰯　赤鰯、赤錆刀をいふ。

○ふけらす　逃がすをいひ、轉じて隱匿する意にいふ。索引「ふける」を見よ。

切なお方をお供した故騙取る、二十兩、持て失せい」と打付ければ、騙の習金見ると目に佛なく手ばしかく、拾ひ集めて耳よみ揃へ、「テモ恐しい此金を那智若衆めにすつての事、ひじり取らりよと致した」と減らず口、「其顚を」と立寄金吾を内侍は押へ「事ない中チ」と若者引連れ、立出給へば、是非もなく跡に引添ひ小金吾も、無念をこたへ上市の宿有、方へと急ぎ行、(下略)

第三の切（鮓屋の段）

歌二上り 春は來ね共花咲かす、娘が漬けた鮨ならば、熟れがよかろ、と買ひに來る、風味も好しの、下市に賣弘めたる釣瓶鮨御鮨所の彌左衛門、留守の内にも商賣に拔目も内儀が早漬に、娘お里が片襷裾に、前垂ほや／＼と愛に愛持つ鮎の鮨、押へて締めて熟れさする、甘い盛りの振袖が、釣瓶鮨とは、物らしし、締木に栓を打込んで、桶片付けて「中は様、昨日父様の言はしやるには、明日の晩には内の彌助と祝言さす程に、世間晴れて女夫になれとおつしやつたが、日が暮れてもお

○日に佛なし　慈悲の涙なきをいふ。
○手ばしかく　手はしこく。手はやく。すばやく。
○耳よむ　金額を數へる。「耳」は索引を見よ。
○那智若衆　年寄若衆の意。以て大前髮の小金吾を揶揄していふ。近松作「源五兵衛おまん薩摩歌」に「高野六十那智八十、きんか頭の若衆にて」。
○すつての事　「すんでの事」ともいひ、「既(すで)の事」の音便。今少しの事で。
○ひじり　那智の語に應じて「聖(ひじり)」といひ、「ひずう」を言ひかけた洒落である。「ひずう」は[illegible]する[illegible]意。
○上市　大和國吉野郡上市町をいひ、下市の東にあり、吉野川の北岸にある。
○熟れ　鮨を[illegible]し、原料の味汁の程合に熟れる事。
○釣瓶鮨　[illegible]をいひ、下市の名物。「[illegible]れ[illegible]大和[illegible]野の花、釣瓶鮨の[illegible]」「三十[illegible]」[illegible]は下市に[illegible]似たり、[illegible]。
○ほやほや　笑ふさま。にこにこ。近松作「日[illegible]
[illegible]
人が釣瓶鮨を作つては、釣瓶鮨が物語ぶつたものに[illegible]

らしい」といふた例は他にもある。
○鮨木に栓を打込む　鮨に飯・肴などを入れ[illegible]、鮨木で之を壓搾し、鮨木[illegible]ゆるまぬやうに栓を打込んで置き、その熟(な)るのを待つ。「和漢三才圖會」卷九十一に「[illegible]法、[illegible]之、一夜拭二浄水一去、用二冷飯一藏二于桶一、如二糟漬法一、而春冬四五日、[illegible]日熟」云々。
○あの言やる事わいの　あの何を言ふのおやわい。
○熊野　紀州熊野權現社。
○隙入り　暇がはいり、ひまどり。
○取なり　なりふり。西鶴作「一代男」卷[illegible]に「[illegible]、あいかい、袖口[illegible]」
○色も香も知る　古今集（卷[illegible]）に、「君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」。
○厚鬢　頭の中央から額にかけて髮を剃り落し、兩鬢を廣く殘し、厚くふさふさと結つた男の髮。
・サハリ　[illegible]の曲節を[illegible]に編入[illegible]ることの意。
○天女の掟　辨財天[illegible]。辨財天の悲願を、ここにいふか[illegible]、それを見ことして守[illegible]ものである。[illegible]辨財天は俗に美女の佛像[illegible]て信仰[illegible]ある。
○孫(そん)　當時、讃岐[illegible]「[illegible]草」に「孫、そん、日其人の[illegible]」
○瓜の蔓　諺「[illegible]瓜の蔓に茄子はならぬ」といふ。「瓜の蔓にでは」云々は、親と違つて好いところ[illegible]
○言ひくろむ　[illegible]

歸りないは噓かいな」「ヲヽあの言やる事はいの、何之の噓であろぞ器量の好いを見込に、熊野參りから連れて戻つて、氣も心も知ると彌助と云ふ我名を讓り、主は彌左衞門と改めて内の事任せておかしやるは、其方と妻はす豫ての心、今日は俄に役所から、親父殿を呼びに來て思はぬ隙入。迎ひに遣ろにも人はなし」「サイナ折惡う彌助殿も方々から鮨の誂へ、仕込の桶が足るまいと明桶取に行かれました、もふ戻らるゝでござんしよ」と。噂半へ、明桶荷ひ戻る男の取なりも、憎からず、內へ入る間も待兼ねて、お里は嬉しく、「アレ彌助樣の戻らんした、待兼ねた遲かつた、もしや何處ぞへ寄つてかと、氣が廻つた案じた」と、女房顔して言ふて見る、流石鮨屋の娘とて、早い馴とぞ見へにける、母は莞爾笑ひを含み、「彌助殿氣にかけて下さんな、此吉野鄕は辨財天の敎によつて、夫を神共佛共、戴いて居よと有ル天女の掟、其代り悋氣も深い、又有やうは親の孫、瓜の蔓にではござらぬ」と言ひくろむれば。「是はまあ却つて迷惑。段々お世話の上、大切なお娘御迄下され。お禮の申樣もござりませぬ、さりながら兎角お前には。彌

○氣の毒　恐縮して心を傷めること。

○掟　天下の掟。

○乙聲　甲（かん）聲に對し乙な聲、音調の低い聲。

○きよときよと　うろたへておちつかぬさま。

○毛蟲　むつかしい親仁に喩ふ。「[illegible]百韻謳語に「毛蟲はむつかしき親仁の説とす」。

○わんぱく　「わつぱ」(童)の訛。兒童の思慮なき[illegible]

○汝が心から　[illegible]すことだとの意。

○聞きや　「聞けば」の[illegible]。

助殿〳〵と、殿附をなされてさりとては氣の毒。やつぱり彌助どふ爲い斯う爲いとお心安う。ナ申」、「イヤ〳〵それは許して下され」、「そりや又何故でござります」、「さればいの、彌助と云ふ名は是迄連合の呼名、殿附せずにどふ爲い斯う爲いとは、物體なうて言憎い、言馴れた通り殿附さして下され」と、實に夫をば大切に、思ふ掟を幸いに娘へ是を聞がしの、母の慈悲とぞ聞へける、お里彌助は明桶を板間へ並べて居る所へ、此家の惣領歪の權太門口より乙聲で、「母者人〳〵」と、言ひつゝ入ればお里は喫驚、「又兄樣が能うお出」と揉手する、「きよと〳〵しい其面なんじや、能う來たが喫驚か、わりや彌助と甘い事してゐるそふなが、コリヤ彌助も能う聞け。今追出されて居ても、竈の下の灰迄おれが物、今日は親父の毛蟲が、役所へ往たと聞たによつて、ちと母者人に言ふ事が有て來た、二人ながら奥へ失せう」と睨み廻されうぢ〳〵と「是に」と言ふて立ッ彌助、娘も跡に引添ふて一ト間へこそは入にけれ、跡に母親溜息つき、「コリヤ父留守を考へ無心に來たか性懲もない[illegible]者、其汝が心から嫁子が有ッても、足踏み一つさす事ならぬ、聞きや此村へ來て居るげなが、互に知らねば擦合ふても、嫁姑

の明盲目、眼潰れと人々に、言はれるが面目ない、ヘヱ、不孝者め」と目に角を、立ヶ變つたる機嫌にぐんにやり、直ではいかぬと歪の權、思案しかへて「申シ母者人、今晩參つたは無心ではござりませぬ、お暇乞に參りました」、「そりや何ンで」、「私は遠い所へ參ります程に、親父樣もお前にも、隨分お健で〳〵」と萎れかければ母は驚き、「遠い所とはそりや何處へ、どふした譯で何しに行く」と、根問ひは親の騙され小口、サアしてやつたと、目をしばたゝき、「親の物は子の物と、お前へこそ無心申せ、つゐに人の物箸片し、歪んだ事も致しませぬに、不孝の罰か、夜前私は大盜人に遭ひました」、「ヒヤア」、「其中に代官所へ上る年貢錢、三貫目と云ふ物盜み取られ、言譯もなく仕樣もなく、お處刑に遭はふよりはと覺悟極めて居りまする、情ない目に遭ひました」と、噛ます袖をば顔にあて、しやくり上ても出ぬ涙、鼻が邪魔して目の緣へ屆かぬ舌ぞうらめしき、甘い中にも分けて母親、實と思ひ倶に目をすり、「鬼神に横道なしと、死なふと覺悟はまだ出來した、災難に遭ふも親の罰能う思ひ知れよ」、「アイ〳〵」、「あ思ひ知つては居りますけれど、どうで死なねば成ッますまい」、「コリヤやい」、「あ

○目に角を立てる　怒って人を見る。
○權　權太を略していふ。
○遠い所　冥土を婉曲にいうた。
○根問　根本まで問ひただすこと。しつこく問ふこと。近松作「釋迦如來誕生會」に「さてもねごひする衆や」。
○親の物は子の物　この諺は「沙石集」にも出づ。
○かたし　對なる物の片方をいふ。片し、片方し（見索引）
○三貫目　[illegible]
○噛ます袖　この前文に「性[illegible]」といへる如く、[illegible]袖を口へ噛まして泣く所を、聲が出ぬので袖で顔を隠して嘘泣きをするのである。
○鬼神に横道なし　この[illegible]「徒然草」にも出て、鬼神はよこしまな事はなさらないとの意。

○しやうぶ分け　家督分け。領地わけ。「かた言」に「所分〔しよぶん〕」を、しやうぶわけ」といふとある。
○ほつとり　「ほつつり」「ふつつり」ともいふ。きつぱり。
○親も盗み…明けかぬる　子に甘い母親も、子に金を遣る爲に、夫(彌左衞門)が戸棚に入れてゐる金を盗むのであるが、心が咎めて甘い錠(たやすく明く錠)でも明けかねる。
○雁首　煙管「きせる」の頭をいふ、首の物は長く[illegible]い首に似てゐるのでこの名がある。
○地獄の種　[illegible]を[illegible]、奪うた三貫目を鮨桶に入れたのは、後に[illegible]、地獄行きの種となるによつてかくいうた。
○くろむ　(既出)
○わろ　「わらは」(童)の約訛。わつぱ。人。ここでは母親をさす。
○疵持つ足の裏　[illegible]よつてゐるので、さういふ場合には[illegible]の首を、[illegible]の首だというて騙さうと思ひ、その首を持つてゐるのでかくいふ。
○南無三　南無三寶の略。(既出)
○内入悪く　不機嫌で内に入り。
○出來ぬ　[illegible]

い〳〵」。「常の汝が性根故是も騙か知らね共。※しやうぶ分けにと思ふた銀。親父殿に隠して遣ろ、是で※ほつとり根性直せ」と、そろ〳〵戸棚へ子の陰で、※親も盗みをする母の甘い錠さへ明兼ぬる、「つい※雁首でこち〳〵がよござりまする」と仕馴れたる己が手業を教ゆる不孝。親は我が子が可愛さに※地獄の種の三貫目、跡を※くろめて持ッて出。「何ンぞに包んで遣りたいが」と。限ない程甘い親、「甘い※わろじや」と歪の權「鮨の明桶よい入レ物。是へ〳〵」と親子して銀を漬けたる黄金鮨。蓋閉め栓しめ「サアよいは。是で目立ぬ提げて去ね」と親子が工合の最中へ。苦い父親彌左衞門是も※疵持ッ足の裏、あたふたとして門口を、「戻つた明けい」と打叩く。「※南無三親父」と内には轉倒狼狽廻り「其桶を、爰へ〳〵」と明桶と共に並べて親子はひそ〳〵。奥と口とへ引別れ、息を詰めてぞ入にける「何故明ぬ〳〵」と、頻に叩けば奥より彌助。走り出て戸を明ける。※内入悪く邊を見廻し。「コリヤ又何奴も寝て居るか。言ひ付けた鮨共は、仕込んで有か」と鮨桶を提げたり明けたりぐはつた〳〵。「コリヤ思ふ程仕事が※出來ぬ、女房共やお里めは何して居るぞ」、「イヤ只今奥へ呼びましよ」と行彌助をば引止め、内外見廻し表を

○小松（既出）
○内府　内大臣。
○宮仕　貴人に仕へること。奉公。（見索引）
○烏を驚　[illegible]る　[illegible]を[illegible]側すること。この說は近松作「國性爺合戰」にも出づ。
○隱居　ここは、世を讓つた時に引籠らうとする爲に設けた家。隱宅。
○おこと　御事。親しんでいふ對稱代名詞。そなた。
○育王山　「平家物語」には「いくわうざん」と訓んである。支那五山の一。（見索引）
○祠堂金　[illegible]
○音戸の瀬戸　[illegible]
[illegible]ものをいふ。

聞め、上座へ直し、手をつかへ、「君の親御、小松の内府重盛公の御恩を受けたる某、何卒御子維盛卿の御行方をと、思ふ折柄熊野浦にて出合、御月代を勸め此家へお供申たれども、人目を憚り下部の奉公、餘りと申せば物體なさ、女房計りに仔細を語り今宵祝言と申スも、心は娘を御宮仕へ、彌助彌助と、賤しき我名をお讓り申シたも、彌助くると云ふ文字の緣起、人は知らじと存ぜしに、今日鎌倉より、梶原平藏景時來つて、維盛卿を隱まへ有と退引させぬ詮議、烏を驚と言ひ拔けては歸れ共、邪智深い梶原、若しや吟味に參ろも知れず、心工は致して置け共油斷は怪我の基、明日からでも我隱居上市村へお越しあれ」と、申上ぐれば維盛卿、「父重盛の厚恩を受けたる者は幾萬人、數限なき其中に、おことが樣な者あらふか、昔は如何なる者なるぞ」と、尋給へば、「私めは平家の御代盛りの折柄、唐土育王山へ、祠堂金お渡しなさるる時音戸の瀬戸にて三千兩の金盜取られ役目の難儀切腹にも及ばん所有難いは重盛樣、日本の金唐土へ渡す我こそは、日の本の盜賊と御身の上を悔み給ひ、重ねて何ンの祟もなく御暇を下され親里へ立歸つて由緒有鮨商賣今日を安樂に暮せ共、悴權太郎めが盜み騙り殺生の報ぞ

◉表具　浄瑠璃節の一派なる表具屋節をいひ、節付上品な風だといふ。「榮華の昔云々」を表具屋節で語るのである。

○月の桂　支那の傳説に、月の中に高さ百丈の桂樹があるといふ。よつて以て桂男の意にいうた。美男[illegible]最に月卿の殿であるから、この語[illegible]。

○殿設け　[illegible]

○遠いが花の香が無うて　[illegible]に「見ぬが佛、聞かぬが花」といふ。遠くに居れば聞かぬが花で、新夫婦が花ある香も、他に知る人がなくての意。

○餅搗き　房事に喩ふ。「あも」は甘「あま」の義、[illegible]に「今宵は[illegible]で、しつぽりと、お二人のおもつき」。

○と　「誰にも知れぬこの下心か」を略した。これは父の詞に對してしつぺい返しの常談である。

○天井拔ける　有頂天となるをいふ。唄に「我[illegible]」。

○[illegible]「[illegible]」に

○辛氣　待ちどほしく、じれつたくなること。

○二世の縁　夫婦の縁をいふ。

○貞女兩夫に見えず　「史記」田單傳に「忠臣[illegible]」。

と思ひ知つたる身の懺悔。お恥しうござります」と。語るに付ヶて維盛も、榮華の昔父の事思ひ出され御膝に。落る涙ぞいたはしき。娘お里は今宵待ッ月の桂の殿設け。寢道具抱へ立出れは、主ははつと泣目を隱し。「コリヤ彌助。今言ひ聞した通り。上市村へ行事を。必ず／＼忘れまいぞ。今宵はお里と爰にゆるり。嬉と俺とは離座敷遠いが花の。香がなうて。氣樂に有ふ」と打笑ひ。奥へ行のも娘は嬉しく。「テモ粋な父樣離座敷は隣知らず。餅搗きせうとヲ可笑、こちらは爰に天井拔け。寢て鼻やろ」と蒲團敷く／＼。維盛卿はつく／＼と身の上又は都の空、若葉の内侍や若君の事のみ思ひ出されて、心も濟まず氣を浮かす。打萎れ給ひしを、思はせ振りとお里は立寄り、「コレナこれなア、ヲ辛氣、何初心な案じてぞ、二世も三世も固めの枕、二つ並べた此方や寢よ」と、先へころりと轉寢は、戀の罠とぞ見へにけり、維盛枕に寄添ひ給ひ、「是迄こそ假の情夫婦となれば二世の縁、結ぶにつらき一つの言譯、何を隱さふ某は、國に殘せし妻子有、貞女兩夫に見へずの掟は夫も同じ事、二世の固めは許してくれ」と、流石小松の嫡子とて解けた樣でもどこやらに親御の氣風殘りける、神ならず佛ならねばそれぞ共、知らぬ

道をば行迷ふ、若葉の内侍は若君を宿有ル方に預け置キ、手負の事も頼まんと思ひ寄る身も縁の端。此家を見かけ戸を打叩き、「一夜の宿」と乞ひ給へば、維盛は好い退き機會と表の方、叩く扉に聲を寄せ、「此内は鮨商賣、宿屋ではござらぬ」と愛想の無いが愛想と成る、「イヤこれ申シ、稚を連れた旅の女、是非に一夜」と宣ふにぞ、斷り言ふて歸さんと、戸を押開き月影に、見れば内侍と六代君、はつと戸を鎖し内の樣子、娘の手前もいぶかしくそろそろ立寄り見給へは、早くも結ぶ夢の櫻、表に内侍は不思議の思ひ、「今のはどふやら我夫に似たと思へど形容、頭も青き下男」よもやと思ひ給ふ内、戸を押開いて維盛卿、「若葉の内侍か、六代か」と、宣ふ聲に「ヒヤア扨は我夫」、「父樣か」、「ノウなつかしや」と取縋り、詞はなくて三人は、泣より外の事ぞなき、「まづまづ内へ」と密に伴ひ、「今宵は取分け都の事、思ひ暮して居たりしが、親子共に息災で不思議の對面さりながら、某此家に居る事を誰が知らせしぞ、殊に又、遙々の旅の空供連れぬも心得ず」と、尋ね給へば若葉の君、「都でお別れ申してより須磨や屋嶋の軍を案じ、一門殘らず討死と、聞悲しさも嵯峨の奥、泣いて計り暮せしに、高野とやらんにおは

○とぼそ　樞ないひ、樞じて扉をいふ。「源氏物語」若紫の卷「奥山の松のとぼそをまれにあけて」。「平家物語」灌頂卷、小原御幸の條に「とぼそ落ちては月常住の燈を挑ぐ」。

○娘の手前　見給へば　娘の手前のおもはくに對しても我が面目もどうであらうかと覺束なく、そうした事もことを見合へば。

○結ぶ夢の櫻　夢見て居る。甲の櫻を以て甲の美人である事の意にいふ。

○絶入り　泣入つて息切れのするをいふ。

○緩かしき　くつろいである。

すると云ふ者の有故に、小金吾召連れお行方を心ざす道追手に出合、可愛や金吾は深傷の別れ。頼も力もない中に、廻り逢ふたは嬉しいが、三位中將維盛樣が、此お姿は何事ぞ、袖の無い此羽織に。此お頭は」と取付て咽び、絶入給ふにぞ、面目なさに維盛も。額に手を當て袖を當て伏し、沈みてぞおはします。涙の内にも若葉の君臥したる娘に目を付給ひ、「若い女中の寐入端、殊に枕も二つ有、定めてお伽の人ならん。斯く緩かしきお暮なら都の事も思召し、風の便も有べきに、打捨て給ふは胴慾」と恨み給へば、「ホヲ、それも心に懸りしかど、文の落散る恐れ有。分けて此家の彌左衞門、父重盛への恩報じと、我を助けて是迄に、重々厚き夫婦が情、何がな一禮返禮と、思ふ折柄娘の戀路、無情言はゞ過ちあらん、却つて恩が仇なりと假の契は結べ共、女は嫉妬に大事も漏すと。彌左衞門にも口止めして我身の上も明さず、徒な枕も親共へ義理に是迄契りし」と、語り給へば臥したる娘、堪へ兼ねしが聲上てわつと計に泣出す、「コハ何故」と驚く内侍、若君引連れ逃げ退かんとし給へば、「ノウこれお待下され」と、涙と共にお里は馳け寄り、「先づ／＼是へ」と内侍・若君正座へ直し、「私はお里と申て此

○色珍しい　色人珍しい。美しい人の珍しい。

○夢にも　いさゝかでも。ついちよつとでも。

○いたいけ　幼氣の義。小兒などの、いたいたしう可憐なさま。

家の娘、淫者憎い奴と、思召されん申譯、過ぎつる春の頃色珍しい草中へ、繪に有樣な殿御のお出で、維盛樣とは露知らず女の淺い心から、可愛らしいとしらしいと思ひ初たが戀のもと、父も聞へず、母樣も、夢にも知らして下さつたら、假令焦れて死ればとて、雲井に、近き御方に鮨屋の娘が惚れられうか、一生連添ふ殿御じやと、思ひ込んで居るものを、二世の固めは叶はぬ、親への義理に契つたとは、情ないお情に、預りました」とどうど伏し身を顫、はして泣ければ、維盛卿は氣の毒の、内侍も道理の詫涙、乾く間もなき折柄に、村の役人駈來り戸を叩いて、「コレ／＼爰へ梶原樣が見へまする、内掃除しておかれい」と言捨てて立歸る、人々はつと泣く目も晴れ、如何は、せんと俄の仰天、お里は早速に心付、「先々親の隱居屋敷上市村へ」と氣をあせる、「實に其事は彌左衛門我にも教へ置きしかど、最早開かぬ平家の運命、檢使を引請け潔う腹かき切らん」と身拵へ、内侍は悲しく、「コレ此若のいたいけ盛りを思召し、一先爰を」と無理やりに引立給へば維盛も、子に引かさるゝ後髮、是非なく其場を落給ふ、御運の程ぞ危けれ、樣子を聞たか歪の權太勝手口より躍り出、「お綱の有た内侍・六代、

○はい〳〵　供の者が道を拂ふ聲。近松作「[illegible]」に「[illegible]はい、、、、、、の聲」。
○十手　（見索引）
○地頭　[illegible]、大江[illegible]の建議によつて設け[illegible]で、[illegible]、[illegible]する者である。後には一區域の領主をいふ。
○早打　馬を馳せて急報すること。

維盛彌助めせしめてくれん」と尻引褰げ駈出すを、「コレ待ッて」とお里は取り付き、「兄樣是は、一ッ生の私が願ひ、見許して下され」と、賴めど聞かず跳飛し、「大金になる大仕事邪魔ひろぐな」と縋るを蹴倒し撲飛し。最前置きし金の鮨桶、「是忘れては」と引提げて跡を慕ふて追ふて行く、「ノウ父樣母樣」と。お里か呼ぶ聲彌左衛門、母も駈出で何事と問へば娘は「コレ〳〵」。都から維盛樣の御詮索、若君尋さまよひお出有、積る話の其中へ、詮議に來ると知らせを聞、二人連れて上市へ落しましたを情ない。兄樣が聞て居て討取るか生捕つて、褒美にするとたつた今追掛けて」と、言ふより喫驚彌左衛門。「それ一大事」と嗜の朱鞘の脇差腰にぼつこみ駈出す向ふへ、「はい〳〵」と、矢筈の提燈梶原平藏景時。家來數多に十手持せ道を塞いで、「ヤア老耄め何處へ行、逃ぐるとて逃がさふか」と、追取まかれてはつと胸、先も氣遣ひ、爰も遁れず七轉八倒心は早鐘、時に時撞く如く也、「ヤア此奴橫道者、汝に今日維盛が事詮議すれば、存ぜぬ知らぬと言拔ける、其儘にして歸せしは、思ひ寄らず踏込まふ爲、此家に維盛隱まひ有る事、所の者より地頭へ訴へ、早速鎌倉へ早打取る物も取りあへず來れ共、油斷の體は汝

を取逃すまい爲、サア首討つて渡すか、但違背に及ぶか、返答せい」と責付けられ、「叶はぬ所」と胸を据へ、「成程、一旦は隱まひないとは申したれ共、餘り御詮議強き故隱しても隱されず、最先達つて首討つたり、御覽に入れんお通り」と伴ひ入れば母娘、どふ成事と氣遣ふ中、鮨桶引提げ彌左衞門しづ／＼出て向ふに直し、「三位維盛の首、御請取下されよ」と、蓋を取らんとする所を、女房駈寄りちやつと押へ、「コレ親父殿、此桶の内には私が些と大事の物を入れて置いた、此方さん明けてどうするぞ」、「ホ汝は知るまい此桶には、最前維盛卿のお首を討つて入置いた」、「イヤ／＼／＼此桶には此方に見せぬ物が有」と、引寄すれば引戻し、「汝が何にも知らぬ故」、「イヤ此方が知らぬ故」と、夫は金と心得て爭ひ果しねば、梶原平藏、「扨は此奴等言合せ、縛れ括れ」と下知の下、「捕つた／＼」と取卷く所に、「維盛夫婦餓鬼奴迄、歪の權太が生捕つたり討取つたり」と呼ばはる聲、はつと計に彌左衞門・女房・娘も氣は狂亂、歪の權太は嚴めしく若君・內侍を猿縛り、宙に引立目通りにどつかと引据へ、「親父の賣僧が、三位維盛を熊野浦より連れ歸り、道にて頭を剃こぼち、青二才にして彌助と名を變へ、此間はほてく

○下知　「令₂下知₁」の略。命令。
○餓鬼　兒童を罵つていふ。こせがれ。（見索引）
○猿縛り　背を屈めて頸先を前へ伸び出るやうに縛る。縛ることで、その形、猿を縛れる如くなるよりいふ。近松作「持統天皇歌軍法」に「荒縄取つてぐる／＼、猿縛りに括し上げ」。
○賣僧　（見索引）
○剃り毀つ　髪を剃り落とし　近松作「國性爺後日合戰」上「月代剃り・・・かやきあたまに剃りこぼち」
○ほてくろし　腹黑しの義。腹きたなし。みつともない・・・近松作「心中宵庚申」に「結構なお若衆様の兄様とは添い添い冥加ない、手附に一寸ほてくろしい事御免」。「物類稱呼」に「ほてくろし」・・・三兵に、・・・「はらきたなし」といふに同じ。

しき婿穿鑿、生捕つて面恥と存たに、思ひの外手强い奴、村の者の手を借つてやう／＼と討取り、首に致して持參御實檢」と差出す、「ヲヽ成程剝こぼち彌助と云ふとは存ながら、先達つて言はぬは彌左衞門奴に、思ひ違ひを爲そふ爲、聞及んだ歪の權。惡者と聞たがお上へ對しては忠義の者、出來いた／＼、内侍・六代生捕たな、ハテよい器量。夢野の鹿で思はずも、雌鹿子鹿の手に入は、天晴の働き褒美には親の彌左衞門奴が命赦してくれう」、「イヤ／＼申親の命位を赦して貰をと思ふて、此働は致しませぬ」、「スリヤ親の命は取られても褒美が欲しいか」、「ハテあのわろの命はあのわろと相對、私には兎角お金」と願へば梶原、「ハテ小氣味の好い奴。褒美くれん」と着せし羽織、脫いで渡せば佛頂面、「コリヤ／＼、其羽織は賴朝公のお召替、何時でも鎌倉へ持來らば金銀と鈎替、屬託の合紋」と聞より戴き「出來た／＼、當世騙が流行によつて、二重取をさせぬ分別、ようしたもの」と引換に、繩付渡せば請取て首を器に納めさせ、「コリヤ權太、彌左衞門一家の奴等、暫く汝に預くる」、「お氣遣ひなされますな、貧乏搖もさせませぬ」、「ハテ健氣な男め」と、褒めそやして梶原平三繩付引立、立歸

●夢野の鹿　「鳴く牡鹿も夢のあはせのまゝに」のさまで、心を悩ましてゐた物が思ひ通りに手に入つた意にいうた。

○わろ　「わらは（童）」の約訛。わつぱ。人。ここでは歪の權太が父を「わろ」というた。

○相對　相對でおきめなされい時。

○佛頂面　膨れ顏。むつとした不快な顏付。佛頂尊の恐しい顏付に喩へた語である。

○鈎替　銀に混合物の中に眞鍮などが銀の一割入れるを上銀と稱へ、それより混合物の多少によつて兩替に要する手數をいふ。よつて「以て引替」の意にいうた。

○屬託　懸賞を以て罪人をさがすことをいひ、轉じて懸賞の金銀をいふ。

○合紋　打鋤りに割り紋を附けることから轉じて、符合ふ事にいふ。「併せ蘇み申候」六二「何こころなき爲の合紋、一つ二つにこゝふる十兵衛で、」

○貧乏搖もさせぬ　貧乏ゆるぎもさせぬといふ。貧乏搖とは、びくりとふるへることに。

○天命　自然に当り來る運命。吉凶禍福、因果應報も亦この中に含む。

○ほえる　聲をあげて泣くことを罵り氣味にいふ語。

○三千世界　一切の世界。宇宙間には無數の世界があつて、各須彌山を中央にして四洲四大海日月等を備ふ。これ等の一個を千集めたものを小千世界と云ひ、小千世界を千集めたものを中千世界といひ、更に中千世界を千集めたものを一大三千大千世界と云ひ、略して三千世界と云ふ。（見宗引）

○因果者　宿業の報い者。不幸者。

る。「ア、これ〳〵其序に褒美の金忘れまいぞ」と見送る隙間、油断見合せ彌左衛門、「憎さも憎し」と引抱へぐつと突込む恨の刄、「うん」と仰向に反返る、見るに親子は「ハッはつ」と、憎いながらも悲しさの、母は思はず駈寄つて、「天命知れや不孝の罪思ひ知れや」と言ひながら、先立物は涙にて伏沈、みてぞ。泣居たる、彌左衛門齒嚙をなし「泣くな女房、何吠へる、不便なの可愛のと言ふて、こんな奴を生け置くは世界の人の大きな難儀。門端も踏ますなと言付ヶ置いたに内へ引入レ、大事の大事の維盛樣を殺し。内侍樣や若君を能う鎌倉へ渡したな、腹が立ッて〳〵。涙がこぼれて胸が裂くる、三千世界に子を殺す、親と云ふのは己計り。適れ手柄な因果者に、能う仕居つた」と拔身の柄。碎くる計りに握り詰め、剔りかけるも心は涙、歪みに歪みし權太郎刄物押へて、「コレ親父殿」、「何じや」、「此方の力で維盛を助ける事は、叶はぬ〳〵」、「コリヤ言ふな、今日幸ひと別れ道の傍らに手負の死人、好い身代りと首討つて戻り此中に隱し置くコリヤ是を見居れ」と鮨桶取て打明くれば、くはらりと出たる三貫目、「ヒヤアこりや錢じや、こりやどふじや」と呆れ、果てたる計りなり、手負は顔を、打眺め「お

○前髮（既出）

○そうから　「そうかみ」（總髮）の音便。男の結髪の名、額の月代（さかやき）を剃らないで全體の髮を延ばし、之を束ねて結うたもの。

○惡漢垂の權太郎が釋然として變つた鐵石の忠節心には、天地も爲に感動するであらう。然し彼の積惡はこれを以ては償ひ足らなかつたのは是非もない。

○一文笛　僅一文ばかりの粗末な玩具の笛。

○茶汲み　權太郎の妻は路傍に茶店を出してゐたのであるから、妻の衣服と着換へさせてその姿に變へたのである。

詞いとしや親父樣。私が性根が惡るさに。御相談の相手もなく。ウ前髮の首を總髮にして渡さふとは。料簡違ひの危い所。梶原程の侍が。彌助といふて青二歳の男に仕立有事を。知らいで討手に來ませうか。それと言はぬは彼方も上み維盛樣御夫婦の、路銀にせんと盜んだ金。重いを證據に取違へた鮓桶。明ヶて見たれば中には首。はつと思へど是幸ゐ。月代剃つて突付ヶたは。やつぱりお前の仕込みの首」。「ムウ其父根性で。御臺。若君に繩をかけ。何故鎌倉へ渡したぞ」。「ホ其お二人と見へたのは。此權太が女房・悴」。「ヤアして〳〵。維盛樣御夫婦・若君は何處に」。「ヲヽ逢はせませう」と袖より出すウ文笛吹立れば。折よしと維盛卿。内侍は茶汲みの姿となり。若君連れて駈付給ひ。ハル彌左衞門夫婦の悦び。權太郎へ一禮を。詞「ヤア傷を負ふたか」と驚くも。「お變りないか」と喫驚も一度に。興をそさましける母は悲しさ手負に取付き。「斯程正しき性根にて人に疎まれ譏らるゝ。身持は何故にしてくれた。常が常なら連合がむざと手疵も負せまい。惨い事を」とせき上て悔み歎けば權太郎。「ヤレ詞其悔み無用〳〵。常が常なら梶原が。身代り食ふては歸りませぬ。まだそれさへも疑ふて。親の命を褒美にくれう。忝し

○禍も三年　諺「禍も三年たてば役に立つ」。（諺に最もよく用ひるは三の數であらう）。

◇惡に強い者は善にも強いとか、權太の心根、思ひやるだに哀れが深い。

○しやらほどけ　〔新辭解〕自然にとけはりさけるをいふ。そらどけ。西鶴作「五人女」卷一、「太鼓による獅子舞の樣に「油牝取亂して、帶はしやらしやら、[illegible]その儘に」

○苦味のはしる　苦味（にがみ）はしる。ひきしまつて澁面をしてゐる。

と言ふと早。詮議に詮議をかける所存。歪と見た故油斷して。一杯食ふて蹄りしは、禍も三年と惡い性根の年の明時、生れ付ィて諸勝負に。魂奪はれ。今日も彼方を二十兩。騙取たる荷物の內に。恭しく高位の繪姿。彌助が顏に生寫し。合點かいかぬと母人へ。金の無心を囮に入込み。忍んで聞ヶば維盛卿、御身に迫る難儀の段々。此度性根改めずば何時親人の御機嫌に。預る時節も有まいと打ッて代へたる惡事の裏。維盛樣の首はあつても、內侍•若君の代りに立る人もなく、途方に暮れし折柄に。女房小せんが悴を連れ、親御の勘當古主へ忠義。何狼狽へる事がある。私と善太をコレ斯うと。手を廻すれば悴奴も、母樣と一緒にと共に廻して縛り繩。かけても〳〵手が外れ、結んだ繩もしやらほどけ。歪んだ儕が直な子を。持たは何の因果じやと。思ふては泣。締めては泣き。後手にした其の時の。心は鬼でも蛇心でも。堪へ兼たる血の淚可愛や不便や女房も。わつと一聲其時に血を吐きました」と語るにぞ。力み返つて彌左衛門。「聞へぬぞよ權太郎。孫めに繩を掛ける時、血を吐く程の悲しさを、常に持ては何故くれぬ。賢い世界に嫁一人、孫と云ふのも彼奴一人、子供が大勢遊んで居れば、親の顏を目印に、苦

○まんざら　「いまさら」（今更）の約轉。

○親父殿　嫁との間にも親子の名のりもあげ合うこ、嫁女も親父殿こいうてくれるだらうし。

○さる事　さあること。然るべきこと。もつとものこと。

○譜代　代代其の主家に仕へてゐること。

○無得心　無道。

●昔の豫讓　豫讓は支那春秋戰國時代、晉の人、智伯に仕へたが、智伯が趙襄子に殺されたので、豫讓は智伯の爲に仇を報いようとして捕へられ、襄子の衣を請ひ受け、劍を拔いてこれを擊ち、遂に自刄した。

味のはしつた子が有ルかと、尋て見ては、コレ／＼子供衆、權太が息子は居ませぬかと、問へど子供はどの權太、家名は何とと尋られ、おれが口からまんざらに、歪の權とは得言はず、惡者の子じや故に、刎出されて居るであろと思ふ程猶其方が憎さ、今直る根性が半年前に直つたら、のふ婆、親父殿、嫁女や、孫の顏見覺へて置こふのに」、「ヲヽ／＼おれもそれ計りが」と、咽せ返りわつと計伏し沈む心ぞ、思ひやられたり內侍は始終御淚、維盛卿は身に迫る、いとど思ひに搔暮れ給ひ、「彌左衞門が歎きさる事なれ共、逢ふて別れ、逢はで死るも皆因緣、汝が討つて歸りたる首は主馬の小金吾とて、內侍が供せし譜代の家來、生て盡せし忠義は薄く、死して身代る忠勤厚し、是も不思議の因緣」と語り給へば、「テモ扨もそんなら是も鎌倉の、追手の奴等が皆所爲」、「ヲヽ言ふにや及ぶ右大將賴朝が、威勢に蔓延る無得心、一太刀恨みぬ殘念」と、怒に交る御淚、「實にお道理」と彌左衞門、梶原が預けたる陣羽織を取出し、「是は賴朝が着替とて、褒美の合紋に殘し置きし、ずた／＼に引裂いても、御一門の數には足らねど、一ト裂宛の御手向、サア遊ばせ」と差出す、「何賴朝が着替とや、昔の豫讓が例を引き、衣

〇雲の上は・内やゆかしき　この歌は謡曲「鸚鵡小町」に出し、帝の御歌である。そして「内やゆかしき」とあるを、小町が「内ぞゆかしき」として御返歌としたことが見えてゐる。
〇物々し　[illegible]らし。

〇さもさらず　まさに然るべきであらう。さうもあるべきだ。
〇池の禪尼　藤原宗兼の女、平忠盛に嫁す。平清盛の繼母で、小松の重盛・池の禪尼が頼朝の死罪を助けるやう清盛に懇願したことは、「平治物語」卷三、頼朝遠流に[illegible]ることに見ゆ。
〇伊東　伊豆國伊東。
〇鸚鵡返し　鸚鵡は人の言ふことを其儘眞似て言ふことで、他人の言付を[illegible]變へないで殆んどその儘[illegible]ていふ。小町の[illegible]鸚鵡返しである。恩になつたことを其儘恩返しすることの意。
〇佛を[illegible]て　[illegible]のことは佛弟子の[illegible]けれど、發心（さとりの心を發起）せぬから斯くいふ。

を裂いて一門の、根を晴さん思ひ知れ」と、御佩刀に手をかけて羽織を取て引上げ給へば、裏に模様が歌の下の句、「内やゆかしき、内ぞゆかしき」と、二つ並べて書いたるは、アラ心得ず、此歌は小町が詠歌、雲の上は有し昔に變らねど、見し玉簾の内やゆかしきと有けるを、其返歌とて人も知つたる此歌を、物々しう書いたは不思議殊に梶原は和歌に心を寄せし武士、内やゆかしきは此羽織の、縫目の内ぞゆかしき」と、襟際附際切解き、見れば内には袈裟衣、「珠數迄添へて入置いたは、コリヤどふじや」、「コハ如何に」と呆れる人々維盛卿、「ホウさもさうずさもあらん、保元平治の其昔、我父小松の重盛池の禪尼と言合せ、死罪に極まる頼朝を命助けて伊東へ流人、其恩報じに維盛を、助けて出家させよとの、鸚鵡返しか、恩返しか、ハア、敵ながらも頼朝は適れの大將、見し玉簾の内よりも心の内のゆかしや」と、衣を取ッて「是とても父重盛の御陰」と戴き給ふぞ道理なる、人々はつと悦び涙、手負の權太は這出摩寄り、「及ばぬ智惠で梶原を、謀つたと思ふたが、彼方が何にも皆合點、思へば是迄騙つたも、後は命を騙らるる、種とは知らざる、あさまし」と、悔みに近き終り際、維盛卿も「是迄は佛を

騙つて輪廻を離れず。離るゝ時は今此時」と、髻ふつつと切給へば、内侍・若君・お里は縋り「倶に尼共姿をかへ、宮仕を許して」と願へど叶はず打拂ひ、〱。「内侍は高尾の文覺へ六代が事頼れよ。お里は兄に成代り親へ孝行肝要」と、立出給へば彌左衞門。「女中の供は年寄の役」と諸共旅用意。手負をいたはる母親が、「ノウこれ無情親父殿權太郎が最期も近し、死目に逢ふて下され」と、止むるに咳き上彌左衞門。「現在血を分けた悴を手にかけ、どふ死目に逢はれうぞ。死んだを見ては一足も歩かるゝ物かいの。息有ル内は叶はぬ迄も助かる事も有ふかと、思ふがせめての力草、止める其方が胴慾」と言ふて泣き出す父親に母は取分け娘は猶。不便不便と維盛の、首には輪袈裟手に衣。手向の文も阿耨多羅、三藐三菩提の門出。高尾。高野へ引分くる。夫婦の別れに親子の名殘、手負は見送る顔と顔、思ひはいづれ大和路や、吉野に殘る名物に維盛彌助と云ふ鮓屋。今に榮ふる花の里其名も、高く顯はせり、

○輪廻　罪障ある衆生が妄念に執着し、生死六道に[illegible]すること。（執念一見宗引）

○高尾　山城國葛野郡梅ヶ畑村神護寺。

○力草　力とたのむもの。頼み。

○輪袈裟　僧侶が頸に懸けて肩に垂らす[illegible]輪に作つて[illegible]一種、首に[illegible]

○阿耨多羅三藐三菩提　梵語 Anuttara-samyak-sambodhi. 無上正遍智と譯し、佛陀の智徳を讃歎して云ふ名稱。

第四（道行初音旅＝狐忠信　河連館＝河連館）

当座より豊竹山城少掾・吉田文五郎の二人まで芸術院会員に推されたる喜びを迎へて

文楽座人形浄瑠璃芸術祭興行

正午より後七時まで
七時間ぶつ通し一部興行

当る昭和二十四年三月五日初日　文楽座

文楽座

太夫 豊竹山城少掾

通し狂言
吉野の花にさきがけて 人々おりにめづらしく 竹田出雲 三好松洛 並木千柳の作
義経千本桜
鳥居前の段より川連法眼館の段まで

大物浦 渡海屋の段
中 竹本[illegible]
竹本[illegible]太夫
豊竹[illegible]太夫
竹本[illegible]太夫
豊竹[illegible]太夫
竹本[illegible]太夫
豊竹[illegible]太夫
野澤[illegible]
鶴澤[illegible]

口上

道行初音旅
静御前
狐忠信
竹本[illegible]太夫
竹本[illegible]太夫
豊竹[illegible]太夫
竹本[illegible]太夫
豊竹[illegible]太夫
野澤[illegible]
鶴澤[illegible]
野澤[illegible]
鶴澤[illegible]
鶴澤[illegible]
竹本[illegible]

椎の木の段
此の段吉田文五郎出遣ひ早替りにて御覧に入れます
口 豊竹[illegible]太夫
豊竹[illegible]太夫
竹本[illegible]太夫
野澤[illegible]

主馬小金吾討死の段
竹本[illegible]太夫
野澤[illegible]太夫
豊竹[illegible]太夫
鶴澤[illegible]

釣瓶鮓屋の段
切 豊竹山城少掾
鶴澤[illegible]

鮓屋の段 豊竹山城少掾 吉田文五郎 顔揃いにて 相勤申候

川連法眼館の段
源義経
佐藤忠信
静御前
亀井六郎
駿河次郎
竹本[illegible]太夫
豊竹[illegible]太夫
竹本[illegible]太夫
豊竹[illegible]太夫
野澤[illegible]
鶴澤[illegible]

狐忠信 乱の段
源義経
狐忠信実は源九郎狐
静御前
此の段吉田文五郎出遣ひ早替りにて御覧に入れます

千穐楽まで 大入 叶 吉例

大物浦渡海屋の段
- 渡海屋銀平実は平知盛　桐竹[illegible]
- 娘お安実は安徳帝　吉田[illegible]
- 女房お柳実は典侍局　吉田[illegible]
- 相模五郎　吉田[illegible]
- 入江丹蔵　吉田[illegible]
- 源義経　桐竹[illegible]
- 武蔵坊弁慶　吉田[illegible]
- 駿河次郎　吉田[illegible]
- 亀井六郎　吉田[illegible]

道行初音旅
- 静御前　吉田文五郎
- 狐忠信　吉田[illegible]

椎の木の段
- 主馬小金吾　桐竹[illegible]
- 若葉の内侍　桐竹[illegible]
- 六代君　吉田[illegible]
- いがみの権太　吉田[illegible]
- 女房小せん　吉田[illegible]
- 倅善太　吉田[illegible]

小金吾討死の段
- 主馬小金吾　桐竹[illegible]
- 猪熊大之進　吉田[illegible]
- 若葉の内侍　桐竹[illegible]
- 六代君　吉田[illegible]
- 鮓屋弥左衛門　吉田[illegible]
- 五人組　吉田[illegible]

釣瓶鮓屋の段
- 娘お里　吉田文五郎
- 鮓屋弥左衛門　吉田[illegible]
- 下男弥助実は三位中将維盛　吉田[illegible]
- 若葉の内侍　桐竹[illegible]
- 六代君　吉田[illegible]
- いがみの権太　吉田[illegible]
- 弥左衛門女房　吉田[illegible]
- 権太女房小せん　吉田[illegible]
- 倅善太　吉田[illegible]
- 梶原平三景時　吉田[illegible]
- 村の歩き　吉田[illegible]
- 町人　大ぜい
- 取巻　大ぜい

川連法眼館の段
- 源義経　桐竹[illegible]
- 亀井六郎　吉田[illegible]
- 駿河次郎　吉田[illegible]
- 佐藤忠信　吉田[illegible]
- 静御前　桐竹[illegible]

狐忠信乱の段
- 静御前　桐竹[illegible]
- 忠信実は源九郎狐　吉田[illegible]
- 源義経　桐竹[illegible]
- 人形師　[illegible]
- 頭取　[illegible]
- 床山　[illegible]
- 舞台装置　[illegible]
- はやし　[illegible]
- 人形頭取　吉田[illegible]

座主 松竹株式会社

花の里其名も、高く顯はせり、

お内に給、

登場人物の主な者

源九郎狐（義經の臣佐藤忠信に化けた者）　　靜（義經の妾）

河連法眼（吉野山寺院檢校職）　　飛鳥（鎌倉武士笑左衞門の妹、河連法眼妻）

山科の荒法橋坊（吉野法師）　　梅本の鬼佐渡坊（吉野法師）

佐藤四郎兵衞忠信（義經の臣）　　龜井六郎重淸（義經の臣）

安德天皇

源九郎義經（賴朝の弟）

返坂の藥醫坊（吉野法師）

横川の覺範（吉野法師、實は能登守平敎經）

駿河次郎（義經の臣）

梗概

「道行初音旅」　義經が難波津を船出して難風に遭ひ、今は吉野山に隱れてゐるとの噂を耳にした靜御前は、源九郎狐の化けた佐藤忠信を伴ひ、大和路をさして旅に出た。四方の景色も春めきて、鄙歌・羽子・手鞠・萬歳の囃子など賑ふ中に、雨に惱める海棠のやうな靜御前は、義經の形見の初音の鼓を携へ、猛き武夫の忠信は、義經から拜領した鎧を背負うて、とぼとぼと行く。その風雅な姿は背景の美と調和して、さながら麗はしい繪卷物を展げたやうである。兩人は人目を避けては互に形見の品に見入り、追懷の感に打たれつゝ、花ぐはしい吉野山の麓に著いた。

「狐忠信（河連）」　源義經は吉野山寺院檢校河連法眼の奥座敷に匿まはれてゐる。河連法眼は數多の吉野法師を集めて、「己が妻の兄笑左衞門から書狀が來た」と、僞つて、「賴朝公の命によつて義經を討取れ」と、書いてある僞狀を讀上げて衆徒の心を試す。そして藥醫坊・荒法橋・鬼佐渡・横川の覺範等が義經を討取らうとする心底を見拔いた後、集會から歸つて妻の心に二心なきを見屆けて安心した。

是時まで病氣で歸鄕してゐた佐藤忠信が、奧州から上つて來て義經を訪うた。義經は忠信に靜のことを尋ねれば、彼は固より知るわけもないので、義經は彼が知らぬとは不思議とその心を疑ひ、龜井・駿河に命じて忠信を難詰させた。

折柄忠信に化けた源九郎狐が靜を誘引して來り、本當の忠信が居るを見て無據素性を明かし、「初音の鼓は我が親狐の革で貼つてあるので、懷しさに靜御前のお供して參りました」と語る。

義經は彼が畜生でありながら親を慕ふ孝心に感じ、我が身に思ひくらべて深く同情し、初音の鼓を狐に與へる。狐は鼓を抱いて嬉しさに堪へぬものの如く、「今から義經公の御守りとなります。今夜吉野山の惡僧等が攻寄せようと工んでゐますから、どうぞ御油斷なさいますな」と注進して、行方も知れず失せた。

「河連館」源九郎狐に魅された荒法橋・鬼佐渡・藥醫坊は、河連法眼の館に來つて龜井・駿河等に搦められる。導いて横川の覺範と名を改め姿を變へた能登守教經が、長刀提げて躍り込み、奧の間の障子を蹴放せば、中に安德天皇がおはしますので喫驚し、さては義經が天皇を守護し奉つてゐたのかと、其の美しい情に感激して戰ふを止める。そして義經の身代りに立つ佐藤忠信と再戰を約し、自ら天皇を抱き奉り、義經主從に送られて我が館に歸る。

評

以上、道行及び狐忠信の段は、美しい風景と麗はしい人情・狐の孝心と流暢な詞章とが融合して、妙味豐かな幻華美術を作り上げてゐる。切の段は、明白な史實を餘りに曲げてゐるので、折角の技巧も情の移らぬのみか、却つて嫌な心地がする。

○はかりなや　量り知られないわい。
○忠と信　佐藤忠信（ただのぶ）にいひかく。
○靜　靜御前にいひかく。
○枝折　古人は山道を行く時、路傍の樹枝を折つて[illegible]たれば、道しる[illegible]にいふ。
○ほろろけんけん　「ほろろ」は雉子が羽をこすり打つ音、「けんけん」は雉子の[illegible]

第四の口（道行初音旅）

歌 戀と、忠義はいづれが重い、かけて思ひははかりなや、※ツシ 忠と信の武夫に、君が情と預けられ、※靜に忍ぶ都をば、後に見捨てて旅立チて、作らぬ形も義經の御[illegible]行

末は難波津の、波に揺られて、漂ひて、今は吉野と人傳の噂を道の枝折にて、大和路さして慕ひ、行く野路も馴れぬ繁みの、紛ひ道、左手も右手も若草を、分けつつ行けば、あさる雉子のぱつと立つてはほろろけんけんほろろ打つ、なれは子故に身を焦す我は、戀路に、迷ふ身のアア羨まし妬ましや、初雁がねの女夫連れ、夫持ち顔の撥ばかま、人よりましの眞柴さす、倉稻魂の御社は、いと尊くも神神と霞の中に瓶原わきて形見の鼓の可愛、可愛〳〵、の睦言を人には包む袱紗物、それを便りに突く杖も心細野を打過ぎて、見渡せば、四方の梢もほころびて、梅が枝うたふ歌姫の里の男が聲聲に、「我妻が、天井ぬけて据へる膳、晝の枕はつがもなや、天井ぬけて据へる膳、晝の枕はつがもなや」、ヲヲつがもなや、可笑しからずの一節に、人も藁屋の育ちにも、春は羽子つく、手鞠「一二」つく〳〵と聞けば、東風風音添へて去年の氷を、「徳若に御萬歳と君も榮へまします、ありけうありや」頼もしや、さぞな大和の人ならば御隱れ家をいざ問はん我も初

○なれ　汝。「萬葉集」卷十一に「いつしかなれがぬしまおがたき」の「なれ」に汝と書いてある。
⊙タタキ　鼓の謡ふ音節で謡ふ。
○撥袴　糊ごはで着用すると端端が撥ねあがるやう[illegible]「大[illegible]」に「黄鳥もはね袴着て阿爺(ここ)の代」。近松作「津國女夫池」第二に「主の威光のはね袴、かさにかかつ[illegible]」
○倉稻魂　[illegible]を司る神。[illegible]
○瓶原　山城國[illegible]村。「新古今集」中納言[illegible]歌に「みかの原湧きて流るるいづみ川、いつ[illegible]」
○細野　山と山との間に挾まつて細く延びてゐる野原。心細いにいひかけた。
○梅が枝　「松の葉」卷三、梅が枝の唄「庭の梅が枝命(いのち)の君に、何が惜しかろぞ、花一重、咲いた[illegible]、咲いた〳〵、何が惜しかろぞ花一重、咲いたの」。
○歌姫　歌をうたふ女。ここの文は、里の女が梅が枝の歌をうたふに、里の男をいひかけた。
○天井ぬける　(既出)
「据ゑる膳」　男が女に[illegible]されること。([illegible]引)
○つがもなや　つながり(縁)もないわい。とんでもないわい。あられもないわい。
○可笑しからず　夫(をつと)と別れた身にはこの歌をかしからずの意。

○ありけう　「あいきやう」(愛敬)の訛。

○徳若に　ありけうありや　萬歳詞。
・徳若　常若、とこわかしをきかせたものである。常若とはいつも若うてあること。

音の、此鼓君の榮を壽きて、昔を今になすよしもがな、谷の鶯ナ、初音の鼓〳〵、調あやなす音に連れて、連れて招くさ、遲ればせなる忠信が旅姿、背に風呂敷をしかと背摺負ふて、野道畔道ゆらり、ゆらり、輕い取なりいそいそと、目立ぬ樣に道隔て、女中の足と侮つて、「さぞお待兼ね、爰幸の人目なし」と、姓名添へて賜はりし、御著長を取出し君と、敬ひ奉る、靜は鼓を御顏とよそへて上に置きの石、「人こそ知らね西國へ御下向の御海上、波風荒く御船を、住吉浦に吹上られ、それより吉野にまします由、やがてぞ參り候はん」と互に形見を取納め、「げに此鎧を賜はりしも、兄繼信が忠勤なり、屋島の戰ひ我が君の、御馬の矢面に駒を驅据へ、立塞がる」、「ヲヲ聞き及ぶ其の時に」、「平家の方には名高き强弓、能登の守教經と名乘りもあへずよつ引いて放つ、矢先は恨めしや、兄繼信が胸板に溜りもあへず眞逆樣」、「敢なき最期は忠臣義士の名を殘す、思ひ出づるも淚にて」、「袖は乾かぬ筒井筒」、「いつか御身も、のびやかに春の柳生の絲長く、枝を連ぬる御契りなどかは朽ちしかるべき」と互に、慰め慰められ急ぐとすれど捗らぬ、蘆原峠かうの里、土田六田も遠からぬ野路の、春風吹き拂ひ雲と、見紛

○昔を今になすよしもがな　靜御前の歌「しづやしづ賤のをだまき繰返し、昔を今になすよしもがな」の下の句に據つたもの。この靜御前の歌は「義經記」に出てゐる。蓋し古歌に「古のしづのをだまき繰返し、昔を今になすよしもがな」とあるを、我が名にもぢつて作り替へたのである)。

○谷の鶯ナ初音の鼓　谷の鶯初音を鳴くを鼓の名にいひつゞけた。

○あやなす　巧にあしらふ。

○背摺負ふ　背を曲げて負ふ。[illegible]に「せたらおふ」大鼓詞、背負ふこと」、「東海道名所記」に「一人の座頭、琵琶はこをせたらおひ杖をつき」。

○取なり　なりふり。姿。ここの文、ゆらり〳〵として行くは忠信、いそ〳〵と行くは靜御前。

○女中　婦人。ここの文、「婦人の足と侮つて、お[illegible]」の意。

○着長　鎧をいふ。[illegible]

○沖の石人こそ知らね　「千載集」戀部、二條院讃岐の歌に「わが袖は潮干に見えぬ沖の石の、人こそ知らね乾く間もなし」。

⊙表具　（既出）

○住吉浦　今は大阪府住吉區に入る。名高い住吉神社はこの地にある。

○よつびいて　「能く引いて」の訛。十分に弓を

引かけること。
○筒井筒　[illegible]「井筒」[illegible]古文にも「筒井筒、井筒の水」などいふ。ここも頭韻なる「いつか」といふ[illegible]。
○枝を連ねる　[illegible]枝を連ねる意で、ここは男女の[illegible]に[illegible]。
○當麻寺　大和國[illegible]の山寺。[illegible]
[illegible]
○かうの里　大[illegible]
○上田　大和國[illegible]上田。
○六田　大和國[illegible]六田。
○丈六　一丈六尺。佛の身長は一丈六尺なるによつて[illegible]
[illegible]になると思はれるものをいふ、といふ。
○忿怒の御像　[illegible]
[illegible]
○藏王堂　大和國吉野郡吉野にある金峯山寺の[illegible]
○評定始　[illegible]正月初めて政務を[illegible]
○知行下　吉野山[illegible]
○お髭の塵取　人に媚び諂ふをいふ。[illegible]に「御髭の塵を取」これに[illegible]ひて追從する者を云ふ[illegible]

ふ三吉野の麓の、里にぞ育きにける

第四の中（狐忠信の段）

丈六忿怒の御像も花に和らぐ吉野山、軒は霞に埋れて、殊勝さ勝る藏王堂、櫻はまだし枝々の梢淋しき初春の空、一山の衆徒、評定始と知行下の百姓等、お髭の塵取掃き掃除靈驗あらたな佛より、衆徒の罰をや恐れけん、名ばかりは靜と云へど、急ぐ道、忠信が介抱にて義經の御跡を、やう〳〵爰に慕ひ來て彌生半と云ひながら、見渡す景も吉野山、百姓共口々に、「何と美しい京女郎、花見にはまだ早いなア」、「何の花見であろぞい、男と女子と二人連、腹が孕みでしやうことなふ、ついとしてござつたか」と問かけられて「ア、否そんな者でなし、河連法眼殿へ用事有て參る者、是からどふ行きます」と、皆迄聞ず早合點、「エ

○ついとして　ついちよつとして。ひよつくり駈落して。
○河連法眼　吉野山の寺院検校職を勤め、義經を隱まつてゐる法師。元名は「義經記」に「川くらの法眼」とあるをもぢつた。
○法眼　僧位の、僧都の相當位であつて、俗位では四位に當する。

○こんだ　「呑込(のみこ)んだ」の略。合點した。
○格　身分の意。自墮落坊主のやうなこというてはつまらないが、妻帶といへば同じ事をいふにも身分が重く聞える。
○日高　鑑識のすぐれた人。
○お客　暗に義經をさす。
○子守明神　水分神社をいひ、吉野山・中千本と奥千本との間にある。「大和名所圖會」に「子守神祠大宮一座、吉野八大神祠の一」。今の社殿は慶長九年の再建。
○とつかは　急ぎ慌(あわ)てるさまにいふ。蓋し足を飛び交(かは)す義であらう。
○喚鐘　喚鐘(くわんしよう)をいふ。鐘の小さきもの。半鐘。
○山科の法橋坊　覺範に一味して義經の敵となつた吉野荒法師。「義經記」には「山科の法眼」とある。
○法橋　僧位。律師の相當位であつて、俗位では五位に准ずる。
○返り坂の藥醫坊　覺範に一味して義經の敵となつた吉野荒法師。「義經記」に「やくいのかみ、かへりさかの小ひじり」とある。
○淸僧　品行よき僧。「淸僧ながら」とは、淸僧たるべき身分でありながらの意。
○大口　大口袴をいひ、[illegible]の口が廣い。今も能樂などにこれをはくことがある。
○道具屋　淨瑠璃面の一派。(見索引)

ヱ込んだ〳〵、妾奉公に遣らしやるの」、「ヲ往かしやればよい仕合せ、河連法眼様と云ふは此一山の衆徒頭。吉野中は立ふと伏せうと儘な上に、女房持ッて魚や鳥は食ひ次第、自墮落坊主の樣なれど、妻帶といへば格が重い、どふぞ首尾して仕合せさしやれ」、「ア　此方樣は日高じやの、が其法眼樣には大切なお客でもござりますか」、「イヤそんな事は知りませぬ、毎日琴三味線で賑かなとは聞ました、コレ此道をかう往てこつちやの方が子守明神。女子の參らにやならぬ所。それより手前の一筋道左の方につゐ見へる、大きな門の有ル所」と。教に靜が「あい〳〵あい、忝うござんす」と氣のせく道をとつかはと打連れてこそ急ぎ行。早參會と喚鐘に。山科の法橋坊。無道不敵の一字を蒙り、荒法橋と名を呼ばれ、のつかのつかと來る跡に、鬼と名乘るは違はぬ惡者。梅本の鬼佐渡坊返り坂の藥醫坊、淸僧ながら大太刀佩き、大口の裾踏み散し、今日の評定眞先かけ、無い智恵振はん面付なり、今迄のふずな百姓共適樣に遣ひ屈めば、鬼佐渡傍を睨み廻し、「まだ掃除仕舞ぬた。先達て言ひ渡すに野良かはいて隙入れる、年貢時分に待て居ろ」と呵り付られ「ハイ〳〵」、當眼に手ん手に箒をつさくさ、風上から掃き廻

○のふず 「のふぞう」に野風俗の約略。圖太く憎らしいこと。無作法。近松作「相模入道千疋犬」に「年若い女の前に似合はぬのふず者」。
○野良かわく 野良なまけを盡す。
○ごくどう 放蕩者。道樂者。「佐渡守」に「ごくたふ俗に人を罵る詞にいへり、言句總の義なるべし」、當流道樂といふが如し」。獄道と書くは當字であらう。
○檢校職 寺内一切の法務を檢鬥する僧職。
○褐地 褐色の地を褐染（藍を紺色）にすることの事。俵藤をいひかく。
○指貫 奴袴とも書き、裾に緒を通して足首に締め括る袴であつて、後に踝迄で腰にのはかしがある。
○仁體 人體。身がら。身分。
○祝着 よろこび祝ふこと。滿悅。
○談合 「だんかふ」であつて「かふ」を「がふ」と濁るは誤、話合ひ、相談。
○飛札 急用の手紙。急報。
○判官 義經。
○しやうきやう 「しやきやう」（舍兄）の訛か。
○大方ならず 通りの事でなく非常な。「大方」は普通、通りの意。

せば袈裟も衣も土埃、「ごくどうめらこりや何し居る」と、呵る程猶遠慮無う、「掃除します」と無二無三埃被けて逃げ歸る。爰に河連法眼とて一ッ山ゝの檢校職、華美を好まぬ萠黄の法服、褐地を來る指貫も締め括り有仁體、「ホ、ウいづれも早かりつ」と、互に前後の挨拶有、各々圓座に列れり、や、有て河連法眼、「先達て回狀を以て申せし所、早々の參會近頃祝着、今日の談合餘の儀にあらず」と、懷中より一ッ通を取出し、「鎌倉殿の家臣、我小舅茨左衞門より斯の如き書狀到來、文言を讀み聞かさば申さず共樣子は明白、先聞れよ」と押ゝ廣げ、「飛札を以て申達す、九郎判官義經の事弟の身として、しやうきやう賴朝追討の院宣を蒙り、剰へ土佐坊正尊を討取都を立退き、大和路に徘徊の由、其聞へ有ルによつて、鎌倉殿御憤り大方ならず、早く討て出すべきの旨、國々へ配符を廻らし畢んぬ討取ッて恩賞申ゝ受ヶらるべく候、隱し置ヶに於ては一ッ山ゝの滅亡此時に候也正月十二日河連法眼殿茨左衞門判、聞れたかいづれも、談合とは此事、元來科なき判官殿、大和路に徘徊と有レば、一山ゝの衆徒を賴來られんは必定也、其時は方々賴まれ申て匿まふ氣か、又は討ッて出す所存か、心々で濟まぬ事、銘々に遠慮な

く評議有」と、聞もあへず荒法橋、「實に尤さりながら、我々が評定お尋迄なく、一山の仕置頭法眼殿から料簡を定め申さるれば誰レ有て詞を背かず一ッ統せん、先ッ御所存は」と問返す、「ホヽウ料簡は胸に有、まつ斯々といひ聞さば、假令心に合ず共、よもや否とは申されまじ、左有レは却つて不覺の基、我所存は跡で言はん先各々の思ふ所、眞直に申されよ」と、いへ共互に心置キ暫し返答忌りしが、返り坂の藥醫坊遠慮なくぬつと出、「先ッ愚僧が存るは、義經を匿まふは二年ニ三年、乃至十年二十年、其間立テ養ひ、一人リ計は僅でも、辨慶と云ふ食拔けの候へば、如何程食ひ込まんも知れず、と有ッて匿まふまいと言はば、彼辨慶滅相者、七つ道具の鋸で家尻切ラんも知レ申さず、どかと盗れ申さんより、一ッ山ンの出し前にて。茶粥を食はせ養ふが勘定ならん」と申にぞ、法眼可笑く思ひながら、「ムウそれも肝要、扨兩人は」と言はせもあへず「されば、く此事に於て勘定も何ニにも入らず、人を救ふが沙門の役、科なき義經匿まふとて鎌倉より討手來らは、忍辱の袈裟引替へ、降魔の鎧に身を固め、坂寄に押ニ寄せ討取リ、直ぐに鎌倉へ追上り御身に覺なき條々、申開いて讒者原一々に切並べ、それも叶はぬ

○仕置　取締つて處置すること。河連法眼は吉野一山の檢校職なれば「仕置の役目」である。
○不覺　不覺悟。覺悟のたしかならぬこと。うつかりして失策すること。
○食拔け　いくら食うても口から尻へ拔けて食ひ足らぬ義。おほものくひ。近松作「平家女護島」第四に「潮も逆卷く大辭上げ、ヤア位ぬけ殿法皇殿」とあるも法皇を罵つた語。
○七つ道具　辨慶の七つ道具は、鋸・槌・鎌・鉞・熊手・鐵棒・長刀であるといふ。
○家尻切る　家後を切破つて忍び入り、盗賊をはたらくをいふ。近松作「[illegible]腹切」に「いつそ手をより出す[illegible]家尻切れとどわめきける」。
○どか　常規を超してゐること。どつさり。近松作「山崎與次兵衛壽の門松」に「どかゝ儲すればどかゝ損をする」。「どかくと入り來る」などの「どかく」と同じ語である。
○一山の出し前　吉野山の各寺院が割附けによつて納めた米錢。
○沙門　梵語 Sramana. の音譯。勤息の義。僧侶。
○忍辱　諸の侮辱に堪へて瞋恨なきをいふ。以て解脱した佛弟子の袈裟に冠していふ。
○原　[illegible]と同じ。接尾語。たち。ども。

物ならば理非辨へぬ賴朝を討取て、判官殿の天下とせん、我々が所存此通り、法眼殿の御料簡承らん」と申ける、「イヤまだ申されぬ、法橋殿の御懇意有近頃の客僧、横川の禪師覺範此場へ參り合さず、此料簡も聞ねば言はれず、などや遲きぞ待久し」といふ間程なく山道を、靜々歩み來る法師は名にし負たる横川の覺範、衣のつゆ高く取り三尺五寸の太刀佩き反し、末座に坐れど丈高く僧柄、ゆゝしく見へにける、「ヤア待兼し覺範殿、近う近う」と招き寄せ、法眼すんど立上り、「コレ〳〵覺範、アレ見られよ、霞の中に朧なる、二つの山は妹背山、是合體の歌名所、川を隔てて西は妹山、東は背山、山は二つに分れたり、妹は妹弟の義、背山は元より兄賴朝、賴朝・義經兄弟の中、吉野川引分れし、姿は山に異らずされば歌にも流れては、妹背の山の中に落つる、吉野の川の、よしや世の中と詠みたれば、世を捨人の我々でも、賴に引かぬか但しは又、浪の白刃で討取氣か、手短き返答聞ん、申されやつ」といひければ、思案に及ずすつと立打頷いて、藏王堂に掛け奉る、奉納の弓と矢取て弦縛し、「河連殿御覽有と手短き我返答、山と山との目通りに立たる一木は勝負の目當、返答御覽」と弦打つがひ、かたむる迄

○横川覺範　吉野山の荒法師であつて義經の敵。「吾妻鏡」に卷四十一で佐藤忠信に討たれたことが見えてゐる。

○露　大衣・水干・狩衣・法衣などの袖括りの緒の末の垂れた端の稱。

○山出し　すかれたるをいふ。

○すんど　すつと立ちあがるさま。すつくと。

◉妹背山　妹山と背山。妹山は大和國吉野郡龍門村河原屋、吉野川の北岸にあり、背山は吉野郡吉野町飯貝のところにあつて、吉野山の南岸に位する。この兩山は上市の東に當り、吉野川を隔てて相對してゐる。（別に紀伊の背山もある）。

○流れては…よしや世の中　この歌は「古今集」卷十五・戀歌五の部に「讀人知らず」として出てゐる。一首の意は、吉野川が流れ落ちて妹山背山の中を隔てるやうに、人間男女の中も長らへて年久しくなれば、先のやうにいつまでも睦じいものではなく、一日遠隔りのできるものであるが、ええままよ、これが世上の常體であるといふ意。

○世を捨人　俗を離れた人。僧の身をいふ。僧侶。

○浪の白刃　白刃には刃形に波の模様があるによつていひ、吉野川の浪の縁にもきかせた。

なくはつしと放す、白矢は背山の印シの木根深に搖つて立たりけり、法眼きつと見、「頼朝に准へたる背の山に弓引かれしは、頼朝に敵對ふて義經の味方よな、ムウ〳〵」と計以前の狀、くるくる卷いて懷中し、「山科法橋・梅本坊・藥醫坊も其通りや」、皆一同に「義經の味方味方」と呼はれば、「ムウそれならば法眼が所存も是にて明さん」と、同じく弓矢手に取上引堅めたは何方を的、どちらに付クぞと見る中チに、※かつきと放すは義經に名ざす妹山弟の山、「ヤア扨は法眼頼朝方、義經に弓彎かるゝよな」、「如何にも、落人に與せんより、世に連れて一山シの破滅にせぬが※仕置の役目」、「しかとそふや」、「イヤ覺範※味な所に念か入、義經此山を頼なば引かけて匿まはれよ、※金輪際此法眼、搜出して討つて見せう、其時は敵味方、無分別成衆徒原に談合せし隙惜しや、今日の參會是迄是迄、さらば、さらば」と言捨に、駕を待タずして立歸る所存の、程ぞ訝しき、跡に鬼佐渡口あんごり、「ありや何シの事どふ云ふ事、言合せたは皆※すまた、覺範はどふ思ふてぞ」と、山科諸共尋れば覺範ふつと吹出し、「其淺い料簡故、法眼が底意を知らぬ、今の詞でとつくりと、義經を匿まひ居る底の底迄皆知れた、法眼も我所存、義經の味

○かつき　弓から矢の放れる時に發する音の形容語。近松作「百合若大臣野守鏡」に「きり〳〵〳〵と引き絞り、暫し固めてかつきと放し」。
○仕置　取締り・處置すること。河連法眼は吉野一山の檢校職なれば「仕置の役目」というた。
○味な　妙な。變な。（見索引）
○金輪際　（見索引）
○すまた　「すまこ」（徒的）の轉であらう。あて外れ。當違ひ。「好色盛衰記」に「知らぬ諸にすかいまた[illegible]」。近松作「[illegible]鼓」に「[illegible]の毒な、[illegible]の思案ごと皆すかいまたじや」。
○眼中　心に思へることが眼つきに顯はれること。
○へつ　[illegible]
○釋門　佛門。佛道修行。
○[illegible]より　[illegible]。
○孫呉が兵書　孫武撰の「孫子」、吳起撰の「吳子」。共に兵法七書の一。
○したかぶと　「ひたかぶと」（直兜）の訛。一同

方とは嘘と睨んで歸つた眼中、事延々に計らはゞ、落しもやらんも計られず、今宵八つの手筈を定め、夜討に入て討ッて取。鎌倉殿の恩賞に預かれ方々、覺範が夜討の懸引催促を、聞や／＼」と大木の、朽根にどつかと腰打掛け、「我釋門のより／＼に、孫呉が兵書諳じたり、我詞を過たず、荒法橋はしたかぶと十騎餘り燈籠が辻より一文字に、彼か館にひた／＼と押寄せて、喚鐘三つ四つ亂聲せよ、鬼佐渡は又如意輪寺の裏の手を眞直に、六地藏の橋を引、敵逃來る時を待さんざんに射て留めよ、此覺範は新坊谷の坊に火をかけ火を上て聖天山より、無二無三に駈散らして勝利を得ん、今夜の勝つ事手裏に有勇め勇め」と言ひければ、藥醫坊頭を打振り、「それは味方の思ふ儘、敵強うして荒法橋か手勢を投退け、駈散らし驀直に討て出、勝手の宮を陣所として、門をひつしと打たばいかに」、「ホウ理にも咎めたり、其時は八王子金剛藏王の袖振山、峰に上つて眞下りに引請め、差詰め射るならば其處もたまらす逃失せん」、「ヲヽ其時はまだ咲かぬ櫻の木隱れ枝隱れ、木の間木の間の細道を、逃行く先は天皇橋、大將軍の多寶塔、時に取つての隅櫓、追ひ來る衆徒を待かけて射かくる矢先は扨いかに」、「小ざかし

甲出[illegible]ること。
○燈籠が辻　吉野山吉水院の附近にある。「吉野山獨案内」卷一に「吉水院より町へ出、西へ一町ばかり行けば、筒井[illegible]弘法大師開持し給ふ名水あり、同所に燈籠の辻あり」。
○喚鐘　鐘の小さきもの。半鐘。(見索引)
○如意輪寺　大和國吉野郡吉野山塔尾にあつて中千本の東に當る寺院で、本尊は如意輪觀音。
○六地藏の橋　吉野山子守明神の附近、六地藏の所にある城の橋をいふか。
○新坊谷　吉野山中院谷をいふか。
○聖天山　「大和名所圖會」插圖に、吉水院のある[illegible]山に聖天[illegible]とある、蓋しこの山であらう。
○勝手の宮　吉野山内、袖振山のあたりにあつた、吉野山八神の一。
○理にも咎めたり　[illegible]ることわり也。
○八王子金剛藏王　吉野山内、袖振山の峯にある。
○天皇橋　吉野山[illegible]にある。「吉野山獨案内」卷四に「道の行手に天皇の橋あり、かたみに大塔天皇の宮あり」とあつて圖を載せてある。
○大將軍　吉野山中院谷の東。[illegible]藤忠信に討たれた龍返しといふ所もこの邊りにある。
○多寶塔　[illegible]塔をいひ、大將軍の地域内にあつたのであらう。
○隅櫓　[illegible]

し荒法橋、何ゝ條射る共落人が、持ッたる矢種は數知レたり、彎ては寄せ、寄せては彎、矢種盡くさせ討取ルに何ンの手間隙入べきぞ、恐れな音すな用意せよ、いそふれ方々其昔、天武の軍有し時乙女下つて舞奏づ、是反閇の始めなり、いざ勝軍の儀を取ッて」、とう〳〵とろ〳〵踏みならす。左リに七足、右七足、左右合して十四足、はた〳〵はつしと踏納め、「サア行ケ進め」と逸散に、勇み足して立歸る、横川の禪師覺範が勇氣、稀なる　三重

鶯の、聲なかりせば、雪消へぬ山里、いかで、春を知らまし、春は來ながら、春ならぬ九郎判官義經を御慰めの琴三味や、河連法眼が奥座敷、音じめも世上忍び駒、琴柱に立る鴈がねも、春を見捨てぬ心ざし實に頼もしきもてなしなり、今朝より他出の法眼心に一チ物有顔に、悠悠と立歸れば、妻の飛鳥は出向ひ、「ヲ、殊ない早いお歸り、今日の御評定一ッ山ンのお仕置か、但は又奥のお客、義經樣の御事かは」と尋ぬれば、「ヲ、サ、義經の事共〳〵」、「ム、ウ扨は吉野一ッ山殘らずお味方といふ樣な品にもや」、「成程成程、衆徒の中にも返り坂の薬醫坊、山科の荒法橋、梅本の鬼佐渡等、別しては横川の覺範、一チ番立ッて義經の味

○音すな　音を立てて敵にさとられるな。
○いそふれ　「いざうれ」に同じ。誘ひ立てる時に発する感動詞。さあさあ。
⊙天武…始めなり　天武天皇吉野に居給うた事あればかくいうた。
⊙反閇　貴人が神拝又は外出の時に凶変なきやうに邪気を除く為、陰陽家が行つた呪法。
○とう〳〵とろ〳〵　踏み鳴らす音の形容。（鼓の譜にいふ語にも「とうとうたらり」といふのがある。これを[illegible]といふ一説には従はぬ）。
○稀なる　「稀なる振舞なり」などいふべきを、三重の為に略した。
○鶯の聲…春を知らまし　「消へぬ」は「消えぬ」の誤。この歌は「拾遺集」巻一・春の部に出て、中務[illegible]の詠である。
○忍び駒　三味線の胴に[illegible]を挟み、余り音の立たぬやうにして弾くこと。
○鴈がね　琴柱の並べるに雁行に似たればいふ。[illegible]。雁は春去る渡り鳥なれば「春を見捨て」にいひつづけた。以て[illegible]をほのめた。
○殊ない　「殊なう」ともいふ。別して。殊の外。近松作「雪女五枚羽子板」に「上（うへ）にはことない[illegible]」に「[illegible]」。
○[illegible]　[illegible]
○一端　まつさき。率先。近松作「[illegible]」第[illegible]

一に「雲上に留まり侍るにつくるたへいちはなかけ」□け「けり」。

○天に口なし　言はしむ　この諺「平家物語」などにも出づ。

○ほんぼん　本ほんに「蘆間」の意。近松作「傾城反魂香」に「打明けて下さんすがほんぼんの□□□」

○隔て　心を隔て。うちとけないで。□□□□□小行丸本に「へだゝては下さるぞ」とある。

方といふは、我心を捜し見ると知つたる故、此法眼は鎌倉方と言放つて歸つたり」、「ムウ鎌倉方とおつしやるは、衆徒の心を此方からも、捜して見る御料簡」、「イヤ〳〵法眼今日より心を改め、義經とは敵味方」、「エヽイ、あのお前は義經樣を」、「ヲヽ鎌倉殿へ討て出す氣、合點行ずば是見よ」と、懷中の書翰投出せば手に取上、文言殘らず讀み終り、「ムウ義經公此山に御忍びまします事。鎌倉へ知れた樣な文體」、「ヲヽいかにも汝が言ふ如く、天に口なし人を以て言はしむる、告知らせた者なくて小舅の茨左衞門。斯く云ふて越すべきや、內通せられて知れたる上は遁れなき判官殿、人に手柄させんより、我手にかけて討つ所存」、「ヤア夫ゝは眞實か」、「おう」、「イヤほん〳〵に此方樣は、義經を切ル心か」「くどいくどい」、「地ハアはつ」と、胸も塞詰めし夫が刀拔くより早く、自害と見ゆる女房が、持たる刄物引たくり、「詞こりや何ッとする何で死ぬ」と、地言ふ顏屹度打守り、「詞エヽ聞へぬぞや法眼殿、何故隔てては下さるぞ、恩賞の御下し文、千通萬通來たとても、一ッ旦の契約變ずる、此方の氣質じやない、鎌倉殿の忠臣茨左衞門が妹の飛鳥。義經公の御隱家。兄の方へ知らせたかと此狀が來た故に疑ふての心じ

やの、覺へない言譯をまだまだとして居られぬ、疑ふよりは一ト思ひに殺して下され法眼殿」と恨み、涙ぞ實なる、法眼始終を聞すまし、以前の一ッ通取より早くずん／＼に引裂き／＼、「僞りに命は捨てまじ、女房を疑ふは未練には似たれ共、義經公へ拔目なき我忠節、衆徒等が胸中探りし序、心引見る此贋狀、引裂き捨つれば安堵して、自害を止まれ女房」と、解くる詞は春の雪、恨も消へてなかりけり、「ヤア法眼歸られしな、面談」と義經公、奥の間より出させ給ひ、「鞍馬山の誼を忘れず、一チ一チの御厚志祝着詞に述べがたし、豫て申談ぜし通り、今日の衆徒の評定委細あれにて承知せり」と、御諚にはつと頭を下け、「師の坊の命といひ只ならぬ御方、疎略なき心底御存の上は身に餘る悅び此上や候べき、武藏坊は奥州秀衡方へ遣はされ、御家臣とて少ければ龜井・駿河なんどが如く、思召下されよ」と、申詞の内使罷出、「佐藤四郎兵衛忠信殿、昔の御行方を尋御出なり通し申さんや」と伺ふにぞ、「扨は無事にて有つるな、此方へ通せ對面せん」と、御傳ふる次の間へ法眼夫婦は立ッて行、案内に連れて入來る、四郎兵衛忠信、御座の間の此方に出、絶へて久しき主君の顏、見るも無念のあら涙差しうつ、む

○まだまだ　「まだるよだる」(間怠間怠) の略。ぐづぐづ。べんべんだらり。

○祝着　よろこび祝ふこと。滿悅。(既出)

○師の坊　東光房。「義經記」卷一、牛若鞍馬入の條に「鞍馬の別當東光房の阿闍梨は義朝の祈の師にておはしける」。

○龜井・駿河　義經の臣である龜井六郎重淸と駿河次郎。

○無念　義經の零落せることを悲しんで、口惜しく思ふこと の意

いて詞なし、大將御機嫌斜めならず、「詞 汝に別れ此處彼處鎌倉殿の御詮議強く、身の置所なかりしに、東光房の弟子、河連法眼に匿まはれ、地 心ならざる春を迎へ、暫くの命をつぐ、詞 我姓名を讓りし其方、命全く有事我運のまだ盡きざる所賴もしし、悅ばし、其砌預けたる靜は如何なりしぞ」と、御尋有ければ忠信不審げに承はり、「詞 コハ存かけなき御仰、屋島の平家一時に亡び、天下一ッ統の凱歌を上給ふ折から、告げ來る母が病氣聞し召し及ばれ、御暇賜はつて本國出羽へ歸りしは去年三月、程なく別れし母が※中陰、忌中に合戰の疵口※おこづき、※破傷風といふ病と成、既に命も危き半、御兄弟の御中裂け堀川の御所沒落と承はる口惜しさ※胸を煎る程重る病氣無念さ餘つて、腹切らんと存せしかど、せめては主君の御顏容、今一度拜し奉らんと、念願叶ひて本復遂げ、※初立の長旅忍びの道中恙なく、此館に御入と承はり、只今參つた忠信に姓名を賜はりし、靜御前を預けしなんど御諚の趣、※かつ以て身に覺へ候はず」と、地 言はせもあへず氣早の大將、「詞 ヤアとぼけな忠信、堀川の館を立退きし時、折よく汝國より歸り靜が難儀を救ひし故、我※著長を汝に與へ、九郞義經といふ姓名を讓り、靜を預け別れし其

○中陰　中有の略であつて中有ともいひ、現世から逝去して未來世に生を受ける七七日（卽ち四十九日）間をいふ。

○おこづく　せきつき病む。「俚言集覽」に「おごつく　咳などの頻りにおこるを云」とあるはこの語か。

○破傷風　破傷風菌が創傷より侵入繁殖して起り、發熱と痙攣とを伴ひ、更に顏面や全身の諸筋肉が痙攣強直するに至る病。

○胸を煎る　胸を焦す。いたく思ひわづらふ。

○初立の長旅　忠信が病氣全快の後、初めて出立つ長旅。後に「忍びの道中」とあるは、義經の道中である。

○かつ　副詞（かつて）で。全く。この副詞は下に必ず打消の語を伴ふ。「萬葉集」卷四に「都毛不知（かつても知らぬ）」。「且」の字ではない。

○著長　鎧（著背長）。ここの文にある事柄は第二[illegible]堀川御所の段に詳しく述べてある。

○世になき　日陰の身なるをいふ。
○まざまざし　「正正し」である。誠らしい、眞實らしいの意に用ひ、心に伴つた言語動作を誠らしくする形容に用ひた。近松作「聖德太子繪傳記」二に「あの人にまざまざしい嘘やいふな」、「まざまざしく」とも混同してゐるのは近松及びその後の淨瑠璃に往々見る所である。
○うつけぬ　放心せぬ。ぼんやりせぬ。
○推參　推し參る義より轉じて、無禮・我儘をいふ。
○面縛　兩手を後に廻して縛り、面を前方に差出させること。「史記」宋微子世家にある「面縛」の註に「面縛者、縛其手於背、而面向前也」とある。
○はせ折る　折り挾む。「はせる」は「はしをる」「端挾む」の意であらう。
○反打ちかけ　腰に帶びてゐる刀の鞘のそつた方を下にして、拔打しようとし、
○腕廻せ　兩手を後に廻せ。これは面縛する爲である。
○引括　引縛つて糺問すること。
○奏者　取りつぎ。取次。古昔、天子に奏聞を取次ぎ、又主君に言をいひ、總じて公方・諸侯などにて取次をする役の稱。
○面晴れ　面前で疑念を晴すこと。

方、世になき我を見限つて、靜を鎌倉へ渡せしな、義經か所在搜しに來たか、只今國より歸りしとは、まざ〳〵しき僞表裏、漂泊してもうつけぬ義經、謀らんとは推參なり、不忠二心の人外、アレ引括つて面縛させよ、龜井・駿河」と腹立の、聲に駈來る二人の勇士、裾はせ折て忠信が、左手右手に反打かけ、「委細あれにて皆聞た、サア腕廻せ四郎兵衞」、「靜御前の御行方、サア明白に白狀せよ」、「踏付て繩かけふか」、「拷問して言はせうか」「サアどふじや」、「サアどふじや」とせりかけられて詮方無、差添共に投出し「兩人待つた麁忽すな」、「待とは但言譯有ルか」、「サア聞ふ」「サアなんと」、「なんと〳〵」に難儀の最中、「靜御前の御供申、四郎兵衞忠信殿御出なり」と、奏者が聲に人人仰天、「何忠信か又來たとは、合點行ず」と聞もあへず、以前の忠信立上り、「我名を騙るは何でも曲者、引括つて大將への面晴せん」と駈行を、「ヤアならぬならぬ、詮議の濟む迄動かさぬ」と龜井が向ふを支へたり、「ヤアさな爲そ六郎、忠信是に有ル上に、又忠信が靜を同道、何にもせよ仔細そあらん、片時も早く是へ通せ」、「あつ」と龜井は次の間へ、我身危む忠信は默して、樣子を窺へば、別れ程經し、君が顏見たさ逢

○とけしなく [illegible]「し」は[illegible]助詞で[illegible]いとけなく、[illegible]しい。近松作「[illegible]丸」に「[illegible]なき、牛の玉鉾遅くとも」。
○輪廻 愛着[illegible]の意。附纏つて離れぬこと。(既出)
○ならねば する事が[illegible]から。
○まんがち 「[illegible]」の訛転した語。我勝ち。自分勝手。
○じやらじやら 喋しやべるさま。べらべら。
○てんがう じやうだん。惡戯。いたづら。ふざけ。

ひたさとつかはと、河連が奥の亭、歩み來る間もとけしなく「ノウ我君か懷しや」と、人目厭はず縋り付キ戀しゆかしの溜々を涙の色に知らせけり。「ヲヽ女心に歎くは、尤、別れし時言ひ聞せし如く、人の情に預かる義經、輪廻きたなき擧動ならねば、情なくはもてなしたり、忠信を同道とや何處に有」と尋給へは「たつた今次の間迄連立て參りしが、爰へはまだか」と見廻し〳〵「それ〳〵、ても早う爰へ來てじや、一所にお目に懸るものを、ちつとの間に先へ拔けがけ、まだ軍場かと思ふてか、まんがちな人では有ル」と恨口なる詞に不審、一倍晴れぬ四郎忠信、「我君も其如く覺へなき御尋、拙者めは今の先、出羽の國から戻りがけ、去年お暇申てからお目に懸るは只今初メて」、「ヱヽあの人のじやら〳〵とてんがうな事計」、「てんがうでなし大眞實」、「アレまだ眞顔で欺すのか」と、何げもなまめく詞の中、立戻る龜井の六郎、「靜樣同道の忠信引立來らんと存せし所、次の間にも有あはさず、玄關長屋所所方方尋ても知れず候」と、申スに心迷はせ給ひ、「コレ靜、爰に居るは其方を預けたる忠信ならず、只今國より歸りしと物語りする中チ、忠信靜を同道との案内、二人有ル中チにも見へざるは不審者

面體似たる贋者ならずや、靜心が付ヵざるか」と、仰の中ヶに忠信を、つれ〴〵と打眺め、「ハアどふやらそふおつしやれば、小袖も形も違ふて有、アヽお待遊ばせや、ハツアそれか、ヲヽそふじや、思ひあたる事が有。君が形見と別れし時賜はりし初音の鼓、御覽遊ばせ此樣に、肌身も放さず手に觸れて、忠信の介抱受け八幡・山崎・小倉の里所所に身を忍び居たりしに、折々の留守の中ヶ、君戀しさの此鼓、打て慰む度々、忠信歸らぬ事もなく其音を感に堪ゆる事、ほんに酒の過ぎた人同然打止めばきよろりつと何氣ない顏付ヶは、よく〳〵鼓が好きそふなと初手は思ひ二度三度、四度目にはても變つた事、又五度目は不思議立、六度目には怖氣立、それよりは打たざりしが、君は爰にと聞付ヶて、心せく道忠信にはぐれた時、鼓の事思ひ出し、打てば不思議や目の前に、來る共なく見へたるは、女心の迷ひ目かと思ふて連立、來りしに、又此仕儀はどふぞいの」と申上れは、義經公、「ムウ鼓を打てば歸り來るとは、それぞよき詮議の近道、靜其方に言ひ付ヶる其鼓を以て同道した忠信を詮議せよ、怪しい事あらば此刀で」と投出し、「我手で打たれぬ鼓の妙音、それを肴に一ツ獻酌まん、早々鼓打ヶ打ヶ」と、言捨て奧

○つれつれ　つらつら(熟々)。つくづく。近松作「冥途の飛脚」に「何人なればこの樣に懇にして下さるぞ、顏をつい〳〵つれ〳〵たがむれば」。

○八幡　山城國綴喜郡八幡。

○山崎　山城國乙訓郡山崎、

○小倉　山城國久世郡小倉。

○感に堪ふる　深く感じながら、じつとこころへてゐる。

○我が手で打たれぬ鼓　義經は初音の鼓を拜受して一生打つまいと決心したことが、第一・第三段に見えてゐる。

に入給へば、龜井・駿河も忠信に引添ひてこそ入にけれ、靜は君の仰を受け、手に取上て引結ぶ辛氣しんくを綱交せの、調べ結んで胴かけて手の中しめて肩に上げ、手品もゆらに打鳴らす、聲清、清と澄み渡り、心耳を澄ます妙音は、世に類なき、初音の鼓、かの、洛陽に聞へたる、會稽城門の越の鼓、かくやと思ふ春風に、誘はれ來る佐藤忠信、靜が前に兩手をつき、音に聞とれし其風情、すはやと見れど打止まず、猶も樣子を、調の音色、聞入り聞入る餘念の體、怪しき者とは見て取ル靜、折よしと鼓を止め、「遲かつた忠信殿、我君樣のお待兼ね、サアサア奧へ」と何氣なき、詞に「はつ」とは言ひながら、座を立おくれて差俯向く、油斷を見すまし切付ヶるを、ひらりと飛びのき飛しさり、「コハ何ッとなさるるぞ」と、咎められて氣轉の笑ひ、「ホヽヽヽヽム、あの人の氣疎い顏、久し振の靜が舞、見よふと御意遊はす故、屋島の軍物語を、舞の稽古」と鼓を早め、かくて源平入亂れ、船は陸路へ陸は礒へ、漕寄せ打出打鳴ら、鼓に又も聞入て餘念※たはひもなき所を、「忠信やらぬ」と又切かくる、太刀筋交してかい潜るを付入柄元しつかと取、「何科有て欺し打に、切る、覺へかつつて無し」と、刀たくつ

○しんく　[illegible]即ち鼓の緒の[illegible]をいふのであるが、辛氣を「しんく」といへば、これをもいひかけた。近松作「長町女腹切」に「皆様半七の朋輩衆か、しんくな仕事でござりんす」。「辛氣」は心のくさくさして浮き立たぬ事。即ち靜の憂苦を、眞紅の緒でよつた鼓のしらべにいひかけた。

○手品　てつき。手のふり。

○もゆら　[illegible]の搖れて鳴る音をいふ。「萬葉集」卷十九に「小鈴毛由良備」と見え、「神代紀」に「瑲瑲」[illegible]を「もゆら」と讀んである。但し鼓の美音の意にいうた。

○心耳　心の耳といふ意、心中に聽くことをいふ。(心と耳との意ではない)。謠曲「天鼓」に「打ては不思議や[illegible]、心耳を澄ます聲[illegible]」、李太白の詩句に「漂澁一聽澄二心耳一」。

○江戸　江戸半太夫の創作した淨瑠璃節の一派なる江戸節。(既出)

○洛陽に聞えたる會稽城門の越の鼓　「日孔子[illegible]、[illegible]大鼓、名[illegible]門、有白鶴[illegible]、[illegible]門[illegible]鼓[illegible]故事に據つた。洛陽は河南省河南府洛陽縣治。

○會稽　浙江省紹興府の東南にある山。會稽から[illegible]百[illegible]里[illegible]ある。

○餘念の體　思ひ餘つて感慨無量の體。

○たわいもなし　何の思慮もなく、しまりなきさまをいふ。

○かつつて　「かつ(都)て」に促音「つ」の添加した語。全然。「かつ」(既出)を見よ。

て投捨つれば、「贋忠信のサア白狀、仰を請けた靜が詮議。言はずば斯うして言はする」と鼓押取はた〳〵〳〵、女の弱き腕先に打立られて「ハアはつ」と、誤り入たる忠信に鼓打付ヶ「サア白狀、サア〳〵〳〵さあ」と詰寄せられ、一句一ッ答詞なくたゞ平、伏して居たりしが、漸々に頭を擡げ、初音の鼓手に取上、さも恭しく、押戴き押戴き、靜の前に直し置キ、しづ〳〵立て、廣庭へ下りる姿もしほ〳〵と、見すぼらしげに、手をつかへ、「今日が日迄隱し遂せ人に知らせぬ身の上なれ共。今日國より歸つたる眞の忠信に御不審かゝり、難儀となる故據なく、身の上を申上る始りは、それなる初音の鼓、桓武天皇の御宇、內裏に雨乞ありし時、此大和の國に、千年劫經る牝狐牡狐、二疋の狐を狩出し、其狐の生皮を以て拵へたる其鼓、雨の神を慰めの神樂、日に向ふて是を打てば、鼓は元來波の音、狐は陰の獸故、水を起して降る雨に、民百姓は悦びの聲を初めて上げしより、初音の鼓と號け給ふ、其鼓は私が親、私めは其鼓の子でござります」と、語るにぞつと怖氣立、騒ぐ心を押鎮め、「ム、其方の親は此鼓、鼓の子じやと言やるからは、扨は其方は狐じやの」、「ハツア成程、雨の祈りに二親の狐を

○しをしを　萎の義。悄然。
○劫　梵語、劫簸（Kalpa）の略、大時分また分別時節と譯し、極めて長大な時間をいふ。
○鼓は元來波の音　波の音を形容して[illegible]などいへばかくいうた。
○狐は陰の獸　狐のことを夜の殿ともいひ、おもに夜陰に徘徊するものなればかくいうた。
○初音の鼓　初音の由來に就いては、近松作「吉野忠信」の文中に說明してある。
○鼓　「鼓の革」の略。
○藻を潰く　「燕石雜志」巻一、雪月花の條にも「昔より狐の妖[illegible]藻を被[illegible]とかいふめれど」とある。
○鳥居の數も重なり　俗說に狐は多く鳥居をくゞる事を好むといふ、稲荷社に鳥居を多く立てるもこの俗說による
○六萬四千　[illegible]

取られ、殺された其時は、親子の差別も悲しい事も、辨へ無きまだ子狐、藁を被く程年も長け、※鳥居の數も重なれど、一日親をも養はず、産の恩を送らねば、豚狼にも劣りし故、※六萬四千の狐の下座に着き、たゞ野狐と輕蔑まれ、※官上りの願も叶はず、親に不孝な子が有レば、畜生よ野良狐と、人間ではおつしやれ共、※鳩の子は親鳥より枝を下つて禮儀を述へ、※烏は親の養ひを、育み返すも皆孝行、鳥でさへ其通り、まして人の詞に通じ、人の情も知る狐、何程愚痴無智の畜生でも、孝行と云ふ事を、知らいで何と致しませう、とは言ふものの親はなし、まだも頼みは其鼓、※千せん劫經る威徳には、皮に魂留まつて、性根入たは則ち親、附添ふて守護するは、まだ此上の孝行と、思へ共淺ましや禁中に留置給へば、※八百萬神宿直の御番、恐れあれば寄付かれず、※頼みも綱も切果ては、前世に誰を罪せしぞ、※人の爲に仇する者、狐と生れ來るといふ、因果の經文恨めしく、日に三度、夜に三度、※五臟を絞る血の涙、火焔と見ゆる※狐火は、胸を焦する、炎ぞや、かほど業因深き身も、天道樣の御惠みで不思議にも、初音の鼓、義經公の御手に入、内裏を出れば恐もなし、ハツア嬉しや悦ばしやと、其日より附添ふは義

る白狐なり、我に仇をなすならば、五萬五千の眷族に言付け、却つて汝が命を取る」とありて、これらの數はいづれも、よいかげんなもので定まつた數ではない。
○官上り　俗に狐に正一位稲荷大明神などと位をつけるによつてかくいうた。
○鳩の子　禮儀を述て　「學文抄」に「鳩有三枝之禮」。俗に、子鳩は親鳩より三枝下つてとまるといふ。
○烏は親の　返す　梁武帝の「孝思賦」に「慈烏反哺以報親」、白居易の「慈烏夜啼」の詩句に「慈烏失其母、啞々吐哀音、……未盡反哺心」云々」。俗に烏に反哺の孝ありといふ。
○千せん劫　近松作「[illegible]」に「千劫萬劫の狐なり」などと見えてゐるから、これも「千年劫」であらう。或は「千年功」の訛か。
○八百萬神　極めて多數の神々。「祝詞式」大祓詞に「八百萬神等乎神集々賜比」。
○頼みも　「頼みの」とあるべきところ。
○人の爲に仇する者狐と生れ來る　「業報差別經」に、「衆生を惱害する者は畜生に生るること」あるに據つたものであらう
○五臟　肝、心、脾、肺、腎。
○文彌　岡本文彌の語り始めた哀婉な調の淨瑠璃節。
○狐火　狐が動物の骨などをくはへて叢「くさむら」に這入る時、その骨から燐光を發つことを見ていひだしたものであらう。

○稲荷の森　伏見稲荷の森。
○源九郎　源九郎狐のことは、西鶴撰「諸國咄大下馬」卷二に「萬民を煩はせける、大和の源九郎狐が爲には姉なり、年久しく播磨の姫路に住みなれて」とある。
○果　佛果の果。菩提と同じく眞如の理を證悟した聖智の義。人間の果とは人間の智力の意。
○親父樣、母樣　初音の鼓の兩面が二親（父母）の革で、はつてあるのでかくいふ。

經公のお蔭、稲荷の森にて忠信が、有合さばとの御悔、せめて御恩を送らんと、其忠信に成代り、靜樣の御難儀を、救ひました御褒美と有って、物體なや畜生に、清和天皇の後胤、源九郎義經といふ、御姓名を賜はりしは、空恐しき身の冥加、是といふも我親に孝行が盡したい。親大事〳〵と思ひ込んだ心が屆き、大將の御名を下されしは人間ンの果を受けたる同然、いよ〳〵親が猶大切、片時も離れず附添ふ鼓、靜樣は又我君を、戀慕ふ調の音、變らぬ音色と聞ゆれ共、此耳へは二親が物言ふ聲と聞ゆる故、呼び返されて幾度か、戻つた事もござりました、只今の鼓の音は、私故に忠信殿君の御不審蒙つて、暫くも忠臣を、苦しますは汝が科、早々歸れと父母が、教の詞に力なく、元の古栖へ歸りまする、今迄は大將の御目を掠めし段、お情には靜樣、お詫びなされて下さりませ」と、縁の下より伸上り、我親鼓に打向ひ、交す詞の後聲も、涙ながらの暇乞人間よりは、睦じく「親父樣、母樣、お詞を背きませず私はもふお暇申まする、とは言ひながら、御名殘惜しかるまいか、二タ親に別れた折は何ンにも知らず、一チ日〳〵經ッに付、暫くもお傍に居たい、産の恩が送りたいと、思ひ暮し、泣明し、焦れた月

○胴慾　貪慾（どんよく）の轉。むごいこと。殘酷。
○せらるは　「せらるゝは」の誤か。
○輪廻の絆　附纏つて離つに忍びぬ情愛。「輪廻」は既に說いた。
○悲しい　慈悲の悲と同意で、憐れみ深く可愛い意。
○業　業因。

日は四百年、雨乞故に殺されしと、思へば照る日が恨めしく、曇らぬ雨は、我涙、願ひ叶ふが嬉しさに、年月馴れし妻狐、中に儲けし我子狐、不便さ餘つて幾度か、引かるる心を胴慾に、荒野に捨てゝ出ながら、飢ゑはせぬか、凍ゑはせぬか、もし獵人に捕られはせぬか、我親を慕ふ程、我子も丁度此樣に我を慕はふがと、案じ過しがせらるは、切ても切レぬ輪廻の絆、愛著の鎖に繋ぎ留められて、肉も骨身も碎くる程、悲しい妻子を振り捨てゝ、去年の春から附ト添ふて、丸一年經ッや經タず、去ねと有ルとて何とまあ、あつと申て去なれましよかいの〳〵、お詞背かば不孝と成ル、盡した心も水の泡せつなさが餘つて歸る、此身は何シたる業、まだせめてもの思ひ出に、大將の賜はつたる、源九郎を我名にして、末世末代呼ばるゝ共此悲しさは何とせん、心を推量し給へ」と泣つ、口說いつ身もだへし、どうど伏して泣叫ぶは、大和の國の源九郎狐といひ傳へしも哀れなり、靜は流石、女子氣の、彼が誠に目もうるみ、間の方に打向ひ、「我君それにましますか」と申内より障子を開き、「ヲゝ委しく聞屆けし、扨は人にてなかりしな、今迄は義經も、狐とは知らざりし、不便の心」と有ければ、頭をうなだれ禮をな

○ちつ、ぽう　鼓の音を形容して「チッポウ」といひ、「タツポウ」ともいふ。「ちつともぽうとも」とあるは「チッポウ」を分けた語。
○長田　源義朝は尾張國の住人長田四郎忠致に殺された。（「近江源氏先陣館」第七には、「をさだ」と濁點がある）。
○日陰　世をかくれしのぶこと。
○前世の業　宿世の業因。
○宿執　宿世の執着。前世からの因果。「十訓抄」中・第六に「宿生の宿執さま〴〵なれば、佛の御教へも亦さま〴〵なり」。
○つむ　抓む、節をつめる。「身に抓まさるる」とは、我が身の悲痛を實感して、人の悲痛に同情するをいふ。

し、御大將を伏拜み〳〵、座を立は立ながら、鼓の方を懷かしげに見返り。見返り行となく。消ゆる共なき春霞人目朧に見へざれば、大將哀れと思召し「アレ呼び返せ鼓打て、音に連れ又も歸り來ん、鼓鼓」と有けるにぞ、靜は又も取上て打てば不思議や音は出でず、「是は〳〵」と取直し。打共〳〵こは如何に、ちつ共ぽう共音せぬは、「ハア扨は魂殘す此鼓。親子の別れを悲しんで音を止めたよな、人ならぬ身もそれ程に、子故に物を思ふか」と、打萎るれば義經公、「ヲヲ我とても生類の恩愛の節義身に迫る、一日の孝もなき父義朝を長田に討たれ、日陰鞍馬に成長りせめては兄の頼朝にと、身を西海の浮き沈み忠勤仇なる御憎しみ、親共思ふ兄親に見捨られし義經か、名を讓つたる源九郎は、前世の業我も業そも何時の世の宿執にて、かゝる業因なりけるぞ」と身につまさるゝ御涙に、靜はわつと泣出せば、目にこそ見へね庭の面我身の上と大將の、御身の上を一ト口には物體涙に源九郎、保ち兼たる大聲にわつと叫べば我と我が、姿を包む春霞晴れて、形を現はせり、義經御座を立給ひ、手づから鼓を取上て「ヤイ源九郎、靜を預り長々の介抱詞には述べがたし、禁裏より賜はり大切の物なれ共、是を汝に

○轉變 前にあつたもの今はなく、今あるものも後になく、種々變轉窮りなき義。以下神通自在の意にいへり。
○眞甲 頭のまんなか。
○車切 (見前引)
○蜘手 八方無盡に刀を振廻すこと。
○かくなわ 「結果」と書き、緒などを結び又はひねつたやうな形をいふ。それの如く刀を振廻すこと。「和名抄」に「結果、和名加久乃阿和」「下學集」に「結果、品論、比間亦有」之、今案加久乃阿和」「平家物語」合戰の條に「蜘蛛手かくなわ十文字、蜻蛉返水車、八方透さず斬りたりけり」
○袈裟 恰も僧侶が袈裟を掛けたやうに斜に肩から横脇にかけて斬下げることの意。
○輕捷 輕くてはやいこと。
○得たりや得たり 得意なところを占め得たりの意で、心の運んだ時に發する句。
○ぬかるな 油斷して失策する。「ぬからせ」の「せ」は尊敬の助動詞で、油斷し、失策なされの意。

得さする」と差出し給へば、「何其鼓を下されんとや、ハア、ハア〳〵有難や忝や、焦れ慕ふた親鼓、御辭退申さず頂戴せん、重々深き御恩のお禮今より君の影身に添ひ、御身の危き其時は一方を防ぎ奉らん、返す〳〵も嬉しやな、ヲ、それよそれ、身の上に取紛れ、申ス事怠つたり、一山の惡僧原、今夜此館を夜討にせんと企てたり、押寄せさする迄もなし、我轉變の通力にて、衆徒を殘らず誑つて、此館へ引入〳〵、眞甲立割車切、又一時に掛つし時、蜘手かくなは十文字、或ハ右袈裟左袈裟、上を拂へば沈んで受け、裾を拂はゞひらりと飛、輕捷秘術は得たりや得たり、御手に入て亡すべし、必ずぬからせ給ふな」と、鼓を取て禮をなし、飛が如くに行末の跡を晦まし失せにける、

第五（吉野花矢倉）

登場人物の主な者

佐藤四郎兵衛忠信（義經の臣）　横川の覺範（能登守平教經の變裝）　源九郎狐

川越太郎重頼（頼朝の臣。義經の亡妻の父）　藤原朝方（左大將）

梗概

「吉野花矢倉」　佐藤忠信は源九郎義經と名乘つて鎌倉勢と戰ひ、敵の逃げるを追ふ道に横川の覺範の來るに逢ひ、一騎打の奮戰に時を移したが、（「吉野花矢倉」の題名は、本文に「覺範頻りに打ちかくれば、ひらりと飛んで大木の、櫻の梢に身（忠信の身）をたもつ」と見え、吉野山の櫻を矢倉（櫓とも書く）として戰ふによる）源九郎狐が忠信に加勢した爲、覺範遂に深傷を負ふ。是時義經現はれて、「安德天皇は大原の里なる御母君の許に送り奉つて御出家させ申す」と語つた。折柄川越太郎重頼は左大將藤原朝方を搦めて來たので、覺範はかねて恨みある朝方の首を刎ね、自らは忠信に殺される。かくて安德天皇は大原へ御幸し給ひ、義經は奥州へ下る。

假名手本忠臣藏

解　題

本曲は義士が討入つた後四十七年に當る寛延元年八月十四日から、大阪の竹本座に上演された。作者は竹田出雲・三好松洛・並木千柳である。

本曲はこれまでの義士劇の長所を取つて、工夫を凝らしたものである。其の題名は、平假名の字數と赤穂四十七士と同數であり、一は假名手本に編まれ、一は忠臣の手本となる。（第十一に、義士が著たる羽織の合印、いろはにほへとと立並ぶとあるも、假名手本の題名のちなみとしたものである）。其の總帥たる城代内藏助の名に因んで藏といつた（富豪の所有する數多の倉をいろは別にすることがあつたので、それをもきかした）もので、十一段に分れてゐる。

作　者

竹田出雲掾清定の傳は「菅原傳授手習鑑」のところに述べ、三好松洛及び並木千柳の傳は「夏祭浪花鑑」のところに述べた。

實　説

元祿十四年三月に東山天皇から幕府へ年頭の恒例として、勅使柳原大納言資廉・高野中納言保春、また靈元院の御使清閑寺大納言熙定が江戸へ參られるので、幕府では勅使接伴役を淺野内匠頭長矩（赤穂城主五萬三千石）と伊達左京亮村豐（伊豫吉田城主三萬石）とに命じ、其の後見役が吉良上野介義央であつた。三月十四日は將軍綱吉が勅使を白書院に招待して、勅答申し上げる事になつてゐるので、接伴役の人々はこの日早朝から出仕した。

長矩は豫て禮法を尋ねても、傲慢な義央（六十三歳）はよく教へてくれないで、却つて輕蔑する風があるので、血氣盛りの長矩（三十五歳）は忿懣を抑へかねてゐた。午前十時には勅使が來られるといふので、其の前九時半頃、義央が幕府の奥の用人梶川與惣兵衛頼照（旗下七百石）と、白書院の入口の所で話し合うてゐるのを見付けた長矩は、かつとなつて後から、「この間の遺恨思ひ知れ」と言ひ放ち、義央が振向くところを額に切付け、更に續けざまに背中に切付けたので、義央は俯向けに倒れ、長矩は頼照に抱止められて、殿中大騷ぎとなつた。

幕府では白書院が刄傷で血に穢れた爲に、急いで場所を變へて黒書院を飾り立て、長矩の代りに戸田能登守（佐倉城主五萬五千石）を接伴役に命じて、穩かに儀式を濟した。

幕府は早速義央と長矩との取調べをした。義央の申立ては「自分は人に恨まれるやうな事をした覺えはない。無法に切付けられても殿中であるから敢て手向はなかつた」といひ、長矩の申立ては「遺恨を含んでした事である。御上に對しては恐縮に存ずる」といふのであつた。そこで長矩は田村右京大夫建顯に預けられ、公法を犯した罪によつて即日切腹。義央は手向はなかつた事を褒められ、退出して差支へないから傷を養生せよと、至つて愼重を缺いた裁決であつた。

其の夕方七時頃、上使庄田下總守・目附多門傳八郎・大久保權左衛門が田村家へ來て、「長矩は場所柄も辨へないで刄傷に及んだのは不屆千萬であるから、切腹を申し附ける」と傳へた。長矩は麻裃で出て、畏つてこの申渡しを聽いたが、書置さへも許されず、たゞ上使に對して挨拶し、義央の容態を尋ねたのみであつた。それから庭に筵を敷き、その上に疊二疊を並べ、その上に赤毛氈を敷き、長矩は其の上に坐して、三方に載せた九寸五分の脇差に手を掛けると直ちに介錯人が首を打落した。上使の檢分が濟んで、死骸を蒲團に包み長矩の弟の大學長廣の所へ届け、長廣は之を芝の泉岳寺に葬つた。かくて赤穗の藩士は一人も主君の臨終に立會ふことを許されなかつた。

三月十四日長矩切腹の凶報は、早打で赤穗城に達し、幕府からは城明け渡しの爲に脇坂淡路守・木下肥後守・目附役荒木十左衛門政羽・榊原采女政殊が下り、四月十八日から二十八日までに城を明け渡すこととなつた。

赤穗藩士の中には大石内藏助良雄を始めとして、芳名を萬世に傳へる四十七士も居たのであるから、囂然たる衆議も早く一決し、立派な處置をつけて城を明け渡した。内藏助は十左衛門に對して淺野家の存續を哀訴し、又諸方面へ手紙を出して之を懇請したが、元祿十五年七月十八日遂にこの懇請も水泡に歸したので、亡君の恩に報いようとする遺臣等は、斷然蹶起して復讐の擧に邁進することとなつた。良雄が長男良金を連れて山科に立退き、祇園町の茶屋に遊んでゐたのも、この時から九月頃までであ

つた。

元祿十五年十月七日良雄等は京都を出發して江戸に下り、十一月五日から日本橋の石町に潜んだ。

これより以前に堀部安兵衛、横川勘平等の同志七人は本所の林町五丁目に店を開き、神崎與五郎、前原伊助は本所の相生町二丁目に蜜柑店を出し、いづれも本所の松坂町吉良義央邸の動靜を窺うてゐた。

又大高源吾は荷田春滿の世話で、吉良邸に出入する茶師山田宗徧に弟子入りして、之も吉良家の樣子を窺つてゐる。折節、宗徧から十二月十四日に義央が茶會を催すことを聞いて、直ちに之を同志に通告した。そこで其の日の夕方浪士は堀部と杉野との家に勢揃へをして、身支度をなし、雪夜吉良邸に討入り、遍く邸内を索めて遂に義央を獲、其の首を刎ねた。衆踊躍して相賀し、首を布帛に裹んで槍柲に懸け、護衛して泉岳寺に赴き、奠して長矩の墓に祭つた。

本作との關係は左の通り（この關係以外に、本曲の義士中に、片山源太、深川彌次郎、牧、高松、堀尾、板倉、堀が居る。そして赤穗義士中に、間喜兵衛、吉田澤右衛門、間新六、間孫九郎が居る。）

〔時代〕足利尊氏時代――德川綱吉時代

〔場所〕鎌倉――江戸

〔配役〕高武藏守師直（在鎌倉の執事）――吉良上野介義央（高家）

桃井若狹助安近（桃井播磨守の弟）――伊達村豐

加古川本藏行國（安近の家老）――梶川與惣兵衛賴照

鹽谷判官高定（伯州城主）――淺野內匠頭長矩（播州赤穗城主）（享年三十五）

顏世御前（高定の室）――淺野長治の女（長矩の室）

大星由良之助義金――大石內藏助良雄（享年四十五）

大星力彌――大石主税良金（享年十六）

赤根――赤埴源三（享年三十五）

蘆野――菅谷半之丞（享年四十四）

磯川――磯貝十郎左衛門（享年二十五）

岡崎――岡島八十右衛門（享年三十八）

間野――岡野金右衛門（享年二十四）

奥村――奥田貞右衛門（享年二十五）

奥山孫七――奥田孫太夫（享年五十六）

小寺十内——小野寺十内(享年六十一)
小寺の嫡子——小野寺幸右衛門(享年二十八)
大星瀬平——大石瀬左衛門(享年二十七)
大鷲文吾——大高源吾(享年三十二)
片山源五——片岡源五右衛門(享年三十七)
勝田——勝田新左衛門(享年二十四)
川瀬忠太夫——間瀬久太夫(享年六十三)
菅野——茅野和助(享年三十七)
木村——木村岡右衛門(享年四十六)
鹽田——潮田又之丞(享年三十五)
杉野——杉野十平次(享年二十八)
須田五郎——矢田五郎右衛門(享年二十七)
千崎彌五郎——神崎與五郎(享年三十七)
千葉——千馬三郎兵衛(享年五十一)
竹森喜太八——武林唯七(享年三十二)
立川甚兵衛——横川勘平(享年三十六)
寺岡平右衛門——寺坂吉右衛門
逵の森——富森助右衛門(享年三十四)

遠松——近松勘六(享年三十四)
中村——中村勘介(享年四十五)
早野勘平重氏——萱野三平重實
早見——早水藤左衛門(享年四十)
原郷右衛門——原惣右衛門(享年五十六)
平賀——貝賀彌左衛門(享年五十四)
不破——不破數右衛門(享年三十四)
堀井彌惣——堀部彌兵衛(享年七十七)
堀井彌九郎——堀部安兵衛(享年三十四)
前原——前原伊助(享年四十)
三村次郎——三村次郎左衛門(享年三十七)
村橋傳次——倉橋傳介(享年三十四)
村松——村松喜兵衛(享年六十二)及び村松三太夫(享年二十七)
矢間十太郎重行——間十次郎光興(享年二十六)
矢島——矢頭右衛門七(享年十八)
吉田——吉田忠左衛門(享年六十三)
斧九太夫——大野九郎兵衛
石堂右馬之丞——多門傳八郎重兵

藥師寺次郎左衛門――庄田下總守安利(上杉家の附人小林平八郎の事が加はつてゐる)天河屋義平――天野屋利兵衛

影響

劇界に獨參湯と謂はれる「假名手本忠臣藏」は、芝居を見ぬ人淨瑠璃を聞かぬ人でも、其名は二つ兒の時から知つてゐる。近松の名作と雖も「忠臣藏」程の普及性を持つものは恐らく無からう。元祿までの心中談や妻敵討談に飽き切つた大衆は、享保時代に於て何か新しいものをと望んでゐた處へ、舞臺は大きく、段々の變化に富み、登場人物の多方多面な而して文章の瑰麗な「忠臣藏」が出たのであるから、所謂圖に當つたのも無理は無い。

其後百五十年の幕末まで、三都の大劇場を始め津々浦々の小屋などに於て、上演せられた回數は幾千となるであらうか。何かの都合で一つの劇場が不入りになるとき、「忠臣藏」を出すと、必ず當るものとなつてゐた。

此間に「忠臣藏」の我文學界に與へた影響を見ると、先づ戯曲に「太平記忠臣講釋」「いろは藏三組盃」「忠臣伊呂波實記」「忠臣一力祇園曙」「忠臣後日噺」の類が、本曲の顰に倣つて現はれ、更に廣く黑本青本の範圍では、「忠臣藏」を冠した「跡の祭」「四十八文字」「樂屋問答」「卽席料理」「道化緣起」「あほうの鑑」「前世幕無」など數十種、又「假名手本」を冠した「藏意抄」「二度淸書」「不通人藏」「胸の鏡」などや、「假名手本」をもぢつた「安名手本執心郭」「穴手本通人藏」「仇手本何々」など各十餘種に及ばうとしてゐる。此内、後の一群は只「忠臣藏」の題號に因緣を附けたものに過ぎぬが、それにしても「忠臣藏」の名が人の耳目を惹着けるに有利であつた事を示す譯である。

[淨瑠璃](赤穗義士に關する天保頃までの有名なもの)

兼好法師物見車　寶永三年五月五日より大阪竹本座。近松門左衛門作
碁盤太平記　寶永三年六月一日より大阪竹本座。近松門左衛門作
鬼鹿毛無佐志鐙　正德三年十二月一日より大阪豐竹座。紀海音作
忠臣金短冊　享保十八年十月一日より大阪豐竹座。並木宗輔等作
忠臣いろは夜討　元文三年七月十五日より京都東芝居。宇治加賀掾作
◎假名手本忠臣藏　寛延元年八月十四日より大阪竹本座。竹田出雲等作

難波丸金鷄　寶暦九年五月十四日より大阪豐竹座。若竹笛躬等作

いろは歌義臣鑑　明和元年十二月十五日より大阪豐竹座。黒藏主等作

太平記忠臣講釋　明和三年十月十六日より大阪竹本座。近松半二等作

通矢數四十七本　明和七年十月三日より大阪竹本座

忠臣後日噺　安永元年四月七日より大阪北堀江座。北鵜素人等作

鎌方武士鑑　安永元年四月二十八日より大阪竹本座。近松半二等作

いろは藏三組盃　安永二年七月二十八日より大阪竹本座。近松半二等作

忠臣伊呂婆實記　安永四年七月十五日より江戸肥前座。福内鬼外作

合詞四十七文字　天明元年九月二十三日より大阪北堀江座

「歌舞伎」（赤穂義士に関する天保頃までの有名なもの）

曙曾我夜討　元祿十六年二月十六日から三日間江戸中村座上演

忠臣藏狂言　寶永七年、大阪篠塚庄松座上演。京都山下京右衛門一座上演（太平記仇討）、京都小佐川十右衛門一座上演、高屋座では山下半右衛門一座の上演もあつて、京阪では義士劇の競争であつた。享保二年、大阪澤村長十郎座上演。享保十一年、大阪嵐三右衛門座上演

太平記義臣の礎　天明四年正月二日より大阪北堀江座。黒藏主作

廓景色雪の茶會　天明七年九月廿六日より大阪東の芝居。若竹笛躬等作

鼻手本給金藏　寛政五年九月三十日より大阪北堀江座

忠義墳盟約大石　寛政九年二月二十一日より大阪豐竹座。若竹笛躬等作

忠臣二度目清書　寛政十年三月十一日より座不明。烏亭焉馬作

忠臣一力祇園曙　寛政十年八月十五日より座本・豐竹時太夫、司馬芝叟作

假名手本義士の書添　享和三年八月十九日より座本・豐竹房太夫。暁鼠寔形作

忠臣國字譬　天保年間。西澤一鳳作

鎧櫻故郷錦　享保二十年三月十一日より江戸中村座。澤村訥子作

忠臣藏狂言　享保二十年四月より大阪中村十藏一座の上演

忠臣いろは軍記　享保二十年九月十八日より江戸市村座。作者津打治兵衛

豐年永代藏　元文五年春江戸市村座

雑武者いろは合戰　寛保元年九月九日より大阪中の芝居。並木丈助作

鹽谷判官故鄕錦　寛保元年十一月より江戸中村座
大矢數四十七本　延享三年七月七日より大阪角の芝居。並木永助作。(延享四年六月一日より京都中村粂太郎座元)
泰平いろは行列　寶曆十二年十二月十二日より大阪角の芝居。並木正三作
小袖藏いろは配　明和八年四月十一日より京都東の芝居
僞討日本一　安永三年十一月八日より京都因幡藥師。辰岡萬作作
日本花赤城鹽竈　安永七年正月四日より大阪角の芝居。並木五瓶作
敵討四十有七人　天明二年正月十九日より京都早雲座。並木正三作
いろは假名四十七訓　寛政三年九月十一日より大阪角の芝居。奈河七五三助作
忠臣双葉藏　寛政五年十一月七日より大阪中の芝居。辰岡萬作作
義臣傳讀切講釋　寛政六年十一月二十二日より大阪中の芝居。並木五瓶作
扇矢數四十七本　寛政九年三月十五日より大阪中の芝居。辰岡萬作作
忠臣兩國織　寛政十年五月五日より江戸森田座。櫻田治助作
名產赤穗花鹽　寛政十年九月十三日より江戸市村座。福森久助作
繪本忠臣藏　享和三年七月二十二日より大阪大西芝居。近松德三作
いろは歌譽櫻花　文化三年正月二十一日より大阪角の芝居。近松德三作
以呂波歌櫻秀逸　文化七年五月九日より大阪曾根崎芝居。奈河晴助作
大石摺櫻花短冊　文政五年三月十三日より大阪中の芝居。奈河晴助作
いろは藏双合鑑　天保六年三月四日より伊勢古市芝居
太平記忠士鑑　天保六年十月三日より大阪角の芝居。西澤一鳳作
花菖蒲いろは連歌　天保十年五月十日より江戸市村座。西澤一鳳作
裏表忠臣藏　天保十一年三月七日より江戸河原崎座。中村重助作
紅楓いろは文庫　天保十三年七月二十一日より大阪角の芝居。西澤一鳳作

現今になつても「忠臣藏」の名は一向にすたらぬ。現に其通しなどが屢々各座に上場される。觀客の總てが舊劇に興味を持たぬやうになるまでは、今後とても猶命脈を續けることであらう。

「忠臣藏」の普及は今では日本中に止まらぬ。其譯本は英獨佛の三國語で出來てゐる。最も早いのは英譯でフレデリク・ヴィ・

ヂッキンズ（Frederick V. Dickins）氏が一八七五年横濱で出版したのが初版で、其後一八八〇年版、一八九〇年版等の數版がある。獨譯はエフ・アー・ユンケル・フォン・ランゲック（F. A. Junker v. Langegg）氏の瑞穗草（Midzuho-gusa）の第一冊を成すもので、一八八〇年ライプチヒ出版である。次に佛譯はアー・ヅーヅベー（A. Dousdebes）氏が一八八六年巴里で出版したもので、前のヂッキンズ氏譯文の重譯である。此外に井上十吉翁が英語に譯した一本が一八九五年（明治二十八年）東京中西屋から發刊されてゐる。流石に日本の英語大家の苦心の作であるだけ、外人の譯述に比して國文の譯本として數段の優越を見る。心ある外人は多く此本によつて原著者竹田出雲。三好松洛等の名文を賞翫することであらう。尙「假名手本忠臣藏」とは畢系のものである爲永春水の「いろは文庫」の英譯で齋藤修一郎及びイー・グレイ（E. Greey）兩氏の筆に成る一八八〇年紐育版のものと一八八四年の新版とがある。是は日本人には「忠臣藏」と全く趣向の變つた書と云ふことが判つて居るけれど、外人には「忠臣藏」と同種のものと視られるかも知れぬから、序ながら斷つて置く。其の他赤穗義士に關する外國人の創作も數々ある。

それから漢譯のものもある。淸人鴻濛陳人譯の「日本忠臣庫」二冊がそれであるが、恐らくは鴻濛陳人の假號を以て邦人の戲作したものであらう。日本の漢文家の物好で原文を能く呑込んだ人で無くては出來ぬ。それにしても、とにかく漢文に譯されてゐるのであるから、支那の研究家には「忠臣藏」の大意を知る便りになる。

古典面には外國語に飜譯された國文學書も數々あるが、近代文のもので「忠臣藏」くらゐ廣く譯されてゐるのは少い。

第一（大序。兜改め）

登場人物の主な者

足利直義（尊氏の弟。左兵衛督）　高師直（武藏守。鎌倉の執事）　桃井若狹ノ助安近（桃井播磨守の弟）
鹽谷判官高定（伯州城主）　顏世御前（高定の妻）

梗概

足利直義は兄尊氏の代參となつて、曆應元年二月討死した敵の大將新田義貞の兜を、鶴岡八幡宮へ奉納する爲鎌倉に下つた。桃井若狹ノ助安近。鹽谷判官高定はその饗應役になつた。直義は饗應役の兩人に對して、「これは淸和天皇の嫡流新田義貞が討死した時、彼の被つた兜であるから、當社の藏に納めよ」と命じた。

高師直その座に居て之を聞き、「義貞の兜だからとて奉納するわけにはまゐらぬ」といひ、若狹ノ助は「これは察するに、尊氏公が新田の殘黨を懷ける爲の御計略と存じますから、師直樣の御意見は輕率と存ずる」といふ。師直怒つて「輕率とはけしからぬ。義貞が討死した時は兜が脫けてゐたのだから、どれが義貞の兜やら知れぬ。さしで口なさるな」と遣込めたので、若狹ノ助の無念顏を見て取つた高定は、「いづれもの御意見御尤もに存ずる。この上は直義公の御意を承りたう存じます」といへば、直義は「さやうな意見があらはせぬかと思つてゐたので、高定の妻顏世を呼んで置いたからこれへ出せ」といふ。

顏世は仰によつて庭に出で、「嘗て義貞公の言葉に、我が戰場に臨む時は、蘭奢待を兜に炷染めて置くとの事でした」とて、四十七の兜の中から芳香を放つ龍頭の兜を取出し、「これこそ義貞公の兜でござりまする」と捧げた。よつて異議なくそれを奉納する事に一決した。

師直は顏世御前の美貌に戀慕し、その歸らうとするを呼留めて、艷書を渡し且つ口說くを、若狹ノ助に遮られたので之を遺憾す

る。若狹ノ助憤怨に堪へず、あはや刀に手を掛けようとする折節、直義・高定等の退出に心紛れて事なきを得た

評

この段、美しい顔世御前と、高定・安近の性質の一端を示し、師直の傲慢陋劣を暴露して、雨か風か此の儘には納まらぬ後段の伏線となる。

●嘉肴 知らず 「禮記」に出づ。
○早 [illegible]
○例をここに假名書の [illegible]
○暦應元年 北朝の年號。後醍醐天皇延元三年。紀元一九九八年。[illegible]
●鶴岡八幡宮 相州鎌倉にあり。[illegible]、次に續く「鶴が岡」[illegible]
○左兵衛督 [illegible]、相當は從四位下 [illegible]
○執事 [illegible]
○判官 [illegible]

第一

嘉肴有りといへども食せざれば其味を知らずとは、國治まつてよき武士の忠も武勇も隱るゝに。たとへば星の晝見へず夜は亂れて現はるゝ、例をこゝに假名書の、太平の代の政。頃は暦應元年二月下旬。足利將軍尊氏公新田義貞を討亡し、京都に御所を構へ德風四方に普く、萬民草の如くに靡き從ふ御威勢。國に羽を伸す鶴が岡八幡宮御造營成就し。御代參として御舍弟足利左兵衛督直義公。鎌倉に下着なりければ、在鎌倉の執事高武藏守師直。御膝許に人を見下す權柄眼で。御馳走の役人は。桃井播磨守が弟若狹ノ助安近。伯州の城主鹽谷判官高定。馬場先に幕打まはし威儀を正して相詰むる。直義仰せ出さるゝは、いかに師

直。「この唐櫃に入れ置きしは、兄尊氏に亡されし新田義貞、後醍醐の天皇より賜はつて着せし兜、敵ながらも義貞は清和源氏の嫡流。着棄の兜といひながら、その儘にも打置れず、當社の御藏に納める條。その心得あるべしとの嚴命なり」と宣へば、武藏の守承はり「これは思ひも寄ざる御事。新田が清和の末なりとて着せし兜を尊敬せば、御旗下の大小名。清和源氏はいくらもある。奉納の儀然るべからず候」と、遠慮なく言上す。「イヤ左樣にては候まじ。この若狹ノ助が存ずるは、是は全く尊氏公の御計略。新田に徒黨の討洩され御仁德を感心し、攻めずして降參さする御方便と存奉つれば、無用との御評議率爾なり」といはせも果ず「イヤア師直に向つて率爾とは出過ぎたり。義貞討死したる時は大童、死骸の傍に落散つたる兜の數は四十七、どれがどふとも見知らぬ兜。そふであらふと思ふのを、奉納した其後でそふで無ければ大きな恥。なま若輩な形をしてお尋もなき評議。すつこんでお居やれ」と、御前よきまゝ出るまゝに、杭とも思はぬ詞の大槌。打込れてせき立つ色目。鹽谷引取つて、「イヤ御尤なる御評議ながら、桃井殿の申さるゝも治まる代の軍法、これ以て捨られず、双方全き直義公の、御賢慮仰

○唐櫃　唐風に作つた脚ある櫃、調度衣服など種々の物を入れる。
○清和源氏　清和天皇の皇子貞純親王の子、經基より出で、頼朝に至つて鎌倉幕府を起した。支族頗る多く、新田・足利二氏は殊に著名である。
○着棄の兜　着てゐたのを脱ぎ棄てた兜。討死の時に脱げてゐた其の者の兜。
○條　段。
○新田に徒黨の討洩され　義貞に一味したもので討洩されてゐる者ども。
○評議　議論。意見。
○率爾　輕率。
○大童　奮闘によつて結髪亂れ、童の亂れ髪の如くなること。
○四十七　四十七士をきかした。
○すつこむ　「すくむ」(竦)の義。ひつこむ。さしでずにゐる。
○御前よし　君のおぼえめでたし。
・杭とも思はぬ　人とも何とも思はない、即ち人間の資格を認めぬ意。
○大槌　[illegible]「打込まれる」[illegible]を踏んで書いた句。
○色目　思ひを目の色にあらすこと。顔つき。氣色。

○打掛　婦女の禮服の一つで、帶を締めた上に打掛けて着る小袖。

○玉帚　[illegible]打掛の裾の地をひくを玉帚に喩へた。

○往んじ　「往にし」の音便。さんぬる。

○十二の内侍　官女で奉仕する司、即ち内侍司・藏司・書司・藥司・兵司・闈司・殿司・掃司・水司・膳司・酒司・縫司に出仕する女官。

○兵庫司　昔は武器を納めて置く庫を兵庫といひ、その管理に當る役所を兵庫寮といひ、そこに奉仕する[illegible]

○ず　[illegible]の濁つたもの。

○目利目利　[illegible]

○蘭奢待　香木、名香名。

○人は一代名は末代　[illegible]謠曲「元服曾我」に「[illegible]」

ぎ奉ること、申上ぐれば御機嫌有、「ホヽ然いはんと思ひし故、所存有つて鹽谷が婦妻を召連れよといひつけし。これへ招け」とありければ「はつ」と答の程もなく、馬場の白砂素足にて、裾で庭掃く打掛は、神の御前の玉帚、玉も欺く薄化粧、鹽谷が妻の顔世御前はるか退つて畏る、女好の師直その儀容かけ「鹽谷殿の御内室顔世殿、最前より嘸待遠御大儀御大儀、御前の御召近ふ〳〵」と、取持顔、直義御覧じ「召出す事外ならず、往んじ元弘の亂に、後醍醐帝都にて召されし兜を、義貞に賜はつたれば、最期の時に着つらん事疑はなけれども、その兜を誰あつて見知る人外になし、其の比は鹽谷が妻、十二の内侍の其内にて、兵庫司の女官なりと聞及ぶ、さぞ見知りあらんず、覺あらば兜の本阿彌、目利目利」と、女には嚴命さへも和らかに、お請申すも亦なよやか「冥加に餘る昔の仰せ、それこそは私が、明暮手馴れし御着の兜、義貞殿拜領にて、蘭奢待といふ名香を添へて賜はる、御取次は即ち顔世、其の時の勅答には、人は一代名は末代、すは討死せん時、この蘭奢待を思ふまゝ、内兜に炷しめ着、ならば、鬢の髪に香を留し、名香かほる首取しといふ者あらば、義貞が最期と思召されよとの、詞はよもや違

ふまじ」と、申上げたる口元に、下心ある師直は、※小鼻いからし聞居たる、地直義詳しく聞し召し「ヲヽ、詳かなる顔世が返答。さあらんと思ひし故、落散つたる兜四十七。この唐櫃に入れ置いたり。地見分させよ」と。御上意の下、侍、屈むる腰の※蝦錠を明くる間遅しと取出すを。おめず臆せず立寄つて。見れば所も名にし負ふ。※鎌倉山の星兜。※頭盔頭。※獅子頭。さて※指物は家々の。流儀流儀によるぞかし。地或は※ちよつぺい・※筋兜。錏のなきは弓の爲。その主々の好みとて、數々多き其の中にも。※五枚兜の龍頭。これぞといはぬ其内に。はつと薫りし名香は。顔世が馴れし義貞の兜にて御座候」と差出せば、フシ地「左樣ならめ」と一決し、「鹽谷・桃ノ井兩人は。寶藏に納むべし、こなたへ來れ」と御座を立ち。顔世にお暇給はりて、※段かづらを過ぎ給へば、鹽谷・桃ノ井兩人も打伴れてこそ入にける。地跡に顔世は※つき穗なく「師直樣は今暫し御苦勞ながらお役目を、お仕舞あつてお靜に。お暇の出たこの顔世、長居はおそれおさらば」と、地立上る袖すり寄つて、じつと控へ、「コレまあお待ち待ち給へ、今日の御用仕舞ひ次第、其許へ推參してお目にかける物がある、幸ひのよい所召出された、直義公はわが爲の結ぶの神。御存じの如

○小鼻いからす　鼻の孔の上の小高い所をうごめかす意であつて、得意なるをいふ。
●蝦錠　門戸の貫木などに著け、鐵棒を彎曲した錠。腰の蝦の如く屈むるにいひかく。
○鎌倉山の星兜　鎌倉山の星月夜を星兜にいひかけた。星月夜は鎌倉の枕詞として用ひる。常盤の歌に「我獨り鎌倉山を越え行けば、星月夜こそうれしかりけれ」「星兜」は、鉢に凸形の鋲のある兜である。「星月夜」をも見よ。
○頭盔頭　兜の鉢の頂の尖つたものを頭盔といふ。これに「かしら」(頭)を添へたのは、龍頭のこの形をいひかけたのであらう。
○獅子頭　獅子の頭の形を兜の前立物にしたもの。
○指物　戰場で目標とする爲に、鎧の背の指筒にさす小旗の類。
○ちよつぺい　[illegible]、兜の鉢の頂の平たくて小形な物の稱[illegible]
○筋兜　兜の鉢に筋があつて、[illegible]弓を射るに邪魔になる[illegible]。[illegible]
○五枚兜の龍頭　「しころ」[illegible]
○段かづら　鶴岡八幡宮の前を通つてゐる參詣道の稱。
○つき穗なく　附穗も取附きやうもなく。きまりわるく。

〳〵我等歌道に心を寄せ、吉田の兼好を師範と賴み、日々の狀通其許へ屆けくれよと問合せのこの書狀、いかにもとのお返事は、口上でも苦しうない」と、袂から袂へ入るゝ結び文。「顏に似合はぬ樣まいる武藏鐙」と書いたるを、見るよりはつと思へども、はしたなう恥しめては却つて夫の名の出る事、持ち歸つて夫に見せうか、いや〳〵それでは鹽谷殿、憎しと思ふ心から怪我過失にもならふかと、物をも言はず投返へす、人に見せじと手に取上げ、戾すさへ手に觸れたりと思ふにぞ、わが文ながら捨てもおかれず。「くどうは言はぬ、よい返事聞く迄は、口說いて〳〵口說きぬく、天下を立てふと伏せふとも任意な師直。鹽谷を生けふと殺そふとも、顏世の心たつた一つ、何とぞふではあるまいか」と、聞くに顏世が返答も、涙ぐみたるばかりなり。折から來合はす若狹ノ助、例の非道と見て取る氣轉、「顏世殿まだ退出なされぬか、お暇出でてひまどるは、却つて上への恐れ、はやお歸り」と追つ立つれば、彼奴さては氣どりしと、弱身をくはぬ高の師直、「ヤア又してもいはれぬ出過ぎ、立つてよければ身が立たす、此度の御役目、首尾よう勤めさせくれよと、鹽谷が內證顏世の賴み、そふ無くて叶はぬ筈、大名でさへあ

○結文の神　[illegible]
・吉田の兼好　[illegible]、吉田に因る[illegible]和歌に[illegible]徒然草[illegible]この人の著書[illegible]俗に兼好は、高師直が[illegible]に逆る[illegible]をしたといふ。
○日々の狀通　この書狀　日々は兼好と日手紙のとりやりをしてゐる。ところで兼好が貴女「[illegible]」に[illegible]けてくれよと、ここへかつたものであるとの意。
○顏に似合はぬ樣まゐる　[illegible]い美しく優しい顏に似合はぬ、心のつれない顏世樣[illegible]、[illegible]「樣[illegible]。
⊙武藏鐙　「伊勢物語」の歌に「武藏鐙さすがにかけて賴む[illegible]」とある。往時武藏には高麗人を多[illegible]を武藏鐙といふて、後世までも産出した名物である。[illegible]
⊙はしたなう　すげなく。無遠慮に。
○戾すさへ　捨てもおかれず　[illegible]手や觸れけむと思ふにぞ、わが文ながらうちも置かれず[illegible]
○內證　人の妻を稱する語。（見索引）

の通り、小身者に捨知行誰が蔭でとらする、師直が口一つで御器提げふも知れぬあぶない身代、それでも武士と思ふじやまで」と、地邪魔の返報憎て口、くはつとせき立つ若狹ノ助、刀の鯉口碎くる程握り詰めは詰めたれども、神前なり御前なりと一旦の堪忍も、今一言が生死の、詞の先手、「還御ぞ」と、御先を拂ふ聲に、詮方なくも期を延ばす、無念は胸に忘られず、惡事悖つて運強く切られぬ高の師直を、明日の我が身の敵ともしらぬ鹽谷が後押へ、直義公は悠々と歩御成り給ふ御威勢、人の兜の龍頭、御藏に入る丶數々も、四十七字のいろは分、鐵の兜を和らげて、兜頭巾の綻びぬ國の、掟ぞ　三重　久方の、

○小身者　身分卑い武士で秩祿薄い者。
○捨知行　役に立たぬ者に與へる食邑。
○御器　椀。「御器提げる」は椀をもつて食を乞ふをいふ。
○まで　語の後につけて、念を推し意を强めるにいふ助詞であつて、近松物などにも多く用ひてある。
○鯉口　刀劒の鞘の口。
○悖つて　逆に。
○後押へ　しんがり。後から來る敵を防ぐ用心の爲に、强い者が行列のしまひにつくのである。
○四十七字　四十七士をきかした。
○かな　鐵に假名をいひかく。
○兜頭巾　江戸時代に武士が火事裝束の際被つたもので、其の形兜に似て、錣は羅紗で作り彩糸をもつて華麗に飾してある。
○三重　聲明から出た語で、三絃の調子高い一種の彈き方。人の音聲は三絃の三重の調子が出されないので、三重に合はせて唄はれない爲に語らないこともあれば、從つてその文句も略されることがある。（見索引）
⊙久方の　「掟ぞ久しい」を「久方の」にいひかけ、よつて次に出て來る「空」の枕詞として用ひた。

第二（松切り）

登場人物の主な者

加古川本藏行國（若狹ノ助の家老　年五十）
大星力彌（由良ノ助の嫡男）
戸無瀬（本藏の妻）

桃井若狭ノ助安近（桃井播磨守の弟）

小浪（本藏の娘）

梗　概

桃井若狭ノ助の館では、奴の關内。可介等が邸内を掃除しながら、若狭ノ助と高師直とが鶴岡で口論のあつた事などを噂して、本藏にたしなめられて去る。その後へ大星力彌は主君鹽谷判官の使者となつて若狭ノ助の館を訪ひ、自分と許嫁の小浪が取次に出たので互に顏を赤くする。力彌は畏つて、「若狭ノ助殿には明朝正四時までに御前に御出勤なされませ」と、我が君の意を傳へた。

若狭ノ助は師直に侮辱されたのを憤怨してゐるので、明日は殿中で師直を斬棄てようと決意し、之を家老の本藏に打明けた。本藏は思案を定め、之を聞いて諫めぬのみか、却つて緣先の松の片枝を切つて之を勵ます。然も内心は師直に賄賂を贈つて、事を未然に防ぐに若かずと決意し、夜陰に家を出で、馬に鞭打つて急ぎ行く。

評

若狭ノ助の身の上に起るべきであつた凶變は、本藏の畫策によつて判官の身に移り行く運命をたどる伏線となる。

第　二

「空も蒲生の、黄昏時、桃井若狭ノ助安近の館の行儀はき掃除、お庭の松も幾千代を守る館の執權職、加古川本藏行國、年も五十の分別盛り、上下編付け書院先、

〔一〕蒲生　陰暦三月の稱。
〔二〕行儀　[illegible]
〔三〕執權職　[illegible]「家老を勤める大義」とある。
〔四〕編付け　[illegible]

○でつかちない　甚大なるをいふ。「でかい」(出來(でき)」の轉じた語)と同緣の語、「ない」は意を強める接尾語。

○入目　入費。費用。

○胴　筒で、雙六の骰子を入れた筒を振るより起つた名で、賭博の親をするを胴とも胴取とも胴親とも、又は略して胴ともいふ。「角助と改め」とは骰子の角の[illegible]によつた。

○旦那　主人。(見索引)

○さがなき　惡い。「倭訓栞」に「さがなし＝神代紀に惡・字不[illegible]ノ字不良ノ字などよめり、無レ善の義也」、俗に「下部は口のさがないもの」といふ。

○禍は下部のたしなみ　諺に「禍は下から」といふから、下部は禍にならぬやうに、たしなまねばならぬ。

○女小姓　貴人の側に給仕し、煙草盆・お茶・お手水などの用を[illegible]じるもので、年頃十二三四歳の女がこの役に多い

○音なふ　ひびく。音たてる。「源氏物語」帚木に「衣(きぬ)[illegible]、若き聲ども憎からず」。

○ほんさう　心をこめて[illegible]すること、「本藏」に[illegible]けた修辭。

○御寮　貴人の息女をいふ。(二〇一頁を見よ)

○御前　若狹ノ助の奥方。

歩み來るとも白洲(知らず)の下人、「ナント關内。此の間はお上にはでつかちないお拵へ都からのお客人、昨日は鶴が岡の八幡へ御社參。おびたゞしいお物入。ア、その銀の入目が欲しい、その銀が有つたらこの可介、名を改めて樂しむになア」、「何じや名を改めて樂しむとは珍らしい。そりや又何と變へる」。「ハテ角助と改めて胴を取つて見る氣」。「ナニ馬鹿面な。わりや知らないか。昨日鶴が岡で、これの旦那若狹ノ助樣いかふ不首尾で有つたげな。仔細は知らぬが師直殿が大きな恥をかゝせたと奴部屋の噂。定めて又無理を吐して、お旦那をやりこめ、居つたであろ」と、さがなき口々。「ヤイ／＼何をざは／＼とやかましいお上の取沙汰、殊に御前の御病氣、お家の恥辱になる事あらば、この本藏聞流し置くべきや、禍は下部のたしなみ、掃除の役目仕舞うたら、皆往け／＼」と和らかに、女小姓が持出づる、煙草輪を吹く雲を吹く、廊下音なふ衣の香も、本藏がほんさうの一人娘の小浪御寮、母の戸無瀨諸共にしとやかに立出づれば、「これはこれは兩人共御前のお伽は申さいで、自身の遊か不行儀千萬」、「イヱ／＼今日は御前樣殊の外の御機嫌、今すや／＼とお休、それでナア母樣」、「イヤ申し本藏殿、先程御前の御物語、許

○舌三寸　「童子教」「人以二三寸舌一、破二損五尺之身一」
○刀　刀を差す武士。

日小浪が鶴が岡へ御代參の歸るさ、殿若狹ノ助樣、高ノ師直殿詞諍遊ばせしとの御噂、誰がいふとなくお耳に入り、それは〳〵きついお案じ、夫本藏仔細委しく知りながら、自に隱すのかやとお尋ね遊ばす故、小浪に樣子を尋ぬれば、これも私と同じ事、何にも樣子は存じませぬとのお返事、御病氣の障りお家の恥になる事なら、「アヽこれ〳〵戸無瀨、それ程のお返事なぜ取繕ふて申上げぬ、主人は生得御短慮なるお性質、何の詞諍などゝは、女童の口癖、一言半句にても舌三寸の誤より。身を果すが刀の役目。武士の妻でないか、それ程の事に氣が附かぬかたしなみ召され〳〵。ナニ娘、そちは又御代參の道すがら、左樣の噂はなかりしか、但し有つたか。ナニ無い、ヲヽその筈〳〵、ハヽヽヽなんの別事でもない事を、よし〳〵奥方のお心休め、直にお目にかゝらん」と。立上る折こそあれ、當番の役人罷出で、「大星由良ノ助樣の御子息、大星力彌樣御出なり」と申上ぐる「ム、お客御馳走の申合せ、判官殿よりのお使ならん、此方へ通せ、コレ戸無瀨其方は御口上受取り、殿へ其の通り申上げられよ。お使者は力彌、娘小浪と許嫁の聟殿、御馳走申しそれ。先づ奥方へ御對面」といひすてゝ、一間に入り

⦿そもじ　そなた。

○おぼこ　「うぶこ」(初子)の轉訛で、うぶな子の義。初心。世慣れないで幼いこと。

○お主と持病には勝たれぬ　古く「毛吹草」に「勝たれぬや主と病と花の嵐」。

○したが　しかし(併)。

○氣を通して　粋を利かして。氣を利かして。

○故實を正し　古儀作法を正しうし。

○角髮　揚卷をいひ、小兒の結髮の名で、髮を左右に分け揚げ卷いて雙角のやうに兩髻を結うたもの。[illegible]らう。角前髮は往時少年の結髮であつて、頭の頂を剃り、額髮の生際を角ばつて剃込んで、髮を結うたもの。

にける。戸無瀬は娘を傍近く、なふ小浪、父様の堅苦しいは常なれど、今おつしやつた御口上、請取る役はそなたにとありそな所を、戸無瀬にとは母が心とはきつい違ひ、そもじも又力彌殿の顔も見たかろ、逢ひたかろ、母に代つて出迎や、いやか〳〵」と問返せば、あいとも否とも返答は、あからむ顔のおぼこさよ、母は娘の心を汲み、アイタヽ、娘背を押してたも」、「これは何と遊ばせし」とうろたへ騒げば、イヤなふ、今朝からの心遣ひ又持病の癪がさし込んだ、これではどふもお使者に逢はれぬ。アイタヽ、娘、大儀ながら御口上も受取り。御馳走も申してたも。お主と持病には勝たれぬ〳〵」と、そろ〳〵と立上り、娘や随分御馳走申しやや、したが餘り馳走過ぎ、大事の口上忘れまいぞ、わしも聟殿にアイタヽ、あひたからうの奥様は、氣を通してぞ奥へ行く、小浪は御跡伏拜み〳〵、「忝い母様。日頃戀しゆかしい力彌様、逢はゞどふ言をかう言を」と、娘心のどき〳〵と。胸に小浪を打寄する、襟ざはりも故實を正し入來る大星力彌、まだ十七の角髮や、二つ巴の定紋に大小、立派さはやかに、さすが大星由良助が子息と見へしその器量、しづ〳〵と座に直り、「誰そお取次賴み奉る」と慇懃に相

述ぶる、小浪ははつと手を支へじつと見交はす顔と顔、互の胸に戀人と、物も得言はぬ赤面は、梅と櫻の花相撲に枕の行司なかりけり、小浪漸う胸押しづめ、「これは〳〵御苦勞千萬にようこそお出で、只今の御口上受取る役は私、御口上の趣を、お前の口から私が口へ直におつしやつて下さりませ」と摩寄れば、身をひかへ「ハアこれは〳〵不作法千萬、總じて口上受取り渡しは、行儀作法第一」と、襷をさがり手を支へ「主人鹽谷判官より若狹ノ助樣への御口上、明日は管領直義公へ未明より相詰め申す筈の所、定めてお客人も早々にお出であらん、然ればば判官・若狹ノ助兩人は、正七つ時に急度御前へ相詰めよと師直樣より御仰せ、萬事間違ひのなき樣に今一應御使者に參れと、主人判官申付け候故右の仕合、この通り若狹ノ助樣へ御申上げ下さるべし」と、水を流せる口上に。小浪はうつかり顔見惚れとかふ、應もなかりけり、「ヲヽ聞いた〳〵使大儀」と若狹ノ助、「ト間より立出で「昨日お別れ申してより、判官殿間違ふてお目にかゝらず、成程正七つ時に貴意得奉らん、委細承知仕る、判官殿にも御苦勞千萬と、宜しく申し傳へてくれられよ、お使者大儀」、「然らばお暇申上げん、ナニお取次の女中御

○花相撲　本場所の相撲に對して、臨時興行する相撲をいひ、もと木戸錢を取らないで、見物の纏頭「はな」のみを受けてゐたよりの稱。ここの文は、梅のやうな美男の力彌と、櫻のやうな美女の小浪とが、互に挨拶の取組みを花相撲に喩へ、兩人の緣枕を取持つ者はなかつたとの意に、相撲の緣語「行司」を用ひた文飾である。

○管領　既出、

○七つ時　午前四時頃。

○仕合　次第。始末。

○水を流せる　よどまぬ意、能辯の形容。

○間違ふ　機會をはづす。折惡い。

○衣紋繕ひ　襟を正し、衣紋は衿を胸にあはせた處。
○九つ　夜の十二時頃。
○まどろみ　目蕩みの義。微睡。
○差添　刀に添へてさす小さい刀。
○金打　武士が大小の刀を抜いて打合せることで、誓をたてる時にするもの。「[illegible]」に「若し誓約に違はば、我大小の刀を打ちて、打ち折りて二度大小を帯せざる事と誓ふ、[illegible]」とある。

苦勞」と、しづ〳〵立つて見向もせず衣紋繕ひ立歸る、本藏一間より立代り、「ハア殿これに御入り、彌明朝は正七つ時に御登城御苦勞千萬。今宵も最早九つ、暫く御まどろみ遊ばされよ」。「成程々々、イヤ何本藏、其方にちと用事有り密々の事、小浪を奧へ奧へ」。「ハアコリヤ〳〵娘、用事あらば手を拍たふ、奧へ〳〵」と娘を追遣り、合點の行かぬ主人の顏色と御傍へ立寄り、「先程よりお伺ひ申さんと存せし所、委細つぶさに御仰せ下さるべし」と、差寄ればにじりより、「本藏、今この若狹ノ助が言出す一言、何によらず畏り奉ると、二言と返さぬ誓言聞かふ」、「ハアこれは〳〵改まつたお詞、畏り入り奉るではござれども、武士の誓言は」、「ならぬといふのか」、「イヤさに非ず、先づ委細とつくと承り」、「仔細を言はせ後で意見か」、「イヤそれは」、「詞を背くか、サア何と」、「ハッ」はつとばかりさし俯き、暫く詞なかりしが、胸を極めて差添拔き、片手に刀拔き出し、丁丁と金打し、「本藏が心底かくの通り、留めも致さず他言もせぬ。まづ思召の一通りおせきなされずと、本藏めが胃の腑に、落着くやうにとつくりと承はらん」と相述ぶる、「ム、一通り語つて聞かせん、此度管領足利左兵衞督直義公鶴が岡造

○下知　命ニ下知一の略。命令。

○勝にのつて　つけあがつて。

○弓矢神　弓矢の守護神。軍神。八幡宮。

○人口　人の口。噂。ここの文は、「短氣故に身を果す若狹ノ助、猪武者よ狼狽者よと、必らず世の人口にのぼるを思ふ故」の意。

○五臟　肝・心・脾・肺・腎。

○横手を打つ　物に感じた時又は思ひ當つた時に、我知らず兩手を打ち合はすをいふ。

○したり　ようなした。ようお言ひになつた。

○料簡　裁量選擇の義。思案。勘辨。

營故、この鎌倉へ御下向、御馳走の役は鹽谷判官、某兩人承はる所に、尊氏將軍よりの仰にて高ノ師直を御添人、萬事彼が下知にまかせ御馳走申上げよ、年配といひ諸事物馴れたる侍と、御意に隨ひ勝に乘つて日比の我儘十倍增し、都の諸武士並居る中、若年の某を見込み雜言過言、眞二つにと思へども、お上の仰を憚り、堪忍の胸をおさへしは幾度、明日は最早料簡ならず、御前にて恥面かゝせる武士の意地、その上にて討つて捨つる必ず止めるな、日比某を短慮なりと奧を始め其方が意見。幾度か胸にとつくと合點なれども、無念重る武士の性根、家の斷絶奧が歎き、思はんにては無けれども、刀の役目弓矢神への恐れ、戰場にて討死はせずとも、師直一人討つて捨れば天下の爲、家の恥辱にはかへられぬ、必ず／＼短氣故に身を果す若狹ノ助、猪武者よ、狼狽者と、世の人口を思ふ故。汝にとつくと打明かす」と、思ひ込んだる無念の涙、五臟を貫く思ひなる、横手をうつて「したり／＼、ム、よう譯をおつしやつた、よう御料簡なされた、この本藏なら今まで料簡はならぬ所」、「ヤイ本藏ナ、何といつた、今まではよう料簡した堪忍したとは。わりやこの若狹ノ助を蔑にするか」、「これはお詞とも覺へ、

○冬は日蔭夏は日陽　冬は陽光の當る暖い所をえらんで人が多く通れば、自分は却つて人の通らぬ蔭を通り、夏は反對に陽光の當る所を通るやうにすれば、人と衝突せずとの意で、蓋し當時の諺。
○杓子定規　杓子の柄の曲れる如く不適當な標準を以て、他を律しようとすること。
○方圖　端圖引きから出た語。際限。
○かたし　對なる物の一片をいふ。片。片方。「かたし」の「し」は接尾語。ここの文は、小刀を片手に持つて草履の片方にすりつけて、切味の鈍れるを研ぎ直すのである。
○早寝刄合はせ　刀の刄の切味の鈍れるを素早く念を入れて研ぐ。
○九つ　既出。

ず、冬は日蔭夏は日陽、除けて通れば門中にて、行違ひの喧嘩口論ないと申すは町人の譬、武士の家では杓子定規、除けて通せば方圖がないと申すのが本藏めが誤か、御詞蔑いたさぬ心底、御覧に入れん」と御傍の、小さ刀拔くより早く書院なる、召がへ草履、かたし片手の早寝刄、とつくと合せ緣先の松の片枝ずつぱと切つて手ばしかく鞘に納め、「サア殿、まつこの通りにさつぱりと遊ばせ〳〵」、「いふにや及ぶ」。人や聞くとあたりに氣を注け、「今夜はまだ九つ、くつたりと一休み、枕時計の目覺し、本藏めが仕かけ置く早く〳〵」、「ヲヽ、聞入れあつて滿足せり、奥にも逢うて餘所ながらの暇乞、モウ逢はぬぞよ本藏、さらば〳〵」といひすて、奥の一間に入り給ふ、武士の意氣地は是非もなし、御後影見送り〳〵勝手口へ走り出で、「本藏が家來ども馬牽け早く」といふ間もなく、股立しやんと凛々しげに御庭に牽出せば、緣よりひらりと打乗つて、「師直の館まで、續けや續け」と乘出す、轡に縋つて戸無瀨・小浪、「コレ〳〵何處へ、始終の樣子は聞きました、年にこそよれ本藏殿、主人に御意見も申さず、合點が行かぬ止めます」と、母と娘がぶら〳〵〳〵、轡に縋りとゞむれば、「ヤア小癪出た、主人のお命お家の爲思ふ故

にこの仕儀。必ずこの事殿へ御沙汰致すな、お耳へ入つたら娘は勘當、戸無瀬は夫婦の縁を切る、家來ども途にて諸事をいひつけん、そこ退け兩人」、「イヤイヤイヤ」。「シヤ面倒な」と鐙の端、一當はつしと當てられて、うんとばかりにのつけに反るを見向もせず、「家來續け」と馬煙、追つ立て打立て力足、踏立てゝこそかけり行

○馬煙　馬が走るので地に飛立つ塵ほこり。
○力足　力をこめた足。

第　三（刃傷の場）

登場人物の主な者

加古川本藏行國（若狹ノ助の家老。年五十）
鹽谷判官高定（伯州城主）
鷺坂伴内（師直の臣）
高武藏守師直（將軍家接待師範役）
早野勘平（高定の臣。お輕の愛人）
其の他大勢
桃井若狹ノ助安近（桃井播磨守の弟）
お輕（顔世御前の腰元）

梗概

加古川本藏等は、將軍家接待師範役高師直が未明の登城の後を追うて駈付け、四足門で逢ひ、「何卒主君若狹ノ助が貴方樣の御恩顧を蒙つて、接待役を無難に仕遂げますやうお願ひ申し上げます」とて、賄賂の品々を贈り、師直に導かれて殿中に入つた

尋いで若狹ノ助來り、やゝ遲れて鹽谷判官が早野勘平を伴うて登城した。腰元のお輕が其の後を追うて來て、顏世御前から師直に送る返歌の入つた文箱を勘平に渡し、之を主君に手渡しして主君から師直に渡されるやう頼み、且つ互に戀を契る。

若狹ノ助は今日こそ殿中で師直に恨みの一太刀を報いようと決心したものの、本藏から賄賂を受けた師直は、慇懃に嘗ての無禮を謝るので、斬るわけにも行かず拍子拔ける。

判官は師直に賄賂を屆けない上に、顏世御前からの肘鐵砲の返歌を與へたので、師直大いに怒り、判官に甚だしい侮辱を加へた。判官は最早堪忍ならず、殿中も顧みず刀を拔いて切付けたが、傷を負はせただけで本藏に抱留められてしまつた。

勘平はこの急變を聞いて驅付けたが、上を下への大混雜の爲に主君に逢ふこともならず、自害しようとするをお輕に諭されて思ひ止り、師直の家來鷺坂伴內等と渡り合ひ、お輕と共にお輕の在所を指して落ち延びた。

評

この段、本曲の起由する所で、忽忙殺伐の中に濡れ場があり、また凶變は當然若狹ノ助に起らねばならぬものが、本藏の斡旋により急轉して判官の身に及んだ因果を含めて、師直の陋劣は萬人の憎む所であることを示した。但し顏世が師直の艶書拒絕の返書を、我が夫高定から師直に手渡しさせたのは、いかなる思慮があつたにせよ愼重を缺き、餘りに師直を侮辱した行爲である。

第三

足利左兵衛ノ督直義公、關八州の管領と、新に建てし御殿の結構、大名小名美麗を飾る晴裝束、鎌倉山の星月夜と袖を列ぬる御馳走に、お能役者は裏門口、

○結構　造りがまへ。組立て。

○鎌倉山の星月夜　（既出）

○七つ時　午前四時頃。
○見附　番兵の見張りする城の外門。
○ハイ〳〵〳〵　[illegible]
・花色模樣の大紋　青い[illegible]色模樣[illegible]の家紋を染め出した素大夫の禮服。
○我慢　七慢の一。傲慢で他を輕蔑する事。
○召下し　主君の召されたのを下部に與へる衣服をいひ、以下愚に著ることの意にいうた。
○どつぱさつぱ　元氣よく忙しう立働くさま。
○どしめく　どし〳〵と音立てる。
○腹の皮　腹の皮がよれる程、をかしさに堪へないこと。
○出頭　武家時代、君に愛せられ要路にあつて政[illegible]るもの。
○こまづけ　手懷け附ける義。手なづける。
○取得がある　とりどころがある。望みがある。
○所を言はぬは　所〻あるべきなのだが、その[illegible]。
○樂しみ　[illegible]
○四足門　[illegible]門、人臣に[illegible]、[illegible]ていうた。

表御門はお客人御饗應の役人衆、正七つ時の御登城武家の威光を耀きける、西の御門の見附の方「ハイ〳〵〳〵」といかめしく提燈照し入來るは、武藏守高ノ師直。權威を顯はす鼻高々、花色模樣の大紋に、胸に我慢の立烏帽子、家來共を役所々々に殘し置き、下部僅かに先を拂はせ、主の威光の召おろし、鶴の眞似する鷺坂伴内、肩肱いからし「申しお旦那、今日の御前表も上首尾〳〵、鹽谷で候の、イヤ桃ノ井で候のと、日比はどつぱさつぱとどしめけど、行儀作法は狗を、家根へ上げた樣で、さりとは〳〵腹の皮、イヤそれに就きかね〴〵鹽谷が妻顏世御前、いまだ殿へ御返事致さぬ由、お氣には障へられな、器量はよけれど氣が叶はぬ、何の鹽谷づれと、當時出頭の師直樣と」、「ヤイ〳〵聲高に口利くな、主ある顏世、度々歌の師範に事よせ、口說けども今に叶はぬ、卽ち彼が召使、輕といふ腰元新參と聞く、彼奴をこまづけ賴んで見ん、扨まだ取得がある、顏世が誠にいやならば、夫鹽谷に仔細をくはらりと打明ける、所を言はぬは樂しみ〳〵と、四足門の片陰に主從點頭き咄し合ふ折もあれ、見附に控へし侍あはたゞしく走り出で、「我々見附のお腰掛に控へし所へ、桃ノ井若狹ノ助家來加古川本藏、師直

○推參　無禮。（見索引）
○仕舞ふ　かたづける。やつつける。
◉手ぐすね引く　充分用意して敵の來るを待ち受ける。手に、つばきしての意。
○衣紋繕ひ　（既出）
○家中　大小名の家來の者どもをいふ。

様へ直に御目にかゝらん爲、早馬にてお屋敷へ参つたれども早御登城、是非御意得奉らんと、家來も大勢召連れたる體。如何計らひ申さんや」と、聞くより伴内騒ぎ出し「今日御用の有る師直様へ、直に對面とは推參なり、某直談」と走り行くを「待て〳〵伴内仔細は知れた、一昨日鶴が岡にての意趣晴し、我が手を出さず本藏奴にいひ付け、この師直が威光の鼻を挫がん爲、ハヽヽヽ、伴内ぬかるな、七つにはまだ間もあらん、これへ呼出せ仕舞ふてくれん」、「成程〳〵家來ども氣を配れ」と、主從刀の目釘をしめし、手ぐすね引いて待ちかけゐる、詞に隨ひ加古川本藏、衣紋繕ひ悠々と打通り、下部に持たせし進物ども、師直が目通りにならべさせ、はるかさがつて蹲り、「ハア憚りながら、師直様へ申上げ奉る、此の度主人若狹ノ助、尊氏將軍より御大役仰付けられ下さる段、武士の面目身に餘る仕合、若輩の若狹ノ助、何の作法も覺束なく、如何あらんと存ずる所に、師直様萬事御師範を遊ばされ、諸事を御引廻し下され候故、首尾よく御用相勤めるも全く主人が手柄にあらず、皆師直様の御執成しと、主人を始め奥方一家中、我我迄も大慶この上や候べき、然るによつて近頃些少の至に候へども、右御禮の爲

一家中よりの贈物、お請け遊ばされ下さらば、生前の面目一入願ひ奉る、即ち目錄御取次」と伴内に差出せば、不思議そふにそつと取り押披き「目錄、一ツ卷物三十本、黄金三十枚若狹ノ助奥方、一ツ黄金二十枚家老加古川本藏、同十枚番頭、同十枚侍中、右の通り」と讀上ぐれば、師直は開いた口塞がれもせずうつとりと、主從顏を見合せて、氣拔けの樣にきよろりつと、祭の延びた六月の、晦日見るが如くにて、手持無沙汰に見へにける。俄に詞改めて「これは〳〵痛み入つたる仕合、伴内こりやどふしたもの」「ハテ扨々」「ハア、お辭儀申さばお志背くといひ、第一は大きな無禮」「ヱ、式作法を敎ゆるも、こんな折にはとんと困る、ナニものじやは、イヤハヤ本藏殿、何の師範致す程の事もないが、兎角マア若狹ノ助殿は器用者、師範の拙者及ばぬ〳〵、コリヤ伴内進物ども皆取納め、ヱヱ不行儀な、途中でお茶さへ得進せぬ」と、手の裏反す挨拶に本藏が胸算用してやつたりと猶も手を突き「最早七つの刻限はやお暇、殊に今日はなほ晴の御座敷、いよ〳〵主人の儀御引廻し賴み存ずる」と、立たんとする袂を控へ「ハテ忝いわいの、貴殿も今日の御座敷の座並、拜見なされぬか」「イヤ陪臣の某御前

○生前の面目　現世の面目。この世に顔の立つこと。「生前」は死後の對。
○番頭　番士よりなる一隊の番衆の長。
○あいた口塞がれもせず　事の意外なのに驚くをいふ。
○祭　大阪諸社の夏祭をいひ、就中殊に盛んな座摩御祓は六月二十二日、天滿天神御祓は六月二十五日である。
○辭儀　辭退。えんりよ。
○困る、ナニものぢやわ　御辭退すべきか貰ふべきか困るものぢやわいといふ意に、ナニと詞を挾んでいかにも困るやうにいうた。
○胸算用（むなざんよう）「むねざんよう」ともいひ、心の中でみつもること。

○何ぞれ彼ぞれ　何某彼某。なにかにつけて。
○お先へ　お先へおいで下され。
○金で面撲る算用　金力で人を服伏する意のもの。「傾城色三味線」に「與かや旦那、そこらは小判で頬はるなり」。
○二一天作算盤　二一天作の五といふ割算の九九を算盤にいひつゞく。
・白鼠　お藏を白鼠といつて、家の福にいふ。白鼠が居れば家に福があるといふ。
○朽葉　黄枯色。
○遅なはる　遅くなる。「なはる」は「畳」「こなはる」などの「なはる」と同じもので、なりゆく義。
○地謠　謠曲の地の文を合唱する六人乃至十二人ほどの一團にて謠ふ者。
○播磨潟高砂の浦に着きにけり　謠曲「高砂」道行の文句。帯張りあけを播磨にいひかく。
○柳　美人の眉をさかす。白居易の「長恨歌」に「芙蓉如レ面柳如レ眉」。
○十八九松　年齢の十八九に、松の字を冠する。それは十八公となるにより、それをいひかけていふ。
○奇特帽子　奇特頭巾ともいひ、目のあたりを明けた覆面頭巾。元禄頃まで歌舞伎の女形が被つたもので、黒い絹風呂敷やうのものを被るので、氣儘になる所から、奇特の意にかけたといひでもある。
○奴　「やいはい」と呼んでゐる、無し……ここの誤であらう。

の恐れ」。「大事ない〳〵。この師直が同道するに、誰がぐつといふ者ない。殊に又若狹ノ助殿も、何ぞれ彼ぞれ小用のあるもの、平に〳〵」と勧められ「然らば御供仕らん、御意を背くは却て無禮、先づお先へ」と跡につき、金で頬はる算用に、主人の命も買ふて取る、二一天作算盤の、桁を違へぬ白鼠、忠義忠臣忠孝の、道は一筋眞直に、打連れ御門に入りにける。程もあらさず入來るは、鹽谷判官高定、これも家來を殘し置き、乘物道に立てさせ、譜代の侍早野勘平、朽葉小紋の新袴、ざは〳〵ざはつく御門前「鹽谷判官高定登城なり」と音なひける。門番罷出で「先程桃ノ井様御登城遊ばされ御尋ね。只今又師直樣御越にて御尋ね、早御入り」と相述ぶる「ナニ勘平最早皆々御入りとや。遲なはりし殘念」と、勘平一人御供にて御前へこそは急ぎ行く。奥の御殿は御馳走の、地謠の聲「播磨潟、高砂の浦に着きにけり〳〵」謠ふ聲々門外へ、風が持て來る柳蔭、其の柳より風俗は、まけぬ所體の十八九松の、緑の細眉も堅い屋敷に物馴れし、奇特帽子の後帯、供の奴が提燈は鹽谷が家の紋所、御門前に立休らひ「コレ奴殿、やがてもふ夜も明ける、こなた衆は門内へは叶はぬ、爰から去んで休んでや」と、詞に

○ナイ〳〵　奴の應答聲。はい〳〵。
○さいなあ　「さればいなあ」の略。（見索引）
○慮外ながら　憚りながら。
○お前　[illegible]ここは[illegible]の言葉をうつし[illegible]をお前というた[illegible]
○[illegible]にて[illegible]、[illegible]の文の使を望み、[illegible]大事件を[illegible]引する事もなく、[illegible]この事がなかつたなら、[illegible]ない事である。
・しんど　辛勞したらうの略、疲勞したこと。
○まで（既出）
○泥鰌踏む足つき　[illegible]足の[illegible]取り[illegible]
○[illegible]　[illegible]ぶ。[illegible]
○きつい　えらい。計略の手嚴しいさまをいふ。

隨ひ「ナイ〳〵」と、供の下部は歸りける、内を覗いて「勘平殿は何してぞ、どふぞ逢ひたい用がある」と、見廻す折から後影、ちらと見付け「お輕じやないか」、「勘平さん逢ひたかつたにようこそ〳〵」、「ムヽ合點の行かぬ夜中といひ、供をも伴れず只一人」、「さいなあ、こゝまで送りし供の奴は先へ歸した、わし獨り殘りしは、奥樣からのお使、どふぞ勘平に逢ふて此の文箱、判官樣のお手に渡し、お慮外ながら此の返歌をお前のお手から直に師直樣へ、お渡しなされ下さりませと傳へよ、しかしお取込の中間違ふまいものでなし、マア今宵はよしにせうとのお詞、わたしはお前に逢ひたい望み、何の此の歌の一首や二首、お届けなさる程の間のない事はあるまいと、つゐ一走に走つて來た、アヽしんどや」と吐息つく〳〵「然らばこの文箱旦那の手から師直樣へ渡せばよいじやまで、どりや渡して來ふ待つて居い」といふ中に門内より「勘平〳〵〳〵、判官樣が召しまする、勘平〳〵」、「ハイハイ〳〵只今それへ、エヽ忙しない」と、袖振り切つて行く跡へ、泥鰌踏む足つき鷺坂伴内「何とお輕戀の智惠は又格別、勘平めとせゝくつて居る所を、勘平〳〵旦那がお召と呼んだはきついか〳〵、師直樣がそもじに賴みたい

○そ様　そなた様。
○狼藉　亂暴。(見索引)
○あた　嫌忌の意をなす接頭語。
○ちよこ〳〵　こそ〳〵する情事をいふ。近松作「丹波與作待夜の小室節」上卷に「目立たぬやうに物蔭へ寄つて、ちよこ〳〵ちよこ〳〵濡れたがよくおんおやる」。
○失せる　行き去る。
○おけ古い　よしておけ、その手は古い。
○はづんだ　せきこんだ、この語「はずんだ」とも書き、「はずむ」は彈「はじ」く義で、勢に乘じて事を行ふ意にいふ。このところ勘平の詞。
○下地は好きなり御意はよし　諺。生來すき(ここは好色)な上に、幸ひに他からの思召もよい。
○それでも爰は人出入　勘平の詞。
○松根に倚つて腰を摩れば　謠曲「高砂」にある文句。
○アノ謠…腰掛けて　勘平の詞。
○脇能　第一番に演ぜられる神事能をいひ、高砂などの神事能を仕手「して」とする能。

事があるとおつしやる、我等はそ様にたつた一度、君よ〳〵」と抱付くを突飛ばし、「コレ猥な事遊ばすな、式作法のお家に居ながら狼藉千萬。あた不作法なあた不行儀」と、突退くれば、「夫れはつれない、暗がり紛れにつゐちよこ〳〵」と、手を取り爭ふ其の中に、「伴内様〳〵、師直様の急御用。伴内様〳〵」と、奴二人がうろ〳〵、眼玉で「これはしたり伴内様、最前から師直様が御尋ね式作法のお家に居ながら、女を捕へあた不行儀な、あた不作法」と、下部が口々「エヽ同じ様に何ぬかす」と、面ふくらして連立ち行く、勘平跡へ入代り「なんと今の働見たか、伴内めが一ぱい食ふて失せ居つた、俺が來て旦那が呼ばしやるといふと、おけ古いと吐すが面倒さに、奴共に酒飲ませ、古いと言はさぬこの手段。ハヽハハ〳〵まんまと首尾は仕おほせた」「サア其の首尾次手にな一寸々々」と手を取れば、「ハヽテ扨はづんだマア待ちやいの」「何言はんすやら、何の待つ事があるぞいなア、もふ軈て夜が明けるわいな、ぜひに〳〵」に、是非なくも下地は好きなり御意はよし、「それでも爰は人出入」、奥は謠の聲高砂「松根に倚つて腰を摩れば」、「アノ謠で思ひ付いた、イザ腰掛て」と手を引合ひ打連れて行く、脇能過ぎて

○長袴　裾を紐で締め括るやうになつてゐる指貫をいうた。
○鯉口　刀の鞘口をいひ、鐔との相合ふ所。ここの文は、刀の鯉口を切らうとし息をせぬやうにして待ちかまへてゐる意。
○我折る　我意を曲ぐ。服從する。
○兩腰　兩刀。腰にさしてゐる二本の刀。
○假令　たとひ。よしや。轉じて、幸ひの意。
○有樣　ありのまま。實際。
○やくたい　益體であらう。「やくたいもない」を略して「やくたい」とばかりもいふ。たわいもない。
○力む　力を入れる。
○寐刄合はす　切味の鈍つた刄を研ぎすます。

御樂屋に鼓の調べ太鼓の音、天下泰平繁昌の壽祝ふ直義公、御機嫌斜ならざりける、若狹ノ助はかねて待つ師直遲しと御殿の内、奧を窺ふ長袴の紐締め括り氣配し「おのれ師直眞二つ」と刀の鯉口息を詰め、待つとも知らぬ、師直主從遠目に見付け「これは／＼若狹ノ助殿、扨々お早い御登城、イヤハヤ我折りました、我等閉口々々、イヤ閉口序に貴殿に言譯致し、お詫申す事がある」と、兩腰ぐはらりと投出し「若狹ノ助殿、改めて申さねばならぬ一通り、日外や鶴が岡で、拙者が申した過言、ヲヽお腹が立つたであらふ尤じやが、そこをお詫、其の時はどふやらした詞の間違ひでつゐ申した、我等一生の麁忽、武士がこれ手をさげる眞平／＼、假令其の許が物馴れたお人なりやこそ、外々の狼狽者で見さつしやれ、この師直眞二つ怖や／＼有樣が其の節貴殿の後影、手を合して拜みました、アハヽヽ、アヽ年寄ると藥袋々々、年に免じて御免／＼、これさ／＼、武士が刀を投出し手を合す、これ程に申すのを聞入れぬ貴公でも無いはさ、兎角幾重にも過り／＼、伴内俱々にお詫々々」と、金が言はする追從とは夢にも知らぬ若狹ノ助、力みし腕も拍子拔け、今更拔くに拔かれもせず、寐刄合せし刀の手前、

さし俯きし思案顔。小柴の蔭には本藏が、またゝきもせず守り居る、「ナニ伴內この鹽谷はなぜ遲い、若狹ノ助殿とはきつい違ひ、扨々不行儀者、今に於て面出しせぬ、主が主なれば家老で候とて、諸事に細心のつく奴が一人もない、いざいざ若狹殿御前へ御供致そ。サアお立ちなされ、サアサア師直め謝罪つて居るぞ。コリヤこゝな粹め〳〵。粹樣め」。「イヤ若狹ノ助最前から、ちと心惡うござる。マア先へ」。「なんとした〳〵腹痛か、コレサ伴內お背中〳〵。お藥進じよかな」、「イヤ〳〵それ程にもござらぬ」。「然らば少しの內おくつろぎ、御前の首尾は我等がよい樣に申し上ぐる、伴內一間へお供申せ」と、主從寄つてお手車に迷惑ながら若狹ノ助これはと思へど。是非なくも奥の一間へ入りければ、「アヽもふ樂じや」と、本藏は、天を拜し地を拜し、お次の間にぞ控へ居る。程もあらさず鹽谷判官、御前へ通る長廊下師直呼びかけ「遲し〳〵」。なんと心得てござる、今日は正七つ時と、先刻から申渡したでないか」。「成程遲なはりしは不調法さりながら、御前へ出るはまだ間もあらん」と、袂より文箱取出し、「最前手前の家來が、貴公へお渡し申しくれよ、即ち奥顏世方より參りし」と、渡せば受取り、「成

○すゐ　推即ち推量また推察の義。轉じて、世間で揉まれて、人情に通達し事物に巧者なるをいふ。「やぼ」の反對で、意氣なこと。

○手車　手車に乘す。以て手厚きもてなしにいひ、ちやほやと、あやなす意にいふ。

○天を拜し地を拜し　天神地祇に御加護を感謝し、ただ僥倖を悦ぶいひである。

○遲なはる　（既出）

○内方 うちかた。内室。

●さなきだに つまな重ねそ この歌は「新古今集」卷二十に出て、「さなきだに」は「さらぬだに」とある。

○あやかり者 肖(あ)えかゝり者の意。そなたの幸福に似るやうにあやかりたいもの。

○へばりつく 附いてはなれぬをいふ。ねばりつく。

程々々、詞イヤ其の許の御内方は扨々心がけが御座るは、手前が和歌の道に心を寄するを聞き、添削を頼むとある、地定めて其の事ならん」と押披き、詞「さなきだに、重きが上の小夜衣、わがつまならぬつまな重ねそ。ハアこれは新古今の歌、この古歌に添削とはム、〱」と、地思案の内、我が戀の叶はぬ驗、扨は夫にも打明けしと思ふ恐をさあらぬ顔、詞「判官殿、この歌御覽じたで御ざらふ」、「イヤ只今見ました」、「ム、手前が讀むのを、ア、貴殿の奥方はきつい貞女でござる、ちよつと遣はさるゝ歌がこれじや、つまならぬつまな重ねそ、ア、貞女〱、ア其許はあやかり者。登城も遲なはる筈の事、内にばかりへばり着いてござるに依つて、御前の方はお構ひないじや」と、地あてこする雜言過言。あちらの喧嘩の門違とは。判官更に合點行かず。むつとせしが押鎭め、詞「ハ、〱〱これは〱、師直殿には御酒機嫌か、御酒参つたの」、「何時盛らしやつた、イヤ何時飲みました。御酒下されても飲まいでも、勤める所は急度勤める、貴公はなぜ遲かつたの、御酒参つたか。イヤ内にへばりついて御座つたか。貴殿より若狹ノ助殿ア、格別勤められます、イヤ又其許の奥方は貞女といひ、御器量と申し。手跡は見事。御自慢な

○御前　直義をさす。
○鼻毛らしい　女に溺れて、阿呆「あはう」らしい。諺に「阿呆の鼻毛で蜻蛉つなぐ」。
○井戸の鮒　「井の中の蛙大海を知らず」といふ諺を作りかへたのであらう。

され、むつとなされな嘘はないはさ、今日御前※にはお取込、手前とても同然、其の中へ※鼻毛らしい、イヤこれは手前が奥が歌でござる、それ程内が大切なら御出御無用、總體貴樣の樣な、内にばかり居る者を、※井戸の鮒じやといふ譬がある、聞いておかしやれ、彼の鮒めが僅か三尺か四尺の井の内を、天にも地にも無い樣に思ふて、不斷外を見る事がない、所に彼の井戸替に釣瓶に着いて上ります、それを川へ放しやると、何が内にばかり居る奴じやによつて、悦んで途を失ひ、橋杭で鼻を打つて、即座にぴり〳〵〳〵〳〵と死にます、貴樣も丁度鮒と同じ事ハ、ハ、〳〵」と地フシ出放題、地判官腹に据ゑかね、詞「こりやこなた狂氣めさつたか、イヤ氣が違ふたか師直」「シヤ此奴、武士を捉へて氣違とは、出頭第一の高ノ師直」「ムムすりや今の惡言は本性よな」「くどい〳〵、又本性なりやどふする」地「ヲヽかうする」と拔討に、眞向へ切付くる眉間の大傷、これはと沈む身のかはし、烏帽子の頭二つに切れ、又切かゝるを拔けつ潜りつ迯廻る折もあれ、お次に控へし本藏走出て押とゞめ、詞「コレ判官樣御短慮」と、地抱止むる其の隙に師直は、館をさしてこけつ轉びつ迯行けば、「おのれ師直眞二つ、放せ本藏放しやれ」とせりあふ

○打つ　叩く。
○御内　家中、家來。
○早馬　急報にて、馬に乘つて急ぎ馳せること。
○網乘物　重罪人を護送する時に行ひ、重罪人を入れた乘物に網をかけ、逃げられぬやうにしたもの。近松作「博多小女郎波枕」下卷、[illegible]、「網籠に積ぎ「よりそ」の細引網」とある。
○南無三寶　事の志と違つて辛い時に佛の救助を願ふより轉じて、失敗した、しまつたと思ふ時に發する語。
○おろ／＼　女々しいさま。
○ほえ面　泣き面。聲をあげて泣くさま、罵りは「ほえづら」といふ。
○一生懸命　命懸けで事をすること。蓋し一所「一ケ所懸命」の語で、その意は、生活の資たる一所の領地を守するをいひ、その意味を轉じたのである。

中、館も俄に騒ぎ出し、家中の諸武士大名小名、押へて刀撥取るやら、師直を介抱やら上を下へと立騒ぐ、表御門裏御門、兩方打ちたる館の騒動、提燈ひらめく大騒ぎ、早野勘平うろ／＼眼走り歸つて裏御門、碎けよ破れよと打叩き大聲上げ、「鹽谷判官の御内早野勘平、主人の安否心元なし、爰明けてたべ、早く／＼」と呼ばはつたり、門内よりも聲高々、「御用あらば表へ廻れ爰は裏門」、「成程裏門合點、表御門は家中の大勢早馬にて寄付かれず、喧嘩の樣子は何と／＼」、「喧嘩の次第相濟んだ、出頭の師直樣へ慮外致せし科によつて、鹽谷判官は閉門仰付けられ、網乘物にてたつた今歸られし」と聞くより「ハア南無三寶、お屋敷へ」と走りかゝつて「イヤ／＼／＼、閉門ならば館へは猶歸られじ」と行きつ、戻りつ思案最中、腰元お輕道にてはぐれ「ヤア勘平殿、樣子は殘らず聞きました、こりや何とせうどふせう」と取つき、歎くを取つて突退け、「エヽめろ／＼とほへ面、コリヤ勘平が武士は廢つたはやい、もふ是迄」と刀の柄「コレ待つて下され、こりやうろたへてか勘平殿」、「ヲヽうろたへた、これが狼狽へずに居れうか、主人一生懸命の場にも在合さず剩へ、因人同然の網乘物お屋敷は閉門、その家來は色に耽

○兩腰　二本の刀。武士は二本の刀を差せばかくいふ。（既出）
○死ぬる道なら　どうでも死なねばならぬ筋合ひならば。
○在所　在郷。田舍。（お輕の父母は山城國乙訓郡山崎の田舍に住んでゐる）。
○腕廻せ　腕を背に廻せの意で、縛られよの意。
○ひろげ　しろ。しくされ。
○一羽　鷺坂の鷺の縁語によつた洒落で、一人の意。
○細葱　ここの文は、料理の縁語を用ひて、己が細腕でおだな殺し方をする細工の意にいうた。
○まつかせ　「まかせ」の促音便。心得たといふ挨拶。

り御供に外れしと人中へ、兩腰差して出られふか爰を放せ」「マヽヽ待つて下さんせ、尤じや道理じやが、そのうろたへ武士には誰がした、みんな私が心から死ぬる道ならお前より私が先へ死なねばならぬ、今お前が死んだらば誰が武士じやと譽めまする、こゝをとつくりと聞分けて、私が親里へ一先來て下さんせ、父樣も母樣も在所でこそあれ頼もしい人、もふ斯うなつた地因果じやと思ふて女房のいふ事も、聞いて下され勘平殿」とわつとばかりに、泣き沈む、「詞こふじや尤、そちは新參なれば委細の事は得知るまい、お家の執權大星由良ノ助殿、いまだ本國より歸られず、歸國を待つて御詫せん、サア地一時なりとも急がん」と身拵する所へ、鷺坂伴内家來引連れ驅出で、「詞ヤア勘平うぬが主人判官師直樣へ慮外を働き、かすり傷負せし科によつて屋敷は閉門、追つ付け首が飛ぶは知れた事サア腕廻はせ、地連歸つて嬲斬覺悟ひろげ」とひしめけば、「詞ヤアよい所へ鷺坂伴内、おのれ一羽で食足らねど、勘平が腕の細葱、料理鹽梅食ふて見よ」、「地イヤ物な言はすな家來ども」「畏つた」と兩方より、「捕つた」とかゝるを「まつかせ」とかい潜り、兩手に兩腕捻上げ、はつし／＼と蹴返せば、地代つて切込む切先を刀の

⦿ちやうど 「丁と」の字を當つ。かつしと受けるを形容した副詞。
○鐺 木後(こじり)の義。刀鞘の背の末端をいひ、金具などで包つてある。
○のつけ あをのけ(仰)。のけざま。
○田樂返し 田樂の串の兩端を返る所作のやうに左右に翻ね返すこと、演劇にて大道具を早替りさせることをも田樂返しといふ。
○そつ首 素首。首を罵つていふ。
○ばらす 散す義。首と胴とを離放すこと、殺すこと。「焦ら(?)」「ばらりの後」「髪のばらけるをいひ、人を殺すことをばらすといふも同じ。
○明六つ 午前六時頃。

鞘にて丁ど受け、廻つて來るを鐺と柄にてのつけにそらし、四人一所に切かゝるを右と左へ一時に、田樂返しにばた／＼／＼と打据へられ、皆ちり／＼に行く跡へ、伴内いらつて切りかくる引つぱづしてそつ首握り、大地へ撞どもんどり打たせ、しつかと踏付け、詞「サアどふせうと此方の任意、突かふか切らふか、地なぶり殺し」と、振上ぐる刀に縋つて、詞「コレ／＼そいつ殺すとお詫の邪魔、地もふよいわいな」と止める間に、足の下をばこそ／＼と、尻に尾のない鷺坂は、命から／″＼逃ゲて行く、地「エヽ殘念／＼さりながら、彼奴をばらさば不忠の不忠、一先夫婦が身を隱し時節を、俟つて願ふて見ん」、最早明六つ東が白む横雲に、塒を離れ飛ぶ烏かはい／＼の女夫づれ道は、急げど跡へ引く、主人の御身いかゞぞと案じ、行くこそうき世なれ 三重

第四（判官切腹。城明渡し）

登場人物の主な者

鹽谷判官高定（伯州城主）　顏世御前（高定の內室）　大星力彌（由良ノ助の嫡男）
原郷右衞門（高定の諸士頭）　斧九太夫（高定の重臣）　石堂右馬之丞（幕府の上使）
藥師寺次郎左衞門（幕府の上使）　大星由良ノ助（高定の國家老）　鹽谷判官高定の臣大勢

梗概

鹽谷判官高定は扇谷の上屋敷に閉門謹愼を命ぜられ、室顏世御前及び近侍の臣原郷右衞門・大星力彌等に慰められて、淋しう暮してゐる。幕府の上使石堂右馬之丞・藥師寺次郎左衞門が來て、奥に通り上座に着く。判官出でて之を取持つ。上使は幕府の文言を讀上げ、「殿中刄傷の科によつて切腹を申し付け、所領を沒收する」と言渡した。判官は謹んで之を承り、酒を酌んで豫ての覺悟を見せ、徐ろに切腹の座に就き、「國家老大星由良ノ助に面會せぬが殘多い」と言ひながら、三方に載せた九寸五分の短刀を取上げ自害に及ぶ。折柄由良ノ助息を切つて馳込む、家臣等續いて馳込む。判官苦しい息をつぎつゝ、「無念、口惜しい」の一言に無量の心事を含めて、「由良ノ助にこの九寸五分を形見として取らす」と、言ひ遺して絶命する。

由良ノ助は無限の感慨に打たれながら後事を引受け、主君の亡骸を光明寺に葬つて評定を開き、斧九太夫等の不忠者を除き、義臣を集め暴挙を誡めて城を明渡した。かくて彼は城外に立つて形見の九寸五分を拔き放ち、切先を見詰めて思ひに沈んだ。噫今日まで日夜武を磨いた赤穗城の、雲間に隱れ行くを望見し、これが名殘かと萬斛の淚を吞み、低徊久しうして去つた。

評

この段、由良ノ助の沈毅と、主君を景慕する義士の情とを見るやうである。豫て君臣水魚の交はりを結び、右文左武互に勵み

勵まされた立派な武士が、鹽谷の城下に集まつてゐたのであるから、城明渡しの難局も無事に過ぎた。然し彼等が、君辱かしめられゝば臣死すとの覺悟は、心ある者には察せられたであらう。大事に當つて誤らぬ眞の勇猛心は、前後の理非を辨へて、冷靜・沈著な決心と覺悟とから生じるものである。

第四

鹽谷判官閉居によつて扇が谷の上屋敷、大竹にて門戸を閉ぢ、家中の外は出入を止め、事嚴重に見へにけり、かゝる折にも、花やかに奥は、なまめく女中の遊び、御臺所顔世御前、お傍には大星力彌、殿のお氣を慰めんと、鎌倉山の八重九重いろ〳〵櫻、花籠に、活けらるゝ花よりも、活ける人こそ花もみぢ、柳の間の廊下を傳ひ諸士頭原郷右衛門、あとに續いて斧九太夫、「これは〳〵力彌殿早い御出仕」、「イヤ某も國許より親どもが參る迄、晝夜相詰め罷りある」、「それは御奇特千萬」と郷右衛門兩手をつき、「今日殿の御機嫌は、如何お渡り遊ばさるゝ」と、申上ぐれば顔世御前、「ヲヽ二人とも大儀〳〵、この度は判官樣御氣詰に思し召し、お失例でも出よふかと、案じたとは格別、明暮築山の花盛り御覽じて、

○扇谷　相州鎌倉にあつて、龜谷〔かめがたに〕坂の南、現在鎌倉停車場の北西。(序云、淺野長矩の屋敷は鐵砲洲にあつた)。

○御臺所　貴人の内室の敬稱。御臺所は御臺盤所の略で、内室は臺盤所で食物の世話する意より稱した語。鹽谷の内室を御臺所といふは僭越である。(見栄引)

○柳の間　座敷の建具などに柳の模様をちなんだ室。

○失例　不例、病氣。

御機嫌のよいお顔ばせ、それ故に自らもお慰に差上げふと、名有る櫻を取寄せて見やる通りの花挿へ」、「アヽいかさまにも仰の通り、花は開くものなれば、御門も開き、閉門を御赦さるる吉事の御趣向、拙者も何がなと存ずれど、かやうな事の思付は、不調法なる鄕右衞門、ヤア肝心の事申上げん、今日御上使のお出と承はりしが、定めて殿の御閉門を御赦さるゝ御上使ならん、何と九太夫殿、そふは思召されぬか」、「ハヽヽヽコレ鄕右衞門殿、この花といふものも、當分人の目を悅ばすばつかり、風が吹けば散り失せる、こなたの詞もまつ其の如く、人の心を悅ばさふとて、武士に似合はぬぬらりくらりと、跡からはげる正月詞、なぜとお言やれ、此の度殿の御越度は、饗應の御役儀を蒙りながら、執事たる人に手を負せ、館を騷がせし科、輕うて流罪、重うて切腹、自體又師直公に、敵對ふは殿の御不覺」と、聞きもあへず鄕右衞門「さては其方、殿の流罪切腹を願はるゝか」、「イヤ願ひは致さねど、詞をかざらず眞實を申すのじや、元を言へば鄕右衞門殿、此方の吝嗇吝さから發つた事、金銀を以て面を張り召さるれば、斯樣な事は出來申さぬ」と己が心に引當てゝ、慾面打消す鄕右衞門「人に媚び諂ふは侍でない、

○正月詞　おせじ。「俚言集覽」に「正月辭‖諛言を云」。ここの文意は、當座の間に合はせのおせじをいうても、後からすぐに嘘となつて顯はれるといふのである。

○おいやれ　お言ひやれ。申されるなら。

○不覺　覺悟の確ならぬこと。不調法。

○面を張る　人を壓伏する。「張る」は撲つ義。「金〔かね〕で面〔つら〕はる」は前段に出てゐる。

○慾面打消す　慾心の顏面に現はれていふことを反駁する。

○御臺　御臺所の略。その條を見よ。

○歌の點　歌につける優劣の點　歌の點取り。歌の點者に從つて添削を乞ふこと。

○小夜衣　「さなきだに重き云々」を見よ。

○心外　意外のことに我が心を痛ますこと。

○昵近　なれ親しむこと。親友。

○間　酒の間をすること。他の者同士が酒を飲合うてゐる間に入つて、盃を受けて又差すこと。

○したが　然し。（見索引）

武士でないなふ力彌殿、何とそふではあるまいか」と、詞のかどを宥むる御臺、「二人共に爭ひ無用、今度夫の御難儀なさる、元の起りはこの顔世、いつぞや鶴が岡で饗應の折から、道知らずの師直、主のある自らに無體な戀をいひかけ、さま〴〵と口說きしが、恥を與へ懲りさせんと、判官樣にも知らさず、※歌の點に事よせ、※小夜衣の歌を書き、恥しめてやつたれば、戀の叶はぬ意趣ばらしに判官樣に惡口、固より短氣なお性質、得堪忍なされぬはお道理でないかいの」と、語り給へば鄉右衞門・力彌も倶に御主君の、御憤を察入り、※心外面に顯はせり、「はや御上使の御出」と、玄關廣間ひしめけば、奥へ斯くと通じさせ、御臺所も座を下り三人出迎ふ間もなく、入來る上使は石堂右馬之丞、師直が※昵近藥師寺次郎左衞門、「役目なれば罷り通る」と、會釋もなく上座に着けば、一間の内より鹽谷判官、しづ〳〵と立出で、「これは〳〵御上使と有つて石堂殿御苦勞千萬、先お盃の用意せよ、御上使の趣承はり、何方も」と一獻酌み、「積欝を晴し申さん」、「ヲヽそれようござろ、藥師寺も※お間致さふ、※したが上意を聞かれたら、酒も咽へ通るまい」と、あざ笑へば右馬之丞、「我々今日上使に立つたる其の趣、

○宿意　かねてよりの恨み。

○ぞべら〳〵　だらしない様。だらり〳〵。

○白小袖無紋の社杯　死裝束である。近松作「心中宵庚申」上卷にも「山脇か七郎白小袖、かいかいに淺葱社杯、覺悟極めて座になほれば」とある。

具に承知せられよ」と、懐中より御書取出し、押開けば判官も席を、改め承はる其の文言「この度鹽谷判官高定、私の宿意を以て執事高ノ師直を刄傷に及び、館を騒がせし科に由つて、國郡を沒收し、切腹申付くる者なり」、聞くよりはつと驚く御臺、並居る諸士も顔見合せ惘れ、はてたるばかりなり、判官動ずる氣色もなく「御上意の趣委細承知仕る、さて是からは、各々の御苦勞休めに、打寛いで御酒一つ」、「コレ〳〵判官默り召され、其方が今度の科は、縛首にも及ぶべき所、お上の慈悲を以て、切腹仰付けらるゝを有難う思ひ、早速用意もすべき筈、殊に以て切腹には定つた法のあるもの、それに何ぞや、當世樣の長羽織、ぞべら〳〵としらるゝは、酒興か但し血迷ふたか、上使に立つたる石堂殿、この藥師寺へ不作法」と、きめつくれば莞爾と笑ひ「此の判官酒興もせず血迷ひもせぬ、今日上使と聞くよりも、かくあらんと期したる故、豫ての覺悟見すべし」と大小・羽織を脱捨つれば、下には用意の白小袖無紋の社杯死裝束、皆々これはと驚けば、藥師寺は言句も出でず、面ふくらして閉口す、右馬之丞さし寄つて「御心底察入る、即ち拙者檢使の役、心靜かに御覺悟」、「ア、御親切忝し、刄傷におよびし

より、かくあらんとはかねての覺悟、恨らくは館にて、加古川本藏に抱止められ、師直を討もらし無念、骨髓に徹つて忘れ難し、湊川にて楠正成、最期の一念によつて、生を引くと謂ひし如く、生かはり死かはり、鬱憤を晴さん」と、怒の聲と諸共に、お次の襖打叩き、「一家中の者ども、殿の御存生に御尊顔を拜し度き願ひ、御前へ推參致さんや、鄕右衛門殿御取次」と、家中の聲々聞ゆれば、鄕右衛門御前に向ひ、「いかゞ計ひ候はん」、「フウ尤なる願なれども、由良ノ助が參る迄無用々々」、はつとばかり一間にむかひ、「聞かるゝ通りの御意なれば、一人も叶はぬ／＼」、諸士は返す詞もなく、一間もひつそと、靜まりける、力彌御意を承はり、かねて用意の腹切刀御前に直すれば、心靜かに肩衣とりのけ座を寛げ、「コレ／＼御檢使、御見屆け下さるべし」と、三方引寄せ九寸五分押戴き、「力彌、／＼」、「ハア」、「由良ノ助は」、「いまだ參上仕りませぬ」、「フウ、ヱヽ、存生に對面せで殘念、ハテ殘り多やな、是非に及ばぬこれまで」と、刀逆手に取直し、左手に突立て引廻はす、御臺二目と見もやらず口に稱名目に泪、廊下の襖踏開き、駈込む大星由良ノ助、主君の有樣見るよりも、ハはつとばかりにどうと伏す、跡に續い

○湊川にて楠正成、最期の一念によつて生を引く 「太平記」巻十六、正成兄弟討死の條に「正成座上に居つつ舎弟の正季に向つて、抑最期の一念に依つて善惡の生を引くといへり云々」。

○ひつそ ひつそり。

○肩衣 衣の上に着て、肩から背のみ覆ひ、前は襟だけあつて袖がない。肩衣と半袴を合はせて裃といふ。

○九寸五分 長さ九寸五分ある短刀である。これを鎧通しともいふ。戰陣に臨む時に太刀や脇差の外に差して出たもので、敵を組打した時に之を以て刺し、又は切腹する時にも用ひる。

○稱名 佛の名を稱へること。南無阿彌陀佛の稱名念佛。

○[illegible] 諸士の待ちに待つ由良ノ助なか／＼出て来ず、最後に至つて周章て駈込むところ、作者の苦心を見る。

○何程か　「どんなにか本望に存じますよ」といふを、略してかくいうた。
○尋常　卑怯でなく立派に。「太平記」卷三、赤坂城軍の條に「敵ながらも弓矢取つて尋常に死したる者かなと、譽めぬ人こそ無かりけれ」。
○切先　切先三寸といひ、刀の先「さき」の最もよく切れる所。
○ふゑ　吭。咽喉の氣管の通じる所。のんどぶえ。
○五臓　（既出）
○六腑　膽・胃・大腸・小腸・膀胱・三焦。五臓六腑を「はらわた」の意にいふ。
○くたばる　「くたびる」の轉語であらう。死ぬ。（この語現今には罵つて死亡する意にのみいうてゐる。）

て千崎・矢間、其外の一家中ばら〳〵と駈入つたり、「ヤレ由良ノ助待兼ねたはやい」、「ハア御存生の御尊顔を拜し、身に取つて何程か」、「ヲ、われも滿足〳〵、定めて仔細聞いたであろ、ヱヽ無念、口惜しいはやい」、「委細承知仕る、この期に及び、申上ぐる詞もなし、只御最期の尋常を、願はしう存じまする」、「ヲヽ言ふにや及ぶ」と諸手をかけ、ぐつ〳〵と引廻し、苦しき息をほつとつき、「由良ノ助、この九寸五分は汝へ記念、わが鬱憤を晴させよ」と、切先にて氣管刎切り、血刀投出しうつぶせに、どうど轉び息絶ゆれば、御臺を始め並居る家中、眼を閉ぢ息を詰め齒を食しばり控ゆれば、由良ノ助にじり寄り、刀取上げ押戴き、血に染まる切先を打守り〳〵、拳を握り、無念の涙はら〳〵〳〵、判官の末期の一句五臟六腑に染渡り、扨こそ末世に大星が、忠臣義臣の名を上げし根ざしは、かくと知られけり、藥師寺は突立上り、「判官がくたばるからは早々屋敷を明け渡せ」、「イヤ然は言はれな藥師寺、いはゞ一國一城の主、ヤ方々、葬送の儀式取賄ひ、心靜かに立退かれよ、この石堂は檢使の役目、切腹を見屆けたれば、この旨を言上せん、ナニ由良ノ助殿、御愁傷察し入る、用事あらば承はらん」と、必ず心おか

れな」と、並居る諸士に目禮し、悠々として立歸る。「この藥師寺も死骸かたづける其の間、奥の間で休息せう。家來參れ」と呼出し、「家中共ががらくた道具門前へ投り出せ、判官が所持の道具、俄浪人にまげられな」と、館の四方をねめまはし、一間の内へ入りにける。御臺はわつと聲をあげ、「扨も〳〵武士の身の上程悲しいものゝあるべきか、今夫の御最期に言ひたい事は山々なれど、未練なと御上使の輕侮がはづかしさに、今迄こらへてゐたわいの、いとをしの有樣や」と。亡骸に抱きつき前後も、わかず泣き給ふ。「力彌參れ、御臺所もろとも亡君の御骸を、御菩提所光明寺へ早々送り奉れ。由良ノ助も後より追つ付き、葬送の儀式取行はん、堀・矢間・小寺・間。其の外の一家中。道の警護致されよ」と、詞の下より御乘物手舁にかき据へ戸を開き、皆立寄つて御死骸涙と共に。乘せ奉りしづ〳〵と舁上ぐれば、御臺所は正體なく歎き給ふを慰めて、諸士の面々われ一と、御乘物に引つ添ひ〳〵御菩提所へと急ぎ行く。人々御骸見送りて、座に著けば斧九太夫、「何大星殿、其許は御親父八幡六郎殿よりの家老職、拙者とても其の右には坐せども、今日より浪人となり、妻子をはごくむ手段なし。殿の貯へ置き給ふ御用

○がらくた　がらくした芥「あくた」の義であらう。やくざ。
○まげる　質入する。七の字は質の畫が略つてゐるによつて七のことにいひ、七と質と音相通じるところで質入質人の意にいふ。
○菩提所　一寺を定めて一家世々菩提の追福を行はせる所。即菩提寺。
○光明寺　相州鎌倉、材木座の南、小坪の北に在り、佛法山と號する大寺で、淨土宗關東總本山で、當時同宗の靈場。
○手舁　乘物の棒を肩へ上げずに手で舁くこと。
○われ一　我こそ一番と、我勝ち。
○右　[illegible]九太夫は由良ノ助よりも上座である。

金を配分し、早く屋敷を渡さずば、藥師寺殿へ無禮ならん」。「イヤ千崎が存ずるには、指す敵の高の師直、存命なるが我々が欝憤、討手を引受け、この館を枕として」、「※アヽこれ〳〵、討死とは惡い料簡、親九太夫の申さるゝ通り屋敷を渡し、金銀を分けて取るが上分別」と、地評議の中に由良ノ助、默然として居たりしが、詞「只今の評定に、彌五郎の所存と、我が胸中一致せり、言はゞ亡君の御爲に、我々殉死すべき筈、むざ〳〵と腹切らふより、足利の討つ手を待受け、討死と一決せり」。「ヤア何といはるゝ、善い評定かと思へば、浪人の※やせ顏張り、足利殿に弓引かふ、アヽそれは無分別、マア此の九太夫合點がいかぬ」、「ヲヽ親父殿そふじや〳〵、この定九郎も其の意を得ぬ、地この※談合には省いてもらはふ」、「長居は無益お歸りなされ」、詞「それよかろ」、地いづれもは緩りと居召され」と、親子打連れ立歸る。地「ヤア慾面の斧親子、討死を聞怖して逃げ歸つたる臆病者、彼奴構はずと大星殿、討手を待つ御用意〳〵」。詞「アヽ騷がれな彌五郎、足利殿に何恨あつて弓ひくべき、彼等親子が心底を探らん爲めの計略、藥師寺に屋敷を渡し、思ひ思ひに當所を立退き、都※山科にて再會し、胸中殘さずうち明けて、評議を※しめん」と

○アヽこれ〳〵……上分別　斧九太夫の子、定九郎の詞。
○痩顏　原本のまま。蓋し「痩我を」であらう。
○談合　「だんかふ」であつて、「か」は濁らぬ。
○山科　山城國宇治郡山科。今、京都市東山區内。
○しめん　締めよう。まとめよう。

○べん〳〵　便々だらり。

○いがみかかる　怒り嗔(ほ)えかかる。「いがむ」は、饅頭屋本「節用集」に「嗔」、易林本「節用集」に「啀」の字が當ててある。もと獸が怒りほえて嚙みつかうとするをいふ。

○あやす　流す。滴りもらす。「うつほ物語」に「たぶさの血をさしあやして」。

○貫木(くわんのき)　「くわんぬき」(「くわんのき」の音便)ともいふ。門戸を閉ぢて、これを鎖し固める横木。

いふ間もあらせず、次郎左衛門一間を立出で、「ハテべん〳〵と長詮議。死骸片付けたら、早く屋敷を明渡せ」と、いがみかゝれば鄕右衛門、「アヽ成程お待兼。亡君所持の御道具、其の外の武具馬具迄よく〳〵改め請取られよ、サア由良ノ助殿退散あれ」、「ヲヽ心得たり」としづ〳〵と立上り、御先祖代々我々も代々、晝夜詰めたる館の內、今日を限りと思ふにぞ、名殘おしげに見かへり見かへり、御門外へ立出づれば、御骸送り奉り、力彌・矢間・堀・小寺追々に馳歸り「扨は屋敷をお渡しあつたか、此の上は直義の、討手を引受け討死せん」と、はやり立てば由良ノ助、「イヤ〳〵今死すべき所にあらず、これを見よかた〴〵」と、亡君の御記念を拔放し、「この切先には、我が君の御血をあやし、御無念の魂を殘されし九寸五分、この刀にて師直が、首かき斬つて本意を遂げん」、「實に尤」と諸武士の勇み、屋敷の內には藥師寺次郎、門の貫木はつしと閉てさせ「師直公の罰が中り、扨よいざま〳〵」と、家來一度に手を叩き、どつと笑ふ鬨の聲、「アレ聞かれよ」と若侍取つて返すを由良ノ助、「先君の御憤り晴さんと思ふ所存はないか」、はつと一度に立出でしが、思へば無念と館の內を、ふりかへり〳〵、はつたと睨んで立出づる

第五（山崎街道 二つ玉）

登場人物の主な者

早野勘平（鹽谷判官の遺臣。お輕の夫）　お輕（勘平の妻）　千崎彌五郎（鹽谷判官の遺臣）

與市兵衞（お輕の父）　斧定九郎（鹽谷判官の不忠な遺臣。九太夫の子）

梗概

早野勘平はお輕と共に、お輕の親里の農家に身を寄せ、獵人となつて日を送つてゐる。

六月二十九日驟雨烈しい闇の夜山崎街道に獵に出て、古朋輩千崎彌五郎に邂逅し、久濶を敍して、故主君の爲に同志の遺臣相集つて復讐の企あるを知り、直ちに「其の同志の中に加へて下され」と懇望して、用金の調達を約して別れる。

不忠な斧定九郎は、父九太夫に勘當されて追剝となる。彼は、お輕の父與市兵衞が聟勘平の爲に入用金を調へようとして、お輕を祇園の遊女に賣つた前金を懷にして歸るを嗅附け、之を道に要して呼止め、刺殺して五十兩を奪ふ。

折節勘平が猪を狙つて驀然發射した二つ玉は、外れて金を奪うて喜べる定九郎に命中した。目刺すも知らぬ暗がりを探り寄つて、これは大變、人



假名手本忠臣藏　五段目（山崎街道）　初代豐國畫
文化二年七月河原崎座

を打殺したと驚いたか、懐中の五十兩に手が觸れ、之を奪つて逃げ去る。

評

大望成就の前には必らず堪へ難い艱苦を伴ふ。義は心肝を貫く判官の遺臣がつぶさに辛酸を嘗める幕は、この段によつて切落された。そして因果應報の理を目の前に見せて、感激の涙をそそる其の道程の第一歩に入る。

さるにても、勘平は今また言ひ開きのできぬ強盗となつた。其奇しき運命の絲に操られる身の行末が恐ろしい。

第五

※鷹は死ても穗はつまずと譬にもれず※入ル月や、日數も積る※山崎の邊に近き侘住居、早野勘平若氣の誤り世渡るもとで※細道傳ひ、この山中の鹿猿を撃つて商ふ種※ケ島も、用意に持や袂まで※鐵砲雨のしだらでん、誰水※無月といふ立の、晴間をここに松の蔭、向ふより來る小提燈これも昔は※弓張の燈火、消じ濡さじと、合羽の裾に大雨を凌ぎていそぐ夜の道「イヤ申し／＼、卒爾ながら火を一つ御無心」と立寄ば、旅人も※ちやくと身構へし「ムムこの街道は無用心と知つて合點の一人

○鷹は…つまず　肉食の鷹は、たとひ飢ゑ困つても[illegible]を啄むやうな卑しいことはしない。[illegible]不義はせぬといふ意の諺。勘平[illegible]

○入る月　[illegible]し、[illegible]の詞に、[illegible]の死は六月二十九日の夜となつて居るが、[illegible]山崎の山にかかる[illegible]に過ぎない。[illegible]入るに、月日の數々積るをいひかけた。

○山崎　山城國乙訓郡山崎。

○細道　細々と世に細道をいひかく。

●種子島　[illegible]の小銃をいひ、[illegible]「商ふ種」にいひかく。

○鐵砲雨のしだらでん　[illegible]雨の如く、雷鳴[illegible]大雨。●しだらでん[illegible]

○水無月　[illegible]無くなる月の義。陰暦六月[illegible]いふにかけていひかく。

○弓張　弓[illegible]武士に[illegible]掛、

○ちやくと　[illegible]作「百日曾我」に[illegible]

旅。見れば飛道具の一口商、得こそは貸さじ出直せ」と、びくと動かば一討チと眼を配れば、「イヤアなる程。盜賊とのお目違ひ御尤千萬シ。我等はこの邊の獵人なるが、先程の大雨に火口も濕り難儀至極。サア鐵砲それへお渡し申ス。自身に火をつけ御貸」と。他事なき詞顔付キを、きつと眺めて、「和殿は早野勘平ならずや」、「さいふ貴殿は千崎彌五郎。これは堅固で」「御無事で」と絶えて久しき對面に、主人の御家沒落の、胸に忘れぬ無念の思ひ互に、拳を握り合、勘平はさし俯向き、暫し詞もなかりしが、「エヽ面目もなき我が身の上、古朋輩の貴殿にも、顔も得上ぬ此仕合、武士の冥加に盡きたるか、殿判官の御供先、お家の大事起りしは是非に及ぬ我不運、其場にも有合せず、お屋敷へは歸られず所詮、時節を待ツて御詫と、思ひの外の御切腹南無三寶、皆師直めがなす業、せめて冥途の御供と刀に手は懸けたれど、何を手柄に御供と、どの面さげて言譯せんと心を碎く折から、密に樣子を承はれば、由良殿御親子。鄕右衛門殿を始めとして、故殿の欝憤せん爲、寄々の思召シ立チあるとの噂、我等とても御勘當の身といふでもなし、手懸り求め由良殿に對面遂げ、御企の連判に御加へ下さらば生々世々の面目、

○一口商ひ　一口で濟む取引の義、以て唯一言で事のわかる簡單の意にいふ。近松作「國性爺合戰」に「賴まれうか賴まれぬか一口商ひ、いやと言はば即座の敵」。

○火口　イチビの殼などで製し、燧火を打附けて火を移し取るもの。ここは火藥に點火する火繩をいうたのである。

○武士の冥加に盡きる　武士が目に見えぬ神佛の加護に見はなされる。「冥加」とは、眼に見えぬ即ち冥々の中に、神佛の加護を被つてゐること。

○南無三寶　これはしまつたりと言ふ時に發する語。（既出）

○寄々の思召し立ち　敵討の相談をいうたのである。

○生々世々　生れ變り世に出づる度每、即ち現世・過去世・未來世の幾世にも亙ること。「生」は人の世にある間、「世」は人の天地間に同居する間をいい、佛書の語である。

貴殿に逢も優曇華の、花を咲せて侍ィの、一分立て給はれかし、古朋輩の好み武士の情、お頼申ス〳〵と両手をつき、先非を悔し男泣理、せめて不便なる、彌五郎も朋輩の悔道理と思へども、大事をむさと明ヵさじと、「コレサ〳〵勘平、はてさて、お手前は身の言譯に取交せて、御企のイヤ連判などとは何の譫言、左様の噂かつてなし、某は由良殿より郷右衛門殿へ急の使ィ、先君の御廟所へ、御石碑を建立せんとの催し、然し我々とても浪人の身の上、これこそ鹽谷判官殿の御石塔と、末の世までも人の口の端にかかるもの故、御用金を集る其御使ィ、先君の御恩を思ふ人を選出す爲、わざと大事を明されず、先君の御恩を思はゞ、ナナ合點か〳〵と、石碑になぞらへ大星の、謀計を餘所に知らせしは、げに朋輩の好みなり、「ハアア忝い彌五郎殿、なる程石碑といひ立、御用金の御拵ある事とつくに承はり及び、某も何卒して用金を調へ、それを力に御詫と心は千々に碎けども彌五郎殿、恥しや主人の御罰で今この態、誰にかうとの便りもなし、されども輕が親、與市兵衛と申スは頼もしい、百姓、我々夫婦が判官公へ、不奉公を悔嘆き、何卒して元の武士に立返れと、翁嫗共に歎キ悲しむ、これ幸ィ御邊

◉優曇華　天竺にある想像上の樹で、三千年に一度花を開くといふ。よつて逢ふ事稀なためしにいふ。
○一分　一身の面目。
○かつて　全く。下の打消と應じる。（見索引）
○餘所に　それとなく餘所事（よそごと）にして。
○御邊　同輩に用ひる對稱代名詞、そなた。

・山崎の渡場　山城國山崎・橋本間にあつて、淀川の渡しといつたものである。
○雨の脚　雨の降るのは線狀に見えるので稱した語で、漢語にいふ雨脚・斜脚などこの意である。
○子故の闇　「後撰集」卷十五、藤原兼輔の歌に「人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道にまどひぬるかな」
◉しら波　盗賊の異稱と「知らず」にいひかく。
○夜働き　盗賊。
・だんびら物　幅の廣い平たい刀。
○落差し　刀を無造作にこじりさがりに佩びること。

に逢し物語、段々の仔細を語り、元の武士に立返るといひ聞さば、僅の田地も我子の爲何しに否は得も言はじ、御用金を手懸りに郷右衞門殿までお取次、一入賴存る」と餘儀なき詞に「ムムなる程、然らばこれより郷右衞門殿まで右の譯をも話し、由良殿へ願ふて見ん、明々日は必きつと御返事、卽ち郷右衞門の旅宿の所書キ」と、渡せば取ッて押シ戴き「重々の御世話忝し、何卒急に御用金を拵へ、明明日お目に懸らん、某が在處お尋あらば、この山崎の渡場を左リへ取り、與市兵衞とお尋あれば、早速相知レ申スべし、夜更けぬ内に早くも御出、コレこの行キ先はなほ物騷、隨分ぬかるな」「合點合點、石碑成就するまでは、蚤にもくはさぬ此體、御邊も堅固で、御用金の便を待ッぞ、さらば」「さらば」と兩方へ立別れ、てぞ急ぎ行、又も降りくる雨の脚人の足音とぼとぼと、道は闇路に迷はねど子故の闇につく杖も、直なる心堅親爺一筋道の後から、「ヲヽイ／＼親爺殿、よい道連レ」と呼はつて、斧九太夫が伜定九郎、身の置處しら波やこの街道の夜働き、だんびら物を落し差、「さつきにから呼ブ聲が、貴樣の耳へは這入らぬか、この物騷な街道を、よい年をして大膽大膽、連にならふ」と向ふへ廻り、ぎよろつ

○一家中 一家から分れ、親類内。
○鐚片半 鐚錢の一錢半錢。片(ひら)は薄く平たい物をいふ助數稱呼詞。
○有樣 「われさま」の訛。おまへさま。貴方。(見索引)
○詰らぬ事 困まつた事。
○ある格 世間普通ある流儀。
○霍亂 俗稱(あつさあたり)吐瀉病。(cholera nostrasの稱)
○和中散 腹痛などに效能ある有名な賣藥名。
・反魂丹 [illegible]賣り出す有名な賣藥名。
○むごい料理 [illegible]を料理にいうた。

く眼玉をつとせしが流石は老人、「これは／＼お若いに似ぬ御奇特な、私もよい年をして、一人旅はいやなれど、サア何處の浦でも金程大切な物はない、去年の年貢に詰り、この中から一ッ家中の在所へ無心に行たれば、これも鐚片半才覺ならず、埒の明ぬ所に長居はならず。すご／＼一人戻る道」と、半分いはさず「ヤイ喧ましい、有樣が年貢の納らぬその相談を聞には來ぬ、コレ親爺殿、俺がいふ事とくと聞しやれや、マアかうじやは、こなたの懷に金なら四五十兩の嵩、縞の財布にあるのをとつくりと見付ヶて來たのじや、貸て下され、男が手を合す、定めて貴樣も何ぞつまらぬ事か、子が難儀に及ぶによつてといふ樣な、ある格な事じやあろ、けれど俺が見込だらハテしよ事がないと諦て、貸て下され／＼」と懷へ手を差入レ、引摺り出す縞の財布、「ア、申シそれは」、「それはとは、これ程ここに在るもの」と引つたくる手に縋り附キ、「イエ／＼この財布は跡の在所で草鞋買とて、端錢を出しましたが、後に殘るは晝食の握飯、霍亂せん樣にと娘がくれた和中散、反魂丹でござります、お赦しなされ下さりませ」と、ひつたくり迯行く先へ立廻りヱヽ、聞分のない、むごい料理するがいやさに、手ぬるう言へば

○拜打ち　二尺八寸の太刀の柄を兩手に握つて振翳し、上から下へ切り下げること。
○幹竹割　幹竹を割るやうに眞直に割ること。
○くたばる　（既出）
○肝先　胸。本曲第六に「聞くよりはつと勘平が肝先にひしとこたへ」とある「肝先」も胸の意である。
○仕覺　才覺の仕方。工面。
○だんかふ　談合の「か」は濁らぬ。（既出）
○沙汰なし　娘の身賣を秘密にして知らさず。
○武士は相身互ひ　武士は相互に思ひやり同情の念あるべしとの諺。「武士は相互」ともいふ。

附キ上る。サアその金こゝへ蒔出せ、遲いとたつた一討」と、二尺八寸拜打ち、「なふ悲しや」といふ間もなく幹竹割と斬付クる、刀の廻りか手の廻りか、外れる拔身を兩手にしつかと摑附キ、「どふでも此方殺さしやるの」。「ヲヽ知れたこと。金のあるのを見てする仕事、小言吐かずとくたばれ」と、肝先へ差付クれば、「マヽヽヽまあ待ツて下さりませ、ハア是非に及ぬ、なる程〳〵、これは金でござります、けれども此金は。私がたつた一人の娘がござる、その娘が命にも代へぬ。大事の男がござりまする、その男の爲に要ル金、ちと譯ある事故浪人して居まする、娘が申ますするは。あのお人の浪人も元は私故。何卒して元の武士にして進ぜたい〳〵と、嚊と私とへ毎夜さ頼み、ア身貧にはござりまする、どうも仕覺の爲やうもなく、婆と色色談合して、娘にも呑込ませ、聟へは必沙汰なしと謀し合せ、ほんに〳〵親子三人が血の涙の流れる金、それをお前に取られて娘は何となりませう、コレ拜みます、助て下されませ、お前もお武士の果そふなが、武士は相身互、この金がなければ、娘も聟も人樣に顏が出されぬ、たつた一人の娘に連添ふ聟じやもの、不便にござる、可愛いござる。料簡してお助なされて下

○まつと [illegible]
○長ばへ [illegible]
○かはいや [illegible]、憐憫の意。ふびんなわい。可愛郎ら愛らしいことの義ではない。
○のたくる [illegible]
○何のいの [illegible]
○いとしぼや [illegible]
○刀も拔かぬ [illegible]
○芋刺しゑぐり [illegible]
●四苦八苦 [illegible]六十四をいひかけ。
○耳 金額の意。金額をとりそろへるを「耳を揃へる」といふ。[illegible]
○跳 [illegible]
[illegible]

さりませ、エ、お前はお若いによつてまだお子も御座るまいが、やんがてお子を持つて御覧じませ、親爺がいひ居つたは尤じやと思召して、この場を助けさしやつて下さりませ、マア一里往けば私の在所、金を聟に渡してから殺されましよ、申し申し、娘が喜ぶ顔見てから死たうござります、コレ申ア、、あれ、〳〵」と呼はれど跡先も遠く山彦の谺に、あはれ催ふせり、「ヲ、悲しいこつちやは、まつと長ばへ、ヤイ老耄め、その金で俺が出世すりや、その惠でうぬが伜も出世するはやい、人に慈悲すりや悪うは報はぬ、ア、可愛や」と、ぐつと突く、うんと手足の七轉八倒。のたくりまはるを脚にて蹴返し「ヲ、いとしや、痛かろけれど己に恨はないぞや。金がありやこそ殺せ、金がなけりや何のいの、金が敵じやいとしぼや。南無阿彌陀。南無妙法蓮華經。どちらへなりと失せ居ろ」と。刀も拔かぬ芋刺ゑぐり、草葉も朱に置く露や。年も六十四苦八苦、敢なく息は絶にけり、しすましたりと件の財布、暗がり耳の摑よみ、「ヒヤ五十兩、エ、久しぶりの御對面、忝し」と首に引かけ死骸を直ぐに谷底へ、蹴込蹴込泥まぶれ、跳は我が身にかかるとも、知らず立つたる後より、逸散に來る手負猪「これはならぬ」と身を

避ぎる、駈來る猪は一文字、木の根岩角踏立テ蹴立テ、鼻怒らして泥も草木も一トまくりに飛行ば、あはやと見送る定九郎が、脊骨をかけてどつさりと、肋へ拔ける二つ彈丸、うんともぎやつともいふ間なく、※ふすぼり返りて死たるは、心地よくこそ見へにけれ、地猪撃止めしと勘平は、鐵砲提ここかしこ、探りまはりて扨こそと、引ッ立れば猪にはあらず、詞「ヤアヽこりや人じや南無三寳」。地仕損じたりと思へど暗き眞の闇。誰レ人なるぞと問れもせず。まだ息あらんと抱起せば、手に當る金財布。掴で見れば四五十兩。※天の與へと押戴く〳〵、猪より先キへ逸散に飛が如くに、三重急ぎける

○ふすぼりかへりて　鐵砲で射殺されたから火藥の爲に甚しく焦げて。

○天の與へ　「國語」卷二十一、越語下に「天予不レ取反爲二之災一」「說苑」に「天與不レ取反受二其咎一」

第六（お輕身賣、勘平自害）

登場人物の主な者

おかる（勘平の妻）　お輕の母　祇園町一文字屋主人

早野勘平（鹽谷判官の遺臣、お輕の夫）　滅法彌八（狩人）　種が島の六（狩人）

狸の角兵衛（狩人）　原郷右衛門（鹽谷判官の遺臣）　千崎彌五郎（鹽谷判官の遺臣）

梗概

お輕の家では與市兵衛の歸りが遲いので、母子共に案じてゐる。折節京都祇園町一文字屋の主人が來訪して「昨夜ここの與市兵衛殿が來られたから、證文を書かせてお娘の身賣りの前金五十兩を、この着物と共切れの縞の財布に入れてお渡し申した」と語り、跡金を拂うてお輕を連れて歸らうとする途端、勘平が歸つて仔細を聞く。そして誤つて人を銃殺して奪つた財布は、一文字屋の主人が着てゐる衣服の縞柄と同じなので、ハテ、さては舅を打殺したのであつたかと早合點し、苦悶しながらお輕を一文字屋に渡すこととなり、お輕は駕籠に乘せられて祇園町に行く。

其の後に近在の狩人等が、「與市兵衛殿が山道の中で死んでゐられた」として、死骸を運び込んだ。老母は勘平の樣子に疑を抱き、勘平の懷に手を入れて縞の財布を摑み出し、親を殺したものと思ひ込んで、勘平に恨みの數々を述べ立てて涙に暮れる。

この時原郷右衛門・千崎彌五郎が來り、勘平が舅殺しの罪惡を責めて、昨夜勘平から受取つた五十兩を返す。勘平は舅殺しの大罪を犯した上に、折角亡君の爲にと思うた金を返されて「我は何たる罪深い身か」と、愁嘆に暮れて刀を腹に突立て、苦しい息を續きながら、誤つて舅を打殺した仔細を語る。其の言を聽く中、彌五郎若しやと思ひ、能く死骸を檢すれば、鐵砲傷と違ひ刀で抉つた傷なので、「ハテこれは」と皆々驚き、初めて定九郎が與市兵衛を殺して、勘平に銃殺されたのであつたことを知る。

老母は勘平に深く誤解を謝し、郷右衛門は直ちに勘平を義士一味徒黨の連判に加へ、勘平の臨終際に改めて百兩を納受して、更にこれを與市兵衛・勘平の供養料として老母に與へる。

老母は一人生き殘るを嘆いて、皆哀愁の裡に別れる。

評

好事魔多しの譬に漏れず、義士が快擧を決行する道程には、これに關聯して大小幾多の哀愁を生んだ。そして彼等の家庭は、

ゐ大儀、別條なう戻られましたか」、「エヽ、扨は親爺殿と連立つて來はなされませぬか、これはしたり、お前へ往てから今に於て」、「ヤア戻られぬか。ハテめんよふな、ハアア若し稻荷前をぶら付いて彼の玉殿につままりやせぬかの、コレこの中爰へ見に來て極めた通り、お娘の年も滿五年切。給金は金百兩、さらりと手を打つた。これの親仁が言はるゝには、今夜中に渡さねばならぬ金あれば、今晩證文を認め、百兩の金子お貸しなされて下されと、涙をこぼしての賴み故、證文の上で半金渡し。殘りは奉公人と引替の契約、何がその五十兩渡すと喜んで戴き、ほた／＼言ふて戻られたはもう四つでも有らふかい。夜道を一人金持つて往かぬものと、止めても聞かず戻られたが、但しは道に」、「イヱ／＼寄らしやる所はなふかゝ樣」、「無いとも／＼、殊に一時も早うそなたや私に金見せて、喜ばさふとて息せきと戻らしやる筈じやに合點がいかぬ」、「イヤこれ合點のいくいかぬは其方の穿鑿、こちはさがりの金渡して、奉公人伴れて往の」と、懷より金取出し「跡金の五十兩、これで都合百兩、サア渡す請取らしやれ」、「お前それでもお親仁殿の戻られぬ中はなふ。輕汝が身はやられぬ」、「ハテぐず／＼と埓のあか

⦿めんよう　不思議。

○稻荷前　京都市伏見區稻荷神社前。

○玉殿　狐殿。狐は寶珠の玉を銜めることあるによつていふ。

○おむす　お娘〔むすめ〕の略。近松作「博多小女郎波枕」にも「おむすが着物におりあはせた緞子三本」とある。

○手を打つ　相談事の決定するをいふ。「紙子仕立兩面鑑」に「今御相對申して三百兩で手を打つた」。

○何が　「何と」といふ程の意で、意味を强めた語。

○ほた／＼　機嫌よく、ざれたはむれる貌を示す副詞。「倭訓栞」に「ほたゆ＝俗語なり、ほたえるともいへり…またほた／＼ともいへり」。

○四つ　午後十時頃。

○いきせき　息急。喘ぎつゝ劇しう急ぐこと。

○さがり　全額の幾分かを支拂つて、まだ皆濟にならずに殘つてゐる金。跡金。

◉れこ 「これ」の倒さ語。ここの文は「これづつ[illegible]」と、[illegible]である。

○母者人 「母おや人」[illegible]「母上や人」と[illegible]
[illegible]
○お上 [illegible]
[illegible]
○文字 文字屋の略。
○たとへ [illegible]
○なづけ いひなづけ。許嫁。
○濫亂 [illegible]すること。

○切取り 人を[illegible]つて物を奪ひ取ること。殺人
[illegible]

ぬ、コレぐつともすつとも言はれぬ與市兵衛の印形、證文が物いふ。今日から金で買いきつた身體、一日違へばれこ宛違ふ、どふで斯う爲ざ済むまい」と手を取つて引立つる、「マア〳〵待つて」と取付く母親突退け刎退け、無體に駕籠へ押込み〳〵舁きあぐる門の口、鐵砲に簑笠うちかけ戻りかゝつて見る勘平、つか〳〵と内に入り「詞駕籠の中なは女房ども、こりやマア何處へ」、「ヲ、勘平殿よい所へよう戻つて下さつた」と、地母の喜び其の意を得ず、「詞どふでも深い譯が有ふ、母者人女房ども、地様子聞かふ」とお上の眞中、どつかと坐れば文字の亭主「詞ヲウ扨は此方が奉公人の御亭じやの、譬へ夫でも何でも、號づけの夫など、脇より違亂妨げ申す者これ無く候と、親仁の印形あるからはこちには構はぬ、早う奉公人を請取らふ」、「ヲ、聟殿合點が行くまい、かねて此方に金の要る様子娘の咄で聞いた故、地どふぞ調へて進ぜたいと、いふたばかりで一錢の當もなし、詞そこで親仁殿の言はしやるには、ひよつと此方の氣に女房賣つて金調やうと、よもや思ふてではあるまいけれど、もし兩親の手前を遠慮して居やしやるまいものでもない、いつそこの與市兵衛が聟殿に知らさず娘を賣らふ、まさかの時は切取りする

も武士の習ひ、女房賣つても恥にはならぬ、お主の役に立てる金、調へて※おましたら、まんざら腹も立つまいと、昨日から祇園町へ※折極めに往て今に戻らしやれぬ故、親子案じて居る中へ、親方殿が見へて、昨夜親仁殿に半金渡し、跡金の五十兩と引替に、娘をつれて去のといふてなれど、親父殿に逢ふての上と譯をいふても聞入れず、今連れていなしやる所どふせうぞ勘平殿」、「これは〳〵先以て舅殿の心遣ひ忝い、※したがこちにもちつと善い事があれどもそれは追つて、親父殿も戻られぬに女房どもは渡されまい」、「とはなぜに」、「ハテ※言はゞ親なり※判がゝり、尤昨夜半金の五十兩渡されたでもあらふけれど」、「イヤこれ京大阪を※股にかけ、※女護ノ島ほど奉公人を抱へる一文字屋、渡さぬ金を渡したといふて濟むものかいの、まだ其の上に憎な事がある※てや、これの親仁が彼の五十兩といふ金を、手拭にぐる〳〵と巻いて懐に入れらるゝ、そりや危いこれに入れて首に懸けさつしやれと、己が着て居るこの單物の、縞の切で拵へた金財布貸したれば、やんがて頸にかけて戻られう」、「ヤア何と、こなたが着て居る此の縞の切の金財布か」、「ヲゝ※てや」、「あの此の縞でや」、「何と確な證據で有らふがな」、聞くよ

○おます　ござる。ここの文は、調達してあげたらの意。
○折極め　折合うて物をきめること。契約。協定。
○したが　然し。
○言はゞ親なり　言はゞ親のした事である。それをかれこれ言ふわけにもいかぬ。
○判懸り　證文に印判の捺してあるのが手懸り。
○股にかける　諸方を遍歴して股へてゐるをいふ。
○女護の島　女ばかり住むといふ想像の島。西鶴作「好色一代男」八に「これより女護の島へ渡りて、つかみ取りの女を見せん」。
○てや　のだよ。「俚言集覧」に「てや　西国中国に語末にいへり」と。
○こてや　「さうしてあるこてや」の略。さうであるのだよ。さやうだよ。

○絲入縞　木綿絲の中に絹絲を入れて織つた縞物。

○圖に乘る　調子に乘じて得意になる意。「圖」は方圖の圖と同義。

○七度疑へ　妄りに人を疑ふなの意の諺。

○四の五の　とやかくと理窟をいふこと。

○いやともに　否であらうと何であらうとも。

○でんど　「でんどころ」の略。公儀。法廷。

○六條參　京都六條にある西本願寺參詣。「孫齋筆記」に「六條といへば古より本願寺の事なるに、只今にては、六條參りと云ば二門跡の事になりたり」。

りはつと勘平が肝先にひしとこたへ、傍あたりに目を配り。袂の財布見合せば、寸分違はぬ絲入縞、南無三寶、扨は昨夜鐵砲で撃殺したは舅であつたか。ハアはつと我が胸板を二つ彈丸で撃貫かるゝよりせつなき思ひ、とは知らずして女房、「コレこちの人そは〳〵せずと、遣るものか遣らぬものか、分別して下さんせ」、「ヲヽ成程、ハテもふあの樣に慥に言はるゝからは、行きやらずはなるまいか」、「アノ父樣に逢はいでもか」、「イヤ〳〵親父殿にも今朝ちよつと逢つたが、戻りは知れまい」、「フウそんなりや父樣に逢ふてか」、「それならそふと言ひもせで、嗅樣にも私にも、案じさしてばつかり」といふに文字も圖に乘つて「七度尋ねて人疑へじや、親仁の在處の知れたのでそつちもこつちも心がよい。まだ此の上にも四の五のあれば。いやともにでんど沙汰。まあ〳〵さらりと濟んでめでたい、お袋も御亭も六條參してちと寄らしやれ、サア〳〵駕籠に早う乘りや」、「アイアイこれ勘平殿もふ今あつちへ行くぞへ、年よつた二人の親達、どふでこな樣のみんな世話、取分けて父樣はきつい持病、氣を付けて下さんせ」と、親の死目を露知らず、頼む不便さいぢらしさ、寧そ打明けありのまゝ、話さんにも他人有り

○「鼻紙・扇」と、こまかい事にまで心の付く母性愛がよく寫されてゐる。
○とばつく　とぼ〳〵する。おちつかないで飛びまはる。
○人並な娘を持ち　人並な娘を持ち、然も人並に生活「くら」させることが出來ないでの意の略。
○鳥羽　山城國紀伊郡內、今京都市伏見區內。
○伏見　山城國紀伊郡內、今京都市伏見區內。
○淀　山城國久世郡にある。
○竹田　山城國紀伊郡內、今京都市伏見區內。

と心を、痛め堪へ居る「ヲヽ聟殿、夫婦の別れ暇乞がしたかろけれど、そなたに未練な氣も出よかと思ふての事であろ」、「イヱ〳〵なんぼ別れても、主の爲に身を賣れば悲しうも何ともない。わしや勇んで行くかゝ樣、したが父樣に逢はずに行くのが」、「ヲヽそれも戻らしやつたらつゐ逢ひに往かしやろぞいの、煩らはぬ樣に灸すへて、息災な顔見せに來てたも、鼻紙・扇もなけりや不自由な、何にもよいか。※とばついて怪我しやんな」と、駕籠に乘る迄心をつけ「さらばや、さらば、何の因果で※人並な娘を持ち、この悲しいめを見る事じや」と、齒を食しばり泣きければ、娘は駕籠にしがみつき、泣くを知らさじ聞かさじと聲をも、立てず噎せかへる、情なくも駕籠かきあげ道を早めて急ぎ行く、母は跡を見送り〳〵、「アヽ由ない事いふて娘も嘸悲しかろ、ヲヽこな人わいの、親の身でさへ思ひ切がよいに、女房の事ぐづ〳〵思ふて、煩ふて下さんな、この親父殿はまだ戻らしやれぬ事かいのふ、こなた逢つたと言はしやつたの」、「アヽ成程」、「そりやまあどこらで逢はしやつて、何處へ別れて往かしやつた」、「されば別れた其の處は、※鳥羽か伏見か淀・竹田」と、口から出次第滅法彌八・種が島の六・狸の角兵衛、

所の狩人三人づれ、親爺の死骸に簑打被せて戸板に乘せ、どや／＼と内に入り、「一夜山仕舞ふて戻りがけ、これの親仁が殺されて居られた故、狩人仲間が連れて來た」と、聞くよりはつと驚く母、「何者の所爲、コレ聟殿殺した奴は何者じや敵を取つて下されのふ、コレ親父殿々々」と呼べど叫べど其の甲斐も、泣くより外の事ぞなき、狩人ども口々に「ヲヽお袋悲しかろ、代官所へ願ふて詮議して貰はしやれ、笑止々々」と打連れて皆々わが家へ立歸る、母は涙の、隙よりも勘平が傍へさし寄つて「コレ聟殿、よもや／＼とは思へども合點がいかぬ、なんぼ以前が武士じやとて、舅の死目見やしやつたら、悔りもしやる筈、こなた道で逢うた時、金受取はさつしやれぬか、親父殿が何と言はれた、サア言はつしやれ、サアなんと、どふも返事は有るまいがの、無い證據はコレ、爰に」と勘平が懐へ手を差入れて引出すは、先刻にちらりと見て置いた此の財布「コレ血の附いてあるからは、こなたが親父を殺したの」、「イヤそれは」、「それはとは、ヱヱ和御料はなふ、隱しても隱されぬ天道樣が明らかな、親父殿を殺して取つた、その金にや誰に遣る金じや、ムウ聞へた、身貧な舅、娘を賣つた其の金を、中で

○山 山狩。[illegible]夜[illegible]うちに山狩を仕舞うての意。

○代官所 [illegible]代には、幕府直[illegible]又は藩主の[illegible]を管理する[illegible]官を代官[illegible]

○笑止 [illegible]「しようし」であらう。すぐれた事、[illegible]のさめること。氣[illegible]

○見やしやつたら 見なさつたら。

○此の財布 [illegible]は[illegible]れは「[illegible]爰に」とある詞に對して、それは何か[illegible]「[illegible]の財布」[illegible]、說明した文である。

○わごりよ [illegible]和御寮。そなた。お前。

○かにや [illegible]かね」は「の誂。

半分※くすねておいて、皆遣るまいかと思ふて、コリヤ殺して取つたのじやな。今といふ今迄も、※律義な人じやと思ふて、欺されたが腹が立つわいやい、ヱ、こゝな人でなし、あんまり惘れて涙さへ出ぬわいやい、地なふいとしや與市兵衛殿。畜生の様な聟とは知らず、どふぞ元の武士にしてやりたいと、年寄つて夜も寝ずに※京三界を駈歩き、※珍財を擲つて世話さしやつたも、却つて此方身の仇となつたるか、詞※飼ひかふ犬に手をくはるゝと、ようも／＼此の様に惨たらしう殺された事じやまで※、コリヤこゝな鬼よ蛇よ、父様を返せ、親父殿を生けて戻せやい」と、地遠慮會釋も(不有)荒男の、髻を摑んで引寄せ／＼叩き付け、「寸斷々々に切さいなんだとて是で何の腹が癒よ」と、恨の數々口說き立てかつぱと伏して、泣きゐたる、地身の謬に勘平も、※五體に熱湯の汗を流し、疊に食付き天罰と、フシ思ひ知つたる折こそあれ、地深編笠の侍二人「早野勘平在宿をし召さるか、原郷右衛門・千崎彌五郎御意得たし」と音なへば、折惡けれども勘平は、※腰ふさぎ脇挾んで出迎ひ、詞「コレハ／＼御兩所共に、見苦しき埴生へ御出忝し」と、頭をさぐれば郷右衛門「見れば家内に取込も有るそふな※」、「イヤもふ此細な內證事、お構ひなくとも

○くすね　くらます義。密に盗み。

○律儀　正直。「圓覺經」に「不レ令三衆生入二不律儀一」。

○京三界　京界隈。京邊(あたり)。「江戸三界」「高津三界」「親許三界」「嵯峨の三界」などいふ。

○珍財を擲つ　金錢を費すといふ意を「珍財を擲つ」といふ成語句に採つた。易林本「節用集」知の部に「投二珍財一」。

○飼ひ…くはるる　「飼ひかふ」は飼養する意。恩顧を施した者の爲に却つて害を受ける意の諺。

○まで　文の切れた所を受けて、終止の語意を強めるに用ひる助詞。(既出)

○五體　頭と兩手と兩足をいひ、或は他を數へたのもある。以て全身の意にいふ。

○腰塞ぎ脇挾む　腰のまはり裾のあたりを繕ひ正す。着物の腰の破れを手で塞ぎ、脇の破れを腕で挾みおさへる意。

○さうな　やうだ。らしい。

いざ先づあれへ」「然らば左樣に致さん」とずつと通り座に着けば、二人が前に兩手を突き「この度殿の御大事に外れたるは拙者が重々の誤り。申しひらかん詞もなし。何卒某が科御赦しを蒙り、亡君の御年忌、諸家中諸共相勤むる樣に御兩所の御執成偏に賴み奉る」と身をへりくだり述べければ、郷右衞門取敢へず「先以て其方貯なき浪人の身として、多くの金子御石碑料に調進せられし段、由良助殿甚だ感じ入られしが、石碑を營むは亡君の御菩提、殿に不忠不義をせし其方の金子を以て、御石碑の料に用ひられんは、御尊靈の御心にも適ふまじとあつて、金子は封の儘相戻さる」と、詞の中より彌五郎懷中より金取出し、勘平が前に差置けば、はつとばかりに氣も轉倒。母は淚と諸共に「コリヤこゝな惡人づら、今といふ今親の罰思ひ知つたか。皆樣も聞いて下され、親父殿が年寄つて後生の事は思はず、聟の爲に娘を賣り、金調へて戻らしやるを待伏して、あの樣に殺して取つた金じやもの。天道樣が無くば知らず、何で御用に立つものぞ。親殺しのいき盗人に、罰を當てて下されぬは、神や佛も聞へぬ。あの不孝者お前方の手に懸けて、なぶり殺しにして下され。わしや腹が立つはいの」と身を投

○菩提　梵語(Bodhi)である。正覺などと譯す。眞如の理を覺つて道の極位に到達する聖智をいひ、佛の座におちつくことの意にいふ。

○惡人づら　惡人の顔付。惡人を馬鹿を馬鹿づらといふの類。づら(面)はその者を卑しむ意の接尾語。

○いき盗人　「生(いき)」は、人を罵り罵るときに、その言葉を強める爲に添へる語。

げ伏して泣き居たる、聞くに驚き兩人刀おつ取り、弓手馬手に詰かけ〳〵、彌五郎聲を荒らげ、「ヤイ勘平、非義非道の金取つて、身の科の詫せよとは言はぬぞよ、汝が樣な人非人武士の道は耳に入るまい、親同然の舅を殺し金を盜んだ重罪人は、大身鎗の田樂ざし、拙者が手料理振舞はん」と、はつたと睨めば郷右衞門「渇しても盜泉の水を飮まずとは義者の誡、舅を殺し取つたる金、亡君の御用金になるべきか、生得汝が不忠不義の根性にて、調へたる金と推察有つて、突戻されたる由良ノ助の眼力天晴〳〵、さりながら、ハア情なきはこの事世上に流布あつて、鹽谷判官の家來早野勘平、非義非道を行ひしと言はゞ、汝ばかりが恥ならず、亡君の御恥辱と知らざるかうつけ者、さ程の事の辨へなき汝にては無かりしが、如何なる天魔が魅入れし」と、鋭き眼に涙を浮め事を分け理をせむれば、たまりかねて勘平、諸肌押脱ぎ脇差を、拔くより早く腹にぐつと突立て、「アヽいづれもの手前面目もなき仕合、拙者が望叶はぬ時は切腹と豫ての覺悟、吾が舅を殺せし事亡君の御恥辱とあれば一通り申開かん、兩人共に聞いて給へ、夜前彌五郎殿の御目に懸り、別れて歸る暗紛れ山越す猪に出逢ひ、二つ彈丸

○弓手　弓を持つ方の手。左手。
○馬手　馬の手綱を持つ方の手。右手。
○大身鎗　刃の大形な鎗。
○田樂刺　田樂豆腐のやうに刺貫くことをいひ、下の「手料理」の語に應じる。
○渇しても飮まず　よしや困窮に逢ふとも不義はしないといふ喩。「文選」陸機の猛虎行に「渇不レ飮二盜泉水一」。
○うつけ　「易林本節用集」に「虛うつけ」。ぼんやり。ばか。

○鶍の嘴　鶍（燕雀類）の嘴は交叉してゐる、よつて物事のくひちがうて意の如くならぬことにいふ。

○たゝずみ　立ちやすらふこと、留まること。

にて撃留め、駈寄つて探り見れば、猪にはあらで旅人、南無三寶過つたり、薬はなきかと懐中をさがし見れば、財布に入れたる此の金、道ならぬ事なれども天より我に與ふる金と、直に馳せ行き彌五郎殿に彼の金を渡し、立歸つて様子を聞けば、撃ちとめたるは吾が舅、金は女房を賣つた金、かほど迄する事なすこと、鶍の嘴ほど違ふといふも、武運に盡きたる勘平が、身の成行推量あれ」と血走る、眼に無念の涙、仔細を聞くより彌五郎ずんど立上り、死骸引上げ打返し「ムウムウ」と傷口改め「郷右衛門殿これ見られよ、鐵砲傷に似たれども、是は刀で抉つた疵、エヽ勘平早まりし」と、いふに手負も見て悔り、母も驚くばかりなり、郷右衛門心付き「イヤコレ千崎殿、アヽこれにて思ひ當つたり、御自分も見られし通り、これへ來る路端に、鐵砲受けたる旅人の死骸、立寄り見れば斧定九郎、強慾な親九太夫さへ、見限りて勘當したる惡黨者、身の佇みなき故に、山賊すると聞きたる、お疑ひもなく勘平が、舅を討つたは彼奴が業」「エヽそんなりや、あの親父殿を殺したは、外の者で御座りますかへ」、ハアはつと、母は手負に縋り「コレ手を合して拜みます、年寄の愚痴な心から、恨言うたは皆誤り、怺へて下され勘平殿、

必ず死んで下さるな」と、泣きわぶれば顔振上げ〔詞〕「只今母の疑も、わが悪名も晴れたれば、これを冥途の思出とし、跡より追つ付き舅殿、※死出・三途を伴はん」と、〔地〕突込む刀引廻せば、「ア、暫く〳〵、〔詞〕思はずも其方が舅の敵討つたるは、未だ武運に盡きざる所、〔地〕弓矢神の御恵にて、一功立てたる勘平、息のある中郷右衛門が密に見する物あり」と、懐中より一卷を取出し、さら〳〵と押披き〔詞〕「此の度亡君の敵、高の師直を討取らんと※神文を取かはし、一味徒黨の連判斯の如し」と、〔地〕讀みも終らず苦痛の勘平〔詞〕「其の姓名は誰々なるぞや」、〔詞〕「ヲ、徒黨の人數は四十五人、汝が心底見屆けたれば、其方を差加へ一味の義士四十六人、是を冥途の土産にせよ」と、〔地〕懐中の矢立取出し姓名を書き記し〔詞〕「勘平血判」、〔地〕「心得たり」と腹十文字にかき切り、臓腑を摑んでしつかと押し〔詞〕「サア血判仕つた、ア、忝や有難や、わが望達したり、母人歎いて下さるな、舅の最期も女房の奉公も、反古にはならぬ此の金、一味徒黨の御用金」と、〔地〕いふに母も涙ながら、財布と倶に二包二人が前に差出し〔詞〕「勘平殿の魂の入つたこの財布、〔地〕聟殿じやと思ふて、敵討の御供に〔フシ〕連れてござつて下さりませ」、〔詞〕「ヲ、成程尤なり」と、郷右衛門金取納め〔詞〕おも

⊙死出・三途　死出の山と三途の川とをいひ、共に冥土にある。

○神文　神明に誓うた文。起請文。

○ほぐ　漉返して用ひるによつて反古とかく。無駄の意。

○紫磨黄金　紫色を帯びた黄金。金色きらびやかに、佛像を紫磨黄金の像といひ、縞・紫磨は同音によつた修飾。

○佛果　佛となるべき善因を修して得た結果。佛道のさとり。成佛。

○四苦八苦　（既出）

へば〳〵この金は縞の財布の紫磨黄金、佛果を得よ」といひければ、「ア、佛果とは穢らはし死なぬ〳〵。魂魄この上にとゞまつて、敵討の御供する」と、いふ聲もはや四苦八苦、母は涙にかきくれながら、「ナフ勘平殿、この事を娘に知らし、せめて死目に逢はして遣りたい」、「イヤ〳〵親の最期は格別、勘平が死んだ事必ず知らして下さるな、お主の爲に賣つたる女房。この事聞いて不奉公せば、お主に不忠するも同然、たゞ其の儘にさし置かれよ、サア思ひおく事なし」と、刀の切先咽にぐつと差貫きかつぱと伏して息絶へたり。「ヤアもふ聟殿は死なしやつたか、扨も〳〵世の中に、己が樣な因果な者が又と一人あらふか、親父殿は死なしやる賴みに思ふ聟を先立て、いとし可愛の娘には生別れ、年寄つた此の母が一人殘つてこれがマア、何と生きて居られうぞ、コレ親父殿・與市兵衛殿、己も一處に連れて往て下され」と、取附いては泣叫び、又立上つて「コレ聟殿、母も俱に」と縋り附いては伏沈み、あちらでは泣きこちらでは泣き、わつとばかりにどふど伏し、聲をはかりに嘆きしは目もあて、られぬ次第なり、郷右衛門つつ立上り、「ヤアこれ〳〵老母、歎かるゝは理なれども、勘平が最期の樣子、大星

殿に委しく語り、入用金手渡せば滿足あらん、地※首にかけたる此の金は、聟と舅の七七日、※四十九日や五十兩、合せて百兩百箇日の追善供養跡懇に弔はれよさらば〳〵」、「おさらば」と見送る涙見かへる涙※涙の、浪の立ちかへる人も、はかなき三重

○首に懸けたるこの金　郷右衛門は勘平が出した縞の財布を受けて懐に入れ、その紐を首に懸けてゐた、その財布の金をいひ、これを出して返すのである。
○四十九日　七七日ともいひ、人の死後四十九日間は今生の死と未來生の間にあつて、未だ來るべき報を感ぜざる間であるによつて、之を中陰又は中有ともいひ、佛事を營む。百箇日にも佛事を營む。
○涙の浪の立ち　はかなき　「涙」の頭韻語、涙の立ちかへるにいひ續けて、留る人も歸り行く人も、共にはかない運命にあるをいふ。

第七（一力茶屋の場）

登場人物の主な者

大星由良助（鹽谷判官の遺臣の領袖）　斧九太夫（鹽谷判官の遺臣。不忠漢）　鷺坂伴内（高師直の臣）
矢間十太郎（鹽谷判官の遺臣）　千崎彌五郎（鹽谷判官の遺臣）　竹森喜太八（鹽谷判官の遺臣）
寺岡平右衛門（鹽谷判官の遺臣）　大星力彌（由良助の嫡男）　お輕（寺岡平右衛門の妹）
遊女大勢

梗概

鹽谷判官の遺臣等が復讐の志があるとの噂があるので、由良助は之を患ひ、敵に油斷させる爲に、京の祇園町一力樓に登つて酒色に耽り、痴態の限りを盡してゐる。高師直に内應してゐる不忠漢斧九太夫も、師直の侍臣鷺坂伴内を連れて登樓し、由良

ノ助の様子を窺ふ。鹽谷の遺臣矢間十太郎・千崎彌五郎・竹森喜太八・寺岡平右衛門連立つて來り、由良ノ助が遊蕩に餘念なく、敵討ちなどは思ひも寄らぬ有様を見て、其の本心を疑ふやうになつた。

折から由良ノ助の嫡子力彌が來て、顔世御前が敵の様子を知らせた密書を父に渡して去つた。九太夫は之をちらりと見、その書狀の何であるかを知らうと思ひ、鷺坂を去らせて由良ノ助に面會を求め、時恰も亡君の逮夜に當り、章魚を食はせて其の心を試した。由良ノ助は泥醉し、亡君の短氣を難じつゝ、平然として之を食つた。



假名手本忠臣藏

大星由良ノ助（中村吉右衛門）

おかる（一世中村福助）

由良ノ助は人の居ぬを見定めて密書を取出し、釣燈籠のあかりに照し披いて讀むを、九太夫は緣の下に隠れて竊み讀み、お輕は二階からのべ鏡に映して覗き見る。されど大丈夫の心が讀めてなるものか。然も密書によつて其の心を讀まれたと大石に氣附かれた以上、彼等は最早大丈夫の爲に死なねばならぬ運命にある。

由良ノ助は大事を知つたお輕を請出さうとして之に戯れる。お輕の兄平右衛門は、お輕の言によつて、由良ノ助がお輕を殺さうとする心を察し、因果を諭して妹を我が手に掛けて斬らうとする。お輕は泣いて兄の爲に死を急ぐ。由良ノ助は兄妹の眞心を知つて之を制止し、平右衛門を復讐の盟士に加へた。そしてお輕に對つて「お前の夫勘平は盟士に加はりながら、遂に何の功も立てず非業に斃れた。之を夫の功にせよ」と、言ひ放つや刀光一閃、疊の透間を貫いて突刺された者は、獅子身中の蟲斧九太夫であつた。

評

この段は技巧の妙を極め、最も義士劇の價値を高めた場面である。藩士は皆浪人となり、人心危懼を抱く時に臨み、城代由良ノ助は凛乎たる節操を心の奥に祕めて、穩かに城を明け渡してからは姿を見せなかつたが、突然變り果てた遊蕩爺となつて、緑酒紅燈の歡樂の裡に千鳥足で現はれた。天言はず人語らねども、何となく享樂の裏面に一抹の悲壯な氣が漂ひ、敵の間者や義にはやる鹽谷の遺臣等は、海月のやうな彼を取圍み、其の本心を知らうとして苛立つてゐる。

夜半人靜まり、釣燈籠のまたたく火影に映る城代の俤は、密書を繰廣げて見入る絶代の英雄、其の水莖の跡は絶世の美人が纎手に成り、眞心を籠めた復讐の大事。それを二階からは延鏡に映し、床下では垂れ下るを待受けて共に讀む艶。醜の二人。此の詩趣に富む感激の場面は、心ある者の胸を打つであらう。

第七

「[illegible]花に遊ばゝ、祇園あたりの色揃へ、東方南方北方西方、彌陀の淨土か塗りに塗立ち、ぴつかりぴか〳〵、光耀く白ゑ藝子に如何な粹奴も、現抜かして、ぐどんどろつくどろつく〳〵ワイワイノワイトサ」「誰そ頼まふ、亭主は居ぬか、亭主〳〵」、「これは急がしいは、どいつ様じや、どなた様じや、ヱ斧九太様、御案内とは

○花　美人。花のやうに美しければいふ。卽ち解語の花である。色といふも美女のこと。○彌陀の淨土か塗りに塗り立ち　ここの文、「西方」から西方十萬億土の彌陀の淨土につづけ、其處に居られる紫磨黄金の佛菩薩のやうに、遊女が化粧を塗りに塗り立てた顏、遊女を菩薩ともいふ。◉白　白人の略。遊女。◉「はくじん」をも見よ。○ぐどんどろつく　ぐでん〳〵になつてでれでれする。「ぐどん」に迦鈍をきかせた。

○氣障い　嫌味がましい。改まつた堅苦しい方だこの戯れ。
○上げます　あがらせます。
○大盡　傾城買ひの上客をいふ。遊里で大身の者の意義であつて、寛濶によそほふ客なるによつて稱したものであらう。盡の字を當てたのは、金を盡すからであらう。
○色達をつかみ込み　遊女達を呼寄せ。
○亭座敷　庭園に建つたあづま屋風の建物を座敷にしつらへたもの。「亭」の唐音「ちん」。
○女郎の蜘蛛　女郎に女郎蜘蛛（蜘蛛の一種）をいひかく。
○下には置かれぬ　疎略には扱はれぬ。
○仲居　遊女屋や料理屋に勤め、遊女と客との中に立つて客をあしらふ女。
○枷　象牙などにて作り、三味線の棹にくゝりつけ、上調子の高音を發せしめるに用ひる具。「枷かける」は、調子を更に高くする意。
○いつそ　本心ではない、むしろ。
○狂氣　[illegible]
○偏私　偏頗不公。かたよること。諸葛亮の「前出師表」に「不宜偏私使内外異法也」
○指合くらぬ　父子一處に登樓しては、互に恥かしかるべき筈だのに、その指合ひを避けようとしてゐるけはひもない。
○實は　あゝわいな　この間矢間・千崎・竹森・寺岡が現はれてこの唄を聞く。

けうとい／＼」「イヤ初めてのお方を同道申した、きつう取込そふに見へるが、一つ上ます座敷が有るか」「ござりますとも、今晩は彼の由良大盡の御趣向で、名ある色だちをつかみ込み、下座敷はふさがつてござりますれど、亭座敷が明いて御座ります」「そりや父蜘蛛の巣だらけであらふ」「又悪口を」「イヤサよい年をして、女郎の蜘蛛の巣にかゝらまい用心」「コリヤきついは、下には置かれぬ二階座敷、ソレ灯を點せ仲居ども、お盃お煙草盆」と、高い調子にかせかけて奥は騒ぎの太鼓三味、「ナント伴内殿、由良ノ助が躰御覧じたか」「九太夫殿、ありやいつそ狂氣で御座る、段々貴樣より御内通あつても、あれ程にあらふとは、主人師直も存せず、拙者に罷り登つて見届け。心得ぬ事あらば、早速に報らせよと申付けましたが、扨々我もへんしも折れましてござる。悴力彌めは何と致したな」「こいつも折節此所へ參り、倶に放埓。指合くらぬが不思議の一つ。今晩は底の底を探し見んと、心だくみを致して參つた、密々にお咄申そふ、いざ二階へ」「まづ／＼」「然らばかうお出」（三下り唄）「實は心に、思ひはせいであだな惚れた惚れたの口先はいかひ、艶では有るはいな」「彌五郎殿、喜太八殿。これが由良ノ助

○どなさん　どなた樣。

○から　こころで。「てから」は、たとこころでの意。本曲第九に「七歳が知行とは皆違うてから五百石」。

○たわい　正體。思慮分別。

○手の鳴る方へ　「めんないちどり」の遊戯で、目を掩うてゐる鬼に向つて、手を拍ちながらいふ言葉。

○ゆら鬼　「めんないちどり」の遊戯を「由良さん」といふのもこれより起つた。

○またい　「待つたい」であつて、「がつてん」(合點)を「がてん」といふの類。待てと、鬼の追ふを制する言葉。

殿の遊び茶屋、一力と申すので御座る、コレサ平右衞門。よい時分に呼出そふ、勝手に控へてお居やれ」、「畏りました。宜しう賴み上げます」、「誰ぞちよと賴みたい」、「アイ／＼※どな樣じやへ」、「イヤ我々は由良殿に用事あつて參つた、奧へ往て言はふには、矢間十太郎・千崎彌五郎・竹森喜太八で御座る、此の間より節々迎の人を遣はしますれども、お歸りのない故、三人連れで參りました、ちと御相談申さねばならぬ儀がござる程に、お逢ひなされて下されと急度申してくれ」、「それは何とも氣の毒でござんす、由良樣は三日以來飲みつゞけ、お逢ひなされてから※たはゐ※はあるまい、本性はないぞへ」、「ハテ扨まあそふ言ふておくりやれ」、「アイ／＼」、「彌五郎殿お聞きなされたか」、「承はつて驚入りました、初の程は敵へ聞かする計略と存じましたが、いかふ遊びに實が入り過ぎまして、合點が參らぬ」、「なんと此の喜太八が申た通り、魂が入替つてござらふがの、いつそ一間へ踏込み」、「イヤ／＼篤と面談致した上」、「成程、然らばこれに待ちませう」、「※手の鳴る方へ、／＼／＼」、「捕まよ、／＼」、「※由良鬼や※またい、／＼」、「捉まへて酒飲まそ／＼、コリヤ捉まへたは、サア酒々、銚子持て銚子持て」、

○由良ノ助に武骨一點張りな者となく、粹人こそたけた所にいひ知れぬ味があることを見せてゐる。
○氣の毒　心の苦痛。いやに感ずること。
○ふし　五倍子をいひ、單寧(たんにん)材として藥用に供され、澁味がある。昔は婦人が齒黑染に使用したによつて、澁面してゐるをかくいうた。(見栄引)。武士は武張りきつた顏をしてゐるものとされて、近松作「心中天の網島」にも「大小くすんだ武士の正眞」とある。
○丹波　いかんして　近松作「丹波與作待夜の小室節」上卷に「山も見えざるかりそめに、江戸三界へ往かんして、いつ戻らんす事ぢややら」云々とあるに據つたもの。この唄は江戸三界といふ唄として、「松の葉」卷四、「古今中興當流はやり歌」の中に出てゐる。「三界」は界隈の意。
○たわい　酩酊。「俚言集覽」に、「たはひ＝酩酊を酒たはひと云、ハヒのかな未考」。
○酒の醉…たがはず　酒に醉うてゐても、本心を失はず忘れないでゐるとの意の諺。
○聊爾　粗忽。
○前かど　前頃、さきつかた。
○足輕　足輕は士分の最下級に屬する者で、雜兵をいふ。平時は門番・使番・雜役に服し、戰時には軍陣の兵卒となる。

「イヤコレ由良ノ助殿、矢間十太郎でござる、こりや何となさる」、「南無三寶、しまふた」、「ヲヽ※氣の毒何と榮さん、※ふし食た樣なお武士樣方。お伴樣かいな」、「さあれば、お三人とも怖い顏して」、「イヤコレ女郎達、我々は大星殿に用事あつて參つた、暫く座を立つて貰ひたい」、「そんな事でありそなもの、由良樣奧へ行くぞへ、お前も早うお出で、皆樣これにへ」、「由良ノ助殿、矢間十太郎でござる」、「竹森喜太八でござる」、「千崎彌五郎御意得に參つたお目覺まされませう」、「これは打揃ふてよふお出でなされた、何と思ふて」、「鎌倉へ打立つ時候は何日頃でござるな」、「さればこそ、大事の事をお尋なれ、※丹波與作が歌に、(唄)江戸三界へ往かんして、(詞)ハヽヽヽ、御免候へ※たわゐ〳〵」、(三人)「ヤア※酒の醉本性たがはず、性根がつかずば三人が、酒の醉を醒さしませうかな」、「ヤレ※聊爾なされまするな、憚ながら平右衛門奴が、一言申上げたい儀がござります。暫くお控へ下されませう、由良ノ助樣、寺岡平右衛門奴でござります。御機嫌の體を拜しまして、如何ばかり大悅に存じ奉ります」、「フウ寺岡平右とは、エヽ何でゐすか、※前かど北國へお飛脚に往かれた、足の輕い※足輕殿か」、「左樣で御座ります、殿樣の御切腹を北國

にて承りまして、南無三寶と宙を飛んで歸りまする道にて、お家を召上げられ、一家中ちりぢりと、承つた時の無念さ。奉公こそ足輕なれ、御恩は變らぬお主の仇。師直奴を一討と鎌倉へ立越え。三ケ月が間非人となつて附狙ひましたれども、敵は用心嚴しく近よる事も叶ひませず。所詮腹かつさばかんと存じましたが、國許の親の事を思ひ出しまして、悄々歸りました、所に、天道樣のお知せにや、いづれも樣方の一味連判の樣子承りますると、ヤレ嬉しや有難やと、取るものも取敢へず。あなた方の旅宿を尋ね、只管お頼み申上げましたれば、出かしたうい奴じや。お頭へ願ふてやろとお詞に縋り、これ迄推參仕りました、師直屋敷の」。「アこれ〳〵、ア其許は足輕ではなうて、大きな口輕じやの。何と幇間なされぬか、尤みたくしも、蚤の頭を斧で割つた程無念なとも存じて、四五十人一味を拵へて見たが、ア味な事の、よう思ふて見れば、仕損じたら此方の首がころり、仕畢せたら後で切腹、どちらでも死なねばならぬ、といふは人參飲んで首くゝる樣なもの、殊に其許は五兩に三人扶持の足輕、お腹は立てられな、はつち坊主の報謝米ほど取つて居て、命を捨てて敵討しそうとは、こりや青海苔貰

⦿非人　一種の賤民。
○かつさばく　割腹する。「かつ」は「さばく」を強めていふ接頭語的の奴詞で、「かつつくばふ」（蹲）、「かつとばす」（飛）といふの類。
○あなた方　矢間・竹森・千崎をさす。
○うい奴　かはゆらしい奴。けなげな奴。「俚言集覧」に「下輩のケナゲなるをほむるにウイ奴など云し」。
○たいこもち　遊客と遊女との間を幇助して、酒の相手となり座の興をすゝめる者。幇間。蓋し大鼓を普通より大神に寄せて、其の太鼓を持つ者の義よりいうた語であらう。
○みたくし　「わ」（我）を「み」（身）に代へ、私の通語か。
○あぢなこと　風變りな事。「俚言集覧」に「アヂヤコト、アヂナココロモチなどいひて、常に異る義なり、ふと味より出たる詞なるべし」。
○人參飲んで首縊る　折角身の爲を思うて身を滅すに喩へた諺。
○三人扶持　一日一升五合の給米。扶持米の計算に男一人一日の食料米を五合と見積り、これを一人扶持といひ、もと瀧川一益が定めたのだといふ。
○はつち坊主　托鉢坊主の「はつち」は鉢（はち）に促音の添加した語。托鉢坊主が門前に立つて「はつち〳〵」と言うて施物を乞ふよりいふ。
○報謝米　讀經の報酬に與へる一握の米。報謝は佛恩に報い德を謝する義。

○所でやめた　この言、[illegible]やうな言ひまはし頗る妙。
○つゝてん／＼　三絃の口拍子。
○押すに押されぬ　爭ふにも爭はれぬ。
○あつたら　あたら、可惜。
○口に風ひかす　無駄な口をたゝく意にいふ語。
○木にも萱にも心を置く　周圍を憚つて[illegible]

ふた禮に、太々神樂を打つ様なもの、我等知行千五百石。貴様と較べると、敵の首を斗桝で計るほど取つても釣合はぬ／＼、所でやめた、ナ聞へたか、とかく浮世はかうしたものじや、つゝてん／＼／＼なぞと彈きかけた所はたまらぬ／＼」、「これは由良ノ助様のお詞とも覺ませぬ、僅か三人扶持取拙者奴でも、千五百石の御自分様でも、繫ぎました命は一トつ、御恩に高下はござりませぬ、押スに押サれぬはお家の筋目、殿の御名代もなされまする、歴々様方の中へ、見る影もない私奴が、指加へてとお願ひ申さば、憚りとも慮外とも、ほんの猿が人眞似、お草履を摑んでなりとも、お荷物を擔いでなりとも參じませう、お供に召連れられて、ナ、申し、コレ、申し、／＼。これはしたり寢て御座るそふな」、「コレサ平右衛門、あつたら口に風ひかすまい、由良ノ助は死人も同然、矢間殿、千崎殿、モウ本心は見へましたか、申合せた通り計らひませうか」、「如何様、一味連判の者共への見せしめ、いざ何れも」と立寄るを、「ヤレしばらく」と平右衛門押宥め傍に寄り、「つく／＼思ひまはしますれば、主君にお別れなされてより、仇を報はんと様様の艱難、木にも萱にも心をおき、人の譏無念をば、じつと耐へて御座るからは、

酒でも無理に參らずば、これまで命も續きますまい、地醒めての上の御分別」と、無理に押へて三人を、伴ふ一ト間は善惡の、明りを照らす障子の内、影を隱すや、三重月の入る、地山科よりは一里半息を切つたる嫡子力彌。内をすかして正體なき父が寐姿。起すも人の耳近しと、枕許に立寄つて、轡にかはる刀の鍔音。詞鯉口ちやんと打ち鳴せば、むつくと起きて「ヤア力彌か、鯉口の音ひゞかせしは、急用あつてか密に〳〵」、「只今御臺顔世樣より、急のお飛脚密事の御狀」、「外に御口上はなかつたか」、「敵高ノ師直歸國の願叶ひ、近々本國へ罷り歸る。委細の儀はお文との御口上」、「よし〳〵、其方は宿へ歸り、夜の中に迎ひの駕籠往け〳〵」、「はつ」と躊躇ふ隙もなく山科さして引返へす。地先づ樣子氣遣いと狀の封じを切る所へ、「大星殿。由良殿、斧九太夫でござる、地御意得ませう」と聲かけられ、詞「これは久しや〳〵。年も逢はぬ中、寄つたぞや〳〵、額に其の皺延しにお出でか、アノ爰な筵破りめが」、「イヤ由良殿。大行は細謹を顧みずと申すが、人の譏も構はず遊里の遊び、大功を立つる基、適れの大丈夫末頼もしう存ずる」、「ホヲ、これは堅いは〳〵、石火矢と出かけた、さりとては措かれい」、「イヤア由

○善惡　障子越しに惡人九太夫が窺つてゐるからかくいふ。

○月の入る　月は山に入るものなれば「山科」の山の序に用ひたもので、本曲第五に「入る月や…山崎の」とあると同じ用ひ方で、この時月が山に入つてゐるといふのではない。

○山科　山城國宇治郡にある。今京都市に入る。

○轡に代る刀の鍔音　諺に「心掛けある武士は轡の音にも目をさます」と、いふを應用してかくいふ。

○鯉口　刀劍の鞘の口。鎧の音や武器の音ですぐに目を覺ます、かねての武士のたしなみが知れる。（既出）

○筵破り　老人が青樓の座席に登るはあるべからざることであるといふ意。「筵」は青樓の座席の意。「[illegible]」に「[illegible]」とあり、[illegible]の意。

○大行は細謹を顧みず　大事業をしようとするものは小事にかかはらないといふ意。史記項羽記に「[illegible]日、大行不顧細謹[illegible]」。

○石火矢　昔の大砲。

○さりとては措かれい　さやうな事はよしになされよ。

○おんでもない事　勿論いこと。「思でも無い事」の義である。

○氣もない　氣配もない。少しもない。

○鯱張る　鯱のやうに堅張る、四角張る。

○堅身　身を堅くすること。緊張。

○信田の狐　信田は大阪府泉北郡信太村信太森ないひ、巨楠樹の下に信太森神社(或云葛の葉の社)がある。陰陽博士安倍晴明の生母といふ白狐の精、葛の葉の子別れは長く口碑に殘る。

○會所　町人の集會所であつて、町年寄の公事訴訟を取扱ふ所。「會所めく」とは、町役所での集會らしい[illegible]

●たやらど　たやんと。たつぷりちやんと。近[illegible]に住[illegible]の條に「鎌田[illegible]」。

○逮夜　佛事を營む忌日の前夜。

良ノ助殿惚けまい、まこと貴殿の放埒は」、「敵討つ術と見へるか」、「※おんでもない事」、「忝い。四十に餘つて色狂ひ。馬鹿者よ、狂者よと、笑はれうかと思ふたに、敵を討つ手段とは九太夫殿、ホヽウ嬉しい〳〵」、「スリヤ其許は。主人鹽谷の仇を報ずる所存はないか」、「※氣もない事〳〵、家國を渡す折柄、城を枕に討死といふたのは、御臺樣への追從。時に貴樣が、上へ對して朝敵同然と、其の場をついと立つた、我等は跡に※しやちばつて居た、いかゐたわけの、所で仕舞はつかず。御墓へ參つて切腹と、裏門からこそ〳〵〳〵、今この安樂な樂しみするも貴殿のお蔭。昔の好みは忘れぬ〳〵。※堅身をやめて碎け居れ〳〵」、「いか樣この九太夫も。昔思へば※信田の狐、ばけ顯はして一獻汲もふか、サア由良殿。久しぶりだお盃」、「又頂戴と※會所めくのか」、「さし居れ飲むは」、「飲み居れ差すは」。「※てうど受け居れ、地肴をするは」と傍に有合ふ章魚肴。挾んで、フシずつと差出せば、詞「手を出して、足を戴く蛸肴、地忝い」と頂いて。食はんとする、手をじつと捉へ、詞「コレ由良ノ助殿、明日は主君鹽谷判官の御命日、取分け※逮夜が大切と申すが、見事その肴貴殿は食ふか」、「食べる〳〵、但し主君鹽谷殿が、蛸になられたとい

ふ便宜が有つたか、ヱ愚痴な人ではある、こなたや俺が浪人したは、判官殿が無分別から、スリヤ恨こそあれ精進する氣微塵も御座らぬ、お志の肴賞翫致す」と、何氣もなく、只一口に味はふ風情、邪智深き九太夫も、惘れて、詞もなかりける「扨此の肴では飲めぬ〳〵、鶏しめさせ鍋焼させせん、其許も奥へお出で、女郎ども唄へ〳〵」と、足許もしどろもどろの浮拍子、「テレツク〳〵ツ、テン〳〵、おのれ末社ども、めれんになさで置くべきか」と、騒に紛れ入りにける、始終を見屆け鷺坂伴内、二階より降り立ち「九太夫殿仔細とつくと見屆け申した、主の命日に精進さへせぬ根性で、敵討存じも寄らず、此の通り主人師直へ申聞け、用心の門を開かせませう」、「なる程最早御用心に及ばぬ事」、「是さまだこゝに、刀を忘れて置きました」、「ほんに誠に大馬鹿者の證據、たしなみの魂見ましよ。扨錆びたりな赤鰯」、「ハ、、、、、、」、「彌本心現はれ御安堵〳〵、ソレ九太夫が家來迎いの駕籠」、「はつ」と答へて持出づる「サア伴内殿お召しなされ」、「先づ、御自分は老體平に〳〵」、「然らば御免」と乗移る「イヤ九太夫殿、承はれば此の所に、勘平が女房が勤めて居ると聞きました、貴殿には御存知ないか、九太

○便宜　音信。たより。
○精進　佛道を勤修して怠らぬをいひ、轉じて肉食せぬことの意にいふ。
○末社　大盡（傾城買ひの上客）と大神と共音通へは、之に附隨する義で帮間を末社といふ。たいこもち。
○めれん　酩酊。ぐでん〳〵。「俚言集覧」に「めれん＝大醉を云」。
○門を開く　警戒を解く。
・刀を忘れて置きました　武士の魂を忘却する義で、武士の最も恥辱とした。
○赤鰯　錆刀をいふ。
○御自分　貴樣。

○松浦佐用姫　松浦佐用姫が石となつたといふ故事に[illegible]「まつら」は古書に「まつら」となれることが多い[illegible]・[illegible]松浦佐用姫の石になり[illegible]を見よ。

○父よ母よとなく聲聞けば　「玉葉集」巻十九・釋教歌、行基菩薩の詠に「山鳥のほろ／＼となく聲聞けば、父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ」とあるに據つて。

○妻に鸚鵡のうつせし言葉　亡き父母を慕ふ[illegible]を思ひ、[illegible]い心境をつい言ひかけて、妻に鸚鵡のうつした言葉とごまかした。そして「エ、何おやいな置かしやんせ」と更に砕けた。へべれけの中にも人の知らぬ衰態を見せてゐる。以て何をいふやら正體無さを見せようとした。

○夜目遠目　夜見る目や遠方から見る目では、はつきりと見えぬ。諺に「夜目遠目笠の内」といひ、はつきりと見えぬ所に好奇心をそゝる。

○延鏡　直接に其の物を見ないで、鏡に映し延べ[illegible]この趣向は、並木宗輔作[illegible]第三に、鎌倉女が柄附の鏡に映す條より得たものである。[illegible]

夫殿九太夫殿」といへど答へず「コハ不思議」と、駕籠の簾を引明くれば、内には手頃の庭の飛石「コリヤどふじや、九太夫は松浦佐用姫をやられた」と、見廻はす此方の縁の下より「コレ／＼伴内殿、九太夫が駕籠拔けの計略は、最前力彌が持參せし書翰が心許なし、樣子見屆け跡より知らさん、やはり我等が歸る體にて、貴殿は其の駕籠に引つ添ふて」「合點、合點」と點頭合ひ、駕籠には人の有る體に見せて靜々立歸る、折に二階へ、勘平が妻のお輕は醉醒し、はや廓馴れて吹く風に、憂さをはらして居る所へ、ちよと行てくる、由良ノ助ともあらふ武士が、大事の刀を忘れて置いた、つゐ取つてくる其の間に掛物もかけ直し、爐の炭もついで置きや、アヽそれ／＼、こちらの三味線踏み折るまいぞ、これはしたり、九太は去なれたそふな、※父よ母よと泣く聲聞けば、※妻に鸚鵡のうつせし言葉、エヽ、何じやいな置かしやんせ」邊り見廻し由良ノ助、釣燈籠のあかりを照し、讀む長文は御臺より敵の樣子細々と、女の文のあとや先、まゐらせそろではかどらず、よその戀よと羨ましく、お輕は上より見下せど、※夜目遠目なり、字性もおぼろ、思ひ付いたる※のべ鏡、出して映して讀取る文章、下家よりは九太夫が、繰り

おろす文月影に、すかし讀むとは神ならずほどけかゝりしお輕が簪、ばつたり落つれば、下にははつと見上げて後へ隱す文、緣の下には猶笑壺、上には鏡の影隱し、「由良さんか」、「お輕か、そもじはそこに何してぞ」、「わたしやお前に盛り潰され、あんまりつらさに醉醒し、風に吹かれてゐるわいな」、「ムウ、ハテなふ、よう風に吹かれてじやの、イヤ輕、ちと咄したい事がある、屋根越の天の川で愛からは言はれぬ。ちよつと降りてたもらぬか」、「咄したいとは賴みたい事かへ」、「まあそんなもの」、「廻つて來やんしよ」、「いや〳〵。段梯子へ降りたらば、仲居が見付けて酒にせう、アヽどふせうな、アヽコレ〳〵幸ひここに九つ梯子、これを踏へて降りてたも」と、小屋根にかければ、「この梯子は勝手が違ふて、ヲヽ、こは、どふやらこれは危いもの」、「大事ない〳〵、あぶない怖いは昔の事、三間づゝ跨げても、赤膏藥もいらぬ年配」、「あほう言はんすな、船に乘つた樣で怖いわいな」、「道理で船玉樣が見へる」、「ヲヽ覗かんすないな」、「洞庭の秋の月樣を拜み奉るじや」、「イヤモウそんなら降りやせぬぞ」、「降りざおろしてやろ」、「アレ又わるい事を」、「やかましい、生娘かなんぞの樣に、逆緣ながら」と背後よ

○笑壺　悦んで笑ふべき面白いづぼし。笑ひ興じること。會心の笑み。

◉そもじ　「そなた」の文字詞。そなた。（既出）

○盛り潰す　酒を飲ませて正體なくならす。近松作「曾我扇八景」中卷に「酒を盛つて盛り潰せしが」。

○屋根越しの天の川　遠方なことをいふ。屋根越しでは話しても聞えず、天の川を隔てては牽牛も織女も互に話合うても共に聞きとれぬことの意の洒落。

○來やんしよ　まゐりませう。

○九つ梯子　九段梯子。

◉赤膏藥　赤色の膏藥をいひ、惡血を加へて逆った血止め膏藥で、赤万などの類。ここの文は、處女でないから大股をしても怪我せぬ意の洒落である

○船靈樣　海路の平安を護る神で、卽ち船の守護神をいひ、主として住吉の神をいへど、ここは船の緣から、下より見上げて、女の隱し所をかく惡洒落ていうたのである。（見索引）

◉洞庭の秋の月　瀟湘八景の一。煩惱の迷ひを照す美しい眺めの意の惡洒落。「洞庭」は「船底」の謎語。

○逆緣　女を前よりの抱くと順緣、背より抱くから逆緣と洒落た。

○くど　諄「くど」きこと。しつこい。
○古いが　惚れるなア［illegible］若い時のこと、この［illegible］、「四十［illegible］思ひ、［illegible］、［illegible］はれうかと思ふたに」とある）。
○根が遂げぬ　將來うまく行かぬ。
○ほん　まこと。（見楽引）
●侍冥利　［illegible］、［illegible］ることゝ。
○埒さそう　埒明けさそう。處置させよう。
○淺瀬　［illegible］、思ひの［illegible］て胸を淡立たし痛めること。近松作「心中重井筒」に「足も冷えて鐵釘「かたくぎ」を、胸に打たるるいくせの思ひ」。
○小夜千鳥　［illegible］、忍び音に鳴く夜の千鳥にいひかけ、浪を奥にいひかけた。

りじつと抱しめ抱降し、「何とそもじは御覧じたか」、「アイ、いゝへ」、「見たであろ〳〵」、「アイ、何じややら面白そふな文」、「あの上から皆讀んだか」、「ヲ、くど」、「ア身の上の大事とこそはなりにける」、「何の事じやぞいな」、「何の事とはお輕、古いが惚れた、女房になつて給らぬか」、「置かんせ嘘じや」、「サ嘘から出た眞でなければ根がとげぬ、應と言や〳〵」、「イヤ言ふまい」、「なぜ」、「お前のは嘘から出た眞じやない、眞から出た嘘じや」、「お輕請出そふ」、「エヽ」、「嘘でない證據に、今宵の内に身請せう」、「ムウいやわしには」、「情夫があるなら添はしてやろ」、「そりやまあほんかへ」、「侍冥利、三日なりとも圍ふたらそれからは勝手次第」、「ハア、嬉しうござんすと言はしておいて笑をでの」、「いや直ぐに亭主に金渡し、今の間に埒さそふ、氣遣せずと待つて居や」、「そんなら必ず待つて居るぞへ」、「金渡して來る間、どつちへも往きやるな。女房じやぞ」、「それもたつた三日」、「それ合點」、「忝うござんす」、三下リ唄「世にも因果な者ならわしが身じや、可愛い男に淺瀬の思ひ、エヽ何じやいなおかしやんせ」、忍音になく〳〵、小夜千鳥、奧で唄ふも身の上とお輕は、思案とり〴〵の、折に出合ふ平右衞門、

「妹でないか」、「マア兄さんか、恥かしい所で逢ひました」と顏を隱せば、「苦しうない、關東より戻りがけ。母人に逢うて委しく聞いた。夫の爲お主の爲、よく賣られた出來した〳〵」、「そふ思ふて下さんすりやわしや嬉しい、したがまあ悦んで下さんせ。思ひがけなう今宵請出さるゝ筈」、「それは重疊。何人のお世話で」、「お前も御存じの大星由良助樣のお世話で」、「なんじや由良助殿に請出される、それは下地からの馴染か」、「何のいな、此の中より二三度酒の相手。夫があらば添はしてやろ、暇がほしくば暇やろと。結構過ぎた身請」、「扨は其方を、早野勘平が女房と」、「イヱ知らずじやぞへ親夫の恥なれば、明かして何の言ひませう」、「ムウすりや本心放埒者。お主の仇を報ずる所存は無いに極まつたな」、「イヱイヱこれ兄樣、あるぞへ〳〵、高うは言はれぬ」、「コレ斯う〳〵」と咡けば、「ムウすりやその文を慥に見たな」、「殘らず讀んだ其の後で、互に見合はす顏と顏、それからじやらつき出してつゐ身請の相談」、「アノ其の文殘らず讀んだ後で」、「アイナ」、「ムウ、それで聞へた、妹とても遁れぬ命、身ともにくれよ」と拔打にはつしと切れば、ちやつと飛退き、「コレ兄樣、わしには何誤り、勘平といふ夫もあり、

○したが　然し。（既出）

○重疊　この上もない滿足。

○下地　もと、ずつと以前。

○何のいな　何の馴染であらうかな。どうして馴染ではない。

○高う　聲高う。

○じやらつく　でれ〳〵とふざける。

○ちやつと　すぐに。近松作「生玉心中」に「申しさへ樣おやつゝとお歸りなされませ」。

○こなさん　そなた。「こなたさん」（此方樣）の略、對稱代名詞の敬語として用ひる女詞。

○人　斧定九郎をさす。詳しくは第五に見えてゐる。

○とても　助詞「とて」に「も」の添はつた副詞で、多くはあとに否定の語を伴ふ。どうしても。到底。

○壁に耳　秘密の洩れ易いをいふ。「平家物語」「壁に耳、石に口」といふことあり。

きつと兩親あるからは、※こなさんの儘にもなるまい、請出されて親夫に、逢はふと思ふがわしや樂しみ、どんな事でも謝罪らふ、ゆるして下んせ赦して」と、手を合はすれば、平右衞門、拔刀を捨てゝどうと伏し悲嘆の涙にくれけるが、「可愛いや妹、何にも知らぬな、親與市兵衞殿は六月二十九日の夜、人に斬られてお果てなされた」、「ヤアそれはまあ」、「コリヤまだ喫驚すな、請出され添はふと思ふ勘平も、腹切つて死んだはやい」、「ヤア〳〵それはまあほんかいの、コレのふ〳〵」と、取付いてわつとばかりに泣沈む、「ヲヽ道理〳〵、樣子咄せば長い事、お痛はしいは母者人、言出しては泣き、思ひ出しては泣き、娘輕に聞かしたら泣死するであろ、必ずいふてくれなとのお賴み、言ふまいと思へども、※とても遁れぬそちが命、其の譯は、忠義一途に凝固まつた由良ノ助殿、勘平が女房と知らねば請出す義理もなし、固より色には猶耽らず。見られた狀が一大事請出し刺殺す、思案の底と確に見へた、よしそうなうても※壁に耳、外より洩れても其方が科、密書を覗き見たるが過り殺さにやならぬ、人手に懸きよりわが手にかけ、大事を知つたる女、妹とて赦されずと、それを功に連判の、數に入つてお供に立た

○小身者　身分卑い者。（既出）

○身の代　身賣り金。

○非業の死　業因にあらぬ死、横死。ここの文、老人だから諦めもつくといふのである。つかぬ諦めをつけようとする、心の持ちやうを言うたのと、之を以て父の横死を輕く見たのではない。

○精進　佛道を勤修し、懈怠せぬことの義、轉じて肉食せぬことの意にいふ。（既出）

◇さすがお輕も義士の妻、「何の生きて居りませう」の言味勝。芳名を千載に傳へる義士の環境はかくの如く立派である。

◇疑晴れたと言ふ語に、由良之助がお輕を殺さうと思うてゐた心中が知れる。

○追善は冥途の供　主君には、敵一人を殺して冥途の供をさせることの意、

ん。小身者の悲しさは、人に勝れた心底を、見せねば數には入れられぬ、聞分けて命をくれ死んでくれ、妹」と、事を分けたる兄の詞、お輕は始終せき上げ〳〵、「便りのないは身の代を、役に立てての旅立か、暇乞にも見へそなものと、恨んでばツかり居りました、物體ないが爺樣は非業の死でも、お年のうへ、勘平殿は三十になるやならずに死ぬるのは嘸悲しかろ口惜しかろ、逢ひたかつたであらふのに、なぜ逢はせては下さんせぬ、親夫の精進さへ、知らぬは私が身の因果、何の生きて居りませう、お手にかゝらば母樣がお前をお恨みなされましよ、自害したその後で、首なりと死骸なりと、功に立つなら功にさんせ、さらばでござる兄樣」と言ひつゝ、刀取上ぐる、「それ待てしばし」ととゞむる人は由良ノ助、はつと驚く平右衛門、お輕は「放して殺して」と、あせるを抑へて、「ホウ兄妹とも見上げた疑晴れた、兄は東の供を許す、妹は長らへて、未來への追善、サアその追善は冥途の供」と、もぎ取る刀をしつかと持添へ、「夫勘平連判には加へしかど、敵一人も討取らず、未來で主君に言譯あるまじ、その言譯はコリヤ茲に」と、ぐつと突込む疊の透間、下には九太夫肩先縫はれて七轉八倒、「こりや引出せ」の、

下知より早く縁先飛降り平右衛門、朱に染んだ身體をば無二無三に引摺り出し、「ヒヤア九太夫奴ハテよい氣味」と引つ立て、目通へ投付くれば、起立たせもせず由良ノ助、髻を摑んでぐつと引寄せ、「獅子身中の蟲とは汝が事、吾が君より高知を戴き、莫大の御恩を被ながら、敵師直が間者と成つて、有る事無い事よう内通ひろいだな。四十餘人の者共は、親に分れ子に離れ、一生連添ふ女房を君傾城の勤をさするも、亡君の讐を報じたさ、寐覺にも現にも、御切腹の折柄を思ひ出して無念の涙、五臟六腑を絞りしぞや、取分け今宵は殿の逮夜、口に諸々の不淨をいふても、愼みに愼みを重ぬる由良ノ助によう魚肉を突付けたなア、否とはいはれず應といはれぬ胸の苦しさ、三代相恩のお主の逮夜に、咽を通した其の時の心どの樣にあらふと思ふ。五體も一度に惱亂し、四十四の骨々も碎くる樣に有つたはやい、」「ヘヱ、獄卒め魔王め」と、土に摩附け捻付けて無念、涙にくれけるが、「コリヤ平右衛門、最前錆刀を忘れ置いたは、此奴をばなぶり殺しといふ知らせ、命とらずと苦痛させよ」、「畏つた」と拔くより早く、躍上り飛上り、切れどもわづか二三寸、明所もなしに傷だらけ、のたうち廻つて、「平右殿、お輕殿、

○下知　命令。（既出）

○獅子身中の蟲　恩を受けながら其の者に仇する事に譬ふ。「仁王經」に「乃是作[illegible]三寶一者、轉更滅破三寶、如獅子身中蟲自食獅子肉、非外道也」。

○高知　高知行。高祿。

○ひろぐ　「する」「行ふ」の意に罵っていふ。

○君　遊君。遊女。支那でも王昭君などと妾を君といひ、また「増鏡」にも橋本の遊女を橋本の君と書いてある。

○五臟・六腑　（既出）

○逮夜　忌日の前夜。（既出）

○三代相恩　祖父以來主君の恩澤を承けて居ること。大石良勝―良欽―良昭―良雄、曾祖父より、淺野長重―長直―長友―長矩に歴仕し、家老職を勤め千五百石を食み、實は四代に仕へてゐる。

○五體　頭・兩手・兩足をいひ、又は肉・骨・筋・脈・毛皮をいひ、又は頭・頸・胸・手・足をいひ、よつて又總身をいふ。

○四十四の骨々　人體には四十四本の骨があるとは漢方醫のいふ所なれども謬說を缺く。「傾城阿波の鳴門」第三に「四十四の骨々は碎くるとも」。

○獄卒　地獄の鬼。

○のたうつ　「のたうつ」（沼田打）の轉であらう。沼田に陷り、泥濘を打つてもがく體より轉じて、臨終の期に體軀を動かして苦しむをいふ。輾轉反側。

詫してたべ」と手を合せ、以前は足輕づれなりと、目にもかけざる寺岡に三拜するぞ見苦しき「此の場で殺さば言譯むづかし、食らひ醉ふた體にして、館へ連れよ」と、羽織打着せ傷の口、隱れ聞いたる矢間・千崎・竹森が、障子ぐはらりと引明け「由良ノ助殿段々過り入りましてござります。それ平右衛門、食ひ醉ふた其の客に、※鴨川でナ、※水雜炊を食らはせい」、「※ハア」、「※往け」

○鴨川（かもがは）　京都市内を流れてゐる大川。
○水雜炊　水を多く加へて薄くした雜炊。雜炊は「下學集」には「增水」とある。「水雜炊を食らはせよ」とは、泥水を呑ませ、いため責めて拷問するをいふ。ここの文は、「たひ醉うた」を受けて、鴨川に溺らすをきかせた洒落である。近松作「傾城八花形」第三に「御代官所の鏡にかけ、御意次第に仕らう、泥水呑んで渡さうより、內證にて濟されよ」。
○ハア　平右衛門の返答。
○往け　由良ノ助の詞。

第八（道行旅路の嫁入）

登場人物の主な者

戸無瀬（加古川本藏の妻）　小浪（戸無瀬の娘）

梗概

桃井家の家老加古川本藏の妻戸無瀬は、娘小浪を許嫁の大星力彌と結婚させようと思ひ、先方が浪人となつたのに遠慮し、供人も連れないで母子二人、海道の旅を續けた。繪卷物を展べたやうな道中の美景に氣を晴しながら、宿々を經て、山科なる大星由良ノ助の閑居を指して行く。

評

海道の名所名所に修辭を練つて印象を深くした。その中に落ちぶれた愛人をいやましに慕ふ娘心と、娘を思ふ母性愛とを取合はせて、情味を添へた流麗な文である。

第八（道行旅路の嫁入）

浮世とは、誰がいひ初めて、飛鳥川、ふちも知行も、瀨と變り、寄邊もなみの下人に、結ぶ鹽谷の、誤は、戀の枷杭加古川の、娘小浪が許嫁結納も、とらずその儘に振捨てられし物思ひ、母の思は山科の聟の力彌を力にて住家へ推して嫁入も、世に有りなしの義理遠慮腰元つれず乘物も、廢めて親子の二人連、都の空に志す、雪の肌も、寒空は、寒紅梅の色添ひて、手先覺へず凍る坂、薩陲峠にさしかかり、見返れば富士の煙の空に消え行方も知れぬ思ひをば、晴らす嫁入の、門火ぞと祝ふて三保の松原に續く。並松街道を狹しと打つたる行列は、誰と知らねど羨し、ア、世が世ならあの如く、一度の晴と花かざり、伊達をするがの府中過ぎ、城下、過ぐれば氣散じに、母の心もいそ／＼と、二世の杯、濟んで後、閨の

○飛鳥川ふちも知行も瀨と變り 「古今集」雜歌下部、よみ人しらずの歌「世の中は何か常なる飛鳥川、きのふの淵ぞけふは瀨になる」をふまへて、國に扶持をいひかけ、今まで扶持も知行も得た家臣が、判官家の沒落によつて俄に寄邊なき浪人となつた意。飛鳥川は大和國高市郡にある山川で、淵瀨が變り易い。「浪の下人」に浪人（大星）をきかせた。

○枷杭（かせぐひ） ほだしとなり、せかれるここの意にとり、[illegible]を「加古川」につゞけた。

○世にありなしの義理遠慮 許嫁だけであつたから、世に對し一結婚の義理を立て、またこを辭退する筈が、あることもないとも考へられる。

○凍る坂 [illegible]

○薩陲峠 駿河國庵原郡興津・由比の間にある險阻な山路。

○富士の煙 知れぬ思ひ 「新古今集」卷十七・雜歌中、西行法師の歌「風になびく富士の煙の空に消えて行方も知らぬわが思ひかな」に據る。

•門火 嫁入の時門に火をたいて花嫁を送る。

○三保の松原 駿河國[illegible]にある。

○府中 駿河國府中[illegible]東海道五十三次の[illegible]

○二世の杯 夫婦となつて[illegible]「二世の契り」。

○親知らず子知らず　薩埵山の南海岸にある。井原西鶴撰「一目玉鉾」薩埵山の條に「親知らず子知らずこゝ、渡りかたき岩を行は旅人の難儀」。

○蔦の細道　駿河國安倍郡と志太郡の境にある宇津谷峠の舊道に當る。明治九年にトンネルが出来た。

○差合ひ　「指合くらぬ」を見よ。

○こかす　蕩じる。鞠をころがすにいひかく。

○鞠子川　鞠子は丸子或は麻利子に作る。駿河國安倍郡宇津の山の口にある鞠子宿（東海道五十三次の一）を流れる川。

○宇津の山邊の現にも　「伊勢物語」の歌、「駿河なる宇津の山邊の現にも夢にも人の逢はぬなりけり」の句によつた。宇津の山は駿河國安倍郡と志太郡との境にある山。

○殿御初め　新枕　初めて同衾すること。

●瀬戸の染飯　瀬戸は駿河國志太郡にあり、島田町と藤枝町との間にある小邑。染飯はこの地の名物で、強飯（こはめし）を山梔子（くちなし）で染め、摺りつぶし、小判形に薄く干乾にしたもの。

○水の流と人心　どう變り　どう落ちつくか知れぬ。

○日陰に花は咲かぬか　[illegible]

○島田　駿河國志太郡にあり、大井川の東岸にあり、東海道五十三次の一。ここの文「島田髷」にいひかく。

睦言私言、親知らず子知らずと、蔦の細道。縺合ひ、フシ嬉しからふと手を引けば、地「アノ母樣の差合を脇へこかして鞠子川、宇津の山邊の現にも、殿御初の新枕、せとの染飯こはゐやら、恥かしいやら嬉しいやら案じて胸も大井川、水の流と人心、もしや心は變らぬか、日陰に花は咲かぬかと、フシいふて島田の憂さ晴し、我身の上を、斯くとだに、人しらすかの橋越へて、行けば吉田や赤坂の、招く女の聲揃へ二上り唄　縁を結ばゞ、清水寺へ參らんせ、音羽の瀧にざんぶりざ毎日そふいふて拜まんせそふじやいな、しゝきがんかうがかいれいにうきう、神樂太鼓にヨイコノエイ、こちの晝寝を覺された、都殿御に逢ふてつらさが語りたやソウトモ〱、若しも女夫と噂樣、ならば伊勢さんの引合せ」フシ鄙俗た歌も、身に取つて、好い吉左右になる鳴海潟、熱田の社あれかとよ、フシ七里の渡帆を上げて艫拍子揃へてヤッシッシ、掛取る音は鈴虫かいや蟋蟀、鳴くや霜夜と詠みたるは、小夜更けてこそくれ迄と、限りある船急がんと、艀が走れば、娘も走り空の霰に笠覆ひ、細路の友の、跡や先庄野龜山せきとむる、伊勢と吾妻の別れ道、驛路の鈴の鈴鹿越、間の土山、雨が降る水口の葉に、言囃す、石部石場で大石や、小石拾ふて我夫

と撫でつゝ、擦りつ手に据へて、やがて大津や三井寺の、麓を越へて山科へ程なき、里へ急ぎ行く

○しらすか　白須賀は[illegible]名郡にあつて東海道五十三次の一。ここの文、「知らず」にいひかかく。
○吉田　三河國豐橋市の舊名、東海道五十三次の一。
○赤坂　三河國寶飯郡にあり東海道五十三次の一。
○招く女　[illegible]「一目玉鉾」に「[illegible]此宿は東海道[illegible]の遊興の所、たはふれ女の數々ありしが、今は昔の形もなく淋しくなりぬ」。
○清水寺　[illegible]の上にある。法相宗の中本山で、音羽山と號し、本尊は千手千眼觀世音で、西國觀音三十三番の札所である。坂上田村麿の創建といふ。[illegible]
○しじき…にうきう　紫色雁高我開令人給（[illegible]）[illegible]紫色雁高は男根をいうたものであつて、「閨中色功史」にも雁高屋と書いた[illegible]がある。開は女陰のこと。
○女夫と噂様ならば伊勢さんの引合はせ　[illegible]他に人が居ずに會合するこ[illegible]、[illegible]の縁を取持つて下さるし、[illegible]伊勢の神様が女夫を引合はせて下さつたわけだとの意。
○古た有　[illegible]
○なるみ潟　尾張國愛知郡にある
○熱田の社　名古屋市南區熱田神宮
○七里の渡し　[illegible]東海道名所圖會」卷二に「伊勢桑名＝宮まで海上七里、此人海[illegible]
○夜番鳴くや霜夜　[illegible]古今集、[illegible]太政大臣の歌に「きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかも寝む」。
○庄野　伊勢國鈴鹿郡にあつて今庄野村といひ、東海道五十三次の一で鈴鹿川の北岸に當る。
○龜山　伊勢國鈴鹿郡にあつて東海道五十三次の一。
○せき　關は伊勢國鈴鹿郡にあつて、坂下と龜山との間、東海道五十三次の一。ここの文は關に塞止〔せきと〕むるをいひかく。
○驛路の鈴　往昔官使が道中で、驛馬を徴發するに賜はつた六角又は八角などの鈴。ここの文は、其の鈴の鳴る驛路の意に、驛路を[illegible]ていうた。「[illegible]驛路[illegible]山」。
○鈴鹿越　「東海道名所圖會」卷二に「鈴鹿山＝阪路八町廿七曲り」
●間の土山雨が降る　馬士〔うまかた〕踊の唄の文句。
○水口　近江國甲賀郡にあつて東海道五十三次の一。ここの文は水口に皆口をいひかけて「間の土山雨が降る」の唄は誰も皆言囃すというたのである。
○石部　近江國甲賀郡にあつて、草津と水口との間、東海道五十三次の一。
○大石　本曲に「大星」といへども、ここには其の實「大石」であることをみせた。
○大津　今、滋賀縣大津市
○三井寺　園城寺をいひ、大津市別所にある。閼伽井屋は金堂の西にあつて、天智・天武・持統の三帝の産湯に供せられ、初め御井といつたのが後に三井と改め、三井寺の名これに基くといふ。
○山科　今は京都市に入る。（既出）

第九（山科閑居の場）

登場人物の主な者

大星由良ノ助（鹽谷判官遺臣の領袖）　茶屋の仲居・幇間　大星力彌（由良ノ助の嫡男）
戸無瀬（本藏の妻）　小浪（本藏の娘）　お石（由良ノ助の妻）
加古川本藏行國（桃井家の家老）

梗概

大星由良ノ助は泥醉し、茶屋の仲居・幇間に送られて、雪轉がしをしながら山科の宅に歸る。

折節戸無瀬母子が尋ねて來たので、由良ノ助の妻お石が出でて挨拶する。戸無瀬は力彌と許嫁の娘小浪との婚儀を懇請した。お石は本藏が亡君に對して取つた行爲を憎み、「許嫁はしましたが、其の後浪人となり、この縁は釣合はぬからお斷りする」とて、聞入れない爲に、戸無瀬母子は悲觀して死なうとする。この時表に來た虚無僧が、聲を掛けて其の死を制止した。お石は「お二人とも斯うまで思ひ込んで下さつたお心に感じて、祝言はお許しするが、聟への土産には本藏殿の首が戴きたい」と言つたので、戸無瀬母子はまたも途方に暮れる。

この時表にゐた虚無僧が、編笠を脱いで入り來るを見れば本藏なので、戸無瀬母子は驚いて「あなたどうして此處へござつたか」と問へど、本藏は耳もかさず座敷へ通り、大星親子をいたく罵り、手向ふお石を取つて伏せ、力彌の槍に刺されて重傷を負ふ。

由良ノ助奥から現はれて本藏に挨拶すれば、本藏は鹽谷判官刄傷の因果を述べて哀悼の意を表し、「娘小浪を早く結婚させたうても、それには嘸我が首を御所望なさるだらうと思ひ、娘可愛さに我が白髪首を聟引出にと思つて參つた」と語つた。由良ノ

助は本藏の心に感じ、起つて奥庭の障子を開き、雪で造つた五輪塔二基を見せて、「これは亡君の讐を討つた後の我等父子の姿だ」と、決心を打明けた。本藏は感激し、漢文の故事を引いて、一死君恩に報いる志を激賞し、懐中から高師直屋敷の繪圖を取出し、「討入りには之が必要だ。聟への土産に致す」とて、攻入る方法を教へ、「我は三國一の聟を持つた」と、喜んで祝言を濟した。

やがて由良之助は鎌倉へ出發の用意に取りかゝり、本藏の忍び姿を其の儘に我が身に附け、「今生のお暇乞ひを申す」と、痛手に惱んで絶命する本藏を見送り、尺八の調の「南無阿彌陀佛」の音も哀れに、武士が踏出す首途の、彌猛心の勇ましく、生別は死別をかねた東の旅路に上る。遠ざかり行く姿の跡に響く笛の音あはれをそゝる。

評

この段また悲劇を添へて、更に哀愁の涙を新たにした。虚無僧が尋ね來て、吹奏する哀婉な尺八の韻律が、耳に殘る中に婚禮の式が擧げられ、情の爲・義の爲に命を棄てる武夫の、美しさを見せて快擧の本筋に入り、悲壯の氣張つて總帥由良之助の首途となる。今生の暇乞ひに吹く念佛の調の尺八の音が、物のあはれを添へる場面は、靈腕の冴を見せて金玉の響がある。

第九

風雅でもなく、洒落でなく、※しやう事なしの山科に、由良之助が侘住居、祇園の茶屋に昨日から雪の夜明し朝戻り、幇間・仲居に送られて酒、がほたへる※雪※

○せう事なし　せんかたない。致し方がない。
●ほたへる　ざれゝはむれる。酒に酔うてふざける事。
○雪こかし　雪ころがし。雪團。

轉し、雪はこけいで雪こかされ、仁體捨てし遊びなり、「旦那申し旦那、お座敷の景ようござります、お庭の藪に雪持つてトなつた所、とんと繪に畫いた通り、けうといじやないかのふお品」、「サア此の景を見て、外へは何地へも往きたうはござりますまいがな」、「ヘツ朝夕に見ればこそあれ住吉の、岸の向ひの淡路島山といふ事しらぬか、自慢の庭でも內の酒は飮めぬ／＼、エヽ通らぬやつ／＼、サア／＼奧へ／＼」奧は何處にぞお客がある」と、先に立つて飛石の、詞もしどろ足取もしどろに、見ゆる酒機嫌、「お戾りそふな」と女房のお石が輕う汲んで出る茶屋の茶よりも氣の花香、「お寒からふ」と悋氣せぬ詞の鹽茶醉醒し、「日飮んで後打明け、「エ奧無粹なぞや無粹なぞや、折角面白ふ醉ふた酒醒ませとは、ア、、ア、、降つたる雪かな、如何に餘所の和郞達が無悋氣とや見給ふらん、それ雪は打綿に似て飛んで中入となり、奧はかゝ樣といへばとつと世帶染むといへり、加賀の二布へ、お見舞の遲いは御容赦、伊勢海老と杯、穴の稻荷の玉垣は、朱ふなければ信がさめるといふ樣な物かい、ヲイこれ／＼／＼、誹返りじや足の大指折つた／＼、おつとよし／＼、序にかうじや」と足先で、「ア、これほたへさし

○雪は轉けいで雪轉かされ　雪の如き潔白な由良、助はしくじりはないが、主君の爲に浪人となつた意にいうた。
○仁體　正しくない人體。身柄。身分。
○トなつた所　ト爲「な」れる所。竹藪に雪が積つて美景となつた所の樣。
○けうとい　「氣疎い」卽ち「人氣疎い」の義、轉じて、すてき。「生寫朝顏話」弓之助屋敷の段に「今日は髮のかざりもけうとうようできました」。
○お品　仲居の名。
○サア此の景…まいがな　仲居お品の詞
○ヘツ朝夕…お客がある　由良ノ助の詞。
⊙朝夕…淡路島山　住吉の岸の向ひの淡路島山の景色は、朝夕にのみ見るからこそよけれども、いつも見なれては珍しくもなく、よい景色とも思はぬの意にとつたものである。この歌は「新後拾遺集」雜上部、津守國冬の詠を少しかへてある。
○通らぬやつ　不粹な奴。
○奧　奧方。妻。
○花香　茶の出花の香氣と、やさしいお石の心ばへとにいひかく。
○鹽茶　番茶に鹽を加へて點「た」てたものをいひ醉を醒す效がある。近松作「淀鯉出世瀧德」に「鹽茶を飮んで寢てくれう」。愛嬌を「しほ」といへば、それをいひかく。
○ア、、ア、降つたる雪…世帶じむといへり　謠曲「鉢の木」の文の改作。⊙「降つたる雪かな」[illegible]

○わろ　「わらは」の約訛か。人の意。（見索引）
○中入　能樂などで中頃で暫時やすむこと。ここでは、縁語を以てつづけた酒醉のたはごと。
○とつと　疾「と」くと。はやく。すぐに。
○加賀の二布：御寝敷　女房の腰巻を見に[illegible]、共に用事がなくなつて、[illegible][illegible]下さいとの意。
○加賀の二布　加賀は加賀絹の略、加賀國から産出する絹で、羽二重の類。「增補俚言集覽」に「加賀絹は古[illegible]今も[illegible][illegible]布は女の腰巻のことで、布二幅を以て作るよりの稱。この詞は由良ノ助の詞。
○伊勢海老：玉垣　「瑠璃天狗」卷三に「赤き物といふと[illegible]也、玉垣は[illegible]玉垣[illegible][illegible]たる垣也、玉は垣をほめたる詞なり」
○間逃り　[illegible]の前日が[illegible]を過すこと。[illegible]逃りの時は[illegible]大[illegible]の間面を[illegible]すればなはるといふ。
○ほたえる　[illegible]ける。[illegible]
○世話　[illegible]
○嶺の吹雪に岩をも碎く　ゆきなだれ（雪[illegible]）[illegible]
⊙螢を聚め雪を積む　車胤は時家貧にして油を買ふことができない爲に、夏月螢火によつて書を讀み、後に尚書郎となつた。また孫康も家貧にして油を買ふことができない爲に、冬月雪の光によつて[illegible]學し[illegible]御史大[illegible]となる。

やんすなたしなましやんせ、酒が過ぎるとたはいがない、ほんに世話でござらふの」と物和らかに待遇ふ、力彌心得奥より立出で、「申し／＼母人、親父様は御寝なつたか、「これあげられい」と差出す親子が所作を塗分けても、下地は同じ桐枕「ヲ、ヲ、」應は夢現、「イヤもふ皆往にやれ」、「ハイ／＼／＼、そんならば旦那へ宜しう」、若旦那ちとお出を目遣ひで往際惡う歸りける、聲聞へぬまで行過させ、由良ノ助枕を上げ、「ヤア力彌、遊興に事寄せ丸めた此の雪、所存あつてのことじやが何と心得たぞ」「ハツ雪と申す物は、降る時には少しの風にも散り、輕い身でござりませうとも、あの如く一致して丸まつたときは、嶺の雪吹に岩をも碎く大石同然。重いは忠義、其の重い忠義を思ひ丸めた雪も、餘り日數を延べ過してはと思召しての」、「イヤ／＼。由良ノ助親子、原郷右衛門など四十七人連判の人數は、ナ皆主なしの日陰者。日陰にさへ置けば解けぬ雪。急く事はないといふ事、爰は日當り奥の小庭へ入れて置けナ。螢を聚め雪を積むも學者の心長き例、女ども、切戸内から明けてやりやれ。堺への狀認めん。飛脚が來たらば知

○切戸　四つ目垣などある庭の小門などに一片の開戸を附けたもの。
○堺　堺の廻船問屋、天河屋義平の宅[illegible]

らせいよ」。「アイ〳〵」。間の切戸の內。手轉し込み戸を閉つる襖引立て入りにける、人の心の奧深き山科の隱家を、尋ねて爰に來る人は、加古川本藏行國が女房戸無瀨。道の案內の乘物を傍に待たせ只一人、刀脇差流石げに行儀亂さず、庵の戸口、「賴みませう〳〵」といふ聲に、襷外して飛んで出る、昔の奏者今のりん、「どうれ」といふもつかうどなる。「ハッ大星由良ノ助樣お宅は是かな。左樣ならば、加古川本藏が女房戸無瀨でござります、誠に其の後は打絶へました、ちとお目に懸りたい樣子に付き遙々參りましたと、傳へられて下され」と、いひ入れさせて表の方、「乘物これへ」と昇寄せさせ、「娘こゝへ」と呼び出せば、谷の戸明て鶯の梅見付けたる微笑顏目深に、被たる帽子の內、「アノ力彌樣のお屋敷はもふ爰かへ、わしや恥かしい」と媚かし、取散す物片付けて、「まづお通りなされませ」と、下女が傳へる口上に、「駕籠の者皆歸れ、御案內賴みます」といふもいそ〳〵娘の小浪、母に附添ひ座に直れば、お石しとやかに出迎ひ、「是は〳〵、お二方共ようこぞやお出で、疾くよりお目にもかゝる筈、お聞及びの今の身の上、お尋に預りお恥かしい」、「あの改つたお詞、お目にかゝるは今日初めなれど、先達て御子息

○奏者　昔時天皇に事を奏聞し、又は奏事の取次などをした役であるが、諸侯も僣してこの稱を用ひた。陪臣由良ノ助の中次人なる下女りんを、昔の奏者といへるは當を失す。

○つかうど　正しくは「つこうど」か。「つこごと」ともいひ、「つきごとごゑ」（突ト聲）の「ごゑ」を略した約訛であらう。とがり聲。腹立らしげな無愛想聲。近松作「博多小女郎波枕」に「餘り物はやつて仕舞うた通りや、〳〵とつかうどなり」。

○谷の戸　谷の入口。谷口。「續後拾遺集」賀部の歌に「君がため谷の戸出づる鶯は、萬代の春を告ぐらむ」。

○帽子　綿帽子をいふ。眞綿を平たくして作り、婚禮の時新婦が被いて顏の上半を覆うたもの。「梅園日記」卷一に「今世婚禮に新婦の帽子といふものは、かづきよりうつれるなり」。

力彌殿に、娘小浪を許嫁致したからは、お前なり私なり、相親家同士御遠慮に及ばぬ事、「これは〳〵痛入る御挨拶、殊に御用繁い本藏樣の奥方、寒空といひ思懸ない御上京、戸無瀨樣はともあれ小浪御寮、さぞ都珍らしからふ、祇園・清水・知恩院、大佛樣御覽じたか、金閣寺拜見あらばよい傳手があるぞへ」と、心置きなき挨拶に、只「あい〳〵」も口の內、帽子まばゆき風情なり、戸無瀨は行儀改めて「今日參る事餘の儀にあらず、これなる娘小浪いひなづけ致して後、御主人鹽谷殿不慮の儀に付き、由良ノ助樣、力彌殿、御在所も定かならず、移り變るは世のならひ。變らぬは親心とやかくと聞合せ、この山科にござる由承はりました故、此の方にも時分の娘早うお渡し申したさ、近頃押付がましいが、夫も參る筈なれど、出仕に隙のない身の上この二腰は夫が魂、これを差せば則ち夫本藏が名代と。私が役の二人前。由良ノ助樣にも御意得まし、祝言させて落着きたい、幸ひ今日は日柄もよし、御用意なされ下さりませ」と相陳ぶる、「これは思ひもよらぬ仰せ。折悪う夫由良ノ助は他行、さりながら、若し宿に居りましてお目にかゝり申さふならば、御親切の段千萬添う存じまする、許嫁致した時は、

○相親家　嫁・婿・聟の兩親の父同士の稱。

○御料　御寮とも書く。御料人の略。孃。この語は貴人の子息・息女の敬稱に用ゐ、他人の妻の敬稱にもいふ。「俚諺集」に「料」を解して「古へ何かねと稱する如く、其儲けの意なるにや」とある。（或云、寮は「文選」に小窓と註してあるから、深窓の意。或云、飯を御料といふより、それを調へる婦人の敬稱となつた）。

○知恩院　京都市東山區にあつて、淨土宗の總本山。

○大佛樣　京都市東山區方廣寺にある。もとは佛像の高さ六丈三尺、蓮華臺下より總高七丈六尺といつたが、それは燒亡なり、今のは天保年中に造られた半身木像の粗末な物である。

○時分　嫁入の年頃。

○他行　よそへ行くこと。外出。

故殿様の御恩に預り。御知行頂戴致し罷在る故、本藏様の娘御を貰ひませう、然らばくれうと。いふ約束は申したれども、只今は浪人、人遣ひとても御座らぬ内へ、如何に約束なればとて。大身な加古川殿の御息女。世話に申す提燈に釣鐘、釣合はぬは不緣の基。ハテ結納を遣はしたと申すではなし、どれへなりと外々へ。御遠慮なう遣はされませと申さるゝで御座りませう」と。聞いてはつとは思ひながら、「詞アノまあお石様のおつしやる事、如何に卑下なされうとて、本藏と由良ノ助様、身上が釣合はぬとな、そんならば申しませう。手前の主人は小身故、家老を勤める本藏は五百石。鹽谷殿は大名。御家老の由良ノ助様は千五百石。すりや本藏が知行とは、千石違ふを合點で許嫁けはなされぬか、只今は御浪人、本藏が知行とは皆違ふてから五百石」、「イヤそのお詞違ひまする、五百石は扨おき、一萬石違ふても、心と心が釣合へば、大身の娘でも嫁に取るまいものでもない、「ムゝこりや聞き所お石様、心と心が釣合はぬとおつしやるは、どの心じやサア聞かふ」、「主人鹽谷判官様の御生害、御短慮とはいひながら、正直を本とするお心より發りし事、それに引替へ、師直に金銀を以て、媚諂ふ、追從武士の禄を取る本

○人遣ひ　召使。

○大身　位高く祿多い者をいふ。

○提燈に釣鐘　緣談などで相互の間柄の釣合はぬをいふ譬。「西鶴織留」卷一に「聟は目下なるを取てよし、娵も亦我より輕き方より迎へてよし、挑灯に釣鐘かけ合はぬ事すれば、内證の火の消ゆるに程近し」。

藏殿と、二君に事へぬ由良ノ助が大事の子に、釣合はぬ女房は持たされぬ」と、聞きも敢へず膝立直し「へつらひ武士とは誰が事。様子によつては聞捨てられぬそこを赦すが娘の可愛さ、夫に負けるは女房の常、祝言あらふがあるまいが、許嫁あるからは天下晴れての力彌が女房」、「ム、面白い。女房ならば夫が去る。力彌に代つてこの母が去つた、〳〵」といひ放し、心隔ての唐紙をはたと、引たて入りにける、娘はわつと泣出し「折角思ひ思はれて許嫁した力彌様に、逢はせて遣ろとのお詞を便りに思ふて来たものを、姑御の胴慾に、去られる覚はわたしやない。母様どふぞ詫言して、祝言させて下さりませ」と縋り。歎けば母親は、娘の顔をつく〴〵と、打ながめ〳〵「親の慾目か知らねども、ほんにそなたの器量なら、十人並にも勝つた娘、よい聟をがなと詮議して、許嫁した力彌殿、尋ねて来た甲斐もなう、聟に知らさず去つたとは、義理にも言はれぬお石殿。姑去りは心得ぬ、ム、、扨は浪人の身の寄邊なう筋目を言立て、有徳な町人の聟になつて、義理も、法も忘れたな。ナフ小浪。今いふ通りの男の性根。去つたといふを面當欲しかる所は山々、外へ嫁入する氣はないか。コレ大事の所泣かずともしつ

○二君に事へぬ　「史記」田單傳に「忠臣不事二君」。

○去る　いなする。離縁する。

○姑去り　姑が嫁を離縁すること。[illegible]

○寄邊なう　たよりなく。

○筋目　家筋。大星はもと甲斐の家老、千五百石の家柄なることをいふ。

○有德　富裕。富有。

かりと返辭しや、「コレどふじや〳〵」と、尋ぬる親の氣は張弓。「アノ母樣の胴慾な事おつしやります。國を出る折父樣のおつしやつたは、浪人しても大星力彌、行儀といひ器量といひ、仕合な聟を取つた、貞女兩夫に見えず、假令夫に別れても又の夫を設けなよ。主ある女の不義同然、必ず〳〵寐覺にも殿御大事を忘るゝな、由良ノ助夫婦の衆へ孝行盡し夫婦仲、睦じいとておじやらにも、悋氣ばしして去らるゝな、案ぜうかとて隱さずと懷姙に成つたら早速に、知らせてくれとおつしやつたを私やよう覺えて居る。去られて徃んで父樣に苦に苦を掛てどふいふてどふ言譯があらふとも、力彌樣より外に餘の殿御、わしや否々」と一ト筋に戀を立拔く心根を、聞くに堪へかね母親の、淚一途に突詰めし、覺悟の刀拔放せば、「母樣是は何事」と、押止められて顏を上げ、「何事とは曲がない、今もそなたがいふ通り、一時も早う祝言させ、初孫の顏見たいと、娘に甘いは爺の習ひ、悅んでござる中へまだ祝言もせぬ先に、去られて戾りましたとてどふ連れていなれふぞ、といふて先に合點せにや仕樣、もやうもないわいの、殊にそなたは先妻の子、私とは生さぬ仲じや故おろそにしたかと思はれては、どふも生きては

○器量　才器徳量。
○貞女兩夫に見えず　「史記」田單傳に「貞女不更二夫」。
○あじやら　「あざれ」の轉訛。戲れ。じやれ。
○ばし　その事の限りを表はす強意の接尾語。この語、今日などには無い。
○案ぜう　案じようと、懷姙と親に通知したら、親に苦い苦しみを心配するであらう。
○曲がない　愛想がない。すげない。曲は曲折の義。
○仕樣模樣　[illegible]の意を重ねて、仕樣を強めていふ。
○生さぬ仲　繼母又は繼父と繼子との間柄。
○おとそ　[illegible]

◉三途　冥土にある川。◉「死出三途」を見よ。

○虛無僧　こむそう。普化宗の僧。有髮で深編笠を冠り、袈裟を掛け尺八を吹き、門附をして諸國を修行したもので、武士の犯罪者が刑罰を逃れようとして、多くこの群に入つたといふ。

○鶴の巣籠　尺八の曲名。「俚言集覽」に「尺八の笛の曲名、こくういはなかし鹿の遠音鶴の巣ごもり六段八段鉢かへし霧海箎〔ムカイゲ〕」。

○尋常　殊勝。立派。（既出）

○手の内　物貰ひなどに施す米錢をいふ。「修行者の手の内か」といへるは、修行者の施物は辭退するといふのかとの意。「振上げた手の內か」とは、振上げた刀を人の身體に施し切ることを御無用といふのかとの意。そして技術の意にいうた。「手の內」を手並の意にいうた例は、「生寫朝顏話」宿屋の段にもある。

居られぬ義理、この通りを死んだ後で父御へ言譯してたもや」、「アノ物體ない事おつしやります。殿御に嫌はれ私こそ死すべき筈、生きてお世話になる上に苦を見せまする不孝者、母樣の手に掛けて私を殺して下さりませ。去られても殿御の內證で死ぬれば本望じや、早う殺して下さりませ」、「ヲツヲよう言やつた出來しやつた、そなたばかり殺しはせぬ、この母も三途の伴、そなたをおれが手に懸けて、母も追つ付け後から行く。覺悟はよいか」と立派にも涙、とゞめて立かかり、「コレ小浪、アレあれを聞きや、表に虛無僧の尺八、鶴の巣籠」、鳥類でさへ子を思ふに科もない子を手に懸けるは、因果と因果の寄合と、思へば足も立かねて、震ふ拳を漸うに、振上ぐる刄の下、尋常に座をしめ手を合せ、「南無阿彌陀佛」と、唱ふる中より「御無用」と、聲かけられて思はずも、たるみし拳・尺八も倶に、ひつそと靜まりしが、「ヲヽ、そふじや、今御無用と止めたは、虛無僧の尺八よな、助けたいが山々で、無用といふに氣おくれし、未練なと笑はれな。娘覺悟はよいかや」と又振上ぐる又吹出す。途端の拍子に又「御無用」、「ム、又御無用と止めたは。修行者の手の内か。振上げた手の内か」、「イヤお刀の手の内御

無用、作力彌に祝言させう」、「ヱ、そふいふ聲はお石様、そりや眞實か誠か」と、尋ぬる襖の中よりも「おひに相生の、松こそめでたかりけれ」と、祝儀の小謠白木の小四方、日八分に携へ出で「義理ある中の一人娘、殺さふと迄思詰めた戸無瀬様の心底、小浪殿の貞女、志がいとをしさ、させ難い祝言さす、其の代り、世の常ならぬ嫁の杯、請取るは此の三方、御用意あらば」と指置けば、すこしは心休まりて抜いたる刀鞘に納め「世の常ならぬ杯とは、引出物の御所望ならん、此の兩腰は夫が重代、刀は正宗、差添は波の平行安、家にも身にも代へぬ重寳、これを引出」と皆まで言はさず「浪人と侮つて、價の高い二腰、まさかの時に賣拂へと、いはぬばかりの聟引出、御所望申すはこれではない」、「ム、そんなら何が御所望ぞ」、「この三方へは加古川本藏殿の、お首を載せて貰ひたい」、「ヱ、そりや又なせな」、「御主人鹽谷判官様、高の師直にお恨あつて、鎌倉殿で一刀に斬かけ給ふ、其の時此方の夫加古川本藏、其の座に有つて抱止め、殿を支へたばつかりに御本望も遂げられず、敵は漸々薄手ばかり、殿はそれ／＼御切腹、口へこそ出し給はね、其の時の御無念は、本藏殿に憎しみがかゝるまいか、有るまいか、家來の身と

○おひに相生の　めでたかりけれ　謠曲「高砂」の小謠の文句。

○小四方　足打折敷をいひ、四方に孔あるからの稱。「書言字考節用集」に「小四方‖小臺也、俗云足打」。但しこの後の文に、この小四方のことを三方といふてある。

○日八分　物を捧げ持つに、目から僅か下で、八分通りその物の見える所まで持ち上げること、目の息のかかるを忌み、貴者に對して膳を捧げる禮である。

○引出物　嫁入の時に嫁よりの贈物　これをこの後文に聟引出とある。

○正宗　正和嘉暦年間、相州鎌倉の刀工岡崎五郎入道正宗は殊に有名である。

○波の平行安　薩摩の刀工で、谷山村波平の鍛冶行安に一族も古い頃の人といふ。

○闇々　むざ／＼。つまらなく。

して其の加古川が娘、安閑と女房に持つ樣な力彌じやと、思ふての祝言ならば、この三方へ本藏殿の白髮首、いやとあればどなたでも、首を並べる聟と姑、それ見た上で盃させう、サヽサア否か、應かの返答を」と、鋭き詞の理窟詰、親子ははつとさし俯首き途方に、くれし折からに「加古川本藏が首進上申す、お請取なされよ」と、表にひかへし虛無僧の、笠脫ぎ捨てゝしづ〳〵と內へ這入るは「ヤアお前は父樣」「本藏樣、爰へどふしてこの形は、合點が行かぬこりやどふじや」と、咎むる女房「ヤアざは〳〵と見苦しい、始終の仔細皆聞いた、そち達に知らさず爰へ來た樣子は追つて、先づだまれ、其許が由良ノ助殿御內證お石殿よな、今日の仕儀かくあらんと思ひ、妻子にも知らせず、樣子を窺ふ加古川本藏、案に違はず拙者が首、聟引出に欲しいとな、ハヽヽヽヽ、いやはやそりや侍のいふ事、主人の仇を報はんといふ所存もなく、遊興に耽り大酒に性根を亂し、放埒なる身持日本一の阿呆の鏡、蛙の子は蛙になる、親に劣らぬ力彌めが大癡呆、うろたへた武士の鈍刄金、この本藏が首は斬れぬ、馬鹿つくすな」と踏碎く、破三方の（押・扶持）ふち放れ、こつちから聟に取らぬちよこざいな女め」と言はせ

○いやとあれば　聞と姑　否いやだと言はれるなら、本藏一家どなたにも容赦はせぬ、手あたり次第首を並べる覺悟である由良ノ助夫婦。
○聞と姑　老翁と老女。婚儀に祝ふ高砂の尉姥に擬へて縁とす。
○御內證　人の妻を呼ぶ敬稱。御內方、奧樣。（見索引）
○報はん　「報いん」に同じ。
○日本一　[illegible]
○蛙の子は蛙になる　子は親に似るをいふ諺。[illegible]

も果てず、「ヤア過言なぞ本藏殿、浪人の錆刀切れるか切れぬか鹽梅見せう、不肖ながら由良ノ助が女房、望む相手じやサア勝負〳〵」と裾引上げ、長押にかけたる鑓押つ取り、突かゝらんずその氣色、「これは短氣なマア待つて」とゝどめ隔つる女房娘「邪魔ひろぐな」とあらけなく、右と左へ引退くる。間もあらせず突つかくる、鑓の汐首引つ摑み、もぢつて拂へば身をそむけ、諸足縫はんと閃かす、足脊を蹴つて蹴上れば、拳はなれて取落す、鑓奪はれじと走寄る、腰際帶際引つ摑み、どふど打付け動かせず膝に引つ敷く强氣の本藏、敷かれてお石が無念の齒嚙、親子ははあ〳〵危ぶむ中へ、駈出る大星力彌、捨てたる鑓を取る手も見せず本藏が、右手の肋左手へ、通れと突通す、うんとばかりにかつぱと伏す、「コハ情なや」と母娘取つき、歎くに目もかけず、とゞめ刺さんと取直す、「ヤア待て力彌早まるな」と、鑓引止めて由良ノ助手負に向ひ、「一別以來珍らし、本藏殿、御計略の念願屆き、聟力彌が手に懸つて、嘸本望でござらふの」と、星を指いたる大星が、詞に本藏目を見開き、「主人の鬱憤を晴さんと此の程の心遣ひ、遊所の出會に氣を緩ませ、徒黨の人數は揃ひつらん、思へば貴殿の身の上は、本藏が身

○あらけなく　荒々しく。「あらけ」は荒氣、「なく」は意を强める接尾語。
○汐首　槍の穗先が柄に接した所。
○星を指す　「圖星を指す」ともいひ、言ふ事の的中するをいふ。「[illegible]」にも「[illegible]聞くと、[illegible]て、コリヤ奇特」と
○出會　敵の間者に出會ふ事の意。

○臺の物　臺の上に載せた進物。

○おほす　果す。爲遂〔しと〕げる。

○媚び諂ひしを身の科　師直に金銀を以て媚び諂うた追從武士であるを、我が身の罪として。

○永劫　永遠。(見索引)

にあるべき筈、當春鶴が岡造營の砌、主人桃ノ井若狹ノ助、高ノ師直に辱しめられ、以の外憤り、某を密に召され、先斯う〳〵の物語、明日御殿にて出會せ、一刀に討とめると思ひ詰めたる御顔色、止めても止まらぬ若氣の短慮、小身故に師直に、賄賂薄きを根に持つて、恥しめたると知つたる故主人に知らせず不相應の金銀衣服臺の物、師直へ持參して、心に染まぬ諂ひも主人を大事と存ずるから、賄賂おほせあつちから謝つて出た故に、切るに切られぬ拍子拔け、主人が恨もさらりと晴れ、相手かはつて鹽谷殿の、難儀となつたは則ち其日、相手死なずば切腹にも及ぶまじと、抱止めたは思ひ過した本藏が、一生の誤は娘が難儀と白髮の此首、聟殿に進せたさ、女房娘を先へ上し、媚諂ひしを身の科にお暇を願ふてな、道を變へてそち達より二日前に京着、若い折の遊藝が益に立つた四日の中、こなたの所存を見拔いた本藏、手にかゝれば恨を晴れ、約束の通り此娘、力彌に添はせて下さらば未來永劫御恩は忘れぬ、コレ手を合して頼み入る、忠義にならでは棄てぬ命、子ゆゑに棄つる親心推量あれ由良殿」と言ふも涙にむせかへれば、妻や娘はあるにもあられず、「ほんに斯うとは露知らず

死後れたばつかりに、お命棄つるはあんまりな、冥加の程が恐ろしい、赦して下され父上」とかつぱと伏して、泣叫ぶ、親子が心思ひやり、大星親子三人も倶に萎れて居たりしが、「ヤア／＼本藏殿、君子は其罪を惡んで其人を惡まずといへば、緣は緣恨は恨と、格別の沙汰も有るべきにと嘸恨に思はれん、が所詮此世を去る人、底意を明けて見せ申さん」と、未然を察して奥庭の障子さらりと引明くれば、雪を束ねて石塔の、五輪の形を二つ迄、造り立てしは大星が、成り行く果を表はせり、戸無瀨はさかしく「ムヽ、御主人の仇を討つて後、二君に仕へず消ゆるといふお心のあの雪、力彌殿も其心で、娘を去つた胴慾は、御不便餘つてお石樣、恨だがわしや悲しい」、「戸無瀨樣のおつしやる事、玉椿の八千代までとも祝はれず、後家に成る嫁取つた、此樣なめでたい悲しい事はないかういふ事がいやさに、むごふつらふ言ふたのが、さぞ憎かつたでござんしよなふ」、「イヽエイナ、わたしこそ腹立つまゝ、町人の聟に成つて義理も法も忘れたかと言ふたのが、恥かしいやら悲しいやらどふも顔が上げられぬお石樣」、「戸無瀨樣、氏も器量も勝れた子飼として此樣に、果報拙い生れや」と聲も、涙にせき上ぐる、

●君子は…惡まず　「孔叢子」卷上に「孔子曰、可哉、古之聽訟者、惡其意、不惡其人」。

○未然を察す　今はさうでもないが、近き將來にはさうなるべきものと推察する。

○五輪　地・水・火・風・空の五大を五輪となす。この五大法性は德を具足圓滿すれば輪といひ、世界を以て五輪を圓成とする。地・水・火・風・空を方・圓・三角・半月・團形の五形を以て表はし、この形相を配して塔を作る、これを五輪塔といふ。

○玉椿の八千代　「莊子」逍遙遊篇に、「上古有大椿者、以八千歲爲春、八千歲爲秋」とあつて、幾久しう目出度い事にいふ。「新千載集」賀茂經久の歌に、「神山の峯に生ふる玉椿、八千代は君の爲と祈らむ」。

○呉王　伍子胥　伍子胥は呉王夫差を諫めて自殺を命ぜられ、子胥乃ち呉王を痛罵して自刎した。
●豫讓　智伯の臣である。智伯が趙襄子に滅されたので、豫讓は襄子を殺して主の仇を報いようとしたが、遂に果さなかつた爲に、襄子の衣を撃つて自殺した。
●女御　宮中に奉仕する高位の女官。
●更衣　女御に次ぐ女官。
○お引　お引出。贈り物。
○孫呉が秘書　「孫子」は戰國時代の孫武の撰、「呉子」は同時代の呉起の撰。共に兵法七書の一つ。秘書とは秘藏の書、即ち孫子・呉子の如き大切な本の意。
○六韜　兵法七書の一つで、俗に周の呂尚の作といへど、實は戰國以後の或兵學者の撰である。
○三略　兵法七書の一つで、俗に黄石公の作といへども、實は後人のこじつけである。
○僻言　言語に合はぬ言。道理にあたらぬ言。
○掛矢　大きな木槌。（見索引）
○疑つては　疑はず　推量に用ゐる時は、……
○前栽　「ぜんさい」とはいはぬ。草木を植ゑた前庭。

本藏熱き涙抑へ「ハツア、嬉しや本望ぞ、呉王を諫めて誅せられ、辱かしめを笑ひし伍子胥が忠義は取るに足らず、忠臣の鑑とは唐土の豫讓、日本の大星、昔より今に至る迄、唐と日本にたつた二人、其の一人を親に持つ、力彌が妻に成つたるは、女御更衣に備はるより、百倍勝つてそちが身は、武士の娘の手柄者、手柄な娘の聟殿へ、お引の目録進上」と、懷中より取出すを、力彌取つて押戴き、披き見ればコハ如何に、目録ならぬ師直が、屋敷の案内一々に、玄關長屋侍部屋、水門物置柴部屋まで、繪圖に委しく書附けたり、由良ノ助はつと押戴き「ヘツヱ有難し／＼、徒黨の人數は揃へども、敵地の案内知れざる故、發足も延引せり、此繪圖こそは孫呉が祕書、我が爲の六韜三略、豫て夜討と定めたれば、繼梯子にて塀を越し忍び入るには緣側の、雨戸を外せば直に居間、「爰を仕切つて斯う攻めて」と親子が悦び、手負ながらもぬからぬ本藏「イヤ／＼それは僻言ならん、用心嚴しき高の師直、障子襖は皆尻差し、雨戸に合栓合樞、こちては外れず掛矢にて、毀たば音して用意せんかそれいかゞ」、「ヲヽそれにこそ術あれ、疑つては思案に能はずと遊所よりの歸るさ、思ひよつたる前栽の雪持つ竹、雨戸を外

すわが工夫、仕様を爰にて見せ申さん」と庭に、(下)折しも雪深くさしもに強き大竹も雪の重さに、※ひいわりと撓りし竹を、引廻して鴨居にはめ、「雪に撓むは弓同然、この如く弓を拵へ弦を張り、鴨居と敷居に箝め置きて、一度に切つて放つ時は、まつ此樣に」と積つたる枝打拂へば雪散つて、伸びるは直なる竹の力、鴨居撓んで溝外れ、障子殘らずばた／＼／＼、本藏苦しさ打忘れ、「ハヽア※したりし たり、計略といひ義心といひ、斯程の家來を持ちながら料簡も有るべきに、淺きたくみの鹽谷殿、口惜しき振舞や」と、悔むを聞くに御主人の御短慮なる※御所爲、今の忠義を戰場のお馬前にて盡さばと、おもへば無念に閉塞がる、胸は※七重の門の戸を、洩るゝは涙ばかりなり、力彌はしづ／＼下り立つて父が前に手を支へ「本藏殿の※寸志により、敵地の案内知れたる上は、泉州堺の天河屋義平方へも通達し、荷物の工面仕らん」と聞きも敢へず「何さ／＼、山科にある事隠れなき由良助、人數集めは人目あり、一先堺へ下つて後あれから直に發足せん、其方は母嫁戸無瀨殿と諸共に、跡の片付諸事萬事何もかも、心殘りのなき樣に、ナ、ナ、コリヤ明日の夜舟に下るべし、われは幸い本藏殿の忍び姿を我姿」と、

○ひいわり　「ひんわり」ともいひ「しわり」の義。たわみ曲る樣をいふ。
○したり　爲し得たりの義。うまく出來たり。
○七重　「七」は數多きをいふ。幾つも重なること。ここの文は、胸は幾重も塞がるを、幾つも隔てた門の戸にいひかけ、それを漏れて聞えるは涕泣の聲であるとの意。
○寸志　御厚意の一端。（己がいささかの志の意とは別）。
○報謝返し　「報謝」とは物を贈與して報いる義。僧の佛事を修した時に、之に金品など布施を贈ること。ここの文は、御厚意にあづかつた虚無僧に返禮することの意。
○御料　他人の妻の敬稱。（既出）
○戀慕流し　尺八の曲名。「糸竹初心集」卷上に、「虚無僧尺八といふは、長さ一尺八寸に切ゆゑ尺八といふとぞ、…近き比不人〔ふにん〕といふこむ僧有て、ごろといふ事を吹出し、その外いろ／＼ながし、京れんぼ、さな也岸川、よし田などいふ樣々の手有しとぞ。
○歌口　笛の吹き口。笛の孔。
○御死期時　命終の時を知ることで、陰陽家では、生年月日によつて其の死期を前知するといふ。また俗に潮汐の退〔ひ〕く時刻に於て死ぬといふ。轉じて臨終の意にいふ。
◉斷末魔　生から死に移る關頭の瞬際。
○玉の緒　魂の緒。いのち。壽命。
○現　生きて居る國土。娑婆。現世。

袈裟打かけて編笠に、恩を戴く報謝返し未來の迷ひ晴さん爲、今宵一夜は嫁御寮へ、舅が情の戀慕流し、歌口しめして立出れば、豫て覺悟のお石が嘆き、「御本望を」とばかりにて名殘惜しさの山々を、言はぬ心のいぢらしさ、手負は今を知死期時「父樣申し父樣」と呼べど、答へぬ斷末魔、親子の縁も玉の緒も切れて一世の、憂き別れわつと泣く母泣く娘、倶に死骸に向ひ地の、回向念佛は戀無常、出行く足も立留り、六字の御名を笛の音に「南無阿彌陀佛南無阿彌陀」これや尺八煩惱の枕ならぶる追善供養、閨の契は一夜切心、殘して立出る

○戀無常　歌集の分類より起つた言の、「戀慕樣・無常」の部に從つた。力彌と小浪との戀、そしてここは、生別また死別をかねた無常である。それにいひ、世戀のさまざまなるをきかせた。
○六字の御名　南無阿彌陀佛。
○尺八煩惱　尺八の首を百八に通はせたもので、佛法に人心の迷妄の煩惱を百八の數に分ける。
○枕並ぶる　謡曲「三井寺」に「百八煩惱の眠りの、驚く夢の世の迷ひ」などあるによつて「尺八煩惱の枕並ぶる」といひ、亡君の爲に枕を並べて討死する決意をいひかけた。
○一夜切　一節切をいひかけた。一節切は、竹の節一つこめて切つた笛で、尺八の小形なものである。

第十（天河屋の場）

登場人物の主な者

天河屋義平（堺運漕店の主人）　伊五（義平の丁稚。十九歳）　由松（義平の子。四歳）
大田了竹（お園の父）　お園（義平の妻）　大星力彌（由良之助の嫡男）
原郷右衛門（鹽谷判官の遺臣）　大鷲文吾（鹽谷判官の遺臣）　矢間十太郎（鹽谷判官の遺臣）
大星由良之助義金（鹽谷判官遺臣の領袖）　其の他鹽谷判官の遺臣大勢

梗概

泉州堺の廻船問屋天河屋義平は、嘗て鹽谷家の恩顧を蒙つてゐたので、由良ノ助から鎌倉行きの荷物や、武具の調進を頼まれて之を引受け、其の漏洩を恐れて、妻や丁稚に暇を遣り、阿呆な丁稚伊五と幼兒由松とを連れて二人世帶をしてゐる。

丁稚が由松を遊ばせてゐる所へ原郷右衛門・大星力彌が來り、荷物の發送を懇ろに依頼し、鎌倉へ出發する日を告げて去つた。其の跡で義平の妻の父大田了竹が來て、義平に強請して妻の去狀を書かせて持ち去つた。

やがて鹽谷の遺臣が捕手に變裝して入り來り、義平が大星等一味の者の武具を調進するを拷問して、幼兒を殺さうとしても、彼は「天河屋義平は男でござる」といひ放ち、頑として白狀しない。この時長持の中から由良ノ助現はれ、「古朋輩の疑ひを晴らす爲に、そなたの心を試したので、全く恐れ入つた」と謝罪し、皆々打寄つて手打蕎麥切で訣別の宴を張る。

お園が來て戸を叩き、復歸を哀願して聽入れられず、涙に暮れて去る途で鹽谷の遺臣に髮を切取られることや、義平が大星の贈物を峻拒する事などあつて、互に名殘惜しう別れる。

評

この段も亦快擧の裏に潛む義平の義侠を見せ、その鐵石心に涙をそゝる哀話である。但し義平の心を試す苦肉策や、義平が由良ノ助の禮物を足で蹴飛ばすなどは、餘り技巧に過ぎた嫌ひがある。

第十

津の國と和泉河内を引受けて、餘所の國まで船寄せする三國一の大港、堺といふ

○三國一　日本・支那・天竺にも比類なきこと。この語當時の俗謠などにもあつて一種の流行語。

て人の氣も賢しき町に疵もなき、天河屋の義平とて金から金を儲溜め、見かけは輕く内證は重い暮に重荷をば、手づから店で締め括り大船の船頭、「これで丁度七竿請取ました」と差荷ひ、行くも黄昏亭主はほつと、「日和もよし好い出船」と、いひつゝ煙草煙管筒、吸付けにこそ入りにけれ。家の世繼は今年四つ・守は十九の丸額、親方よりもわが遊び、「サア始りじや〳〵、面白い事〳〵、泣き辨慶の信田妻、東西〳〵、爰に哀れをとゞめしは、この由松にとゞめたり、元來其の身は父ばかり、母は去られて、往なれたで、泣き辨慶と申すなり」、「コリヤ伊五よ、もふ人形廻いや〳〵、嚊さんを呼んでくれいやい」、「ソレ其の樣に無理いはしやると、旦那樣にいふてこなはんも追出さすぞ、あとの月からお釜が破れて、手代は手代で鼠の子か何ぞの樣に、目が明かぬといふて追出し、飯焚は大きな欠伸したといふて暇やり、今ではこなはんと、儕と旦那はんとばつかり、どふで此の内を抜そけするのかして、ちよこ〳〵船へ荷物が行く、駈落するなら人形箱持つて往こふぞや」、「イヤ人形廻よりおりやもふ寐たい」、「アレもふ儕迄をそのかす程にの、宜ござるは儕が抱いて寐てやろ」、「いやじや」、「なぜに」、「汝には乳が

○賢しき町　堺は古來町人の氣賢くて殷富な商人多く、我が國の文化に貢獻する所が多かつた。
○内證　ふところあひ。
○竿　簞笥・長持などを數へるに添へる語。棹をさして擔ぐよりいふ。
○荷擔ふ　前肩と後肩と二人で物を擔ふをいふ。
○丸額　額を丸上りに作つたもの。
○泣辨慶　泣辨慶とは人に負けることを嫌ひで、泣き勝つ者をいふ諺で、由松に當てていふ。
⦿信田妻　古淨瑠璃「信田妻」に母子葛の葉の子別れがあるので、由松母子の別れをそれに準へてかくいうた。
○爰に哀れを…其の身は父　古淨瑠璃「信田妻」(相模掾正本)に、「こゝに哀れをとゞめしは、あべの童子が母上なり、元より其の身は畜生の」とあるの改作。
○伊五　子守の名。
○人形廻　古淨瑠璃「信田妻」の人形遣(づかひ)。
○こなはん　こなたさん。お前さま。
○お釜が破れる　義平が夫婦別れをしたことをいふ。「お釜」は義平の妻お園の事、「破れる」は破鏡の意。「俚言集覽」に「男の尻をカマと云、又妻を釜といふ、…東國の俗、妻を呼んで阿釜(おかま)と云」。この前の文にも「母は去られて、往なれたで」とある。
○目が明かぬ　萬事不注意である。
○どうで　どうせ。いづれ。
○抜そけ　逃の義。駈落。夜逃げなどの意に廣く用ひる。

ないものおりや否じや」、「アレ又無理いはしやる、こなたが女の子なら、乳よりよい物があるけれど、何をいふても相聟同士」、これも涙の種ぞかし、折節表へ侍二人「誰そ頼まふ義平殿はお宿にか」と、いふも密めく内からつこど、「旦那様は内に、我等人形廻しで忙しい、用があらば這入つた〳〵」、「イヤ案内致さぬも無禮、原郷右衛門・大星力彌、密に御意得たいと申しておくりやれ」、「何じや腹へり右衛門、大飯食や、こりや耐らぬ、アレ旦那様大きなけないどが見へました」と、叫ぶ由松引連れて奥へ這入れば、亭主義平「又阿呆めがしやなり聲」と、いひつつ出でて、「ヱ郷右衛門様・力彌様、サアまあこれへ」、「御免あれ」と座をしめて郷右衛門「段々貴公のお世話故萬事相調ひ、由良ノ助もお禮に參る筈なれども、鎌倉へ出立も今明日、何かと取込み悴力彌を名代として失禮のお斷り」、「これは〳〵御念の入つた儀、急に御發足とござりますれば、何かお取込でござりませうに」、「成程郷右衛門殿の仰せの通り、明早々出立の取込、自由ながら私に參りお禮も申し、又お賴み申した跡荷物も、彌今晩で積仕舞いか、お尋ね申せと申渡しまして御座ります」、「成程お誂への彼の道具一卷、段々大廻で遣はし、小手・

○つこど 「つかうご」ともいふ。尖り聲。「つかうご」を見よ。
○腹へり右衛門 原郷右衛門のもぢり。
○大飯食ひや 大星力彌のもぢり。
○けないど 異な人の義。健氣な人。勇しい人。
○しやなり聲 あだめいた聲。男らしうないぐにやくにや聲。（「しやら聲」とは別）。
○自由 氣儘勝手。
○一卷 一切。淨瑠璃「心中刃は氷の朔日」に「平野屋こかん、、、一まきは[illegible]」
○大廻 遠方に廻すこと[illegible]

膳當・小道具の類は、長持に仕込み、以上七竿、今晩出船を幸ひ船頭へ渡し、殘るは忍提燈・鐶鉢卷。これは陸荷で跡より遣はす積りでござります」、「郷右衞門樣お聞きなされましたか、いかゐお世話でござりまする」、「いかさまた人鹽谷公の御恩を受けた町人も多ござれども、天河屋の義平は、武士も及ばぬ俠氣なものと、由良殿が見込み大事をお頼み申されたもつとも、併し鑓・長刀は格別、鐶帷子の繼梯子のと申す物は常ならぬ道具、お買ひなさるゝに不思議は立ちませなんだかな」、「イヤ其の儀は、細工人へ手前の所は申さず、手附を渡し金と引替に仕る故、何處の誰と先樣には存じませぬ」、「成程尤、序に力彌めもお尋ね申しましよ、内へ道具を取込み荷物の拵へ、御家來中の見る目はどふしてお忍びなされましたな」、「ホウそれも御尤のお尋、此の儀を頼まれまするると、女房は親里へ歸し、召使はたりひずみを付けて、段々に暇遣はし、殘るは阿呆と四つになる伜、洩れる筋はござりませぬ」、「扨々驚き入りましてござりまする。其旨を親どもへも申し聞かして安堵させませう。郷右衞門殿お立ちなされませぬか」、「いか樣出立に心せきまする。義平殿お暇申しませう」、「然らば由良助樣へも」、「宜しう

●忍提燈 「がんだう提燈」をいふ。鐵又は銅で火袋ごを作り、内部に蠟燭立を旋回するやうに作り附け、俯仰しても燭が倒れず、俯すれば光を蔽ひ、仰がすれば四方照護をしたもの。

○鐶鉢卷 小さい鐶を編み連ねて作つた鉢卷。

○鐶帷子 小さい鐶を編み連ねて作つた帷子で、多く鎧又は衣服の下に着たもの。

○手附 物を買ふ契約を結んで、其の代金の幾分かを交付しおくこと。

○家來 家に召し使ふ者。

○たりひずみ 跛躄。

○親ども 親一どもは多數を統べていふのではなく、卑下して婉曲にいうたに過ぎぬ。勿論由良助一人をさしていつて、複數ではない。

申聞しませう、おさらば」、「さらば」と引別れ二人は旅宿へたち歸る、表閉めんとする所へ此の家の舅大田了竹、「おつと閉めまい宿にか」と、ずつと通つてきよろ／＼眼、「これは親父様ようこそお出で、扨この間は女房園を養生がてら遣はし置き、嘸お世話お藥でもたべまするかな」、「ア藥も呑みまする、食も食ひます」、「それは重疊」、「イヤ重疊でござらぬ、手前も國許に居た時は、斧九太夫殿から扶持も貰ひ相應の身體、今は一僕さへ召使はぬ所へ、さしてもない病氣を養生さしてくれよと差越されたは、仔細こそあらんカ、それはともあれ、生若い女不埒が有つては貴殿も立たず、身どもも皺腹でも切らねばならぬ、所で一つの相談、まづ世間は暇やり分、暇の狀をおこしておいて、ハテ何時でも爰の勝手に、呼戻す迄の事、たつた一筆つい書いて下されい」と、輕ういふのも物だくみ、一物有りと知りながら、否といはゞ女房を直に戻さん戻りては、賴まれた人々へ、詞も立たずと取つ置いつ思案する程、「否かどふじや不得心なら此の方にも、片時置かれず戻すからは此の了竹もになり込み、へたばつて倶に厄介否か應かの返答」と、込附けられてさすがの義平、たくみに乘るか口惜やと、思へどこちら

○重疊　この上もない滿足。
○身代　其の身に屬する財產。資產。この語西鶴の本などにも「身體」または「身袋」と書いてあるが、これは當字であつて、古代法の古書には多く「身代」と書き「身のしろ」の義である。
○世間は暇遣り分　世間體「てい」は離別した事にして。
○おこす　送り來たす。よこす。
○取つ置いつ　「取りつ置きつ」の音便。とやかくと思ひ迷ひて。躊躇して。
○不得心なら：倶に厄介　汝が不同意なら、我も汝の妻にやつた娘をいつまでも引取つてゐるわけには行かぬ。すぐに娘を歸し、この親も娘と一處に汝の家に入り込んで、掲養ひにしてもらはうとの意。
○へたばる　すわる。家族と同坐する。
○込附く　やりこめる。

○懸硯　懸子のある硯箱で、引出の附いてゐるもの。近松作「心中二枚繪草紙」に「懸硯の鐶出し、引出あけて」。
○これ　暇の狀。離緣狀。
○底工み　腹底に計畫してゐる陰謀。ここの文は、[illegible]に[illegible]る爲に[illegible]りつつ、これ[illegible]つて離緣狀を[illegible]意。
○歷々　[illegible]身分の[illegible]い人。[illegible]高い家柄の意にいふ。
○一杯まゐつて　一杯くはされて。だまされて。
○こうけ　「こうけん」の「ん」の略された語。[illegible]
○嫁らする　嫁入「よめい」らするの略。
○[illegible]　[illegible]近松作「大經師[illegible]」に「[illegible]つたさ」。疝氣は腸や腰などの痛む病氣で、その痛[illegible]
○[illegible]
○十手　昔捕手の用ひた具。中程に鉤の附いた鐵製の短い棒で、犯罪者を捕縛する時これをもつて[illegible]

の一大事見出されてはと懸硯、取つて引寄せさらさらと、書き認め、「これ遣るからは了竹殿親でなし子でなし、重ねて足踏おしやんな」底工みある暇の狀、弱みを食ふてゐるが殘念、持つて往きやれ」と投付くれば、手早く取つて懷中し、「ヲヽよい推量、聞けば此の間より浪人どもが入込みひそめくより、闌めに問へども知らぬと吐かす、何仕出さふも知れぬ聟、娘に添はして置くが氣遣い、幸いさる歷々から貰ひかけられ、去狀取ると直に嫁入さする相談、一杯參つて重疊重疊」「ホヽ縱令去狀なきとても子までなしたる夫を捨て、外へ嫁する性根なら心は殘らぬ勝手〳〵」「ヲヽ勝手にするは親のこうけ、今宵の内に嫁らする」「イヤア細事吐かずとはや歸れ」と、肩先摑んで門口より、外へ蹴出して跡ぴつしやり、ほう〳〵起きて「コリヤ義平、なんぼ摑んで放出しても、嫁らす先から仕拵金。暖まつて蹴られたりや、どふやら疝氣が癒つた」と、口は達者に足腰を撫でつ、摩りつ逆吼に、つぶやき〳〵立歸る、月の曇に影隱す隣家も寢入る亥の刻過ぎ、この家を目がけて捕手の人數、十手・早繩・腰提灯、火影を隱して窺ひ〳〵間者と覺しき家來を招き、耳打すれば さし心得門の戶忙しく打叩く、「誰じや、誰

○及腰　體を屈め手を延ばして事を行はうとする態度。
○浮ける船　錨を上げて漕出る船。船を出すを浮けるといふ。
○仕切る　取引決算の締切をする。決算する。勘定する。
○聞え　近所に聞かれるのも不體裁。
○横道者　不埒者。不屆者。
○條　段。
○言はせもたてず　言立てもさせず。
○茣蓙荷　茣蓙で包んだ荷ごしらへ。
○笑本　春畫本。●「具足櫃の笑本」を見よ。
○笑道具　淫具。

じや」もおよび腰。「イヤ宵に來た大船の船頭でござる。船賃の算用が違ふた、ちよつと明けて下されー」「ハテ仰山な。僅な事であろ明日來た〳〵」「イヤ今夜浮ける船、仕切つて貰はにや出されませぬ」と、いふも聲高近所の聞へと、義平は立出で何心なく門の戸を、明くると其儘「捕つた〳〵。動くな上意」と追つ取卷く。「コハ何故」と四方八方、眼を配れば捕手の兩人「ヤア何故とは横道者、汝鹽谷判官が家來大星由良ノ助に頼まれ、武具馬具を買ひ調へ、大廻にて鎌倉へ遣はす條。急ぎ召捕り拷問せよとの御上意。遁れぬ所じや腕廻せ」。「是は思も寄らぬお咎め。左樣の覺え聊なし。定めてそれは人違」と言はせもたてず「ヤア吐すまい爭はれぬ證據有り。ソレ家來ども」。はつと心得持來るは、宵に積んだる茣蓙荷の長持、見るより義平は心も空。「ソレ動すな」と四方の十手、其の間に荷物を切解き、長持抉けんとする所を、飛懸つて下部を蹴退け、蓋の上にどつかと坐り「ヤア卑怯千萬、此長持の内に入置いたは、さる大名の奥方より、お誂のお手道具、お具足櫃の笑ひ本、笑ひ道具の注文迄其の名を記し置いたれば、明さしては歴々のお家のお名の出る事、御覽有つては何れものお身の上にも掛りませ

○胡乱　怪しく疑はしいこと。支那では「胡乱」をHuluan と發音し、「胡思亂道」「胡説亂道」などと分けても用ひられてゐる。「亂」の客家音 lon. 易林[illegible]「[illegible]」[illegible]

○有やら　ありのまゝ。（既出）

○天河屋の義平は男でござるぞ　名高い文句。

○かつて　都（すべ）て。全く。この語は下に打消の語と應じる。（既出）

○金輪奈落　龍底までの意で、下に略した「知[illegible]由旬[illegible]でもの意に用ひる。奈落は梵語 Naraka. 地獄の意。

○[illegible]性骨　[illegible]ふこと加はる語。性骨は根性の義。

○管鑓　金屬製の管を鑓の柄に通し、刀身に近い[illegible]をしごくに便に[illegible]。

○人種はあるまい　人間の根絶やしになるで[illegible]

○一寸試　[illegible]

うぞ」、「ヤア彌々胡亂者。中々大抵では白狀致すまい、それ申合せた通り」、一合點でござる」と一間へ駈入り、一子由松を引つ立て出で、「サア義平、長持の内はともあれ、鹽谷浪人一統にかたまり、師直を討つ密事の段々、おのれ能く知つつらん、有やうに言へばよし、言はぬと忽ち伜が身の上、コリヤ是を見よ」と拔き刀、稚き咽に差付けられ、はつとは思へど色も變ぜず、「ハヽヽヽ女童を責める樣に、人質取つての御詮議、天河屋の義平は男でござるぞ、子に絆され存せぬ事を、存じたとは得申さぬ、かつて何にも存せぬ、知らぬ、知らぬといふから金輪奈落、憎しと思はゞ其の伜、わが見る前で殺した／＼」、「テモど性骨の太い奴、管鑓・鐵砲・鎖帷子、四十六本の印まで調へやつたる汝が、知らぬといふて言はして置かふか、白狀せぬと一寸試、一分刻に刻むがなんと」、「ヲヽ面白い刻まれう、武具は勿論、公家武家の冠。烏帽子、下女小者が藁沓まで、買調へて賣る商人、それ不思議とて御詮議あらば、日本に人種は有るまい、一寸試も三寸繩も、商賣故に取らるゝ命、惜しいと思はぬサア殺せ、伜も目の前突け／＼」、一寸試は腕から切るか胸から裂くか、肩骨脊骨も望次第」と、差付け突付け我子

をもぎ取り。「子に絆されぬ性根を見よ」と、締殺すべき其きつさう、「ヤレ聊爾せまい義平殿、暫し〳〵」と長持より、大星由良ノ助義金、立出る體見て恟り、捕手の人々一時に、十手。捕繩打棄てゝはるか、下つて座をしむる。威儀を正して由良ノ助義平に對ひ手を支へ、「扨々驚き入つたる御心底、泥中の蓮。砂の中の金とは貴公の御事、さもあらんさもそふづと、見込んで頼んだ一大事。此の由良ノ助は微塵いさゝか、お疑ひ申さねども、馴染近づきでなきこの人々、四十人餘の中にも、天河屋の義平は生れながらの町人、今にも捕へられ詮議にあはゞ、如何あらん、何とか言はん、殊に寵愛の一子もあれば、子に迷ふは親心と評議區々、案じに胸も休まらず、所詮一心の定めし所を見せ、古朋輩の者どもへ安堵させん爲、せまじき事とは存じながら右の仕合、麁忽の段は眞平〳〵、花は櫻木、人は武士と申せどもいつかな〳〵武士も及ばぬ御所存、百萬騎の強敵は防ぐとも、左程に性根は居らぬもの、貴公の一心を借受け我々が手本とし、敵師直を討つならば、たとへ巖石の中に籠り、鐵洞の裡に隱るゝとも、やはか仕損じ申すべき、人ある中にも人なしと申せども、町家の中にも有れば有るもの、一味徒黨の者共の爲に

○きつさう　「氣相」である。顔色。顔の樣子。

○泥中の蓮　汚れに染まないで潔白を保つに喩ふ。「法華經」に「不レ染二世間法一、如二蓮華在一レ水」。以二利をむねとする商人でありながら、義利をはなれた[illegible]義にかたきをいふ。

○砂の中の金　こゝでは[illegible]太子論傳記」の中にも見えて、[illegible]の喩にいふ。

○さもさうず　「さもさあらんとす」の約。如何にもさうであらうの意。

○一心の定めし所　義平の心が義の一筋に思ひ定めた所。

○花は櫻木・人は武士　[illegible]一休の狂歌に「人は武士・柱は檜の木・魚は鯛・小袖は紅梅・花はみよしの」。

○やはか　いかでか。

○人ある中にも人なし　人は多けれども、其の中に眞に信用すべき人はなし。

は、産土とも、氏神とも尊み奉らずんば、御恩の冥加に盡果てませう、靜謐の代には賢者も顯はれず、ヘエ、惜しいかな、悔しいかな、亡君御存生の折ならば、一方の旗大將、一國の政道、お預け申したとて惜しからぬ御器量、これに並ぶ大鷲文吾、矢間十太郎を始め、小寺・高松・堀尾・板倉・片山等潰れし眼を開かする、妙藥名醫の心魂、有難し〳〵と退つて三拜人々も、「無骨の段眞平」と疊に、頭を擂付くる、「ヤレそれは御迷惑、お手上げられて下さりませ、總體人と馬には、乘つて見よ添ふて見よと申せば、お馴染ないお方々は氣遣に思召すも、尤、私元は輕い者、お國の御用承はつてより、經上つた此身體、判官樣の樣子承はつて倶に無念、何卒この恥辱雪ぎ樣はないかと、力んで見ても石龜のじだんだ、及ばぬ事と存じた所へ、由良ノ助樣のお頼み、こそ心得たと向見ず、倶にお力付ける計り、情ないは町人の身の上、手合でも御扶持を戴きましたらば、此の度の思し立、袖褄に取付いてなりともお供申し、いづれも樣へ息つぎの、茶水でも汲みませうに、それも叶はぬは、よく〳〵町人はあさましい者、これを思へばお主の御恩、刀の威光は有難いもの、それ故にこそお命捨てらるゝ、御羨しう存じまする、籏

○産土　産土神の略。生れた土地を守護する神。
○靜謐　しづか。世の靜かに治まること。
○無骨　[illegible]
○お手上げられ　[illegible]
○人と添うて見よ　人には添うて見よ馬には乘つて見よ。[illegible]
○身體　しんだい。[illegible]である。[illegible]
○石龜の地團駄　[illegible]
○たらば　假定を示し、「てあつたなら」の意で、[illegible]

○奥齒噛み割る　齒をくひしばる。
○内證　人の妻をいふ。内儀。（既出）
○吉左右　吉報。轉じて縁起好きこと。（既出）
○佐太の森　河内國北河内郡守口町の東北にあつて、今[illegible]村といひ、京街道に沿ひ[illegible]茶屋などがある。今は佐太天神[illegible]。
○お辭儀は無禮　御好意を辭退しては、却つて無禮になる。
○入る月と…二つ輪　伴ひ入るを入る月にいひかけ、月輪の語を分つて、連れ歸る親と、家を出す夫とに喩へた。
○あやなき　暗くて何の文目も見えぬ。
○化生の者　へんげ。ばけもの。
○迷ひの者　死者の魂が冥途の道に迷ひ成佛し得ないもの。幽靈。
○ばあ　俄に顔を出して人をおどかす時などに「ばあ」といふ。幽靈が顔を出した時にも「ばあ」といふ。
○おへさん　お家（いへ）様ともいひ、中流以下の家庭の主婦の敬稱。おかみさん。
○病犬　狂犬。
○鈍な事　愚な事。つまらぬこと。近松作「國性爺合戰」第三に「[illegible]」。

も冥途で御奉公、お序に義平奴が、志もお執成」と、厚き詞に人々も、思はず涙催して奥齒、かみわるばかりなり、由良ノ助「取敢へず、今晩鎌倉へ出立、本望遂ぐるも百日とは過すまじ、承はれば御内證まで、省き給ふ由重々のお志、追つ付けそれも呼返させ申さん、御不自由も今暫く、はやお暇」と立上がる。「ヤレ申さばめでたき旅立、いづれも樣へも御酒一つ」、「いやそれは」、「ハテ扨祝ふて手打の蕎麥切」。「ヤ手打とは吉左右、然らば大鷲・矢間御兩人は後に殘り、先手組の人々は、郷右衛門・力彌を誘ひ、佐太の森までお先へ」、「いざ此方へ」と亭主が案内、「お辭儀は無禮」と由良ノ助、二人を伴ひ入る月と、又出る月と、二つ輪の親と夫との中に立つ、お園は一人小挑燈暗き思ひを、子故の闇、あやなき門を打叩き「伊五よ〳〵」と呼ぶ聲が、寢耳にふつと阿呆は駈出で、「おれ呼んだは誰じや、化生の者か、迷ひの者か」。「イヤ園じや爰明けてくれ」、「そふいふても氣味が惡い、必ずばあといふまいぞ」と、言ひつゝ門の戸押開き「ヱヽお家さんか能うごんしたの、一人歩行をするとナ、病犬が噛むぞへ」、「ヲヽ犬になりとも噛まれて死んだら、今の思ひはあるまいに、おりや去られたわいやい」、「どんな事に

○わろ　「わらは」の約訛か。人。（既出）

○ざざんざ　酒宴の座でよく謡つた「三国一ぢや、濱松の音はざゞんざ、酒になりすまいたしやんしやん」といふ小唄の囃し、即ち酒を飲んで浮かれ騒ぐ意にいふ。

○伽　相手となつて機嫌をとり、徒然をなぐさめること。

○本　[illegible]伊五はたはけ者であるから、何を言ふやら[illegible]の言を観を出さずに置いた。然しここにいへる伊五の詞だけは[illegible]、子を思ふ母の心は深く哀に打たれ[illegible]。

○空に知られぬ雨の脚　涙。「雨の脚」とは雨をいふ。（既出）

○内證一つの畜生め　言ふ事も無いを内證にいひかけ、内證親子同心の、人でなしの義理知らずめの意。

○附込む　機會に乗じてつけ入る。すきに乗じて入り込む。

ならんしたなア」、「旦那殿は寝てか」、「イヽヱ」、「留守か」、「イヽヱ」、「何の事じやぞやい」、「何の事やら私も知らぬが、宵の口に猫が鼠を捕つたかして、捕つた〳〵と大勢來たが、ちやつと俺は蒲團かぶつたればつゐ寝入つた、今其和郎達と、奥で酒盛ざゞんざやつてゞ御座んす」、「ハテ合點のいかぬそふして坊は寝たか」、「アイこれはよう寝てゞござんす」、「旦那殿と寝たか」、「イヽヱ」、「われと寝たか」、「イヽヱ、つゐ一人ころりと」、「なぜ伽して寝さしてくれぬ」、「夫でも私にも旦那様にも、乳がないといふて泣いてばつかり」、「ヘヱ、可愛いや、そふであろ〳〵、そればつかりが本の事」とわつと泣出す門の口、空に知られぬ雨の脚乾く袂もなかりける。「ヤイ〳〵伊五め何處に居る」と、呼立て出る主の義平、「アイ〳〵こゝに」と駈入る跡、尻目にかけて「癡呆めが、奥へ往て給仕ひろげ」と、呵り追遣り門の戸を、さすを抑へて「コレ旦那殿、いふ事があること明けて」、「イヤ聞く事もなしいふ事も、内證一つの畜生め、穢らはしい其處退こふ」、「イヤ親と一所でない證據、それ見て疑ひ晴れて給べ」と、戸の透よりも投込む一通、拾ひ取る間に附込む女房、夫は書物一目見て、「コリヤ最前やつた暇の

○拵へ　嫁入拵へ。婚禮の仕度。

○鼻紙袋　鼻紙入ともいふ。懐に挿み持つ函迫「はこせこ」のやうな物で、革或は絹を以て片蓋を縫ひ、その内に紙・小楊枝・懐中薬・印判・耳爬子「みゝかき」など、ちよつとした携帶必要品を入れたもの。

○扶持人　祿を受けてゐる家來。

○散ばら髮　亂れ散けたる髮、蓬髮。

○何の汝が由松がかはいかろ　汝は由松がかはゆいと口にはいへども、汝の行爲はその詞と相反す。何の由松がかはゆいと思ふものか、まさしく由松がかはゆくないからである。

○身節が碎いて　「身節が碎けて」とあるべきところ。身の關節が碎け離れるやうな氣がしての意。悶絶せぬばかり。

○親の恩…知る　「徒然草」に「孝養の心無き者も、子持ちてこそ親の心ざしは思ひ知るなれ」で

狀、これ戻してどふするのじや」、「どふするとは聞へませぬ、親了竹の惡工みは、常からよう知つての事、縱令どの樣な事あるとて、なぜ暇狀を下んした、持つて戻ると嫁らすと、思ひもよらぬ拵へ、嬉しい顔で油斷させ、鼻紙袋の去狀を、盜んでわしは逃げて來ました、お前は由松可愛ないか、去つてあの子を繼母に、かける氣かいの胴慾な」と縋り嘆けば、「ヤア其恨は逆ねぢ、この内を去なす折、いひ含めたを何と聞いた、樣子あつて、其方に暇やるでなし、暫しの内親里へ歸つて居よ、舅了竹は、もと九太夫が扶持人、心解けねば仔細は言はぬ、病氣の體にもてなし、起臥も自由にすな、櫛も取るなと言付け遣つたをなぜ忘れた、さんばら髮で居る者を、嫁に取ろとは言はぬはやい、何の汝が由松が可愛かろ、晝は一日阿呆めが、だましすかせど夜になると、母樣〳〵と尋ね居る、嚊は追つ付けもふ爰へと、だまして寢させどよう寐入らず、叱つて寢させそと叩付け、怖い顔すりや聲上げず、しく〳〵泣いて居るを見ては、身節が碎いて耐へらるゝものぢやない、これを思へば親の恩、子を持つて知るといふ、不孝の罰と我が身をば、悔んで夜と共泣明かす、昨夜も二度抱上げて、もふ連れて往こ、抱いて往こと、門口まで出た

○たんのう　「たんぬ」(足)が轉じて「足(た)んの」となり、「たんのう」と延びた轉成名詞。滿足。十分。(堪能・湛納など書くは當字)。
○隙どろ　「隙取(ひまど)らう」の約。
○知れぬ事に馴染ましては　何日まで夫婦別れをしてるようやら知れぬ事に、子を母親に馴染ましてはの意。
○ぐど／＼　ぶつ／＼とつぶやくさまにいふ副詞。近松作「曾我五人兄弟」第五に「死ぬる事をぬめ／＼たいとも言はれぬと、ぐど／＼いひて埒あかず」。

れども、一夜でたんのうするでもなし、五十日隙どろやら、百日隔てゝ置こふやら、知れぬ事に馴染ましては、後の難儀と五町三町、揺振り歩いたゝきつけ、寐さしては密と轉し、わが肌附くれば現にも、乳を捜してしがみつき、僅な間の別れでさへ、戀焦るゝもの一生を、引分けふとは思はねども、是非に及ばず暇の狀、了竹へ渡せしを、内證にて受取つては、親の免さぬ不義の科、快からず持つて歸れ、これ迄の縁、約束事、死んだと思へば事濟む」と、切れ離よき男氣は、常を知る程猶悲しく、「此の家に居るとお前が立たず、内へ去ぬると嫁らにやならず、悲しいものはわたし一人、これが別れにならふも知れぬ、由松を起してちよつと逢はして下さんせ」、「イヤそれならぬ、今逢うて今別るゝ、其身、跡の思ひが猶不便な、わけて今宵はお客も有る、ぐど／＼言はずと早くお往きやれ」、「それでもちよつと由松に」、「ハテ扨未練な、跡の難儀を思はずや」と、無理に引立て去狀も、倶に渡して門先へ心强くも突出し、「子が可愛くば了竹へ、詫言立てゝ、春迄も、かくまひ貰はゞ思案もあらん、それ叶はずばこれ限り」と、門の戸締めて内に入る「ノウそれが叶ふ程なれば、この思ひはござんせぬ、情ないぞや我夫、科

○抜いて　刀を抜いて。
○無意氣　やぼ。

もない身を去るのみか、我子にまで逢はさぬは、あんまり惨い胴慾な、顔見る迄はなんぼでも、往なぬ〳〵」と門打叩き「情じや慈悲じや、爰明けて、寐顔なりとも見せてたべ、コレ手を合せ拝みます、惨いわいの」とどふと伏し前後不覺に泣きけるが「ハア、恨むまい歎くまい、なま中に顔見たら、母様かと取附いて、離しもせまいし離れもなるまい、今宵いぬれば今宵の嫁入。明日まで待たれぬわしが命、さらばで御座るさらばや」と、いふては戸口へ耳を寄せ、もしや我子が聲するか、顔でも見せてくれるかと、窺ひ聞けど音もせず、「ハア、是非もなやこれ迄」と思ひ切つて駈出す向ふへ、目ばかり出した大男道を塞いで引つ捉へ、「これは」といふ間も情なやすらりと抜いて島田髷、根よりふつつと切取つて懐までを引つさらへ、何處ともなく逃行きし無法無意氣ぞ是非もなき「ノウ憎や腹立や、何者かむごたらしう髪切つて、書いたもの迄取つて往んだ、櫛笄の盗人なら、いつそ殺して〳〵」と泣叫ぶ、聲に驚き義平は思はず駈出でしが「ハア爰が男の魂の亂れ口よ」と食しばり、ためらふ中に奥よりも「御亭主〳〵、義平殿」と、立出る由良ノ助、「段々御深切の御馳走、お禮は鎌倉より申越さん、猶後

○白臺　贈物を載せる白木の臺。扇を白臺の間に合はせに代用したのである。（見索引）

○耳　（[illegible]）

○娑婆　[illegible]（[illegible]）[illegible]と譯し、忍土又、現世。

○宿緣　前世の因緣。

○あた　輕蔑の意を表はす接頭語。

荷物の儀、早飛脚を以てお賴み申す、夜の明けぬ中はやお暇」、「いかさま今宵しとも申されぬ刻限、道中御健勝で、御吉左右を相待ちまする」、「首尾致さば早速、書翰を以てお報せ申そふ、返すぐも此の度のお世話、詞でお禮は言ひ盡されませぬ、ソレ矢間・大鷲、御亭主へ置土產」、はつと文吾・十太郎、扇を時の白臺と乘せて出したる一包、「これは貴公へこれは又、御內室お園殿へ、些少ながら」と差出す、義平はむつと顏色變り「詞で言はれぬ禮とあれば、イヤコレ禮物受けふと存じ、命掛けのお世話は申さぬ、町人と見侮り、小判の耳で面はるのか」、「イヤ我は娑婆の暇、貴殿は殘る此世の宿緣、御臺顏世御前の儀もお賴み申さん爲、寸志ばかり」と言ひ殘し、表へ出れば猶むつと、「性根魂を見違へたか、踏付けた仕方あた忌々し、穢らはし」と、包みし進物蹴飛せば、包ほどけて中よりばらり、女房駈寄り、「コレこれは私が櫛・笄・切られた髮、ヤアヽヽこの一包は去狀、ホイ扨は最前切つたのは」、「ホウこの由良助が、大鷲文吾を裏路より廻らせ、根よりふつつと切らした心は、いかな親でも尼法師を、嫁らそふとも言ふまいし、嫁に取る者は猶あるまい、其髮の伸びる間も凡百日、我々本望遂ぐるも百日は過

○笄髷　女の頭髪をくる／＼と卷付けて、笄で締め置く結ひ方。近松作「嵯峨天皇甘露雨」に、「はね元結のかうがい髷」などある。

○三國一　日本・支那・天竺にも比類なくすぐれたこと。(既出)

○肝煎　肝入郎ち肝膽を入れることで、身を打込んで世話する義であらう。世話。周旋。

○請判　身元保證人の判を捺し、證文。ここの文は、大鷲と矢間とが、大事は洩れぬといふことを、義士連中へ保證するといふ證文を入れるとの意。

○九牛が一毛　多い物に對して極少な物、即ち物の數にも當らぬ喩。「前漢書」司馬遷傳に「假令僕伏法受誅、若九牛亡一毛」。

○合詞　豫め何と言へば何と答へるやうに詞を合はせ置き、暗中などで敵味方の區別つかぬ時に、互に言合ふ詞。

○末世に天を山といふ　後世義士の合ひ詞を「天と河」といはないで「山と河」といふ。

○孫呉の術　孫子・呉子の兵術。「孫呉が祕書」を見よ。

○娑婆　現世の意にいふ。(既出)。「娑婆の言葉の定めなき」とは、有爲轉變常なく現世では、その言葉まで轉變するとの意。

さじ。討遂せた後めでたく祝言。其の時には櫛笄。その切髪を添に入れ。詞「笄髷の三國一。まづそれ迄は尼の乳母。詞「一季半季の奉公人。その肝煎は大鷲文吾。同矢間十太郎。地この兩人が連中へ大事は洩れぬといふ請判。由良ノ助は冥途から仲人致さん義平殿」。詞「ハア、重々のお志。お禮申せ女房」。地「わたしが爲には命の親」。詞「イヤお禮に及ばず。返禮と申すも九牛が一毛。義平殿にも町人ならずば、共に出立とのお望。幸いかな。豫て夜討と存ずれば、敵中へ入込む時、貴殿の家名の天河屋を直に夜討の合詞。天とかけなば河と答へ。地四十人餘の者共が、天よ。河よと申すなら。詞貴公も夜討にお出も同然。義平の義の字は義臣の義の字、平はたいらか容易く本望。地はやお暇」と。立出る末世に天を山といふ、由良ノ助が孫呉の術。忠臣藏とも言ひはやす、娑婆の言葉の定めなき別れ、別れて

三重 出て行

第十一（討　入）

登場人物の主な者

鹽谷判官の遺臣大星由良ノ助等四十六人　高師直（武藏守。在鎌倉の執事）
桃井若狹ノ助安近（桃井播磨守の弟）　藥師寺次郎左衞門（高師直の昵懇）　鷺坂伴内（高師直の臣）

梗概

鹽谷判官の遺臣大星由良ノ助等四十六人は、漁船の中に隱れて稻村崎に上陸し、手分けして天と河との合詞を申し合はせ、高師直の館の表裏から衞夫の意氣で討入つた。

折節師直は遊女を招いて亂舞酒宴に夜を更かし、前後も知らぬ寐入端、不意の襲撃に驚き、逃げて柴部屋の内に隱れた。隣邸では師直邸内の騷動に警戒して提燈を掲げる。忠義にはやる武夫の向ふ所敵なく、遂に師直を尋ね出して首を刎ね、桃井若狹ノ助の注意によつて亡君の菩提所光明寺に立退く途端、要撃した藥師寺次郎左衞門・鷺坂伴内を斬棄てた。

義士を讃める國民の聲は、どよめき渡つて永く忠臣の手本となる。

總評

以上本曲は、鶴岡の饗應に始まつて義士の討入りに終るまで、各段いづれも技巧を凝らして波瀾變化に富み、觀客の心を引締めて倦ましめぬ不朽の名作である。

さばれ完璧にはまだし、文章は寧ろ平凡、脚色も往々技巧に過ぎた嫌ひがある。本藏が禮法故實の師範役たる師直に對し、我が主君に越度のないやうに指導を懇請して、鄭重な贈物をしたのは禮である、然るに判官は何の附屆もせぬ上に、妻からの文箱

を手づから渡して恥辱を與へたのは、陋劣な師直に非禮を敢てし、喧嘩を賣つたともいへる。其の他本藏が力彌に斬られて娘の祝言を濟したり、又義平を殘酷な拷問にかけた捕手が、義士の變裝であつたとは愛想が盡きる。これ等淺薄不自然な點を指摘すればまだ幾らもある。要するに出雲等が俗受けに重きを置き、却つて本劇の眞價を殺いでゐるのは惜しい。

然し千辛萬苦命を棄てて、亡君の讐を討取る無雙の心境を寫し、武士道の精神を發揮したこの藝術が、我が國民に永く好果を齎すことは言ふまでもない。

第十一

※柔能く剛を制し、弱能く强を制するとは、張良に石公が傳へし祕法なり。鹽谷判官高定の家臣。大星由良ノ助これを守つて、既に一味の勇士四十餘騎、※獵船に取乘りて、苫ふかぐと※稻村が崎の油斷を頼みにて、岸の岩根に漕寄せて、まづ一番に打上るは、大星由良ノ助義金。二番目は原郷右衞門、第三番目は大星力彌。跡に續いて竹森喜多八。片山源太、先手後船段々に列を亂さす立出る、奥山孫七・須田五郎、着たる羽織の合印、※いろはにほへとと立並ぶ、勝田・早見・遠の森、音に聞へし片山源五、大鷲文吾※掛矢の大槌引提げ／＼、吉田・岡崎ちりぬ

○柔能く…强を制す　「三略」に「柔能制レ剛、弱能制レ强」。序に云、三略は俗に黄石公が張良に授けた祕法の兵書といへど、實は後人の依託したもので、その本旨は「老子」から來てゐる。「老子」には「柔弱勝二剛强一」とある。

○稻村崎　相州鎌倉の西方海岸、[illegible]が崎の西にある。[illegible]やうであるので、この名稱が起つたといふ。鎌倉の初めには街道がこの磯を通過してゐた。

○獵船　いさりぶね。漁船。

○いろはにほへと　この後の文につづいて、いろは歌の所々の句を冠とし或は音として文を修飾し、以て假名手本の題名のちなみとしてゐる。

○掛矢の大槌　掛矢といふも大きな木槌のことである。[illegible]

るをわか手は小寺・立川甚兵衞・不破・前原・深川彌次郎、得たる半弓手挾んで上がるは川瀨忠太夫空に輝く、大星瀨平、よたれそつねならむうゐの、奥村・岡野・小寺が嫡子、中村・矢島・牧・平賀、やまけふこえて、朝霧の立並びたる芦野や菅野、千葉に村松・村橋傳次、鹽田・赤根は長刀構へ、中にも礒川十文字、遠松・杉野・三村の次郎、木村は用意の繼梯子、千崎彌五郎・堀井の彌惣、同彌九郎遊所の酒にゑひもせぬ、由良ノ助が智略にて八尺ばかりの大竹に、弦をかけてぞ持ちたりける、後陣は矢間十太郎、はるか後より身を串下し、出るは寺岡平右衞門、假名實名袖印其數四十六人なり、鎖袴に黑羽織忠義の胸當、打揃ふ、げに忠臣のかな手本義心の手本義平が家名、「天と河との合詞忘るな豫ての言合せ、矢間・千崎・小寺の面々、倅力彌を始めとし表門より入れ〳〵、郷右衞門と某は、裏門より込入つて、合圖の笛を吹くならば時分はよしと乘込めよ、取るべき首は只一つ」と、由良ノ助に下知せられ怒りの眼一時に、館を遙に睨付け裏と表へ別れ行く、かくとは知らず、高ノ武藏守師直は、由良ノ助が放埒に、心もゆるむ油斷酒、藝子遊女に舞い謳はせ、藥師寺を上客にて身の程知らぬ

○半弓　大弓の半分ほどの大きさの弓で、坐して射る事ができる弓。

○十文字　十文字鎗「やり」。

○遊所　遊里、遊廓。第九に、由良ノ助が茶屋酒に酩酊して歸り、ここにある謀のことを本藏に語つたことが見えてゐる。

○串下し　へりくだり。

○假名　通稱、俗名。よびな。

○實名　本名、武士は假名「けみやう」の外に二字の實名を有す。

○袖印　敵味方を區別する爲に、鎧の袖に目じるしに附ける布帛の類のきれ。

○鎖袴　小さい鐶を編み連ねて、鎖帷子のやうに造つた袴。

○胸當　胸部に當てる甲「よろひ」。

○下知　命ニ下知」の義。命令。（既出）

○藥師寺　師直の一黨、藥師寺次郎左衞門

大騷ぎ、はてはざこ寢の不行儀に前後も知らぬ寐入ばな。非常を守る番人の拍子木のみぞ殘りける。表裏一度に手筈を極め。矢間。千崎不敵の二人。表門に忍寄り內の樣子を窺へば、夜廻りと覺しき拍子木遠音をさせばよき折と。例のたしなむ繼梯子。高塀に打かけ〳〵雲井までもとさゝがにの、登りおほせた塀の屋根。はや拍子木の近づく音ひらりと下りるを見付けし番人、「スハ何者」と駈寄るを取つて引伏せ高手小手、よい案內と息をとめ繩先腰に引つかけて、拍子木奪ひかつちかち。役所々々を打ち廻り、窺ひ廻るぞ不敵なる。はや裏門に呼子の笛。時分はよしと兩人は、拍子木合せて「天」「河」と、貫木はづして大門をぐわらりと開けば力彌を始め。杉野。木村・三村の一黨我も〳〵と込入つて。見れば一面雨戸の固め「父が敎へし雪折は。爰ぞ」と下知し。丸竹に弦をかけたを雨戸の鴨居。閾に挿んで一時に、ひいふう三つの拍子にて掛けたる弦を丁と切れば。鴨居は上り敷居は下り雨戸は外れてばた〳〵〳〵、「そりや乘込め」と、「天」「河」の聲ひゞかして亂れ入る、「スハ夜討ぞ」と松明提灯裏門よりも込入つて、一方は郷右衞門一方は由良之助、床几にかゝつて下知をなす、小勢なれども

○雜喉寢　雜魚のやうに男女老若打ちまじつて寢ること。西鶴撰「一代男」卷三、一夜の枕物ぐるひの條に、大原の里のざこ寢の風俗の繪が載せてある。

○遠音をさす　音の遠方に響くをいふ。大藏流狂言「鐘音」に「撞鐘と申すものも、遠音のさいて目出たいもので御座る」。

○たしなむ　心がける。用意する。

⦿さゝがに　蜘蛛。この語もと小蟹の義といひ、また篠原に住む蟹の意ともいふ。もと「さゝがにの」といふて蜘蛛に冠する枕詞である。さるを蜘蛛の異稱とするに至つた。（一說に、佐嵯餓泥（ね）（山名）の蜘蛛とも、がにの蜘蛛と誤り、さゝがにを蜘蛛の枕詞のやうに用ひ、轉じてさゝがにを蜘蛛の異名とするに至つたといふ）。ここの文の「さゝがにの」は蜘蛛の如くの意、雲井に對する枕詞。

○高手小手　人を嚴しう縛り上げる狀にいふ。高手は臂より上、肩より下の稱。小手は手先をいふ。

○よい案內　此奴の持つてゐる拍子木は、都合のよい手引の道具。

○役所々々　侍の詰めてゐる部屋々々。

○丁ど　（既出）

○なーそ　勿れ。禁止の意を示す助詞。中に活用語を挾む時はその連用形を挾むことが通則で、加變・佐變の動詞である時はその未然形を挾む。
○はやりを　早雄。血氣に逸（はや）る男子。
○北隣は仁木播磨守　吉良義央本所の邸の北隣土屋主税の事を改作した。
○狼藉者　亂暴者。狼が草を藉いて臥した跡の亂れたるよりいふ。「史記」滑稽傳に「杯盤狼藉」。
○主人申付けられし　「主人仁木播磨守が申付けられた」「主人石堂右馬之丞が申付けました」、兩家[illegible]詞でもある。「られ」は敬相の助動詞である。
○卒爾　[illegible]
○力なく　元氣なくいや〳〵ながら。
○[illegible]

寄手は今宵必死の勇者、秘術を盡せば由良之助、「餘の者に目なかけそ、只師直を討取れ」と、郷右衞門諸共に八方に下知すれば、はやりをの若者ども揉立て揉立て三重切結ぶ。北隣は仁木播磨守南隣は石堂右馬之丞、兩隣より何事かと家の棟に武者を上げ、提燈星の如くにて、「ヤア〳〵御屋敷騷動の聲太刀音矢叫び事騷がしく、狼藉者か盜賊か、但し非常の沙汰なるか、承り屆けよと、主人申付けられし」と高らかに呼はつたり、由良之助取敢へず、「これは鹽谷判官が家來の者共、主君の仇を報はん爲、四十餘人の者共が千變萬化の戰ひ、かく申すは大星由良之助・原郷右衞門、尊氏御兄弟へお恨なし、元來兩隣仁木・石堂殿へ何の遺恨も候はねば、卒爾致さん樣もなし、火の用心は堅く申付けたれば、これ以て御用心に及ばぬ事、只穩便に捨置かれよ、それとても隣家の事聞捨ならず加勢あらば、力なく一矢仕らん」と高聲に答へたり、兩家の人々聞屆け「御神妙〳〵、我人主人持つたる身は、尤かくこそあるべけれ、御用あらば承はらん提燈引けー」と一時に、靜り返つて控へける、一時ばかりの戰に寄手は僅二三人、薄手を負ふたるばかりにて敵の手負は數知れず、されども大將師直と覺しき者もなき

所に、足輕寺岡平右衛門、舘の内を飛廻り、「部屋々々は勿論上は天井下は簀子、井の内まで鑓を入れて探せども師直が行方知れず。寢間とおぼしき所を見れば、夜着蒲團の暖まり、この寒夜にさめざるは逃げて間なしと覺へたり、表の方が氣遣はし」と駈行くを、「ヤレ平右衛門待て／＼」と、矢間十太郎重行、師直を宙に引つ立て「コレ／＼いづれも、柴部屋に隱れしを見付出して生擒りし」と、聞くより大勢花に露いき／＼勇んで由良ノ助、「ヤレ出來された手柄／＼、さりながら迂濶に殺すな、假にも天下の執事職、殺すにも禮義有り」と、請取つて上座に据へ「我々陪臣の身として、御館へ踏込み狼藉仕るも主君の讐を報じたさ、慮外の程御赦し下され、御尋常に御首を賜はるべし」と相述れば、師直も遉の似非者わろびれもせず「ヲヽ尤々、覺悟は豫てサア首取れ」と、油斷さして拔討にはつしと切る引つ外して腕捻上げ、「ハアヽしほらしき御手向ひ、サアいづれも、日比の鬱憤此時」と、由良ノ助が初太刀にて四十餘人が聲々に、「浮木に値へる盲龜はこれ、三千年の優曇華の花を見たりや嬉しや」と、躍上り飛上り形見の刀で首かき落し、悦び勇んで舞ふもあり、「妻を捨て子に別れ老いたる親を

○いづれも　いづれもの方。皆様。
○花に露　花は露がかゝつて生々とする。よつて生々の序とした。
○執事職　（既出）
○陪臣　またげらい。
○えせ者　似而非なる者。曲者。
○わろびれもせず　心臆しもせず。臆せる様子もない事である。
○しほらし　柔和らしい。愛らしい。蓋しもと「しをらし」の假名なるべく、「しをる」「しをらし」などいふ語に從ひ、たわむの意で、折れ曲る、なよ／＼と弱々しいの意より轉じて、やさしい、愛らしいの意にもいふのである。
⦿浮木に値へる盲龜　優曇華と同じく得難き機會の喩にいふ。
○三千年の優曇華の花　三千年に一度花を開くといふ想像上の植物。⦿「優曇華」を見よ。
○形見の刀　亡君が切腹に用ひられた九寸五分の短刀。

○蓮性院見利大居士　淺野長矩の戒名は冷光院殿吹毛玄利大居士といふ。

○草葉の陰　墓の下。草の陰ともいふ。

失ひしも、此の首一つ見ん爲よ今日はいかなる吉日ぞ」と、首を擲いつ食付きつ一同にわつと嬉し泣き理り過ぎて哀れなり。由良ノ助は懷中より亡君の位牌を出し、床の間の卓に載せ奉り、師直が首血汐を清め手向け申し。兜に入れし香を炷きすさつて三拜九拜し「恐れながら、亡君尊靈蓮性院見利大居士へ申上げ奉る、去る御切腹の其の折から、跡吊へと下されし九寸五分にて、師直が首搔落し、御位牌に手向け奉る、草葉の陰にて御請取り下さるべし」と涙と、共に禮拜し、「いざ／＼御一人づゝ御燒香」、「まづ總大將なれば御自分樣より」、「イヤ拙者よりまづ先へ、矢間十太郎殿御燒香なされ」、「イヤ／＼それは存じもよらず、いづれもの手前と申し、御贔負は却つて迷惑」、「イヤ贔負でござらぬ。四十人餘の衆中が師直が首取らんと、一身を抛つ中に貴殿一人、柴部屋より見付出し生擒になされたは、よく／＼主君鹽谷尊靈の、お心に適ひし矢間殿。お羨しう存ずる。何といづれも」、「御尤に存じまする」、「それは何とも」、「ハテ扨刻限が延びます」、「然らば御免」と一ツの燒香「二番目は由良殿」、「いざ御立」と勸むれば、「イヤまだ外に燒香の致し人有り」、「そりや何者誰人」と、問へば大星懷中よ

○不義の過　殿中刃傷の時、主君の守護を忘れてお輕と戯れてゐたことをいふ。不義は密通の意。
◇喜び極まつて悲しみ來る。由良ノ助が勘平をあはれむ所は、物のあはれを知る武夫のゆかしさを思はしめ、彼が智仁勇兼備の英雄たるを見せて、技巧の妙を極めた。
○取かけし　討つてかゝつた。近松作「國性爺後日合戰」第一に「鬨を作つてどつと取かけ」。
○罪つくりに何かせん　無益の殺生はしますまいの意。
○光明寺　[illegible]墓所は江戸高輪の泉岳寺である。

り碁盤縞の財布取出し、「これが忠臣二番目の燒香、早野勘平がなれの果。其身は※不義の過から一味同心も叶はず、せめては石碑の連中にと、女房賣つて金調へ、其の金故に舅は討たれ金は戻され詮方なく腹切つて相果てし、其時の勘平が心さぞ無念にあらふ口惜からふ金戻したは由良ノ助が一生の誤、不便な最期を遂げさしたと、片時忘れず肌離さず、今宵夜討も財布と同道、平右衛門そちが爲には妹聟、燒香させよ」と投げやれば「ハヽヽヽはつ」と押戴き／＼「草葉の陰より嘸有難う存じましよ、冥加に餘る仕合せ」と、財布を香爐の上に被せ、「二番の燒香早野勘平重氏」と、高らかに呼はりし、聲も涙に顫はすれば、列座の人も殘念の胸も、張裂く計りなり、思ひがけなや人馬の音、山谷に響く攻太皷鬨をどつとぞ上にける、由良ノ助ちつとも騷がず、「扨は師直が一家の武士※取かけしと覺えたり、※罪つくりに何かせん」と覺悟の所へ桃ノ井若狹ノ助おくればせに駈付け給ひ、「ヤア／＼大星、今長門より攻めかけたは、師直が弟師安、此の所で腹切つては、敵に恐れしと後代迄の譏り、鹽谷殿の御菩提所※光明寺へ立退くべし」と、仰せにはつと由良ノ助、「いか樣最期を遂ぐるとも、亡君の墓の前、

仰せに從ひ立退き申さん、御しつぱらひ頼み上る」と、いふ間もあらせずいづくに忍び居たりけん、藥師寺次郎・鷺坂伴内、「おのれ大星、遁さじ」と、右往左往に討つてかゝる、力彌すかさず受け流し〳〵、暫時が中は打合しが、はづみを打つて打つ太刀に、袈裟にかけられ藥師寺最期、かはす二の太刀足斬られ、尾にもつがれず鷺坂伴内、其の儘息は絶にける「ヲヽ手柄〳〵」と稱美の詞、末世末代傳ふる義臣これも偏に君が代の、久しき例竹の葉の榮へを、爰に書殘す

○後拂(しつぱらひ) 軍陣の語。殿「しんがり」。「大友興廢記」「門司勘次一備ヘ二陣に相從ふ武士、宮武藏守親督いゝいゝ、しつぱらひにて、諸勢引きさる」。

○右往左往 しどろもどろ。

○袈裟にかける 恰も僧侶が袈裟を掛けたやうに、斜に肩から横脇にかけて斬下げるをいふ。

○尾にもつがれず 鷲は尾が無いから、尾に足を接がれねば、尾を振つて憐れを乞ふわけにも行かずを、鷺坂にいひかけた。第三に「尻に尾のない鷺坂」。

○竹の葉の榮 座に竹に雀の竹の紋の附く、竹本座の幾久しい繁榮を祝福するをいひかけた。

一谷嫩軍記

解　題

寶暦元年十二月十一日から初めて豐竹座（座本、豐竹越前少掾）に上演された。作者は奥書に「淺田一鳥、浪岡鯨兒、並木正三、難波三藏、豐竹甚六、故人並木宗輔」とあれども、並木宗輔が本曲の第三段目までを作り、寶暦元年九月に歿したので、その後の第四・五段が淺田一鳥等の合作に成つたものであるといふ。本曲は五段に分れ、就中第三段が最も名高い。

作　者

並木宗輔は並木千柳とも云ひ、其の傳は「夏祭浪花鑑」のところに述べた。

淺田一鳥は「聲曲類纂」追考に「淺田一鳥 森長三郎と云 諸の師なり」とある。

豐竹甚六は「聲曲類纂」追考に「豐竹應律 若太夫芝居主 甚六といふ」とある。

並木正三は享保十五年に生れ、大阪道頓堀宗右衞門町に住み、菓子商を營んで高砂屋平右衞門といひ（これには異説もある）、幼時から劇を好み、寬延三年淨瑠璃作者並木宗輔の門人となり、歌舞伎狂言を作り、傍ら操りにも筆を揮つた。「傾城天羽衣」（寶暦四年春大阪三條座上演）・「女文字平家物語」（寶暦五年冬京都布袋屋座上演）、「一[illegible]稀藤原系圖」（寶暦八年冬大阪中山文七座上演）、「三十石艠始」（寶暦九年春大阪中山文七座上演）、「桑名屋德藏入船物語」（明和七年冬大阪小川吉太郎座上演）などは、彼が歌舞伎狂言の名作である。「和布苅神事」（安永二年春中村歌右衞門座上演）を作つて上演してゐる二月十七日、樂屋で俄に病死した。行年四十四。彼は歌舞伎の機械的方面に貢獻した所が多い。門下に並木五瓶を出し、その後この一派は維新前まで東西の劇壇に勢力を揮つた。（正三は、「三十石艠始」（寶暦八年十二月顏見世）の大切に、廻り道具といふ事を爲始めたとは、普通に信ぜられてゐる。然し「役者談合衝」（寶暦九年正月刊、江戸卷、道外方之部）に「[illegible]谷甫北（同座「市村座」）其むかしは道外のぶんまはし」とあるから、廻り舞臺は正三の創案ではなく、其の以前既にあつた。正三の事は、余の學友[illegible]見[illegible]作が深く研究してゐる。）

出　處

本曲は平家沒落の哀史中、一の谷に於ける平敦盛と熊谷直實との組打、藤原俊成と平忠度との訣別、平忠度と岡部六彌太との合戰を脚色したもので、「小敦盛」「須磨都源平躑躅」に據つて、更に趣向を變へ、技巧を凝らしたものである。

本曲は非常な好評を博し、屢々操芝居に上演されてゐる。また歌舞伎では、寶暦二年五月江戸の中村座・森田座の兩座に、寶暦二年十一月には大阪中の芝居（座本中村十藏）に上演され、爾來諸方に屢々上演されて今日に及んでゐる。

本曲の第四段目の切に西澤一鳳が、佐々木市藏作曲の琴唄「流しの枝」を書き添へ、弘化三年正月大阪角座で市川海老藏が獨吟で好評を得、嘉永二年八代目團十郎が大阪で之を習つて歸り、八月から河原崎座で「一谷武者畫土産」と題して之を演じ、大入りであつたことが「傳奇作書拾遺」下に見えてゐる。嘉永五年三月河原崎座で新歌舞伎十八番の一として演じられた「蓮生譚」、天保十二年四月中村座に上演された「堺開帳二升花衣」、元治元年河竹默阿彌の作「一谷凱歌小謠曲」（市村座上演）は、いづれも本曲に關係あるものである。

第一（堀川の御所・卿の君自害・經盛の館・敦盛初陣）

登場人物の主な者

平時忠（大納言）　源義經（軍將）　菊の前（五條三位藤原俊成の娘）
熊谷次郎直實（源氏の臣）　卿の君（時忠の娘。義經の室）　梶原平次景高（源氏の臣）
平經盛（參議修理大夫）　平敦盛（無官の大夫。經盛の養子）　玉織姫（時忠の娘。敦盛の愛人）
平山武者所季重（源氏の臣）　大館玄蕃（季重の部下）　成田五郎（季重の郎等）
藤の方（經盛の室）

梗　概

壽永三年二月半、平時忠は源義經の堀川の館に來り、神璽と八咫の鏡との二種の神器と、平家陣取の地圖とを義經に渡す。折から菊の前が父俊成の使となつて來り、平忠度の詠歌「さゞ波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山櫻かな」を出し、「これは天晴れの秀逸であるから、勅撰集に入れたいと存じますが、御意を伺ひます」と語る。時忠側から之を聞いて、「その歌は朝敵忠度の詠であるから入れてはならぬ」と難じたが、義經の情ある計らひで、「讀人知らず」として千載集に入れることになる。

この時義經は熊谷直實に命じ、須磨の陣所に辨慶の書いた「此華江南所レ無也一枝於ニ折盜之輩一者任ニ天永紅葉之例一伐ニ一枝一者可レ剪ニ一指一壽永三年二月」の高札を立てさせて、敦盛を殺さぬ意を諷した。

時忠不平を抱き、娘の卿の君を義經の室とせるを取戻して梶原平次に妻はせ、また平經盛の養女に遣した敦盛の愛人玉織姫を取返して、平山末重に妻はさうとしたので、卿の君は憤怨して自刄し、玉織姫は時忠の使者大館玄番を斬殺して、敦盛と夫婦杯をする。かくて敦盛は甲冑を着して勇ましう一谷へ出陣する。

其の後成田五郎が大勢を引具し、經盛の館を襲ふ。經盛の侍女等之を邀撃して切捲り、藤の方は矢を放つて五郎を射殺し、侍女と共に平家一門の落ち行く跡を慕うて、船場の磯へ急ぎ出る。

第　二（小次郎先陣　須磨浦組打　林住家　流しの枝）

登場人物の主な者

熊谷小次郎直家（直實の子）　平山武者所末重（源氏の臣）　熊谷次郎直實（源氏の臣）

平敦盛（無官の大夫。經盛の季子）　玉織姫（敦盛の室）　平忠度（平家の將、薩摩守）
林（菊の前の乳母）　太五平（林の子）　茂次兵衞（人足廻し）
菊の前（藤原俊成の女。忠度の愛人）　梶原平次景高（源氏の臣）　岡部六彌太忠澄（源氏の臣）

梗概

無官の大夫平敦盛は、養父經盛に代つて一谷の要害を固めてゐる。二月初旬の暗夜、小次郎直家は先驅して初陣の高名を顯はさうものと、一谷西の陣門に突進した。折から城内に起る管絃の音に心耳を澄まし、「あゝ陣中でも都人は情も深く心も優しうおはすことよ」と、物のあはれに打たれて闘志鈍る。この時佞人平山末重後方から駒を早めて驅け來り、「ヤア小次郎か、勇ましゝ〳〵、初陣の健氣さにめで先陣を讓るぞよ」と煽てた。血氣にはやる小次郎は其の詞にふはと乘り、遮二無二敵陣に肉薄した。直實は愛子を見失うて狂へる獅子の如く、單身城内に突入し、直家（實は敦盛）を救ひ出し、手負ひと僞つて連れ歸る。卑怯な末重は直實父子を戰死させようとして當が外れ、敦盛（實は直家）等に切立てられて逃げる。途中、敦盛を尋ねる玉織姫を見付けて之を提へ、甘言を以て靡かさうとして峻拒され、怒つて之を刺す。

敦盛（以下いづれも實は直家）は安德天皇の落ち給ふ御座船の後を慕ひ、須磨の浦波に駒を乘入れ、鞭をあげて進む。熊谷直實之を望見し、扇をあげて麾き、「平家の大將と見奉る。めゝしうも敵に後を見せ給ふか。引返して勝負あれ」とて名乘りを上げた。敦盛乃ち駒を引返し、手綱搔繰り磯邊に驅け上り、直實と格鬪して組伏せられる。直實は敦盛の首を刎ねようとして、氣高い顏容を眺めて其の名を尋ね、平家の公達敦盛と聞いて悼はしさに堪へず、さしも猛き武夫も情の涙に暮れ、何とかして遁し奉らうものとためらふ。之を瞥見した末重は、「ヤア熊谷。平家方の大將を組敷きながら、助けようとするは二心に紛れない」と叫んだ。爲に熊谷は詮方なう、念佛を唱へて敦盛の首を搔く。そして曇い聲を張上げて、「平家方に隱れない無官の大夫敦盛を、熊谷直實が討取つた」と呼ばはつた。（直實は敦盛を助けた爲、末重に手向かつた我が子直家を敦盛と僞つて殺すとは、餘りに技巧に過ぐ。）

深手を負うて磯に臥した玉織姫は、其の聲を聞いてむつくと起き、「敦盛樣を討取つたとは誰人ぞ。せめて名殘に一目見せて給はれ」といふ。直實乃ち討取つた首（直家の首）を渡せば、姫は目も見えずおろ〳〵涙に打濕り、懷しげにその首を膝に載せて撫で、「敦盛樣よ。この世の緣は薄くとも、未來では幾久しう添ひ遂げてたべ」と、聲も消入る蟲の息。直實もあはれに打たれ、泣く音を添へて須磨の浦千鳥、汐退く時を娑婆の別れに姫は息を引取つた。

薩摩守平忠度は俊成卿の宅を訪ひ、別れを告げて詠歌を渡し、「先生の御情にあづかつて勅撰集に御入れ下さるなら、草葉の陰からも御恩は忘れ申しませぬ」と語り、須磨の陣所をさして行く道に日は暮れ、津の國菟原の里林の伏屋に泊る。この夜盜人が忍び入つたので、林が之を捕へて見れば我が子太五平である。母は之に說諭すれば、太五平は詞巧みに言拔ける。折節人足廻しの茂次兵衞が來たので、林は之に太五平の世話を賴み、太五平は茂次兵衞に勸められて軍場の道具持となり、母から餞別に太刀を貰ふ。

菊の前は愛人忠度の行方を尋ねて夜道を踏み、林の伏屋に來つて忠度と邂逅する。忠度は勅勘の身を憚り、菊の前との緣を切らうとし、菊の前は愛人の爲に命を賭しても離れまいとし、互に思ひ切な風情である。

折から夜の寂寞を破つて陣太鼓の音。人馬の聲騷がしう響き、寄手の大將梶原平次手兵を引連れ、林の伏屋を襲ふ。忠度乃ち奮戰して敵を追拂ふ。この時岡部六彌太が義經の命を奉じ、忠度を尋ねて來り、忠度の書いた「さゞ波や志賀の都」の歌の短冊を、山櫻の流し枝に附けて差出し、「御身勅勘なれば名を憚り、『讀人知らず』としてこの歌が千載集に入りました」と知らせる。

忠度は義經の情け心と六彌太の情誼とに感激し、首を渡さうとして明日の決戰を約し、駒に打乘り我が陣所に向ふ。菊の前は名殘を惜しんだ。之を見た六彌太は、刀を拔いて忠度の錦の右の片袖を切放し、林に之を渡して、「是もその人の形見と思へども猶なつかしき袖のうつり香」と詠んで、忠度が菊の前に與へる形見であるを諷し、互に名殘を惜しんで別れる。あはれ武士の情け心の優し[illegible]

第三（彌陀六の宅。御影の松原。熊谷陣屋）

登場人物の主な者

白毫の彌陀六（石工。實は彌平兵衛宗清）　お岩（彌陀六の下婢）　彦介（彌陀六の下男）
小雪（彌陀六の養女。平重盛の娘）　藤の局（敦盛の母）　平敦盛（院の御所の胤。藤の局の子。十六歳）
輿次郎（石工）　番場忠太（梶原景高の郎等）　須股運平（梶原景高の郎等）
孫作（庄屋）　雀の忠吉（石工）　菅右衛門（石工）
又平（石工）　相模（直實の妻）　梶原平次景高（源頼朝の臣）
熊谷次郎直實（大内に勤めた時は佐竹次郎といひ、出家して蓮生といふ）　堤軍次（直實の家來）
源義經（源氏の大將）

梗概

攝州御影の里に石屋がある。其の主人の額に黒子があつて、恰も彌陀如來の白毫に似、佛道に歸依して同職仲間と念佛講を作り、常に念佛を口ずさむので、人呼んで白毫の彌陀六といふ。

彼は講中の若者等と共に石塔を建てに行つた。その留守中、美形の若衆が立寄り、「お頼みして置いた石塔を刻んで下さつたか」と尋ねる。お岩出でて「されば、それは刻みましたので、主人が今建てに參つてゐますから、その歸るまで暫く爰でお待ち下さい」と答へ、奥に入つて彦介と相談し、かねてこの若衆に懸想してゐる主人の養女小雪との戀を取持つ。若衆は小雪に慕はれて迷惑げに、再會期し難い事を述べ、形見として赤金襴の袋に入れた青葉の笛を與へる。

此の時彌陀六一人歸り若衆に逢つて、「お誂の石塔を建てましたから、お氣に召すか御覽下さい」と、共に連立つて行き、

「ハアこれは蓋が歪んでゐる」と押直し、「恰好がとても好うございましよがな」と、いひ／＼、漆喰を取出して、重ね／＼の隙を塗る間に若衆の姿が消える。石工仲間から「オイ彌陀六、施主は何處に居られる」と、言はれて彌陀六あたりを見廻し、「ハテ何處に行かれたか、内金は取らず、施主が居なくては丸損になる」とてうろ／＼する。

折節小雪は若衆を尋ねて驅け來り、この様子を聞いて、「いや、あの若衆様は人を騙るやうなさもしいお方ではありませぬ。その證據にはこの袋に入れた笛を下さつた」と見せる。

折から藤の局は梶原景高の兵に追はれて逃げ來り、青葉の笛をちらと見て、「アラそれは我が子敦盛が秘藏の笛であるが、どうしてお持ちになつてゐるか」と問ふ。石工等これを聞いて、「これは不思議な。その敦盛様といふは須磨の浦で討死なされ、お連添ひの玉織姫とやらも殺されたと聞く。すれば若衆は敦盛様の幽靈であつたか」と、言ふを局聞いて、はじめて我が子の戰死を知り愁歎に暮れ、小雪も袖を顔に當てて泣く。

彌陀六は「マ、お斯うしては居られぬ。まづお局様はこの石塔の陰にお隠れなさい」と敎へ、「皆の衆何と思やる。追手の奴らがすなほに通ればよし、ぐづ／＼ぬかさば其の時こそ、我々は平家の領地に住んだ御恩の爲、お局様の味方となつて一働きしようではないか」と、いへば皆、「おゝよしきた」と忽ち一決し、手ん手に鶴嘴を操り緊めて待受ける。

やがて梶原の郎等番場忠太。須股運平が多勢を引連れ、砂煙蹴立てて驅け來り、「コレ石工ら。このあたりに逃げて來た女の行方を知らぬか」と言ふ。石工らは「おゝ見た／＼、もう今は濱邊傳ひに二三里も逃げ延びたであらう」と答へる。そこで追手は濱邊の方に走つたが、中にも運平等は陰に隠れて様子を窺ひ、局を見付けたので、石工等は局を庇ひ、大勢を相手に鶴嘴振つて擲合ひ追拂ひ、遂に運平を叩き殺した。其の鋭い業は只者とは見えなかつた。

庄屋の孫作は石工等が人殺しをしたと聞いて驅け付け、之を咎めれば彼等は、「イヤ人殺しはしませぬ。彼奴が死んだのは目が眩うたからだ。其の證據には切疵などありやしない」と言張る。庄屋も「なる程」と合點し、「それなら誰が其の事を公儀で

言開きせよ」といへども、いづれも自分で自分に難癖を附けて後込みする。無據庄屋は鬮を作つて石工等に取らせたが、鬮へて一筋多く作つた其鬮に庄屋が當り、言開きせねばならぬこととなる。庄屋は當惑し、「これは困つた。おれは掛合ひの場に立會はないから、言開きしようにも様子がわからぬ」と、いへども石工等は承知せず勇み立つて、あべこべに庄屋を引立てて熊谷の陣所に行く。

熊谷直實の妻相模は武藏に殘つてゐたが、子を案じ夫を慕うて百里餘りの長旅を續け、一谷熊谷の陣所に辿り着く。

藤の局は敵に追はれて、熊谷の陣所とは知らず逃げ込み、嘗て憐みをかけた相模に邂逅する。そして共に御所に出仕してゐた時の昔話りや、その時共に懐胎してゐた事などを話して、互に奇遇を喜んだが、今の身の上を語り合ふ中に、相模が直實の妻であると聞いて驚き、「其の直實は我が子敦盛を殺した敵である。舊恩を忘れずば助勢を頼む」と哀願する。

相模はこれを慰めて武士道を說き、戰場に愛子を送る母の心懸けを述べた。然し其の實直實は、義經が己れに與へた高札の文言に、「此華江南所レ無也……伐二一枝一者可レ剪二一指一……」とあるので、敦盛を助けようとする義經の謎意を察して、我が子小次郎を敦盛の身代りに立てた事が判明すると、忽ち藤の局と相模とは喜悲轉倒する。

梶原景高はこれを隠れて聴き、鎌倉に密告しようとして出て行く所を、宗清に手裏劍を投げられて斃れる。宗清は情ある義經の計らひによつて、藤の局と敦盛とを連れ去る。直實は無常を感じて世捨人となり、妻を連れて佛道修行の旅に出る。そして義經は戰場に赴く事となり、各人の心とりどりに哀愁に打たれて別れる。

評

この段、義理人情に富む源平の名將勇士の行爲と、それ等に絡む美女烈婦の異性愛と、子に迷ふ母性愛などを、麗しい詞章で縷々と說いてある。そして社鼠に等しい奴原の陋劣な仕打を織込んで、到る處に憂愁・哀婉・悲壯・痛快。厭世の情を高調して、我が武士道の精神を發揮し、變化波瀾の妙を極めてゐる。

第三

世に在らば又歸り來ん津の國の御影の、松と詠み置し、一ト木と共に年を經し額の黒子口癖に、佛の御名を唱ふれば白毫の彌陀六と、人に知れし石屋有、げに交はりも信心の同氣同行相求め朝暮勤むる看經の、責念佛の終りには諸國諸山に建置し石塔に有戒名の、數も限りも南無阿彌陀、願以此功徳平等の、廻向の聲も殊勝也、日暮紛れに門口へ連立て來る石屋共、「おやぢ殿内にか」といふ聲聞てずつと立出、「ホウ同行衆ようござつた、今日は大分忙しさに仕事のなりで直に看經たつた今仕舞ふた、ササ上らしやれ南無阿彌陀／＼」、「アイヤこれ彌陀六殿、今夜は珠數繰の數右衛門が逮夜、百萬遍申によつて誘に來ました」、「ほんにそふじやどりや參りましよコリヤお岩まだ彦介は戻らぬか、ソレ娘が起きたら藥暖めて飲ませ、若し石塔を誂へさしやつたお若衆が見へたら戻る迄待しておけ、サア／＼ござれちやつと念佛搔込んで夜食を申てじや有まいか」、「ヲイノ

○世にあらば・御影の松　「續古今集」卷十九・雜下部、藤原基俊の歌に「世に在らば又歸り來む津の國の御影の松よおもかはりすな」。
○御影　攝津國武庫郡（舊莵原）の町名。
○額の黒子　白毫に擬へて白毫の彌陀六といふ。
○佛の御名　南無阿彌陀佛の六字の名號。
○白毫　彌陀佛三十二相の一で、佛の兩眉の間にあつて清淨柔軟、右に旋轉し常に光明を放つといふ。この石工の額の黒子を佛の白毫に見立てた渾名。
○同行　同じ道の修行者。
○かんきん　「看經」の唐音（Kan Kin）。現今の支那音は（Kan Ching）。もと經文を默讀することであるが、誤つて鉦を鳴し讀經することにいふ。
○責念佛　責懸ける樣に早口聲高に唱へる念佛。
○諸國諸山に建置きし石塔　この段の後文に「御影の里へ身退き、平家の一門先立ち給ふ御方々の石塔、播州・[illegible]高野近國他國に建置きし施主の[illegible]石塔は、皆是彌平兵衞宗清が[illegible]種と御存じ知らずや」とある。
◉願以此功徳平等　念佛宗總回向文中の句。ここの文は、己が建てた無數の石塔に一々刻んだ戒名を悉く唱へ、念佛・總回向文を唱へて供養する意。
○逮夜　佛事法要する忌日又は命日の前夜。（見[illegible]）
○百萬遍　念佛をつまぐりながら佛名を百萬遍唱へること。淨土宗[illegible]起つてから[illegible]念佛[illegible]

佛も百味の飲食此方も奈良茶の飲食せう、しよざいぶつほうはらね佛」、門念佛を日々に打連てこそ急ぎ行、あとへ下人の彦介が、枴の先にぶら〳〵と輕籠引ッかけ立歸り、「ヤレ〳〵しんどや、お岩殿肩も腕もめり〳〵いふは」、「ヲヽ道理〳〵嘸くたびれ、そして石塔は建ちましたか」「イヤまだ建はせぬが、おりや内に用があろと思ふて先へ戻つたが旦那殿は奥にか」、「イヤ〳〵同行中ヵに百萬遍が有ッて參らしやつたはいの」、「ホウそんなら幸ィ此間小雪様か病氣じやとて引込んでござるは、かの石塔を誂へさしやつたお若衆に、戀煩と見たは違はぬ旦那の耳へ入ぬ内意見せうじや有まいか」「イヤそりや妾も如才はない此間からいろ〳〵と言ふてもいかな〳〵、此戀が叶はねば井戸へ身を投るの首締て死るのと怖い事計言ふてじや」「ホウそりや嫌なこつちやのハアそんなら斯うじや、たつた一度で思ひ切しやれととつくりと合點さしていつそ逢はそじや有まいか」、「ハテもふせう事がない幸今夜お若衆か見へる筈じやが其間に旦那が」「アヽ何のいの百萬遍ならちやつとじや有まい、マア娘御に其譯言ふて工面さつしやれ、おりや寢所で彼の時分、獨角力を取ましよ」と、言ひつゝ勝手と奧の間へ別れてここは

に行はれ、京都には百萬遍知恩寺といふ寺院もある。

○念佛擬込んで夜食を申して　「夜食擬込んで念佛を申し」であつて、卽ち念佛と夜食とを取違へていつた。

○百味の飲食　佛に供へる諸種の珍味。「無量壽經」卷上に「如ノ是諸佛諸菩薩、百味飲食自然盈滿」。

○奈良茶　茶飯に大豆・小豆・又は栗などを振掛けたものをいひ、もと奈良の東大寺興福寺などで炊ぎ始めたによつてこの稱があるといふ。

○しよざい…腹念佛　「世帶佛法腹念佛」のかたことである。佛法よりも世帶、念佛よりも腹ふくれるが大切であるとの意の諺。「風流今平家」（元祿十六年刊）今様宮摘の條に「寺首場は東やら西やら知らぬが佛、世帶佛法腹念佛とおもい世話を聞き、……」。近松作「今宮の心中」に「世帶佛法腹念佛、口に食ふが一大事」。

○枴　兩端に物をかけて擔ふ棒。てんびんぼう。

○輕籠　繩で編み、その四隅に繩を附け、中に土などを載せ、棒にかけて擔いで運ぶ具。もつこか。

・しんど　「しんらう」（辛勞）の訛り。疲勞することで、くたびれること。

○爲う事がない　致し方が無い。

○何のいの　何の案ずるに及ばないよ。

○ちやつと　[illegible]。

○丑三つ　四更三點卽ち午前二時頃。深更。
○しんしん　沈々。近松作「曾根崎心中」に「風いたい〳〵たる曾根崎の森にぞ辿り着きにける」。
○下に居る間も胸せかれ　小雪は若衆を室に引入れて早く對坐したさに、庭さきに立つて誘引する間も、氣がせくのである。
○逢ひましたい　お逢ひ致したい。
○うつつ答へつやつつ返しつ　「打ちつ答へつ遣りつ返しつ」の音便、聖山盡るをいふ。もじやもじやする動作をいふ。

入にけれ、既に其夜も、丑三つの、風しん〳〵と更渡り、いと物凄き時しもあれ宿鳥の聲の哀れげに、仄聞ゆればいとゞ猶心細さと訝しさ、小雪は部屋を立出て、燈火挑げ窺へば門の戸ほと〳〵打敲き、「頼ませふ〳〵」と言ふ聲は「紛ふ方なきお若衆樣、ヤレ嬉しや」と飛で下り、戸口を明けて「ようこそお出、サア〳〵此方へ」と伴ふて、下に居る間も胸せかれ顏は上氣の櫨紅葉。差俯向いてもじもじと、挨拶も出ぬ其内にお岩が聞付走出、「是は〳〵お若衆樣今日お出の約束故只今迄待ましたか何故更けてお出なされた」、「されば手前はちと樣子有て人目を忍ぶ者なれば、晝は勿論夜とても密な時刻を心懸け、態と只今參りしが先達て誂へ置イた石塔が出來ましたら、彼の地へ建てゝ貰ひたさ、先御亭主に逢いましたい」、「イヤ父樣は只今留守でござりますが、お前がお出なされたら待せまして置クやうにとナフお岩」、「アイ申付ケて出られました、歸られます迄名代は此娘御、お咄シの相手にしてうつつ答へつやつつ返しつ兎角お心安うして進ぜて下さりませサア〳〵奧へ」と勸むれば、「然らば左樣致さん」と何の心もつゐ立て、一間へ通る後影、見送るお岩が手を打て、「テモ扨も好い器量、あの樣なお若衆は日

本國を尋ても今一人と有まい惚さしやんすも道理道理、云々」と、言ひつゝ、勝手へ入跡へ、小雪は立出興醒顔、「ハテ　めんようなお若衆樣、たしかに奥へ行かしやんしたが掻暮姿か見へぬはどふじや、不思議〳〵」とうろ〳〵きよろ〳〵尋る内、此方の障子さつと明、「イヤ爰に居ますはいの」、「是はしたり意地の惡いいつの間に抜けなさつた、人の思ふ樣にもない心强いお方じや」と、言ひつゝ、側へ差寄れば飛退つて「ア、これ〳〵、始終の樣子を見聞くに付、優しき人の志、嬉しいとは云ながら、我身は深き樣子有て假にも妹背の語らひを爲す事叶はず、緣なき事は前生の約束ならめと諦めて思ひ切て下され」と、言ふも流石に氣の毒の、打萎れたる其風情、小雪ははつと力を落し、「たとへ樣子が有とても、是程に思ひ詰め心を盡す甲斐もなく、情無ふも振捨て否とおつしやりや生きては居ぬむごいつれないお心」と恨み歎けば、「いやとよ恨はさることながら、逢ふは別れのはじめといふ例に漏れぬ我身の上、頼み置たる石塔が今にも成就しておらば、再び此家へ來らぬ故相見る事も叶ふまじ、只儘ならぬは世の習ひはかなき物は人の身の、一生は皆夢と思へばさの迷も有まじ、さりながら今を限の別れといへば、誰

◉めんよう　奇怪。不思議。この語、もと「めいよ」(名譽)が「めいよう」「めんよう」などと訛り、「ほまれ」の義から轉じて、奇妙、かはつたこと、不思議の意にいふ。「めんよう」を面天または面妖などと書くは當字である。
○掻暮　少しも、皆目。この副詞は下に打消の語と應じる。
○人　我を人と婉曲にいうた。
○氣の毒　自分に心を痛めること。一他への同情の意にいふは後の轉義。
◉サハリ　他流の節廻しに觸れる意、義太夫節などの内に他流の節廻しを挿入した部分である。隨つてここに他の部分とは違つて、語る事をせず、美しい節廻しを以て謡ふ。
○いやとよ　「いなさよ」に同じ。いゝえ。否「いや〳〵さう思ひなさるな。」
○さることながら　さあることながら。然るべく御尤もとは存ずれど。
○逢ふは別れのはじめ　逢ふことあれば、別れることのあるを覺悟せねばならぬ。謡曲「楊貴妃」に「會者定離ぞと聞く時は、逢ふこそ別れなりけれ」。
○一生は皆夢　李白の「春夜宴桃李園序」に「浮世若夢」。

しも名殘惜いもの、若しも戀しき折からは、心のいさめともならん、いで〱形見に參らせん」と、錦の袋押開き青葉榮へし笛竹を、渡す心も味氣無く戴く身にもさながらに道理に向ふ矢先はなく、「ひよんな事じや」と云ふより外詞も、涙にくれ居たる、折から道々口癖に「南無阿彌陀、南無阿」彌陀六逮夜より息急き戻り門の戸を、「明けい〱」と打叩けば、「あい」と奧から返事してお若がかけ出、「旦那樣のお歸りそふなコレ小雪樣、折角戀になされた彼方を、此まゝで思ひ切お前の心がいかにしてもいとしぼい、せめてもの心行かし、此間にちやつと抱付なされ」と、無理に押遣り庭に下り戸口を明、「ホウ旦那樣早かつた」「何の早かろ百萬べん〱たら〱と後の咄しで途方も無ふ夜か更けた。南無阿彌陀〱ヤお若衆はござつたかサア其お方は、どふじや〱」、「サヽ、さつきに見へたけれど、耻かしかつたか門口でうぢかは〱這入にくそふにしてゞ有たを、もどかしがつて娘御がつゐ這入らしなされたはいな」「ヤ何じや娘がもふ這入らしたか、アイ南無阿彌陀〱」、「ヲヽ旦那さんとした事が惡い聞そう此門口にござつたを内へ這入らしなされたといふこつちやはいな」、「ハテそふしつかりと言へば好いにどふ

○いさめ　諫言の意より轉じて、慰める意。近松作「傾城反魂香」に「御徒然を諫めの爲」。
●青葉の笛　敦盛の青葉の笛と稱する物、今も須磨寺の寶物の中にある。
○味氣無し　面白からず。興「きよう」がない。
○ひよん　いや(嫌)なこと。(見索引)。新井白石の白箍稿本「技搾」(題名)に「俗に物の不好事を凡てさよんな事と云ふ、肉字の維音ひよんと云ふよりいひ傳へて常語となれり」。
○戀になされた彼方を　お若衆様を懸想なさいてあなたをの意。
○いとしぼい　「いとほしい」(惇)の「ほ」と「し」とが顚倒した語。
○途方も無う　とんでもなう。
○うぢかはうぢかは　ぐづつき躊躇するさま。[illegible]
○とした事が　其の者の分際として、其の思ひなした事が不似合ひの意。何を思ひちがひ仰つしやる。(見索引)

○背戸　家の後口。うらぐち。

○雀の宿り　雀の松原の名に寄せた。雀の松原は攝津國武庫郡魚崎あたりの古稱。

○布引の瀧　神戸市にあつて、布引山の中腹にある。[illegible]

○魚崎　又は魚崎に作る。攝津國武庫郡魚崎。

○忉利天上寺　神戸市[illegible]區内にある、摩耶山の頂上にある寺[illegible]、佛母摩耶山と號す。今のは[illegible]年の再建。

やら紛らはしかつたではつと思ふた、どりやお目にかゝろかと、ずつと通つて「是は／＼、嘸お待遠にござりましよ、扨は彼の石塔、今日の約束なりや夜を日についで漸う出來し、今朝から若い者等に運ばせたが、大方建てたでござりましよ」、「それは嬉しやいかゐ世話でござつた」「イヤ世話は家業じやがお氣に入つたら此方も仕合、マア御覽じて下さりませ」、「成程／＼同道して參りたい」、「そんならお供致しましよ」と、立て用意を取急げば、「コレ／＼父樣私も一所に行たいはいな」、「そりや何で」、「ハテ石塔の恰好見に」、「ハテ扨譯もない何ゝのわれが見る事で、此所や彼所の所じやなし殊に夜道じや阿呆言はずと背戸門閉めてよう留守せい、コリヤお岩、そちも傍から隨分氣を付誰が來ふ共構へてつゐ這入らすなよ、合點か、サア／＼お出」と打連立急ぎてこそは出て行。月もさやけき夜もすがら、四方の景色も澄みのぼる、光を掩ふ雲ならで、雀の宿り陰晴き、松の林に風荒れて、汀の波のおのづから音も烈しく打寄せて高嶺に響く山彦はどう／＼さつと布引の瀧の、白絲絶へずと人の、問へば彼方と魚崎に續く、鮫池村里も、急ぎて忉利天上寺、摩耶のお山を右手に見て、行道筋も、直ならぬ脇の濱

○繼橋（つぎはし）　淀川の支流三國川（今云神崎川）には橋を繼いだ渡し場があつた事が「文德實錄」に見ゆ。
○舟を守りの神　攝津國豐能郡の垂水神社か。
○垂水　攝津國豐能郡豐津村垂水、又は播磨明石郡垂水をいふか、何れにしてもここの文に適合せず。（或は播州垂水の海神社か。）
○上野山　神戸市にあるをいふか。
○一谷　兵庫縣須磨の西七丁、源平の古戰場。
○つつくり　徒立の義か。つくねん。
○御影石　花崗石をいひ、攝津の御影から多く出すによつてこの稱がある。一谷の戰に須磨の浦の露と消えた敦盛と挙つた敦盛塚は、三谷の西一丁目にあつて苔蒸した五輪石塚が現存してゐる。
○ちつくり　いささか。近松作「丹波與作待夜の小室節」中之卷に「髮がちつくり縮んだ」。
○振　振つてゐること。くるひ。
○漆喰　「石灰」の唐音。石灰に粘土を加へ苆（すさ）を交へ、ふのりの汁で練つたもの。凝固して堅牢のものとなる。
○蓋物　蓋のある器物。
○こちとら　我等。「こちと」は「こちびと」（此方人）の略で、「はやびと」（隼人）を「はやと」といふの類。
○畦な　[illegible]。（[illegible]引）
○希有（けう）　常には無い義、[illegible]「徒然草」百六段に「こは希有の狼藉かな」と。
○卒塔婆（そとば）　通じる　[illegible]

邊や磯傳ひ、神戸も跡に湊川、流るる水の、淀ならば爰も繼橋※架け渡す舟を守り※の神垣や、地森も茂みておく露の、※垂水の里も早過て行けば、程なく※上野山、※一の谷にぞ着けるが、地東雲近き横雲のたなびく空も青々と、枝葉茂りし松蔭につつくり※立た御影石※、遠目にそれと彌陀六が、走り寄つて「是じや〳〵」、詞先達て遣はされた所書に合せ、若い者等に言付たりや建ては建てたがちつくり※蓋に振が有ル」と、地押直してためつすがめつ、「詞サア恰好見て下さりませ、何と好うござりませうがや、是から狂ひのない樣に止を合すは※漆喰」と、地懐より※蓋物取出し、重ねの際際塗る所へ、山畑稼ぐ百姓共、鋤鍬擔げどや〳〵と通りかゝつて、「詞ホウ石屋の親仁殿か」、「おいやいこりや皆疾うから精が出るな」、「イヤ此方※とらよりこなたが疾うからあだ※な所へ石塔を建てさしやつたの」、「ハテあの人は商賣じやによつて、何處で有ふが持運んで建てねばならぬが、誂へ人が※希有な奴じやの」、「ア、これ〳〵むさと粗相言ふまい、其施主人ンが此所にござるぞナアお若衆樣、我レも人も亡者のため※卒塔婆一枚立てゝも※三惡道を遁るゝといふ、まして大層な此石塔をお建てなさるは御奇特なお若衆樣、結構なお志しでござります」、「イヤこれ親

石又は木で作り、地・水・火・風・空の五輪塔をいふ。「[illegible]」に「一見卒塔婆、永離三悪道、何況造立者、必生安樂」。
○三悪道　地獄道、餓鬼道、畜生道。
○わいら　「われら」(我等)の音便。汝等。近松作「博多小女郎波枕」に「わいら、が居ればやかましい、とつとゝ行け」。
○めんよう　もと名譽である。一樣にて、妙。奇怪。
○すた〱　喘(あへ)ぐさま。いきせくさま。淨瑠璃作「[illegible]」に「[illegible]行者行のすたすた坊主、すた〱いうてご加持しける」。
○うせる　逃げ失せる。(見索引)
○金だん　緞子の地に金糸で模樣を織出したものを金緞といふから、それのことか。(或は金襴(きんらん)の誤か。)

仁殿、お若衆の施主人のと人もないにそりや何言はしやる」、「何とはわいら※目が覺めぬな」、「アレまだ何處に人が居るぞいの」、「ハテこれ爰にハアほんに見へぬは、ハレめんよう※なたつた今迄こゝにで有たか、ハアどつちへござつたな、お若衆樣〱」と呼ば倶々百姓共、こゝかそこかと尋る所へ、娘の小雪が徒歩跣足息もすた〱※走り付。「お若衆樣にたつた一言云ひたい事が有ッて來たちよつと逢はして下さんせ」。「イヤ逢はして所じやない影も形も見へぬはい」、「コレ親仁殿、お若衆が居やらねば忽ち此方の損じやぞや、所を知つてか但し前金でも取て置かしやつたか」。「否てや人體が好いから所も問はず一錢も受取らなんだ」、「ハア夫でよめた、石塔を託けに何ンぞせしめる下工み、扨は騙に極まつた、遠はうせ※まい追掛けんサア皆來い〱」と立騒げば、「イヤこれ〱待しやんせ、よもやそんなさもしい心なお方では有まい、其證據は私に遣るとてコレ此笛を」「貰ふたのか、ハア、どれ〱。こりやまあ袋が結構な赤金だん※じや、扨笛は、生竹でもないが節からちつくり枝葉が有ル」、「いか樣是を錢にせうなら百が物は有ふかいナフ親仁殿」、「ハテ扨何の錢にならふそれも娘が一ッ杯食たのじや、ヱ、こんな事

○あた　嫌忌の意を示す接頭語。（見索引）
○笑止　氣の毒。いたはしいこと。この語もと「勝事」（「しようし」と訓み、「し」を濁らず）であつて、すぐれた事、常ならぬ事の義から轉じて、異のさゆること、氣の毒、いとほしい事の意になつたのであらう。（笑止の字義によつて「をかしいこと」の意とするは誤つたものである）。
○手附　契約の保證金。「手附を取る…知られたり」と、いかにも手附を取ることがこれから起つたやうにいふ、この種のかるふざけは、既に上代の昔や平安朝以來の國文學書に往々見る所、そして淨瑠璃の中にかやうに見えてゐる。これは我が國人がかういふ事を好む一種の癖である。
○舟寺　「攝津名所圖會」に「蓮花寺、舟寺八幡の傍に…境内に舟寺といふ…より神宮寺とす」。この寺は現今は有馬郡高平村に移つて大井寺といひ、黄檗宗の寺院。
○内裏上﨟　内裏に仕へてゐる身分高き女で、玉織姫は修理大夫平經盛の養女なのでかくいうた。
○御臺　（見索引）
○福原　兵庫縣神戸市内（兵庫縣攝津國八部郡…）[illegible]

なら初手で半金取て置いたら、まんざらの損もせまいにあた慘たらしい目に遭ふた」と、悔むに甲斐もあら笑止や、彌陀六が拔かれたと傳へて諸事の誂物、手附を取るといふ事は此時よりと知られたり。時しも跡の松原より足早に來る女子は、何者なるといふ內に走り、近付藤の局、「コレ〳〵ちよつと物問はふ、舟寺はどつちじやの。」「教へてたも」と有ければ、「ハヽアそれは是から餘つ程遠いが、見れば賤しうない女中の。たつた一人徒步跣足で何故寺を尋さつしやるぞ。」「されば妾は樣子有つて後より追手のかゝる者、暫く影を隱さん爲」と宣ふ內に目早くも娘が持たる袋を見付ヶ、「なふそれ一寸見せてたべ」と、手に取給へば紛ひなき青葉の一管。「ヤア是は我が子の敦盛が肌身放さぬ秘藏の笛、どふして此方の手に有」と、聞て親子も不審顔、百姓共口々に、「其敦盛といふ人は、此間の戰に、源氏の侍熊谷の次郎が手にかゝり、死なしやつたじやないかいナア與次郎」。「ヲヽ其時にいたらしい玉織といふ內裏上﨟も殺されて居たげな」と、聞て御臺は、「ヤア〳〵何敦盛は討たれしとな、福原の館にて母樣御無事でおさらばと玉織諸共、潔う、言ふたが此世の暇乞、永い別れになつたか」と。お

○あのこの物の　「彼〔あ〕のもの此〔こ〕のものの」
○[illegible]　何のかの[illegible]
○興醒顔　「さつさ」[illegible]付

りし事共口説き立、人目も恥ぬ叫び泣き前後、不覺に見へにける、「イヤこれ親仁殿、合點のいかぬ事がある、死なしやつた敦盛樣があの笛の主なれば、こなたに石塔誂へ、たお若衆と一つじやないか、いかにも、其死んだ人が來そふな物じやないぞや」、「いかにも、ハヽア聞へた、さつきに此所まで連立ッて來て、あのヽ物の言ふ内掻消す樣に見へなんだは扨は幽靈で有たよな」と、言へば皆々興醒顔、御臺は猶も悲しさの思ひ彌增御歎き、小事も始終を聞ッに付ヶ「はかない事ぞ」とばかりにて、共に袂を絞りける、折節遙の松陰より群々鳥の搏つが如く駈來る大夢彌陀六が、「あれこそ慥に追手の者、まづ／＼彼方を隱すに幸ィ、此石塔の後へ」と御臺の手を取忍ばせて、「何と思やるいづれも、追手の奴等が此所を通順に通れば彼方の仕合、若しも何かと意地張らば、是まで平家の領地に住だ御恩の爲、一働きせうじやないか」、「ヲヽサ手ん手に鋤鍬の、背打くらはせ追捲ろ」と、言ふ間もあらせず砂煙、蹴立て蹈立て駈來るは、梶原が郎等番場の忠太須股運平先として、數多引連れつつと寄り、「コリヤ／＼百姓共、三十餘の女、一人此所へ來たであらふ、どつちへ逃げたそれ吐かせ」、「ハア成程／＼、其女子はアレ、

○片つ端　手あたり次第。
○ののしる　騒ぎ立てる。
○そつくひ　「そくひ」（續飯）の音便。ここの文は素首〔そつくび〕と類似音の洒落。そして「相手仕事ぢや手早」に縁をもたせた。
○ほで　うで(腕)。手。
○拔連れ　拔刀して連れ立ち。
○韓竿　竿の先に樞〔くるる〕があつて、これに更に竿を附け、竿を振り、先に附けた竿を廻轉して、穀物を打つて穀粒を脱落せしめる農具。

あの道を横切ゝに、濱邊傳ひに走つたがア、もふ二三里も行ませう、追手の衆なら一足も早ふござれ」とせかすれば、「扨こそ遁すな皆來い」と、駈出す振にて立留り、運平が耳に口、諜し合せて木蔭に殘し濱邊を指して駈り行。跡打眺め「サア樂じや、此間に早ふ」と御臺を出し、「コリヤ／＼娘、彼方、人は覺束ない、寺まで送つて内へ往ね、ちやつと／＼」といふ所へ、思ひがけなき木蔭より須股運平飛んで出、「ヤア／＼どこへ／＼斯う有ふと推量し、忠太が我を殘し置かれた、サヽ早う御臺を渡せ、邪魔ひろぐと片つ端、素首ころり打落す何と／＼」との※しれば、百姓共せゝら笑ひ、「コリヤやい、素首のそつ※くいのと、わいらがほ※での動く間にうつかりとして居よふかい、サア相手仕事じや手早に來い」と、手ん手に鋤鍬大熊手、打てかゝれば運平はじめ數多の家來も一同に拔連れ※／＼渡り合ふ、打合ふ隙に彌陀六が「ソレ御臺樣逃げた／＼、娘も逃げよ」とおせる中、元來達者の百姓共腕先揃へて韓竿打片端家來を打毆り、運平をおつ取卷き、「投げたり踏んだり蹴飛したり寄つて掛つて打叩く急所にや當りけん「うん」と仰向に反かへれば、「ソリヤ死んだは」と逃行家來、又追つ掛くるを彌陀六が、「コレ／＼

○狼藉　亂暴。見字引

○ひよんな　惡いへんてこな。（既出）

○おぢや　おいでや。ござれ。

○定　きつと。必定。

○ちよびくさ　口早に、ちよこ〳〵としやべる形容語。「ちよびかは」などの「ちよび」も「ちよびくさ」の「ちよび」も同じ語。

待ッた」と呼返し、「御臺の難儀を救ふ爲、追散す計りでよいにア、死んだりや後がむづかしい、コリヤまあどふした物であろ」、「どふと言ふたら逃げたがよいサア皆ござれ」と言ふ所へ、駈つて來る庄屋の孫作、死骸を見付て「扨こそ〳〵、一人も散す事ならぬぞや、コレ皆能う聞きやれ、今梶原樣の郎等、番場の忠太といふお侍がござつて、百姓共が狼藉し家來運平を殺したる由憎い奴、殘らず引立來るべしと嚴しい言付ヶ、ア、※ひよんな事して己に迄厄介を掛ける運なはつたら猶怖い、サア〳〵※おぢや」と言ふに皆々尻込みの、中に彌陀六進み寄り、「殺したと聞しやつたは大きな間違ひ、ありや目が眩ふて死んだのじや、其證據にはソレ、死骸に一つも疵がない」、「ムウそれが※定なら己も嬉しい、ドレ〳〵」と體を改め、「ほんに何處にも疵はない、こりやあつちのが大きな粗相、ハテ其方達が殺さぬからは何の怖い事はない此中で能う物言ふ者たつた一人往て、さつぱりと言譯すりや濟む事じや」、「ほんにそふじや、ハア誰レがよかろなア」、「いやこれ年の功じや彌陀六往かしやれ」、「イヤ往く分は構はぬがおりや口癖の念佛が邪魔になつてどふもならぬ」、「そんなら此庄屋が指圖せう、日頃※ちよびくさ能うしやべる雀の

○こつちや　ことぢや。ことだやら。
○びしやのくだ　「びしや」は「びしやり」で、鼻のびしやりと叩きへこんだこと。「くだ」は管を卷くの管で、騒がしうしやべり立てること。鼻潰れがしやべると聲が鼻にかかるから、「聲が鼻へ入る」こといふ。
○與次郎は齒拔なり　與次郎人形は一本足であるから、その形が行人の片屐齒の拔落ちた姿に似てゐるといふので、屐齒を日齒に取つた洒落。
○又平　俗に大津繪の開祖又平は吃であつたから吃又平といひ、近松作「傾城反魂香」にも見えてゐる。よつてここの文に、かくいうた洒落である。
○もちやくちや　入り亂れて秩序なきさま。くしや〳〵。「もちやくちや」は「もんちやく〳〵」(悶著々々)の訛略であつて、「むちやく〳〵」(無著々々)を「むちやくちや」といふの類である。
⊙いも(妹)。いちかか(市嗅)。西國巡つて　いづれも緣語。[illegible]
○親　鬮「くじ」を作つて取らす者をいふ。(カルタ札を配渡す者をも親といふ)。
○すつとせい　「すつと引けい」の意の掛聲。
○わいら　「われら」(我等)の訛。汝等の意にいふ。(既出)
○ヨイヤサッサ　[illegible]

忠吉(ちゆん〳〵)遣らふかい」。「イヤわしやあんまり口早で何のこつちや譯が知れまい」、「扨はびしやの管右衛門かい」、「おりや聲が鼻へ入ぞ」、「といふて丹兵衛は咽がごろつく、與次郎は齒拔け也。さしづめ又平お往きやれ」。「イ、いやヨ、こちやドヽド吃りますはいの」、「ハテ扨其樣に讓合ふては埒があかぬ、幸ィこゝに石を運んだ繩が有ル是で鬮取したらよかろ、ヲヽそりや否應云はさぬ樣此庄屋がして來る」と、手早に繩切後でもちやくちや引ん握り、「コリヤ結んだのを取た者が往くのじやぞ。サア取れいもよ」。「ヲツトいちかかどれ取りやる」「西國巡つてこれこれ」と手ん手に繩先引つ張れば、「ハア、頭數よんでしたがコリヤ一ト筋餘つたは」、「ハテそりや親の繩じや庄屋殿取らしやれ」、「ほんにそふじや己が取ろ、サア引け〳〵片端から去してくりよ」、「ヤすつとせい〳〵」「ハア悲しや結んだのは己じや有ッた」、「サア庄屋殿往かしやれ〳〵」、「イヤ待てよ、おりや往かふ筈がない此場の樣子を知つて居るわいらが言譯する筈じや」、「テモ鬮が當つた物」、「そんなら今一度」、「イヤ爲直しはならぬ〳〵無理言はずと往かしやれ」と、寄つて掛つて引つ立押し立、ヨイヤサッサ「これは迷惑」、ヨイヤサッサ「待つてくれんか」、

「ヨイヤサツサ」、「料簡ならぬか」、「ヨイヤサツサ」、「あんまり胴慾」、「ヨイヤサツサ」追つ立引つ立、「ヨイヤサツサ」、「て」、「ヨイヤサツサ」、「こ」、「ヨイヤサツサ」、「そ」、行空も、いつかは冴ゑん須磨の月、平家は屋島の浪に漂ひ、源氏は、花の盛を見る中に勝れて熊谷が、陣所は須磨に一ト構要害嚴しき、逆茂木の中に若木の花盛、八重九重も及びなき、それかあらぬか人毎に、熊谷櫻と云ふぞかし、花折らせじとの制札を讀んで行人讀めぬ人、一つ所に立集り、「扨も咲いたり〳〵、花より見事な此制札、辨慶殿の筆じやげな、さつても見事一つも讀めぬ」、「ヲ、あれはの、義經樣が此花を惜み、一枝伐らば指一本剪ルべしとの法度書」、「ヤア花の代りに指剪ろとは、首切下地ヲ、怖や、見て居る中も虎の尾を踏む心地する皆ござれ」と花に嵐の臆病風散り〳〵にこそ別れ行、はる〳〵と、尋て爰へ熊谷が妻の相模は子を思ひ夫思ひの旅姿、陣屋の軒を此處や彼處と尋しが、幕に畳への家の紋、嬉しや此處と内に入、折節家の子堤の軍次立出て、「是は〳〵奥樣か」、「ヲ、軍次そなたも息災そふなマアめでたい〳〵、熊谷殿や小次郎も變る事はないかの、早う逢ひたい逢はせてたも」、「ハア旦那は今日御廟參、小次郎樣は先頃より御前勤め

いで出たる[illegible]の、「ヨイ〳〵、〳〵、〳〵サツサ」。

○どうよく 貪欲「どんよく」の訛。非道。胴慾は當字。

○て、こ、そ てゝ、これは、それは、と言ひ掛ける詞。言を採つて「追つ立て引つ立てこそ行く空も」の文に續ける。

○屋島 讃岐國木田郡屋島町のある地の山で、その形屋根の如きによつていふ。この地は一谷に敗れた平家が籠つた源平の古戰場。

○要害 [illegible]で敵を防ぐに便宜な處。「俗語録」に「在於高險、[illegible]、要害地也」。

○逆茂木 棘木を逆立て垣とし、その木を枝も付けたまゝ、敵の侵入を防ぐもの。

○熊谷櫻 櫻の一種。

○一枝伐らば剪るべし 制札の中の文句。

○虎の尾を踏む 危險を抱くこと。『書經』君牙篇に「心之憂危、若蹈虎尾、渉于春冰」。

○家の子 家人（けにん）。其の家に仕へてゐる家來。

○廟參 [illegible]に參詣したことをいふ。

ておさがりなし、マアノ〵長の御旅路お疲れをお休め」と、挨拶とり〴〵なる所へ、敦盛卿の御母藤の局虎口の難を逃れ來て、倒けつ轉びつ花の陰、陣屋を目がけ走り着き、「跡より追手のかゝる者影を隠して給はれ」と險しき體に驚きて相模は傍へ走り寄り、見るに見交はす互の顔、「マアお前は藤のお局樣ではないか」、「そふいやる其方は相模じやないか、テモ久しや懷かしや」、「おゆかし樣や」と手を取て「マアこなたへ」と伴ひ入、親しき體に心を利かし軍次は勝手へ入にける、相模は軈て手をつかへ「誠に一昔は夢と申スが、大内に御座遊ばす時、勤番の武士佐竹次郎殿と馴初め、御所を拔け出東へ下り、お前樣のお身の上を承はれば、御懷胎のお身ながら平家の御家門、參議經盛樣方へ緣付き給ふとの噂、其折は世盛の平家、御威勢は益々と陰ながら悦びましたに、此度源平の戰、御一門も散々と聞に付、アヽ此藤の方樣は何となされたどふ遊ばしたと、獨り苦にして居りましたに、マア御機嫌なお顔を見て、おめでたやお嬉しや」、「ヲヽ其方も無事でマア嬉しい、懷胎で出やつた時の子は姬御前か男か、息災で育てて居るか」と、ちよつと寄つても女子同士問ふつ問はれつ、年月に、積る言の葉繰返し嬉し涙の種ぞかし、

○虎口　極めて危險の意。「史記」酈食其傳に「欲ニ以ニ齊人ニ強秦一、此所謂探ニ虎口一者也」。

○けはし　「けあし」（氣惡し）の轉語であらう。物凄うて穩かでない。近松作「大經師昔暦」に「やあ助右殿夜中にけはしい、何の用でござる」。

○ゆかし樣　懷〔なつ〕かしの意。「ゆかし」は心往きたしの義。樣はお氣の毒樣などいふ樣に同じ。

○一昔　「源平盛衰記」卷二十に「情ら事の心を案ずるに、二十一年を一昔とす」。十年一昔ともいふ。

○大内に御座遊ばす時　お前樣（藤の局をさす）が大内に御座遊ばされました時に私は。

○懷胎　ここの文は、藤の局が院の寵衰盛を懷胎して平經盛に緣付いたことをいふ。

○參議　宰相ともいひ、禁中に在つて國政を參議し、國治を觀察する役で、諸官中で四位以上で其の才ある人を選任し、大臣につぐ重役である。

○懷胎で出やつた時　擬當、懷胎して御所を拔け出た時の意であつて、小次郎を懷胎してゐたのである。

藤の方涙ぐみ「世の盛衰は是非もなや、其時に産み落したは、無官の大夫敦盛とて、器量發明揃ふた子を、今度の戰に討死させ夫は屋嶋の浪に漂ひ我のみ殘る憂き難儀あさましの身の上」とかこち給へば、「お道理〳〵、以前の御恩も有連合にも語りお身の片附後世の營み、お心任せに致しませう、以前は佐竹次郎と申て、北面同然の武士只今にては、武藏の國の住人私の黨の旗頭、熊谷の次郎直實と人も知つた侍ィ」と聞より御臺は、「ヤア其方の連合の佐竹の次郎、今では熊谷の次郎といふか」、「アイ」、「すりや彼の熊谷の次郎は其方の夫よな。ハアはつ」と胸の氣を靜め、「何と相模、以前大内にて不義顯はれ、佐竹次郎と諸共禁獄させよとの院宣自らが申宥め御所の御門を、夜の内に落してやつたを覺てか」、「アツア其時の御恩、何ゝの忘れませうぞいな」、「ムヽ其恩を忘れずは、助太刀して其方が夫熊谷を自らに討たしてたも」、「ヱヽイそりや又何ゝのお恨で」、「サア最前も話した院の御所のお胤、無官の大夫敦盛を其方が夫、熊谷が討つたはいの」「エヽそりやまお誠でござりますか」「スリヤ其方は何にも知らぬか」「サアはる〳〵と東より今來て今の物語、聞て胸の誠しからず。おつつけ夫が歸

○無官の大夫　貴族の子は五位に叙せられるのであるが、まだ若くて官職なきによつていふ。大夫は「令義解」に「一位已下五位以上、總稱二大夫一」とあるが、轉じて專ら五位の稱となつた。
○北面　院の御所の北面に居て院中を警衛する武士。四位五位を上北面といひ、六位を下北面といふ。
○私の黨の旗頭　熊谷直實の父直貞、武藏國熊谷に住し、十六歳の時白熊を殺したので、鄕閭の者皆これを稱して私黨の旗頭とした。その子直實之を嗣ぐ。
○とむね　或は肚胸の字を當つ。心。
○不義　男女の密通。野合。

り次第。樣子を尋る其間暫らくお控へ下され」と、言葉を盡し理を盡し宥むる折に表より。「梶原平次景高所用有て推參」と呼ばはる聲、「ヤア何梶原とや、見付られてはお身の大事、まづ〳〵此方へ」と御臺の手を取、一間へ伴ふ其中に、堤の軍次立出。「今日は主人直實　志　有て廟參。御用あらば某に仰おかれ下され」と、地に鼻付くれば平次景高。「何熊谷殿は他行とな、ソレ家來共、其石屋の親仁め引立來れ」。「はつ」と答へて科もなき白毫の彌陀六を平次か前に引据ゆれば、「ヤア　鈍　親仁め、おのれ何者に賴まれ、敦盛か石塔は建てたやい、平家は殘らず西海へ追下し、誂ゆべき相手なければ、察する所源氏方の二タ股武士が、賴みしに違は有まい、サア眞直に白狀ひろげ。僞ると鉛の熱湯。脊骨を割つて流し込む」と。おどしかけても正直一遍「テモ扨も御無理な御詮義、先程も申た通り、石塔の誂へ人は敦盛の幽靈。五厘の事は扨置き一厘も手附は取らず。建てると其儘石塔の食逃げせめて人魂でも手附に取たら小提燈の代りに致しませうに、冥途へ責出しは遣られず、ほんの是がそんしやう菩提、有さうの申上願以此功德施一切、此通りでござりまする」と取締めなき、「ア、何おつしやつても糠に釘」

○推參　我より訪ふこと。
○白毫　（既出）
○二股武士　去就の一定せぬ卑怯武士。
○五輪　五輪塔をいふ。（見索引）
○人魂　俗説に人の死ぬ時、その魂魄光を放つて虚空に飛び去るといふ。近松作「曾根崎心中」に「稲妻かそれかあらぬか、ア、怖、今のは何といふものやらん、ヲ、あれこそは人魂よ」。
○責出し　[illegible]
○そんしやう菩提　「損しよう」に「頓證菩提〔とんしようぼだい〕」をいひかく。頓證菩提とは、頓に悟を開き佛道を成就して、佛果を得ること。
○願以此功德云々　淨土宗で讀誦する「願以此功德、平等施一切、同發菩提心、往生安樂國」といふ回向文中の句。「施一切」を「一切此通り」にいひかく。
○糠に釘　何の利目〔ききめ〕も無きをいふ諺。

○わろ　「わらは」（童）の約訛であらう。わつぱ、やつ。人。
○三つ鐵輪　三人が三本足の鐵輪の形に並び坐すること。鼎坐。
○そやつ　御影の石屋の親仁をさす。
○覆　庇護。熊谷が妻に對する不機嫌顏を見た軍次は、熊谷の妻をかばはうとしたのである。

と、軍次が詞に平次は悪智恵、「大方石塔を建てさせたわろも合點〳〵、熊谷戻らば三つ鐵輪の詮議、先其奴めを引立來れ」と一間へ入ば家來共、石屋の親仁を無理遣に引立奥へ連れて行、相模は障子押開き、「日も早西に傾きしに夫の歸りの遲さよ」と、待つ間程なく、熊谷の次郎直實、花の盛の敦盛を討つて無常を悟りしか、流石に猛き武士も、物の哀れを今ぞ知る、思ひを胸に立歸り妻の相模を尻目にかけて座に直れば、軍次はやがて覆になり、「先達つて平次景高殿、何か詮議の筋有とて御影の石屋を引連れ御出有、奥の一間に御待」と、委細を述ぶれば「ムウ詮議とは何事ならん、ヤいや其方は一獻を催し梶原殿をもてなし申せ、サア早く往け〳〵、ハテ扨何を猶豫する」と、叱り散され是非なくも、相模に顔を見あはして、心を殘し入にけり、跡見送りて、熊谷は、「コリヤ〳〵女房、其方は此處へ何しに來た、國許出立の節、陣中へは便も無用と、堅く言付置いたるに詞を背くといひ剩へ女の身で陣中へ來る事、不屆至極の女め」と、不興の體に相模はおど〳〵、「其お叱りを存じながら、どふかかうかと案じるは小次郎が初陣、一里行たら樣子が知れうか、五里來たら便があろかと、七里歩み、十

里歩み、百里餘の道をつゐ、都迄ホヽヽヽヲヽ辛氣、上つて聞けば一の谷とやらで今合戰の最中と、とり／＼の噂故子に引かされるは親の因果、御料簡下さりませ、「マア此小次郎は息災で居ますか」と問へば熊谷詞を荒らげ「戰場へ赴くからは命は無き物、堅固を尋ぬる未練な性根、若し討死したら何とする」、「いゝゑいな小次郎が初陣に、好き大將と引つ組んで討死でも致したら、嬉いことでござんしよ」と夫の心に從ひし健氣な詞に顔色直し、「ホヽまづ小次郎が手柄といふは、平山の武者所と爭ひ拔驅けの功名、軍門に駈入ての働き、手疵少々負ふたれ共、末代迄家の譽」、「ヱヽして其手疵は、急所ではござりませぬか」、「ソレまだ手疵を悔む顔付き、若し急所なら悲しいか」、「イヤ何のいな」、掠疵でも負ふ程の働きは、出來したと思ふて嬉しさの餘りお尋、其時お前も小次郎と一所に御出なされたか」、「ホウ危しと見るより軍門に駈入、小次郎を無理に引つ立小脇に引ん抱き、我が陣屋へ連れ歸り某は其軍に搦手の大將無官の大夫敦盛の首取つたり」と話に扨はと驚く相模、後に聞居る御臺所我が子の敵とありあふ刀、「熊谷やらぬ」と拔く所鐙摑んで、「ヤア敵呼ばはり何やつ」と引寄するを女房取附

○辛氣　心のくさ／＼として浮き立たぬこと。じれつたきこと。

○一谷　鐵拐・鉢伏の兩山海岸に迫り、其の間僅に一路が通じて居る所。義經の軍が、背面から平家の陣を攻めて潰走させた古戰場である。

○平山の武者所　平山武者所季重。ここにいへる事は本曲第二に見ゆ。

○拔驅の功名　人を出し拔き、おのれ一人功名を立てるをいふ。

○搦手　追手に對する語。敵の後面。城砦の裏門。

○聊爾　そこつ。

○うろ〳〵涙　途方に暮れ、涙の出て目のうるむこと。

○鎬を削る　刀を烈しく打合ふをいふ。（見索引）

○敦盛卿　其の實は我が子熊谷小次郎直家である。[illegible]

○六日　元暦元年二月六日。

○なそ　勿れ。（見索引）

○打物　太刀・長刀・鑓など打ち鍛へて作るよりいふ。ここの文、波の打つにいひかく。

き、「ア、これ〳〵聊爾なされな、彼方は藤のお局様」と、聞て直實びつくりし「ハア思ひがけなき御對面」と飛退き敬ひ奉れば、「コリヤ熊谷戰の習ひとは言ながら、年端も行かぬ若武者を、能うむごたらしう首討つたなアサア約束じや相模、助太刀して夫を討たせ。何と〳〵」と刀押つ取り迫付給へば、「アイあいあい」と返事も胸に迫りながら、「エ、これ直實殿、敦盛樣は院のお胤と知りながら、どふ心得て討たしやんした。樣子があらふ其譯を」と、云ふもせつなきうろ〳〵涙、「ア、愚々、此度の戰、敵と目指すは安徳天皇。それに從ふ平家の一門。敦盛は扨置き、誰彼と鎬を削るに容赦がならふか、イヤナフ藤の御方、戰場の義は是非なしと御諦め下さるべし、其日の戰の概略」と、敦盛卿を討つたる次第。物語らんと座を構へ「扨も去んぬる六日の夜、早東雲と明くる頃、一二を爭ひ拔駈けの、平山・熊谷討取れと切て出たる平家の軍勢。中に一際勝れし緋縅さしもの平山あしらひかね、濱邊を指して逃出す」、「ハテ健氣なる若武者や」、「逃ぐる敵に目な懸けそ、熊谷是に控へたり、返せ、戻せ、ヲ、イ、おいと、扇を持つて打招けば、駒の頭を立直し、波の打物一打二打、いでや組まんと馬上な

○いざよふ　「ためらふ」に「十六」をかけていふ。
○年ばい　「としばへ」（年延）の訛。年配などの字が當てておる。としごろ。
○上帶　鎧の腰の邊に纏ひ附ける帶。
○落ち給へ　逃げ給へ。
○波濤へ赴き給ひ　海上遙かに落ちのび給ひ。
○雲井　ここの文は、昨日は禁闕に奉仕し、今日は流浪の身こいふ意に、大空をいひかく。

がらむんづと組み、兩馬が間にどうど落ち」。「ヤア〳〵なんと其若武者を組敷いてか」。「されば御顔を能く見奉れば、鐵漿黑々と細眉に、年はいざよふ我子の年ばい、定めて兩親ましまさん。其歎はいか計りと、子を、持たる身の思ひの餘り、上帶取て引つ立塵打拂ひ早落ち給へ」。「と勸めさしやんしたか、そんなら討ち奉るお心ではなかつたの」。「ヲヽ早落ち給へと勸むれど、イヤ一旦敵に組敷かれ何面目に存命へん、早首取れよ熊谷」に「ナニ首取れと云ふたかいの、健氣な事を云ふたなふ」。「サア其仰にいとゞ猶涙は胸にせきのぼし、まつ此通りに我が子の小次郎、敵に組れて命や捨てん、あさましきは武士の習ひと太刀も、拔けかねしに、逃去つたる平山が、後の山より聲高く、熊谷こそ敦盛を組敷きながら助けるは、二心に極まりしと呼ばはる聲々、ヱヽ是非もなや、仰置かるゝ事あらば、言ひ傳へ參らせんと申上れば、御涙をうかめ給ひ、父は波濤へ赴き給ひ心に懸かるは母人の御事、昨日に變る雲井の空定めなき世の中をいかゞ過行給ふらん、未來の迷ひ、是一つ熊谷賴むの御一言、是非に及ばず御首を」と、話す中より藤の局「ナウさ程体をば思ふなら經盛殿の詞につき、なぜ都へは身を隱さず、一の谷へは

○鎧ふ　鎧を著る。「保元物語」新院御遷幸の條に「甲冑を鎧ひたる兵」。

○入相　日暮時。入相の鐘とは、たそがれに撞く鐘の聲をいふ。ここの文は、入るに入相をいひかく。

○不便　たよりないこと。いたはしいこと。（見索引）

○今は　臨終。（見索引）

○陀羅尼　[illegible] 佛菩薩等の說かれた眞言で、萬德を含藏し [illegible] とある。

向ひしぞ、健氣に鎧ふた其時は、母も共々悦んで、勸めて遣りし可愛やな、覺悟の上も今更に。胸も迫りて悲しや」と口說き、歎かせ給ふにぞ御尤とは思へ共相模は態と聲勵まし、「イヤ申お局樣御一門殘らず屋嶋の浦へ落行給ふ中に一人踏留まり、討死なされた敦盛樣。數萬騎に勝れた高名、但し逃延び身を隱し、人の笑を受け給ふが、お前の氣では嬉しいか、御未練な御卑怯な」と諫めに熊谷「ヲヲ出來した〳〵。コリヤ女房、御臺所此處に御座あつてはお爲にならぬ、片時も早く何方へも御供せよ、サア〳〵早く行け〳〵。我も敦盛の御首實檢に供へん、軍次は居らぬか早參れ」と、呼ばはる聲と諸共に一ト間へ、ここは入相の、鐘は無常の、時を打つ、陣屋陣屋の燈火にいとゞ、悲しさ藤の方、「アヽ思ひ出せば不便やな、今はの際迄も肌身放さず持たるはコレ此青葉の笛、我と我が身の石塔を建てゝ貰ふた價にと、渡し置いた此笛の我が手に入しも親子の緣。魂魄此世に在るならば何故母には目見へぬぞ、聞へぬ我子や懷かしの此笛や」と、肌に附け身に添へて盡せぬ思ひ遣瀨なき。「コレ申其笛が好いお形見。經陀羅尼より笛の音を手向けるが直に追善、敦盛樣のお聲をば聞と思ふて遊せ」と、勸めに從ひ藤の方

涙に、濕す、歌口も、顫ふて音をぞ、澄しける、親子の緣の、ともづなにや、障子に映る陰影の姿は確、敦盛卿、藤の局は一目見るより、「ヤレ懷かしの我子や」と、駈寄り給ふを相模は抱止め、「香の煙に姿を現し、實方は死して再び都へ歸りしも、一念のなす所。有まい事にはあらね共訝しき障子の影。殊に親子は一世と申せば、御對面遊さば御姿は消失せん」。「イヤなふ四十九日が其間魂中有に迷ふと聞く、せめては逢ふて一言を」と振放し〳〵障子ぐはらりと明給へば、姿は見へず緋縅の鎧ばかりぞ殘りけるはつと計に藤の方、相模も共に取付いて、「扨は鎧の影なるか、戀しと迷ふ心から、お姿と見へけるか」と、共に焦れて正體も泣き口說く、こそ哀れなれ、時刻移ると次郎直實首桶携へ、立出れば、相模は夫の袂を控へ、「コレ申是か親子御一生のお別れせめて御首になり共御暇乞を」と願ふにぞ、藤の局も涙ながら「ノフ熊谷、其方も子の有身でないか、野山の猛き獸さへ子を悲しまぬはなき物を、親の思ひを辨へて情に一目見せてたも」と、縋り歎かせ給へ共、「イヤ實檢に供へぬ内内見は叶はぬ」と、押退け突退け行く所に、「ヤア熊谷暫し〳〵、敦盛の首持參に及ばず、義經是にて見やう

○歌口　口をあてて吹く笛の孔。（見索引）
○ともづな　纜。きづな。互つに忍びの情愛、
○香の煙に姿を現はし　漢武帝の后李夫人死して、反魂香の煙の中に姿を現じたことは、「白氏文集」、謡曲「花筐」などにも見ゆ。
○實方は死して再び都へ歸り　藤原實方陸奥守に左遷せられ、長徳四年十二月任所に卒し、魂魄化して雀となり、内裏に歸つたことが「十訓抄」、「本朝神社考」などに見ゆ。
○親子は一世　親子の縁はこの世限り。「保元物語」に「親子は一世の契と申せども」と
○中有　中陰ともいふ。生死二道の中間、死して四十九日間をいふ。この間に、前世における善悪の業因によつて、來世しようとしてゐる假現迷道の身である。
○「見ようずるわ　見ようとするよ。見ればそれでよいとの意。

するは」と、一間をさつと押開き立出給ふ御大將、ハヽヽヽはつと次郎直實、思ひ寄らねば女房も藤の局も諸共にあきれ、ながらに平伏す、義經席に着き給ひ。「ヤア直實首實檢延引といひ。軍中にて暇を願ふ汝が心底訝しく竊に來りて最前より、始終の樣子は奥にて聞く、急ぎ敦盛の首實檢せん」と、仰を聞くより熊谷は「はつ」と答へ走り出、若木の櫻に立置きし制札引拔き、恐れげなく義經の御前に差置き、「先つ頃堀川の御所にて。六彌太には忠度の陣所へと花に短冊。此熊谷には敦盛の首取よとて、辨慶執筆の此制札、即ち札の表の如く御諚に任せ、敦盛の首討取つたり、御實檢下さるべし」と蓋を取ば「ヤア其首は」と駈寄る女房引寄て息の根止め、御臺は我が子と心も空、立寄り給へば首を覆ひ、「コレ申、實檢に供へし後は。お目に懸ける此首、お騷有な」と熊谷が諫に流石はしたなう、寄るも寄られず悲しさの千々に碎くる物思ひ次郎直實謹んで、「敦盛卿は院の御胤。此花江南の所無は。即ち南面の嫩、一枝を伐らば一指を剪べし、花によそへし制札の表、察し申て討つたる此首。御賢慮に叶ひしか。但し直實誤りしか御批判いかに」と言上す、義經欣然と實檢ましまし、「ホヽ、花を惜

○あきれ　驚いて恐縮するをいふ。
○御諚　御仰せ。貴人の命をいふ敬語。諚は定言の合字。
○息の根止む　呼吸又は聲音を息根といふ。聲を出さぬやうにしたのである。
⦿はしたなう　輕々しう（身分柄に對して）。「はしたなう」の「なう」は甚しいの意を示す一種の接尾語。
○此花江南の所無　⦿「一枝（ひとえだ）伐らば云々」を見よ。
○南面の嫩　外題名これより出づ。「南面」は、天子は南面すといふによつたもので、「南面の嫩」とは院の御胤の意。ここの文意は、院の御胤なる一子を斬るなら、それよりも先づ我が一子を斬るべしとの意をきかせて、かくいうた。即ち敦盛の首だというて、其の實は敦盛の首は斬らないで、まづ我が子小次郎の首を斬つたのである。

〽死兒に對する母性愛を寫して妙。

○サイナア　「さればいなあ」の略。

○死になされたか　死んだは我が子なれど、敦盛の事にしていふによつて敬語を用ひた。今まで[illegible]、[illegible]は、思ふ事の[illegible]に[illegible]れる身と變つて、[illegible]い[illegible]を見せて、[illegible]入深い。

む義經が心を察し。ア能くも討つたりな。敦盛に紛れなき其首。ソレ緣故の人も有べし。見せて名殘を惜ませよ」と。仰を聞より「コリヤ女房。敦盛の御首。藤の方へお目に懸けよ」。「アイあい」と計女房は。敢なき首を手に取上。見るも涙に塞りて。變る我子の死顏に。胸は咳上身も顫はれ。持たる首の搖ぐのを。頷くやうに思はれて。門出の時に振返りにつと笑ふた面差があると思へば可愛さ不便さ。聲さへ咽に。詰らせて。「申藤の方樣。御歎有た敦盛樣の此首」。「ヒヤア是は」。「サイナア申。これ能う御覽遊してお恨晴し能い首じやと。褒めておやりなされて下さりませ。申此首はな。私かお館で熊谷殿と忍逢ひ懷胎ながら東へ下り産落したはナ。コレナ。此敦盛樣其節お前も御懷胎誕生有し其お子が無官の大夫樣。兩方ながらお腹に持ち國を隔てて十六年。音信不通の主從がお役に立たも因緣かや。せめて最期は潔う死になされたか」と怨めしげに問へど夫は瞬きも詮方涙御前を恐れ。餘所に言ひなす詞さへ。泣く音血を吐く思ひなり。藤の局は御聲曇り。「ナフ相模。今の今迄我が子ぞと。思ひの外な熊谷の情。其方は嘸や悲しかろ。斯うした事とは露知らず。敵を取らふの切らふのと言ふた詞が恥か

しい、我子の爲には命の親、忝い」と手を合せ、「此首の生世の中。相見ぬ事の悔しや」と共に、歎かせ給ひしが、「是に就訝しきは此濱の石塔。敦盛の幽靈が建てさせたとの噂といひ。祕藏せし青葉の笛石屋の娘が貰ひしとて、我手に入、最前其笛吹いた時あの障子に映りし影は確我子と思ひしが、詞も交さず消失せしは、「アいや其笛の音を聞て駈出し敦盛の幽靈、人目有と引留め、障子越の面影は義經が志」と、聞て御臺は我子の無事、悟りながらも箒木の有とは見へて隔てられ父も涙にくれ給ふ。折節風に誘れて耳を突拔く法螺貝の音喧すく、聞ゆれば、義經は勇み立「ヤア／＼熊谷。着到知らせの法螺の音出陣の用意／＼」と仰に直實畏り急ぎ一間に入にけり最前より樣子を聞居る梶原平次一間の内より躍り出、「斯くあらんと思ひし故、石屋めを詮議に事寄せ窺ふ所、義經・熊谷心を合せ敦盛を助けし段々鎌倉へ注進」と言捨て駈出す後より、はつしと打たる手裏劍は、骨を貫く鋼鐵の石鑿「うん」と計に息絶ゆる。「スハ何者」といふ中に、立出る石屋の親仁、「ハヽア お前方の邪魔になる木端を捨て上げました扨幽靈の御講釋承つて先安堵もふお暇」と立行を「ヤア待親仁、コリヤ彌平兵衞宗

○生世　在生。世に生きてゐる時。「生世の中」は在生中の意。

○石屋の娘　小雪。

・箒木のありとは見えて隔てられ　「新古今集」一一・戀一「園原や伏屋に生ふる箒木の、ありとは見えて逢はぬ君かな」に據つた。

○着到　陣に馳せ着いた者を順に帳面に記すこと。「平家物語」に「着到書付の日に、年號月日、何之國何者到着と書きて、其數幾千騎幾百騎、其數幾十騎と書也」

○手裏劍　手の裏（うら）に持つて敵に投げかける小さい劍。

○木端　木の切れ端。切り落された木の屑のやうに取るに足らぬ武士。

淸待て」と義經の詞に喫驚、はつと思へどそらさぬ顏、「ハ、やれ〳〵とつけもない御影の里に隱れの(無)名白毫の彌陀六といふ男でゑす」、「ハヽヽヽ、まことや諺にも、至つて憎いと悲しいと嬉しいとの此三つは人間一生忘れずといふ、其昔母常盤の懷に抱かれ、伏見の里にて雪に凍へしを、汝が情をもつて親子四人が助かりし嬉しさ、其時は我三歳なれ共面影は目先に殘り、見覺有り眉間の黑子隱しても隱されまじ重盛卒去の後は行方知れずと聞しが、ハテ堅固で居たな滿足や」と、聞より彌陀六つか〳〵と立寄り、義經の顏穴の明く程打眺め、「テモ恐しき眼力じやよな、老子は生れながらに聰く、莊子は三つにして人相を知ると聞しが、斯く彌平兵衛宗淸と見られた上は、ヱヽ義經殿、其時此方を見遁さずば、今平家の立籠る鐵枴が峯鵯越を攻落す大將は有まい物、又池殿と言合せ、賴朝を助けずば平家は今に榮へんもの、ヱヽ宗淸が一生の不覺、是に付ても小松殿御臨終の折柄、平家の運命末危し、汝武門を遁れ身を隱し、一門の跡弔へと、唐土育王山へ祠堂金と僞り三千兩の黄金と、忘形見の姬君一人預り、御影の里へ身退き、平家の一門先立ち給ふ御方々の石碑、播州一國那智

○そらさぬ顏　人に悟られぬ顏。
○とつけもない　取附も無き義。何の緣もない。途方もない。
○白毫　（既出）
○えす　ごはす、ゑえす、えす、と轉訛した語。ござる。ござります。
○常盤の懷　助かりし　「伏見常盤」、近松作「源氏烏帽子折」などに見えて有名な話である。
○親子四人　常盤・今若・乙若・牛若。
○老子は生れながらに聰く　老子は李耳又は重耳といひ、老聃と稱す。周時代の人。母の胎内にあること八十一年、生れて聰明であつたといふ。
○莊子　莊周といひ、春秋戰國時代の人。老子と並稱して道家の祖と爲す。
○鐵枴が峯　攝津國武庫郡六甲山脈、鐵拐嶽の峯。一谷の上に當る。
○鵯越　鐵枴が峯中にあつて、義經が搦手から[illegible]
○池殿　[illegible]宗淸が池殿に申[illegible]「平治物語」にも見ゆ。
○不覺　失策。
○小松殿　平重盛をいひ、小松谷の邸に居たによつていふ。[illegible]
○育王山　「平家物語」には「いくわうざん」と讀[illegible]

進して菩提を弔はしめた話は、「源平盛衰記」、「比古婆衣」、近松作「孕常盤」などにも見ゆ。
○祠堂金　祖先代々の供養の爲に菩提寺に寄附する金錢。
○姫君　小宰。
○那智　紀州那智權現
○天命歸す　天の人に賦與する所のものの歸著する所をいふ。卽ち運命の定まるをいふ。
○獅子身中の蟲　恩を受けながら其者に仇することに譬ふ。「仁王經」に「乃是住持護二三寶一者、還自滅二破三寶一、如二獅子身中蟲自食二獅子一、非二外道一也」。
○大荒目　大荒目の鎧をいふ。普通の鎧は割小札で、札の小ざねを綴れども、大荒目は割小札にせずして横に長くし、その小札を二三枚も重ね、鐵などを交へて札厚く、緘緒も太くして粗く綴つた鎧。[illegible]いかなる大力の者が着る。
○鍬形　[illegible]
○したが　[illegible]

高野近國他國に建置きし施主の知れぬ石塔は、皆是彌平兵衛宗清が涙の種と御存じ知らずや、今度敦盛の石塔誂に見へし時も、御幼少にて御別れ申せし故御顔は見覺へね共、心得ぬ風俗は、ヒヤ世を忍ぶ平家の御公達ならんと思ふより心よく請合しが、扨は命に代りし小次郎が菩提の爲、此濱の石塔は敦盛の志にて有けるか、ヘツヱいかに※天命歸すればとて、我助けし賴朝。義經此兩人の軍配にて、平家の一門御ン公達、一時に亡ぶるとは、ハア、是非もなき運命やな。平家の爲に※獅子身中の蟲とは我が事嘸御一門陪臣の魂魄我を恨みんあさましや」と、或は悔み。或は怒り涙は、瀧を爭へり、元來聰き大將義經。「ヤアヽ熊谷障子の内の鎧櫃、ソレ此方へ」、「はつ」と答へて次郎直實、出陣の出立と好む所の※大荒目※鍬形の兜を着し、抱へ出たる鎧櫃、御目通りに直し置。「コリヤ親仁、其方が大切に育つる娘へ此鎧櫃屆けてくれよ、コリヤ彌陀六」、「ヤア彌陀六とは、フウ宗清なれば平家の餘類、源氏の大將が賴むべき筋は、ム、面白い。彌陀六めに賴まれて進ぜましよ、※したが娘へは不相應な下され物。マア内は何ンでござります。改めて見ませう」と、蓋押ン明くれば敦盛卿。「ノウ懷しや」と藤の方、駈寄り給へ

○ヤア…ない　直實の詞。
○蟲が納まつた　腹立ちがなほつた。この所は彌陀六の詞。
○ナウ…剪つて　義經の詞。
○平山を追つ掛け出たを　本曲第二に「無官の大夫敦盛は炎かに六具をかため、駒を進めて乗出し、平山を見るよりも、まつしぐらに打寄せ給へば」とある。この敦盛は其の實は小次郎であつた。即ち小次郎が敦盛になりすました行爲であつたのである。それは第二の樣子を見よ。
○もぎどふ　菩提道、涅槃道、無常道などの字が當ててある。蓋し非道の音便か。非道。野暮。不愛想。[illegible]
○切拂うたる　髻髪を切拂うてゐる。

ば蓋びつしやり、「※ヤア此内には何にもない」、「ヲヽ何もない〳〵、ホヽ是でちつと※蟲が納まつた」、「※ナウ直實、貴殿への御禮はコレ〳〵此制札、一ッ枝を伐らば一ッ指を剪つて」、「ヘツヱ忝い」と言ふに相模は夫に向ひ、「我子の死んだも忠義と聞けばもふ諦めて居ながらも、源平と分れし中、どふしてまあ敦盛樣と小次郎を取替へやうが」、「ハテ最前も話した通り、手負と僞り、無理に小脇に引つ挾み連れ歸つたが敦盛卿。又※平山を追つ掛け出たを呼返して、首討つたのが小次郎さ、知れた事を」と鋭なる、詰に相模は咽び入り、「エヽ胴慾な熊谷殿、此方一人の子かいなふ、逢はふ〳〵と樂んで百里二百里來たものを、とつくりと譯も言はず、首討つたのが小次郎さ、知れた事をと※もぎどふに、叱る計が手柄でも、ござんすまい」と聲を揚げ泣き口說く、ここ道理なれ、心を汲んで御大將勇みを付んと「ヤア〳〵熊谷、西國出陣時移る用意いかに」と仰に直實、恐れながら先達て願上げし、暇の一件かくの通り」と兜を取て、※切拂ふたる有髮の僧、義經も感心有「ホヽさもありなん、それ武士の高名譽を望むも、子孫に傳へん家の面目、其傳ふべき子を先立て、戰に立たん望は、ホフ尤、コリヤ熊谷、願に任せ暇を得

○上帶　鎧の上に締める帶。（既出）
○西方　極樂淨土は娑婆世界の西方十萬億土にある。
○九品　極樂世界の果相を說いて上中下の三部に分ち、その各部にまた上中下あつて、總て九品あることが「觀無量壽經」に見ゆ。
○一念、無量罪　この文句は「平家物語」、諸曲「[illegible]」などにも見ゆ。一心に彌陀佛を念ずれば、いかに多くの造作の罪業も忽ち消滅するとの意。
○柊（ひひらぎ）　木犀科、葉厚く大形、葉の端は針狀をなす。其の葉の刺々しい直實に喩へ、日影を菩提心に喩へ、[illegible]に喩ふ。
○蓮蕚　[illegible]に附ける紐。近松作「日本西王母」に「この蓮蕚背負うて御歸り候へと、連蕚掛けてしつかと負はせ」。
○不隨者　世捨人の身には何も附隨する物なく單身といふ。「大[illegible]」[illegible]
○修羅道　戰場のことに當てていふ。（見索引）
○黑谷　京都市左京區岡崎黑谷町の金戒光明寺をいふ。[illegible]法然上人、比叡山黑谷より[illegible]に[illegible]を結んだ。
○法然（ほふねん）　淨土宗の開祖。[illegible]といひ、建曆二年正月二十五日入寂、年八十。明治四十四年、圓光大師の[illegible]せらる。

さするぞよ、汝堅固に出家を遂げ、父義朝や、母常盤の回向も賴む」と親しき御諚、「ハ、ア有難し」と立上り、上帶を引解き鎧を脫げば袈裟白無垢、相模「是は」と取付くを、「ヤア何驚く女房、大將の御情にて戰半に願の通り御暇を賜はりし我本懷、熊谷が向ふは西方彌陀の國、忰小次郎が拔駈したる九品蓮臺、一つ蓮の緣を結び、今より我名も蓮生と改めん、一念彌陀佛即滅無量罪、十六年も一昔、ア夢で有たなあ」と、ほろりと零す淚の露、柊に置く初雪の日影に溶ける風情なり、「ヲ、そふじや／＼、我子の罪障消滅の加勢はこれ」と切たる黑髮、詞はなくて御大將、藤の局も諸共に御淚にぞ暮れ給ふ、長居は無益と彌陀六は、鎧櫃に蓮蕚を掛けた思案の締括り、「コレ／＼義經殿、若し又敦盛生返り、平家の殘黨驅集め、恩を仇にて返さばいかに」、「ヲ、それこそは義經や兄賴朝が助かりて仇を報ひし其如く天運次第恨を受けん」、げに其時は此熊谷、浮世を捨てて不隨者と、源平兩家に緣は無し互に爭ふ修羅道の、苦患を助くる回向の役」、「此彌陀六は折を得て、又宗清と心の還俗」、「我は心も墨染に黑谷の法然を師と賴み、教を受けんいざさらば」、君にも益々御安泰お暇申、「

と夫婦連れ石屋は藤のお局を伴ひ出る陣屋の軒。「御縁もあらば」と女子同士、「命があらば」と男同士、「堅固で暮せ」の御上意に有難涙名殘の涙。又思ひ出す小次郎が、首を手づから御大將。此須磨寺に取納め末世末代敦盛と、其名は朽ちぬ黄金札。武藏坊が制札も花を惜めと花よりも、惜む子を捨て武士を捨て、住所さへ定めなき有爲、轉變の世の中やと、互に見合す顏と顏、「さらば、〳〵」、「おさらば」の聲も涙にかきくもり別れて、こそは出で、行

○須磨寺　兵庫縣武庫郡須磨の福祥寺（眞言宗）をいふ。
○札　見出引
○住所さへ定めなき　沙門は居所をさだめず、諸方を遍歴し、雲水の身となるによつていふ。
○有爲轉變　有爲とは諸種の因縁和合して作爲されたる諸現象をいふ。この世は因縁和合によつて假に成れるものなれば、展轉變遷するによつて之を有爲轉變の世といふ。

第四（道行花の追風」鶴岡八幡宮前の並木中」六彌太の館）

登場人物の主な者

菊の前（藤原俊成の娘。忠度の愛人）　岡部六彌太忠澄（源氏の臣）　林（後藤兵衛守長の妻。菊の前の乳母）
菅原（九條方の女。林の娘）　龍井兵太（鎌倉警固の武士）　樂人齋（實は太五平。林の子）

梗概

菊の前は、愛人平忠度が生死の程も明らかならねば、林と共に連立つて津の國若原の里を出で、武庫川・昆陽野・芥川・伏見を過ぎ、近江路より伊勢・尾張・濱松・大磯・藤澤を經て鎌倉に下る

六彌太の馴染み九條町の遊女菅原は、六彌太を慕うて鎌倉に下り、鶴岡の武士醒井兵太に咎められたが、巧みに遁れて愛人の館に著く。

菊の前・林は鶴岡八幡宮前の並木中で、これも兵太に咎められてゐる所を、浪人が通りかゝつて之を助け、忠度は六彌太に殺された事を語り、その敵の館に行く道を教へて去る。

菊の前は愛人の討死を聞いて悲歎に暮れながら、其の敵を討たうとして遊女に變裝し、林と共に六彌太の館に入る。そして鶴岡の社前で己等を助けた浪人が、即ち六彌太であるので驚いたが、彼等の内輪口論によつて、忠度を斬つたのは同家に居る樂人齋である事を知つて之を斬る。然るに其の樂人齋は林の子太五平の替名であり、又遊女菅原も林の娘であることが知れ、意外の感に打たれる。

かくて後菅原は兄妹の緣を切つて六彌太の妻となり、菊の前は六彌太から忠度の詠歌、「行暮れて木の下陰を宿とせば、花や今宵の主ならまし」を入れた錦の袋を貰ひ、林を伴うて感慨深く別れる。

第五（大內の場。平山陣所）

登場人物の主な者

源　　賴　　朝（征夷大將軍）
平　　時　　忠（大納言）
岡部六彌太忠澄（賴朝の臣）
源九郎義經（賴朝の弟）
平山武者所末重（源氏の叛臣）
醒　井　兵　　太（源氏の陪臣）
番　場　忠　太（源氏の陪臣）
熊　谷　蓮　生（直實の法名）

梗概

源賴朝をはじめとして大小名大内に相詰める。大納言平時忠は賴朝に、義經が天下を倂呑する志を抱くと讒して、六彌太と口論に及ぶ。賴朝は旣に時忠の奸佞を知つてゐたので、義經と謀つて時忠が所持する十握の御劒を奪ひ、六彌太に命じて時忠一味の逆臣平山武者所末重を討伐させる。

六彌太乃ち末重の扇谷の陣所を襲うて醒井・番場を斬殺し、末重を捕へて首を刎ねる。折節熊谷蓮生法師來り、義經に請うて時忠を預り、「極樂にも剛の者とや思ふらん、西に向ひて後見せねば」と、詠歌を殘して暇を告げる。其の後賴朝・義經は士卒を引率し、闕下に伏奏すべく神器を守護して都に上る。

武田信玄
長尾謙信

本朝廿四孝

解題

明和三年正月十四日から竹本座に上演され、作者は近松半二・三好松洛・竹田因幡・竹田小出・竹田平七・竹本三郎兵衛であるが、主として半二の指導によつたものである。

本曲は五段に分れ、就中第四の切「十種香の段」が最も名高い。

作者

近松半二は穂積以貫の子。豪放の氣質を具へて自信力強く、青年時代は遊蕩に過したが、淨瑠璃に趣味を持つて近松門左衛門に私淑し、竹田出雲の門に學び、寶暦元年十月竹本座に上演された「役行者大峯櫻」に初めて他の作者と共に名を列し、その後淨瑠璃作者として推敲の功を積むこと三十三年間、五十餘篇に筆を揮つた。その多くは他の作者と共にしたもので、殊に有名な物に「奥州安達原」「本朝廿四孝」「關取千兩幟」「近江源氏先陣館」「妹背山婦女庭訓」「新版歌祭文」「伊賀越道中雙六」などがあつて、何れも脚色・結構・變化の巧妙を得てゐる。晩年山科に閑居し、天明三年二月歿した。享年五十九。

三好松洛の傳は「夏祭浪花鑑」の所に述べた。

竹本三郎兵衛は人形遣吉田三郎兵衛（二代目）の淨瑠璃作者名であつて、吉田文三郎の子。初め吉田文吾と稱して竹本座に勤め、寶暦九年九月から吉田三郎兵衛と改名し、また竹本三郎兵衛ともいうた。彼が他の者と共に作つた有名な物に「奥州安達原」「本朝廿四孝」「太平記忠臣講釋」「關取千兩幟」などがある。「艶容女舞衣」（安永元年十二月上演）は彼が名を列ねてゐる最後の名作である。歿年詳かでない。

出處

是までに甲越の戰を題材とした戯曲の中で、最も優秀なものに近松門左衛門作の「信州川中島合戰」がある。本曲はそれに基いて技巧を凝らしたものである。

諏訪明神には上宮と下宮とある。上宮は上諏訪にあつて建御名方神を祀り、下宮は下諏訪にあつて八阪刀賣命（建御名方神の妃）を祀り、現今共に官幣大社に列し、信州で最も名高い神社である。「古事記」に、天照大御神が建御雷命を御使として、大國主命にその領土を奉るやう申入れられた時、大國主命はこれをその御子建御名方神に諮られたれば、「建御名方神千引石擎手末而來言、誰來我國而忍忍如此物言、然欲爲力競云々」と見えてゐる。本曲第二の口にある力石のことは、蓋しこれに由來するものであらう。

また第三の口にある桔梗が原が古戰場であることは、天文二十二年信玄が鹽尻峠を越えて、小笠原長時の軍と桔梗が原に戰つて之を敗つたことなどがあるに據つたものである。

主要人物の略傳

武田晴信は甲斐・信濃の領主、信玄と號す。軍略に長じ上杉謙信と川中島に戰ふ。天正元年四月十二日歿す。年五十三。

武田勝頼は信玄の第三子。天正十年三月織田信長・徳川家康の聯合軍と戰つて敗れ、天目山で自刄した。年三十七。

長尾謙信は越後の城主。本名景虎。後上杉氏を冒し、薙髪して謙信と號す。甲越の戰結んで解けず、川中島で信玄と一騎打の戰をなす。天正六年三月十三日歿す。年四十九。謙信子なし、景勝養子となつて後を嗣いだ。

上杉景勝は謙信の養子。天正中織田信長と戰ひ、後秀吉に屬し、關ケ原の役に石田三成に黨した爲に、會津を削られて米澤に徙る。大阪冬の陣に戰功を立て、元和九年三月薨ず。年六十九。

山本勘助は本名晴幸。勝田號足。武田信玄の軍師となり、剃髪して道鬼と號す。三河國寶飯郡牛久保の人。智謀あり。永祿四年謙信の軍と川中島に戰ひ、敵中に突撃して死す。年六十九。

足利義晴は大永元年足利十二代將軍となり、天文十五年細川晴元の亂より幕府の威令行はれず。義晴憂悶遂に病となり、十九年五月四日薨ず。年四十。

直江山城之助種綱は直江山城守兼續である。智謀すぐれて謙信の重臣となる。大阪の陣に東軍に屬して戰功を立て、晩年文事を娛しみ、元和五年十二月十九日歿す。年六十。

村上義清は信濃葛尾（埴科郡坂城）の城主。左衞門佐に任ず。屢ゝ武田信玄と戰ひ、遂に敗れて上杉謙信に屬し、信玄と川中島に戰ふ。元龜四年正月病歿す。年七十三。

八重垣姬は近松作の「信州川中島合戰」に衞門姬に作り、長尾謙信の女で、信州諏訪明神に參詣し、武田勝賴に逢うて相思の仲となり、村上義清に横戀慕されたが、甲越の戰解けるに及んで、勝賴と婚儀を擧げたことになつてゐる。

影響

本曲が初めて大阪の竹本座に上演された時、その第四は殊に好評を博して大入であつた。又歌舞伎では明和二年五月十六日から大阪の中座に初めて上演され、その後操にも歌舞伎にも屢ゝ上演されて、我が士道の精神と、勸善懲惡とを見せ、今も猶生命を保つてゐる。

第一（口、室町御殿。中、誓願寺。切、室町奥御殿）

登場人物の主な者

足利義晴（足利十二代將軍）　手弱女御前（義晴の奥方）　賤の方（義晴の妾）

直江山城之助（景勝の重臣）　八つ橋（賤の方の侍女）　北條相模守氏時（相州太守）

村上左衞門義清（氏時の重臣）　長尾三郎景勝（謙信の嫡子）　井上新左衞門（相模柿子島の生れ、浪人。其の實齋藤道三である）

長尾入道謙信（越後城主）　武田晴信（法名信玄）（甲斐城主）　横田兵内（氏時の臣）

梗概

足利將軍義晴が左大臣に任官した初春の祝に、諸大名が將軍の御殿に參集した。長尾謙信は武田晴信から法性の兜（諏訪明神から武田家へ夢中に賜はる。明神の使はしめ八百八狐がこの兜を守護し、神通力が加はつてゐる爲、之を被る時は戰に勝利を得ぬ事はないといふ。）を借りて返さぬ爲、兩家確執になつてゐるので、手弱女御前はこの際これを和睦させようとして、長尾景勝の妹八重垣姫と武田晴信の嫡子勝頼との結婚の約を取持つた。

賤の方は直江山城之助・八つ橋等を伴に連れて誓願寺に參詣した。その間に相思の直江・八つ橋は睦じう語り合ふ。

北條氏時は主君の胤を孕んでゐる賤の方を横戀慕し、重臣村上義淸と心を合はせて賤の方を奪ひ取らうと工んだ。又武田・上杉の兩家を戰はせて漁夫の利を占めようと、密談してゐるを景勝に聞かれて、景勝と斬り結んだところを手弱女御前に宥められて別れる。

其の後、井上新左衞門が種子島（鐵砲）を發射して義晴を弑したので、奥方は薙刀押つ取つて新左衞門と渡り合ひ、種子島を打落して追拂つた。長尾謙信・武田晴信は殿中の變を聞いて馳付け、奥方から出仕を怠つた罪を責められて、晴信は紅梅の一枝を切り、以て「嫡子勝頼の首を刎ねて申譯にする」といひ、謙信は烏帽子の眞中を切り、以て「嫡子景勝の首を切つて身に曇りなきを明かす」と言ふ。惡心の氏時はさやうにさせようとするを、奥方は「兩人の心を見拔いた上は子を殺すに及ばず、この種子島を證據に三年の内に犯人を探し出して詮議を遂げよ」とて、黒髪を切つて尼となる。晴信も髻を切つて信玄と法名する。又直江・八つ橋は密通の罪を謝して自害しようとするを、謙信に叱られて退く。謙信は種子島を預り、信玄と別れ別れになつて退出する。村上義淸・横田兵内は八つ橋を奪ひ取らうとして、直江と戰ひ、兵内は殺され義淸は逃げ去つた。

第二（口、下諏訪明神。切、信玄の館）

登場人物の主な者

板垣兵部（武田信玄の奥家老）　武田信玄（甲斐城主）　武田四郎勝頼（實は信玄の子でなくて兵部の子）
蓑作（實は信玄の子）　濡衣（武田家の腰元）　横藏（後に山本勘助といふ）
落合藤馬（景勝の臣）　長尾三郎景勝（謙信の子）　村上義清（氏時の重臣）
常磐井御前（信玄の室）

梗概

板垣兵部は我が子と武田信玄の子の勝頼とが、同年の生れで能く似てゐるを幸ひに取替へたので、信玄の實子は諏訪で蓑作といふて車を引いて暮して居り、兵部の子の勝頼は眼病となつた。

故將軍義晴の三年忌になつても弑した者が知れぬ爲に、信玄は手弱女御前に誓つた通りに勝頼の首を差出さねばならぬので、兵部はその身代りを立てようとして、蓑作を尋ねて諏訪明神に行つた。また勝頼と情交ある濡衣は、勝頼を助けようとして諏訪明神に祈願を籠めてゐる。この時、横藏といふ者が賽錢や奉納の太刀を盗み、之を咎めた長尾景勝の臣落合藤馬を斬殺す。そして力石を上げればその下から菅蓑を著た白髪交りの老人（將軍義晴を銃殺した齋藤道三であることが後に知れる）現はれ、横藏に菅蓑を與へ、後日再會の印として別れる。

信玄の館では村上義清上使となつて來り、勝頼の首を渡せと迫るので、常磐井御前や濡衣の悲しみに暮れる中に盲目の勝頼は自刃する。義清がその首を持つて歸つた後に、兵部は身代りにする蓑作を連れ急いで歸つた。兵部が子を取替へた事を最初から知つて知らぬ振をしてゐた信玄は、兵部の罪惡を責めて斬付けたので、兵部は悔悟して自刃する。かくて濡衣は法性の兜を奪ひ

返さうとして、謙信の館に入込むこととなり、義作は義晴を弑した者を尋ねて館を出ることとなる。

第三（口、桔梗が原。切、勘助住家）

登場人物の主な者

高坂彈正時綱（信玄の執權）　唐織（高坂の妻）　越名彈正忠政（謙信の執權）
入江（越名の妻）　峯松（慈悲藏の子）　横藏（信玄の臣山本勘助晴義、慈悲藏の兄）
慈悲藏（謙信の臣直江山城之助種綱、山本勘助の弟）　次郎吉（將軍義晴の遺兒松壽君）　お種（慈悲藏の妻）
長尾三郎景勝（越後城主謙信の嫡子）

梗概

甲斐城主武田の執權高坂彈正時綱夫妻と越後城主長尾の執權越名彈正忠政夫妻とは、信州桔梗が原の兩主家の國境で、農夫が株刈の爭から口論となる。又そこにあつた棄兒（峯松）に山本勘助の札が附けてあつたので、勘助を從へる僞に棄兒の奪合ひとなつたが、遂に時綱夫妻が子を拾うて歸る。

信州箕摩郡の山奥に住んでゐる老母に二子があつて、兄を横藏と云ひ、弟を慈悲藏といふ。横藏は軍學に心を凝らし、武田信玄と心を合はせて都に上り、足利將軍義晴の弑された時暖の方を奪ひ、信州の山奥に隱れて傅いてゐた。然るに暖の方が義晴の胤松壽君を分娩して死なれたので、その御子を次郎吉と名つけて我が子の如く見せ、弟慈悲藏の妻お種にお種の子峯松を棄てさせて次郎吉を養育させ、母にもお種にも放縱無法の振舞を盡してゐる。

また慈悲藏は長尾謙信に仕へて直江山城之助種綱と名乘つたが、亡父の遺した六韜三略を得ようとして、家に歸り母に孝養を盡してゐる。長尾景勝は嘗て諏訪明神で横藏に逢ひ、其の顏貌が自分に似てゐるを見たので、父が手弱女御前に差出す自分の首の身代りとしようと思うて來り、「横藏を我が家來にしたい」と所望し、母はこれを承諾する。

孝心深い慈悲藏は母の命で雪中に筍を掘りに行くと、土中から三略の箱が出たので、これを見た兄の横藏と奪合ひとなる。母は景勝の意中を知つて横藏を契約したので、横藏に自害を勸める。横藏は片眼を抉つて「これで景勝とは人相が違へば、其の身代りとはなれぬ。自分は既に武田信玄の臣であり、次郎吉は其の實松壽君である」と明かし、土中に隱してゐた箱を取出して源家正統武將の白旗を示し、亡父の山本勘助を襲名し「三略は我が心にある」とて、兵書は弟の直江に與へる。

外題の「本朝廿四孝」は、この筍掘りの場面にちなんだものである。

第四（道行似合の女夫丸。口、和田山村上館。切、謙信館）

登場人物の主な者

濡衣（齋藤入道道三の娘、信玄の侍女）　蓑作（庭作り。その實武田勝頼）　長尾入道謙信（越後城主）
村上左衛門義清（北條氏時の重臣）　關兵衛（濡衣の父・花守、將軍義晴を銃殺した井上新左衛門であつて、齋藤道三のこと）
長尾三郎景勝（謙信の嫡子）　八重垣姫（謙信の娘。武田勝頼と許嫁）　白須賀六郎（謙信譜代の郎等）
原小文治（謙信譜代の郎等）　更科（謙信譜代の郎等）　山本勘助（武田信玄の重臣）

梗概

濡衣は蓑作と共に武田信玄の館を出て、薬賣となつて流行唄を歌ひながら信濃路を行き、伊那郡宮田町を過ぎて謙信の諏訪の新館に赴く。



本朝廿四孝　八重垣姫（六世尾上菊五郎）

村上義清は信州和田山で狩をなし、狐に魅されて萱原の中に臥し魘されてゐた所を、家來どもが太鼓鉦で尋ね出して連れて歸る。

長尾入道謙信は義晴の後室手弱女御前及び若君松壽丸を招待する爲、諏訪湖の要害に館を新築する。その館に濡衣の父關兵衛は花守となり、濡衣は侍女となり、蓑作は庭作りとなつて入込んでゐる。

手弱女御前・松壽君が御入來になつたといふ時、景勝は自ら上使と稱して父に對ひ、「手弱女御前に御契約された通りに我が首を刎ねて渡されよ」といふので、謙信當惑する。この時關兵衛は蓑作を伴うて出て謙信にお目見えさせる。謙信は蓑作こそ勝頼であるを知つて、之に鹽尻峠に控へてゐる諸大名に上意の返事の使者を命じた。又嘗て手弱女御前から預つた種子島を關兵衛に渡して、「これを以て將軍義晴公を弑した者があるので、其の下手人を尋ね出せ」と言つた。心に覺えある關兵衛は、ぎつくり胸にこたへ、思案に暮れながら鐵砲を擔つて臥所へ行く。（これから名高い「十種香の段」となる。）

〔十種香の段〕　八重垣姫は己と許嫁である勝頼が既に死んだものと思ひ、其の繪像を掛けて冥福を祈る。濡衣も勝頼の身代りになつた愛人の爲に回向してゐる所へ、現はれた蓑作の姿が、繪像に似てゐるので姫は不思議がる。濡衣は姫に法性の兜を盗み出して貰ふことを保證として、蓑作は勝頼であることを打明けたので姫大いに喜ぶ。この時謙信は蓑作に「早く使に行け」と命

じ、後から白須賀六郎・原小文治・更科を追手として途中で殺さうとする。之を聞いた姫は、夫を救ひたく思案に暮れる折節、奥座敷から洩れ聞える琴の唄に心亂れ、法性の兜を取つて戴けば狐の姿かげろひ、狐火燃えて八百八狐が法性の兜を守護する。

花守關兵衞は將軍家・武田・上杉・北條など皆滅して、天下を掌握しようとする底意があるので、白菊の畑中から手弱女御前を狙撃し、奥深く入る所を景勝・勝頼に取卷かれる。勘助は嘗て諏訪社の境内で菅蓑をくれた老翁が今の關兵衞で、それが井上新左衞門と名乗つて、將軍義晴を弑した美濃の住人齋藤道三であることを見抜く。また關兵衞は手弱女御前を弑したとのみ思つたのは、其の實我が娘濡衣を銃殺したのであつた事を知る。かくて彼の根深い叛逆も遂に惡運盡き、謙信の矢に貫かれて斃れる。其の後勝頼は芽出度く八重垣姫と祝言し、法性の兜は再び武田家に納まる事となる。

評

切の文は、妙齢な美女の淋しい戀愛や、戰國期の武士の氣風や、謀叛人の惡辣な陰謀などを織込んである。そしてこれ等が錯綜して走馬燈のやうに移り變りつゝ、因果應報・勸善懲惡の理に導かれて行く。其の徑路整然として、流麗な詞章によつて情味豐かに書き盡されてゐる。然も繪巻物を見るが如き背景の美を兼ねて、花やかな場面が展開され、幻華藝術として技巧の妙を極めてゐる。

第四の切（十種香の段）

行水の流と人の、蓑作が姿見かはす長社杯、悠々として一間を立出、「我民間に育人に面を見知られぬを幸に、花作と成て入込しは、幼君の御身の上に、若過やあらんかと、餘所ながら守護する某、夫と悟つて抱しや、ハテ合點の行ぬ」と差俯向き、思案に塞がる一間には、館の娘、八重垣姫、許嫁有勝頼の、切腹有し其日より一間所に引籠、床に繪姿掛けまくも御經讀誦の鈴の音、此方も同じ松虫の、鳴音に袖も濡衣が、今日命日を吊ひの位牌に、向ひ掌を合せ、「廣い世界に誰有て、お前の忌日命日を、吊人も情なや、父御の惡事も露知らず、お果なされたお心を、思ひ出す程おいとしい、嘸や未來は迷ふてござらふ、女房の濡衣が心計の此手向、千部萬部のお經ぞと、思ふて成佛して下さんせ。南無阿彌陀佛〳〵〳〵」「誠に今日は霜月廿日。我身代りに相果し勝頼が命日。暮れ行月日も一年と餘り、南無。幽靈出離生死頓證菩提」、「中勝頼樣、親と親との許嫁、有し樣子を聞よりも、嫁入する日を待兼て、お前の姿を繪に書かし、見れば見る程美しい、こんな殿御と添臥の、身は姫御前の果報ぞと、月にも花にも樂しみは、繪像の傍で十種香の、煙も香花と成たるか、

○行く水、人の身　何處に落着くか知れぬ。諺に「水の流と人の行末は知れぬ」といふ。近松作「冥途の飛脚」に「水の流と身の行方、戀に沈みし浮名のみ浪花に殘し留りし」と。

○見かはす　見かへる、見かへる。

○長社杯　肩衣と同じ染色の長袴を着ることであつて、武家の禮服。

○民間に育ち　蓑作は武田信玄の嫡男に生れたが、板垣兵部の子と取替へられ、諏訪の民間に育つた。

○幼君　足利將軍義晴の子松壽君。

○鈴　唐音「リン」(ling)。之を松蟲(今は鈴蟲をいふ)の鳴く音「りんりん」にきかせて、「此方も同じ松蟲の鳴く音」とつづけた。

○誠に今日…菩提　蓑作の詞。

○我身代り　濡衣が勝頼と思つて契つた兵部の子は蓑作の身代りになつて死んだ。

○南無　歸命頂禮の意で祈りの詞。

○幽靈　亡魂。

○出離生死頓證菩提　迷界を離れ出て、悟を開いて生死の苦輪をのがれ、或る機會に遭つて頓に心の迷ひを去り、佛となり、佛果を證得するをいふ。「南無」「菩提」は回向文とする。

○月にも花にも　月や花の行樂にもまさる樂しみに。

○十種香　栴檀・沈水・蘇合・薫陸・鬱金・青木・白膠・零陵・甘松・雞舌の十種を組合はせた名香。

回向せふ迚お姿を繪には書かしはせぬ物を、魂返す反魂香、名畫の力ラも有ならば可愛とたつた一ト言の、お聲が聞たい〳〵」と、繪像の傍に身を打伏し流涕、焦れ見へ給ふ、「彼の泣聲は八重垣姬よな、我名を呼し勝頼を、誠の夫と思ひ込、吊ふ姬と吊ふ濡衣、不便シ共いぢらし共言はん方無き二人が心」と、そゞろ涙に、暮れけるが、「アヽ我ながら不覺の涙」と、衿かき合せ立上る、後にしよんぼり濡衣が、「申シ蓑作樣、合點の行ぬは貴方のお姿、如何した事で此樣に」、「ヲヽ不審尤、測らずも謙信に、抱られたる衣服大小」、「テモ扨も、衣紋附キなら社杯の召シ樣迄、似たとは愚やつぱり其儘、形見こそ今は仇なれ是無くば、忘るゝ事も有なんと、詠しは別れを悲しむ歌、形見さへじやに我夫ッに微塵變らぬ此お姿、見るに付ケても忘られぬ、私しや輪廻に迷たそふな、御赦されて」と伏沈む、泣聲洩て、一ト間には不審立チ聞ク八重垣姬、そつと襖の隙間漏る姿見紛ふ方も無く、「ヤア我夫か勝頼樣」と、飛立ッ心を押シ鎭め、「正しうお果なされしもの、似たと思ふは心の迷ひ、繪像の手前も耻し」と立戾つて掌を合せ、御經讀誦の鈴の音、勝頼公は濡衣が心を察して聲曇り、「はかなき女の心から、歎ヶは理

○反魂香　亡き人の魂魄を招き反すといふ靈香。漢武帝の寵姬李夫人が死んだ後、反魂香の煙の中に其の姿が現はれたといふ。
○名畫の力　名畫が物言ふ例は古書にもあるのでかくいふ。
○呼びし　名乘つた。
○衣紋附　衣服の着ぶりの意。衣紋は衣服着用の法式の義。近松作「博多小女郞波枕」に「顏を見合はす荒男、俄かに繕む衣紋つき」。
○愚　おろそか(疎)。言ふまでもなく。
○形見こそ　ありなん　謠曲「松風」に「形見こそ今はあだなれ是なくは、忘るるひまもありなん」。
○形見さへぢやに　形見でさへも斯くの如く悲しいのに、まして。
○輪廻　妄執。愛著。(見索引)

り去ながら、定め無き世と諦めよ」と、慰むる詞此方には、心空成ル、其人の若シや存命へおはすかと、思へば戀しく懐しく又覗ては繪姿に、見較べる程生キ寫し似はせでやつぱり本本の、「勝頼樣じやないかいの」と、思はず一間を走リ出縋り付イて、泣給へば、はつと思へどさはらぬ風情。「こは思ひ寄らざる御仰せ。我レ等蓑作と申ス花作リ、漸う只今召シ抱られ、衣服大小改メし新シ參シ者、勝頼とは覺なし、御免相有ルな」と突放せば、「ム、何と言やる、今父上に抱られし新參者、花作リの蓑作とや、自とした事が、餘り能ふ似た面ざしの、若シや夫レかと一心の煩惱、二人の手前耻かしながら、コレ濡衣、此蓑作とやら云ふ人を、其方は疾から近付キか、ヱイ、言やいの、知る人で有ふがの」、「アノお姫樣とした事が、たつた今見へたお人、何シのマア私が」、「イヤ隱しやんな今の素振、忍ぶ戀路と云ふ樣な、可愛らしい中かいの」と、思ひもよらぬ詞に喫驚、「ヲヽ、お姫樣のおつしやる事はいの、人にこそよれ、何シの貴方に物體ない」、「ム、物體ないと言やるからは、如何でも其方の知邊の人か」、「イヽヱそふでは無けれ共、大事のお主の目を掠、忍び男を拵へるは、物體ないと申ス事でござります」、「ム、すりや知

○似はせで　似てゐるといふのではなくて。
○本々　本當、實物。
○さはらぬ　さはあらぬ。さやうではない。
○自とした事が　自分の不似合をいぶかる意にいふ。(見索引)
○煩惱　迷妄。まよひ。
○二人　蓑作と濡衣。
○可愛らしい仲かいの　いとしう思ふなからひであらうかなあ。
○貴方　蓑作をさすとも、八重垣姫をさすとも兩樣にとれる。姫は蓑作をさすととつた。そこで濡衣は、「貴方というたのはお姫樣をさしたのであつて、大事のお主の[illegible]目を掠め[illegible]申す事でござります」と、取繕うたのである。

邊の人で無く、殿御でも無い人なら、何卒今から自を、可愛がつてたもる樣に、押シ付ケながら媒を頼ムは濡衣樣樣」と、夕日眩く顔に袖、※あてやかなりし其風情。「ヲヽお姫樣とした事が、未お子達チと思ひの外、※大それた彼の蓑作殿を、サア見初メたが戀路の始メ。後チ共言ず今爰で。媒せいとおつしやるのか。※我おれ。ほんにお大名のお娘御迚、油斷はならぬ戀の道、※品に寄ッたらお取持チ致しませふが」、「※コレ〳〵濡衣。必麁相言ふまいぞ」、「サア何もかも私が、呑ミ込ンでナ、呑ミ込ンでお取持チ致すまい物でも無いが、眞實底から蓑作殿に、御執心でござりますか」と、問れて猶も赤らむ顔、「※勤する身はいさ知らず、姫御前の※あられも無い。殿御に惚たと云ふ事が嘘僞りに言はれふか」、其お詞に違無くば、何ンぞ慥な誓紙の證據。夫レ見た上でお媒」、「ヲヽ夫レこそ心安い事、其誓紙さへ書イたらば」、「※イヱ〳〵、夫レも此方に望ミが有ル、私が望ム誓紙と言ふは、諏訪※法性の御兜、夫レが盜ンで貰たい」、「※ヤア何ンと言やる、諏訪法性の御兜を、盜ミ出せと言やるのは、扨は貴方が勝頼樣」と、言ふ口押ッへて「ハテ滅相な勝頼呼はり、徴塵覺の無い蓑作。麁忽※ばし宣ふな」と、言ふ顔つれ〳〵打守り、「許嫁計リ

○あてやか　高貴。上品。
○大逸れる　甚しく思はぬ方へ飛び行く義。常軌をはづれる。途徹もない。
○我折れ　我ながら屈した義。これはかなはぬと呆れた時に發する感動詞。
○品　事がら。種々に條件を持出さうとしてゐる。
○コレ〳〵…言ふまいぞ　蓑作の詞。
○勤する身　遊女。「勤する身…見た上でお媒」は濡衣の言葉。これを分つて、姫と濡衣との言葉とするは非。
○いさ　「どうだやら」といふ副詞で、下に必ず「知らず」と受ける。「萬葉集」には「不知」を「いさ」とよんでもある。(「いざ」は「どれ」といふ感動詞で「いさ」とは別)。
○あられもない　ありうべくもない。あり得ぬ事である。
○イヱ〳〵……貰ひたい　濡衣の詞。
●法性の兜　詳しくは第一に見えてゐる。
○ヤア……勝頼樣　姫の詞。「貴方」は蓑作をさす。
○ばし　語勢を強める係尾語。見索引
○つれづれ　つく〴〵。(見索引)

○差添　脇差「わきざし」。八重垣姫が蓑作の脇差を奪ひ、自殺しようとして、その脇差を逆手に取つたのである。

○濡初め　情交の爲初「しぞ」め。世上で「濡れ事」といふ。

にて枕交さぬ妹背中。お包有ルは無理成らねど、同じ羽色の鳥翅、人目に夫レと分ねど親と呼ビ又妻鳥と呼ブは生有ル習ひぞや、如何にお顔が似ればとて、戀しと思ふ勝頼樣、そも見紛ふてあられふか世にも人にも忍ぶ成ル、御ン身の上と云ひながら、連添私に何遠慮、つい斯々とお身の上明カして、得心さしてたべ、夫レも叶はぬ事ならば、いつそ殺して殺して」と、縋り付イたる恨泣、勝頼態と聲荒らげ、「ヤア聞分ケ無き戯言、如何程に宣ふ共、覺無き身は下司下郎、餘所の見る目も憚リ有、其處退給へ」と突放せば、「スリヤどの樣に申シても、勝頼樣ではおはさぬか、ハア、」、はつと計に蓑作が、※差添逆手に取給へは、「こは御短慮」と止むる濡衣、「イヤ〳〵放して殺してたも、勝頼樣でも無い人に、戯言の恥しや、心の穢れ繪像へ言譯、どふも生キては居られぬ」と、又取直すを猶も押シ止メ、「ヲヲ流石は武家のお姫樣。天晴成お志、其お心を見るからは、勝頼樣に逢せませう、ソレ其處にござる蓑作樣が、御推量に違はず。彼れが眞の勝頼樣、ちやつとお逢なされませ」と、突キ遣られては流石にも、始メの恨百分一チ聞へませぬが精一杯、跡は互に抱キ付、つい濡初に濡衣も心ときつく折柄に、又謙信の聲として、

「蓑作は何れに居る。鹽尻への返答。時刻移る」と立チ出れば、はつと蓑作飛退り、「御支度能くば直ク樣參シ上」。「ホヽ委細の事は此文箱に。片時も早く罷リ越セ」、はつと領掌、文箱携へ鹽尻差して急ギ行、謙信跡を見送つて「ヤア〳〵者共、用意よくば早來れ」と、仰にはつと白須賀六郎・原小文治。更科なんどの譜代の郎等、御前に進めば謙信勇んで、「今此諏訪の湖に、氷閉れば渡海は叶はず。鹽尻迄は陸路の切所。油斷して不覺を取ルな」。「ハアヽ畏り奉る」と勇ミ進んで駈り行、跡に不審は八重垣姫。「申シ父上。事々しい今の有樣。何事ぞらん」と尋ぬれば。「ホヽ彼れこそは。武田勝賴討ッ手の人數」。「何勝賴樣を討ッ手とは」、こはそも如何に何故に」と。驚ク二人シをはつたと睨め付ケ、「諏訪法性の兜を、盜ミ出さん汝等が工み。物陰にて聞たる故。勝賴に使者を言付ケ、歸りを待ッて討チ取さんと、諜し合せし討手の手配」。「エイそんなら今の討ッ手の者は、勝賴樣を殺さん爲か」。「ハアヽ」。はつと計にどふど伏シ、「今日は如何なる事なれば過ギ去リ給ひし我夫に。再び逢は優曇華と悦んで居たものを、又も別れに成ル事は。何ンの因果ぞ情なや、父のお慈悲にお命を、何卒助ケて給はれ」とくどき、歎ク目もくらず。「ヤ

○鹽尻　信州東筑摩郡にある町で、今は鐵路中央線長野行と名古屋行との分岐點に當る。
○領掌　承知。
○切所　難所、「下學集」に「節所、難所也」。
○不覺　不覺悟の義。失策すること。
○二人　八重垣姫、濡衣。
⦿優曇華　逢ふことの極めて稀な喩にいふ。

○失せう　行かう。行くべし。
○帳臺　室内に臺座を設け、帷を四方に垂れたもので、貴人の座所。
○焦れて燃ゆる　姫の焦れて燃ゆるを、狐火の燃ゆるにいひかく。法性の兜を守護する狐が火をこぼすのである。但しここは、この琴の唱歌である「狐火」についてはこの後に記した。
○爪音　琴の音をいひ、琴爪で彈くよりの稱。
○檢校　盲官、盲人の最高の官。琵琶・琴などの音曲は、盲法師に上手な者が多かった。

ア武田方の廻し者、「憎き女」と濡衣引ッ立、「汝には尋る仔細有リ、奥へうせふ」と小腕取リ、情容赦も荒氣の大將帳臺、深く入給ふ、「思ひにや、焦れて燃る、野邊の狐火、小夜更けて、狐火や、狐火野邊の、野邊の狐火、小夜更けて」、幾重波くる爪音は、昔を饗應の奥御殿シ、此方は正體、涙ながら「アレ彼の奥の間で檢校が、諷ふ唱歌も今身の上、おいとしいは勝頼様、かかる工みの有ぞ共知らず量らぬお身の上、別れと成ルも情ない父上、諫めても歎ゲいても聞入も無き胴慾心シ、娘不便と思すなら、お命助ケて添せてたべ」と身を打伏して、歎キしが、「いやいや泣ては居られぬ所、追ッ手の者より先キへ廻り、勝頼様に此事を、お知らせ申ミが近カ道の、諏訪の湖舟人に、渡り頼ん急がん」と、小褄取ル手も甲斐甲斐しく、駈け出しが「イヤ〳〵〳〵」、今湖に氷張詰、舟の往來も叶はぬ由、徒路を行ては女の足、何と追ッ手に追付カれふ、知らすにも知らされず、みすみす夫トを見殺しに、するは如何なる身の因果、アヽ翅が欲しい、羽が欲しい、飛シで行たい、知らせたい、逢たい見たい」と夫戀の、千千に亂るゝ憂思ひ「千年百年泣明し、涙に命絶れば迚夫の爲にはよも成ルまじ、此上頼ムは神佛」と、床に祭し

法性の兜の前に手を支へ、「此御兜は諏訪明神より武田家へ、授け賜はる御寶なれば、取も直さず諏訪の御神。勝頼樣の今の御難シ儀、助ヶ給へ。救ひ給へ」と兜を取て押シ戴、押シ戴し俤の、若シやは人の咎んと窺ひ下りる飛石傳ひ庭の溜の泉水に、映る月影怪しき姿、はつと驚キ飛退しが、「今のは慥に狐の姿、此泉シ水に映りしは、ハテ面妖な」とどきつく胸、撫下し〱、怖怖ながら徐徐と、差覗く池水に、映るは己が影計リ、「たつた今此水に、映つた影は狐の姿、今又見れば我俤、幻と云ふ物か、但シ迷ひの空目とやらか、ハテ怪や」ととつ置イつ、兜をそつと手に捧げ、覗けば又も白ッ狐の形チ、水にあり〱有明ヶ月、不思議に胸も濁江の、池の汀にすつくりと眺入て、立たりしが、「誠ニャ當國諏訪明神シは、狐を以ッて使はしめと聞つるが、明神の神シ體に等しき兜なれば、八百八狐附ヶ添て、守護する奇瑞に疑ヒ無し、ヲヽ夫レよ思ひ出したり、湖ムに氷張詰ムれば、渡リ初メする神の狐、其足跡を導にて、心安ふ行交ふ人シ馬、狐渡らぬ其先キに、渡れば水に溺とは、人も知ッたる諏訪の湖、假令狐は渡らず共、夫レを思ふ念シ力ラに、神の力ラの加はる兜、勝頼樣に返せと有ル、諏訪明神の御教ハア、、

○めんよう　「めいよ」「めいよう」などともいひ、「名譽」であつて、「ほまれ」の義より轉じて、奇妙、奇怪、不思議の意にいふ。これを「面妖」「面夭」など書くは當字である。

○空目　見違ひ。

○とつ置いつ　「取りつ置きつ」の音便。彼此と思ひ迷ふさま。躊躇して。

○有明月　夜が明けてもまだ空に殘つてある月の義であつて、陰暦十六日以後の月をいふ。ここの文は有明の月空に躍き、狐の姿が水に映るのである。

○諏訪明神　信州諏訪郡にあつて、上諏訪にあるを上宮といひ、法性大明神と稱し、下諏訪にあるを下宮といひ、共に官幣大社に列す。諏訪の人たちは、狐を諏訪明神のつかはしめの獸と申し傳へてゐる。

○八百八　物事の多きをいふに用ひる數であつて、「江戸八百八町」「春日社の八百八燈籠」「松島の八百八島」など皆然り。

○氷張詰むれば渡り初めする神の狐　[illegible]

忝なや有難や」と、兜を取て頭に被けば、忽姿狐火の此處に燃へ立チ、彼處にも、亂るゝ姿は法性の、兜を守護する不思議の有様、此方の間には手弱女御前、始終の様子窺ふ共、いさ白菊の花の番小屋にとつくと關兵衞が、附ケ廻しても神通力、花の間に間に見へつ隱れつ神さる狐、南無三寶と急き立ッ關兵衞、狙ひの的は手弱女御前ン、どつさり響く鐵砲の、音を合圖に遠近より、俄に響く鉦太鼓、亂調に打立れば、騒ぬ關兵衞廣庭に二王立、稚無く馳來る雑兵原、我討チ取ッんとひしめいたり、「ヤアしほらしき有財餓鬼、此世の暇取ラさん」と、大刀すらりと抜ト放し、當る任せに薙ぎ立テ薙ぎ立テ御殿ンをさして、行先の、間毎間毎は、沈沈と燈火消へて音せぬは、敵キの油斷折こそよけれ、烏帽子素袍も忍び入、時の用にぞ大廣間、咎る人も長廊下長袴の、裾差足に、御座の間近く窺ふ關兵衞、怪と豫て勝頼が、透せど見へぬ眞の闇、人こそ有ルと身を避れば、此方も避る彼方の一ト間、立塞つたる三郎景勝、遣り過して駈け入を、袖引キちぎれば手に觸る、下の腹巻スハ曲者と、組ミ付ク景勝小手返し、ひらりと付ケ入勝頼

○狐火　狐が火をともすといふ事は古くから言ひ傳へられてゐるが、蓋し狐が動物の骨などを銜へて叢に這入る時、その骨から燐光を放つを見て、言ひ出したものであらう。
○手弱女御前　故將軍義晴の北の方、ここはその實、濡衣である。
○いさ　[illegible]の意をなし、「不知」にかゝる間詞。[illegible]
○白菊　この所、白居易が内宅の詩句「[illegible]」を思はせる。
○神さる　「神去る」で崩御をいふ。ここは神通力をそなへて飛び行く意に誤用したのであらう。或は「神さぶ」の誤か。
○南無三寶　これはしたりと思ふ時にいふ言葉。(見案引)
○二王　寺門の兩脇に立てる二人の金剛神をいひ、二王の如くつつ立つを「二王立ち」といふ。(見案引)
○しをらし　殊勝な。
○有財餓鬼　餓鬼の種類に無財餓鬼(食無きもの)、小財餓鬼(膿血等を食ふもの)、多財餓鬼(人の遺落の食などを食ふもの)とあつて、小財餓鬼・多財餓鬼を有財餓鬼といふ。以て人を罵つていふ語。
○だんびら　大刀をいふ。(見案引)
○當る任せ　當り放題。
○素袍　足利時代以後の服で、直垂の少し變つたものであつて、布地に家紋を染出し、菊綴を附ける。
○腹巻　背で合はせるやうにし、後世のものには袖もあつて鎧の代用とした。
○曲者　あやしいやつ。えせ者。
○小手返し　柔術上の語。相手の手頸を握り、逆様にして痛め倒すをいふ。

○さしつたり　心得たこと、氣構へした時にいふ語。あつこと心得た。
○眞の當　柔術上の語。當は當身であつて、拳で敵の急所に突當てて一時氣息をとめること。
○坂東聲　腹に力の入つた坂東人の胴聲「だみごゑ」。坂東とは古昔、箱根・木曾・碓氷「あらち」の三關以東の諸國をいふ。齋藤道三は美濃の住人である故に「坂東聲」というた。
○枯木立　枯木の如く直立すること。
○えせ者　曲者「くせもの」。あやしいやつ。
○あきばる　[illegible]
○匹夫　身分なき一人の男。
○七重八重…悲しき　この歌は「常山紀談」巻十九に出て、中務卿兼明親王の歌である。
(●)太田道灌が連ねし一首　七重八重の歌のことから、道灌が歌道に志すに至つたといふ話のあるのを取つてかく作つた。

を、さしつたりと眞の當、たぢ〳〵〳〵と後退り、騒ぬ大膽爲済し顔、人を欺く坂東聲、「大將の御座近く帶劍の武士叶ひ申さず、銘々詰所の當番大切に致されよ」と、外さぬ體に徐徐と猶奥、深く行所を、「ヤア〳〵美濃ノ國の住人、齋藤入道道三止まれやつ」と聲かけられ、肝にこたへて馳け戻り、邊をきつと大音聲、「ヤアラ訝や、三十年來跡を晦し、包み隱せし我本名、齋藤道三と呼ぶだるは、そも何奴ぞ對面せん」と、廣縁先に枯木立、景勝・勝賴前後を圍ひ、逃ば切んと詰掛くる。後の襖さつと明け、「武田の忠臣山本勘助、叛逆人の詮議を遂げん」と、悠然と立出る、續て近習・諸大名、御殿廣間も燭臺に、一度に輝く灯の光、遁れん方こそ無かりけれ。され共ちつ共臆せぬ似非者、「ヤア長尾謙信の此城へ、日頃不和なる武田の家臣、山本勘助とやらんのさばり來るも心得ず、叛逆人の詮議とは、誰が詮議夫聞ふ」、「ホヽウ匹夫下郎の分として、天下に仇する汝が本名、知ッたる仔細は此一品、七重八重、花は咲けども山吹の、實の一つだに無きぞ悲しき、此歌が有ふがな、諏訪明神の力石、出合た横藏、珍らしい對面するなア、此歌は汝が先祖、太田道灌が連ねし一首、實一つだに無き

○張本　惡徒ノ首魁。

•石火矢　昔の大砲。石の彈を用ゐし時にいひかく。

○三人　謙信・信玄・氏時。

○ほく／＼　首を縱に振つて得心するさま。

○ふかぶか　うかうか。うつかり。近松作「栬狩劔本地」第一に「御僉議もなくふかいふかいとの將軍宣旨、御政道の暗き事」。

ぞ想さとは、足利殿に攻落され、美濃ノ國を切取ァれし、其鬱憤にて義晴公を鐵砲にて、撃奉る叛逆人の張本、美濃國の道三と、顯はす蓑は身の破滅、最前ン撃たる鐵砲の術ェ、覺し者は汝一人、我と我身の白狀明ィ白、諍ふな齋藤」と、大地を見拔く詞の石火矢、三人中へ取込メて、「何ンと／＼」と極付ァれば、ほく／＼と打頷き、「ホ、流石は武田の軍師と、呼る、勘助よく見付ヶた、我先ン祖道灌は、謙信の先ニ祖上杉が鑓先キにかかつて死たる恨の元トは足利の武將。續つて殺さん其爲に、北條氏時に賄賂し、心を合せ安安と、義晴は擊たれ共、忘レ形見の松壽丸。今日此館へ來るは幸ィ。奪ひ取て人質とし、謙信・信玄・氏時をも皆殺し、一ッ天四海を掌握する此道三、汝等が手には如何な／＼、義晴を殺した鐵砲で、手弱女御前も擊殺した。松壽丸を是へ出し、降參せよ」と睨付る、「ホ、ウ根強く仕込し謀叛人こ、斯かる危き敵の中へ、足利の公達がふかぶかと來り給はんや、松壽丸の御入と、僞り來たは此勘助。最前鐵砲にて擊タれ給ふ。手弱女御前ニの御ン死顏、篤と拜見仕れ」と、投ヶ出す女の切首、押ッ取ッて能く見れば、「ヤアこりや娘濡衣か、コハ／＼如何に」と顚倒煩亂、「ヱ、口惜や奇怪や、數十年ンの鬱憤

を、一時に散せんと思ひしに、勝頼が恩に引されて、敵方へ卷込れ、大望有る此親に、能くも不覺を取せしな、憎い女が死樣や」と、首を打付け齒ぎしみ齒切り、灑ぐ涙は諏訪の海一度に解くる如くなり、「ヤア返らぬ繰言絶體絶命、尋常に繩かかれ」と、兩人一度に立かかる、「シヤ物物し道三が、死物狂ひ」と立上る、左手の脇壺はつしと射る、白羽の矢先は長尾謙信。威風烈しき眼の中に、道三どつかと座を組で、引拔く鏃我が腹に、ぐつと突立て目を見開き、「先祖より遺恨有上杉が子孫謙信の矢先にかかるは、我運命の盡る所、本國を切取れ、美濃一トつだに無かりし無念さ、美濃尾張兩國を從へ、終には國家を握らんと思ひしが、我身の終りと成りたるか、及ぬ望みに足利の、武將を擊ったる其天罰、信玄・謙信中惡しく見せ掛けしも、我を見出す計略とは、今迄知らざる心の淺はか、最期に魂改むる此世の餞別、北條が城廓の案内は、某具に傳へ申さん、元來相州小田原の城、壕深ふして塀高く、要害一の名城なれば、たやすくは落べからず、霞晴たる時節を窺ひ、箱根山より見下せば、敵地の構能知れし、其時に謙信が家の軍法細作の、犬を入置き後より、勸助是にと切て出、放火を合圖に申

○解くる　水の解くる。
○尋常　立派。（見索引）
○物物し　仰仰しい。おほげさで憎々しい。
○脇壺　腋下のくぼんだ所。謙信が道三の左手の脇壺を射たのである。
○美濃一つだになかりし　前の「みの一つだになきぞ悲しき」の歌の句に據る。
○要害　守るに大切で、攻めるに難き所。（見索引）
○細作　しのび者。間者。
○犬　[illegible]

甲越後、諸軍一度に矢先を揃へ差詰、引詰、射るならば、さしも堅固の城なら共、直に乘取り氏時が、首を巷に晒さんは道三が、老後の思ひ出、さらばさらば」と引廻す、心も清き武士の、死でも殘す名の譽、家の譽れと法性の、今ぞ兜を甲州へ、戻す兩家の確執も、納る婚禮三三九度、勝つ色見する紅梅の色有勝頼勇有る景勝・道三が、仇も恨も晴渡る、諏訪の湖徒渡り、夜も東雲に明け渡る。甲斐と越後の兩將と其名を、今に殘しける

○引廻す　鎧を引廻し　腹を切り裂くをいふ。
○確執　言爭ひ　不和。
○三三九度　新夫婦互に三度づつ三度取交はす婚禮盃の禮。ここは勝頼・八重垣姫の婚禮をいふ。
○勝つ色見する紅梅　三三九度の酒に酔うた色をきかせて紅梅といひ、梅は他の木よりさきに魁して咲けば、「勝つ色見する紅梅」というた。謠曲「箙」に「勝つ色見する梅が枝、一花開けては天下の春」と。

第五（大團圓）

登場人物の主な者

武田信玄（甲斐城主）　長尾謙信（越後城主）　武田四郎勝頼（信玄の嫡子）
長尾三郎景勝（謙信の嫡子）　山本勘助（信玄の軍師）　北條氏時（相州小田原城主）
村上左衛門義清（氏時の重臣）

梗概

甲越の戰結んで解けず、信玄・謙信兩大將の一騎打となつた時、山本勘助現はれて、兩家に仇する北條氏時・村上義清を搦め捕つたことを言上する。尋いで勝頼・景勝が氏時・義清の首を刎ねて惡人滅び、勇將の譽れは後世に傳はる。

關取千兩幟

解題

明和四年八月四日から、初めて大阪の竹本座に上演され、作者は近松半二・三好松洛・竹田文吉・竹田小出・八民平七・竹本三郎兵衛である。

本曲は九段に分れ、就中第二「岩川内の段」及び「相撲場の段」が最も名高い。

作者

近松半二及び竹本三郎兵衛の傳は「本朝廿四孝」の所に、三好松洛の傳は「夏祭浪花鑑」の所に、又、八民平七の傳は「近江源氏先陣館」の所に述べた。

出處

當時大阪の人氣力士であつた稻川と千田川とに絡ませて、「雙蝶々曲輪日記」の力士達引を飜案し、趣向を凝らしたものである。「攝陽奇觀」卷之三十二に、「明和四年夏、千田川、八枚メ、今年病氣ニテ不レ取。稻川、八枚メ、勝六番まけ二番預り一番。同年秋、千田川、七枚メ、不レ取。稻川、七枚メ、勝七番まけ二番。今年竹本座のあやつりにて岩川鐵ケ嶽關取千兩幟といふ新淨瑠璃を出すも此節花かたの稻川の事を取組たり去年大坂相撲の後千田川稻川の取組無之故餘人之取組勝負略す」とある。

影響

本曲はその後も屢々上演された。また飜案物では、明和五年九月十一日から龜谷の芝居に上演された「關取二代勝負附」などがある。また第二・相撲場の段及び第七・鏡谷の段は、宮薗節の「名殘初女夫」に轉用され、第二・岩川内の段は常磐津に轉用され、新内節では稻川（或は猪名川）内の段に改められて、今も盛んに行はれてゐる。

歌舞伎では、明和六年春、江戸の森田座に上演され、寛政十一年八月十五日から江戸の市村座にも上演され、其の後も諸方に屢々上演されてゐる。

第一（狂言釣狐の場　惠海庵）

登場人物の主な者

禮三郎（鶴屋淨久禪門の子）　錦木（大坂屋の抱妓）　お才（王島彌太夫の娘、禮三郎の愛人）

瀨平（彌太夫の僕）　一原九平太（藏屋敷の侍）　村岡團右衛門（九平太一味の惡徒）

善九郎（鶴屋の惡手代）　岩川次郎吉（池田の名力士）　およつ（大阪の名力士千羽川の妻）

梗概

發端に素人の狂言「釣狐」を取入れてゐる。大阪の商人鶴屋淨久禪門の子禮三郎は、大坂屋の抱妓錦木等を引連れて、この狂言を見物してゐる際、愛人お才が僕瀨平を伴ひ尋ねて來たので、錦木は忽ち嫉妬心に燃える。このお才は、父が自分を丹波の武士津田雨助に嫁入させようとするを嫌ひ、國許を出奔して來たのであつた。

折節禮三郎は錦木の身請金七百兩の支拂に窮し、且その戀敵藏屋敷の侍一原九平太一味の惡徒村岡團右衛門、及び鶴屋の手代善九郎の陰謀にかゝつて大金を奪はれた上に、贋金五百兩をつかまされた爲に、身請金七百兩と贋金に對する五百兩を拂はねばならぬ事となつた。禮三郎の父淨久は我が子の放埒を憐んで訓戒し、千兩を渡して改心を促す爲に勘當した。然るに其の千兩は、錦木を身請するになほ二百兩の不足を生じるので、淨久の恩顧を蒙れる力士岩川が其の不足金を請合ひ、九平太を惠海庵に呼寄せて散々に打擲する。

かくてお才は嘗て其の父彌太夫に恩顧を受けた力士、天滿の千羽川吉兵衛の妻およつが預る事となり、禮三郎・錦木は岩川が保護し、各〻挨拶を述べて別れる。

第　二（岩川内。相撲場。）

登場人物の主な者

七兵衞（島の内茶屋北野屋の主人）　音羽（岩川の妻）　岩川次郎吉（池田の名力士）

鐵が嶽陀多右衞門（九平太の一味の惡徒。力士）

梗　概

〔岩川内〕　岩川が堀江の假住居には、最負客からの祝儀の贈物が賑々しう飾つてある。往來の人々は其の威勢よきを見ながら、岩川の全盛を譽めたゝへて通る。内で之を聞く岩川の妻の顏は輝いてゐる。北野屋七兵衞も相撲見物に行く途中岩川の宅に立寄り、悦びを述べて去つた。

それと入違ひに、岩川は敵方の力士鐵が嶽を伴つて歸つて來たので、音羽は之を迎へて愛想よく會釋する。折節大坂屋から使が來て、「錦木身請の殘金が今日中に拂つて戴きたい。明日になつたら無據他の身請客に渡さねばなりませぬ」と、言うて去る。岩川は「これは大變、錦木が他に身請させて己の顏が立つものか」と駈出す。鐵が嶽聲を掛け、「これ岩川、ちよつと待て。其の身請客は外でもない己だ」といふ。岩川は、さては彼奴め九平太の手先となつて、錦木を身請しようとしてゐるのかと知り、「鐵が嶽よ一生の賴みだ。己が請合つた身請の殘金二百兩の調達に窮してゐる苦衷を察して、九平太が錦木を請出す事を思ひ止まらせることはなるまいか」と懇請する。然るに心に一物ある鐵が嶽は、岩川の言葉後を捉へ、「汝が惠海庵で九平太を打擲した仕返しだ」とて暴行を加へる。

折から取組の番附が屆いたので、手に取つて見れば岩川と鐵が嶽との組合はせになつてゐる。鐵が嶽は、岩川がこの相撲に負けてくれるなら、錦木を禮三郎に讓するやう斡旋しようといふ意を仄めかす。岩川は無念の涙を呑んで、若旦那の爲に鐵が嶽に勝

を諒らうと決心して別れる。岩川の妻は之を立聞きして夫の心を察し、胸に咳上げる悲しみの色を見せじと、殊更に笑顔を作り、優しく話し掛けて夫の髪を撫附けながら、懇に宥めて相撲場に行かせる。後に妻は獨り無量の感慨と思案に暮れ、何を思ひ立つたか直ちに夫の後を慕うて家を出る。

〔相撲場〕 負けるを覺悟の岩川は、行司に呼ばれ、悄然として土俵に上る。そして固唾を呑んで見物する幾萬の群衆の前で、鐵か嶽と組んで危く見えた所に、相撲場の一角より「進上金子二百兩岩川樣最負より」と、勇しく呼ばはる聲を聞いて、忽ち變る大象の勢に、鐵か嶽を投飛ばして仁王立ち、行司の軍配を受けて、觀客から萬雷の拍手を浴びせられ、意氣揚々として歸る。

その途で七兵衛に逢ひ、「二百兩を贈つた最負客にお目に懸からせよ」と言はれて、駕籠の垂を上げたのを見れば、中に坐せる最負客といふは女房音羽で、二百兩は我が妻が夫を思うて、身を苦界に沈めた身の代金であつた。萬感胸に迫る岩川は、唯一言「女房忝い」と夕暮の、空に告げ渡る梵鐘の音に哀れを添へ、互に湧出る涙を押へて、名殘は盡きず別れ行く。

評

この段、遊蕩兒に絡まる忠義・報恩・夫婦の眞心などを精細に述べて、美しい人情を見せてゐる。その中にも岩川の妻が夫を思ふ獻身的行爲は眞に涙ぐましい。

第　二（岩川内。相撲場）

芝居は南、米市は北、相撲と能の常舞臺、堀江〳〵と國々へ鳴り響たる岩川が、

○岩川　文政九年二月大阪中座で太夫本・鶴澤新十郎興行の時に「猪名川」と改名（新内では稻川）。

○南　大阪市南區道頓堀。五座の劇場軒を竝べて繁盛を極めた。

○北　大阪市北區堂島。徳川時代諸侯の藏屋敷があつて、米穀取引の市の最も盛んな所。

○能　[illegible]。

○堀江　大阪市西區にあつて、西道頓堀川の北。大阪の[illegible]

角力の内は夫婦連レ爰に堀江の假住居、店は初日の餝物半紙・毛氈・煙草盆・羽織・脇差・取廻し、酒は杉ばへ米俵、餘所の軒端を假初メも賑々敷ウ見へにける。「扨積だの見事何じや羽織・脇差・米も有ゐらい張込ミじやの」、「いや又一二年ッこつちの角力にめつたに負た事のない岩川、したが今ン度の角力には、千羽川が病氣故はづむまいと思ふたが思ひの外きつい はづみ」、「ソリヤ其筈、勸進元トの顏のよいのに江戸方九州方殘らず上リ、岩川といふ贔負の強い力の強い、あんな男を持ッ者の顏が見たい」と長テから内を覗て高々と、夫トの噂女房おとは、出合頭に聞嬉しさ顏に少シは紅桔梗の、前垂の紐縄暖簾、上ゲてによつこり、「北野屋の七兵衞でござります」、「是は〳〵嶋之内の七兵衞樣よふお出、サア〳〵爰へ」に打通り、「扨まあきついばづみ樣、千羽川が出ぬ故にどふ有ふと思ふたが近年ンの大入、今日は大方爰の關取が取ッしやるで有ふと思ふて、見ン物に來た序ながらちよつと悦びに參りましたが、關取はもふ行てでござりましたか」、「イヱ〳〵今日は叶はぬ用事に付つい近ン所迄參られましたがもふ戻つてゞござんせう、マアほんにいつぞやはいかゐお世話で、練物を緩りと見ン物致しまして忝ふござります、い

○取廻し　力士の化粧廻し、化粧褌。
◉杉ばへ　杉葉に椪〔はへ〕をいひかけて、酒樽・米俵を積上げることをいふ。力士の全盛を祝した贔屓客からの贈物である。椪とは、材木又は俵などを積むに、方形に並列して其の上に杉形に積重ねること。酒屋には杉の葉を集めて丸くした物を看板に出し、又上尖り下廣がれるを杉形といひ、方錐形の積み方をいひかけた。
○張込み　奮發し大層力をいれた贈物なるをいふ。
○したが　然し。
○はづむ　古來「は字む」とも書かれ、彈〔はじ〕く義か。勢に乘つて事を行ふ意にいふ。勢づき盛んなるをいふ。ここの文は、千羽川が病氣で休場する故、岩川・千羽川の好取組などがないから、人氣がわかないことと思はなかつたとの意。
○江戸方九州方　江戸方面・九州方面の力士。
○紅桔梗　紅色を帶びた桔梗（濃紫に稍藍を帶ぶ）[illegible]
○紐縄暖簾　[illegible]
○嶋之内　[illegible]
○關取　相撲の大關をいふ。關ともいひ、本名最手[illegible]、その次ぎを小結といひ、其の以下を前頭といふ）。
○練物　[illegible]

つでも嶋之内の祭は、俄が多ふて賑やかな事、私等は在所者故、物見だけいと云ではこちのに叱れます」、「イヤモこちらの方も門ドがざはつくばつかりで、奉公人が動かねば肝心の商が少ない、イヤかういふ中チに遅なつたら這入られまい關取へよい樣に、賴ます」と座を立上れば、「ヲヽ忙しない、まあ御緩りとお茶也と」。「イヤ遅いと好い場がござりませぬ」と挨拶、そこ〳〵歸りける、町中の、贔負に眉も岩川が、鐵が嶽陀多右衞門と打連レ歸る我ガ家の內、「ヲヽこちの人戾らしやんしたか、陀多右衞門樣シもよふお出、初日からまだお目に懸りませぬが、きつい大入でお目出度ふござります」、「アイそりや互でごんす、見シ物の足が早さに、そろ〳〵行ふと出かけた道で、岩川に逢たによつて夫レでちよつと寄りました」、「夫レはマア〳〵よふこそお出、したがまだ漸と今の先キ、櫓太鼓を打出しました、マア緩りとお茶成リ共」と、會釋に汲出す花香より、心の花香ぞ愛想有、「コリヤ女房共、留守の內へ今日の相撲割は持て來なんだか」、「イヱイヱ、まだ何にも持ては」、「ハテ埒の明ぬ、今迄知レぬは何ぞ採でも有かいの陀多右衞門」、「サア己も初日に鈍な角力取ッたによつて、何でも今日はと思ふて居

の練物を出す、[illegible]中座摩社・天満宮等の御旅の練物は[illegible]て、山車の類や、武者の假裝行列などが[illegible]。
○嶋之内の祭　嶋之内、[illegible]津八幡宮（應神天皇を祀る）の祭禮。各町から練物を出した。
○俄　俄練物をいひ、物ごとの題でた右衛門を飾り、下ざりの題で笹を飾りなどして、洒落滑稽を旨とした練物。
○在所物　在所者、田舎者。
○物見だけい　「物見高い」の轉訛。なんでも物をさかく見たがるをいふ。
○[illegible]て　[illegible]技藝[illegible]大蔵流[illegible]にこのやうな事をは、えて例にしたがるものおや」。
○道具屋　道具屋節の略。道具屋吉左衛門の始めた、勇ましい調子で語る淨瑠璃の一派。
○眉も岩川　「[illegible]」[illegible]をいふ）を「岩川」といひかけた。
○花香　花やかな香味。
○採　[illegible]
○鈍　[illegible]

るが誰と合すぞ、相手によつては魂膽も工夫もして見にやならぬ、いつぞ行て聞て來ふかい」、「ハテまあよござんすわいな。其内には持て來ふ、幸ィ貰た肴も有、主と一緒に飯上つて行しやんせ、ドレ拵ふ」と木綿襷かけまく神にあらぬ共、菩薩廻りの女房は、勝手へ立ッて入にけり、「岩川樣お宿にござりますか、新町の大坂屋から參りました、左右衛門申ます、錦木太夫が身請ヶの跡金、今日中に遣はされませぬと、こちらに身請ヶの客衆がござります故、其方へ相談致します、お前のお顏を立ァまして今日中は待ます、明日に成たらこちらへ太夫をやります程に、其時意地むぢのない樣に、念ヲを入レいと申されました」と、言捨使は立歸れば、「ヤア其身請外へさしては岩川が立ッ物か」と、駈出すを、「コリヤ／＼岩川。其身請ヶの譯も其客も、此鐵が嶽が知ッてゐる程に、マア行ず共よいわいやい」、「ムヽすりや、其身請ヶの相談ミを、汝がよう知ッて居るか、シテ其身請ヶの客といふは」、「イヤ外でもない己じや、ヲヽ此鐵が嶽陀多右衛門じや、程に、マアそふ思ふて居いやい」と、俄にこつきも節々れ立、頬髭撫てのさばり面、「ムヽ聞へた、こりや九平太が腰じやな、尤汝が爲には大事にかけにやならぬ人じや、

○魂膽　たくらみ。
○菩薩　米をいふ。「俗つれ〳〵」巻一に「酒の一滴は菩薩七十粒より出づる」。ここの文は、木綿襷は神事に奉仕するに用ひれば、木綿襷掛けるを、言葉にかけまくもかしこき神の意にいひかけ、神を受け「菩薩」というた。「菩薩廻り」とは飯拵へに立ち廻ることの意。
○新町　大阪市西區にある遊女町。
○左右衛門　大坂屋の亭主。
○太夫　最上位の遊女。
○身請け　請出すこと。落籍。
○跡金　全額の殘分を先に支拂うて、其拂のまま殘つてゐる金。其の跡金は、百兩である。
○意地無地　彼れ是れと因縁を起すこと。ぐづぐづ言ふこと。
○こつき　骨氣の字を當つ。容貌。さうがう。
○のさばり、伸張の義。意氣あがり。高ぶり。
○九平太　岩川の若い者で、錦木太夫を身請しようとするのを邪魔する者。
○腰　「腰推し」の略。後方より力を添へること。黒幕。

が爰をよふ聞分ヶてくれ、あの錦木太夫は、己が親方の禮三殿とはきつう深い中じや、其錦木故親の勘ッ當迄受ヶられた事、こりや言はいでも知ッて居る事、そこらはまあ取ッてほつて、※五百兩といふ金迄渡し、跡金の二百兩才覺※する其内に、太夫殿を外の手へ渡しては、どふも岩川が顏が立ぬ。汝が身が中へ這入つたこそ幸、どふぞ其方の身請を、※じやみる様に言廻してたもるまいか。※鐵が嶽、コレ頼む／＼と詞をさげ、事を分ヶたる一言を、※鼻であしらふ惡者作り、「ヲ、此身請ヶはどふせうとかうせふと己が儘じや、汝が頼む様にしてやろといふたら、勝ッ手はよからふが嫌じや、わりや※惠海庵で九平太様をひどい目に合したげな、ヲ、強いこつちや。其仕返しを頼れて居る此鐵が嶽。※あんだら臭い事いふない」、「ム、すりや、其時の事が根葉に成ッて、夫レ故身請ヶの邪魔するのか」、「イヤ邪魔するとは何のこつちや、コリヤ錦木が身請ヶは金ずくじやぞよ、僅二百兩計リの跡金を、團子の咽に詰つた様に、※ぎつちかはと吠面かはくとは違ふ。七百兩といふ金を、※がらりに出して身請ヶするのじや」、「成ル程尤じや、兎角銘々親方を、大事に思ふから起る事じや、何と斯うしてたもらぬか、己を九平太様へ連レて往

○取つてほつて　放任して。捨て置いて。「はる」は放〔はふ〕るの義。

○才覺　工面。調達の工夫なすること。(見索引)

○じやみる　事の成りかけたのが破れるをいふ。現今用ひてゐる「おじやんになる」といふ詞も「おじやみになる」の音便である。「俚言集覧」に「じやみる＝事の成らんとして留り止むを云」。

○たもる　「たまはる」の約轉。

○鼻であしらふ　人から話掛けられて、相手[illegible]。馬鹿にしたあしらひをする。

○惡者作り　惡漢仕立。惡漢にできてゐるもの。

○惠海庵　[illegible]の中に[illegible]、[illegible]郎を助けて越屋敷の侍一原九平太を散々に投飛ばし[illegible]。このことは[illegible]に見えてゐる。

○あんだら　「彼〔あ〕のごろ」の轉訛である。「[illegible]」はだら／＼して締りのないこと。馬鹿。愚鈍。近松作「傾城吉岡染」に「あんだらの大馬鹿ども」。同「[illegible]」に「あんだらめには[illegible]」[illegible]

○ぎつちかは　物の[illegible]状にいふ。近松作「心中[illegible]」に「[illegible]」。

○吠面かはく　[illegible]。

○がらり　そつくり。近松作「淀鯉出世瀧德」に「中ら四百四百兩、[illegible]がらりに身を賣りて」。

て、あなたの胸の晴る様に、撲たし成りと踏し成りとさして、身請ヶはこつちへさしてたも、汝が身の言やる通り金づくの事なれば、今日中に跡金さへ出來れば、頼ム事も何シにもなけれど、サちつと急には出來にくい、尤在所へ言ふてやつたら、工面の出來る事もあらふが、親共の耳へ入とむない、夫レで汝が身を頼ムのじや、又身請ヶ仕やつてからが、迚も太夫が九平太様の女房にやならぬ、すりや畢竟が費といふ物じや」、「だまれやい、太夫が隨はふが隨ふまいが、夫レにや構はぬ。九平太様には金がたんと有によつて、其金でわいらが面をはり廻すのじや」、「サイノ、金で面をはらず共、此岩川をどふなりと腹の癒る様にして、身請ヶはこつちへさしてたも、コレ一生の頼じや、恩にも著よ、コレ手を下ゲる、鐵が嶽」と、頭を疊にすり付て、頼ム心ぞせつなけれ、「ム、そんなら何か、踏れても撲たれても、言分シないといふのか」、「イヤモ聞分ヶてさへたもれば、譬此身はどふ成ても」、「コリヤ相談が面白いわい、九平太様の名代に、マアちよつとかうせうかい」と、立蹴にどふど踏飛し、「何じや、何びこ〳〵するのじや、わりやたつた今、言分シないと言ふたぞよ、但シ言分シが有。いか」、「イヤ〳〵、何の言分シが有ル

○たんと　「足りぬる」の約。充分に。澤山に。
○金で面をはる　金力で人を壓伏するをいふ（「[illegible]はる」は[illegible]意。[illegible]）
○わいら　「われら」の音便。汝ら。
○サイノ　「サレバイノ」の約。
○恩にも著よ　恩にも著よう。恩として身に受けよう。
○びこびこ　びりつく貌。びく〳〵。近松作「生玉心中」上卷に「跪まくりて捻ぢ寄れば、ヤアびこ〳〵するない、わやにしてもさせぬ〳〵」と。

物で、サア〳〵どう成と心任せに」、「ヲヽ其筈じや、惠海庵での意趣返し、わりや九平太樣を斯うくらはしたか、イヤかう踏しだか」と、弱みを付ヶ込ム厄病の髪も頭も引しやなぐり、さいなむ折から表へ息急。「ハイ今日の相撲割でござります、もふ追付ヶ土俵入じや程に、早ふお出なされませ」と、書付ヶ抛込立歸れば、陀多右衛門押し披き、「何じや、鐵が嶽に岩川」、「ムヽすりや、今日は岩川と鐵が嶽」、「コリヤ見い、己と汝とが相撲じやとやい、ムヽ時も時折も折、汝が身と己が立合ィとは、ハテ氣味合な事じやの」と、言ふも心に一思案、「コリヤ汝も池田の岩川と言はれては、國々へ名の通つた者、又己も大名のお抱、殊に大坂は初てなれば、此相撲しくじるが最期扶持放れじや、すりや是二人ながら大事の相撲、九平太樣の名代に、惠海庵での仕返ししたれば、此算用は濟で有、又錦木が身請の事は己次第、ヲヽ此鐵が嶽が心次第じや、水心有レば魚心有、頼ム事も頼まれる事も、まあ今日の相撲仕舞ふてから、其上の事にせうわい、汝も隨分と神佛でも叩き廻して、己に勝ヶ樣にせい、したが可愛や、己と取たら骨身が碎けて、重て土俵踏ム事はならぬぞよ。どふぞ頭取衆を頼んで、振替へて貰ふて成と、取ッ

○弱みをつけこむ厄病の神　諺に「弱みにつけこむ風の神」といふ。
○しやなぐる　かなぐる。かきなぐる。
○相撲割　相撲の割當。わりふり。相撲の番附。
○土俵入　相撲力士一同が化粧廻しをつけ、土俵場に上つて行ふ儀式。横綱だけは單獨で露拂・太刀持を從へて之を行ふ。
○氣味合　心持のよいこと。會心。
○池田　攝津國豐能郡池田町。猪名川が町の西を流れる。稻川(猪名川とも書き、本曲では岩川)といふ力士名も、彼の古郷のこの川の名に據つた。
○水心あれば魚心あり　彼が我に好意を持つならば、彼も我に好意を持つといふことの喩の諺。[illegible]「[illegible]」[illegible]で「[illegible]心あれば水心あり」ともいふ。

ぬ方が勝チじやあろ。夫レ共に取て見よふと思ふなら、魚心有レば水心有、ナ岩川、土俵で逢ふ一と強い詞のどこやらに、味な鐵棒引キ摺る雪踏、ぐはらつかせてぞ出て行。跡に岩川諸手を組ミ。思案にくれて居たりしが、一段々日切リの切レた跡金、親方が催促するも九平太が皆仕業。兎角鐵が嶽を抱キ込ンで、彼方の身請ケを延して貰はふより外はない。と云ふても一ト筋繩ではいかぬやつ、抱込ム仕様は、ム、太夫が身請ケは己次第。魚心有レば水心有リ、ヲ、こりや今日の相撲を、振つてやらざ成ルまいわいの、ソレ〳〵、あれと己とが立合ふこそ幸イ。美しう振ツてやり。あいつに勝チを譲て置イて、其上で退つ引キさせず、頼ムが近カ道上分ン別、とは言へ、名取リの鐵が嶽。どふ魂膽して成共、投殺さにやならぬ相撲、言はば一生懸命の、大事の相撲を金故に、振つてやる岩川が、心の内のせつなさ儀さ、摩利支天にも見放され、相撲冥加に盡きたのか一と、思ひ廻せば廻す程空恐ろしさ口惜さ、思はず拳を握り詰身を顫はして、男泣、始終立聞ツ女房が涙隠して、一ヲ、こちの人とした事が、さつきにから飯拵へて待ツて居るのに、爰で上ガるか奥へ据よふか一と、何気なければ素知らぬ顔。一イヤ モ 飯なら食たふない、ホンニ角力

○味な　妙な、へんてこな。[illegible]
○鐵棒引摺る　夜番などが金棒を引摺つて騒音を立てるに譬へて、口やかましうしやべるをいふ。そして「引摺る雪踏」にいひかけた。
○日切　日限。
○親方　[illegible]の親方　大坂屋[illegible]
○一筋繩では行かぬ　たやすくは制御し難い。
○振つ　棒に振る。勝を失ふ。
○やらざなるまい　遣らずばなるまい。
○魂膽　たくらみ。（既出）
○投殺す　[illegible]
○一生懸命　（見宗引）
○摩利支天　[illegible]武士の守本尊とされてゐる。
○とした事が　[illegible]何としたことであるのか[illegible]だ。（見宗引）

○髮がきつう亂けて　取出す櫛箱　[illegible]作「哭泣の飛脚」下卷に「昨日のまゝの髮つきや、髮の[illegible]取つてある[illegible]

○サイナ　サレバイナ。

○[illegible]　[illegible]髮に達しないで垂れさがる髮）とを言ひかく。

○[illegible]　「あのごろ」の訛。馬鹿。愚鈍。（既出）

○振つて遣る　負けてやる。「振る」は既出。

から呼に來た、」「ドレ行て來う」と立上れば、「そんならもふ行しやんすか、こゝと岩川殿、ソレ髮がきつう亂けて有ぞへ、人中へ見苦しい、結て上ふ」と取出す櫛箱、「イヤ結て居たら隙が入、つい撫付ておいてたも」、「ヲヽお前もこんな髮して、行しやんした事はないが、いつその事何もかも、言ふて聞して下さんせぬか」、「ヤ言へとは何を」、「サイナ、お前の心のナ、それ縺れ髮、撫付て置こふより、いつそさつぱり言はしやんせぬかと言ふ事いな」、「イヤ言ふまい／＼、何ぼ私に言へと言やつても、高が女の手業、言ふたら大方おくれが出よふ、つい撫付ておいてたも」と、傍に直れば女房も、押しは言はぬ縺れ髮、鬢の、ほつれを、撫付る櫛の背より夫の胸、映して見たき鏡立、「サアよいか見さしやんせ」と、向ふ鏡の蓋取て、映せば映る顏と顏、「申岩川殿、色も青さめ、そして目の内もうるんで、どふやら氣色の惡そふな顏付、もふ今日の相撲には、斷言ふて行しやんすな」、「何をあんだら言すぞい、いつはともあれ今日の相撲は、鐵が嶽と此岩川、初日の出ぬ先から町中が、待て居る晴の出合、何でも鐵が嶽を、土俵の砂へ埋にせで置ぬ」、「イヤそりや嘘じや、今日の相撲は鐵が嶽に、振

つてやるお前の心」と、言ふ口押へて、「聲が高い、スリヤさつきにからの様子殘らず」、「アイ一ト間で聞て居りました。僅な金に手詰つて、難儀さしやんすが私や悲しい、いつそ此譯親父様に」、「たわけめ、それ言ふ程なりや此様に、人に擲れ踏れはせぬ。昔質氣の親父様。打明ヶて物言ふと、禮三様に意見の何のとやかましい。若ヵいお人の水の出ばな、若シ命生害に成ッた時は、千日に刈た萱じや、ア、急な事でさへなくば。工面の仕様もあらふに。僅二百兩の金故に。大事の相撲を振つてやらざ成まいと思へば、腑甲斐ないやら口惜いやらで、おりや胸が裂る様な」、「ヲ、道理じや、〳〵〳〵」去ながら。それ程の大事の事、連レ添女房に隠して居る。お前の心が聞へぬ」と、恨涙に、時移り、早追ィ々の呼使ィ。「申シ土俵入でございます。早ふお出なされませ、ちやつと〳〵」に岩川が。悄悄として立上れば、「もふお前は行しやんすか」、「ホ鐵が嶽を抱込ンで、工面の通り往きや格別。若シも行ねば絶體絶命。是が暇乞にならふも知レぬ、さらば」と計リ一聲を跡に殘して出て行。「コレまあ待て岩川殿。たつた一ト言いひたい事」と、見れ共跡は雲霞、「コリヤ斯ふしては居られぬ所。夫トの命にかゝはる勝負、私も

○水の出ばな　水の出ばなは勢盛んである。よつて若い者の血氣盛んで前後の思慮なきことをいふ。
○千日に刈つた萱　「千日に刈つた萱を一日に亡ぼす」の諺に據る。長い間の辛苦も一朝にして徒勞に終らす意。
○腑甲斐ない　「言ふ價無（かひな）い」の義。
○ちやつと　早く。すぐに。近松作「生玉心中」上卷に「申しおへ様ちやつとお歸りなされませ」。

○とうから　[illegible]の形容。
○東西々々　興行物などにて、口上を述べる時などにまづいふ詞で、もと相撲の東西に始まるといふ。
○[illegible]　[illegible]の時、[illegible]衛門のはじめた、勇ましい調子で語る浄瑠璃の一流。[illegible]
○四股　[illegible]片足づつ高く揚げて強く張り、力をこめて勢強く地を踏鳴らすを「四股踏鳴らす」といふ。
○しよげ鳥　「しよげ」は悄氣。悄然として元氣[illegible]「しよげ鳥」といふ。近松作「大經師昔暦」に「分限[illegible]、中に挾まるしよげ鳥の、浪人の巣のとりぶさ[illegible]
○千番に一番　[illegible]
○[illegible]
○[illegible]
○力士　[illegible]、寺門の兩脇に[illegible]

是から相撲場へ〳〵と、帶引締めて夫々の跡慕ふてこそは、行空に、響く櫓のとうからと打仕舞ふたる太鼓より、鳴り渡つたる岩川と鐵が嶽との相撲割、表にべつたり貼紙も、張裂く木戸口押し合へしあひ。早土俵入事終り相撲の數々取盡し、中入前ぞ勇ましき、「東西〳〵道頓堀宗右衛門町、北野屋七兵衛樣急用でござります、一寸木戸迄お出なされませ」と。又も呼出す相撲の名乘り、入替へ〳〵勝負も、今一番と夕日に連れて、「西は岩川〳〵、東は鐵が嶽〳〵」と名乘り上られ四股踏鳴らす鐵が嶽。此方は猶もしよげ鳥の悄々、上る土俵の上、すは千番に一番の、相撲と力む幾萬の人。靜り返つて見物す。「片や岩川〳〵、片や鐵が嶽〳〵、せくまい〳〵せかずと顏を見合せて、やつ」と引いたる行司の團扇。直に付入鐵が嶽、ずつと兩腕差込ます。元來覺悟の岩川が、既に危く見へたる所へ。「進上金子二百兩岩川樣贔負より」と、聞よりぐつと岩川が、初めの氣色どこへやら、鐵が嶽が諸差を、ほぐして土俵へ引つくり返し、力士の如くつつ立ば、「よいやよいや〳〵」と數萬の人、一度に立つて手を拍きどよみを作る鬨作る、櫓太鼓も打出しの表は人の山なせり、次第〳〵に散る人の中に紛れて息急と、駕籠を舁せ

○もやくや　悶々。

○味な　妙な。變な。（既出）

○勤奉公　年限を定めて遊女に身賣すること。遊女の勤めのことをもいふ。

○入相　太陽將に西の山の端〔は〕に入らうとする時を入相といひ、寺々には鐘を鳴らして、日沒時の看經を催する。見索引

て北野屋七兵衛。來かゝる向ふへ。岩川が、胸の※もやくやさつぱりと。我家へ歸る戻り足。「ヨウ／＼關取樣出來ました」と。跡から附ィてくる人に。見付られじと駕籠片寄せて、七兵衛が素知ぬ顔。「ハア關取。さて／＼今日はきついお手柄」、「ホ七兵衛殿。見てじや有たか」。「見た段か。どふやら取口は惡かつたが。引ッくり返した其强さ」。「イヤモ今日の相撲は譯が有ッて、きつう取にくかつたが、※あだな事が張合に成ッて」、「あだな事とは二百兩の纏頭か。コレ其纏頭遣つた旦那殿が幸ィ爰にじや。逢て禮を言はしやりませ」と、誰を上れば、「ヤアわりや女房」、「岩川殿。隨分ッまめで居て下さんせ」、「そんなら今の二百兩は」、「コレ關取、お内儀の※勤奉公。志の二百兩」。「女房共。何ッにも言ぬ忝い」、「サ駕籠の衆、※遣つて」と北野屋が。氣轉利かして駕籠の垂レ、内は歎キに暮近カく、※入相告る鐘諸共別れ／＼に。三重 行末は

第三（難波の浦）

登場人物の主な者

禮三郎（鶴屋淨久禪門の子）　錦木（禮三郎の愛人）　鐵が嶽陀多右衛門（九平太一味の惡徒。力士）

曲者（後に村岡團右衛門である事が知れる）　津田兩助（丹波の武士）

梗概

春雨しと／＼と降る眞夜中、禮三郎。錦木の兩人は相合傘で、岩川の妻音羽の事を話しながら難波の浦を行く途中、鐵が嶽と邂逅して喧嘩となる。錦木は音羽の勤め先北野屋七兵衛の宅を指して逃げ、禮三郎は鐵が嶽に組伏せられたが、後の稻叢から曲者が現はれ、鐵が嶽を斬殺し、禮三郎の落した刀を拾うて闇の中に消える。折から通り掛つた侍津田兩助が、詮議の種に横死者の侍に落ちてゐる紙入を拾うて一通の書を取出し、提燈に照し讀んで去る。

第四（千羽川吉兵衛内）

登場人物の主な者

千羽川吉兵衛（天滿の名力士）　お才（禮三郎の愛人）　禮三郎（鶴屋淨久禪門の子）

善九郎（元鶴屋の惡手代。九平太一味の惡徒）　津田兩助（丹波の武士）　澤田作龍（村岡團右衛門の替名）

およつ（千羽川の妻）

梗概

千羽川吉兵衛の宅では、お才・禮三郎等寄集り骨牌遊びをしてゐる時、善九郎が破れ編笠を被つて來り、千羽川に面會を強請した。千羽川は之を曲者と察して縛し、櫃に入れて床下に投込む。

或夜禮三郎が岩川に遊びに行つた後へ、津田雨助が奴を連れて來り、鐵が嶽を殺した下手人を尋ね、且つお才と其の密通の男禮三郎との行方を尋ねたが、千羽川は「何も存ぜぬ」と言ひ張る。折から浪人風の者が澤田伴龍と名乘つて、刀を賣りに來り、「價は千兩だが之は買はねばなるまい」といふ。千羽川訝しがり、其の刀を取つて見れば、正しく禮三郎の腰刀であるのではつと驚く。伴龍は「千兩がないなら之を質に取る」と、女道具を容れた小袖櫃に手を懸ける。之を傍觀してゐた雨助は不審がり、其の刀を吟味しようとして立寄るを千羽川突退け、疊を蹴上ければ床下から這出た善九郎が、伴龍を見て「お頭」と聲を掛けるを、伴龍は我が素性を知られじと一刀に刺殺した。そして始終見てゐる雨助を氣味惡く思ひ「其の刀の價は後に受取らう」と、居所を告げて去る。

雨助はいかにも彼等に複雜な事情があるものと察し、鐵が嶽の死骸の傍で拾うた紙入の中にお才の去狀を入れて、「此の中には其方に入用の物もあらう」と言うて渡し、後日の爲にと、己が旅宿を告げて藏屋敷に歸る。

千羽川は伴龍を訪ふと稱して出た後に、伴龍忍び入つておよつを縛り、お才に暴行を加へようとする際、千羽川が戸を蹴破つて躍り込み、闇の中に伴龍の帶に觸れて之を切取り、逃去る後を追ふ。

第五（伴龍內）

登場人物の主な者

千羽川吉兵衛（天満の名力士）　澤田伴龍（村岡圓右衛門の替名）

梗概

千羽川は伴龍の宅を訪ひ、切取つた帯を見せて千両に買へと言ひつのり、伴龍の逃出すを捉へて揉合ひ、誤證文を書かせて、雨助から貰つた紙入の中の書面と同筆蹟であることを確め、其の書面の文言によつて、伴龍即ち圓右衛門が藩主の刀備前長光を盗んだ者であるを知り、其の刀を奪ひ取る。

第六（島の内の揚屋）

登場人物の主な者

鶴屋浄久禪門（禮三郎の父）　岩川次郎吉（池田の名力士）　禮三郎（鶴屋浄久禪門の子）

錦木（遊女、禮三郎の愛人）

梗概

鶴屋浄久禪門は、我が子が錦木を身請しようとして二百両不足の事から、岩川の妻音羽が身を賣るに至つた事を聞き、音羽を請出さうとして登樓する。又錦木は音羽の義に感じ、之を救ふ爲に再び勤めの身となつたので、岩川は錦木を諭して禮三郎に添はせようとし、登樓して浄久と邂逅する。浄久は我が子禮三郎が鐵が嶽殺しの嫌疑を受けてゐるを苦に病み、岩川に音羽の身請金を渡し、萬事を依頼して別れる。

禮三郎は人殺しの嫌疑を受けて世をはかなみ、錦木に此の世の別れを告げる。錦木も死ぬなら共にと禮三郎の後を追ふ。

第七（鰻谷の裏借家）

登場人物の主な者

錦木（北野屋の遊女）　鶴屋禮三郎（錦木の愛人）

錦木の父（盲目）　七兵衛（島の内茶屋北野屋の主人）

梗概

錦木は禮三郎を尋ねて諸方をさまよひ、夜中に長堀の南なる鰻谷の裏借家に來て禮三郎に逢ふ。そして互に情死を覺悟して名殘を惜しみ、飯を炊いで親に陰膳を据ゑ、常に心配を懸けた上に先立つ不孝の罪を謝まる。この時北野屋七兵衛が、盲目の錦木の父親を伴うて來り、錦木の年季證文を禮三郎に渡して歸る。然るに禮三郎は殺人の嫌疑を負うてゐるを苦にし、あくまで錦木と情死を決心し、折角尋ねて來た父親に錦木の居るを明さぬ爲、親は娘に逢はれぬを歎く樣目も當てられず。禮三郎堪へかねて、我が手と言うて錦木の手を按摩させて暗に別れを告げ、丑三つの鐘の音に最早これまでと、父親を置去りに兩人家を脱出で、情死の道を辿る。

第八（道行闇路の町續き）

登場人物の主な者

鶴屋禮三郎（淨久禪門の子）　錦木（禮三郎の愛人）

梗概

禮三郎と錦木は手を取交はして堺筋に出で、順慶町・米屋町・本町・安土町・備後町・瓦町・淡路町・平野町・道修町・伏見町・高麗橋・浮世小路を過つて大川を越え、寺町を經て女夫池の堤を傳ひ、源光寺（濱の寺）に行く。

第九（濱の寺）

登場人物の主な者

鶴屋禮三郎（淨久禪門の子）　錦木（禮三郎の愛人）　千羽川吉兵衛（天滿の名力士）

岩川次郎吉（池田の名力士）　一原九平太（藏屋敷の侍）　村岡團右衛門（九平太一味の惡徒）

津田兩助（丹波の武士）　鶴屋淨久禪門（禮三郎の父）　お才（三島彌太夫の娘　禮三郎の愛人）

梗概

禮三郎は刀を拔放ち、錦木と情死しようとする途端、千羽川は岩川と連れ立ち、九平太・團右衛門を捕縛して馳け來る。この時津田兩助・淨久・お才も來合はせて、九平太一味の惡徒の罪狀明白となる。かくて禮三郎はお才を妻となし、錦木を妾として鶴屋の繁昌となり、池田の關取・天滿の關取、千兩千兩二幟、其の名を難波に揚げた。（「關取千兩幟」の題名は之に據る）

傾城阿波の鳴門

解　題

明和五年六月一日から、初めて竹本座に上演された。作者は近松半二・八民平七・寺田兵藏・竹田文吉・竹本三郎兵衛である。

本曲は十段に分れ、就中第八の「順禮歌」の段が最も名高い。

作　者

五人の作者の中で主なのは近松半二で、その傳は「本朝廿四孝」の所に述べた。

出　處

本曲は「夕霧阿波鳴渡」(近松門左衛門作)、「けいせい睦玉川」(並木十助作)などを取交ぜて、更に構想を練つたものである。其の主人公阿波の十郎兵衛の實説は詳かでない。言ひ傳へに據れば、慶長三年頃阿波國板野郡川内村に富豪十郎兵衛といふ者が居て、毎年節季になると海賊に襲はれる爲、其の難を他に轉嫁しようとして、外の船を襲ふやうに手引した罪により、磔刑に處せられたといふ。一説には、十郎兵衛が他國から阿波への輸入米の取締役を勤めて、米をごまかしてゐた事が知れ、元祿十一年十一月に處刑され、妻お弓は元祿十二年二月に死んだともいふ。

阿波城主玉木衛門之助が吉原の遊女高雄の容色に溺れ、そして高雄は先君の落胤であるといふ所は、寛保元年十月姬路城主榊原式部大輔政岑が、吉原三浦屋の抱妓高尾(十代目)に狎れ、之を請出した爲に幕府から隱居を命ぜられたといふ説を作り替へ、なほ「けいせい睦玉川」をまねびて潤色したものである。

藤屋伊左衛門と高雄・夕霧との情事は、「夕霧阿波鳴渡」に據つて工夫したものである。

名高い「順禮歌」の段は、元文三年十月八日から豐竹座に上演された原田由良助作「南北野中の隱井」(梅屋澁浮名色揚の改作)の中巻「長吉殺し」の場に據つて、工夫を凝らしたものである。そして「けいせい睦玉川」藤棚の場に、淺香と娘お縫とが出るのからも由來してゐる。

第八の「順禮歌」の段は、淨瑠璃にも歌舞伎にも屢々上演された。後年背景を産湯稲荷や、どんどろ大師の門前（今から程近き以前、大阪で大師の法會が行はれた際、それを當込んで背景としたもので、大阪市東區安堂寺通二丁目善福寺〔本尊弘法大師〕をいふ。もと大阪奉行土井氏邸内にあり、土井殿がどんどろと訛つたもの。寺の前の道を俗にお鶴の死んだ所といふ。東京では大師の門前を背景にせず、長い間産湯稲荷を用ひたのである）に改め、趣向も多少變へて、現今でも生々した壽命を保つてゐる。十郎兵衛と聞けば、直ちに「阿波の鳴門」を思ひ浮べ、「順禮歌」の段といへば、同時に別れの際に娘の着物の塵をはたいてやるお弓と、笈摺をかけた可憐なお鶴との姿を聯想して、親と子となる人々の、心の奥底に潜んでゐる恩愛の契を喚起す程、世間に深く親しまれてゐる。また、本曲の書替物では、「萬歳猿島鳴門白浪」（福森久助作。文化十四年九月江戸中村座上演）がある。

第一（吉原巴屋）

登場人物の主な者

玉木衛門之助（藤屋伊左衛門の僞名）　高雄（江戸吉原の太夫）
佐渡七（幇間、定九郎一味の惡漢）　山口定九郎（玉木の惡家老小野田郡兵衛の一味）　蛇河の團八（定九郎一味の惡漢。競組の團八ともいふ）

梗概

阿波德島の若殿玉木衛門之助（京の町人藤屋伊左衛門が僞名してゐる者である事が後に知れる）は吉原の巴屋に遊女高雄を揚げ、仲居。幇間等を集めて遊興してゐると、其の席へ蛇河の團八が現はれ、無法な事を言ひかけて幇間佐渡七に追拂はれた

其の夕暮、團八は山口定九郎と共に巴屋に忍び入り、定九郎は佐渡七を呼寄せて、「自分は小野田郡兵衛に頼まれて、若殿衛門

之助を殺さねばならぬから、この藥で毒害してくれ」と、毒藥を渡して賴み、三人手分けして別れた。これを陰で聞いてゐた衞門之助は佐渡七を追拂つた。そして高雄を連れ仲居等に送られて、駕籠に乘込んだやうに見せ、我が衣を入れて身をかはした。定九郎等の惡徒は衞門之助を毒害しようとして失敗したので、更に團八は衞門之助の歸途を要し、駕籠の内にゐると思ひ込んで、衞門之助が入れて置いた衣に手裏劍を打ちかけ、騷ぎに紛れて逃げ去つた。其の後で衞門之助等は無事に歸る。

第二（櫻井主膳の邸宅）

登場人物の主な者

櫻井主膳（阿波德島城主玉木衞門之助譜代の重臣）　閨の戸（主膳の妻）　十郎兵衞（主膳の中間）
小野田郡兵衞（衞門之助の惡家老）　山口定九郎（郡兵衞一味の惡漢）　競組の團八（定九郎一味の惡徒）
高雄（江戸吉原の太夫）　藤屋伊左衞門（京の町人）

梗概

十郎兵衞は嘗て櫻井主膳の中間であつた時、惡家老小野田郡兵衞の家來と喧嘩した爲に、主膳から勘當を受けた。彼は深く前非を悔いて、主膳の江戸屋敷を訪れた。折節主膳は主君の許に出懸けて留守であつたので、主膳の室閨の戸に面會を乞うて詫を申入れ、主膳の歸りを待つて己が罪を謝した。然し勘當を赦されないので、それを悲しんで去る。

その後間もなく、かねて主家を横領しようと陰謀をめぐらしてゐる郡兵衞、山口定九郎、競組の團八等の惡徒前後して來り、主膳に面會を求めて、「若殿玉木衞門之助を廓通ひに唆かした責任を負うて切腹せよ」と迫つた。主膳は「それは何者かが殿

様の名をかたつたのだ。現に殿様から其の曲者を詮議せよと命ぜられてゐる」と答へた。郡兵衛等もとより承知せず、相圖をすると定九郎が高雄を連れて其の場に現はれた。然し主膳と高雄とは今まで一面識もない。折節藤屋伊左衛門といふ京都の町人が現はれ、「若殿様の名をかたつたのは自分である」と自白し、「自分は嘗て主膳様の恩顧を蒙り、また高雄は其の賓先殿の落し胤であるから、かやうにたくらみました」と答へた。主膳は事情を聽取り、團八の首を刎ねて伊左衛門を手討にした如く見せた。

第三（兩國橋）

登場人物の主な者

山口定九郎（主膳の組下。郡兵衛一味の惡徒）　佐渡平（佐渡七の變名。郡兵衛一味の惡徒）　櫻井主膳（德島城主玉木衛門之助の重臣）
十郎兵衛（主膳の中間）

梗概

山口定九郎は佐渡平に逢うて、「櫻井主膳が預つてゐる主君玉木家の重寶國次の刀を盜んで小野田郡兵衛に渡した」と、祕密を打明けた。そして相共に兩國橋に隱れて、主膳の歸途を闇討にしようと待つてゐる。

折節十郎兵衛は、主膳の歸りに逢うて勘當を赦してもらはうと思ひながら、其處を通り過ぎる。定九郎・佐渡平は之を主膳と見誤り、躍り出て後方から斬付けたが、却つて十郎兵衛の鋭い太刀打に兩人共斬殺された。

折しも通りかゝつた主膳はこの有樣を見て、「其方が今彼等を殺したので白狀させやうも無く、早まつた事をしてくれた」と無念がつたので、十郎兵衛は落膽して自害しようとする。主膳之を制止し、「紛失した國次の刀を尋ね出すなら、勘當を赦して

やる」と言つた。十郎兵衛はつと歡喜し、忠勤を勵ます爲には、斬取強盜は武士の習と決心し、「今から名を銀十郎と改め、國次の刀を尋ね出す爲に盜賊となりまする」と語る。この時郡兵衛の下部の通るを見て提燈を吹消し、兩人別れて闇の中に跡を晦まして行方知れずなつた。

第四（絎屋）

登場人物の主な者

お卷（絎屋の女主人）　お辻（お卷の娘）　お弓（銀十郎の妻）
庄九郎（絎屋の惡番頭）　助右衛門（絎屋別家の番頭）　銀十郎（十郎兵衛が盜賊となつての變名）

梗概

大阪今橋筋の豪商絎屋では、主人三郎右衛門の死後、寡婦お卷逼塞して暮し、娘お辻の結納金五百兩を藤屋伊左衛門から贈られたのを大切に貯へてゐる。折から伊左衛門が罪を犯したとの噂が立つたので、お卷は娘の結婚に就いて深く案じた。惡番頭庄九郎は之を奇貨とし、お辻と情交を結ばうとし、よつて以て絎屋を横領しようとたくんだ。

これを嗅附けた銀十郎は、結納金を奪つて伊左衛門との緣を切らすまいと思ひ、妻お弓と謀し合はせて、お弓がお卷と知り合ひであるを幸ひに先づ絎屋を訪れさせ、自分は浪人の姿となつて入込み、お卷・助右衛門を欺いて五百兩を騙り取り、庄九郎を斬殺して、お弓と共に逃げ去る。

第五（尊正寺）

登場人物の主な者

正清（尊正寺和尚）　才覺坊（尊正寺の納所坊主）　鈍才坊（尊正寺の納所坊主）

十郎兵衞（盗賊）　黑八（十郎兵衞の手下）　道七（十郎兵衞の手下）

梗概

寺町尊正寺の本尊日刹如來の繁昌で、毎日賽錢が夥しう寄つた。和尚は之がため俄に裕福となり、妻を迎へて祝言した其の夜十郎兵衞は手下を連れて尊正寺に忍び入り、坊主等を散々な目に遭はせ、賽錢。法衣を奪ひ取つて去つた。

第六（吉田屋）

登場人物の主な者

助右衞門（新屋別家の番頭）　夕霧（大阪新町扇屋の太夫）　小野田郡兵衞（玉木衞門之助の悪家老）

十郎兵衞（盗賊）

梗概

新屋別家の番頭助右衞門は、藤屋伊左衞門の馴染遊女夕霧の心を探らうとして、乞食の姿に俏して吉田屋（揚屋）に夕霧を訪うた。夕霧は落魄れた伊左衞門を慕ふ餘り、他の客に嫌はれようとしてこの乞食を優遇した。夕霧を請出さうとしてゐる郡兵衞は、

この乞食を伊左衞門と思ひ誤つて暴行を加へた。
折から十郎兵衞が田舍大盡となつて現はれ、夕霧の身請金五百兩を投出して、先に長持の中に隱れてゐた伊左衞門に夕霧を與へ、「自分が紙屋から五百兩を奪つたのは、かうして伊左衞門を助け、お辻との緣を切らせない爲であつた」と、打明けて出て行かうとする。この時郡兵衞躍り出て十郎兵衞を搦めようとした。十郎兵衞乃ち郡兵衞を捩伏せて長持の中に投込み、悠然と去つて跡を晦ました。

第七（道行思ひの富士）

登場人物の主な者

藤屋伊左衞門（町人）　武太六（ゆすり者）　銀十郎（十郎兵衞の變名）
鈍才坊（尊正寺の納所坊主）　お弓（銀十郎の妻）　捕手數多

梗概

藤屋伊左衞門は駕籠に揺られて睡氣さし、うつとりとしてお辻と夕霧とを夢みてゐるを起され、長町裏の毘沙門で下される。そこへ武太六が駈付けて、嘗て用立てた五十兩の返濟を迫つた　折節銀十郎通り合はせ、「その金は己から明晩返濟する」といふ約束で別れる。其の後でお弓が通りかゝつて伊左衞門と遇ひ、自分どもが盜賊となつた苦衷を語り、國元へ殘した娘お鶴の身を思ひ煩うて嘆いた。之を後の陰で鈍才坊が聞いてゐて代官所へ訴へた。そこで捕手數多押寄せてお弓を取圍んだが、お弓は懷劍を遣つて立向ひ、其の場を巧に遁れて闇の中に姿を消した。

第八（十郎兵衛の宅）

登場人物の主な者

銀十郎（阿波の十郎兵衛の變名）　お弓（銀十郎の妻）　武太六（ゆすり者）
お鶴（銀十郎・お弓の子。十歳）　捕手數多

梗概

武太六は銀十郎の家を尋ね来て、「約束通り五十兩を返せ」と催促した。銀十郎もとより何の貯へもないので、「金の工面をして来る」とて、武太六と連立つて出た。

その後に十歳ばかりの順禮姿の少女が、西國順禮の御詠歌を歌ひながら来て報謝をこうた。お弓はその子の愛らしい顔容を見て、國許に殘した我が子の事を思ひ出し、少女の身の上話を聞く。そして計らずもこの子が我が子お鶴で、父母を尋ねて廻國してゐるのであるを知り、驚き且つ懐しがつて名乘り合はうとしたが、さて何時召捕られるかも知れぬ己等夫婦の難儀を、娘に及ぼさぬやうにする爲には、名乘らぬがよいと思ひ返しても、抑へ難い思ひは熱い涙となる。泣く〳〵よそ目はあかの他人となり、娘を歸國するやうに言ひ聞かせた。蟲の知らせか少女はお弓が言ひ聞かす樣なはなつかしかつたが、遂にお弓の言葉に從ひ、しを〳〵として去り、御詠歌を唱へて行くあはれな幼聲も次第に遠ざかる。



傾城阿波の鳴門
お弓（三世坂東秀調）
お鶴（中村又五郎）

お弓は一人ほつねんと物思ひに沈んだが、矢も楯もたまらなくなつて我が子の跡を尋ねて出る。

その留守に銀十郎は、我が子と知らずに順禮を連れて歸り、其の少女が小判金を持つてゐるといふので、武太六に渡す金の足にしようと思ひ、「をぢさんに一寸貸してくれ」と頼んだ。されど少女は幼心に、祖母樣から貰つた大切な金と思ひ込んでゐるので、中々承知せず逃出した。銀十郎乃ち之を捕へれば、少女は恐れて大聲を立てるので、さすがの銀十郎も持て餘し、口に手をあて誤つて窒死さしてしまつた。そこへお弓が戻り、我が子の死を見て狂亂の如くなり、銀十郎も我が子であつたかと驚き、夫婦共に悲歎の涙に暮れる。

銀十郎夫婦は愛子が非業の死を悲しみながら、お鶴の懐中を探し、小判と老母の手紙とを見出して之を讀めば、その文言にお鶴が優秀な子である事を賞めた後に、國次の刀は小野田郡兵衛が所持してゐる事が書いてある。銀十郎夫婦は悲喜こもごもの感に打たれ、早速歸國しようとする折節、武太六の密告によつて捕手數多押寄せた。銀十郎乃ち奮闘して之を斬拂ひ、お鶴の屍を敵に渡すまいとして、家具の中に入れ火を放ち、お弓と共に我が子の菩提を祈る念佛の聲も哀れに、歸國の旅を急いだ。

評

順禮歌の段は本曲中最も勝れた場面である。可憐な少女が佛弟子となつて、順禮歌を歌ひながら兩親を尋ねて廻國し、たまたま日陰の身の母に邂逅して互に慕ひ慕はれる。その母性愛と親に焦れる子心とを示す、その言葉その振舞が麗はしい筆で細かく巧みに描き出され、言々涙があり、句々情がある。無常をそゝる順禮歌は、始終この悲しい運命の絲を奏でる調子となつて、哀婉な樂の聲を傳へつゝ、遂に愛兒を非業の最期に導く。この藝術は由來數知れぬ多くの人々の涙を絞つた事であらう。

○よしあし　善惡「よしあし」を蘆葦「よしあし」にかけて浪花につづけた。蘆葦は浪花の縁語。
○何と浪花　語調をなだらかにするために言葉のはじめの音を揃へた、所謂頭韻法「アリタレーション」。

第八

善悪を、何と浪花の町外れ、巨造に身を隠す阿波の十郎兵衛本と名隠し。銀十郎と表は浪人内證は、人は夫と其白波の、夜の稼ぎの道ならぬ、身の行末ぞ是非も無き。人の名を、神と呼る、其神は、京の吉田の神帳に入た神かや入ぬのか、野暮共見へぬ悪ずいほう。とつぱかぶの武太六が、蚤取眼に暖簾押と上、「銀十郎内にか用が有て逢に來た」と、言ふ聲聞て女房立出、「ヲ、武太六樣か能ふお出。久敷逢ぬがまあ御無事で」、「イヤコレお内儀。逢ぬの無事なのと地を打た臺詞じやない。ならず者の伊左衛門に貸た金、爰の銀十郎が請合し今日中に濟す筈、夫で其金請取に來たのじや、きりきり逢して下され」と、聲も辰巳の上り口。尻捲りして高足座、「ヲ、其樣に聲高に言はずと靜に物を言はしやんせ、此方の人は夜が更たので今晝寐して居られます」、「何じや晝寐じや。夜が更たとは、エ、聞へた。夜通しのてこつりかい。好い機嫌じやな、てこつる金が有なら貸た金戻して行」と、言ふに女房が不審顔「アノ魚釣に行に金か入かへ」、「ヤそりや

○巨造　[illegible]
⦿白波　盗賊をいふ。
○人の名を神と呼ばる　[illegible]者を名づけて疫病神「やくびやうがみ」といふ。武太六は[illegible]
○京の吉田の神帳　[illegible]「吉田」をも見よ。
○野暮　[illegible]「やぼ」[illegible]
○悪ずゐはう　[illegible]の後にある「てこつり」「れこさ」「てんしよ」などは[illegible]た語だといふ。
○とつぱ株　騙り者の持前。ごろはうの身柄。「とつぱ」をごろはうの意にいふは、盗し警戒を突破することい轉義であらう。
○[illegible]　[illegible]
○内儀　町人の主婦を呼ぶ稱。「女重寶記」巻一に「大名の[illegible]を奥様といふ。…町人のを内儀といふ、[illegible]なり」。
○地を打つた臺詞　地を打てば外れのないやうに、誰れにもあてはまる應對の詞。「せりふ」は「せりいふ」（競言）の約であらう。歌舞伎役者が舞臺で互に[illegible]合ふ詞を「せりふ」といひ、臺詞と書くは舞臺詞の略である。（見索引）
○ならず者　なつてゐない者の義。無頼漢。惡漢。

○きりきり　てきぱき。しやんしやん。
○たつみあがり　立ち身上「あがり」の義であらう。叫び[illegible]

○夜が更けた　夜更かしをした。
○てこつり　「てこ」（手兒）は美女、「つり」（釣）はおびく意であつて、美女をおびくことであらう。

○白さ海老　多く〔は〕河水と海水と交る所に棲息し、薄白い小海老。
○推方　人情世態を察知して意氣な方。粹人。通人。
○太郎四郎　たはけ者。あほう者。「浮世風呂」三下に「むごく太郎四郎にされるはい、可哀さうに（太郎四郎とは、たはけの事）」。
○れこさ　これさし（見索引）。ここでは馴染の美女をさしたのである。
○てんしよ　篆書であつて、以て洒落詞の意に用ひたので、「古文眞寶」を堅苦しい意にいふと同じ類であらう。
○青二　めくり骨牌四十八枚の中、貳の四枚の中に青二と稱する札があつて、青く彩色しその數五十に當る。よつて以て博奕かるたの意にいうた。詳しくは「近松語彙」の「うんすん」の條に述べてある。
○お染久松　寶永四年冬豐竹座に「心中鬼門角」上演されて、評判大當りであつたから、その〔心〕中の浄瑠璃を語ることをいふのであらう。
○疫病を受取る　人に嫌外されるを疫病に喩へていうたもの。
○ざ　「ずは」の約。
○もてあつかふ　もてあます。〔續〕膝栗毛「自分居ら〔れ〕いや見付が居ましにおてあつかう〔ての〕樣子」。
○あた　厭忌の意を示す接頭語。（見索引）
○まじくら　まじり。「俚諺集覽」に「まじる一韓又交をよめり…俗語に何まじくらともいへり」。

何言ふのじや」、「デモお前でこつる金が有ルなら戻して行けと言はしやんすじやないかいな。私や父鯊釣やうに白さ海老で釣るかと思へば、金で釣ルてこと云ふ魚はどんな魚でござんすぞ」。「ヱ、推方の嗅に似合ぬきつい太郎四郎じや、金を餌にする魚が有てたまる物か、コレてこつると云ふはの、れこさの事じやわいの此方も推方の女房なら、ちつとてんしよでも覺へそふな物じやかなア、今の世界に青二引カぬ者と、お染久松語らぬ者は疫病を受ヶ取ルといの、こんな事言ふ間は無い、銀十郎〳〵起て來んかい怖い事は何もない、高が借錢乞に來たのじや、起キざ起しに行ぞよ」と、喚くを宥める女房ももてあつかふて見へにける、「ヱ、あたやかましうぬかすので、可惜夢を覺し居つた」と、欠まじくら立出る、銀十郎が寐惚れ聲、「コリヤ銀十郎、わりやマア夢所じや有まいがな、今日中に、戻さふと約束の通り受ヶ取に來たのじや、サア今渡せ受ヶ取ふ、否と言や此錢文で直ヶに代官所へお願ひ申く、が、わりやでんどへは出られぬ身分ッじや有ふかな」と、病附かすは疫病の神と名の付ッ奇特なり、「ハテやかましい日暮ィ迄は今日の内大方工面も出來て有、是から直ッに先キへ往て才覺して來る程に、大儀ながら晩方

來い〳〵と、聞ては流石強ふも得言はず、「ハテ晩方迄なりや待ってやろ、其代りに暮レ六つをごんと打と直に受ヶ取に來る程に。其時に成てからならぬなど〳〵、※ねだ切張つた所で※三どつは打れた樣に、がつくりさすのじやないかよ、今ン度違へば直グに※代官」、「サア呑こんで居る、も一度行たら慥に工面の出來る金、汝も去ぬなら連レ立とかい」と、言つゝ出る袂を控へ、「※其樣に慥に言ふて何ぞ當の有事か、又間違へば※氣の毒な、まあ二三日も言延べて」、「※イヤ成らぬ〳〵二三日の事は扨置キ半時も待ッ事ならぬ、サア〳〵來い〳〵」とせり立る、武太六伴ひ十郎兵衛我家を出て行跡へ、引違ふて息急と飛脚と見へて草鞋がけ、内を覗いて「申此狀屆ヶます」と投出す一ッ通、女房取上上書キに、「銀十郎殿へ急用」と書イた計リで下の名は、「内儀樣覺がござりますか、私も人傳に、託かつて參りましたれど、必先キへ直キ〳〵にと、念入レて申されましたが、※内方へ來る狀かな」と、念を入レれば、「ア、成ル程成ル程下の名は無けれ共、上書キの手は慥に此方に見知りがござんす、置イて去んで下さんせ。夫も今は留守なれば、歸られ次第見せませう。マア這入つて煙草でも」、「ア、否々未外へ廻ヶる狀、急用なればもふお暇、御返事あらば後から」と、言

○寐惚れ聲　ねぼけ聲。
○でんど　「でどころ」(出所)の訛略。公儀。代官所。近松作「曾根崎心中」に「斯うたくんだ事なれば、でんどへ出てもおれが負け」。(見索引)
○奇特　[illegible]ここの文句、武太六が人を苦しめて病みつかすは、彼が疫病の神と渾名のつく所以であり、其のきゝめであるとの意。
○才覺　くめん。
○暮六つ　午後六時。
○[illegible]切張つた所で　[illegible]床を追はれ、住宅が出來たといふ所で。
○三どつば…さすのぢやないかよ　三人[illegible]に闖入されて、家財を盗み取られたやうに、がつかりと失望落膽さすのではないかよの意。「三どつは」は、[illegible]「打つ」は、近松作「[illegible]」とある、その打つと同じく、「する」(爲)の意。
○代官　(見索引)。代官所へ訴へるといふのである。
○其樣に…言延べて　お弓の詞。
○[illegible]　[illegible]困ること。
○イヤ成らぬ…サア〳〵來い　武太六の詞。
○内方　貴方の家。お宅。

捨出る町飛脚もと来し。道へ立歸る。跡打眺め女房が、心懸りと、封押切、讀む度毎に喫驚びくり、「ヤアこりや是。夫ト銀十郎を始メ、仲間の衆へも吟味がかかり、詮議嚴しく成たる故、捕へられし者も有、最早遁れず立退との知らせの状。スリヤ。夫ト十郎兵衛殿の身の上も、今日一日にせまつた難儀、昨日長町裏で危い所を漸遁れ。ヤレ嬉しやと思ふ間もなく、今又此状の文ン體では。中々斯ふして居られぬ所。我迚も女房の身、殊に騙の同類なれば。罪科遁れぬ夫婦が命、今更驚ク氣は無けれど。一合取ても侍イの、家に生れた十郎兵衛殿、盜賊騙リと成果しも國次ヶの刀詮ン議の爲。重い忠義に輕い命。捨るは覺悟と云ながら。肝心の其刀。在リ處も知レぬ其内に。若此事が顯はれては。是迄盡せし夫トの忠義。皆徒事と成のみか、死ンだ跡迄盜賊に、名を汚すのが口惜い、盜ミ騙も身欲にせぬ、女夫が誠を天道も。憐有て國次ヶの、刀の詮議濟迄の。夫トの命助ヶてたべ」と、心の内に。神佛。誓は。重き觀世音、

「補陀落や岸打つ波は、三熊野の。那智のお山に、響く、瀧津瀬一、年シ坊、誓うとむ〳〵の道を、排けたる。笈摺に。「同行二人」と記せしは。一人リは大悲の陰

○長町　大阪市日本橋筋一丁目より五丁目に至る[illegible]所謂[illegible]、[illegible]其の他の[illegible]町名である。

○一合取つても侍　[illegible]十郎兵衛は[illegible]櫻井主膳の中間「ちゆうげん」であつたによつてかくいふ。

○國次の刀　[illegible]

○[illegible]山寺如意輪觀世音、「後の世を願ふ心はかろくとも、佛の誓ひ重き石山」で

●[illegible]　西國三十三番の順禮歌で[illegible]

●補陀落や　瀧津瀬　[illegible]

●笈摺　[illegible]

○同行二人　一人は自分、一人は衆生をあはれ[illegible]

○大悲　一切の衆生をあはれんで、苦惱を救除さ[illegible]

頼む、ふる里を遥々、此處に、紀三井寺、花の都も、近くなるらん、順禮に御報謝ー」と、言ふも優しき國訛、「テモしほらしい順禮衆、ドレ／＼報謝進ぜう」と、盆に精げの志、「アイ／＼有難うござります」と、言ふ物腰から様はづれ、「可愛らしい娘の子、定めて連衆は親御達、國は何處」と尋ねられ、「アイ國は阿波の徳嶋でござります」、「ムヽ何じや徳嶋、さつても夫はマア懐しい、私が生れも阿波の徳嶋、そして父様や母様と一緒に順禮さんすのか」、「イヱ／＼其父様や母様に逢たさ故、夫で私一人り、西國するのでござります」と、聞てどふやら氣に懸かる、お弓は猶も側に寄り、「ムム父様や母様に逢たさに西國するとは、どふした譯じや夫が聞たい、マア其親達の名は何と云ふぞいの」、「アイ如何した譯じや知らぬが、三つの年に、父様や母様も私を祖母様に預けて、何處へやら、行かしやんしたげな、夫で私は、祖母様の世話になつて居たけれど、どふぞ父様や母様に逢たい顔見たい、夫で方方と、尋て歩くのでござります、父様の名は阿波の十郎兵衞、母様はお弓と申ます」と、聞て喫驚お弓が取付き、「コレ／＼コレアノ、父様は十郎兵衞、母様はお弓、三つの年に別れて、祖母様に育られて居た

・古郷を　遥ーなるらん　[illegible]
○順禮に御報謝　[illegible]
[illegible]
詞章したいに哀婉妙境に入る。「報謝」は索引を見よ。
○國訛　ここでは生國阿波國徳島の方言。
○テモ　さても。
○しをらしい　可憐な。（見索引）
○精げ　精米。これを「志」につづけて純眞潔白[illegible]
○物腰　[illegible]
[illegible]近松作「[illegible]」に「心もとなやあら運やさ、物越しも早嶋々と」。「[illegible]」に「ものごし＝伊勢物語及源氏に見えたるは物を隔てたる義也、又人の聲をいへり」。（見索引）
○様はづれ　身のこなし。身ぶり。
◇このあたりの對話極めて自然。興味の中心に向つて一歩ずつ近づく。
○西國する　[illegible]て來たいぢらしい姿が、ありありと目にちらつく。
○行かしやんしたげな　行かしやりましたげな。お出でになりましたさうな。

○取らるる命　十郎兵衛夫婦は盗賊となり、公儀のお尋ね者なのでかくいうた。
○年は　年齢。齢のほど。（見索引）
○飛立つ　おつとしてゐられず躍りあがる。雀躍する。
○よく〳〵の事　よくよく已むを得ない事情あつての事。
○ひよつと　「偶」にかの意を表す副詞。ひよつとしたら遂に。
○泣いじやくり　しやくり泣き。しやくりあげて泣くこと。近松作「傾城反魂香」に「聲を立てねはないじやくり」。

とは一疑ひも無い我娘と、見れば見る程稚顔、見覺の有額の黒子、ヤレ我子か懐しやと、言はんとせしがイヤ待テ暫し、夫婦は今も取らるゝ命、元トより覺悟の身なれ共、親子と言はば此子に迄どんな憂目がかゝらふやら、夫レを思へばなま中に、名乘りたてして憂目を見んより、名乘らで此儘返すのが、却ッて此子が爲ならんと、心を鎮め餘處餘處しく、「詞ヲヽ夫レはまあ〳〵年シはも行ぬに遙々の處を、能ふ尋に出さしやつたのふ、其親達チが聞てなら、嘸嬉しうて嬉しうて飛立ッ様に有ふが、儘ならぬが世の憂ふし、身にも命にも代て可愛子を振り棄、國を立退く親御の心、よく〳〵の事で有ふ程に、むごい親と必恨ぬがよいぞや」、「イヱイヱ物體ない何ンの恨ませう、恨る事は無いけれど、小さい時別れたれば父様や母様の顔も覺ず、餘處の小供衆が、母様に髪結て貰ふたり、夜ルは抱れて寢やしやんすを見ると、私も母様が有ルなら、彼の様に髪結て貰ふものと羨しうござんす、どふぞ早ふ尋て逢たい、ひよつと、逢れまいかと思へば、夫レが悲しうござんす」と、泣いじやくりするいぢらしさ、母は心も消へ入思ひ「扨も扨も世の中に親と成リ子と生るゝ程、深い縁は無けれ共、親が死ンだら子が先キ立ッ

たり思ふ様にならぬが浮世、此方もどれ程尋ても、顔も處も知らぬ親達、逢れぬ時は詮無い事、もふ尋ずと、國へ去んだがよいわいの」、「イヱ〳〵。戀しい父様や母様、假令何時迄かゝつてなと、尋ふと思ふけれど、悲しい事は一人旅じやてて、何處の宿でも泊めてはくれず、野に寝たり山に寝たり、人の軒の下に寝ては擲れたり。怖い事や悲し事、父ゝ様や母様と一ッ緒に居たりや、こんな目には逢ふまい物を、何處に何ふして居やしやんすぞ、逢たい事じや、逢たい」とわつと泣出す娘より見る母親はたまり兼「ヲヽ道理じや、可愛やいぢらしや」と、我を忘れて抱付前後。正體(ママ)歎きしが、是程親を慕ふ子を何と此儘去なされふ、いつそ打明ヶ名乗らふかイヤ〳〵夫レでは此子も同じ罪、其時の悲しさを思ひ廻せば去なすが爲と、「ヲヽ段々の様子を聞我身の様に思はれて、悲しい共情ない共、言ふに言はれぬ事ながら、兎角命が物種、健でさへ居りや、復逢れまい物でもない、コレ仕付ヶぬ旅に身を痛め、煩ひでも出りや悪ルい、何處をしやうどに尋ふより、其祖母様の方へ去んで居るとの、追ッ付ヶ父ゝ様や母様が逢に往てじや程に、悪い事は言はぬ、思ひ直して、是から直ッに國へ去んで、隨分健で視達ヶの、尋て行

○こなた　自分の方をいふ語なれど、轉じて相手方をいふ。あなた。そなた。

○なと　なりとも。

○てて　「と言つて」の約。ここの文は、附添〔つきそひ〕の居らぬ一人旅の女兒は泊められぬと言つてゐる。その泊めぬ理由は、相手が頑是無い子供であるから、宿賃料を請求しても、拂つてもらはれぬ時は損になるからである。この後の文に、お弓の言葉に「なんぼ一人旅でも、たんと錢さへ遣りや泊める」と見えてゐる。(徳川時代は、子供の一人旅を禁じてあつたといふのではない)。

○居たりや　「居たら」の轉。居たならば。

○何と　何として。どうして。

○爲と　子の爲になると思ひ。

⦿しやうど　當所〔あてど〕。めあて。近松作「嫗山姥」に「方角のわきまへなく、どこをしやうどに行くことぞ」。

○の　感動詞。なう。なあ。ね。

○追つつけ　間もなく。

しやるを待ッて居るのがよいぞや」と、宥め賺すを聞分ケて、「アイ〳〵忝ふござります。お前が其様に言ふて、泣て下さりますによつて、どふやら母様ンの様に思はれて。私や此處が去にとむない、どんな事なと致しませふ程に、申お家様ン、お前の側に何時迄も。私を置ィて下さりませ」。「ヱヽ悲しい事を言出して復泣すのかいの、先にから私も子の様に思ふて。爰に置キたい去なしとむないと、様様思ひ廻せ共、爰に置ィては如何も爲に成らぬ事が有によつて、夫レで情なふ去なすのじや程に、聞分ケて。去んだがよいぞや」と、言ひつゝ内へ針箱の底を捜して豆板の、まめなを悦ぶ餞別と、紙に包で持ッて出、「コレ何程一人旅でも、たんと錢さへ遣りや泊める。僅なれ共志、此銀を路銀にして、早ふ國へ去にや、必必煩ふてばしだもんな」と、銀を渡せば押シ戻し、「嬉しうござんすれど、銀は小判シと云ふ物をたんと持ッて居ります、そんなりやもふ参じます、忝うござります」と、泣く泣く立ッを引キ止め、「夫レはそふでも是は私が志」と、無理に持タして塵打拂ひ、「コレもふ去にやるか、名殘リが惜い、別れとむない、コレ今一度顔を」と引キ寄て、見れば見る程胸せまり離れがたなき憂思ひ、夫レと知らねど眞

○去にとむない　去に度うも無い。女兒お鶴が母親に逢うてゐるとは知らないで、「去にとむない」といふて焦れるのは、所謂蟲の知らせである。かくまで母親を慕つてなつくお鶴の言葉は、いかにも哀れである。
○申し　呼掛けの詞。
○お家さん　おかみさん。近松作「女殺油地獄」に「よい衆の娘子達やおいへ様がた」。
○豆板　豆銀とも粒銀とも小玉ともいひ、徳川時代に鑄造した銀貨であつて、豆狀をしてゐる。與へた豆板は五十匁ばかりであつたことが後文に見えてゐる。
○たんと　澤山に（見索引）
○ぜぜ　「ぜに」（錢）の頭の一音を躍らした小兒語。
○ばし　（見索引）
○たもんな　たまはるな。
○そんなりや　「それなれば」の訛。
○塵打拂ひ　女兒の衣服や脚半などに附いてゐる塵を打拂うてやる。兒を思ふ母性愛が目にちらつく。まことに母子恩愛の極致を見せてゐる。
○離れ難なき　離れ難きを強めていふ。「なき」は甚しい意にいひ、「あらけなき」「はしたなき」などの「なき」と同じ接尾語であつて、「無き」の義ではない。
○それと知らねど　母は我が子であるを知つてゐても、子は我が母であるとは知らねど。

評釋 江戸文學叢書 月報

昭和十年十二月八日印刷
昭和十年十二月十六日發行
東京市小石川區音羽町三ノ一九
大日本雄辯會講談社
編輯兼發行人　川村新次郎
東京市小石川區諏訪町五六
印刷所　常磐印刷所
印刷人　奈良直一

近松門左衛門以後の淨瑠璃

樋口慶千代

劇作家近松門左衛門は、承應二年に生れ、享保九年に歿するまで、七十二年の生涯を劇詩の向上に捧げた一世の文豪であります。

彼は不易の人情と義理とを絡ませて、彼の心に徹底する道德觀を劇詩の上に絶叫しました。そして前人未踏の境地を開拓し、淨瑠璃[illegible]を大成したのであります。彼は實に我が國空前の國民的大劇詩人であります。これに就いては、既に「傑作淨瑠璃集」上卷に詳しく述べて置きました。

竹田出雲は、大劇詩人近松に學んだ淨瑠璃作者であります。そして[illegible]出て淨瑠璃を書きました。彼は其の經驗から淨瑠璃の構成に就いて、近松の短所を補ひ、且つ技巧上にも非常な進歩を示しました。從つて竹田出雲の時に到つて、綜合藝術としての淨瑠璃はその最盛期に達し、延享・寛延の頃には義太夫劇の黄金時代を現出し、義太夫文學の名篇佳作は、二の時に於て最も多く出ました。其の後も數々の名曲が出ましたが、いづれも出雲の作に倣つたものが多いのであります。

「淨瑠璃譜」延享二年七月「夏祭浪花鑑」の條に、「操(あやつり)段々流行して歌舞妓は無きが如し、芝居表は數百本の幟(のぼり)・進物等數を知らず、東は豐竹・西は竹本と相撲の如く東西に別れ、……」を以て當時に於ける人形淨瑠璃の隆盛を想見されるのであります。

淨瑠璃構成の要素

淨瑠璃の文章は、いづれも義理の精神を表現し、普遍の人情を描寫して、そこに義理・人情の葛藤(もつれ)を縷説(るせつ)し、又は悲しい運命と情愛のもつれあひなどを細敍して、人心の健(けな)げさ、美しさを現はしてをります。そして近松の頃には、音樂的表現と、人形の舞踊と、繰(からくり)装置的表現とが人形淨瑠璃構成上の要素とされてゐたのであります。

……つて、詩的韻律的な所が多いのであります。三味線を伴奏樂器として、對話の中にも、曲節をつけて歌ふやうに演ずる部分もあり、殊に道行や景事(けいじ)や物盡(ものづく)しや節事(ふしごと)などの所は、人形の舞踊的表現が之に伴つて、優艷な情景が展開されたことであらうと想像されます。それ等が總て相調和する事によつて、人形淨瑠璃の鑑賞が成立つのであります。

また好奇心をそそり人目を喜ばす爲には、色々の手妻(てづま)や、操(あやつ)からくり装置が、殊に時代物の表現に多く利用され、それによつて大衆の感興はいやが上にも引つけられたのであります。

近松の作品と出雲及び其の後の作品との比較

(一)近松の時代物の作品を考察すると、餘り必要とも思はれない歌謠や故事などが隨所に取入れてあります。また語り出しやこれに類した所でも、太夫がそれらの文を語る時に、さやうな文ではそれに合はして人形の操(あやつ)りやうがあるまい、恐らく人形は動かないで、只鳴物入(なりものいり)の太夫の音曲的朗讀ばかりが續けられたのであらうと思は

謹告

本月報の前號で第五回は「讀本傑作集」を配本するやうに豫告致しましたが、都合に依り急遽豫定を變更し「傑作淨瑠璃集下」をお送りすることに成りました。

第一回配本以來、待望久しかつた本書が樋口教授の御苦心に依りこゝに完成しました。必ずや十分に御期待に副ひ得ることゝ一同欣喜いたして居ります。たゞ遽かの變更のため延引の段は幾重にも御寛恕願ひ上げます。

評釋江戸文學叢書編輯局

また音樂や人形の舞踊の伴つてゐる詞章は、概して頗る難澁な語句で綴られてあります。殊に近松の時代物は、謠曲・幸若舞曲・說經・古歌・故事・傳說・歷史などの多方面から材料をとり、節事・歌謠・物盡し・景事・道行などを織込み、人形の動作と舞踊の興味と相俟つて、效果を擧げようとしたのでありませう。が其の文章は机に凭つて讀んでですら、容易に解せられないものが多い、まして太夫の語るのを聽いて、すぐに其の文意がわからう筈がありませぬ。されば觀客は、音曲や舞踊を聞いたり見たりして慰みながら、太夫の語つてゐる難解な文句に對しては、恰も坊樣が經文を讀誦するのを聽いてゐるやうな、おぼろげな興趣を感じてゐたものでありませう。

これ等の缺點を見てとつた竹田出雲は、近松の時のやうに音樂・舞踊を淨瑠璃の要素としたのでは、大衆の心を引つけて行く事はとても六ケ敷いと考へました。そこで工夫を凝らして、音樂・舞踊を淨瑠璃の要素としないで、詞章の上に輕く取扱つたのであります。

（一）近松の時代物には、超自然的・夢幻的な大げさな誇張を敢てせる部分が多く、まことに架空的・空想的な所が多いのであります。そして前述の如く、それ等を演ずるに繰装置的表現を廣く應用して、觀客の好奇心をそそつたものであります。斯くして近松は幻華藝術を大成したのでありました。然しながらこれ等の不自然さや奇怪千萬な事柄は、低級な人々には喜ばれたでありませうが、劇的價値を甚しく低下するものである事はここにいふ迄もありませぬ。

これ等の缺點を看破した竹田出雲は、架空的・空想的な分子を少くし、現實的で自然味に富んだ、概して寫實的に、心理的に、心の動きや微細な動作までも巧に描寫しました。なほ近松よりも一層巧に義理・人情を強調し、更に工夫を凝らして其の場面を眞に迫るやうに細かく寫しました。そして嘗て用ひた繰装置的表現などは遂に廢してしまつたのであります。

（二）其の他一篇の構成や、對話や舞臺面の變化波瀾などに特に意を用ひ、最も智慧を絞つて趣向を考案したものであります。

以上述べました如く、出雲は近松の非戲曲的な缺點を補ひ、舞臺效果を一層著しくし、調和ある藝術に仕上げて、人形淨瑠璃の面目を一新しました。乃ち出雲は我が淨瑠璃劇の展開の上に、非常な發達を齎した大功勞者であります。

後世、近松の時代物が歌舞伎に改作されて、上演されてゐるものは「國性爺合戰」の一部分の外には殆んど無く、其の多くは作品の出來た時に操芝居に上演されただけで終つて居ります。それに反して出雲及び出雲に倣つた後の作者の作品が、現今に於ても操人形淨瑠璃芝居や歌舞伎に往々上演されて、永く生命を保つてゐる所以のものは、蓋し前に述べた理由によるものでありませう。

竹田出雲後の人形淨瑠璃の變遷

竹田出雲後の作者は、いづれも出雲に倣つたものであります。そして地の少い淨瑠璃となり、太夫の曲節や音樂的表現法は時勢と共に進歩して行きました。要するに淨瑠璃は歌舞伎に近づいて劇的效果を擧げるやうになつたのであります。嘗ては歌舞伎を壓倒して隆盛を極めた人形淨瑠璃も、次第に歌舞伎に接近するやうになつて、遂にはその勢力に壓倒される事となりました。誠に世相の變遷、趣味好尚の推移は計り難いものであります。現今では僅かに大阪の文樂座のみが殘存し、操の本格的形式を示して、ゆかしい古典藝術の香をとめてゐます。

本書に載せたものは、近松以後に於ける代表的の傑作で、曲中に內在する日本精神の顯著なる上からも、題材や結構脚色の上からも、舞臺生命の上からも、文學的價値の上からも、それ〴〵特色を有してゐるものであります。「生寫朝顏話」及び「壺坂」の如きは、淨瑠璃の末期に於て光芒を放つてゐる名作であります。（「壺坂」は明治二十年二月大阪の彥六座で初演されたもので、江戸時代でありませぬから本書には收めなかつたのであります。）

壺坂の梗概　西國靈場第六番の札所大和國壺坂山南法華寺のほとりに住む座頭澤市は、眼を病んで盲目となる。所が妻のお里が毎夜外出するので、澤市は妻に愛人が出來たのであらうと邪推して嫉妬に燃えた。が其の實お里は、夜な〳〵南法華寺の觀世音に祈願を籠め、夫の眼病平癒を念じてゐるのであると聞いて、澤市は妻の貞心に感動し、且

つ癒らうとも思はれぬ眼病で、いつまでも厄介をかけるを氣の毒に思ひ御禮參りと稱して家を出で、寺の裏の谷間に身を投げた。お里はこれを知つて驚き、悲しみに堪へず、自分も其の谷に身を投げる。と、忽ち觀世音の靈驗著く、澤市・お里共に蘇生して、澤市の眼も開き、夫婦相擁して嬉し涙にくれる。

人口に膾炙する名曲でも、現代人の批評眼から見れば、全體に行渡つて理路のいかがはしい點があり、不自然な處も往々見當るのであります。

昔から淨瑠璃や脚本には、餘りに明白な史實を牽强附會して荒唐無稽な事を作り、論理や自然味などを少しも顧慮せず、中には技巧に過ぎた作者の絡繰が見え透いてゐる物すらあります。蓋し往時の劇作者は、芝居は歴史を演ずるのでなく、道義本位のものであると考へてゐたので、史實などに捉はれるのは、寧ろ藝術味に乏しいものとして輕んじました。其の爲に實拍子もない牽强附會を敢てし、目先の變化や意外などから來る感動を大衆に迎合はせて、面白く作り上げる事を以て能事と心得てゐたのであります。從つて荒唐無稽であるからとて一概にこれを排斥するのは見當違ひなのであります。が劇に就いての鑑賞眼が非常に進歩した今の人々には、甚しく興趣を減殺するものである事は論ずるまでもありません。

作者に就いて

近松の頃は、作者一人で全曲を書いたのでありました。が竹田出雲の時代となると、作者一人で全曲を書く事は稀で、多くは數人の合作に成つて居ります。つまり一段毎に作者が違ふのですから、各段毎に山も當て場もあつて、觀客や聽衆を喜ばせる事に於て成功したのであります。が其の一方には各作者の優劣によつて、構想作文の上に於ても、各段に格別の巧拙があるのであります。

又全曲を貫く筋に就いても、一人の作よりも合作の方が、これを統制するのに隨分骨の折れた事でありませう。出雲の如き名作者でも、ややもすれば統一を缺きがちであります。ましてそれ以下の作者では、各段毎に巧拙の差異を生じ、統一の上にもあき足らぬものがあるのであります。

私は、人口に膾炙する優秀な名曲を選擇して本書に載せながら、其の全曲を評釋する事を敢てしなかつたのも、これ等の點を考慮したからであります。即ち全曲を讀んで行くと、だれる所があつて讀み疲れ、折角の興味を殺がれるであらう事を氣遣ひました。その爲に、面白く名高い妙文に成る段のみ本文を擧げて評釋し、他は梗概によつて、全曲との關係を明らかにするに止めました。(然し斯く申せばとて、通し物がよくないといふのでは決してなく、ただ缺點のある事を申したに過ぎませぬ。)

感　想

何といつても近松は絕世の大文豪でありました。彼が開拓した優れた格調と、非凡な地の文や對話などから成る、所謂近松情調は、聞けば聞く程面白く、讀めば讀む程慕はしくなる妙文であります。其の後の出雲は、詞章に於てこそ近松に劣りましたが、劇の展開と舞臺效果とに偉功を立てて、人形淨瑠璃の黃金時代を現出するに至らせ、そして近松と共に、後世の作者に淨瑠璃文學構成上の範を垂れたのであります。

私はこれ等の名作者の輩出した京阪を回顧し、且つ其の地方の人人が、これ等の藝術家を保護して下さつた事を追想して、懷しさに堪へぬのであります。そして今もなほ文樂座が、人形淨瑠璃の傳統精神を存續して氣を吐いてゐるのに對して感慨深く、これに敬意を拂ふと同時に、この我が國特有藝術の、いつまでも凋落することなく、存續するやうに祈ると共に今後、作詞者・作曲者・演技者に大天才が出て、これを維持してくれねばならぬと思ふのであります。

「義太夫文學論」に就きましては、本叢書の月報第一號に述べて置きましたから御覽下さい。

「義太夫文學論」から引續いてこの文を書いたのは、義太夫文學が我が古典藝術の一として、文學史上に燦然たる光を放つてゐる事を重ねて申し述べ、この方面の研究熱が盛んになり、斯界に大天才の現はれてくれよかしと希ふが故であります。本叢書の「傑作淨瑠璃集」に筆をとりました事も、優秀な淨瑠璃は日本精神を鮮明に傳へて、非常に興味もあり、文學的價値も高いものである事を、世間の人々に十分に知つて戴きたいといふ、その熱望から發したものであります。(完)

滑稽本の代表作を語る

三田村鳶魚（談）

滑稽本は江戸に生れ江戸に發達した文學でありまして範圍は何處までかと言ひますと、それは先づ三通りの説があるやうです。その第一は寶暦度に出版された『下手談義』以後のものとする説、第二は『膝栗毛』このかたとする説、第三は風來山人の系統を引くものとする説であります。

が然し、その孰れにもせよ、滑稽本としての條件が完備されたのは『膝栗毛』以來のものであると思ひます。

『膝栗毛』は御承知の通り十返舍一九の作で、享和二年に初編が書かれ、文化六年に完結した八編十八册のものです。

元來一九といふ人は、實に幅の廣い作者で、洒落本・黄表紙等にも多數の作を遺して居りますが、『一九あつての「膝栗毛」か、「膝栗毛」あつての一九か』とまで言はれるだけに、此の『東海道中膝栗毛』は何と言つても彼の代表的なものであります。此の本は、當時餘程好評であつたと見えて、初めは極く短かくて完結させる積りで、第二編を後編としてゐますが、その後豫定が屢〻變更されて十八册の長篇になつたものゝやうです。最初の篇は浮世道中とあるのに、後には東海道中となつて居たり、發端がずつと後れて文化十一年に出來たりしてゐるのを見ても肯かれます。

では何故『膝栗毛』がそんなに評判になつたのでせうか。それには色々理由が擧げられますが、『江戸ッ子』を主役に使つたといふのもその一つでありませう。八代將軍吉宗が學問を奬勵して以來、漸く江戸に讀書熱が起り、京坂の文化は東に遷つたのでありますが、それでも初めの讀本（よみほん）の時代は多く武士階級を取扱ひ、まだ民衆文學とまでは行きませんでした。それが、洒落本に到つて町人を扱ふやうになりましたが、矢張り旦那樣程度のものに取材したので、それと同じ程度の階級で占められてゐた讀者層から見れば、さう目新しいものではなかつたのです。そこへ此の『膝栗毛』が現はれて、長屋連中、即ち所謂『江戸ッ子』の氣風を現出したのですから、當時の讀書階級であつた武士や旦那樣階級の人達に取つては、斬新なものであつたに違ひありません。同時にさうした讀書人が、自分より以下のものゝ踊り狂ふ姿を見る時、自然と自分の位置が高所にあることを感じて、そこに淡い誇りを滿足させる事が出來たのだらうと思ひます。

それともう一つ、從來の黄表紙や泣本や洒落本などが、段々教訓的な、或は怪談めいた、又は敵討ちのやうな眞面目なものに傾いて來た際ですから、をかしみを專らとした『膝栗毛』が人氣に投じたのも尤もな話であります。

元來此の小説は江戸の小咄から出てゐて、その小咄を幾つかつなげる爲に、道中といふ自然なくさりを用ゐたものと言へませう。又、彼が永らく大坂に居た關係で、その當時一般の流行であつたにわか（俄）の趣向をもそれに應用したものでありませう。大坂にわかは京都で發達したとも言ひますが、大坂に於て最も殷んになりました。祭りの時、その行列を賑やかにする爲に出來た愛嬌で、餘り言葉を出さずに妙な風をして歩いたのが、段々と大道藝として行はれたもので、中には小屋を立てゝやつたものもあります

が、多くは流して歩いたやうです。

かうして大坂のにわかの趣向を取入れて構想し、その特性である短篇的なものを、東海道といふ背景によつて幾らでも長く連續させる事が出來たのです。諸所に挿入されてゐる狂歌は、さうした一つ〳〵の短かい話に落ちとして入れたと見る事が出來ます。從つて此の狂歌の數を見れば、大體幾つの趣向から成つてゐるかと言ふ見當がつく譯であります。

さて、かうして『膝栗毛』は江戸の人氣を沸騰させましたが、其の作の内容は、田舍者を馬鹿にして得意がつてゐながら、矢張り金力と傳統的文化に榮えた京の人達の前では、全く、輕蔑されてゐます。これでは『江戸ッ子』自身の誇りが許しません。どうしても江戸の土地にあつて、思ふ存分ふざけて見たい――そんな氣持も起つたことでせう。

それに又、其頃、江戸に於ては、落語が一般民衆の人氣に投じて非常に盛んになつて來ました。殊に當時有名であつた三笑亭可樂は、從來短かい小咄程度に止まつてゐたものを長く延ばして、面白をかしくし、寄席のお客を相當長時間滿足させる事に成功した人でありました。さうした落語の特徵を應用して、之を小說風にしたものが、式亭三馬の作『浮世風呂』と『浮世床』とであります。これは孰れも江戸を背景として、自分達江戸人の生活、否、武士町人の下に置かれた長屋連中の赤裸々な生活をぶちまけてゐるのです。而も一つは風呂の中であり、一つは髪結床であり、双方共に限られた狹い背景の中で、讀者を面白がらせ笑はせてゐます。それは丁度、可樂などの落語家が、扇子一本で寄席の高座に立つて、而も身振り手振りを成る可く出さぬやうにしながら、聽衆をどつと笑はせようといふ行き方に類似してゐます。これが又、その當時の民衆の嗜好に投じた所以でありませう。

『浮世風呂』は四編九册からなり、文化六年に前編を出し、同十年に完結して居ります。初編は男湯、二編・三編は女湯、四編はまた男湯となつてゐます。一九が大坂のにわかの仕組みを取入れて人物の動きを主とし、又移動的に背景を變へて行つたのに對し、三馬は高座の落語のやり方を取つて、一定の場面で、殆んど同じ人物を働かせて人情の動向を深く穿つといふ行き方を持つてゐます。かうした限られた圍ひの中にあつて、人を飽かさずによくも長文を綴つたといふ點は、感心すべきであると思ひます。

下つて感和亭鬼武の『舊觀帖』は前述の江戸ッ子の誇りを飽くまで滿足させようとして、一人の田舍婆さんと若者を引張り出して、これに江戸見物をさせ、そのマゴ〳〵する樣子を見て喜んでゐるといふ貌であります。

此の當時、世には豆藏といふものが行はれ、大道で口から出まかせを喋べりながら色々な藝をして見せました。中には手品、籠拔けなどをするものもあり、場合に應じて門附けをするもの、小屋掛けしてやるもの、或は舞臺に立つて演ずるものなどさへありました。

江戸を知らぬ老婆が、錢湯へ行つたり芝居を見たりして、喋べり散らしながら滑稽を演ずる樣は、一脈豆藏と相通ずるものがあるやうに思ひます。

私は滑稽本の評釋をするに當つて、以上のやうな滑稽本の起らねばならなくなつた所以を時代的に觀察して、その系統を明らかにすると同時に、夫々特殊の味を持つ三つの代表的作品を舉げて、滑稽本の輪廓を描き出したいと思つたのであります。幸にもこれによつて幾分なりとも滑稽本の全貌を窺ひ知る事が出來たら、私の目的は達したといふべきであります。　（文責在記者）

三田村鳶魚著

滑稽本名作集（第六回配本）豫告

本書は江戸研究家として世に知られた三田村鳶魚先生が、多年の蘊蓄を傾けて評釋されたもので、滑稽本の範圍、成立ち、本質等につき精しく研究された堂々百頁の長論文を卷頭に掲載された。

本文は、一九の『膝栗毛』か『膝栗毛』の一九かと云はれる十返舍一九の名作『東海道中膝栗毛』全編と、式亭三馬の傑作『浮世風呂』全編、及び感和亭鬼武の『舊觀帖』全編とから成つてゐる。

○滑稽本の解說

先づ滑稽本の字義から筆を起して滑稽本の範圍を考察し、その第一說『下手談義』からといふ說に就いて詳細なる檢討を試みてゐる。

次に八代將軍吉宗の法律、經濟、教育方針に及び、又神・儒・佛三教の當時の說教振りと民衆の歸趨について論じ、談義物の起るべき由來と、洒落本、人情本から滑稽本に轉じて行く道程を考察してゐる。

續いて一九、三馬、鬼武、鯉丈に就いて各々その特徴を擧げ、それ等作者の各作品に對する見方を深く究めてゐる。

著者の此の方面に於ける研究は實に獨特のもので何人も追隨し得ない所、此の著者にして初めて云ひ得る卓見である。



此の懇切丁寧、到れり盡せりの解說を味讀する時、本文の頭註と相俟つて初めて滑稽本の眞の良さを了解含味することが出來る。

○東海道中膝栗毛

本書は誰も知る十返舍一九の快著である。全八編十八册、享和二年に筆を起して文化六年に完結してゐる。一九が當て東海道を旅行し、その見聞を基礎として構想を廻らしたのは想像に難くない。又著者三田村先生の所謂大坂にわかの影響も多分にあつたらうし、能狂言を取入れた事も所々の挿話に依つて伺はれる。

江戸は神田八丁堀に栃面屋彌次郎兵衛といふ者あり、知己の喜多八を同道して伊勢參宮に出かける。途中あらゆる滑稽、種々な失敗を繰返しつゝ江戸ッ子氣質を思ふ存分發揮させて行く。

拔參り、物貰ひの木賃泊、馬士の風俗など、當時の俗情は穿ち得て妙と言ふべく、宿屋の飯盛女、途中の縮尻談、泊々の悪戯等、腹の底から込み上げる可笑味の中に人情風俗の種々相を穿つてゐるのは本書の價値ある所以であらう。

彌次郎兵衛、喜多八の江戸出立の由來を發端として、

初編は　江戸から品川を經て箱根に至る道中

二編上は箱根、三島、蒲原間

同　下は蒲原、府中、岡崎間

三編上　岡崎、大井川、日坂間

同　下　日坂、濱松、荒井間

四編上　荒井、吉田、赤坂間

同　下　赤坂、宮、桑名間

五編上　桑名、四日市、參宮道

同　下　追分、津、山田間
同追加　伊勢參宮
六編上　伊勢、伏見から京へ
六編下　京の巡覽
七編上　同
同　下　京三條より淀の大橋へ
八編上　大坂巡り
同　中　同
同　下　長町住吉を巡り大坂出立

となつてゐる。

○浮世風呂

『膝栗毛』に於ける道中の展開は廣くして變化あるに反し、風呂屋といふ狭い不自由な一局所に於てその變化を人物の描寫に求め、それを濃く寫つたものそれが「浮世風呂』である。本書は式亭三馬の作で四編九册、文化六年に前編を出し同十年完成。初編と終りの第四編は男湯で、二・三兩編が女湯の卷になつてゐる。序に曰く



『つらつら監みるに、錢湯ほど捷徑の教諭なるはなし。其故如何となれば、賢愚・邪正・貧福・貴賤湯を浴びんとて裸形になるは、天地自然の道理、釋迦も孔子もお三も權助も、産れたまゝの容にて、惜しい欲しいも西の海、さらりと無欲の形なり……總て錢湯に五常の道あり。湯を以て身を温め垢を落し病を治し草臥を休むるたぐひ則仁なり。桶のお明きはござりませぬかと他の桶に手をかけず、留桶を我儘につかはず、又は急いで明けて貸すたぐひ則義なり。田舎者でござい、冷物でござい、御免なさいといひ、或はお早い、お先へと演べ、或はお靜に、お寛りなどいふたぐひ則禮なり。糠・洗粉・輕石・絲瓜の皮にて垢を落し、石子で毛を切るたぐひ則智なり。あついといへば水をうめ、ぬるいといへば湯をうめる。お互ひに背後を流し合ふたぐひ則信なり。』と。即ち錢湯を中心として其處に現出する貴賤、賢愚の風俗を赤裸々に且精細に描き出さんとしたのが作者の主意でもあり、又本書の特徴でもあらう。三田村先生の所謂狭い天地に於てあらゆる實相を取扱つた所に落語的な味を持つ事を見るべきであらう。

○舊観帖

感和亭鬼武の作、全三編、四册より成る。序に示す如く浮世物眞似といふもの能く人の心を慰め樂しましめ、腹の筋をよらせるといふに倣つて鸚鵡に似たる『舊觀帖』（九官鳥）と題し、江戸の名所を背景として老婆を中心とする田舎者四人を登場させ、活躍させたのが本書である。その第一編は



第一回　馬喰街寓居之條
第二回　戯場看取並老婆説話の條
第三回　愛宕山眺望の條

次の第二編は

上之卷　自柳原始至湯島止
下之卷　上野山見物

第三編は

上卷　淺草の段（鬼武著）
下卷　兩國の段（一九著）

となつてゐる。讀者は本書によつて田舎者の赤毛布ぶりを揶揄しつゝ、自ら江戸人の誇りを感じ滿足してゐたことであらう。それが又本書の讀者と作者との共通な心理であり、本書が受けた所以であらう。（終）

『俳諧名作集』の補訂（一）

頴原退藏

本叢書編輯部員諸氏の綿密を極めた校正によつて、誤植は全く見出されないかと思はれるくらゐである。たゞ筆者の疎漏から校正中看過した誤や、頭註に一寸加へておきたいと思ふ所は少くない。今氣づいたまゝを左にあげておく。なほ此の後も機を得て、月報紙上で訂誤補正を加へたいと思ふ。讀者諸氏からも教示を得たら幸である。

九七頁　本文六行目「市に入つて」は「市に入つて」の誤。隨つて索引にこの句を「し」部中に入れたのも改める。

二〇七頁　玄峯集の頭註中「門人旨原の編」の六字を削る。なほ旨原は淸水超波の門人である。

二六九頁　「長松が」の句の解釋上、蓼太撰「七柏集」中に見える蓼太の附句（前髮とつて親の名で來る）は、參考に資せられる。

三〇二頁　浪化筆蹟の頭註に「この文は『その花』にも出て居る」と加へる。

三一一頁　凉菟の略傳中歿年を五十七としてあるが、右は通說に從つたので、追善集「其曉」には五十九歲とある。異說として頭註を加へておきたい。

三一九頁　「須磨人は」の句の頭註に「なほ元祿九年の印南野、同十二年の小弓集には『須磨の人よくは活きけり秋の暮』とある」と加へる。

三二〇頁　頭註の化鳥風については、その後不角撰「正風集」の自序により、當時やはり不角も化鳥と呼ばれた一人である事が明かにされた。しかし必しも不角一派のみに限つたわけではないのだが、後年不角の系流が最も榮えたので、遂に化鳥風即ち不角風とされるに至つたものであらう。

三二三頁　水間沾德の略傳中二行目「露葉」を「沾葉」に改む。

三六一頁　水語の句中左の一句を脫してゐる。耳に入るそれさへ遠し枯尾花。（寬保三年—古すだれ）

五〇一頁　本文九行目「氣色を旨として云々」について、頭註に「この事鬭淸水物語に見ゆ」と加へる。

六一五頁　有明しの頭註に左の一句を加へる

時鳥たゞ波渡の灯のありあかし　飯塚松白（芭蕉盟）

六二四頁　頭註に古く靑鷺を夏季とした例を見當らぬと記したが、「後れ馳」（元祿十一年刊）には夏部に靑鷺の季題を揭げて數句を錄して居る。尤も同書は特に新しい季題を多く交へたらしいが、とにかく靑鷺は當時すでに夏季とされた事は明かである。

七八三頁　頭註「江滝」について、新村出博士著「花鳥草紙」（一五二頁）によれば、草木頌十五首の作があるといふ。その中に茶の頌があるのではあるまいか。なほしらべて見たい。

×　　×　　×

なほ新村出先生から左の通り示教を受けた。こゝに附記して補訂にかへ、かつ先生の御好意に謝する次第である。

二〇四頁　「何とおよるぞ舟の中」は、むしろ「松の葉」卷一飛驒組に載せてあるあの小歌（退藏云、「船のなかには何とおよるぞ、苫を敷寢に楫を枕に云々」とある。）より直接出づるものとする方可然か。

五四三・五四四頁　「梅が香や隣は荻生惣右衛門」。徂徠のこと、あの解釋は如何にやと存候。（退藏云。作者珪琳が江戶座の人であるのから考へ、やはり先生の御注意の如く、あの句は、和漢の對照と解すべきであらう。即ち梅が香を國粹の象徵とし、それに對して支那崇拜の物茂卿をもつて來て些か皮肉つたのである。）

○何處をどうして：觀音様　お鶴の思ひ浮べる心を前附けて淨瑠璃にかかる文である。
○たべ　「たまへ」の約。
・父母の恩…頼もしきかな　[illegible]
○たも　給はれ。たもれ。給へ。
○長の[illegible]　[illegible]い旅路に[illegible]い日數をかさねて。
○路頭に立たす　道ばたに立たせる。家を出て[illegible]
○どうど　[illegible]　この語は近松の文の中にも「どうど」「どうど」共に用ひ[illegible]
○消え入る　魂も消え入る。
○夫の思案　夫の工夫によつて免かれることも[illegible]
○程は行くまい　どれ程も行くまい。近くにゐるであらう。
○子に迷ふ道　「後撰集」藤原兼輔の歌に、「人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道にまどひぬるかな」。ここの文意は、子を尋ねて迷ひ出た道は、[illegible]なつたといふのである。
○入相の鐘　日沒時を入相といひ、寺院では鐘を[illegible]ので、[illegible]と日[illegible]ていうた言葉。
○おじや　[illegible]

の血筋名残り。惜げに、振返り、何處をどふして尋たら、父様や母様に逢れる事ぞ。逢はしてたゞ、南無大悲の觀音様。父母の恩も深き、粉河寺(子可愛)。佛の誓、頼もしきかな、泣く〳〵。別れ行跡を見送り。見送り伸上り「コレ娘ま一度此方向いてたも」、折角長の海山越へ、艱難して憧れ尋るいとし子に、不思議と逢は逢ながら名乗らで去なす母が氣はどの様に有ふと思ふ。狂氣半分半分は死で居るわいの。まだ生先の有子をば親故路頭に立すかと其儘其處に、どうど臥し消へ入、計り歎しが、起き直つて涙を抑へ、「イヤ〳〵どふ思ひ諦ても、今別れては又、逢事はならぬ身の上、假令難儀が懸らば懸れ。又其時は夫の思案。程は行まい追付て。連て戻らふそふじや、そふじや」と子に迷ふ。道は親子の別れ道跡を、慕ふて、尋行。

既に其日も、入相の鐘の工面も引違ひ。我家へ戻る十郎兵衛が。順禮の子の手を引て、「女房共戻つたぞ」と。内へ這入つて見廻し〳〵「こりや日暮紛れに火も點さず、何處へ往た」と呟き〳〵行燈點し煙草盆提げて、どつさり高足座。「コレそこな子爰へおじや。今戻る道筋をソレ、乞食共が寄り集り、汝が身を剝で銀

取ふとぬかして居るを聞た故。夫レで己が連レて戻つたが、汝が身や銀でも持ッて居るか」、「アイ餘處の伯母様ンに貰て持ッて居まする」、「ム、何かそんな事を悪ル者共が頑張つて、ヲヽ危ない事危ない事、そして其銀はどれ程有。ドレ伯父に見しや」、「アイ是程ござんす」と貰た銀を差出せば、「ム、こりや小玉が五十匁計リ、もふ外に銀は無いか」。「イヱまだ小判ンと云ふ物がたんとござんす」、「何じや、小判ンがたんと有ル。アノ小判が、てもマア夫レは好い物を持ッて居やるの、コレ此邊は用心が悪ルいによつて、其様に銀持ッて居ると、今の様に人に取れて仕舞ふ、ドレ伯父が預かつてやらふ爰へ出しや」と、武太六に約束の足にもなろかと心の工面。騙し掛くれど合點せず「イヱ〳〵此小判ンの財布には、大事の物が包で有ル程に。人に見せなと祖母様が言はしやんしたによつて。誰レにも遣る事成りません」と、大事にする程なほ見たく、威嚇して見んと目を瞋らし、「其様に隠すと爲にならぬぞよ、痛い目せぬ内ちやつと伯父に預ヶて置きや」、「それでも大事の銀じや物」、「サア大事の銀じやによつて持て居ると爲にならぬ、片意地言はずと預ヶておきや」と、言ふ程怖がる子供心、「こんな所に居る事嫌や」と逃出る首筋引ッ摑ミ

○事を　事を知つて。

○小玉　豆板（その條を見よ）のこと。

○たんと　「足りぬこと」の約。たくさん。（既出）

○今のやうに　今のやうに乞食等につけねらはれて。

○有様（ありやう） ありてい。實際。（見索引）

○たも （既出）

○觀音様へも 連れて參る [illegible]

○借して 「貸して」を「借して」と書いたのは、西鶴本などにもある。

○南無三寶 つらい時に佛の救助を乞はうとし[illegible]しまつた と思ふ時に發する詞。

○目が廻ふ 目をまはすこと。

○敗亡 [illegible]

○それで死んだか [illegible]死したのであるから、[illegible]もない。（お鶴は窒死でもあらうが、人は[illegible]れても死ぬ。「源氏物語」の夕顔は、[illegible]

○母者人 「母おや人」を古くから「母者（じや）人」と書き、おのれの母を呼ぶに用ひる詞。

めば、「アレ怖い怖い」と泣出す、「コリヤやかましい〳〵近所へ聞へる、聲が高い」と口へ手を當て、「コレ怖い事は無い、有様は私も、ちつと銀の入ル事が有によつての、何ぼ程有ルか知らねど、二三日預ケてたもや、其内には又拵て戻そふ程に、まあ夫レ迄は此方の内に緩りつと逗留仕や、其觀音様へも伯父か連レて參る、ヲ好い子じや、聞分ケてサア、ちやつと借てたも」と、兩手放せばがつくりと、其處へ其儘倒るゝ娘、「コリヤ〳〵何とした〳〵、どふした」と、言へ共更に物言はず、息も通はぬ即死の有様、「ヤ南無三寶、コリヤ〳〵目が廻ふたか、コリヤ、順禮の娘やい」と、呼生け呼生け口押シ明ケ「ヤコリヤ 氣付ケも水ももふ叶はぬホイ」、はつと計リに俄の敗亡、「ヌヽ聲立テさせじと口へ手を當テたが、思はず息を止め、夫レで死ンだか、ハアヽこりやマア不便」と計リ呆、果たる折柄に、表へ聞ゆる足音トは、女房ならんと蒲團で死骸、包ミ傳ひを息急と戻るお弓が、「ヲヽ、此方の人戻つてか、サア〳〵ちやつと往て尋て尋て」と、急き切ル女房「ヤイたわけ者、跡先キも言はず尋てとは、何を尋て」、「サアお前の留守へ、國に殘した娘のお鶴が、不思議と爰へ來たわいの」、「ヤ何じや娘が來たとは、そりや母

○お尋　公儀からお尋ねになつてゐる罪人。
○今知れぬ　今捕はれるかも知れぬ。

者人と一處にか、如何して來たぞ」、「イヱ〳〵お鶴一人ッでござんする、樣子を言へば長い事、不思議に娘と知つた故、飛付ヶ樣に思ふたれどな、悲しい事はお前も私も、お尋の身分ゝなれば、今知れぬ身の罪科を、何にも知らぬ娘に迄倶に難儀を掛けふかと、わざと親子の名乘ッもせず、氣強う言ふて此内を去なした事は去なしたが、跡で思へば思ふ程、どふも捨て置ヵれぬ故、直ヶに跡から尋に行たれど、影も形も知れぬ故お前と手分ヶして尋ふと思ふて戻つた」（後文略）

第九（神社境内）

登場人物の主な者

小野田郡兵衛（右門之助の國家老）　[illegible]　十郎兵衛（盗賊）

櫻井主膳（右門之助の重臣）　郡兵衛の家來大勢

梗概

阿波國徳島の町外れの神社境内で、小野田郡兵衛は悪僧海藏院に逢ひ、一子相傳秘密の行法を以て若殿玉木衛門之助を祈り殺してくれと頼む。海藏院はこれを承諾して去る。

折から郡兵衛を尋ねて居る十郎兵衛が近づき、それと知つて押取卷く郡兵衛の家來を追捲つて、郡兵衛と渡り合ふ。互に心を異にせるも、いづれ劣らぬ悪者同士の戰なれば、脇で見る目も痛快である。其の斬合ひの最中に駈付けた櫻井主膳は、國次の刀を手に入れうとする手だてに、十郎兵衛を搦めて郡兵衛に渡した。

第十（郡兵衛下屋敷）

登場人物の主な者

櫻井主膳（徳島城主玉木衛門之助の重臣）　十郎兵衛（盗賊）　土手助（郡兵衛の家來であるが其の實主膳の家來）

藤屋伊左衛門（もと京都の町人）　高雄（江戸吉原の太夫。先殿の落し胤）　小野田郡兵衛（衛門之助の悪家老）

海藏院（悪僧）

梗概

小野田郡兵衛は己が下屋敷に遊女高雄を引入れ、我が意に從はせようとしても、高雄は之を嫌つて靡かない。それを知つた櫻井主膳は、謀略を以て郡兵衛の家に入込ませた十郎兵衛や、土手助等と謀し合はせ、敵の術中に陥つた如く見せて郡兵衛の下屋敷に入る。

また十郎兵衛は高雄に言ひ含めて我が妹とし、郡兵衛の心に從はさすやうに見せて、終に郡兵衛が山口定九郎に盗ませて所

持してゐる國次の刀を取返した。かくて郡兵衞の陰謀は悉く發覺した。こゝに於て主膳等は郡兵衞・海藏院等の惡徒を搦め取つた。そして十郎兵衞は武士の身分に取立てられ、藤屋伊左衞門はお辻を本妻とし夕霧を妾とする事となり、目出度く事件は落著した。

近江源氏先陣館

解　題

明和六年十二月九日から、初めて大阪の竹本座に上演された。作者は近松半二・八民平七・三好松洛・竹本三郎兵衛等である。
本曲は九段に分れ、其の中で第八「盛綱陣屋」の段が最も名高い。

作　者

近松半二・三好松洛・竹本三郎兵衛の傳は既に述べた。
八民平七は竹本座にも豐竹座にも筆を揮ひ、明和四年から安永六年に亙つて、他の作者と連合して作つたもの多く、其の中で有名なのは「傾城阿波の鳴門」「褄重浪花八文字」「近江源氏先陣館」等である。「聲曲類纂」追考に「八民平七　坂町大坂や太郎兵衛の倅」とある。

實　説

本曲は、これまで行はれた豐臣家末路の史劇の後を承け、大阪陣の史實や口碑に基いて趣向を凝らし、徳川幕府を憚り鎌倉將軍源實朝時代に假托して仕組んだもので、其の兩者の關係は次の通り。

〔場　所〕　鎌倉——江戸。坂本城——大阪城。

〔配　役〕

東軍北條時政——徳川家康	源頼家——豐臣秀頼
源實朝——徳川秀忠	片岡造酒頭春久——片桐市正且元
時姫——千姫	大江廣基入道東元——大野修理亮治長
佐々木三郎兵衛盛綱——眞田源三郎信幸	佐々木四郎左衛門高綱(又云二郎作)——眞田左衛門佐幸村
西軍宇治の局——淀君	和田兵衛秀盛(又云四斗兵衛)——後藤又兵衛基次

主要人物の略傳

徳川家康（本曲では北條時政）は徳川初代の將軍。天文十一年十二月三河國岡崎城に生れ、天正十八年關八州を領して江戸城に移り、慶長五年關原の戰に捷ち、八年二月征夷大將軍に任ず。十年四月將軍職を秀忠に讓つて駿府城に移り、慶長十九年十一月豐臣秀頼を大阪城に攻め十二月和議成る、之を大阪冬の陣といふ。元和元年再び豐臣秀頼を大阪城に攻め、五月八日城を陥れて豐臣氏を滅ぼす、之を大阪夏の陣といふ。二年四月十七日薨じた。年七十五。

徳川秀忠（本曲では源實朝）は徳川第二代の將軍。家康の第三子に生れ、慶長十年四月征夷大將軍に任ず。大阪冬夏の陣起るや父と共に之を征し、寛永三年太政大臣となり、九年正月二十四日薨じた。年五十四。

千姫（本曲では時姫）は徳川秀忠の長女で、慶長二年四月生れ、八年七月豐臣秀頼に嫁いだ。大阪城陥落して秀頼死し、元和二年九月本多忠朝に再嫁した。世に竹橋御殿といふ。寛文六年二月逝去。

眞田信幸（本曲では佐々木三郎兵衛盛綱）は幸村の兄。大阪冬の陣の時東軍の先鋒となり、夏の陣の時も東軍に屬し、天王寺に出陣して武功を立て、元和八年信州松代城に移り、明暦二年致仕し、萬治元年十月十七日卒した。年九十三。

淀君（本曲では宇治の局）は豐臣秀吉の妾。秀頼の母。秀吉の歿後自ら事を決し、遂に家康と兵を構へ、元和元年五月八日大阪城陥つて自殺した。年三十九。

豐臣秀頼（本曲では源頼家）は秀吉の次男。文祿二年大阪に生れ、慶長三年八月秀吉が薨じたので家を繼ぎ、十九年冬兵を擧げて家康に抗し、既にして和成り、翌元和元年再び家康の軍と戰ひ、城陥つて自刄した。年二十三。豐臣氏亡ぶ。

片桐且元（本曲では片岡春久）は豐臣秀吉に仕へ、天正十一年近江賤嶽の戰に功を立てた七本槍の一人である。十三年東市正となり、十八年小田原の役に功あり、攝州茨木二萬五千石を領した。秀吉の歿後秀頼の傅となり、方廣寺の鐘銘の事から秀頼が家康と不

和となるや、且元は全力を盡して和解に力めたが、却つて豐臣氏からは德川方に内應するものと誤解されて、事は成功しなかつた。元和元年夏大阪城陷つて豐臣氏亡びるに及んで、慚憤病を發して死んだとも或は自殺したともいふ。年六十二。

大野治長（本曲では大江東元）は豐臣秀吉及び秀頼に仕へ、秀吉の歿後常に淀君の側に侍して寵され、意驕つて政權を專らにし、色を好んで讌飲度無く、遂に陰謀を企て、德川氏と兵を構へて大阪冬夏の陣を起し、元和元年大阪城が陷るに及んで、秀頼・淀君に殉死した。

眞田幸村（本曲では佐々木高綱）は豐臣秀吉に仕へ、關原の役に兄信幸と別れ、父と共に豐臣氏に屬し、敗後紀州九度山に潛んだ。慶長十九年大阪冬の陣に秀頼の召に應じ、奇計を以て屢〻東軍を破り、元和元年夏の陣に奮戰して伊達政宗を破り、東軍を夾擊しようとして成らず、遂に越の人西尾久作に擊たれた。年四十六。

後藤又兵衞基次（本曲では和田秀盛）は幼より黑田孝高及長政に仕へ、屢〻軍功を立て、小熊城主となつて一萬四千石を食んだが、長政が秀頼の爲にせざるを知り、去つて細川忠興に投ず。其の後諸國を流浪し、遂に秀頼の招きに應じ、元和元年大阪夏の陣に奮戰して殪れた。年四十六。

木村重成（本曲では三浦之助義村）は父重茲が罪を得て自殺した時は、嬰兒であつたが、乳母に抱かれて近江に匿れ僅に免かれるを得た。長じて豐臣秀頼に仕へ長門守と稱した。大阪冬の陣に西軍の將となつて佐竹義宣の軍を破り、退いて柵を保つたので、東軍は皆その遠謀勇略に驚いた。和議成るに及んで秀頼の使となつて德川家康の軍營に到り、誓書を載せて歸る。其の動作がよく整つてゐたので、德川氏の諸將が嘆賞した。夏の陣の時に西軍の先鋒となつて河内若江に陣し、井伊直孝の軍を衝き、敵に多大の損害を與へ、奮戰して死んだ。時に年二十一。重成は容姿美しく、沈勇で軍事に長じてゐた。若江の戰には豫じめ死を覺悟し、伽羅を炷き頭髮に薰じて戰場に臨んだので、家康の首實檢に入つた時も、猶香氣がほんのりと匂うてゐたといふ。

影　響

浄瑠璃ではその後、天明八年十月二十四日から大阪道頓堀東の芝居にも上演された。又歌舞伎では明和七年五月十三日から大阪中座に上演され、寛政五年の秋には江戸市村座にも上演され、その後も諸方に度々上演された。首實檢の場は、最近東京國技館の菊人形にも造られ、大衆に多大の感激を與へつゝ今に及んでゐる。又後年本曲の影響を受けた作品も數々ある。

第一（鎌倉御殿）

登場人物の主な者

政子（源頼朝の室）　北條相模守時政（實朝の祖父）　佐々木三郎兵衛盛綱（近江源氏の嫡流。時政の部下）

源實朝（右大臣鎌倉將軍）　片岡造酒頭春久（頼家の附家老）　比企判官能員（頼家の近習）

三浦之助義村（頼家の臣、十八歳）　關八州の諸大名。

梗概

建久三年正月一日、右大臣源實朝の御殿に年賀の儀式が行はれ、母公政子の方、祖父北條時政、關八州の大小名等が大廣間に参集する。實朝は佐々木三郎兵衛盛綱を召し、勲功を褒めて近江の國を與へた。盛綱拜受し、「弟の佐々木四郎左衛門高綱にもこの喜びを分ちたう存じます」と言上する。時政之を聞いて、「近頃頼朝の嫡子頼家が不平を抱き、京都に隠棲して謀反を企ててると聞く。其方は弟の行方を尋ねて、共に忠勤を勵まれよ」といふ。盛綱お受の詞を述べて退出する。

折節頼家からの年賀の使者片岡造酒頭春久・比企判官能員・三浦之助義村が來た。時政は使者に對つて頼家の放埓を詰る。片岡之に答へて、「頼家公は御病であり、又遊女若狭を愛して酒色に溺れられるも若氣の致す所と存じます。何卒我等にお預け下さ

れ」と言へば、能員何を思つたか、「頼家公には謀反の疑ひがある」とて、片岡と諍ふ。三浦之助聞きかねて、「抑も謀反とは下から上を討たうと圖るをいふ。頼家公は故頼朝公の嫡男にまします。されば時政公だとて其の家來に相違ない。何が怖うて御謀反を思召し立たれよう」と、一喝されて滿座聲なし。

時政は三浦之助の才智に感じて引出物に義弘の刀を贈る。政子も喜び、「時政の愛妾牧の方の乙娘時姫を頼家に妻はして、京・鎌倉の親睦を計りたい」との詞に、時政も同意し、其の媒介は片岡と定め、今年頼朝公の三回忌追善供養が行はれる南都東大寺の靈場で、政子の方と頼家の生母宇治の局との對面の上で、婚姻の契約をする事となつて別れる。

第二（東大寺）

登場人物の主な者

榮西和尚（導師。建長寺前住）　片岡造酒頭春久（頼家の附家老）　比企判官能員（頼家の近習）
三浦之助義村（頼家の臣）　住の江（時姫の側女中）　時姫（北條時政の愛妾牧の方の娘）
政子（實朝の母）　宇治の局（伊東祐親の娘。頼家の母）

梗概

東大寺では佛殿をおごそかに飾つて頼朝公の追善供養が行はれ、千僧萬僧の讀經の聲が澄み渡る。導師榮西和尚の挨拶が濟んだ後、片岡が禮を述べる。比企能員之を難じて、「故頼朝公の後を弟實朝公に嗣かせ、嫡子頼家公を斥けながら、今また役柄も打忘れて、其の頼家公に時姫との縁組の取持ち顔は、いやはや片腹痛い戯け事だ」と貶して、片岡と激論となつたが、榮西和尚に宥

められて兩人とも休息所に入る。
この時三浦之助は、宇治の局から時姬への使者となつて來た。時姬の側女中住の江(片岡の娘)が其の取次に出で、三浦之助に懸想してゐる時姬の戀を取持たうとする。
折節政子の方・宇治の局の燒香があつて、宇治の局は、我が子賴家が嫡男でありながら後を嗣がれぬを歎いて、政子と口論となり、あはや刄傷に及ばうとする刹那、片岡が駈付けて懇ろに兩後室を宥める。榮西も「天の時正に到る」と書いた卷物を展げて諫める。やがて佛事供養も無事に終り、政子は片岡・榮西に見送られて歸館した。
宇治の局は怒りが解けないで後に殘り、賴朝が東大寺に奉納した雌雄の劍を取り、其の雌劍を三浦之助に與へ、「妾が欝憤を察せよ」といふ。三浦之助は「承知仕つてござる。あの榮西が掛軸の中の文字さぞお恨みの目當でござりませう」とて、弓矢を執つて局に渡せば局これを受取り、文字の直中を射る。かくて入相を告げる鐘の音に促されて、供先勇しう歸る。

第三（賴家館）

登場人物の主な者

源　賴　家(賴朝の嫡男。母は宇治の局)　若　狹(遊女。大江東元の娘)　比企判官能員(賴家の近習。惡人)
佐々木四郎左衛門高綱(盛綱の弟。賴家の軍師)　宇　治　の　局(賴家の母)　片岡造酒頭春久(賴家の重臣)
大江廣基入道東元(賴家の逆臣)

梗概

源賴家は遊女若狹等と酒宴の最中、比企能員が罷出て、「北條時政の所存心得難く、何時鎌倉方と戰を開かうも知れませぬ。其の時の用意に佐々木高綱を味方に附け置く爲、御母公の仰を受けて彼の行方を尋ねさせてゐます。又片岡が時姫との御婚約を取結ぶ爲、やがて參るでありませうが、其の御祝言なされては若狹殿の爲にもなりますまい」と言上する。

折節佐々木高綱は召に應じて白書院に來た。賴家は高綱を引見し、軍師の大任を託して座を立てば、高綱も其の後に附いて奥に入る。この時又も佐々木高綱と名乘つて伺候する者がある。比企能員等は「又も高綱が來た」と訝り、實否を糺さうとして追取り卷く。宇治の局「ヤレ待て」と聲を掛けて出られ、高綱に味方の軍師を賴まれゝば、以前に來た高綱と同じ有樣にお受する。

庭には花賣りの男が來て、腰元等が制止するも聞入れずに奥へ通るを、能員が捕へて繩を掛ける。宇治の局は花賣りを手討ちにするとて、捕繩を切つてしなだれ寄り、奥へ伴ひ行く途端に片岡が來る。局は花賣りの男を隱して片岡に會ふ。大江東元が現はれて、片岡が鎌倉に於ける處置を詰つたので、片岡は苦衷を語つて宇治の局の放埒を詰る。局は氣色を變へ、「詞が過ぎるぞ片岡」と咎める。片岡は恐れ入りながら、若君と時姫との祝言を勸める。

大江東元は片岡を狙ふ振して局に投付けた手裏劍が外れて、打掛の下に隱れてゐる花賣りの男に中る。また東元は若狹を賺して局を弑さうとする。花賣りの男は東元に衝當り、「御免」というて過ぎ行くを東元に呼止められ、東元の切付ける刀を身をかはして打落し、脾腹をぐつと踏付ける。之を見て駈寄る能員は、片岡が投げた手裏劍に殪れる。

花賣りの男は名乘を上げ、「我こそ民間に隱れて棲む佐々木四郎左衛門高綱だ。今日から賴家公の御味方となる。家來刀を持つて來い」と呼ぶ聲に、先刻の佐々木二人立出で、同じ姿の主從三人共に床几に腰掛ける。宇治の局は喜んで、東大寺から持參した雄劍を賜ふ。

ついで東元が鎌倉に内應してゐる事や、宇治の局を弑さうとした事や、又賴家を放埒にした若狹は東元の娘である事も發覺

し、頼家は若狭の首を刎ねて改心する。東元は切腹しようとして高綱に救はれる。片岡は主君に疑ひを蒙り疎まれた身であるからとて、仕官を辭して歸る。悪念強い東元は、片岡の歸路を要撃して高綱に追拂はれる。

第四（道行旅路の濡衣）

登場人物の主な者

時姫（北條時政の愛妾牧の方の娘）　住の江（片岡春久の娘。時姫の侍女）　鹽賣長藏（三浦之助義村の變裝）

梗概

北條時政の秘藏娘時姫は、深窓に在つて数多の侍女にかしづかれた身の、戀なればこそ忍び出で、侍女住の江を供に連れ、我を尋ねて追ひ来る人のあらうかと思へば、春の野邊を飾る若草、紫雲英・土筆も目に留らず、露踏分け遙々の道を經て近江路を辿る。

折から面白い口上で赤穂鹽を賣る者に逢ひ、顔を見合はせて「あれ三浦之助様か」と、時姫・住の江は鹽賣の袖に縋つて口說けども、鹽賣は取合はないで、空吹く風と聞き流して別れる。

第五（高宮居酒屋）

登場人物の主な者

時姫（北條時政の愛妾牧の方の娘）　住の江（片岡春久の娘。時姫の侍女）　關口平太（北條時政の家來）
八藤軍治（北條時政の密使）　雲助四斗兵衛（和田秀盛の變裝）　仁作（駕籠舁）
鬼山曾平（大江廣基入道東元の密使）　鹽賣長藏（三浦之助義村の變裝）

梗概

近江路高宮の村外れで、時姫の一行は北條の家來關口平太等に尋ね出され、東路さして引返す。其の後に北條の密使八藤軍治を駕籠に乘せて來る。其の後肩の雲助が、先肩の仁作を呼んで酒屋の前に駕籠を卸し、軍治の惠みで仁作は餅を食ひ、後肩の雲助は蕃椒を肴にして、がぶ〳〵と酒を飲んで泥醉し、芝生に倒れて眠る。時移れば軍治は立上つて身拵へする所に、都から關東に下る大江東元の密使鬼山曾平と邂逅して、賴家公の内情を聽き、時政から大江に送る密書と、大江から時政に内應する密書とを交換する。

曾平ふとあたりを見廻し「あの泥醉者めが氣遣ひだ」と、呼起して名を問へば、泥醉者は未だ眠りが足らぬ顏して、「私は本名雲助、替名が呑助、飲む事は二斗三斗、まだ其の上もたべますによつて此頃は名が變り、何處でも四斗兵衛と申します」とて、又眠るを呼起されたが、童謠を歌つて正體がない。曾平苛つて「其方は我等が主人の密事を話合つたのを聞いたかも知れぬ。であるによつてどうも生かして置けぬ」といへば、四斗兵衛「ひやお酒も興も一時に醒めました。どうぞ赦して下され。どうでもお赦しにならぬとあれば、因果と諦めて命を上げまするが、ちよつと歸つて老母や妻子に暇乞ひをして參ります」とて、逃出す後方から打下す軍治の一刀に、斬られたか飛んだか古井戸の中に眞逆樣に落込む。曾平古井戸に走り寄り、石を投込んで其の中

を見屆け、なほも密談を遂げて京と東とへ、もと來た道をさして別れる。

この有樣を木陰に隱れて窺つてゐた鹽賣長藏は、彼奴只者ならずと思ひ、豫て杓に仕込んだ穗長の鑓を井戸に突込めば、穗先ぽつきと折れる。やがて四斗兵衛は井戸からぬつと出で、其の折つた穗先を手裏劍にして投付ければ、之に中つて長藏は倒れる。四斗兵衛之を見向きもせず、何か心に頷きつつ懷手で、夕暮の淋しい村道を悠然として歸る。

長藏は投付けられた穗先を手で受止めながら、死んだ振を裝ひ、彼の歸るを見てむつくと起上り、身繕ひして其の後を追ふ。

第六（四斗兵衛內）

登場人物の主な者

雲助四斗兵衛（源頼家方の名將和田兵衛秀盛の變裝）　お卷（四斗兵衛の妻。片岡春久の妹）　可內（奴）
權平（奴）　片岡造酒頭春久（頼家の重臣）　時姫（北條時政の娘）
住の江（片岡春久の娘。時姫の侍女）　鹽賣長藏（頼家の名將三浦之助義村の變裝）

梗概

近江國醒井の四斗兵衛の宅では、彼が萬事を夢と飲みあけて、妻お卷に酒を買へと強請る。折から通り過ぎる奴の可內・權平を呼入れて、酒だと騙して水を飲ませた爲、奴はぶつ〳〵いうて歸る。その後で片岡春久が我が娘住の江を時姫と伴つて連れ來り、時姫樣が三浦之助に執心深い爲、姫を頼家公の室に迎へて京・鎌倉兩御所の和睦を計らうとした事も徒となり、京では時政の首を添せと迫り、又時政公は不義の娘だとて縁を切られ、姫君の御身の寄せ處がないので、四斗兵衛殿の魂を見込んでお

預け申したい」といふ。妻お卷は、夫が酒を飲めば忽ち心變りがするので、大事の姫君を預かるなんて、之がどうなるものかと氣遣ふ。夫は「いや其の心配無用だ。姫君を預かるからは禁酒する。然し匿まひ了せたら其の褒美に、四斗入の酒樽四五挺も戴きたい」といふ。片岡悦んで「首尾能う致したなら、鎌倉の歴々の武士にお取持ち仕らう」といひ、時姫を托して歸る。

やがて鹽賣長藏が社杯裝束で、肩に酒樽ぶら〳〵と入り來り、「駕籠舁の四斗兵衛殿は此方か。弟子入りをお賴み申す爲に進物を持參致した」とて、酒樽を前に直せば、四斗兵衛「これは忝い」と、常談たら〳〵飲み續ける。長藏「これは酒の肴に致す」とて、宇治の局から預かつた雌劔と、古井戸の中で嚙折られた鑓の穗先とを差出して、時姫の首を所望する。四斗兵衛「承知した。切つてやらう」といふ。妻は驚き夫を諫めかねて、時姫を連れ兄片岡の所へ走らうとする後方から、四斗兵衛は姫君を拔打にどつさり、首は前へころりと落ちる。妻は夫にしがみ附いて恨み歎けど、夫は轉んで高鼾。

かくとは知らぬ片岡は、家來に駕籠を釣らせ音物を持たせて來り、姫君を匿まひくれた禮を述べて、迎へに參つた由を語れば、女房は居たたまらず自害しようとする。片岡之を抑へて眼を配り、「こりや四斗兵衛、よくも姫君を殺したな」と、苛つて切込めば、四斗兵衛は片岡が音物に持つて來た龍頭の兜を摑んで一間に駈入る。

表にて「和田兵衛秀盛殿、御用意よくば坂本城へ。三浦之助義村お迎に伺候仕つた」と、呼ばはる聲は鹽賣長藏が、何時の間にか初めに似ぬ勇士の扮裝。片岡耳を傾けて「京方は皆我が敵、其の上目前姫君の仇思ひ知れ」と、駈入つて戸障子踏開けば中には秀盛、甲冑に身を堅め凛々しう床几に腰掛け、「ヤア片岡、時姫君の身代りとなつて殺された娘は、定めて貴殿の息女佳の江でござらう。痛はしう存ずる。御迎の乘物の中のが時姫君であらう。早々これへ」と、見拔く詞に片岡は呆れるばかり。秀盛なほも詞を繼ぎ、「貴殿が娘を身代りに立てて、姫君の心の儘に三浦之助に添はせ申さうと、心を碎く忠義の程感じ入る。よしや身代りにもせよ時姫は殺されたれば、最早姫君は時姫ではなくて佳の江」と、之を聞いた姫君ははつと驚き、自分の爲に殺された佳の江の死骸に取附いて泣く。

片岡は既に覺悟してゐた事なれど、恩愛の情に堪へないで悶える。お卷も事情を知つて今更の感に打たれ、「時姫樣ではなく片岡の息女と見れば、三浦之助樣のお連れ添ひとなるに何の妨がありませう」とて、相寄つて婚約を定める。

三浦之助は髷引出に片岡の首を所望する。秀盛之を制して、「早まられな三浦之助。片岡が京方の爲に鎌倉から奪ひ取つて我に渡されたこの龍頭の兜こそ將軍宣下の御寶、嗚呼名を捨てて忠義を立てられた」と褒めれば、片岡「京方からは疑はれ、鎌倉方からは兜を奪ひ取り、最早我は在つても益なき臣。三浦之助の所望に任せ、我が首を進上申さう」とて自刄する。一座哀愁に打たれ、龍頭の兜を香爐に代用して蘭奢待を炷き、合掌して片岡父子の成佛を祈る。

かくて秀盛は龍頭の兜を三浦之助に渡し、お卷は時姫君を預かる。こゝに於て三浦之助は、「名香薫る首を取つたといふ沙汰があつたら、我の討死と思されよ」とて、軍の首途に別れを告げる。戀と無常と愛別離苦とを一時に見る。身を棄てて義を成す武士の道ほど健氣にも哀れなものはない。

評

この段、技巧に過ぎて往々不自然な嫌はあれども、要するに牢乎不動な古武士の精神を見せて、變化に富んだ名文である。

第七（坂本城）

登場人物の主な者

佐々木四郎左衛門高綱（頼家の軍師）　篝火（高綱の妻）　佐々木小四郎高重（高綱の子。十三歳）

佐々木三郎兵衛盛綱（鎌倉方の將。高綱の兄）　古郡新左衛門（鎌倉方の武士）　佐々木小三郎盛清（盛綱の子。十三歳）

梗　概

源頼家の江州坂本城では、佐々木四郎左衛門高綱軍帥となり、城を堅めて鎌倉勢の來襲に備へてゐる。物見の侍が高綱の前に畏り「敵は明日攻寄せる樣子であります」と報じる。高綱は「よし〳〵」と答へて軍慮を廻らす折から、妻の篝火は一子小四郎高重を伴うて出で「小四郎の初陣に戰場へお連れ下されたい」といふ。高綱これを許して、小四郎に武士の道を教訓する。

夜も沈々と更けた頃忍の者が來て城門を敲く。篝火は刀押取り走り出て誰何すれば、忍の者「あゝ音高し。我は高綱の兄盛綱だ。弟の顔が見たさに忍んで來た」といふ。篝火は訝しう思ひながらも夫の命に從ひ、城門を開いて通す。

盛綱・高綱の兄弟は對面して睦じく挨拶終り、盛綱「兄弟互に敵となるも武士の習とはいひながら孝悌の道に戻る。保元の亂に爲義父子の合戰は天の道に背き、義朝は長田に斬られて永く武道の惡名を殘した。今から我は心を改め、賴家公に降參の取持ちを賴み入る」と言へば、高綱「旗色の惡いを見て降參とは卑怯だ。戰場で高綱の首を取つて見せようと言へ」と、怒りの眼に涙を浮べる。篝火も何と挨拶してよいやら口ごもる。

盛綱は思はく外れて詮方なう寨の馬場先に出て、窺ひ寄る味方の侍古郡新左衛門に逢ふ。新左衛門「盛綱殿か、敵の城内の樣子はいかゞでござる」。盛綱「北條殿のお賴みにより、何卒弟を鎌倉の味方にしようと思ひ心底を探つたが、いかな〳〵高綱の義心は鐵石。この上は急に城を圍んで落すが肝要だ」と、語つて去つた。

高綱は「兄が時政に賴まれて、我を味方に附けようとの僞り表裏、その計略を仕損じたればやがて攻寄せるであらう」とて、桴押取つて打つ陣太鼓の響に、轟くは敵が鯨波の聲。敵の祕術に應じて我には既に其の備あれば、寄手の軍兵攻めあぐんで見えた折柄、花やかな若武者一騎小四郎高重と名乘を揚げて驅廻り、寄せ來る敵を追拂ひ、盛綱の一子小三郎盛清と格鬪して生捕られる。

第八（和田兵衛使者。盛綱陣屋）

登場人物の主な者

佐々木三郎兵衛盛綱（近江源氏の嫡流。時政の名将）　佐々木小三郎盛清（盛綱の子。十三歳）　佐々木小四郎高重（高綱の子。十三歳）
微妙（盛綱の母）　早瀬（盛綱の妻）　和田兵衛秀盛（頼家方の名将）
篝火（高綱の妻。小四郎の母）　北條相模守時政（源實朝の祖父）　竹の下の孫八（時政の臣）
榛谷十郎（時政の臣）

梗概

佐々木三郎兵衛盛綱父子出陣後の比良の館では、小三郎が初陣の手柄始めに小四郎を生捕つたとの報に接し、喜びに滿ちてゐる。盛綱は小三郎と共に戰場から直に時政の石山の陣所に出仕して歸る。その跡に繩で縛られて雜兵に取卷かれ來る小四郎を、祖母微妙は一目見るより胸塞がる。

盛綱は我が子小三郎が時政から感狀を賜はり、並居る侍どもに褒めはやされた事を語れば、妻早瀬は悦んでぺら／＼喋る。小三郎手をつかへ「時政公の仰には、小四郎を助けて置く事が味方の計略。縛めは其の儘にして大切にあしらへとの事でした。小四郎殿よ其方は私と從兄弟同士、初陣の軍に負けて嘸殘念にござらう」と言へば、小四郎顏を振上げ「父樣の豫ての敎には、勝つも負けるも軍の習ひ、逃げるは武士の恥辱と申された。私は生捕られても恥とは思はぬ。早う首を切つて下され」と、觀念の目を閉ぢる。

折節和田兵衛秀盛長裃を着、盛綱に面會を請うて入り來り、上席にどつかと坐り「坂本城から使者として參つた。其の許の手に生捕られた小四郎高重を只今お返し下され」。盛綱「あれしきの童いか樣とも申したいが、既に生捕の帳に記した上は時政

公から預かりの囚人、私の計らひにはなり難い」。秀盛「然らば石山の陣所に參り、時政殿に直談致さう。これはお邪魔申した」と、去つて虎穴に飛入る心は金鐵、石山さして出でて行く。

〔盛綱陣屋の段〕 盛綱は室内に籠つて軍慮に餘念なかつたが、ふと母微妙を呼んで「小四郎を今宵の中にお手に掛けて殺して下され」と頼む。母「あの小四郎は時政公から、過ちさすな殺すなとの仰ではなかつたか」といふ。盛綱「されば其の仰故になほ以て殺さねばなりませぬ。時政公の御心を察するに、小四郎を人質にして、恩愛に引かれて寄り來る高綱を味方に附けようとの謀と存じます。いかに高綱に確かな心があつても、子を思ふ道に迷ふ親心、萬一時政公の術中に陷つて降參などの心が起らば、永く武士の道を汚し不忠の名を流すでありませう。よしやさなくても小四郎が生きてゐる中は、敵に對する心が鈍る事と存じます。弟が爲には迷ひの種の小四郎を片時も早く殺しますれば、弟は無念骨髓に徹し、敵愾心は百倍するでありませう。さすれば弟に對する武夫の情と存じます。然しそれが爲に私が小四郎を殺しては我が君の仰に背く。この事を能く小四郎に納得させて下さつて、彼が自害しますれば我は油斷の誤りで濟み、兄弟の義も立ち忠も立ちます。この役目は御苦勞ながら母樣にお頼み申します。いかなれば武士に生れ來て、この憂き目を見る事よ」と、項垂れて愁歎に沈む。母「尤もに存ずる。目の中へ入れても痛くない孫なれども、思ひ切つて切腹させませう」といひ、盛綱が渡した刀を受取つて別れる。

三井寺の入相の鐘響き、木枯の音物凄い頃、篝火は男裝して陣笠目深に被り、我が子小四郎を取返さうとして盛綱の營内深く忍び入り、白羽の矢文を紅葉の茂みに放つ。營内では早瀬目敏く之を見付けて其の矢文を拔取り、披けば女の筆蹟で「名にし負はば逢坂山のさねかづら人に知られで來る由もがな」の古歌を記してあるので「ム、小四郎に陣屋を脱出で、人に知られないで來よとの謎か。武士の妻に似ぬ未練なさもしい心よなあ」とて、其の歌の裏に返しとして「行くも歸るも別れては知るも知らぬも逢坂の關」の古歌を記し、以て時節を待てとの意を寓し、之を白羽の矢に結び付けて射返した。

其の間に小四郎は母の矢文を讀んで脱出ようとするを、祖母微妙之を見咎めて呼止め、說諭して涙ながらに自害を勸める。小

四郎は「父様母様にお逢ひ申してから死にませう」といひ、何と言聞かせても得心せず逃げ廻る。外では篝火が、「酷や無情や」と恨んで泣く。祖母は堪へられないで血の涙に暮れる。

折から早瀬は攻太鼓の音に驚き、長刀掻込み走り出て城門を開けば、篝火駈入る。早瀬「待つた〳〵」と聲掛けて、篝火とぎしみ合ふ最中に、盛綱は小四郎を小脇に抱へ、「敵が石山の陣所に突撃した様だ」とて、小三郎と共に驅出す途端、知らせの者來り、「子を奪はれた高綱は烈火の如く怒り、寡兵を以て時政公の大軍の中に切入りました。固より時政公には何等の氣遣ひもございませぬ」と報じる。盛綱は之を聞いて、弟は豫想通り時政の術中に陥つて討死するものと思ひ、之を母に語り歎いた。



近江源氏先陣館　佐々木盛綱（十五世市村羽左衛門）
母　微妙（六世尾上梅幸）　小四郎（大谷廣太郎）

やがて勝鬨の聲聞えて、敵將佐々木高綱の討死を注進して來た。間もなく時政は侍臣を伴つて盛綱の陣屋に來り、着替の鎧櫃を飾つて微妙に面接する。

折節竹の下の孫八來つて、和田兵衛を取逃した事を注進する。時政は高綱の首桶を出して盛綱に首實檢を命じる。小四郎は之を側から見て、父の首でない事を知つたが、父母がかねての教訓はこゝぞと思ひ、「父様さぞ殘念にございませう。私も跡から追付きます」とて、直ちに刀を腹に突立てた。今まで小四郎を卑怯と思つてゐた祖母は、初めて彼が心底に、態と小三郎に生捕られ、一死以て親の謀を助けようとする、立派な精神が祕められてゐた事を知り、感激して泣き崩れる。盛綱も感動して、小四郎を犬死させせじと決意し、「これは弟高綱の首に相違ありませぬ」と言ひ切る。時政喜んで、其の恩賞に持參した召替の鎧櫃を盛綱に與へて本陣に歸る。

盛綱は篝火を招いて小四郎に臨終の暇乞をさせれば、篝火は小四郎に抱き附き聲を上げて泣く。一座哀惜嗚咽の聲に滿つ。小四郎笑を浮べ、蟲の息を繼ぎながら別れの詞を述べて絶命する。

盛綱「私は首實檢を仕損じた申譯をせねばならぬ。母樣おさらば」と、暇乞を告げて刀に手をかける。この時何處から這入つたか和田秀盛現はれ「ヤア盛綱、敵を見かけて自害とは臆したか。この舶來の懷鐵砲受けて見よ」と轟然一發、彈丸は時政が召替の鎧櫃に命中し、其の中に匿れて內情を探る時政の臣榛谷十郎を殪した。盛綱は秀盛の情を心に感謝しながらも、彼の去るを「返せ戻せ」と呼ばはつて、敵としては逃されぬ武夫の義理を立てぬいた。そして一座相寄つて小四郎の亡骸の野邊送りをする。時しも三井の晩鐘鳴り渡り、近江八景が夕靄の中に消え行く秋の景色は、一入物のあはれを添へた。

評

自分を愛する者は親を愛する、親を愛する者は國を愛する、國を愛する者は君を愛する。この一貫不離の愛が我が日本魂である。嚴肅な君臣の道、武士道、犧牲的精神、親子の恩愛などこれ等總ては、日本魂を儼立する捨身の大努力、不拔の大精神となり、艱難に處して其の光を放つのである。幼少な小四郎はこの世に在ること僅かに十三年、其の短い悲慘な生涯を飾る、彼の日本魂を發揮する盛綱陣屋首實檢の段は、本曲中興味の中心となつて人の胸を打つであらう。然も其の間の雄々しくも涙ぐましい心持が、麗はしい詞章で巧に細かく描かれてゐる。そして哀れをそゝる三井の晩鐘を以て終始し、末に近江八景を織込んで、物悲しい秋の夕暮の景色を添へ、一入感慨を深うした妙文である。

世界の人々が驚異とする國民我が日本民族は、古來文にも武にも、この一貫不離の愛の道を修養し、以て其の道を歩んでゐるのである。

○盛綱　眞田幸村の兄、眞田信之に當てた。
○帷幕　陣屋の幕　史記　高祖本紀に「運籌策帷幄之中、決勝於千里之外」。
○音なふ　おとづれる。
○我が君　北條時政。
○御諚　御仰せ。諚は言定の合字。
○北條殿　徳川家康に當てた。
○佐々木四郎左衛門高綱　眞田左衛門幸村に當てた。

第八の切（盛綱陣屋の段）

盛綱は只茫然と、軍慮を帷幕の打傾き、思案の扇からりと棄、「母人夫におはするか」と、音なふ聲に立出る、陣屋の隈々跡先見廻し、母の膝にすり寄て、「親の役目を子が勤るは順なれ共、御老體の母人に、御苦勞お頼申さねば叶はぬ事、申さぬ先から心得たと有、御誓言承はりたし」と、事有げなる願ひの品、聞ねど流石佐々木の後室打頷き、「親子の中に改めて頼むと有はよく／＼の事ならめ、仔細は知らねど心得ました」、「ハツア早速の御承知忝し、お頼の仔細と申は、最前の囚人、拙者が爲には甥、母人の爲には孫の小四郎を、今宵の中に母のお手にかけられて」と、聞もあへず「コレ／＼盛綱、最前我君よりの仰渡され必小四郎に過さすな、殺すなとの御諚ならずや」、「サア其殺すなと御諚故に、猶以て殺さにやならぬ、辯舌を以て人を懐る北條殿、小四郎を殺すなとの上意は、生て置て人質とし、子を餌に飼て、佐々木四郎左衛門高綱を、味方に付ん謀

鏡にかけて顯はれたり、なか／＼心を變ずべき、弟高綱とは思はね共、如何なる大丈夫も我子の愛には迷ふ習ひ、萬が一此謀に陷て、降參などの心付ヵば、子故に不忠の名を流さん事殘ン念至極、よしさはなく共小四郎が、俘虜と成て生キ有中チは、恩愛といふ大敵に高綱が弓ノ勢も弱り、刃金も自然と鈍る道理、迷ひの種の此小四郎、一時も早く殺して仕舞へば、弟が義心猶々鐵石、是ぞ兄弟弓矢の情と、有て我手にかくる時は、主君ノ北條の命ィに背、稚心に此理を辨へ、自身に切ッ腹するならば、我は油斷の誤り計リ、兄が義も立チ、弟が忠も立ッ、雙方全き此役目は、御苦勞ながら母人、密に小四郎に腹切ラせて下されかし、現在の甥が命中宥めて助るこそ、情共いふべけれ、殺すを却て情とは情なの武士の有樣や、いかなれば、兄弟敵味方と引キ別れ、今朝の矢合セに敵は甥なり、味方は我子、肉身と肉身の、劍を合す血汐の瀧、修羅の巷の、攻太鼓胸に盤石こたゆるつらさ、弓馬の家に生れし不祥聞分ヶてたべ母人」と事を、分ヶたる物語リ、母は手を打「尤々、兄のそなたも、弟の高綱も我子に依怙はなけれ共、隔て居る程不便もまさり、有やうは其方にも、心を置て居ましたが、弟に不忠の惡ヶ名を、付ヶさすまいと左程

○鏡にかける　明かに知られるをいふ。

○弓矢　昔時武士は弓矢をもつて功名を立てたによつて、弓矢を武士の意にいふ。槍を以、功名を立てるやうになつた時には槍取といふ。

○矢合せ　敵と初めて矢を以て戰を交へること。

○修羅　梵語阿修羅 Asura の略。六道の一。修羅趣は瞋心強く、傲慢嫉妬の念旺盛で、常に鬪爭するによつて、これを戰場に喩へて修羅といふ。

○不祥　不仕合。不運。因果。祥は「さいはひ」の義。

○依怙　かたぴいき。「法華經」譬喩品に「無レ所ニ依怙一」。

○不便　「たよりない」の義より轉じて、憐れな。かはゆさう。

○ありやう　有樣。ありのまゝ。實際。（見索引）

○心を置く　氣を置く。心配する。遠慮がどういふ心でゐるか案じてゐたのである。

迄、心遣ひの深切、ヲ、忝いぞや、嬉しいぞや、世の喩にも、小の蟲を殺して大功を立る事、眞實親身は子よりも可愛孫なれ共、思ひ切て切腹させう」、「ヲ、お出かしなされた、健氣者とは見ゆれ共稚き小四郎、若小腕に切損なはゞ、母人宜しう御介錯、早短日の暮近し、佐々木兄弟が苗字を汚すか名を上るか、一つの境涙ばしかけ給ふな」、「氣遣ひ召さんな後れはせぬ」、「必氣强う遊ばせ」と、渡す一腰受取腰の張弓に詞つがふて別れ入、峯吹通す、木枯に、早園城寺の鐘諸共、誘はれ來る白羽の矢、紅葉の茂みに射込しは、主を誰共人目塞く、陣笠、目深に篝火が、男出立の半弓にやはか徒には歸らじと、陣屋間近く慕ひ寄、和田殿の供廻りに紛れ込、爰迄は忍び入たれど用心堅き陣屋の木戸口、心を通はす矢文の謎、小四郎が目にかゝれかし、祝ひ祝ふた初陣に、忘まはしい繩目の恥、外の手でも有事か、從弟同士の小三郎、憎てらしい手柄顏、甥を縛らせ伯父の身で、夫が本意か恨い、どうして居るぞ只一目、見たい逢たい間の戶に、我身をひしと立板も、通すは涙の矢數なり、洩て奧に聲高く、「侍中〳〵、夜廻り怠り申されな」と、女の聲も敵の中、胸驚かれ篝火は、差足なが

○小の蟲を殺して大功を立つ　「小の蟲を殺して大の蟲を助ける」といふ諺。[illegible]近松作「佐々木先陣」に「世話にも小の蟲を殺して大の蟲を助けよと申すも同斷」。

○子よりも可愛い孫　[illegible]に「孫は子よりもかはゆしと、世の諺にも申すぞや」。

○介錯　自害する人に附添うて、その人の首をはねること。

○ばし　或語に添へて意を強める接尾語。ここの文は、憐れみをかけて泣かれるやうな事があつてはなりませぬぞとの意。

○後れ　氣後れ。

○[illegible]の張弓　[illegible]、腰を張るにいひかく。

○園城寺　[illegible]三井寺のこと。三井の晩鐘は近江八景の一である。

○篝火　佐々木高綱の妻で、小四郎の母。

○半弓　大弓の半分ほどの弓で、坐して射ることを得るもの。

○やはか　いかで。何として。

○木戸　城戸、城門。

○憎て　憎體(にくてい)。にくげ。

○「楯板」に「通す」　いづれも矢の縁語。

○矢數　[illegible]

ら忍び行、障子さつと目早の早瀨、紅葉の矢文抜キ取て、つく〴〵眺め「扨こそ

扨こそ、羽響もなき忍ひの矢、女業と推量に違はぬ手蹟、狀の文ン體にもあらず、

名にしおはゞ逢坂山のさねかづら、人にしられで來るよしもがな、と古歌を書キ

しは、ム丶〳〵、手は見知らねど相イ嫁の篝火、囚れの小四郎に、此陣屋を脫け

出て、人知らず來るよしもがな、爰は所も近江路や、世に逢坂の關の戶を、明ケ

て逢んと知らせの謎、ヱヽ侍イの母の樣にもない、未練なさもしい、軍に立テば討

死は覺悟の前と、立派な小四郎に惡ル氣を付、若シ取逃ガしやなどしたら、其不調

法は誰レにかゝる、一家の誼は生ケ捕ッても、命に別ッ條ない樣子、知らせて安堵さ

す程に、必こゝらに狼狽へて、親子一處の繩目を受ケ、夫トの名迄汚しやんな」と、

恨の裏の反古文、打返したる返ン事の古歌、矢立テの硯さら〳〵と書キ認めて括付ケ、

内にも人目重籐の弓打、番ひ陣外の、小松にひやうど手ごたへとともに、立テ切

障子の內、稚心に油斷せぬ、繩付キながら小四郎は、そつと一ト間を忍び出「今伯

母樣の讀しやつた、矢文の手は母樣、爰を脫けて戾れとの、知らせは聞ても敵の

中、見咎られては恥の恥、とはいへ母樣何所にござる、死共ちよつと、顏見た

○早瀨　佐々木盛綱の妻。

○紅葉の矢文　紅葉の中に射込んだ矢文。

○名にしおはゞ…よしもがな　この歌は、三條右大臣定方の詠で、「後撰集」戀部に出で、又「小倉百人一首」にも出てゐる。一首の意は、近江山城の國境なる逢坂山にある美男葛「さねかづら」の、逢ふといひ、小寢「さね」といふ名を負うてゐる通りであるなら、人に知られないで想ふ女の我が許へ來て寢るすべもあればよいになあとの意。これをここにいへる如く、陣屋を脫け出て、人に知られないで來るすべもあればよいになあの意に用ひた。

○手　手蹟。ここの文は、篝火の手蹟は知らねども、これはまさしく相嫁篝火の筆蹟に違ひないとの意。

○覺悟の前と　覺悟の前と數へつらんに。

○反古文　篝火の矢文の裏に返歌を書くによつていふ。（反古とは、漉返してもとの紙にもどすことをいふによつた語）。

○重籐　弓を滋「しげ」く卷き、籐を幅一寸はかり、間を五分はかり置いて繁く卷いた弓を重籐の弓といふ。ここの文は人目滋きを重籐にいひかく。

○ひやうど　弓に矢をつがへ、よつ引「ぴ」いてひやうと放つなどといふ。

やゝとそろり〳〵とぬき足も、危き毒蛇の陣の口、あはや跡より窺ふ微妙、「小四郎待ちや」と聲に喫驚「アヽイ、どつこへも行きや致しませぬ、御赦されて」と計りにて、わな〳〵慄ふ有樣を、つく〴〵見れば見るに付、同じ佐々木の血筋でも、扨も果報の拙い子や、囚人の身と成たれば子心にも氣後れして、身窄らしい顏容、今宵限りの命とは、言ねど蟲が知らすかと、思へばそゞろ先立つ泪、胸に押し下げ撫下し、「ヤレ孫よ爰へおぢや、コレ其方の祖母じやわいの、器量骨柄揃ふた子に、痛々しい此繩目、解て其方に此祖母が、言聞す事有」と、立寄り解く血筋の繩、子故に引かれ篝火が、又立戻る陣屋の前、矢文の返事は嫂の早瀬の手蹟、「行くも歸るも別れては、知るも知らぬも逢坂の、關とは時節を待ての事か」、いかにと見遣る戸の隙間、微妙は孫の手を引て、一間の障子押し開き、「ノウ小四郎、高綱に別れてから十三年の年月、孫有りとは聞た計り、懷しさ逢たさは、膝元で育た小三郎より、顏見ぬ其方の不便さは百倍、殊更長の浪人の貧しい中に育られ、武具馬具迄も無不自由に口惜しう暮しつらんと、思ひ遣る程片時も忘るゝ隙はなけれ共、思ふに任せぬ敵味方、此社袮は祖母が其方へ引出物、着

○毒蛇の口　危難に遭ふの意。謡曲「安宅」に「虎の尾を踏み、毒蛇の口をのがれたる心地して」。

○微妙　小四郎の祖母の名。

○今宵限りの命　「太平記」筑紫合戦の條にある菊池武時の歌「故郷に今宵限りの命とも知らでや人の我を待つらむ」の歌句。

○おぢや　おぢやれ。おいであれ。おいでよ。

○骨柄　ほねぐみの様子。容姿、風采。

○行くも歸るも逢坂の關　「後撰集」雑部、蟬丸の歌「これやこの行くも歸るも別れては知るも知らぬも逢坂の關」。「小倉百人一首」にも出づ。この一首の意は、これがあの京を出て田舎へ行く人も、京へ歸る人も、知る人も知らぬ人もここで別れて、又ここで逢ふといふ名の逢坂の關であるかとの意。これをここにいへる如く、別れは又逢はれる時節もあるから、それを待てとの意に用ひた。

○引出物　饗宴の時など記念に主より贈る物品。昔は多く馬であつて、馬を引出してはなむけしたよりの稱。

○社杯にはなぜ紋がござりませぬ　無紋の社杯は死裝束である。（又葬禮の時にも着る）。索引により「白小袖無紋の社杯」を見よ。
○九寸五分　短刀。一尺九寸までを大脇差、一尺七寸までを中脇差、九寸五分までを小脇差といふ。（見索引）
○利發　利口發明。かしこきこと。
○一倍　「一倍命が惜うなつた」などいふ一倍と同じで、一層、ひとしほの意。「一杯」ではない。
○老の繰言淚の䶩漏れて　淚を流して語る老の操言が戯から漏れて。
○お袋　母たる人。（見索引）
○我が子は殺さぬ　この篝火は我が子小四郎を殺させぬの意に、語氣せまつてかくいうた。
○葦垣の隔つる中　「續古今集」卷十二・戀二の部、御詠に「葦垣の間近き甲斐もなかりけり心かよはぬ中、、、」。「葦垣の」は「間近き」に冠する枕詞。

てたもやいの」と差出せば、何心なく押シ戴キ、取上て不審顏ニ、申シ「祖母樣、此社杯にはなぜ紋がござりませぬ、九寸五分が添て有ルは、高名手柄せよと有、首搔刀でも有ルまい、こりや私に腹切レとの、死裝束でござりますな」と、覺る利發に驚く篝火、微妙ははと泣倒れ暫し、詞もなかりしが、「ヲ、流石は親の子程有、人に優れて其樣に、聞分ケよい程助たさは、胸いばいに迫れ共、殺さにやどふもならぬといふは、父親の高綱が、武勇智謀の優れたが、其方の身の仇敵、助ケよと有北條殿は、子を人質に高綱を、降參さする謀。夫迄は殺しもせず、まして助ケて歸しもせず、何時迄も陣中に、囚へて置ケとの主命ィ、生て居る程、高綱が武勇の妨、爰の道理を聞分ケて、潔う腹切てたも、ヱ、見れば見る程目付なら鼻筋なら、眉に一つの黶子迄父親に此似樣。智惠才覺迄違はぬもの、生長も見ずむざむざと蕾の花を散らすか」と、老の繰言淚の䶩、漏れて外面に聞嫁の、「何程道理は道理でも餘り氣强いお袋樣。我子は殺さぬ〳〵」と、伸上れ共葦垣の隔る中ぞ是非もなき、母の心の通じてや、小四郎おとなしく手をつかへ、「私が命一トつで、父樣や伯父樣の手柄に成ル事なら、何の惜は致しませぬ、尤腹の切樣も稽

古して置たれば、切損ひもせまいけれど、私が一つの願ひ、昨日軍の初陣に、直に敵へ生捕れ、此儘死るは弓矢神の冥加にも盡たかと、何ぼう悲しい口惜い、どうぞも一度お歸しなされ、父様母様にたつた一目逢た上、せめて雑兵の首一つ取て、立派に死で見せませう、此お願ひを」、「ア、これのふ、賢い様でも流石は小供、預りの囚人敵へ歸して、盛綱が武士が立ものか、父や母に逢される程なれば、此憂目はないわいの、とはいふものゝ逢たいは道理じやわいの、尤じや、世が世の時なら二人の孫、右と左りに月花と、竝べて置て老の樂しみ、此上も有まいに、生捕も孫、捕れるも孫、小三郎が手柄したと、煽立る眞中へ、縛られて引出されし、顔見た時の祖母が胸は、張裂様に有しぞや、迚も甲斐ない其方の運、最期が未練に有たなどと、口の端にかけられては、親高綱が弓矢の名折れ、尋常に死でたも、ヤ、介錯は此祖母、可愛孫を先立て、いつ迄因果の恥曝そふぞ、祖母も直に自害して、三途の川を手を引て、渡るわいの」と抱締め泣く〳〵釼差付れば、「只二親に逢迄は赦して下され祖母様」と、未練も親子の恩愛に道理といとど目もうろ〳〵、孫もうろ〳〵隙有ば逃んと見やる木

○弓矢神　軍神。弓矢八幡などいひて、おもに八幡の神をいふ。
○世が世の時なら　今の時が、昔のやうな自分の全盛の時であるなら。
○とても　どうしても。（見索引）
○尋常　立派。（見索引）
○三途の川　冥途にあつて死者の渡る川。（見索引）
○恩愛に　恩愛に引かされての事なれば。

戸口の「こゝに」と母の呼子鳥、「ヤア母様か」と飛立ッ計り、駈出す孫を引ト留めて、せき立ッ老母の聲荒らか、「エヽ未練者卑怯者、扨は母親と內通して、爰を脱けて出る心じやな、夫レなれば猶助ヶられぬ、望の通り親にも一ト目逢した上は、サア〳〵切腹、但祖母が手にかけふか」、「サア夫レは」、「サア〳〵何と」と威に拔て振り上る、劔ギの下に手を合せ、「母樣の聲聞てから一倍命が惜成ッた、どふぞ助ヶてお情じや、堪忍して下さりませ、アレイ〳〵」と逃廻り、後れる孫に猶氣後れ、「ヤレ最前シの健氣な覺悟忘れしか、迚も叶はぬ期に成ッて、臆病者の名を取かや、伯父が見ぬ先キ自害して、立派な最期と譽られてくれ、祖母が方から手を合す、賴ム」といへど逃惑ふ、外には「啼や無情や」と、恨も三方三惡ヶ道、前ト生の敵同士がいとし可愛の孫や子に、生れて憂目を見するかと老母が親身の血の淚時雨の中の枯紅葉露より先キに散りぬらん、折からさつと山風の、遙に陣鐘攻太鼓、事こそ有レと左足の早瀬、長刀掻込走り出、木戸口開けば駈入篝火、「待ッた〳〵、高綱のおかもじこりや何處へ」、「知レた事、我子の小四郎取返す」、「ならぬ〳〵、相イ嫁の初ッ見參シ長刀に乘りたいか」、「イヤ推參な」とぎしみ合ふ、眞シ中に三郎兵

○呼子鳥　「古今集」三鳥の一。郭公であるといふ。ここの文は、母の子を呼ぶを呼子鳥にかけた。そして緣語の「飛立つ」にいひつゞけた。

○三方　佐々木盛綱、小三郎、微妙。これに九寸五分を載せる三方をいひかけた。

○三惡道　地獄道、餓鬼道、畜生道。三方三惡道は同じ頭音を重ねた所謂頭韻法。

○枯紅葉露より先に散りぬらん　枯紅葉は露の重みに堪へずして散り落ちるが、餘命幾許もなき老母の悲歎は、それよりも早く落命してしまふであらう。

○陣鐘　往時陣中で用ひた半鐘をいひ、兵士の進退などの合圖に打鳴らしたものである。

○事こそあれ　事變が起つたぞ。

○左足　いざといふ場合に、まづ左足を踏み出すによつていふ。謠曲「熊坂」に「いらつて熊坂左足を踏み」。

○かもじ　母(かか)の文字詞、嬶(かか)（「見索引」）

○見參　お目見え。ここは敵同士の初對面であるから、果し合ひの意をふくむ。

○推參　押して參る義、轉じて無禮、慮外の意にいふ。

○ぎしみあふ　軋合。「ぎ」は濁音に用ふ。すれあひ摩擦を生ずる　の意か。

衛、小四郎小脇に引抱へ、「石山の御陣ン所に事有と覺るぞ、ヤア〳〵小三郎は何處に有ル、「ハア即チ只今御加勢」と、用意の小具足兜の緒、締むる間遲しと駈け出す、引ッ違へて知らせの軍ン卒馳參ンじ、「時政公の計略の如く、佐々木四郎左衛門高綱我子を取ラれし憤り、今宵自身に馬を出し手勢やう〳〵二千ン餘騎、鎌倉の總大將時政公に直キ見ン參ン仕らんと死物狂ひの其有樣鬼神の如く見へ候、併シ味方は豫ての用意、大將の陣は數萬の警固ッ、盛綱公には氣遣ひなく、俘虜の悴を守護有べしとの御事なり猶追イ々に御注進」と申捨てぞ驅けり行、三郎兵衛大息つぎ、「ハ、ア南無三寶しなしたり、さしもぬからぬ弟高綱、子故の闇に心眩ミ、謀に陷たるな、摩利支天なれば迚、數萬ン騎の其中へ、一騎駈けの死軍、討チ死せん事眼前ンたり、此上は親の御慈悲、佛ッ間で御回向なされかし」、「盛綱」「母人、エ、力なき武運の末。殘念ンさよ」と、計リにて眼コを、閉て奥に入、篝火猶も氣はそゞろ、我子も氣遣ひ夫トも如何、千々に碎くる軍の破、「ゑい〳〵おふ」と勝鬨は、敵か味方か二人の妻、胸の陣鐘足も空ニ一度の注進勇の大音ン、「御悅び候へ軍は十分味方の勝利、大軍ンに取圍れ集り勢の高綱方途を失ふて逃ゲ走るを、或は、

○石山　近江國滋賀郡石山寺のある山で、琵琶湖に臨す。石山の御陣所は、北條時政の陣館である。

○即ち　卽時。

○小具足　鎧に具したる小具足の義。「軍用記」に「小具足といふは、鎧をば着ずして腹當に籠手・臑當を着するなり」と。

○南無三寶　しまつたといふ時などにいふ言葉。（見索引）

○しなしたり　しまつたり。（見索引）

○摩利支天　武士の守護神。（見索引）

○勝鬨　戰勝の、大將床机に倚り、凱陣の酒を飲むとき、右手に軍扇を取り、左手に扇を開いてあふぎながら「えいえい」と言へば、諸軍一同に「おう」と聲を揚げる、かくすること三度。これを勝鬨を揚げるといふ。

掻首、或は射取、殘る兵散々に追捲り、諸葛孔明と呼れたる四郎左衛門高綱を、榛谷ノ十郎か討チ留メて候」と、聞より妻はハアはつと、心散亂燃立ツ篝火、夫トの首は渡さじと、行をやらじと留むる早瀬、「大將軍時政公、御成リぞふ」と呼はる聲、ハアはつと早瀬は大將の御座の設と走リ入、龍の雲に冲が如く、一陽の春を待ツ平の時政、近習の武士古ル郡新左衛門、佐々木小三郎盛淸御供に扈從して、御召シ換の鎧櫃御座の次に飾せて、寛然と入給へば、三郎兵衛母微妙敬ひ、請し奉る、竹の下の孫八慌敷ク罷リ出、「最前シ和田兵衛秀盛、御陣シ所へ參りし所、日頃好める酒を強いて醉臥させ、居間の四方に金網をかけたれば、籠の鳥同然シと思ひの外の痴者、隱火矢を以ッて屋根を打拔キ、御座の間の白旗を奪取立退て候」と、言シ上すれば時政公、「ハ、、、、敵の軍中へ鎧も着せず只一人シ、踏込ム程の不敵キ者、汝等が手に合ッべきか、第イ一の大敵、佐々木高綱を討チ取たれば、腹心の害は拂ふたり、去リながら此佐々木、古への將門ドに習ひ、一人ならず二人三人の影武者有て、何れを是と見分ケ難し、誠の佐々木か贋首か、弟が首よも見損ずまじ、兄盛綱實檢せよ」と仰の下に新左衛門首桶、御前シに直し置、三郎兵衛承はり、

○諸葛孔明　支那三國時代、蜀帝劉備に仕へた智勇兼備の名將。彼の作に成る「出師表」は有名な文である。

○ぞふ　さふらふ(候)の約。

○龍の雲に冲る　勢の盛なるをいふ。「故事成語考」に「蛟龍得二雲雨一終非二池中物一」。

○一陽の春を待つ　一陽來復して、冬去り春の來るを待つ義。以て榮える時節を待つ意。

○扈從　從ひ供よること。陪從。

○和田兵衛秀盛　後藤又兵衛基次に當つ。

○しれ者　曲者(くせもの)。

○隱火矢　後文に「懷鐵砲」とあるのと同じ物であらう。

○腹心の害　腹心に深く潜在して取去り難き憂患。

○將門　平將門は多身通の術を得て、七人の姿に現はれ、いづれを眞の將門とも見極め難かつたことは、近松作の「傾城懸物揃」にも見えてゐる。

○影武者　眞の將と紛ふ、同じ姿になつて現はれる武士。ここの文は「厭蝕太平樂記」に、眞田幸村が六人の影武者をつかつたことを記せるに據つたものであらう。

○無慙　いたはしいこと。（慙を知らぬは憐れむべきものなるにより、轉じていたはしいことの意にいふ）。

○まだ／＼　まだるく／＼（間遠々々の略）とも[illegible]

○きりり　くるくる。旋回するさまをいふ。

○[illegible]小四郎を自害させ[illegible]

○故實　[illegible]の故實は「軍用記」第七にも見えてゐる。

大將に一ッ禮し無慙の弟が死首に、是非もなき對面やと、吞込ム涙後より、父の死顔拜まんと窺ふ小四郎。盛綱が引キ開くる首桶の、二目共見もわかず、「父樣さぞ口惜から、わしも跡から追付ク」と、氷の刃雪の肌、腹にぐつと突立ッる、「ヤレ母人お留メなされ、何故の切腹仔細を言へ、樣子は如何に」と人々慌て介抱に、小四郎きつと目を見開き、「何故死とは伯父樣共覺へぬ、卑怯未練も、父樣に逢たさ、父を先キ立何まだ／＼と生キ恥曝さん、親子一ッ所に討チ死して、武士の自害の手本ンを見せる」ときりり／＼と引キ廻す、其手に縋り母微妙「ノウ其立派な心を知らず、叱た祖母が面目ない。怺へてたも」と右左リ目をしばたゝく三郎兵衞、「猶豫は如何に早實檢、何と／＼」と御上意に、跪口拭ひ耳際迄、熟と改め故實を守り、謹で兩手に捧げ、「矢疵に面體損じたれ共、弟佐々木高綱が首、相違御座なく候」と御前ンに、直し押シ退れば、「ホヽウ骨肉の兄が實檢といひ、首に向カつて小四郎が恩愛の涙。切腹の有樣。誠の首の證據明イ白、思へば昨日は此首に後を見せし時政が、今手の下に誅罰する武運の強さ。ハヽア心地よや嬉しやな。今といふ今時政が、初メて枕を安く寢るは盛綱が働。我首替の鎧一領、當座の褒美に殘し置ッ。

○彼　佐々木四郎左衛門高綱をさす。

○負うた子　淺瀨を渡る　この諺は紀海音作の「心中二つ腹帶」にも出づ。[illegible]の意には[illegible]を[illegible]教へられたるをいふ。

小三郎其外には陣中にて、勝チ軍の恩賞せん、皆萬歳を唱へよ」と、悦喜の裝ひ四邊を拂ひ本ン陣、さして歸陣有、盛綱あたりを熟くと見廻し、「佐々木高綱が妻篝火、計略の贋首仕畢たれば、小四郎に最期の暇乞、赦す是へ」と一言を、柵間遲しと轉び出、我子に犇と抱付キわつと泣より、外ぞなき、涙ながら母微妙、「贋首と知つて、大將へ渡した其方は、京方へ味方をする心ン底か」、「イヽヤいつかな心は變せねど、高綱夫婦が是程迄仕込ンだ計略、父か爲に命を捨る幼少の小四郎が、餘り神妙健氣さに、不忠と知つて大將を欺しは弟への志、彼レが心を察するに、高綱生キて有ル中チは、鎌倉方に油斷せず、一旦討死せしと佯て山奥にも姿を隱し不意を討んず謀、然れ共底深き北條殿、一應の身代リは中々食ぬ大將、そこを計つて一子小四郎をうま／＼と此方へ、生ケ捕せしが手段の根組、最前の首實檢、贋首を見て父上よと、誠しやかの愁歎の有樣に、大地も見拔く時政の眼ン力を眩ませしは、敎へも敎たり、覺へも覺へし親子が才智、見す／＼贋首とは思へ共、斯程思ひ込ンだ小四郎に、何ンと犬死かさせられふ、主人を欺く不調法、申譯は腹一つと、極めた覺悟も負た子に敎られ淺瀨を渡る此佐々木、甥か忠義に比

くては伯父が此腹、百千ッ切ても掛合難き最期の大功、其方が命は京鎌倉の運定、實出かいたな、出かした」と手負の顔を、打守り〳〵、悲歎の涙にくれければ、篝火いとゞかきくれて、「子を譽られる親の身の、悦ぶは常なれど生キて高名手柄して、今の仰に預らば何ンぼう嬉しかるべきに、年シ相應より利發なが生れ付た此子が因果、如何に武士の習ひじや迚、斯う〳〵して自害せいと、敎る親の胴慾さ可愛や初ィ陣の初メから、死に行事合點して、おりや侍ィの子じやによつて、討死するは嬉しけれど、死だら父様や母様に、つい逢事が成ルまいかと、夫レばつかりがと言さして、泣顔見せず勇んで行し其立派さ。天晴弓矢打物迄誰レに劣らぬ物覺、腹切ル事迄是程に、器用になくば何事ぞ、コレなふ小四郎。〳〵」と手負の耳に口さし寄セ、「此深手じやもの、耳も遠なろ。目も見へまい、今伯父様のおつしやつた事聞取やつたか、其方の命棄たので。高綱殿の忠義が立ッと、褒美のお詞、夫レを未來の引導に迷はずと佛に成ッてたも」と、言聞すれば嬉しげに、「そんならわしが死るので。父様の軍が勝チに成ルか。エ、忝い。祖母様は何處にぞ。わしや縛られても、卑怯者じやないぞへ。夫レで死ンでも本ン望じや、伯父様伯母様、

○其方　小四郎をさす。

○胴慾　貪慾（どんよく）の轉。非道。殘酷。

○打物　打ち鍛へた武器、即ち刀槍の類をいふ。

○何事ぞ　「何事にあらん」の略。何事もなかつたであらうに。

祖母様にも母様にも。逢て死るは嬉しいが、たつた一トつ悲しいは、父様に〳〵」と跡は得言ず舌硬ばり、次第〳〵に弱り果惜や實生の初ッ花も。無常の風に散りて行。「コレなふ小四郎孫やい。※今はの際に父親を尋て死ンだ子の心、※思ひやつて只一目なぜ顔見せに來てくれぬ、千ン騎萬ン騎の大將にも成ルべきものを※梅檀の、二葉で枯せし※胴慾は神も佛もなき世か」と、歎ヶく微妙の聲限り※涙の早瀨・篝火も消る。計りの思ひなり。三郎兵衛泣目を拂ひ、「ハア歎ャに紛れ後れたり、實檢を仕損じたる鎌倉への申譯、母人さらば」と※差添に手をかくれば「ヤア〳〵盛綱、和田兵衛秀盛是に有。敵を見かけて自害とは、臆したるか」と聲かけられ、「シヤ幸ィのよき敵、歸らば其儘歸さんに、運盡たる秀盛、逃ガしはせじ」とつゝ立ヶば、「ヲヽ和田兵衛が習ひ得し※南蠻流の※懐鐵砲、受ヶて見よ」とどうど打狙は外れて鎧櫃、内に忍びし榛谷十郎太腹射貫かれ※のた打たり。「見よや盛綱、底の底迄疑ひ深き北條の※隱し目附、汝が手にかけざれば、不忠にあらず彼レめが不運、今又※御邊自害せば、鎌倉への義は立べきが、佐々木が首は贋物也と、忽ち露顯し是迄も、碎し心は水の泡、時を待って佐々木高綱、誠は爰にと切って出る其時に、潔く

○今は　今際。臨終。
○思ひやつて　高綱が思ひやつて。
○梅檀の二葉　「栴檀は二葉より芳し」の諺に據る。この諺は「平家物語」にも出づ。幼少の時から既に非凡であることの意。
○胴慾　「どんよく」（貪慾）の轉。無慈悲。（既出）
○涙の早瀨・篝火も消ゆる　二人の女の名を緣語にしてうまくいひつゞけた。
○差添　脇差。即ち刀に添へて差す短刀。
○南蠻流　南蠻とは往時南洋諸島を經て來航した西洋人、殊に葡萄牙人・西班牙人の稱。南蠻流とは西洋流の砲術をいふ。
○懐鐵砲　拳銃（種子島の短く小さきもの）。
○のた打つ　「ぬたうつ」（沼田打）の轉。輾轉反側すること。
○隱し目附　探偵。
○御邊　そなた。貴方。（見栄引）

切ッ腹せば、忠も立義も全し、腹の切リ様早い〳〵」、「ハヽア賞讃たり我命、暫く生キるは弟へ是も情の一つには、甥への寸シ志追善供養」、「野送り萬シ事も一家の内證で諸事何事も此座切、表テは京方、鎌倉方、右大臣シ實朝の御座の白旗奪取しは、軍の吉左右重て再會留めて見ぬか」と出て行、「ヤア盛綱が陣中にて、味方の武士を討ッたる曲者、返せ戻せ」は弓矢の儀式因は、嫂小姑孫よ甥子の亡骸に、憂き事三井の晩の鐘、消行子より親心、我から先の夜ルの雨父には一ト目、粟津の嵐、木の葉の紅葉かき寄せて、夕を照らす瀬田の橋門ト火は、狼標敵味方「さらば」と、ばかり別れ行

○野送り　野辺に送葬すること。葬式。
○吉左右　吉報。喜ぶべきしらせ。和田秀盛が盛綱の陣所から首を受け取ったことは前文に見ゆ。
○留めて　引留めて。
○三井の晩の鐘　近江八景の一つ「三井の晩鐘」。「三井」は三井寺。
○唐崎の夜の雨　近江八景の一つ。
○粟津の嵐　粟津の晴嵐。近江八景の一つ。
○夕べを照らす瀬田　瀬田の夕照は近江八景の一。
•門火　葬送の際に火を門に焚くこと。この文は、門火に紅葉をかき寄せて焼き、その火が夕を照らす[illegible]
○狼標　軍中[illegible]に上げる火や煙。「[illegible]」に「[illegible]」。

第九（佐々木船長の家。坂本城）

登場人物の主な者

二郎作（大津の船長。佐々木高綱の變名）　およつ（高綱の妻篝火の變名）　盆太（二郎作の下男）
花園團部之介（無能の好色侍）　谷村小藤治（高綱の部下）　四宮六郎（高綱の部下）
雷時（北條時政の臣稲毛前司）　和田兵衛秀盛（頼家方の名將）　三浦之助義村（頼家方の名將）

北條時政（實朝の祖父）　大江廣基入道東元（頼家の逆臣）　宇治の局（頼家の母）
源頼家（頼朝の嫡男）

梗概

佐々木高綱は大津の船長に姿を變へて二郎作と名乘り、妻篝火はおよつと名乘り、十五歳の下男盆太との三人暮し。夫婦共稼に出で、雪の夜およつは花岡園部之介といふ侍と相合傘で歸り、彼の心底を試す爲揶揄し、無能の好色者と知つて之を返した。

その後に二郎作は贋時政を伴ひ歸つて奥の室に休ませ、夫婦佛壇の前に合掌して、知覺院幼玄童子（小四郎の戒名）一七日逮夜の回向をする。そして谷村小藤治・四宮六郎に言含めて戰場からの注進のやうに見せ、時政を討ち漏した事や、和田兵衞・三浦之助が大江入道に殺された事などの僞りを語らせて、贋時政をして時政を誘き出させるやうに騙して返し、高綱は間道から坂本城へ驅付ける。

坂本城内では、性懲もない惡逆無道の大江入道が、味方の軍の潰滅を言觸して、宇治の局や頼家公に自刃を勸告する。この時高綱襖蹴放して飛んで出で、入道を摑んで投付ける。またも贋時政現はれて宇治の局を害しようとするを、高綱の影武者が銃聲一發之を射殺する。そして其の影武者は、高綱の謀で誘き出された眞の時政が放つた矢に中つて斃れる。

時政は既に高綱・秀盛・三浦之助皆殺されたものと思ひ、頼家を尋ねて奥へ行く時、眞の高綱が現はれ、其の發射する銃聲に時政仰天して引返す。

折から和田兵衞・三浦之助が三方と長柄の銚子とを携へて出で、「頼家公と實朝公と御對面の上調停が成りました」と報じ、一同悦んだ。その時又も攻め來る大惡人大江入道の首を刎ねる。ここに於て長閑な泰平の世となる。

神霊矢口渡

解　題

明和七年正月十六日から江戸の外記座（座本豐竹新太夫）に上演された。作者は福内鬼外であつて、外に「補助吉田冠子・玉泉堂・吉田二一」と載せてある。

本曲は平賀源内の淨瑠璃中の傑作であつて五段に分れ、其の中で第四の「頓兵衛住家」「矢口渡」の段が最も名高い。

作　者

平賀源内は戯作者、博物學者。讃岐志度浦の人。名は國倫、字は士彝、源内と稱し、鳩溪と號し、別に福内鬼外・風來山人・紙鳶堂・天竺老人・松籟子・森羅萬象・無根叟・陳奮翰の戯號がある。初め藩命で藥園附の下役人となり、去つて長崎に行き、本草に通じて舶來の藥品の眞僞を見分け、又蘭語を學ぶ。寶暦中江戸に出で、湯島天神の祠前に寓居して儒・醫を業とした。天性聰敏で、電機・寒暖計等諸種の器械を製作し、火浣布を創製し、砂糖の精製・人參の培養など世を利したものが多い。また當時流行した源内櫛・鳩溪燒なども彼の工夫になつたものである。彼はまた洒落本・滑稽本などにも筆を揮つた。淨瑠璃の作では、彼一人若しくは他の者と共に作つた物を合はせて九種ある。安永八年一商人と紛爭し、過つて之を殺害した罪によつて獄に投ぜられ、十二月十八日獄中で死んだ。年五十一であつたといふ。（源内の死には異說もある）。大正十三年二月從五位を贈られた。

實　說

新田義興は義貞の第二子で、幼名を德壽丸といひ、上野で成長す。延元二年（或云建武三年）北畠顯家に應じて鎌倉を攻破り、男山の敗戰後、吉野の皇居に參つて後醍醐天皇に拜謁し、名を義興と賜はり、左兵衛佐に任ぜられた。

正平七年弟義宗・從弟脇屋義治等と共に東國を從へて勢を張つたが、足利尊氏の鋭鋒を避けて越後を保ち、後再び武藏に赴いて鎌倉を謀る。足利左馬頭基氏・畠山入道道誓之を憂ふ。道誓の幕下の士竹澤右京亮良衡は嘗て義興に仕へた事があるので、道誓は之と謀つて奸策を廻らす。乃ち竹澤は道誓から罪を得て放逐された眞似をして、義興の臣となりたいと義興に申し入れ、日

の美女少將を京都から迎へ、之を己が子として義興に贈つたので、義興は竹澤を信じるに至つた。そこで竹澤は伏兵を設け、義興を招いて殺さうとしたが、少將が義興の行くを止めた爲に事成らず。竹澤は之を銜んで遂に少將を殺した

竹澤は更に一策を案じ、道誓をして佯つて江戸高重を放逐させて、之を義興に推薦し、江戸と共謀して義興に鎌倉攻めを勸め、「多勢を連れては人に怪しまれませうから、手兵を以て突撃するが上策と存じます」と申し立てた。義興は其の言葉に騙されて大部隊と離れ、僅かに十騎と共に矢口の渡舟に乘り、竹澤・江戸に内應してゐる舟子等の爲に中流で舟を沈められ、恨みを呑んで刄に伏した。家臣井彈正直秀・大島周防守・世良田右馬之助・由良兵庫助・由良新左衞門共に殉じ、土肥三郎左衞門・南瀨口六郎・市川五郎等は泳いで岸に登り、敵と戰つて討死した。時に正平十五年（或云正平十三年）十月十日。里人屍を收め靈を矢口村に祀る。今の府社新田神社がこれである。明治四十二年九月忠節を嘉されて從三位を贈られた。

傳にいふ。義興の死後十月二十三日、江戸高重の部下が矢口を渡り中流に及んだ時、俄に疾風起つて舟を覆し、舟中の者皆溺死した。之を岸で見てゐた高重は、驚怖して逃出した。折節、頭上に黑雲覆ひ、大雷雨の中に義興が甲冑を帶し、白馬に跨れる姿が現はれ、弓矢執つて己れを射ると見、馬から落ちて血を吐き、後七日で死んだ。又道誓も屢ゝ惡夢に魘はれ、矢口渡でも夜な／＼光り物が出て往來の人をなやますので、野人村老が集つて、神靈をいさめる爲に社を建てて祀つたといふ。

公が若年の頃、上野に勤王の兵を擧げてより以來、後醍醐・後村上の二朝に仕へて二十餘年間、國步艱難の中にあつて終始忠勤を勵み、賊徒に對し東國に恐れを抱かせてゐた。然るに一朝鼠賊の奸策に誤られて、雄圖空しく矢口の川波の中に消えた事は洵に千古の遺恨である。今は多摩川の流れ其の昔と變れども、風雲長へに去來して忠魂を弔ふ。

義興公の矢口渡に關する記事は、「太平記」卷三十三、新田左兵衞佐義興自害の事、及び林大學頭撰「新田大明神緣起書」、延享三年三月守山侯松平賴寛が新田大明神社境内に建てた「矢口新田神君廟碑」に見えてゐる。本曲はこれ等に據つて、技巧を凝らし脚色したものである。

影響

本曲が初上演された時、江戸の大衆に好評を博した。其の後も第四の「頓兵衛住家」「矢口渡」の段は、操浄瑠璃芝居にも歌舞伎劇にも屢〻繰返され洗練されて、現今も生命を保つてゐる。

第一（吉野皇居。九條遊廓井筒屋。八幡宮）

登場人物の主な者

新田左兵衛佐義興（義貞の子。南朝の忠臣）　坊門宰相清忠（吉野皇居に仕へ、尊氏に内應せる奸臣）　新田小太郎義岑（義興の弟）
臺（井筒屋の遊女。義岑の愛人）　畠山入道道誓（足利尊氏の執權）　竹澤監物秀時（尊氏の部将）
江田判官景連（尊氏の部将）　石原丹治（道誓の家來）　逸見傳吉（道誓の家來）
篠塚八郎重虎（義興の部将、篠塚伊賀守の嫡子）

梗概

新田義興は後村上天皇の吉野假皇居に召され、足利尊氏討伐の勅命に奉答し、「尊氏の執權畠山入道が奸曲我儘であるから、久しからぬ間に内訌が起る事と存じますれば、暫く時機を御待ちあそばす方がよくはございますまいか」と奏上した。けれども敵に内應してゐる坊門宰相清忠に阻まれて戰死を覺悟し、先祖頼光から傳はつた水破。兵破の二つの矢が、皇居に納まつてゐるのを望んで拜領し、これを最後の參内と思ひ定め、名殘惜しげに退出する。その途中で敵の落し穴に陥つたが、大石を敵の伏勢の中に投じ、十餘人を殺して去つた。

新田義岑は京都九條町の遊廓井筒屋の遊女臺に馴染み、帯間等に取卷かれてゐる。敵將畠山入道・竹澤監物・江田判官ら井筒屋に会横し、三人密議を凝らして、監物は奸策を以て義岑を騙して其の臣となる。

義興は出陣の首途に八幡宮に參詣して戰勝を祈り、水破・兵破の二矢を義岑に預け、竹澤監物を部下に連れて出發した。

義岑は跡に殘り、臺・帯間等に持成されて遊興に耽つてゐる。その隙に、帯間に變裝して交つてゐた畠山の家來石原丹治。逸見傳吉は、水破・兵破の二矢を盜み去る。そして再び大勢を引連れ引返して襲ひ、義岑を捕へて搦める所に、味方の勇士篠塚八郎が驅付け、敵を追拂つて石原・逸見を叩き殺した。

第二（武藏野合戰。新田城内 八郎物語。新田落城）

登場人物の主な者

新田左兵衛佐義興（義貞の子。南朝の忠臣）
由良兵庫助信忠（義興の家老）
徳壽丸（義興の子、三歳）
篠塚八郎重虎（義興の部將。湊の弟）
お浪（義興の臣大島長門の妻）
南瀬六郎宗澄（義興の家老）

江田判官景連（尊氏の部將）
井　彈正（義興の家來）
湊（兵庫助の妻）
水木（井彈正の妻）
お辨（義興の臣土肥三郎左衛門の妻）
笹目兵太（竹澤の家來）

竹澤監物秀時（義興の部將、尊氏に内應せる奸臣）
筑波御前（義興の室）
友千代（兵庫助の子）
お鈴（義興の臣世利田右馬之助の妻）
おつが（義興の臣市河五郎の妻）

梗概

新田義興は江田景連の率ゐる鎌倉勢と武藏野に戰ふ。敵に内應してゐる竹澤監物は江田景連と諜し合はせて、景連の軍の退却するを追撃した。義興は勝に乘じて長驅し、一擧に鎌倉を突かうとして駒を乘出す所に、由良兵庫助駈付け、「さやうになされては大將の御身に危險がともなひます」と、馬の轡に縋り附いて諫めた。決戰を覺悟してゐる義興は大いに怒り、勘當を言渡して陣扇を投付け、駒に鞭を上げて進んだ。兵庫助は憂はしげに主君の後姿を見送つて、「これはどうなる事だらう、さても心許ない」と、獨ごちながら陣扇を拾ひ、坐して男泣きに鎧の袖をしぼる。

上野國新田の庄義興の居城では、義興が武藏の合戰に勝利を得たとの報知に接し、義興の室筑波御前は、重臣の妻の湊・水木・お鈴・お浪・お辨・おつが等と共に祝杯をあげる。南瀬六郎も登城して後報を待つてゐる所に、兵庫助が顔色を變へ思案の體で歸り、氣遣はしげに其の仔細を申述べる。

兵庫助の詞のいまだ終らぬ中に、篠塚八郎が深傷を負うて喘ぎながら駈付け、「竹澤と江田とが心を合はせ、六郷川の船頭に言含めて、船底に穴を刳明けて栓を差込み、我が君の御乘船を待受けました。我が君はさやうな事とは露御存じなく、諸軍勢に先立ち、世利田右馬之助・大島長門・井彈正・土肥三郎左衛門・市河五郎等の十騎と共に、急いで其の船に召されました。そこで船子どもが中流に漕出て、栓を抜き水に飛込んで遁れました。折から此方の岸では竹澤、彼方の岸では江田の伏勢押寄せ、我が君を目懸けて雨霰と矢を射たので、我が君主從十一人無念の涙を呑んで自害なされ、大將を失つた味方の軍は殘らず討死しました」と、語つて其の場に自刄した。一座色を失ひ、筑波御前も自害しようとされるを、南瀬六郎が刄を捥取つて諫める。

この時竹澤の軍が攻寄せる聲が聞えて來たので、南瀬六郎は城を枕に討死するを主張し、由良兵庫助は妻の諫をも拒み、敵に降參するを言張つて袂分れとなる。其の間に竹澤の家來笹目兵太は城内深く攻入つて、筑波御前を拉し去らうとする所を、湊が長刀を揮つて斬棄てる。南瀬六郎は筑波御前と若君とを守護し、暴れ狂ふ鬼神の如く敵を撫斬りにし、血路を開いて退いた。

第三（燒餅坂。兵庫助内。身代り）

登場人物の主な者

寢言の長藏（馬方）　湊（由良兵庫助の妻）　願西（駕籠舁）

野中の松（駕籠舁）　筑波御前（新田義興の室）　竹澤監物秀時（義興の臣となつて義興を亡ぼし、足利尊氏の臣となる）

犬伏官藏（竹澤の家來）　南瀨六郎宗澄（新田の家老）　德壽丸（義興の子）

由良兵庫助信忠（新田の家老）　江田判官景連（足利尊氏の部將）　友千代（由良兵庫助の子）

梗　概

長閑な春の日暮前、寢言の長藏は湊を馬に乘せ、願西・野中の松は筑波御前を宿駕籠に乘せ、「此處は相州戸塚でござる」と僞つて、武藏相模の國境なる燒餅坂（「國花萬葉記」に武藏相模の境にやき餅坂中村の町あり）の雲助宿六兵衞方に立寄る。三人の雲助はこゝで酒を飲み、はては筑波御前・湊に暴行を加へようとしたが、湊は彼等を賺して虎口を遁れ出た。其の後に竹澤の家來犬伏官藏は、南瀨六郎の行方を尋ねて六兵衞宿に來り、人改めをなし、三人の雲助に「南瀨六郎を搦め取つたなら褒美は望み次第」と、言ひ置いて去つた。

入相の鐘の響き渡つて物の哀れを感じる頃、南瀨六郎は廻國順禮六十六部の姿となり、笈の中に若君德壽丸（實は友千代）を入れて背負ひ、燒餅坂にさしかゝる。あたりを眺めて人通りなきを見計らひ、若君を笈から出して遊ばせてゐたが、人の來る足音に驚いて若君を笈の中に隱す。そこへ長藏。野中の松。願西の三人が立現はれ、德壽丸を奪つて足利尊氏の恩賞に與からうとして、六郎と渡り合ひ、野中の松は斬殺され、願西は重傷を負ふ。南瀨六郎は長藏に庖丁を投付けられて、膝に深傷を負ひ、よろめきながら笈を背負うて夜道を辿り行く。

由良兵庫助は既に敵に降服し、竹澤の推薦によつて足利尊氏に仕へ、吉田村（戸塚町吉田）に立派な邸宅を構へ、豪奢に暮してゐる。ある夜彼は江田判官を伴ひ歸つて機嫌を取る。江田の去つた後へ、あはれな筑波御前・湊は夜道に迷ひ、疲れた足を曳きながら宿を乞うて立寄る。然るに其の家の主人は兵庫助であつたので、これはと驚き救を求めたが、兵庫助は頑として承知しない。湊は悲憤の餘り夫を罵り、恨しげに筑波御前の手を引いて去つた。兵庫助果して無情か、さりとも有情か、丈夫の心は人に讀まれてはならぬ。

その後に南瀬六郎は、若君を入れた笈を擔ひ痛手に惱みながら、これも一夜の宿を乞うて立寄り、兵庫助を見て喫驚し「ム、人非人の由良兵庫、サア勝負」と詰掛けた。兵庫助は冷笑して相手にせず、「故舊の情だ、奥の間で休め」といふ。南瀬は詮方なく奥へ行く。折節捕手の大勢が長藏の手引で押し寄せ、竹澤は上使と呼ばはつて入り來り、「德壽丸・南瀬六郎の首を渡せ」と迫る。兵庫助卽ち起つて弓矢押取り、寢てゐる六郎を射て血煙を立てた。六郎怒つて跪く間に、兵庫助は六郎の連れた兒を奪ひ、水もたまらず首打落して竹澤に渡せば、竹澤は之を長藏に首實檢させ、六郎が連れてゐた兒に違ひない事を確めて引上げた。

この騷ぎを道で聞いた筑波御前・湊は、跡戻りして兵庫助を詰り、兵庫助が投出した首の無い死骸に取付いて愁歎に暮れ、懷劔を拔いて兵庫助に突きかゝれば、兵庫助はあしらひかねて奥へ駈入る。その途端に隱れて樣子を窺うてゐた長藏が躍り出たが、忽ち兵庫助が投げた手裏劔に斃れる。

やがて兵庫助は若君德壽丸を抱いて現はれ、「官軍の御大將新田義興公の御嫡男は、御安泰に渡らせおはします」と呼ばはる。其の聲を聞いて六郎も起直り「新田落城の時に、兵庫助と心を合はせて兒を取替へ、誠の幼君は兵庫助が守護しまゐらせた」と打明け、また義興公の討死は、勅答の謀が坊門清忠に妨げられて勝利の望みなく、潔く戰死する覺悟であつた事も知れ、兩家老は交々それからの苦衷を語り合ふ。

茲に於て今までは幼君の死なれたものと思つて悼んだ湊の涙は、忽ち幼君の身代となつた我が愛兒友千代の死を悲しむ涙と變じた。かくて六郎は亡君の跡を慕うて自刄する。あはれ義興の遺臣が國難に處して、身を捧げ忠節を立通す美しさよ。

第四（道行。生麥稻荷社。頓兵衛住家。矢口渡）

登場人物の主な者

新田小太郎義岑（義興の弟）　臺（もと井筒屋の遊女こ義岑の室）　僧道念（もと久助といひ義興の舊臣）

萬八（無頼漢）　頓兵衛（六郷川の渡守）　しつかり候兵衛（博徒）

三上十次（博徒）　からのぴん助（博徒）　六藏（頓兵衛の下人）

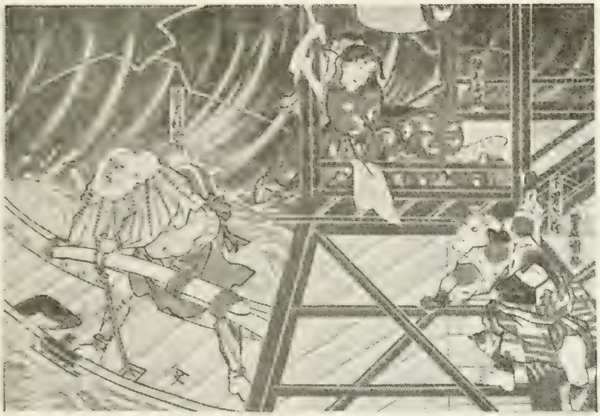
お舟（頓兵衛の娘）　竹澤監物秀時（尊氏の部將）　新田義興主從の怨靈

梗概

〔道行比翼の袖〕新田義岑は八幡宮で不慮の難に遭つて落人となり、臺を連れて東路をさし、東海道五十三次の旅をつゞけて神奈川に著いた。

生麥（今は横濱市鶴見區の中）の僧道念は稻荷堂に籠り、鉦鼓を鳴らし經文を讀誦してゐる。無頼漢の萬八は、道念が新田義岑夫妻を匿まつてゐるを嗅付け、義岑夫妻を捕へて一儲けしようとして來り、色々と道念に話掛けても、道念が取合はぬので、萬八は業を煮し、捨臺詞を殘して去る。其の後で道念は稻荷堂の扉を開いて、中にゐる義岑に鄭重に會釋し、「私はもと久助と申し、御兄様義興公が武藏野の合戰から矢口渡で御最期を遂げられるまで、始終御旗持となつて御供申上げた者で、其の證據を御目に懸け

ます」とて、新田家の定紋一引兩の入つた旗を取出して義岑に與へ、「御家をお興しあそばす事が何よりの御孝行と存じます。私は廻國修行を致して、御恩返しに我が君様の御社を建立したう存じます」と、語つて涙に袖をしぼる。



神靈矢口渡（三世豐國畫）
嘉永三年五月河原崎座
福内鬼外作

おふね（岩井粂三郎）
頓兵衛（市川海老藏）
六藏（市川九藏）

折から萬八の手引で大勢が襲うたので、道念は鉈を揮つて追拂ひ、急いで義岑夫妻を遁れさせた。そして自らは狐の姿に早變りして稲荷堂に蹲ひ、再び大勢が引返して扉を開くを待つて彼等を驚かし、聲色をつかひ色々の事を言うて怖ぢさせ、彼等をして萬八を縛らせて連れ行かせた。（これからが名高い「頓兵衛住家」「矢口渡」の段となる）

〔頓兵衛住家・矢口渡〕六郷川の渡守頓兵衛は竹澤監物の命に從ひ、新田義興主從を渡舟に乘せて沈めた功によつて、多額な褒美金を受け裕福に暮してゐる。冬の頃、博徒仲間のしつかり候兵衛・三上十次・からのびん助の三人が、博奕に負けて無心に來たので、頓兵衛は彼等に二百兩づつを與へ、自分が裕福になつた仔細を語つて聞かせた。

折節竹澤の使者が頓兵衛を呼びに來たので、共に連立つて宅を出た。その後で下人の六藏は、かねて頓兵衛の娘お舟の美貌に懸想し、お舟に言寄つて夫婦にならうと迫つたが、日傭の八助に呼ばれて去る。

その後へ新田義岑が臺を連れて頓兵衛方に立寄り、矢口の渡舟を賴む。お舟應對して義岑の氣高い姿に見蕩れ、奥の間に引入れて未來を契る。

頓兵衛は落人を討取る事を竹澤と打合はせて歸り、六藏と謀つて義岑を殺さうとする。お舟は之を悟つて義岑夫妻を舟で遁れさせ、自らは義岑の身代りとなつて父の刄に刺され、痛手に苦しみながら、懇ろに父の非道を諫めた。然るに我慾の爲には義理

も人情も顧みない頓兵衞は、娘の言に耳もかさず、之を突飛ばして罵聲を浴びせ、義岑の跡を追うて舟を乘出した。是に於てお舟は猛然蹶起して櫓に驅登り、父がまつしぐらに舟を漕ぎ行くを後目に見て、落人捕縛の相圖の太鼓を打鳴し、村人に義岑の跡を追はせぬやうにした。六藏は「其の太鼓を打たれてたまるものか」と、叫んで櫓に飛登り、お舟に取附けば、お舟は素早く六藏の刀を奪ひ、之を突刺して川に落し、自らは深傷の爲に次第に弱り行きて、あたら蕾の花と散つた。

六藏は痛手に屈せず對岸に泳ぎ著き、頓兵衞と共に義岑夫妻を捕へて組伏せ、將に首を搔かうとする時、水破・兵破の二矢何處からともなく飛び來つて頓兵衞・六藏を殪す。竹澤が部下を連れて馳付けた折から、天候俄かに險惡となり、雷火閃き颶風起つて舟を覆し、黑雲の中にありくと、義興主從の怨靈顯はれて竹澤を引裂く。

評

この段、可憐な美女が愛著にきざして、南朝の遺臣を助け、大義の爲に命を棄てた健氣な動作に涙ぐませる。又義興公の神靈によつて、圖太い鼠輩等が非業な最期を遂げるは、因果應報の理を見せて痛快である。

第四の中（頓兵衞住家）

同　切（矢口渡）

行末の、六郷は近き世よりの渡にて、其古は、都より、東へ通ふ旅人の迴る

○六郷の渡　神奈川縣川崎市の北を流れる六郷川の渡をいふ。「江戸名所圖會」卷二に「六郷渡＝昔は橋を架せしが享保年間田中丘隅といへる人の工夫により洪水の災を除かん爲に橋を止めて船渡にせしとなり」。

○近き世　享保年間に當る。

○都　宮處（みやこ）の義。京都をいふ。

○迴るも遙か　船渡が無い時は遙かに迂回して往來したとの意。「遙か」に「張る」をいひかけ、「弓」「弦」「矢」いづれも緣語。

○矢口渡　東京市蒲田區古市町の所にあつて、多摩川の下流六郷川の一渡場。

○調布や：多摩川の　「拾遺愚草」上卷、藤原定家の歌に「たつくりや晒す垣根の朝露を貫き留めぬ玉川の里」。手作りの布を晒す、そのあたりの垣根に宿る朝露が、玉となつて流れ散つてゐる玉川の里の朝景色は、いかにも住いゝ意。多摩川に沿ふ調布（てうふ）の地名も、上古里人が調布を作つて内藏寮に納めたに起る。

○多摩川（玉川）東京灣に注ぎ、下流は六郷川の稱がある。

○流れより知れぬ心　「水の流と人の行末」の諺による。どうなるか知れぬ意。

○棧作り　川の上に懸けわたして造つた家。

○渡世　渡守の生業。

○瑪瑙　石英の一種、華麗な色を帶び、玻璃のやうな光澤がある。七寶の一。

○瑠璃　紺色の寶石、七寶の一。[illegible]

○龍宮城　龍神の住む宮殿。[illegible]人の能く知る所である。

○鳶が孔雀　「鳶が孔雀を生む」の意による。

○ぼつとり者　[illegible]

○有らう事か　有らう事か有りはせぬ。有り得

も、遙弓と弦、矢口の渡と聞へたる、其水上は調布や、晒す垣根の朝露を、貫き留ぬ多摩川の舟を浮る流より知ぬ心の底深き、渡守の頓兵衞が内とは思ひ棧作、物好したる亭座敷渡世には似ぬ家作りは、瑪瑙の階瑠璃の扉、龍宮城の乙姫か夫かあらぬか娘のお舟、鳶が孔雀のぼつとり者、田舍に惜き姿也、擔桶に水を打かたげ立歸る下人の六藏「申しお舟樣、モウ料理は出來ましたか、旦那殿はまだ晝寐、ほんにマア有ふ事か、今渡守の頓兵衞といふては、おそらく日本ン國中に續者なき大長者、なれども餘り人使がひどいから、幾度置いても奉公人が、三日とは居たゝまらぬ故、お娘御のお前が、竈元の世話なさるで、可愛らしい其お手が荒ふかと思へば悲しうて〳〵。酸漿程な血の涙御家老か番頭かと敬れる此六藏、渡舟を漕隙々には、薪を割たり水汲だり、忌々しい事ではある、爰な内でも旦那殿と渡舟が無けりや樂じや」と、小言にお舟は氣の毒顏、「コレ六藏人聞の惡い父樣の噂、止して給れ」と制する折からどや〳〵と、しつかり候兵衞・三上十次、からのぴん助三人連、「親分は内にか」と揚口から大胡床、「皆樣能ふお出なさんした」と、お舟が愛想の煙草盆、「父樣はまだ晝寐、御用が有なら

起しませふ」と、いふ聲聞て一間より欠まじくら、「ムヽ今其處へ行て逢ふべい」と、ゆるぎ出たる主の頓兵衛、雪を欺く白髪に朱を濺いだる顰面、强慾無道の眼ざし、八段掛の大廣袖紙子仕立の伊達狩繍、どつかと坐し、「ヲヽ皆揃つて能ふ來た、して仕合はどふだぞやい」「どふかふ所じやごんせぬ、持て立つた大失敗、三人ながら此中の元手、すつぱり負て仕舞ました、面目もなき仕合」と、もおかはすれば、「ムヽソリヤさんざんな目に遭ふた、ゑいは、負る時がなけりや勝事もない道理、少計り負たとて、補鍋匠が華鯨を請合ふた樣に、騷事だないわい、今一勝負やつて見ろ、コリヤ娘よ、ソレ板厨の金を出してやれ」、「アイ板厨を明るにも及ませぬ、先刻に品川の兵丘郎樣と青山の萬九郎樣が見へて、日外借た金じやとて、持つて來てござんす故、つい懸硯の引出しへ」「ムヽそんなら出してやるべい」と、引出し明けて、「ヲヽ幸ひ爰に六包有、一人前二百兩で足

[illegible]

○居たゝまらぬ　居りきれない。その場に堪へて居られない。

○酸漿程な血の涙　血の涙が、酸漿の果實のやうた大きな玉になつて流れ落ちるといふのであつて、[illegible]い事をいつたもの。六歳はお舟に懸想してゐるものだから、機嫌を取らうとしてかくいふ。

○番頭　[illegible]

○氣の毒　自分の心をいためること。つらく思ふこと。

○からのびん　空（から）の貧（びん）で、素寒貧（すかんぴん）の意。これに「助」を添へて人名とした。

○胡床　足座（あぐら）の義。足を組んで坐ること。

○まじくら　まじり。「倭訓栞」に「まじる＝雜又交をよめり、俗語に何まじくらともいへり」。

○八段掛　絹織物の一段が絹八段の目方あるもの。

○廣袖　袖口の下方（袂の部分）を縫ひ合はせない袖。

○紙子　厚い白紙に澁を引き、揉んで着物にするもの。[illegible]

○持つて立つた　[illegible]「[illegible]手」につゞく。

○もおかは　もおし〳〵。[illegible]に逡巡する[illegible]

○えいわ　よいよ。よろしいよ。

○なべのいかけ　鍋の鑄掛。鍋などのわれめに、しろめなごを鎔しかけて接合はせる者。

○つりがね　釣鐘。華鯨とも書く。（釣鐘の音を鯨音ともいふ）。東京市[illegible]通寺銅鐘銘の句に「[illegible]華鯨」」「鍋の鑄掛が釣鐘を請合ふ」とは、身に不[illegible]事を引受ける意の諺。

○はさろ　「とだな」であらう。

○青山　今の東京市赤坂區青山。

○懸硯　懸子のある硯箱で、引出の附いてゐるもの。

ずばもちつと借ふか」と、いふに三人肝を潰し、「ナント聞たか」、「ヲイヤイ」、凡金持も多けれど、つがもない端錢か何ぞの樣に、懸硯にも六百兩、目出度といふも程が有」、「サレバサ、昔から無い物は金と化物といへども、化物はまだも出よふが、今時ない物は錢金、折々氣晴しに芝居を見ても、近年は淨瑠璃でさへ、何ぞと言や金のない事、餘りけちな此時節、有所には斯ふ澤山、マアどふすれば此樣に滅多に金が出來まするぞ、咄して聞かして下され」と、言へば頓兵衛烟管こちこち、「イヤサ皆が料簡が惡いから、出來る金も出來ないわい、塵が積つて山と言へど積る内には又吹き散る、二文四文じや埒や明ない、出世しやうなら相場か金山博奕は勿論、是も近年はこずいかうで好い鳧もかからぬ故、此頓兵衛が思ひ付き、彼の鎌倉で借元の大將、足利尊氏樣と謀反勝負の義興殿か、闇雲の高つ張、武藏野の賭場で大勝負、元手の強い尊氏樣も根こんざい打負て、コリヤ一番切替ふと鎌倉へ、盆がへ、何か破れかぶれの義興、うぬが命を投出し、鎌倉へ仕掛の博奕、手におへない首尾に成たを、鼻ばりの竹澤監物殿かすり取の江田判官殿から、此親父へ人をよこして、でらをしてくれると思つて、どうぞ魂膽してく

○借さう　西鶴本などにも「貸さう」を「借さう」と書いてある。(見索引)
○つがもない　繫「つな」がりも無いの義。緣もない。とんでもない。わけもない。
○無い物は金と化物　この諺昔から言はれた。
○けち　「消極」の「消」の義であらう。しわいこと。鄙吝。以て不景氣い意にいふ。
○こち／＼　煙管で灰吹をたゝく音。得意の貌。
○塵が積つて山　諺。「古今集」序に「高き山も麓のちりひぢよりなりて」。
○金山　鑛山はうまくあたれば大儲するが、あたらなかつたら大損をする。よつて之を山師といふ。
○こずいから　吝「しわ」い加留多勝負。狡猾な加留多勝負の意。「かう」は羅甸語 co— で、かるたの繪紋を合はせて勝負すること。
○鳧　利益を得ようと待ちかまへて居る所へ、さうとは知らずに金を捲られに來る人をいふ。
○借元　賭博の貸元である。
○闇雲の高つ張　むやみに博奕で高金を賭「か」けること。以て猪武者の意にいふ。
○根こ際　根底。家を擲ふこと。「根こ際」に寄附際の語。
○切替　かるたの札の種々を左手に持ち、札の裏面を上に向け繪を見ないやうにして、右手で札の下から上に、上のを下に順次に入替へて前に置くを切るといふ。それを置直すを切替へるといふ。以て戰爭

[illegible]にいうた。
●ぼん [illegible]
○投長半 「博奕仕方風聞書」に「投長半と是は賽三つにいたし手に持投出候」と。賽三つをつかんで投げ、賽の目の偶數か奇數かをあてゝ勝負を決するもの。命を投ぐにいひかけた。
○鼻ばり 鼻張「はなつぱり」の強いこと。相手に強く對抗して來る人をいふ。
○かすり取 うはまへを取ること。口錢を取ること。
○てら 寺錢の略。博奕場で張錢を受けた者から、寺錢と稱して賣錢の高に應じて歩合を取つて留置き、その金で雜費を支拂ひ、殘金は貸元の收入とするもの。貸元は貸した金の内にはすたりが多く出來るから、寺錢といふて引取るのである。
○魂膽 たくらみ。企畫。
○ぢやが であるが。
○甘口 なまぬるいこと。
○水銀 はらや（伊勢白粉）をいふ。花見時などに伊勢白粉を顏などに塗附けた奴の底拔け騷ぎをする、その底拔け騷ぎから思ひ付いたといふのであらう。
○猿 戸の樞に裝置した栓で、戸を閉めるとき之を鴨居又は敷居に挿してしまりとするもの。以て船底を刳つて穴に插した栓のことにいうた。
○ごつきり かつきり（限）の轉。「一番ごつきり」とは、たゞ一番だけの意。たゞ一遍の仕打。
○ぐわんといはせた ぐしやんとまゐらせた。

れろと、モ色々とのお頼、ハテ後生こそ願ふまいけれ、人の爲に成る事だ。じそが、甘口ではいけまいと、水銀奴からの思ひ付きで船の底を刳拔いて、六藏めに猿を引かせ、一番ごつきりで義興めを、川中でぐはんといはせた其御褒美に此頓兵衛、尊氏樣の尻持で、大名に成筈なれど、夫では結句氣が詰り、好の博奕が打れませぬ、大名慳貪止しにして、やつぱり食べ付たぶつかけの渡守がよござりますると申上たりや、そんなら何なと望めと有、そこでお金をしたたか請、そいつを元手に大勝負、勝つ程にける程に、持丸長者とは、おれが事、斯ふ普請をやらかしても、昔を忘れない樣にと、アノ通り床の間には櫓や蓑を飾物、出世の因縁かくの通り」と語るにぞ、三人は不審晴、「それで聞へた、そんなら己らも一思案、何ぞあてずつぽうにやつて見よかい、ジヤガ刳拔ふにも船は無し、是

○尻持 後援。
●大名慳貪 色彩と模樣を描いた器に盛つて客に出す蕎麥切。大名にいひかく。
○ぶつかけ 「打掛」である。饂飩又は蕎麥切を溫めて汁を注ぎかけたもの。
○道具 道具屋商。（見索引）
○ける程に 念を推すとき重ねていふ詞を略して「ける程に」といふ。「程に」を受けて「さうする程に」と繰返す時に用ひる。
○持丸長者 金滿家。
○普請 「ふしん」は普請の宋音。もと普く人に請うて營繕をする義。轉じて一般に建築の意に用ふ。
○あてずつぽう 當推方の義。確かた成算なくして、心當てに推量すること。

○壺皿　博奕の采を伏せおほふに用ひる壺。この壺に穴を刳抜いて硝子をはめて置けば、伏せてあつても中にある采の目が見えるから、かくいうた。
○歩　江戸時代、庄屋（村役場）に雇はれて雑使に供せられる者の稱。
○茶を參つた　茶を飲んだ意に、ちやかにする意をいひかくる。ちやにするとは、わけのわからぬ事をいうて馬鹿にする意。ここの文は「參つた」を重ね、且つ庄屋の口吻をまねた。
○大だら　「大だんびら」の略。大刀をいふ。「だんびら」は[illegible]の轉訛で、幅廣い刀をいふ。
○じやら／＼　戯れ／＼。
○てんがう　じやうだん。ふざけ。（見索引）
○戸板にごろ付豆　戸板に載せた豆はごろごろころこ[illegible]れぐ＼になり、意のままならぬからかくいふ。
○根津　本郷區根津[illegible]で、昔は遊女屋多く、江戸岡場所の一であつた。
○音羽　小石川區音羽町通りで、昔は遊女屋多く、江戸岡場所の一であつた。
○氷川　[illegible]
・[illegible]
・[illegible]
江戸岡場所の一であつた。
○鼓が橋　今四谷區[illegible]

から壺皿を刳抜いて、硝子入てやらかそふナフ候兵」、「イヤ／＼夫よりもおらが望みは、爰なお娘の舟底が刳抜て進せたいサア／＼お暇其内にと皆々打連れ立歸る、道引違へて走り來る村の歩がずつと這入り「申し頓兵衛樣、お尋者の事に付て、竹澤樣から御用が有、庄屋殿迄只今一寸」、「ム、お尋者とは知た事、新田方の落人の、御詮議であんべい、夫なら行にや及ばない、どちから來ても此渡を渡らにやならぬ一筋道、かねて竹澤樣と諜し合、新田方の落人が、若し此所へ來るが最期、相圖の烽火を上げると村々で法螺を吹けば、竹澤樣から捕手が出る、若しもおれが方で搦取か討取か、加勢に及ばぬといふ知らせには、アノ亭座敷の上に吊した太鼓を打てば、村々で取圍んだが皆散る約束、庄屋殿が大きな面で、どふ參つた斯ふ參つた隣の姥樣茶を參つたと無駄計りいふで有」、「何か樣子は知ませぬが、呼で來いとの言付け」、「そんなら一寸行てやらふ、ヤイ六藏、若しも落人臭い奴が見えたら、烽火と太鼓の手都合を忘れるな」と、腰に大だらぼつ込で歩を連れて出て行、跡に六藏小聲に成り「申し／＼お舟樣、エ、お前はむごい」と摩寄れば、「父樣の留守に成と、又じやら／＼とてんがう計り」、「アイヤてん

がうじやござりませぬよ、疾ふからお前に惚て居て、何ぼ口説ても戸板にごろ付豆よ、其豆故に身を盡し、根津音羽はいふに及ばず、氷川から裾繼櫓、朝鮮長屋鮫が橋、蘿蔔畠迄ほついたれど、笠森のお仙と、お前程なは何處にもござりませぬはい、コレ申どふぞ叶へて下さりませ」、「アレ〳〵〳〵、テモ耳の早いやつでは有」、「コリヤたまらぬ」と抱付く、「放せ〳〵」とせり合所へ、表口から日傭の八助「コレ六藏殿、ちつとの内用が有、代に渡場賴といふて、おれに任せて貴樣はコリヤしなしやな〳〵、親玉へ知ると毛氈を被る出入りだ、サア〳〵ござれ」と引立れば、「アイヤ少し仕かけた用が有、もちつと待て下され」、「イヤ〳〵待事はごんせぬ、貴樣の顏で色事とは唐茄子もモウ古い、飛んだ茶銚が西瓜と化た」と打連舟場へ急行、娘は跡に獨言、「けふの髮は上村のおみよ樣が、筋立してくれなさつた大事の髱を損ふて、此簪の吹廻しの、紋迄なくして仕舞た」と、つぶやき〳〵入にける。鴛鴦の番離れぬ二人連、義峯公は漸と道念、忠義故、生麥村を落のびて、新田の方へと志し矢口の、渡に差かゝり、「ノウ臺愛が兄義興殿の御最期有し矢口の渡し、此水底の根しや」と、川に向ひて合掌し、

はこの辺り[illegible]に遊女屋があつて、江戸岡場所の一。
○蘿蔔畠 [illegible]（今の[illegible]花町）にあつた遊女町をいひ、江戸岡場所の一であつた。
○ほつく 脫解毒（はつつく）の義。金錢などを浪費するをいひ、轉じて、ぞめき歩きまはる。
・笠森のお仙 江戸谷中笠森稻荷境内、水茶屋のお仙をいひ、有名な美女。
○耳の早い奴 聞くことのさとい奴。以て手はしこい（敏捷な）奴の意にいふ。
○しなしやな 萎「な」え靡く狀をいふ。なよなよ。
○親玉 かしら。頭目。
○毛氈を被る 毛氈に包み、壓へて苦しめる。
○出入り 紛紜。悶着。ごた〳〵もめ。（見索引）
○唐茄子 [illegible]もそめぬ娘（ふすぼ）り鑵子（唐茄子に喩へるは古くさいから茶釜に喩へ）が西瓜（粹をいひかく）に化けたとの洒落。
○上村のおみよ [illegible]す。按するに、ふさ〳〵した美しい髮を結うたのだ[illegible]
○吹廻し 「かざぐるま」（紋所の名）をいふ。
○道念 [illegible]
○生麥村 [illegible]
○新田 [illegible]

「南無尊靈出離生死頓證菩提」と、回向の聲と諸共に、暫し涙に暮れ給ふ臺も、倶に涙聲、「ヲヽお歎は御尤。早ふ新田へお歸り有。御一門を語らひて、御矢の詮議兄御樣の敵をお討遊ばせ」と、諫る詞に義岑公、「見れば渡に人も無し、道にて聞けば此家が、渡守の内とかや頼んで見ん」と門口に歩寄。「頼ませふ〳〵」と宣へば、奥より走て娘のお舟「何の御用」と立出れば義岑公しとやかに、「川の向ふへ參る者、舟の無心」と宣へば、顔熟々と打守り、「イヱ〳〵舟はいくらも有けれど、落人の詮議で日暮ては出しませぬ、其上にお前の樣な美しい殿御には、借ことは猶成ませぬ」と、顔に見とれてうつとりと心の内は餘所ながら、胸を焦せる薄烟。いとしと思ひ懸香のとふぞ留たき下心、義岑公は氣の毒顔、「我々は急ぎの道、暮に及んで宿屋は無し、差當つて難儀なれば、何とぞ渡して下さりませ」、「イヱ〳〵どふ有ても成ませぬ、宿屋がなくば私の内に、泊りなさつたがよいわいな」、「ソリヤ泊めて下されうか」、「泊いで何と致しませふ」、「夫は近頃忝い、連の女が持病の癪、幸ひのよい足休め臺此方へ」と呼入れば、「ムヽスリヤ貴方はお連樣かへ、ヱヽ憎らしい」と、ぴんとする臺は會釋して、「旅疲

○南無尊靈　菩提　南無は梵語 Namas. 歸命と譯す。義興公の精靈は生死界を超越し、頓に迷妄を去つて佛果を證得せよとの回向文である。
○御矢　水破「すゐは」と兵破「ひやうは」との二つの矢。これを義岑は兄義興から預つて敵に奪はれたこと第一に見ゆ。
○いたける　なぐさめる意であらう。
○無心　憚る心なきこと、轉じて、人に頼むこと。ねだり。
○借　正しくは「貸」である。（既出）
○懸香　繪を附け首に懸けて懐中する匂袋。懸想に懸香をいひかく。「留めたき」は懸香の縁語。
○氣の毒　つらく思ふこと。當惑。（既出）
○ぴんとする　つんとすること。氣に[illegible]ない[illegible]色にあらはれるをいふ。

れの私ら、お泊なさつて下さるとは忝ふござんする」、「アイお前もお連なら、お泊りなさんせ、サア申、見苦しけれどアノ奥の亭座敷がよい見晴し、あれでゆるりとお足休め」、「然らば左樣」と義岑公、臺諸共打連れて奥の一間に入給ふ、跡打眺め娘のお舟、「ほんに美しいと言はふか、可愛らしいと言はふか、とても女に生るるなら、あんな殿御と添ふて見たい、夫はそふとあの女中、兄弟なりやよいが、若し夫婦なら、わしや何とせふどうせふ」と、おぼこ娘の一筋に思ひ亂るる絲薄、穂に現はれて見へにける、義岑公は一間を立出、「申々お女中、連れの女が藥たべる、お湯の無心」と宣へば、娘はハツト手をもぢ〳〵、「申旅のお方樣へ、お前にちつと御無心がござんする」、「コレハしたり斯ふお世話に成からは、何なりとも御遠慮無ふ」、「アイアノ連の女中樣は、妹御でござんすか、お内儀樣でござんすかへ」、「是は扨變つた事に御念が入」、「アイお妹御ならよふござんすが、若御夫婦ならこつちにちつと濟ぬ譯がござんする」、「アイ成程あの女は私の妹、久々の病氣ゆへ、保養がてら淺草の觀音樣へ、連て參詣致しまする」、「アヽ嬉しや〳〵、夫聞たらもふ何もかも入ませぬお前ど、ふぞ私が内に、十日も

○とても　生れるとても。どうせ。（見索引）

○女中　婦人。（見索引）

○おぼこ　「うぶこ」（初子）の轉訛。うぶな子の義。初心。世なれないで幼いこと。

○絲薄　薄の一種で、葉・莖・穗共に細く、穗は紫赤色である。ここの文は、亂る、絲から絲薄にいひつづけ、絲薄の穗から表面（顏色）の意にとつて、現はれといひつゞけた。「古今集」の歌にも「花薄ほに出て戀ひば」などとある。

○したり　とんでもないと思ふ時に發する感動詞。

○内儀　町人の主婦を呼ぶ稱。ここは奥樣といふ意に用ひた。（見索引）

○淺草の觀音　東京市淺草區淺草公園にある金龍山傳法院淺草寺（せんさうじ）をいひ、本尊は聖觀世音菩薩である。

○したが　であるが　だが。然し。（見索引）
○つんと　一向にとんと。近松作「生玉心中」上卷に「おうというたが何の事ぞ、つんと此方に覺えがない」。
○琥珀の塵や磁石の針　琥珀を摩擦すれば電氣を生じ、塵などを吸付け、又磁石は針などの鐵片を吸付ける。以てお舟が義岑を附廻す姿に喩ふ。
○粋　推の義。世態人情に通じて意氣なこと。（見索引）
○不祥　不仕合はせ。不運。
○日陰の木々も花咲く　田舍娘も妙齡となれば色氣づくに喩へて。
○玉笹　笹の美稱。戀に[illegible]える涙の玉をいひかく。
○有られもない　あり得られさうにもない、でれ〳〵する體「ていなるをいふ。「源氏物語」帚木の卷に「折らば落ちぬべき萩の露、拾はゞ消えなんと見ゆる玉笹の上の霰」。
○いなふねのいなにもあらず　刈稻を積んだ舟を稻舟といふ、その稻舟の名のやうに、否といふのでもない。「古今集」卷二十に「最上川のぼればくだる稻舟のいなにはあらずこの月ばかり」。
○月草　鴨跖草又は露草ともいひ、花に碧色で早朝に開き青藍色、採って衣に摺ればよく染み著く。よ[illegible]

二十日も、十年も、百年も、逗留なされて下さりませ、したが私らが樣な田舍者は、相手に成もお嫌で有ふけれど、イヤもふつんと、わしに計り物言せ、コレイナ〳〵、此方ら向いて下さんせ」と、右よ左と附廻す、琥珀の塵や磁石の針、粋も不粋も一樣に迷ふが上の迷ひなり、義岑公は氣の毒さ、「思ひ懸けなきお宿の無心、いかいお世話に成まするると、入んとし給ふ袂を控へ、「ソリヤ餘りでござんする、是程思ひ詰めたものを、返事のないはお胴慾、なんぼ田舍生れでも惚れたが因果、惚れられたが、不祥と思ふて下さんせ、日陰の木々も花咲けば岩の狹間の溜り水、澄めば住む世の思ひ出に、叶へてやらふとつい一口、いふてくれたが、よいわいな」と縋り付たる袂、觸らで落る玉笹の有られもないが戀路なり、義岑公もいなふねのいなにもあらず、「ムヽ夫程迄に思ふて下さるお志さら〳〵徒には、思ひませぬ」とじつと締めたる手の内は、戀の錠前情の要、互に抱付草の、うつろひやすき色絲の濡れの絲口綻び口、吸附き引附き締附けて離れがたなき風情なり、時に不思議や義岑公、娘も共に色變り、ハツト身ふるひ忽ちに、どつかと倒れ息絶へたり、音に驚き駈け出る妻、コリヤ何事とうろ

○濡れ　痴話狂ひ。情事。
○件　「くだり」の音便。「行」の義であつて、前文にあることを指していふ語。「件の御旗」とは、道念から貰つて懐中してゐる新田家の定紋「新田中黒」の入つた旗をいふ。
○ふしん　「普請」の宋音。普く人の助力を請うて堂塔伽藍を建立する事をいひ、轉じて廣く一般に家などを建築することをいふ。(既出)
○しだら　「しだらう(つ)」の「しだら」で、ほど拍子より轉じた語か。工合。都合。體たらく。
○たづき　手着きの義。手寄り、たよりの所、とりつく所。
○楫なきお舟　娘の名お舟に舟をいひかけて、「新古今集」戀の部、曾根好忠の歌「由良のとを渡る舟人楫緒たえ行方も知らぬ戀の道かな」の趣がある。
○一腰　刀一腰。刀一本。
○狼煙　「前賢」に、昔火に狼の糞を用ひれば、烟眞直に上り集つて散らず、風が吹いても横に靡かないとある。
○中黒　「一引兩(ひとつひきりやう)」とも「新田中黒」ともいひ、圓の中に横に一黒引き渡した紋。

たへながら、柄杓の水を口うつし、介抱しても呼生けても、其甲斐更に詮方も、思ひ付いたる氣轉の臺、扨は娘の色香に迷ひ、心の穢れ御旗の咎めなるかと手を清め、義岑公の懐へ手を差入て件の御旗、さつと開けば忽ちに二人は夢の、覺めたる心地、表の方には六藏が戻りかゝつて、窺ひ足、義岑公あたりを見廻し、「此家に泊りて窺ひ見れば、家業に似ざる普請の結構、樣子といひ場所といひ、かた〲もつて心得ずと。娘が戀慕を幸に問い落さんと思ひし故、近寄れば今のしだら、仔細ぞあらん此家の内」と、御旗を取つて卷き納め、「臺來れ」と引連れて奥の一間に入給ふ。跡にしよんぼり本意なげに何と詞も投首し、たづきも知らぬ海中に楫なきお舟が物思ひ、打萎れてぞ居たりける。表に控へし六藏は、木部屋に隱せし一腰ぼつ込、「アノ旗を持つからは、紛ひなき新田の落人、相圖の狼煙を上ふか、イヤイヤ討手を引受け討せては手柄にならず、拔駈し搦め取つて褒美の金。おれ一人でせしめてくれん。うまい〱」と頷き〱奥を目懸て駈入るを。立塞がつて娘のお舟、「コレ六藏、そなたは奥の旅人を、何とせふと思やるぞ」、「ヤア何ととは知れた事。先刻にとくと見て置いた。中黒の旗持つか

らは新田の落人義岑に違はない。去年親方と相談して舟底を刳抜いて、義興を殺す時は命がけの事手傳はせ。御褒美を貰ふ時は親方一人でゐたゝまり。此六藏はおちやつぴい、出物になつて今に此樣、其弟の義岑。此度はおれが生捕つて、御褒美丸でゐたゝまり、おれも出世をせにやならぬ、邪魔なさるりやお主とて容赦はない」と、止めても止らぬその勢、一間に立聞く義岑公、娘は一途に戀の邪魔。拂はんものと思案を定め「ヲヽ無理に其方を止めはせぬ、が何ほいふても相手は武士、若し仕損じまいものでもない、僅かの褒美に目がくれて、私がいふ事聞かぬからは、是迄何のかのと言やつたは、皆嘘かや」と言はれ、噯。「ソリヤお前ほんの事か、イヤ／＼／＼、アノ奥の男めに氣が有故おれを止ふといふ謀、そふうまくは參るまい」、「イヤノウ そなたの心を見た上と思ふて居た故。是迄は返事もせなんだが、夫ともに疑がそるなら、其方の勝手にしたがよい」と、つんとすねられ六藏は、惡寒發熱頭に湯氣、「コイツハヱイワイ／＼、夫ならお前は此六藏が性根を見た其上では、きまつてくれるといふ腹か」、「サイノ其方がおれと夫婦になりや、父樣の爲に子じやないか、親子の間に掛隔けして、一人の

○暖まる　懐が暖まる意。儲ける。

○おちやつぴい　流行「はやし」られ下等な藝娼妓を「御茶挽、おちやひき」といふ、その「おちやひき」の音便訛。儲けがなくて心淋しい者をいふ。不景氣者　現今、多辯でへうきんな婦人のことにいふは、其の意を轉じたものである。

○出物　店に張出てゐる下等な遊女をいひ「おちやつぴい」の縁語。以てつまらぬ身に喩ふ。

○惡寒　ぞつとして身體に寒さを感ずること。

○發熱　寒さから熱の出ること。以て上氣すること。

○性根　[illegible]。根性。心根。

○サイノ　サレバイノ。（見索引）

手柄にするにや及ばぬ、父様は庄屋殿へ行てなれば、とくと相談した上で、どふとも爲たがよからふ」と、口へ出まかせ間に合を言ふて※水棹や詞の棹、※渡りに舟と六藏は乘せかけられてふはと乘り、「コリヤ近年に無い好い※日が出たはい、そんならわしは庄屋へ往て、親方を連れて來ふ、奥の奴等を逃さぬ樣、氣を付け給へ女房」と※延びた鼻毛のとちめんぼう、※振廻してぞ出て行、しすましたりと門の戶の、懸金かけて※とつかはと一間の內へ入にける。かくて時刻も※久方の、空近へ渡る冬の夜の、二十日※亥中の月出て、遠寺の鐘の※かうかうと、常に流るゝ川水も、いと物凄き門口の、一群茂る藪の中、ぬつと出たる主の頓兵衞、時分は好しと呼子の笛、塀の陰より下人の六藏、頓兵衞小聲に、「コリヤ〳〵六藏、娘めが目を覺まし邪魔ひろげば※ひち面倒、物音のせぬ樣におれ一人で忍び入らん、手前は表に氣を付けて、若し逃出ば討取れよ」、「ヲツト合點」と頷きさゝやき六藏は元の小陰に身を忍ぶ、頓兵衞は門の戶を引けど、しやくれど明ざれば、※大だら引拔き壁切明け、這入れば吹込む川風に燈火消へて深の闇、勝手覺えし我內も、態に心は暗紛れ、忍べばいとど身も重く、床はぎち〳〵足音の耳へ這入れば立留り、

○水棹や詞の棹　お舟の名から、言うて見るも「水棹」にいひかけ、詞であしらふことを「詞の棹」といひつづけて、舟の縁語で綴つた。
○渡りに舟　極めて好都合なことに喩へる諺。「法華經」藥王品に「如子得母、如渡得船、如病得醫」。
○日が出たわい　日出度いわい。そして「日」に賓の日をいひかけた。
○延びた鼻毛　男子が婦人に惑溺して愚弄されるも知らぬを、俗に「鼻毛を延ばす」といふ。（「鼻毛で蜻蛉を釣る」といふ諺もある。）
○撥鬢杵　撥鬢を結ふ時に用ひる棒。撥鬢が冷えれば縮んで延びぬから、いそいで棒をつかふやうに、[illegible]を「撥鬢杵を振る」といふ。
○とつかは　[illegible]。急ぎあわてるさまにいふ。
⦿ひさかたの　「空」にかゝる枕詞。時刻の久しくなるを「久方」にいひかけた。
○亥中の月　陰暦二十日の夜の月をいふ。二十日の月は亥の刻、午後十時ごろに出る。
○かうかう　鐘などの鳴る音の形容語。近松作「心中天の網島」上に「[illegible]」。
○ひち面倒　甚だ面倒。「ひち」は「ひちくどい」などの「ひち」と同じ語で、「しち」の轉。
○大だら　大刀。（既出）

○鈍臭い　はからしい。あはうらしい。ヘマをやつたとの意。しまつたり。

○あいたしこ　あゝ痛し。「こ」は接尾語で「はんこ」(判)、「ありんこ」(蟻)などの「こ」と同じ類である。

○だんびら　[illegible]いりの義と、略して「だら」と[illegible]刀　[illegible]

○[illegible]消る聲　心魂の消入る聲の義。[illegible]（もと[illegible]より出た語か）。

○つれ／＼　つら／＼。つくづく。近松作「冥途の飛脚」に[illegible]

○佛とも法とも辨へず　「佛法」[illegible]

一息ほつと次の間へ又も踏出す、足の下ぴつしやり砕ける煙草盆、「エヽ鈍くさい」と心では怒りながらもそつと投げ、襖にばつたりあ痛しこ難無く、忍ぶ亭座敷、梯子の上へ二足三足、「イヤ／＼彼奴も名に負ふ義興が一族なれば強者」と、心で頷きそつと下り、下屋へ廻つて探り寄り、闇にも光るだんびらを抜いて突込む二階の板、上にはわつと魂消る聲、してやつたりと刄物引抜き血押拭ひ、二階の梯子駈上り、障子蹴放し月影に夜着引捲り見て喫驚、「ヤア／＼わりや娘か、お舟か」と驚きながら、「義岑と女めは何處へやつた。有様に吐かせ、／＼」と目をむき出し怒りの大聲、娘は顔をつれ／＼と、恨めしそふに打眺め、「申し父様。浮世に生れた人毎に、慾を知らぬはなけれども、お前のやうに凝固まり、佛とも法とも辨へず、人は死ふが倒れふが、我さへよければ構はぬと、身勝手ばかりの強慾非道有ふ事か源氏の大將、義興様を誑つて、むざ／＼と殺したる、其天罰が我子に報ひ、宵に泊りし旅の御方、義岑様とはつゆ知らず、可愛らしい殿振りに恥かしながら心の迷ひ、お傍へ寄れば恐ろしき御旗の咎め、義興様の御怒りにて、悶絶せしも、そふとは知らぬ戀路の闇、最前六藏を追出し、一間へ忍び様々

と歎きしに、義岑様のおつしやるには、兄を殺せし頓兵衛が娘ゆゑ、此世で添ふ事ならねども、親と一處でないといふ、一つの功を立るなら、未來で添はふとおつしやつた、其一言がわしや嬉しい、此内にお出有つては、お身の上も心許無く、委細の譯を打明けて、月の出ぬ間を幸に、船にて落し參らせし」と、聞くより頓兵衛じだんだ踏み、娘が髻引摑み、「ヱ、汝は汝は〳〵大膽千萬な、見ず知らぬ男めに惚れくさつて、親の大事を他人に打明け、手に入つた代物を能ふも能ふも落し居つた、道知らず、罰當り、憎い奴」と拳振上げ丁々、手負ひの上の打擲に、娘は息も絶へ〴〵に、「ヱ、罰當り道知らずといふ事、お前も見事御存か、常々不埒な勝負好き、剰へ恐ろしい惡工みが仕足いで、たつた一人の娘の戀人、殺さふといふ惡心から、現在我子を手にかけるは、餘り非道じや胴慾じや、死ぬる我身は厭はねども、跡に殘つたお前の身の上、案じ過しがせらるゝ」と恨み歎けば、「ヱ、役にも立たぬ世迷言、落人を取逃して此親が立つものか」と、突退け刎退け行んとす、娘は袖にしがみ附、「一意見言ふても歎いても、聞入給はぬ無得心、仕樣がござるなら、仕樣模樣も有ふ物何をいふても身一つに思ひ詰め

○心許無し　不安心である。
○落す　逃がす、「逃げる」を落ちるといふ。
○じだんだ踏む　「じたたらふむ」（地蹈鞴）の訛、身をもがきながら、せか〳〵足踏みするをいふ。
○くさつて　繋がつての意。「くさる」は鏈るの意。
○不埒な勝負　博奕。
◇お身と頓兵衛とは血を分けた親子でありながら、[illegible]の両極端を行つてゐる。これを[illegible]にある[illegible]其の[illegible]さに比較すれば、其の性格相似通つてゐる如くに[illegible]、樋口郎は風あり浪ある。そして共に[illegible]人情の極致である。何がそうさせたか、本文を熟讀して貰ひたい。
○世迷言　不平をかこつこと。繰り口説「くぜ[illegible]」。
○仕樣模樣　手段方法。（見索引）

○一念發起　佛道に入つて佛果を得ようとして專心一意に起す信仰。
○不便　たよりない義。轉じて、憐むべきこと。いとほしいこと。
○愚「おろそか」(疎)の略。なみ〳〵の言ひ方ではたすならぬ意。これを「愚」で書くは當字。
○釋迦如來が元服　書かうといふても　釋迦が元服し、一體を納め、謝罪の文を書くやうな、如何樣なことがあらうとも。
○火打　火打石を打つに、其火の早いことをいひかけた。
◉心中　眞實な心をいふ。

たる義峯樣、此世で添はれぬ契緣と、聞けば聞く程猶戀しく、お手にかかつて死だなら親と一つでないといふ。言譯立たば未來にて。いとし殿御に逢はれふかと夫を頼みに一つには、一人の娘が先立ば一念發起もし給ひて。お心も直らふかと果無い事を頼みにて、覺悟極めて死まする、娘可愛と思すならお心を飜し、義峯樣を助けて給べ、頼みまする」と口說き立てわつと計りに伏沈み、血汐に爭ふ血の涙不便と、いふも愚なり。〔詞〕「頓兵衞はせゝら笑ひ、「此年迄仕込んだ根性、釋迦如來が元服して、謝罪證文書ふといふても、いつかな〳〵翻へさぬ、相圖を定めた義峯めを取逃しては、竹澤樣へ約束の顏が立ぬ」と、〔地〕娘を取つて突飛し、二階を驅降り用意に仕掛けし烽火に火打の早業、天を焦せる炎の光、兼て相圖の〔合〕村々より、人を集むる法螺吹立、さも物凄き其有樣、〔地〕娘は苦しき身をあせり、〔詞〕「村々より大勢にて取卷かれ給ひなば、何とてお命有べき」と、天に憧れ地に平伏正體、涙の隙よりも、思ひ付いたる一思案、上なる太鼓に「きつ」と目を付け、「此太鼓を打つ時は生捕りしと心得て、村々の圍を解くと最前聞いたが天の與へ、〔詞〕夜そ殿御へ心中の、女の操」と、一節に思ひ付いたる心の誠、ますます足を踏み蹌め

踏ん締め、漸う桴を振上げて、打んとしても手は屆かず、伸上りてはよろ〳〵〳〵、又起直つて飛上り、どんと一聲かつぱと伏す、音に驚き駈來る六藏、「これ打たせてよいものか」と、抱留むるを突退け刎退け爭ふ内身輕に出立頓兵衞が、繫ぎし舟に飛乘つて、櫓を押立て漕ぎ出す。上には娘が身をあせり、「コレノフ〳〵」と聲限り呼ど。叫べど叶はねば、又もや桴を振上る、「おつとまかせ」と後方より。桴引つたくる六藏が脇差引拔き切付られ、欄干より眞逆樣、川へざんぶり水煙。上には娘が詮方も、落ちたる鞘を振上て滅多無性に打つ太鼓、響に爭ふ頓兵衞は櫓を押立てゑいさつさ、手疵にひるまぬ六藏が。日頃に馴れし水練に早瀨の浪を事ともせず、拔手を切つて立泳ぎ、娘は死出の斷末魔。夫を慕ふ執著心、蛇とも成べき日高の川、領巾麾山の悲しみも、是にはいかで增るべき、跡は間違になる太鼓遙かに隔たる川向ふ。頓兵衞は腕限り難なく舟を乘着けて、陸へ飛下り駈出す。堤の陰より高聲に、「ヤア〳〵新田小太郎義岑是に有。匹夫め待て」と呼

○おつとまかせ　よしきたと應じた時に發する語。よしきた。どつこいこらさ。六藏は「どつこいこらさ」、お舟の後からお舟の持つ桴を引つぱつてゐるのである。

○脇差引拔き切付けられ　お舟は六藏の脇差を拔き、背をむかつて六藏を切付ける。六藏はお舟に切付けられ。

○滅多無性　むやみやたら。

○響に爭ふ　太鼓の響と爭ふ舟と、いづれが勝つかを競爭する。

◎[illegible]南朝の遺臣である[illegible]憤然として起つた若い雄[illegible]

○水練　游泳術。

○死出　冥土にある死出の山をいふ。冥土に行くことをいふ。●死出・[illegible]を見よ。

●斷末魔　死ぬ時の苦しみ、臨終の最際をいふ。

○夫　[illegible]また大[illegible]いうたのである。

◉蛇ともなるべき日高の川　[illegible]毒蛇となつて日高川[illegible]

○日高川　紀伊國[illegible]村道成寺より程隔つて[illegible]流れて[illegible]

○領巾麾山　松浦佐用姬[illegible]とつぐさよひめしが大[illegible]領巾麾山の石となつたといふ。

◉「松浦佐用姬の石になり」を見よ。

○匹夫　ひとりの男の義。轉じて「工匠」「下郎」などと卑賤な男の意にいふ。

○どうで助けぬ…助けしに　どうせ生かしては置けぬ汝の命であるが、娘の切な志にめでて、暫時の間助けてやつたのに。
○飛んで火に入る夏の蟲　求めて禍にかゝるに喩へる諺。「法苑珠林」に「如二飛蛾見一レ火投一」。
○百年目　運命のきはまる時の意にいふ。（見索引）
○たるみ　引締つた心が、どうしたらよいかとたやみ、元氣のゆるむ意。
○韓竿　連枷とも書き、竿の先きに梱（くるる）があつて、これに更に竿をつけ、竿を振り、先に附けた竿を廻轉して、籾を打つ農具。ここの文は、櫂と水棹とで、まるで韓竿で籾を打つやうに滅多打ちするとの意。
○牛頭馬頭　地獄の鬼の中に、牛頭人身なるを牛頭といひ、馬頭人身なるを馬頭といふ。獄卒。（見索引）
○觀念　目を[illegible]して、心に考へあきらめること。
○水破兵破の二つの御矢　[illegible]十六、[illegible]を具へたり、水破といふ矢を[illegible]けり」とあつて、源三位頼政がこの矢をもつて功名を立てたことや、この矢の由來などが記してある。

掛けられ、頓兵衛は立留れば、すつくと立つて義岑公。「現在の兄の敵見遁すべき奴ならねど、どふで助けぬ汝が命、娘が切なる志にめで、暫時の命助けしに、追つ掛け來る不敵者。もふ赦されず」と拔放せば、「ヤア飛で火に入る夏の蟲。名乘て出たは百年目」と、渡り合て丁々はつし、何とかしけん頓兵衛が、躓く所を義岑公、附入て取つて組伏せ首をかゝんとする所へ、臺を引提げ六藏が、「サア義岑。親方殺さば此女只一思ひ」と締め付る。ハツト驚くたるみを見、持返して頓兵衛が、蹈むやら蹴るやら叩くやら、「コリヤ六藏娘が敵の一人の奴原。嬲り殺しにしてくれん」と、櫂と水棹の韓竿打、「無念々々」と義岑公。臺は苦しき聲限り、力一ぱい牛頭馬頭が、いつそ止めの一思ひ、今が最期觀念と振上る間もあら不思議や、いづくよりとも白羽の矢二人が喉笛射拔かれて、共に息は絶へ果てたり。義岑・臺は起上り、「お前にお怪我は無かつたか」「其方は無事なか、さるにても何者のわざなるぞ」と引拔き／＼、「ヤア是こそは家の重寶、水破・兵破の二つの御矢」と、驚き給へば臺は目早く、「其矢に何か短册が」「ム、げにも」と打明り、「何々二つの矢を奪はれては、新田の家名の費へん事を愛へ、我

一念の通力にて敵の手より奪ひ返し、其方へ與ふる者也、新田小太郎殿義興」と、讀みも終らず義岑公、「ハヽヽヽヽ、扨は兄上義興公、お命亡び給ひても魂魄はれいくと、家を思ひ、弟を憐み給ふ大恩、何を以てか報ずべき、再び御矢手に入るからは、官軍を驅集め、朝敵を滅して兄上の恨みを散ぜん代々傳はる此御矢、家の重寶、武運の守り、ハヽヽヽヽ、有難し忝し」と躍り上つて悦び給ふ、末世の今に至るまで新田の社へ參詣し、守の御矢頂戴の、因緣斯くとぞ、知られける、時に向ふの川岸に、松明提燈きらめきて、さながら晝の如くなり、「ム、さてこそ〳〵、敵方の捕手の人數、押寄すると覺へたり、此隙に落ち延びん」と、臺諸共一散に漸う遁れ落給ふ、程もあらせず竹澤監物、數多の家來一同に舟に込み乘、「ヤア〳〵者ども、頓兵衛に言付け置きし相圖の太鼓の聞へしは、落人を生捕りしと、待てども〳〵沙汰せぬは、仕損せしと覺へたり、追掛けて討留めん、急げやつ」と下知すれば、櫓を押立てゑいさつさ、川の中に乘出す、不思議や俄に風起り、川波逆立かき曇り、空に雷電霹靂凄まじ、くも又怖ろしし、數多の家來を始めとして、水主楫取色違ひ、不敵の竹澤少しもひるまず舷に突立上

○麗々　明らかなさま。近松作「天智天皇」に「識情天地れい〳〵として行はせ給ひし」「俚言集覽」に「れいれい＝明らかなる意なり、レイレイたり、又レイレイとして居るなどいふ」。

○新田の社　「江戸名所圖會」卷二に「新田大明神社＝矢口邑にあり…祭る所の神は新田左兵衛佐義興朝臣の靈なり、十日を祭日とす、拜殿のみを經營す、本社の地は古墳なり、則其周りに瑞籬を造り設く、中は一堆の塚にして若樹繁茂す」。往時はこの社で［illegible］し御守りの矢をいただいたものである。

○落ち延びん　逃げ延びよう。

○下知　［illegible］の略、命令。（［illegible］引）

○はたたかみ　はた〳〵く雷の義。鳴りはためく雷。

り「ヤア卑怯なり者ども、此川にて去年の冬、義興のを殺せし故、恨みをなすと覺へたり、シヤ何程の事あらん」と、虚空を睨んで立つたる所に、空中より聲高く、「ヤア／＼竹澤監物秀時慥に聞け、汝が手段に滅びたる、新田左兵衛佐義興が、一念愛に現はれて恨みをなさん、思ひ知れ」と、呼はる聲の下よりも小山の如く波立て、舟を搖り据へ搖り下せば、廣言吐きし竹澤も、※五體にわなわな※膽襟色、猶も吹來る※疾風、舟は碎けて飛散れば、數多の家來一時に、底の藻屑と成にける、中にも剛氣の竹澤が、波を潜つて泳ぎ行く、上より黑雲覆ひかかり、甲冑を帶したる義興公の御姿、馬上勇々しく出立つて、御手を伸べて竹澤が頭を摑むと見へけるが、二つにさつと引裂い※と、「今こそ恨み晴れたり」といふ聲共に船中にて、滅び失せたる十騎の魂魄、君を守護して有々と空中に顯るれば、雷も鎮まり浪風も治る御代の末迄も、運を守りの御神德、※十騎の宮と諸共に仰がれ、給ふぞ有難き

○五體　頭・兩足・兩手をいひ、或は身體の他の所を數へていふ。[illegible]索引）

○膽襟色　驚怖して顔色の青くなること。「膽[illegible]」は[illegible]の別名で、青色の[illegible]である。

○疾風　俄に烈しく吹く風をいふ。

○と　「て」の誤であらう。

○十騎の宮　「江戸名所圖會」卷二に「同所（新田大明神[illegible]にあり、新田左兵衛佐義興[illegible]一塔の荒塚のみなり、土民[illegible]明神と稱す」とあつ[illegible]

第五（新田大明神社）

登場人物の主な者

四條大納言隆資（勅使）　新田小太郎義岑（義興の弟）　由良兵庫助信忠（新田の家老）
徳壽丸（新田義興の子）　僧道念（義興の遺臣）　畠山入道道誓（尊氏の執權）
坊門宰相清忠（吉野皇居に仕へ、尊氏に内應した奸臣）　江田判官景連（尊氏の部將）

梗概

新田義興公の怨靈雷神となり、雷鳴頻りに鎌倉・六波羅にも轟き渡るので、神靈を慰める爲に義興公の社を矢口村に建て、特使四條大納言隆資卿を迎へ、新田義岑・僧道念・由良兵庫助・徳壽丸も參詣して有難い勅命を拜する。畠山道誓・坊門清忠・江田景連の惡徒は、鳥居の笠木の落ちたのに打たれて身體微塵に砕ける。

十三鐘
絹懸柳

妹背山婦女庭訓

解題

明和八年正月二十八日から、初めて大阪の竹本座に上演された。作者は近松半二・松田ばく・榮善平・近松東南であつて、外に「後見行年七十六歳三好松洛」と載せてある。

本曲は五段に分れ、蘇我入鹿の謀反を背景として脚色した、所謂王朝物の代表的傑作と持囃され、當時衰微した操人形芝居の人氣を一時に取戻したものである。其の第三及び第四の道行までは、殊に結構の雄大と詞章の流麗とを極めた壓卷の場面で、本曲の題名もこゝに基いてゐる。

作者

近松半二の傳は「本朝廿四孝」の所に述べ、三好松洛の傳は「夏祭浪花鑑」の所に述べた。松田ばくは「聲曲類纂」追考に「松田ばく　作者師同本様　吉後表降と云」と見え、榮善平は同書・追考に「榮善平　道頓堀いろは茶や」と見え、近松東南も同書・追考に「近松東南　東南伊助といふ老後法體となりて綾子堂序と改ミ絲の上手なり」とある。

出處

蘇我蝦夷父子が誅された事は、古くは「日本書紀」に見え、これまでに謠曲・淨瑠璃・歌舞伎などに仕組まれた物がかなり多い。本曲はそれ等を參考し、中にも「王代入鹿大臣皇都諍」（竹田出雲作。寛保三年竹本座上演）から材料を求めた所が多い。それに入鹿の名によつて畜類的の因緣說を立てて骨子となし、鎌足・淡海等の忠義な人々が惡逆無道の入鹿を誅伐する爲に、心を痛め身を犧にし、種々の犧牲者を出すに至る事を述べた。

又、古から名高い猿澤池畔にある采女の衣掛柳の傳說や、神鹿を殺して石子詰にされた十三鐘（菩提院といひ、もと天平年間の創建。今のは應永年間の再建である。この鐘は寺僧勤行の合圖に六ツ時と七ツ時に打鳴したもの。今は南圓堂に移つた。境内に石子詰の遺蹟と稱する墓がある）の話や、活玉依姫が三輪の神の裳に苧環の絲を縫付けて、跡を慕つて行かれたといふ神話などを巧に取入れて、極めて複雜な趣向に技巧を凝らしたものである。

主要人物の略傳

藤原鎌足は藤原氏の祖で姓は中臣。大化元年（孝德天皇の御宇）六月三日中大兄皇子と謀つて蘇我入鹿を大極殿に誅し、孝德・天智の二朝に仕へて、大織冠を賜はり、内大臣となり、天智天皇の八年十月に薨じた。

藤原淡海は藤原不比等といひ、鎌足の第二子で、正二位右大臣に陞り、養老四年八月薨じた。年六十二。淡海公と諡す。

蘇我蝦夷は推古・舒明兩朝の大臣となり、子の入鹿と共に僭逆甚だしく、入鹿誅されるに及んで蝦夷も滅んだ。

蘇我入鹿は蝦夷の子。皇極天皇の御宇國政を專らにし、威權も父に過ぎて暴戾を極めたが、大化元年六月三日中大兄皇子・藤原鎌足の爲に誅された。

影　響

本曲はその後も屢々操芝居に上演され、現今も往々文樂の一座によつて上演されて、壽命を保つてゐる。

歌舞伎劇では、明和八年八月一日から大阪小川座（座本小川吉太郎）に上演されたのが最初で、江戸では安永七年春森田座に上演された。文政十一年八月江戸中村座に上演された時は、道行文を添削して「柳糸戀苧環」と題し、富本豐前太夫等が語り、天保四年七月江戸河原崎座に上演された時は、道行文を寶川壽助が添削して「願絲縁苧環」と題し、常磐津で語つた。これが現今行はれる常磐津の「お三輪」である。

かやうに道行は一幕或は單獨の踊としても演ぜられ、地は竹本と常磐津の掛合ひでも行はれるので、人形芝居と歌舞伎劇とのこの兩者を比較すると面白い。

第一（〔序〕大内。〔中〕春日野の社頭近き小松原。〔切〕蝦夷館）

登場人物の主な者

蘇我蝦夷大臣（逆臣）
安倍行主（中納言）
大判事清澄（武官）
宮越玄蕃（蝦夷の家臣）
定香（太宰小弐の後室）
雛鳥（定香の娘）
釆女の局（鎌足の娘）
中臣鎌足大臣（忠臣）
荒巻彌藤次（蝦夷の家臣）
久我之助清舟（清澄の嫡子）
桔梗（雛鳥の侍女）
小菊（雛鳥の侍女）
文昌寺（有髪僧）
八乗寺（有髪僧）
橘姫（蝦夷の娘）
蓍の方（行主の娘。入鹿の室）
蘇我入鹿大臣（蝦夷の子。大逆臣）

梗概

天智天皇眼病とならせ給ひ、大臣蘇我蝦夷・中納言安倍行主・大判事清澄等が禁中に出仕してゐる。其處へ太宰小弐の後室定香が参内して、娘の雛鳥に跡を取り家督を相續させたいとの願を言上する。宮越玄蕃その座に居て、「雛鳥を我が妻に申受けたい」と言ふ。行主は之を耳にもかけず、「おつてお許の御沙汰があらう」と言うて座を立つ。

折から久しく病床にあつた中臣鎌足大臣がお召によつて参内する。蝦夷はかねて逆心を抱いてゐるので鎌足を讒奏する。鎌足は敢て之を言ひ開かうともせず、謹慎の意を表して退出し行方不明となる。天皇の御寵愛を受けてゐる鎌足の娘釆女の局も、父の跡を追うて禁中を出た。

大判事清澄の子清舟は、狩の戻りに春日野の社頭近き小松原に憩ひ、雛鳥が侍女を伴うて通りかゝるのに邂逅し、吹矢の筒の音信して相思の仲となつたが、來合はせた玄蕃に妨げられて別れる。清舟は途に釆女の局が父を尋ねて行くのに逢ひ、之を匿つ

て追手に捕はれぬやうに逃れさせた。

蝦夷の子入鹿は、己が本心を人に悟られじと深く韜晦し、父の無道を嘆き佛道に歸依して入定せるかの如く見せてゐる。又聖寺・八乘寺の兩有髮僧が入鹿滿願の日に拜禮に來た。蝦夷は宮越玄蕃・荒卷彌藤次に命じて、兩坊主の衣を剝ぎ髮を剃りこほつて追拂はせる。又清舟を呼寄せて殺さうとして成らず。入鹿の室喉の方は蝦夷の惡逆無道を憂ひ、之を諫めて殺される。

父に不滿を抱ける入鹿は、勅使となつて蝦夷の逆心を糺しに來た行主・清澄に、父が反逆の證據品を渡し、以て父に詰腹を切らせた。これは入鹿が今までの假面を脫棄てて、だいそれた底意を決行する第一步である。彼は直ちに矢を放つて行主を射殺し、清澄に大逆の決意を打明けて、大綱の郎答をせまつた。忠義な清澄の心は變らねども、彼は時機を待つ爲作つて入鹿に從ふ。

こゝに於て入鹿は清澄・玄蕃・彌藤次等を引連れ、內裏をさして勇んで行く。

第　二（〔口〕猿澤池。〔中〕葛籠山神鹿殺し。〔切〕芝六住家）

登場人物の主な者

天智天皇（人皇三十八代）　釆女（天皇の寵姫。鎌足の息女）　淡海（鎌足の子）

芝六（獵夫。もと玄上太郞利綱といひ鎌足の家來）　三作（芝六の前妻の連れ子。十三歲）

お雉（芝六の妻）　新右衛門（郡山の搗米屋）　杉松（三作の義弟）

梗　概

盲目とならせ給うた天智天皇は、釆女が猿澤の池に身を投げた事を聞召され、官女を召連れて竊に宮殿を忍び出で、衣掛柳

の邊に御車を駐め、采女を弔うて追憶に暮れ給ふ。其のところに淡海が來て、節會の時に神例の式を過つた御詑を申上げてゐる際、禁廷の勤番等駈付けて、「入鹿が反逆を企て、寶藏に入つて叢雲の御劔を盗み出しました」と奏聞した。之を聞いた淡海は官女と諜し合はせ、還御と稱して御車を押し、天皇の御目の御不自由なのを幸ひに芝六の家に御連れ申上げた。

芝六はもと玄上太郎利綱というて鎌足の家來であつたが、獵夫に零落れてゐる。或日葛籠山に狩し、列卒等の貝鉦の音に驚いて逃出た爪黑の牝鹿を見付け、これこそ淡海公の所望されてゐる鹿であると思ひ、禁を犯し、子の三作に追はせて之を射殺し、背負うて家路へ急いだ。

芝六の住家では、天皇。淡海。官女達が御出になつたので、芝六の妻お雉は鄭重に御取持ち申上げてゐる。郡山の搗米屋新右衛門は米代の催促に來り、お雉にしなだれかゝつたので芝六に追返された。芝六は萬歲の囃子を催して天皇を御慰め申上げた後、爪黑の牝鹿の乳の下の生血を壺に入れ、以て御註文の品を調へた事を淡海に語つた。

暫くして入鹿の官人と稱して大勢押寄せ、芝六が天皇及び淡海を匿まつてゐる嫌疑によつて大庄屋の所へ拉し去つた。

孝心深い三作は、父が禁を犯して鹿を殺した罪を我が身に引受けようとして、「自分が鹿を殺した」と書面に記し、弟杉松を使として興福寺の鹿奉行に屆けさせた。之が爲に三作は捕へられて、六つ時（午前六時）の鐘を最期に石子詰の刑に處される事となつた。

然るに芝六を拉し去つた捕手は、其の實芝六の心を試す爲の鎌足の廻し者であつたので、芝六は無事に歸宅した。彼は心に思ふやう、一つは我が心を試されるは、我が子の愛に引かされて、逆臣に内應はせぬかとの疑あつての事なれば、一つは我が心の眞實を見せ、一つは疑はれた鎌足公への面當にしようと決心し、遂に杉松を刺殺した。妻は二子を失うて悲歎の涙に暮れる。芝六は已が留守中に三作が捕はれた事を聞いて驚き、三作を取返さうと狂氣の如くなつて駈出す。

この時鎌足公、猿澤の池に入水したと傳へられた采女を連れて出はれ、「三作を石子詰にしようとして掘つた土中から、蝦夷

が埋めた八咫の鏡が現はれ、三作の命も助けられた」とて、三作を誘引した。そして八咫の鏡の光に天皇の御眼も開き、釆女と御喜びの御對面をされた。爪黑の鹿の生血は入鹿調伏の料となつて、忠臣の蹶起を促す事となる。そして、十三鐘の古跡を今に傳へた。

第三　（〔口〕定香の館。〔中〕花渡し。〔切〕妹背山）

登場人物の主な者

蘇我入鹿大臣（逆臣）　荒巻彌藤次（入鹿の臣）　定香（太宰小貳國人の後室。雛鳥の母）

大判事清澄（武官。清舟の父）　久我之助清舟（清澄の嫡子。雛鳥の愛人）　雛鳥（定香の娘。清舟の愛人）

小菊（雛鳥の侍女）　桔梗（雛鳥の侍女）

梗概

〔口〕大逆の臣蘇我入鹿は、内裏に籠つて僭越を極めてゐる。或日定香の館に枉駕するといひ出した。そして僭位の悦びを分たうと、彌藤次に命じて奈良の諸職人・商人・藝人に受領の沙汰をする。

この時清澄は入鹿に召されて定香の館に來り、かねて領分の境界爭ひから不和になつた定香と口論をする。折から入鹿入り來り、「自分が妃にしようと望んでゐる天智天皇の寵姫釆女を、猿澤の池に投身したと僞つて、久我之助が匿まつてゐるに相違ない。久我之助の父清澄や、久我之助の愛人雛鳥の母定香は、釆女の在處を知つてゐるであらう白狀せよ」と迫つた。清澄も定香も「その事は更に存じませぬ」と言ひ張る。入鹿は「然らば釆女を匿まはぬといふ證據に、今日から久我之助を我が目通りに出

對させよ、また雛鳥をも我が内裏へ入内させよ」と、難題を命じた。そして側にある活花を引拔いて、「得心すれば榮える花、背けばこの通りだ」と落花微塵に枝打折つた。かゝる所へ鎧武者が駈入つて、「只今安曇の文次宗秀が當麻に陣取り、味方の軍を破つて奈良に攻入らうとしてゐます」と注進した。入鹿大いに怒つて駒に打乘り、鞭をあげて直ちに出陣する。

「中」元兇のはびこる世にも色は變らぬ櫻花、咲き亂れた彌生の頃、清舟は父の勘氣を受けて領内紀伊の背山に籠居し、法華經を讀誦して心を澄してゐる。又雛鳥は清舟を慕ひ、病と稱して領内大和の妹山に養生し、侍女と共に雛祭をして氣を晴してゐる。この兩家の山莊は、吉野川を隔てて相對してゐる。

雛鳥の侍女小菊・桔梗等は雛鳥の心を知つて之を慰め、雛鳥の戀文に石を括り附け、對岸まで屆けかしと念じて之を投げた。其の文は石と共に川中に落ちたが、瀧つ瀬に轉がり押上げられ突流されて行く。久我之助は之を眺め、愛人からの戀文とは氣も付かず、「石が水に沈まぬも世の逆さま事の習ひか。さるにても父の底意はいかに」と、之を占ふ爲に柏の葉を川に投げた。之を見た雛鳥は對岸に駈出で、「ナウ久我樣か懷しや」と聲を掛けた。久我之助も「オウ雛鳥無事で」と、互に顏を見合はせ、橋渡しなき水の流れを恨んで、遣る瀬ない戀に胸を焦す。

この時清澄と定香とは、入鹿に命ぜられた難題に張裂けんばかりの憂愁を胸に祕めて、それ〴〵の山莊に入り來り、思ひ思ひに入鹿の命を語つて愛子の心を試す。然るに久我之助は人臣の道を重んじ、雛鳥は貞婦の道を守つて、共に死を決す。是に於て兩家の親は愛子を殺しても、せめては其の愛人を助けたく、互に言合はせたやうに櫻花の枝を川に流して、我が子の無事を知らせて安心させる。

「切」然も定香は意を決し、愛人の爲に喜んで命を捧げる愛子の成佛を祈り、血の涙にくれて雛鳥の首を刎ねる。又清舟は采女の所在を父に告げて、刀を腹に突立てる。相愛の兩人の親は無量の感慨に打たれ、直ちに兩家和睦して、共に死ぬる各〻の愛子の爲に婚姻を結ぶ事となり、定香から雛鳥の嫁入として、其の首と共に雛道具や調度を吉野川に浮べて贈り來る。清澄は泣いて

之を受取り、清舟に雛鳥の首と未來の契りを結ばせて介錯し、やがて入鹿誅伐の當麻の義軍に投ずる事となる。

評

この段、花も水も山の姿も、仙境を思はせるやうな美しい妹山と背山とを背景として、相愛のあでやかな若い男女が籠居の有樣を寫した。そして男は人臣の大義を守つて命を棄て、女は愛人の爲に死ぬる健氣な眞心を說き、あたら嵐に蕾の花と散る哀れが、興味の中心となつて人の胸を打つ。そして其の兩人の親子が恩愛の絆にほだされて、血の涙にくれる眞情が、流麗な筆で巧に書分けられてある。

要するに結構も壯大、各人の心々も精細に描かれて、其のいふ所も、よく我が國民道德の精華を強調してゐる。本曲の題名もこれに基き、半二の靈腕もこゝに至つて不朽の生命を宿してゐる。

第三

奈良の都の八重九重、禁裏守護の太宰の館、入鹿公のお成り連、さゞめき渡る奧女中、荒卷彌藤次一ト間を出、「コリヤ仕丁共、今ン日は入鹿公御目出たの御悅びに、奈良の町へ入込の諸職人ン、商人藝者に受領を下タされんとの勅諚、相イ詰メたる町人ン共一ト人づゝ呼出せ」、「はつ」と答へて立チ出る、縣召しかや諸人

○奈良の都の八重九重　詞花集一春の部、伊勢大輔の歌「古の奈良の都の八重櫻、今日九重ににほひぬるかな」に據つた。
○太宰の館　太宰小貳の役宅の意。
○仕丁　召使ひの人夫。丁とは男の義。
○藝者　藝人。
○受領　職人などに國名の名義を授けるもので、諸國の長官名を許可すること。
○勅諚　天皇の御仰せ。「諚」は宣旨の合字。但しここは入鹿の命を、僭越にもかく用ひた。
○縣召　中古、毎年正月十一日から三日間に、諸國の國司の官人を任ずる公事であつて、專ら地方の官を任ずるが故に外官の除目ともいひ、春季に行はれるが故に春の除目ともいふ。

に、司を給て夫々に、國名を付し烏帽子子の、始めにかけし烏帽子屋が、身を立烏帽子諸眉は、三大臣のお召とて、高き位や懸烏帽子、十二の冠式法の、烏帽子屋なれば平七を。頭平と受領なされける。跡へ出たは烏帽子に白丁。彌藤次きつと見、「フウ其方は神職な。神職ならば何故吉田へ參つて受領を受ぬ」、「イヤ拙者めは鹿嶋の事觸、當年は辛の卯の年祟り年とござつて。鹿嶋の御寶殿よりでつかちない光り物が飛出。神の扉が八文字に開け神馬の四足に大汗をかいてござる。禰宜・神主是を歎き御湯を捧て七座の物忌、時にお鹿嶋の御託宣に氏子共が下用櫃にしやりを切してむらつぎをするで有、人の物でも手廻り次第打殺して其日を凌げ、むくりこくり地の底より潤はして米は下直に、錢は高ふさしてやろとの御託宣でござる、無上禮法新兵衛嘉兵衛、拂ひ給へ清めて給ふ」と喋りける、「扨は汝事觸よな。向後其方が受領には、口松の差出の頭作平次」と、許せし跡へぼつとしよ髮。言ねど手足黒黒と、鍛冶屋の挺子の某てんからり、ころり、てん〳〵からりの相槌に打や、打物光とは燒刄の燒物なれば、備前の守とぞ名にし負ふ、櫻に色香取り交て、手品やさしき、びんささら、京の水色

○烏帽子子　元服の時に烏帽子を被らせ名を付ける人を烏帽子親又は名付親といひ、その子を烏帽子子といふ。
○立烏帽子　烏帽子の本體であつて、折烏帽子が出來るに至つて、區別する爲にこの稱ができた。横の廣さ八寸たれば竪の長さも八寸である。
○諸眉　烏帽子の前にあるひなさきと額との間のひだで、少し高く押出た所を眉といひ、それが左右兩方にあるを諸眉といふ。
○三大臣　太政大臣、左右大臣、或は左右大臣、内大臣。
⊙懸烏帽子　打懸烏帽子をいふ。
○十二の冠　「職原抄」に「推古天皇御宇聖徳太子攝政十二年甲子正月始定冠位十二階」。
○白丁　・神事神祭などの時に物を舁ぎ行く人夫の被る服。傍訓「はくはう」とあるは誤し。
⊙吉田　京都吉田山の案園。吉田家は神道の長。
⊙鹿島の事觸　鹿島の神託と稱して、神職の姿で毎年の吉凶をふれ歩いた一種の物貰ひ。
○當年は…清めて給ふ　事觸の文言。
○辛の卯の年　本曲の初めて上演された明和八年（辛卯）。
○でつかちない　でつかい、大きな。「ない」は意を強める接尾語。
○七座　鹿島の七座即ち本宮・若宮・[illegible]・[illegible]・熊野・牛頭天王・疱社・高房の七社をいふか。
○下用櫃　日用の雜品を入れる櫃。（見索引）

よい染上ゲの、礪茶小紋ニに見初メて染て、酔てじやらくら笹の葉小紋ニ、今ニ夜必かならずやいの、松葉小紋ニの戸明ケて門ドにちつとやつて下ん」。「シテ俤は伊勢か熊野か」。「イヤ私は伊勢比丘尼」。「夫レならば比丘尼の司、お寮なんどといは」樟の、堅木作りのどつてう聲、「アイおらは攝州西成リの郡、上ミ福嶋の船乘でござります」。「夫レならば大名の船歌、上つ方には珍らしからん。謳へ〳〵」の聲に連レ。「ヱヤつるつつ共往つきやのふ來てな、小傍に立チ寄り見て有レば、おん目ん元は轉り、轉りんな轉轉共、こん轉がしやりかの、しやなりんがちよろ、能けんれんば又の愈ほん、ほんほ若枝や、葉ん葉葉もイヨヱ榮へや葉ん葉葉も、ろやんは

○しやり　梵語 Sarira（シヤリーラ）。米粒。「祕藏記」上に「天竺呼二米粒一爲二舍利一、佛舍利亦似二米粒一、故曰二舍利一也」。
○むらつぎ　むらつなぎ　村繼ぎ、村内を寄附を取立てて歩くこと。
○むくりこくり　「蒙古高句麗」の轉訛で、蒙古高句麗の襲來のことで、昔は鬼の意にいつたので本文も、現今この語は筑前地方に殘り、その意を轉じて頑固の意にいふ。ここの文の「打殺して」は「蒙古勢を打殺して」、その物を掠奪しての意、それは鬼の行爲であるから「むくりこくり」といひ、鬼は地獄にゐるから、「地の底より」といひつゞけた。
○無上靈法行兵衞嘉兵衞　「無上神靈神道加持」をもぢつたもの。
○口まつ　口まめ。おしやべり。「まつ」は「末」であつて、言はないでもよい末々までもしやべりたてることをいふ。「口まつ」は口まめの轉訛で、口まめに掛けていひかけて擬人した語。「俵詰めに……口まつも同じ」。
○ぼつとしよ變　ぼつとしよ變、ふざけふくらんだ變。
○挺子　梃杆をいふ。「挺子の衆」とは、梃杆をもつて働く人たち、即ち鍛工、石工、土工の人たちをいふ。近松作「心中及は氷の朔日」に「鍛冶屋のてこの衆、てつからりころり」。
○打物　刀劍の類をいふ。（見索引）
○櫻色　櫻色の顏は酒に醉うたさまをいふのであるといはれてゐる。近松作「……」に「二……黑目がちなる目の中も……櫻色」。
○手品　手つき。手ぶり。

○拍板　長さ五寸・幅二寸ばかりの薄い板を幾枚も重ねて其の一端を綴合せ、相撃つて音を發せしめる昔の樂器。熊野比丘尼が拍板を撃ち唄を歌うて歩いたことは、近松作の「五十年忌歌念佛」の中にも見えてゐる。
○京の水…やつて下ん　比丘尼唄。
○礪茶小紋　肉色にちかくて茶色を帶びたものを礪茶といひ、礪茶染の地に小紋を染出したもの。
○じやらくら　でれでれとふざけること。近松作「丹波與作待夜の小室節」に「泊泊の赤前垂にじやらくら致さないやうに」。
○比丘尼　もと熊野比丘尼又は伊勢比丘尼と稱したもので、佛法に歸依し、熊野權現・伊勢神宮の事觸れめいたことをしてゐたのが、時勢の推移につれて、隱し白粉黛紅を附けて伴達者となり、小歌を便りに色を賣る尼となつた。
○お寮　「おれうにん」（御寮人）の略。比丘尼のをさ。比丘尼。近松作「傾城酒呑童子」に「私は今熊野貞山に由する比丘尼のおれう」。
○岩樟の堅木作り　岩樟船をきかせて、「船乘り」と續く。
⊙どつてら聲　どなり聲。
◇舟歌の意は、つるりと往けば彼も來て、小傍で見てゐれば、目廻つて共に轉がり、又いつ見ようといつて別れるの意か。
○葉も榮え　「茂れ松山」などいふ「茂れ」（房事）の意か。
○ろやん　「ほんほ」「ろやん」は舟歌の拍子。

愈イヨへ榮へ」。謳ひ納めし船歌に、彌藤次は聞キ入ッて、「ヲヽ出かした〳〵。此後チは其方を、船の頭となすべし」と。言ヒしより名を船頭と。名付ケし跡へ道心シ者。風呂敷肩にひよつか〳〵、「コリヤ〳〵汝、所化ならば上人シ和尙に成リたい望か」。「イヤ〳〵。愚僧は願人シ坊主、寺號をお許し下ダさりませ」、「ムヽ願人シとは何シの宗旨」、「されば八宗九宗をもれ、二季の彼岸は鉦太鼓で町町を、六齋念シ佛ッ。お目に懸けふ」と風呂敷より、取リ出し始める太鼓の拍子。「やあん楊柳枝。〳〵。南天龍膽金銀花咲いた。銀杏金柑楊梅寒梅瓢簞鳳仙花、やあん鐵仙花、〳〵、栴檀沈丁芙蓉林檎、長春半夏草、ヱヽスヱ〳〵りよ。ヱヽスヱスリヨニんりやうヱヽスヽリヨ、こんりやうこんしんこんりやうこんしん〳〵、こすへふくぐ〳〵いしせほろみとす」、と打チ納めつ。「扨盆前の施餓鬼には、鐃鈸なんど打チ鳴し法界の、施餓鬼〳〵と六字詰、七月廿四日には、地藏菩薩を背撓負、一トつや二つ三つや四つ、十ヲより内の嬰子は、小石拾ふて塔と積。一チ重積んでは親の爲、二重積んでは、鄕里兄弟我ガ身の爲と、廻向する、庚申には鉦鑼打ッて、庚申の代待、扨傘に、赤前垂を腰に卷。住吉踊、四社のお前で、扇を拾ふた、扇

○道心者　佛果菩提を求める心を發起し、佛門に入れる者。

○ひよつかひよつか　「ひよつこひよつこ」ともいひ、徐徐と歩く貌。

○所化　師によつて敎化される者をいひ、能化に對する語。佛弟子。

○願人坊主　昔、人に代つて願がけの修行・水垢離などした乞食坊主をいひ、轉じて門附をして歩く乞食坊主をいふ。

○八宗・九宗　三論、法相、華嚴、倶舍、成實、律、天台、眞言を八宗といひ、又これに禪を加へて九宗といふ。

○六齋念佛　毎月八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、三十日を六齋日といひ、この日鉦太鼓をたたいて念佛を唱へ、有緣無緣の弔ひをなすこと。

○やあん楊柳枝…ほろみとす　この歌は近松作「日本振袖始」第五に出てゐる。

○沈丁　近松作「日本振袖始」第五には「沈丁花〔げ〕」とある。

○長春　かうしん薔薇〔ばら〕。

○半夏草　かたしろ草。

○ヱヽスヱ〳〵…ほろみとす　これは太鼓の拍子であらうが、「日本振袖始」には鼓・笛の音拍子のやうになつてゐて、之と少し違つてゐる。

○施餓鬼　寺院で、毎年七月一日より十五日までの間で、施餓鬼會を任意に日を定めて修する。

目出たや末繁昌。サ住吉樣の岸の姫松目出たさよ。白かん金延べてのふソレ襷にかけて。米米量る關の戸。船頭殿ぞさらば〳〵ヱ〳〵、踊仕舞へば彌藤次も、「是はしんどい宗旨じやな。向後は其方を。曉山ヶ西方寺と寺號をお許しなさるぞ」。「ハア、有難し忝し」と。悦び勇春駒は、「目出たや〳〵、春の初めに春駒なんど。夢に見てさへよいとや申。ドウ〳〵〳〵。三吉乘つたか、右の袂に三七二夜。左りの袂に三七二夜。兩方合せて六七六夜。ドウ〳〵〳〵」。勇み舞たる春駒が。轡の紋ちきつぱりと、好ィ男共友禪の、伊達な下着を一つ前。横目つかふて白洲につくばい、「私は堺の素人淨瑠璃ヽ三右衛門と申ス者。政太夫は播磨、若太夫は越前。筑前大和と受領致す、是は大坂の名人藝、私は太夫號を下さらば有難ふござります」。「ナニ淨瑠璃を語るとな、幸ィ〳〵、奥女中も

○鐃鈸　寺院で用ひる樂器、響銅で作り二枚打合せ鳴らす。
○七月二十四日　「雲錦隨筆」卷四に「今世俗に二十四日を地藏の緣日とす」。
○背捲負ふ　背を曲げて負ふ。背負ふ。（見索引）
○林清　日暮（ひぐらし）林清の創めた歌念佛の節で語ることを示した。林清は日暮八太夫の門人で、說經節から歌念佛を創作した斯道の名人であつた。
○十より内の嬰子…廻向する　賽の河原で小兒等が石を積む俗說によつた。
○銅鑼　唐金（からかね）で作り銅盤の形したもの、今佛家で用ひる樂器の一種。
⦿庚申の代待　庚申の日に代人となつて神佛に參詣すること。
⦿だいまち　「だいまつり」（代祭）のつまつた語。
○住吉踊　「人倫訓蒙圖彙」卷七に「住吉踊＝住吉のほとりより出る下品の者也、菅笠に赤き絹のへりを垂れて顏をかくし、白き着物に赤き前垂、團扇を持ち、中に傘鉾を立てて踊る」。
○四社のお前…さらば　この住吉踊の唄は「麓廼塵」にも出で、殆んど同文言である。
○四社　住吉社は四御殿あるによつていふ。
○しんどい　疲勞する。つかれる。（見索引）
○春駒　春の初めの祝に馬頭の形を作り、頭に戴いて歌舞したものであるが、後には木偶の馬頭を持ち歌を唄ひ、門附をして歩いた一種の乞食。
○目出たや…ドウドウ　春駒の唄。
⦿友禪　友禪模樣。
○一つ前　衣服を二枚以上重ね著て、前を一つに揃へること。
○白洲　奉行所の白砂で敷いた庭、轉じて奉行所の稱。
○三右衛門　「咲太夫」（後にある）を見よ。
○政太夫　竹本播磨少掾といひ、竹本筑後少掾の弟子。
○若太夫　後に豐竹越前掾といひ、竹本筑後少掾の弟子。
○筑前　竹本伊太夫は豐竹筑前少掾と號した。
○大和　竹本大和少掾は豐竹…

聞たがる。無間の鐘を所望〳〵」。「是は迷惑、私はちやり聲で歌事は參りませぬ」、「いかぬを是非にと權威の所望。迷惑ながら聲張り上げ、「テ、テンツヽ石にもせよ、金にもせよ。心ざす所は無間の鐘、其金爰にと三百兩。深山おろしに山吹の花吹散らす」、破れ聲にて、語れば「扨も。怖い聲。最前の藥罐屋と、一所に置たら能からふ」と、どつと笑ひを、催ふせり。「ヲ、一ッ興一ッ興面白し、御梅が枝は諸木に先立咲花なれば、一左衞門も向後は咲太夫と改むべし」と、にはつと悦びて、お禮申せば「殘りし受領。又明日」と言渡し、いづれも立洲を立出る、「召しに應じて大判事清澄。袴の襞積も角菱有る。不和成る中の定香が屋敷、互にそれと白書院。目禮もせずつつと通り、「入鹿公の御座の間へ謹案内仕れ」と、言捨て行んとす、定香聲かけ「先暫く、珍らしや大判事殿、太宰の小貳が跡目を預る妾が屋敷、挨拶もなく、お通りは女と思ひ侮つてか、但し武家の禮儀御存じなくば、少と御傳授申そふか」と、詞の非太刀打掛拂ふ、驕がる清澄空嘯き、「小貳存生より領地の遺恨により、此屋敷の内へは今日迄、足踏もさせぬ大判事、入鹿公のお召しによつて參つたは、勅諚を重んずる故、皇居

○無間の鐘　無間の鐘の淨瑠璃。俗說に無間の鐘は遠州の夜中山觀音寺にあつて、これを撞けば、現世では[illegible]者となれども、未來は無間地獄に墮するといふ。

○ちやり聲　[illegible]「伊吉集覽」に「江戶にてドウケ方の事を京にてチヤリ役と云」。

○石にもせよ　花吹散らす　無間の鐘の淨瑠璃の文句。

○破れ聲　石原に藥罐を引きずるやうな騷がしう響く聲。

○最前の藥罐屋　[illegible]のやうに喧しうしやべり立てる鹿島事觸をしやれてかくいうた。

○梅が枝　「無間鐘」の[illegible]に出る、梅が枝の手水鉢[illegible]といふ有名な唄があるので、[illegible]いうた。

○咲太夫　もと堺の人。大阪に出でて堺屋三右衞門と[illegible]、二代竹本政太夫の門弟となり、寶曆十二年九月竹本座で「奧州安達原」の興行中に竹本咲太夫[illegible]

○大判事　武官で[illegible]判をする役、[illegible]に當る。

○白書院　[illegible]

○珍しや　[illegible]強い意味をもたせてもいふ場合がある。ここの文では、[illegible]不和の間に話し合ふことはなかつたので、「珍しや」といふのであるが、反感を[illegible]

○太宰の小貳　筑前太宰府の上役を太宰の帥といひ、下役に小貳といふがあつて五位の諸大夫に相當する。ここは太宰の小貳國人（くにんど）をいふ。

○非太刀　[illegible]

○検非違使　[illegible]てあつたが、別に役所がなかつたので、淳和天皇の[illegible]

○おりない　[illegible]

○警蹕　[illegible]

○午の上刻　[illegible]

○流星南に出て…朕が吉星　「符瑞圖」に[illegible]位とするといふを取つて、かくいうたのであらう。

○萬乘　[illegible]を出すといふ意より天子をいふ。

の間へ出仕の心。女童に用なければ、挨拶する口は持ぬ」、「イヤ夫なれば猶もつて。今日入鹿様お成りなれば大内も同然、大判事に御疑ひの事有つて、此定香に吟味致せとの勅諚。此詮議済ぬ内は、一寸も御前へは叶はぬ。お控へなされ清澄殿」、「ムヽ、ハテ珍らしき事を聞く。昔御詮議の筋有らば検非違使に仰て、拷問有んに何の御遠慮。元來御疑ひ蒙るべき覺なし、生ぬるき女の吟味、受る様な清澄でおりない。お身見事詮議して見るか」、「ヲヽ太宰の後家此定香が。屹度詮議して見せふ」、「イヤ小癪な。其處退て早通せ」、「罷ならぬ」と根に持遺恨。互に。折ぬ老木の柳。松の間の襖押開かせ。「出御成り」と警蹕の、聲に一人も飛退り恐れ、入たる計也。入鹿の大臣寛然と、上段の褥より、遙に見下し。「ヤア大判事、未明より參内せよと。勅使を立つるに甚の遅参。アレ見よ今日は午の上刻、流星南に出て北に拱するは、萬乘の位に朕が吉星。夫程の事知らぬ大判事でなし。但し、入鹿に仕へるが不足と思ひ、身を退ん下心か。緩怠也」ときめ付れば、「コハ御諚共覺へず今日天下四海皆の御手に屬するとは云ながら、いまだ殘黨先帝に心を寄る族有つて、帝都を窺ふ折柄、我

等が領地紀伊ノ國は、西國南海の咽首にて大事の※切所。弓を張り鏃を磨くに隙なければ思はざる遅參。其上忠臣第一の大判事に、何事の御疑ひ」と憚りなくぞ申ける。「ホヽ其仔細といつぱ、先帝の寵妾者采女の局を、朕が后妃に定めんと行方を尋求める所。※猿澤の池へ入水せし由。如何にしても合點行ず、察る所采女が所在は、大判事其方が能く知らふがな」と、思ひがけなき疑ひに。清澄不審の眉を顰め。「コハ存ジ寄ラざる儀、其采女の御事は。猿澤の池に捨身有しとは、誰レ知らぬ者ござなきに、我等が行方存せしなどとは、何を目當の御仰なるぞや」、「ヤアとぼけな。汝が悴レ久我之助は采女が※附ケ人ならずや。其親たる其方なれば、よも知ラぬとは言れまじ。サア眞直に白狀せよ、※陳ずるに於ては計ラふべき旨有リし」「イヤのふ大判事殿お聞キ有リしか。妾に仰付ケられし詮ン議とは此事こサア覺へが有ラば申されよ」と言せも立ず「イヤ默り召れ。女の差出る所でなし」、「イヤ勅諚を受ケての詮議なれば。勅答の有無によつて、其座はちつとも※立タしはせじ」と、膝立テ直し詰寄て。雙方挑み爭ふたり。入鹿大臣大口明キ「ハヽヽヽ、イヤ工だり拵へたり。定香が領分大和の妹山。清澄が領地紀の國背※山、隣國境目の

○切所　難所・要害の處。（見索引）

○猿澤の池　奈良興福寺南大門址の南西の石壇下にある。周圍三三六米。池の西北角に、「大和物語」などに載せてある采女が入水した傳説で名高い采女の社がある。

○附け人　監督保護の爲に附けておく人。つきそひ人。

○陳ず　陳述する義、轉じて虚僞の申立てをすることを云ふ。

○立たしはせじ　立たせ申すことは致しますまい。立退くを承知せぬ意を婉曲にいふ。

○妹山　●「妹背山」を見よ。

○背山　●「妹背山」を見よ。

○さいめ　さかひめ（境目）の約轉。境界。

○古主の帝　天智天皇。

○夫　「をつと」である。「それ」とよむは誤。

○氣相　顏にあらはれる氣色。面色。

○不義　密通。密通を總て不義といふ。

○尾籠　十三　日參照。

論により、互に確執せしとは表の見せかけ、内々には申合せ、古主の帝へ心を通はす儕等と。我眼力に違ひはせじ、さすれば天皇・采女は両家の中に、隱し置んも知ざる故。大判事が詮議を申付た定香コリヤ其方にも此疑ひはかかるぞよ」。「是は又昔の勅諚共覺ませぬ、夫小貳より中悪き大判事殿、何故申合さふ様もなし、私に迄お疑ひは恐れながら」、「言な女め、さ程音信不通の中なるに、大判事が悴久我之助、其方が娘雛鳥と。密通致し居は如何に、イヤ知るまじと思ふか。悴共が縁に繋がれたる汝等なれば、両方共に吟味は遁れぬ、何と肝に徹へふが」と。飽迄邪智の一言に。何思ひけん大判事席を蹴立行んとす。透さず定香が刀の鐺むずと取り、「コレ待給へ清澄殿。氣相かへてコリヤ何處へ」、「何處へとは。親親が不和成中を存ながら。忍び逢ふ悴が不所存、引捕へて吟味せねば。子供が縁を幸に和睦せしと言れては、我家の恥辱となる」、「ヲヽそりや此方も同じ事。一旦は武士の意地。今更中が直りたい計に、娘に態と不義させしと。世上の人に蔑せられては、過逝給ふ夫へ立ぬ、妾も倶に」と襖引上、駈け出す一人をはつたと睨め、「私の趣意に立騒ぐ尾籠

やつ、儕等が悴の不義を吟味はせぬ、朕が訊るは釆女が所在、サア何れからな
りと早く言へ、何と〳〵」「イヤ悴が性根はいさ知らず、釆女殿の義は都て存せ
す。我が詞に僞有らば、弓矢神の御罰を受けん」と、刀すらりと拔き放し、丁々と
金打し、「此上にも御疑ひ有らば如何程の拷問なり共、サア遊ばせ」とどつかと
坐す。「ヲヽ妾とても小貳が妻。家に替へて釆女殿は匿はぬ、水責火責に遭とて
も、知らぬ事は存じませぬ」と詞するどに言ひ放す。「ムヽ然らば釆女が詮議は
追つて。先。汝等が面晴なれば、匿はぬといふ潔白に、定香は雛鳥を入内させよ、
又大判事も覺なきに相違なくば、久我之助を今日より、朕が目通りへ出し勤させ
よ、屹度其旨心得よ」と、何がな探る當座の難題、二人は胸にぎつくりと、答
へも暫し無かりしが、稍有つて詞を揃へ、「斯有り難き勅諚を、互の子供が違背
致さば」「ヲヽ言にや及ぶ」と傍成る活け置く櫻の一枝押し取り、「得心すれば榮へ
る花、背くに於ては忽ちに、朕が威勢の嵐に當つ眞此通り」と欄干に、はつし
と打ち折り落花微塵、はつと計りに覩視の、心も共に散亂せり。猶もゆるさぬ大
音上げ、「ヤア〳〵彌藤次早く參れ、汝は百里照の目鏡を以て、香具山の絶頂より

○性根　この語から「正念」であらう。根性。
○いさ　知らずに應じる副詞で、「いさ知らず」と熟語となる。また「不知」を「いさ」と訓んでもある。「倭訓栞」に「いさ＝いなと通へり、否の義なりといへり」。（見索引）
○かつて　すべて。「かつ」は「かつふつ」の「かつ」であつて、下に必らず打消の語に應じる。（見索引）
○金打　武士が大小の刀を拔きて打合はせることで、誓を立てる時にするわざである。（見索引）
○面晴　疑晴れて面目の立つこと。
○おばしま　「おほはしま」（大階間）の約。欄干。「倭名抄」に「軒檻＝於波之萬」。
○百里照　遠方を照し覽ること。百里は大數をあげたのであろ。「[illegible]」[illegible]である。
○香具山　大和國[illegible]香[illegible]につて、高さ[illegible]。

○諚　定言の合字。仰せ。
⊙趙高が馬と欺く小牡鹿　秦の中丞相趙高が、二世皇帝に鹿を献じて馬と欺いた。ここの文は、小牡鹿から[illegible]入鹿につづけた。
○大鳥　[illegible]ふはまり。
○官軍　[illegible]ていふ。
○當麻　大和國[illegible]當麻。
○南都　奈良の都。
○逆徒　逆徒は入鹿が官軍を逆徒とよばりする。[illegible]に對して、[illegible]
○穆王が龍馬　周の穆王、八匹の駿馬を[illegible]居つたことは、「穆天子傳」卷一にも見えてゐる。
○龍馬　駿馬。
○綸言　[illegible]
○いそふれ　[illegible]

屹度遠見を仕れ、コリヤ／＼兩人よつく聞ヶ、若少シでも容赦致さば兩家は沒收、從類迄も絶するぞ。性根を定め早行ヶ」と、せき立ッ。諚意に親親の、思ひは千千の胸の中。見せぬ表に。忠と義を。張り詰メし氣のたゆみなく。打チ連レてこそ、出て行く、誠に秦の趙高が。馬と欺く小牡鹿の。入鹿が威勢ぞ類ひなき、かかる所へ中門より追ィ追駈入鎧武者、「御注進」と呼はつて。御白洲に頭を下げ「河内の國に武知郡司安彦。先ン帝に味方をして大鳥の城に籠りしを、官ン軍殘らず馳向ひ、敵キを攻付一ッ晝夜に落城、大和に安曇の文次宗秀、當麻の邊りに陣ンを取、南都を攻る其結構、馳向ふて戰ひしに味方の、官ン軍ン利を失ひ、殘らず敗北仕る」と息キつぎ敢ず言上すれば「ハヽヽヽ物數ならぬ逆徒の奴輩。我馳向ふて微塵にせんぞよ。彼穆王が龍馬に勝れし希代の名ィ馬。吉野の牧より狩出したる。其馬引ヶ」と廣庭へ引キ出させ。欄干より、ひらりと打チ乘り。名ィ馬の勇で手綱かいくりしと／＼。轡の音トはりん／＼／＼。綸言誰レか背くべき、天地狹しと馬上の勢ひ、刻む蹄も街の谺、「いそふれ、やつ」と出ッ陣の朝を、早めて、駈り行、

○山跡の國は都の初め　神武天皇建國の大業成り、都を大和國橿原に奠め、はじめて天皇の位に即かれ給ふ。「みやこ」とは宮處の義、天皇の宮居のある地。
○妹背の初め　大和なる妹山・背山は神代からあつたもので、これが妹背の名の始めである。
○歌人の言の葉草の捨所　大和は歌枕なるをいふ。「言の葉草」とは和歌をいふ。
○勘氣　勘當。父から勘當されて山住居するのである。
○經讀む鳥　鶯。法華經を讀誦してゐるにいひかく。
○彌生　陰暦三月。
○桃の節句　三月三日の節句、雛祭の日。
○萩の强飯　萩の餅（おはぎ）をいひ、雛祭の供物。
○すうわり　すらりと延びた貌にいふ。近松作「本朝三國志」に「すうわりの腰をよおらし出でて行く」「[illegible]」にも[illegible]。
○しつらひ　設け飾ること。ここは雛を調へて飾ることである。
○不破の關　この關址は美濃國不破郡關原町大字[illegible]にあつて、[illegible]。ここの文は不和をいひかけた文飾。

古への、神代の昔山跡の、國は都の初めにて、妹背の初め山山の、中ヵを流るる吉野川、塵も芥も花の山、實世に遊ぶ歌人の、言の葉草の捨所、妹山は太宰の小貳國人の領地にて、川へ見越しの下館、背山の方は大判事清澄の領内、子息清舟日外より爰に勘氣の山住居、伴ふ物は巣立ヶ鳥網と我レと只一ッつ、經讀鳥の音も澄て、心細くも哀也。頃は彌生の初めつかた、此方の亭には雛鳥の氣を慰めの雛祭り、桃の節句の供へ物、萩の强飯腰元の、小菊、桔梗が配膳の腰も、すふわり春風に柳の、楊枝端近く、「ノウ小菊、いつものお雛は御殿ンでお祭りなさるれど、姫様のお調成で此山岸の假座敷、谷川を見晴し櫻の見飽、雛様も一ト入お氣が晴てよからふの、此方等も追ッ付ヶよい殿御持ッたら、常住あの様に引ッ附いて居たら嬉しかろ」、「フウ桔梗の何言やるやら、何ぼ女夫並んで居ても、あの様に行儀に畏つて計ッ居て、手を握る事さへならぬ窮屈な契りは嫌」。肝心の寝る時は離れ／＼の箱の中チ、思ひの絶る間は有まい」と、徒口口も雛鳥の、胸に邊の入日寒く、辛ひ戀路の其中ッに視と視とは昔より、御中ヵ不和の關と成ヵ逢ふ事さへも片絲の、結ぼれ解けぬ我ヵ思ひ、一戀しゆかしい清舟様、此山の彼方に

○ひょん　閃「ひょん」。忌忌しい。いやなこと。(見栄引)

○一つてき　一摑であらう。ひとなげのまま。

○したが　ではあるが。然し。

○岩橋　岩石の橋、昔時役小角（えんのせうかく）といふ行者が、大和國葛木山に岩橋の工事に[illegible]

○念彼觀音　「[illegible]」であつて普門品[illegible]「法華經」普門品を[illegible]

と聞ィたを便り母様へ。お願ヵひ申て此假り屋、お顔が見たさの出養生爰迄は來れ共、山と山とが領分の境の川に隔られ。物言ひ交す事さへもならぬ我ヵ身の儘ならぬ、今は中中思ひの種。いつそ隔て戀佗る。逢れぬ昔がましぞかし」と、切なる思ひかきくどき、歎けば倶に腰元共。「お道理でござりますほんにひょんな色事で隣同士の紀伊國大和、御領分のせり合で。お二人りの親御様は軋轢軋轢。雛鳥様と久我様の。妹背の中を引キ分ヶる妹山背山、船も筏も御法度で。たつた此川一トつ、つい渡られそふな物、小菊瀬踏して見やらぬか」、「ヲヽ滅相な、此谷川の逆落し。紀州浦へ一ッてきに流れて往たら鮫の餌食。したが申雛鳥様、お前の病氣をお案じなされ、此假屋へ出養生さしなさつたは。餘所ながら久我様に。お前を逢す後室様の粋なお捌き、女夫にして下ダさりませと。直キにお願ヵひ遊ばしたら。よもやいやとは岩橋の渡る事こそならず共、せめて遠目にお姿を」と。障子ぐはらりと縁端に。覗こぼるる腰元共、久我之助は鬱鬱と一文の行ヵ末身の上を。守らせ給へ」と心中に。念彼觀音の經机。案じ入たる顔容、手に取様に「ノウあれあれ、机に靠れて久我様の。物思はしいお顔持お癪な起りつらん」

○辛氣　氣分のくさくすること。じれつたい氣もち。
○鹿の卷筆　鹿の夏毛で穗を作り、紙又は色絲などで軸を巻き附けた筆をいひ、大和良い名物「和漢三才圖會」卷十九、筆の條に「今名所用者鹿毛也」。
○どんな　「鈍な」である。あはうらしい。
●松浦佐用姫の石になり　松浦佐用姫が、夫の大伴佐提比古（さでひこ）と別れるを嘆き、高嶺に登り船夫の船を望んで領巾「ひれ」を脱いで麾いたが、追慕の餘り石となつたといふ。
○ひれふす山　平伏すに領巾麾山、ひれふるやまをいひかけた。領巾麾山は肥前國濱崎市の西南、鏡村の東端をいひ、大伴佐提比古の妻が領巾を振つたから、山の名となつた。
○三つ柏　「見つ」をいひかく。三つの柏葉を水に浮べ[illegible]、沈めば願ひ叶はず、浮けば願[illegible]「[illegible]」[illegible]「思ひ[illegible]いかにこふことの、沈むにうくは濱な[illegible]」
○[illegible]川　[illegible]に男や[illegible]のある時、祓ふ爲に河原に出で、川で身を[illegible]、祓式し、六月と十二月との晦日に行ふ。吉野川を假の[illegible]とし[illegible]參拜する意。よ[illegible]に[illegible]を遷して大神宮を崇けるといふによる。「大和[illegible]」[illegible]に「[illegible]」[illegible]
○朝拜　[illegible]
○女中　婦人。
○いつち　「いふ[illegible]」[illegible]

エ、お傍へ行たい。コレ爰に居るはいな」といへど。招けど谷川の。漲る音に紛れてや。聞へぬつらさ。「エ、辛氣。此方等が思ふ様にもない。コレ此方向て見たがよい」と。あせるお傍に氣の附附。「ほんに夫よ。口では言はれぬ心のたけ」。豫て認め奥山の鹿の卷筆封じ文。戀し小石に括り添へ。「女の念の通せよ」と祈願をこめて打ッ礫。からりと川に落瀧津波にせかれて流れ行。「エ、どんな。心の念は届ても。女力の届かねば思ふた計り片便り。返ゞ事を松浦佐用姫の。石に成りとも成たい」と。平伏山の甲斐もなき。久我之助川に目を付ヶ。「何處よりか水中に打ッたる石は重けれど。逆卷水の勢ひに沈みもやらず流るゝは。ムム重き倍も入鹿といふ逆臣の水の勢ひには、敵對がたき時ゞ代の習ひ。夫を知ッて暫しの中ゞ。敵に従ふ父大判事殿の心。善か惡かを三つ柏。水に沈めば願ひ叶はず浮む時は願成就。吉野を假の岐川大神宮へ朝拜せん」と。柏の若葉摘取ッて。谷を傳ひに水の面。見やる女中は「申〳〵。今の小石が届いたか。久我様が川へ下りなさるる。あの岩角の折ら曲りが、川端がいつち狭ひ。幸のよい逢瀬」と。言ふに嬉しさ鶯鳥の飛立計り振ゥ袖も。裾もはらはら坂道を折から風に散花の。櫻か中の立姿

※しどけ難所も厭ひなく、「ノウ久我樣か懷かしや」と、言ふに思はず清舟も、「雛鳥無事で」と顏と顏、見合す計り※遠間の、心計りが、抱き合詮方淚先き立ち、「中〻清舟樣、妾やお前に逢たさに、病氣といひ立爰迄は來て居れど、親の許さぬ中垣に忍んで通ふ事叶はず、女雛男雛も年に一度は※七夕の、逢瀨は有に此樣に、お顏見ながら添事の、ならぬは何の報ひぞや、※妹背の山の、中を隔つ吉野の川に※鵲の、橋はないか」と口說き言、聞清舟も楫有ば早渡りたき※ゆかしさを、胸に包みて、「道理道理、我も心は飛立ど、此川の法度嚴しきは親親の不和計でない。今入鹿世を取て君臣上下心心、隣國近邊といへ共親しみ有ば徒黨の企有んかと、互に通路を禁しめて船をとめたる此川は、領分を分る關所も同然、命だに有ならば又逢事も有べきぞ、今流したる水の柏、波にもまれて浮しは心の願ひ叶ふ知らせ、入鹿が掟嚴しければ我も世上を憚りて、此山奥の隱住心の儘に叢の、噂は聞共※籠鳥の雲井を慕ふ身の上を、思ひやられよ雛鳥」と、儘ならぬ世を恨泣。「ノウ又逢ふ事も有ふとは、別る時の※捨詞。假令※未來の父樣に御勘當受る共、

[illegible]

○雛鳥の…振袖　雛鳥の緣語「飛立つ」を用ひ、飛立たうとして袖を振ふを「振袖」にいひかけた。

○しどけなし　着衣ぶりが亂れてだらしなくな[illegible]をいふ。「倭訓栞」に「しどけなし[illegible]無[illegible]の義なるべし」とある。

○遠間　「とほあひ」である。

○七夕　初秋の夜に牽牛・織女の二星が銀河の邊に[illegible]支那の小說に、毎年陰曆七月七日の夜の一度のみ、この二星が交會するといふに據つたもの[illegible]上代の[illegible]棚機津神に附會し、牽牛星[illegible]のである。

○妹背の山の中を隔つ吉野の川　「古今集」卷十五・戀の部、讀人知らずの歌に「流れては妹背の山の中に落つる吉野の川のよしや世の中」。

○鵲の橋　七月七日の夜、鵲といふ鳥が群をなして、[illegible]橋をなし、以て織女星を牽牛星に渡す[illegible]といふ。この故事によつて[illegible]の橋を男女の[illegible]の意にいふ。吉野川に[illegible]しの橋はないかと怨むのである。

○ゆかしさ　なつかしがつて行きたさ。

○籠鳥の雲井を慕ふ　身を束縛されてゐる者が自由を[illegible]、「平家物語」卷十に「籠鳥の雲を戀ふる思ひ」。

○捨詞　[illegible]しない詞。「捨ぜりふ」ともいふ。(芝居でいふ「捨ぜりふ」は、役者が花道又は奥からの出入に、相手なしに一人つぶやく詞)。

○未來の父樣　清澄[illegible]將來結婚したら、清舟の父清澄は雛鳥の父ともなるから斯くいふ。

妾やお前の女房じや、迚も叶はぬ浮世なら法度を破つて此川の、早瀬の波も厭ふまじ、何國いか成方へなと連て退て下さんせ、私は其處へ行ます」と、既に飛込川岸に、周章驚き留むる腰元、「イヤイヤ放しや」と泣入娘、「ヤレ短慮なり雛鳥、山川の此早瀬、水練を得たる者だに渉り難き此難所、忽命を失ふのみか母後室に歎きを掛け、我にも彌憎しみ懸かる、科に科を重る道理、必早まり召れな」と、制する詞一筋に、思ひ詰たる女氣も今更弱る折こそ有れ、「大判事清澄樣御入なり」と知らする聲、はつと驚き久我之助歸るを名殘り、押しとむるも、我身を我身の儘ならず、「コレのふ待て」の聲計、「後室樣御出」と、告る下部に詮方も、泣く泣く庵の打萎れ登る坂さへ別れ路は、力難所を行心地空に、知られぬ花曇り、花を歩めど武士の心の、嶮岨刀して、削るが如き物思ひ、思ひ逢瀬の中を裂、川邊傳ひに大判事清澄、此方の岸より太宰の後室、定香にそれと道分の石と意地とを向ひ合ふ、川を隔てて、「大判事樣、お役目御苦勞に存じます」と、聲打掛を掻取の夫の魂、放さぬ式禮、清澄も一揖、「早かりし定香殿、御前を下るも一時、参る所も一つなれ共、此背山は身が領

○とても　助詞「とて」に「も」の添はつた語。どうしても。

○空に知られぬ花曇り　空が曇るのでなく、空に知られないで我が眼の涙に曇りうるむ意。「花曇り」とは、花時空の曇つて霧のやうな雨の降るをいふ。「拾遺集」春の部、紀貫之の歌に「櫻散る木の下風は寒からで、空に知られぬ雪ぞ降りける」。ここの文は「新古今集」戀の部の歌「何故に曉なる月の曇るらむ、空に知られぬ袖のしぐれを」の趣がある。

○嶮岨刀して削る　「遊仙窟」に「刀削嶮岨之勢」。武士のけはしい心から目には温情を見せねども、斷腸の思あるをいひかく。

○定香　人名「定香」に「定か」（はつきりの意）をいひかけた。

○掻取　濃衣　近古婦人の服装の一で、帶をしめた上に打掛けて着る小袖。

○式禮　色代。挨拶。會釋。

○一揖　一度おじぎをすること。「揖」は、漢土では人に禮をするに、手を我が胸にあてこまぬくことをいふ。

分ヶ、妹山は其許の御支配、川向ひの喧嘩とやら睨合ッて日を送る此年月、心解るか解ぬかは今日の役目の落居次第、二つ一つの勅命、狼狽た捌召さるな」と睨、くしやつく茨道、脇へかはして「仰の通り、入鹿様の御諚意は、お互に子供の身の上請合ふては歸りながら、身腹は分ても心は別別。若あつと申さぬ時は。マアお前にはどふせふと思し召」、「知た事、御前で承はつた通り、首打放す分の事さ。不所存な悴は有ッて益なく無ふて事缺けず、身の中の腐は殺で棄るが跡の養生、畢竟親の子のと名を付るは人間の私さ。天地から見る時は同じ世界に涌た蟲、別ッに不便とは存じ申さぬ」、「ハテ強い思し切り、私は又いかふ料簡が違ます、女子の未練な心からは、我が子が可愛て成りませぬ、其代りにお前のお子息様の事は、眞實何共存じませぬ、只大切なは此方の娘、忝い入鹿様のお聲のかかつた身の幸、假令如何申さふ共、母が勸て入内させ、お后様と多くの人に、敬ひ傅かそふと思へば此様な嬉しい事はござりませぬホヽヽヽ」と空笑ひ、「ムムシテ又得心せぬ時は」、「ハテそりやもふ是非に及ばぬ、枝ぶり悪い櫻木は、切ッて接木を致さねば、太宰の家が立ませぬ」、「ヲヽそふなくては

○川向ひの喧嘩 「和漢故事要言」にも出てゐる事。

○くしやつく くしやくしやする。

○知れた事 不便とは存じ申さぬ この清澄の詞は實に徹底した人生觀である。然もこれを、後文に後に遭遇する時の絶大な悲劇に對照すれば、詞と心とは全く人の兩面を見せて哀れを極めた。

○入内 皇后などが册立の前に、儀式をそなへて内裏に入り給ふこと。

叶ふまい、此方の悴とても得心すれば身の出世、榮華を咲す此一枝、川へ流すが知らせの返答、盛りながらに流るるは吉左右、花を散して枝計り流るるならば、悴が絶命と思はれよ」、「如何にも、此方も此一枝、娘の命活け花を、散さぬ樣に致しませふ」、「ヲヽサ今一時が互ひの瀬越し、此國境は生死の境、返答の善し惡くに寄つて、遺恨に遺恨を重るか」、「サア是迄の意趣を流して、中吉野川と落合ふか」、「先つ夫迄は雙方の領分」、「お捌を待つて居ります」と詞峙つ親と親、山と大和路分れても、變らぬ紀の路恩愛の、胸は霞に埋れし庵の、内に別れ入る立派に言ひは放しても定かに知らぬ子の心、覺束なくも呼子鳥、「娘娘」と谷の戸に、音なふ初音雛鳥も、母の機嫌を差足に、「一段樣能ふぞ、今日はお目出度ふ存じます」と、武家の行儀の三つ指に、堅い躾猶親子の親しみ、「ヲヽよふ飾が出來ました、今日は其方の顏持もよさそふで、一入目出度い、母も祝ふて獻上の此花、供へてたも、幾才に成つても雛祭りは嬉しい物、女子共何なりと、娘が氣に合遊びをして、隨分と慰めてくれ」と、いつに勝れし後室の機嫌は訴訟の好い出機會、「一寸今のをちやつと乘り出して、御覽じませ」と腰元に、腰押されても兎

○吉左右　吉報。
○瀬越し　櫻の枝が流れて川瀬を越すこと。これに[illegible]の意をいひかく。
○遺恨に遺恨を重ぬる　清澄・定香の兩人は、我が子は殺してもせめて其の愛人を生かしたい爲、口でこそ強い事を言ふけれども、實際いづれか一方が入鹿の命に從ふとなつては、境界爭ひの遺恨があ[illegible]遺恨を重ねる。
○峙つ　稜立「そばだつ」の義。かど〳〵しい。けはしい。
○大和路　妹山は大和なるによっていふ。
○紀の路　背山は紀伊なるによっていふ。
○覺束なくも呼子鳥　どうやらわからない不安心に[illegible]れながら子を呼ぶ。「古今集」春歌上部、よみ人知らずの歌に、「をちこちのたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな」。
○谷の戸　谷のいり口。「續後拾遺集」賀部の歌、「君がため谷の戸出づる鶯は、幾萬代の春を告ぐらむ」。
○今日はお目出度ら存じます　雛祭の祝[illegible]
○三つ指　三本指をついて頭を[illegible]
○飾　雛飾。
○かほもち　おもゝち。顏色。
○[illegible]好い出しほ　[illegible]お機嫌の好い機會を見計つて言へば、叶へてくれや

すいからかくいふ。

○付　久我之助清舟をさす。

○塞がる　組の流蘇「ふさ」をいひかく。

○叡聞　叡は明らに通ずる義、聰明といふことで、天子の御事についていふ。叡聞とは天子の聞し召すこと。但しここは、入鹿に聞えてゐることをいふ。

や角と、言ひこそくれの縺れ髪、「イヤのふ雛鳥、脊たけ延た娘を、親の傍に引付ヶて置ヶば結句病の種、夫レで急に思案を極め、其方に好い殿御を持す、嫁入さすが嬉しいか、ヱヽ、ハテ氣遣カひ仕やんな、可愛娘の一ッ生を任す夫ト、和女の氣に入ぬ男を、何ンの母が持タさふぞ、ナア腰元共」、「ハイハイ、左樣でござります」、お氣の通つた後室樣、嫁入の先キは大方今のナ焦るる君でござりませふ」と、押シ推當ども得手勝ッ手、誰にか縁ンを組紐に、胸は眞紅の塞がる箱取リ出し、「妹背をならぶる雛の日は嫁入リの吉日、此箱の主シは極る殿御、雛の御膳ンで夫定め、コレ和女の夫トと云ふは誰レ有ふ、入鹿大臣樣じやわいの」、「ヱヽそんなら私を嫁入さすとは」、「ヲヽ、太宰の小貳が娘雛鳥、美人の聞ッへ叡聞に達し、入内させよと有リ難い勅諚」、「ヱヽイ」、はつと喫驚うろ〳〵と詞は涙、ぐむ計リ、「ヲヽ肝が潰れる筈、夫トと申スも恐多い、一ッ天ンの君を聟に取ル家の面ン目、日本ンの國に此上エのない嫁入の隨一チ、果報な娘、此樣な目出度い事が有レ物かナア女子共」、「ハイ〳〵お目出度いと申そふか、いつそ亂騷でござります」と、工合違ひの嫁入リに、菊も桔梗も投ゲ首の、二人リは小腹ッ立て行、母の心も色色に、咲キ分ヶ

の枝差出し、「親の許さぬ言かはし私通は叱つて返らず、一ッ日思ひ初メた男、何時迄も立テ通すが女の操、破りやとは言ぬが、貞女の立テ様が有リそふなもの、とつくりとよふ思案しや、此花は八重ト一ト重、互ィに不和なる親親の、心揃はぬ一つの花、一つ枝に取リ結び、切放すに離されぬ悪ク縁ンの仇花、今和女の心次第で、當時入鹿大臣の深山颪に吹散され、久我之助は腹切ねばならぬぞや、雛鳥と縁を切て入鹿様へ降参すれば、清舟も命を助る、知らせは川へ流す櫻、散るか散ぬが身の納り、時に従ふ風に靡き、君が手活ヶの花になれば、八重も一重も恙なふ、九重の内に傅るる互の幸、戀しと思ふ久我之助、助けふと殺さふと今の返事のたつた一トつ、貞女の立様サアサア見たい」と、戀も情も辨へし、義理の柵せきとめても涙せき上せき上ながら「母様段段聞分ましたお詞は背きませぬ」、「そんなら得心して入内して給るか」、「アイアイ」、「ヲヽ嬉しや、出かしやつたく、夫でこそ貞女なれ、馴ぬ雲井の宮仕へ、武家の娘と笑はれな、今日より内裏上﨟い、髪も改めすべらかし、親ふて母が結直してやりましよ」と、いそいそ立ヶは立ながら娘の心思ひやり、別れの櫛のはかなさも、解ほどかれぬ愛を思ひ、

○叱つて返らず　既にすぎた事は、叱つてもそのまゝには返らず。私通を叱つても取返しがつかぬ。

○八重一重　八重櫻と一重櫻。昔は櫻に今のやうに多くの名稱はなくて、一重の山櫻や、八重櫻の名で通つてゐた。

○九重の内に傅かる　禁裡で大切にされる。「九重」とは禁裡をいひ、皇居を九天に擬して天子九門といふよりの稱。

○柵　[illegible]「しきからみ」の義であらう。水流を塞ぐ爲に、杭[illegible]を打ち並べて之に竹柴を横たへたもの。

○すべらかし　[illegible]「すべらかし」[illegible]

●別れの櫛　[illegible]櫛を投げるは不吉[illegible]れてこんと投げ櫛は別れの櫛とて忌むことをと、口には言はず[illegible]」。

○重き背山　「妹」を「重き」に掛けて、妹山の清澄から重い背山の情況に移り、この両方の掛合の詞章として、両山の情況をうまく書分けた。

○赦免　罪をゆるすこと。赦は罪をゆるす義。切腹は、武家時代に士分以上の罪ある者に科する重刑であつて、打首よりも名誉とした。武人たるの面目を立つる恩命であるとも觀られる。よつて打首などにしないで、切腹による御赦免というたのである。

○金打　誓を立てること。（既出）

○神妙　奇特。殊勝。

○葎　蔓草であつて、莖に刺がある。田園荒地に自生する。

○介錯　切腹する人に附添うて　其の人の首を刎ねること。

○綺羅を飾り　美服をよそほふ義、轉じてみえを張る。

重き背山の、庵の内、父が前に謹で、「久我之助が心底聞し召分られ、切腹御赦免下さるる事、身に取ていかい計大慶至極」と手をつけば、默然たる大判事、良打うるむ、目を開き、「今朝入鹿大臣此大判事を召出し、先帝寵愛の采女、身を投死たりとは僞り、其方が悴久我之助、人知ぬ方へ落しやりしに極れば、必定汝等が方に匿有べしとの難題、元來知ぬ大判事。よくよく思へば采女の御難を避けん爲、猿澤の池に入水の體にもてなして、密に落し參らせしは、中々中久我之助が智惠でない、鎌足公の指圖を受ての計ひと、知たは身も今日が初め、親にも隱し包みしは大事を漏さぬ心の金打、若輩者には神妙の仕方、ハ、ア出かしたりと思ふに付、邪智深き入鹿、久我之助が降參せば命を助ん連て來れと、情の詞は釣寄て、拷問にかけん謀、責殺さるる苦しみより切腹さすれば、采女の詮議の根を斷大功、天下の主の御爲には、何悴の一人など、葎に生る草一本、引拔くよりも瑣細な事と、涙一滴こぼさぬは武士の表、子の可愛ない者が凡、生有者に有ふか、餘り健氣な子に恥て、親が介錯してくれる、侍の綺羅を飾、嚴しく横たへし大小、悴が首を切刀とは五十年來知らざりし」と、老の

悔に清舟も、親の慈悲心ン有難涙、「命二つ有ならば君には死て忠義を立テ、父には生て養育の御恩を送り申さんに、今ン生の殘ン念ン是一トつ」と、顔を見上ヶ見おろしてわつと平伏ス親子の誠、此方の亭には母後室、「サア／＼目出度い、和女の名の雛鳥を、其儘の内裏雛、裝束の附ヶ樣も此女雛と見合せて、サア／＼早ふ」と有ければ、恨めしげに打守り、「女夫一對何時迄も添遂るこそ雛の德、思ふお人に引離され、何樂しみの※女御后、※茨の絹の十※二一重、雛の姿も恨めし」と、取ッて打付ヶ緣板に、ころりと落チし女雛の首、驚く母の胸板に必死と極る、娘の命包めどせきくるはらはら涙、「娘入内さすといふたは僞り、まつ此樣に首切ッて渡すのじやはいのふ」、「ヱ、そんならほんぼんに※、貞女を立チ※さして下タさりますか、ア、忝い有リ難い」と、伏シ拜む手を取ッて、「ノウ入内せずに死るのを、夫ト程に嬉しがる、娘の心知らいでならふか、あつと受ヶても自害して、死る覺悟は知りながら、和女の死る事聞ィたら、思ひ合た久我之助、倶に自害召れふも知レぬ、せめて一ト人リは助ヶたさ、一ッ日得心したにして、母が手づから解いた髪は、下ゲ髮じやない、※成敗の搔上ヶ髮、介錯の支度じやはいの、尊いも卑いも姫御前の、夫トと

◇「まこと」「こなた」と同韻によつて、背山から妹山の情況に尊じる。このあたりの文、技巧詞章共に洗煉の妙を極め、我が士道婦道の極意に觸れて言々涙がある。

⊙女御（にようご）　「にようご」といふべきである。もとは嬪と同樣な待遇であつたが、漸次地位高まり、攝關大臣の女を女御として、皇后に立たれるやうになつた。至尊に奉仕する高位の女官。

○茨の絹　茨の如き絹。その絹は我には身を刺す茨の如く感じるとの意。

○十二一重　内衣、緋の袴、單〔ひとへ〕、五衣〔いつつぎぬ〕、打衣〔うちぎぬ〕、表著〔うはぎ〕、唐衣〔からぎぬ〕、裳〔も〕と襲ねて着たのをいひ、官女の正裝である、内裏雛の御衣裳はこの正裝に作つてある。

○ほんぼん　本々。眞實。

○立チさして　立てさせて。

○成敗　「成」はなる、「敗」はやぶる義。政事を取扱ふことにいひ、轉じて刑罰を加へる義となり、更に轉じて誅戮することをいふ。

○成敗の搔上け髪　介錯の場合には、首を切[illegible]なされる女は髪を搔上げて結ふのである。[illegible]「御[illegible]」「すべらかし」であつては、首を切落すに[illegible]魔になるからである。

○賽の河原 [illegible]に、[illegible]して冥土に行き、この河原[illegible]で、[illegible]て塔を造れば、獄卒[illegible]この時[illegible]、[illegible]の[illegible]とに旅立つによつてかくいうた。(見索引)

○三つ瀬川 [illegible]「[illegible]のかは」をいひ、[illegible]によつて[illegible]といふ。「十王經」[illegible]、山水瀬、江深淵、[illegible]冥土にある川。

○九寸五分 [illegible]

○血脈 [illegible]

○無量品 [illegible]「[illegible]彼觀音の經机」とあるから、[illegible]。

○今は [illegible]

○不義 [illegible]

○不和な中程 [illegible] この詞は我が民衆[illegible]

○花は三吉野 [illegible]「花は」[illegible]「[illegible]武士」[illegible]

いふはたつた一ト人リ、穢らはしい下の輿何ンの母も嬉しかろ、祝言こそせね、心計リは久我之助が、宿の夫と思ふて死にや、ヱヽ是程に思ふ中、一チ日半ン時添しもせず、賽の河原へやるかいの」と、引キ寄引寄雛鳥も膝に取リ付キ抱キ付キ、忝さと嬉しさと逢で別るる名殘リの涙、一つに落る三つ瀬川、川を隔て清舟が、最期の觀念悪びれず、燒刃直ゾなる魂の、九寸五分取リ直し、腹ラにぐつと突立ッる、「ヤレ暫く引ト廻すな、覺悟の切ッ腹クせく事はない、コリヤ冥途の血脈讀さしの無量品、親が讀誦する間、一ッ生の名殘リ女が面、一ト日見て何故死ぬ」、「イヤ存ジも寄ラず、此期に及んで左程狼狽た未練な性根はござりませぬ、去リながら、今はの際の御ン願ガひ、私相ィ果しと聞カば、義理に繋れ雛鳥も、倶に生害と申スべし、左有ル時キは太宰の家も断絶、暫の間ながら、切ッ腹クの義はお隠しなされ、降參承知致せし體に、後室方へお知せ有ラば、女も得心仕り、入内致せば彼が爲、不義の汚名は受ケたれ共、是ぞ色に迷はぬ潔白」、「ヲヽ出かした能氣が付イた、年シ來立チぬ武士の意地、不和な中カ程義理深カし、命を捨るは天ン下の爲、助るは又家の爲、氣遣ひせずと最期を潔ふ、花は三吉野侍ィの、手本ンになれ」と

潔く、言へど心の、亂咲キあたら櫻の若者を、散らす惜さと不便さと小枝にそそぐ血の涙落て、波間に流れ行、夫レ共知ラず悦ぶ雛鳥、「アレ〳〵花が流るるは、嬉しや久我樣のお身に恙のないしるし、私は冥途へ參ンじます、千ン年ンも、萬ン年ンも、御無事で長ガ生遊ばして、未來で添ふて下ダさんせ」と心でいふが暇乞、「思ひ置ク事、言置ク事もふ何ンにもござんせぬ、片時も早ふサア母樣、切ッて切ッて」と身を惜まぬ、我ガ子の覺悟に勵され、胸を定めて取リ上れど、刀は鞘に錆付ク如く、離れ兼たる血脈の緋、今切リ殺ス雛鳥を、無事と知らする返ン事の櫻、同じく川に浮ぶれば、「ハアア嬉しや、是ぞ雛鳥が入内の知らせ、久我之助が心の安堵、采女の方の御所在は最前ン申シ上る通り、此世に心殘りなし、御苦勞ながら御介錯」、「サアサア母樣切ッていの、未練にござんす母樣」と泣カぬ顔するいぢらしさ、刀ナ持ッ手も※大盤石、思ひは同じ大判事、子よりも親の※四苦八苦命もちりちり、日も※ちりちり、「※ハアそふじや、早西に入ル日輪は娘がお迎ひ、彌陀の來迎、※西方淨土へ導き給へ、南無阿彌陀佛」と眼を閉て、思ひ切ッたる首諸共わつと泣聲答る詞、肝に徹して大判事、刀からりと落たる障子、「ヤア雛鳥が首討ッたか」、「久我

○未練　覺悟のたしかならぬこと。
○大盤石　大盤石の如く、どうにも手が動かぬ。
・四苦八苦　[illegible]
○ちりちり　[illegible]に「[illegible]」に「かいかいおりおりと上る朝日の東山」。（見案引）
○ハアさうぢや…南無阿彌陀佛　定香の詞。
○西方淨土　極樂のこと。娑婆世界から西方に[illegible]

○衣紋繕ふ [illegible]を正すない[illegible]「衣紋」は衿を[illegible]にきりよた處。[illegible]引)
○柳腰 ほつそりとした美人の立姿。以て定香の姿にいふ。「胖芽譜」に「細[illegible]之柳腰」。
○わけては ことさらには、とりわけては。こまかい事情は、ことさらには、[illegible]である。即ち別して[illegible]かい事情は何も言はぬといふのである。
○かひ 價値の義。甲斐は[illegible]「甲斐もない」は[illegible]い意。
○あへない 敢無い。かたい。
○妹背の……吉野の川 「古今集」卷十五、戀の部に載「流れては妹背の山の中に落つる吉野の川のよしや世の中」。「流れては[illegible]」を見よ。
○水杯 訣別の時などに、酒の代りに水を杯に注いで飮み交はすこと。ここは[illegible]両人が目出度い祝言の杯であると同時に、死別の杯にもなるのであるから、水杯に極りない喜悲[illegible]。
○大嶋臺 嶋臺は婚禮[illegible]の飾物であつて、洲濱[illegible]の上に松・竹・梅・鶴・龜・尉・姥を飾り、蓬萊山の[illegible]を摸す。ここでは婚儀[illegible]妹背山櫻の林の大自然[illegible]景を嶋臺に擬する故、大[illegible]臺というた。
○相親家 [illegible]婚雙方の關係[illegible]「假字遣例書」に「あひ[illegible]相舅」。(見索引)
○跡の祭り 時機におくれることの意にいふ諺。
○流れ灌頂 流水中に[illegible]を建て、樒や幡を[illegible]を飾り、佛事を修し[illegible]塔婆を水中に流し、[illegible]に佛緣を結ばしめ[illegible]の行事。
○行器 食物を容れる器で、[illegible]して高く、蓋あ[illegible]

殿は腹切ってか」、「ハアしなしたり」とどうど坐し、悔も泣くも一時に呆れて詞も、なかりしが、良有て定香聲を上ゲ、「入鹿大臣へ差上る雛鳥が首、御檢使受ヶ取リ下ダされ」と、呼はる聲を吹送くる、風の案内に大判事歎キの、姿改めて、衣紋繕ひしづしづとおり立ッ、川邊の柳腰、娘の首をかき抱、「大判事樣、わけては何にも申シませぬ、御子息の御命チはどふぞと思ふた甲斐もない、あへない有リ樣、お前樣のお心も推量致して居ますする、添に添れぬ惡ク緣シを、思ひ合ったが互イの因果、此方の娘も添たい添たいと思ひ死、餘り不便シに存じます、せめて久我之助殿の息キ有ル中チに、此首を其方へお渡し申すが、娘を嫁入リさす心」、「實ニ尤、嫁は大和婿は紀伊國、妹背の山の中カに落る、吉野の川の水杯、櫻の林の大嶋臺、目出度ふ祝言さしませふわい」、「そんなら是迄の心も解けて」、「ハテ互イに相親家同士」、「ヱ、忝い」と悦ぶも跡の祭り、「ほんに脊丈延た者を、何時迄も子供の樣に、思ふて暮すは親の習ひ、あまやかした雛の道具、一ト人リ子を殺して何にせふ、跡に置ク程淚の種、腰元共其一式、殘らず川へ流れ灌頂、未來へ送くる、嫁入リ道具行器、長ガ持チ犬張子、小袖簞笥の幾棹も、命チ存らへ居るならば、一ッ世一度の

贈り物、五町七町續く程、美美敷せんと樂しみに、思ふた事は引ヶ換へて、水に成ッたる水葬禮、大名の子の嫁入りに、乘り物さへも中ヵ中に、形見も仇の爪琴に、首取乘る弘誓の船、あなたの岸より、彼岸に流るる、血汐清舟が、臨終の顔ばせ見る親の、口に祝言心の稱名、「千穐萬歳の千箱の玉の緒も切レて、今はあへなき此死顔、生キて居る中チ此様に、婿よ嫁よと言ならば、いか計り悦ばんに、領分の遺恨より、意地に意地を立通す、其上重る入鹿の疑ひ中直るにも直られぬ、義理に成たが二人リが不運、あれ程思ひ詰た嫁、何の入鹿に從はふ、迚も死ねばならぬ子供、一時に殺したは、未來で早ふ添してやりたさ、言ひ合さねど後室にも、是迄不和な大判事を、相親家と思し召ばこそ、悴に立ッて一人の娘、ヲヽよくこそお手にかけられし、過分に存る定香殿」、「アア物體ない、其お禮はあちらこちら、不束な娘故、大事のお子を御切腹、器量筋目も勝れた殿御、夫に持た果報者、とは言ひながら、あれ程迄手鹽に掛けて育てた子を、又手に掛けて切心」、「サ、サ推量致して居る、武士の覺悟は常ながら、まさかの時は取亂し、介錯仕後れ面目ない」、「イヤイヤ否否、それで目出度い此祝言、是がほんの葬よ嫁入、一代一度の祝言

○水葬禮　「釋氏要覽」に、天竺に葬禮法四つあつて、一は水葬といひ江河に投ずること、二は火葬、三は土葬、四は林葬とて林の中に棄てること。
○あだ　あた（仇）と清むべきである。形見を見ては忘られぬによつて、今は却つて自分の爲にはこの形見が、かたきであるとの意。
○爪琴　琴。琴爪を以て彈くところの稱。箏。
○弘誓の船　佛菩薩が衆生を濟はうとされる弘大な誓願を[illegible]、佛菩薩が衆生をして生死の苦海を渡して、[illegible]に達せしめられるを、船人[illegible]に喩へて言つた語。
○稱名　稱名念佛の略で、佛菩薩の名號を稱念すること。[illegible]
○千秋萬歳の千箱の玉　謠曲「養老」にも見えて、祝言の謠の文句。
○玉の緒　命「いのち」をいふ。
○とても　助詞「とて」に「も」の添はつた語。[illegible]
○立てて　義理を立てて。
○あちらこちら　[illegible]
○手鹽に掛け　[illegible]するをいふ。[illegible]を皿に入れて膳部に附け、以て食ふ人の手づから加減するに任せた。よつて其の皿を[illegible]
○器量よき[illegible]　[illegible]

する日は死扮裝、葬禮の儀式と聞く」とある。死んだ[illegible]、嫁入の[illegible]であるから、「[illegible]嫁入」といふたのである。
○無紋の社杯 [illegible]の時に無紋の社杯を着る。「[illegible]」第四、[illegible]の條に、「下には用意の白小袖、無紋の社杯死裝束」とある。
○子といふ文字に死の聲 「子」も「死」も[illegible]共に「し」であれば、かくいうた。
○宿業（しゅくごふ） 前世の業因。過去世に造つた善惡の作業。
○人間最期の一念に…引く 恩怨共に臨終の一念によつて、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道に生きかはり死にかはりして窮りなきこと、車輪の廻るが如く、執着の恐るべきをいふ。近松作「生玉心中」に「臨終の一念は無量劫を引くといふ」「大經師昔暦」に「一念五百生、繫念無量劫」。
○盡未來（じんみらい） 未來のある限。未來永遠。「地藏[illegible]經」に「盡未來際云云」
○五百生 「大經師昔暦」に「一念五百生、繫念無量劫」とあるに據る。
○南無成佛得脱 「南無」は梵語 Namas. 歸命・頂禮、「成佛得脱」は煩惱を斷じ、悟を開き、佛果菩提を成就すること。成佛は即ち得脱であつて、成佛得脱と同じ。
○霧 霞に同じ。春霧といふ熟語もある。
○よしや世の中 ええままよ、これが世の中の常、[illegible]ようとの意。「古今集」卷十五・戀部、「流れては妹背の山の中に落つる吉野の川のよしや世の中」の歌句に據つた。
○當麻 安曇の文次宗秀[illegible]を集めて大和の當麻に陣取り、[illegible]の軍を敗つて、奈良に進撃しようとしてゐることが前に見えてゐる。

に、婿殿の無紋の社杯」、「首ばかりの嫁御寮に、對面せふとは知らなんだ」、「これも子供が遁れぬ壽命」、「兎にも角にも世の中の子といふ文字に死の聲の、有も定まる宿業」と、隔つる心親親の積る思ひの山山は、解けて流れて、吉野川いとど、漲るばかりなり涙はらふて大判事首かき上て聲高く、「倅清舟承はれ、人間最期の一念によつて輪廻の生を引とかや、忠義に死する汝が魂魄、君父の影身に附添て、朝敵退治の勝軍を草葉の蔭より見物せよ、今雛鳥と改めて親が許して盡未來、五百生迄かはらぬ夫婦、忠臣貞女の操を立死たる者と高聲に、閻魔の廳を名乘て通れ南無成佛得脫」と、唱ふる聲の聞へてや物得言はねど合す掌を、合せ兼たる此世の別れ、早日も暮て人顏も、見へず庵の霧隱れ、埋む娘の亡骸は此方の山に留まれど、首は背山に檢使の役目、我子の介錯涙の雛、よしや世の中憂事は、いつか當麻の、大和路や、跡に妹山、先だつ背山、恩愛義理を堰下す、涙の川瀬、三吉野の花を、見捨て、出て行

第　四（〔口〕井戸替。〔中〕杉酒屋　道行戀の苧環。〔切〕入鹿御殿（鱶七上使、橘姫歸館、竹に雀の馬士唄、奥御殿、入鹿退治））

登場人物の主な者

土左衛門（相借家人）　五洲兵衛（相借家人）　野平（相借家人）
藤六（相借家人）　お三輪の母（三輪の里杉酒屋の女主人）　お三輪（杉酒屋の娘）
子太郎（杉酒屋の丁稚）　其原求馬（烏帽子屋。實は鎌足の子淡海）　白絹の女（入鹿の妹橘姫）
茂木兵衛（家主）　宮越玄蕃（入鹿の臣）　荒巻彌藤次（入鹿の臣）
蘇我入鹿（逆臣）　鱶七（鎌足の忠臣金輪五郎今國の變名）　玄上太郎利綱（鎌足の忠臣）

梗概

〔口〕大和國三輪の里の杉酒屋では、七夕の日隣家の相借家人土左衛門・五洲兵衛・野平・藤六等が寄集り、嘉例の井戸替を濟し、その井戸端で杉酒屋の振舞酒で賑やかに酒盛をしてゐる。其の所に近頃引越した相借家の烏帽子屋其原求馬が歸つて來て、井戸替の手傳ひをしなかつた事を懇に詫びて去る。

其の後へ家主の茂木兵衛は、彼等が餘り騷がしう踊つて飲むので、之を制止しようとして來る。そしてつい酒を勸められて醉ひ、いゝ氣持になつて歸りかけに杉酒屋に立寄り、お三輪の母に逢つて、「近頃鎌足の子淡海が方々流浪してゐるげなが、之を捕へれば入鹿樣から大金の褒美が戴ける。まあ此方らへお出で、話して聞かさう」とて連れ去つた。

〔中〕日暮れ頃白絹の衣裳をした女が、其原求馬の家を訪れた。これを見た杉酒屋の丁稚子太郎は、お三輪が寺子屋から歸るを待受けて之を知らせた。お三輪は我が愛人求馬に忍び妻があると知つて嫉妬を起し、子太郎に言付けて求馬を呼寄せさせた。

そして七夕に供へた二つの苧環を持ち出して、其の赤絲なのを求馬に渡し、自らは白絲の苧環を持つて、夫婦の緣の印に互に其

の絲を肌に附交はした。

白絹の女は、求馬が出たまゝ歸らぬので、待佗びて尋ね來り、この樣子を見てお三輪と戀爭ひとなる。折からお三輪の母は、家主の所から歸り、「求馬樣には用がある。何處へも遣りませぬ」と、喚いて取附き揉合ふ。子太郎は戯れに繩でお三輪の母の帶と酒樽の吞口とを結び付けた。母はさやうな事には心付かず、求馬が手を振切つて逃げるを追ふ拍子に、吞口拔けて酒が流れる。このどさくさ紛れに、白絹の女とお三輪とは、求馬の跡を慕うて行く。

白絹の女、實は橘姬は求馬を戀佗びながら、大和街道の箸本。柳本。帶解を過ぎて奈良へ歸つて行く。求馬は其の跡を追及して言葉を交せる時、お三輪現はれて又も戀爭ひとなる。求馬は白絹の女の歸る所を知らうとして、女の振袖に苧環の絲を縫ひ付けた。またお三輪は嫉妬の餘り、之も己が持てる苧環の絲を求馬の衣の裾に結び付け、互に絲筋を慕うて辿り行き、三笠山なる入鹿の御殿に入込む事となる。

評

この段、森の中に見え隱れする神々しい三輪の社、又は青葉薫る大和街道を背景として、美男美女が手繰る白絲。赤絲に、縺れつ離れつ開いつ窄みつ巴形に戀に狂ふ姿は、さながら花鳥の中に雄蝶・雌蝶がひら〳〵と飛交うて、蜜の甘きにあこがれ戯れるにも似てゐる。其の優艶な樣は名匠の筆になる繪のやうである。

第四

「引たり、ヲヽ、引たり、ヲツトト」文月七日例年の、水を新井に繰返す釣瓶

○引いたり　釣瓶の綱を「引いたり〳〵」の囃[illegible]である。
●文月七日　[illegible]陰暦七月七日に井戸[illegible]

○三輪　大和國磯城郡三輪。
○杉屋　杉酒屋。昔は杉の葉を集め丸めて軒に吊し、酒屋の標にした、これを酒林といふ。酒林は慈を掃ふ帚の意から酒屋の看板にしたもので、よつて又杉屋を酒屋の屋號にしたのである。
○汗を入れる　汗を拭つて休息する。井戸に御酒・洗米・供物をして、然る後休息したのである。
○ほやほや　笑ふさまにいふ。にこにこ。
○雑作な　手數をかけますわいと、饗應を謝する詞。
○さんせいで　なされませいで。なされませずに。即ち酒盛を止めになさらないで、かう鄭重にして下さるとは痛み入りますとの意。
○相借家　一棟つゞきの貸家に相住〔あひずみ〕すること。借家を「かしや」と訓んで、貸家と書いても、西鶴作「日本永代藏」にも「世界の借家大將」の「借家」に「かしや」と傍訓してある。
○術無い　せんすべなきをいふ。いたみいる。
○寺屋　寺子屋（見臺引）。寺子屋では七夕を祭つて手習ひ上手を祈つたのである。
○あひたてない　分別ない。盲目愛なるをいふ。[illegible]
○星　[illegible]
○ませる　老成ぶる。およすぐ。
○世界　[illegible]

の綱も三輪の里、酒商賣の世杉屋が身過ギの水の内井戸をわけて、祝ひの賑はしさ、「サア〳〵濟ンだ」と取取に、御酒。洗米。供物、皆々汗を入にける、主ジの母は納戸より運ぶ用意の酒肴、いつにないほやほや機嫌、「近ン所の衆どなたも大儀でござんした、嘉例の通リ酒盛して、暮ルる迄ゆつくりと遊んでいんで下さんせ、コレ土左衛門さん、年嵩にお前から酒始メて下さんせ」、「アヽ又雑作な止しにさんせいで、おいらが相借屋で手傳ふのも、年ン中爰の井戸の水をつかふ恩返し、のふ五洲兵衛そふじやないか」、「ヲヽそふ共そふとも、氣をはつて貰ては術ない、是からは何時もの通リ、賑やかに遊びましよ、サア野平。藤六、騷ごぞ〳〵、ホンニ夫レはそふと、コレ内儀さん、見れば爰にも寺屋の樣に、七夕樣が祭て有ルな」、「サイノマア見て下さんせ、愛たてないと思はんしよが、此方の娘のアノお三輪、何やら星樣に願ヒが有ルとて、あの樣に内で祭りも色々の供へ物、ませた世界じやないかいな」、「ホヽそりやマア奇特なこつちや、そして此お娘は留守か」、「アイ小さい時行た寺子屋へ、七夕に呼れました、サア〳〵、一つ飲で下さんせ、ヤイ子丁稚、酌をし居らぬか、とりや吸物に豆腐でも、煮て來ましよ」と母親は、納

戸へ入レば打くつろぎ廻る、杯底なし共、引キ受〳〵、いつき飲、肴の鉢を、引キ寄せて箸放さずの、滅多食丁稚の子太郎、呆れ顔、「アヽ、扨々、氣味の好いとは挨拶じや、よつ程下作クな飲樣じや、井戸の鮒が水飲ム樣に、口明ィてがつぷ〳〵、ヱヱ夫レでは味が知レにくかろ、コレ此酒は内儀樣シが張込で、こちの銘酒の第一番、男山といふ酒じやが、此方樣達は眞の無茶飲、此銚子の代り目から、もふ鬼殺しにしてくれふ、そしてマアよい加減に酒飲んしたら、いつもの通り騒ごかい、此方のお三輪樣シの三味線と、太鼓も借ッて來て置ィた」、「おつと合點」と口利の、土左衛門が眉に皺、「夫レはそふじやが、此隣へ近ヵ頃來た相ィ借屋の烏帽子折、此井戸替にも立合ず、餘り蔑めた奴ッじやないか、野平何シと思やるぞ」、「ソレ〳〵生白けた顔付で、馬鹿慇懃な生れ付キ、平生ぬかす挨拶も仔細らしい切リ口上、毛唐人の樣なやつ、大方ソレ今流行る、早學問といふ本シを見て、唐の箝め句をしをるのじや、此井戸替に出合ぬからは、屹度物言ひ付ヶてやろ」と、借屋の内の神樣達チ、御託宣も取々に、夫レ共知らずのつし〳〵、歸る隣の烏帽子折、辛き世渡り廿日に羊羹色の黒小袖、一腰さした取なりに、浪人とこそ知られける、門ド

○底無し　底ぬけ飲む大酒家。
○いつき飲　一氣飲。一息に飲むこと。
○下作　下品。
○男山　酒の名。「日次紀事」七月七日の條に「今日村民各家浚當井水、去井底泥、汲他家井水合之、是俗謂男水」による。この男水の縁でかくいうた。
○鬼殺し　「嬉遊笑覧」卷十に「俗に村店の薄酒を鬼殺しと云」。「増補俚言集覧」に「鬼殺し＝酒名、麁惡なる酒をいふ、又おによけともいふ」。
○烏帽子折　烏帽子造り。「折」は烏帽子を造ること。「雍州府志」服器部に「凡造烏帽子謂之折」と。
○切口上　一句一句しつかり言ひなす口上の義。四角ばりかしこまつた言葉つき。
○早學問　久川資衡撰「問合早學問（まにあはせはやがくもん）」（明和三年成、刊本）をいひ、明和・安永頃京阪で大いに行はれた本である。
○唐の箝句　漢文句を材料に取つて我が文に箝込むこと。
○神樣達　威勢を振うて人に恐れられる者どもを神樣といひ、又その縁で、申述べるを「御託宣」というた。
○のつし〳〵　のろくして役に立たぬさま。のつそり〳〵。
○羊羹色　黒・茶・紫などの染地の古びて變色したもの。ここの文「辛き」に應じて「甘口」といふ。

○總々 總て。皆々。近松作「本領曾我」に「御尊顔みな上げまする、これこれそうぞうの者が拜みます」。
○潰す 面目を潰す。井戸替する我々の顔に對しても表合にせねば[illegible]、それを求女さんは我々の面目を潰し馬鹿にするいかにの意。
○ねだり臺詞 強請する談判の言葉。返答を強要する談判。「せりふ」に要求の意を見よ。
○合壁 壁一重を隔てる隣家。「下學集」家屋門に「合壁　隣之義也」
○都 「[illegible]」に同じ「かつ」であつて、皆、すべて。全く。下に必らず打消の語に續ける。（[illegible]）
○先格 以前のしきたり。先例。
○いざこざ 紛紜。
○[illegible] [illegible]
○きゆつとやる ぐつと飲む。
○[illegible]

口より腰かゞめ、「隣家に居ります其原求馬でござります、お屋敷ヶ方の用事に付き、未明より罷り出只今歸宿仕る、後室樣には彌御機嫌麗しうござりませふ、後刻緩りと御意得ませふ」と、我ヵ家へ入ルを總々が、「ア、これこれこれ、マア待タんせ、今日はコレ爰の井戸替、相借屋が寄ッて居るのに、此方樣シ計リ來ずに居て附合が濟のかい、但シはおいらを、潰すのか」と、ねだり臺詞に求馬は喫驚上ヵり口に兩手をつき、「是は〱、お顔を見れば皆合壁のお方々、是の井戸替お手傳ひ、都以ッて私シ存せず、是と申スも不案内から先格の作法を存せず、段々の失禮眞平御赦免下され」と、疊に額すり付ヶる、「アこれ〱、又仔細らしい事言はんすかいの、ハテ勝ッ手を知らにやしよ事がない、料簡せいなら夫レで濟、此方も一番言ふた跡は、モウいざこざはないわいの、此土左衛門が呑込んだ〱」「然らばあなた樣がお執成で、斯樣に御教訓なされた上は、其いざこざとやら申シ、御遺恨はござりませぬか」、「サアらふよい、言はんすな、根おいらは餘程醉て居る、是からは舊例の騒じや、調子が合いで面白ない、此石できゆつとやらんせ」、「ハハ忝ふはござりますが、私シ一ッ滴もたべませぬ」「ヲヽタットそしたら勝ッ手次第、

サア是からが騒の趣向此上左衛門に烏帽子屋殿、丘洲兵衛に丁稚の子太郎、しめて四人の大踊、三味線太鼓は、野平・藤六よいか〳〵、求馬様も合點か」、「スリヤ私にも其踊を」、「ヲイノこな様は此借屋での新面、猶踊にやならぬわい、音頭もおれが一役じや、ヤア千代の始めの一ト踊、先ッは松坂こへたゑ、松坂こへたやつさ、踊はありやありや、ハッハ、ヨイヤサ、烏帽子屋殿はもじ〳〵と、手持チ不沙汰に揉烏帽子、ヤットサ、爰の、娘の柳皺引ヶ立烏帽子と折かけた、ヤットサ、風折烏帽子見すまして帆かけ烏帽子とと踊らるゝ、ヤットサ」、家主茂木兵衛いつきせき、「いかに嘉例の祝ひでも、餘り騒が嵩高な」と、門口から聲高に、喚いて這入れど如何な事、耳へも入らず、「ヤットサ、ヤットサ、ヤットサ」茂木兵衛叶はずとも〳〵に、叱る詞も拍子づき、「ヤットサ、此家主を袖にして、酒を飲其言わばこそ」、「ヤットサ」、「僣等計飲食ひ、近所を構はぬ大騒ぎ」、「ヤットサ」、「是程言ふても聞入ぬにや、家明ヶ付るが合點か」、「ヲゝサテ合點じや、是を來て見よかしの人、お家主渡した」と、踊拍子の醉機嫌、夢中に成って立踊る、家主跡に、とほんと成、「アゝやくたいもない奴ら、とう〳〵おれ迄夢中にした、婆様内にか、

○二役 [illegible]二役。
○音頭 [illegible]
○揉烏帽子 冑の下に被るによいやうに揉みやはらげた烏帽子。これに梨打・引立・風折の三種がある。
○柳皺 [illegible] 柳腰を柳皺にいひかけたもの。
○引立烏帽子 梨打烏帽子の後のかざを引立てたもので、揉烏帽子の一種。
○風折烏帽子 立烏帽子の先をすぢかひに折伏せた烏帽子[illegible]
○帆かけ烏帽子 侍烏帽子をその形によっていうたものである。そして「尻に帆掛ける」の諺をきかせて「踊らるる」とつづけた。
○いつきせき 「いきせき」(息急)に促音「つ」を[illegible]
○袖にして 疎外して。「身にして」の反對語。
○言はばこそ 言うたらよいに決して言ひもしないで。
○やくたいもない らちもない。(見索引)

逢たい」といふ聲聞て納戸より、「※ヲヽ是はマアお家主様かヤイ子太郎め、あなたがお出なされたら、何故おれに知らせ居らぬ」、「※ナア二言はんすやら、あのお家主様も、今迄同じ様に、踊ッてで有たもの」、「※父つけ／＼と何言居る、サアサア申、なんぞ御用でござりますか」、「※ヲヽ用とも用とも大事の用、去ルお侍から頼れたが、入鹿様の言付で、ソレ鎌足といふわろの息子の淡海、方々流浪して居るげな、夫レを見付ヶ出したら大金、何でもマア此方へござれ、とつくりといふて聞そ、サアちやつと／＼」、「※ハイ／＼／＼そしたらお前へ参りましよ、ヤイ／＼子太郎よ、サア忙がしう成ッて來た、もふ日が暮レたそふな、火も消て店明ヶい、用心シに氣を付ヶい、又此娘は寺屋から戻りが遲い、ソレ酒買が來たら擲出せ、盜人が來たら酒量つてやり居れ」と、氣の急く儘に間違ひだらけ、打連レ、てこそ出て行、

日と共に營むさまも※入相の、四方の※市座戸鎖し時、子太郎跡を打見やり、灯を上ゲ表の戸夜ルの構への其處此處と、此方の道より、歩よる※振の袖の香※やごとなき面を隱す衣被き、誰レ白絹の優姿、窺ふ内に隣の軒、知らせの咳キ主の求

○ヲヽ是はマア…知らせ居らぬ　お三輪の母の詞。
○ナア二言はんすやら…踊つてであつたもの　子太郎の詞。
○父つけ／＼と　御用でござりますか　お三輪の母の詞。
○つけつけ　附々と、附加へる義。人の氣に入らぬことを遠慮なく、ずば／＼といふさま。
○ヲヽ用とも…ちやつと／＼　家主の詞。
○わろ　「わらは」(童)の約訛であらう。人。(見索引)
○ちやつと　ちよつと。すぐに。(見索引)
○ハイ／＼／＼…やり居れ　お三輪の母の詞。
○入相　太陽將に西の山の端に入らうとする時。日沒時。
○市座　市の商品を陳列してゐる處。商店。
○振の袖の香　振袖に焚きしめた香の匂。
○やごとなし　「やんごとなし」に同じ。「止事無し」の略された語。捨置かれないの義より轉じて、貴い。尊い。

〇代物　衣裝きの女をさす。

〇はし早い　はしこい、すばやい。

〇寺子屋　見索引。

〇さしやつた　「さすことをなした」の義、即ち「なさつた」の意。

〇衒妻　女を衒つている者。もと「衒賣女色（げんまいぢよしよく）」の義であらう。

馬、「今宵はどふして早かりし、サア〳〵此方へ」と其跡は、言わず語らず手を取て、戸口立寄入跡に、子太郎は不審顏、隣の門口耳を當て、聞すまして立戻り、「何でも隣の烏帽子奴は、己とは違ふてよつ程豪い色事仕じやわい、彼奴が見事な烏帽子で、アノ代物占め居ると聞へた、此方のお娘に聞せたら、大抵の事じや有まい、ヱヽはし早い奴では有」と、呟く所へ、娘のお三輪、寺子屋戻り、足早に、門口這入れば、「ヤお三輪樣戻らんしたか、サア〳〵事じや〳〵〳〵大事じや〳〵」、「ヲヽあの人はいの何じやいの私に喫驚さしやつたわいの、さしやつたわいの」、「さしやつたわいの所かいの、コレお前に忠義を言ふて聞かす」、「忠義とは何の事じやいの」、「ヱヽ忠義とは忠臣の事じやわいの」、「サ其忠臣は知つて居るがの、夫がどふぞしたかや」、「サ其忠臣はの、アノ隣の烏帽子めがな」、「隣の烏帽子とは、ムヽ求馬樣の事かいの」、「ヲヽ求馬〳〵、其求馬の姿から起つた事、此方の内儀樣は家主殿へ用が有て往かしやつた、其跡へ何じやか知らぬが、眞白な絹を被ぎ、幽靈かと思ふたら、美しい衒妻が、隣の門口ことことと敲た、そしたら求馬樣がつつと出て、よう早ふ来たナアと、手に手

を取て內へ這入つた、夫からおれがじつとして聞て居たら、ソレ此方へ雇ふ男共が、朝の間に酒桶洗ふ樣に、シイ〳〵といふ音がした、どふでもありや求馬樣と、か、竹簓で擦ると見へるわいな、ナントお三輪樣と、コリヤだまつて居られまいがナ」、「ム丶、そんなら何と言やる、求馬樣の所へ美しい女中樣が見へて、其女中樣を、連立て這入らしやんしたと言やるのか」、「アイ」、「そりやマア合點のいかぬ事、幸ひ母樣も留守なれば、其方行て求馬樣を、爰へ連て戾つてたも」、「ヲット合點呑込だ」と、走り出て隣りの門、破る計りに打敲き、「コレ求馬樣、隣の酒屋から使に來た今のが濟だら印判持つてござんせ」と、口から出次第、求馬は喫驚何やらんと、立出れば物をも言わず、「マア〳〵此方へ」と無理やりに手を引連て我家の內、夫と見るより娘のお三輪、口に言はねど赤らむ顏、「求馬樣お歸りなされたか」、「ホ是は是はお三輪樣、寺屋へお出なさつたげな」と、互におかな墨付を、子太郎が引取つて、「サアおれが役はもふ是迄、其處へ何かの立引さんせ、爰らで我等粹を通し夜食の拔荷に有つかふ、兩人其後に逢ふ」、と納戶へ、走り入にける、跡に二人はつきほなくおぼこ育の娘氣に思ひ詰たる

○あお　「味」である。おもむきありげなこと。（見立引）
○墨付き　墨印のすわつた文書をいひ、以て「印判持つてござんせ」の言葉に應じる。そして「墨付」[illegible]の意にいふ。
○立引　意氣地を張り合ふこと。
○つきほなし　附穗無し。言ひつき又は寄り[illegible]に
○おぼこ　「うぶこ」(初子)の轉訛で、うぶな子[illegible]初心。世慣れないで幼いこと。

○たまさかに　たまさかであつて。
○浮世の譯　[illegible]といふよりも、好色の[illegible]
[illegible]
○在所育ち　在郷育ち、田舎育ち。
○禰宜　神に禰（ね）ぐ人、即ち神官の稱。神職。
○おろか　おろそか（疎）の義。言ふまでもなく。
○影向　神佛の[illegible]ること、本體の其の影をある一面に對向せしめるの義。神佛の[illegible]
○和歌三神　住吉明神に[illegible]
[illegible]
○苧環　[illegible]
○乞巧針　[illegible]九孔針五色線[illegible]
[illegible]

一ト筋を、言わふとすれば、胸せまり、「今子太郎に聞たれば美しい女中様が、宵からお前へ來てじやげな、定めて夫レは隱し妻、是迄お前と私が中逢事さへもたまたまに、千年シも萬年シも變らぬ契りとおつしやつた、其約束は僞りか浮世の譯も辨へぬ在所育の私でも、言かはした事忘れはせぬ、餘りむごい」と、取付て涙先キ立ツ恨言、「是は思ひも寄ぬ疑ひ、成ル程女中は來て居るが、あれはソレ春日の巫女殿、其連合の禰宜殿の、烏帽子を誂に見へたのじや、美女はおろか、如何な天女が影向有ツても、外へ散る心はない、和歌三神を誓にかけ、僞りは申さぬ」と、時の間に合ヒ落著せば、流石おぼこの解易く、神樣迄誓言に、夫レで私も落著イた必變つて下さんすな」と、立チ上つて七夕に供へ祭りし一つの苧環、持出て前に置キ、「私が寺屋へ往た時に、お師匠樣に聞て置イた、殿御の心の變らぬやうに、星樣を祈るには、白い絲赤い絲、苧環に針を付ケ結び合せて祭るとやら」、「ヲヽ夫レが卽チ願ひの絲の乞巧針」、「ムヽお前も能ふ知つてじやナア、白い絲は殿御と定め、女子の方は赤い絲、それで私も此願籠、寺屋で見た本トの中に心を懸けし女の歌、ア、何とやら、ヲヽそれよ、戀渡る、思ひは千々に結ぼれて、

幾代願ひの綠の苧環」、「ホヽ其男の返しには、※相見ての、後も願ひの綠筋を、餘所へ亂すな君が苧環」、「アイ〳〵そふでござんした、何時迄も變らぬ印、赤い綠をお前に渡し、白い綠を私が持チ」、契りも長き願ひの綠、夫婦の約束※星合に、※鵲ならぬ苧環を、千代の媒介取かはし肌に附キ合ふ、※わりなき緣、求馬が内より以前シの女、歩出て此方の門ド口、「隣の烏帽子※折樣は、此方へ來てござるかな、許さつしやれ」と内へ入ル、姿に求馬は手持チ不沙汰、お三輪は何の氣も付カず、「アヽあなたが今のお人かへ」、「ヲイノ、あれ〳〵巫女樣じや、それで薄衣着てござる」「ナア申、お前樣はアノお連レ合樣の、烏帽子を誂へにお出なされましたのじやナア、そふでござりませふがな」、「サヽヽ、そふでござります」と、紛らかす、包む詞の絹を漏る※月の笑顔をぴんと拗ね、「コレ申求馬樣、アノ女中はお下婢か、何人でござります」、「アイヤ是は此酒屋の娘御」、「ムヽ其マア隣の娘御と、最前シから久しい間、何の用がござりました」と、問れて求馬は答へも無く、うぢつく素振見て取ルお三輪、「アヽ申、コレ巫女樣とそらふ女中樣、人をマアお下婢かの何シのと、※ひつこなした物の言ひやう、求馬樣にはアイ、私が用が※たあ

○相見ての…君が苧環　この歌の意は、相見ての後も私は決して忘れさせぬが、あなたも希くはその言葉通りに苧環の綠を亂さないやうに、即ち心を他に寄せないやうになされよといふのである。
○星合　陰暦七月七日（七夕）の夜、牽牛・織女の二星が相會すること。
○鵲　鳥の名。「公事根源」乞巧奠の條に「烏鵲の天の川に來りて翼をならべ橋となして織女を渡す」。「韻府」に「烏鵲塡レ河成レ橋渡ニ織女一」。
○わりなし　理無し。詮方なし。
○折　（既出）
○月　月の顔なれば、貴い妻をかくいうた。
○引つこなす　操「くじ」きいやしむ。誹謗する。「俚言集覧」に「こなす」薪を折「さく」をこなすと云ふ、又人を誹謗するをこなすといふ」。
○たあんと　「たんと」に「あ」の添加した語。澤山に。充分に。「たんと」は「足「た」りぬと」の[illegible]

んとござんす、お前のお世話には成ルまいし、構ふて下さんすな」、「ヲヽ、是ははしたない、其樣に言はしやつても、そもじなどの用を聞ク、求馬樣じやないわいのふ、サアお歸り」と手を取レば、お三輪が隔てて、「イヱ／＼、私がまだ用が有ル、去なす事は成りませぬ」、「イヽヤ爰には置キはせぬ、邪魔せずと其處通しや」と、手を引ッ立テて立出れば、「イヤ放さじ」とお三輪もまた、彼方へ引ケば此方へ引く、譯も渚に戯れる雁、翼振り袖振分ケ姿、戀を爭ふ其折から、いきせき戻る此家の母、「ヤア求馬殿、此方さんには用が有ル、どつこへもやる事ならぬ、動くまいぞ」と身構へに、何かは知らず白絹の姫は、外へと出行くを、とめる求馬に又縋る、娘を押シ分け母親は求馬やらじと引キ止め、繋ぐ手と手を梱の風に揉まるゝ爭ひに、子太郎立出見廻して、これ幸ィと母親の帶にしつかり括つたる、繩先桶の吞口に結付ヶ納戸へ逃ゲて入ル、此方は互に戀慕ひ姿亂るゝ、姫百合の手を振り切れば一時に、亂れて走るを母親が、やらじと追へば繋ぎ繩、力も拍子に呑ミ口抜ヶ酒は瀧津瀬喫驚敗亡、三人門ドへ遅れじと同じ、思ひを跡に先キ道を、慕ふて、三重

○し　口語「[illegible]」[illegible]尾に[illegible]、下の文につゞける接尾語。
○はしたない　不都合である。「はした」は半端で、物のそろはぬ義、「ない」は甚しの意の接尾語である。
⊙そもじ　「そなた」の文字詞。
○梱　柴絡（しきからみ）の義であらう。川の中に杭を打ち並べて、之に竹柴を横たへたもので、水流塵芥を塞ぐもの。風の梱などいふは、塞ぎ止める意に借り譬へていふのである。（既出）
○姫百合　百合科の多年生草本、高さ一尺乃至二尺餘に成長し、花に黄・赤の二種がある。以て姫にいひかく。
○敗亡　失敗。閉口。窮すること。
○三重　三味線の調子。（見索引）。ここの文は、三重なるが故に「出でて行く」を略した。

○表具　表具屋旨。
○岩戸・常闇の夜　天照大神、素盞嗚尊の暴虐を憤り給ひ、天の岩屋に入つて出で給はれぬ爲に、天地暗くなつたといふ故事に據る。
○せ　貧、せ(し)に「せき」(急)をいひかく。
○情なき松の下紅葉　秋冬になつても色變へぬを情なき松といつて、以て情に引かされない人にきかせた。「新續古今集」卷六、冬の部の歌に「龍田山［illegible］、つれなき松にぞほしかるなり」。
○魂の緒　命「いのち」。(既出)
○芝村　大和國磯城郡織田村内にあつて、三輪村の［illegible］
○晩にござらば　枝こえて　「松の葉」(元祿十六年刊)卷三、のんやほぶしの端唄に、「晩にござらばござんなれ［illegible］、晩しや梅の木の枝おろそ、のんやほ〳〵」。
○背戸　家の裏。
○連理　［illegible］連理を連ね［illegible］生ずること。［illegible］
○箸中村　大和國磯城郡［illegible］村内にあつて、芝［illegible］
○一森　［illegible］
○［illegible］
・［illegible］
○ほろろ打つ　雉子「きぎす」はけんけんと鳴

道行戀の苧環

岩戸隠れし神様は、誰と寝して常闇の夜、夜毎に通ひては、又歸るさの、道もせ氣もせ夫も何故戀故に、窶る、所體、恥しと、俤隠す薄衣に、包ど薫り橘姫、思はぬ、人を思ひ侘心のたけを口説け共、情無き松の下紅葉焦れて絶へん魂の緒も殿故ならば捨草も、暫しは憩ふ芝村の賤の男が、置手拭で、忍び忍びの出逢妻晩にござらばナコレ、のんやほんにさ、背戸の柿の木の、枝越へて連理を契る言の葉は、それも戀中爰は又、箸中村よ一森の長者が跡と名に響く、釜が口をも出はなれて、歩むに、暗き、呉竹の茂れる中を分行ば、葉毎の露か、ほろ〳〵とほろろ打なる雉の聲、思ひ較べていとゞ猶、心細野に立盡す惜や、案山子に威さるる我か、姿に又怯ちてはつと立行羽風につれて、ちり〳〵散るや、柳本流るゝ水に濯ぬれて、物思へとや帶解の、里窶し自らは、遂に一度の情さへ泣いて、身を知る、涙雨、布留の社の御燈の影か、松の木の間にちら〳〵〳〵と見へつ隠れつ、歸るさの跡を求馬が慕ひ來て、庭にはたゞ行合の、星の光に顔

と顔、「ヤア戀人か何故に、爰迄跡を追ふ鳥は、若しや塒の契りをも、叶へてやろとのお心か」と、胸には言へど詞には面はゆき振の袖几帳、成る程切成る心ざし仇に思はじ去りながら、左程焦るゝ戀路にて、當をば何と、烏羽玉の夜許りなる通ひ路は、いと不審なり名所を聞いたる上は此方よりも、二世の固めは願ふ事、あかさせ給へ」と只管に、問はれて實にも恥しの漏りて、あまれる、憂身の上、語るにつらき葛城の峯の白雲有ぞ共、一定かならざる賤の女と思ふて深い疑ひの、雲をはらして自らが、思ひもはらして給はらばどんな御も背くまい、假令草葉の露霜と消ゆるとも、何との厭やせぬ、是程思ふに胴慾な、解けぬお前のお心は餘り結ぶの神様を、噺過した咎かや、無情の君や」と恨わび、思ひ亂るゝ、薄藤夫レとお二方は走り寄り、中を隔て、立柳、立退後、引き止め「エ、聞へませぬ求馬樣ゝ、ソリヤ氣の多い、惡性な抑や二人が馴初は、初めて三輪の過ぎし夜に、葉越の月の俤は、お公家樣ゝやら、侍ィ樣ゝやら、知れぬなりふりすつきりと、水際の立つ、好い男、外の女子

いてほろろと羽はたきをする、之を「ほろろ打つ」といふ。

○細野　山の間又は山と川との間にあつて細く延びた野。心細いにいひかく。（見索引）

○柳本　大和國磯城郡柳本。

○帯解　大和國[illegible]、奈良・[illegible]鐵路に當る。帯を解くといふ名であるから「殊し」とつゞけた。

○身を知る雨　思ひある身を知りて、折からに[illegible]

●なゝキ　[illegible]

[illegible]してある。

○石上の社　大和國[illegible]にある。

○[illegible]

○袖几帳　几帳は臺に柱を立てて帷をかけたもの[illegible]

(●)烏羽玉の　「夜」にかゝる枕詞。

○二世　夫婦の契をいふ。（見索引）

○羽束師の森　山城國乙訓郡羽束師（はつかし）にある森。ここはこの地をいひかけたまでで、この地に關係はない。

○葛城　大和國南北葛城郡と河内國南河内郡との[illegible]たといふ。よつて「語るにつらき葛城」というた。近松作「心中天の網島」[illegible]

○惡性　[illegible]好色、淫奔の意。當時惡性の語は好色の意にいふ。

○三輪　大和國[illegible]三輪をいひ、官幣大社大神神社のある所。[illegible]

○水際の立つ　目立つて殊に麗しう見えるをいふ。

は禁制と、しめて堅めし肌と肌、主有る人をば大膽な、斷なしに惚るとはどんな本にもありやせまい、※女庭訓躾方、能ふ見やしやんせ、ヱ、嗜みなされ女中樣ン」、「イヤ、そもじとて※たらちねの許せし中でもないからは、戀は仕勝よ我殿御」、「イヽヤ私が」、「イヤ私が」と倶に縋りつ、手を取て、三下リ※園に色よく咲草時は、男女になぞらへ言はゞ、言れふ物か夕顔の、（言）梅は武士、櫻は公家よ、山吹は傾城、※杜若は女房よ、色は似たりや、菖蒲は妾、牡丹は、奥方よ、桐は※御守殿姫、百合は、娘盛と撫子の　ナルゾエ　ハヽ、なるとならずと※奈良坂や、フシ兒手柏の二人りの女、睨ば、睨む荻と萩、中に揉まるゝ※男郎花、放ちはやらじと縋り付、此方が引ケば、彼方が止め、戀の柵蔦葛、附纏はれてくる／＼／＼、廻るや※三つの小車の※花より白む横雲の、たなびき渡りあり／＼と、（詞）※三笠の山も程近く、鳴鐘の音に驚く姫、歸る所は何處ぞと、求馬も氣轉挨拶、袖の、端に縫ふ※てふ取交す、縲の苧環いとしさの餘りて三輪も悋氣の針、男の裾に附る共、知らず印の絲筋を慕ひ、慕ふて、三重

○女庭訓　女の守るべき教訓。本書題名の一部これより出づ。庭訓は家庭の教訓の義で、この語もと「論語」の中より出た。

○たらちね　親の[illegible]「たらち」は「たらし」（足らし）の轉。「ね」は美稱。赤子を育て月日を足らし人との義で、萬葉集までは母の枕詞として用ひられたが、後世に母または親の意に用ひる。

○杜若　似たりや菖蒲　謠曲「杜若」に「似たりや似たり杜若・花菖蒲」。

○御守殿　德川將軍の息女の、三位以上の大名に嫁した者の敬稱。

○奈良坂や兒手柏の二人　「奈良坂や兒手柏の二面〔ふたおもて〕」の二面を二人にいひかへた。[illegible]の葉が兒の手に似てゐるより稱を[illegible]にいひなして、「奈良坂や兒手柏」といひつづけ、兒手柏は檜葉に似て、その葉の表裏殆んど同じなれば、「二面」といふ語につづけていふ。謠曲「百萬」に「奈良坂やこの[illegible]の二面」[illegible]

○男郎花　をみなへし科の多年生草本、花は[illegible]花序に[illegible]し、小形白色である。以下[illegible]に喩へ[illegible]

○三つ　[illegible]・三笠・三輪・三人[illegible]はいふ。

○花より白む横雲　「秋篠月清集」二に「初瀬山をのへの鐘のあけがたに、花より白む横雲の空」。

○三笠の山　奈良春日神社の背面にある山で、[illegible]

○てふ　「といふ」の約。但しここでは「て」の意に誤用したものであらう。

〔切〕悪逆無道な入鹿が、金に飽かして新築した三笠山の御殿が出来上つた。其の祝ひに玄蕃・蒲藤次等を集めて酒盛を催し、諸方から喜びの進物が山と積まれた。

難波の漁夫鱶七は中臣鎌足大臣の使者となつて来り、進物と称して徳利を差出した。入鹿は自分と不和な鎌足の贈物だから、毒酒であらうと疑つて受取らない。鱶七は「お納め下さらぬならば私が飲みます」とて、徳利を傾けてぐい／＼と飲み乾し、懐中を探つて鎌足の書状を取出した。蒲藤次之を取つて読む。入鹿は耳を傾けて聴き、「君の齢を東方朔に譬へ」とある文句を聞咎め、「我を西王母が桃を掠めて食つた、其の盗人に擬へるか」と難癖を付け、傍にある器物を鱶七に投付け、「帰つてはならぬ」と大喝し、玄蕃・蒲藤次を従へて奥に入る。そして伏勢を以て鱶七を打取らうとし、又侍女に命じて鱶七をたらし毒酒を勧めさしたが、いづれも鱶七に悟られて失敗に終る。

橘姫は暗路に紛れて入鹿の館に帰る。其原求馬も橘姫の袖に縫附けた苧環の緒を辿つて入り来り、我に恋する白絹の女がこの館に帰るとは、さては入鹿の妹橘姫であつたかと驚く。そして姫が入鹿の奪へる十握の宝剣を持出すを条件として、夫婦の約束をする。

お三輪も求馬の跡を慕うて入り来り、まごまごして居るを御殿女中に見咎められ、「歌を謡へ」と強ひられて、「竹に雀は品よくとまる」と、馬士唄を謡うて嘲られ、狂乱となる。折から鱶七現はれて之を刺し、「女能く聞け。蘇我入鹿とは、父蝦夷が齢傾くまで子の無いを憂ひ、博士に占はせて白い牝鹿の生血を取り、之を母に呑ませた験によつて生れた子である。だから其山入鹿を蕩かすには、爪黒の鹿の血汐と執着の相ある女の生血とを混ぜて、鹿笛に注ぎかけて吹く時は、笛の音色に感じて入鹿の正体が無くなる。其方が慕ふ淡海公の為に入鹿退治の犠牲となつてくれ」と、言はれて可憐なお三輪は、「妾のいとしい愛人が貴い淡海公であつたとは知りませなんだ。死んでも嬉しいがせめて今一度お逢ひ申したい」と、焦れる声も重傷の為に細り

かすれて絶命した。

鱶七は其の死骸を負うて去る所に、入鹿の部下等に襲撃されたが、之を斬破つて悠々と去る。大膽不敵な鱶七は、其の實鎌足公の忠臣と名も高い金輪五郎今國であつた。

橘姫は寶劍を取出さうとして入鹿に斬付けられた。折から聞える鹿笛の音に、入鹿は蕩けて醉へるが如くなる。また寶劍は金龍と變じて泉水に飛入る。續いて姫も其の後を追うて飛入る。いつの間にか寶劍は鎌足公の手に納まり、神鏡の威力で超人的の惡者入鹿も遂に滅んだ。

第五（志賀の皇居）（大團圓）

登場人物の主な者

天智天皇（人皇三十八代）　藤原鎌足（中臣の内大臣）　藤原淡海（鎌足の子）
玄上太郎利綱（忠臣）　三作（利綱の子）　橘姫（入鹿の妹）
定香（太宰小貳國人の後室）　大判事清澄（忠臣）　金輪五郎今國（忠臣）

梗概

天智天皇は都を江州志賀に遷し給ひ、勳功の臣に恩賞任官の御沙汰がある。まづ勅命によつて橘姫は淡海公の室となり、三作は大判事清澄の養子となり、鎌足は太宰の後室定香。金輪五郎今國・玄上太郎利綱等皆大祿を賜はる。また妹背山の山莊で、哀れに死を遂げた清舟・雛鳥の法會を營み、亡靈の菩提を弔はせ給ふ。

美濃や三勝
あかねや半七

艶容女舞衣

解題

安永元年十二月二十六日から初めて大阪豊竹座(座本豊竹定吉)に上演された。作者は竹本三郎兵衛・豊竹應律・八民平七である。

本曲は三巻六段に分れ、就中下の巻「上鹽町の段」(酒屋の場)が最も名高い。

作者

竹本三郎兵衛の傳は「本朝廿四孝」の所に述べた。

豊竹應律は「聲曲類纂」追考に「豊竹應律 若太夫芝居主甚六といふ」とある。また八民平七は同書・追考に「八民平七 坂町大坂や太郎兵衛の倅」とある。四五四頁をも見よ。

實說

本曲は「浄名茜染五十年忌 女舞劍紅楓」(延享三年十月上演)に據つて技巧を凝らしたものである。三勝心中に關することれより以前の物では、「茜の色揚」(元祿九年大阪岩井座上演。歌舞伎)、「三勝心中」(寶永元年刊の「落葉集」卷五所載。流行唄)、「笠屋三勝千日寺心中」(歌祭文)、「笠屋三勝二十五年忌」(享保四年上演か。浄瑠璃)などがある。

笠屋三勝は元祿頃大阪長町四丁目に住し、女舞の藝人である。茜屋半七と馴染み、遂に愛兒お通を殘して、元祿八年十二月六日の夜、千日墓所の南さいたら畠(千日の墓所の傍の字)で情死した。時に半七三十四歳、三勝二十四歳といふ。西澤與志撰「新色五巻書」(元祿十一年刊)に「大阪女舞の三勝芝居興行の立札所には、珍しく見る人やるせなく立塞がり、街道塞けて人を通さす、あなたこなたより人橋かけて世渡りの女舞云云」とあれば、當時全盛の藝人であつた。

近松作「心中刃は氷の朔日」下之巻に、「笠屋三勝舞の袖、褄と褄とを引寄せて、結ぶ無常の薄煙、千日寺のはかなしや、別れし後の寢姿は、夜中の鐘に目を覺し、母よ母よと乳呑子の、歎きを捨てし修羅の道、魂は冥途に到れども、魄となりたる今の世の、お通は母の形見ぞや」とある。

「傳奇作書」續篇中の卷、三勝半七情死の話の條に長々と記してあるが、煩はしければ略す。

影響

本曲は其の後も屢々上演されて、今も壽命を保つてゐる。「上鹽町の段」（酒屋の場）に、お園が「今頃は半七様、何處にどうしてござらうぞ」のサハリは、義太夫の語り物にも歌舞伎芝居にも最も人氣のある所である。

上の卷

生玉の段

登場人物の主な者

茜屋半七（三勝の愛人。二十五歳）　茜屋半兵衛夫婦（半七の兩親）

梗概

大阪の盛り場生玉は、興行物など軒を並べ雑沓を極めてゐる。美濃屋三勝が女舞の芝居も此處にあつて、三勝は愛人半七との間にお通といふ子までなした。

半七はお園といふ妻を後に迎へながら之を疎んじ、芝居の終る頃となれば、三勝を迎へに出でて我が家に歸らす。半七の兩親は日暮れ寺参りの歸途生玉を通り、我が子の不身持を憂へて話し合ひながら行く。之を半七は芝居小屋の陰に隱れて聞濟し、兩親に心配を掛けるを相濟まぬ事と思ひ、後姿を拜んで窃に見送る。

概して淨瑠璃・歌舞伎の主人公は、感情によつて事をなし、意志の弱い人が多い。本曲の主人公も其の通有性をそなへた善人である。

島之内茶屋の段

登場人物の主な者

今市屋善右衛門（半七の悪友）　中村屋番頭庄九郎（半七の悪友）　美濃屋三勝（女舞の藝人。半七の愛人）
美濃屋半左衛門（三勝の兄）　お通（三勝・半七の女兒。二、三歳）　茜屋半七（三勝の愛人。二十五歳）

梗概

今市屋善右衛門と其の友中村屋の番頭庄九郎とは、大阪島之内六軒町の大七といふ色茶屋に登り、幇間・藝妓等を相手に騒ぎ立ててゐる。美濃屋三勝も大和の武士宮城十内に舞を所望されてこの家に来り、憩ふ間に兄半左衛門が連れて来た我が兒お通に乳を銜める。兄は妹に自分の腑甲斐無さなど述懐したが、妹の氣を滅入らすまいと心を取直して力を付け、お通を連れて去つた。それと入違ひに半七は三勝を尋ねて来り、心安立てに痴話口説をしてゐる折、善右衛門の聲が聞えたので姿を隠した。善右衛門はかねて三勝に懸想してゐるので、三勝を捉へて口説くと、三勝はうまく遁れて十内の席に出で舞を舞ふ。其の後、善右衛門・庄九郎は三勝に暴行を加へようとして半七に妨げられる。

中の巻

菅町橋の段

登場人物の主な者

見通しの法印（賣卜者）　茜屋半七（三勝の愛人。二十五歳）　美濃屋三勝（女舞の藝人。半七の愛人）

お園（半七の妻。十九歳）　中村屋番頭庄九郎（善右衛門の友人）　今市屋善右衛門（庄九郎の友人）

美濃屋平左衛門（三勝の兄）　宗岸（お園の父）

梗概

見通しの法印は大阪新町橋に賣卜店を出し、占を請ふ者に出鱈目を喋つて、通りかゝりの者どもに追拂はれた。其の日暮れ頃、茜屋半七は親に勘當され、三勝の戻りを迎へに出て新町橋にさしかゝり、お園の來るを見て賣卜店の中に隱れた。お園は半七の妻であるが、父と舅との意見の衝突から實家に連れ歸られ、今しも夫の身を案じて金毘羅詣の戻りであつた。そこで賣卜店に夫が隱れてゐるとは知らずに立寄つて邂逅し、己が夫を思ふ切な心を細かに述べて泣く。半七も身の過りを謝して別れた。

折節庄九郎・善右衛門は三勝の兄平左衛門を伴つて通りかゝり、庄九郎は平左衛門が中村屋から借金してゐる五十兩を徴し、督促する。善右衛門は「其の五十兩は己が貸すから、其の代りに三勝を我に質入する證文を書け」と迫る。平左衛門は之を承諾しない。そこで兩人は怒つて平左衛門に暴行を加へようとした。平左衛門も破れかぶれとなつて庄九郎を川中へ投飛ばした。善右衛門は之に驚いて逃げると、其の途中に、三勝が、喧嘩してゐる者があると聞いて兄の身を案じて來るに遇ひ、之を捕へた。其處へ平左衛門が追及して善右衛門と摑み合ふ。其の場に半七もお園の父宗岸も期せずして出會ひ、互に顔を背け、暗闇に乘じて半七は、用水の桶を擔ぎ投げ、さつふり水散る騷ぎに紛れて姿を消した。

長町の段

登場人物の主な者

美濃屋平左衞門（三勝の兄）　雲西（平左衞門の念佛仲間）　宮城十内（大和五條櫻井の家中）
美濃屋三勝（女舞の藝人。半七の愛人）　茜屋半七（三勝の愛人。二十五歳）　お通（三勝・半七の女兒。二、三歳）
お園（半七の妻。十九歳）

梗概

美濃屋平左衞門は大阪長町の傘屋に住み、傘の下手間をして貧しう暮してゐる。同じ念佛仲間の道心者雲西が來て、中村屋で同行衆がお勤めをする案内を述べて歸る。平左衞門は其の中村屋で借金してゐる事を思ひ出し胸を苦しめる。

折節和州櫻井の家中宮城十内が奴角助を連れて平左衞門方に立寄り、「自分の主人の若殿樣が、大阪で三勝の女舞を見物なされ、それから想を懸けられて居られる。よつて三勝を一生抱へたく、その爲相談に參つた」といふ。平左衞門は其の返答の猶豫を乞ひ、隣家の座敷を借りて十内を憩はせる。やがて三勝は半七。お通と共に歸り、半七は直ちに平左衞門が胸を苦しめてゐる借金五十兩を調達しようとして外出する。

その後にお園は三勝を尋ねて來り、慇懃に言葉を盡して半七との緣切りを乞うた。三勝は泣いて之に從ひ、平左衞門は己が意見を述べる中に、「中村屋から借りてゐる五十兩は、もと〳〵己が父近江屋治左衞門が借りて、かねて懇意にしてゐた浪人侍に貸したのだが、今は其の侍の名も知れぬ」と語つた。十内は嘗て父が治左衞門から五十兩を借りた事を聞いてゐたので、平左衞門の話を立聞きしてはつと思ひ當つた。そしてお園の去つた後、平左衞門に金を返し、且つ「半七の郷里大和五條は己が若殿樣の領內であるから、三勝は憚つて半七とは夫婦にならないでくれ」と戒めた。其の際半七等が歸つたので、十内は見付けられ

まいとして、提燈を吹消し闇に紛れて去る。

下の巻

今宮戎の段

登場人物の主な者

今市屋善右衛門（悪漢庄九郎の友人）　中村屋番頭庄九郎（悪漢善右衛門の友人）　茜屋半七（三勝の愛人。二十五歳）

梗概

大阪今宮戎の市で雜沓する正月十日の夕暮、半七は美濃屋平左衛門が今市屋から借りてゐる五十兩を返させようとして、其の調達に窮し、心を痛めながら戎の社内をさまよひ、善右衛門。庄九郎に邂逅し、彼等の甘言にふはと乘つて五十兩を借り、喜んで彼等の言ふが儘に借用證文を認め、禮を述べて別れた。

後にそれは贋金を摑まされたのだと知つて彼等を追跡し、山の口で呼止めて喧嘩となり、半七は善右衛門が斬付けるを外して、遂に之を刺殺す。其の間に庄九郎は遁れ、半七も人目を忍んで闇に姿を晦ました。

上鹽町の段

登場人物の主な者

茜屋半兵衛（酒屋。半七の父）　老　　婆（半兵衛の妻。半七の母）　長　太（茜屋の丁稚）
美濃屋三勝（女舞の藝人。半七の愛人。）　年寄。五人組　宗　岸（お園の父）
お　園（半七の妻。十九歳）　お　通（半七・三勝の子。二、三歳）　茜屋半七（三勝の愛人。二十五歳）
宮城十内（大和五條櫻井の家中）　庄九郎（中村屋の番頭。惡漢）

梗概

茜屋は大和五條の名ある家であつたが、逼塞して大阪に出で、上鹽町三丁目格子構への家に酒店を出し、老夫婦は一子半七に妻お園を迎へ、丁稚長太を使つて約まやかに暮してゐる。

冬の日暮れ頃三勝は幼兒を抱いて來り、「進物にしますのですが、お宅の柄樽に銘酒を一升詰めて下さい」と言うて代金を拂ひ、長太を賴み之に其の柄樽を持たせて去つた。

入違ひに半兵衛は、町年寄。五人組の人たちと共に代官所から歸る。彼は我が子が善右衛門を殺した罪を引受け、縛り繩を掛けられたのを着物で隱してゐる。半兵衛の妻は何故に夫が代官所に呼ばれたのかと案じてゐるので、半兵衛は「呼ばれたのは別に變つた事でもなかつた」と、之を瞞して安心させた。

やがて長太は柄樽を持ち、幼兒を抱いて泣きながら歸り來り、「今の女が途中で、『ちよつと用たしをして來るから、此處で待つてゐてくれ』と、柄樽とこの兒を預けた儘去つたが、待つてゐても歸つて來ない。其の邊を尋ね廻つても全く行方が知れませぬ」といふ。しかも其の樽には「進上茜屋半兵衛様」と、張紙がしてあるので老夫婦は不審に思ふ。

折から宗岸はお園を連れて來り、娘を取戻した過ちを謝し、「どうぞ元通りにお園を半七の妻として下さい」と頼む。お園も、「お氣に召さずとも哀れと思召されて、元の儘に嫁として使つて下さい」と、涙に袖を濡しつゝ懇請した。されど半兵衛は我が子の不身持から、お園の行末を氣の毒に思つて承知しない。そこで宗岸は貞心堅固なお園の心を思ひ遣り、子を思ふ親心のせつなさを語り、同時に半兵衛が我が子の殺人の罪を被て、縛られてゐる事を指摘し、同情の涙にくれた。之を聞いて老婆ははつと驚き顏を曇らす。半兵衛はかねてお園の美しい心に感じ、「こんな嫁は世に稀な嫁鑑、去なせともないは山々なれど、此方へ置けばこの儘の若後家、それがいたはしい」と、聲を上げて噎び入る。そして「内密の話がある」とて、妻と共に宗岸を誘うて奥に入つた。

お園は獨り取殘されて夫の身を案じ、「今頃は半七樣何處にどうしてござらうぞ」と、斷腸の念に消入るばかり。折節先刻の捨ひ兒が目を覺し、乳を吞まうとしてお園の膝に這寄る。お園は之を見てお通であるに驚く。半兵衛も宗岸もまろび出て、「半七。三勝の中に生れたといふのは此の兒か」と眺め入り、女兒の懷を探つて書置を取出した。其の文に、細々と不孝を謝し、殺人罪を犯した事を述べ、お園にも詫びて來世の契りを誓ひ、氣に懸かるはお通が事、何卒子と思し召して養育の程、かへすがへすも賴み上げますとあるので、相寄つて互に讀んでは泣き、泣いては讀み、行燈の灯も幽かにしばだたく下に、滿座哀愁の氣に裹まれた。戸外では竊に三勝。半七が來て、掌を合はせて親を拜み子を思ひ、千萬無量の感慨に名殘を惜み、血の涙にくれて去る。

その後に宮城十内は庄九郎に捕繩を掛け、之を引連れて駈付け、「善右衛門は舊惡露顯によつて半兵衛に罪無し。半七の事は代官所に申請して、櫻井家の處置に任される事となつた」と、告げて半兵衛の縛を解く。家内一同「これは有難き御仰せ」と拜し、「一刻も猶豫ならず」と、手分けして三勝。半七を尋ねに出たが、それは既に兩人が、行方も知れず情死の道を辿つた後であつた。

評

我儘な半七は、親の許さぬ三勝と契り、親の與へた妻を疎んじて我が家に近づかず、戀愛の三角關係を結んだ擧句は、戀敵を作つて騙られ、遂に殺人の大罪を犯し、其の身も情死して浮名を流した。其の誤つた結婚と、愛に溺れる家庭教育の缺陷とは、往々恐ろしい悲劇を生む事を示してゐる。吾人は餘りに明白なこれ等の批評を述べ立てるまでもない。寧ろ彼等相愛の男女が、死なねばならぬ其の深刻な窮苦と、悲慘な戀愛とに同情を寄せるべきであらう。

本段は之を流麗な筆で描いた。そして子の爲には水火も辭せぬ親心や、自己を滅却しても婦德を全うしようとするお園の、美しい犧牲的精神を細かに書き盡した。そしてそれ等の涙ぐましい場面を高調して、我が國往時の義理人情の一面に鮮かな印象を與へてゐる。然し今の世の烈しい生存競爭の壓迫を受けてゐる人の心は、往往利己に走り、自由放恣に傾いてはゐないか。その眼からは、これ等往時の義理人情に對して不思議に感じるであらう。

上鹽町の段

古郷は大和五條に名のみして、今は浪速の上鹽町格子作りも小作りに、三輪の山本ならねども杉立つ軒の酒ばやし、味淋白酒燒酎の、看板も辛い渡世也、賣り男に居眠る丁稚の長太、酒壺で天窓こつ〳〵り「アイタヽヽ」何奴じや、人の天

○大和五條　大和國宇智郡五條町をいひ、茜屋半七の郷里である。
○上鹽町　大阪市天王寺區上鹽町。茜屋は上鹽町三丁目北側の角屋敷にあつた。昔はこの馬場で毎年五月五日に競馬の儀式が行はれ、このあたり現今は商家が[illegible]であるが、[illegible]頃は商家の間に田畑や[illegible]、[illegible]
○三輪の　杉立つ軒　三輪は大和國磯城郡、[illegible]

窓を擲き居つたはハア、。誰も擲いたのじやなかつた。己がでに打ッたのじや、ア、何じや〳〵又彈は〳〵。隣の須賀都が稽古じやそふな、何ぞ面白い事を諷へばよいが」、「可愛らしい前髪を、愛想もこつそり坊樣に。せふ事もなき憂節の爰ばつかりに日は照まいし」、「ハア、コリヤ萬年草をやらかし居る、コリヤ面白いよいよ樣。長ふ賴みます」と身を腹這いに寐はらばい、餘念たはいも納戸より、立出る此家の女房、「ヤイ長太よ其形は何じや。今日は親父殿を代官所からお召シで、お年寄や町のお衆と、今朝から行しやつた故、何事が起つた事と、内で兎や角案じて居るに。其氣も付かぬ白癡者。嗜居れ」と叱られて、俄にしよげりましくしと水洟すゝる計り也。早日も西に。片陰を、歩む姿は一ト風ある。一ッ三つの子を抱、酒屋の暖簾押明ヶて「お邪魔ながら酒を少々下さりませ」と、内へ這入れば「何じや酒くれ。此方の内にやる酒は無い。通りや通りや」、「イヤ私は物貰ひではござんせぬ、よい酒が一升買い度ふござんす」と、言ふに女房立寄ッて「又しても阿呆めが。粗相ばつかり吐かし居る。お赦しなされて下さんせ、よい酒とおつしやるは、銘酒でも上ましようか」、「アイ。遣ひ物に致しますのじや程に、隨

○酒ばやし　往時酒屋には杉葉を集めて丸め、軒に吊し標しるしとした。之を酒林といふ。酒林は慾を掃ふ帚の意から酒屋の看板にしたもので、そのもとは帚であつた。

○辛い　焼酎の味の辛いに、逼塞してゐる辛い生計をいひかく。

○己がでに　自身ひとりで。

○こつそり　頭髪を剃るさまをいひ、それに「愛想もこそも盡き果つ」をいひかけた。「俚言集覧」に「ごつそり＝髪を剃る事に云」。

○萬年草　三味線唄の名。蓋し高野の萬年草の名によつたもので、「可愛らしい…日は照るまいし」は、即ち其の唄であらう。

○いよいよ様　唄・三味線・踊などの妙處を褒めて發する聲。ここの文は「面白い」に「いよいよ様」をいひかく。

○寐腹這　寐てはらばふこと。ねころび。近松作「本朝三國志」に「佛の手の上に寐はらばうて烟草のむもの己れ一人」。

○納戸　衣服調度の類を納めて置く部屋。

○代官所　江戸時代には幕府直轄又は藩主の支配下の年貢・公事・人別等を管理する地方官を代官といひ、その役所を代官所と稱した。

○年寄　町年寄ともいひ、町内の公用雑事を掌る役。[illegible]

○町のお衆　五人組（その條を見よ）の人々。

○しよげり　[illegible]元氣なきをいふ。

○ましくし　心よからず、むしやくしやするをいふ。[illegible]「[illegible]」に「[illegible]たる侍ましく〳〵したる頭（かしら）を持上げ」。

分好いのを内方の。塗樽に一升入レて下さりませ」。「ヲヽお遣い物なら相生が好からふ」と挨りを拂ふ塗樽に、漏斗さし込古今の飲み。好い程らいに詰樽の口にべつたり銘酒の書付。手早に張て差出せば、「ヲヽ相生とは目出たい銘酒、價は其處へ宜しう」と。お脚取出し差出し、「近頃わりなき事ながら。内方のわろ衆に。此樽持たせてちよつと其處迄。雇はかして下さりませぬか」、「アヽ夫は何よりお安い事。コリヤ長太よ。胸前匹外して、此女中樣に附いて往て、樽の明いた時取りに行ヶ樣に。先樣を能ふ覺へて戻らふぞ。ヤ申シ何處迄成りと連レてお出なされませ」、「ヲヽ夫はマア〱お嬉しや、お禮は戻りに申シませふ、此方樣いかい大儀じやの」と挨拶つど〱角樽を、長太に持たせ、出て行、引違ふて主半兵衛、老の丘調氣はいらくら。急ぐ足取り我ヵ家の軒。跡に年寄五人組、打連レ伴ひ立歸れば、「ヲヽ親父殿戻らしやつたか、お年寄樣何方も〱いかい御苦勞、思ひかけない代官所のお召シ故。何事か起つたと、今朝から妾は案じつゞけ、氣遣ひな事じやござらぬか」、「イヤお内儀、さして氣遣ひな事じやござらぬ、高が爰の半七が、山の口で人殺した」「アヽ申シお宿老樣、半七が人ころスサア悴めが一頭とは違ふ

○内方　貴方「あなた」の内、貴方の家。近松作「長町女腹切」に「こりや旦那さんでござりんすか、内方に居さんす半七殿におよつと逢ひたら御座りんす」。
○相生　酒の銘、この銘及びこの後の文に出る「古今」「浪花江」「泉川」も、「古今集」及びその中にある歌枕などに據つた酒の銘である。
○古今　「古今集」の名から取つた酒の銘、ここの文は古今といふ銘の酒を混合して、相生といふ銘の酒をつくるのである。(原文「小きん」とあれど、これは「古今」をかく書いたのである。)
○程らい　程あひ。「古今著聞集」に「引出物の程らひなど定めて」。「增補俚言集覽」に「ほどらい＝大坂詞ほどよき也」ここの文に「飲み」と「好い程らい」との間に讀切點[illegible]とあれど、これは言ひ方の上のことで、意味の上からは續いてゐる文である。
○お脚　お錢、「易林本節用集」に「要脚、錢也」。
○わりなき　ことわり(理)なき意。無理な。申しかねる。
○わろ衆　小者さんたち。「わろ」は「わらは」(童)の[illegible]であらう。
○女中　婦人。
○[illegible]々々角樽　[illegible]
○角樽　柄が兩角のやうに長く出てゐる朱塗の樽。
○がんでう　[illegible]

て、ぞけ出した故の勘當、御挨拶は忝けれど、先其分になされて、何にもおつしやつて下さりますな、女房共定めて案じて居やつたで有ふが、何にも氣遣ひな事じやなかつた、年の切れた證文の、賣り買すなハ畏りましたと、何事無う濟んで戻つたが、皆様は嘸御退屈、御酒でも燗して上ましや」と、夫が詞に悦ぶ女房「夫はマア〳〵目出たい事、身に覺へはなけれども、時の災難でどんな事が起らふと、案じた程は悦ばぬ、詞皆様の草臥休め、肴はなくと御酒一つ」と、立つを留めて「ア、お内儀、イヤモよしにさつしやれ〳〵、下宿で支度して、酒もたんと飲んで居れど、理に入つたかして醉も出ぬ、ア、氣の毒な事では有ル」と宿老の投げ首何とやら樣子ありげの折からに、上の町から「おい〳〵」と泣て戻る阿呆の長太、片手に酒樽片手に抱稚子も、俱に泣々、我が家の内、詞「又阿呆めが餘所の子にせぶらかされたな、ヱよい年して何のほへざま、嗜み居れ」と叱られて

ウ」人倫」。

○いらくら　心の苛立つさま。いら〳〵。

○五人組　五戸を一組とした隣保的團結であつて、治安維持の方法として、組合相互の罪惡を見さぬやうにし、若し罪科を犯す者があつたならば、其の組合から連帶責任にして告發せしめた。

○代官所　（既出）

○内儀　町人の主婦を呼ぶ稱。町人でない主婦を稱することもある。おかみさん。（見索引）

○山の口　大阪今宮戎神社の東、逢坂下之町にあつて、正月十日戎の市の午後六時すぎ、此處で半七が善右衛門を殺した。

○宿老　町内の年寄役であつて、その町の取締をしたものである。

○ひところ　半兵衛は女房に、我が子の半七が人殺しをしたと知らせては、愁歎にくれるであらうと思ひ、人殺〔ひところし〕を一頃〔ひところ〕（或一時の意）にごまかした。

○ぞけ出す　「ぞなけだす」（背出）の義か。親の心に背きだすをいふ。

○案じた程は悦ばぬ　悦ぶよりも案じ心配した方が大きかつた。

○と　とも。「雖」の意を示す。

○下宿　宿屋兼業の茶屋と料理屋。「男色大鑑」卷六に「[illegible]大吉屋が下宿なるに、[illegible]」、また近松作[illegible]「[illegible]がない」とある。「したやど」は、[illegible]る宿をいうた。

○支度　食事をすること。

○たんと　「たん」は「たり」（足）の義。充分に。澤山に。（見索引）

○理に入る　理窟を考へ込むこと。「入る」は定（ぢやう）に入るなどいふ入ると同じ意。

○せぶらかす　「せびらかす」ともいひ、ねだりといたむ。からかふ。いぢめる。近松作「[illegible]」に「今日は島屋で彼の田舎のうてやにせびらかされて頭が痛い」

○ほえざま　[illegible]といふ意。

○辨天　大阪市天王寺區生玉社の東に辨財天の宮居がある。

○金毘羅　大阪生玉金毘羅。

○八幡　生玉社の門前南の方、蓮池の側にある北向八幡宮。

○生玉　大阪市天王寺區にあつて生玉神社がある。

○姫御前の子　女の子といふべきを、老婆の詞であるから、かく優しくうつした。

○有らいで　有らずしてなるものか、有るにちがひない。

○樣子でもあることか　何かわけでもあるここか。

○女中　婦人。(既出)

○雇ふ　[illegible]

⦿めんよう　奇怪。不思議。

○五人組　[illegible]

「イ、エ。こちやせぶらかさりやせぬけれど、先刻女が、己を辨天の内へ連れて行て、ちよつと其處まで行て來る程に、此子をちつとの間、抱て居てくれと言ふて。そしてから何處へ行たやら戻らぬによつて。金毘羅樣や、八幡樣や生玉の内を、彼方らへ行たり此方らへ行たり尋る中に、此子が泣くによつて、夫で己も悲しいエヘン〳〵」、「やい〳〵何を吐かすやら、それは汝が阿呆じやによつて、やつぱり辨天の内に、待つて居ればよい事を、定めて爰へ尋て見へるであろ」と、泣く子を賺寄抱取り、「ヲ、よい子や、姫御前の子じやそふな」と、長太が提し樽打眺め、「ハア、變つた書付。進上茜屋半兵衞樣と、此方の名を書ィてある、コレ見やしやれ親父殿」と。樽差寄すれば「ハテ此廣い大坂、同じ名も有らいで」と、言いつゝ見やつて眉に皺「進上上鹽町馬場先にて、茜屋半兵衞樣、ムヽ、馬場先で、茜屋半兵衞といふは此方の事じやが、見りや此方の塗樽コリヤ樣子でも有る事か」。「イヤ樣子といふは、先刻に見知らぬ女中が酒買に來て、アノ長太を雇ふて連れて行かれたが、其樽に此書付、「イヤ何じや見知らぬ女が、酒買に來た、其時何の譯も言はず、阿呆を雇ふて」、「ハテめんよふな」と、不思議に立寄五人組、

一爰らが宿老の分別所」といふても詰る塗樽の、禿た天窓を傾けり、半兵衛膝を丁ど打ち、「ハア、よめた〳〵コリヤ棄兒じやはいの」、「ヤア棄兒とは何を證據」、「ハテ此方の内で買た酒に、進上茜屋半兵衛様と書付け、其子を阿呆に抱して、何處やら行方の知れぬは、疑ひもない棄兒。此半兵衛を見込みに、養育頼む印の此酒、サ何とそふじや有ルまいか」、「成る程〳〵言しやればそんな物、何のよしみもない人が、酒くれふ筈がない。是が棄兒ならマア何と利口な仕様じやござりませぬか」、「ソレイノ、蜜柑籠も入らず、イヤモ新しい棄兒の趣向。コリヤ流行ませふわいの、シタガ棄兒の筒もたせじやないかや」、「ハテ何と致しましよ」、「モ斯う突付られた事じやもの、養ふてやらざ成りますまい」、「ヲヽ夫々こんな事も縁の物。乳味湯で成りと育ませう」、「ホヽ夫はいかい後生じや」、「イヤ其かはり其子に就いて、違論妨ある時は、何時でも町が證人、サヽヽヽ何と皆の衆、是をはねにモウ逝ふじやあるまいか」、「イカニモ左様」と起上れば、半兵衛夫婦つどつどに今日の御苦勞御世話の禮、何やら物を言たげに、振向く宿老を目でとどめ稚子抱き祖父祖母は一間へ。こそは入相の、鐘に散り行花よりも、可惜盛り

○宿老の分別所　町々の宿老が思案して事理を[illegible]。宿老は町の年寄。[illegible]をいふ。
○詰る　分別に行詰ると、酒の詰るとにいひかく。
○禿げたあたま　宿老即ち町年寄の禿頭。
○蜜柑籠　蜜柑籠に子を入れて棄てることが多いによってかくいふ。
○筒もたせ　「美人局」など書いてある。なれ合いまをとこ。ここでは夫婦相談して我が児を棄て、それを他人に拾はせ、これをいひがかりに金銭を強請することの意。
○養うてやらざなりますまい　この所半兵衛夫婦[illegible]親切心をあらはしてゐる。
○乳味湯　乳の代用物。
○後生　人に親切を盡して己が身の功徳となること。來世の極樂往生の[illegible]。
○町　町年寄。
○跳　興行物などの打出しで見物人の散ずることを以て話も仕舞ひにして皆な散り歸ることの意にいふ。
○都度々々　毎々。いちいち。[illegible]
○入相の鐘　可惜盛りを獨寐　新古今春歌下[illegible]能因法師の歌に「山里の春の夕ぐれ来て見れば入相の鐘に花ぞ散りける」とある。その[illegible]惜むべき[illegible]可惜「あたら」獨寐の[illegible]。「入相の鐘」[illegible]

○お園　半七の妻であるが、半七が三勝にいりびたつてゐるので、お園は實家に引取られてゐた。
○世間かまはぬ　隱居の身分なればいふ。
○十徳　昔用ひた服の名。素袍に似て腋を縫附け、胸紐を附けたのと附けぬのとある。後世腰から以下に襞を附けて禮服などに用ひた。
○光　禿頭の光と光陰とをいひかく。
○暗む　子に迷ふ親心の暗むと、日の暗くなるをいひかく。
○疵持つ足　今まで實家に引戻されてゐたのであるから、何となくきまりわるく、踏込むも心おくれて遠慮するをいふ。身に後暗いことあるを、諺に「脛に疵持つ」といふ。
○針持つ詞　人の心を刺す皮肉な詞。
◇往時我が國の結婚は、ここにいふが如き道德によつて支配されたものである。
○跡の祭　時機におくれるをいふ諺。

を獨寐の、※お園を連レて爺親が。※世間構はぬ※十徳に丸い天窓の、※光さへ子故に。※暗む黄昏時、主の妻は灯をともし表を締めにいそ〳〵と。出合頭に「ホヽ是は是は宗岸樣、そつちに居やるはお園じやないか」、「アイ母樣。お變りもござりませぬか」と、いふ挨拶も何處やらに※疵持つ足の蹈所さへ。低き敷居も越かぬる、宗岸は遠慮なく「半兵衛殿お宿にか」と、娘を連レて打通れば、妻は門の戸引立てて「サア〳〵先お上りなされませ」と、奧底もなき詞の中。夫と聞より半兵衛が、一間を出る澁々顔。「娘を連レて逝れたからは。此方の内に用はない筈、何の爲にござつた事」と。※針持つ詞に妻は氣の毒。「イヤもふ人樣に追從言ぬ偏窟な此方の人、必お氣に障へられて下さりますな。此間は嫁女の歸つて居られまして、いかひお世話でござりませふ」、「ナンノ〳〵。半兵衛殿の立腹は皆尤、三勝とやらに心奪はれ、夜泊り日泊りして、女房を嫌ふ半七、所詮末の詰らぬ事と。無理に引立て逝だのは、娘にひけを取ラすまい爲己が氣迷ひ、夫から思案をするに付け、唐も倭も、一旦嫁にやつた娘、嫌はれふがどふせふが、男の方から追出す迄、取戻すといふ理窟はない筈、コリヤ宗岸が一生の仕損ひと、悔んでも※跡の祭り、聞こ

めも晝夜泣悲しみ、朝夕も進まねば、若し病が起らふかと、見て居る親の心は闇。己も天滿に年古ふ住んで居れば、人に理窟もいふ者なれど、誤りは詫ねばならぬと、年寄の面押拭ふて來ました、何かの事は料簡して、今迄の通り、嫁じやと思ふて下され頼みます。コレ御夫婦」と、誤り入たる挨拶に、お園もうぢ〳〵手をつかへ「父様の一轍で無理に連られ歸りしが、一旦殿御と極つた半七樣。嫌はれるは皆私が不調法、鈍に生れた此身の科、今から隨分お氣に入る樣に致しませふ程に、やつぱり元の嫁娘と、おつしやつて下さりませお二人樣」と跡は詞も、涙なり（詞）ヲヽ何のマア、そつちさへ其心なら、こつちは變らぬ嫁姑、ノウ親父殿。そふじやないか、「イヤそふじやない、昔唐にも例が有、太公望とやらいふ人の妻、夫に暇取り月日を經て、詫言に來りし時、鉢の水を大地に明させ、其水を鉢へ入よ、元の如く夫婦にならんと、太公望が言はれたと、いつぞや講釋で聞て來た、夫と丁度同じ事、こなたの方から無理暇取つて、今更嫁と思へとは、いつ迄言ふても返らぬ事、口詞叩かずと早ふ連て逝つしやれ〳〵」と、鰾膠もしや〳〵りも納戸口、顔を背けて居たりける（詞）ヲヽ其腹立は尤々、が重々不調

○朝夕も進まねば　朝夕の食事が進まねば、食慾が無いから。
○親の心は闇　「後撰集」雜一、藤原兼輔の歌に「人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道にまよひぬるかな」。
○天滿　[illegible]
○理窟もいふ　議論し説教もする。
○面押拭ふ　恥を忍んで顔を人にさらすをいふ。近松作「[illegible]」[illegible]ながらおめ〳〵と、面をのごうて來つたり」。
○うぢ〳〵　ためらつてぐづ〳〵するさま。近松作「[illegible]心中」に「[illegible]うぢ〳〵してこそゐたりけれ」。
○一轍　ひとすぢに思ひ込んだ事を是が非でも押通すこと。
○鈍　愚鈍。
○太公望とやら…言はれた　「覆水盆に返らず」の故事。「鶡冠子」の註に「太公既封ニ齊侯一、道[illegible]、太公取ニ水一[illegible]地、令ニ收一、惟得ニ少泥一、公曰、誰言離更合、覆水定難レ收」。太公望は姓呂氏、名は尚。周武王に仕へて齊に封ぜられた。
○鰾膠もしやしやりも無い　粘氣もなく、しやりしやりした所もなく、無味無愛想なるをいふ。[illegible]いひ、粘着力が頗る強い。

法は此天窓に免じ料簡して、どふぞ嫁に。「否でござる。悴めは勘當したれば、嫁といふべき者もない筈」。「サア夫も懲しめの爲當座の勘當」、「イヤ、當座でない、七生迄の勘當じや」、「ム、其又、七生迄勘當した半七が代りに、此方は何で繩掛かつた」、「ヤア」、「サア半七とは親でも子でもない此方が、今日代官所で、何の爲に縛られて戻らしやつた」と、思ひも寄らぬ宗岸が詞に喫驚も驚く女房。嫁も倶々立寄つて、肌押脱せば半兵衛が、小手をゆるめし羽交締「ノウ情なや何故」と。嫁はうろ／＼女房も、取付き歎けば宗岸が、「イヤまだ驚く事がある、聟の半七は人殺し、御尋者になつたわいの」と、聞くより二人は又喫驚り「夫は何故どふした譯、樣子を聞かしてコレ／＼半兵衛殿」と問へども更に返答は、差俯いて詞なし、宗岸涙の目をしばたゝき、「一昨日の晩、山の口で、善右衛門を殺したは、茜屋の半七と、噂を聞ィた其時は、驚くまいか喫驚りせまいか、膝も腰も拔け果しが、思へば／＼不孝者、よい時に勘當さしやつて、親に難儀のかゝらぬは、まだ此上の仕合せと、思ふたは他人の料簡、※違ふた此方の縛繩、科極つた半七が命、一日なりと延したいと、人殺しの科を身に引請、繩かゝつた此方の

○小手　半兵衛の手さき。
○羽交締　背後から兩手を括り、縛繩を兩手の腋下から通して、胸元を強く締付けること。
◇このあたりの文、婿はお尋ね者と知りながら、娘を連れて婿家へわびに來る、その宗岸の義理がたい心を見るべきである。義理張るより頬張れの今の人には、宗岸のやうな者は稀であらう。
○違ふた　他人の料簡とは違うた。即ち他人の利己心と違ひ、自ら進んで子の爲に難儀を引受け、縛繩にかゝるをいふ。

心は、眞實心に子を思ふ親の誠と、知れば知る程宗岸が仕損ひ、半七の身の難儀、此方も勘當して仕舞ひ、己も娘を取戻したら、親にかゝる首綱もなく好い事したと世間から譽める人もあらふが、親となり舅となるが、大抵深い縁かいのふ、斯ういふ時宜になつた時は、譽られるより、笑はれるが親の慈悲、片時も早ふと連レて來た心はの、一旦嫁にお越したれば、半七が嫌がるなら、ハテ尼にしてなと此内で、御夫婦の亡き跡の、香花なりとも取らして下され、コレ手を合して頼ふます、詫言が叶はぬと、内へ連レて往ぬならば、引離されたと突詰めて、短慮な心も出し居ろかと、此事の起らぬ先から、案じ過して夜の目も合ず、母親は無したつた一人、彼奴を思ふ己が因果、此方の繩目も半七が、科人に成つたら猶可愛かろ、例ば又勘當が定でも、舊里切つたが誠でも、眞實親子の肉縁は、切ラれぬ血筋の親、己も此方程はなけれども、娘は可愛、まして勘當はせぬ娘、愚痴なと人が笑はふが、おりや可愛不便にござるコレ〱〱、聞キ入レてたべ半兵衛殿」と是迄泣カぬ宗岸が、堪へに堪へしため〱を、たくしかけたる叫び泣キ、我強ふ生れし半兵衛も、舅の心根思ひやり、ニヲ、道理じや〱宗岸殿」と、跡は詞もないじ(註)

○此方　貴方。半兵衛をさす。
○大抵深い縁かいたら　蓋大抵の深い縁でございませうか、いや〱普通なところではない大變な深い縁であります。
○時宜　都合好い頃の意。時に一、成り行き。
○このあたりの文、親が子を思ふ恩愛の情をいひつくして餘蘊なし。そして「譽められるより笑はれるが親の慈悲」の如きは、この文句千鈞の重みがある。（もつともこれは近松の文中にもある）。
○おこす　よこす。
○内へ連れて　突詰めて　宗岸がお園を連れて我が家へ歸るなら、それこそお園は、半七との夫婦の間を引離されたと心に突詰めての意。
○舊里切り　舊里に寄せ付けぬ義、勘當義絶するをいふ。舊里を久離また舊離とも書いて、勘當の義にいひ、久離を切るともいふ。
○ため〱　「溜め〱」であつて、溜めに溜めての意。
○たくしかく　「たぐりかく」（手繰掛）。「たくしかける叫び泣き」とは、續けざまに叫びながら泣くこと。近松作「冥途の飛脚」に「ヤれそが言傳したぞや、近日一座致したいとたくしかけれは」。
○ないじやくり　「なきじやくり」（泣噦）の音便。しやくり泣き。「詞も無い」にいひかけた。

やくり妻もお園も一時に、四人が涙洪水に樋の口。明けし如くなり、半兵衛涙の内よりもお園が顔を打守り「何から何迄氣を付けて、孝行にしてたもる。こんな嫁が尋たとて、も一人とあるものじやない、世間の人の嫁鑑、半七が事は思はぬが、其方に別るゝ、半兵衛は、よく／＼の不仕合せ、どふぞ去なせとむない、返しともないとは思へども、こつちに置けば此儘若後家、おりやそれが可愛いとしうおじやる、夫で詫言聞キ入レぬ、料簡して呼戻さぬ。コレ嫁女、必惨いと恨んでばしたもんなや、一人の悴はお尋者、明日より誰を力にせうぞ、孝行にして給つたが今では結句、恨めしい」と咳上げ。咳入る舅の背摩るお園も正體なく伏沈むこそ道理なり。半兵衛漸う顔を上げ「いはねばならぬ事もあれど、孝行な嫁女の手前、胸に詰つて言ひ惡ひ、宗岸殿、奥の間で言ひ明かさん、コレお園、其方をさら／＼嫌ふじやない。氣に懸けて給るなや。舅殿へ咄す中、暫らく爰に」と、三人はしほ／＼奥へ泣に行、心の内ぞ。哀なり、跡には、お園が、憂思ひ、かゝれとてしもうば玉の。世の味氣なさ身一つに結れ解けぬ片絲の、繰返したる獨言、今頃は半七様、何處にどふしてござらふぞ、今更返らぬ事ながら私といふ

○いとしうおぢやる　いとほしうござる。
○ばし　意を強める接尾語。
○たもんなや　たもるなや。下さるなよ。
○かゝれとてしも…世の味氣なさ　かく憂き思ひのあれといふ事であゐ、不趣味な現世のならはしこの意に、何のあやめも見えぬ暗闇の夜の不趣味さことをいひかけた。「後撰集」巻十七、遍昭の歌に、「たらちめはかゝれとてしも烏羽玉の、わが黒髪を撫でずやありけむ」。
⊙うば玉の　「夜」にかかる枕詞。
○片絲　縒り合はせないこと等。「一つに結ぼれ解けぬ」「繰返したる」は片絲の縁語によつた文句である。
○今頃は半七様　このところは、お園が無情な夫に對して、己が美しい貞心を見せたもので、世に知られてゐる名高い文句である。作者はかくの如き三角關係の上に立つて[illegible]である。そしてお園のいぢらしい貞節に對する貞婦の眞情を吐露して、言々涙があり句々情がある。

○輪廻 愛著妄執の意。附纏うて離れぬこと。(見索引)

○はかない 果無い。半七の死ぬる事にいうた。

○とても 覺悟 どうあつても現世には生きながらへぬ決心。

○飲ふ 「飲まう」の意、小兒語。

者無いならば、男御樣もお通に免じ子までなしたる三勝殿を、疾くにも呼入れさしやんしたら半七樣の身持も直り、御勘當も有るまいにと思へば／＼此園が、去年の秋の煩ひに、いつそ死で仕舞ふたら、斯した難儀は出來まいもの、お氣に入らぬと知りながら、未練な私が輪廻ゆへ、添臥は叶はずともお傍に居たいと辛抱して、是迄居たのがお身の仇、今の思ひに較ぶれば一年前に此園が、死ぬる心が付かなんだ堪へてたべ半七樣私や、此樣に思ふて居る」と恨み辛みは露程も、夫を思ふ、眞實心猶いや、まさる憂思ひ、「明日は疾ふから爺樣に、又連られて天満へ逝、半七樣のひよつとした、はかない便りを聞ならば、思ひ死に死ぬで有う。とても浮世は經ぬ覺悟、嫌はれても夫の內、此家で死は後の世の、若しや契りの綱にも」と、最期を急ぐ心根は、餘所の見る目もいぢらしし、かゝる哀も知らぬ子の、泣聲に目や覺しけん、一間を出て「乳飲ふ、乳が呑みたい叔母／＼叔母」と、お園が膝に寄添子の顏見て吃驚り抱寄せ、「ヤア其方は美濃屋のお通じやないか、爰へはどふしておじやつた」と、不思議ながらも、抱き上ぐれば、半兵衛宗岸母親も、一間の內を轉び出「ヲゝコレ／＼嫁女、忝い其心、障子の內で

聞ヶ度に、拜んで計リ居たはいの、禮言ふこともたんと有レど、心の急くは此子の事、美濃屋のお通と言はしやつたは、半七と三勝の」、「アイ、お二人の中に出來た、お通といふは此子じやわいな」、「ヤア／＼親父殿聞しやつたか」、「ヲヽ聞ィて居る、其お通をナヽヽ、何で棄兒にして此方へはお越した、こりや譯が有ッふ、嗅懐か何處ぞに書ィた物でもないか早ふ、尋ねて見や」といふ内に、わくせき明ヶる守り袋、内よりぱらりと落たる一通、取間遲しと封押シ切、「ヤア何じや、書キ置キの事と書ィて有、ヤア／＼これ／＼嫁女其方のよい眼でちやつと讀みや讀みや」、「アイ／＼、ナニ／＼、十度契りて親子となる、父の御恩は山よりも高きとの世の教へ、我身にも辨へ居候得共、其御恩も得送らず、儘ならぬ義理に絡まれて、心にも有ぬ不孝の罪、御赦し下され度候、わけて母樣の御養育、申シ、お前の事でござります、能ふお聞なされませへ」、「ヲヽ能ふ聞ィて居ます、聞ィて居ますわいの」、「聞て居るさの、障子より、漏れ出る月は、洒ゆれど胸の闇」、「エヽ時も時と隣の稽古、そして其跡は何と書ィて有ルぞ」、「アイ母樣の御養育海より深ヵき御惠み、親父樣の御機嫌惡しい時には、陰になり日向になり、幾千萬のお心

○たんと　「足(た)りぬこと」の義。充分に。澤山に。(既出)

○わくせき　「あくさく」(齷齪)の轉訛。せはしくこせつくこと。せゝかしう思ふこと。近松作「生玉心中」に「抱付きたい言ひたい事のわくせきも、主人が見る目憚りて」。

○十度契りて親子となる　「曾我姿富士」に「七度契りて親子となり、三度結びて兄弟と生る」とある。

○父の御恩は山よりも高き　「童子教」に「父恩者高シ山、」

○聞いて居るさの胸の闇　端唄の須賀搔「すがいち」が稽古に彈く唄の文句であつて、それが聞えるのである。

○居るさ　居る方。ここの文は「行く月の入るさの山」などいふによつて、「入るさ」を「居るさ」にいひなし、「入るさ」の縁で「漏れ出づる月」といひつゞけた。

○母樣の…御惠み　「童子教」に「母德者深シ海」、

遣ひも、泡と消行我難儀、人を殺せし身と成り候へば、思ひ設ぬ御別れエ、〳〵
そんならやつぱり、半七様は「、「ヲ、、嫁女、善右衛門を殺しましたわいのふ、
ハア、あの又善右衛門といふ奴が大抵や大方悪ルい奴じやない、あんな悪ル者でも
喧嘩両成敗、我子の命を解死人に取らるゝと思へば〳〵、宗岸殿「、「ヲ、、エ、
惜いわい惜いわい」、「鴛鴦の片羽の、とぼ〳〵と、子に迷ひ行小夜千鳥」、三勝は
半七に添に添れぬ十内へ、義理故捨る憂き命、又お園へも立チ難き、義理故捨し
我ガ子の顔、名残りにせめて今一日と、倶に戸口に夜の鶴、内にはそれと白髪の母、
心ならねば書キ置キを、又取上ゲて讀文章、「人を殺し一日も生キながらへる所存はな
く候得共、お通と申ス娘一人御座候て、殊にか弱き生質、不便さ餘る親心、夫レに
心が引カされて、今日迄ながらへ候得共、所詮助らぬ身に候へば、思し召しも顧
ず、お通を遣し候まゝ、私の小さく成りしと思し召サれ、御養育の御世話の程、
くれ〳〵頼み上ゲ候、子を持ッて親の御恩を知ルと、お通が不便さいぢらしさに、御
二人様の御恩の程、猶更此身にしみこたへ有難く存じ奉り候、又々心懸りは、親
父様の御勘當、相果候跡にても、御赦し下され候やう、母様宜しく御執成、是の

○大抵や大方悪い奴ぢやない　普通やなみ〳〵の悪者ではない。頗る悪い奴である。
○喧嘩両成敗　喧嘩した者は是非を問はないで、両方共に處罰すること。「成敗」は成る敗るの義、政事を取扱ふことにいひ、轉じて刑罰を加へる事をいふ。
○解死人　「げしゆにん」(下手人)の訛。直接に手を下して人を殺した者。
○鴛鴦の片羽　小夜千鳥　謡曲から聞える謡曲の文句であるが、しかも半七・三勝が戀仲であるに夫婦となれぬを、鴛鴦比翼の仲ならぬに喩へて、鴛鴦が身をいふ。聞くにつけて、情ない景で哀れである。「鴛鴦の片羽」は相思の男女の別れ〳〵となるに喩ふ。
○三勝は半七に云々　これまで讀者も亦半七はどうしたかと案じてゐる。ここに至つて三勝・半七が出る。構想的に妙である。が、かくの如きは近松巣林子も屢〻用ひた筆法である。
○十内　大和五條の藩士宮城十内をいひ、この者は藩士一同を率ゐて三勝を連れ帰らうとしてゐることは前文に見えてゐる。
○夜の鶴　「夜鶴子を懷ふ」の故事によつたもので、親の子を思ふ愛情をいふ。
○か弱し　弱い。「か」は接頭語。
○子を持つて…知る　「明心寶鑑」孝行篇に「養子方知父母恩」とて

み黄泉の障りに御座候〳〵ヲ、道理じや〳〵〳〵可愛や」と泣ク聲洩る表には半七が身にこたへ、かゝる歎も我故と思へば今更、空怖しく身を悔んだる男泣キ、袖や袂を嚙緊め〳〵泣ク音とゞむる憂思ひ、地こなたはお園が猶涙、泣く〳〵取上る書置キの、讀むもはかなき世の中に、ヨミ女は其家に有リて定る夫一人を、賴みに思ふ物に候所、其賴みに思ふ我等が身持、いつしか愛想らしい詞もかけず、遂に一度の添臥もなく候へ共、※其色目も致さずして、夫大事親達大事と、辛抱に辛抱なされ候段、山々嬉しく存シまゐらせ候、今迄すげなふ致せし事も、さら〳〵嫌ふではなく候へ、共三勝とは、※そもじの見へぬ前からの馴染にて、子迄設し中に候へば、互に退離別も成リ難く心にはあらで、それとはなしに、そもじへ疎遠に打過まゐらせ候、併、※夫婦は二世と申事も候へば、未來は必夫婦にて〳〵候まゝ、是迄の事は御赦し給はるべく候ナヲス詞ヲ、こりやマア、誠か半七樣」、「ハヽヽヽヽヲヽ、コリヤ娘、未來で夫婦と書イて有ルかいやい〳〵」、「アイ〳〵」、「未來は未來じやが、一日なりと此世で、女夫にして、やりたい〳〵、何として〳〵マア此半七は、善右衛門を殺しましたぞ、ドレ〳〵娘もちつとじやドレ、己が讀ませふ、兎角不

○黄泉の障　冥土へ行くさはり。黄泉とは冥土をいふ。「左傳」隱公元年の條に「不及黄泉無相見也」。

○色目　やうす。けしき。西鶴作「五人女」卷四に「思ひ極めて否くひきる色めの時、母親近く寄り[illegible]ささやき申されしは」

●そもじ　「そなた」の文字詞。

○夫婦は二世　「毛吹草」に「夫婦は二世の契」(見索引)

○字性　字の性質の義。字の形状。

○なからぬ跡　なくなつた跡、卽ち生きてゐる[illegible]

あ[illegible]なは「[illegible]」[illegible]

○手打　小兒をあやすに手を打つて音を立てること。ここの文は小兒が[illegible]する[illegible]。

○あはゝ　「あわゝ」と讀む。幼兒の開いた口に掌を當てて、輕く叩きながら、聲を出させる時の音響。

○胴慾　「どんよく」(貪慾)の轉。非道。殘酷。[illegible]

○關の戸：羽拔鳥　自分でないやうな聲音をつかつて、戸締りを開けてもらふわけにも行かずこ[illegible]後拾遺集[illegible]、清少納言の歌「夜をこめて鳥の空音ははかるとも、よに逢坂の關はゆるさじ」に[illegible]、かういうた。

○羽拔鳥　羽[illegible]戸をいへ、以下見苦らしいさまに[illegible]、[illegible]「善知鳥」に「羽拔鳥の[illegible]」とある、[illegible]羽拔鳥の語を取つて、[illegible]「善知鳥」の文句を引用[illegible]。

○親は外面　安方　善知鳥うとう(謠曲)の親鳥が[illegible]、砂子の中に生んだ子を[illegible]は、子は[illegible]と答へるといふ。それの[illegible]に[illegible]子を心配して、門外に立ち血の涙を[illegible]、謠曲「善知鳥」に「親は空にて血の涙を降らせば」「親は隱すとすれど、うとふと呼ばれて、子は[illegible]」とあるに據つた。

○浪花江、泉川　共に「古今集」などにある歌枕[illegible]。「浪花江」と[illegible]を合はせた[illegible]

○小きん　「古今」[illegible]「古今集」にちなんだ[illegible]

孝の我等に候へ共、死後には嘸やお二人や、宗岸樣の御歎に、隨分〳〵力を付ヶ、此身に代つて御孝行になされ給はるべく候、申殘したき事共は數々に候へども、涙に字性も見へ難くあらあら惜しき筆止め申候、唯々お通が事のみ頼上候、此上はなからぬ跡のお念佛、南無阿彌陀佛〳〵」と讀も終らず宗岸親子、又伏沈めば半兵衞夫婦、お通を中に抱キ上、「初孫の顏が見たいと、心に思へど世間の義理で、是迄逢も見もせなんだ、斯いふ事と知つたらば、顏見ぬ内がましで有ッた、愛らし盛りの此お通、半七と一緒に暮すなら、よい樂しみで有ラふもの、コレ婆見やいのアレ何にも知らず手打やあはゝ斗り」、「ヲイノ、こりや孫よ、モウ父も嬶もない程に、此婆と一緒に寐いよ、とは言ふものゝ乳もなく、今から先の寐起にも、嘸や歎かん親々が、知ラずに居るか胴慾者、惨い心、いぢらしや」と言聲洩る三勝が、思はず乳房を、握りしめ「乳は爰に有ものを、呑して遣りたい顏見たい〳〵乳が張るはいなふ」と身を顫はせ駈入ッんにも關の戸に空音もならず羽拔鳥、親は外面に血の涙子はやすかたの安からぬ、悲しさ迫る内と外、一度にわつと湧出る、涙浪花江・泉川・小きんを汲出す如く也、半七は齒を食締め「かばかり深

○疾しや遲し　疾「はや」くと急いでも、なほ遲い心地するをいふ。
○今市　今市屋。
○銀役人と相並び　銀役人と相棒になる意。
○仕置　法によつて處分すること。處刑。
○申し下す　願つてさげてもらふ。願ひさげる。

き御情是非もなや物體なや、不孝を赦させ給はれ」と、悔み歎けば三勝も「皆我故の御事ぞ」と結ぼれ解ぬ身の上の倶に詫入中に半七、詞「何時迄泣ても返らぬ繰言親父樣の御繩目、早ふ解くは身の最期、イザ／＼急がんサアおじや」と、地立上りしが「今生の別れにせめて御顏を」と、差覗けば三勝も「お通を一目」と延上り見れども親子隔の關、何と千萬無量の思ひ、兩手を合せ伏拜みフシ「おさらばおさらば」といふ聲も歎きに埋む我家の内見返り、見返り死に行身の成ル、果ぞ哀れなり、地内には宗岸涙を押へ、詞「泣て居る所でない、一時も早ふ半七が行方、夜と倶に尋ん半兵衞殿、地早ふ／＼」とせり立フシ折から、地美々しく照す高提燈、宮城十内聲高く、詞「善右衞門を殺せし科人、茜屋半七を召シ捕たり」と呼はるにぞ、地内には仰天門の戸も※疾しや遲しと引明れば、詞「ヤア驚くまい方々、半七が殺せし、※今市の善右衞門は、國許に於て※銀役人と相並び、用金を奪ひ立退し、此度惡事殘らず顯はれ、召シ捕に來りし所、一昨夜半七に殺されたる由、當所の役所へ具に斷、此一件、和州に置て※仕置仕リ度旨、半七が命※申シ下し、立歸る此道筋コレ見よ、同類の庄九郎を生捕たれば、半兵衞に科はなし」と、地禁しめの繩引解けば、夢ではないか

○心に任せず　一しよに捜してやりたいが、役目柄さう思ふ儘にならず。
○彌猛心　勇みに勇む心。いやましに勇む心。これを矢竹にいひかけて、弓の縁語「張詰め」にいひつゞけた。
○花も實もある　名實相協ふ。「ひらかた盛衰記」に「花あり實ある武士と語りつたへて」。
○櫻井　上町の段に「茶事は和州櫻井の家中宮城十内と申者」とあつて、櫻井は十内の主家である。
○茜染　茜草で染めたもので、赤色のやゝくすんだもの。茜屋にちなんでかくいうた。
○艶容　本曲の題名はこの所の文から出た。
○豐に竹の春　本曲は安永元年十二月二十六日顔見世、同二年初春上演の豐竹座を祝福してかくいうた。
○目出度けれ　本曲は悲劇であるから目出度くはない。然るにかくいふは、太平の世を謳歌し豐竹座を祝福するのであつて、淨曲の終末に述べる慣用の文句である。

と四人が手を合せてぞ伏拝む、悦ぶ中にも母親が、「コレ／＼／＼親父殿、十内様のお情で、半七が命も助かるといの、書置を殘したからは、今宵死に行た半七、どふぞ命の在る中に、留めて下され宗岸様」、「西か東か何方じや」とあせるを聞て十内が、「何半七は死に出たとや、ヱ、遲かりし殘念／＼、役目なれば心に任せず、夜明ぬ内に早お行きやれ」と、科人引かせ立上る心は、實も十内が情ぞ厚き武士の、彌猛心を張詰て引別れてぞ出て行、花も實もある櫻井の、掟和らく國の名も、大和五條の茜染、今色あげし艶容、其三勝が言の葉を、爰に寫して女舞袖も豐に竹の春、唯安らかに永き代の盡せぬ、程こそ目出度けれ

おはん
長右衛門

桂川連理柵

解題

安永五年十月十五日から、初めて大阪堀江市の側此太夫座に上演された。作者は菅專助である。

本曲は二卷五段に分れ、就中下の卷「帶屋の段」が最も名高い。

作者

菅專助（菅原專助の略）は學僧知洞の戯作號であつて、法名を如達といひ、能登國羽咋郡南邑知村菅原明傳寺の第八代である。享保十三年能登に生れ、長じて京阪に遊學し、内外の典籍を渉獵し、また淨瑠璃を好んだ。安永八年十月二十八日寂す。壽五十二。著書に「勸導簿照」「芙蓉篇」「說法巍々篇」「言々海」「說法無盡藏」「說法百華園」等があり、又淨瑠璃では、彼一人又は他の者と共に作つた物を合はせて二十八種ある。其の中で「染模様妹背門松」（明和四年十二月上演）、「攝州合邦辻」（安永二年二月上演）、「傾城戀飛脚」（安永二年十二月上演）、「桂川連理柵」（安永五年十月上演）などが最も名高い。

出處

本曲より以前に、お半・長右衛門の事が淨瑠璃に仕組まれたものに、「曾根崎模様」（寶暦十一年五月大阪曾根崎新地豐竹座上演）、「朧の桂川」（明和初年以前の作、宮薗節）などがある。又歌舞伎では、「桂川妹背仇浪」（享保十三年十月大阪角の芝居上演）、「桂川仇白浪」（明和六年九月大阪大西の芝居上演）、「桂川連理柵」（安永元年五月大阪中の芝居上演）などがある。本曲はこれ等に據つて思考を凝らしたものであるが、實說は詳かでない。（お半・長右衛門の比翼塚は京極誓願寺内にある。）

「西澤文庫傳奇作書」拾遺上の卷、桂川の話の條に、「皇都虎石町の帶屋長右衛門・信濃屋おはんの跡を、町内の虎石町好者家穿鑿して百回忌の追善を營み遣はせしと云事、以前隣町に住む友より聞きし事あり。是も歌舞伎狂言とは違ひ、お半懷胎したれば身二つにせんと、丹波の親類へ預けんものと、長右衛門附添ひ夜深く立ちて、樫原へ行かんとする途中にて盜賊に逢ひ、旅用金著替等を奪ひ取られ、兩人共に絞殺され、跡の死骸を心中情死の體にして、桂川へ打込まれしなりとぞ、其後盜賊相知れお仕置になると聞く。此狂言は安永元年歌舞伎にて立[illegible]桂川と云、是を堀江市の側此太夫座にて安永五申年淨瑠璃に仕組み、桂川連理柵

とは云也」とある。

影響

本曲は操人形浄瑠璃芝居にも歌舞伎芝居にも屢々上演されて、現今も壽命を保つてゐる。そしてお半・長右衛門が石部の宿で、ちよつとしたつまらない一ふしから、悪人に詛はれて苦惱し、遂に死なねばならぬに至つた哀れを見せ、以て人を戒めてゐる。

上の巻

道行戀の乘かけ

登場人物の主な者

お半（信濃屋女主人お石の娘、十四歳）　長吉（信濃屋の悪手代、十八歳）　りん（信濃屋の下女）

長右衛門（呉服所帯屋の主人、三十八歳）

梗概

京都押小路柳の馬場信濃屋の娘お半は、振袖姿美しう著飾り、手代長吉・下女りんを連れて、伊勢参宮下向の途中關の追分で憩うた、折節隣家の帯屋長右衛門が遠州からの歸りに、此處を通りかゝつて邂逅し、相共に連立つて道すがらの景色を眺めて興じながら、石部の宿を泊りと定めて行く。

石部宿屋の段

登場人物の主な者

お半（信濃屋女主人お石の娘。十四歳）　長右衛門（呉服所帯屋の主人。三十八歳）　長吉（信濃屋の悪手代。十八歳）

梗概

お半・長右衛門の一行は石部に著き、定宿の出刃屋に泊る。かねてお半に懸想してゐる長吉は、夜更けてお半の寝室に忍び込んだ。お半は驚いて悲鳴をあげ、長右衛門を呼起して保護を頼み、遂に長右衛門と同衾してわりない戀に陷つた。（この誤から、終生憂愁の運命の糸に操られる身となる）

之を知つた長吉は嫉妬に胸を焦し、戀の敵長右衛門を罪に陷入れようとして、長右衛門が遠州侯から研ぎを頼まれて、持ち歸つてゐる素鞘の脇差の刀身を、己が錆刀と取替へた。これが遂にお半・長右衛門の身の破滅の導火線にならうとは、夢にも知らぬ彼等は何の氣もつかない。宿屋の者に起されて食事を終へ、驛馬の嘶き馬士の唄に、明け行く東雲の空を眺めて、爽かな旅路に出た。

信濃屋の段

登場人物の主な者

長右衛門（呉服所帯屋の主人。繁齋の養子。三十八歳）　お石（信濃屋の女主人）　お半（お石の娘。十四歳）

長吉（信濃屋の悪手代）　義兵衛（繁齋の後妻の連れ子。長右衛門の義弟。悪漢）　木間五六（長吉の兄）

お絹（繁齋の娘。長右衛門の妻）　りん（信濃屋の下女）

梗概

帯屋長右衛門は石部の宿屋で、お半と戀に落ちた事を深く恥ぢた。且つ自分はもと棄兒であつたのを、お半の亡父治兵衛に拾はれ五歳まで養育されて、隣家の帯屋繁齋の養子に遣られた關係から、信濃屋とは緣が深いので、お半の母の同意を得、お半を己が妻の弟才治郎に妻はす媒妁をしようとした。長吉はこの緣談を破つて、お半を己が妻にしようとする。

義兵衛は義兄長右衛門がお半と密通したのを吹聴し、また義兄が遠州侯から研ぎを頼まれた正宗の脇差を紛失した罪を被せて、義兄を自滅させ、以て義兄の妻お絹を己が妻とし、家督を奪はうと工んだ。かくて惡人同士の長吉・義兵衛共謀し、長吉の兄木間五六を侍に變裝させて信濃屋に行かせ、お半の嫁入を妨げさせた。お半は既に長右衛門の胤を姙娠してゐるので、深く恥ぢて死を覺悟し、母・長右衛門夫妻の勸める緣談を拒んだ。其の夜長吉等は、下女りんをお半と思ひ誤まつて捉へ去つた。

下の巻

六角堂の段

登場人物の主な者

お絹（繁齋の取嫁、長右衛門の妻）　義兵衛（繁齋の後妻の連れ子、長右衛門の義弟、惡漢）　長吉（信濃屋の惡手代）

長右衛門（呉服所帯屋の主人、繁齋の養子、三十八歳）　才治郎（佛壇屋。お絹の弟）　雪野（祇園の遊女、才治郎の愛人）

針の惣兵衛（雪野の兄。惡人）

梗概

お絹は京都の六角堂にお百度を踏んで家内の安泰を祈る。義兵衛後から來り、お絹が踏み終る時を見計らつて話し掛け、義兄長右衛門が祇園遊廓通ひするを語り、義兄宛のお半の艶書を見せて、其の放埒を詰りながらお絹を挑んだ。お絹は之を怒らせるも夫の爲ならずと思ひ、賺して別れる。

折から手代の長吉が香籠を提げて來り、「お絹樣」と呼掛けたので、お絹振向き、「これはよい所で逢ひました」とて、我が夫とお半との戀に就いて問うた。長吉は兩人が石部の宿屋で密通した事を委しう話したので、お絹は長吉の機嫌を取り、「其方がお半を慕つてゐる戀を叶へてやる上に、金も遣るから、石部の宿でお半と密通したのは我で、お半は我が妻だと言へ」と、賺して得心させた。そして「これは當分の小遣だ」とて、金を紙に包んで與へた。長吉は喜んでお絹の後に從ひ、誓願寺通柳の馬場を上り行く。

長右衛門は爲替の百兩を受取り、六角堂に立寄つて憩うてゐる。折節祇園の遊女雪野は本堂の後方から、己が愛人才治郎の通るを見て呼留め、「妾は田舍客に百兩で請出される事になりましたが、お前と別れて生きてはゐませぬ」と泣付き、才治郎も「さりとて請出す金はなし、私も生きてはゐない」と、互に手を取つて泣く。惣兵衛は妹雪野を尋ね來てこの樣を見、妹の首筋を摑んで引据ゑた。そして才治郎に向ひ、「雪野は百兩で田舍へ遣る。それが否ならさあ百兩出せ」と、責立てて打擲する。長右衛門は之を見かねて側に立寄り、惣兵衛を投飛し、「さあ其の身請金を受取れ」と、百兩を惣兵衛に投付け、受取證を書かせて毆打した。かくて各散り〲に別れる。才治郎・雪野は長右衛門の恩を感謝しながら、三條通を跡にして打連れ歸る。

評

この段、お絹が夫を思ふ眞心と、長右衛門が人を救ふ情心の美しさとを、麗しい文で描かれてゐる。之が爲次段に起る悲劇は一入哀れを增す。

帯屋の段

登場人物の主な者

長右衛門（呉服所帯屋の主人。繁齋の養子。三十八歳）　お戸瀬（繁齋の後妻。長右衛門の繼母。義兵衛の母）　義兵衛（長右衛門の義弟。お戸瀬の連れ子。惡漢）

お絹（繁齋の取嫁。長右衛門の妻）　長吉（信濃屋の惡手代）

繁齋（長右衛門の養父。七十歳に近い）　お半（信濃屋女主人お石の娘。十四歳）

木間五六（長吉の兄）　お石（信濃屋の女主人）

梗概

京都虎石町の西側呉服商帯屋長右衛門は、五歳の時帯屋繁齋の養子となつて家を繼いだ。姑お戸瀬は下女から繁齋の後妻に成上つた者で、其の連れ子義兵衛を愛し、母子結託して帯屋を横領しようとし、長右衛門を憎んだ。そして長右衛門が留守中に口ぎたなく長右衛門を罵り、且つ合鍵をもつて戸棚の引出を開けて五十兩を盗む。

長右衛門は遠州侯から研ぎを頼まれた脇差を調へて藏屋敷に持参すれば、刀身が鈍刀と摩替へてあるので、「今夜四つ（十時）までに詮議して差出せ」との嚴命を受け、途方に暮れて家に歸る。其の樣子を知つてる姑と義兵衛とは、心を合はせて長右衛門を責め、爲替金の百兩を祇園遊廓で費ひ果したものと詰る。併せて己が盗んだ五十兩をも長右衛門に罪を被せ、剰へお半との密通を發いて辱かしめた。お絹はかねて長吉に言含めてゐたので、「お半と密通した者は長右衛門でなくて長吉である」とい



桂川纈月見　初代豐國畫
（享和三年八月　市村座）

ふ。義兵衞あざ笑つて、長吉を呼寄せ吟味する。然るに長吉は其の密通を是認した。繁齋も長右衞門夫婦を庇うたので、紛擾は漸く納まつたが、長右衞門は憂苦に堪へず、妻に罪を謝して心に死を決する。

折からお半竊に來り、長右衞門に逢つて暗に名殘を惜しみ、書置を落して去つた。長右衞門は其の書置を拾ひ上げ讀んで驚き、お半の跡を追うて家を脱出で桂川へ走つた。

其の後に本間五六が來て、惡者に與した本心を打明けたので、お戸瀨・義兵衞・長吉の陰謀發覺し、三人共に搦められる。その際お半・長右衞門が居合はさないのに氣付き大騷ぎとなつた時、桂の里の百姓等駈付けて、兩人が氷が淵に溺死して居るを知らせた。

評　色の道は聖人君子も深く其の誘惑を恐れた。お半・長右衞門は誘惑の好機會に遇ひ、煩惱に打克つを得ないで、惡者等の乘ずる所となり、遂に死を選ばねばならぬ深刻な憂苦に沈んだ。そしてそれに絡む各人の心々を巧みに書分けて、因果應報の理を示した。中にも心も姿も美しいお絹や、道理の能くわかつた繁齋や、氣の毒なお半・長右衞門の哀話が、極めて自然的に進展して戲曲構成術の妙を得、平易流暢な筆に成つて人の胸を打つ。

〇桂川連理柵の外題名に、お半・長右衞門が連理の契を結び、桂川に入水して情死を遂げ、その身が樹にかゝつたといふに據る。連理とは二樹相對し脈理を連接して生じること。以て夫婦の契をいふ。[illegible]
〇柳の馬場　京都市中京區にあつて南北に通じる街。
〇押小路　[illegible]

帯屋の段

柳の馬場を、押小路、軒を並べし、呉服店、現銀商ひ掛硯、虎石町の西側に主

○掛硯　掛寳を掛硯にいひかく。「掛硯」とは掛子のある硯箱で、引出の附いてゐるもの。（見索引）
⦿虎石町　虎石をいひかく。「虎石町」は押小路[illegible]にあつて、そこにある石の狀が虎に似てゐたので町の名となつたのであるが、[illegible]「虎石」は近江國高島郡から産出し、虎斑のやうな模様があつて[illegible]「掛硯虎石町」といひ續けた。
○井筒に帶　井桁の圖形なもの中に、帶の字を書いて[illegible]もの。
○掛直　暖簾を掛けと掛直にいひかく。
○内儀　他人の妻を呼ぶ稱。おかみさん。（見索引）
○目を貫はじ　大目[illegible]にらみ叱らぬ[illegible]
○皺　皺を引伸すに、老いの皺をいひかく。
○がんぢよう　[illegible]がんでう）かと、おや[illegible]、強情、頑固、[illegible]
○河東　京都祇園の遊女町は鴨川の東にある。（四條大橋の東こ）
○藏屋敷　[illegible]時代に諸藩若くは藩下の士や、その他大なる寺社では、其の領内から廻送した米穀[illegible]
○サイノ　「サレバイノ」の略。
○痒い所へ手の行く　ぬけめなく能く行届くをいふ。
○ぬるま　[illegible]

は帶屋長右衞門、井筒に帶の暖簾を掛直如才も内儀のお絹、氣の取苦しい姑に目を貫はじと襷掛け、洗濯物を引伸しの、皺は寄ッても岩疊な、母のお戸瀬は勝手を出「朝飯の箸下に置ッと駈出した長右衞門、もふ晝過ぎたに戻らぬは、又河東で飲居て居るので有、お絹、ちつと言はしやれいの」、「イヱ〳〵遠州の殿様から請取の脇差、研屋から來ると其儘、藏屋敷へ持ッて參られました」、「サイノ、脇差の研が出來ましたと持ッて往た斗りに、斯ふ隙が入ッて内の見廻しが出來るかいの、同し事でも弟の義兵衞めは、痒い所へ手の行やうに精出すのに。ヱ兄のぬるまに困つた」と、繼子を憎み實の子を、持テはやしたる贔負口、聞かねて隱居繁齋、數珠つまぐつて奥より出、「アヽお婆聞づらい。死れた隣の治兵衞殿が五つに成ル迄育られた長右衞門、無理に貰ふて家の根繼ぎ。死ンだ先ンの女房は、隣への義理が有ルと荒い詞も遣はなんだに、長右衞門が成人以後後妻に直つた身をもつて、連レ子の義兵衞ばつかりを大事にかけ、兄が事といふとがみ〳〵〳〵

○がみ〳〵　嚙みつくやうに言葉嚴しう責め立てるさま。
○持てはやす　ほめそやす。
○根繼ぎ　相續。あとつぎ。あととり。

がみ、ヱ、ちと嗜めやれ、嫁女、氣に懸けてたもんな」と、地女房に變はる佛性、「詞ヲヽ其結構を見込んでの、身代をさゝほうさにする長右衛門、隨分と可愛がらしやれ」、「アヽやかましや〳〵、お絹、隱居へ連レて行て、晝寐なとさしてたも」と、地負て居ぬ口逆らふは、後生の邪魔と繁齋は、裏の隱居へ嫁引キ連レ。フシ行と、戻ると一時に、義兵衛はとつかは内に入リ、「詞はゝじや人聞カしやれ、一昨日兄貴が取に往た駿河の爲替、まだ金を見ぬ故、合點が行ぬと飛脚屋へ行て問ふたれば、一昨日長右衛門殿に渡したと、爲替手形を出して見せた、すりや爲替の百兩は、兄貴が宙でくすねたに極つた」、「ヲヽそふで有ロ、戻り居つたら吟味して。親父殿への面當、ぐつといがめてよい樂しみ、今一つよい事は、昨日上つた濱松の五十兩も、金戸棚の合鍵して、コレ見やちよろり盜んで置イたは金の入ルわが身に遣りたさ、爲替の金をくすねたからは、是も兄めにぬり付ケる」、「出來た〳〵。此五拾兩はの、コレ斯う、〳〵」と囁く弟、兄長右衛門は棒鞘の一腰腰に差詰まる、難儀を何と投首し、しほしを歸る我ガ家の内、見るより戸瀨はゐんぐはん聲、一五町か十町有ル屋敷に半日の上かゝつて内の事は何に成レ、朝から藝子や、おやま狂ひ

○嗜め　「嗜み」の轉。つゝしみ。
○たもんな　給はるな。下さるな。
○佛性　佛様のやうな慈悲圓滿な性質。
○さゝほうさ　「ちや〳〵ほうちや」ともいふ。めちや〳〵。薄情。蓋し「散々放散」の義であらう。
○なと　なりとも。でも。
○とつかは　急ぎあわてるさまにいふ。按じるに足々飛びかはす義であらう。
○母者人　「母ぢや人」を古くから「母じや人」と書き、おのれの母を呼ぶ詞。母にてある人。(見索引)
○駿河の爲替　駿河國から送金の爲替。飛脚によつて送附されるものである。
○くすねる　窃に盗む。蓋し「くすむ」「くろずむ」「くろめる」と縁ある語で、心暗い義より出でたものであらう。
○いがめる　・歪。いぢめる。近松作「聖徳太子繪傳記」に「牛頭・馬頭の惡鬼が責めよかし、この婆がいかい、いがめてやる」。
○ちよろり　手はやにこつそり。
○棒鞘　刀劔の共鞘「しらざや」。近松作「長町女腹切」に「下人に持たせし風呂敷より棒鞘の一腰を取出し」。
○差詰まる　刀が[illegible]へられて差詰まると、刀を腰に差しとをいひかく。
○難儀を何と投首　[illegible]
○投首　[illegible]

藥投首ともいふ。
○やんぐわん聲　「やぐわん聲」(藥鑵聲)に「ん」の添加した語。石原に藥鑵を引く時の音のやうに騷がしい聲。鋼鍋聲。近松作「傾城酒吞童子」に「還手の鍋が、藥鑵聲」。
○お山狂ひ　遊女の色香に迷うて、遊興にうつつをぬかすこと。「お山」とは妓女をいふ上方詞。「蓼子」といふも遊女である。後に註した。序に云、祇園新地の繁昌は安永以後である。
○氣張　さはり。遊興に氣を張り心をうちこむこと。
○しやら聲　高聲ごゑつて、氣障りな聲の意。近松作「傾城酒吞童子」に「しやら聲に上(かみ)する女子の取廻し」。
○ひだるい　干意の義であらう。饑ゑるをいふ。ひもじい。「倭訓栞」に「ひだるし=武備志に肚餓の字を讀せり、腹の乾たる意なるべし」。
○おましや　召出せよや。たべさせよや。
○とむね　胸(とむね)を衝(つ)くこと。ぎつくり胸にこたへること。
○折角　わざ〳〵。(二)語、後漢の郭林宗が雨に逢うて巾角の折れたのを、時人殊更にまねて巾角を折…ここは…にいふ。
○ぬけ〳〵　拔々。巧言を以て欺き言ひ拔けすること。…作「…」に「…侍のぬけ〳〵とよう嘘をつかしやんす」。
○こて〳〵　ちよこ〳〵物をいぢるさま。この後の文に「佛壇の御明しは年寄役と繁齋が、こて〳〵燈(とも)しせごしめり居る」ともある。

も、あんまり張でござらふ」と、喚くは隱居の耳へ筒拔け、「又鬼婆がしやら聲は長右衛が戻つたか」と、お絹を連レて親繁齋、「さつきにも言ふて聞カすに、長右衛門さ、見りや嚙付やうに、近所の手前もちと思や、長右衛門も肚餓かろ、お絹早ふ飯をおましや」、「イヤ飯所じやない問はにやならぬ事が有ル、コリヤ長右衛門、一昨日取りに行た爲替の百兩、ドレ金見やう、爰へ出せ」と、言はれて胸の長右衛門、「イヤ折角參つたれど、先キの亭主が折節留守、金は明日請取ル約束」、「コレ〳〵兄貴、ぬけ〳〵嘘を言しやんな、おりやたつた今先キへ行たれば、金は此方に渡したと、爲替手形を出して見せた、ガそれでも此方請取ぬか」、「サア夫レは」、「金は明日の約束で、先キへ手形はやるまいがの」、「サア夫レは」、「コレ〳〵義兵衛詮議にや及ばぬ、もふ河東へ飛ンだじや有ロ、昨日上つた五十兩も心許ない。サア爰へ出して見せい」。「あつ」といふより長右衛門、巾着の鍵こて〳〵と金戶棚の引出し明ケ、「ヤアこりや五十兩の金がない」、どふした事と驚く夫、お絹も喫驚繁齋も倶に驚く呆れ顏、「ホ、、、ホ、、、ヲ、盜人たけ

○盜人猛々しい　盜人でありながら、潔白をよそほうて他に其の罪をきせるをいふ諺。一居所を白顯の詞。

だけしい、錠のおりた此戸棚。鍵持った者が出さいで誰が取ロ。是もお盗ミ遊ばしたの、ヲヽ天晴な家の根繼。親父殿の安堵で有ロ。嫁御嘸嬉しかろなふ」、「イヤ母者人夫レばかりじやない、まだ〳〵どめつそふな事が有ルはいの、隣の娘お半と、兄貴が懇して居ると近所から言ひ立テれど、いとしなげに兄貴に限つて、猥なと言はふか、大人げないそんな事、よもや有ルまいと思ふたが、違ガひないはコレ此狀、ヘヱ口の間ダは取ってのけて、伊勢參りの下向道、石部の宿の假枕今しも忘れかねまゐらせ候、どふぞ〳〵今一度、嬉しき御見を願ガひ上ゲ候、長様まゐる、お半より、ハヽアませたり〳〵小へげたれ」、「ヤアそりや大それた不義淫奔、兄弟同然といひ、恩有家の小娘をそゝなかし、嫁入の邪魔を能ふ仕たなア、コレ親父殿、なんとがみ〳〵言ふが無理か、水晶輪のやうな義兵衛、贔負口でござるかや」と、惡は惡でも當座の理詰、長右衛門は身に冷汗、親繁齋も詞詰り、「ヲヽ長右衛門、ヱヽ情ない事してくれたな、色は心の外とは言へど、あんまり闇のない取合で、おりや世間へ顔が出されぬ、嫁女の里へもどの顔さげ、どふ挨拶の仕やうが有ラふ、指をさされぬ帯屋の家、暖簾に泥をよふ塗つた」と、初めて

○お盗み遊ばしたの、嬉しかろなら　敬語を用ひて嘲りながら罵るさま、近松の「ひぢりめん卯月紅葉」を思ひ起させると同時に、この帯屋の段はそれより構想したものである。
○どめつさう　法外。「ど」は意相を強める爲に添はつたもので「どえらい」などの「ど」に同じ。
○いとしなげ　「いとしぼなげ」ともいふ。いとほしげ。かはゆさう。この所は、義兵衛が養兒を今まで信じてゐた事を母に語つて、傍に居る者に己が悪事を示さうとする奸智の詞。
○口　手紙の文の發端。
○石部　近江國にあつて草津と水口との間、東海道五十三次の一。
○御見　お目に懸ること。お目もじ。
○ませる　「まさる」（増）の轉。年齢の程よりは大人（おとな）びてゐるをいふ。老成する。
○小へげたれ　「へげたれ」は「へこたれ」といひ、腰ぬけ。ばか。「小へげたれ」は人を罵つていふ。
○大それる　[illegible]して思はぬ[illegible]る義。たいした[illegible]をはづれる。[illegible]もない。「[illegible]」に「たいそれた」[illegible]
[illegible]
○そゝなかし　「そゝのかし」の轉。
○水晶輪　[illegible]に「水精輪の地をならし」。
○色は心の外　[illegible]

聞た親の恨、胸に釘打ッ長右衛門、面目涙にくれ居たる、お絹は男の傍に寄り、「一途にお聞なされてはお腹の立ッも尤なれど、長右衛門様に不義はない、ありや相手が違ひました」、「コレ／＼これお絹女郎、今讀だをどふ聞しやつた、其上にコレ長様まゐる、貧乏ゆるぎもならぬわいの」、「サア其長様がきつい間違ひ、お半様の色の相手は、内の子飼の長吉おやはいな」、「ハヽヽヽ、ハヽヽヽこりや臍が石橋舞ふはいハヽヽヽ、まだ／＼と競り合より、長吉内にか、ちよつと來てたも、ちよつと／＼」と門口から、どやけば隣の内より長吉、疾しや遲しと走り來る、義兵衛は落著く布袋形、「コリヤ聞長吉、汝と其方のお半女郎と、懇して居るといやい、覺へないとさつぱりと言へ」、「コレ／＼コレ長吉殿、爰じや、／＼、ノ合點か、覺への有事言ふたがよい」と、お絹が目交呑込ム長吉、「皆様の手前も面目ないが、伊勢參りの戻り石部の宿屋で、お半様と女夫事、アイ、懇して居ますからは、お半様は私が女房」、「ヤイ／＼／＼そりや何

戀愛のことは常識では判斷できぬとの意。

○圖のない　方圖もない。度外れな。法外な。

○挨拶　禪語の「一挨一拶」などいふ語が挨拶とな[illegible]、普通に[illegible]意に用ひられる。

○指をさされぬ　他人に指ざし笑はれぬ、れつき[illegible]とした。

○胸に釘打つ　弱點をつかれて心痛する意にいふ諺。

○女郎　女。婦人。

○貧乏ゆるぎ　びり／＼とふるふこと。「貧乏ゆるぎもならぬ」とは、少しも動くことならぬ、ぬき[illegible]

○色　戀愛。

○石橋　能樂の「石橋」をいひ、「石橋」の舞は一人[illegible]、紅白の牡丹を栽ゑた石橋の邊りで、頭を振り廻[illegible]って、臍が宿がへする、臍がよれるなどいふに同じ。

○まだ／＼　[illegible]ぐづ。べんべんだらり。近松作「唐船噺今國性爺」に「口でふだふだ申さんより、我々が心底見せやうはあ[illegible]」

○じやく／＼　騒ぎ立てる。どなる。どよめく。西鶴作[illegible]きて笑ひけり」。

○疾しや遲し　疾きもなほ遲い心地する意。速に。すぐに。

○布袋形　七福神の一なる布袋和尚のやうな悠然たる形。小[illegible]い様をあらはし[illegible]ゐる。

○居るといやい　居るといふわい。

○目交　めくばせ（眴）。

ぬかす、コリヤやい、此狀、ナ、此狀に、長樣まゐるお半より」、「ヱ、義兵衞樣しちくどい、長樣まゐるは、おはもじながら此長吉」、「ヱ、何の事じやい、テモ藝氣のないやつ」と、義兵衞は天窓、かきむしる、見るにお絹は心地よく、「申か、樣、現在戀の本人が出たからは、夫に不義はござりませぬぞへ」、「ハテそりやもふ仕よ事がない、が爲替の百兩と五十兩は何處へやつた、サアサア長右衞門白狀せい」、「申し母者人、如何にも百兩の金は、私が惡ル遣ひ、なれど五十兩の金は存じませぬ、こりやどこぞに、合鍵した盜人めが」、「有ルなら出せ、其盜人は、サア誰じや、鍵を持ツてけつかつて、盜人は外に有、とは、佛のやうな義兵衞や此に、ぬり付ヶふと思ふのか、乞食の子やら、盜人の子やら、知れぬ捨兒の汝とは違ふ、素性正しい此方ら親子に科を着せふとする横道、サアノ\五十兩の行方を言へ、ヤ言はぬと斯じや」と棕櫚箒、振上ゲてりうノ\、肩腰分かず打ヶ据へる、「こりやあんまり」と駈寄ル、お絹、箒をしつかと動かさず、「ヱ、ノ\ヱ、お前はなア」、「何ンとした」、「何ンとしたとは胴慾な、如何に胤腹分けぬとて、そふ辱たらしうはせぬものじや、言はぬ大儀孝行なれど、お前方の氏素性

○しちくどい　執拗。しつこくくだくだしい。「しち」は「しち面倒」などいふ「しち」に同じ。
○おはもじ　「お恥かし」の文字詞。文字詞は、足利時代の女門、朝廷式微にして供御の物備はらない爲、女官等その名を言ふを忌みて、何もじという隱語から起つたこといふ。
○藝氣　藝道の心意氣。「藝氣のない奴」とは、長右衞門をいぢめる藝當をやる氣分のない奴の意。
○けつかる　有るくと居るの意にいひ、總て人の所作を卑しめていふ語。蓋し「かつつくばる」の約[illegible]
○横道　道に背くこと。不屈。近松作「大經師昔暦」上卷に「今日の内一貫目急度調へ進じませう、私[illegible]
○りうノ\　物を振廻す樣などをいふ副詞。「俚言集覽」に「りうノ\ー刀などふり廻す聲、又勢ひなどをいふ」と。
○胴慾　「どんよく」(貪慾)の轉。非道。むごいこと。(俚言集覽)
○お前方の氏素性　[illegible]

○あや 文句の道理の意より轉じて、[illegible]
「[illegible]」
○捨詞 [illegible]之を「すてぜりふ」ともいふ。[illegible]にもいふ。
○眞面目になつたる 本氣になつたる。精神緊張して決心したる。
○蟲を死なす 「蟲を殺す」ともいふ。癇癪をおさへる。
○ヤわれには。汝や撲つか 長右衛門の詞。
○イヽヤ 白状さするのぢや お戸瀬の詞。
○どつかして 「どやかして」の促音訛であらう。なぐらして。[illegible]前にある「[illegible]」の轉義であらう。「[illegible]」に「[illegible]」關西にて毆打すること」とあり、他の地方でもいふ。
○絲瓜 [illegible]絲瓜の皮は後に立たず不用なものとされ、[illegible]にここに附していふ。この所、[illegible]を聞いた詞で、力がある。
○ぼひまくる 「[illegible]」の訛、放逐する。

も、あんまりあやは拔けぬぞへ、サア言ひませふか、言はふか」と、腹立ち儘の捨詞、眞面目になつたる母息子、長右衛門は女房を引きのけ、「母者人に向ふて慮外な惡口、サ言ひやまぬか、置きや居らぬか」、「何言はしやんす、禮儀も人に由はいな、なんぼ結構にあしらふても、嚙分けの有る母御じやない、ヱヽわしや腹が立つ／＼／＼」と、身を顫はして無念泣、心根不便と引寄せて、「道理じや道理じや、ガコリヤ、親じやはやい親じやはやい、親といふ字で何事も、蟲を死なす胸の中、思ひ遣つてくれ、女房ども」と拳を握り、男泣き。「ナヽ夫／＼、親じや／＼、親に向かつて何を不足、コリヤ義兵衛、ちつと代つて箒の役、擲きのめして金の行方を」、「ヲツト合點」と棕櫚箒、振上る手をぐつと捻上げ、「ヤわれにはよふ擲かれまい、見事兄を汝や撲つか」、「イヽヤ弟が撲ついじやない、おれが名代にどつかして、金の白状さするのじや」、「イヤ白状も絲瓜もいらぬ、兄に指でも差たらば、此繁齋がぼいまくるぞ」、「コレ親仁殿、金を盜んだ長右衛門、なんで此方贔負する」、「ソレ夫が大戯けの親玉とやらじや、長右衛門は此家の主、百五十兩が千兩でも、我が物を我が遣はふが、撒き散らさふが心次第、

○づけ〳〵　遠慮なくなじりなどするさま。

○燒餅顔　餅を燒けば脹れる、また立腹するを脹れ顔といへば、これ等をいひかけて「脹れる燒餅顔」といふた。

○よごんしよ　ようござりませう。

○うせる　「おはせる」(御座)、「わせる」、「うせる」と轉訛した語。來る。「うせい」は來いの意。(見索引)

○せりふ　「せりいふ」(競言)の約であらう。理窟といふことにもいひ[illegible]、近松作「[illegible]女腹切」に「おやぢこのせりふなら、何處ぞ外でしたがよい」。

○出來合ひ　間に合はせ。當座。

○壺を被つた色事仕　「徒然草」第五十三段に仁和寺の法師が[illegible]を被つて[illegible]、満座興に入つたが、拔かうとするに拔けないので、[illegible]大笑[illegible]といふ「大笑」[illegible]に[illegible]。[illegible]「壺を被つた色事仕」[illegible]といふ。[illegible]こうして[illegible]、(文[illegible]に[illegible])、其の意をもいひかけた) その後が義兵衛母子にいはれるには、[illegible]色事仕といふのである。

●八方行燈　[illegible]を附け、うつはりなどに[illegible]行燈。

○こて〳〵　(既出)

○しめり居る　燈明の消えるに、女夫の涙に濕るといひかけた。

○尻が温り　腰がすわり。

○[illegible]　[illegible]。

夫を取つた盗んだと、詮議立て阿呆臭い、づけ〳〵物を吐かしたら、昔の飯焚お竹に追下げ、長右衛門女夫が草履直し、親子共に揉ちのめさせて責使はすぞよ」と、道を立てたる父親の、情に女夫は有難涙、親子は脹れる燒餅顔、「アヽ義兵衛草臥た、臺所で一杯せふかい」、「ヲヽ夫がよごんしよ、コリヤ長吉めうせい、汝にや大分せりふが有ル」と、弱みを見せぬ親と子が、跡に引ッ添ひ出來合の、壺を被つた色事仕、打チ連レ勝手へ入ル跡は、早暮かゝれば下男、燈す八方行燈の灯、佛壇の御明しは年寄役と繁齋が、こて〳〵、燈ともしめり居る、女夫の者を膝近く、一年〳〵尻が温もり、道も義理も知らぬ婆め、追捲るも合點なれど、七十に近い繁齋、女房の離別が眉目でもないと、堪忍の胸を摩つて居る、したが否と言はふが應と言はふが、近い内隱居へ呼取り母屋の事は構はすまい、女夫なから夫を樂しみに、煩はぬやうにしてたも、長右衛門も何ぞ角ぞ氣の揉める事も有ふ、此浮世に長ふも居ぬ己に、逆樣事など見せてたもんな、物の譬はアノ御明し、僅燈心一筋でも、油との持合で燈つて有、油は繁齋、燈心は長右衛門、暗いと言ふては搔立て、すり込ムと言ふては搔立て、段々と搔立てゝ〳〵、もがきあせ

つて燈心が無なれば、油が有ッても家は暗闇、其氣の細い燈心一本、高が町人の身の上で是が恥の立タぬとは、畢竟心が狭いといふもの、じつとこたへて氣を掻立てさへせねば、いつ迄も身は有明行燈、遠州の御用も相變らず聞ク様に、親に安堵を頼むぞやと、哺める様に箸折かゞみ、心は直實屈む腰伸して佛間へ入にけり、親の慈悲心身にこたへ差俯いたる夫の傍、言はんとすれど胸塞がり暫し、詞も出ざりしが、「申シ長右衛門様、道理は道理なれど、お前はきつう済マぬ顔じやが、必ひよんな思案やなど、怪我にも出して下タさんすなへ、姑御や小舅に辛い氣がねも辛抱も、お前といふ人有レばこそ、十年シ連添ふ女房の手前、立タぬ事も何にもいらぬ、おやま狂ひも藝子遊びも、それや殿達の器量といふもの、お半女郎と二人の中、ひよつと私が知つたかと、言譯にさしやんす媒約、愚鈍な者でも女房じやと思ふての心遣ひと、心じや拜んで居りました、其運根では

○したが　然し。
○母屋　家の中央の部分、本宅。
○たも　たまはれ。たもれ。下さい。（見索引）
○逆様事　親の末期を看るべき子が、親よりも早く死ぬることを逆様事といふ。長右衛門は死を覺悟してはゐないかと氣遣つてゐるのである。
○やど　「やたど」の誤か。
○恥の立たぬ　恥でござるの面目が立たぬの。「立たぬ」は「立たぬの」の略。
○掻立て　[illegible]いふ[illegible]燈心の[illegible]を[illegible]
○有明行燈　夜明け迄[illegible]燈火を「つ[illegible]ごう」又は「はつけうあんどん」といふ。◉「八[illegible]
○遠州　「[illegible]」遠州行燈をいひかく。◉「遠州[illegible]
◉箸折屈み　たゞ二人の兄弟又は姉背のことをいふ。ここは長右衛門夫妻のこと。ここの文は、「哺[illegible]」[illegible]にいひかけた。
○済まぬ顔　氣の済まぬ、即ち物思ひにくれた[illegible]
○ひよん　凶な意にいふ、いまくしいこと。[illegible]白石の說に、「俗に物の不レ好事を見てひよん六事と云ふ、凶字の華音ひよんとなれり」[illegible]
○[illegible]　[illegible]
○小舅　[illegible]

○立たぬ　義理が立たぬ。顔がつぶれる。
○おやま狂ひ　[illegible]女に[illegible]こと。[illegible]は妓女をいふ。（既出）
○藝子　[illegible]「宮川町の藝子岸野に[illegible]」ともある。
○媒約　長右衛門が媒酌人となつて、[illegible]郎と結婚させようとしたことは、「信濃屋の段」に見えてゐる。

なけれども、縁組を變改は、年端の行ヵぬ※アノ子でも若やお前の樂しみになりもせふかと心の奉公、わしや疾ふから知ッては居れど、悋氣所か顏へも出さぬは、※氣の毒がらすが※笑止なと結構な舅御や、意地くね惡い姑御の、耳へ入かと夫ゝが悲しさ、※私も女ゴの端じやもの、大事の男を人の花、腹も立ッし、悋氣の仕様も、まんざら知らぬでなけれども、可愛い、殿御に氣を揉まし煩ひでも出よふかと、案じ過して何にも云ず、※六角堂へ※お百度も、どふぞ夫ゝに飽れぬ様、お半女郎と二人の※名さか、立タぬ様にと願立テもはかない女子の心根を、不便と思ふて何時までも、見捨ず添て下ダさんせ」と、夫トの膝に打伏て〳〵どき立ッるぞいぢらしき、長右衛門も目を摩り赤め、「女房ども悉い、言やる事が道理だらけ、道理の無いは己が身一つ、去りながら百兩の金を色遣ひと言ふたは嘘、其方の弟才治郎が、死ぬるを助けた雪野が身の代」、「ヱヽそれはマア」、「サヽヽ、堅ふ此事言ふまいと思ふたれど、浮氣らしい色狂ひと思はれまい爲の言譯、嫁入のひへた詫じやと思へば、惜ふ思はぬ金替の百兩、又五十兩の盗人はしつかりと知レて有レど、詮議すれば不孝に成ル、此二口の譯は立てど、面目ないはお半が事、時のは

○アノ子　お半をさす。
○氣の毒がらす　相手の心を苦しましめ惱まさせる。
○笑止　興のさめること。轉じて、いたはしいこと。(見索引)
○私も女子の端　このところ夫を思ふ眞情あふれ、そしてつゝしむ心をよく寫してある。
○六角堂　頂法寺といひ、京都市中京區六角通東洞院西入にある。本尊は如意輪觀音、西國十八番の札所で、堂は六稜形をなし、今のは明治十年の再建である。
○お百度　百度まゐり。
○なさか　名無の義であらう。汚名。惡評。近松作「大經師昔暦」上に「澤山な家の貌、瓜の蔓の茄子もあればよその寃名なるが、是にはほうど困つたり、どうぞなかいなさかの立たぬやうに繕ひ取りやうあるべき」。
○ども　「手前ども」などいふ「ども」と同じく、一團の如く示す複數の接尾語。
○嫁入のひえた　[illegible]

○らつちもない　埒も無い。らつしもない。さんでもない。
○面が被りたい　恥かしくて顔を掩ひたい。顔むけが出来ない。
○過つて憚らぬ　一時の過ちはあつたが、今は改心して居るから、更に憚るところはない。「論語」学而篇に「過則勿憚改」
○とつかは　いそいでせかせかするさま。（見[illegible]引）
○たんのう　「たんぬ」足ぬが転じて「足んた」たんのうとなり、「たんのう」と訛りて名詞と成る。満足、充分。（堪能、堪納など書くは當字）。
○腹帯　妊婦の腹に締る帯。
○正宗　岡崎五郎入道と號し、相模鎌倉の刀匠で、[illegible]の人で、刀剣中興の祖神と稱せられた。（但し異説もある）。
○差添　刀に添へて差す短刀。わきざし。[illegible]

づみと言ィながら、埒もない事したと、我ヵ身ながらも愛想が盡き、連添其方に顔は上ヶて、言ふも言はれぬ身の誤り、美しう言ふてたもる程おりや面が被りたい、堪忍してたも、堪へてたも、然し是もさつぱり埒明ヶて仕舞ふたれば、何所へなりとも嫁入せふ、親父様の有難ひ意見といひ、ハテ過つて憚らぬ己が身の上、何にも案じる事はない、兎角是迄の事は、コレ過つた／＼、「エ、譯もない女房に何の詫もふ／＼此事はさらりと流して、久言出さぬ堅めの杯、わしや肴拵らへふ、一つ飲つてちとお休み」、「そんならそふせふ、ア、氣草臥かふら／＼眠たい、其間も一睡、ヤツトころりと轉る夫にあてがふ枕、蒲團打着せ女房は、勝手へとつかは行影を、蒲團の中より手を合せ、「不所存な長右衛門を男と思ふて辛抱する、心意氣の嬉しさ過分さ、千萬年も連添て、禮が言ィたいたんなふさせたい、取分て五つからお世話なされた親父様、末期の水も上ヶませず、道樣事の歎きをかけるは、不孝と言はふか道知らず、先刻の御意見お絹が心底、聞ヶば骨身を裂る、苦しみ、親父様の御料簡、お絹が心は捌けても、捌けぬ物はお半が腹帶、死しやつた治兵衛殿、お石殿へは恩を讐、其上屋敷へ持て行た正宗の差添

は、いつ摩替へられたも知らぬ贋物、贔負强いお留守居も、お國へ執成す詞はない、今夜四つ迄に詮議仕出せと、御料簡は付いたれど、何處を詮議も雲を闇、所詮生ては言譯立ず、死ふと覺悟極めたれど、親父樣やお絹が顏、名殘に一目と見に戻り、いよ〳〵女房に苦に苦をかけ、不孝に不孝の覆輪かける、此身は何たる大惡人、愛想もこそも盡果た、我身の上」と忍び泣キ枕も、漂ふ涙なり、同じ思ひを信濃屋の、お半は胸の憂さ辛さ、餘所目を包む振袖の、內を覗ひて能い首尾と、そつと這入て枕元、「長右衞門樣〳〵、今朝下さんした文の返事、ちよつと逢に參じた」と、ゆすり起せばとぼけた顏、「フウ お半か、返事に來たとは合點がいたか、「成程お前のおうしやる通り、得心して是切りに、とんと思ひ切りませふ」、「ヲヽ出かしやつた〳〵、それで互ィの身も納り、世間の噂もひとり止む、サア〳〵其心なら斯して居ると又浮名、ちやつと內へ逝でたもに、「アイ、アイ、私も是を限りに、さつぱり內へ歸りますが、お前は隨分お達者で、見納めに今一度顏を、よふ見せて下さんせ」と、抱き起して顏つく〴〵、見る目も明かれぬ雨やさめ、長右衞門も、此世の別れと、口へは出さねど心の內、暇乞ぞと抱き

○四つ　十時。

○雲を闇　雲を闇に掴むが如く、漠然として捕捉し難いをいふ。「彦山權現誓助劔」毛谷村の段に「知らない道を闇雲に尋ねましてごはります」。

○覆輪　刀劍などで器物の緣をとること。「覆輪かける」は、輪をかけるといふ意。

○愛想もこそも盡き果てた　「愛想もこそ盡き果てた」の意。「こそ」を「こそも」というて、「愛想も」の口調語にして重ねた。

○ひとり　ひとりでに。

○雨やさめ　「さめ」といふも雨のことである。小雨を「こさめ」、[illegible]を「[illegible]さめ」といふ類。「さめ」と[illegible]「雨やさめ」には、[illegible]を重ねて意を[illegible]、[illegible]いことと、[illegible]するに喩ふ。

○きな〳〵　くよ〳〵愛へるさま。「俚言集覽」に「きな〳〵＝女などの物おもふ體を云」。
○やくたいもない　「益體も無い」の義であつて、益體の體は、無體などいふ體と同じ語であらう。（「やくたい」を藥袋又は藥帶などの說もあれどいかが）。役にも立たない。らちもない。益もないにかかれこれと思ひ成す。
○衾　[illegible]な夫婦の床[illegible]いふ[illegible]を應用して、「鴛鴦の離れ得ぬ衾」といひつゞけた。
○桂の川　[illegible]「都名所圖會」卷四に「桂川＝大井河の流にして舟渡[illegible]
○蟲が知らす　心に奇妙な感覺がはたらいて未[illegible]する。
○四つ辻　[illegible]小路との交叉點のあたり（臥石町の西側）にあればか[illegible]いひ、「夜」をいひかく。
○看經　[illegible]ching）である。もと經文を默讀することであるが、後に誤つて鉦を鳴し讀經することにいふ。
○南無[illegible]

締め、「何にもきな〳〵思はずと、煩らはぬやうに母御へ孝行」、「アイ、今迄は能ふ可愛がつて下さんした」、禮は言はずに氣を揉まし、「ア、やくたいもない子じや、死別れではなし、緣は切つても朝夕見る顏、ア、いや〳〵、誰も見ぬ中、サア逝にや〳〵」、コレ逝にやいの」と突遣られ、名殘も鴛鴦の離れ得ぬ、衾を分けて出て行果は、桂の川の川水に浮名を流すぞはかなけれ、蟲が知らすか長右衛門、「アヽどふやらおかしい今の逝にやう、合點が行かぬ」と門の口、落た一通灯影に透し、「書置の事、扨こそな」と、駈出しても宵闇に、影さへ見えぬ四つ辻を、又駈戻つて見る書置、佛壇の間に繁齋が、看經の聲いつよりも、無常を誘ふ鉦の音、「南無阿彌陀〳〵、南無あみだ佛、南無あみだ、南無あみだ」、「お前と緣切り外々へ嫁入する心もなく、殊に只ならぬ此身、世間へ知れても私が恥はいとはねど、お前の名を出すが悲しく、お絹樣への詫言や母樣に叱られぬ中、桂川へ身を投げ候、お前は御無事で御夫婦仲好ふ、折々には一遍の御回向願ひまゐらせ候、ア、可愛や、突詰た娘氣で、蕾の花を散らさすか、皆此長右衛門がなした業じやわいの」、「南無阿彌陀〳〵、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀」、「嘸や母樣の

○江戸の兄樣　江戸店に居るお半の兄治助をいふ、お半の亡父治兵衛が生存中、治助は既に江戸に居た。

○因果は車の輪　原因あつて結果を生ず。因果應報は車の輪の如く、必らずめぐり來るといふ諺。

○宮川町　鴨川の東岸四條と五條との間にある傾城町。この町の妓女岸野は、因果の理を示す爲に假作されたものであらう。

○最期の一念　恩怨共に臨終の一念は無量劫の間相離れないもので、生れ代つても其緣を引く。「大智度論」に「一念五百生、繫念無量劫」。

○觀念　觀察想念の義。閉目沈思して心に想ひ浮べて悟ること。轉じて、あきらめること。覺悟すること。

○うつそり　空虚の意。うつかり。まぬけ。ぼんやり。

歎き力落しと存じ候間、江戸の兄樣を呼上し、朝夕の御介抱頼み上ゲ參らせ候、其方が死では猶もつて、生キて居られぬ長右衛門、一所に死ヌるが親御への言分け、ア、いかさま因果は車の輪、十五六年ン以前、宮川町の藝子岸野にのぼり、詰らぬ事で桂川へ心中に出た所、先キへ岸野が身を投げたを、見るよりふつと死後れ、人の知らぬを幸ィに其場を遁れ、今日迄は生キ延びたが、思へば最期の一念で、岸野はお半と生れかはり、場所も變らぬ桂川へ、我を伴ふ死出の道連レ、是こそ因果の罪滅ぼし、そふじや、〳〵」と觀念し桂川へと駈出す、道引違へ、本間の五六、門口覗き相圖の手拍子、長吉勝手を忍び出、「兄者人大事ない爰へ」と、懷ろより取り出す五十兩、「義兵衛から請取ッた約束の骨折賃、件の脇差持ッて來てか」、「ヲ、提て來た」と金に引替へ、「己や何にも譯を知らぬが、此脇差はどふした代物、骨折にさへ五十兩、義兵衛殿は能ふ出すの」、「ハテ其五十兩も根は合鍵した盜み物、此脇差は長右衛門が、遠州の殿樣から請ヶ取ッて來た誂へ物、戀の敵の意趣晴し、石部の宿屋で摩替へたはおれが細工、何とよいか」、「よいともよいとも、夫レを義兵はどふする積り」、「サア長右衛門のうつそりが贋とも知らず研

にかけ、今日藏屋敷へ持ッて往て、ゐらふ目玉を貰ふて戻り、今夜四つ迄に正眞を渡タさねば、どんなぼくが來ふも知れぬ、所で此正眞を、義兵衛が外で尋ね出したと藏屋敷へ持ッて行ッと、長右衛門は呉服所を上げられ、大方首も空へあがり物、義兵衛は褒美に一代の呉服所、是もよかろが」、「よいとも／＼、能ふも揃ふた畜生めら、ヤア、己や小さいから大坂の北濱に奉公、母者人の話で聞ヶば、親父殿は是の御隱居、繁齋様のお情で聚樂で八百屋商賣、其縁で汝迄お世話。七つの年に信濃屋へ奉公に遣つたも、繁齋様、所に惡ルの義兵衛めが贋侍を頼みに來たは、どふでも帶屋信濃屋の難儀の筋と推量して、惡ル者仲間へ這入つたも、此工みを聞ヵふ爲、其脇差はやつぱり贋物、正眞はコリヤ差て居る」と、開て長吉「ハア仕舞た」と、逃行ヵんづか掴み投げ、勝手を駈出る母・義兵衛、其脇差をと取附ッを、「ちよこざいすな」と右左り、どつさり轉りと投ヶ付ッれば、長吉も起立て三人一緒にむしやぶり附ッ、繁齋お絹も駈出て、「様子は聞ィた三人共括れ括れ」と言ふ聲に、「こりや叶はぬ」と三人は行方ヶ知らず逃て行、五六はお絹に五十兩、渡ヶせば悦び、「コレ／＼長右衛門様、金が出たぞへ、何處にじや」と尋

○目玉を貰ふ　にらみ叱られるをいふ。「ゐらう目玉を貰ふ」では、大目玉を頂戴するをいふ。
○四つ　十時。(既出)
○ぼく　僕即ち歩(「ぶ」)をいひ、捕手の下役人である。近松作「堀川波鼓」に「殿様の御勘當受け、ぶに首打たるる法もあれ」。
○呉服所　大名高家などの衣服を調進する所で、公用商人である。
○あげられ　召上げられ。とりあげられて。
○上り物　廢物。脇差は贋物であるから廢物とされること。それに首を刎ねられて空へあがり(獄首)をいひかけた。近松作「長町女腹切」に「脇差はいかい物、外に直段はするさい」。
○大坂の北濱　大阪中之島の北岸の地で、米穀取引商人の多かつた所。大坂の坂は、土に反るといふ縁起を忌んで、明治十九年頃から正式に大阪と書くやうになつた。
○是　帶屋をさす。
○聚樂　京都市上京區横堀町と智恵光院との間に聚樂(じゆらく)第跡が存してゐる。蓋しこの邊をいふのであらう。
○がんづか　「かんづか」の誤であらう。「かみづか」(髪束)の音便であつて、髻(もとどり)をいふ。
○ちよこざい　ちよこ／＼した才。なまいき。
○むしやぶり附く　「むさぼりつく」(貪附)の訛。しがみつく。

ぬ廻れば繁齋、五六、倶々尋ねる折も折、隣のお石がおろ／＼涙、「先刻にからお半が居ぬ故、尋ねて見れば此書置」、「エヽ」と皆々胸騒ぎ、「長右衛様も何處へじや知れ、ヤア／＼／＼」と俄の狼狽、繁齋は氣をいらち、「そちは早ふ其脇差遠州の藏屋敷へ、後日の言ひ譯證據の三人、追ッかけて引括れ」、「心得ました」と駈け行五六、門へどや／＼桂の百姓、「氷りの淵に二人の身投げ、引上げたれば見知つた顔、長右衛門様とお半様」、「ヤア／＼それは」と皆敗亡、あきれて結句涙も出ず、「男どもも女子どもも皆おじや／＼、氷りの淵が長右衛門様へ身を投げたといの」、「此方の者共も皆來い／＼、お半が長右衛門様で長右衛門がお半様じやといやい」、「エヽ、エヽ、二人ながら狼狽まい、高が氷りが淵と桂川が心中じや」と何を言ふやら分けもなし、「何分早ふ最期場へ」と百姓共に勸められ、家内の男女呼連れ／＼、泣に行ゥかや水鳥の、聲すみ渡る月影の桂川へと急ぎ行、哀れを筆に書留て治る御代の物語り話の、種と成りにけり

○おろ／＼涙　涙に目のうるむこと。「おろ／＼」は靄々の義、うるむ狀にいふ。
○知れ　「知れぬ」の誤であらう。
○桂　京都市下京區桂（もと葛野郡桂村）。
○氷の淵　桂川の渡のあたりの淵。本曲の題名は、互に契つたお半・長右衛門が桂川の淵に身を投げ、その死骸が流れて柵にかゝつたといふに據る。
○敗亡　失敗。窮すること。がつかり自失すること。近松作「心中天の網島」に「どうぞ助けて助けてと騒げば夫も敗亡し」。
○結句　つまり。かへつて。この語もと俳諧から來た。近松作「博多小女郎波枕」に「人は知らじと思ふこそ、けつく身の上知らずなり」。
○おぢや　おぢやれ。ござれ。おいでよ。
○氷の淵が…身を投げたといの　「氷の淵に長右衛門様が身を投げたといの」といふべきを、あんまり狼狽して言葉もしどろもどろになれる狀がよく寫されてゐる。
○お半が長右衛門様　お半様ぢや　狼狽して心の亂れたる樣見るやうである。この文句は名高く、往時兒童が遊戯する時などにも能く言はれた。
○月影の桂　月のことを月の桂ともいひ、支那の傳説に、月の中に高さ五百丈の桂樹があるといふによる。ここの文は、月影の桂を桂川にいひかけた。

新版歌祭文

久松 おそめ

解題

安永九年九月二十八日から、初めて大阪の竹本座に上演された。作者は近松半二である。

本曲は「おそめ久松袂の白しぼり」（正徳元年四月上演。紀海音作）、「染模樣妹背門松」（明和四年十二月上演。菅專助作）に據つて思考を凝らしたもので、二卷四段に分れ、就中「野崎村の段」が最も名高い。（「野崎村の段」にある灸すゑの構想は、近松作「今宮の心中」中之卷にある二郎兵衞・おきさが主人四郎右衞門に灸をすゑる場から得たものである。）

作者

近松半二の傳は「本朝廿四孝」の所に述べた。

出處

「今宮の心中」（寶永七年春竹本座上演。近松作）に、「歌瓦屋橋とや油屋の、油搾木の音に聞く、お染に染めし久松は、いつの時雨の一降、洗へど落ちぬ、戀衣、世に廣がりしあだし名を、餘所に歌ひし言の葉や」と見えてゐる。この近松の文は歌祭文の文句に據つたものである。

又お染久松の情死を脚色して歌舞伎に上演した最も古いものでは「心中鬼門角」（寶永七年春大阪荻野八重桐座上演）がある。又元文五年二月大阪角の芝居で、お染久松の情死を脚色した「三十三回忌袂白絞」を上演してゐるので、これから逆算すれば、おそめ久松の情死は寶永五年である。要するに寶永五年初春に情死した事實があつたのであらう。

延寶七年九月二十九日大阪東横堀瓦屋橋通り油屋新五郎の娘お染が二歳の時、丁稚久松に連れられて川邊に行き、誤つて溺死した。それが爲、久松は新五郎に叱られ土藏に幽閉されたので、久松は土藏の中で縊死したのを、情死したことに作り替へられたとの說があれども、どうもこの說は信じ難い。

影響

本淨瑠璃は其の後も屢々諸方に上演され、「野崎村の段」は、現今も大阪文樂座人形淨瑠璃芝居などに上演されて、生命を保つてゐる。そしてお光がその根深い愛著の惑から大悟して、尼となつた健氣な心は、彼の女に對して淚をそそぐ世の人人の心の

文化元年八月座本陸奥茂太夫によつて上演された「（増補）新版歌祭文」（作者佐川魚麻呂）は、文も筋も本曲と異つてゐる。又歌舞伎で名高い

中に生きて、我が婦道の上に幾久しう好教訓を残すであらう。

文化元年八月堺本陸奥茂太夫によつて上演された（増補）新版歌祭文（作者佐川魚麿呂）は、文も筋も本曲と異つてゐる。又歌舞伎で名高い「お染久松色読販」（鶴屋南北作）は、文化十年三月江戸森田座に上演された。

座摩社の段

登場人物の主な者

山家屋佐四郎（谷町の質屋。年三十一）　お染（瓦屋橋油屋お勝の娘）　久松（油屋の手代）

小助（油屋の悪手代）　法印（売卜者）　勘六（無頼漢）

鈴木彌忠太（浪人）　岡村金右衛門（勘六一味の無頼漢の偽名）　お傳（油屋の下婢）

梗概

山家屋佐四郎は瓦屋橋油屋の娘お染に懸想し、座摩明神に参詣して、お染が靡くやうにと祈願してお百度を踏んでゐる。油屋の手代小助は相手代久松と共に、小倉屋敷の商銀一貫五百目を受取らうとして出た。その途中座摩の前で、佐四郎がお百度を踏んでゐるを見て、俄に腹痛が起つたと偽つて苦しみうめく。久松は小助が自分を陥れる陰謀を工んでゐるとは、神ならぬ身の知る由もなく、彼をいたはつて一人小倉屋敷に行つた。

そこで小助は鳥居前闇店の売卜者と共謀し、佐四郎を騙して金を取る。その上茶屋に引入れておごらせる。

この時お染は下女お傳を連れ、愛人久松を尋ねて座摩社に来る。折節久松が小倉屋敷から金を受取り、急いで帰るのに逢うて喜ぶ。之を見た小助は、豫て語らひ合はせてゐる浪人・無頼漢等に喧嘩させ、其の騒ぎに紛れて浪人をして久松の所持金を盗

ませる。尋いで藏屋敷の侍岡村金右衛門と僞名した一味の惡漢と共謀して、浪人が騙り取つた銀を奪ひ、各別れ去る。

野崎村の段

登場人物の主な者

久作（野崎村の農夫。久松の養父）　お光（久作の養女。妻の連子）　久作の妻
小助（久松の相手代。惡漢）　久松（油屋の手代。久作の養子。和泉國石津の家中相良丈太夫の子）
お染（お勝の娘）　お勝（瓦屋橋油屋女主人）

梗概

年の暮、野崎村の小百姓久作の娘お光は、母の病を看護してゐる。折からお夏・清十郎の祭文を語つて、繪草紙を賣りに來たので、久作は其の一冊を買つて看病の慰みにお光に與へた。そして久松の奉公先の油屋へ歳暮の禮に行くとて出た。

其の後に小助が久松を連れて來り、取次に出たお光に向つて、「久松は小倉屋敷から受取つた爲替銀一貫五百目をごまかした爲に主家から放逐された」とて、盗人呼ばはりして暴言暴行を極める。この時久作は寢屋川の堤から引返して駈戻り、小助を突飛ばし、「久松が騙られた銀一貫五百目、それを渡せば言分はあるまい」とて、投出せば小助は之を取納め、なほもへらず口を吐きながら大阪に歸る。

久作は「久松の戻つたを幸ひに、今日お光との祝言をさせよう」と語れば、お光が恥かしげに喜ぶを見て親心に嬉しく、浮き浮きとして奥に入る。（これからが名高い場面である）

お光は一生苦樂を共にする良人を得た事を喜び、いそ〳〵として祝言の支度に取りかゝる。折からお染が久松を尋ねて來る。



新版歌祭文　久作（八世市川中車）お光（六世尾上菊五郎）
久松（十五世市村羽左衛門）お染（七世澤村宗十郎）

お光はお染に逢うて久松の愛人であると知り、忽ち嫉妬に悶える。そして久松と並んで父に灸をすゑる間も、お染を無愛想にあしらつた。けれども遂に兩人の離れ難い心を察して、いづれも無事であるやうにと案じるに至る。こゝに於て今まで喜んだ祝言は、限ない悲しみと變り、けなげにも烏羽玉の黑髮を切り、法衣を纏つて尼となる。これを知つた家族の者もお染も、お光の心事に同情して涙に袖をしぼる。

　この時お染の母が尋ねて來て、外面に立つて様子をうかゞひ、お光の美しい心に感激して内に入り、小助が持歸つた銀一貫五百目を杉折に容れ、土産と稱してお光に與へ、お光の爲に泣く。かくて互に親の間に話がまとまり、久作とお光とに見送られて、お染母子は船に乘り、久松は駕籠に乘り、川と陸と堤傳ひに分れて大阪に歸る。

評

　喜悲哀樂錯綜する各人の心々を、麗はしい詞章で書分けてある。就中戀愛三角關係の一人となつて悶える少女お光は、其の初めは子供らしかつたが、忽ちけなげにやさしくも兩人の幸福を希うて尼となる。そして煩惱の絆を斷つてからは光風霽月の如くである。其の牢固たる精神は丈夫も及び難い所がある。吾人はお光のこの立派な態度に對して、強い感激を感じるのである。

　船と駕籠とで分れ行く戀の勝利者と、其の勝利者に幸ひあれと祈つて淋しげに見送る父子との情景は、巧妙を極めて、しみじみと深い感慨に打たれる。

野崎村の段

跡に娘は氣もいそいそ「日頃の願が叶うたも、天神樣や觀音樣、第一は親のお蔭、ヲヽ此樣な事なら今朝あたり、髮も結ふて置ふもの、鐵漿の付やう挨拶も、どういうてよかろやら」と、覺束鱠拵へも、祝ふ大根の共白髮、末菜刀と氣も勇み、手元も輕ふちよき／＼／＼、切ても切れぬ戀衣や、本の白地をなま中に、お染は思ひ久松が、跡を慕ふて野崎村堤傳ひに漸うと梅を目當に軒の端、供のお芳が聲高に「申し御料人樣、彼人に逢はうばかり寒い時分の野崎參り。今船の上り場で、教へて貰ふた目印の此梅。大方爰でござりませふぞへ」、「ヲヽもそつと靜に言やいなう、久松に逢ひたさに、來た事は來ても在所の事、目立つては氣の毒、其方は船へ早う／＼」と、追遣り／＼、立寄り乍越兼ぬる、戀の峠の敷居高く「物申お賴申しませう」と、言ふも怖怖暖簾越「百姓の内へ改つた、用が有るなら這入しやんせ」、「ハイ／＼」率爾乍ら久作樣は、内方でござんすかへ、左樣なら大

○娘　お光。
○天神樣　河内國北河内郡佐太天滿宮。
○觀音樣　河内國北河内郡西條村大字野崎にある野崎觀音堂をいふ。境内にお染久松の墓がある。
○共白髮　膾に大根を細長う刻み、夫婦共白髮になるよそごとの祝物として用ひる。
○切ても切れぬ　菜刀で受けていひ、且つ切らうとしても切られない惡縁に染まつたお染にいひかく。
○白地　戀衣の縁で白地といひ、「知らじ」をいひかけて、いつそ知らないでゐた方がよかつた、さすれば戀に苦しむこともないにの意をふくむ。
○堤　寢屋川の堤。
○梅を目當　田舍で家を探すには梅樹を目當によることに掛ければいふ。「問ふ人のしるべか妹の門の梅」の句もある。
○料人　孃。詳しくは三〇一頁「御料」の頭註に説いた。
○彼の人　久松。
○船の上り場　德庵堤の上流、野崎觀音の西南なる一つ橋をいひ、野崎觀音參詣者を乘せて、大阪間往復船の發着場。
○在所　在鄕で田舍。
○氣の毒　我と我が心をいためること。困ること。(他への同情の意ではない)。(見索引)
○内方　他人の家をさしこ、この家、この宅、この内、こなたなどいふと同じ意。「内方でござんすか

坂から。久松と云ふ人が、今日爰へて見えた筈、ちよつと逢て下さんせ」と、言ふ詞つき姿かたち、常々聞た油屋の娘は、お染と悋氣の初物、胸はもや〳〵かき交鱠、組板押やり、戸口に立寄り、見れば見る程エヱ美くしい、あた可愛らしい其顔で、久松様に逢はして呉れ、そんなお方はこちや知らぬ、餘所を尋ねて見やしやんせ、阿呆らしい」と腹立聲、心付ねば「ホンニまあ、何ぞ土産と思ふても急な事、コレコレ女子衆、さもしけれ共是なりと」と、夢にもそれと（不知）白玉か、露を帛紗に包の儘、差出せば「こりや何じやへ、大所の御料人様、様々と言れても、心がいたらぬ置しやんせ、在所の女子、と侮つてか、ほしくばお前に遣るはいな」と、やら腹立に門口へ、投ればほどけてはら〳〵と、草に、露銀芥子人形、微塵に散毀出した、中へつか〳〵親子連、出て来る久作「どうじや、鱠は出来たで有う、捨祝言の事婆が聞て、きつい悦、じやが年は寄るまい物、先刻のそつさもつさで、取上したか頭痛もするいかふ肩が痞へてきた、アヽ大儀の數は事は

[illegible]る。近松作「長町女腹切」上卷に「内方に居さんす半七殿に、一寸逢ひたうござりんす」。

○初物　[illegible]初めて、[illegible]

○もやもや　心くさくさとして腹が立つさま。

○あた　[illegible]「[illegible]」に「[illegible]、腹が立つ」[illegible]「あた」を用ひた。

○さもしい　みすぼらしい。あさましい。

○夢にも　露　「伊勢物語」の歌「白玉か何ぞと人の問ひし時、露と答へて消なましものを」の中の[illegible]

○白玉　白玉といひ、露といふも、小粒銀（豆銀又は小玉銀ともいふ）のこと。

○露　小玉銀をいふ。

○大所　大家（たいけ）といふ程の意。

○様々　敬語を重用して冷かし嘲るのである。[illegible]「[illegible]」[illegible]様さまとぞわめきける」。

○心がいたらぬ　委しく氣く心に至らない。

○やら腹立　やたらに立腹すること。近松作「[illegible]」に[illegible]の家出か」。

○はらはら　はらはらと散る貌。そして「はらや」をいひかく。はらやは水銀粉に明礬塩を和して作つ[illegible]「[illegible]」

○芥子人形　[illegible]い人形。

○香箱　香合ともいひ、香料を容れる器、[illegible]作つて[illegible]

○やつさもつさ　ごたくさ。小助を追拂つたことをいふ。

○[illegible]　[illegible]ここにいふ。

れぬものじやわいの」、「左様ならそろ〱、私が揉んで上げませうか」。「ソリヤ久松忝い、老いては子に従へじや、孝行にかたみ恨のない様に、コリヤお光よ、三里をすゑてくれ」、「アイ〱、そんなら風の來ぬ様に」と、何がな表へ當り眼、「サアサ門の戸びつしやりさしもぐさ、燃ゆる思ひは娘氣の細き線香に立つ烟、「アイ〱、きつう痞へア、親子迚遠慮はない、艾も肩癖も大摑にやつて呉れ」、「アイ〱、きつう痞へてござりますぞへ」、「そうであらう〱、序に七九もやつてたも、ヲツトこたへるぞ〱」、「サア据ゑますぞへ」、「アツ、〱ゑらいぞ〱、明日が日死なうと、火葬は止めにして貰いませう、丈夫に見えてももう古家、屋根も根太も、こりや一時に割普請ぢや、アツ、、、」、「ヲ、父様の仰山な、皮切は仕舞でござんす、ホンニ風が當ると思や、誰じや表を明けたそうな、締めて參じよ」と立つを引留め、「ハテよいはいの、晝中に鬱陶しい、ナウ久松久松久松、コリヤ久松、餘所見して居ずと、しか〱と揉まぬかいの」、「サア餘所見はせぬけれど、覗くが悪い、折が悪い〱、悪い」と目顔の仕方、「ヤ悪いの覗くのと、足に灸こそすゑて居れ、何處もお光は覗きはせぬ」、「サアアノ悪いと言ひましたは、慥か今日は塞

○老いては子に従へ　「大智度論」に「幼則從二父母一、少則從レ夫、老則從レ子」。
○かたみ　片身の義。互。
○三里　灸穴の名。膝頭の下の外方の凹い處をいふ。三里の灸は氣分を輕うする效驗があるといふ。
○風の來ぬ樣　灸をすゑる時、風があたると痛みが烈しいので、灸には風が禁物である。よつて風の來ぬやうにするのである。
○當り眼　當付（あてつ）けて見る眼。
○さしもぐさ燃ゆる思ひ　「後拾遺集」戀部、藤原實方朝臣の歌に「かくとだにえやは伊吹のさしもぐさ、さしもしらじな燃ゆる思ひを」。さしもぐさは艾のこと。「さし」はさしつける意で添はつた語。
○肩癖　肩から頸・胸にかけて筋肉の時々ひきつる病といひ、これを揉み治するより按摩のことをいふ。以て前文に「肩がつかへて來た」といひ「そろそろ私が揉んで上げませうか」とあるに應じる。
○七九　背部にある灸穴の數と、蓋し七曜九星にかたどつたものか。
○ゑらいぞ　痛い、苦しい、辛いといふやうな時にいふ。きついぞとか、甚しいぞとかいふ意。
○明日が日死なうと　老人のよくいふことで、[illegible]
○古家　老朽の身を古家に喩へる事は今もある。
○皮切　最初にすゑる灸。
○覗くが悪い　今そこで覗いてくれては困ると、[illegible]のである。
○塞り日　[illegible]

庚日、それに灸は惡い〳〵と言ふたのでござります」、「エヽ愚痴な事を、此樣に達者なは、ちよこ〳〵と灸をすゑ作りをする、そこで久作、アツヽヽエヽ何じやはい、汝が身達も達者な樣に灸でもすゑるのが、おいらへの孝行じやぞや」、「ヲヽそふでござんすとも、久松樣には振袖の美くしい持病があつて、招いたり呼出したり、憎てらしい、アノ病面が這入らぬ樣に、閾の上へ、大きうしてすゑて置きたい」、「コレお光殿、振袖の持病のと、いふ〳〵の耳こすり、はしたない事聞ては居ぬぞや」、「ホヽヽヽ變つた事がお氣に障つた」、「ヲヽ障らいじや」、「こりや可笑しい、其譯聞くぞへ」、「言ふぞや」と、我を忘れて諍を外に聞く身の氣の毒さ、振の肌着に、玉の汗、久作も持てあつかい、「アヽコリヤ、肩も足もひり爲るがな〳〵、未祝言もせぬ先から、女夫諍の取越かいやい、灸饗の代り、喧嘩の行司さすのかいやい、二人ながら嗜め〳〵」、「イヱイヱ構ふて下さんすな、今の樣な愛想づかしも病面めが言はしくさる」、「何をいふやらモウ〳〵兩方共おれが貰ひじや、コヨ中直しが直に取結びの杯、髪も結ふたり鐵漿もつけたり、湯もつかふて花嫁御を、コリヤ作つて置け」と打笑ひ、無理に納戸へ、連れて行、其

と思んだのである。[illegible]「伊[illegible]」に「[illegible]日[illegible]宣暦「[illegible]四手」[illegible]日[illegible]から日比二ケ日はようこしゆくこわがうそうじやうの日なる故に佛事によし嫁取によしがくもんによし」とある。

○作り　[illegible]

○おいら　「おれ(己)ら」の轉。自分ら。自分。

○振袖　お染をさす。

○病面　持病の面に譬へ、お染を憎んでいふ。

○閾の上へすゑる　人を入れぬまじなひである。早く人をいなさうとして下駄の裏に灸をすゑる[illegible]

○耳擦り　あてこすること。

⦿はしたない　不都合な。近松作「持統天皇歌軍法」に「[illegible]、はしたない女め」と。

○障らいぢや　「障らでは」の訛。障らではゐられるものかの略。障らずにゐられるものか。

○振　[illegible]の略。

○持てあつかひ　もてあまし。(見索引)

・灸饗　[illegible]に食べるもので、[illegible](餅を[illegible])と蒸米と蒸豆(黒豆を蒸[illegible])[illegible]いふ。但し以上の代りに菓子なども用ひることもある。

○貰ひ　[illegible]

○納戸　衣服・調度の類を納め置く部屋。

間遅しと駈入るお染「ア、逢ひたかつた」と久松に、縋付けば、「ア、コレ聲が高ふござります。思ひがけない爰へはどふして、譯を聞かして／＼」と、問はれて漸う顏を上げ「譯は貴方に覺えが有ふ。私が事は思ひ切り、山家屋へ嫁入せよと、殘して置きやつたコレ此文、其方は思ひ切る氣でも、私や何程でもえ切らぬ、餘り逢たさ懷かしさ、物體ない事ながら、觀音樣をかこつけて、逢ひに北やら南やら、知らぬ在所も厭ひはせぬ、二人一處に添はふなら、飯も炊かふし織り紡ぎ、どんな貧しい暮しでも私や、嬉しいと思ふ物、女の道を背けとは、聞えぬはいの胴慾」と、恨のたけを友禪の、振の袂に北時雨晴間は、更になかりけり、曇り勝なる久松も、背撫擦り聲ひそめ「其お恨は聞えて有ども、十の年から今日が日迄、船車にも積れぬ御恩、仇で返す身のいたづら、冥加の程も恐しければ、委細は文に殘した通り、山家屋へござるのが母御へ、孝行家の爲、能ふ得心をなされや」と、言へど答も涙聲、「否じや／＼私や否じや、今となつてそう言やるは、これ迄私に隱しやつた、許嫁の娘御と、女夫に成たい心じやの、是非山家屋へ行けならば、覺悟は疾から極めて居る」と、用意の剃刀取直せば、「先は短氣」と久松が、止めて

○觀音樣　野崎觀音樣に參詣。
○女の道　「貞女兩夫に見(まみ)えず」をさす。往時の道德は、たとへ密通であつても、一旦夫婦と思ひ定めたものは、之を變へるは女の道でないとされた。
○胴慾　(貪慾の訛。非道。無慈悲。(見索引)
⊙友禪　友禪染。
○振　振袖の略。(既出)
○北時雨　北山時雨ともいひ、京都は秋冬間、北山から時雨がよく降りくるによつてこの稱がある。ここでは晴と曇る涙とにいふ。
○船車にも積まれぬ御恩　舟にも車にも積まれぬ莫大な御恩。

も止らず、イヤ〳〵、其方に別れ片時も、何楽しみに生きて居よふ、止めずと殺して殺して、と思ひ、詰たる其風情、そんなら是程申しても、お聞分は御座りませぬか、添はれぬ時は死ぬるといふ、誓紙に嘘がつかれうかいのう、ハア達て申せば主殺し、命に代へて夫程迄に、思ふが無理か女房じやもの、叶はぬ時は私も一所に、お染様、「久松」と、互に手に手を取交す、悪縁深き契りかや、始終後に立聞く親、其思案悪からふ、と、言れてはつと久松・お染、騒ぐを押へて、ヲヽ、大事ない〳〵、マア〳〵下に居や、因縁とは云ひながら、和泉國石津の御家中、相良丈太夫様といふれこさの息子殿、聊の事で家が潰れてから、汝が身の乳母は己が妹、其縁で十の年迄、育て上げた此久作は後の親、草深い在所に置こより、智恵附の爲油屋へ丁稚奉公、それ程迄に成人して、商ひの道讀書まで、人並になつたはコリヤ親方の大恩、其恩も義理も辨へぬは、これ見や、先に買ふたお夏清十郎の道行本、嫁入の極つて有る、主の娘をそゝなかすとは、道知ずめ、人で無しめ、サこりや清十郎が噺じやわいの、疾から意見もしたかつたれど、今の様な事が有ふかと、それが悲しさ一日延、二日延しする間、降つて湧いた金の

○達て　是非に。しひて。
○石津　[illegible]の間。
○れこさ　[illegible]「それ」を「れそ」といひ「これ」を「れこ」と隠語的に倒さ詞を用ひる。[illegible]「れ[illegible]一種の倖詞である。ここでは「れこさ」はそのお歴歴といふ程の意に用ひた。
○視方　油屋の主人をさす。
○お夏清十郎の道行本　お夏清十郎の道行[illegible]「好色五人女」巻一、近松作「五十年忌歌念佛」などに見え、[illegible]清十郎の死は萬治三年四月十八日二十五歳であつたであらう。俗謡に「清十郎殺さばお夏も殺せ、生きて思をさそよりも」、「向ひ通るは清十郎ぢやないか、笠が[illegible]」に有名である。
○そそなかす　「そそのかす」の轉。（既出）
○降つて湧く　天より降り、地から湧いたやう[illegible]「降つかいかいて湧いたる忙しさ、お成座敷の替へ疊」。

○水呑百姓　貧乏な小作農夫。
○着類着殺　衣服類一切。「着そげ」は着物のいたみ穢けたもの、即ち弊衣である。近松作「心中天の網島」に「着るゐ着そげに[illegible]付けられぬ間に取返してくれうと」
○生さぬ仲　[illegible]養ひ母と繼子との間柄。久作は久松の養父である。
○水の出端　水の出端は盛んなれど驟て衰へる如く、血氣盛んな若者は思慮に乏しい意の諺。
○絲瓜の皮　絲瓜の皮は何の益にもならぬ如く、つまらぬものと意に介せざることの意の諺。
○戸は…口ぢやわい　諺に「人の口に戸は立てられぬ」。人の批評は防止できぬ意。
○身上　しんだい、資産。この久作の意見は道理が[illegible]備はつてゐて、諷戒中での名文であらう。
⊙心中　心はせよくて義理を守り意氣方よきことをいひ、また戀愛に關する眞實の心をいふ。
○不義　密通、姦通の意にいふ場合が多い。

揉め事、これ言立に暇を貰ひ分けて置くのが上分別と思ふから、引負の銀の工面、どの様に氣張つても、高の知れた※水呑百姓、僅かの田地※着類着そげ、お光めが櫛笄迄賣代なし、漸う拵へたさつきの銀、※生さぬ中でも親子といふ名があるからは、肉身分けた子も同然、可愛ふ無ふて何とせふ、コレお染樣ではない、此本のお夏とやら、清十郎を可愛がつて下さるは、嬉しい樣で恨めしいわいの、聞いての通りお光めと女夫にするを樂しみに、病苦をこたへて居る、アノ婆樣に、今の樣な事聞かしたら、何と命がござりませうぞいの、若い※水の出端には、そこらの義理も※絲瓜の皮と、投やつて此方樣と、いつ迄も添遂げらるゝにしてからが、※戸は立てられぬ世上の口じやはい、ヱヽアノ久松めは、辛抱した女房を嫌ふて、※身上のよい油屋の婿になつたは、アレ榮耀がしたさじや、皆慾じや、人の皮著た畜生めと、在所は勿論大坂中に指さゝれ、人交りがなりませふかいの、コレ／＼コレ爰の道理を聞分けて、思ひ切つて下され、申しコレ拜みますはいの／＼、是程言ふても聞入れず、親御達が滿足に産付けて置しやつた其體を、切裂いて、淺ましう死ぬるのが、女の道か※心中か、サ久松も其通り、※不義密夫の惡名受け、實

親の名を汚す計りか、世間の義理も主の恩も、むちやくちやにして仕舞ふのか、侍の子か人間か、返事次第で思案が有る」と、眞實親身の強意見、骨身に徹へて久松・お染、何と返事もないじやくり「是程言ふても返答の無いは、コリヤ二人ながら不得心じやの」、「ア、勿體ない、實の親にも勝つた御恩、送らぬのみか詐を掛けるも、私が不所存から」、「イヤ〳〵其方の科ではない、皆此身のいたづらから、親にも身にもかへまいと、思ひ詰ても世の中の、義理にはどうも代へられぬ、成程思ひ切りませふ」、「ヲヽよふ御合點なされました、私もふつつり思ひ切り、お光と祝言致しまする、そんなら其方も」、「お前も」と、互に目と目に叶せ合、心の奥情に白髪の親父「アノさつぱりと思ひ切つて、祝言をしてたもるか」、「何の嘘を申しませふ」、「娘御も今の詞に微塵も違はござりませぬか」、「久松の事は是限り、私や嫁入をするわいの」、「ヲヽ出來た〳〵、むくつけな親仁めと腹も立てず、能ふ聞入れて下さりました、晩の間も知れぬ婆に命、息の有る中祝言に濟んだと聞かして下さるが、大きな善根、善は急げじや今宵で祝さそ、お光お光」と呼立つる、声聞えてや病床より、母は漸々探り出で「親仁に嫁、久松も其處

○むちやくちや 「無茶苦茶」に同じ。[illegible]

○ないじやくり 「泣きじやくり」の音便。[illegible]

○送らぬ 報いぬ。

○むくつけ 気味の悪いこと。ぶいきなこと。[illegible]

○善根 善果を増長せしめる根本の善。慈善の所行。[illegible]

○善は急げ 諺。「毛吹草」に「善は急げ悪は延べよ」。

にか、待ちに待つた娘が祝言、嬉しうて嬉しうこ、此間にない氣色の好さ、大煩ひの上目迄潰れた因果人、佛樣のお迎ひを待兼ねたに、强顔い命があつたりやこそ、悦ぶ聲を聞くと云ふも、孝行な久松が蔭、ふつつかな在所生れ、心には入るまいけれど、末の面倒見て下されヽ賴みまする」と言ふ中も、痰火は胸にせき上せば「ヱヽ此寒いのに寝所にやつぱり居たがよござります、冷えれば惡い」と蒲團の上、抱き抱へて久松が、介抱如在納戸より、親子の中も丸盆に乘せた杯銚子鍋運ぶ久作「コレお婆、やつぱり寝ては居やらいで、したが島臺の無い代り、世話事の尉と姥も新らしい、目の見えぬは目出度秀句じや、ハヽヽヽ、ヱヱ目出度序に、此嫁は何處に居るぞい、お光お光」と尻輕に、立つて一間を差覗き「ハテ出ぐすみをして居るは、それでは果てぬ」と手を取つて「サア／＼、マア／＼嫁の座へ直つたり／＼、ヱヱ時に一家一門着の儘の祝言に、改つた綿帽子、鬱陶しからふ取つてやらふ」と、脱がすはづみに笄も、脱けて惜げも投島田、根よりふつつと切髪を、見るに驚く久松・お染、久作呆れて「こりやどふじや」と、言ふ口抑へて「コレ申し父樣も、お二人樣も、何にも言ふて下さんすな、最前から何

○痰火　熱氣あつて痰が烈しう出ること、及びその病。
○じよさい　「如在」であつて、「そんざい」(存在)と等しく、ありのままの意で、丁寧にせぬ意であらう。「じよさいなし」は疎略にせぬ、ておちない意。
○したが　であるが。然し。(見宗引)
○島臺　古の洲濱の遺形で、蓬萊島にかたどり、松竹梅や鶴龜や高砂の尉と姥などを作つた臺であつて、婚禮の席に飾る。
○尉　老翁。
○姥　老婆。ここの文は、島臺の無い代りに、通常[illegible]の尉と姥とを揃へるも新らしい思ひつきの意。
○目の見えぬ　秀句　[illegible]い人よしを「目出度い人」といふ[illegible]目は見えずも、言を信ずるから斯くいひ、頭韻法によつた地口。
○秀句　巧みにいひかけた言句。地口。
○出ぐすみ　出[illegible]んで出ぬこと。
○綿帽子　[illegible]に「今世婚禮に新婦の綿帽子といふものは、[illegible]門かづきのうつれるなり」と。
・投島田　[illegible]
お光の投島田は、島田の投げ落ちる意を含んでゐる。

○死ぬる…母樣の大病　お光が母に心配をかけまいとして、「母樣が死ぬる覺悟で居やしやんす大病」の意に、解されるやうにいひかへた。

○五條袈裟　三衣の一、安陀會の法衣をいひ、[illegible]のである。

○水晶の玉　水晶の念珠をきかせた。

○鈍　愚鈍。近松作「國性爺合戰」に「日本人はいかいどんなこと聞いてゐぬ」。「鈍臭い」「鈍氣(げ)」などと熟語にしてもいふ。

○何の死の　お光が「サ死ぬる覺悟で居やしやんす母樣の大病」と言うたのを、母は、お染・久松が死ぬる覺悟といふを言ひ直したものとは氣も付かず、[illegible]「何の母が死の」と言うたのである。以下久作も心の[illegible]

○とても　助詞の「とて」に「も」の添はつた語。[illegible]いづれにしても。

○唱名　佛名を唱へること。南無阿[illegible]

事も、殘らず聞いて居りました、思ひ切つたと言はしやんすは、義理に迫つた表向、底の心はお二人ながら、死ぬる覺悟でござんしよがな、サ死ぬる覺悟で居やしやんす、母樣の大病、どふぞ命が取止めたさ、私やもふとんと思ひ切つた、ナ切つて祝ふた髮形、見て下さんせ」と兩肌を、脱いだ下着は白無垢の首に掛けたる五條袈裟、思ひ切つたる眼の中に、浮む涙は水晶の、玉より清き貞心に、今更何と詞さへ、(詞)涙呑込み、呑込んで耐ゆるつらさ久松・お染、久作も掌を合せ「何にも言はぬ此通りじや〳〵、(詞)エヽ女夫に仕たい計りに、そこらあたりに心も付かず、蕾の花を散してのけたは、(地)皆おれが鈍なから、赦してくれ」も口の中、聞え憚る忍び泣「(詞)アヽ冥加ない事おつしやります、所詮望は叶ふまいと思ひの外祝言の、杯する樣になつて、嬉しかつたはたつた半時、(地)無理に私が添はふとすれば、死なしやんすを知りながら、どふ杯がなりませうぞいな」、「(詞)お光の何を言やるやら、女夫になりやるを此母も、悦こそすれ何の死の、ノウ親仁殿」、「そじやはいの、迚も此世は無い緣でも、せめて未來は、アヽイヤ未來までも變らぬといふ、(地)杯さそ」と立上り、口に唱名ぶつ〳〵と佛壇明けて取出す、花瓶の松に鶴

龜もあの世を、契る心の島臺ニサアサア、斯うしてなりと杯さすのが、せめてもの心ゆかし、ヱヽ言ひたい事だらけじやけれど、此樣な座敷には、食べ付けぬ此親父、三三くどうは言はぬが花嫁、一つ飲んで久松へ、アヽ目出度い〳〵、婆も嘸かし嬉しかろ」、「ヲヽ嬉しい段かいの、一世一度の娘が晴、定めて髮も美しう出來たで有ろ、さき笄に結やつたか」、「イヱ」、「そんなら兩輪か」、「ヲヽ兩輪共兩輪共、思ひがけなふすつぱりと、アイヤさつぱりと能ふ出來たはいの」、「ヲヽ親父殿の言はしやる通り、自慢じやないが髮は大抵上手じやござらぬ、ホンニ前方大坂行の土産に貰やつた薄の簪、今日の晴に挿しやつたかや、着物は取つて置き花色、加賀の裾模樣、それか」、「アイ」、「夫着て居やるか」、「アイナ」、「ヲヽ汝が身には能ふ似合ふぞいの、ならふ事なら鐵漿付けて、顏直しやつたおとなしさを、たつた一目見て死んだら、善光寺樣の御印文にも勝つて、未來は極樂往生、ホヽヽヽ、私とした事が、目出度い中で忌まはしいと、久松必ず氣にかけて、たもんなやいのと子に逢ふ、晴と盲目にそれぞとも、知らず悦ぶ母親の、心を察し誰々も泣聲せじと〳〵ひしばる、四人の涙八つの袖、榎並八ケの落し水、膝の

○心ゆかし　心やり。氣慰み。
○食べつけぬ　婚禮の式に尼となる杯は飲んだことがない。
○三三くどう　三三九度の杯に「くどう」をいひかく。三三九度は「貞丈雜記」に「酒は三三九度存むを祝ひとする故なり、九は陽數にてめでたき數ゆゑ、唐土にも九獻といふ事なり」と見ゆ。
○言はぬが花　諺。そして花を花嫁にいひかけた。
○先笄（さきかうがい）　頭髮を分ち笄のめぐりに卷付けて兩輪を作り、その髮さきを垂らし結ぶ方。町人農家などの嫁人の結髮に用ひた。
○兩輪　先笄「さきかうがい」の髮さきの垂れを上げた結髮。
○大抵上手ちやござらぬ　大概の上手ではない、大いに上手でござる。
○取つて置き　ふだんに著ないで取つて置きの晴著。
○花色　「はなだいろ」（縹色）に同じ。薄い藍色。
○加賀　「加賀絹」の略。（見索引）
○善光寺　信州長野市［illegible］
○御印文　［illegible］
ここがないと傳へられてゐる。
○としたことが　不似合な意にいふ。（見索引）

堤や越えぬらん、見聞くつらさに忍びかね、お染は覺悟の以前の剃刀、「南無阿彌陀佛」と自害の體、久作周章押止め、「コレ娘御何が不足で死ぬるのじや」と、聞き間違ふて娘ぞと、母は驚き「コレお光、待つて〳〵」と這寄つて、探る手先に五條袈裟、「ヤア此袈裟といひ此頭、どうして髮を切つたのじや、譯を聞かして〳〵」と、急けば急く程咳のぼし、病苦に惱む母親を、見るに娘は猶悲しく、「母樣こらへて下さんせ、添ふに添はれぬしなになり、私や尼になつたわいな」、「ヤア〳〵ヤア、そんならさつきにから、母が氣を休めふ爲」、「ヲイノ、來世の緣を結ぶ杯、此世の緣は切れて有るわいの」、「ハア」、「ヲヽ、尤じや尤じや、其方は見えぬがいつそまし、傍でまじ〳〵見て居る心、推量してたもいの」と、言ふ聲咽に詰らせば、「サア〳〵其悲しみをかけるのも、此お染から起つた事、死ぬるがせめて身の言譯」、「イヱ〳〵、死なねばならぬ久松、わしから先へ」と駈寄るを、久作剃刀引つたくり、「これ程言ふても聞入れず、是非死にたくばおれが先へ、物の見事に死んで見せふか」、「父樣が死なしやんすりや、私も生きては居ませぬぞへ」、「ヲヽ娘出かしやつた、むさい在所に育つても貞女の道を辨へて、能ふ尼になり

○子に迷ふ暗き 「後撰集」卷十五、藤原兼輔の歌に「人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道にまどひぬるかな」と。

○榎並 大阪城の東北[illegible]。昔は淀川に沿へる地であるから、八ヶ所の溜し水があつたのであらう。

○しな 折。場合。「[illegible]しな」「歸りしな」などいふ「しな」も同じ語である。近松作「曾根崎心中」に「[illegible]も死なねばならぬしなとなるが」「萬葉集」に「した」とあるも同義語である。

○ヲイノ…有るわいの お光の詞。

○ハア 母の嘆息の聲。

○ヲヽ尤…たもいの 久作の詞。

○まじまじ まじりまじり。瞬(またた)きするさま。涙に曇る眼を[illegible]する意。

○ヲヽ娘…胴慾 母の詞。

○むさい きたない。近松作「百日曾我」に「今[illegible]」。「[illegible]袋」に「むさし＝汚穢の意にいへり」。

やつたなう、其處にござるが、噂に聞いたお染様か、お前様や久松を殺しともない計りに、蝶よ花よと樂しんだ一人娘を尼にして、出かしたといふ心の中、思ひ遣りが有るならば、なぜ存命へては下されぬ、折角娘が志※無足にするとは胴慾」と、こらへし涙一時にわつと計りに取亂せば、「ヲ、道理じや〳〵、サア〳〵どふあつても死にたくば、婆も娘も己も死ぬる、三人ながら見殺す氣か」。「サそれは」、「思ひ留つて下さるか、但し死なふか」、「サア〳〵〳〵」と三方が、義理と情と恩愛のしめ木※にかゝる久松・お染、「死ぬる事さへ叶ぬは、いかなる過去の報ぞ」と、前後正體泣き倒れ、咽返るこそ道理なれ、久作涙押ぬぐひ、「どふやら斯うやら合點が行たそふな、嘸母御様が案じてござらふ、大事の娘御、慥な者に」、「イヤそれには及びませぬ、母が慥に請取ました」と、言ひつゝ這入れば、「ヤア母様」、「ハアはつと計りに詞無く、差俯向けば、「コレお染、野崎參り仕やつたと聞いて、餘り氣遣ひさ、イヤ氣慰みに好からふと、跡追ふて來て、何事も殘らず聞いた、夫婦の衆の親切お光女郎※の志、最前からアノ表で、わしや拜んで計り居ましたわいなう、サア觀音様の御利生※で、怪我過の無かつた嬉しさ、是から直

○無足　料足などの無きをいひ、轉じて無效になた。
○ヲ、道理…氣か　久作の詞。
○サそれは　お染の詞。
○しめ木　締められることと、油屋の縁で油をしぼり取る搾「しめ」木とをいひかけた。近松作「今宮の心中」に「油しめ木の音に聞く、お染にそめし久松は、いつの時雨の一染」。
○女郎　女の通稱。「一代記」[illegible]
○利生　利益衆生。利益「りやく」。

にお禮參り、ホンニ是はさもしい物なれど、御病人への見舞の印、麁末ながら」と詞數言はず出過ぎぬ杉折を、供の男が差置けば、「マア／＼、冥加も無いお見舞、戴きまする」と取上る手元はづれて取落せば、中よりぐはらりと以前の銀、「サア先刻に渡した此銀を」、「ヲヽ表向で請取つたりや事は濟む、改めて尼御へ布施、せめて娘が冥加じやはいのふ、言譯が立つからは、久松も元の通り、戻つて目出度う正月仕や、取込の中長居も無遠慮、娘もおぢや」と手を引て、表へ出れば久作も、門送りして「是はマア／＼何とお禮を申しませふやら、お辭儀致すも却つて無躾、せめてものお土産に、折つて置いた此早咲、目出度い春を松竹梅と、お家も榮え蓬萊の飾物、幾久松が御奉公大事に勤めて此御恩、忘れぬ證」と差出せば、「ヲヽ心有げな此早咲、譬へて云へば雨露の惠を請ぬ室咲は萎むも早し香も薄い、盛りの春を待てといふ、二人への良い教訓、殊更内に口さがない者もあれば、何かに遠慮せねばならぬ、幸ひ私が乘つて來たアノ駕籠で、コレ久松、其方は堤、お染は船、別れ別れに往ぬるのが、世上の補ひ心の遠慮」、「左樣でござりまする共、お志じや乘つて往にや」、「娘は船へ」と親々の、詞に否も言ひ兼ぬる、鴛鴦

○さもしい　あさましい。おはづかしい。（既出）
○杉折　杉のへぎ板で作つた平たい匣をいひ、内に菓子などを入れてあるもの。「過ぎぬ杉折」は頭韻法。
○冥加も無い　冥加につきる。おそれ多い。「冥加」とは、冥々の中に常に神佛の加護を被り居ること。
○ヲヽ表向で　娘もおぢや　お染の母お勝の詞。
○布施　佛語。布は普、施は捨の義。僧に佛弟子[illegible]施し與へる金錢品物をいふ。「尼御へ布施」とは、[illegible]に[illegible]つた[illegible]への布施にするとの意。
○辭儀　辭退。遠慮。
○無躾　無禮。
○蓬萊　蓬萊島に擬して松竹梅などを飾つた臺をいひ、祝儀に用ひる。別に春興をもいひ、新年の祝に用ひる。
○幾久松　幾久しくを久松にいひかく。
○口さがない　口ぎたない。口やかましい。「口さがない者」とは小姑をさしたのである。
○世上の補ひ　世上に悪い噂の立たぬやうにとの補ひ、世上に悪評の立たぬやうに補ふこと。
○鴛鴦の片羽　相思の男女の別れ／＼になるに譬ふ。[illegible]質屋の段に「鴛鴦の片羽の別れ路や、[illegible]振袖にて」

○藪入　奉公人が主家より休暇をもらつて藪澤の故鄕に歸るをいひ、盆・正月の十六日は藪入の日である。
○水馴棹　水に馴れた棹の義。水棹「みざを」。
○船にも積まれぬ　介抱賴む　久松の詞。
○伏籠　鷄を伏せ置く籠。久松の乘る駕籠を伏籠と見立てた。そして鷄になぞらへて、啼く音を防ぐ伏籠の中に面を伏せる意。「面伏せ」は面目なきことをいふ。
○死んで花實は咲かぬ　諺。
○一本花　人の死んだ際、佛壇に樒「しきみ」を一本挿にする風習あるによつていふ。この詞が讖をなして、近い將來に悲しい實現を見るのである。
○枷杭　柵となり杭となつて行動を束縛するもの。（見索引）
○比翼　翼をならべ飛ぶ鳥の義、以て夫婦の愛の親密なるに喩ふ。白居易の「長恨歌」に「在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝」。（見索引）

の片羽の片々に、別れて二人は乗移れば、「夫なら久松もふ行きやるか、來正月の※藪入を、母も必ず待つて居る」、「兄様お健でお染様、モウおさらば」と詞迄、早改まるお光尼、哀れを餘所に※水馴棹、「※船にも積まれぬお主の御恩、親の惠の冥加無い取分けてお光殿、斯うなりくだるも前の世の定まり事とあきらめて、お年寄られた親達の、介抱賴む」と言ひさして泣く音※伏籠の面伏せ、船の中にも聲上げて、「由無い私故お光様の、緣を切らしたお憎しみ堪忍して下さんせ」、「ア、譯も無いお染様、浮世放れた尼じやもの、そんな心を物體ない、短氣起して下さんすな」、「ヲ、娘が言ふ通り、※死んで花實は咲かぬ梅、※一本花にならぬ様に、目出度い盛りを見せてくれ、隨分達者で」、「ハイハイお前も御無事で」、「お袋様もお娘御も、おさらば」、「さらば」、「さらば」さらばも遠ざかる、船と堤は隔たれど緣を引綱一筋に、思ひ合うたる戀中も、義理の柵情の※枷杭、駕籠に※比翼を引分くる心心ぞ、世なりけり

登場人物の主な者

久　松（油屋の手代。久作の養子。泉州石津の家中相良丈太夫の子）　お　庄（久松の乳母。久作の妹）　鈴木彌忠太（もと石津藩士であつたが、吉光の守刀を盗んで浪人となる）
勘　六（無頼漢）　小　助（油屋の悪手代）

梗　概

久松は泉州石津藩士秩禄千五百石の相良丈太夫の子に生れたのであるが、丈太夫が主君秘藏の吉光の守刀の紛失した責を負うて切腹した爲、久松は乳母お庄に救はれてお庄の兄久作に養はれた。そして大阪瓦屋橋油屋の手代になつた者である。

お庄は舊恩を忘れず相良家の復興を心懸け、吉光の守刀の行方を尋ねて、遂に鈴木彌忠太が盗んで谷町の質商山家屋佐四郎方へ質入した事を探知した。偶然大晦日の前夜久松と道に出會ひ、吉光の刀の有處の知れた事を語つて喜び、久松から一分金七八つを貰ひ、且つお染が久松に與へた起請文を預かる。かくてお庄は、久松に別れて長町に行く途で彌忠太に邂逅し、吉光の守刀を買戻さうとして話合つてゐる間に、久松から受取つた總てを掏摸に攫はれた。そして其品は餅搗になつてゐる勘六の手に渡る。

勘六は彌忠太・小助と出會ひ、勝曼院で待合はせるを約して分れ、一方、小助・勘六は勝曼院に來て掏摸等と喧嘩する。何れも劣らぬ悪漢仲間の事とて、野良犬の啀合ふやうに叫びつ蹴りつ撲ちつ擲きつ、やがて散り散りに逃げ去つた。

油屋の段

登場人物の主な者

お　勝（瓦屋橋油屋女主人。お染の母）　お　染（お勝の娘）　久　松（油屋の手代。お染の愛人）

長八（油屋の下男）　久兵衞（油屋の下男）　勘六（お庄の子。幼時三之助といふ。父に死別して家を出で、惡漢となる）
おさつ（油屋の下女）　お傳（油屋の下女）　小助（油屋の惡手代）
お庄（久松の乳母）　山家屋佐四郎（谷町の質商。お染を戀慕す）　鈴木彌忠太（浪人。惡漢）

梗概

大晦日の夕暮、瓦屋橋の油屋では下男長八・久兵衞・下女おさつ・お傳・日雇の勘六が忙しう働いてゐる。小助は賣笑婦と戯れて歸り、お庄は久松に逢ひに來る。佐四郎も歳暮の禮に來り、お勝に逢うてお染との婚儀の延び〳〵になるを詰り、結納の證として取替はした脇差一腰・金十兩の返濟を迫る。お勝は之を返さうとすれば其の金が紛失してゐる。小助は其の金を盜んでゐながら其の罪を久松に被せて、勘六・佐四郎と共に久松をいぢめる。

折節彌忠太が來て、前夜お庄の盜まれたお染の起請文を出して高價に賣付けようとする。この時彌忠太と掛合ひに出たお庄の昔語りによつて、勘六はお庄の子で、久松は勘六の爲には若旦那に當る事が知れ、勘六は心に前非を悔いる。そして心を飜して久松の味方となり、小助の罪惡を發き當身を以て氣絶させ、彌忠太の持つお染の起請文を引裂く。其の騷ぎに佐四郎は居たまらずして去る。

お染は母に說諭されて、佐四郎と結婚せねばならぬを悲しんで死を覺悟する。又久松はお染を今一目見たさに近寄らうとして人の足音に驚き、藏の中に隱れた所を小助に錠を下される。やがて久松は藏の中、お染は庭の井戸の中で情死を遂げた。勘六は彌忠太と渡り合つて、彼が差してゐる眞の吉光の守刀を奪つた。然し殘念な事には其の時は既にお染・久松情死の後であつた。

かくてお庄が吉光の守刀を石津藩主に返して久松を守立て、以て相良家の復興を計らうとした長年の苦衷も、お光が尼となつて、兩人に幸ひあれと思つた健氣な志も、皆水泡となつてしまつた。

伊賀越道中雙六

解題

天明三年四月二十七日から初めて大阪の竹本座に上演された。作者は近松半二・近松加作である。

本曲は「伊賀越乘掛合羽」（操芝居では安永六年三月二十六日から、初めて北堀江市の側豊竹此吉座に上演され、作者は近松東南である。また歌舞伎では安永六年十二月二日から、大阪中の芝居嵐七三郎座に上演され、作者は奈河龜助である。この狂言大當りで日數百四十五日打つたといふ。「傳奇作書」初篇に「奈河龜助は中古歌舞伎作者の祖にして……此人もと奈良の産にて、放蕩より家業を捨て、河内の緣家に食客の内も遊里戲場に通ふ癖ありて、遂に浪華に來つて作者道に染たり、奈河と呼ぶは、奈良と河内に身をさすらひぬとの洒落より附けたるとなり」云々）の改作であつて、十段に分れてゐる。其の中で第五の「郡山屋敷の段」の婚禮・饅頭娘、及び第六の「沼津の段」、第八の「岡崎の段」の煙草刻み・巳之助殺し・お袖道心の場が最も名高い。

實說

寛永七年七月岡山藩主池田忠雄の臣渡邊數馬の弟源太夫が、郡山城主本多甲斐守の臣河合又五郎に殺されたので、數馬は致仕して弟の爲に復讎の機を狙ふこと數年、望みを達せず。數馬の姉婿郡山藩の劍術師範荒木又右衛門（歳三十七）はこれを傍觀するに忍びず、致仕して數馬と共に又五郎の行方を尋ねた。

折しも寛永十一年十一月又五郎が其の一味二十餘人を從へ、奈良を發して江戸に赴く由を聞き、乃ち數馬及び其の若黨孫右衛門、又右衛門及び其の若黨武右衛門の四人結束して、七日拂曉又五郎の一行を伊賀上野の鍵の辻（伏見に通じる上野の町外れ）に要撃した。そして又右衛門は櫻井甚左衛門等數人を斬伏せ、殘るを追散し、數馬が又五郎と戰へる場に駈付け大音上げ、「又五郎一味の者は既に鏖殺にした。數馬力めよや」と勵ました。數馬は其の聲を聞いて勇氣十倍し、遂に又五郎を斬殪した。この敵討に數馬傷を負ふこと十三ヶ所、孫右衛門十ヶ所、武右衛門は重傷を負うて死し、又右衛門は無傷であつた。是時主君忠雄は既に歿し、嗣侯因幡藩主に迎へられて祿を給された。

本曲との關係は左の通り。

上杉顯定（鎌倉山内執權）——池田忠雄（岡山藩主）

和田行家（志津馬の父）——渡邊源太夫（數馬の弟）

和田志津馬（顯定の臣）＝渡邊數馬（忠雄の臣）　　石留武介（政右衛門の若黨）＝武右衛門（又右衛門の若黨）
唐木政右衛門（郡山藩士）＝荒木又右衛門（郡山藩士）　　澤井股五郎（郡山藩士）＝河合又五郎（郡山藩士）
池添孫八（志津馬の若黨）＝孫右衛門（數馬の若黨）　　櫻田林左衛門（郡山藩士）＝櫻井甚左衛門（郡山藩士）

以上事實に就いては、「徳川實記」「事實文編」「徳川太平記」「因幡紀要」「豪雄言行錄」など、その記すところ異同あつて正確を保し難い。「徳川實記」卷二十六に「寛永十一年十一月七日さきに松平宮内少輔忠雄が家士渡邊某を討て立のきし河合又五郎を、その兄數馬並近緣荒木又右衛門年ごろ復讐の志有て、ここかしこ搜索せしが、けふ藤堂大學頭高次が所領伊賀の城下にて行あひ、又五郎並その伯父河合勘右衛門及櫻井半兵衛を悉く討はたせしよし聞ゆ、數馬・又右衛門は忠雄が子庄五郎より人數を出して迎しめ、因州に引とりしとぞ」と見え、「武將感狀記」には、寛永九年正月二十四日池田の臣渡邊靫負が、同家中河合又五郎に討たれたと記してある。

また本曲中にある松葉屋の遊女瀬川（平作の娘お米）は、前述の史實には關係がない。もと江戸吉原の松葉家に瀬川といふ二人の遊女があつた。其の一人は奈良の醫師通仙の子に生れて名をたかといふ。通仙は源八といふ者の爲に陷れられて罪を獲、放浪の身となり大阪で客死し、たかは大阪の侍小野久之進に嫁した。然るに久之進は主命を帶び、大金を携へて旅に出で、江尻で賊の爲に殺された。たかは夫を亡ひ困窮して、遂に松葉家の遊女となり、瀬川と名乘る。かくて享保七年四月源八に邂逅して之を斬殺し、以て亡父の讐を報じた後は、淺草幡隨院の尼となつて、念佛三昧に世を終へたといふ。

他の一人は下總國香取郡小見川の農家に生れ、松葉家に賣られて瀬川と名乘り、書畫・俳諧・卜筮を能くした。後に豪商江戸屋宗助の妾となり、二十八歲で歿したといふ。蓋し半二はこの二人の遊女をつきまぜて、藝術描寫の對象としたものであらう。

影響

「伊賀越敵討」は戲曲に脚色されてからは評判益ゝ高く、忠臣藏・曾我兄弟と合はせて三大敵討と稱されるに至つた。淨瑠璃では、「伊賀越乘掛合羽」と綴合はせても屢ゝ上演されてゐるが、現今では殆んど「伊賀越道中雙六」に據つて上演されてゐる。

歌舞伎では、天明三年九月十三日から大阪中の芝居座に上演され、天明八年春には江戸森田座に上演され、其の後も屡〻上演されてゐる。また現今では改作して映畫にもなつてゐる。

第一、鶴が岡の段

登場人物の主な者

志津馬（上杉顯定の家來。和田行家の一子）　佐々木丹右衞門（上杉顯定の家來。志津馬の父和田行家の高弟）　澤井股五郎（上杉顯定の家來。鎌倉將軍の麾下城五郎の從兄）

本庄屋定七（鎌倉切通の町人）　瀨川（吉原松葉屋の遊女）

梗概

大永元年二月上旬、鎌倉鶴岡八幡宮奉幣の勅使が下著されるといふ通知があつたので、志津馬は社内警固の任に當る。折から丹右衞門が來て、懇に酒色を誡めて去つた。其の後に定七が來て貸金の督促をした。

股五郎は遊女瀨川を連れ込み、志津馬に逢はして身請を唆かし、其の身請金五百兩を定七から借りさせ、其の借金の抵當に、和田家の重寶正宗の刀を入れるといふ證文を書かせる。そして酒を勸めて志津馬が醉倒れるを見屆け、これで我が工み成れりと心竊に喜んで去る。

丹右衞門は「勅使御入り」と呼ばはる聲を聞き、志津馬いかにと案じて駈付け、この有樣を見て瀨川を追拂ひ、志津馬に代つて勅使を出迎へ、辛うじて事無きを得た。

第二、行家屋敷の段

登場人物の主な者

和田行家（上杉顯定の家老。劔術家。志津馬の父）　柴垣（行家の妻。お谷の繼母）　お谷（志津馬の姉）
唐木政右衛門（お谷の夫）　澤井城五郎（幕府の麾下。股五郎の從弟）　實內（行家の奴。惡人）
澤井股五郎（城五郎の從兄。行家の門弟。惡人）

梗概

鎌倉桐谷の行家邸では、召使の者等が掃除しながら、お谷の勘當された事などを噂してゐる。折からお谷が忍び來て母に逢ひ、政右衛門と密通して駈落した爲に、父の勘當を受けたのを悔み、赦免を乞うて其の執成しを賴む。其の際股五郎が來て柴垣に皮肉をいひ、室から出た行家に對つて言葉巧に、「志津馬が正宗の刀を質入したと聞きましたが、其の刀を讓つてもらひたい。お谷も我が妻に貰ひ受けたい」などといふ。病身の行家は、彼の奸計を見透して意見すれば、彼は「私が正宗の刀を奪はうとしたのは、其の實城五郎に賴まれたからだ」などと、いかにも懺悔改心したやうに見せ、行家の透を狙つて之を刺す。かねて股五郎に內應してゐる實內も、緣下に隱れゐて行家を刺殺した。股五郎は後難を恐れて、口を塞ぐ爲に實內を斬殺し、ついで正宗の刀を奪はうとして刀箱を開けば、刀は無くて丹右衛門の預り證文が入れてあるので、詮方なく逃出で、城五郎方に身を寄せて匿まはれる。

第三、圓覺寺の段

登場人物の主な者

佐々木丹右衞門（上杉顯定の家來。和田行家の高弟）　和田志津馬（和田行家の一子。お谷の弟）　お谷（政右衞門の妻）
池添孫八（志津馬の家來）　澤井股五郎（上杉顯定の臣。惡漢）　澤井城五郎（鎌倉幕府の麾下。股五郎の從弟）
鳴海（股五郎の母）　關・近藤等（城五郎昵近の侍）　吳服屋十兵衞（城五郎に出入の者。瀨川の兄）

梗概

股五郎は鎌倉圓覺寺に匿まはれ、澤井城五郎昵近の侍關・近藤・海田・荒川等に護られてゐる。上杉家では股五郎の不埒を怒り、彼の母鳴海を人質に捕へてゐる。

城五郎は丹右衞門を騙して、彼が和田家から預かれる正宗の刀を奪ひ、股五郎をば出入の吳服屋十兵衞に託して、肥後の相良に落さうと工んで其の手筈を定め、丹右衞門に書を送り、「股五郎を請取り度くば鳴海の命を助け、且つ正宗の刀を渡されたい」と申し入れた。丹右衞門は之を承諾した返信を使者に渡し、自身正宗の刀を携へ、鳴海を乘物に入れて網を掛け、從者僅に三人で護衞して圓覺寺に行つた。

鳴海はかねて丹右衞門に、「自ら死して股五郎の急を救ひたい」と頼んでゐたので、「我が子が殺されねばならぬに至つた起りは、この正宗の刀を念懸けた爲で、思へばこの刀は我が子の敵」と、言ひつゝ這寄つて正宗の刀を取り、素鞘を拂ふ手も見せず自刄する。其の紛れに丹右衞門は正宗の刀を摩替へて渡した。城五郎は之を正眞の正宗と誤認して受取り、股五郎を渡した。丹右衞門は之を縛して連れ歸る。

その途中で山門に隱れてゐる城五郎の伏兵に要撃され、股五郎を奪ひ取られて深手を負ひ、池添孫八に助けられる。そこへお

谷も駆付けて血路を開く。丹右衛門は正宗の刀を志津馬に渡し、無念の涙にくれながら、「お谷の夫郡山の政右衛門に助太刀を頼まれよ」と、懇に後事を遺言して斃れる。

第四、郡山宮居の段

登場人物の主な者

譽田大内記（郡山藩主）　宇佐美五右衛門（大内記の近習）　櫻田林左衛門（郡山藩の劍術指南）
源之進（能太夫）　杢助（大内記の奴）　能助（大内記の奴）
お谷（志津馬の姉。政右衛門の妻）

梗概

大和國郡山藩主譽田大内記は謡曲を好み、城下の八幡宮に奉納の能樂を催す。上に倣ふ下と、奴の杢助・能助までも能狂言の真似をして戯れる。能樂終つて大内記は、徒士近習に護られ、源之進と話合つて機嫌能く歸る。

其の途中で五右衛門は、自分の推薦によつて召抱へられた唐木政右衛門と、林左衛門との劍術試合を主君に願うて許され、社内清めの仰せをうけて引返す。

折節お谷が松蔭から五右衛門を呼掛け、涙にくれながら、「夫政右衛門がこの頃兎角不機嫌で、この刀を持つて五右衛門方に行けと、申しました」とて差出す。五右衛門之を取つて見れば、嘗て自分がお谷の親代りに、政右衛門に與へた長船の刀の切先に、お谷の離縁と試合を辭退する狀が結付けてある。五右衛門は驚き且つ怒り、「どうかして彼を出世させようと思ひ、且つは主君が

武道を嗜まれるやうになれば、御家の爲と思うて、林左衛門との試合をお願ひ申して聽屆けられた。然るに政右衛門が之を辭退するとは大腰拔けめ、一家中の物笑ひとなり、お勸め申した我も言譯がない、面目がない。最早堪忍ならぬ。お谷、和女は屋敷に歸つて、何氣なう夫をもてなされよ。我もやがて押しかけ、事によつたら勝負する。其の時は和女も尋常に自害を召されい」と、言葉鋭く、義に堅き武士の一徹に、お谷は勇まぬ心を取直して別れる。

第五、郡山屋敷の段

登場人物の主な者

譽田大内記（郡山藩主）　久方御前（譽田大内記の室）　宇佐美五右衛門（大内記の近習。政右衛門の親分）
唐木政右衛門（郡山藩の劍術指南。お谷の夫）　櫻田林左衛門（郡山藩の劍術指南）　お谷（和田行家の女。政右衛門の妻。志津馬の姉）
柴垣（お谷の繼母）　お後（柴垣の實子。お谷の妹。政右衛門の後妻となる。七歳）　お藏（お後の乳母）
石留武介（政右衛門の若黨）

梗概

唐木政右衛門の留守宅では、若黨石留武介が家事を引受けて忙しう働いてゐる。

隣家の侍婢ども連立つて來り、「今夜は政右衛門様の御婚禮だけな。お手傳ひに參りました」とて、互にお谷の離縁話や、今夜來る嫁御の事など、話に花を咲かせる。

お谷は物思ひに沈んで戻り、この様子を見て泣き倒れ、「今まで夫婦となつて、助太刀を心頼みにした夫との縁が切れては、最

早敵討の本望も遂げられぬ」と苦悶する。武介之を慰めて「否々拙者が命に代へても御離縁はさせませぬ。お前様のお腹の御子が平産なさつたら、切れても切れぬ血筋の縁。さて今宵の銚子に附ける蝶花形の折り様知りませぬ。お前様に頼みます」と、頼まれてお谷は、心ならずも蝶花形を折る。折から政右衛門の歸りと聞いて奧の室に隱れ入る。（これからが名高い「婚禮・饅頭娘」の段となる）

お谷の夫政右衛門は、志津馬の敵討の助太刀をしたくても、親の許さなかつた内縁の妻の間柄では、表向の助太刀が出來ないので、お谷を離別する。そして僅か七歳になるお谷の妹お後と正式の婚儀を擧げる。其の席でお後は、器に盛つた饅頭を欲しがり、又嫁入に持參した玩具を並べて人を笑はせる。

これより先お谷は離別された時、かくては親の仇討の助太刀を頼む望も絶えると、悲歎にくれて之を親代りの宇佐美五右衛門に語り、共に憤怨したが、政右衛門が後に迎へた妻がお後であると見て驚き、夫の底意を知つて感謝の涙に袂をしぼる。五右衛門も政右衛門を疑つてゐた心も解けて感激した。この時政右衛門は「御恩深い五右衛門樣にお頼み申しますが、貴方は明日切腹して戴きたい。其の譯は折角拙者を推薦して下されたが、櫻田林左衛門との試合に私が勝てば、主君からお暇のお許が出ますまい。よつて態と負けます。さすれば私を推薦された貴方の面目が丸潰れとなつて、お腹を召されねばならぬ事と存じます」と語る。さすが武士の五右衛門は快く之を得心した。

其の翌朝政右衛門は、林左衛門との劍術試合に負けて暇をごはうとした。然し賢君譽田大内記は、五右衛門の切腹しようとするを制止し、政右衛門の手練を賞めて增俸されたので、お谷の繼母柴垣は主君から政右衛門の暇乞のお許は受けられぬものと諦め、お谷。お後の行末と、志津馬の助太刀とを懇に政右衛門に頼んで自害した。其の後で主君から改めて政右衛門に暇が出で、信國の刀を餞別に賜はつた。政右衛門等は主恩に感泣し、御前を拜して退出する。

評

古來武士は、形式を重んじて義理堅く、恥を知つて清い名を汚さぬといふ事を、根本道德としてゐた。内縁の妻を離別して其

の妹の七歳の女兒と結婚式を擧げる「婚禮・饅頭娘の段」の如きは、其の極端に形式を重んじたものの一例である。情實は兎も角、表向の筋道が立たなければ、主君の御意に叶つた臣は、暇を請うても許されなかつたのみならず、親の仇討も承認されなかつたのである。

又政右衞門がその恩人宇佐美五右衞門に對して率直に、「明日切腹なされて下されい。その譯は拙者が明日林左衞門との試合に、負ける事を許して戴きたいので、從つて彼奴に負けるやうな拙者を、貴方が主君に推薦なされたといふ責任上、當然お腹を召されねばなりますまい」といふ。五右衞門は之を聞き、いかにも武士の本懷として直ちに得心した。要するに未熟者を見損つて推薦したのは、五右衞門の越度である、不德である、恥辱である。再び世に立つ面目が無い。それだのに生きてゐては、命を惜しんだと人に思はれる。武士が恥を忘れて命を惜しむと思はれる事は、死よりもなほ堪へ難い苦痛である。武士の道は、汚れぬ名を守つて死ぬを以て、素懷を遂げたものである、滿足の至りであるとの、信念の上に立つてゐるのである。かくして武士は四民（士・農・工・商）の最上位にあつた。

本曲のこの段は、往時の武士精神の一面を明白にしたものである。然し今時の人の中には、五右衞門が切腹を直ちに得心したのを、不可解なものと思ふ方もあらうとの婆心から、一言ここに辯じた。今は昔と異り、多くの人々は生活の壓迫に心身を苦しめて、著しく利己的となり、言譯さへあれば苟も免れて恥ぢぬ風はないであらうか。義理を守り恥を知る武士の精神は、現代の或人たちの思想の一面に對して、反省の好資料であらう。

第五　郡山屋敷の段の内（婚禮・饅頭娘の段）

心がけ有ル侍は、地を這ふ蟲も氣を許さぬ唐木政右衛門、伊達を好まぬ刀の柄前、人に勝れし袴の幅上屋敷より歸り足、武介手を突キ「申シ旦那、殊の外お隙入り、御用の品は如何體の儀でござりましたな」、「サレバノ\、此間から辭退する彼、林左衛門と武藝の試、明朝正六つ時御前において立チ合へと、押シ付ケて御家老の言イ渡し、今ン晩ン妻を迎へまする婚禮の中一兩日お延下されと、願ふてもいかな聞キ入レず、女房呼は私事、明日は延されぬ、と去とは心ない家老殿、此方は内へ氣が急く、もゝ尻に成ッて漸ウ只今、祝言ンの拵へ用意は出來たか、ヤレノ\知行取リにも飽果た、嫁の來る迄社杯脱で休息せふ、枕おこせ女子ども」、「アイ」と返シ事もさし足に、角を隠せし塗枕、そつとかたへに奥樣を、腰元がはりの、見へ隠れ袴は解ど胸解ぬ、鋭い常の侍肩衣、折ッてたゝんで取リ直す、詫い種とは

○地を這ふ蟲も氣を許さぬ　氣にかけるに足らぬ微細な事にも油斷せぬをいふ。「心がけある侍は蟻の背に目をさます」ともいふ。
○伊達　當借字。もと「立」であつて「伊達をする」「男伊達」などいふ伊達もこの義より出た語。轉じて華奢、容姿を繕ひ、また衣裳を着飾ることにもいふ。
○柄前　柄の體裁。「前」は男前などいふ前に同じ。
○人に勝れし袴の幅　大男なればかくいふ。
○上屋敷　[illegible]數ヶ所の屋敷を[illegible]ゐる、其の中の主人常住の屋敷をいひ、下屋敷に對する稱。
○品　事柄。「御用の品」とは御用件の意。
○六つ時　[illegible]
○婚禮　嫁娶の禮は夜（昏時）行ふからの稱。[illegible]
○桃尻　尻のおちつかぬこと。腰が浮きておちつかぬこと。[illegible]段に「馬など迎へにおこせられたに、桃尻にて落ちなむは心憂かるべし」。
○只今　只今歸つた。
○おこせ　よこせ。もてこい。
○さし足　音のせぬやうに足をつまだてて歩むこと。踏むには挿すが如く、上げるには拔くが如くし、さし足ぬき足と連ねてもいふ。お谷が歩くにも、夫の機嫌に觸らぬやうに遠慮するさまを示した。
○角を隠す　[illegible]これを枕の角を隠すにいひかく。
○見え隠れ　[illegible]袴のうしろに隠したり、機嫌を伺ひ案じる。
○肩衣　往時武家の禮服で、衣の上に着て、肩から背のみ被ひ、前に垂はかりで袖がない。下に半袴を着けたのを上下（肩衣・半袴）合はせて社杯といふ。但し肩衣は小紋形にしないで地質色合等に定まりなし。これを「かたぎ（氣質）」にいひかく。

○そりやあんまり　お谷が「そりや餘りひどい」と言ひさして、政右衛門の氣にさからはぬやうに語調を取直し、「イヱサア云々」と云ひつゞけたのである。

○しほ　はずみ。（見索引）

○堅藏　硬骨漢。粋（「する」）の利かぬやかましや。

○わせる　「おはせる」の訛。ござる。來る。

○ひつしよなく　「ひそなく」（穢無）の義。容赦なく。[illegible]

○彌左衛門哉　[illegible]の角張つた裁縫仕立。「嬉遊笑覧」卷二上・服飾の部に「八水隨筆」に[illegible]

見付ヶた夫、「ヤイ武介、あの女子は何者じややい」、「エイ〳〵、イヤ、あれは彼、今日お目見へに參つた、新參の女中で、ナ、ナ」、「ハイ旦那樣お目、かけられて下さりませ」、「フウ奉公人じやな、見かけから愚鈍そふな、不束な女なれど、遣ふて見てくれふ、コリヤヤイ、今夜は身共が女房を呼むかへる、祝言の給仕申付ヶる」、「アノ、嫁御とお杯の、其お給仕をせいとは、そりや餘りイヱサア、餘り、急な御祝言、不調法な私が」、「給仕得せすば奉公叶わぬ、立ッて歸れ」、「イヤ〳〵申し何でも御意は背きませぬ」と、下女に成ッても夫の内、離れかねたる心根を、察して武介が呑込む涙、「そふだ〳〵、奉公は辛抱が大事、何におつしやらふと、アイ〳〵と、そこらを程よふ、鹽梅加減、ドレお杯の用意せう」と、料理を機會に立ッて行ク、折柄「宇佐美五右衛門樣御出」と案内す、「ハア又堅藏がわせられた、誰ぞ羽織持テ來い」と言ぬ先キから心得て、勝ッ手覺へし女房の德、氣轉利して後から、着せる羽織をひつしよなく、「ヱ、子供ではないわい、差出女奴彼方へ行」と、睨付ヶられて、是非なく〳〵も、立ッ間せはしく入り來る五右衛門、彌左衛門哉の社衿こはばり切ッてむずと坐し、「政右衛門殿、今晩は

○發句　俳諧の第一句を發句といふ。發句のみを單獨に作る事にもなり、それを俳句と名づけるやうになつた。これは五七五調・十七字を本體とすべきである。

○果し狀　決闘申込の書狀。

○不便　たよりなき義。いとほしいこと。憫然。

○且は　一方では。

○器量　才器德量をいふ。人格技倆。

「其許に嫁入が有ルと承リ、御祝儀申に參つた、老人シの寸志ぞと御覽下され」と一ッ通を差置ヶば、「是は／＼、婚禮を祝しての、御發句でがな、先ッ以ッて忝し」と、押シ開き見て驚き顏、「フウこりや拙者への、果し狀でござるな、ハテ存じ寄ぬ、先ッ其意趣の次第はな」、「知レた事、科ない女房何故去ッた」、「ハア、拙者が女房を、拙者が去ルに、お手前樣が何故の御立ッ腹ヶ」、「イヤサ言ふまい、尤お谷は上杉の家中ゥ、和田行家が娘なれど、お身と密通して二人連レ、此郡山へかけ込シだ、浪々の體不便に思ひ、且はお手前が器量を見込、殿へ申シて有リ付ヵせたは此左右衞門、其上、勘當請ヶて親の無いお谷、身共が娘分シにして、改てお身にくれたれば、以前は行家が娘にもせよ今は身が娘、少しの見落し有ルとても、去られる義理ではないぞよ、一ッ旦の恩を忘れ外の女房持チ替へて、五右衞門を踏付ヶた仕方堪忍ならぬ、それ共、お谷に據ない科でも有ルか、それ聞ふ、返シ答次第、座は立タせぬ」と鍔打チ叩いて、詰かけたり、「イヤモウ重々御尤千萬シ、お谷に微塵も科はなし、去ッた仔細は別ッ儀ではない、飽ました、女房と云ふ物、は飽てからはもふもふ、片々時も持ッて居られる物ではござらぬ、サ、マ、、お聞なされ／＼、

御立ッ腹は御尤じやが、今拙者と討果されては五右衛門殿、殿への不忠に成ッませう、何故とおつしやれ、今ン日上より御意有ッて、明朝御前において、櫻田林左衛門と劔術の、勝負を致す此政右衛門、是迄拙者を推擧なされ、明日も勝負見ン分ンの役目を、仰付ヶらるゝ、其許が、此立チ合ィも致タさぬ中に、拙者を※さつふりと切ッてお仕舞なされて、殿へは何ンと、言譯はなさるるぞ、是非憤り晴ぬと有ラば、何ンと致さふ、武士の因果、明日の御前を勤メて、其後でお手に懸りませう、暫く※宥免下され」と、理に詰られてさしもの五右衛門、「コリヤ尤、意恨は意恨、御用は御用、明日迄は傍輩の役目、中よし、〳〵」、「御得心下ダさるか、ア、忝い〳〵、然らば今宵はこれに緩りと、御酒一ッ獻お上り下され、追ッ付ヶ新しい女房が參る、イヤ又其※器量のよさ、雪と墨との替徳古女房のお谷めは、不器量の上に、因果と早ふ子を孕で、正眞ンの※河豚の横飛、飽たを無理とは思し召な」と、愛想づかしを立聞キの、障子に齒形も入ル計、上る瘠を折しも有レ、嫁御樣早是ヘ、ヲ、待かねた早ふ通せ、女子共ソレ燭臺に火を點せ、嶋臺、銚子」と騒ぐ〳〵程、五右衛門が、むかつき顔、玄關ンより奥座敷直ッに、手繰の※鋲乗物對の、簞笥に染込ミの、

○さつふり　肉深く切込むさま。ざつぷり。「夏祭浪花鑑」第七に「切つた〳〵と人寄せの、聲を止めんと又ざつぷり、」。

○やうめん　勇者「ようしや」を勇者「ゆうしや」といへば、宥免「いうめん」も宥免「ようめん」に轉じたものか。

○器量　才器器量の義より轉じて容貌、顔容をいふ。

○河豚の横飛　「河豚の立泳ぎ」ともいひ、姙婦の歩行を形容して罵つた詞。

○鋲乗物　「守貞漫稿」に「金鋲は有徳、押鋲は黒塗に、鋲を打ちたる乗物」と見え、女用乗物である。

覆ひも愛持、介添女房」、「ヲヽ大儀〳〵、イヤ申宇佐美公、只今カノ妻が參つた、お悦び下され」、「アヽ、お目出たい儀でござる」、「御推量下され、貴公には御退屈、コリヤ〳〵あなたに御酒上いよ」、「イヤ拙者御酒たべると、胸が惡くござる」、「是は氣の毒、然ばお菓子」、「イヤサお構ひ御無用」、「ハテ堅くろしい何がな御馳走、ヤイコリヤ新參の女、何をうろ〳〵まい〳〵と、其不調法では祝言の酌は得せまい、お客人の癇癪、ソレお背中でも揉であげい」と、いふ程腹の、立波に音を泣千鳥、四海波」、「扨我等今晩の花婿、社杯を着る筈なれど、あたまから打解る樣に、角菱止て此儘の見參、サア〳〵、早ふ女共の顏が見たい見たい」、「ヲヽお心安い婿樣で、嫁御樣のお仕合、恥かしがつてござらずと、サアお出なされませ」と、乘物明れば綿帽子に、腰より上は、埋もれて、七つ計のいと樣御料、丈にも合ぬ裲衣ほら〳〵、帶につられて座敷にとんと、乳母是取つて〳〵」、「アヽ申其帽子、お杯の濟迄召てござれ」、「アヽイヤ〳〵鬱陶しからふ取てやりや、ドレ戀女房の御面相」と、帽子とらせば丈長も締らぬ罌粟の花嫁御、直す三方土器を乳母が持添戴せ、「婿君樣へ上まする」、「忝い

○覆ひも愛持つ　衣裳を覆ひ包んでゐる布に定紋などを染込んである、それが愛らしう見えるに、介添女房の愛嬌あるをいひかく。
○介添女房　花嫁に附添ふ女。
○まひ〳〵　舞々。うろつく貌。
○腹の立つ波に音を泣く千鳥　腹がでんぐりがへる程怒つて、聲を出して泣くといふに、立つ波に音を鳴く千鳥をいひかけ、その緣語四海波につゞけた。お谷には四海波どころではないことをうまく書いてある。
○四海波　祝言の席で謡ふ謡曲「高砂」の中の文、「四海波靜かにて國も治まる時つ風…君の惠みぞありがたき」。
○角菱　かどだつこと。ここの文は社杯のことははり角立つこと。繁文縟禮の意。
○綿帽子　婚禮の時新婦の被る眞綿の帽子。
○いと樣御料　いとしい御料人樣。可愛い嫁御料。御料は御料人の略、他人の娘の敬稱。詳しくは三〇一頁に說いた。京阪地方では女兒の敬稱に「いと樣」といふ。
○裲衣　搔取の義、打掛。近古婦人禮服の一で、帶をしめずに打掛けて着る小袖。
○アヽイヤ〳〵…御面相　政右衛門の詞。
○丈長　丈長奉書をたたんで作つた平元結。
○罌粟の　罌粟人形の如き。

忝い、女子共皆見てくれ、何とちよつこりと、何處に置ても邪魔にならぬよい女房で有ふがな、ハア嬉しい〳〵目出たふ一つ」、次の間より、「千秋萬歳の、千箱の玉」と謠聲、打掛の、袖に一ッ通取り乘せ、立出る、「ヤアお前は母樣柴垣樣」と、驚くお谷に目もやらず、政右衞門に打向ひ、「頑是ない此娘を女房に持ッて下され、此上の本望なし婿引出の此目錄は、主人上杉宇內樣より、悴志津馬に下されし、敵討御免の御書、いよ〳〵助太刀なされて下さるお心じやな」、「お尋に及ばず、承知致いて、罷有ル」、「コリヤ新參の女もよく聞け、身共には先妻が有ったれども、親の許さぬ密通、行家殿の勘當の娘、どれ合ィ女夫の悲しさは、表立って、婿舅と云ふ事はならぬぞよ、今郡山の扶持を戴く政右衞門が、よしみもない他人の、助太刀が成ルべきか、「コレ此お後は世間晴れた行家殿の忘れ形見、志津馬が妹に違ひない、此子と今祝言すれば、是こそ誠の婿舅、舅の敵、小舅の助太刀仕ると、殿へ御願ひ申さんに、よもや不屆とは思されまじ、彼方此方を思ひ計つて、科もない女房、去った謂れは此通り、義理と云ふ色に迷ふて、五年の馴染に、見替へた心斷分て政右衞門殿御立ッ腹ッの段々は、眞平眞平、

○千秋萬歳の千箱の玉　謠曲「難波」に「いやましに運ぶ御貢の、千秋萬歳の千箱の玉を奉る」とあつて、祝言の時に謠ふ。

○一通　賜物目錄の一通。

○引出　餞別。賜物。（見案引）

○どれ合　男女の私通。野合。「どれ」はどろける（盪）義、だらだらして締りなきをいふ。「和漢三才圖會」卷十に「男女私合曰姘俗云止禮阿比夫婦」て

○婿舅といふ事はならぬ　政右衞門とお谷とは親の許さぬ馴合ひ夫婦であるから、政右衞門とお谷の父和田行家とは、婿とか舅とかいふ事は表向にはいはれぬ。

○郡山　大和國生駒郡郡山町。

○お後　後妻の意よりつけた名。

○色　女を色といへば、お後をめとる事にいひかけた。

○たわい〳〵　たわいなし〳〵。とりとめもなきをいふ。（見案引）

○ヲ、サ　お取持ち　政右衞門の詞。

○色直し　婚禮の時、[illegible]

移る時、白小袖を脱いで色小袖に着替へること。之を怒れる顏色を和らげるにいひかく。

○二世　親子は一世、夫婦は二世、主從は三世の契といふ。

○やんちや　小兒の我儘をいうてむづかること。小兒がむづかる時にいやんいやんといふ。「やんちや」は「いやんおや」の約說である。

○とした事が　意外だ不似合と思ふ時などに附加へる詞。[illegible]

○三三九獻　三三九度の杯をいひ婚禮の祝杯。

○おから　酒をいふ。[illegible]よりの稱。「[illegible]」

○さもしい　あさましい。いやしい。

○廣蓋　[illegible]

○市松人形　[illegible]ひる土焼の子供人形。蓋し昔市松といふ[illegible]があつて、それに象つたよりの稱であらう。

○七つに成る子に濟ました　「狂言小歌」に「七つになる子がいたいけな事いうた、殿がほしいとおうた」で

○濟ましたしやんしやん　元祿以前から「三國一おや何々になり濟いたしやんしやん」といふ小唄[illegible]ある。「しやん〳〵」は事の決着した時にいふ詞。

○濱松の音はざざんざ　これも小唄であつて、[illegible]

御免ニ下され、我等もふ醉ました、何申そらたわい〳〵」と淚に、紛らす本ニ性の、言譯聞ィて手を合せ、「よふ去ッて下さんした、其誠をちつとの間も、恨だ女子の廻り氣を、堪忍して下さんせ」、「ヲ、サ、身共もよい年をして、疑ひの惡口面ニ目ない、天晴武士かな、政右殿、此祝言ニは敵討の門出、武士道も立チ家も立ッ、よい嫁を迎へられた、扨々目出たい婚禮、我等も共々お取持チ」と、始メの腹立チ打ッてかへ、一度に、顔の色直し」、お心が解たれば、彌、替らぬ政右衛門が、後チ連レの、お後や、二世かけて、其方の男、今ニ夜から抱て寢るぞや、コレ女房共〳〵」と言へど、お後は欠交り」乳母もふ去なふ」とやんちや聲」是は娘とした事が、嫁入リ早々去んでたまる物かいの、三三九獻未だ濟マぬ、殿御の怜歳く物じや」、「イヤおからはいや乳母あれ欲い」、「あれとは、ム、お饅頭かへ、さもしい奥様では有ぞ」、「イヤ〳〵道理じや〳〵、可愛ひ女房に何惜からん、併シ一つは過ギる、半ニ分ニは身か預る、是が夫婦の堅めぞ」と、持タせばほや〳〵饅頭聟、「ホンニ忘れた、嫁若の御持參ニのお道具」と、簞笥の引キ出し、廣蓋に盛たらへたる持遊びの、市松人ニ形風車ニ、七つに成ル子に、殿を持タせ濟マしたしやん〳〵、濱松の、音

⦿そもじ　「そなた」の文字詞。そなた。
○なさぬ中　まま親子の間柄をいふ。「なす」は「成」で生む義。
○ばし　語意を強める接尾語。（見索引）
○三國一　前文の「三國一」の小唄の語を分けて用ひた。
○富士　「三國一」の語によつて富士にいひつづけ、富士の氷山を郡山にいひかけ、「とけて」と、氷の解けると憤怨の解けるにいひかく。
○しめ〳〵　しめやか。「源氏物語」椎巻に「火たきやかすかに光りて、人げすくなくしめじめとして」。
○しし　「しと」（尿）の頭音をごらした小兒語。小便。
○と　とも。「繪にかくと筆も及ばじ」「行かずとよからう」などの「と」と同じ。
○切腹なされて下されい　この詞は切腹を要求[illegible]試合に負けることを許してもらつたなら、貴方は切腹なされる事であらうの意を鋭くいうたものである。
○いつぱ　「いへば」を「いつぱ」といへる例は謠曲に多し。
○六つ時　六時。

はざざんざ」、「座はかはらねど我夫を、夫と言はれぬお谷の心、思ひやつて居るはいの、そもじとはなさぬ中、ほんの娘の此お後と、見かへさした繼母が、婿殿に悪性根付たと、恨んでばし下さんな」「ア物體ない事ばつかり、私が縁の切るは、父樣へ不孝の言譯、政右衛門殿何時迄も、あの子と添ふて下さるが、家の爲志津馬が爲、私や死る迄去れて居るが、嬉しいわいの」と明し合、親子の貞心三國一、思ひは富士の郡山とけて、涙を汲かはす、酒宴に入しめ〳〵と、夜も更渡れば、稚子が「乳母もふ寢よふ」と乳さがす、「ヲヽ此お子はいの、七ツに成迄乳銜る子が有物か、殿御の手前も恥なされ」、「イヤ大事ない〳〵、是から新枕、腰元共、床を取身も追付寢る、コレお乳母、女房共にしゝやつて寢さしてやりや」と痛はり心付〳〵に、乳母のお藏が抱かゝへ、寢所に、伴ひ入ければ、政右衛門宇佐美が前に手を突、改て五右衛門殿へ御賴、申上たき樣子有、「サア〳〵、役には立ずと、身共も力に成たい、何なり共遠慮なふ承ふ、どうか〳〵」、「ハア御深切忝し、近頃申兼たれ共、其許樣には明日、切腹なされて下されい、其仔細といつぱ、明六つ時、櫻田林左衛門と、立合御渡

○手の内　手なみ。腕前。(見栄引)

○ひいき　「ひき」(引)の延。目をかけて力を添へること。贔屓と書くは當字。

○五臓　肝・心・脾・肺・腎をいひ、[illegible]一はらわた」の意にいふ。

されし、此勝負に拙者は負ますする、サア知レて有ル林左衛門が手の内、ぶつて打ち伏るは合點なれど、勝チば御前の御意に叶ひ、是より一ッ家中の師範仰付られお暇出ぬ時キは、助太刀の望が叶わぬ、御前において政右衛門、物の見事に打チ負ケ、これを越度に知行差上ゲ、浪人シして思ふ儘、小舅の助太刀致タす所存シ、時には拙者が鍛錬を、吹聴なされた其許様、負ケた我等が恥よりも、見損ふた、御恥辱、よもや生キてはござるまい、腹なされにや成リますまい、これ迄厚ふ御贔負下サされ、様々御恩に預りし、恩を仇と申さふか、腹切ッて下サされと、申出サば、五臓の血を一ッ時キに、吐よりも苦しけれ共、舅の敵が討チたさ、志津馬に本ン望遂げさしたい計に、斯様の不届キを申上ゲる、御赦されて下されいと、鬼を欺く政右衛門わつと、泣キたる、眞實に、感じ入ッて「ム尤々、命進シ上申、何ニよりも安い事、只殘ニ念ニなは林左衛門奴に、恥頬かゝせんと思ひしに、却つて此五右衛門面ニ目を失ふて、相果るは悔しけれど、貴殿シが本ニ望遂げたれば、敵の上で身共が恥も、其時キすゝぐ、暫しの無念シ、誠有ル侍の爲に、鐵腹一ッが役ッに立タば、身に取ッて大慶、大慶」と、死スるを常の武士氣質ニ「アレ聞キたか、主人ニに預るお命を、我々に下サ

さるゝ、有リ難いとお禮申せ」、「女房共とは言はれぬ※表、※親子共又云ぬが孝行、勝べき勝負を負ッるも義心ン」、「恥辱を取ッて御最期も、侍同士の、お情」と、互に禮儀の中々に、涙催す※八つの袖、時計の※七つせはしなく、「アレ早勝負の刻ッ限ン近し、身は先キへ登城致す、用意有レ政右衛門、貴殿ンのお暇出るを合圖に身共が切ッ腹、※御邊は直ク様、鎌倉へ出ッ立、冥途の出立ッ早參る」、「御苦勞、後刻ッ」と※式ト禮默禮、性急武士の短夜や、明ッる間を待ッ最期の門出勇んで、御前へ※三重時過ギて早明六つの、知ラせの太鼓、朝日輝ク大廣間、※大内記殿上段の褥に着ッ、座近ン習の武士、各見ン物ッ晴レ勝負、政右衛門は大の竹刀、櫻田は豫てより好む所の※作分利流、長柄を持ッて待かくる、雙方呼吸の隙間なく先ンを取ンんと、挑ミ合ふ、切先キ刃金はなけれ共、※鎬を削る心の眞ン劍ン、打チ合ふ數は※帳面ンに、見る人々も息を詰暫く時を、移せしが、豫て期したる、政右衛門櫻田が鑓リ先キを、あしらひ兼たる手の狂ひ竹刀からりと卷落され、鑓に※脾腹をウンと計リ、がはと倒れてうつぶしに、面ンも目なふこそ見へにけれ、勢ひ込ンで林左衛門、「ナント何れも御覽じたか、陰で廣言は誰レもいふ、まさか勝負にかゝつては、※生兵法が役に立ッ物ではない、此様

○表　表むき。お谷は離縁した形式なれば、表面では女房とは言はれず。
○親子　五右衛門とお谷との關係をいふ。前文に五右衛門の詞に「身どもが娘分にして、改めてお身にくれたれば」とある。
○八つ　ここは午前二時。これに四人(政右衛門・五右衛門・柴垣・お谷)の袖合はせて八つをいひかく。
○七つ　午前四時。八つといひ、七つとつゞけて時間の刻々迫るを示す。
○御邊　そなた。そこもと。(見索引)
○式禮　禮儀。
○三重　(見索引)。「御前へ罷り出づ」などいふべきを、三重の調子は人の聲に合はぬ故に、その文を略したのである。
○大内記殿　大和國生駒郡郡山藩主勝田大内記。
○作分利流　槍術の流派。其祖を作分利猪之助重隆といひ、富田牛生に從ひ槍術を學び、これに工夫を加へて作分利流を創む。重隆は慶長五年勢州津城に在って石田三成の兵を破り勇名を顯はす。作分利重之・作分利重可其の宗を得た。
○鎬　刀の刃と棟との間に高く聳えた筋の稱。「鎬を削る」とは刀を打合ふ義であって、烈しく切合ふをいふ。
○帳面　記録の帳面と帷の表とをいひかく。
○脾腹　横腹。
○生兵法　「生兵法は大怪我の基」といふ。

○抜作　智能の抜けて足らぬ者。のろま。

○肩衣　上下の上をいふ、但し小紋形にしないで地質色合等に定りなし。

○肩で風切る　得意顔で風切る貌、威勢よきをいふ。近松作「女殺油地獄」に「肩で風切る堂「から」ぞめき」。

○頼もしし　「頼もしし」といふべきを「頼もしし」と用ひた例は甚だ多い。

○弓取　武士、昔は弓矢を執て功名したればかくいふ。

な抜作を、お取持なされた左右衛門殿、何と今御合點が參つたか、イヤハヤ天晴のお目利〳〵と、嘲弄譏りも覺悟の前、御前に向ひ謹で、不鍛錬の政右衛門を、推擧致せし不調法、恐れながら申譯と、言もあへず肩衣はね退、差添に手をかくる、「ヤレ待て左右衛門、あれ留めよ」、「御意じや、切腹先づ待たれよ」と、近習の聲々、ハツと計暫し、控へて平伏せば、「櫻田林左衛門・唐木政右衛門、兩人共是へ參れ」、ハア、ハツと一度の答さへ、肩で風切る櫻田と、唐木は枯し萎れ枝、見すぼらしげに蹲る、「ヤイ政右衛門、只今の勝負、大内記是にて逐一に見屆、其方が致し方神妙に思ふぞよ」と、仰にハツ〳〵と計り夢見し心地一座の、不審「イヤサ、其方共は今の立合を何と見た、尤勝負には政右衛門負たれ共、始よりつく〴〵見るに、身構へ太刀捌き、よつく鍛し誠の達人、林左衛門が中々及ぶ所ならず、彼が心を察するに、新參の身を以つて古參の者に、恥辱を與ゆるは、武士の情にあらずと、わざと勝を讓りしは、劔術計か心迄奥床し頼もしい、併ながら是迄、遊藝を樂しみ、武藝に疎き大名と、噂に云はれし大内記、劔術の批判覺束なしとも云ふべきが、弓取の家に生れし身が、武藝を

知らぬ様有らんや、然れ共、※弓を袋にし、太刀を鞘に納むるは太平の掟、今足利一ッ統に治つたる此御代、※靜謐の世に、弦を引き鏃を研、鎧よ弓よとひしめくは、上への恐れ家衰微の基、爰を思ひ計つて、茶の湯※亂舞に目を暮せ共心に捨ぬ劔術武藝、よく知つて居る身共が眼相違有っじ、政右衛門を取持し左右衛門、身が爲に天晴忠臣誤りと思ふべからず、又林左衛門事は、怪我の勝をそれ共知らず、いかめしく罵るは、我藝の我手に見へぬ不鍛錬千萬、知行くれるは國の費、暇を遣はす、勝手に屋敷を立退べし」と、案の外成御※諚意に、林左衛門一句も上らず、鏡き殿の御賢慮に、恐れ入たる一家中、「御前に叶わぬ林左衛門、早立めされ」とせり立られし※したゝかな目に、大廣間一人すご／＼立て行、重て政右衛門に言ふべきは、新參ながら其方、武藝の鍛錬感じ入、貳百石の加增申付る、※黒書院にて改め杯今より一家中の師範と成、彌忠義を勵んでくれよ」と、いと懇に仰有りしづ／＼、御座を御太刀持の小姓引連れ入給へば、近習の面々ざゝめきわたり、「さりとては政右衛門殿、※けしからぬお首尾お目出たい／＼、イヤもふお羨しう存じます、我々もおそかる爲、お杯お戴きたい、詰所に相待居ます、我々もお手

○弓を袋にし　納む　[illegible]明[illegible]式[illegible]位、[illegible]二十[illegible]弓矢」。

○靜謐　しづかにて最も靜の義。

○亂舞　猿樂に演伎の間に行ふ舞。

○諚　定言の合字。仰せ。

○したゝかな目　ひどい目。

○黒書院　書院を別つて黒書院白書院といふ。書院は貴人の居間の室で、黒書院は黒塗を立つた客殿、白書院は白木作りの客殿で、黒書院よりも輕い。[illegible]

○けしからぬ　「けしかる」を「けしからぬ」ともいひ、[illegible]たにより、普通ならず[illegible]の意。

○胸算用　[illegible]心の中で見つもること。

○ひね　物のふるくなること。すたりもの。「[illegible]

[illegible]

○前の間　[illegible]

○御前中　[illegible]しく見えおはぬによつていふ。

柄〳〵」と、挨拶悦び請る程、ぐはらりと違ふ胸算用、二人は顔を見合す計、只うつとりと手を組で、「政右衛門殿」「五右衛門殿、是ではお暇は願われまい」「サア身共も折角、切かけた腹がひねに成た、コリヤマア」、どうと腰も抜けし、度に溜息吐の間の、襖あらはに妻お谷、肩にかゝりし柴垣が、咲に煙気て詰し、母の自害に孫子の、お後を跡におろ〳〵目元、二人驚き「何故の、此生害」「イヤのふ是は覚悟の上、唐木殿の頼もしい心底を聞上は此世に用のない體、未来へ参つて、娘お谷が勘當の詫言今日の様子を見届てと、此廣間のお次迄、隠れ忍んで委細の譯、思ひの外の立身でお暇の出ぬは是非もなし、此上ながら姉も妹も、そつにも此お様の女房と思ひ、敵討には行れず共、心の助太刀を、蔭ながら志津馬が力に成てたべ、兄弟共さらばよ」と顔を、見上見下して、盛の梅と蕾の櫻[illegible]に、残して息絶る、「コレのふ是」と取付て泣聲人を憚の間より、大内記殿の御意[illegible]時、欠所御前立出給ひ、「一家て夫様の御詮議、政右衛門が今日の仕方、定て様子有べしと御覧じなされし所、心の底に望有て、わざと我手練を隠し、拙を備し趣、殊に御前の次の間へ女を引入、御暇を願し科によつてお暇を遣はさるゝ、

さりながら、暫しも扶持し置れし家來、浪人の糧に盡るも不便なれば、刀一腰お暇の印に下さるゝ、殿樣御祕藏の※信國の名作、敵討の餞別とはおつしやれぬ、賣代なして世渡りの助にせいとの御慈悲、有難ふ頂戴仕やと、小姓に持せし刀箱、「※打明申さぬ心の底、しろし召れし御惠み、ヱ、相果し志津馬が母、今少し生延はり、此御諚意を聞ならば」と止めかねたる有難淚御簾中も御落淚、「父にも母にも後れたる、其稚子は手廻りて養ひ育る※三世の緣、殊更姉は只ならぬお腹に持し大事の身、假りの親分五右衞門の屋敷で介抱如才なふ、本望遂げて立歸り、元の主從對面を待て居るぞ」と※つど／＼に仰も重き亡骸は、宇佐美が屋敷で野送りの、供に控へし※若黨武介、此世の名殘御殿の名殘、始の妻と後の妻、生れぬ子にも引るれど返す／＼も大恩の、御前を拜し、立出る、世の有樣こそ、

三重
物憂けれ

○信國　來信國作の刀。信國は建武頃山城の刀匠で、初代を了戒といふ。近松作「長町女腹切」中之卷に、信國の棒鞘の脇差を三十兩に賣拂つたことが見えてゐるから、高價な物であつたことが知れる。
○打明け　刀箱打明けと、心打明けとの意をいひかく。そして「底」といへるも刀箱の緣語である。
○三世の緣　【主從の緣】諺に「親子は一世、夫婦は二世、主從は三世の緣」といふ。
○つど／＼　都度々々。一一。「俚言集覽」に「ツドツドは毎々の如し。毎〔つど〕ふ義なるべし」。
○若黨　年若い郎黨。武家の家臣。

第六、沼津の段

登場人物の主な者

呉服屋十兵衛（城五郎に出入の者。平作の子。二十八歳）　安兵衛（十兵衛の從者）　平作（雲助。七十歳）

お米（平作の娘。嘗て吉原松葉屋の太夫瀨川。志津馬の愛人）　市兵衛（原町の古道具屋）　池添孫八（和田志津馬の家來）

梗概

呉服屋十兵衛は安兵衛を伴うて東海道を上る。其の途中沼津の宿で、雲助の平作と其の娘お米とに遇つて親しうなり、後れて來る安兵衛に、自分はこの家に居るといふ目印に、軒に笠を懸けて平作の伏屋に泊る。そして立寄つた安兵衛を先きの宿へ行かせた。

其の日暮古道具屋市兵衛は、平作が賣拂ふことを約束してゐた所帶道具を買ひに來た。十兵衛は疊まで剝いで行かれてはたまらぬので、市兵衛に金を與へて去らせた。かくて三日月の微かな光に照されながら、平作の身の上話を聞いて、さては我が父かと知り、且つ志津馬がこの邊に療養に來て居る事を察し、父妹の貧苦を救ふ爲に「我が恩人の石塔を建てたいが、いづれの寺でもよいから、この金で其の世話を頼みます」とて、三十兩を與へた。そして態と股五郎から預つた金瘡藥の入つた印籠を忘れて出立した。

平作は其の印籠を取上げて、これは股五郎の品であり、泊つた客は我が子であつた事を知つて追跡する。そして我が子から股五郎の在處を聞く爲に自害して、股五郎一味の者に殺された事にし、以て十兵衛から「股五郎が落著く先は九州相良、道中筋は參州の吉田で逢つたと人の噂」と、敎へてもらひ、其の言葉を平作の跡を慕うて來たお米と池添孫八とに聞かせた。彼はかくして我が二人の子に義理を立てさせた。そして臨終の際に、孫八が小石を拾うて、刀身を火打の石の火の光の間に、親子互に見か

はす顔と顔、盡きせぬ名殘を惜しみつゝ、極樂往生を祈る念佛の聲も哀れに、長い別れとなつた。

評

この段も亦敵討の爲に難儀する人々や、犧牲となる人を寫した。そして義理と人情とに絡まる悲劇を展開してゐる。かくて復讎の念に燃える勇士の心膽は錬られ、快擧の大團圓に向つて一歩一歩近づく。

第六　沼津の段

東路に、爰も名高き沼津の里、「富士見白酒名物を、一つ召せ／＼」「駕籠に召せ、お駕籠遣ろかい參ふか、お駕籠／＼」と稲叢の、陰に巣を張待かける、蜘蛛の、習ひと知られたり、浮世渡りは、樣々に、草の種かや人目には荷物ッもしやんと供廻り泊りを、急ぐ二人ッ連レ、立場と見かけ立どまり、「コレハしたり大事の用をとんと忘れた、大儀ながらわしが寄ッた所迄ゝ走り、往て來てたもと、急ぎの用事走り書、さら／＼／＼と書認め、「早ふ／＼」と手に渡せば、主に劣らぬ達ッ者もの心安兵衛逸散に元ト來し、道へ引かへす、稲叢陰より「旦那、申お泊り迄參りませうかい、申旦那樣どうぞ持して下さりませ、今朝から壹文も錢の顏を

○東路　東海道。
○沼津　駿河國沼津市であつて、三島と原との間。東海道五十三次の一。
○富士見白酒　沼津あたりで賣る名物の白酒。蓋し伊豆池田あたりの酒を船に積んで富士山の見えるあたりまで行けば、酒が揺られて味がよくなるから、これを富士見酒といつた縁によつた名稱であらう。
○稲叢　稲を刈つたまゝ積み重ねたもの。
⊙蜘蛛　「雲助」をいひかけた。
○浮世渡り　草の種　「生計（すぎはひ）は草の種」の諺に據る。生計の仕方は千種萬別で、到る處にあるとの意。
○立場　宿場以外で人足が休んで憩へる處。
○したり　しまつた。
○走り書　すら／＼と、文字を草體に書き下すこと。走るにいひかく。
○達者　上達した者をいひ、轉じて、健康。
○持たして　荷を持たせて。

見ませぬ、どうぞお慈悲」と云かけられ「イヤ〳〵わしは今夜は夜越に行」「サそこがお慈悲でござります」と、頼かけられ是非なくも「サそんなら吉原迄何程じや」「エヽお前様も、私が頼んで持ッのじやもの、好い程に下さりませ」「ササそんなら遣らしやれ」「年ヨ寄の止しにせいでの、そんなら持タして下さりますか、エヽ忝い、サアお出なされませ、ヤット任せ」は聲計、一肩往ては、立留り「ヤ今シ日は結構な天氣じやなア、ヤットまかせ」「二肩、往ては息を繼、「旦那申、向ふの立テ場に鯲の名物がござります、ヤットまかせ」と杖する度に追從口、深田に下りし、白鷺の、餌ばみをするに異らず、見るに氣の毒、「コレ親仁殿、ちつと持てやりませうか、アヽそれ〳〵あぶない〳〵」「イエ〳〵、物體ない〳〵」「アヽ氣の毒な足元ト、最前から見て居るに氣しんどでならぬ」「是は私が足の癖でござります、旦那の陰で、今日も内入がよござります」「モウ此方もいくつじや」「七十に手が屆いてござります」「アヽソレ〳〵〳〵、合點の行カぬ足取リ「お氣遣ひなされますな、若い時は小相撲の一ヶ番も取リましたヤットまかせとな」といふ下道の爪先キ上り、木の根に躓きひよろ〳〵〳〵、「ソレ見やしや

◇このあたりから詞章妙境に入り、情あり血あり涙あり、そして精妙な諧謔も織込まれて、まことに得いはれぬ名文である。

○吉原　駿河國富士郡にあつて、東海道五十三次の一。

○年寄の止しにせいで　老人だからとてお止めになさらないで。

○岡崎　岡崎節小唄節。正保前後にこの小唄があつた。

○深田　前掲と同。深田を「ふけた」といへるは「太平記」にも見ゆ。

○しんど　「しんらう」（辛勞）の訛。心苦しきこと。せつないこと。この文は、雲助の苦勞を見て居ると、こちらも氣くたびれがしてならぬの意。

○内入　收入。まうけ。

れ、ヱヽきつい事をしたの、親指を蹴返いたか、ヨシ〳〵早速ゥに癒してやろ」と、用意の、藥取リ出し、附ると其儘、「何ッとどふじや痛は止ろが」、「コレハ結構なお藥でござります、痛はとんと癒りました、サア〳〵お出なされませ」、「イヤコレ〳〵荷はおれが持ッてやる」、「アヽ旦那樣滅相な」、「イヤサ駄賃は遣る、氣遣ひさしやんな、此方の足元ト、最前からあぶなふて〳〵、荷を持ッ方がやつと氣樂な、咄しもつて行キませう、サア〳〵ござれ」と先キに立、平作は千鳥足、しんどが利に成ル蒟蒻の、砂に成かと悲しさに、小腰屈めて、「申旦那、一肩やりませうかい」、「イヤ〳〵是で大分步行よい、ア此方の足元茶めいたものじやの、其足取リを狂言師に見せたいわいの、亂れ抔と云ッて、傳授事に成リそふな事」、「イヤ旦那のおつしやる通り、大概亂れかゝつて居りますはい、ハヽヽヽヽ」と、道の伽する、笑ひ草、踏分ヶて來る道草に、菊の折枝持チ添へて、見合ハす顏は「父樣か」「お米じやないか、今日は結構な旦那の供したので、荷は持ッずにお世話に成ッた、お禮申してたも」、「コレハ有リ難い、もふ爰が私が內、暫くお休み遊ばしませ」と、昔の殘る風俗も、尾羽打チ枯し、松蔭に、侘び、入ル西日影、侘たる中の一

○きつい　ひどい。
○滅相　「大藏法數」に「塵境既亡、心念亦滅、是爲二滅相一」で轉じて滅法。法外。
○やつと氣樂な　やつとこれで氣樂な。やうやうこれで氣樂になつた。
○咄しもつて行きませう　咄しながら行きませう。
○しんどが利になる　苦しげな姿をして客に氣苦勞させ、自分が持たねばならぬ荷物を、客に持たせて駄賃をもらふのだから、かくいうた。
○蒟蒻の砂になる　平作の足つきのぐら〳〵して落ちつかぬを蒟蒻にたとへ、そして「蒟蒻は腎丸の砂拂」といふ諺によつてかくいうた。平作がぐら〳〵しながら步いて得る駄賃を、砂にしはせぬかと氣遣ふ意。近松作「丹波與作待夜の小室節」に「蒟蒻の鏡おやとて砂にして」。蓋し「こんにやく」も「くにやく」の轉訛であらう。
○茶めく　おどけめく。「茶利」「茶目」など同緣の語。
○亂れ　能樂の「猩々」の亂れは重き傳授になつてゐる。猩々が酒に醉うてよろめく足つきをする所作で、猩々を舞ふにも其の氣で舞ふ。
○亂れかゝつて　猩々の亂れの詞に應じて、心亂れ老衰しかゝつてゐる意に「亂れかゝつて」といふおどけ詞面白し。
○道草　馬が路傍の草を食うて進まぬより出た語で、道で遊びぶらつくこと。笑草、道草、菊と巧みに緣語を用ひた。この菊は野菊である。
○尾羽打枯らす　鷹が尾羽を損じてみすぼら

しくなれるをいふより出た諺で、人の窶れて貧相なるをいふ。[illegible]
○お掛けなさるりや　この家に來てゐるといふ[illegible]に掛けていふに、[illegible]に腰を掛け[illegible]
○庭一杯　庭が全部ふさがること。「一杯」は滿の意。
○藍薄く　愛から藍の同音語につゞけ、「薄く」に藍の染色の薄い、待遇の薄い、茶の薄いをいひかく。
○おみあ　「[illegible]」[illegible]
○せせなげ　「せせらぎ」の轉。溝。下水。どぶ。
○杜若　[illegible]美人に喩ふ。
○活けたい　手活の花と眺めたし。
○三文なと　三文なりと儲けて。
○さもしい　[illegible]。この語「あさましい」の約轉か。（或は「さびしい」の轉か）。
○大切ない物　甚だ大切な物。「大い」は[illegible]しい[illegible]
○金瘡　きりきず。
○武家方には尋ぬれども　武家方にはこの[illegible]
○ほたほた　[illegible]「[illegible]」芭蕉の句に「ほたほたと地に咲揃ふ椿かな」。本曲第八、岡崎の段に「雨垂もほたほた[illegible]」。

人住、門の柱に印の笠、「お掛けなさるりや庭一ぱい、いつそ座敷へマアお上り」と、親仁が馳走、娘の愛、前垂レの藍薄く共、マアお茶一ツと差シ出す、こぼれかゝりし、藁屋葺、折リ惡ふ湯も沸かず、水で成リとおみあを」、「マア、イヤ〳〵もふ行まする、拙娘御は好い器量、不躾ながら此内には、せゝなげに咲た杜若、よい床へ活たいのふ」、「ハイどなたも左様におつしやります、自慢で作つて置キましたれど、近頃は手入レが惡さに、いかふ田地が荒ました、何ンが身に構はず賃仕業、貧乏は、苦にもせず、それは〳〵孝行にしてくれます、それで私シも年寄リての雲助も、せめて三文なと肩休めと、餘り彼女がいぢらしさでござります」、「コレ父樣、始めてのお方々に、其樣なさもしい噺しを」、「ホンニそふじや、ハヽヽヽ、イヤお米、今日は大きな怪我を仕てな、コレ〳〵是見よ、爪が起て有ル、ア藥もあれば有ルものじや、あなた樣の藥きついの妙藥、ありや何ンと申ス藥でござりますへ」、「此藥は大切ない物、第一金瘡には、其場で治る妙藥、武家方には尋ぬれ共、金銀づくでは手に入ぬ妙藥」と、語れば娘は猶ほた〳〵、父樣の命の親、一日や二日で、お禮は云フも盡されず、ならふ事なら今宵は爰に御逗留遊ばして、

○しなつこらしい　しなやかしらしい。やさしらしい。「似付かはしい」を「につこらしい」といふの類。
○根が生える　[illegible]くなる。
○目の鞘抜けし　目の鞘外（はづ）すともいふ。瞼（まぶた）を張明けて目玉をきよろきよろ光らして見るといふ。[illegible]目のない。
○油氣はない　艶（つや）をつけぬ。
○笠宿り　一樹の雨宿りを笠宿りといひかへて、軒に[illegible]「尋ねる軒の」[illegible]目印」とつゞけた。「說法明眼論」に「宿二一樹下一、汲二一河流一、一夜同宿、一日夫妻、皆是先世結緣」。
○原の町　[illegible]
○錢三貫　錢四貫文に金一兩替とし、金一兩を[illegible]
○佛壇　[illegible]はかくいふ。それを市兵衛は、平作が放しにくいと言ふからにはよい物であらうと思ひ、高く評價したのである。
○はか　はか。しか。
○置いて[illegible]見よう。

「アヽ娘何いふぞいこんな内に泊まして、肴は干鰯が一ッ疋なし、虱より外おなたの身に附ク物はない」、「イヤ〳〵不自由は仕付ヶて居ます、娘御があの様に、しなつこらしう言はしやるので、どふやら爰に根が生た、大事なくばいつそ泊て貰ふかい」と、目の鞘抜し商人も、上手な娘の饗應にころりと、成レば、「お枕」と、油氣はない親身の馳走、是も一チ樹の笠宿り、尋る軒の、目印も當に内に入リ、「旦那是にござりますか、サお立なされませんか」、「ホ安兵衛か、早かつた〳〵、其方は其荷物ッを持ッて、吉原の鍵屋で宿を取りや、日和が知レぬ早ふ行ヶ」、「ヤ」、雨具の用意は吉原の、鍵屋をさして急ぎ行、お米は立ッて門の戸を、引立んとする所へ、「平作殿内にか」と、ぬつと這入ルは原の町の古ル道具屋、「ヲイ市兵衛様、御苦労によふお出」、「イヤこちも商賣づく、昨日此方の云しやるは、急な入り用錢三貫、道具諸式を直にして、取ッてくれといふ事なれど、代ロ物見てからの事と、手附ヶに三百進せて、殘りの錢持て来た、駄賃出しては合ぬ仕事、直が出来たら、此方様か荷ふて来て下さるか、時々にと、道具といふは、見へ透ダつた此通りか、こりや聞ィたとはきつい相違、マア第一、放しにくいと云しやつた故、見込に思ふた佛壇

か、こりや百が物はかない、デモマアちよつと置イて見よ、二ツ竈鍋釜かけて、百二十と入レい、古ル疊八疊で三百よ、鼠入リの膳棚百五十文、走は役ッに立タぬ、是十六文、破レ障子一チ枚十二文、縁の取レた角行燈八文、荒増こんなもの、家ぐち毀つても壹貫が物はない、といふて手附ヶの三百は、飛ンで仕舞でもふ有ルまい、「御推量の通りでござります」、「せふ事がない、此疊まくつて往のふ、コレ若いの、其所退イて貰ひましよ」と、疊ばた/\上かける、「申/\御尤なれど、今ン夜の所を御料簡」と、親子が詫る氣の毒より、ひよんな所へかゝり合ひ、「コレ道具屋殿、わしは今ン夜泊つた客、是は難儀な所に泊り合した、とんと煤掃に茶屋へ往た樣な、どうで埃はかづかにやならぬ、手附ヶはわしが返しましよ、疊は此儘置イて貰を」と、綺麗に捌く貳朱一つ「是は結構な日那殿、ちと多けれど爰迄來た賃、序に疊も引直し、まん直しに平作殿、貧乏神の居ぬ樣に、箒でお上槌で庭、藁の出ぬ前お暇」と、躓き廻つて立歸る、親子一度に手を合せ、「忝い共面ン目ない共、嬉しいと術ない涙がごつちやに成ッて、お禮の詞も出ませぬ」と、破れ疊に食付ば、「ハテ今のは今ン夜の宿錢、高で知れた親子の世帶、家財を賣リ代ッになさふと

○鼠入　[illegible]鼠に[illegible]られてゐるから。
○走　台所のながしをいひ、物を洗つた水を流し[illegible]
○あらまし　あらかた。たいがい。ざつと。
○ごち　[illegible]食ふといふ」。
○若いの　[illegible]をさす。
○料簡　勘辨。
○ひよん　凶の韓音で凶變の義。いやな。變つ[illegible]
○埃　[illegible]錢をもきかせた。「倭訓栞」に「算にほこりといふは[illegible]取り」。ふりかゝつた災難の意をもふくむ。
○かづく　[illegible]
○まんじ　[illegible]
○[illegible]
○槌で庭　鄙事に人をあしらはうとして狼狽するをいふ諺。ぴよこ/\頭を下げる。貧乏神を掃き棄てるをいひかく。
○藁　ほろ。箒の語を受けて藁というた
○術ない　せんすべなきをいふ。胸苦しい
○疊に食付けば　疊に頭をすりつけて感謝すれば。

は、よく〳〵差詰つた、難儀な事が有のでごんせう、いとしや苦勞さつしやるの親仁殿此娘御より外に、もふ子供衆はないかいの」、「ハイ此お米が上ァに男の子が一人リ有ッたれど、二つの年ニ養子に遣リましたが、又其親の手を離れ、今は鎌倉の屋敷方へ、お出入、よい商人に成ッて居るとの噂、それ聞ィてとんと思ひ切ッました」、「ソリヤ又なぜに」、「ハテ一ッ旦ン人に遣ッたれば捨たも同然ン、我ガ子ながらも義理有ルもの、今其躮が身上がよいとて、尋に往て箸片し貰ふては、人間の道が済ませぬ、今出逢てもあかの他人ン、子といふは此娘一人リ」、「ム、それも尤其兄貴は今幾歳位じやの」、「ハイ斯うつ、丁度今年シ廿八、鎌倉八幡宮の氏地の生れ、母の名は豐と書付ケ、守り袋に入レて遣リました、其後此お米を産ンで母も相果、即今日が命ィ日で、孝行な娘が水手向、花の立ァ方タ御覽じやつて下ダさりませ」と、何心なき咄しの合紋、一々胸にこたゆる十兵衛、思ひ合せば覺有ル、扨は産の親父樣、血を分ケた我妹が貧苦の有リ樣、有リ合せた路用の金、なま中親子と名乘ては受ぬ氣質を何とかな、金の遣ッたい屈託に胸を、痛めて「コレ親仁殿、何ニと物は相談じやが、此お娘をわしに下されぬか」、「エ、奉公に上ゲますのか、イヤテヤ、

○ごんせう　ござんせう。ござりませう。

○かたし　片。「し」は接尾語。對〔つゐ〕な物の片方をいふ。「箸かたし」は箸一本のこと。

○氏地　神の鎮守し給ふ領内。

○合紋　符合。

○屈託　屈惑の義か。慣用。思案に困りわづらふこと。

○羽二重地　[illegible]いうた。

○じなつく　ふざける。蓋し「じだ」はじやうだんの義であらう。「増補俚言集覧」に「じなくさ‖備後にて[illegible]」

○あた　[illegible]

○なめ過ぎた　あな[illegible]りすぎた。

○在所者　在所者・田舎者。

○ずつぷり　すつかり。全く。とつぷり。

まだ女房のない男、利發な娘御、商人の噂には極上々の羽二重地。得ッ心シして下ダさるなら、仕拵へはこつちから、旅商人の事なれば、呼迎へる日限シは、まだ何時共定められぬ、嫁入リの拵へ料、爰に少々持合す、是置いて去ますする得ク心シかいの。どふでごんす、コレよい女房、面シ目ッないが最前シから、わしや此方様に、惚たわいの。とじなつきかければ、ついと退キ、「父様あのお方タもふ去して下ダさんせ、いかに貧しう暮して居る迚あたなめ過た、あほうらしい。と、打て變りし腹立顔、「ヱ、嗜め、よい女房と云れるが、何シの夫トに腹の立ッ事、汝が器量がよい故じやと、おりや嬉しい、イヤ申あなた様、よふ御親切ッに惚さしやつて下さりました、ジヤが此お米は女房といふてはやられぬ譯がござりますへ。ムムそんなら御亭主が有ルのか、是は／＼、イヤ實は只今のはほんの座興、主シの有ル人共存せず麁相申シた、眞ッ平御免シに預りませう、コレ娘御、機嫌直して貰ひましよ。「アノ痛入ッたお詞、ほんに思へは在所者を、おなぶりなさるを眞受にして、お恥かしそ。と莞爾と笑ひに心打チ解て、咄しに紛れてずつぷりと、日の暮レて有ルに氣が付カなんだ、三日月様が上つてござる、宵月夜で行燈は入ラぬ、御明

しを伽にして辻堂の雨宿り、お客様ももふお休足延すと壁につかへる奥座敷、綏りとちゞかまつて御寝なりませ、私は此臺所コリヤ娘は其方に寝い旦那様はお堅いけれど、時の機勢では主の有ル池へ踏込なさりよも知れぬ、用心ンには網を張じや、今ン夜はおれが股引をはいて寝や、むさけれどあなたには、わしがどんざを裾にな」と、追風もて來る、鐘の聲いと深々と聞コへける、

お米は一人リ、物思ひ、心にかゝる夫トの病氣、我ガ手で介抱する事も浮世の義理に隔られ、秋の螢の消殘る、佛壇の灯も細々と、嵐にふつと氣の付ク娘、一奇妙に治つた父様のあの疵、今でも敵の手がゝりが知レてから、あの病氣では思ひも寄ラず、ム、」と心で點頭胸を据へ、灯の消たるは天の與へ、夫トの爲と拔足シさし足探り寄、印籠取上立退足、躓く音に目覺す十兵衛、思はず高聲「何者」と、裾を捉へて引キ留むれば、わつと泣キ入ル娘の聲、平作も喫驚し、起キ上ても眞暗がり「お米、〳〵」と言ィつゝ探す、竃の埋火、附ヶ木にうつし顔見合せ「娘じやないか、旦那様か、何故に此有リ様、ヱ、何ンの因果で此樣ッな、情ない氣に成たぞいやい、コリヤ此親は、其日暮しの者じやけれど、人様の物文字寸半、盜もと

○辻堂　我が伏屋を辻堂に喩ふ。「御明し」の語に應じてかくいふ。
○綏りとちゞかまつて　「足延ばすと壁につかへる」を受けて、いかにも妙文。
○用心には網を張れ　用心は細心にすべしとの意。「用心に網を張る」といふ諺の網を、前の「池」に應じて緣語の網にかへた。
○むさい　きたない。
○どんざ　圓座「ござ」。ごてら。
○鐘の聲いと深々と聞えける　寺の鐘の聲が、いと沈々と更け行く夜の寂寞を破つて聞えた。
○お米は一人…秋の螢の消え殘る　「圓機活法」螢の詩句に「思婦斷腸倚扇愁、秋深草底認流星」の趣がないでもない。「螢の」の「の」は「の如く」の意。
○夫　和田志津馬。
○天の與へ　「說苑」に「天與不取、反受其咎」で
○印籠　藥をいれ腰に佩びる小匣をいひ、もとは印判・肉をいれるものであつたによつてこの稱がある。江戸時代には、蒔繪・描繪など精巧な細工をなし、裝飾品として用ひられた。
○附木　檜などの薄片の端に硫黄を塗り附けたもので、之に點火して火を他物に移すに用ひる。
○文字寸半　一錢半錢。「文字」は錢「ぜに」。「物類稱呼」卷四に「ぜに（錢）‖畿内にて表の方をもじと云」。「半」は一寸の半分の義。錢一文は徑一寸[illegible]

○わいやい　「わい」も「やい」も感動詞であつて、芝居や淨瑠璃に慣用されてゐる。
○本復　病氣全快。
○介病　病人の介抱、看病。
○才覺　工面。
○お年寄られし：日を送る　父平作に對して[illegible]十兵衞[illegible]を云ふいてゐる。
○瀬川　「我が身の瀬川」は我が身の名の瀬川の[illegible]名に據つたものである)。
○張　意氣張り。達引。吉原遊女は概して張があつたといふ。
○松葉屋　[illegible]

思ふ氣は出さぬはいやい、エ、親の顏迄、穢し居つた」とわつと計リに、泣キ居たる、十兵衞は氣の毒顏、「金ン銀ンを取ッたと云ふではなし、是には譯の有リそふな事」と、問れてお米は、顏を上ゲ、「恥かしながら聞て下さりませ、樣子有ッて言交せし、夫の名は申されぬが、私故に騷動起り、其場へ立チ合イ手疵を負、一ッ旦ンは本ン復ッ有ッたれど、此頃は頻りに痛、種々介病盡せ共驗なく、立チ寄ル方も旅の空、此近所で御養生長しい間に路銀も盡、其貢に身の廻り櫛笄迄賣リ拂ひ、最前ンもお聞キの通り、悲しい銀の才覺も、男の病が、治したさ、先キ程のお咄しに金ン銀づくではないとの噂、燈火の消しより、アノ妙藥をどうがなと思ひ付しが身の因果どうぞお慈悲に是申シ、今宵の事は此場切リ、お年シ寄ッれしお前に迄苦勞をかけし不孝の罪、今日や死ふか、明日の夜は、我ガ身の瀬川に身を投てと、思ひし事は幾度か、死ンだ跡でもお前の歎きと、一チ日暮しに日を送るどふぞお慈悲に御料簡」と、東育の張もぬけ、戀の意氣地に、身を碎く心ぞ、思ひやられたり、歎きの端々つく〴〵と聞取、十兵衞「コレ姉御、そんなら此方さんは、江戸の吉原で全盛の、松葉屋の瀬川樣じやの」、「ハイ、チモよう御存じ」、「すりや瀬川殿の

○心の目算　心の中でみつもること。推測。
◉太夫　最上位の遊女をいふ。
○勸むる功德倶に成佛　この詞は狂言「宗論」に[illegible]佛道に入らしめれば、その功德によつて己れも共に成佛するとの意。
○荷物は先へ　一物の語から、二物を荷物につ[illegible]荷物を持つて[illegible]宿屋で宿を取りや」とある。よつて荷物は先に安兵衞が持つて行つた。故に「荷物は先へ」というた。
○水入らず　「俚言集覽」に「親しき者の中に疎き者の間雜するを油に水の交りたる如しと云、それにうら反して親しき者ばかり集合をかく云」。
○澤井股五郎　[illegible]讒。

夫の爲に、ムウ〳〵」と心の目算、思案を極め、「イヤ太夫殿、夫の手疵を治す藥、ほしいは尤、それ聞ては進ぜたいものなれど是は人の預り物、此事は思ひ切つつしやれ、今此方衆の咄しの通り、私も又恩を受た、サ其恩を受た人の爲に、いづれの寺でも苦しうないが石塔一つ寄進が仕たいが、何と世話して下さるまいか」、「それは御奇特、結構な寄進でござります、何時成共お世話致しませふ、私も來年は嬶が年忌、勸むる功德倶に成佛とやら、是非お世話致しまするでござります」、「どうぞ今度の下り迄違はぬ樣に賴みます、豫ての願ひに、書付も此內に委しふござる」と、金一包取出し、「コレ必賴んだぞや、親子の衆最早夜明に間もなし、隨分無事に親仁殿へ」と立出れば平作も、「必お下り待ちまする」、姉御さらば」とばかりにて、心に一物、荷物は先へ道を早めて急ぎ行、跡に親子は顏見合せ、金取上て「コレお米隨分大事にかけておきや、夜明迄は間も有其方も休みや」と水入らず、見廻す傍に落たる印籠、「アヽ是は今の旦那のじや、定て尋てござるで有」と、言ふにお米が手に取て、「此印籠はどうやら覺への有模樣、ハテ合點の行ぬ」、それか是かとよく〳〵眺め、「ホンニそれよこりや澤井股五郎が

常々持チし、覺への印籠に、「ハテ不思議な」と平作も金取出しよく〳〵見れば、「金子三拾兩此書付ヶは、鎌倉八幡ノ宮の氏地の生れ、稚名は平三郎、母の名はお豐、コリヤコレ我ガ子に付ケて置た書付、「そんなら今のお方は私が爲には兄樣ン」「ヲヽ我ガ子の平三で有たかい、そんなら最前からの親切は、それとは言はず此金を、貢でくれた石塔代、不思議の縁」と親と子は暫し、あきれて居たりしが、お米は印籠手に取って、裾ばせ折て駈出す、「コリヤ待テ娘コリヤどこへ」「何處へとは父樣ン、此印籠を持って居る、其兄樣は敵の手がゝり、追ッかけて股五郎が在所を尋ね志津馬樣へ」「尤じや〳〵、が汝ではいかぬ年ン寄ったれ共此平作、理を非に曲て言はして見せう、汝も續いて跡から來い、どの樣ナな事が有ッてもな、必出なよ、敵の在所聞キ迄は大事の場所、木陰に忍んで立聞キせい、必ずとも麁忽すな、合ッ點ンか、本ン海道は廻り道、三ン枚橋の濱つたひ、勝手覺へし抜道を」と、子故に迷ふ三ン惡ク道、轉つまろびつ走り行ク、跡にお米は身拵へ、續いて出んとする所へ、折柄來かゝる池添孫八、「瀬川樣か」「孫八殿、よい所へござんした、今ン夜爰に泊た客で、敵の手筋が知れてゐた、詮議の爲に吉原迄、父樣ンが行しやんした」「イヤ

○ばせ　はし（端）の轉。
○理を非に曲げて　無理にも。
○聞キ　聞かしてやるべきところ。
○必ずとも　どのやうな事ありとも。平作の意中は死を決してゐる。故に「出なよ」「麁忽すな」と、詞を重ね[illegible]戒めた。
○麁忽　粗忽。
○三枚橋　今は沼津市内に入る。「東海道名所圖會」[illegible]
○三惡道　地獄道・畜生道・餓鬼道。平作は抜道[illegible]のであるから、抜道に[illegible]
○池添孫八　[illegible]志津馬の[illegible]孫八が之を救う[illegible]

○人心様々　「左傳」襄公三十一年の條に「人心之不同、如其面焉」。
○千本松　沼津海岸千本松原をいひ、駿河灣を見晴らして風景佳し。
○よたすた　氣息奄奄たる貌。はあ／＼。
○大枚　多額の金高。「増補俚言集覽」に「今の俗語に大枚の事といふは古へ餅銀の大なるをいひたる詞の遺れるなり、後拾遺往生傳に作大枚ノ餅ニと見えたるを證すべし、是間銀の事を云へるなり」、
○さる人　暗に我が娘に關聯して志律馬をさす。
○約束　前の世よりの約束ごと。「説法明眼論」に「一夜同宿、一樹皆是先世結縁」。
○固唾を吞む　口中に溜る唾「なまつばき」を吐出さないで、氣を凝らし一心になるをいふ。
○二十や三十　手作が圖籠として得る錢は一日約二十文乃至三十文位であること。

忝ない、シテ其行先は」、「吉原迄はよも行まい」、「何角の様子は道にて聞ん」と、瀬川に續く池添も足に任せて、慕ひ行、實人ト心様々に町人なれ共十兵衞は、武士も及ばぬ丈夫の魂、夜深に立し獨旅、千本松にさしかゝる、「ヲヽイ／＼」と杖を力に息すた／＼、「申々旦那様、ヤレ／＼お早い足元」、「フウ今呼だは此方か慌しう何の用」、「イヤ、只今のお金を、戻しに參じました、石塔料と名を付て、大枚の金子三十兩、其日暮しの雲助に、下さるにも譯が有、又請まするにも譯が有、けれども、此金を請ましては、さる人が立ぬ義理がござります、是をお返し申ます代りに、あなたにお頼がござります、お聞なされて下さりますか」、「ハテ、夜さ泊るも何ぞの約束、様子によつて頼れまいものでもない」と、夕闇の夜の聲しるべ跡より窺ふ池添・瀬川、固唾を呑で聞居たり、「シテ其頼みの様子は」、「ハイおつしやつて下さりませ、此印籠の主の在所を、承はりたふござります、是を尋て知りたい計りに、様々の流浪致す人、それ故娘も廓を出て、憂艱難、是が知ると本望成就、娘につれて私迄、モヽヽ此上の悦びはござりませぬ、二十や三十のはした錢で、露命を繋ぐ私が、死る迄安樂

に、暮される程の三拾兩、其金ッ銀ニに代てのお願ひ、七十に成ッて雲助が、手に叶はぬ重荷を持ッ、それはまだ休みもする、子の可愛といふ重荷は、寝た間も休まぬ一生の苦痛を助る、藥の名お前様も親御が有ッば、子故には愚痴に成ルものじやと、思し召ッやられて、願ひを叶へて下ヶさりませ、コレ申シ旦那様」と、血筋と義理と道分ヶ石、わけて血の緒の三ッ界に、踏迷ふこそ道理なれ親の心を察しやり二ム、そふ有ラふ、心底至極尤じや、が是計はどうも言れぬ、己も頼れた男づく、其方の人が大切ッなら、こつちにも又大切ッ、假令又在所を聞ても、命がなふては本ン望は遂られまい、そつちの内に落して置ィた、主シのない印籠の、其妙藥で疵養生、達ッ者に成ッた其上では、望ミの叶ふ時節も有ふ、親仁殿、サそふじやないか」と、心の懸子一重明ヶぬ十兵衛が、情の詞、「サ、それ程お慈悲の有お方、迚もの事なら其藥の持主」、イヤサコレ惡い合點、此藥の持チ主は、其病人シとは大敵藥、三拾兩の其金、敵の恩を受まい爲、戻したではないかいの、此持チ主の名を言へば、敵の藥で疵本ン復、恩を請てはまさかの時、切ッ先がなまらふぞや、やつぱり捨ふた藥にして心置キなふ養生さしたが、よささふに思はるゝ」と、聞ィ

○手に叶はぬ　老人の手には持ち堪へられぬ。これより「……一生の苦痛を助ける云々」といひつゞけ、親の子を思ふ[illegible]に描き盡した。まこ[illegible]

○藥の名　この藥を誰から手に入れさしやつたか、その名前[illegible]を教へて下され、と、言はうとしたが、さてあまりむき出しでもいかぬと思ひかへ、「藥の名」といひさして、言葉をひかへて情を述べるのである。

○道分け石　岐路に立ててある道教への石。ここの文は、血筋の情と義理の道とを分けて悩み、[illegible]に踏み迷ふの意。

○三界　欲界・色界・無色界をいふ。三界はいづれも[illegible]であるによつて、[illegible]現世の意にいふ。

○心の懸子一重明けぬ　開けよ悟れよと蓋を開けても、懸子の一重はうちあけないで、其の奧にあるものを知らせぬ、[illegible]澤井股五郎の居所を打明けぬ[illegible]。

○とても　いつそ。

○惡い合點　[illegible]それを私が汝に心を寄せてゐると思ひ、藥の持主を[illegible]の意。

○切先　刀の尖端三寸許、最もよく切れる所。

(見索引)

て平作感じ入、「アヽそふじやあつた、ヱヽお前様は、恐ろしい發明なお人じやの、そふ聞ましては、申ス様ッもござりませぬ左様ならもふ歸りましよ、旦那様、おさらば」と、云つゝ、探つて十兵衛が、脇差抜ト取リ腹へぐつと突立ッる、「ヤアヤア〳〵何とした〳〵、コリヤ自害か、何故に、」「誰レを恨で物體なや」と、うろうろ涙驚く娘、聲に手當テる池添が、泣音とゞむる(一)蟀蟲草に食付泣計、平作苦しき目を開き、「おりや此方の手にかかつて、死るのじやはいの〳〵、ハテ、此方と己とは敵同士、志津馬殿に縁の有此親仁を殺したれば、頼れた此方の男は立、コレコレ此上の情には、平作が未來の土産に、敵の在所を聞して下ダされいの、外に聞者は誰もない、今死る者に遠慮は有まい不思議に初めて逢ふた人、どふした縁やら、我子の様ッに思ふもの、何の此方に引取す様な事此親が、」「サア此親仁が致しませうぞ、是がヿ生の別れ、ヿッ生の頼み、聞ずに死シでは、迷ひますはいの〳〵、コレ拜ます〳〵旦那殿」と、子故の闇も二タ道に、わけて命を塵芥須彌大海にも勝つたる、誠の親に初て逢、名乘ルもならぬ、浮世の義理、孝行の仕納め、「どこに誰レが聞て居まいものでもなけれど、十兵衛が口から言ふは、死で行此方様へ

○物體なや　恐れ多いわい。この語もと物體の無いなるを惜しむ意から轉じたもの。ここは娘の詞。
○蟀蟲草に食付　「蟀蟲」に「口」をいひかけ、「草」「食付」と緣語によつた類語法の修飾、此の處おく米が聲を立てて泣出さうとするを、池添がおく米の口に手を當ててこれを止めたのである。眞に情味豐かな名文。
○此方　十兵衛をさす。
○引け　負けて恥辱になること。「此方に引けを取らす」とは、十兵衛に迷惑をかける意。
○迷ふ　安執に迷ふ。安念この世に迷つて佛の座にたたれぬをいふ。
○二道　一人の子には自ら死して義理を立てさせ、一人の子には敵の在所を聞知させて義理を立てさせようと、この二道の爲に命を塵芥のやうに棄てる。
○須彌大海　高大深遠の意にいふ(言泉引)。諺に「父母の恩は山よりも高く、海よりも深し」。
○今際　臨終。
○相良　肥後國球磨郡にある人吉町をいふ。人吉を相良といふは、建久頃から維新に至るまで相良氏がこの地を領していたからである。實地では澤井股五郎(實名河合又五郎)がこの町に落ちて來る計畫であつたことになつている。
○吉田　三河國吉田をいひ、東海道五十三次の一。
○[illegible]　[illegible]

○引導 [illegible]ふ式、[illegible]
○前生 この世の我が子でありながら、言葉を憚[illegible]いふ。
○親子一世 親子はこの世限りの縁といふ。「保[illegible]
○兄 [illegible]
○ヱ、顔 わいやい [illegible]
○十念 十遍[illegible]名念佛。淨土宗では「合掌不[illegible]
○小石拾うて 火影 [illegible]して、小石で刄を打つて發した火影の間に、親子顔を見ては[illegible]

餞別、今際の耳によふ聞つしやれ、股五郎が落著ヵ先は九州相良、道中筋は參州の、吉田で逢たと、人の噂」、「ヱヽ忝い／＼」アレ聞ィたかイヤ誰ヒもない／＼聞ィたは此親仁一人リ、それで成佛仕ますはいの／＼、名僧智識の引導より、前ャ生の我子が介抱受、思ひ殘す事はない、早ふ苦痛を留て下され」、親子一世の逢初の、逢納め、「親仁樣」、「兄、ヱヽ顔が見たい／＼顔が見たいわいやい」、「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀／＼」と、唱る十念十ゥ兵衞が、こたへ兼たる悲歎の涙、始終窺ふ池添が、小石拾ふて白ラ刄の金合す火影は、親ャ子の名殘跡に、見捨て別れ行

第七、關所の段

登場人物の主な者

和田志津馬（行家の子）　唐木政右衞門（志津馬の義兄）　お袖（水茶屋の娘）

澤井股五郎（行家を殺した惡漢）　櫻田林左衞門（ち、政右衞門との劍術仕合に勝ち、主君から放逐された者）

助平（澤井の飛脚奴）　蛇の目の眼八（藤川宿の馬追）

梗概

參州額田郡藤川の新關所の町茶屋の娘お袖は、茶を汲んで憩ふ旅客を取持つてゐる。山中の法藏寺參詣の者ども立寄り、茶を飲みながら佛の御利益などを話し合つて立ち去つた。その跡に、和田志津馬は親の敵を尋ねて來り、お袖に懸想されたを幸ひに、「關所の切手を持つてゐないので、何とかして通して下さい」と頼む。お袖は愛人のいふ事であるからやす〳〵と之を請合つた。折節飛脚奴助平が立寄り、お袖に巫山戲ながら店前にある遠目鏡を覗き、四方の景色を眺めて悦に入つてゐる。その中にふと吉田宿の二階茶屋で、己が情婦おきのが客とたはむれてゐるのを見出し、燒餅に逆上せて倒れた。時こそよしと志津馬は、助平が置いてゐる狀箱を明けて封書を奪ひ、お袖は助平の紙入から關所の切手を奪つて志津馬に渡した。そして助平に茶釜の湯を浴びせれば、助平正氣付き、紙入を探つて關所の切手がないのに驚き、「はて道で落したか」と、もと來た道へ引返す。其の間にお袖は茶店を片付け、志津馬と共に岡崎をさして急いだ。

其の跡に擔いで來た女乘物の中から忍び姿の股五郎が現はれ、蛇の目の眼八を先に立て、櫻田林左衛門等に護られて夕暮に關所を通過する。少し後れて政右衛門來り、今過ぎた奴等は股五郎の一行と、心付いて關所まで驅付けたが、門は既に閉ぢた後なので猛虎の如く暗夜に竹藪を押分け、拔道を辿つて敵を追跡する。助平は關所の切手を失ひ、怖つ〳〵政右衛門の跡を附ける。關所では關所破りの音に氣付き、「それ通すな」と、政右衛門に組子どもの取附くを、薙ぎ立てて過ぎ行く。組子等は顫へてゐる助平を捕へ、「強敵の曲者を捕つた」と、叫んで引立て行く。

第八、岡崎の段

登場人物の主な者

山田幸兵衛（お袖の父）
お袖（水茶屋の娘。十七歳。幸兵衛の子。）
幸兵衛の妻
蛇の目の眼八（藤川宿の馬追）
和田志津馬（唐木政右衛門の義弟）
唐木政右衛門（劍術の達人。幼時庄太郎といひ、幸兵衛が斐と名乘つて劍術家であつた時の弟子）
お谷（政右衛門の妻。志津馬の姉）
巳之助（政右衛門の乳呑兒）

梗概

お袖の父山田幸兵衛は、岡崎の町外れの農夫で、母は夜業に絲車を廻して絲を績いでゐる。雪の夕暮にお袖・志津馬が相合傘で歸つた後に、馬追ひ蛇の目の眼八が來て、お袖に戯れて幸兵衛に追拂はれる。志津馬は幸兵衛に挨拶し、伴つて自分は澤井股五郎だといひ、藤川の新關で助平から奪つた城五郎より幸兵衛宛の封書を渡す。幸兵衛「然らば貴方は、城五郎殿のお勸めによつて婚約したお袖の婿でござるか」とて、一家打悦び、祝言を急ぎ相伴つて奥に入る。（これからが「煙草刻み・巳之助殺し。お袖道心」の名高い場面である）夜更けて蛇の目の眼八は幸兵衛方に忍び入り、駄荷の葛籠の中に隱れて内の樣子を窺ふ。關所破りの唐木政右衛門は、雪中に捕手等と戰ひ、幸兵衛に救はれ連立つて其の家に立寄り、互に話合つて、政右衛門は幸兵衛が己が若い時の劍術師匠である事を知つた。然し幸兵衛は、政右衛門が若い時の名の庄太郎は覺えてゐても、それが今名高い唐木政右衛門であるとは知らず、股五郎の助太刀を賴んだ。政右衛門は之を幸ひに敵の在處を知らうとして承諾したやうに見せる。そして幸兵衛が庄屋に呼ばれて家を出た跡で、政右衛門は「何ぞ家事のお手傳ひを致しませう」とて、煙草を刻む。その時お谷が乳呑兒巳之助を連れて來り、寒氣と癪とに憊れて宿を乞ふ。政右衛門は己が素性を幸兵衛の妻に隱す爲、之を追拂ふ。幸兵衛の妻は憐んで乳呑兒を預かつた。やがて幸兵衛歸り、乳呑兒の守袋の中にある書付を見て、政右衛門の子と知つたので、當の政右衛門は當惑したが、大事の前

の小事と思ひ定め、「敵の子は生かして置けぬ」とて、我が子を刺殺した。然し隱し得ぬものは彼の眼に、恩愛の情に堪へぬ一滴の涙が光つてゐた。幸兵衞は之を見て彼等の祕密を悟り、且つ其の心事に同情して志津馬と對面させ、股五郎の行方を敎へて、關所を通る便宜を與へる。お袖は尼となり、お谷と共に順禮となつて菩提の道に入る。その別れの際に幸兵衞は、蛇の目の眼八を血祭にあげて、政右衞門等の首途を祝つた。

評

この段また巳之助殺し、お袖道心の悲劇を描寫して、更に哀愁を添へた。かくて義の爲に千辛萬苦を嘗める丈夫の心は、百錬の鐵の如きものとなる。詞章も流麗にして、花は櫻木。人は武士のゆかしさを見せてゐる。

第八　岡崎の段の内（煙草刻み、巳之助殺し、お袖道心の場面）

既に其夜も、深深と遠山寺に、告渡る早九つの※鐘てより、内の案内は知たる眼八、表から忍んで納戸口、思はず躓明き殼の、駄荷の葛籠を※あたふた押し明ヶ忍び込み、鼻息もせず窺ひ居る、斯とは人も白ヶ雪の、道も厭はぬ政右衞門、心も※關の忍び道遁れて、急ぐ跡よりも、數多の捕手が見へ隱れ、慕ふ足跡氣轉の唐木、南藏そつと道端の草掻集めの押し隱す、蹤もあらせずばら／＼、「鞭を廻

○九つ　こゝは夜の十二時。
○納戸口　衣類調度などを納め置く部屋を納戸といふ、其の出入り口。
○駄荷　馬に負はせる荷物。
○あたふた　あわてる貌。周章。「蓋」にいひかく。
○關　「關所」をいひかけ、[illegible]、ここは第七に見えてゐる。
○南藏　[illegible]

せいと押取巻、「ヤア仔細も云はず理不盡に、繩かゝるべき覺へはない」と云せも果ず雙方より、「捕た」とかゝるを引ぱづし苦もなく首筋一掴み、一振ふつて右左、弱腰蹴据へて狗兒投、隙間を得たりと二番手が腕絡を振ほどき、ほぐれを取て眞逆樣、づでんどう骨行道に打付られて叶はじと、入替つた三番手、打込十手かい潜り脾腹をてうど眞の當、烈しき手練にさしもの組子、左右無くも寄付ず跡じさり、する計也、見兼て駈寄捕手の小頭、「ヤア上意によつて向ひし我々、手向いなすは關破りの、浪人者に相違はない、腕を廻せ」と詰かくれば、「ヤレ麁忽也お役人、急用有て此如く夜道を急ぐ旅の者、丸腰の某を、關所を破りし浪人とは、身に取て覺へぬ難題、外を御詮議なされよ」とちつ共恐れぬ、丈夫の振舞、始終を見屆幸兵衛は、戸口を駈出押隔て、「憚りながらお役人へ申上る、關破りの御詮議半、深夜に一人步行の旅人、御疑ひは御尤、併此者は鎌倉飛脚、仔細有て此幸兵衛よく存じ罷有ば、慮外の段は御容赦有、無難にお通し下さらば有難き仕合」と、かばふ詞に政右衛門、「ムウさいふ此方は何人」と、いふを打消、「イヤサコリヤ、身に覺へない

○理不盡　理を盡さないで押しつけること。ここの義から轉じて、無法。
○弱腰　[illegible]腰の上の左右の細い處。
○えのころ　「いぬこ」(犬兒)が「えのこ」に轉じ[illegible]狗兒を投げる如く投げること。
○得たり　占め得たり。しめたり。
○ほぐれ　解けほぐれること。解け外れたはず み。ここでは、[illegible]番手が政右衛門に取附いて腕をからめるを、政右衛門が振りほどく其のはずみに、二番手は跳飛ばされての意。
○十手　「じつてい」といふは俗言。昔捕手が攜帶した具で、短い鐵棒の中程に鉤あるもの。犯罪者を捕へる時之をもつて毆打する。「じつて」を見よ。
○脾腹　[illegible]
○てうど　[illegible]「ちやうど」である。[illegible]「ちやうど」を見よ。
○眞の當　柔術に眞・行・草とあつて、その眞の當身には、[illegible]一瞬その呼吸をとどめること。
○組子　組頭の下に支配する者。組下。
○左右無く　たやすく。
○跡じさり　跡退り「あとずさり」。
○關破　關所を通らないで、間道によつて通過すること。
○丸腰　[illegible]帶せざること。
○慮外　思ひの外の[illegible]、無禮。

にもせよ、お役ク人ンに慮外の手向ひ、アヽ不屆至極」と叱り付ケしづ／＼と歩み寄り、倒れ伏たる組ミ子共、引キ起して死活の活、「いづれもお心慥にござるか、お役目御苦勞千ン萬ン」と、苦い挨拶氣の付ッ捕手、幸兵衛猶も威儀を正し、「承はれば關所を破りし科人ンは帶刀の浪人ニ者彼は町人此丸腰、憚りながら人ト違ひ、かやうな儀に隙取中、彼曲者を取り逃さば詮なき事、早々お手當テなされよ」と、言ハれて實もと捕手の小頭、「ムウ其方が存ンせしと申ス詞に相違も有ルまい、是よりは山手へかゝり、彼曲者を詮議せん家來、參れ」と引連て元來し道へ引返す、影見送つて政右衛門、「ハヽア危ふき場所を遁れしも全く貴公の御厚志故、ガお禮は重ねて、心も急けば失禮ながらお暇申ス」と、立チ上ガるを「暫し」と止め、「昨ク今ンなれど折リ入ッてお尋ね申ス仔細もあれば、見苦しけれど拙者が宅へ暫時ながら」と老人ンの、詞に是非なく政右衛門「然らば、御免ン」と打通れば門の戸引キ立テ主の幸兵衛、傍近く差寄ッて、「多勢を相ィ手に今の働き感心の餘り役ク人ンを欺キ歸し、難ン儀を救ふは身共が寸ン志、それに付ケても訝しきは貴殿ンの柔術、正しく拙ッ者が流儀に同じき神陰の極意、手練せられし旅人は」と訝かる色目、此方も不審、

○死活のいけ　柔術の當身で氣絶せる者に活（急所を突き又は揉みなどして蘇生さすこと）を入れること。

○苦い挨拶　弱蟲のざまを笑ひもできず、にがにがしく眞面目くさつての應對。

○曲者　怪しい者。一くせある者。わるもの。饅頭屋本「節用集」に「怪物（くせもの）」。

○昨今なれど　見知り申して間もないことなれど。

○神陰　[illegible]（實は荒木又右衛門）は宗嚴の門下である。「寛政重修諸家譜」第六輯・卷千百三十四に「宗嚴」となつてゐる。

○心憎し 憎う思ふほどえらい。奥ゆかしい。「[illegible]」[illegible]に「[illegible]心にくく[illegible]」

○相好 かはつき。顔容。容貌。[illegible]

○變られし 「變」かはじられし[illegible]

○指南 [illegible]

●遠州行燈 丸行燈。「物類称呼」[illegible]に「[illegible]を[illegible]津國にてゑんちやんざんと云、是はゑんしうあんど[illegible]」

○[illegible]木田宮内 [illegible]

○手鹽にかける 手づから面倒をみてやる。自分で手をくだして世話する。(見聞引)

○一を聞いて十を知る [illegible]

○[illegible] [illegible]で分銅な振[illegible]、鎖で首な捲きたおす[illegible]

○[illegible]

一神陰流の極意なりと、見極られし御老人ニ、ハヽア心憎しと鑓方ヾ、ためつすがめつ見合す顔、ムヽお別れ申して十年余り、相好は變られしが、生國勢州山田にて、武術の御指南下されし要様ではござりませぬか、ヲヽ其詞で思ひ出した、我勢州に有りし節、幼少より育上げし庄太郎で有ふがな、成程〳〵、然らばあなたが、其方が、是は〳〵と手を打つて、盡ぬ師弟の遠州行燈搔立搔立打眺め、ヲヽ稚顔に見覺有庄太郎に相違ない、ハテ健に生立しな、ハア先生にも御健勝で、ヲヽサヽ無事の對面互に満足、去りながらアヽ思ひ廻ハせば過行月日、其方は山田の神職荒木田宮内が悴なれ共、幼少の砌父母に離れ孤兒となる不便さに、手鹽にかけて育つる所、稚立より武藝を好むは、末頼もしく思ふより、門弟共へ稽古の序、一手二手と教ゆる中、一を聞て十を知る頓智といひ器用といひ、十五以下にて鎗術劒術鎌鎗、體術柔術に至る迄、諸歴歴の弟子を追抜き、神陰の奥義を極むる無雙の達人、何卒大家へ仕官致させ、親の氏をも繼せんと、心頼みに思ふ中、未熟の師匠と見限りしか家出致して十五年、便なければ折りにふれ、此庄太郎は如何なりしと、雨につけ風につけ思

○有附　我が仕へる主にありつくこと。仕へる主君を得ること。

○さる事　さあること。もつともな事。

○うくわつ　注意を拂はないこと。うつかり。無思慮。

○白髪の母　[illegible]

○器量　[illegible]

○聟殿　[illegible]の夫をさす。

○後楯　うしろみ。後援。

ひ出さぬ事もなく、夫婦打チ寄り其方が噂、シテ只今の住所は何國、有リ附きしとも、あらざるかーと師匠の慈愛に政右衛門、思はずはつと手をつかへ「親にも勝る大恩の、師匠を見限り家出せしと、御ン疑ひは去ル事なれど、常々武術の御講釋、小耳に覺ゆる其中に、一ッ派に心を凝さんより、諸流に亙り修行をなすこそ、此道の心がけと御教訓、心魂にしみ渡り十五歳にて國を出、普く諸國を遍歴し、武術を磨く武者修行、天運に叶ひ然るべき主取リも致させしかど、生れ付ィたる好色者、亂酒に主人の機嫌を損じ、只今は元の浪人、たよるべき方もなければ、昔ニ上方に有リ付キもやと、志して參る所、思ひがけなく先生に面目もなき對面ーと、うかつに、それと身の上を、言ハぬ底意は白髪の母、樣子聞てや一間を立チ出、「ヲヲ庄太郎か、テモ成人仕やつたの、連合の眼鏡に違はぬ武藝の上達、器量を見込ミで頼みたい仔細が有。ーと聲をひそめ「其方の家出仕た時は、三つ子のアノお袖、もふ十七に成ルはいの、緣有ッて許嫁の其聟殿を、親の敵と附ケ狙ふ者が有ル故、まさかの時の後楯、力に成って下ださらば、餘の人千人萬人ンにも勝りて嬉しう思ひますーニヲ、いかにも／＼、庄太郎と知らぬ先、難儀を見兼救ひしも、其娘を頼ま

○假名　通稱又は俗名をいひ、實名に對する稱。武士は假名の外に二字の實名を有す。股五郎は假名である。
○上杉　上杉顯定。
○まだしも　まだ十分とまでは行かぬが、それでも。せめても。
○心付かねば　今まで氣が付かねば。
○壁に耳　何處で誰が聽いてゐるやら知れぬ意。「世間話」に「壁に耳、天に口」といふこともある。
○蓋は取らぬ　[illegible]
○小助　江戸時代、村役場に雇はれて驅使に供される者の稱。
○とんきよ聲　間の拔けた聲。調子はずれの大聲（頓狂聲）。

ん下心」と、師匠の詞聞もあへず政右衛門摩寄て「ムウ其附狙ふ敵の假名は」「ヲヽ聟といふは上杉の家來、澤井股五郎といふ侍、附狙ふは和田志津馬と、聞た計面體は知ねど共、高で知たる若輩者、幸兵衛が片腕にも足ぬ相手、が爰に一つの難儀といふは、彼奴が姉聟唐木政右衛門といふ奴、音に聞へし武術の達人、假令五十人百人加勢有とて、政右衛門には及ばぬ〳〵、まだしも唐木に立合んは、其方ならで外にはない、何卒聟に力を添へ、助太刀頼む庄太郎」と、餘儀なき頼に政右衛門「先生に内縁有股五郎殿に力を添れば少しは師恩を報ずる理り、如何にも助太刀仕らふ、サヽ此上は澤井殿の隱れ家へ御案内」と、せき立つ唐木忍びの眼八、蓋押明て差覗く影をちらりと見付る幸兵衛、心付ねば「ヤレ〳〵嬉しや、庄太郎の今の詞聞たからは千人力、ドレ聟殿へ」と立上るを、「ハテ要らざる女の差出、股五郎殿の行方は知らぬナハテ、壁に耳有世の諺、それと慥に知ねば共、言聞すには折が有ふが、うかつにそれと明されぬ、噛しの蓋は取ぬが秘密」とどこやら一チ物歩の小助、門の戸叩て「申〳〵、庄屋殿から急な御用、只今お出」ととんきよ聲、「ハア又闕破りの詮議で有ふ、否と言

はれぬ役目の不祥」と、言ィつゝ、羽織引ッかけて、たしなむ大太刀差こなす、腰もかゞみし海老錠を葛籠にしつかと。「コリヤ女房、今も言た咄しの蓋、戻つて來る迄明ヶぬ様、心におろした此錠前ナ、合ッ點ンか」と詞の謎、聞ヶ女房も解やらぬ、雪道いとはぬ高ヵ足駄、さす傘の骨組も人トに勝れし岩調作り、歩を先ャに幸兵衛は心を、殘して出て行ヶ。「戻らしやる迄寢られもせまい、絲績ながら咄しませう」、「ハア今に御上根な事、マア火にお當りなされませ、私も是から下モ男同然に、お遣ひなされて下ヶさりませ」、「何ンのいの、此方様は大事のお客、マア煙草呑でゆるりつと、寢轉んだがよいわいの」、「イヱ／＼物體ない師匠の内、ホンニ此煙草はどこから參つた」、「ソリヤ親仁殿が旅戻りに、貰てござつた上方煙草」、「ハアあなたのお口に合のなら、服部か國府か、此天氣に斯して置ィたら濕りましよ、留守事に刻で見ませう」、幸ィ爰に切ゥ臺庖丁、底に劔の葉揃へ、敵を聞ャ出す煙草の小口、葉卷、手早くきり／＼と、夫の體を小廻りの、奉公ぶり、哀れなり、外は音せで降雪に無慙や肌も郡山の、國に殘りし女房の、思ひの種の生れ子を抱いて逢ィ海山を、辿り／＼て岡崎の、宿より先キに日は暮て、何國を宿と、定メなく、

○不祥　因果。近松作「傾城反魂香」にも「武家に生れたふしやうには大門口で立腹切り」。（古院本には「不肖」と書けるが多けれど、もとより當字である。）
○だら　「だんびら」の略。太刀。近松作「持統天皇歌軍法」に「大だら差こはらし」。（見宗引）
○差こなす　具合よく差す。
⊙海老錠　腰が海老の如く屈まるにいひかく。
○高足駄　雪道を高足駄で行くは、いかに矍鑠［くわくしやく］たるかを見せてゐる。
○がんでう　しつかりと丈夫なこと。五調・岩む・岩乗・岩畳などと書いてもある。（見宗引）
○あるき　既出。
○上根（じやうこん）　[illegible]根氣強きこと。根性は佛語で、根性良質の義、轉じて氣力、忍耐力の意にいふ。
○何のいの　何をいふことぞ。[illegible]
●服部　[illegible]
○國府　[illegible]
○底に劔　[illegible]
○[illegible]

がはと轉ればわつと泣く、子を賺す手も、冷凍る、雪の蒲團に添乳の枕、いんのこ〳〵に友誘ふ犬の聲々、夜廻りの番が見付る小提燈、「ヤイ〳〵軒下に何で寢るのじやきり〳〵行け」と叱られて「ハイ〳〵、私は秩父坂東廻る順禮、癪でお腹を痛めまする、ちつとの間置しやつて」、「順禮でも幽靈でも在の中に寢さす事はならぬ〳〵、意地ばるは猶胡散者、棒戴くな」と提燈差付見る棲外れの尋常さ、白眼んだ眼うつかりと細目に明る戸の隙間、内から覗く夫婦の緣、思ひがけなき女房お谷、ハツと喫驚差合せ包む我が名の顯れ口、異ない所へ切かけた煙草の及金、胸を刻むと人は知らず、「フウ見た所が、小盜する風俗共見へぬ、此寺に乳吞兒抱へて難儀じや有、何處ぞ後生氣な所を頼んで、泊て貰はしやれ、エヽ見れば見る程頭合なゑい女房、一人寢さすは殘念なれど、此方も寒い氣に閉られ、瘦畑の酸漿で可惜物を見逃す事」と、呟き歸るも頼みなき、人の詞もせめての頼、火影を力に戸口に這寄、幼い者を連れた順禮でござります、

一 し、異な事を[illegible]これも折惡う庭で煙草を刻んでゐたからだと、胸を刻まれるやうに苦悶する意

○フウ見た所…見逃す事 夜廻り番太の詞。

○後生氣 佛に歸依し[illegible]

○瘦畑の酸漿 [illegible]ぬ一物に喩ふ。

○胴盤 いたはしいこと。(見索引)
○郡山 大和國生駒郡郡山町。
○岡崎 三河國岡崎市。東海道五十三次の一。
○油園 もと油の臭を搗いた園藝の場であつたのが、轉じて食い物になつたといふ。
⊙いんのこ 「犬の兒」の訛。小兒を眠らさうとする時にいふ語。
○秩父 武藏國秩父三十四番札所をいひ、其の中で最も名高いのは橋立寺である。
○坂東 坂東三十三所觀音。
○順禮 巡禮とも書く。靈場を順拜する者。靈場を順拜する者は、功德を受け冥福を得るといふので、もと印度や支那から傳はつた思想。我が國では、花山法皇が御行脚修行の事あつてから盛んになつた。
○癪 胸部又は腹部に痙攣を起して烈しく痛む病氣で、婦人に多い。癪の字は積聚の積に疒を加へて、積の字の異音讀にしたもの。
○在 この在郷。
○胡散者 怪しい者。支那小說に胡散とある語が、我が常用語となつて、廣東音を傳へた。
○棲外れ 身のこなし。
○尋常 立派い意。しとやか。みめよきこと。
○細目 夜廻りの番人の白眼は美人を見て綠の目になつたといふ、外の人聲を聞いて締り戸を細目に明けることをいひかく。
○差合はせ 互に差控へねばならぬ障り。ここでは、秦作を殺してゐる政右衛門が、妻子と邂逅

お情に今宵一夜さ、お庭の端に」と計りにて癪に、苦しむ息切の、聲に主は涙もろく、「いとしや癪持そふな、門中に寢てはたまるまい、泊て進じよ」と立て行、「南無三寶」と裾引留、「ア、是は又御麁相千萬、此お觸の嚴しい中、殊にお役柄の此内、何處の者やら知もせぬに、滅多に引入、後の難はどふなさる、屹度止しになされませ、夜中に一人歩行女子、碌な者じやござりませぬ、戸を明ずと追去したがよござります」、「いか樣のふ、親仁殿の留守の中は用心が肝心、コレ〳〵旅人、いとしけれど一人旅を泊るは御法度、御城下の中は軒下にも寢る事はならぬ程に、宿はづれの森の中へ往て寢やしやれ」と和らかに、言て引出す絲車、「來いと云たとて行かれる道か道は四十五里波の上」、「ハア何處へ行ても一人旅は泊てくれふ樣もなし、遙々の海山も、此子の顏を旦那殿に、見せたいと思ふ精力で、産落すから此巳之助、漸忌も明や明ず、國を立てついに一夜さ、家の下で寢た事がなけりや、身はならわしと山寺の、鐘が鳴れば寢る事にして、星の光を燈火と、思ふて寐入ど今夜の暗さ、氷の樣な此肌で、寢苦しいは道理じやはいの、殊更癪で乳は張らず、雪に凍雨に打たるゝ、辛

○主（あるじ）　幸兵衞の妻をさす。

○南無三寶　しまつたりと思ふ時にいふ語。（見索引）

○めつた　彼此の別なくやたらに。蓋しこの語「べた」「並（なめた）」の轉であらう。滅多は當字。

○ろく　まろく（圓）の義、完全であつて缺ける所なきをいふ。正しくて缺點のないこと。碌は當字。

○法度（はつと）　掟（おきて）の義。轉じて、禁制。

○來いと云たとて…四十五里波の上」　流行小歌に「來いと云（ゆ）たとて行かりよか佐渡へ、佐渡は四十五里（或云四十九里）波の上」。

○忌も明く　忌明（いみあけ）は産の穢れの終る日。出産から忌明までの日數は、父は七日、母は三十五日といひ、或は五十日といひ、又は百二十日といひ一定せず。

○身はならはし　身の常習となるをいふ。「拾遺集」雜門の部の歌に「手枕のすきまの風も寒かりき身はならはしのものにぞありける」。

○鐘　入相（いりあひ）（日沒時）の寺の鐘。

さは骨に徹ゆれ共、旦那殿や弟が、敵を尋ぬる辛抱は、まだ〳〵〳〵こんな事ではは有まいに、其艱難に較べては、事は愚鈍の上にも、寝るのがせめて女房の役々、氣は張詰ても此癪の、重るに付ては二人の身に、勞れの病が起りはせぬか、萬一悲しい便やなど聞たら、何とせふぞいのふ、頼上るは觀音樣、弟夫の武運長久、我子の命息災延命、未練な事じやが私も、此子を夫に渡す迄は生て居たい、死ともない」と、傍に夫の有ぞとも、知らぬ不便さ食しばる、喉に熱湯内外に水火の責苦、雪霙、子を濡さじと抱しめ〳〵、天道哀れ内の積り、重る旅勞れ、癪と寒さ氣に閉られてアッと一聲氣を失ひ、どうど倒れし物音は、肝にこたへて「南無阿彌陀、南無阿彌陀佛」も口の内、「今のは何ぞ」と主の母、戸を引明ればばつたりと、身は濡鷺の目はどみたり、「こりや眩暈が來たのじやはいの、ヱ、いぢらしやどうせうぞ、夫よ幸此氣付」と、とつかは文庫に用意の藥「ア、申そりや御無用になされませ」、「なぜにいの、こりや親仁殿の道中で、持しやつた結構な氣付」、「サア其結構な氣付を、非人同然の者に吞して、それでも氣の付ぬ時は、かゝり合に成ますぞへ、此儘にして、

○旦那殿　政右衛門。
○弟　志津馬。
○悲しい便　政右衛門・志津馬が敵を討たずして果てるなどの消息。
○觀音樣　順禮となつて廻國してゐるのであるから、「頼み上ぐるは觀音樣」というた。
○南無阿彌陀佛　政右衛門が人に悟られぬやうに口の内で唱へる念佛。前に「煙草の刃金胸を刻む」といひさし、ここには「肝にこたへて」といふ。政右衛門の苦悶を示してゐる。
○どむ　どろりとして視力を失へるをいふ。
○とつかは　急ぎ慌（あわ）てるさまにいふ。蓋し足を飛び交す意であらう。
○非人　乞食。

放出して、お仕舞なされませ」、「じやと云ふてどふ見捨に成ル物、アレ可愛や乳を捜して泣ヶわいの、せめて此子を殺さぬ樣に、奥の炬燵で温めて遣ませう」、地風に當じと寢卷キの※襦袢、※あかの他人には慈悲深く、※比翼とかはす女房を惨ふ引キ出し、フシ戸を、引立、地奥口見廻ハし差足し、勝ッ手は見置ヶ釜の前、附ヶ木の明ヵり見咎て、人は何とか※いひ柴を、そつと隠して門の口、伏たる妻に氣を付ッる柴の焚火、の暖り、地噛しめる齒を押割て、雫に潤す氣付ヶの一ッ滴、耳に口寄セ聲微め、お谷と言ふも憚りて、心の中で呼生る、夫の眞通じてや、うんと一ト聲ニ氣が付ィたか、「コリヤ女房」、「ハア、アア／＼、政右衛門殿かいの」と、言ふを押ッへて「コリヤ何ニにも言ふな、敵の在所手がかりに取リ付キたぞ、此屋の内へ身共が本ンの名、※けぶらいでも知ラされぬ大事の所、其方が居ては大ィ望の妨、苦しく共堪へて、一ッ丁南の辻堂迄、這ふてなり共行てくれい、※吉ッ左右を知ッす迄、氣をしつかりと張詰て必死ヌるな、サア早ふ行こ、行け」と、夫の詞は千人ニ力ヲ、※觀音ニ樣のお引キ合ィせ、お前に逢たは※人參熊膽、エ、忝い／＼が、坊は何處へ」「氣遣ひすな、坊主は奥で寢さして置た、ソレ／＼向ふへ來る提燈、見付ヶられな早ふ／＼」とせり立ッ、れ

○襦袢　葡萄牙語(Gibão)訛つて「じゆばん」といふ。肌着。
○あかの他人　幸兵衛の妻をさす。
○比翼　翼をならべて飛ぶ鳥の義。以て夫婦の契の親密なるに喩ふ。白居易の「長恨歌」に「在レ天願作二比翼鳥一」。
○いひ柴　「言ひ」をいひかけ、また釜の詞に應じて「焚」をもいひかけて、柴火をきかせたものであらう。一作「言ふ」に「しひしは柴也、言にいへり」。
○けぶらひ　「けぶり」(氣振)の延言。そぶり。
○吉左右　吉報。
○人參　[illegible]人の[illegible]する形であるによつて名づく。
○熊膽　[illegible]

ど、此年月の悲しさと嬉しさ高じて足立ず、杖を力に立かぬる、とやせん側に脱捨し、薦に積りし雪の儘着せて、人目を暗き夜を、ぼか／＼戻る達者親仁、「ヲヽお歸りなされましたか」、「ヲヽ庄太郎、寒いに門に何して居る」、「イヤお歸りが遲い故、お迎ひに出かける所」、「ナンノ迎ひには及ばぬ、こりや門口に柴の燃さし、非人共が業で有、不用心な」と見廻す提燈、「イヤ私が」と取拍子、わざとばつたり、「コリヤ麁相」、「だんない／＼、きつい風で既に道で取られふと仕た、まだも好い所で火が消た」と、言ふもこたへる疵持足、天氣も大方上がり口、庭から足拭く下駄直す師匠思ひに機嫌顏、「イヤ馴染程結構な物はない、是から緩りと夜と共咄そふ」、彌最前頼んだ事、違變はないの」、「是はお師匠其覺へぬくどいお尋、心許なふ思し召なら、鈍刀でない魂を、只今金打」、「アヽコレ何のそれに及ぶ事」、「及ばぬとおつしやつても、お頼なさるゝ本人の、股五郎殿の在所、御存じないとおつしやるは、お師匠の詞に鞘が有かと存じられ、頼まれるに力がない、ナント左樣じやござりませぬか」と、探る心の奥より女房、稚兒抱走り出、「コレ親仁殿最前に行倒れの順禮が、抱て居た此乳呑兒、今晩を明て

○とやせんかたへ　こやせん斯くやせんと、うろたへた意に、側といひかく。

○だんない　大事ない。

○疵持つ足　其の身に弱點があれば、何でもない事にも氣遣ふといふ意。「足に疵持ては薄（すゝき）にも怖る」、「足に疵持ては茨が走れぬ」などいふ。

○夜と共咄さう　夜もすがら咄さう。

○心許なう　不安心に。

○金打　武士が大小の刀を拔いて打合はす事で、誓を立てる時にする業。若し誓約に違はば此の如く大小刀を打折りて、二度大小を帶せざる身と成るべしとの意。後には大小の刀を拔いて打合はせないで、刀を少し拔いて納める時に、鍔と鯉口と觸れてかちと音させること。「神靈矢口渡」第二に「刀の鯉口投さかけて、丁々と金打し」

○及ぶ事　[illegible]

○鞘があるか　[illegible]

見れば、守の中に此書付、和州郡山唐木政右衛門子、巳之助と書ィて有ル わいの」、ヤア地と幸兵衛立チ寄ッて、「誠に〳〵、※シヤアよい物が手に入ッたぞ、敵の悴を人質に取ッて置ヶば、此方に六分の強味、敵に八チ分の弱味有リ、股五郎殿の運の強さ、其※餓鬼隨分大事にかけ、乳母を取ッて育るが、計略の奧の手」フシと悦び勇めば、地政右衛門ずつと寄ッて稚兒引寄、喉笛貫く※小柄の切ッ先キ、幸兵衛驚き、詞「コリヤ庄太郎、大事の人質なぜ殺した」、「ハヽヽヽ此悴を留メ置キ、敵の鋒先を挫かふと思し召、先生の御思案、お年の加減かこりや些と※撚が戻りました。武士と武士との晴業に、人質取て勝負する卑怯者と、後々迄人の嘲り笑ひ種、※少分ながら股五郎殿の、お力に成ル此庄太郎、人質を便りには仕らぬ、目指す相手政右衛門とやら云ふ奴、其片割れの此小悴、※血祭に刺殺したが、頼まれた拙者が金打」と死骸を庭へ、フシ投棄たり、地幸兵衛手を打チ、「ハヽア尤、其丈夫な魂を見届たれば、何をか隱さふ、股五郎は奧へ來て居るはいの、祖母婿殿を起して※おぢや、コレ〳〵股五郎の片腕に成、頼もしい人が來たと、言ふて爰へ呼でおぢや」、「スリヤ、澤井股五郎殿は此内に居さつしやるか、フウシテ、外ヵに連の衆でもござるかな」、「イヤ〳〵供もな

○シヤア　感動詞「サア」の訛。

○餓鬼　小兒を罵つていふ。蓋し食を求めて泣き叫ぶからの稱であらう。

○小柄　鞘に添へて差す刀。

○撚が戻る　心のしまりがゆるむ。氣象がにぶる。

○少分　少し許り。大きな助けはとても及ばず、少々の助けを致すといふのである。

○血祭　軍陣に牲の血を以て軍神を祭ることをいひ、轉じて戰ひの手始めに殺すをいふ。

○おぢや　おいでやれ。ござれ。

したつた一人、奥底なふ咄してたも」と、打明ヶ語るは思ふ壺ニ何條知ーたる股五郎、手取にするは安かりなん」と、手ぐすね引て待大膽、志津馬は女房が案内に股五郎が片腕とは、何奴なり共只一討と鯉口くつろげ居合腰、氣配り目配り互にきつと「ヤア此方は」「此方は」と一度の仰天、幸兵衞むんずと居直り、「唐木政右衞門・和田志津馬、不思議の對面滿足で有ふな」と、先がけられし二人より、思ひがけなき女房が心どきまぎ不審顏ニ「ナント老人の目利よもや違ひはせまいがの、今宵澤井股五郎と、名乘來る年ヶ配恰好、聞及びしとは拔群の相違、扨は却つて附ヶ狙ふ、志津馬か、但し餘類の者か、肌許させて詮議せんと、態と一ヶ杯食ふた顏ニ三寸組板見拔いたれど、我が弟子の庄太郎が政右衞門と云事を、知たは漸たつた今、骨柄といひ手練といひ、あつぱれ股五郎が片腕にせんものと、賴めば早速承知仕ながら、股五郎が在所を根を押ゞて、聞たがるは心得ずと思ひしが、子を一刳りに刺殺し、立派に云放した目の内に、一滴浮む涙の色は隱しても隱されぬ、肉親の恩愛に始てそれと、悟りしぞよ、澤井にさせる恩はなけれど、娘お袖を、城五郎方へ奉公に遣た時、筋目ある人の娘、末々は我一家の、股五郎と娶

○何條 「なにでふ」(「何云ふ」の約つまり)つた詞、「なんでいふ」「なんちふ」の義。「何條」は當字。
○知れたる わかり知れたる。
⊙手ぐすね引く 「手につばきよる」と同じ意。身がまへして敵をまつをいふ。
○鯉口 刀の鞘口をいひ、鍔と相合ふ所。(見宗引)
○居合腰 半ば右膝を立て、敏速自在に刀を拔き敵と立合ふ腰付をいひ、劍術の[illegible]。
○女房 幸兵衞の女房。
○肌許させて 心置きなく安心させて。志津馬に對して油斷させ、肌身を許させる心をきかせて、かくいうた。
○三寸組板見拔く 眼前の調べるをいふ。ここでは「九月目の直越」にも見えてゐる。「三寸見通し」ともいふ。
○骨柄 [illegible]
○一滴浮む涙の色 [illegible]にて[illegible]に武士には[illegible]恩愛の情をや[illegible]義理に當りては敢行したるも[illegible]其の情愛は忍びざる心[illegible]、これぞ日本武士道の精神である。
○[illegible]

合せん、ヲ、いかにもお頼申と、つい云た一言が、今更引れぬ因果の縁、其後娘は奉公引て歸りしかど、今落目に成た股五郎、見放されぬは侍の義理、隠匿ふ幸兵衛狙ふは我弟子、悪人に與してくれと頼に引れず、現在我子を一思ひに殺したは、劒術無雙の政右衛門、手ほどきの此師匠への言譯さりとては過分なぞや、其志に感じ入、敵の肩持片意地も、最早是切只の百姓、町人も侍も、變らぬものは子の可愛さ此方は男のあきらめも有、最前ちらりと思ひ合す、順禮の母親の、心が察しやらるゝと、悔めば門に堪かねてわつと泣聲内よりも、明ヶる戸直に轉び入、あへ亡骸を抱き上げ、コレ巳之助、物言てたも、母じやはいの／＼、昨夜迄も今朝迄も、憂い辛い其中にも手打仕たり藝盡し、父御によふ似た顔見せて自慢せふと樂しんだもの、逢と其儘刺殺す、惨たらしい父様を恨るにも恨られぬ、前生にどんな罪をして侍の子には生れしぞ、こんな事なら先刻の時、母が死だら憂目は見まい、佛のお慈悲の有ならば今一度生返り、乳房を吸てくれよかしと、庭に轉びつ這廻り抱締めたる我子が身も無と、消入る風情なり、志津馬涙押拭ひ、此上は包ん様なし、迚もの事に眞實の、敵の在所を一、何が扨、此方も隠

○引かれず　退引「のつぴき」ならず。
○過分　分限に過ぎてあること。轉じて鄭重の意。
○百姓　庶民の義より轉じて農夫の稱となる。「詩經」に「群黎百姓云々」。
○あへ亡骸　敢無を卽ちはかりあひなきの意に、亡骸「なきがら」をいひかく。
○とても　いつそ。
○有様　實際。（見索引）
○したり黒星　うまく言ひ當てたの意。ちと射

弓から出た語。
○とても　何としても。
○薬師堂　岡崎市六供町にある薬師堂（伊云本尊伝教大師作）で、薬師堂裏手の山越しに信州飯田に出られる信州街道が通じてゐる。
○中仙道　中山道とも書く。江戸時代江戸京都間の[illegible]、[illegible]、[illegible]六十九驛ある。
●そぎ尼　[illegible]
◇お袖が尼になる仕組を以て、[illegible]
○男　[illegible]「[illegible]の男」とつづく。
○けさころも　袈裟衣。今朝頃もをいひかく。今朝迄[illegible]
○鐵漿うたる鐵漿附け　[illegible]
○[illegible]
○泣かぬ[illegible]　泣くべきを泣かぬ[illegible]

しはせぬ、有様は此幸兵衛、最前庄屋へ呼れた時、股五郎に逢て來た」、「ヤアすりや敵は庄屋の方に、」心得たり　と駈け出すを、政右衛門引キとゞめ「愚々、我レ我、爰に有ルと聞ィて、暫時も此地に足を留ふ樣がない、早五六里も行キ過て、もふ爰らに敵は居ぬ、此行ク先も用心して、海道筋へはよも行クまい、道を變へて落たと見へる親仁樣、何シと左樣でござらふがな」「したり黒星其通り、迚も非道の股五郎、天シ道の御罰にて、どうで討るゝ者なれ共、此岡崎で勝負さすれば、肩持ねばならぬ幸兵衛、藥師堂の山越に中仙道へ落したは、城五郎へ一ッ旦シの情、股五郎との緣も是迄、思はぬ方便が緣に成リ、志津馬殿と言交した、娘が身の果不便やーと、見れば籬の小蔭より、思ひ切ッ髮墨染の、袈裟に變りしそぎ尼姿、「お袖か、ヲヽ、出かしやつた、惡人シの股五郎に、假リにも女房と言ィの付ィた、其間違ィが其方の不運、可愛や盛りの黒髮を」、「アヽコレ申シ、もう何シにも申シませぬ、顏は見ぬ共許嫁の、男持ッのがうるさゝに、屋敷を戻つた其時キから、尼に成ル氣で袈裟衣、今日一日に氣が變、染違ふたる鐵漿附ヶを元トの白歯と墨染に、染直しても剝しても思ひ初た煩惱の、心が剝れぬ佛ヶ樣、御赦されて」と身を背け、泣ヵぬ

氣を泣ク親心、股五郎にも志津馬にも緣を離れたお袖道心シ、袖振合ふも他生の緣、子に別カれた順シ禮に菩提の爲のよい道連、「關役人の我ガ娘、關所關所も切手いらず、中仙道への、案シ内者勝ッ手に連レて行カれよ」と、娘に敵の導キを、流石子故に踏迷ふ、未來の契り鉦撞木、淚で渡す父母の、恵も、深き觀世音、南無阿彌陀佛南無阿彌陀、我ガ子は冥途の道しるべ、志津馬・唐木も恥合ふて、悄れぬ表武士の禮、師弟は内證敵同士、「此儘歸るは卑怯者、返せ」と一聲切付る、「得たり」と請る牛シ蓋に馬士の胴切ル重切リ、「まつ其通りの手柄を待ッ」、「まだお手の内は狂ひませぬ、ハヽヽヽ」、「やがて吉左右〳〵」と笑ふて、祝ふ出立は侍なりけり

○道心　佛果菩提を求める心をいふ。この心を發起した者を道心者といひ、略して道心ともいふ。
○袖振合ふも他生の緣　袖の觸れ合ふも前生よりの因緣であるとの意の諺。この諺は佛敎の說に據つたもので、「松ゆづり葉」などにも見えてゐる。
○菩提　梵語 Bodhi. 正覺などと譯し、眞如の理を覺り道の極意に到達する聖智をいふ。悟を開くこと。
○切手　手判ともいひ、旅行券。徳川時代旅行するには、其の所在地の名主五人組の手判を得て、關所の番人にそれを見せて通過を許されたものである。
○鉦撞木　順禮に出るのであるから、鉦と撞木（鉦を打鳴らすに用ひる丁字形の棒）とを父母が渡すのである。
○父母の恵も深き觀世音　西國三十三所順禮歌第三番粉河寺、紀伊補陀洛山施音寺、本尊十一面觀音「父母の恵も深き粉河寺佛の誓頼もしきかな」。
○恥合ふ　互に相手の姿を見るを恥ぢあふ。
○表　表面、内面に對す。

○牛蓋　牛掛（まがけ）の事。兩掛（天秤棒の兩端に掛け、衣服などを入れて擔ふ一對の葛籠）の片方をいふ。前文に蛇の目の眼八が葛籠の中に匿れてゐることが書いてあるそれである。

この所幸兵衛が蛇の目の眼八を斬る。其の電光石火の手腕を見せて、なるほど劍術の達人であるのを示したもの。

第九、伏見の段

登場人物の主な者

和田志津馬（行家の子）　瀬川（志津馬の愛人）　池添孫六（孫八の兄）

池添孫八（志津馬の家來）　唐木政右衛門（志津馬の義兄）　石留武介（政右衛門の若黨）

櫻田林左衛門（澤井股五郎の伯父）　呉服屋十兵衛（股五郎に出入の商人。瀬川の兄）

梗概

和田志津馬は瀬川と共に敵の行方を尋ね、伏見の船著場北國屋に泊り、林新五と名を替へ、伴つて眼病を裝ひ、主君上杉顯定の病死を聞いて悲歎の涙にくれる。櫻田林左衛門は其の隣家八百屋の奥座敷に假寓して、林新五の動靜を窺ふ。これを知つた池添孫八は板屋勘兵衛と替名して按摩取となり、又其の兄池添孫六は竹中貧宅と替名して眼醫者となり、兄弟共に林左衛門に近寄り、之を欺いて股五郎の在處を知る。

尋いで政右衛門も武介を連れて苫船から駈付け、林左衛門の寓居を襲うて呉服屋十兵衛を斬付ける。そして十兵衛の自白によつて、股五郎一味の者どもが、巨椋堤を經て伊賀越を過ぎ、志州鳥羽港から船に乗り、九州相良に遁れようとするを知つた。

ここに於て志津馬一味の者どもは、之を伊賀越（「伊賀越」の題名これによる）の途中で要撃しようとし、時は正に五つ（午後八時）夕闇を衝いて、武夫の思ひつめたる一筋の、道を踏分け急ぎ行く。

第十、敵討の段

登場人物の主な者

和田志津馬（行家の子）　唐木政右衛門（志津馬の義兄）　池添孫八（志津馬の家來）
石留武介（政右衛門の若黨）　澤井股五郎（行家を殺した惡漢）　櫻田林左衛門（股五郎の伯父）
團四郎（股五郎の部下）

梗概

志津馬・政右衛門・孫八・武介の主從は、合詞を定めて手分けをなし、伊賀國上野の北谷四つ辻（鍵屋の辻）で敵の來るを待受ける。間もなく股五郎一味の者どもが小田町筋へ打通る。これを見た志津馬は木陰から現はれて名乘を上げ、敵味方入亂れて戰ふ。孫八・武介之に死し、政右衛門は林左衛門・團四郎など數多の敵を斬殺した。志津馬は股五郎と切結び、深手を負へども撓まず屈せず、いづれ劣らぬ手練の働に勝負つかず。其の場に政右衛門駈付け「助太刀の奴等は皆殺した。たゞ殘るは其奴一人、踏込んで討留めよ」と呼ばはつた。其の聲に志津馬は力を得、敵がたゝみかけて撃つ太刀を受流し、やつと掛けた聲と共にざつぷり股五郎を斬り斃した。かくして長い月日辛酸を嘗めた彼等は、遂に不倶戴天の讐を討ち、以て年來の本望を遂げた。

總評

和田志津馬は、不倶戴天の讐澤井股五郎を討取らうと志したが、敵の一族縁者は、彼を庇護した。其の爲に志津馬や政右衛門は容易に決行の機を得ず、敵の跡を尋ねて、長い間の根氣くらべ、東海道の道筋をたどり、窮迫に苦しみ病魔に惱まされ、幾多の障礙を突破する度毎に波瀾を捲起し、犠牲者を出した。其の間には政右衛門・志津馬等の志に對して、譽田大内記・宇佐美五右衛門・山田幸兵衛等の有力者の同情を得て、遂に本懐を達する大團圓に導いた。これは本曲の一特色である。（「道中雙六」の題名も之に因む）

伽羅先代萩

解題

天明五年正月初めて江戸の結城座に上演された。作者は松貫四・高橋武兵衛・吉田角丸である。

本曲は九段に分れ、伊達騷動を仕組んだ戯曲中の最も名高いもので、其の第六（御殿の段）は殊に有名である。

實説

伊達騷動を劇に仕組んだものは、これまでに「開闢今川狀」（延享元年五月江戸市村座に上演）「大鳥毛五十四郡」（延享三年十一月江戸森田座に上演）、「けいせい睦玉川」（明和四年正月大阪中座に上演）、「けいせい紅葉襠」（安永元年七月江戸森田座に上演）、「伽羅先代萩」（安永六年四月大阪嵐座に上演）、「伊達競阿國戲場」（安永七年七月江戸中村座に上演）、「同」（安永八年三月江戸豐竹東治の操座に上演）がある。又別に實錄物もある。

伊達騷動は、伊達藩の奸臣原田甲斐・多田刑部等一味の者相謀り、幼君龜千代君を弑して伊達家を横領しようと企てたのに起る。原田の命を受けた荒木和助は、幼君を刺しそこなつて入牢する。近臣神並三左衛門は原田から差入れの酒を荒木に飲ませると、荒木は悶死したので、神並は毒酒であつたことを知り、原田の無情を怒つて一味を裏切り、荒木から得た連判狀を證據に水戸黄門に直訴した。龜千代君の乳母淺岡は身を捧げて幼君を守護し、我が子の千代松が片倉小十郎に連れられて御殿に來ても、忠義の心を鈍らせぬ爲に親子の名乘りをしない。後、遂に片倉小十郎・伊達安藝・松前鐵之助等の爲に、原田一味の陰謀は失敗に終つた。

本曲はこれ等の著作物の影響を受け、殊に安永六年に上演された「伽羅先代萩」、及び實錄物に依つて、更に技巧を凝らしたものである。

主要人物の略傳

本曲は、萬治・寛文年間の伊達家騷動を、世を憚つて源賴朝時代に擬して仕組んだもので、源賴朝公とあるは德川四代將軍家綱の事である。

伊達冠者太郎義綱、これに伊達綱宗のことである。綱宗は萬治元年仙臺城主となつて陸奥守といふ。萬治三年二月將軍に謁し、台命を奉じて江戸筋違橋の土木工事を督し、吉原の三浦屋に遊んで遊女高尾に狎れた。後見役の伊達兵部宗勝は權を專らにしようと企て、原田甲斐宗輔等の奸佞の輩を擇んで綱宗の近侍とし、益々綱宗を放埒に陷れたので、宗勝・宗輔は我が奸策の成つたのを喜び、在藩の諸老に愛想を盡かさせようとして、書を送つて主君の失德を發いた。これに驚いた伊達安藝宗重・伊達安房成房・片倉小十郎景長・伊達上野宗篤・石川駿河義則等は馳せて江戸に上り、相連署して綱宗の爲に隱退を幕府に請うた。よつて綱宗は萬治三年七月十八日終に品川の別邸に蟄居することになつた。時に年二十一。歿したのは年七十二。

高尾は野州鹽原に生れ、承應年間江戸新吉原京町一丁目三浦屋の妓となり、萬治三年に高尾を名乘る。仙臺侯伊達綱宗に馴染んで落籍されたことが幕府に聞え、綱宗は萬治三年七月品川の別邸に蟄居を命ぜられ、高尾之に仕へてお椙といふ。享保元年七十八歳で歿した。墓は仙臺荒町日蓮宗佛眼寺にあつて、表に「妙法淨休院法讃日晴大姉享保元年十一月二十五日」と刻してある。（一説にお椙は高尾とは別人で、高尾の歿後綱宗が三浦屋に遊んで愛した遊女お椙であるともいひ、高尾にはなほ異說もある。）

鶴喜代丸は伊達綱村のことである。綱村は綱宗の子。小字を龜千代といひ、二歳で家を嗣ぎ、幕命によつて伊達兵部宗勝・田村右京宗良が國事を視る。兵部は幼君の叔父に當るので簒奪の志を抱き、原田甲斐宗輔も亦其の奸を助けた爲、龜千代君の身が危くなつた。之を知つた伊達安藝宗重以下忠義の士が身を棄てて之に當り、遂に安泰を得るに至つた。綱村長じて精勵治を圖り、神佛を尊崇し儒者を貴み、文武諸藝の道場を起し、農産業にも力を用ひたので、治績大いにあがつた。有名な仙臺平は實に綱村の時に出來たものである。綱村はまた皇室尊崇の念頗る厚く、屢々金幣を大朝に獻上した。官從四位上中將となつて、享保四年六月二十日歿す。年六十一。肯山と諡し、大年寺に葬る。大正十三年二月朝廷舊功を賞されて從三位を追贈された。

影響

本曲の第六（御殿の段）は其の後も屢々操人形芝居に上演された。歌舞伎劇でも、本曲に工夫を凝らして現今の「先代萩」を大

成したものである。女丈夫政岡が纖手を以て、累卵の危い伊達家を支へ、惡人の頭上に天誅の下る時を待つたあの涙ぐましい場面は、大衆に感激を與へて、忠勇義烈の我が國民精神を鼓舞してゐる。

第一（舟岡山。躑躅山）

登場人物の主な者

伊達冠者太郎義綱（奥州五十四郡の領主）　高尾（島原三浦屋の遊女）　楓（禿）
夏（遣手）　頓吉（幇間）　錦戸刑部（義綱の伯父。惡人）
荒灘風之助（刑部の臣）　三浦屋才助（傾城屋の主人）　源之助（貝田勘解由直勝の子。忠臣）
松島（伊達明衡の娘。源之助の妻）　熊川源五兵衞秀影（義綱の忠臣）　貝田勘解由直勝（刑部一味の惡家老）
有松金助（勘解由の若黨）　常陸之助國雄（秀衡に滅ぼされた常陸大掾國香の末子）

梗概

奥州の領主伊達義綱の伯父錦戸刑部一味の者らは、義綱を暗愚な者にして忠臣の輩に愛想を盡かさせ、鶴喜代君を跡目に立て、遂にはこれもなきものにして、その跡を横領しようとかねて反逆を企ててゐた。義綱はその陰謀に陷り、舟岡山の麓に下屋敷を新築して島原の遊女高尾と同棲し、禿の楓・遣手の夏・幇間の頓吉を呼寄せて身を持崩してゐる。錦戸は荒灘風之助に三萬兩を持來らせて積上げさせ、「御世帶には金がなくてはなりませぬから、持參させたこの金で當分お凌ぎなさいませ」と、話してゐる時、遊女屋の主人三浦屋才助が尋ねて來て、遊女高尾の身請金にとて千兩を持去つた。

その後忠義な源之助は妻松島と共に来り、松島が話せと勧めたことを箇條書にして、「一つ殿様御放埒の事」とやつたので、奸臣錦戸聞咎めて、「これは松島の入智恵であらう。いらざる女の忠義立て」と極附けた。この時嘗て義綱に諫言して追拂はれた忠臣熊川源五兵衞が、紅葉を鉞に括り附けて入り来り、「殿様を放埒にした高尾めを打殺す」と喚き、錦戸の手を摑んで眞逆様に投付けたので、錦戸と斬合ひにならうとする途端、錦戸一味の貝田勘解由が現はれて、いかにも忠義らしうに源五兵衞が嫌して、源之助・松島と共に立去らせた。その後に勘解由の若黨有松金助が馳入つて義綱を連出した。錦戸の臣荒灘風之助は義綱を道で弑さうとして其の一足前に出た。

貝田勘解由は伜源之助が行方不明になつたと聞き、その跡を尋ねて躑躅山に分け入り、山に籠つて妖術幻術の修業を積んでゐる常陸之助國雄に遇ふ。そして共に伊達義綱を殺すことを約し、祕密の漏れぬやうに、そこに居た部下を皆殺して去つた。

第二（義綱上屋敷門外）

登場人物の主な者

伊達冠者太郎義綱（奥州五十四郡の領主）　高尾（島原三浦屋の遊女）　稲妻響助（神浪山左衞門の替名。忠臣）

荒灘風之助（逆臣錦戸の家來）　伊達治郎昌衞（義綱の忠臣）　和泉小治郎定倉（義綱の忠臣）

梗概

伊達義綱は酒色に身を持崩し、沈々と更け渡る眞夜中に、千鳥足で高尾の肩に縋り、稲妻・荒灘に護られて上屋敷に歸れば、城門が鎖つて靜まりかへり、「殿様のお歸り」と呼んでも返答がない。荒灘は癪に障り、大聲を上げて門番を罵ると、忽ち城内

に高提灯を掲げて人の足音騒がしうなり、「御門の警護は伊達治郎明衡・和泉小治郎定倉」と名乗り、嚴重を極めてゐるので、いかにしても醉ぱらひの義綱公や遊女を連れては入りにくく躊躇してゐる。その間に、逆徒に一味してゐる荒灘は、透を狙つて義綱を斬殺さうとした。之を見た稲妻は直ちに荒灘を斬殺し、門内から定倉が、「天晴れ當座の褒美」と言つて投げた一通の書状を拾ひ上げ、義綱・高尾を連れて立退く。

第三（貝田屋敷）

登場人物の主な者

貝田勘解由直勝（刑部一味の悪家老）　お綱（勘解由の下婢）　お睦（勘解由の下婢）
源之助（貝田勘解由の子。忠臣）　松島（伊達治郎明衡の娘。源之助の妻）　千賀之助（明衡の子。松島の弟）
奇妙院（勘解由一味の山伏）　熊川源五兵衛秀影（義綱の忠臣）　渡會銀兵衛（御膳奉行。逆臣）
大場道益（藩醫。忠臣）

梗概

貝田勘解由直勝は京都神明町に豪奢な邸宅を構へてゐる。下婢のお綱・お睦等が座敷を掃除しながら、錦戸刑部が足繁く來ることや、若旦那源之助が蓮臺野の邊で狼に取巻かれたといふ噂などを話し合うてゐる。折節源之助が妻松島と共に現はれ、韜晦して狂亂を装ひ、松島が之をいたはつてゐる所に、弟の千賀之助が來たので、之と挨拶を言交はして別れる。

源之助は何を思つたか、謠曲「船辨慶」の一節を謠つてゐる時、山伏奇妙院が源之助の祈禱に來た。熊川源五兵衛が之を見て

高笑ひすれば、源之助は嘆語をしやべり立てて倒れ、鼾をかいて眠る。奇妙院は數珠を揉み、祈り立てて源之助の眠を覺せば、源之助は煩さがつて謠曲「道成寺」や「鐵輪」の一節を取交ぜて謠ひながら、奇妙院を投飛ばして上に乘りかかり、壓殺して奥の間に入る。

渡會銀兵衛は大場道益を伴うて來り、勘解由に逢うて、道益が調合した毒藥を道益の手から勘解由に渡させようとする。その時、道益は其の毒藥を鶴喜代君に呑ますのだと聞いて、其の惡逆を罵つて立去らうとする。勘解由は之を後から斬付けて殺し、懷中を探つて二包の毒藥を取出し、その一包を銀兵衛に與へて鶴喜代君の毒殺を謀らしめ、他の一包は勘解由が手づから釜に入れ、煎じて松島に呑まさうとする。その所へ、銀兵衛が眞青になつて駈戻り、「鶴喜代君の膳部に毒藥を入れたのを、鶴喜代君の乳母政岡に悟られ、強力者の節之助が膳番の川崎軍八を糺問しだしたので、錦戸刑部はその發覺を恐れて證據を堙滅する爲、軍八や並居る近習・小姓・腰元等十人許りを卽座に手討ちにされた」と、語つて引返した。

源之助は松島を刺し、自害して父勘解由の惡事を諫めた。熊川源五兵衛は之を見て、源之助夫妻の忠節に感じて落涙し、敵の投付けた釜の熱湯毒氣に噎びながら、取圍む惡徒を斬拂うて立退いた。

第四（浮世渡平住家 / 豆腐屋）

登場人物の主な者

お澤（豆腐屋の女主人。吉尾の母）　お幾（郷助の娘。お澤に養育された）　重三郎（浮世渡平の子。お澤に養はれる）

浮世渡平（熊川源五兵衛の替名）　大木戸門兵衛臂利（錦戸刑部の家來）　稻妻郷助（神浪由左衛門の替名）

伊達冠者太郎義綱（奥州五十四郡の領主）　高尾（お澤の娘お種。義綱の愛人）

梗概

お澤は我が子として育てたお幾と、浮世渡平の子の重三郎と共に、南禪寺の門前で豆腐屋を營んでゐる。その隣家に住んでゐる浮世渡平の所へ、錦戸刑部の家來大木戸門兵衛が尋ね來て、「隣りの豆腐屋の女主人は高尾の母であるから、いづれ伊達義綱・傾城高尾が尋ねて來るであらうが、その時は彼等二人を討取つてもらひたい」と頼む。渡平は僞つて之を請合うた。

豆腐屋ではお幾と重三郎とが相思の仲となつてゐる。お澤が南禪寺へ參詣してゐる時に、高尾は義綱を連れて尋ね來る。

稻妻鄕助は義綱の供に遲れて昔知合ひのお澤に出遇ひ、自分が置去りにした娘のお幾がお澤に養育されてゐることや、また義綱公を救ふ爲に、密かに殺す機を狙つてゐた高尾はお澤の娘であることが知れ、高尾を殺すに忍びないで、我が子のお幾を殺して高尾の身代に立てようと決心して、之をお幾に話す。お幾は父が子の愛に絆されて討ちおほせぬを氣遣ひ、態と未練な擧動をして親の手にかかつて殺される。（この所近松作「嫗山姥」の冠者丸最期の構想を其の儘取入れた）

その所へ浮世渡平も來て居て、奇妙院が持つてゐた處方に合はせて、辰生れのお幾の生血を酒に混ぜ、伽羅を焚いて之を煎じ（本曲の題名「伽羅」は之に基づく）以て義綱に服ませたので、義綱も長い夢の覺めたやうに改心し、加茂川に隣る砂川に隱居所を建てて籠ることとなつて、世を鶴喜代に讓る。重三郎は高尾を連れて近江の眞野に立退き、お幾の爲に發心して名を道鐵と改め、鄕助は娘お幾の首を定倉に渡すこととなり、恩義と忠義とに別れ別れとなつて、出でて行く。

第五（堅田の浦の道行と眞野の途中）

登場人物の主な者

大木戸門兵衛曾利（錦戸刑部の家来）　浮世渡平（熊川源五兵衛）（秀影の替名）　高尾（義綱の愛人）

重三郎（渡平の子）　雨攀（行脚僧）

梗概

大木戸門兵衛は大勢を引率して近江路にさしかかり、浮世渡平を呼寄せて、「自分は主君の錦戸刑部から波の平行安の刀を拜領した上、仰を承つて、義綱の胤を孕んでゐる高尾が近江にゐると聞いて殺しに來たのだから宜しう頼む」と語り、渡平を連れて堅田の浮御堂に參詣した。

〔道行夏野のさらし井〕重三郎は高尾を連れて近江路を行く道で、鄙歌を聞き琵琶湖を望んで、死んだ愛人お幾のことを思ひ出し、高尾と共に涙に袖を濡らす。折から高尾が知合ひの行脚僧雨攀に遇ひ、相連立つて堅田の浦に著いた。

重三郎の一行三人は、堅田から眞野に行く道で大木戸門兵衛の一行に遇ひ、門兵衛は重三郎と戰ひ、刀折れて逃げ行くを、渡平は重三郎としめし合はせて門兵衛を呼戻し、これを賺すやら嬲るやらして路銀も刀も奪ひ取つた。

第六（御殿）

登場人物の主な者

鶴喜代丸（伊達義綱の嫡子。眞明石十四郎の幼君）　政岡（鶴喜代君の乳母。伊達明衡の妹）　千松（政岡の幼兒）

八汐（[illegible]の妻。惡人）　小卷（大場道益の妻妹）　沖の井（著士頭信夫庄司爲村の未亡人）

榮御前（逆徒一味の梶原平三景時の妻）　松ヶ枝節之助（鶴喜代君の忠臣）

梗概

〔飯炊きの場〕幼君鶴喜代丸の鎌倉の館では、錦戸刑部一味の逆徒がはびこつてゐる爲、乳母政岡は幼君の身を氣遣ひ、幼君を病氣と沙汰して男の面會を謝絶し、同年配の我が兒千松を幼君の遊び友達として、食事も悉く自分が調へた物の外は差上げないことにしてゐる。八汐は小卷を連れて沖の井と共に幼君の見舞に來た。沖の井は忠義を辨へて惡意を持つてゐないが、八汐は夫に從つて逆心を抱き、政岡に無實の罪を被せて牢に入れようとしたが、鶴喜代君が政岡を慕うて許さないので、政岡は幼君の恩に感泣する。



實錄先代萩　鶴千代丸（中村正太郎）　淺岡（五世中村歌右衞門）　千代松（中村兒太郎）

かくて八汐等に妨げられて膳立の支度が遲れ、若君や千松がひもじがりながら能く政岡の言付けに服從し、童謠などに慰められて膳立の出來るを待つてゐる。漸く煮炊きを終へた政岡は、まづ我が兒に毒試をさせて後幼君に差上げた。

「政岡忠義の段」逆臣錦戸刑部に内應してゐる梶原景時の妻榮御前が來り、賴朝公からの見舞と言うて、毒を入れた菓子折を鶴喜代君に與へた。鶴喜代君は甘さうに之を眺めて食はうとするを、政岡は制しかねてもがく所に、かねて敎へておいた千松が、この時とばかりに走り出て其の毒菓子を取つて食ひ、忽ち懊亂して菓子折を蹴散した。八汐は毒を悟られては一大事と、千松を刺して罵りながら嬲り殺しにするけれども、政岡は顏色も變へないで見てゐる。榮御前は政岡の平氣なのを見て、小卷から聞いた通りに、彼が若君と我が子とを取替へ、反逆に一味してゐるものと一人合點して、政岡に惡事の企を打明けて去つた。

榮御前の歸つた後、八汐は隱れて居て政岡が我が子の非業の死を悲しむを聞き、政岡を刺さうとして飛出し、沖の井・小卷から、「不忠不義の銀兵衛夫婦、工みの次第を白狀せよ」と、聲を掛けられ、政岡と渡り合うて刺殺された。

〔床下の段〕 この時床下で組討の騷がしい音が聞えて、忽ち節之助が現はれ獅子奮迅の勢で、反逆一味の忍びの者どもを投飛ばした。其の中に常陸之助國雄の魔術で飛出た大鼠が、伊達藩主系圖の一卷を盜み銜へて驅け行くのを見付けた節之助は、手裏劍を擲つて之を傷付けた。

評

偉大な人物は偉大な人格者の感化に因つたものである。女丈夫政岡が育てた二人の幼兒は實に立派な者である。いづれも克く困苦缺乏に堪へ、危機一髮の際に、若君は乳母を救ひ、千松は死して若君を救ふ。其の愛らしい幼兒の聲と其の童謠と、涙に濕る女心とを錯綜させ、君臣親子の至情を巧みに描き盡した。

斯くて艱難に遭遇して必らず之に打克ち、轉禍爲福の成果を收める我が國民性を、一婦人政岡を以て示した。實に日本精神を國民の心に甦らしめる好資料である。蓋しこの名作の著想は、近松作「丹波與作待夜の小室節」上卷、滋野井子別れから暗示を得たものであらう。

第六

何時迄も、變らぬ御代に、※相竹の、代々は幾千代、※八千代經る、千代を壽く、
※爪音は、鎌倉山に美を盡す、冠者太郎義綱公の奥御殿に、※懦弱の聞へ隱れなく

○相竹　伊達家は竹を抱合せて中に雀の紋なればいふ。そして[illegible]御殿竹の間をきかせた。
○八千代　彌千代の義。はかり知れぬ多くの年代。
○爪音　箏を彈く音。
○懦弱　なまけて意氣地の無いこと。「だじく」
[illegible]

※砂川へ隱居有ければ、御長男鶴喜代丸幼稚ながらも御家督定り、近き頃より御病氣とてお傍には男を禁じ、諸士の對面叶はねば家中を始め※典藥まで、何と思案も※爲んじ樣、常より館物淋し、諸士頭信夫の庄司爲村の後室沖の井御前、渡會銀兵衞が妻の八汐、打掛姿しとやかに、禮儀正しく打通り、「イヤ申八汐樣、大殿義綱樣御隱居遊ばし、御幼稚ながら御家督の鶴喜代樣、此程より御不快とて御食事も召上れず、殊更人に逢給ふ事がお嫌ひとて、男を禁じて近習※小姓も遠ざけられ、お傍には政岡殿、腰元衆の外ヵ叶はず、何卒直に御容體伺ひ申ス私が心」「さればいな、手前の夫ト銀兵衞は※御膳奉行と云、今後見の刑部樣の※御出頭、夫さへ御對面叶はぬとは、コリヤ政岡の胸中に、深い所存か有ッての事か、モ今日は是非共御容體見屆ねば下られずと、奥女中まで申シ込置たれば、御保養旁々追ッ付是へお出の筈、何かの樣子とつくりと心をお付遊ばせ」と、二人が噂の程もなく、奥より腰元走り出、「殿樣是へ御出」と、知らせの中に、まだ頑是無き鶴喜代君、お傍の※お伽も同い年政岡が子の千松が、舁いて出たる鳥籠の、「エイ〳〵　サツサ」、愛らしき、跡に附添ッ※お乳の人、はつと二人シは頭を下ゲて恐レ、敬ひ奉る、政岡御

○砂川　京都出町橋の東で、川端通りの東に沿へる地。

○典藥　昔、宮廷又は幕府の醫藥を掌つたものをいひ、諸侯もその稱に倣つた。

○せんじ樣　ここの文は、家來は勿論、醫者までも若君に面會を謝絶されてゐるのであるから、若君の病氣の容態が知れねば、思案のしやうもなく、藥の煎じやうもなく、見舞ふ者も稀なれば、若君の病中は常よりも物淋しいとの意。

○小姓　貴人の側に給仕し、煙草盆・お茶・お手水など總て膝許の用を辨じるもので、年配十三四歲の者がこの役に多い。

○御膳奉行　藩主の食膳を擔當する職名。(德川幕府にもこの職名がある)。

○出頭　要路に居つて政務に當る武家の職名。錦戶刑部は幼君鶴喜代丸の後見をなし、出頭家老職である。西鶴撰「武道傳來記」卷之一に「出頭家老にて諸事でかしだてに、物每子細らしく吟味する」。

○お伽　お相手となつて機嫌をとること。

○お乳の人　貴人の子をはぐくむ乳母。

◇數多の惡黨に附狙はれてゐるこの三人が連立つて初めて現はれた。其のいた〳〵しい姿を見よ。然もこの君臣水魚の交りは盤石よりも堅固である。

前ンに手をつかへ、「信夫の庄司爲村の後室沖の井、渡會銀兵衛の內方八汐、御病氣の御樣子、伺ひの爲參シ上」と、申上れば大人しく、「二人共能ふ見舞てくれた、大儀、大儀」と情有ル、仰にはつと恐入、「誠に存せしよりは麗しき御容體、見奉りて我々が安堵、去リながら御食事進み給はぬ由、モ一家中の心遣ひ、恐ながら沖の井が、申シ付ケし今日の御膳、少し成共召上られ下さる樣、ソレ〳〵早ふ」と詞の下々、はつと答へてお傍の女中、捧る膳の目八分、御前ンに直せば、嬉しげに、「そんならモウ、飯食ふても大事ないか」と、座に着給ふを政岡が、尻目に睨まれ、もぢ〳〵と、「イヤ〳〵、おりやモウ飯は厭じや〳〵、アレ見よ千松、雀が飯を食ひたひやら、口を明ィて鳴クはいやい、弱い奴じや」と乳母が顏、見やる目元トに淚ぐむ、御心根のいたはしさ、じつと堪へて政岡が、「イヤ申お二人樣、彼の通り御膳をお進め申ても、いやじや〳〵と御意遊ばす、お傍に附添政岡が心遣ひ、御推量下さりませ、ガ醫脈を伺ひ申さんにも、男帶せし者はお嫌ひ、夫レ故に典藥も」、「ヲヽ此八汐も其處へ心の付し故、御典藥大場道益が妻の小卷、女ながらも夫トに劣ぬ醫術の譽、御容體伺はせん爲召連レて參りし、ソレ召出せ」と

○後室　身分ある人の未亡人をいふ。
○內方　內證ともいひ、他人の妻の敬稱。おくさま。
○一家中　伊達一藩の家來全體。
○目八分　貴人に差出すのであるから、口の息がかゝらぬやうに、膳が我が眼と八分通り見える程、目より高く持つこと。（見榮引）
○まゝ　飯。「うまうま」（甘々）の約。小兒語。
○男帶せし者　夫を持つてゐるもの。現に配偶者ある女。「せし者」は「せる者」とあるべき所。（妻を持つを妻帶するといふ）。
○小卷　小卷の夫〔をつと〕道益は貝田勘解由に殺され、小卷は寡婦になつてゐる。

詞の下タ、はつとお次へ腰元がやがて、伴ふ※年シ輩も、四十に近き、※二つ髷打掛さばきも、しとやかに遙、末座に手をつかへ、「恐れながら、大場道益が妻の小卷、御脈伺ひ奉らん」と、すり寄レば政岡が、「いざ」と勸めに鶴喜代君、御手を出させ給ひければ、恐れ愼しみ御脈體、篤くと伺驚く面シ色、「ヤアコリヤ是只今必死のお脈」と、言ふに喫驚驚く人々暫し、言葉も無かりしが、沖の井御前不審顏、「イヤコレ小卷、※御物越御顏色常に變らぬ御樣子、夫レに必死の御脈とは」、「ハア成ル程御不審御尤、仰の通り麗しき御容體、夫レに引換へ絶命の御脈は、モ何共不思議、恐れながら若君樣、是へ御越遊ばされよ」と、遙此方へ※たへ誘ひて、又も伺ふ御脈に、はたと手を打、「ハテ不思議や、あれにて見れば必死の御脈、今又是にて伺へば、常に變らぬ御脈體、ハテ、怪しや」と眉に皺、政岡始人々も更に心は納まらず、何思ひけん沖の井御前、長押に掛ケたる長刀押取、ぐつと突込ム天井の、板こじ放ナせば怪しき曲者、落るを透さず取て引ッ伏、用意の捕繩手ばしかく※高手小手に括り上、「お脈の不審の其根元、サア眞直に白状せよ、※陳ずるに於ては水責火責、憂目を見するがサア／＼何シと」と、極付られて「アアコレ

○年輩　「としはへ」（年延）の訛。としごろ。

○二つ髷　「嬉遊笑覽」卷一下に、若衆の髷をいへる條に「まけは髻に元結多く卷き、二つまげにしたるもあり、また茶筅なるもあり」とある。ここは年增の女が髻を分けて髷を二つに結うたのである。

○ものごし　物越しに聞える音聲の義。轉じて、音聲。（見索引）

○たへ　重複か。

○高手小手　人をきつく嚴重に縛るさまにいふ。（見索引）

○陳ず　虚僞の申立てするをいふ。（見索引）

申ます／＼、イヤモ斯顯るゝ上からは有樣に申ます、鶴喜代君を殺してくれと、賴まれたも褒美が欲しさ」、「ムヽ其賴人の名は何ンと」、「サ何者に賴れた、サア／＼どふじや」、「サア何ンと」と倶に詰寄ル政岡が、顏を眺めて「テモ扨も、アノ白しい顏わいの、其賴人は誰で有ふぞ即此方」、「ヤア何と」「ア、／＼、もふ隱しても隱されぬ、千松とやらを代に立たさ、若君を殺してくれとナソレ、賴ましやつたじやないかいの」、「ヤア下郎めが大それた僞り言、コリヤ白を科に取ッて落さん爲、己レを賴んだ拵へ事じやな」、「イヤ政岡殿、モ如何樣にあらがはれても、此方の工みと云ふ事は此八汐が睨んで置た。とても叶はぬ覺悟召れ」、「ムヽ假初ならぬ一チ大事、マとつくりと紏しもせず、妾が業とおつしやるには、何ンぞ慥な」「ヲヽ證據と云ふは其曲者、サ現在此方を傍に置ィて彼の通りに言ふからは、モ是に上越す證據は無い、ガまだ其上に、コレ此一ッ通、鶴が岡の神ン木の本トに、埋て有ッた釘付の箱、內に込メたる願ン書の文ン言ン、若君を調伏し、我子を出世させたい望、願ン主松ヶ枝節之助、乳母政岡と、あり／＼と書たが慥な證據、サ何と違ひは有ルまいがの」、「イヤイヤ夫レも眞赤な似せ筆、更々

○ありやう　ありのまゝ。（見索引）
○白しい　しらぐ／＼しい。知つてゐながら知らぬさまな。いけづう／＼しい。
○大それる　途轍〔とてつ〕もない。大間違である（見索引）
○あらがふ　あらそふ。論爭す。
○とても　如何に釋解されたとても、の意。即ち助詞「とて」に「も」の添はつた語で、「どうしても」の意をなし、下に多くは打消しの語をともなふ。
○鶴岡　鎌倉鶴岡に「鶴が岡の神木」とあるは、上宮樓門の前の石階の西側にある大銀杏樹をさしたものである。
○調伏　佛敵を法力で調伏滅除すること。
○まつかい　「まつか」（眞赤）に「い」の添加した語で「眞赤な嘘」などの眞赤で、全くの意。

此身に覺はない、無實を言ィ懸け跡で後悔なさるゝな」、「ム、是程慥な證據が出ても、まだ潔白なあらがひ立テ、シテ又覺無いと云ふ、サ證據が有ルかな」、「サア夫レは」、「サア／＼何ンと」と、詰掛られて政岡が、覺無き身の言譯も、證據なければ今更に、無念涙の、外カぞ無き、「ヲヽ言譯は有ルまい／＼、言譯無くば遁れぬ科人ン、節之助諸共に、牢屋へ打込ミ急度糺明、今日より若君の御守役は此八汐、ヤア／＼侍中、政岡を括り上、牢屋へ引ヶ」と、呼はるにぞ、若君はおろ／＼涙、「乳母が牢へ行なら、己も附ィて行たいわいやい」、「ヱヽそりやマア何を御意遊ばす、八汐が申事能ふお聞遊ばせや、彼の政岡はな、君に敵たふ大科人ン、「イヤ科人でも大事ない、乳母は何處へも遣る事ならぬ」、「デモ伯父御樣、刑部樣の仰付」、「イヤ／＼其刑部も、其方達も、皆己が家來じやないか、夫程牢へ入度ば政岡が代りに、其方達から牢へ行ヶ、乳母と離れて居る事はいやじや、いやじや」と腕白も、自然と備はる仁心ンに、嬉しさ限り政岡が、身に染み渡る有難涙、只掌を合ハす計なり、流石の八汐も主命に、返答なければ沖の井御前、「君の仰までもなく、お乳の人に科ヵは無い、朝夕お傍を片時離れぬ政岡殿、サ誠若君を害せ

○おろおろ涙　臚々涙の義。泣いて涙のうるむこと。

○さすが　「しかすが」の約。これを「流石」と書くは、「倭訓栞」に「流石は、晋ノ孫楚が石に漱ぎ流に枕すといふ故事によれり、さすがによく牽合せりといへり」とある。

○お乳の人　貴人の子をはぐくむ乳母。（既出）

○仕様模様 [illegible]（[illegible]）
○頼もしい頼まれ人 頼もしくない頼まれ人 [illegible]
○同じ事 同じく[illegible]
○詮議立てするお人 [illegible]
○五十四郡 [illegible]五十四郡の[illegible]
○水掛論 [illegible]掛合ひ、其の後でどちらが先に水を掛けたかを爭論するやうに）雙方互に根據なき[illegible]、果てしなく爭ふこと。
○眼鏡外さぬ [illegible]

んと思はゞ、人手を頼む迄もなく、仕様模様も有べき事、サ夫に何ぞや此曲者、誠政岡に頼まれなば、一旦は隠れ遁るゝ筈、白が長刀の光に脆く飛下りしは、ハテ頼もしゐ頼人、又道益が妻の小巻、必死の賑と言たるも、モ餘り割符が合ィ過て、此沖の井は呑ミ込ぬ、アイヤ夫レ計リでない此願ン書、願ン主松が枝節之助、政岡と有ルからは、イヤ／＼夫レとても同じ事、かかる大事を工む者があり／＼と名を顯はし、證據の種を殘し置ふや、サ若や其名が八汐と有バ、お前は科ガを被る氣か、モ餘り工みが淺はかで、詮議立ヲするお人まで、底意の程が心得ぬ、曲者めを拷問して、五十四郡を呑まんとする工みの底を白状させ、惡事に與する方人共、一々首を並べて見せう、サとつくと見物なされよ」と、此場の善ン惡ヶ明ィ白に見通す如き辯舌は、實も信夫の後室と、奥ゆかしくぞ見へにける、理の當然に拉がれて、八汐は猶も減らず口、「テモつべこべと能ふおつしやるの、ガ所詮分らぬ水掛論、モ何時まで言ってもお同じ事、マア此儘に差措ィて、追ての詮議それまでは、小巻も下つて休息召れ」、と目くばせし伴ふ人に一物の、有と見抜キし後室の眼鏡はづさぬ一ト捌、「曲者引ヶ」と嚴重に、心は隔つ、竹の間の襖押明入に

ける、

地 跡見送りて政岡が※正無き事も身に懸る、科は晴れても晴やらぬ、養ひ君の行末を誰レに、問べき樣もなく心、一つの憂思ひ、地 物案じ成ル母親の、顏を※眺る千松に、鶴喜代君も打守り、詞「コレ乳母、モウ何言ッても大事ないかや」、「アイアイ、外カに誰レも居りませず、何シ成リ共御意遊ばせ、ほんに先に沖の井殿、※若へ御膳を上ゲた時、豫て乳母が申シた事お聞入遊ばして、能ふマアお上り遊ばさなんだナア、夫レでこそ此乳母が、お育申シた若殿樣、ヲヽお出かしなされた天晴な」と、地 襃れば※あどなき稚氣に、詞「ヤイ乳母、ひもじいと云フ事は、強ひ武士の言ハぬ事と、常に其方が言た故、己は言ねど、先にから空腹に成たはやい」、「ヲヽお道理でござります、今日は思はぬ事故に、御飯の拵へも遲ふ成リ、貴方樣にも嘸お待兼、千松も能ふ辛抱しやつた、地 モウ拵へて上ます」と立上れば、詞「ノウ乳母、爰に有ル此膳を、食べるのは惡いかや」、「ア、イヤ 申其御膳を上る程なれば、乳母も苦勞は致ませねど、此程から怪しゐ事共、忠義厚き沖の井殿、差上られた其御膳、疑ひはなけれ共、油斷のならぬ此時節、上てよければ此政岡が上まする、コレ能ふお聞遊

○正無き事　よからぬ事。無實の事。政岡と同じ頭音を合はせた所謂頭韻法。

○ながむ　長見(ながみ)る。物思ひして、じつと見てゐるをいふ。

○若　若君樣の略。

○あどなし　「相人(あひうど)なし」の略で張合ひのない義か。小兒などの智慮なきをいふ。「倭訓栞」に「小兒などの慮智なくて事をなすをあどないといふ」。

○御前に聞かす　若君に聞かせてたしなんでもらはうと思ふ。

ばせや、今お館には悪人蔓り、御近習小姓膳番まで、ちつ共心は許されず、忠臣の節之助は、不義者とて遠ざけられ、力とする者も無く、朝夕の御膳は皆庭へ棄させて、私が手づから拵へて差上るも、若毒藥の工もと、微塵心は許されず、空腹なもお道理ながら、御前のお堪へ遊ばす爲、此千松も四五日前から、三度の食事もたつた一度、忠義故じやと堪へて居ります、「コレ千松、其方は言事能ふ聞て、何共言ずに辛抱する、ヲヽ賢い賢い強い強い强者じや」と、譽れば千松、「コレ母樣、侍の子と云ふ者は、ひもじいめをするが忠義じや、又食べる時には毒でも何共思はず、お主の爲には食ふものじやと言しやつた故に、私や何共言ずに待て居る、其代り忠義を仕て仕舞ふたら、早ふ飯を食はしてや、夫までは翌日までも何時までも、斯ふ屹度坐つて、お膝に手を突いて待て居ります、お腹が空ゐてもひもじうはない、何ともない」と詭面作り、涙は出れど稚氣に譽られたさが一杯に、「こちや泣はせぬはへ」と、額を撫て泣顔を、隱す心は流石にも、名に負ふ武士の、胤なりき、母は健氣さいぢらしさ目に持涙、心には、御前に聞ヵす譽詞、「ヲヽそふじやそふじや强者じや、千松はいかう强ふなりやつたわい

の」、「イヤ千松よりおれが強い、ヤイ政岡、おれはちつとも空腹にはないぞよ、お大名と云ふ者は、飯も何にも食べずに、斯う坐つて居るものじや、ナウ乳母、おれは強者じや」、「是は又氣疎い事じやは、そふお行儀な所を見ては、まだまだ千松などは叶はぬ叶はぬ、ヲヽお強いお強い、そふお強ふては、コリヤ早ふ飯を上ざ成ルまい、ドレ拵へふ」とかい立て、傍へに飾る黒棚より、取出す、錦の袋物、風爐に懸ケたる茶飯釜の、湯の試みを千松に、呑ます茶碗も樂ならで、お末が業を信樂や、何時水差を炊ぎ桶、流す涙の水翻、心は清き洗ひ米、釜に移して風爐の炭、直して煽ぐ扇さへ、骨も砕くる思ひなり、「アレもふ飯じや」と御機嫌の、我子も共に悦び顔、見れば胸まで突かくる、涙呑込呑込で、「モウ上ますぞへ」、「母様早ふ上ましてや」、「ヲヽ上ませいで何とせう、今上ゲまするまちつと煮立つ其間、お氣に入の雀の子、モウ親鳥が來る時分、其處へ直してお慰」、「アイアイ」と千松が返事はすれど立悩み、歩む姿もたよ〳〵と、置直したる小鳥籠、ちうと教る親鳥の、軒端の竹に飛かはす、子は孝行に面瘦せて、羽含み返す烏羽玉の、涙を隠す髫髪かゝれば直ッに飯に成る、ソリヤもふ飯じやと悦ぶ子、

○氣疎い　「人氣（ひとけ）疎い」の義から轉じて、おそろしい。えらい。「東海道中膝栗毛」八上に「そりやけうとうよござります」。
○まだまだ　原本「又〳〵」とある。
○かい立つ　「かき立つ」の音便。立つ意をやや強めていふ。「かき」は接頭語。
○黒棚　物を載せる黒塗の棚であつて厨子の類。
○錦の袋　茶を入れて煎じ出す袋をいひ、大名のだから錦で作つてある。
○風爐　緣の一方から風を入れるやうに作り、茶湯に用ひる爐。
○茶飯釜　煎茶の汁で飯を炊く釜。
⦿半太夫　江戸半太夫のはじめた淨瑠璃節の一派。
○樂　樂焼の樂に樂焼をいひかけた。樂焼は天正年間京の聚樂第で朝鮮の陶工に焼かせ、聚樂の二字を底に印せしめたより起つたもので、多くは手づくねの土焼の茶碗で質が脆い。
○お末　下女をいふ。政岡が下女のわざを爲（し）たるを信樂（しがらき）にいひかく。
○信樂　信樂焼は近江國信樂地方から産出する粗質の陶器で、色は鼠又は薄柿である。
○水差を炊ぎ桶　水差しに用ひる桶に、水差子で水を差す意にいひ、いつ炊ぐ法を見習つてかの意をいひかく。
○水翻　茶碗を洗つた水などをこぼし入れる器。建水。涙のしづくをこぼすをいひかく。

◇「黒櫃…骨も砕くる思ひなり」までの文は、炊事[illegible]縁語を織込み、縁語・掛詞を巧みに用ひて修飾してある。
○たよ〳〵 [illegible]弱々しいさま。
○文彌 [illegible]、大坂で[illegible]文彌が語り初めた[illegible]
○打合み返す烏羽玉 「烏に反哺の孝あり」の諺を取つて、烏の字からすぐに烏羽玉につゞけた文飾。
⊙烏羽玉の 「髮」にかゝる枕詞。
○髫髮：飯になる 髫髮は小兒の髮を項「う[illegible]」[illegible]が髫髮を振亂して泣けば、母はすぐに乳を與へるといふ意で、「まゝ」は「うまうま」の小兒語。以て乳のことにいひ、飯をいひかけたのである。
○おろ〳〵 悶々の義、うるむ狀にいふ。「おろ〳〵涙」は涙に目のうるむこと。
○こちの裏の 花嫁御 本曲によつて有名になつた童謠。
○ちさの木 [illegible]科に屬する喬木で、えごの木ともいひ、葉は卵圓形、鋸齒を具へ、花は初夏開き白色五瓣である。
○わしが息子の千松が、七つ八つから金山へ、一年待てどもまだ見えぬ、二年待てどもまだ見えぬ、ほろり〳〵とお泣きやるな、何が不足でお泣きやるぞ これも本曲によつて有名に[illegible]

「コレ千松、何共ないと言下から、忙しない何の事じや、何時も唄ふ雀の歌、唄ふて御前ッの御機嫌取りや、ヱヽ鈍な子では有ルはい」と、叱られておろ〳〵涙、しやくりながらの濕り聲、「こちの裏のちさの木に、ちさの木に、雀が三疋留つて、一羽の雀が言ふ事にや、言ふ事にや、夕べ呼だ花嫁御花嫁御」、竹の下タ葉を飛下りて籠へ、寄り來る親鳥の、餌食をすれば小雀の、嘴さし寄る有樣に、「アレアレ乳母、雀の親が、子に何やら食し居る、おれもあの樣に、早ふ飯が食べたい」と、小鳥を羨む御心根、「ヲヽお道理じや」と言ィたさを紛らす聲も、顫はれて、「わしが息子の千松が〳〵、ヱヽコレ千松、殿樣の御機嫌を、ヱヽ何を泣顏する事が有、ちいそふても侍じや、コレ、七つ八つから金山へ金山へ、一年待共まだ見へぬまだ見へぬ」、「乳母まだ飯は出來ぬかや」、「ヲヽもふ出來まする、一年待共まだ見へぬまだ見へぬ」、「母樣飯はまだかいの」、「ヱヽ忙しない、其方までが同じ樣に行儀の惡い」、「イヱ〳〵私は食べたい事はなけれど、御前ッ樣がおひもじからふと思ふて」、「ヱヽ何のお強いお殿樣が、おせがみなされう、ソリヤ其方がせがむのじや」、「イヱ〳〵わしはせがみはしませぬ」、「サアせがまずば

今の歌、聲張上て唄ふて見や」と、言はれて涙の聲張上ゲ、「ほろり／＼とお泣やるがお泣やるが」、力無く／＼泣聲を隱して連る母親が、「何が不足でお泣やるぞお泣やるぞ」、歌の唱歌も身に當る。涙はお乳が胸の内子故の、闇ぞ遣る瀨なき、若殿小陰を打眺め、「アレアレ千松狆が來る呼べ呼べ」、「狆よ來い來い」と、呼ば駈け來る緣の上、「ヲヽ好い所へ能ふ來たなア、ほんにわれは仕合せ者、おすべりの此御膳、殿樣の御機嫌を、直した御褒美戴」と、紙折敷いて並ぶれば悅ぶ體を見る若君「コレ、乳母おりやアノ狆に成たい」と羨やみ給ふ御風情、聞悲しさを堪へ兼「ヲヽ、お道理じやお道理じや、日本ッ國の其中に幾億萬と限りなき、人の果報を請給ひ五十四郡の御主と。榮耀榮華は上も無き何暗からぬ御身にて、思ひがけない御辛抱、假令賤しい下々でも、斯ふ云ふ事が有ものか、ましてや遂に見も聞も、涙ながらに政岡が申ス事とて大人しう、聞入レ給ふいたはしや、現在御内の御家來が、邪非道に組從ひ、殺害せんとの工みとは、知ッたる故に影身に添イ、お健な御身を御病氣と世間を僞り胴慾に、稚い御身に朝夕さへ思ふ樣に上ぬ故、鳥獸の餌食むをば羨しがるお詞は、御尤共お道理共言ッに言れぬ御

○連れる　連れて唄ふ。

○お乳　お乳の人。乳母（うば）。

○子故の闇　「後撰集」卷十五・雜部、兼輔の歌に、「人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道にまどひぬるかな」。

○おすべり　供物をさげたもの。おさがり。

○幾億萬と限りなき人の果報　幾億萬と限りなく多い人の中に大名の子に生まれる者は、前世で善業を積み、この世にその果報を受けて生まれた者に限る。即ち幾億萬と限りなき人の中の果報者である。

○見も聞きも涙　大名が餓鬼のやうな辛抱をせねばならぬことは、未だ嘗て見たことも聞いたことも無い、といふを涙にいひかけた。

○影身に添ひ　影の身に添ふ如く常に其の身邊を離れぬをいふ。

○雀や犬に劣つたる宮仕へ　前文に雀や犬が餌を食べることをいひ、ここにそれをうけて、若君に食を與へないで苦しめるは、かの雀や犬に劣つた奉公だと、聞え歎くのである。

○忙しい　氣ぜはしくせつく。

○己が食べても、其方が死んでも悪いナア　此の君ありて此の臣あり。

○いそいそ　悦び勇むさま。

身の因果、雀や犬に劣つたる宮仕へして忠義じやと、言ハれうものか」と食しばり、胸も煮立ッ風爐先の、屏風にひしと身を寄て奥を、憚る忍び泣き、稚けれ共天然に太守の心備はりて、「コレ乳母何で泣ぞいやい、其方や千松も食べぬ内、己一人忙しゐと思ふなら、モウ堪忍して泣てくれな、其方達二人ッが食べぬ内は、何時迄も己は怺へて居る、己が食べても乳母が食べずに、死にやつたら悪いナア千松、其方が死でも悪い、ナア」、「ハイハイハイ、能ふおつしやつて遣ヵはされます、アア有難ふ御ざります、乳母が今泣たのはな、アリヤ飯の早ふ出來る呪い、何の悲しゐ事はござりませぬ、コレモウ涙はないナ御覧じませ、ホヽヽヽおかしいおかしいサアサア今の呪いで、モウ飯が出來ました、何時もの樣に、握々して上ましよ」と、飯匙取ッて手の内に、結ぶを千年と待侘て手を出し給へば、「マアマアお待遊ばせや、吟味の上にも吟味せねば、御辛抱の甲斐がない、先御毒試」と千松が、顔を眺めて、「ム、氣遣ひない、サアサア御膳、お心靜かに召ませ」と、言にいそいそ御悦び、「千萬石を手の内に、握る御身に引替へて、只一握りの握り飯を數の珍味と思召ゝ、御心根の物體なや」と君を思ひ我

子を思ひ、心の奥の忍ぶ山忍び、涙の折柄に、「梶原様の奥方御入なり」と、呼はる聲、「ハテ心得ぬ梶原の奥方とは、何にもせよお通し申せ、コレ千松、其方は次へ、常々母が言ィし事、必々忘レまいぞ、サ早ふ、早ふ」と追遣つて、衣紋繕ふ其内に、沖の井・八汐も出迎ひ敬ふ、襖押開かせ、梶原平三景時の奥方、夫トの權威に榮御前、しと〳〵と上座に直り、「ヲヽ何れ何れも出迎ひ大儀、自今ン日來りしは右大將の御上使、夫ト景時承はれ共、義綱の一ッ子鶴喜代病氣によつて、男たる者を禁じたると聞キし故、夫トに代る此榮、義綱隱居の其後鶴喜代の所勞、殊に食事も進まぬ由、御心を付られし此御菓子、賴朝公より下され物、有リ難頂戴有レ」と、持せし菓子箱差出せば八汐引取、「コレハコレハ有難い大將よりの下され物、サア〳〵申若殿樣、早ふ頂戴遊ばしませ」と、蓋押開き、「テモまあ見事な結構な此お菓子、イザ召ませ」と差出す、流石童の嬉しげに、立寄リ給ふ鶴喜代君、「アヽ申御前ン樣、又其樣なさもしい事、御病氣の御身なれば、お毒に成たら何となさるゝ、此方へお越」と政岡が、詞打消す榮御前、「ヤア賴朝公より下さるゝ御菓子、何疑ふて頂戴させぬ、是非此榮が食べさせる」、「ア、イヤ夫レで

○信夫山　岩代國信夫郡の山をいひ、伊達藩内にある歌枕。信夫山忍び涙と頭韻法の文飾。

○母が言ひし事　政岡は我が子の千松に、「食べる時には毒でも何とも思はず、お主の爲には食ふものぢや」と敎へてゐる。これは千松がやがて若君の爲に忠死するに至る伏線である。

○サ早う　サア早う次の間へ行け。

○衣紋繕ふ　襟を正すをいふ。衣紋は衿を胸にあはせた處。

○しと〳〵　靜かに歩むさま。しづ〳〵。

○右大將の御上使　右近衛大將源賴朝公よりの御使者。「上使」とは將軍家よりの使者をいふ。

○所勞　有所勞の略、病氣。

○頑是も　頑是もなく。この所の千松の行爲は、健氣な犧牲的精神のあらはれである。

○忽ち惱亂目を見詰め　千松は忽ち惱亂たるに一詞を補うて見るべきである。

○折　菓子折。

惡婦八汐の殘忍さは、天も之を赦さず、やがて後に滅びずにはすまぬ。

○餓鬼　食に饑ゑた亡者をいふ。以て小兒などを罵っていふ。(見索引)

○成敗　處置。(見索引)

も」、「ム、但し頼朝公の仰は背いても苦しうないかサア、サア、サアサア」と權柄押シ、奧より走つて千松が、「其菓子欲しゐ」と引掴み、何の頑是も只一トロ、八汐が喫驚榮御前、毒の工みの顯はれ口、忽惱亂目を見詰蹴散らかしたる折は散亂、八汐は透さず千松が、首筋片手に引キ寄せて、懷劍ぐつと突込〆ば、わつと一聲七ッ轉八ッ倒、驚く沖の井・政岡が仰天ながら一大事と、若君押遣る我部屋口、戸口に附キ添イ守り居る、「ヤア何をざはざは、騒ぐ事はないわいの、忝くも頼朝公より下されし此折、蹴破しは上への無禮、小さい餓鬼でも其儘には差置れぬ、夫故に手に掛けたは、お家の爲を思ふ八汐が忠節、ム、ハ、ハ、、、、、ヲ、可愛そふに可愛そふに、痛いかゐのふ痛いかゐのふ、他人の私さへ涙がこぼれる、コレ政岡殿、現在の其方の子、悲しうもないかいの」、「何のマアお上へ對して慮外せし千松、御成敗は御家の爲」、「ム、スリヤ、是でも此方は何共ないか、ヤ是でもか、是でもか」と、嬲殺しに千松が、苦しむ聲の肝先へこたゆる辛さ無念さを、じつと堪ゆる、辛抱も只若君の大事ぞと、涙一ッ滴目に持ぬ、男勝りの政岡が、忠義は先代末代まで又有まじき烈女の鑑今に其名は、芳しき、榮は始終

政岡が、素振に氣を付ヶ打ほゝ笑み、(詞)「ヲヽ、出來した八汐、右大將より鶴喜代へ下さるゝ大切の御菓子、小悴めが出しやばつて、※すつての事に大事の工み、イヤアノ大事の菓子を荒した科、殺したは八汐が働き、流石渡會銀兵衛が妻程有ル、政岡には自が、言聞カす事も有リ、沖の井・八汐兩人は、暫く次キへ間を隔て、遠慮召サれ」と榮の詞、(地)何と違變も(色)※沖の井が、深き心は海の、汐の※八汐も打連レて伴ひ、一間へ入にける、(フシ)跡先キ見廻し榮御前、政岡が傍にすり寄て、(詞)「年シ頃仕込ミし其方の願望、成就して嘸悦び」、「エヽ、何ンとおつしやる」、「アイヤモ隱すには及ぬ、東西わかぬ内よりも、取替置し其方の子の、鶴喜代が身に恙なふ、義綱の誠の悴、千松が此最期、嘸本シ望で有ふのふ」、「エヽ」、「ヲヽ、取替子の樣子は先達ッて知つたれ共、若しやと思ひ最前から、窺ふて見る所、血筋の子の苦しみを、何ぼ氣強い親々でも、堪へらるるものじやない、若殿にして置ヶ我子が大事、和女の顏色變らぬは、取替子に相違はない、スリヤ皆々心は同腹中、刑部殿共內談※しめ、諸事我夫の指圖有ラん、先ッ今日は立歸り、病氣の樣子申上ヶん、必ズ何事も、人に悟られまいぞや」と、(地)一ト人呑込悠々と、(フシ)館をさして歸らるる、

○すつての事　すんでのこと。既にの事。もすこしの事で。一歩を誤つたならば。ここの文意は、もすこしの事で大事の工みが失敗にならうとしたが、成功してよかつたの意をいひさして悟らしたつもりである。榮御前は、政岡が我が子と若君とを取替へてゐる噂を聞いてゐたのであるが、政岡が目前我が子千松の殺されるのを平氣で見てゐるので、さては噂は事實であると信じてかくいうた。「小悴めが出しやばつて」とある「小悴」は其の實鶴喜代をさした心算なのである。

○沖の井　ここの文は、何と違變もできずと、思案して胸に手を置きを沖の井にいひかけ、沖の縁語「深き」につゞけて、「深き心」というた。そして「沖」「深き」「海」「汐」「八汐」、いづれも緣語によつて文飾した。沖の井が深き心に惡人の術策を察知した意である。

○八汐　あまたの海路をいふ。〔呪詞式〕「大祓に「荒汐の汐の八百道の八汐道」などあるによつて、人の名の八汐をいひかけた。

○しめ　締め。取りきめ。遂げ。

跡には一人、政岡が、奥口窺ひ、窺ひて、我子の死骸抱き上げ、堪へ堪へし悲しさを一度にわつと溜涙咳き入咳き上げ歎しが、コレ千松能ふ死でくれた出かしたな出來したな、其方が命捨た故、邪智深い榮御前、取替子と思ひ違へ、己が工みを打明けしは、親子の者が忠心を、神や佛も憫みて、鶴喜代君の御武運を守らせ給ふか、ハ、、、、有難や、有難や、是と云ふのも此母が、常々敎へ置た事、稚心に聞分けて、手詰に成た毒害を、能ふ試みてたもつたのふ、ヲヽ出來しやつた出來しやつた、其方の命は出羽奥州五十四郡の一ツ家中、所存の臍を堅めさす誠に國の、礎ぞや、とは言ものの可愛やな、君の御爲豫てより覺悟は極めて居ながらも、せめて人らしゐ者の手に懸つても死ぬ事か、素性賤しゐ銀兵衛が女房づれの劔に懸り、嬲殺しを現在に傍に見て居る母が氣はどの樣に有ふどふ有ふ、思ひ廻せば此程から、唄ふた歌に千松が、七つ八つから金山へ一年ヶ待共まだ見へぬ、二年ヶ待共まだ見へぬと、歌の中なる千松は、待甲斐有つて父母に顏をば見せる事も有ふ、同じ名の付千松の、其方は百年待たとて千ヶ年萬年ヶ待たとて、何の便りが有ぞいの、三千世界に子を持た親の心は皆一つ、子の可愛さに

◇政岡は愛子千松の殺される時、人々の見てゐる所では極めて冷静であつたが、人無き此處では取亂して愁歎にくれる。文の對照妙を極めて、女丈夫を目のあたりに見るやうである。

○手詰になつた毒害　[illegible]が[illegible]るに道なく[illegible]まつた毒害。前文に政岡が愛子千松に教へた詞に、「食べる時には毒でも何とも思はず、お主の爲には[illegible]」とある[illegible]、哀れの極を見せてゐる。

政岡が愛子千松の囀つた童謡を、再び引き來つて斷腸の涙にくれる。その親心は切々讀者の胸を打ち、言々句々人の肺腑を刺すやうである。

○三千世界　三千大千世界の略。廣漠たる一切世界をいふ。(見案引)

毒な物食ふなと言ッて叱るのに、毒と見へたら試みて、死でくれいと言様な、胴慾非道な母親が又と一ト人あるものか、武士の胤に生れたは果報か因果か、いぢらしや、死るを忠義と云ふ事は何時の世からの習わしぞ」と、凝り固まりし鐵石心ン、流石女の愚に返り人目無ければ伏轉び死骸にひつしと、抱付キ前後、不覺に歎きしは、理過て道理なり、後にすつくと八汐が大聲、「何もかも様子は聞ィた、此方の工みの妨女、己レも生ては置れぬ」と、詞の一間押明て、「ヤア不忠不義の銀兵衛夫婦、工みの次第白狀せよ」と、立出る沖の井、「ヤア此八汐に白狀とは」、「ヲヽ其證人ンは爰に有ル」と、言ィつゝ出る顔見て喫驚、「ヤアそちは小卷」、「ヲヽ能い證人ンで有ラふがの、夫道益に言ィ付ケて、無理に毒藥調合させ、此事外カへ洩そふかと、能ふ夫を殺したな、夫トの敵と思へ共、女の身の討ッ事叶はず、態と惡ッ事に一チ味して、先斯う手めを上ゲよふ爲、鶴喜代君と千松を、入替子と言ッたも小卷、夫レ故に榮御前、うま〳〵此場を歸りしも、裏の裏行ヒ加減、サア眞直に白狀」と、忠と不忠と食合せ、毒藥却つて藥と成ル顔に似合ぬ配劑は、類ひ内儀の手柄なり、モウ是までと八汐が懷劍、心得政岡請流す、互ィに嗜む太刀

○胴慾　貪慾（どんよく）の轉。つれなき心。無情。

○果報か因果か　士農工商の中の士に生れたのは果報（仕合）といふべきであるが、それが爲に非業の死を遂げねばならぬとは、何の因果で士の子に生れたことかとの意。

○女の愚　「女の智慧は鼻の先」といふ諺もある。

○一間　一言を一間にいひかく。

○手め　「手前（てまへ）」の約訛。なんぢ。「菅原傳授手習鑑」第三に「今の世の人はきめごまかで、たらが始ていゝ手が目付けて、晩に来て饗酒たべう」とある「手め」も「手前」の約訛である。

○上げる　挙げる。捕へる。

さばき手を盡したる二人の女、我子の恨一ッ心ンに突込ム懐劔打落し、直に切込八汐が肩先キ、ひるむを取ッて突通され、虚空を摑で悶き死、悪の報ひは忽に心地よくこそ見へにけり、「手柄手柄」と沖の井・小巻、共に悦ぶ折柄に、物音人聲騒がしく、「アノ人音は縁の下々、油断ならざる若君の御身の上も氣遣ひなり、ヤア腰元中燈燈」、はつと答へも銘々手燭、手ン手に一腰長刀も閃めき渡る縁の下、身は鐵石の節之助、寄來る忍びを人礫、はらりはらりと投散らす、

物の文色も暗紛レ、丈抜群の大鼠、口に銜へし系圖の一チ巻ン、飛鳥の如く駈行を、透さぬ松が枝小柄の手裏劔鼠の頭忽にばつと燃へ立焔と共すつくと立たる、異形の姿、「ア、ラ不思議や、密に宿直の縁の下、斯取ッ圍みし曲者ばら、騒ぎに紛れ現れしは、群に勝れし大鼠、正しく忍びの幻術成か、ハ、、、怪しやナア」、「此一チ巻ンを奪ん爲、大願ン成就嬉しやなア」、聲は遙かに節之助、「曲者待」と聲より早く、はつしと打たる以前の小柄、心得松が枝忍びを楯、胸先血煙り曲者は跡を、暗まし出て行。

○忍び　忍びの者。忍び入つてゐる者。
○人礫　小石を投げる如く、人を投飛ばすこと。
○文色　あやめ。わかち。差別。
○大鼠　常陸之助国雄が幻術を用ひて大鼠の姿となり、伊達家系圖の一巻を奪つて現はれたのである。
○手裏劔　手の裏に持つて敵に投げかける小さい劔。[illegible]大鼠に投付けた意。
○異形の姿　大鼠は忽ち怪異な姿に變じた。（常陸之助国雄らしい怪しげな姿が現はれたのである）。
○曲者ばら　縁の下を取圍んでゐた忍びの者ども。
○忍びの幻術　忍びの者（常陸之助国雄）の幻術。
○聲は遙か　出でて行く　異形の者の聲は[illegible]

第七（明衡の上使屋敷）

登場人物の主な者

專內（明衡の中間）　是非內（明衡の中間）　江戸兵衛（明衡の中間）
象潟御前（和泉小治郎定倉の妻）　文字摺（千賀之助と許嫁の定倉の娘）　羽根川丹下（京都からの上使）
伊達千賀之助（明衡の子）　萩原藤治（定倉の家來）　伊達治郎明衡（伊達藩の重臣）

梗概

京都から上使が下るといふので、明衡は使者設けの幕を打廻し、中間の專內・是非內・江戸兵衛は常談を言ひながら掃除して去つた。その後に象潟御前は娘の文字摺を連れて立寄り、設けの床几に憩ふ。折しも京都からの上使羽根川丹下に陪從して伊達千賀之助が來たので、定倉の家來萩原藤治が出迎へて挨拶し、「定倉が預つてゐた領地を明衡の支配にお變へになつたが何卒元通り定倉の支配にして下され」と申述べ、丹下と爭論となる。之を聞いてゐた象潟は、丹下の機嫌を取り相伴うて奥に入る。

文字摺は千賀之助を慕ひ寄つてゐる所へ、明衡の來るのが見えたので、駕籠の陰に身をかはした。明衡は幕際近く寄つて文字摺を見、「京都からの上使はお出でになつたか、千賀之助は居ないか」と問ふ。文字摺は狼狽して不得要領な返答をする。其處に象潟が幕の內から現はれて挨拶をすれば、明衡は機嫌をそこね、「自分が預かることになつた領內を、我が忰と和女の娘との許嫁を幸ひに、割返さうとの底意は卑劣だ」と罵つた。象潟は蛾眉を逆立てて張合へば、明衡は高笑ひして、「女は相手にせぬ。子息千賀之助を殺して緣を絕ち、定倉に泡を吹かせてやらう」と言放ち、屋敷をさして歸る。これを陰で聞いてゐた千賀之助は、父明衡が刑部・貝田等の反逆に與したのではないかと疑ひ、意見をしようとして飛出したのを、象潟は之を制止して、千賀之助・文字摺を一緒に駕籠に乘せて衣川の邸に歸る。

第八　（定倉屋敷）

登場人物の主な者

和泉小治郎定倉（鶴吉代君の忠臣）　象潟御前（定倉の室）
女字摺（定倉の娘）　錦戸鷲五郎（錦戸刑部の子）
熊川源五兵衛秀影（鶴吉代君の忠臣）　伊達治郎明衡（伊達家の重臣）
千賀之助（明衡の子）
榧平（鷲五郎の間者）

梗概

和泉小治郎定倉の衣川の館では、庭に萩を植ゑ、先君の愛された花であるとて先代萩と名付けた（本曲の題名「先代萩」は之に基づく）。定倉・象潟・千賀之助・女字摺相揃つて庭の萩に眺め、酒を酌み交はして樂しんでゐる。女字摺は父の機嫌好きを見計らつて、「千賀之助と婚儀のことをお頼み申します」と打明けたが、定倉は千賀之助の父明衡が逆臣に與してはゐないかと、疑つて承諾しないので、相愛の兩人は失望する。

この時人相の悪い錦戸鷲五郎がつか〳〵と入り來り、定倉と明衡とを同士打させようとして、明衡を逆臣と罵り、かねて定倉の館に忍ばせて置いた榧平や、曲者を遣つて奸策を廻らさうとした。けれども其の曲者は定倉等に好意を寄せてゐる熊川源五兵衛であつた爲に、陰謀の裏をかゝれて鷲五郎一味の者は鏖殺され、前栽の萩の露と消えた。

かくて明衡に對する定倉の疑心も晴れ、女字摺は千賀之助と祝言を濟し、明衡は佞人等の罪を糺す爲、單身鎌倉に赴いて幕府に踏入ることとなり、到底生きては還れぬものと思ひ、懇ろに後事を定倉に頼んだ

第九（對決）

登場人物の主な者

伊達治郎明衡（伊達藩の重臣）　畠山重忠（鎌倉將軍源頼朝の重臣）　貝田勘解由直勝（錦戸刑部一味の惡家老）
梶原平三景時（頼朝の佞臣）　浮世渡平（熊川源五兵衞の替名）　常陸之助國雄（秀衡に滅された常陸大掾國香の末子）
外記左衞門（鶴喜代君の忠臣）　松ケ枝節之助（鶴喜代君の忠臣）

梗概

伊達明衡が鎌倉に赴いて、伊達藩の騷動を幕府に訴へた爲に、幕府では畠山重忠に命じて、貝田直勝・伊達明衡を呼出し對決させることとなる。貝田は巧みに非を理に言ひくろめ、「幼君を毒殺しようなどとは誣言であつて、更に存じない」と言ひ放ち、梶原景時も貝田の爲に辯護した。明衡はこれを反駁し、貝田等が先君を放埒にしたことから述べて、二十餘條の罪狀を擧げる。貝田も負けず、明衡一人の訴人に出たことを難じ、三ケ條を擧げて責問し、遂に證據調べとなつた時、浮世渡平現はれて、自分が嘗て錦戸の中間に交つて奪つた逆徒一味の連判狀を差出した。然るに其の連判狀は常陸之助國雄の幻術で白紙となつた爲に、明衡の敗訴とならうとする時、外記左衞門は國雄が幻術を行つてゐるを見付け、之を殺さうとして幻術にかかつて死し、松ケ枝節之助が國雄を殺して、大鼠が銜へて逃げた伊達藩主系圖の一卷を取戻し、連判狀の文字も現はれ出たので、錦戸・貝田一味の罪狀明白となる。貝田はくやしまぎれに明衡を斬殺したが、其の刀は彼が主家から奪つた亂れ髮の一腰であつたので、長く紛失してゐた寶刀も出で、梶原は居たたまらないで逃げ出す。熊川と松ケ枝とは貝田を殺し、錦戸刑部は遠流の刑に行はれ、長い間の伊達騷動も落著いて、鶴喜代君の榮行く代となつた。

おしゆん 傳兵衛 近頃河原の達引

解題

本曲はその作られた時も、作者も未だ詳でない。正本にも二種あつて、その一は天明五年五月五日から江戸の肥前座で上演された時の正本で、「作者、爲川宗輔。筒川半二。奈河七五三助」と記し、他の一は奥に「右此淨瑠璃は天明二の春豐竹八重太夫中の芝居へ下り御目見え出語大賞仕候得共正本出不申依之此度つたなき筆をもつて上中下三段に綴り四方の貴客の御一笑に備ふのみ、天明五乙巳年九月九日中村重助再撰」とある。「俗耳鼓吹」にも「（局岩藤 中藤尾上）鏡山舊錦繪（容楊黛作）天明二年寅正月より中芝居（名代薩摩屋小平太座元豐竹新太夫）座にて大あたり也、此時竹本（豐竹の誤）八重太夫下りて、堀川の段をかたる中に、猿廻し場大あたり也」とあるから、爲川宗輔・筒井半二・奈河七五三助は、既作品に少々筆を加へたものであらう。また中村重助は編者であつて作者ではない。そして以上二種の正本は殆んど同文である。

また「俗耳鼓吹」に「猿廻し、おしゆん傳兵衛 近頃河原の立引に見ゆ」として載せてある唄は、正本に載つてゐるものとは大分違つてゐる。本書に收めた「堀川の段」は、各種の本の中から其の善いと思ふ物に從ひ、特に假名遣をも正した。

本曲は三卷六段に分れ、其の中で中之卷「堀川の段」が最も名高い。

實説

「落葉集」（寶永元年刊）卷七に「心中おしゆん」の唄が載せてある。「心中大鑑」（寶永元年刊）卷二「東河原は夜明の紅」の條にも、米屋庄兵衛が八百屋おしゆんと心中した話が載せてある。また享保三年京夷屋座上演のものに「おしゆん傳兵衛十七年忌」といふのがある。「聲曲類纂」卷一下、都太夫一中の條にも「おしゆん傳兵衛川原の心中 土佐が芝居にてかたりし淨瑠璃なり」とある。其の他おしゆん・傳兵衛の事は、元祿・寶永の交の歌祭文にも作られてゐるから、元祿十五年頃に情死したものであらう。其の後また本曲の作られる少し以前に、同じ名のおしゆん・傳兵衛といふ者が居て、本曲に似た出來事のあつたのを取合はせ、上方を擬らして仕組んだので、題名に「近頃」と冠したのであらう。

本曲に就いては諸說がある。卽ち、題名に「近頃」と冠したのは、元文三年十一月十六日の朝京都聖護院の森で情死した者があつたのを脚色したからである。男は京都釜座通姉小路下ル呉服商井筒屋傳兵衞二十三歲、女は先斗町近江屋の抱妓おしゆん十九歲。兩人は相馴染み、金に窮し、人情に絡まれて情死し、兩人の死骸は傳兵衞の檀那寺である鳥邊山の寶報寺に葬つたといふ。今も本法寺の北方におしゆん・傳兵衞の墓がある。

この情死のあつた月の十三日に、德大寺家の侍中村主水の下部音吉と、京都所司代土岐丹後守賴稔の下部常五郎・定造の兩人とが、四條河原で喧嘩し、常五郎が石をもつて音吉の頭を疵附けた爲、主水怒つて常五郎を斬殺した。之を見た所司代の下部數人が定造に味方し、久我家の侍奏野伊織は主水に味方して定造を斬殺し、主水・伊織は其の場から逃げ失せた。元文四年六月主水・伊織は捕へられて流罪に處せられ、音吉は追放に處せられた。

また當時京都東堀川一條上ル富田町の借家者に丹波屋佐吉といふ猿廻しがゐて、與次郎（扇子を叩いて拍子を取りながら唄をうたひ、錢を乞ふ物貰ひ）の唄拍子で猿を廻して歩いた。この者至つて孝行者であつたので、元文三年九月二十七日所司代から褒美に靑銅七貫を貰つたといふ。

またおしゆんといふ女も堀川下立賣下ルに住んでゐたとの話。

要するに實說が曖昧な爲に、本曲はどこまで事實を取入れてゐるかも明らかでない。そして本曲より以前の淨瑠璃「おなつ半七京羽二重娘氣質」（近松半二、竹本三郎兵衞作、明和元年五月竹本座上演）、「助六揚卷紙子仕立兩面鑑」（菅專助作 明和五年十二月北堀江座上演）の詞章と能く似た所がある。蓋しこれ等を粉本として技巧を凝らしたものであらう。

影響

本曲の「堀川猿廻しの段」は、天明二年春江戸の中の芝居座に上演されて大當りであつた。同三年三月十五日から大阪の北堀江座でも上演し、豐竹八重太夫が江戸土産として語つて好評を得た。

歌舞伎でもこの「猿廻しの段」は、優れた場面として演じられ、語り物と共に今もなほ壽命を保つてゐる。

上之巻（祇園の揚屋の段。）

登場人物の主な者

瀧口左内（龜山藩の勘定頭）　横淵官左衛門（龜山藩の勘定役人）　おしゆん（祇園の遊女）
與次郎（兄。おしゆんの猿廻し）　井筒屋傳兵衛（喜左衛門の子）　万八（傳兵衛の惡手代）
勘藏（仲賣）　丹波屋六左衛門（祇園の揚屋の主人）　おたよ（遊女）
おそめ（遊女）　おみよ（遊女）　おたつ（遊女）
お縫（遊女）　久八（幇間）　井筒屋喜左衛門（掛屋商〔藏屋敷に出入して金錢の用達を勤める商人〕。傳兵衛の父。年六十）
十助（喜左衛門の手代）

梗概

〔祇園の段〕　丹波龜山藩の勘定頭瀧口左内は、相役横淵官左衛門と連立つて京の祇園社に參詣した。祇園町の遊女おしゆんも參詣する途で兄の與次郎に遇ひ、母の眼病の事などを話合うて別れた後、愛人井筒屋傳兵衛の來るに遇うて、人から請出されようとしてゐる心配などを語つて互に泣く。

左内は嘗て傳兵衛の父喜左衛門の恩顧を受けた者であるので、傳兵衛のこの有様を見て懇に放埒を說諭したが、傳兵衛はおしゆんを思ひ切れないで、身請けの手附金百兩に窮してゐる。これを知つてゐる万八は、官左衛門。勘藏と共謀して、まづ官左衛門が所持の八ッ橋の鍔を三百兩で傳兵衛に賣らせ、その內の百兩を傳兵衛に貸すことにし、勘藏は贋金三百兩を傳兵衛に渡し、万八はその間に立つて斡旋するやうに、手筈を定めて實行に及んだ。

傳兵衛はさやうな事とは知る由もなく、まんまと彼等の奸策にかゝり、官左衛門は贋金は受取れぬと傳兵衛を毆打し、勘藏は

逃げて行方知れず。傳兵衞は毆打された上に、三百兩を官左衞門に拂はねばならぬ羽目に陷つた。之を陰で聽いてゐた左内は、傳兵衞の爲に三百兩を投出して官左衞門に與へ、傳兵衞を連れて去つた。官左衞門は左内に詐欺を見拔かれて底氣味惡く、万八・助藏と落合うて百兩づつを分配し、三人共に行方を晦ました。

「揚屋の段」横淵官左衞門は傳兵衞から詐取した百兩を懷にして妓樓丹波屋に登り、遊女おたよ・おそめ・おたつ・おみよ・お縫・幇間の久八等を寄せて、「忠臣藏」の七段目・「雙蝶々曲輪日記」の三段目などの狂言をまねて大騷ぎをした後、亭主六左衞門を呼んで、おしゆんを請出す手附金百兩を渡さうとした。これを聞いたおそめ・おみよ等はおしゆんを其の愛人傳兵衞に添はせたく思ふ。又久八も嘗て傳兵衞の恩を受けたことがあるので、忽ちおそめ等に同意した。

折節喜左衞門は我が子傳兵衞を案じて丹波屋に來り、子の爲におしゆんを請出したいと申し入れた。またお縫は濡髮長五郎に扮して、官左衞門の身請け話を斷るやうに申し立てたので、喜左衞門は喜んで我が身の上話をしてお縫におしゆんの身請けを任した。これを知つた官左衞門は事の成らぬを怒り、おしゆんを奪ひ去らうとして反つて久八に投付けられて逃げ去つた。是時手代十助が瀧口左内の手紙を持つて喜左衞門を呼びに來たので、喜左衞門は身請けを今夜中に濟ますやうに頼み、傳兵衞を跡に殘して去つた。

中之卷（河原の段。堀川の段。）

登場人物の主な者

横淵官左衞門（龜山藩の勘定役人）　万八（官左衞門一味の惡漢）　勘藏（官左衞門一味の惡漢）

井筒屋傳兵衛（喜左衛門の子）　おしゆん（祇園の遊女、傳兵衛の愛人）　久八（幇間）
おしゆんの母（盲目）　おつる（おしゆんの母の教へ子）　與次郎（おしゆんの兄。猿廻し）

梗概

〔河原の段〕冬の夜更けて人跡絶え、川風寒く水音物凄い四條河原に、横淵官左衛門は万八・勘藏を伴うてさしかゝり、喜左衛門めがおしゆんを請出し、駕籠に乗せて戻るも此の筋と待ち構へ、万八は加勢に泥坊を呼集めに行つた。折柄官左衛門。勘藏は駕籠の來るを見付け、飛び出して提燈を切落せば、駕籠舁は怖れて逃け去り、駕籠の中から「亂暴するは何者だ」と、叫んで躍り出たのは傳兵衛であつた。二人は之を見てたまげ、「ヤァおのれは傳兵衛めか」と、言ひながら言葉を交しつゝ、傳兵衛を投飛し踏躙り、傳兵衛が藩主から拜領した脇差の小柄を官左衛門が土足にかけた。傳兵衛は無念の齒嚙みをなし、最早これまでと覺悟し、官左衛門を刺殺した。久八は河原の喧嘩を聞いておしゆんと共に駈付け、傳兵衛が自殺しようとするを押止めて逃れさせ、万八・泥坊等の來るを追拂ふ。かくて暫したためらふ所に勘藏の訴へで捕手の役人等が駈付けたので、久八は人殺しの科を我が身に引受けて縛り繩にかゝつた。（これから有名な「堀川の段」につづく）

〔堀川の段〕おしゆんの母は京の堀川邊に住居して琴三味線を教へ、長男の與次郎は猿廻しとなつて貧しう暮してゐる。師走の十五日教へ兒のおつるが習ひに來たので、鳥邊山の唄の三味線を教へて歸す。日暮前に與次郎は小風呂敷を持ち猿を肩に載せて戻り、盲目の母をいたはつて慰めた。母は一廓の主人が娘を連れて來て、おしゆんと戀仲の傳兵衛が人殺しをした爲、おしゆんを内に置き難く、どうぞ傳兵衛に逢はせぬやうに匿まつてくれと言うて歸つた」と、語つて嘆いた。

與次郎は往來の人に聞かれぬやうに門口を鎖し、おしゆんを呼んで母と共に懇に諭し、傳兵衛との縁切り状を書かせたが、母は盲目、兄は無筆であるから、何を書いたか知らねども、おしゆんが氣休めの言葉に安心して二人共に寢所に入つた。

夜更けて傳兵衛は、おしゆんを尋ね來て戸を叩いた。寢ないでゐたおしゆんは飛び出て、傳兵衛樣よう逢ひに來て下さつた。

と、言ひながら戸を明けた音に、母も兄も目を覺す。臆病者の兄はあわてて暗紛れに取違へて、おしゆんを締出し傳兵衛を内に入れ、燈火を點して見れば傳兵衛であるのに驚き、おしゆんの縁切り狀を突付けた。傳兵衛は恐しげに之を受取つて讀めば、女の守るべき道を說き、傳兵衛と共に死ぬ覺悟を述べ、どうぞ不孝の罪をお赦し下されと、こまごまと記した書置である。三人ともはつとたまげ、「さてはさうした心であつたか」と、與次郎は急いで娘を引入れる。

傳兵衛は「わしをさうまで思うてくれるか。忝い。お前はお二人の爲に生き長らへて、我が死後の弔を頼む」と泣けば、おしゆんは「そりや聞えませぬ傳兵衛樣」と、女の守る道を語つて自殺しようとする。母も與次郎も之を押止め、娘の貞心に感じて傳兵衛に任せ、「二人共に逃げられるだけは逃げて、死なずにゐてくれ」と別れを悲しむ。

與次郎は傳兵衛に編笠を與へて姿を變へさせ、門出の祝とて酒を酌み交し、猿廻しの唄を歌うて猿を舞はし、互に此の世の見納めと名殘を惜しむ。かくておしゆん・傳兵衛は母と兄とに見送られ、聖護院の森をさして出て行く。



猿廻門途の一諷（安政三年八月中村座）三世豐國畫
與次郎（片岡我童）おしゆん（岩井粂三郎）傳兵衛（澤村訥升）

評

其の段、妻が夫に對して守るべき道や、親子の恩愛をこまごまと述べて、餘す所なきまでに麗しい文で書き盡されてゐる。そして生別はやがて死別となる人間最大の悲哀に直面して、與次郎が謠ふ優しい猿廻しの唄で可憐な猿の舞ふ樣を見せ、互に心を

慰めながらいそいそと門出を祝うて送る心は、どんなに悲しい時でも笑うて濟す我が國民性の流露したものであると同時に、本曲の哀愁的な効果を高めてゐる。この義理と人情とに絡む祝言の心持は、外國人などにはとても理解されぬであらう。

堀川の段

地※同じ都も、世に連れて、フシ田舍が増しの、薄烟、※堀川邊に住居して後家の操も立(色)つ月日、琴三味線の※指南屋も、※合の手縺れ、氣縺れを、保養がてらの※藥風爐、煽ぐも我を※澁團扇、フシ目さへ不自由な暮しなり、詞「お鶴樣待遠にあらうなア、そして何やらの復習であつた、ヲ、それ※鳥邊山、アリヤ地體心中事、會にでも彈くのなら、お前は女子の方、お繁樣は男の方、掛合に唄ふがよいぞえ、ドレドレお繁樣の代りに私と掛合に唄ひませう」と、※老手彈く手もしをらしき、ニ上り歌※「女肌には白無垢や、上に紫藤の紋、中着緋紗綾に黒繻子の帶、年は十七、※初花の、合雨に萎るる立姿、男も肌は白小袖にて、黒き※綸子に色淺黄裏、二十一期の色盛をば、戀といふ字に身を※捨小舟、どこへ取り付く島とてもなし、合※鳥邊の山は其方ぞと、死に

○同じ都…薄烟　同じ暮すなら都がましと、人のあこがれる花の都の住居よりも、我が身の境遇につれて、却つて田舍住居の方が生活苦が少くて、その方が増しである、さやうな貧しい暮し。
○堀川　京都二條離宮の東側を南北に通じてゐる川で、それに沿へる大通りを堀川通りといふ。
○指南　この語昔周公が作つた指南車に出で、教授、指導などの意。
○合の手　音曲上の語で、歌聲の中絶する間を樂器のみ吹彈すること。歌聲の絶え間に彈く手。
○藥風爐　藥を焜爐の類にかけて煎じること。
○澁團扇　「貧乏神の澁團扇」の諺をきかす。貧乏神は澁團扇で貧乏を煽ぎたてるものであるといふ。「琴三味線」「澁團扇」の文は、緣語は緣語を生んでつづけた。まことに妙味のある言ひまはしである。
○鳥邊山　この唄は「吟曲古今大全」にも載り、お染半九郎の鳥邊山心中の歌舞伎唄で、近松門左衛門の改作したものか。「[illegible]」に「[illegible]、同崎硯枕[illegible]、近松門左衛門作」とある。この唄をここにいへるは、おしゆん傳兵衛が鳥邊山の墓所に[illegible]を流すを暗示した。鳥邊山は鳥部山とも書く。
○老手　老人の手も熟して「老手彈く手」に[illegible]、
○女肌には　あの面白さを見るときは、染殿そなたと某が、忍び逢うた

事思ひ出す　鳥邊山の唄。
○白無垢　白い絹衣。「無垢」はけがれのないこと。潔白。まじりもののないこと。白小袖と共に死裝束である。
○紗綾　[illegible]卽ちサアヤの約で、布帛の義。卍の形をくづして連ねた模樣や、其の他種々の模樣を現はした綾地(ぬめぢ)の絹織物。
○初花の雨に萎るる　年の若い美女が物思ひに惱んでゐるを形容したもので、「長恨歌」の句「玉容寂寞淚闌干、梨花一枝春帶雨」の趣である。
○鍛子　[illegible]紗綾に似て[illegible]、光澤を有し、[illegible]の氣がある。
○捨小舟　打捨てて乘人のない舟。ここの文は、身を捨てるを捨小舟にいひかけ、「とりつく島」とつづけ「取り」の同韻語鳥邊の山へつづけた。
○鳥邊の山　京都西大谷の北で、淸水坂と小松谷との間に當る山で、[illegible]の墓所であつた。
○後髮引く　心の跡に殘るをいふ。
○祇園町　京都[illegible]祇園社地で、[illegible]の多い所。
○山衆　[illegible]遊女たち。
○しをれ　[illegible]
○染殿　半九郎と鳥邊山に情死したお染をいふ。
○七夕　(見索引)
○座敷踊　[illegible]座敷で踊ることをいうたのであらう。
○手も廻り出した　三味線を引く手もよく利くやうになつた。
○片男波　[illegible]であるが、これを波にこの名のものがあるやうに曲解せる例は他にもある。ここの文は、片ゑくぼをいひかけて、片男波から夕汐の緣語につづけた。
○いふしほ　言ふ折。[illegible]は索引を見よ。ここの文は[illegible]人の歌「和歌の浦に汐滿ち來れば潟を無み葦邊をさして田鶴鳴き渡る」の中の語に據つたものであらう。

に行く身の後髮、彈く三味線は祇園町、茶屋の山衆が色酒に、亂れて遊ぶ騒ぎ合ひ、「あの面白さを見る時は」、「イエイエそれではとんと、聲にしをれがないわいな」、「あの面白さを見る時は」、「あの面白さを見る時は」、「よしよし」、「染殿そなたと某が、去年の初秋七夕の、座敷踊をかこつけて、忍び逢うた事思ひ出す」、「けふはマアそこまで精が出る程あつて、きつう手も廻り出した、もうもう何處で彈きなさつても、恥かしい事はない」と、聞いて笑顏の片男波、「又明日」といふしほに、お鶴は立つて歸りける。母を大事と油斷なき身すぎも輕き小風呂敷、肩に載せたる猿廻し、戻りはいつも日暮前、與次郎は息せき門口から、「母者人今戻つたぞや」、「ヲヽ兄戻りやつたか、さぞひもじかろ、茶も沸いてある、膳もそこにして置いた、ヲヽ徳よ戻つたか、今朝から子猿めが親を尋ねて喧し

○身すぎ　身を過し行く手だて。くらしむき。
○猿廻し　猿を飼ひ馴らして種々の藝を教へ、これを舞はせて金品をもらひあるく者。
○ひもじ　ひだるい。空腹なるをいふ。
○徳　親猿の名。この猿は後に[illegible]の役を勤めるによつてかくいふ名にした。

○ちやつと　ちやと。はやく。近松作「生玉心中」に「申しおへ様おやつとお歸りなされませ」。
○ごんしよ　「ござんせう」の約。ござりませう。
○たもる　たまはる。下さる。(見索引)
○餘情　風情。ここは同情のおこぼれ、卽ち薄謝の意。
○呵責の鬼　せめさいなむ獄卒(地獄の鬼)。子が汗水流して得た金を、母が病氣の入用に費ひ果す意よりかくいうた。
○つれな　無情。
○母者人　正しくは「母ぢや人」で「母である人」の約。封建時代に武士の間で母を呼んだ語であるが、町人などの間にも用ひた。母上の意。
○ひそやか　ひつそり。貧乏で物淋しきをいふ。
○御袋　母。伊勢貞丈の說に「ふくろ」は「ふところ」(懷)の略で、兒が懷にある義といふ。
○檀那　もと梵語 Dana-pati の略「ダーナ」の音寫で、[illegible]施主などと譯し、轉じて主人、良人、商家の顧客の意となり、又下賤な者が貴人などを呼ぶ稱ともなつた。
○裾分　物の餘りを分配すること。
○しられねば　「せられねば」の轉。幾度も裾分するわけにも行かぬからの意。
○氣の毒　氣ざはり。心の苦痛。こまること。近松作「[illegible]」に「可愛らしい顔附で氣の毒がらすはごうおやいやい」。(見索引)
○世話な　面倒な。うるさい。

い、ちやつと傍へやつてやりや」、「アイアイさうでごんしよとも、ソリヤちやつと乳を呑ましてやれ」、「イヤナウ與次郎、そなたが孝行にしてたもるにつけ、わしがこの長々の病氣も、いつ本復する事であらうと思へば、疲れの上になほ疲れる、僅かな弟子衆の餘情や、汝が身の働きで、この養生がなるものかと、思へば藥も毒となり、母では無うて子供の爲には、呵責の鬼と思はるる、鬼は冥途に住るものを、つれなの老の命や」と、身を悔みたる噎び泣き、哀れにもまたいぢらしし、「ア、コレ母者人、ソリヤ何を言はんすぞいなう、其の様にひそやかな身代ぢやと思はしやるか、此の間弟子入した米屋の息子殿から、長々おふくろの煩ひでさぞかし勝手も惡からうと言うて、雪か花かと申すやうな白米の仕送り、店〳〵の旦那衆からは何なと用があるならば言うておこせ、もし出養生さしますなら幸ひな隱居所もある程にと言うてくるお方もあり、羊羹・饅頭・生肴、近所隣へさう〳〵裾分もしられねば、鯛・赤貝の類は横町の鮨屋へ卸賣、モ案じる事は微塵もないぞや、それにまだ〳〵氣の毒なは、この家主が此の家を居なりに買うてくれぬかと頼まれる。ヤレ厭やの、厭やのア、あた世話な家持よりは金持か、遙

かましてもあらうか」と、母に案じを掛けさせぬ、嘘八百さへ一貫に足らぬ節季の言譯を、いふ下稽古やこれなるべし、嘘とは知れども老の身は子に從ふが習ひぞと、機嫌よげに頷き、「ヲヽそれ聞いて落付きました、が落付かぬは娘が事、此の間も親方が、おしゆんを預けに來て言はしやるには、コレ傳兵衞といふ客のことで、ちと内に置かれぬ事がある、たとへ傳兵衞が尋ねてござろとも、おしゆんが歸つてゐる事は、包み隱さねばならぬぞやとくれ〴〵も言はしやつた、サアわしも其の入譯を聞いた故、おしゆんが心根を思ひやり、思はず涙が、ドレマア、火を點そ」と棚の隅、こて〴〵取り出す行燈の、火影も漏るる暖簾越し、「おしゆん〳〵」、「アイ」と返事もしをしをと、思ひ惱みし顏容、「マア〳〵ここへ」と小聲になり、一門の戸はかけてある、見る人も聞く人も無い、方々で噂を聞くに、此の間の河原の喧嘩は、殺し人は汝が身の客の傳兵衞殿なれど、大恩受けた久八といふ者が、代りに捕られて往つたげなが、其の場に落ちてあつた小柄が、カノ傳兵衞殿がお屋敷から、拜領した小柄ぢやゆゑ、天命遁れず御詮議最中、なれども其の夜から傳兵衞の行方も知れず、其の相方の女郎はおしゆんといふ事お

○嘘八百　でたらめの嘘をならべ立てる意の諺。「[illegible]川狂歌集」に「彭祖が長生もまことにはあらじ嘘[illegible]の八百[illegible]
○一貫　[illegible]天明[illegible]年六月[illegible]百文に付き上白米八合の直段であつたことが見えてゐるから、[illegible]文[illegible]八升に相當する。
○節季の言譯　節季（支拂時は晦日及び盆・節句[illegible]）[illegible]で、一貫に足らぬ僅かな金も支拂ふことができず、何とか言譯をして、支拂を延べることの意。
○老の身は子に從ふ　諺。「大智度論」に「老[illegible]
○入譯　込入つた事情。人殺しをした事をさす。
○涙が　涙が出ました。
○こて〴〵　火打箱・行燈を取り出す時、ことこと音がする、その響をいうたものである。
○河原　[illegible]
○小柄　[illegible]小刀。[illegible]「この[illegible]小柄は殿樣より拜領したる[illegible]が作の三疋獅子、[illegible]
○天命　[illegible]もので、[illegible]をなせ[illegible]

上にも能う御存じで、親方の方へも色々と御詮議があれど、これも行方が知れぬと言ひ切つて、今揉めてある最中ぢやと、とりどりの噂評判、おりやもう聞く度にびくびくする」と、聞くほど迫る、おしゆんが胸、「其の夜の起りも皆わしゆゑ、何處にどうしてござるやら」、心もとなさ逢ひたさも。いふに言はれぬ此の場の品、いかがと胸も塞がりし、母は一途に娘の可愛さ、「コレおしゆん、何にも案じる事はない、併し突詰めた男氣で、ひよつと此方の家へ來て、刄物三昧でもしやせまいかと、四五日は夜の目もろくに、寐られぬまゝの物案じ、世間にだんとある格な心中やなどしてくれたら、此の母は目かひは見えず、兄はアレあのやうな臆病者、若しもの事があつたらば跡で母はどうせうぞ、袖乞物貰ひに歩いてもそりやもうひつとつも厭やせぬけれど、そなたの體に凶事でもあつたら、おりやモウ直に死んで仕舞ふぞや、若い氣に跡先思はず、義理ぢやイヤ人の落目を見捨てゝはと、つまらぬ義理を立て拔いて年寄の此の婆に、辛い目見せてたもんなやーと、可愛さ餘る親心、「ア、南無阿彌陀佛」も涙聲、兄もともども、「コレおしゆん、今母の言はるゝ通り、何の義理も絲瓜もいらぬ、退いて仕舞へば赤

○おりや　「おれは」の訛。女にもつかふ。姿「わし」は。
○しな　折。場合。「行きしなに」「歸りしなに」などいふ「しな」と同じ語である。「萬葉集」卷十四・東歌に「阿抱思太毛安波乃敝思太毛奈備己曾與佐禮」「あほしだもあはなへしだもなにこそよされ」とある。「思太」「しだ」も、ここにいへる「しな」と同義語である。
○刄物三昧　みだりに刄物を振廻すこと。はものさわぎ。「三昧」は梵語 Samadhi の略で、專思寂想の意、轉じて一途に心を傾注することをいふ。
○たんと　「たん」は足「たり」の義、「たんと」は「足りぬこと」の約。充分に。澤山に。（見索引）
○格　同じ仕方。流儀。
○目かひ　目價、「めかひ」卽ち目の價値の義。目のはたらき。（見索引）
○袖乞　托鉢僧が袖に鉢を載せて米錢を乞ふをいひ、轉じて乞食、物貰ひをいふ。
○ひつとつ　ひとつ「一」に促音の添加した語。
○南無　梵語 Namas の音で、歸命と譯す。佛菩薩をうやまふ時に唱へ、自己を捧げて佛菩薩に歸依する意を示す。（見索引）
○絲瓜　絲瓜の實の略で、絲瓜の實は何の役にも立たぬものなれば「いらぬ」などの語につゞける。（見索引）
○赤　「赤裸」などの赤と同じ語で、全きさまを表はす語。すつかり。

○腹助け　「喉へ通らぬ」の句に應じてかくいうた。

○たも　「たもれ」の略。たまはれ。(兒手引)

○物體　ものものしい體「てい」をいふ。「下學集」に「勿體」の字を書いてあれいも當字である。「物體無い」とは様體の威儀の無くなる義で、それを惜しむ意から轉じて、貴い、おそれ多いの意になつたのである。

○品　譯品。ここの文は、妾「わし」は喧嘩別れにならぬやうに傳兵衞さんに納得させて、互に體裁よく言譯の立つやうにして縁を切りませうとの意。

○去にがけの駄賃馬　問屋へ荷物を渡して歸りの空馬「からうま」に人の荷物をのせて駄賃を取ることをいひ、以てついでに事をなすに喩へていふ諺。近松作「丹波與作待夜の小室節」に「ひとり死のより人もれは、いいにかけの駄賃おや」。

○噛合はされぬ　駄賃馬の語に應じてかくいうた。

○むづかし　心のすゝまぬをいふ。不快な。

の他人、又おれも氣に懸つて、好の飯さへ喉へ通らぬ、母じや人の氣休め、おれが腹助けぢやと思うて、退いてたも、や、や、頼む〳〵」と正直一遍、母の心と兄の言葉。物體ないと思へども、切るに切られぬ胸の内、所詮死なねばならぬ身の、此の場を拔けて其の上でと、心一つに思案を極め、「母樣兄樣、お二人のお言葉よう合點致しました、殊に又傳兵衞樣、つい一通りで逢うた客、深い譯でも無いわいなあ、しかし勤の習ひにて、人の落目を見捨てるを、廓の恥辱とするわいな、とても末のつまらぬ事、わしや得心をさせまして、品よう譯の立つやうに」、「イヤそのやうに譯立てると言やつても、あつちに得心せぬ時は、それ〳〵去にがけの駄賃馬で踏殺し、ア、イヤ〳〵無理殺しにしようもしれぬ、コリヤ滅多に噛合はされぬ」、「ヲ、兄の言やる通りぢや、そなたに怪我でもあつては、傳兵衞殿とやらも難儀、思ひ切るのがあつちの爲、汝が身に心引かされては、つい捕へられるは知れた事、退狀をやつたらそなたの事も思ひ切つて、切れるとも〳〵、遠い國へでも影を隱したら、身を遁れまいものでもない、ソレ〳〵むづかしかろとも一筆、兄硯箱取つてやりや、サ、早う、早う」と母と兄、詞に否も泣

顔を、隠す硯の海山と、重なる、思ひ延紙に、筆の立所の後や前、涙に墨のにじみがちなる、胸の內、書き遺すとはつゆ知らぬ、與次郎が傍から、「コレ、そのやうに長たらしう書かずとも、つい退きますと書いても、濟みさうな事ぢや」、「イヤナウ、書いた物は跡々までも殘るもの、男の去狀と同じ事、とつくりと譯の分るやうに書いてやるがよいぞや」、「アイ／＼此の狀にとつくりと、御合點の行くやうに、兄樣、此の文お前から、お渡しなされて」、「よし／＼、此の狀さへあれば千人力ぢや、マア／＼母じや人も落着かしやれ」、とやかう言ふ內九つ前、お前も奥でもう寢やしやんせ」、「ソレ／＼、今夜こそゆつくりと、心よう寢るであろ、兄もそなたも其處に寢や」と、奥底もなき隔てをば、押明けてこそ入りにける。「サアおしゆんこちらも爰に往生いたそ」、「アイ」とおしゆんが共々に、暫し此の世を假蒲團、薄き親子の契りやと、枕に傳ふ露涙、夢の浮世と諦めて、更けゆく鐘も哀れ添ふ、頃しも師走十五夜の、月は冴ゆれど胸の闇、過ぎし別れの言ひ交し、死なば一緒と傳兵衞か、忍ぶ姿のしよんぼりと、佇む軒は見覺えの、慥かに爰と門の戶へ、觸る相圖の咳拂ひ、聞くにおしゆんは飛立つ思ひ、上

○海山　「硯の海」を「海山」にいひかけ、その他「立所の後や前」「にじみがち」など、いづれもかけ詞と縁語で文を飾つてゐる。
○延紙　和州吉野から産出し、縱七寸橫九寸ばかりの大きさの小杉原紙である。粹客遊女の輩は常にこの紙を懷中し、鼻汁を拭去るなどに用ひるによつて鼻紙ともいふ。
○退きます　「のきます」の訛。「ついどきます」の言葉、いかにも與次郎が素朴單純な人であることを示してゐる。
○去狀　離緣狀。
○九つ　夜の十二時。
○奥底もなき　押明け　一間（ま）か二間（ま）かしかない狹い家であるから、「奥底もなき隔て」といひ、心に奥底の深い思慮もなく、隔心なく打明ける意をいひかけた。
○往生　安樂淨土に往き生れることをいひ、以て死ぬることをいひ、又轉じて寐入ることなどにいふ。
○かり蒲團　この世は暫しの假りの世であるといふに借蒲團をいひかけ、蒲團の薄きに、親子の契りの薄きをいひかけた。
⊙夕丶キ　蔽の歌ふ調子。
○夢の浮世　夢の如くはかない現世。「金剛般若經」に「一切有爲法、如夢幻泡影」とあるといふ。
○師走　陰曆十二月の稱。年果（或は仕果）の義である。
○闇　心の迷ひ。「冴ゆれど」の語に應じて對。

○しよんぼり　悄然。
○上ぐる枕も打外す　おしゆんが枕から頭をあげるのと、與次郎が枕をはづして熟睡してゐるのとをいひかく。
○突き　突殺し。突刺し。このところ臆病者の與次郎の言語動作を、[illegible]化[illegible]化[illegible]よく寫してある。

ぐる枕も打外す、與次郎は傍に高鼾き、心も共に行燈の、燈火吹消し差足に心、急くはと明けかぬる、戸口の鎰表にも、「おしゆんぢやないか」、「傳兵衛樣よう逢ひに來て下さんした」と、言ふ聲纔耳に與次郎が喫驚、起きると明ける門の口妹が姿も暗紛れ、捉へる袖の振合せおしゆんと心得傳兵衛を、無理に引込む取違へ、戸口を内からぴつしやりと引立て、「ソレヤこそ突きに來をつたぞ、おしゆん必らず外へ出まいぞや、戸口に己が押へてゐる、門にゐるは傳兵衛ぢやぞ、汝を入れてよいものか」と、言ふもがた〳〵胴震ひ、「コレナア兄樣、わしや表にゐるわいな」、「何ぢや表にゐるわいな、ヤア其の聲色おいてくれ、そんな事食ふ己ぢやないわい、母じや人〳〵、傳兵衛がおしゆんを殺しに來たわゐ、今表へ閉て出した、おれ一人では手が廻らぬ、こなたも加勢して下され、加勢〳〵〳〵」と、うろうろ〳〵〳〵うろたへ騷ぎ、母親も、「何ぢや傳兵衛の加勢、ムヽまた外に同類でもあるのか」と、探り寄つたる傳兵衛が傍、「コレ〳〵おしゆん、顫ふ事はない、兄や母が附いてゐる、マア氣を鎭めや」と撫でさする、背中の手觸り合點行かず、「コレコレ與次郎、どうやらコリヤ娘ではないさうな、ヤア闇が

り紛れに材木が紛りやせぬか、此方つかまへてゐて下されや」と、探る手先に火打箱、がち／＼顫ふ、附木の光、「コリヤ妹ぢやない傳兵衞ぢや」、「お袋・兄御、エヽ面目もない此の姿」と、猶も小隅に屈みゐる、「コリヤヤイ其の樣にしをしをして見せて、己らを騙して、おしゆんを突かうとするのか、其の手は食はぬ」と、懷より一通取出し、怖々ながら傍に寄り、「コリヤ傳兵衞、おしゆんと汝と手が切れぬと、科人の汝ぢやによつて、妹まで難儀する、それで先刻に、妹に得心さして、退狀が書かしてある、コレ之を見い、これぢやによつてモウ／＼モウ、おしゆんが方に殘心氣は離れてあるわい」、「ムヽ、スリヤおしゆんが其の退狀を」、「コリヤ退狀ぢや／＼」、「エヽその心とは知らず、言ひ交した詞を誠と思うて、迷うて來たが無念なわい、口惜しい」と齒を食ひしばる男泣き、恨を聞くも隔てたる戸口、心はさうぢや泣い嘰、「ヲヽさぞ腹が立と道理ぢや／＼、マアとつくりと氣を鎭めて退狀を見て下さんせ」、「ヲヽそれでよい、長う物言やんな屑が出るぞ、傳兵衞、おれが讀んで聞かしたうても、皆目おれは諧筆ぢや、サア／＼、早う」と封じめ切り、突付けられて目にたまる、涙を拂ひ、「ナニ書

○材木　人違ひではないかの意に「材木が紛りやせぬか」といふたのは、能狂言に「人か杭（くひ）か」といふのがあり、又諺に「人でも杭でもない」などがあるによつて、材木にしてかくいうた。

○火打箱　火打石・火打金・いちびがらなどから製した火口（ほくち）・附木（つけぎ）を入れた箱。

○附木　檜などの薄片の端に硫黄を塗り附けたもの。火打石と火打金とを打つて發する火を火口に取り、火口から附木の硫黄に移して火を燃し、以て他物に火を移し點すに用ひる。

○手が切れる　緣が切れる。交際又は情交を絶つ。

○殘心氣　名殘惜しげに思ふ心の意であるが、これを殘心氣といふ新熟語は苦笑せしめると共に、いかにも無學な與次郎の言葉らしく穿ち得て妙。

○ないじやくり　「泣きじやくり」の音便。しやくり泣き。近松作「傾城反魂香」に「聲を立てねはないじやくり、氣も沈入る時しもあれ」。

○諧筆　「貞丈雜記」に　右筆と書くが正しく、右の手に筆を持つ事であるが、實際は書役の事を右筆といふと見えてゐる。諧筆は國字の意であつて自筆は無筆なことをいふ。この諧筆の用ひ方の變な所にも與次郎の無學を示してゐる。

置の事」、「ヤア何ぢや書置」、「コレ／＼兄正直な、喫驚する事はない、そなたは無筆私は盲目、書置ぢやと讀違へ、うろたへさして門へ出で、娘を存分にせうとの工み、そんな嘘は食ひませぬ、サア／＼ほんまに讀まつしやれ、コレ／＼與次郎、表の娘に氣を付けて、門の戸を明きやんなや」、「ヲヽ呑込んでゐる、ここにはおれが※へたばり附いてゐる。サア早う讀め、物こそはよう書かね、聞く事は無筆ぢやないわい、サア／＼、讀んだ／＼」、「これまでの御養育、※海山にも譬へ難き親の御恩、殊更不自由なる御身の上何卒首尾よう※勤めを遁れ、世を樂に過ごさせまし候はヾ、せめて少し御恩報じ、孝行の片端にもなり候はんとそれのみ朝夕祈りまゐらせ候處、※二世までと言ひ交しまゐらせ候傳兵衛樣、思はず此の度の御身の難も皆我ゆゑに候へば、今更見捨て候ては女の道立ち申さず候、不孝とは思ひながら共に覺悟を極めまゐらせ候」、「母じや人どうやら※風が變つて來た樣な」、「※サイナウ、わしも胸がどき／＼と、サア／＼、跡を讀んで下され」、「先程傳兵衛樣退狀と申して認めしは、此の事申し上げ度まヽ退狀と僞り書殘しまゐらせ候、何事も／＼前世よりの定まり事と御諦め※下され候、申し上げたき數々は筆に

○へたばり附く　ぺたりと、くつつく。「俚言集覧」に「へたばる [illegible]」

○海山にも譬へ難き親の御恩　諺に「父母の恩は山よりも高く海よりも深し」。

○勤めを遁れ　[illegible]

○過ごさせまし　お過ごさせ申し。

○二世　夫婦の縁をいふ。(見榮引)

○風が變る　形勢の變化するをいふ諺。心配しなくてよいと思つてゐたのが忽ち心配となつた。

○サイナウ　されはいなあ。ここの母親の短い言葉に無量の悲慾を含む。

○下され候　「下されたく候」とあるべきところ。或は「候」を候へと讀むべきか。

○そりや聞えませぬ傳兵衛樣　人々に廣く知られて、口淨瑠璃に唄はれる有名な文句である。身こそ遊女なれども、一生を任せた愛人の爲に冥途に連立たうとする美しい心は、平易なこの一句に盡されて、涙ぐましう奥ゆかしい。
○内證の世話　家計の世話。おしゆんが無心をいふのを傳兵衛が聞屆けることをいふ。
○振捨てて　夫「をつと」を振捨てて。

も盡し難く候へども、心急くまゝ申し入れまゐらせ候」、扨はさうした心かと、驚く傳兵衛親子はうろうろ、「エ、氣遣ひなコレ兄や、娘を内へ早う、早う」と母があせれば與次郎も、戸口を明くれば走り行く、妹を無理に四人が顔見合して溜息吐き、涙に更に別ちなく、なんと言葉も傳兵衛が泣く目を拭ひ、「一旦言ひ交した言葉を立て、共に死なうと覺悟して、義理を立拔くそなたの貞節、忘れはせぬ嬉しいぞや、思ひ廻せば廻す程、我こそ死なで叶はぬ身、そなたは科もない身の上、共に死んではお二人の歎き、命ながらへ亡き跡の、とひ弔ひを頼むぞ」と、言葉にわつと泣出し、「※そりや聞えませぬ傳兵衛樣、お言葉無理とは、思はねどそも逢ひかゝる初めより、末の末まで言ひ交し、互に胸を明かし合ひ、何の遠慮も※内證の、世話しられても恩に被ぬ、ほんの女夫と思ふもの大事の、大事の夫の難儀、命の際に※振捨てて女の道が立つものか、不孝とも惡人とも、思ひ諦めコレ申し、一處に死なして下さんせ」と、隱せし剃刀取直す、「マヽヽマア待て待ちをれやい、これで死ぬると命が無いぞよ、コリヤ何の事ぢやとんと分からぬやうになつて來たわい、殺しに來たと思うた傳兵衛殿より、今では汝が方

が手強うなつたぞよ、コリヤマアどうしたらよからうぞ」と、いふもおろおろ母親も、「ヲヽ、さうぢや、我が子が可愛い可愛いと、子ゆゑの闇に傍ひら見ず、これまでおしゆんがお世話になつた恩も義理も辨へず、一途に中を引分けうと思うた母は義理知らず、賤しい勤めする身でも女の道を立て通す、娘の手前面目ない、そなたの心に恥入つて何事も言ひませぬ、傳兵衛樣と一處にの、コレ死出の道連れしやいなう、したがコレ申し傳兵衛樣、定めて親御樣達もござりませうが、親の心といふものは人間はおろか、たとひ鳥類畜類でも、子の可愛さに變りはないもの、おしゆん傳兵衛と言はす氣か、若しやお前が死なしやつたと親御達が聞かしやつたら、悲しうて悲しうて此の世に殘つてゐる氣はあるまい、何國いかなる國の果、山の奥にも身を忍び、どうぞ遁れて下さりませ、娘が心に恥入つて天にも地にも掛け替ない、可愛我が子を心中に合點してやる親心、ここの道理を聞き分けて、コレ拜みます、賴みます」と手を合したる母親の、子ゆゑに迷ふ闇の闇、二人は何と言葉さへ、涙に涙結ぼるゝ、血筋の別れ與次郎も、涙の雨の古布子袖くひしばり噦泣き、「アヽ傳兵衛樣の歎かしやるも道理ぢや、又おしゆんの

○おろおろ　[illegible]の意。涙のうるむ貌をいふ。
○子ゆゑの闇　「後撰集」巻十五・雑一、藤原兼輔の歌に「人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道にまどひぬるかな」（已出引）
○傍ひら　傍へ[illegible]の意であつて、「ら」は接尾語。
○死出　死出の山をいひ、冥途にある山。◉「死出」[illegible]見よ。
○したが　しかし。この下の文は、子を思ふ親心をしみじみと感じさせる美しい文である。
○おろか　おろそか。充分に言ひ盡されない。
○おしゆん傳兵衛と言はす　おしゆん傳兵衛と情死と世の中の人に言はせて、うき名を流す。情人同志を呼稱する場合は、女の名を先にいうたのが多い。
・心中　情死。「死出の道連れしやいなう」とあるに應じる。
○闇の闇　涙に涙　共に同じ語を重ねて意味を[illegible]。
○布子　木綿の綿入。

○分からぬ道理　前の文に「さんと分からぬやうになつて来たわい」とあるに應じる。
○猿廻し　猿を飼ひ馴らして種々の藝を教へ、これを舞はせて錢を貰ひ歩く者。猿舞。[illegible]
ここの文は、自分が猿廻しであるのを幸ひに、猿廻しの品々を用立てるから、二人共猿廻しの姿になつて逃げよといふのである。
○お初徳兵衞　元禄十六年四月七日、大阪堂島新地天滿屋の抱女お初と、内本町醤油商平野屋の手代徳兵衞とが、曾根崎天神の森で情死した。之を淨瑠璃に作つた有名な近松作「曾根崎心中」は、本書上巻に收めてある。
○お猿はめでたやな　めでたやな　猿廻しの歌。
○あろかいな、さんな又あろかいな　猿廻しの唄の調子。二上り新内、猿廻しの唄にも「小猿の時から飼ひおいて、フトした縁の御用に立ち、殺さにやならぬ今のしぎ、畜生なれどよう聞けよ、せめて今度は人間に、生れ代つて来るやうに、エリトハ、[illegible]、エー[illegible]「あろかいな」[illegible]「さんな」は三王の約[illegible]「あろかいな」はそれでよくあらうかなあと猿の舞ふを許した意から起つたものであらう。
○顔眞赤　[illegible]
○つれない　[illegible]
○ひぞる　乾反るの義、物の乾いて反るをいひ、[illegible]「ひぞらず」とは立腹せずの意。
○差す　[illegible]す。

泣きやるも道理ぢや、母じや人の泣かしやるのも猶道理ぢや、道理ぢや〳〵、道理〳〵というては根つから葉つから、何時までも分からぬ道理ぢや、ガコレ二人ながら母者人の今の言葉、御合點がまゐりましたか、エ、コリヤ、汝も得心してくれたか、合點がいたか、サ、、、合點したらば、どうぞ此の場を立退く分別、しかし其の形では人目に立つ、京の町を離れるまで、此の編笠に顔隠し幸ひの猿廻し、健全で二人が末長う、目出度う女夫になり遂げる、門出の祝ひに此の與次郎がお初徳兵衞が祝言の壽、こなた衆も別れの杯、イヤ〳〵祝言の杯」と、地祝ひ唄ふも聲低に、「歌お猿はめでたやな、合拍子婿入姿ものつしりと〳〵、詞コレさりとは〳〵ナウあろかいな、さんな又あろかいな、詞ヲ、徳兵衞様ござんせ、餘りこな様が来やうが遅いによつて、お初様は顔眞赤にして腹立て、居やんすわいなう、コレお初様、婿様が杯をしたいといなう、機嫌直して杯を戴かんせ、コレコレ〳〵戴くなら杯を、さんな又あろかいな、地ヤ、コレ婿様、足で杯をさす餘りつれない、それでは嫁御が戴かんせぬわいなう、ひぞらずとほんまに差してやらんせ、さうぢや〳〵、そこでお初が戴いた物ぢや、地コレ戴く〳〵なう杯を、さん

な又あろかいな、コレ嫁御の晝寝も轉りとせい〳〵、ナ、コレ、エあろかいな、さんな又あろかいな、コレ婿様餘りつれなうさんすによつて、おしゆん嫁御様が起きさんせぬわいなう、そこらでちよつと起したり、〳〵、エコリヤコリヤイコリヤ、さりとは〳〵ナウあろかいな、さんな又あろかいな、起きたら互に抱付きやれ、ヲヽそれで機嫌が直つたぞ、エヽヽヽあろかいな、さんな又あろかいな、くるりと返つて立つたりな、立つてくれコレ〳〵〳〵立たしやませ、序に日和を見てたもれ好い女房ぢやに、〳〵ナウあろかいな、さんな又あろかいな、日和見たらば落ちてたも、〳〵、コレさうぢや〳〵、お猿はめでたやめでたやな」、「サア〳〵きり〳〵此の家を、猿廻し、勝る目出度う何時までも、命全うしてたも」と、目には見えねども、見送る母、言葉も此の世で聞き納め、心の中の暇乞明日の噂と、形振も窶す、姿の女夫連れ、名を繪草紙に聖護院森を、あてどに、たどり行く

○晝寝もころり　猿のよくする藝。
○さんす　なされます。
○日和を見る　額に手をあて仰ぎ見る動作で、猿のよくする藝。
○たもれ　「たまはれ」の約。下され。
○[illegible]　[illegible]
○きり〳〵　てきぱき。さつさと。近松作「源五兵衛おまん薩摩歌」に「きり〳〵戻りや迎ひに來た」。
○[illegible] [illegible]枚の粗惡な小冊子である。繪草紙は新聞發達の第一歩に立つたもので、ここにいへるも、おしゆん傳兵衛の心中が[illegible]いうたものである。
○[illegible] [illegible]にある。[illegible]なく、すつかり變つてしまつた。

下之卷（道行涙のあみ笠。聖護院の段）

登場人物の主な者

井筒屋傳兵衞（喜左衞門の子）　おしゆん（祇園の遊女）　勘藏（惡漢）
万八（惡漢）　十助（喜左衞門の手代）　與次郎（おしゆんの兄）
瀧口左内（龜山藩の勘定頭）　井筒屋喜左衞門（掛屋商。傳兵衞の父）

梗概

〔道行涙のあみ笠〕　傳兵衞は猿廻しの姿に身を窶し、おしゆんを連れて夜道をとぼとぼと、昔を懐び今の身を嘆きながら、錦小路を經て誓願寺の前を過ぎ、「死んだ後は繪草紙に綴られて唄はれるであらう」と泣きつゝ、聖護院の森の此方に着いた。

〔聖護院の段〕　勘藏・万八は瀧口左内・十助に追はれて逃げ延び、喘ぎながら芝生の上に身を休めた。其の後の樋の陰から十助が現はれ、組みつ組まれつ投げつ投げられつ、命限りと摑み合ふ。折から左内が駈付けたので、万八等は逃げ去つた。

此方の森では傳兵衞・おしゆんが死なうとして、思ひ出の數々を語り合うて嘆く。折節與次郎が駈付けて情死を止める。左内は喜左衞門を伴ひ、十助は勘藏・万八に繩を掛けて引立て來り、左内は「横淵官左衞門の罪惡露見したによつて殺し手に罪なく、勘藏・万八の罪狀を代官所に訴へて、久八の出牢を願ふばかりである」と語る。又喜左衞門はおしゆんを請出して傳兵衞の妻とすることとなつて、萬事目出度く納まつた。

御陣九州
地理八道

彦山權現誓助劔

解題

天明六年閏十月十八日から初めて大阪道頓堀東の芝居(座本竹本千太郎)に上演された。作者は梅野下風、近松保藏である。
本曲は十一段に分れ、就中第七の内の「瓢簞棚」及び第九「毛谷村六助住家」が最も名高い。

作者

梅野下風は、天明六年から寛政十年までの間に、他の者と共に作つた曲が五種あるが、本曲はその最も有名な物である。(「聲曲類纂」追考に「梅の下風（千葉軒湖水軒佐藤太）」とあれど、近松千葉軒と近松湖水軒とは別人である)。

實説

「西澤文庫傳奇作書」續篇中卷に、「彦山權現誓助劔も梅野下風の作にて、鎭西御軍記といへる寫本の内より、毛谷村六助吉岡の娘に助太刀して京極内匠を討せる條を仕組める物にして、是も筋は至極よけれど、兎角狂言にまとまり兼たる筋なり云々」とある。然し毛谷村六助の事は「豹皮錄」に載つてゐるものと頗る酷似してゐる。「豹皮錄」に據れば次の如くである。
毛谷村六助は豐前彦山の麓毛谷村に生れ、天性强力、母に孝養の志が厚かつた。嘗て劔術を某氏に學んで其の奥義を究め、國中に敵する者が無かつた。
奸徒京極内匠は防州岩國興國寺で吉岡一味齋を暗殺し、逃れて豐前をさまようた。時に小倉城主立花統虎武を好んで六助を召抱へようとしたが、六助は「老母に仕へねばなりませぬから」とて辭したので、然らばとて六助に打勝つ者を求めたが、仕を願ふ者いづれも六助との試合に負けた。内匠も仕を求める者であつたが、六助には勝たれぬことを知つて奸策を廻らし、農夫の老婆を賺して我が母と稱し、之を伴うて六助の家を訪ひ、「私こと浪人となり母を連れて困窮してゐます。何とかして小倉藩に召抱へられようと存じましても、劔術拙く貴殿と技を較べては固より叶はず。どうぞ哀れと思召し御なさけに預かつて、貴殿との試合に私に勝たせて下され」と賴み入れたので、六助はその孝心に感じて快く諾ひ、勝を讓つて、内匠は小倉藩主に召抱へられた。

後日六助は内匠の奸策を知つて怒る。折から一味齋の娘は父の仇内匠が豐前に居るを知り、六助を尋ねて助力をこひ、六助の後援によつて終に内匠を討取つた。統虎は六助の孝且つ義を賞して、貴田孫兵衛統治と名乗らせた。統治は豐臣秀吉の命を以て、一味齋の娘と婚儀を擧げ、秀吉の選んだ勇士三十五人と力を角して之に勝ち、終に無雙の劍客木村又藏に負けて加藤清正の臣となり、後朝鮮征伐の軍に從ひ、兀良哈で戰死したといふ。

影　響

本曲の「瓢簞棚の段」「毛谷村六助住家の段」などは、其の後も諸方で操人形淨瑠璃芝居にも、歌舞伎芝居にも、上演されて現今もなほ壽命を保つてゐる。義臣孝子の美しい心と、勸善懲惡の理とを示した所は、興味の中心となつて世の人に感激を與へるであらう。

本曲の梗概

本曲は其の構想技巧餘りに荒唐であり、蕪雜である所が往々あるので、第七、八、九の外は各段に就いての梗概を述べないで、大體の要點を記して置く。

中國の大膳主部晉成(毛利元就)の家來劍術師範京極内匠(後に微塵彈正といふ)は、同役吉岡一味齋の娘お菊に懸想し結婚を申込んだが、拒絶されたので遺恨を含み、晉成公に勸めて一味齋との御前試合を催し、之に勝つて恥辱を與へようとしたが、却つて負けた。その意趣によつて、防州の小松原で不意に一味齋を狙撃し、之を殺して行方を晦ました。

一味齋には三人の子があつて、女子をお園。お菊といひ、晉成公の激勵のお言葉を拜して敵討に出る。男子三之丞は盲目の

爲敵討に行かれないのを殘念がり、門出の血祭にと自刄した。

姉妹は分れて敵の所在を尋ね廻る中、お菊は須磨の浦で返討にされ、其の幼兒彌三松は奴友平に助けられたが、友平自害の後は郎黨佐五平に連れられて豐前に下つた。そして彦山の麓毛谷村の杉坂で敵の一味門脇儀平等に逢うて、佐五平は殺され、彌三松は劍術の奧義を究めた達人毛谷村の六助に拾はれた。

またお菊の姉お園は小栗栖で辻君に俏して敵の在處を探り、千辛萬苦の末これも毛谷村に下り、仙人の家の物乾竿に彌三松の着物が乾してあるのを見咎めて立寄る。そこで計らずも許嫁の夫六助に邂逅し、母も彌三松も居合はせて互に奇遇を喜び、六助の助力を得て首尾よく本望を達した。

以上の事柄に、明智光秀主從の怨念や、眞柴久吉の朝鮮征伐に關する事（本曲題名の割註「御陣九州地理八道」はこれによつて附けた）などを絡ませ、牧司官の幻術、蛙丸の名劍、千鳥の香爐の不可思議のことなどを取入れて巧に脚色したものである。就中毛谷村六助の素朴で美しい心は全篇に異彩を放ち、忠臣は必らず孝子の門より出で、義臣も孝子の門に求むべきを明らかに見せてゐる。

第七（栗栖の小野。瓢簞棚の段）

登場人物の主な者

銅八（京極内匠の變名。明智光秀の遺子。吉岡一味齋を防州で暗殺した悪漢）　茂九郎（獨樂廻しの見物人）

佐五平（吉岡家の郎黨。お園に仕ふ。老人）　お園（吉岡一味齋の娘。お菊の姉）　鷲鼠川（相撲取）

轟傳五右衛門（立浪家の執權）　友　平（吉岡家の奴。お菊に從ふ）

梗　概

秋の夕暮、銅八は栗栖の小野の路傍に六角の獨樂を廻し、茂九郎等其處へ寄集つて賭事に興じてゐる。その所へ辻君が傘と下駄片方とを持ち、鼻緒擦した足をびつこして來る。そして銅八に話掛けて、互に己があさましい渡世の業を語り合ひ、銅八はふざけながら別れる。其の後で佐五平が來り、「これ辻君、今夕も揚料をやるから宿所へ早う歸れ」とて、銀玉一歩を與へる。辻君「これは有難う存じます。今宵で三日、お伽もしないで銀を戴く、こりやどうしたお志」と問ふ。佐五平「いや別儀でないこの所の鎭守神牛頭天王は靈驗あらたなるによつて、手前の主人が七日の通夜をなされる。その御祈禱の間施しの銀だ」といへば、辻君は徒口をたたき小唄を歌うて歸る。佐五平「騷がしい女だな。どれ樣子を主人に申上げよう」と、呟きながら元來た道へ引返す（これから名高い[illegible]宵闇の段となる）

佐五平は、駕籠に乘つて來るお園に逢つて、辻君を追拂つた事を告げる。お園は之を聞いて駕籠から出る、其の姿は夕化粧媚かしう全くの辻君と見えた。お園「今宵はここで通夜するから、其方は旅宿へ歸り、明朝乘物をもつて迎へに來れ」とて、之を歸した。そして「一味齋の娘ともある者が、あさましい辻君の形に俏すのも、往來の人を試して親の仇京極内匠の在處を知らう爲。雲の裏までも尋ね出さで置くべきか」と、獨言ちつゝ刀を隱して露けき草叢の中に立つ。青侍や相撲取の鬮鼠川が通りかかり、お園にからかつて行き過ぎる。

その後で立浪家の執權轟傳五右衛門が從者を連れ、騎馬にて通る。お園近寄り、「申し〱遊んでおくれ」とて、掛鞍に手をかける。從者之を叱すれば傳五右衛門、「いや待て」と聲を掛け、提燈を揚げて辻君を凝視し、從者を去らせて、「和女は藝州吉岡氏の御息女ではござらぬか」。お園「いや〱さやうな者ではございませぬ」傳五右衛門「お隱しなさるに及びませぬ」とて、馬上に一禮して己が身の上を名乘り、十七年前に一味齋に弟子入りした事を語つて、懇に一味齋不慮の横死の悔みを述べ、

「其の敵討の爲に心勞なさるか」と、厚い同情を寄せたので、お園も我が名を明かして叩頭する。

傳五右衛門は關所の往來札を取出してお園に與へ、「芽出度う本望をお遂げの時を待ち申す。おさらば」と、互に默禮して別れる。

友平駈來つてお園に行當る。お園「友平ではないか」。友平「これはお園樣か」と、互にそれと知つて喜び話合ひ、友平はお園の妹お菊の幼兒の息災な事を述べたが、お菊の事を言はない。その爲にお園は妹の身を案じて之を問へば、友平「須磨の濱邊で、駕籠を尋ねてお園樣の側を離れました間に、曲者に殺されなされました。詮方なく泣く亡骸を葬り、御形見に黑髮を切取りました」とて差出し、「其の曲者の名さへ知れませぬ。これは其の場で拾ひましたが、何か手懸りになりますまいか」とて、守袋を出した。お園は驚いて涙にくれながら、守袋の中を改めれば、臍の緒を入れて、書付に「永祿九年五月十日誕生」とあるのみなので、お園「これは手懸りには餘り捉まへ所のないものだ」といふ。友平「すれば手懸りにはなりませぬか」と、落膽して歎き、責任を全うされなかつた事を謝して切腹する。

お園は妹の黑髮を取上げて愁歎に沈み、友平の最期を褒めて不便がる。友平は恥入つて身を掻きむしり、流れ出る血汐に草葉を染めつゝ、落ちてゐる臍の緒を握りしめて目を瞋らし、「主人の敵我が身の敵、何國に隱れるとても恨を晴らさで置くべきか」と呼ばはり、臍の緒を池中に投棄てて息を引取つた。と、俄に池の面波立ち、お園が懐中の千鳥の香爐音を出す。お園「はて訝しや、これは吉事か凶事か」と獨言つ。

この時銅八が池のほとりに現はれる。池の中では明智光秀の幽靈が銅八を呼掛ける、其の聲は銅八に聞えるばかりである。銅八「ヤア明智光秀の亡魂とや、ハテ今まで我は兒島の郡代京極新左衛門の實子と思うてゐたに、それは養父であつて、實父は光秀殿であるか。それで思ひ當る事がある。嘗て晉成の館で、四法天但馬が最期の際に我が人相を見て、貴方は光秀公の遺子でござふうがと言つたが、誠であつたか。すれば彼の首を刎ねたのは殘念な事をした、今呼掛けられたのは、この池で父の首の血汐

を洗はれ、そして又最期まで差してゐられた、其の蛙丸の名劔をこの水底に隠されたを、我に讓るとの御所存でござりますな。久吉を狙ふとも四海に望みをかけなとの御教訓か、ハ、、、、物體なや」と禮拜した。かくて彼は池の浮草を分け、蛙丸の劔を探つて之を獲る。

折節蛙頻りに鳴き、お園の懐中の香爐も音を出す。お園は銅八を咎しや我が尋ねる敵かと思ひ、近づいてはつと飛退き、又馴馴しう寄つて蛙丸の劔に手を掛ける。銅八は千鳥の香爐を奪はうとして、揉合ひ捻合ひ引合ひ引取るはずみに、拳放れて劔は夕顔棚の上に跳上る。銅八はお園の横腹を突飛ばして、鼯鼠の樹傳ふ如く夕顔棚にさら〳〵と登れば、お園もつゞいて攀登り、互にえいやつと切結ぶ。空には秋の月冴え渡り、閃く太刀風物凄く、打込み受留め、あちこち外す虚々實々、刀をこめてはつたと切先下りに打下すを、丁と受け留めるお園の刀は碎けて散つた。其の隙に銅八は飛んで逃げるを、遁さじと後を慕ひ追うて行く。

第七の内（瓢簞棚の段）

道へと引返す、薄を分くる秋風が吹送り、たる乗物は、急ぐとせねどおのづから、栗栖野にこそ着にけり、「ハ、只今途中から申上げたる通り、夜發共は殘らず拂ひ置きました」と、引戸明くれば立ち出る、容儀器量も吉岡が、娘と誰か

○道へと引返す　お園の[illegible]栗栖の小野の辻君に金を與へて追拂ひ、跡戻りして之をお園に[illegible]

○栗栖野　今の[illegible]に「栗栖野は伏見の東、醍醐の西也」。後の文に「小[illegible]」[illegible]

○夜發　夜鷹、立君、辻君、惣嫁などともいふ。

○容儀　[illegible]

○吉岡　[illegible]

夕げわひ作りやつして辻君と、見せばや見せん其風情、「今宵も是に通夜すれば、明方に迎ひの乘物、其方達は旅宿へ歸れ、早ふ／＼」と追ッかへし、邊り見廻し獨言、「旅宿近邊の人目を憚り、毎夜爰迄乘物にて忍び出、往來の人を試し見るも今宵で五夜さ、それぞと思ふ者にも出合はぬは、神佛のお惠みの無いのかと、思へば悲しい身の上、一味齋が娘とも言はるゝ者が此樣な、夜發立君の姿に俏し、苦勞辛苦をする事も、皆京極めが所爲故、憎しと思ふ念力に尋ね逢はいで置こふか」と、男勝りの其魂、一腰隱し置く露の草の茂みに、立盡す、絹物ながらしみづきて、一重に薄き青侍、通りかゝるを、走り寄り、「遊んでおくれ」と袖口に手を差込めど怖めぬ體、鼻に扇のいやみして、「ハヽア月前の惣州面白いなあ、併し嚢中に四文錢が三銅、是を遣しただ錢の、二文の釣にかゝろより我住む宿へ歸ろやれ、コレそもじは其處にいつ迄も、稻荷の惣嫁じや有まいか」と、睫毛濡して、行過ぐる、大道一ぱい大股に、摩れぬ太股摩れた顏取り手、相撲が歩み寄り、「菊野よ、小せんよ、又今夜も居らぬはい、ホヽヲゑらいな、ゑらいな／＼姉よ、一番揉んでくれぬかい、いかなお敵でもなア、コリヤ左差たらなア」と

○夕けはひ　夕化粧。
○俏す　行儀を崩す。西鶴作「一代男」卷七、其面影は雪昔の條に「事過ぎて跡はやつして亂れ酒」。
○ばや　「や」は疑問の助詞。見せたら見せうか。「心あてに折らばや折らむ」の「ばや」と同じ。
○京極　京極内匠。吉岡一味齋を殺した惡人。
○一腰　刀一本。
○しみづく　夜の寒い爲に氷り付くをいふ。「古今集」戀三の部の歌に「笹の葉におく初霜の夜を寒みしみはつくとも色に出でめや」とあるのも同じ。
○青侍　官位の卑い侍。「青」は青書生の「青」と同じく、未熟の意。ここの文は、絹物一重の薄着と、その色の薄青と、青侍とをいひかく。
○怖めぬ　臆せず、はにかまぬ。
○いやみ　否味で、殊更に品をつくる生意氣な不快の態度。きざ。
○惣州　惣嫁、辻君のことをいふ。「州」は、湯女を湯州といふ州に同じ。この所、詩句らしい口吻。
○四文錢　錢一箇が普通錢即ちただ錢・四文に當るものをいひ、寛永通寳などの青波錢をいふ。明和四年十月新吉鑄貨品位に「一、眞錢一青波錢と唱へ、一四文錢なり」と。
○ただ錢　普錢（なみせん）に同じ。普通錢。ここの文意、四文錢三箇一ぱり錢十二文に當る。二文の釣といふのは、惣嫁を買ふ料金は十文である。十文で惣嫁を買つた事は、料金であることは「近松語彙」に見えてゐる。

寄掛けしが、我より抜群大女房、見るよりしよげるあま一聲、伯母樣地取見にごんや、だんないわいの、どいつでも留め居つたが最後、此鼬鼠川が聞かんわいじや、ヱ、コレおれが力が見せたい」と、嘘に見へすく褌で、伊達吐き散らし鼬鼠川、尻こそばふも、逃歸る、又の往來を、松蟲も、すだく鈴蟲轡の音、八條流の乘り振に、立派を見する西國武士進ませ手綱行く駒の、道を遮り、「申々遊んでおくれ」と掛鞍に手をかくれば、「ヤイ コリヤく 御用先を妨る不敵の女め、留める者に事を缺き、馬を留むるとはよつ程な助兵衛やつ、そこ放せ下れ、下れ下り居らふ」、「イヤ コリヤく 家來ども暫く待て、褌留めの心を持つて控へしは、樣子ある女と見つる、明しを持て」と挑灯の、火影にとつくと互の人柄、見上げ見下し打ち頷き、「コリヤこち達も行先の出口に控へ待合せよ、早行く」と、家來を拂ひ、「貴さまと絶て久しき對面といひ、殊更夜陰の事なれども中々見違へ、

○釣にかゝろ　釣錢にあづからう、即ち釣錢をもらはうの意。
・そもじ　貴方（そなた）の文字詞。
[illegible]
○稻荷の惣嫁　狐は稻荷のつかはしめといへは、[illegible]
○眦毛濡す　諺に「眉に唾をつける」といひ、眉に唾をつければ狐狸に魅せられないといふ。
○離れた顏　[illegible]
○[illegible]子　[illegible]
○[illegible]野、小[illegible]　[illegible]
○惣嫁　[illegible]といひ、又客から己が相手の遊女をさしていふ。あひかた。
○[illegible]　[illegible]
○地取　相撲部屋の稽古相撲。
○ごんや　ござれや。おいでなさいよ。
○だんない　大事無い。差支ない。
○留め居る　人場をとめて入れない。
○こき散らし鼬鼠川、尻こそばふ　鼬鼠の最後屁をきかせた。
○こそばふ　こそばゆい。こそぐつたい。
○すだく　[illegible]「すだく＝萬葉集に多集をよめり、蟲のよりあつまりて鳴〔かまびす〕しき意にいへり、集抱の義にや」。
○轡　轡蟲をきかせた。
◉八條流　八條房繁を祖とする馬術の一派。

○掛鞍　馬に掛けた鞍。
○不敵　大膽不敵。
○事を缺き　[illegible]べきものが多いのに、かゝることをなし。

○助兵衛　好〔すき〕（好色の意）を「すけ」と轉じ、兵衛を添へて人名の如くいひなした語。男又は女の好色者をいふ。
○褌留め　[illegible]
○げにさま　いかさま。いかにも。

は致さぬ、其處許は藝州吉岡氏の御息女でござらふがの」、「ヱ丶イヤ　左樣の者ではござりませぬ」、「イヤ〳〵隱し召るゝな」と、馬の三頭へ膝折屈め、「拙者事は立浪家の執權轟傳五右衛門と申者、一味齋殿の御高名を慕ひ、お國へ推參致せしは早十七ヶ年以前、其時其處許は、御幼少の折なればよも見覺へは致されまい、御親父には數度御對顏致し、劍術奧義の端々をも、承り得たる事なれば、外ならず門人同然の傳五右衛門、是迄も書通を以て音信絶ず、然る所一味齋殿不慮の横死と聞しより、ヱ丶死なしたり殘念や、直樣馳付け諸共に、敵の詮議と存じたれど、仕官の身なれば詮方なく明暮無念に思ひしが、不思議にも今其、息女に廻り逢し事、吉岡殿を再び見申す心地して落涙致す、去りながら心得ぬ其有樣はヱ丶聞へた、コリヤ敵を狙はん其爲に、姿を俏せし辻君なるか　ハテサテ　逞しきお志、女ながらも天晴家柄、如何樣親父の胤なるぞや、ホ丶ヲ出かされたり賴もし」と、感じ入たる面色に、人の心の花見へし、「園ぞ」と名乘り手をつけば、傳五右衛門は懷中より燒印の札取出し、「敵の有所分明ならずば、六十餘州の端々までも、探し尋ぬる所存ならんが、今九州は新關あつて迂濶に通行な

〇三頭　馬の尾の上で、腰のくぼみの所。

〇執權　家老職。

〇死なしたり　原本「死なしたり」とあれど、「しなし(爲了)たり」とあるべきで、「死」は借字。しまつたり。

〇逞しき　健氣〔けなげ〕なのを、勢盛んなと褒めたのである。

〇心の花　傳五右衛門の美しいなさけ心を花に喩へていふ。「花」「園」と縁語によつてつゞけた。

〇六十餘州　日本全國。

〇新關　豐前國門司關をさすのであらう。門司關の興廢未詳。これを新關というたのは脚色であつて、文祿・慶長初年頃には關所はない。

り難し、それこそ關所の往來札、惠むは夜發へ今宵の花代」、「ヱヽ忝いお志、本望遂げて此お禮は」、「ヲヽサ目出度ふ承はらん、おさらば」、「さらば」と默禮し、誠の心筑紫人馬を、早めて急ぎ行、便り無き身は世の人の情の詞力草、伏拜みてぞ泣涙、かゝる折柄息急き、來かゝる奴も眞黒な、紺のだいなし分らぬ闇、ほうど躓き行當り、「是はしたり滅多に心の急きまする者だから、でつかちない粗相致した眞平〳〵、序にお尋申さふは、此所の鎭守とやらに、女中一人通夜なされてござるのを、御存じは有まいかな」、「ムヽそふ言やるは友平ではないかいの」、「ヱそふおつしやるはお園樣でござりますか、是はしたり、ヤレ〳〵嬉しや〳〵、何か仰置かれましたる御旅宿へ、漸う著仕つたる所、是に御座なさるゝと聞や否、イヤモ知らない道を闇雲に尋ねましてごはります」、「ヲヽ大儀大儀、長しい道中といひ女子供の初旅なれば、嘸かし其方のいかひ苦勞、能ふ介抱して給つたのふ、そふしてアノ妹や彌三松は、旅宿に休んで居やるかや」、「成程坊樣は御旅宿で佐五平に、急度預け置きましたが、隨分御機嫌な能ござります」、「ヲヽそれで安堵仕ました、いやもふ案じられたは妹が事、虚性な上に持

○力草　力と頼むところ。

○眞黒　わき目もふらぬさまに、色の眞黒をいひかく。（索引）

○紺の代無し　紺染地の着物　[illegible]　一説に紺は卑しき色にして、昔より奴僕などが多く紺の着物を着す、[illegible]といふ意なり」。

○ほうど躓き　したゝかに躓き倒れかけたるをいふ。「はうど」は索引を見よ。

○滅多　やたら。（索引）

○でつかちない　大變な。近松作「心中二枚繪草紙」に「向[illegible]からでつかちない光物が飛んで出て」。

○女中　婦人。

○何か　何かと。色々と。

○闇雲　[illegible]

○女子供　[illegible]子供[illegible]彌三松。

○虚性　「きやしや」（華奢）の訛で、細つそりと[illegible]

病の癪、若し道で發りはせなんだか、達者で有たか無事なかと、かきたくる程諄ねられ、答へん詞荒涙膝に淵なす計なり、「ム、差うつむいて涙の體は合點が行かぬ氣遣はしい、ヱヽどうやら胸が騒がれて心許ない、樣子を早ふ聞かしてくれ、なせ返事せぬコリヤ友平、何とじやどうじや」とせりかけられ「ヱ、無念な、口惜ふござりますはいのふ」「ナニ口惜い無念なとは」「サア申上るも面目ない事だが、お妹御お菊樣は人手にかかつてあへない御最期」「ヤアと仰天氣は半亂、餘りの事に涙も出ず、むしやぶり附て引しやなぐり、「ヱヽヽ何の事じやぞやい、誠かいやい／＼」「ヲヽお道理だ／＼わいの」「サア何者の所爲敵は何奴早ふ言へ、こりやどふせうぞいやい／＼」「ヲヽお道理だ／＼／＼道理でごはりますわいのふ」「サコリヤ何處での事じや」「サレバ、須磨の邊迄お供致しましたが、旅勞れにや御持病發り、うろたへ廻つて私めは、駕籠借へいと跡の宿へ引返し、又立戻る途中にて、怪しき曲者下郎を目懸け切かけしを、拔合せ二打三打、合す間もなく逃行しを、追つかくる足元に、痛はしやお菊樣、明き所もなしに數ケ所の深手、呼たけつても返らぬお命、また天道のお捨か、和子

○癪　胸部又は腹部に痙攣を起して烈しく痛む病氣で、婦人に多い。（見索引）
○かきたくる　掻きむしる義。いらつて身をもがくをいふ。この語は本曲第九にも出づ。
○人手　お菊は暗夜に須磨の浦邊で京極内匠に殺されたが、友平はその場に居合はさなかつた爲、その下手人を知らない事が、本曲第六に見えてゐる。
○むしやぶり附く　「むさぼりつく」（貪附）の訛り。とりこめて取附くこと（武者振附は當字）。
○引しやなぐる　引きむしる。近松作「曾根崎心中」に「つかみつき、掻きしやなぐり」。
○須磨　もと村をなしてゐたが、今は神戸市内。古來風光明媚の地として知られてゐる。
○べい　「べし」の音便。
○曲者　怪しい者。一くせある者。わるもの。
○たける　呼の義。よぶ。さけぶ。
○和子樣　若樣。

○いしこらし　「いしくらし」の轉。神妙らしい。殊勝らしい。

○ずだ〳〵　寸斷々々。

◇友平の責任感はいぢらしうも貴い。

○臍の緒　[illegible]細長い肉[illegible]死すれば亡骸と共に棺に入れる風習があつた。

○永祿九年五月十日　永祿九年（正親町天皇[illegible]）[illegible]月十日は京極内[illegible]の誕生日なる事が後文で知れる。

○ばつと　漠（ばく）と。漠然と。つかまへ所のなきをいふ。

○しちど[illegible]「片時離れぬ兄弟の、六度契りて兄となり、七[illegible]なる因縁深きものなるをいふ。

様にはお怪我もなければ、悲しい中にも心を勵まし、此曲者のは必定敵、追つ付いて捕へんと思へど遙時も過ぎ、方角知れねば詮方も、泣く〳〵御骸取納め、御龕にもと切取りし、此黒髪をお妹御と思し召れて下さりませ、御歎きもお腹立ちも御尤だ、御尤でごはりますはいの、〳〵、※いしこらしくお供を仕ながら、此樣な事に逢はせましたは、手を出してせぬ計、やつぱりおらが殺しましたも、同じこと主殺しだわいの〳〵、※ずだずだになされたとてお恨はない、サア突つしやりませ、地「切刻んで下されよ」と、首差付くれば泣目を拂ひ、詞「コリヤ身の言譯をするに及ばぬ、少しなりとも手懸りに、成るべき事をなぜ言はぬ、うろたへたか友平」と、地言はれてそれよと取り出す、守り袋を手に取つて、「此中には如何樣な物が有るぞ」、「サア※臍の緒がごはります、シテ書付は※永祿九年五月十日の誕生と計ごはりますが、手懸りは成りますまいかな」、「稚名さへも記してない書付、あんまり※ばつとした物じやが」、「スリヤ手懸りには成ませぬか、ホイ〳〵、地はつと計にどふど坐し思ひ極めし、フシ身の覺悟、フシお園は形見の、黒髪を撫つ摩りつ肌に添へ、「※七度結んで姉と成る六度契りて妹と、言ひかはしたる甲斐もなき、

親の敵を現とも夢辨へぬ稚子に、嘸や心の引されて迷ふて居やるで有ふのふ、迷ふてなりと今一目姿形を見せてたも。逢たいわいの」と聲を上くどき焦れて歎きしが、漸う涙押留め、「詞ヲヽそふじや、地此切髪を添へとせば兄弟寄添居る心」、先の世までも同胞の契り忘るな長髢、其小枕の事迄も、未來へ、黄楊の櫛の歯に、解きほどかれぬ縺れをも、凌ぎおふせて勝山と縁起祝ひし黒髪の色も、つや〳〵烏羽玉の、地闇こそ幸友平は、腹存分に切あばき、一息ほつと、月影の出汐はおのが身の知死期、苦痛隱せど夫ぞとは、悟りしお園も氣を張り詰め、「詞ヲヽ天晴健氣の切腹は、慥に園が見届けた、此世にござる母様は假令御容赦あるにもせよ、未來におはする父樣へは、命捨てずは言譯立つまい、ヲヽ能ふ腹切つた出かしたなあ」とは言ふ物の不便やと、悔み惜めば友平は、一期の終り大聲上ニハヽヽヽ有難や忝なや、腑甲斐ない奴めでも家來と思し召ばこそ、お歎なされて下さるる、ヱヽ物體ない罰當り、申譯に成る事なら、下郎め如きのどん腹を、百貳百切つたとて何惜からふ、よし御宥免あるにもせよ、此樣な不吉者が、大切な敵討に、何とお供が致されませう、ヱヽ淺ましい業曝し」と、我と我身を掻むしり、

○迷ふ　死しても妄執の爲成佛できないで、魂魄この世に迷ふをいふ。
○添へ　添へ髮。いれがみ。髢（かもじ）。
○文彌　岡本文彌が語り創めた哀婉な調の浄瑠璃節。（見索引）
○小枕　髷の根を高くし髷の締りよい爲に、中剃の上に押當てて入れるもので、はじめは附木などを輪にして用ひたが、紙を堅く束ね又は黄楊などで作り、其上を紺紙又は紫絹で包むやうになつた。又小枕付けの入髮などもできた。
○冷泉、タ、キ、説經　いづれも浄瑠璃節の一種。◉「冷泉」「タ、キ」を見よ。
○勝山　今の丸髷の前形であつて、髮を輪に卷上げて笄でとめた結び方。承應萬治頃江戸吉原の遊女勝山といふ太夫が結び創めたものだといふ。
◉烏羽玉の　「黒髮」「闇」にかゝる枕詞。
○月影の出汐　月の出る時刻にさす汐。謠曲「松風」に「澄む月の出汐をいざや汲まうよ」。一息ほつと吐くときに月をいひかく。
○知死期　俗説に人の死ぬる時刻は自ら定まつてゐるといふ。轉じて、死ぬる時機。（見索引）
○腑甲斐ない　いくぢがない。「甲斐」は當字であつて、價（かひ）即ち價値の義。胴腹のすわらぬ價値なきをいふ。
○どん腹　腹をのゝしつて强くいふ。「どん」は「どんじり」「どんじまひ」などの「どん」と同じ。
○業曝し　前世でなした悪業の報によつて、現

世に受けた恥辱を世にさらすこと。
○五體　全身の意。（見索引）
○齒節　齒莖（はぐき）。齒の根のある部分。
○千鳥香爐　もと連歌師飯尾宗祇の珍藏してゐたといはれてゐる名高い青磁の香爐で、足がそろはないで少し長短ある故に、千鳥香爐と稱するのだといふ。
○銅八　[illegible]した京極内匠の變名　京極内匠は明智光秀の遺子であつて、幼名を[illegible]といひ、備前兒島の郡代京極新左衛門に拾はれ[illegible]養育され[illegible]銅八は、[illegible]光秀の遺子である事を[illegible]であるが、今光秀の亡魂に呼掛けられてはじめて之を知つた。
○わろ　「わらは」（童）の約訛であらう。わつぱ。人を[illegible]（見索引）。ここでは明智光秀の亡魂をさす。
○音成　中國の太守[illegible]成をいさ、毛利元就のもおり。
○四法天但馬　明智光秀の第[illegible]の[illegible]四王天但馬守といひ、[illegible]秀吉を[illegible]て寺院に入り、探しかねて出る所に、加藤清正に逢ひ、[illegible]この者は本曲に東菜（とくねぎ）の城主、車騎將軍牧司官（もくそくわん）と偽り稱して活躍し、本曲第三・音成館の段に京極内匠に首を刎ねられる時に、内匠の人相を見て「貴方は明智光秀公の遺子で、幼名を秀丸と云[illegible]」[illegible]、内匠は信じないで[illegible]
○忘れ形見　[illegible]

※五體を揉めば龍口より、流るゝ血汐紅に草葉染なす血の涙、落ちたる守りの臍の緒を、引掴んで眼を見開き、「ヱヽ、思へば〳〵腹立ちや、主人の敵、我身の仇、何國に隠れ忍ぶとも、一念通さで置くべきか」と、怒りの※齒ぶしに噛しめ食裂き池水へはたと打込み引取る息、俄に烈しく逆浪打吹上げ吹卷水煙、忽ちお園が懐中に音を啼※千鳥香爐の不思議、「ハテ訝しや、池水烈しく立登れば、啼音を發する千鳥の香爐。若しや吉事か、但しは凶事か、何にもせよ怪しき業を見聞くよな」、「ヲヽイ、〳〵（ヲイノフ）、行くといふのに忙しない、頻りに己を呼返すは、誰じやぞいやい、ヤア何處からじや、慥爰らに聞へるが」と、うろ〳〵戻る※銅八は、池の邊りに聞耳立て、「ヤヽ何と、明智光秀が亡魂じや、（ハテノウ）、其※わろが又何で己を呼返した、ムヽ、（ヒヤウ）、ヤア〳〵、すりや今迄、眞實の親と思ひ居つた、兒島の郡代京極新左衛門は、我を拾ひし養父にて、誠の父は明智殿で有つたよな、ハヽア思ひ合はせし事こそ有れ、※音成が館にて※四法天但馬我を見咎め、主君の面差に能く似たり、光秀殿の※忘れ形見にて有るべしと、言つたる詞ひし〳〵と、今こそ思ひ當つたり、ヱヽさは知らずしてむざ〳〵と、可惜しき

郎等を失ひしこそ殘念〳〵、併し心得難きは此年月、過ぎ行き去つて今日只今、呼掛けられし仔細はいかに、ム、扨は、山崎の合戰に打負。此所に命を落す際迄も、帶せられたる蛙丸の名劍、久吉が手に渡らん事を悔み憤り是なる池中に隠せしとや、即ち御首をも此池にて洗ひ流せし其血汐、凝固まりし魂魄殘り。守護せられたる名劍の、其名を感じ集つたる、蛙の聲を假初に、素性を知らせ劍をも、讓り與へん其所存とな、ハヽ、有難や忝や、其上に我行末の事迄も、思し召れて久吉に、遺恨の刃は合すとも、四海に望をかくるなとは、後車の戒め子を思ふ、父の大恩ハヽヽヽ、物體なや」と、三拜九拜悅び涙、「いで亡父の御賜物拜領せん」と浮草を、かき分け探り當りし名劍、押戴いて拔放せば、劍の氣を得る蛙面の相、猶も頻りに蛙の聲。又も鳴出す香爐の奇特。思はず兩人飛開き互に透し、見て見ぬ振、劍を鞘に曲者は納り返つて、行先に、向へば避くる右左、附まとはれし「蔦かづら長き、契りを神かけて、忘れぬ人を今更に、去なしはせぬ」と引留る、「往來を妨る汝やまあ何處の者じや」、「アイ私が生れは永祿九年五月十日の誕生」、「ハテ、ハテナア、夫が又何で爰に居りや」、「ハテわしや惣嫁」、「ヤ

○郎等　四法天但馬をさす。
○山崎の合戰　山城國乙訓郡大山崎は、天正十年羽柴秀吉が明智光秀と戰つて、之を破つた古戰場。
○此所　今京都市伏見區小栗栖、明智藪。
○蛙丸　この劍のことなど總て俗說である。
○久吉　眞柴久吉をいひ、羽柴秀吉のもぢり。
○四海に望をかくるな　銅八が四海に望をかけてゐる事は見えぬから、之は光秀の亡魂の老婆心。
○後車の戒め　「漢書」賈誼傳に「前車覆、後車誡」　光秀が天下を奪ひ失敗したに鑑みて、自ら戒めよとの意。
○物體なや　おそれ多いわい。蓋し様體の滅び無くなる義で、それを惜む意から轉じたのである。物體はもの〳〵しい體をいふ。勿體と書くは當字。
○曲者　(既出)。ここは銅八郎が京極內匠をさす。
○蔦かづら　去なしはせぬ　蔦かづらの這ひまつはつて長いが如くに、長い契りを神に誓ひ、忘れずに思へる戀人を、今更に去なしはしませぬ。いつまでも連れ添ひませうとの意。俗諺に「蔦かづから長き契りや九十九〔つくも〕髮」。
○永祿九年五月十日　京極內匠が須磨の浦邊でお園を殺した時、彼が落した守袋の中の書付に、「永祿九年五月十日誕生」とあつた事が本曲の前文に見えてゐる。その年月日をお園がいうたのである。
○惣嫁　辻君、立君、夜鷹。
○伽羅　奇南香、轉じて上品、沈香。又轉じて名香をいふ。頭髮に附ける香油、名に伽羅油といふのもある。
○きだん　[illegible]
○はずんだ穿鑿　調子づいた物言ひふるまひ。

○斟酌なし　遠慮なし。
○善は急げぢや　諺。「毛吹草」などにも見ゆ。
○啼かして見たいは此懐　お園の懐にある千鳥の香爐を啼かして見たい。情事をもきかす。
○しこなしやの　程よい思はせぶりだわいの。
○心中　心の眞實。
○指を　指を切る。心中立〔だて〕するに指を切り、又は爪をはぐなどは、遊女間に多く行はれた。
○物打　刀の尖端［illegible］寸程の長さをいひ、最もよく［illegible］
○［illegible］
○せめ　鞘に［illegible］〔たが〕のやうに輪にして挿込ん［illegible］「せめ」として［illegible］
○帯取［illegible］定紋をつくる」とある。
○［illegible］
○當身　［illegible］で、手又は足を相手の急所に突當てて一時絶息させること。
○鼯鼠　［illegible］の獣、よく樹上を飛行する。
○つらら　この語をもて氷をいふ。「つらら」はつるつるの義で、即ちつるつるすべる意。お園の刀の碎けた形容。

惣嫁じや」、「サアそふでなくば、傍へ寄て、抱付、見やしやんせ、自慢じやなけれど伽羅の香は、幾夜留ても留飽ぬ、きだんに成氣はないかいな」ともたれ掛かれば、「有難い初對面からはずんだ穿鑿、斟酌なしに附合ふからは、善は急げじや、今爰で啼して見たいは此懐」、「ヲ、しこなしやの、肌打明るはお前の心中」、「ヲヲ見たくば見せう望みが有るか」、「サア望んで見たいは此劔」、「イヤあぶない事よしにせい」、「イヤ切るわいの」、「ソリヤ誰を」、「ハテ指を、妾から心中見せるのじや」と、言ふより早く劔の鍔際、物打しかと取り頭渡せ渡さじ一二のせめ、帯取芝引拉ぐる計捻合、引合引取はづみ、拳放れて夕顔の棚へ計らず跳上ぐれば、取下さんと駈寄を遣らじと障ゆるお園が脾腹、土足で當身にたぢ／＼たぢろく隙に、駈登れば、續いて跡より甲斐／＼しく、身は鼯鼠と這上り、互に探し尋ぬる太刀、取より早く切かくる、強氣の曲者劣らぬお園、打合ふ刀は氷柱の如く微塵に碎け飛散るにぞ、遙に退り身を構へ、「鍛し刀も名劔の、徳におされて折れたる物か」、「ヲ、不思議を怪しみ音を啼きし、其香爐こそ久吉が、祕藏の器物と聞たる故、打碎いて暫時の腹癒せ、又是なる夕顔の、實のりし數の

○馬印　大將の馬の側にたてて軍中の目標としたもので、戰國末期に始まつたといふ。千生瓢簞は豐太閤の馬印である。
○鎖鎌　鎌の柄に長き鎖を附け、其鎖の端に鐵丸を結付けた武器で、その鎖を振廻して敵の武器を卷取り、鎌を以て敵の首をかき切るなどに用ひる。これはお園の持てる武器。
○虎亂　虎の猛り飛びかゝる如く打込む太刀先の勢あること。謠曲「熊坂」に「小太刀を拔いてわたり合ひ、獅子奮迅・虎亂入、飛鳥のかけりの手をくだき」。

瓢こそ、取も直さず千生瓢簞、眞柴が家の馬印まづ此樣に」と小躍りし、只一薙に切拂ひ。直に踏込打ちかくるを、潜るは神力鎖鎌、丁々はつしと請留めて、今打かけたる虎亂の太刀、「切先下りに打下すは、若しや尋ぬる敵か」と、いふ間稻妻劔の電光ひらりと飛んで遠近の、霧に紛るゝ曲者を遁さじものと一足に飛んで、折しも沍へ渡る、月の光りを力にて跡を慕ふて追て行

第八及び第九（六助住家の段）

登場人物の主な者

微塵彈正（吉岡一味齋を暗殺した京極内匠の變名。三十四歳）　老婆（柚人斧右衛門の母）
六助（豐前彥山麓毛谷村に住し、八重垣流劔術の達人。後にお園の夫となる）　軍八（彈正の弟子）
曾平治（彈正の弟子）　栗右衛門（柚人。六助の弟子）　彌三松（お菊の遺兒。杉坂で六助に拾はれる）
老女（吉岡一味齋の妻。お園の母）　お園（一味齋の娘。お菊の姉。後に六助の妻となる）
斧右衛門（柚人）

梗概

第八に於て、微塵彈正が六十歳を越えた老婆（實は斧右衛門の母）を連れて、毛谷村の六助を訪問し、「貴方は假令私との劍術試合に、お勝ちなされても御仕官なされるでなし、若し私が勝てば私は小倉藩主立浪家から五百石に召抱へられます。さすればここに連れて參つた私の母に孝養を盡されますから、何卒私との試合に勝を讓つて下されますまいか」と懇請した。善良な六助は偽りとは知らず、孝心に感じて之を承諾した。立浪家の家老轟傳五右衛門は彈正の人物を疑つて、この試合に同意しなかつた。爲に彈正は六助の宅で試合する事となる。

六助は彥山權現の檜杉坂で、侍風の老人（佐五平である）が惡漢二三人（彈正一味の者）に取卷かれ、殺されてゐる場に際會し、惡漢を谷に投飛ばして之を殺し、老人が連れてゐた幼兒（彌三松である）を連れて歸り養育してゐる。（これから第九 六助住家の段となる）

慶長四年梅花薫る春の頃、六助は微塵彈正との試合に勝を讓つて負けた。彈正の弟子重八。曾平治は、我が師の勝てるを喜び、囃立てて六助をさげすんだ。六助は頭を垂れて己が劍術の未熟を恥ぢゐる。彈正は弟子に護られて熨斗目の著物麻裃に著替へ、傲然として駕籠に乘り、意氣揚々として去る。六助は之を見送つた後、「試合に勝たせた今の人は何人かは知らねども、親を大切に思つて侍の言ひ難い事を打明けてお頼みになつた。孝養の爲とあつては己が勝つわけには行かぬ。あの人の勝は孝行の徳、親の威光故だと思つて、隨分孝養をお盡しなさい。我は親が無いから喜んでもらふ事もできず、味氣ない浮世だわい」と、亡き親を焦がれつぶやきつゝ、見遣る。

折から畑中を栗右衛門等の杣人農夫逆散に駈來り、彈正等が六助を口ぎたなく罵りながら、歸つて行つた事を語つて齒痒がる。六助「負けたのではない」と、之を諭せば、杣人等は六助の經緯を聞きたゞし、「やはり負けたのだ」と、くやしがつて去つた。その後六助は庄屋から貰つた牡丹餅を、拾ひ子（彌三松である）と共に食はうとして之を呼ぶ。

折節老女（一味齋の妻である）來つて六助の門前に佇み、物干に掛けてある子供の著物に目を付け、屋内を覗入つて、武器の掛けてあるを見て山賊の住家と思ひ、内に入つて一夜の宿をこふ。六助「お宿は致しかねるが、御隨意に休息召され」とて茶を差出すと

度をする。老女はこれがかねて尋ねる六助であらうと見定め、敵討を頼みたいものと、心は希望と歡喜とに燃えた。老女「お兒受け申せば親御も無ささうなが、私を親になさらぬか。貴方の心を見込んで遙々來たからは、土産も四五十兩は持參致した。その上によい金儲けの相談もある」。六助「オ、子にもならうが、暫く考へてお答する」とて、破れ障子を引立てて奥に入り、亡



花楓高色重賀紀（嘉永四年十一月三十日より市村座所演）
一勇齋國芳畫　毛谷村六助（澤村長十郎）
一味齋娘お園（坂東しうか）

母の位牌に向ひ念佛を唱へて冥福を祈る。この時外面に遊んでゐた拾ひ兒が歸り、母を慕ふので六助は之を抱上げていたはり、疣太鼓を叩いて賺してゐる間に兒は寐入る。六助は「無邪氣な者や」とて、抱いて蒲團の上に寐させ屏風を立てる。

折からお園は虛無僧となり、親の敵を尋ね來て、彌三松の著物が物干に掛けてあるに不審を抱き、其の著物に手を掛ける。隣家の者之を見て、盜人と疑ひ摑みかゝるを、お園は尺八を振つて撲廻し追散し、つゝと入り、「杉坂で五十歲餘りの佐五平を殺し、妹お菊の遺兒彌三松を奪取つた山賊め、赦して置かぬ」とて、六助を目懸けて打つてかゝる。六助「山賊と言はれる覺えはない」と答へて、身をかはしかい潜る。彌三松は物騷がしい音に目を覺し、屏風の中から飛出で、「ヤア伯父樣、伯母樣が來た」と、喜ぶのでお園氣がひるむ。

六助は杉坂でこの兒を拾つた仔細を語り、「何者の子か知れぬ爲、この子の著物を物干に掛けて置けば、それを見て立寄る緣者があらうと思うた心が早う屆き、尋ねてござつた。この子を伯母御に渡せば我も安心する」といふ。お園は之を聞いて心解け、「然らば貴方のお名は何と申す」。六助「オ、六助といひます」お園は

これが我が許嫁の夫かと仰天し、包みきれぬ嬉しさを抑へて、「それでは八重垣流劍術の達人と名高い六助様か。お連添ひがござりますか」六助「仔細あつて女房は持つてゐませぬ」。お園「あゝ嬉しや〳〵。それで何より落著いた。お前様の妻は私でござりまする」とて、直ちに立つていそいそと、家事の働に取りかゝる。

六助は來る者毎に、視となるの、妻でござるのといふに氣味惡く、「全體和女は誰だ」と問ふ。お園俄に行儀を改め、「餘りの嬉しさにあわてて、申す事も後先になりました、お恥かしや。父がかねゞ申した言葉に、お前は行末劍術の達人豐前國毛谷村の六助の妻となつて、吉岡の相續をさせようと思ひ、六助殿に音信を通じて置いたと聞きました。それで二十歳を越えても斯うして獨身者、推量して下さりませ」。六助「さすれば和女は一味齋殿の御息女か。これはしたり」と、低頭平身してお園を上座に直した。そしてお園から一味齋や弟妹が非業の死を遂げた事情を聞いて、相共に不幸を悲しむ。

六助「私は嘗て彦山の麓で一味齋殿に逢つて、兵法印可の一卷を授かつた。その時のお詞に、拙者の娘お園と夫婦となつて、吉岡を相續してくれよ。そして貴方の劍術に勝つ者あらば、師匠と頼んで修業せよと、懇切な教訓を賜はつた。その師匠の忘れ形見の和女、お懐はしう存じまする」と、感涙にくれてお園を拜した。之を陰で聞いてゐた老母は彌三松の手を引いて出で、「自らは一味齋の家婦であつて、お園の母である」と名乘り、一味齋の愛刀を六助に與へる。

折節門外騷がしう、杣人等が老婆の死骸を戸板に載せて來り、「これは斧右衞門の母で、杉坂の橋下で殺されてゐました。どうぞ敵を討つて下され」といふ。斧右衞門も泣いて敵討を頼む。六助は其の死骸を能く見れば、以前微塵彈正が自分の母と稱して連れて來た老婆なので、「エヽ惡い微塵め」と、無念骨髓に徹し、「よし〳〵、敵を討つて遣る」と約束したので、杣人等は喜んで歸る。お園の母は始終を聞濟し、敵の人相書や、永祿九年五月十日生れで、今年二十四歳になる事などを考へ合はせて、「其の微塵とやらは我が夫一味齋の敵である」と告げる。「然らば吾には舅の敵」、「吾には親の敵、弟妹の敵、念頭を離れぬ無恨を晴らさん」と叫ぶ、盲龜の浮木、優曇華（値ひ難い得難い機會の喩にいふ。莊嚴王品に「佛難得値、如優曇波羅華、又如一眼之龜値浮木孔」。）の、花待ち得た心地して勇み

立つ。六助「早まつてはならぬ。微塵彈正は今五百石にて召抱へられた小倉立浪家の藩士なれば、まづ拙者から彈正との試合を願ひ出で、木太刀を以て彼奴を撲ちのめした上、敵討の仔細を言上して、御免を請うてはいかゞ」と、謀つてそれに一決した。そこでお園は紅梅の一枝を折り（勝つ色見する意を寓す）、老母は椿の枝を折つて（幾久しくお園と夫婦の意を寓す）、首途の縁起を祝ひ、彌三松と共に四人連れで、豐前小倉の領内へ出發する。

評

お園の母が初めて六助に逢ひ、自分でばかりこれが娘の聟かと知つて、「何と物は言うて見盡ぢやが、妾を親にさつしやれぬか」といふ。其の後お園が來、六助を山賊と疑つて斬付ける騷ぎを、お園の母は其のあばら屋に居て出て來ず。またお園は六助に名前を聞いて、さてはとひとり心に喜び、「コレイなあお前の女房は妾ぢやぞえ」といふ、其のそゝつかしさ呆れるばかり。其の外事件の運びの上にも、お園の母が、六助とお園との話合ひや樣子を殘らず聞澄した後、奥から孫を連れて出て、母子對面するなどは、事實としてあり得ぬ事である。かやうな不自然はまだある。要するにこれ等は舊劇の紋切形であつて、現代人には甚しく感興を殺ぐものである。

然し吾人は舊劇に對するこれ等理論上の批評は暫く措き、義理人情に重きを置いた幻華藝術として、女丈夫のお園や、溫和で孝心厚く義に富んだ勇士の六助を思ひ浮べるのは、修養上にも決して無益ではあるまい。

第九（六助住家の段）

一「勝負は見へた彈正殿お手柄〳〵、立合召るゝと早勝ちと見へました、何と仔

○勝負は見えた　吉岡一味齋を暗殺した惡漢京極内匠（微塵彈正といふ）は、母に孝養を盡したいと僞り、孝心深い六助を感じさせて、六助との試合に勝を讓つてもらつたのである。

○手練　鍛練の腕前。立派な手並。
○イヤモ段々誤り入り　怖やの〳〵　六助の詞。
○拔けて　ぬきんでて。卓越して。
○イヤ知れた事だ　立て置かれたてや　軍八の詞。
○殿　小倉藩主。
○ヲ、サ然る所　早く〳〵　皆手前の詞。
○鞍馬山の僧正　京都の北方愛宕郡に聳える鞍馬山の[illegible]僧正が谷に住み、牛若丸に兵法の[illegible]義を傳へた大天狗をいふ。[illegible]曲「鞍馬天狗」に「われ此山に年[illegible]たる大天狗は我なり、君兵法の大事を傳へて平家を亡ぼし給ふべきなり云々」と見え、「義經記」には、牛若に兵法の[illegible]書を傳へたのは鬼一法眼である由見え、いづれにしても甚だ曖昧な人物である。
○微塵流　劍術の一[illegible]。「北條五代記」七に「愛宕山に[illegible]、[illegible]て兵法の秘術を傳へ[illegible]中[illegible]て、微塵流と名付け人に教へ」て。
○[illegible]　[illegible]を容れる[illegible]の蓋をいひ、後には其蓋の形に作つて衣服を載せ、又は食物などを[illegible]る物となつた。
○吉良流　[illegible]に[illegible]しかつた。
[illegible]

平治殿達ふた物ではござらぬか」、「いか樣軍八殿言はるゝ通り適御手練でござる、ヤイ六助、我に勝つ者あらば奉公せんなどと、人もなげなる廣言は最早是で言はれまいがな」、「イヤモ段々誤り入りましてござります、何が山稼の透間には、在所の者どもを相手に我流無法の叩き合、ヤレ六助は劍術がよいはの、兵法を拔けて居るはのと、誰が言ふとなき取沙汰、ぱつと噂立つたのが今での迷惑、誠の藝に出合ふては中々叶ふ物ではござりませぬ、怖やの〳〵」、「イヤ知れた事だ、汝が雜言吐くを殿も憎しと思し召せばこそ、六助に勝れし者あらば、五百石にて召抱へんと有る高札を、所々に立置かれたてや」、「ヲ、サ然る所、鞍馬山の僧正も閉口する劍術者、微塵流の親玉が顯われ出し故、殿にも甚御悅び、即御前に於て兩人が立合、御覽遊ばされたく思し召せど、家老轟殿が、今一息不呑込だから汝があばら屋にて立合せ、打勝つに於ては召抱へよと、兩人へ檢分の役仰付られた、餘程むづかしい試合であらふと思ひの外、イヤ手間も隙も入る事か、彼城下町の煤取に、古疊を叩くより心安く見へたはいハ、、、、、扨々先生恐れ入つた、イヤ先衣服を召替られよ、早く〳〵」と廣蓋に、吉良流の

折形包、熨斗目の衣服麻社袢、御紋附に着せ替ゆれば、忽ち見かはす其人柄。詞付き早横柄に、「イヤナニ※そな者、假令打負けたれば迚力を落すな、是からが修行の所だから、隨分出精したがよい、後々はよく成らふ〳〵」、「コレ先生いらざる御教訓お構ひなされな、ヤイ汝御領分の奴なればお慈悲を以て深きお咎はあるまい、なれど以後を急度嗜み居らふ、ソレ家來ども乘物是へ、イザ先生お召なされ」、「是は憚り、やはり此儘歩行致さふ」、「イヤテヤ只今よりは殿の御師範、我々が爲にも先生なれば平に〳〵」、地「然らば御免」と乘移るを、直に舁出すお六※尺、※七尺去つて師範を得、フシ悦び勇み出て行、地門送りして六助は、※つつくり立つて獨言、詞「ア、誰しも孝行には仕たいもの、見ず知らずの人なれど、親御を大事に思ふて、侍の言ひにくい事を打割つて頼ましやつた、其實心な所がどふも默止がたなさ、契約の通り打負けて進ぜた今日の試合、イヤコレ必禮には及ばぬぞや、是もやつぱり親の威光故じやと思ふて、存生の中隨分と孝行を盡さつしやりませ、おれが樣に死別れといふものは何したとてとんと※まめしげはないぞいの、必大切にさつしやれ」と、地言ひつゝ見やる※眞黒に成つて山賤共、すた

○熨斗目　練絲を經にし、生絲を緯にして織り、衣服に仕立てて腰のあたりに縞を織出し、他は無地なものをいひ、武家の禮服であつて、その上に麻社袢を着用した。

○イヤナニ　後々はよく成らふ〳〵　彈正の詞。

○そな者　そこな者。

◉六尺　駕籠舁夫「かきふ」をいふ。

○七尺去つて師範　諺の「七尺去つて師の影を踏まず」を應用した、「童子教」に「弟子去二七尺一、師影不レ可レ踏」。

○つつくり　徒空の義か。つくねん。近松作「山崎與次兵衞壽の門松」に「母は始終つゝくりさ、のうお傾城の詰開きはむづかしさうな事や」。

○まめしげ　忠實氣。たのもしげ。近松作「丹波與作待夜の小室節」中卷に「世間で惡う歌はれて、まめしげもなき浮世や」。

○眞黒になつて　一目散に。ここでは「走り」にかゝる。卽ち走るに心が奪はれて、傍の物は何にも見えぬ意。近松作「日本武將吾妻鑑」第五に「日本武者[illegible]」

○へしやげる　「ひしやげる」拉ぐの[illegible]。みしやげる。おしつぶされる。[illegible]してゐる者がぺいぺい、「へしやられる」意。

○抱へる　召抱へる。俸禄を與へて家來とする。

○頬桁　「ほゝげた」「頬桁たゝく」などと、しやべる意にいふ。

○いぢらしさ　[illegible]　かはいさうなさま。

○きろり　[illegible]御前試合をして、殿様が[illegible]御覧になつて居られる所が[illegible]

○小倉　豊前國[illegible]

○着物　[illegible]「きるもの」[illegible]

○まつかい　[illegible]血さをいひ[illegible]

○くろめる　「[illegible]」[illegible]かすかに[illegible]

○栗右衛門　[illegible]山脇へや[illegible]まだつし」の[illegible]

すた息急き走り付、「サア／＼／＼六助殿内へ這入た／＼、へしやげたはいの／＼、此方ら迄も鼻がへしやげたはいの」、「ハテやかましい何の事じや」、「何の事とは此方の事じや、六助に勝つた者は抱ふと、殿様から方々へ立て、置かしやつた高札を、奴共が皆引抜いて去んだはいの、じやによつてへしやげたはいの／＼」、「ソリヤ何ぞあつちの勝手づくで持つて去んだ物で有うぞい」、「イヤ／＼それ計りじやない六助めが頬桁とはきつい違ひ、打たれ居つた其いぢらしさ、大方骨が砕けたで有ろ、イヤ今時分は泣々頭の缺けを尋ねて居るで有ふのと、口々吐かして去に居つたが、此方さんはほんまに負けたのかい」、「イヤ嘘じや、殿様の御意じやから、勝負をせふと言ふては来たれど、爰で立合ふては晴れ立ぬ、殿様の前付けならば御前きろりがよい、小倉からお召なされたら、何時でも行て勝負せふと追戻したが、それを腹立てて悪口言ふたので有ろぞいやい」、「ムヽ、そふかいなあ、それに又額の其瘢は」、「是か、是はあのヽヽヽヽ、夫れ／＼、あの着物干に出て、入口の石に蹴躓き、竹垣で摩破つてのけたのじや」と、嘘も眞かい血に染みし、額押へてくろめる詞、譴々ながら栗右衛門、「イヤコレ[illegible]りの柴ら謎ま

ある、六助先生が今の詞と掛けて」「ムヽ、何と解の一、「サア極めて有る掛目よりたんと有る干鰯と解、其心は一、「ハテ負けた聲じやと思はるゝ」と、苦り切てぞ歸りける、一彼等があのやうに言ふのは、一手ゝ習ふ師匠じやと思ふからの深切、馴染の者共に愛想盡かされても、人の爲に成る事ながら厭ひはせぬ、然し得心した事ながら、負けたと思やがつくりと力ない、ヤ是は扨、腹迄が急に力無ふ成た程にの、ヲツトよし／＼、昨日庄屋から貰ふた牡丹餅、鼠が引かずばやつぱり其儘有るで有ふ、ドレ孤殿にも食さふ一と、表に出て其處らを見廻し「コレ孤殿戻らしやれ、それ崖へやなど落ちまいぞ、是は又何所に遊んで居る事ぞ、孤殿／＼、イヤ／＼戻つた所で、彼牡丹餅が無くば手持無沙汰、先有か無いか見て來ふ一と、子供にさへも僞りを、言はぬ生得生拔し、梅と、椿の大木を、直に住家の門柱、立添ふ花も八重葎の霞の、屋根に蔦の壁草の、とぼそにイむ老女、外面に乾たる四つ身の小袖、一ハテ心得ず」と差覗き、見入る家の一壁に、鐵棒・鼻捩・山刀・半弓なんと掛け置しは、山立にても有んかと、一心に納めしとやかに、一コレハ心願有つて國々の神社を廻る年寄の一人旅、聊を輸か迷惑致す、

○干鰯　鰯の膓を取つた後を日に乾したもので肥料に用ひ、臭氣が烈しいから千臭の義であらう。野太夫言にふさはしい干鰯をいひ、極めた掛目より多いから負けたといひ、聲に肥をいひかけた。
○ながら　ながらは
○ぼた餅　はぎのもち。
○孤殿　孤の子、彌三松をいふ。彌三松は吉岡家の若黨佐五平に連れられて豐前に下り、彥山の麓毛谷村の杉坂で、敵京極内匠一味の門脇儀平等に逢つて、佐五平は殺され、彌三松は六助に拾はれた事が第八に見えてゐる。
○生得生拔きし　天性そのまゝで生ひ立つたのこと、實生「みしやう」のまゝで生成した意とをいひかく。
○八重葎　蔓などを繁く重ねて葺けること。花の八重にいひかけた。
○とぼそ　戸臍の義。戸のくるゝになつてゐるつぼ、卽ち臍をいひ、轉じて扉「とびら」をいふ。
○四つ身　本裁「ほんだち」のみごろから衽と衽「おくみ」とをとる衣服の裁ち方をいひ、兒童の着るもの。
○鼻捩　昔時馬方が馬の暴れるを制するに鼻をねぢる用具。長さ一尺五寸ばかりの棒を、黑と朱との段々塗にしてある。これを以て人を毆打などもした。
○山刀　山賤の用ひる鉈「なた」のやうな刃物。
○半弓　大弓の約半分の長さで坐して射られる弓。
○山立　山賊。

暫しの宿り御免なれ」と、案内聞より六助は、納戸を出て迎へ入れ見れば御老人の旅労れ嘸御難儀、宿はせずとも休息程の事は、緩りつと御勝手次第」「是は〳〵忝い、左様ならば」と打くつろぎ、囲爐裏に釣り鑵子の下、差焼べる木もほたほたと、心置なき饗應に、「イヤ のふ御亭主、どふやら獨住の様に見受けましたが左様かの、但し御両親でもござるかの」「イヤ〳〵母一人ござつたれど、近き頃相果られ、今ではほんの鰥暮し」、「ヲヽ それは不自由にござらふ、何と物は言ふて見書じやが姿を親にさつしやれぬか、斯見た所が、丁度よさそふな親子ではないかいの」と、ずつかりした事言ふ仁體、どうやら小氣味悪洒落な、「ハハヽヽ座興も旅の憂さ晴し、テモ氣の軽いお年寄じやのふ」、「イヤ 座興じやない、眞實親に成ませふ」、「ムヽそりや又なせな」、「サア 心様の逞しそふなこなたと見込で来た事じや物、まんざら無手では来ぬはいの、コレ爰に四五十両程はしつかり土産を持て居るし、まだ其上に味い金儲けの相談も有はい、サア〳〵早ふ親子に成て何もかも覆隠しなしに、打明けて談合する氣はないかいの」と、譯金から聢入り一詮議と、急けども急かぬ小鬢頭「ヲヽ 當に寄たら談合もせう、親

○鑵子 [illegible]茶釜。

○ほた〳〵 [illegible]た」をいひかく。「[illegible]る木をいへば火立の義なるべし」。

○[illegible]

○ずつかり 率直のさま。ずつかりした事をい[illegible]

○小氣味悪洒落 [illegible]ひかく。小氣味悪い悪洒落。

○[illegible]一詮議 [illegible]

○しな [illegible]

にもせう、がとつくりとおれが心の極まる迄は、退屈ながら彼の一間で、マア緩くりと待つたがよい」、「夫れならとんと腰据へて、やんがて孝行請ませふ」と、地丘に探る肌刀、身内と知らで暫くは、疑ひ（合）間の破障子引立てこそ入にける、地跡には不審取つ置いつ、思案吹散る春風に、梅が香、慕ひ鶯の、囀る聲に法華經も、既に暮れぬと告ぬらん、「詞ハ、刻限も違へず鶯がもふ鳥居に來た、如何様鳥でさへ法華經と囀るに、身の忙しさに取紛れ、念佛もろく〱に得申さぬ、ア、物體ない〱、申し母者人、如在じやごんせぬぞや、必叱つて下さるな」と、地位牌に向ひ合掌し、在すが如き孝行を、感ずる天の加護やがて、深き惠みも有ぬべし、地一心不亂他念なく、打鳴したる鈴の音に、誘はれ、歸る稚子の、目もとしほ〱亡き母と、知らで焦るゝ子心に、聞覺へてや拾ひ取、小石積みては母様と、慕ふ涙の雨やさめ、草葉に落ておのづから、手向の水の哀れなる、地賽の河原を目前に、見やる六助こらへかね、其儘駈下り抱き上げ、「尤じや〱尤じやはやい、どふぞ逢してやりたさに、何處じやと問ど別ちは知れず、勿論預けさしやつた人は、只一言も得言はぬ最期、スリヤ何國の誰が倅かは知らねど、いたいけにしは

○肌刀　肌の内の意にいうて、「肌刀身」とつゞけた。
○とつおいつ　「取りつ置きつ」の音便。兎や角と迷ふさま。（見索引）
○法華經　「妙法蓮華經」の略。日本・支那に最も廣く流布した大乘經典の一。鶯の囀る聲が「法華經」といふに似てゐるによつて經讀む鳥ともいふ。またこれを日没時の讀經の意にきかせて、「既に暮れぬ」とつゞけた。
○母者人　母たる人。母上。（見索引）
○如在　「そんざい」（存在）と等しく、ありのままといふことで、丁寧にせぬ義であらう。（但し語原は「論語」の「祭如在」から出たといふ說はいかゞ）。
○在すが如き　亡き親が歸り來して頭上に來り在すが如き。「論語」八佾篇に「祭如在、祭神如神在」。
○稚子　非業の死を遂げたお袖の子彌三松が哀れを、目のあたりに見るやうである。
○しを〱　可憐に愛らしい意の「しほ」（正しくは「しを」）に、萎れいた〱しい意をいひかけた。
○小石積みては　賽の河原、後に見ゆるの俗說に據る。
○雨やさめ　「さめ」は「はるさめ」（春雨）などの「さめ」と同じ語で雨のこと。同意語を重ねて雨の甚だしいことにいひ、甚だしく流涕するに喩ふ。
○賽の河原　俗說に、冥土にある河の名で、無罪なる兒ども死してこの河原にきて、積石を積んで

塔を[illegible]に、獄卒来つて之を崩散す、この時幼児は地藏菩薩の御袖下に隱れて身を免るといふ。見楽引。

○別ちは知れず　何の事わけもわからない。

○預けさしやつた人　仕た事をさす。

○いたいけ　傷氣の義。小兒などのいたいたしく、あはれなさまをいふ。

○しほらし　愛らしい。もと「しをらし」なるべく、「しをる」「しをらし」などいふ語は、撓「たわ」む意で、折れ曲る、なよなよと弱々しいの意から轉じて、やさしい、愛らしいの意になつたもの。見楽引。

○まはす　我が心に從ふやうに人を動かすをいふ。某作「山崎與次兵衛壽の門松」に「男の意地ならば、手柄に若妻を廻して見や」。本段の後文にも、「廻いた、廻いた、廻いた可愛がり」。

○六道の地藏　地藏菩薩は衆生を化度する爲に、常に身を六道に現じ、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道に入り、衆生を濟度し給ふによつていふ。

○八萬地獄　佛典の數八萬四千に對する地獄の大數を擧げたのである。

○咒太鼓　[illegible]でふさい太鼓をいひ、鐵太鼓よりいひ替へたる[illegible]「いは」は[illegible]の義、小なる意にいふ。

○わやく　「わうわく」枉惑、誑惑の約訛。無理。わるさ。見楽引。

○頑是なき　頑是は無心の義。小兒などが是非をわきまへない、聞きわけのない義。

らしう、伯父様、伯父様とまはす物、憎さふとて是が憎されうか、可愛や〳〵」と、「コレ伯父様、母様はなぜござらぬ、母様はしい、母様なふ」と泣き叫ぶ、「コレ其様に親を戀ひ焦れて、煩ひやなどしてくれなよ、ひよつと死んだら今の様に、賽の河原で石の數、一重積んでは父を慕ひ、二重積んでは母親を、尋ね焦れて六道の地藏菩薩に取すがり、父よ母よと泣といやい、おれも二人の親に離れ、女房もなければ子供同然、ほんに親に逢れる程ならば、賽の河原はまだな事、八萬地獄の底へでも、尋ねて行きたい逢たいもの、何辨へない心から、逢たがるのは無理じやない、ヲヽ道理じや〳〵可愛や」と、抱締め〳〵聲立て男泣きに歎きしが、漸う涙ふり拂ひ、「アヽ悪い孤殿、己までをそゝなかして泣かした程にの、サア〳〵、さつぱりと機嫌を直して、ソレ昨日買てやつた咒太鼓、それを叩いて遊ばしやれ、己が守してやりませう」、「イヤ〳〵太鼓はいやじや、おらや睡たい、母様と寐たいわいのふ、寐さしてほしい」と稚子のわやくも頑是なき寐入、「ホヽ、コリヤもふ寐入たそふな、ハテ子供といふ者は、とんと罪の無い佛様では有はいの、ドレ伯父が寐さしてやらふか」と倶に臥所の草莚、折節竹の、背

○吹暮し [illegible]尺八を吹いて日を暮した意で、「行暮し」などと同じいひ方である。
○虚無僧 [illegible]を遁り、尺八を吹いて諸国を修行したもので、昔は敵を尋ねる者がこの姿になることが多く、「人倫重寶記」(元祿九年刊) 卷五に、「虚無僧といへば敵討のやうにおもはるゝなり」。(見索引)
○ぶうぶう ぶつくみて不平をいふうるさい者。近松作[illegible]に「人間のぶうぶう[illegible]を[illegible]」。
○まいす 「賣僧」[illegible]
○宗門 [illegible]
○如法 [illegible]。近松作「女殺油地獄」に「一座遊びはによほふめく」。
○本山 [illegible]
○戒でない 原本「戒でないか」の「か」を脱[illegible]
○梵論字 [illegible]ここにいふ。「徒然草」第百十五段に「ぼろぼろといふ[illegible]字などいひける者、其のはじめなりけるとかや」。
○さる者 しかるべき者。相當の役儕ある者。
○聞けん 聞かさん。

も冴へて、吹暮しなる虚無僧の、宿求んと籬により、ム、爰に干して有る此四つ身は、慥に覺有る小袖」と、取んとするを後方から、「こりや盜人め」と二三人、摑みかゝるを寄付ず、振廻したる尺八の、長けた手利にぶうぶうども、眉間肩先腕骨脊骨、撲ちのめされて散り〴〵に、ヤシ我先と逃歸る、六助内より乾度目を付、「見れば賣僧の贋虚無僧、よつ程味をやり居つた」と、詰る詞を聞咎め、「ナニ贋虚無僧の賣僧とは」、「ハテ掟に違ふた身の廻りといひ、第一宗門の姿で、喧嘩口論ならぬ筈、又常人が理不盡を言ひ掛けても、隨分如法に濟せよとは、本山からの戒でない、其上尺八の本手は吹ず、今時流行雜な手を吹歩行からは、贋者と言ふたが誤りか、山賤は仕て居れど、夫れ程の事は知つて居る、何とでごんす梵論字」と、詞に一癖さる者と、見て取る此方も笑腕組て、ヲヽ其返答して聞ん」と、ずつと入るより背筒に、仕込みし短刀拔打ちを、ひらりと交はししつかと取、「フヽヽヽ、ちよつと見るから女とは悟つた故に咎て見たが、敵と言はるゝ覺はないぞ」「ヤ覺ないとは卑怯な奴、杉坂の邊りにて五十有餘の侍を手にかけ、路銀は勿論妹が、忘れ形見の倅子迄、奪ひ取た山賊め、紋しは

○[illegible]　只八[illegible]

○[illegible]

○手だれ　「てだり」(手足)の轉。伎倆のすぐれ[illegible]

○[illegible]

○のめらせ　前へたふし。「俚言集覽」に「のめ[illegible]」

○[illegible]別はなし　[illegible]

○[illegible]　[illegible]じた由緒[illegible]である。

せし」と振ほどき、鋭き切先無刀の六助、抜けつ潜つつあしらふ手だれ、遁さじものと附廻す、屏風の内より「伯母様か」と駈出る稚子見て喫驚、不審ながらも小腕に引抱、心許さず身構へたり、「コレ伯父様伯母様が来てじや、太鼓叩いて見せていのふ」、「ヲヽ合點じや〳〵、後に〳〵」、「イヤ今じや、早ふ〳〵」と頭是なふ、廻せば廻る子可愛がり、持遊び箱を引寄て、「ソレ今鳴すぞ、コレ聞かしやれや、二十三日は母者人の四十九日、杉坂の墓所を戻りがけ、泥坊めらが二三人、五十計な侍を、切るやら突くやら嬲り殺し、見るに見かねて片端からのめらせ、介抱すれど物も得言はず、其子を指差して拜んだばつかりがつくり往生、目前敵の盗人めら、踏殺して谷へ蹴込、連れて戻つて其子に問ど差別はなし、そこで思ひ付たあの着物、門口に干て置たは、其子の所縁を知らふ爲、心が早ふ屆いたか。現在の伯母御に渡せば此方も安堵、能ふまあ尋ねてごんしたの」と、悦ぶ體に僞りなき、眞實見ゆれど猶も根を押し、「しかと其詞に違ひないか」、「イヤ何が怖ふて僞り言はふ、くどい尋ねにや及ばぬ事」、「シテ此方さんの名は何といふ」、「ヲヽ六助と云まする」、「ヤア何と」、「サア毛谷村の六助といふ由緒

でごんす」、「ヤアすりや八重垣流の達人と音に聞へた六助様かヱヽ」とあきれて取落す、子はうろたへて逃込ども、知らず構はず六助を、うつかり眺め、見とれ居る、「今の様に言ふても疑ひ晴ず、やつぱり己を敵にするか」、「ヱヽわつけもない何の家來の一人や二人、どふなと仕たがよいはいな」と、前に寄添後に立、「テモマア　適好い殿御、マア何よりか落著いた、イヤ〳〵まだ落著かれぬ事が有るはいの、イヤ申、女房様がござりますかへ」、「イヤ仔細有つて女房は持ませぬ」、「ありやせまいがな、ないかへ〳〵、ヲヽ嬉しや〳〵、それでほんまに落著いた、コレイなあお前の女房は妾じやぞへ、サア〳〵女房じや〳〵」と掻手繰る程今迄も、逢たふ思ふた重荷が下り、三衣袋も茶袋に仕て見たがりの水仕わざ、袈裟も襷と掛徳利「酒も上げふし夕飯の、拵へせう」と釜の下、薪の濕り燃かぬる、「火吹竹は」と尺八を取違へては、可笑がり獨御機嫌六助は、承知內儀の振賣を、持餘たるむつと顏、「とんと譯が知れぬ、今日程けぶな日はない、見ず知らずのわろ達が、イヤ親にならふの、聟にならふのと、押入女房の手引した、あの子もめつたに油斷はならぬ、今體こなたはマア誰じやぞ」と、尋ねにはつと心付

○八重垣流　貴田統治「きだむねはる」の開いた劍術の流派。
○取落す　お園が稚子彌三松を取落したのであつて、前文に「小脇に引抱き」とある。
○わつけもない　「わつけ」は「わけ」（譯）に促音「つ」の添加した語。譯もないことを仰しやる。
○家來の…どうなとしたがよいわいな　前のお園の詞に、「杉坂のあたりにて五十有餘の侍を手にかけ」と、いへるによつてかくいふ。
○掻手繰る　（既出）
○三衣袋　僧侶の三衣をいれ持ち行く袋。三衣は三種の法衣卽ち大衣・七條・五條をいふ。虛無僧は法衣を著すればかくいうた。
○內儀　人の妻を呼ぶ稱。うちかた。（見索引）。ここの文洒落で面白く、「承知ない儀の振賣」の文句最も妙。
○振賣　物をになひ聲立てて賣りあるくこと。以て自分の口から妻だと稱して、六助の妻にと求めさせようとすることの意にいふ。
○けぶ　「けぶい」（煙）の略。氣づまり。不氣味。そして「奇[illegible]」をきかせて[illegible]
○わろ　「わらは」の約。人。（既出）

○眉を其儘・含まぬ　眉をその儘にして剃落さず、そうして/\お齒黑をつけませぬの意。昔は人妻となれば眉を剃落し、齒を染める風習があつたによつてかくいふ。

○あへない　敢無い。はりあひがない。力ない。

○闇々　わけもなく。むざ/\。

○姓名　實名。武士は假名のほかに二字の實名を有す。右衛門、兵衛門などいふは假名である。

き、俄に行儀改めて、「いふべき事も斯る先當な父様のおつしやるには、備前の國毛谷村の六助といふ者こそ、劔術勝れし器量の若者、行末は其方と妻合はせ、吉岡の家を相續させんと、音信通じ置たるぞと、操を守る此年月、二十の上を越しながら眉を其儘いかな鐵漿も含まぬ恥かしさ、推量なされて下さんせ」、「スリヤ其許は、吉岡一味齋殿の」「ハイ娘の園でござります」「コレハしたり」と手を取て無理に上座へ、押直し、「先何が差置きお尋ね申たいは、御親父一味齋殿、御健勝で今にお勤なさるゝか、御老體の事なれば、自然のお勞れにて、若し病氣など發りはせぬかと、寐ても覺ても心ならぬは是一つ」と、問れて園は涙ぐみ、「申すも敢ない事ながらおいとしや父様は、隣國周防の山口といふ所でな」、「ヤ、何が何とどふなされた」、「口惜や闇々と、騙し討れてはかない御最期」「イヤア、シテ/\其相手は町人土民でもあるかい、姓名は何と何國の誰」、「同じ家中に名を得たる劔術師範の京極内匠」、「シテ此以前に來られしは敵の在所は當國と知つてか但し知らずにか」、「サア所々方々と身を窶し、言ふに言はれぬ憂艱難、尋ね探せど敵の行方、今日が日迄も知れませぬはいな」、「ホイ」はつと計にどう

○妹　[illegible]須磨の邊で、親の仇京極内匠の爲に返討にあつて、殺され[illegible]に見えてゐる。
○味氣ない　[illegible]ない。
○あるる　荒れてある。荒涼たる。
○便りの人　六助をさす。
○二世　夫婦の緣をいふ。俗に「親子は一世、夫婦は二世、主從は三世」といふ。[illegible]
○高良の神　筑後國[illegible]町高良山上、高良[illegible]大社。
○[illegible]

ど坐し、拳を握り悔み泣、闇は取分悲しさを遣瀨涙の口說ごと、「ほんに憂世といひながら、身の憂事の斯くばかり重る物か父上の、敵を願ふ門出に、可愛や弟は盲目の、儘ならぬ身を悔み死跡に見捨て、古鄉を、出るも散り〴〵離れ離れ、在所を探す其内に、悲しや妹も劍の難、父上のみか抑や抑二人三人が味氣ない、刃の霜と消殘る母と私が憂き苦勞、辛い、悲しい、恥しい姿も形も厭ひなく雨露、雪の深山路や野末に、あるる一つ家に、もしや隱れて居やうかと、人なき道に、日を暮しさまよい歩行親と子が、便無い身の上もなき、便りの人に廻り逢ひ私が心の奥底を、明すは二世の我夫、必見捨て下さんすな、可愛と思ふて給はれ」とあまへ歎きて伏沈む、悲歎の涙六助も、「かゝる憂には猶更に、思ひ忘れぬ一昔、彥山の麓にて、目馴ぬ老翁にまみへしが、高良の神使なりと兵法印可の一卷を下されし、其老翁こそ吉岡殿と、察せし事は彼卷の、奥にあり〳〵御姓名書添へられしはこなたの事夫婦となりて吉岡の、家名相續致せよと六助如きの拙き業、傳へ聞れて有難や、神の使と僞つて、印可を與へ其上に、汝に勝つべき者あらば、それに隨ひ身を修め、末長久に榮へよと、教訓有りしは後々迄

○我慢 [illegible]、我慢にして他を輕蔑すること。
○だた [illegible]
○腸を斷つ 甚だしく憂ひ悲しむをいふ。白樂[illegible]
○冥途 [illegible]世界に赴く[illegible]
○とつかは あわてるさまにいふ。（見栄引）
○[illegible]
○[illegible]
○[illegible]
したことをさかせた。
○魂 刀をさす[illegible]に「刀は武士の魂、[illegible]は女の魂」といふ。
○獻々 酒杯を[illegible]かはすこと。
○三三九度 婚禮の酒杯の禮、夫婦となる男女の[illegible]酒杯をとりかはすこと。[illegible]そ[illegible]「三々九度」を「[illegible]から事」にいひかけた。

我慢を押ゆる御情、例へん方もなき大恩、肉にしみ骨に徹つて忘られず、母だに見遁る上からは、尋ね上つて恩を謝し、師の御顔をしみ〴〵と、拜せんものと思ひしも、皆無駄事と成つたるか、エヽ殘念や悔しやな、せめての形見の片腕れあら懷かしや」とお園を拜し、迸る涙はら〳〵、腸を斷つ思ひにて慕ひ歎くぞ、不便なる、時に障子の内咳き、「ホヽヲ師匠を慕ふ誠こそ、遙に聞き冥途より聞浮に歸る一味齋、對面せん」と聞ゆれば、思ひかけなくお園は喫驚、「ヤアそふおつしやるは母樣か」と、嬉しさとつかは押開く、内につこと以前の老女、柔和の面皺の波、打笑顏なし稚子の、手を引連れて立出づるを、見るよりはつと飛退り、「師の後室とは夢いさゝか、存ぜぬ事とて最前は、無骨のあしらひ無禮の段偏に御免下されかし」と誤り入つてぞ平伏す、「イヤのふ、さつきに逢た其時は、譯しも姑とも、互に知らねば他人も同然、今こそ親身泣寄りし、男子が爲には鐵の[illegible]通したる娘が操、不便と思ひ睦じふ夫婦に成つて下さらば、本望遂ぐるに疑ひもなき我夫の此魂、聟引出に」と差出せば、「ハヽヽヽこは有難き師の形見、御辭退申さず頂戴せん」と押戴し獻々の、杯三々九度からず、陳た生

娘今日よりは、手折せ初る花嫁御母も悦ぶ其所へ、「爰だや〳〵」と杣仲間達盧亡骸戸板に乗せ、どや〳〵と舁込んで、「コレ六助殿聞かしやませ、二十三日の事であつたがよ、此斧右衞門のお婆が見へぬとて、仲間中が手分をしての、ヲヽテヤ、何が所々方々を尋ね歩行、よふよふと杉坂の土橋の下で見付けた所がよ、此様なお蠶絹を引張せ、むごく殺して有りましたよ、敵が取つてやりたけれど、己どもでは何として、サヽヽそこで頼むは六助殿」と、いふに駈下り死骸の傍、立寄つてとつくと見、「ムヽすりや此死骸は其方が母か、アノ是が、「フン」と眉に皺、思案の體に杣仲間、「コリヤ斧右衞門濕り伏さずと頼みやれ」と、引起されて泣噦り、「アイ〳〵、皆のお言やる通りじやよ、敵を取て下さませ、アヽ死なしやる端か其晝間、鹽梅よふ出來た自慢の團子棚からころり、其身もころり、手で捏ねたとててこねる物か、何程杣が親じやとて、斯しやきばつた枝骨は、下さゞ樋へ這入るまい、這入りともない死出の山、覺束なかろのふ婆樣〳〵」と呼子鳥、山彦に響き泣く涙、落込む谷に水嵩のいとゞ増りて、見へぬらん、始終とつくと聞すまし、「ヲヽ氣遣ひするな、今の間に敵は己が取つてやる、其死骸

○母　第八に、微塵弾正（京極内匠のこと）が六十歳を越した老婆を連れて六助を訪ひ、「そなたさの御前試合に勝ては五百石に召抱へられ、この私の母を安心して養生させられるから、どうぞ試合に負けてくれ」と頼み、六助は虚僞とは知らないで、其の孝心に感じて負けてやつたとある。その老婆の屍體である。

○濕り　濕り涙。

○端　端緒。いとぐち。きざし。

○ころり　ころりと死ぬをいふ。

○てこねる　死ぬ。「御涅槃」「ごねはん」」「ごねる」「てこねる」は同様の語。西鶴作「好色五人女」巻三に「御内儀様はと尋ねけるに、…旦那にがい顔して、それはてこねたと言はれける」。

○しやきばる　「しやちはる」（鯱張）の義。硬「こはる」はる。死後いかたくなるをいふ。

○おろさゞ　「おろさずは」の約。枝を切るを枝をおろすといへば、杣人らしくその語をかりて、四肢を折らねばの意にいふ。

○死出の山　冥途にある山。（見索引）

○呼子鳥　「古今集」三鳥傳の一、郭公であるといふ。「呼ぶ」をいひかけ、且つ「覺束なかろのふ」といへるは、「古今集」巻一、春上部の歌「をちこちのたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな」をふまへた。「死出の山の一人旅は覺束なからうなう」の意。

○あ人 「あの人」の略。

○深い所へやる [illegible]

[illegible]にあはす。

○おのれ [illegible]「おのれ」

[illegible]

○骨柄 [illegible]

○[illegible]

○[illegible] お[illegible]懸想した程である

[illegible]

○小栗栖村 [illegible]

○三十四の年 [illegible]四年に

當る。

○[illegible]たものぞ、文字などを竹父は

[illegible]

大事にして、内へ往んで香花取れ、サア早ふ連れて行け、早ふ〳〵」と六助が、詞を勢に斧右衛門、「アヽ其様に言ふて下さるのが、婆様の爲にはお寺様の御引導、ナフ皆の衆」、「ヲヽテヤ、お人がアヽ言はりや、ちつとも氣遣ひ[illegible]泣顔を、笑顔に直し歸りける、跡に六助無念の顔色、「扨は柚が母を誑し込み、己れが親と僞つて、孝行ごかしに六助を、深い所へやり居つたな、ヘヱ思へば〳〵腹立ちや、卑怯未練の微塵彈正おのれ此儘置くべきか」と、胸も張裂く怒りの歯嚙、庭の青石三尺許り思はず踏込む、金剛力、「イヤコレ聟殿待たしやれや、此方の腹を立てさつしやる、相手の苗字は微塵とや」、「如何にも、己が流儀を其儘に、氏となしたる微塵彈正」、「ナニ其流儀の名が微塵とな、シテ其者の年輩は」、「三十二三至極の骨柄、面體白く目の中冴ゑ、左の眉に一つの黒子、慥にありあり左の腕、一の腕かけて刀疵」、「扨こそなア、同じ家中といひながら、お園といひ此[illegible]も、見知らぬ敵の人相書、妹に尋ね其御書せ置たる此安綸、また其上に、妹お死骸の傍に有りしとて、小栗栖村にて女竿が後の證據を遺したる、此隣の緒の書付に、永祿九年の生れと有る、月日を繰れば三十四の年人相といひ年の頃書符

○申請け　小野寺十内が家に敵討御許可の願ひを申出でゝ許した請けで。後文に「仇討御免の訴訟」とある。
○お袋　母たる人。蓋し小児は母のふところにて育つものなれば、「おふところ」の略轉語であらう。
○不覺　覺悟いたしかたならぬ事の意。通俗「をちごで失敗」。
○欺すに手なし　欺くに道を以てし巧に欺けば、七十有?、欺す手段がないとの意。
○蠅蟲　蠅蟲同然い者。人をいやしみ罵つていふ。後の「一撮み」に同じ。
●塞翁が馬　人間の禍福は定め難きをいふ故事。
○天地に慙づる義　正道に從ふを義といふ。義に背けば天地に慙づべきである。
○吉岡　吉岡一味齋。

の合たは尋ぬる敵、親の敵菊が仇恨を晴すは今此時、嬉しや娘片時も早ふ」「母様用意」と勇み立つ、「アヽ〳〵コレ〳〵二人共にマア待つた、慥にそれと知れたれば六助が爲にも師匠の仇、コレ氣遣せまい敵は討たす、が眞劍當ぬ其先に、木太刀で試合の意趣返し、撲つて撲つて撲ちのめし、申請けての敵討、お袋、女房、いざ一緒に」と取出す、破れ𧘕𧘔手傳ふて、母は腰板あてがふ紐、お園が取つてしつかりと結び合たる妹背の縁、「コレ伯父様、坊にも敵討たしてや」「ヲヽ出かした、賢い賢い強いなア、どりや行ふか」と言ふより早ひらりと庭へ、一ッ足飛、「コレ〳〵聟殿、輕き相手と侮つて、必不覺を取まいぞ」「そふとも〳〵欺すに手なし油斷なされな此方の人」、「ムヽヽヽ、何さ〳〵氣遣ひ無用、一旦こそは得心にて、負てやつたる蠅蟲め、謀り取つたる五百石、抱へられたも我情、却つて足を繋ぎしは、もつけの幸塞翁が(馬)味ふ出合ふた妻姑、恨は倶に六助も天地に慙る義の一字、鬼神とて京極内匠、我見る目には一撮み、然し御知行戴く内は、殿の御家人討得難し、試合を願ひ勝つた上直に仇討御免の訴訟、元首押へ討たさす」と、實にも鋭き魂を見極め置きし吉岡が眼力違はず、勇者なり、

お園は猶も勇みたち、咲亂れたる紅梅の花の一枝折持て、「ノフ〳〵我夫、梶原源太景季は平家の陣に切入つて、暴れを揚し箙の梅、是は敵の京極に勝つ色見する此花の、可愛男へ寄そこと、言ひつつ抱き付たさも親に遠慮の手をもぢ〳〵、母も同じく椿の一枝、一本望遂げた其上で直に八千代の玉椿變らぬ色の花聟殿、ノウイザ」と打連立出る三人が、中に弥三松は、奔走小倉の領内へ勇み進んで、出て行。

○箙の梅 [illegible]

○勝つ色見する此花 [illegible]「[illegible]色見する梅が枝、一花開[illegible]」[illegible]に京極に勝つをいひかく。

○八千代の玉椿 [illegible]と[illegible]八千歳一爲レ春、八千歳爲レ秋」とある。

○奔走小倉 奔走子に[illegible]前小倉をいひかく。奔走子[illegible]、子を走りまはり世話する義より轉じて、[illegible]

繪本太功記

解　題

寛政十一年七月十二日から、初めて大阪道頓堀豐竹若太夫の芝居に上演された。作者は近松柳。近松湖水軒。近松千葉軒である。

本曲は主として明智光秀謀反の顛末を仕組み、發端及び十三段に分れ、就中第十段目の「夕顔棚」尼崎」が最も名高い。

作　者

近松柳が他の人と共に作つたものに、「持丸長者金笄釼」(寛政六年三月上演)、「日吉丸稚櫻」(享和元年十月上演)、「日吉丸二度清書」(享和二年八月上演)などもあり、近松湖水軒が他の人と共に作つたものに、「鳰湖高名硯」(寛政十二年十二月上演)、「廓能湖來書艸紙」(文化六年一月上演)、「伊賀越乘掛合羽」(文化六年十二月上演)などもあり、又近松千葉軒が他の人と共に作つたものに、「彫刻左小刀」(寛政三年三月上演)、「蟬麿」(文政二年四月上演)などもある。

出　處

本曲は主に「繪本太閤記」に據つて脚色したものであつて、在來太閤秀吉に關する多くの戯曲の中で、最も世に知られたものである。本曲と「繪本太閤記」との關係は、兩者の中の主な人物の名を比較して置けば、略作者の趣向に就いても知られる便宜となると思ふ。

兩者の關係は左の通り。

尾田春長＝織田信長	郡＝毛利
眞柴筑前守久吉＝羽柴筑前守秀吉	小梅川隆景＝小早川隆景
武智惟任光秀＝明智惟任光秀	清水長左衛門宗治＝同上
尾田春忠＝織田信忠(小字を三法師といふ)	武智十次郎光慶＝明智十兵衛光慶
阿野の局＝於能の方	加藤正清＝加藤清正
森蘭丸＝同上	四王天田島頭＝四王天但馬守

操 —— 照子

足利慶覺 —— 足利覺慶（義昭）

安徳寺恵瓊和尚 —— 安國寺恵瓊和尚

主要人物の略傳

織田信長（本曲では尾田春長）は天文三年五月尾州古渡城に生れた。諸國を平定した功によつて天正五年右大臣となり、六年正二位に累進した。十年四月豐臣秀吉が毛利氏を備中高松城に攻め、援軍を信長に請うたので、信長は部將明智光秀に命じて先發させ、尋いで親ら赴かうとして京都本能寺に宿した。然るに光秀はかねて信長を恨んでゐたので、急に起つて本能寺を夜襲し、信長は近侍の臣と共に血戰して斃れた。時に六月二日。行年四十九。朝廷生前の功を賞して從一位太政大臣を贈られた。

豐臣秀吉（本曲では眞柴筑前守久吉）は天文五年正月一日尾州愛知郡中村に生れた。青年の頃遠江に行つて松下之綱の奴となり、後織田信長に仕へて屢ゝ武功を立て、天正十年四月信長の命を奉じて毛利の部將清水宗治を備中高松城に圍み、六月之を陷れた。偶ゝ本能寺の變があつたので急に毛利氏と和睦し、十三日逆臣明智光秀を山崎に破り、十三年七月從一位關白となり、十二月太政大臣となり、文祿元年朝鮮征伐の軍を起し、慶長三年八月十八日病の爲に伏見城に薨じた。行年六十三。詔して正一位を追贈された。

明智光秀（本曲では武智光秀）は十兵衞といふ。永祿九年初めて織田信長に仕へ、天正二年三月從五位下日向守となり、三年信長の命によつて姓を惟任と改め丹波に封ぜられた。五年十月片岡城を攻めて之を拔き、後波多野秀治を八上城に攻めて敗れ、母を人質として和し、秀治兄弟を捕へて信長に送つた。信長は之を磔刑に處したので、波多野の兵怒つて光秀の母を斬つた。光秀爲に信長を恨み、信長もまた屢ゝ光秀に暴行を加へたので、光秀大いに憤怨して十年六月二日信長を本能寺に襲うて之を弑した。六月十三日豐臣秀吉の軍と山崎に戰つて大敗し、坂本に遁れようとして途中小栗栖で、土人の爲に竹槍で刺され首を本能寺に曝された。時に十四日。反逆を企ててから僅に十三日。行年五十七。

清水宗治は長左衞門といひ、備中高松の城主。天正十年四月豐臣秀吉高松城を圍み、足守川及び備前國馬屋郷の溪流を堰いて

城に灌いだので、宗治は防禦の術に窮し、秀吉に書を送り、死して以て衆を救ひたいと申込んだので、秀吉はその節義に感じて巨樽五荷を贈る。宗治之を受けて自刄した。行年四十五。

明智光慶（本曲では武智光慶）は孝行で英才であつた。天正十年病の爲に丹波龜山にあつて父の反逆を知らなかつたが、父の書面を得て初めて之を知り、煩悶憂苦病重つて死んだ。行年十四。

足利覺慶（本曲では足利慶覺）は足利十五代の將軍。天文六年に生れ、南都一乘院の僧となつて覺慶といひ、永祿十年元服して義昭と改めた。天正元年信長を滅さうとして、却つて信長の爲に河内に逐はれて困窮し、三年備後に往き毛利氏に依つたが、後また京師に歸り、慶長二年八月十八日大阪で薨じた。行年六十一。

影響

本曲は享和三年一月二日から大阪北堀江市の側西側芝居にも上演され、また歌舞伎では「惠寶太功記」の外題で、寛政十二年十一月大阪中山德次郎座に上演された。その後淨瑠璃でも歌舞伎でもしば〳〵諸方に上演されて、今に壽命を保つてゐる。

評

本曲の人物として、尾田春長が其の臣武智光秀に對する行爲は、臣下を愛する道に悖つてゐた。それが爲に本能寺で哀れな最期を遂げる事になつた。これは主君として謹まねばならぬことである。又主を弑した光秀は安らかな時なく、其の母も妻も子も嫁も善人であつたにかかはらず、いづれも悲慘な境遇に陷れ、剰へ彼は主殺しの上に母を刺し、愛子を非道の戰に出して殺すこととなり、己は田夫野人の竹槍に貫かれて殪れるといふ恥曝しの最期を遂げて、後の世までも逆臣の汚名を殘した。眞柴久吉や小梅川隆景は智勇兼備で、情け心に富んだ主であつたから、いづれも大功を立て或は身を全うする事となり、また清水宗治や孫市などは、身を殺して義を成し人に惜しまれる者となつた。これらは主從の道を守つた人の鑑である。

更に老母が聖賢の道に合した名教訓も、心の腐つた光秀には效果がなかつたのみか、その弑逆は我が運命と道義心とに由つた

正當な行爲であると、信じるまでに怖しい者と成り果てたが、やがて受ける天罰は遁れるに由なく、三日天下の「諺」の持主となつて穢い死様をした。この因果應報勸善懲惡の理を明らかにした本曲は、人の能く知つてゐるそれだけ、大衆感化の上に大きな影響を與へたものである。殊に清水宗治の節義は、世の人々の心に永く生きるであらう。

發端

登場人物の主な者

尾田春長(内大臣)　眞柴筑前守久吉(春長の臣)　武智光秀(春長の臣)

安部法印(占者)　普天坊(法華行者)

梗概

内大臣春長は眞柴久吉・武智光秀を從へて出で、安部法印を召して、泉州妙國寺から安土に移植した蘇鐵が、聲を發して妙國寺に歸らうと言ふ由を語つて之を判じさせる。又幽閉した法華行者の普天坊を繩附きの儘白洲に引出させ、呶鳴り散した上に、「そいつ國境へ追拂へ」と命じ、之を諫めた武智光秀を毆打する。普天坊は大いに怒り、死を覺悟して春長に食つてかゝり、「今に佛罰思ひ知れ」と言ひ放ち、一心に題目を唱へる。妙法の威力は遂に春長が本能寺に於ける非業の最期是非もない。

六月朔日の段

登場人物の主な者

浪花中納言兼冬（院御所の勅使）　尾田春長（内大臣）　尾田城之助春忠（春長の嫡子）
森蘭丸（春長の臣）　赤山與三兵衞（春長の使者）　武智日向守光秀（春長の臣）
操（光秀の室）　武智十次郎（光秀の子）　九野豐後守（武智の部下。五十歳）
四王天田島頭（光秀の臣）

梗概

天正十年六月上旬尾田春長父子が上洛した。朝廷では浪花中納言兼冬を春長の邸に遣はし、春長の子春忠を從三位左中將に任ぜられたので、其の勅使饗應の役を武智光秀。森蘭丸が承つた。春長はかねて光秀を疑ひ惡んで之を森蘭丸に語つたので、蘭丸は饗應に奔走する光秀父子に故意に恥辱を與へた。春長はなほも蘭丸に命じて光秀を毆打させて額に疵を負はした。光秀は無念を抑へ、畏つて春長の無情を諫めれば、春長怒つて光秀父子を門外に驅逐し、剩へ赤山與三兵衞を千本通りなる光秀の假舍に遣はし、光秀の領地丹波近江を沒收し「眞柴久吉に隸屬して西國に下れ」と命じた。

光秀默然として煩悶し、四王天は憤怨して謀反を思ひ立つ。操及び九野豐後守は四王天を制止して光秀を宥めたが、光秀は遂に意を決し、反逆の出陣の血祭に豐後守の首を刎ねた。光秀の反逆は、暴君の凌辱を受けて、武將の面目が丸潰れとなつたので煩悶憂苦し、大惡事を自覺しながら感情の激發を抑へきれず、己が運命に殉じるの外に道なきものと諦めた敢行であつて、其の心事は憐れであるが、天は人臣の道に背く者に與せず。彼の頭上に悲慘な運命の断案が下る時も遠くはない。

同　二日の段（本能寺）

登場人物の主な者

尾田春長（この日正二位右大臣となる）　三法師（春長の孫。春忠の子）　森蘭丸（春長の近習）

森力丸（蘭丸の弟）　坊丸（春長の臣）　宗祇（茶道宗匠）

阿野の局（春長の侍女）　しのぶ（春長の奥女中。齋藤蔵之助の妹）　武智惟任光秀（春長の逆臣）

齋藤蔵之助（光秀の臣）　左馬五郎光俊（光秀の臣）　田島頭（光秀の臣）

安田作兵衛（光秀の臣）

梗概

尾田春長の本陣本能寺では、奴の三助・珍内等が徒話をしながら境内を掃除してゐる折、阿野の局が三法師を抱いて鋲乗物で来たので、蘭丸はこれを取次いで奥に案内した。春長は悦んで酒宴を催し、阿野の局は能楽班女を舞うて賑はひ、奥女中しのぶは蘭丸を慕うて纏れ合ふ。歓楽の夢も短い夏の夜の東雲近い頃、光秀の兵四千余騎本能寺を襲ひ、左馬五郎光俊・齋藤蔵之助・田島頭・安田作兵衛等が乱れ入つた。春長の兵僅に三百余人、先づ宗祇や女子供を遁れさせ、さしも名高い霊場も修羅の巷と化し、蘭丸等は戦死し、しのぶも懐剣で咽を突いて死んだ。

客殿では力丸が無念の歯がみをなし「我が君様は天文より天正十年の今日まで、天下の兵乱を平定し、民を救うて大業を成就し、正二位右大臣に昇り給ひながら、逆臣の為に非業の御最期を遂げ給ふは、天魔の所為か口惜しや」と、血の涙を流せば、春長は戦傷して床に伏し、力丸・坊丸之に殉死した。よしや君は君たらずとも臣はどこまでも臣であらねばならぬ。大逆無道を敢てした光秀は、天人共に赦さぬ身となつて、罰の矢の通る道筋を歩まねばならぬ。

同　三日の段

登場人物の主な者

清水長左衞門宗治（郡家の將。高松城主）　やり梅（宗治の妻）　浦邊山三郎利氏（宗治の臣。杢之進の子）

玉露（宗治の妹）　林丈左衞門（郡家の臣。杢之進を殺す）　安徳寺和尚（郡家の使者）

加藤正清（眞柴久吉の臣）

梗概

清水宗治の高松城は眞柴久吉の軍に圍まれて水攻めに苦しめられてゐる。浦邊山三郎利氏は愛人玉露の手引によつて宗治の館に忍び込み、宗治が郡家から預かれる亡父の讎林丈左衞門を斬殺して、自殺しようとするを宗治夫婦に諭されて思ひ止る。そして玉露と夫婦杯を濟した後、敵を騙し久吉の首を獲て功名を立てようと決心し、水を潜つて寄手を防ぎながら敵陣に赴き、敵將加藤正清に逢うて、「我は浦邊山三郎利氏といふ者である。只今親の讎を討つて城を逃げ出ましたので、どうぞ匿まうて下され」と懇請し、正清の情にあづかつて伴はれて行く。道の遙か向ふに漕ぎ渡る舟は、戀と無常とを一つに見る、妙齡の玉露と和尚の安徳寺とを乘せてゐる。

同　四日の段

登場人物の主な者

小梅川隆景（郡家の名將）　安德寺和尚惠瓊（宗治の使者）　玉露（宗治の妹）
片山藤太（宗治の郎等）

梗概

高松城を援けに向つた小梅川隆景の軍も、敵將眞柴久吉の水攻めの謀に、手の出しやうもなく持餘してゐる。折節安德寺和尚・玉露同道で來り、「私どもは高松城主宗治の使者となつて敵陣に赴きます」と、語つて文箱を差出した。
隆景は之を取つて一讀し、「自分も久吉と講和したいと思ひ、其の事を既に敵へ傳達したが、それに就いて御兩人がお使は時に適うた。暫くお休みなされよ」と、誘ふ側の林の中で、鳩が集つて瓜を啄んでゐる。之を見た隆景は、「ハテ瓜の輪切は尾田の紋、その瓜を食ひ散すは春長の身邊に意外の事變が起る前兆だ」と、見抜く智慧に玉露等はすはと勇み立つた。折から味方の郎等片山藤太馳せ來つて、高松城内の困苦を訴へた。隆景は敵と和睦する心組みを話して、玉露等を我が本陣へ引入れた。

同　五日の段（高松城水攻）

登場人物の主な者

眞柴久吉（春長の名將）　加藤正清（久吉の名將）　阿野の局（春長の侍女）
小梅川隆景（郡家の名將）　清水宗治（高松城主）　やい梅（宗治の妻）
惠瓊（安德寺和尚）　玉露（宗治の妹）　浦邊山三郎利氏（宗治の臣）

梗概

郡。高松兩城の使者となつた惠瓊・玉露の兩人は、小梅川隆景の陣所を出でて敵の陣館に來り、加藤正清の取次で敵の大將久吉に逢ひ、玉露は久吉の情によつて愛人浦邊山三郎を取返し、また高松城主清水宗治への書狀を預かつて歸る。

折節阿野の局が久吉の館に駈付けて本能寺の變を注進し、春長公御最期の様子を語つて御形見の旗を渡し、「どうぞ逆臣の首を討取つて下さい」と、言ひ終つて氣弛み、痛手の爲に殪れた。

惠瓊は後に殘つて久吉にからかうたが、久吉から袈裟を投付けられて、（この袈裟は嘗て惠瓊が矢矧の橋上で奴を占ひ、こいつ天下に主たる人相と易の面に出たのは、我が易の誤りであると思ひ込んで、奴の望みに任せて與へた其の袈裟であつて、その奴は今の久吉である。）はつと昔を思ひ出し、驚いて敬服する。そして久吉の命を受けて尾田・郡兩家和解の仲介者となつた。かくて後宗治は、久吉の陣館に來り、味方の助命を懇請して腹を搔切つた。宗治の妻子は良人の跡を慕ひ來て、この有様に泣入つた。久吉は宗治を扶けて高處に登らせ、高松城の圍を解いて水を落し、長い間の戰ひに惱み水攻めに苦しんでゐた敵味方共に、和戰の歡びにどよめき渡る聲を望み見させる。尋いで隆景等入り來て、久吉と和睦の神文を取交はすを見た宗治は、嬉しげに息を引取つた。

久吉は改まつて隆景に本能寺の變を打明けたので、隆景は久吉の心に感じ、今まで戰つてゐた隆景の精鋭は、久吉の武智光秀討伐の軍に加はる。剛勇加藤正清は其の先鋒を承はり、都を指し大擧して上る。後に起る天王山（山城國乙訓郡山崎の北なる山）の晴れ軍は、きつと天が久吉に手を假すものと知られた。

同　六日の段（妙心寺）

登場人物の主な者

武智十兵衛光秀（春長の逆臣）　皐月（光秀の母）　操（光秀の室）
武智十次郎光慶（光秀の子）　初菊（十次郎と許嫁の娘）　四王天田島頭（光秀の臣）

梗概

武智光秀は春長父子を弑して妙心寺に立籠った。長男の十次郎は許嫁の初菊と睦まじく語り合ひ、老母皐月は我が子の不忠を憤って、操・田島頭の宥めるをも聴かず、賤の女の姿に身を俏してしよんぼりと館を出た。光秀は良心の呵責におびえ、辞世を残して自殺しようとするを十次郎・四王天に諫められて思ひを翻し、久吉を討取る為綸旨を戴かうとして駒に打乗り、大内山をさして鞭を上げた。

同　七日の段（孫市切腹）

登場人物の主な者

足利義輝（足利直輝の弟）　鱸喜多頭重成（慶覚の昔）　孫市（重成の子）
千谷（孫市の妻）　松代（孫市の娘）　重若丸（孫市の子）
[illegible]八郎（春長の臣）　中川瀬平清秀（真柴久吉の臣）

梗概

孫市は足利義輝の使者となって尾田春長に和睦を申し入れ、不調に終ったといふ越度によって、父重成から勘当を受け、幼児

重若丸を連れて行方を晦ました。慶覺は石山に陣を引いて杉の森の砦に據つた。小笹・浪江などの腰元集まり、口々に春長を罵つて孫市を氣の毒がるを聞いた雪の谷は、松代の手を引きしよんぼりとして出で、重成に對つて「どうぞ夫の勘當をお赦し下さいませ」と、泣きながら哀訴したが退けられた。

慶覺は心靜かに念佛を唱へ、民を戰爭の悲慘から救ふ爲に自殺しようとするを、重成に諫められて思ひ止る。かくて君臣水魚の情もあつい夏の夕暮に、孫市は重若丸を鎧櫃に入れて擔ひ、人目を忍んで戻つて來た。折節庭の茂みを潜る敵の是角六郎を見附け、斬殺して懷中から書狀を探り出し、月に透し讀んで本能寺の變を知り、思はず聲を出して喜ぶ。孫市の妻聞附けて飛んで出で「ようお歸り下さつた」と嬉し涙に暮れた。

孫市はこの機會に今度こそは足利家の和睦を成立たさうと、死を以て眞柴久吉に懇請する願書をしたため、重若丸に渡して其の使を命じた後自刄しようとする。妻之を押止めて泣附くを庭の樹に縛り附け、二兒に介錯を敎へる。父は孫市の心に感じて勘當を赦したので、孫市はにこ〳〵として割腹した。

重若丸は和睦の使者となつて出た。久吉は重若丸から和睦の願書を得て感動し、中川淸秀を使者として慶覺を迎へに來り、芽出度く和議調ふ。かくて慶覺の側に重成・重若附添ひ、行列揃へて都に上る。一死以て主君を安んじた孫市の義膽は武士の鑑である。

同　八日の段

登場人物の主な者

武智十次郎光慶（光秀の子）　陣張甚助（裏切武士）　太郎作（故春長公の大法會が行はれる地の庄屋）
おこぶ（賣笑婦）

梗概

故右大臣春長公十七日の大法會が營まれるので參詣人群聚し、見世物・輕業などの興行物が軒を並べて賑はふ。陣張甚助は路傍の茶屋の床几に腰掛け、主人の武智左馬之介を嵩に被て威張り散し、庄屋太郎作が「どうぞ御容赦下され」と、出した金を受けて笑顔する。折から賣笑婦おこぶに呼掛けられ、猥語りながら連れ立つた。

物思ひに沈んだ武智十次郎は深編笠に人目を忍び、松原傳ひに歩み來て床几に腰掛け、人倫の道の廢れた世の有樣を歎いて、春長公の靈前に謝罪しようと途中、道に陣張甚助等立塞がり、十次郎を誘つて斬りかかつたので、十次郎は刀を拔いて切伏せ、細川の隱居所を尋ねて落ち延びる。あはれ父に似ぬ十次郎と、主に似た甚助が所爲とは、善惡の心々を其の儘に見せてゐる。

同　九日の段

登場人物の主な者

眞柴久吉（光秀討伐の總將）　加藤正清（久吉の臣）　長兵衛（田夫に變裝した光秀の臣四王天田島頭の變名）
僧　觀　穴（光秀の間者）

梗概

眞柴久吉は毛利家と和睦し、武智光秀討伐の軍を進めて大物の浦に着陣した。折節[illegible]片手に持つた百姓と旅僧とが連れ立ち

來り、「私は大阪今里村の農夫長兵衛でございます」。「拙僧は江州觀音寺の獻穴と申します」と、名乘つて面會を請ひ、久吉の前に誘はれて舊馴染みのことどもを語り、且つ「光秀は既に軍を今里・京街道に進めてゐますから、お前樣をわしが在所へお連れ申して歸り、敵の不意を襲うて討取らせ申さうと思うてお迎へに參りました」とて、土產に眞桑瓜の二つ入つた藁苞を差出した。

　折から、光秀の伏せ勢稻叢から現はれて、加藤正淸の兵と戰ふ。久吉は長兵衛・獻穴に誘はれ後に附いて行きながら、透を窺うて獻穴を投げ飛ばし、「コリヤ百姓め、長兵衛とは嘘の皮、誠は武智の家來四王天田島頭と見た、留まれや」と聲を掛ける。四王天は「ハア知られたか殘念」と、久吉を目懸けて切付けた。久吉はあしらひかねて駈出すと、これを見た正淸は、躍り上つて四王天と渡り合ふ。四王天は正淸が打込む鋭い太刀風に切捲られて深手を負ひ、恨めしげに悲壯な最期を遂げた。（これから有名な・夕顏棚の段」に續く）



繪本太功記　光秀（市川海老藏）
（安政五年七月市村座）　重次郎（八世市川團十郎）
初代豐國畫　初菊（市村歌女之丞）

同　十日の段（夕顏棚。尼崎）

登場人物の主な者

甚作（尼崎の百姓）　皐月（光秀の母）

操（光秀の室）　初菊（十次郎と許嫁の娘）

武智光秀（春長の逆臣）　旅僧（眞柴久吉の變裝）　武智十次郎光慶（光秀の子。十八歳）

梗概

光秀の母皐月は我が子の大逆を憤つて世捨人となり、尼崎なる片田舍の伏屋に引籠り、題目を唱へて心耳を澄し、夕顔棚の下に立寄る村人の四方山の話に、心を慰めて日を送つてゐる。折節、操・初菊・十次郎・旅僧・光秀の五人前後して此の閑居に落合ふ。光秀は障子越に映る老母の姿を眞柴久吉と思ひ違へて刺す。老母は深手を抑へながら光秀を近づけ、懇ろに人臣の大義を說いて諭したが、其の金玉の言も無道の彼は馬の耳よそ吹く風と聞き流した。されど愛子十次郎が深手を負うて戻り、一家愁の雲に鎖されれば、さすがに彼も愛著に引かれて眼をうるませた。

折から、けたたましい人馬の音・矢叫びの聲聞えて久吉立現はれ、光秀と山崎の合戰を約して別れる。

評

太功記十段目は昔から名高い文であつて、光秀の犯した大逆が原となつて、老母も妻子も暗い運命に卷込まれて行く、そのいたましい有様は人の胸を打つであらう。殊に老母が世捨人となつて罪障消滅を祈り、孫を憐れみ、無道の子に人臣の道を說き、又妻は始終物思ひに沈み、けなげな子は父の爲に因果な戰に臨んで深手を負ふまで、それからそれへ麗はしい筆で細々と書き續けられ、何ともいひ知れぬしみ〴〵した場面が展開されてゐる。「夕顔棚の此方より……」の聲で、もう此の段を思ひ起して魅せられた心地がする。

十日の段

「南無妙法蓮華經〳〵〳〵」、御法の聲も媚きし尼が崎の片邊り、誰ガ住ム家といふ顏も、おのが儘なる軒のつま、邊り近所の百ヶ姓共、茶碗片手に、高咄し、「なふ婆樣、此方樣が見た所が、上ミ方で歷々のお衆そふなが、何の爲に面白ふもない此在所へはござつたぞいの」、「ア、コレ〳〵甚作そりや言やんな、京の町は武智といふ惡ゥ人シが、春長樣を殺して大騷動、大方又下モへ下つて居やしやる久吉殿が戻つて來て、武智と是非に一合戰なけりや濟ぬはいのふ」、「そんなら年ョ寄は浮浮京の町には居られぬ兎角危げのない樣にこんな在所へ來て居るが大出來〳〵」、「時に近付がてら妙見講を勤るとはよい手廻し、大きな馳走に逢ました、是から隨分お互ヒにお心安ふ致しませう、サア〳〵往ふ」と口々に、言たい事をたくしかけ喋り廻つて歸りける、老母はつど〳〵門送り庭の下草に打水も保つ葉每に、風薰る、軒を目當ァに、來る人は武智か閨に咲花の操の前は家來を遠ざけ、嫁の

○尼崎　兵庫縣尼崎市の地で、大阪・神戸の間に介在し、今は工業都市として發達し、世に小大阪と稱されて、昔の片田舍の面影はもとむべくも無く、世の推移を示してゐる。尼だから「媚めく」の語にかけて地名につゞけた。

○軒のつま　軒端（はし）。「源氏物語」夕顏の卷に「夕顏…小家がちに…むね〳〵しからぬ軒のつまご とに蔓（はひ）まつはれたる」とあつて、夕顏棚の着想は「源氏物語」夕顏の卷に思ひよつたものであらう。

○茶碗片手に　老婆に招かれて妙見講の饗應にあづかり、茶碗片手にぱく〳〵やりながら話してゐる場面である。

○歷々　際立ちあきらかな樣をいひ、轉じて身分・格式・家柄・門閥の高い者をいふ。

○下　眞柴久吉が淸水宗治の備中高松城を水攻めにしてゐるのをさす。卽ち「下」は備中高松。

○妙見講　妙見菩薩を信仰する日蓮宗徒の講社。妙見菩薩は北斗星の本地であつて、國土を守り貧窮の救濟を誓はれ、殊に日蓮宗信者の尊崇する菩薩。

○たくしかく　手繰掛（たぐりか）く。續けざまにいひかける。

○都度々々　每度。その度每に。（見索引）

○咲く花云々　咲く花の實を操にいひかけ、なほ「咲く花」は後の「初菊」の語に轉じ、美女の意をきかせたこ

初ッ菊伴ふて窺ふ切戸の庭先に花に心を、養ふ老女、夫レと見るより手をつかへ、「後室様の見舞として、只今參上致せし」と、慇懃に相述る、詞に老女は打笑み「ヲヽ珍らしい嫁女孫嫁、遙々の道よふこそ〳〵、さりながら忰光秀、當月二日本能寺にて、主君を害せし無法者、同し館に膝並ぶるも、先祖の恥辱身の汚れと、館を捨て此在所へ身退きし此婆を、見舞とは尾籠がましい、善にもせよ悪にもせよ、夫に附が女の道、操の前は武智十兵衛光秀か妻、其方は父孫の十次郎光慶が嫁でないか、生死分からぬ戰場へ、赴く夫を打捨て浮世を捨た姑に、孝行盡すは道が違ふ、妻は城に留つて、留守を守るが肝要ぞや、モウ寡婦暮しの樂しみには、夕顔棚の下涼捨べき物は弓矢ぞ」と、言放したる老女の一徹、後は詞もなかりけり、常の氣質と逆らはず「如何様後室様のおつしやる通り、此様に只お一人ござつたら、何もかも氣散じで、マア第一はお身の養生、今から私も初ッ菊も後室様のお傍に居て、飯も焚たり茶も沸し、お宮仕へをせうぞいの」と、有合前垂襷の上に引締め茶釜の傍、花香の籠る姑の、遙々機嫌を取かぬる娵心に初菊も、マとふ術事か濁り井の、深き奇縁の釣瓶縄、水汲み上んと立寄れば、「コレ

○切戸　内つ目垣などにある通の小門などに附けた一片の扉戸。
○後室　身分ある人の寡婦（やもめ）。皐月をさす。
○本能寺　もと京都六角四條坊門西洞院の間にあつた法華宗の大寺院であつたが、天正十年六月二日信長の時明智光秀の為に焼失し、今は寺町通り御池下ルに移り、境内に織田信長の供養塔がある。
○をこ　[illegible]後世の[illegible]に烏滸といふ国があつて、その風俗に理非を顛倒して笑ふべきことが多かつたので、その語略合して後には[illegible]
○夫に附くが女の道　「儀禮」喪服篇に「婦人有三從之義、…未嫁從父、既嫁從夫、夫死從子」。
○[illegible]
○捨つべき物は弓矢ぞ　いかにも名句である。弓矢は武士をいふ。光秀が信長に惜まれた時に、彼にこの心を起さしめたかつた。
○氣散じ　氣樂。
○宮仕　宮中に仕へ奉ることの義。轉じて仕官、奉公をいふ。
○花香　情愛の意をかけたもので、「花香」「遙々」[illegible]
○[illegible]によつて書きつづけた。

コレ嫁達、シテ孫十次郎は、城に殘つて居召るか」「されば でござります、十次郎が願ひには、どふぞ今日の軍に、高名手柄が顯はしたいと、父上迄は願ガひしかど、婆樣のお許しなきに出陣するも本意でなし、母に取次してくれと、くれぐれの願ひ故、餘り健氣さ祖母樣に御機嫌の程如何ぞと、伺ひに參りました」と語る内、老母は涙をはら〳〵と流し、「ヲヽ、煩さの嫁が物語り、主を討たる逆賊の邪非道の軍サの評定、聞が否さの此住居、ガ又孫を譽るではなけれ共、非道な悴光秀が子に、十次郎と云ふ武士が、生れて來るとは是も因緣悔んで返らず、戰場の事聞キたふない、アいや〳〵情なの浮世や」と、無量の思ひ百八の、珠數爪繰つて居たりける折節表へ草鞋がけ、風呂敷キ背に息急蛙飛込道の邊の清水、掬ばん夏の旅、西行もどきの僧一人門口に立チ休らひ、「諸國修行の一ト人旅、近カ頃申かねたれど御宿の報謝に預カりたし、押シ付ケながら」と言入レる聲を老母が聞キ取ッて、「見苦しうござりますれど、お心置キなふ御一宿」、「夫レは千萬忝い、左樣ならば御遠慮なしに御免御免」と上ガり口腰打かくれば二人の女、草鞋の紐を解かくれば「ア、物體ない〳〵、構ふて下さりますな、旅仕付ケた坊主の氣散ンじ、

○されば で…參りました　操の詞。

○武士　光秀のやうな非道の武士もあるが、それとは違ひ眞の武士。

○百八の珠數　珠數は百八箇の珠を聯ねて造れるものを正規とす。蓋し百八煩惱を滅盡する爲に撰んだ數である。

○蛙飛込む…西行　芭蕉の句に「古池や蛙飛込む水の音」と「新古今集」卷三・夏の部、西行法師の歌に「道の邊に清水流るる柳陰しばしとてこそ立ちとまりつれ」の西行のこの歌をきかせて「西行もどき」とつづけたので、行脚僧に似てゐること。

○報謝　喜捨。喜んで物を施すこと。恩を報じ德を謝する義であつて、「敎行信證」に「深知二佛恩一爲報二謝德一」とある。

○二人の女　操と初菊。

○木納屋　薪なぞの雜木を入れて置く納屋。
○とした事が　（見索引）
○ぼや／＼　火の燃え上るを形容する副詞、名詞にして「ぼや」ともいふ。
○行水　潔齋の爲に流れ行く水で身體を洗ひ淸めることをいひ、轉じて、ゆあみ（浴）。
○威儀を正し　たちゐふるまひの作法を正しうし。
○とても　「死ぬとていとはぬ」などいふ助詞「とて」に「も」の添はった語で、「どうあっても」などといったやうな意を示す。いつそ。いつそのこと。

木納屋の隅でもつい轉り、蚊帳も蒲團も入ませぬ、お心遣カひ御無用」と、詞半へ表口、人目を忍び只一ッ騎、窺ひ立聞武智光秀、心得難き旅僧と、生垣押シ分ケ差覗き、思はず見合す母の顔、老母は何か心に點頭き、「ヲヽ、私とした事が心の付カぬ、コレ御出家樣、此板圍が即チ風呂場、水は幸イ汲で有、ついぼや／＼と燃して、暑い時分じや行水して休んで下さりませ、婆も跡で相伴しませう」、「アヽイヤ夫レには及びませねど、相伴と有レば沸しませう、そんなら御免なされませ」と、包ミ引ッ提げ氣散シじに、湯殿をさして入にける、味方の軍卒兩手をつき、「御子息十次郎光慶樣、後室樣に御願ひの筋有と、只今是へ御越」と言ふ間程なく靜々と、家來に持せし鎧櫃、舁入させて打通り、「コリヤ／＼者共其方達に用事はない、陣所へ早く」と追立やり、威儀を正して兩手をつき、「母樣を以ッて御願ひ申せし出陣、御聞キ屆下されなば、武士の本意」と十次郎思ひ込でぞ願ひける、老母は見るより機嫌顔、「ヲヽ、珍らしい十次郎、出ッ陣の願ガひとな、悴を見限り此所へ身退きしに叮嚀な願ひの筋、最前嫁女に委しう聞キました、迚も出陣仕やるなら、祖母が願ガひは此初菊、今宵此家で祝言シの、杯仕てから門出仕や、何と嫁女嬉しい

か」と老の詞に初菊は、飛立計氣もいそ〳〵、心の悦び穗に出る、顔は上氣の夏楓色も媚く計也只默然と十次郎、今日初陣に討死と、覺悟極めし此體、お暇乞に參りしと、知らせ給はぬ悲しやと涙呑込忍び泣操の前も立上り、「祖母樣の御機嫌の變らぬ内に堅めの杯」、「ヲヽそれ、孫も大方心急き、操は九獻の用意仕や、十次郎が初陣の、鎧の役はすぐに花嫁」、三國一の悲しみと、知らぬ白齒の孫嫁が、手を引連て、三人は奥の一ト間へ入にけり、（以上夕顔棚の段）

殘る蕾の花一つ、水上かねし風情にて思案し、投首萎る、計漸、涙押留め、「母樣にも祖母樣にも、是今生の暇乞、此身の願ひ叶ふたれば、思ひ置事更になし、十八年が其間御恩は海山かへがたし、討死するは武士の習ひと思し召分られて、先立不孝は赦してたべ、二つには又初菊殿、まだ祝言の杯をせぬが互の身の仕合せ、私が事は思ひ切、他家へ縁付して下され、討死と聞ならばさこそ歎かん不便や」と、孝と戀との思ひの海隔つ一ト間に初菊が、立聞涙轉び出「わつ」と計に、泣出せば、はつと驚き口に手を當、「アヽ、コレ〳〵聲が高い初菊殿、扨は樣子を」、「アイノ、殘らず聞て居りました、夫の討死遊ばすを妻が知らいで何とせう、二

○穗に出づ　心のやうすが表面に顯はれるをいふ。「萬葉集」卷三の歌に「見渡せば明石の浦にともす火の、ほにぞ出でぬる妹に戀ふらく」とあつて、「略解」に「ほは總て物の顯れ出るをいふ詞也」とある。
○夏楓　夏に葉の赤い楓。のぼせて顔の赤くなるを、夏に葉の赤い楓にいひかけた。
○知らせ給はぬ　「せ」は敬稱の助動詞。御知り給はぬ。御存じになり給はぬ。
○九獻　酒の異名。「下學集」に「九獻＝日本世話酒名也、三三九獻義」と。
○鎧の役　夫が戰場に出る爲には、妻は最も氣がかりで鎧着の世話などもするによつてかくいふ。
○三國一　祝言の席などで謠ふ小唄。「伊賀越道中雙六」第五・郡山屋敷の段を見よ。
○白齒　昔は結婚式を擧げれば齒を鐵漿で黑く染めたもので、結婚式を擧げぬうちは白齒であつた。おはぐろの習慣は、もと南洋人が結婚式に檳榔子の實を嚙むので齒が黑くなるに遠因するものであるとの說がある。「知らぬ白齒」は同じ頭音をつゞけた修飾で、卽ち頭韻法。
○花一つ　若盛りの十次郎にかけていふ。
○水あげ　花の緣語「水あげ」をいうて同衾の意をきかせた。妓女の初床を水揚といへば、その語に據つたものである。ここの文意は今にも戰場で討死せねばならぬ身の、同衾して妻に思ひを更にかけさせうよりもと思案した意。
○海山代へ難し　「童子敎」に「父恩者高山、須彌山尚下、母德者深海、滄溟海還淺」

世も二世も女夫じやと思ふて居るに情ない杯せぬが仕合せとは、餘り聞へぬ光慶樣、祝言さへも濟ぬ内討死とは曲がない、わしや何程でも殺しはせぬ、思ひ留つて給はれ」と縋り歎けば、「アヽ、此方も武士の娘じやないか、十次郎が討死は豫ての覺悟、祖母樣に泣顏見せ、若し悟られたら未來永々縁切ぞや、エヽ、サア、とかふ云ふ内時刻が延る、其鎧櫃爰へ、〳〵」、「アイ〳〵」、「サ早ふ、時延る程不覺の元、聞分ない」と呵られて、「いとしい夫が討死の、首途の物の具付るのがどふ急がるゝものぞいの」と、泣々取出す緋縅の、鎧の袖に降りかゝる、雨か淚の母親は、白木に土器白髮の祖母、長柄の銚子蝶花形首途を祝ふ熨斗昆布結ぶは、親と籠手臑當、六具堅むる三々九度、此世の縁や割小札、緒首に着なす鍬形の、あたり眩ゆき出立は、爽なりし、其骨柄、ヲヽ、遖武者振勇ましし、高名手柄を見る樣な、祝言と出陣を一處の杯、サア〳〵早ふ、目出たい〳〵嫁御寮」と、悅ぶ程猶彌增名殘、「こんな殿御を持ながら是が別れの杯か」と、悲しさ隱す笑ひ

○祝言の杯をせぬが互の身の仕合せ 「[illegible]」の文[illegible]。これを說き明かしたもので、このあたりは名高い文句で[illegible]。

○[illegible] [illegible]。

○二世 [illegible]

○曲 面白み。「曲がない」とは情がない、愛想がない。謡曲「鉢の木」に「あら曲もなや、よしなき人を待ち申して候ものかな」。

○何ぼうでも殺しはせぬ [illegible]死なせは致しませぬ。

○不覺 [illegible]ならぬこと。不調法。失策。(物を[illegible]ことの意にもいふ)。

○物の具 [illegible]鎧をいふ。「物」は物部・[illegible]」で、兵又は武の義である。

○緋縅 [illegible]は[illegible](一說に色縅で人を威すい義であるといふ)。

○蝶花形 婚禮の時に長柄の銚子に附ける紙で折つた雌蝶雄蝶。熨斗・昆布も祝儀に用ひる。

○六具 鎧・籠手「こて」・袖・脇楯「わいだて」・脛楯「はいだて」・臑當「すねあて」。

○割小札 小札は鐵又は革で造つた小さい板で、これを魚鱗の如く並べ重ね、緘して鎧を作る。小札に割小札と縛小札とある。之を縁を割るにいひかく。

○緒首 [illegible]

○鍬形 [illegible]上より角[illegible]の如く[illegible]立てるものの稱で、慈姑の葉の形をしてゐるので「くわゐがた」の義であるといふ。

○勇ましし 「勇まし」といふべきを「勇ましし」といふた例は甚だ多い。これは慣用である。

○どれう (見索引)

顔「随分ゝお手柄高名して、せめて今宵は凱陣を」と、跡は得言はず食ひしばる、胸は八千代の玉椿散りて、はかなき心根を、察しやつたる十次郎包む涙の忍の緒しぼり、かねたる計也、哀レを、爰に、吹送る、風が持テくる攻太鼓、氣を取リ直しつつ立上り、「いづれもさらば」と言ィ捨て、思ひ切ッたる鎧の袖行方知らず成にけり「ノウ悲しや」と泣入ル初菊、母も操も顔見合せ、「祖母樣」「嫁女、可愛や可惜武士を、むざ／＼殺しにやりました、ノウ初菊、十次郎が討死の出陣とは知ながら、生半留て主殺しの憂死恥を曝そふより、健氣な討死させん爲、祝言ゝによそへて杯をさしたのは、暇乞やら二つには心殘りのない樣と、思ひ餘つた三々九度、祖母が心のせつなさを推量仕や」と計にて、始メて明す老母の節義、聞初菊も母親も一度にどふと、伏まろび前後不覺に泣叫ぶ、襖押明ヶ何氣無ふつか／＼出る以前ゝの旅僧、「コレ／＼上樣、風呂の湯が沸きました、何方ぞお這入なされませ」と、言ふに此方は泣顔隠し、「ヲヽそれは御苦勞ながら年寄リに新湯は毒、跡は若い女子共、マアお先へ御出ッ家から」「如何樣湯の辭儀は水とやら、左樣ならば御遠慮なし、お先へ參る」と立上れば、三人は涙押包奥の佛間と湯殿口入や、月漏

○凱陣　戰に勝つて我が陣營にかへること。

○八千代の玉椿　「莊子」逍遙遊篇に「上古有ニ大椿樹一、以ニ八千歳一爲レ春、八千歳爲レ秋」。以て幾久しく芽出度い意にいふ。然し椿花は其儘に落ちるものなれば、武家では首が落ちるに擬へて忌む。よつてこの文にも「散りてはかなき」といひつづけた。

○忍の緒　兜に附け頤「あご」にて結ぶ紐。（もと兜の内に忍ばせて髮に結び付けたが故にこの名がある）。これを忍び泣きにいひかく。

○しぼり　涙をしぼりと、忍の緒を締める意とをいひかく。

○不覺　物を覺えず知らぬさまなこと。（覺悟の確ならぬことの意にもいふ）。（既出）

○上樣　後室樣。婆「ばゝ」樣「浪花方言」（文政二年成）に「かみさん＝後室をかくいふ」。「浪華の風」に「當地にては、町家の妻などはおしなべておへさんと唱呼す、おかみさんといふは老女の樣になりて、五六十に及ぶ老婆を呼んでおかみさんと唱ふればなり」。

○年寄に新湯は毒　沸し立ての風呂湯はきついから、老人の體にはこたへるので毒といふた。老人の入浴は、一二人入浴後の湯のやはらいだのに入浴するがよいとは今もいふところである。

○湯の辭儀は水になる　諺。辭退してゐる中に冷めてしまつては何にもならぬ。

○入るや月漏る片庇　「新古今集」巻十七、攝政太政大臣の歌に「人住まぬ不破の關屋の板びさし、あれにしのちは唯秋の風」、「新後撰集」巻四、信實の歌に「秋風に不破の關屋のあれまくも、惜しからぬまで月ぞもりくる」とある。これらから思ひついた文であらう。この所有名な文である。

る片庇、爰に刈取眞柴垣、夕顏棚の此方より、顯れ出たる武智光秀、必定久吉此内に忍び居ること究竟一、只一討と氣は張弓、心は矢竹藪垣の、見越の竹を引そぎ鑓、小田の蛙の鳴音をば止めて敵に悟られじと、差足抜足、窺ひ寄、聞ゆる物音、心得たりと突込手練の鑓先に、「わつ」と魂ぎる女の泣聲、合點行ずと引出す手負、眞柴にあらで眞實の、母の皐月が七轉八倒、「ヤアこは母人かしなしたり、殘念至極」と計にて、流石の武智も仰天し只、茫然たる計也、聲聞付て駈け出る操・初菊諸共走り出、「ノウ母様か情ない、此有様は何事」と縋り歎けば目を見開き、「歎くまい〳〵、内大臣春長と云ふ、主君を害せし武智が一類、斯成り果るは理の當然、系圖正しき我家を、逆賊非道の名を穢し、不孝者共悪人共、譬方無き人非人、不義の富貴は浮べる雲、主君を討て高名顏、天子將軍に成た迚、野末の小家の非人にも、劣りしとは知らざるか、主に背かず親に仕へ、仁義忠孝の道さへ立ば、物相飯の切米も、百萬石に、勝るぞや、儕が心只一つで、驗は目前是を見よ、武士の命を斷、刃も多いに此様な、引そぎ竹の猪突鑓、

○刈取る眞柴垣　眞柴久吉を討取る意をかけてかくいふ。
○究竟一　至極好都合。
○張弓　氣の張るを「張弓」にいひかけ、その緣で「矢竹」といひ、「矢竹藪垣」と頭韻法により、「見越の竹」といひつゞけた妙味を知られたい。
○小田の蛙の鳴く音…悟られじ　近松作「鑓の權三重帷子」に「誰ぞ庭へ來たさうな、…今迄鳴いた蛙がひつしやりと鳴き止んだ」とあるに思ひついたか。
○魂ぎる　「たまげる」ともいひ、「たまきえる」(魂消)の義。突然烈しき恐怖に襲はれて心魂の消入るをいふ。驚愕仰天するをいふ。近松作「博多小女郎波枕」に「心たまぎりや、、、、夜ざとくなつて」。
○しなしたり　取返しのつかぬつまらぬ事をしてしまつたの意。しまつたり。
○茫然　あつけにとられたさま。ぼんやりとして自失してゐるをいふ。
○歎くまい　光秀は母が子の大逆を恨んで、かくなることを覺悟してゐた。ここも名高い文句。
○内大臣　右大臣とあるべき所。
○譬方無き人　[illegible]の行を以て。
○不義の富貴は浮べる雲　不義の富貴は大空に浮いてゐる雲の如く極くはかないとの意。「論語(述而篇)」に「不義而富且貴、於我如浮雲。」
○物相　一合・二合の飯を容れる器をいひ、もと禪家の具。足輕・小者などにあてがふ、もつさうめし。

○切米　江戸時代には扶持米を切つて渡すに、春・夏に渡すを借米、冬に渡すを切米といふ。また町人の給金を指すこともある。ここは奴の給米(二合半)をいふ。

主を殺した天罰の報は親にも此通り」と、鑓の穂先に手をかけて抉り苦しむ氣丈の手負、妻は涙に咽せ返り、「コレ見給へ光秀殿、軍の首途にくれ〴〵もお諫め申た其時に、思ひ留つて給はらば斯した歎きは有まいに、知らぬ事とは言ながら現在母御を手にかけて、殺すと云ふは何事ぞ、せめて母御の御最期に善心に立歸ると、たつた一言聞してたべ、拜むはいの」と掌を合し諫めつ泣つ一筋に夫を思ふ恨泣、操の鏡曇りなき涙に誠あらはせり、光秀は聲あらゝげ、「ヤアちよこ才な諫言立、無益の舌の根動かすな、遺恨を重ぬる尾田春長、勿論三代相恩の主君でなく、我諫を用ひずして神社佛閣を破却し、悪逆日々に増長すれば、武門のならひ天下の爲、討取たるは我器量、武王は殷の紂王を討、北條義時は帝を流し奉る、和漢倶に無道の君を弑するは、民を安むる英傑の志、女童の知る事ならず、すさり居らふ」と光秀が、一心變ぜぬ勇氣の眼色、取附嶋もなかりけり、折しも聞ゆる陣太鼓、耳を貫く金鼓の響あはやと見やる表口、數ケ所の手疵に血は瀧津瀬、刀を杖によろぼひ〳〵、立歸つたる武智が一子、庭先に大息つぎ、「親人是におはするや」と、言ふも苦しき斷末魔、見るに驚く母親

○合し　「合せ」とすべき所である。
○操　人名に節操の意をいひかけた。
○ちよこざい　小才。なまいき。小りこう。近松作「女殺油地獄」に「ちよこざいなけさい六」。
○三代相恩　父祖以來主君の恩澤を承けてゐること。ここの文は「繪本太閤記」巻上の文に「光秀暫く信長が旗下に屬しあるといへども、三代相恩の主と申すにてもなく云々」とあるに據つた。
○武王は殷の紂王を討つ　殷の紂王過を悛めないによつて、周の武王乃ち紂を伐ち滅して天子となつた。「十八史略」巻一に「紂不レ悛、王（武王）乃伐レ紂、…王既滅レ殷爲ニ天子ニ」。
○北條義時は帝を流し奉る　承久三年夏官軍、北條義時の軍に敗れ、仲恭天皇は廢せられ、後鳥羽上皇は隱岐に、土御門上皇は阿波に、順徳上皇は佐渡に移され給ふ。
○すさり居らう　退り居れ。引きさがれ。
○金鼓　陣鉦「かんだれ」と陣太鼓。
●斷末魔　生から死に移るさかひに

より、娘は傍に走り寄り「のふ痛はしや十次郎様、祖母様といひお前迄此有様は情ない、お心慥に持ってたべやいの〳〵」と取り附て介抱如才、泣計、光秀わざと聲あらゝげ「ヤア不覺なり十次郎、仔細は何こと、様子は如何に、具に語れ」と呼はれば、はつと心を取直し「親人の指圖に任せ手勢すぐつて三千餘騎、濱手の方に陣所を堅め、今や歸國と相待所に、敵はそれ共白浪の、櫓を押切で陸地に漕付く、追々都へ馳上る、眞柴の軍勢ござんなれと、鬨をつくつて味方の軍兵縱横無盡になぎ立つれば、不意を打たれて敵は敗亡、狼狽騒ぐを追つ立て、追詰爰を先途と戰ふ内、後ろの方より大音聲、眞柴筑前守久吉の家臣加藤正清是に有り、逆ッ賊ッ武智が小わっぱ共目に物見せてくれんずと、言ふより早く太刀拔かざし、四角八面に切り立られ、瞬間に味方の軍卒、殘らず討死仕り、無念ながらも只一騎立歸つて候」と、息繼あへず物語れば、光秀怒りの髮逆立、「ヤア言がひなき味方の奴原、シテ四王天田嶋の頭は、」「さん候四王天は、目指すは久吉一人と、昨朝よりの一騎駈け、亂軍となれば生死の程も、慥にそれと承はらず、親人の御身の上心にかゝり候故、未練にも敵を切拔、是迄落延歸りしぞや、此所に御座有て

○娘　初菊。
○不覺　覺悟い傍ならぬ義。未練。（既出）
○濱手　尼崎の濱手。
○ござんなれ　「ござあるなれ」の約。さあ來れ。
○敗亡　[illegible]
○先途　行先の極みの義、最も大切の場などの意にいふ。
○わつぱ　「わらは」（童）の促音便。
○ず　[illegible]「す」が上の「ん」と連つて濁つた語。とす。
○四角八面　四方八面。四方八方。
○四王天田嶋の頭　明智光秀の第一の重臣四王天[illegible]追うて寺院に入り、探しかねて出る所に、加藤清正[illegible]
○さん候　「さに候」の音便。返答する時にいふ敬語。さやうでございます。

○倅　老母皐月の倅光秀。
○せぐる　塞苦の義、胸の塞がるをいふ。こみあげる。近松作「浦島年代記」に「言はんとすれどせぐり來る涙は聲に先立ちて」。「せぐり苦しき」は「聲」にかかる。
○妹背　夫婦。
○愛著　愛の執著。かはゆいと思ひこむこと。
◇祖母・母・子の三人が愁歎言ひ分け得て妙。
○につと　につこと。につこり。近松作「曾我五人兄弟」に「互ににつこと打笑ひ」。
○きぬ／＼　後朝。女夫の語らひをした男女が、朝各自の衣を着るをいふ。ここの文は、解けて逢ふ夜もなく、後朝もなく、夫婦枕をかはす間もなく、許嫁も永き名殘となるとの意。
○二世　夫婦の縁をいふ。（既出）
○輪廻の絆　衆生は此處に死し彼處に生じ、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道に輪廻すること、恰も車輪の廻るが如きによつて之を輪廻といふ。「輪廻の絆」とは輪廻妄執の絆の意であつて、恩愛にほだされ煩惱の業苦を受けること。
○潮境　あまたの涙を潮水に喩へて「涙の潮」といへば、それに潮流の分れる境の渦立つをいひかく。

は危ふし／＼、一時も早く本國へ、引取給へサ早く、／＼」と、深傷を屈せず父親を、氣遣ふ孫の孝行心、聞に老母は塞兼て「アレあれを聞きや嫁女、其身の手疵は苦にもせず、極惡人の倅めを、大事に思ふ孫が孝心、ヤイ光秀、子は不便にないか、可愛とは思はぬかやい、僑が心只一つで、いとし可愛の初孫を忠と義心に健氣成、討死でもさす事か、逆賊不道の名を穢し、殺すは何の因果ぞ」とせぐり苦しき老の身の、聲聞付て十次郎「ヤアそんなら祖母樣には、御生害遊ばしたか、今生のお暇乞、今一度お顔が見たけれど、もふ目が見へぬ父上、母樣初菊殿、名殘惜や」と手を取て、妹背の別れ愛着の道に引るゝいぢらしさ、母は涙に正體なく、「討死するも武士のならひといへど情ない、十八年の春秋を乃の中に人と成何時樂みの隙も無ふ弓矢の道に日を委ね、今朝の首途の其時にも母樣今日の初陣に、適高名手柄して、父上や祖母樣に譽らるゝのが樂しみと、につと笑ふた其顔が私や幻にちら付て得忘れぬ」と口說立、口說立れば初菊も、「ほんに思へば此身程はかない者が世に有ふか、解けて逢ふ夜のきぬ／＼も永き名殘の許嫁、二世を結ぶの枕さへ、交す間も無ふ此樣な、悲しい別れをする事

はマどふした罪か情ない、私も一つ所に殺してたべ死たいわいな」と身を悶へ、互に手に手を取り交し名残り涙の暇乞、見るに目も暮れ心消へ母も老母も聲を上「わつ」と計に取り亂せば、流石勇氣の光秀も親の慈悲心子故の闇、輪廻の紲に締め付ヶられ堪へ兼てはら〳〵雨か涙の、潮境浪立騒ぐ如く也、又も聞ゆる人馬の物音、矢叫びの聲喧く手に取如く聞ゆれば、光秀聞よりつゝ立上りニアノ物音は敵か味方か、勝ヶ利如何に」と庭先ヶの、拗木の松が枝踏しめ〳〵攀登り、眼下の村手を屹度見下ろし、「和田の岬の弓手より追々續く數多の兵船に、間近く竹ッたる魚鱗の備へ、千ヶ生瓢の馬印は、疑もなき眞柴久吉、風を食つて此家を遁延、手勢引具し光秀を討取術と覺へたり」と言ふより早くひらりと飛下り、草履掴ふの猿面冠者、いで一搾ぎ」と身繕ひ、勢ひ込んで駈け出せば、「ヤア〳〵武智光秀暫く待、眞柴筑前守久吉對面せん」と呼はつて、三衣に代る陣羽織、籠手臑當も優美の骨柄悠然として立出れは、光秀見るより仰天し、駈け戻つてはつたと睨み、「ヤア珍らしし眞柴久吉、武智十兵衛光秀が、此世の引導渡してくれん、觀念せよ」と詰寄光秀、中に隔つる老鳥の、子故に手疵屈せぬ老女ニなふ久吉樣、

○矢叫びの聲　戰場で矢合はせの時に揚げる鬨の聲。

○拗木　光秀の性質をかけてかくいうた。

○和田岬　神戸港の南界をなし、東に向つて突出す。

○弓手　弓を持つ方卽ち左手。

○魚鱗　陣立ての名。[illegible]兵力中部に多く、前後に少きもの。

○千生瓢　[illegible]の馬標。[illegible]信長より許され、戰に勝つ每に小瓢を一つづつ增したといふ。

○風を食ふ　[illegible]で逃げ去る意の諺。

○草履掴みの猿面冠者　[illegible]

○三衣　佛弟子の着する三種の法衣、卽ち大衣・[illegible]

○陣羽織　[illegible]頃て袖なく、多くは羅紗又は緞で仕立て、刺繡を施[illegible]

○籠手[illegible]

○引導渡す　僧が死人を葬式に[illegible]なふに讀へて、首を切るなどの意にいふ。

○老鳥　籠鳥にいひかけ、籠鳥雲を戀ふを、老婆が子を戀ふ意にいひかけた。

我子に代る此母も、天命遁れぬ引そぎ鑓、作りし罪の萬ン分一亡ぶる事も有ふかと、思ひ餘つた此最期、武智が母は逆礫に、かゝつて無慚の死を遂しと、末世の記錄に殘してたべ、それもやつぱり悴めが、可愛さ故の罪亡し、うるさの娑婆に殘らんより、孫と一所に死出三ン途」、「ハア私もお供致しまする、いづれもさらば、おさらば」と、未練ン殘さぬ武士の、花も實も有ル此世の別れ、今ぞはかなく成にけり、操の前も初菊もさらに詞も出ばこそ、あへ亡骸を押シ動かし天にあこがれ地に伏て歎ク、心ぞいぢらしき、哀を餘所に眞柴久吉、光秀に打向ひ、「倶に天を戴かぬ亡君の弔ひ軍、今此所で討取ては義有て勇を失ふ道理、諸國の武士に久吉が軍ン功を知らさん爲、時日を移さず山崎にて、勝負の雌雄を決すべしがいかに〳〵」、「ヲヽ遉の久吉よく言ふたり、我レも惟任將軍と勅許を請し身の本ン懷、一ト先ッ都に立歸り京洛中の者共へ、地子を免すも母への追善ン互の運ンは天王山ン、洞が峠に陣所を構へ、只一戰ンに驅け崩さん、首を洗つて觀ン念ンせよ」、「ホヽヽヽ何さ〳〵、假令項羽が勇有共、我又孫呉が祕術を振ひ、千變萬化に駈け惱し、勝鬨上るは瞬く內」と久吉が、詞は搖がぬ大磐石、忽ち廻り小栗栖の、士

○引そぎ鑓　老母は光秀の竹を引っそいだ鑓に刺されたことが前文に見ゆ。
⊙逆礫　身體を逆にして行ふ磔刑。（但しこれには異説がある）。
⊙死出三途　死出の山と三途の川。
○花も實もある　諺。心も動作も共に美しいのをほめた言葉。
○倶に天を戴かぬ　君父の讐とは倶に天を戴かず。「禮記」曲禮に「父讐弗與共戴天」。
○惟任將軍と勅許　「眞書太閤記」六ノ二十三、光秀將軍宣下の條に、「光秀を以て中將に任ぜられ、將軍職に補せらる、との勅定なり」。
○天王山　山城國乙訓郡山崎の北なる山。
○地子　年貢及び雜種税。
○洞が峠　山城國綴喜郡から河内國北河内郡交野に通じる山道に當り、男山の南一里。秀吉と光秀との兩軍山崎の合戰に、筒井順慶この峠に陣し、兩端を持して形勢を觀望し、秀吉の軍が有利になつたので味方となつた。戰後秀吉はこの卑劣な行爲を憎んで順慶を賞しなかつた。後世「日和見の順慶」「順慶流」ということ、「洞が峠」の名と共に諺となつた。
○項羽　沛公（前漢の高祖）と戰って遂に敗死した西楚の名將。
○孫呉　孫武・呉起をいひ、共に支那春秋戰國時代の兵法家。
○小栗栖　山城國宇治郡醍醐村。明智光秀の殺された地。（今は京都市に入る）。
○二世　夫婦の縁は二世。これは十次郎・初菊のことで、一生を散らしてしまうことは、皐月のこと。佛道に入つたので「菩提の種」というた。（既出）

に哀を殘すとは知らず知られぬ敵味方、睨み別るゝ一人の勇者、一世を堅めの別れの涙、かゝれとてしも烏羽玉の、其黒髪を敢なくも、切拂ふたる尼が崎、菩提の種と夕顔の軒にきらめく千ゞ生瓢箪、駒の嘶迎ひの軍ゞ卒見渡す、沖は中國より追々入來る數萬ゞの兵船ゞ、威風凛々凛然たる、眞柴が武名ィ假名書に、寫す繪本の太功記と末の、世までも殘しけり

○かかれとてしも　黒髪　「後撰集」卷十七・雜三の遍昭の歌に「たらちめはかゝれとてしもうばたまの我が黒髪を撫でずやありけむ」。發想しなかつた尼にならねばならぬをいふ。●「烏羽玉の」は黒髪にかかる枕詞。烏羽玉とは射干の實をいひ、その黒きより「黒」「夜」「闇」「髪」などの枕詞に用ひる。
○菩提　（見前引）
○瓢箪、駒　「瓢箪から駒が出る」の諺による。
○繪本の太功記　本書の題名これから出た。

同　十一日の段

登場人物の主な者

梱（光秀の臣松田太郎左衛門政道の妻）　音壽丸（光秀の子といへど實は政道の子下行）　赤山與三兵衛（眞柴久吉の臣）

梗概

松田太郎左衛門の妻梱は蓑笠被て、光秀の幼兒音壽丸を伴ひ、主君光秀の主殺しの汚名を悲しみながら、夜道を踏んで淀堤にさしかかる、その時並木の陰から現はれた赤山與三兵衛等に要撃されて追拂ひ、赤山を斬殺して山崎へと急ぐ。

同　十二日の段

登場人物の主な者

柵（光秀の臣松田政道の妻）　音壽丸（光秀の子といへど實は政道の子千石）　松田太郎左衞門政道（光秀の臣。柵の夫）

松田宗左衞門利休（眞柴久吉の臣。政道の父。後に千の利休と云）　眞弓（利休の妻）

森尾茂助義晴（久吉の臣。柵の兄）　眞柴久吉（總帥）

梗概

柵は山崎の里なる夫政道の親利休の居所を尋ねて音壽丸を預け、夫が自分に宛てた死覺悟の手紙を見て天王山の戰場へ駈付ける。是時政道は森尾義晴と戰ひ、妻と音壽丸との行末を依賴して自刃する。柵は泣く泣く夫の首を携へて利休の家に戻る。

利休は千石の首を刎ねて音壽丸の身代りに立てた後、自殺しようとするを眞柴久吉に制止され、千石の名の一字を取り、千の利休と改名して茶道の師となる。武智光秀は天王山の戰に敗れ、小栗栖さして落ち延びる。

同　十三日の段

梗概

天道は可を道いて不を省てる。さしもの武智光秀も筒井順慶の裏切により、忽ち敗れて小栗栖に落ち延び、百姓（實は匪徒である。武家時代殊に戰國期は、百姓というても其の實土匪の類が多かつた。）が藪陰から突き出す竹槍に刺されて哀れな最期を遂げた。

増補

生寫朝顔話

解題

嘉永三年正月京都翠松園主人が增補したもので、十六段に分れ、其の中の第三・宇治の段、第十二・濱松の段、及び第十四・宿屋の段（其の二）が最も名高い。

本曲はもと山田案山子（近松德叟の戲號）が「生寫朝顏日記」を作つたが、瞽女深雪に扮して琴を彈くに適當な俳優がなかつた爲、上演されなかつた。其の後讀本の「朝顏日記」（雨香園富田柳浪撰。文化八年刊）が作られ、また「けいせい筑紫夫琴」（近松德叟作「生寫朝顏日記」を奈河晴助が修正したもの。文化十一年正月大阪角座に上演）が作られ、その後「生寫朝顏話」（耶麻田加々子が山田案山子（近松德叟）の遺作「生寫朝顏日記」を添削し、天保三年正月二日から稻荷境內太夫本竹本木々太夫、太夫竹本重太夫の芝居に上演）が作られ、その後更に「增補生寫朝顏話」が作られたもので、其の奧書に

「嘉永三載戌正月發板　生寫朝顏日記といへる淨瑠璃過ぎし文政（文化の誤か）の年間故人山田案山子竹本重太夫が爲に筆を乘るといへども未だ局を結ばずして終に鬼籍に入りたり爰に故人重太夫子　鶴澤才二同儀左衞門等此の淨瑠璃の全からざるを深く惜しみ團圓をなして專ら世に廣くせん事を計り予に校補を需むる事せちなればいなみ難く舊章の足らざるを删補潤色し兩子之に節奏を加へ且外題の文字六つの員となる事梨園中の人の嫌忌なりといへば改めて增補の二字を冠らしめ生寫朝顏話と題するの概略を簡端の餘紙に錄する事しかり　洛土翠松園主人」

と見えてゐる。

作者

原作者山田案山子は、大阪の淨瑠璃作者近松德叟の戲號である。寶曆元年（或云二年）に生れ、俳諧師小野紹蓮の孫で、父は大阪伏見阪町の娼家大枡屋勝右衞門といふ。彼は少年の頃から劇を好み、淨瑠璃作者近松半二の門に入り、歌舞伎作者となつて德叟（初め德三と云）といひ、寛政八年に「伊勢音頭戀寢劍」を作り、七月二十五日から大阪の角座に上演して大當りであつた爲、彼の名は頓に高くなつた。その後、世話物または飜案物の佳作の數々を殘した。彼はまた俳諧點者を兼ね、俳名を雅亮といふ。文化七年八月二十

三日歿した。行年六十(或云五十九歳)。

増補者翠松園主人は京都の人。「星月夜窓下白梅」(合巻物。嘉永六年刊)の作者翠松園種春のことであらう。

實　説

本曲は熊澤伯繼の今様歌「露の干ぬ間の朝顔を照らす日影のつれなきに、あはれ一村雨のはらはらと降れかし」から想を構へたものである。

熊澤次郎八は長じて伯繼といふ。元和五年京都に生れ、外祖父熊澤守久の養子となつて其の氏を冒した。寛永十一年(十六歳)備前岡山藩主池田光政(芳烈公)に仕へ、職に留ること五ケ年で辭し、近江桐原に住んで儒學を研究し、中江藤樹の門に入つて陽明學を受け、正保二年(二十七歳)光政に招聘されて再び仕へ、國政に參與し祿三千石を食む。伯繼勵精事に當り、貧民を救ひ、土木を起す等、治績大いに見るべきものがあつた。彼は屢々主君に陪從して江戸に往來し、名聲高かつた。其の人と爲り、容姿端麗で美婦人の如く、然も英邁經世の智略を有し、溫厚以て人に接し、喜慍の色を見せなかつたといふ。彼は光政の信任を得たが、往々己が才智に任せ、光政の意に滿たぬ所あり、明暦三年正月(三十九歳)職を辭し、備前國和氣郡蕃山村(今は伊里村蕃山)に閑居した。彼が蕃山と改姓したのは、この村名に據つたのである。そして名を了介と改めた。萬治元年(四十歳)京都に轉居し、後に播州明石に隱棲した。彼は陽明學を修めて、公卿と交際してゐた爲幕府に忌まれ、貞享四年十月將軍綱吉の命で禁錮され、元祿四年七月二十七日(七十三歳)歿した。本曲にいへる宮城阿曾次郎事駒澤次郎左衛門は、これに似通つた所がある。

本曲に出る悪人岩代多喜太は、俗に津田左源太永忠を脚色したものとされてゐるが、これは故人を誣ふるものである。永忠は池田家の世臣の家に生れ、伯繼が致仕した後、十八歳で光政に拔擢され、井田を和氣に作り、また教育の普及に力を盡した功臣である。今の閑谷黌はこの時に創設されたものである。

深雪(朝顔の女)は、熊澤伯繼が「毛詩」周南・召南を引いて貞節の道を說いた彼の著「女子訓」の趣旨に據つた假作人物であらう。

影響

本曲は淨瑠璃芝居にも歌舞伎芝居にも、諸方で度々上演されて今も壽命を保ち、大衆に遍く知られてゐる。女丈夫深雪の可憐な姿は、思ひ出す毎に目にちらつき、我が婦道の上に感激を與へるものである。

(一) 大内館の段

登場人物の主な者

大内多々良之助義興（鎭西の探題。防長豐筑の太守）　山岡玄番之允（義興の惡家老）　駒澤了諳（大内家儒學の師範）

園生の方（義興の母）　玉橋の局（實は山岡一味の逆徒荒妙）　赤星運八（山岡の家來）

梗概

大内義興は鎌倉に在勤中、惡家老山岡玄番之允の術中に陷り、酒色に溺れ遊興に身を持崩してゐる。國許では主君の放埒を心配し、駒澤了諳は甥の宮城阿曾次郎に命じて、主君を諫めさせようと決心した。

折節白髮の老婆が玉橋の局と名乘り、勅使と伴つて義興の周防の留守邸に來り「中宮樣が御病氣であるから、大内家秘藏の藥王樹（もと天竺の名醫耆婆の持つてゐた靈木。「本草經」に「有二藥王樹一、從レ外照レ內、見二人腹臟一。」）を暫時借用したい」と申込んだので、園生の方が出て對面し、藥王樹を局に渡した。局は之を持つて乘物で歸る。其の間に玄番之允は赤星運八に命じ、寶藏に忍び入つて靈符の尊像（御守の釋迦牟尼佛の像）を盜み取らせた。

(二) 松原の段（多々良濱）

登場人物の主な者

駒澤訝一郎（了諳の子）　白髪の老婆（玉橋の局と伴つた山岡一味の逆徒荒妙）　山蛭（荒妙の部下）

梗概

駒澤訝一郎は親了諳に勘當されて乞食となり、周防山口の南なる多々良濱で、薦を被つて寝ね、前非を悔いてゐる。眞夜中に何者か濱邊を乗物で來る者があるので、訝一郎は松原の中に隠れ入つて様子を窺へば、乗物の中から白髪の老婆が現はれ、この邊に待つてゐた山蛭といふ男に逢ひ「大内家へ入込みうまく騙して藥王樹を奪つたから、早う之を持つて摩耶山（海抜六九七米、鬱蒼たる樹木に覆はれ、脚下に神戸市街を見る。名高い忉利天上寺はこの山にある。此處を荒妙が叛逆を起す根據としてあるのである。）へ歸れ」といふて渡した。そして「これから大内家を亡して大友家が再興し、運好くば一天四海を併呑したいものだ」と、獨り頷いて入江の方へ行く。之を聞いた訝一郎は、こいつ曲者めと、老婆の跡を附けた。

(三) 宇治の段（宇治川船）

登場人物の主な者

僧　月心（宮城阿曾次郎の知人）　宮城阿曾次郎（大内家の侍。駒澤了諳の甥）　深雪（藝州岸戸の家老秋月弓之助の息女）

淺香（深雪の乳母）　鹿内（阿曾次郎の奴）

梗　概

頃は五月、新綠の宇治の景色にあこがれ出る人の多い中に、宮城阿曾次郎は僧月心老と共に宇治橋に來て、通圓といふ水茶屋に憩ひ、繪よりも美しい景色に眺め入つた。そして興に乘じて一首の歌を短冊に書き月心老に與へたが、其の短冊は風に吹飛ばされて、深雪が螢狩の遊山船の中に落ちた。月心老は「つい好い景色に見とれて興聖寺（宇治町にある。曹洞宗）に行くのを忘れました。後刻菊屋でお出合ひ申しませう」とて、宮城と別れた。

深雪の乳母淺香は船の中に落ちてゐる短冊を拾ひ「とても優しい此の歌を御覽あそばせ」というて深雪に渡した。深雪は其の讀み人をゆかしう思ひ振向いて、阿曾次郎と互に顔を見合はせ、互に美しい姿に見惚れた。折節二人連れの泥醉した浪人風の男が深雪の船に飛込み、深雪に暴行を加へようとしたので、これを見かねた阿曾次郎は、同じく船に飛入つて泥醉者をたしなめ、叩きのめして追拂つた。深雪・淺香は阿曾次郎にその禮を述べて杯を差し、阿曾次郎は深雪に所望されて、朝顔の今樣歌を扇子に書いて渡し、相思の仲となる。

折から奴の鹿内が阿曾次郎を尋ね來て、伯父の駒澤了庵から送つた書狀を渡した。その文言に「鎌倉在勤の主君義興樣御放埓に就き諫言申上げよ」とあるので、阿曾次郎は深雪と名殘を惜しみながら急いで歸る。その途中で以前の醉漢に襲はれ、之を川へ投飛ばした。かくて船と陸との相愛の兩人は、姿の見えずなるまで振返り〳〵して慕うた。（この段は、詩趣に富んだ宇治の螢狩を寫し、其の地に遊ぶ深雪と阿曾次郎との美女美男が、初めて見知つて戀に落ちる有名な場面である。）

(四) 眞葛が原の段（眞葛が原茶店）

登場人物の主な者

お由（水茶屋の下女）　立花桂庵（秋月家に出入の藪醫者）　萩野祐仙（藪醫者、桂庵の朋輩。）

梗概

立花桂庵は京の丸山の井筒屋で遊興して歸る途中、眞葛が原の水茶屋に立寄つて、年頃三十一二の醜い男萩野祐仙の來るを待合はせ、「秋月弓之助の息女深雪との緣談の媒妁をしてやる」といふて、三十兩を捲上げた。そして祐仙を髪結床へやつた後、水茶屋の下女お由と諜し合はせ、祐仙の戻るを待つて、鍋墨を「惚れ藥井守の黑燒である」と、騙して十五兩に賣付け、お由が祐仙に馴々しう寄添ふを、惚れ藥の利目だといふて騒ぎ立てる。

（五）岡崎の段（岡崎隱家）

登場人物の主な者

秋月弓之助（藝州岸戸の家老）　操（弓之助の妻）　深雪（弓之助の息女）

淺香（深雪の乳母）　立花桂庵（秋月家に出入の藪醫者）　萩野祐仙（藪醫者。桂庵の朋輩）

瓜生勇藏（岸戸の家臣）　宮城阿曾次郎（大内家の侍）

梗概

秋月弓之助は主君の放埓を諫めかねて職を辭し、浪人となつて京都聖護院の町はづれ岡崎に隱棲し、朝顔を栽培して花に心を慰めてゐる。彼は妻に娘深雪の緣談を語り、「立花桂庵の世話で、宮城阿曾次郎といふ侍を聟に取る契約をした」と、いうて奧に

入る。深雪は宇治の螢狩に出て、阿曾次郎と契つてからは思ひの種となつたが、乳母から「お好きの阿曾次郎様が聟入なさる事になりました」と聞いて、夢ではないかとばかり喜んだ。然るに桂庵は萩野祐仙を阿曾次郎と偽つて連れて來たので、忽ち化の皮が現はれて追拂はれる。深雪は失望して、愛人が形見に朝顔の今様歌を書き殘した扇に眺め入り、物思ひに沈むを乳母に慰められて奥に入る。

折節弓之助の古朋輩瓜生主水の舍弟勇藏が駈込んで、國許の騒動を報じ「主君御召しの書状を持つて參りました。早く御歸國なされて騒動をお鎭め下さい。私は心もせきますから直に國許へ引返します」とて、飛ぶが如くに出て行つた。弓之助は急いで歸國の支度に取掛り、今夜伏見に出て船に乘らうと混雜してゐる夕暮、阿曾次郎は今一度深雪に逢うて暇を告げようと思うて來た。それとは知らず以前の贋阿曾次郎に懲りた宮城家では、又も曲者が來たかと誤つて追拂つたので、阿曾次郎は其の譯は知らず、不思議に思ひながら去つた。

(六) 明石船別れの段

登場人物の主な者

宮城阿曾次郎(大内家の侍)　深雪(岸戸の家老秋月弓之助の息女)

梗概

秋月一家の者は歸國を急いで船出したが、折から天候惡しく、明石の浦に碇泊して順風を待つ事となつた。深雪は退屈紛れに、愛人の形見の朝顔の唱歌を琴に合はせて彈じた。宮城阿曾次郎が歸國を急いで乘つた船もこの浦にかゝり、己が作つた朝顔の唱

歌が聞えるので、さても不思議な事と、船から顔を出した、之を見た深雪は、「あら阿曾次郎様か」と驚喜し、親の眠つてゐるを幸ひに船に飛移り、「あゝ嬉しい、久しうお逢ひ申しませんでした」と、互に縺れ附き、共に逃げて同棲しようと約す。深雪は「親を案じさせない爲に、書置を殘して來ます。そしてすぐに參りますから待つて下さい」と頼み、我が船に乗移つたが、その間に船は風に吹分けられた。深雪は悶えて愛人の船に扇を投込み、兩人の燃える愛は水に妨げられて、又もはかない別れとなつた。

(七) 弓之助屋敷の段

登場人物の主な者

秋月弓之助（豊岡岸戸の家老）　操（弓之助の妻）　深雪（弓之助の息女）
蘆柄傳藏（岸戸の臣）　淺香（深雪の乳母）　關助（弓之助の奴）

梗概

秋月弓之助は歸國して騷動を鎭め、主君に召されて出仕した。其の留守中、深雪は阿曾次郎を思ひ焦れて病となり、腰元どもに慰められてゐる。折節下賤の身から成上つた蘆柄傳藏が來て、「深雪を我が妻に貰ひ受けたい」と強談に及び、深雪の母の操に嘲されて歸つた。その後弓之助は主君の許から歸宅し、妻を呼んで、「國内の騷動を鎭めた事を主君がお褒めになつて、二百石の加增を賜はつた。折しも大内家の侍駒澤次郎左衛門といふ立派な人が使者となつて來てゐたので、共に御前で饗應に預かつた。その時主君から駒澤を深雪の聟にせよと仰せられた。聟として申分がない過分の者と思つたから、早速喜んで御返事を申上げた」と語り、機嫌好く奥に入つた。

操は深雪がかねて阿曾次郎を思ひ焦れてゐるのを知つてゐたから、この縁談を氣遣ひ、娘を呼寄せて能く言ひ聞かせた。然るに次郎左衛門が阿曾次郎と同人であるとは夢にも知らぬ深雪は、斷然この結婚を拒絶し、書置を殘して窃に家を拔出た。乳母の淺香はその書置を拾うて、一家大心配となり、淺香・關助等は深雪の行方を尋ねて出る。

(八) 大磯揚屋の段

登場人物の主な者

岩代多喜太(大内義興の奸臣)　赤星運八(大内義興の奸臣)　大内義興(鎭西の探題。防長豐筑の太守)

駒澤次郎左衛門(宮城阿曾次郎の改名。義興の忠臣)　瀬川(松葉屋の遊女)　淺井順藏(大内家の儒者)

梗概

大内義興は大磯の遊廓松葉屋に入浸り、赤星運八・岩代多喜太等の奸臣が附添ひ、遊女を集めて踊・囃子の大騷ぎをしてゐる。そして其の中へ國許から諫言に來た駒澤次郎左衛門を呼寄せて辱かしめようとした。駒澤は威儀を正して進み出で「私は御諫言を申上げようとして參つたものではございませぬ。この度伯父了諳の跡繼を致しましたので、殿樣へその御挨拶を申上げ、且はお杯の御相手にもと存じ、御伺ひ申しました」と言つたので、岩代等は豫想に反して言葉も出ず、義興の機嫌も直つた。駒澤は美男である上に、酒もよく飲み歌もよく謠ふので、一座の大持てとなつた。

駒澤は豫て主君の馴染遊女瀬川に詩文を敎へてゐたので、瀬川とひそ〳〵話し合ふ。之を見た岩代・赤星等は駒澤を手に入れて主君を毒害しようと工む。又瀬川は、駒澤が義興公の爲に死んでくれよと諷したことが氣に懸り、その返事を書いて駒澤に渡

した。それをちらと見た岩代は「姦通者め動くな」と聲を掛ける。容寐入して見てゐた義興は瀨川を拔討にし、次郎左衞門に斬付けるを、次郎左衞門はひらりと身をかはし、押取り卷く大勢を投飛ばし、「姦通は致しませぬ。無法をなされても科が極らぬ中は繩に掛りませぬ」と言ひ放つた。折柄岩代は瀨川の書狀を拾ひ上げ、「これが姦通の證據だ」と喚けど、漢文なので讀めず。瀨川は深疵を押へながら、「妾どもは姦通致しませぬ。その文をお讀み下さつて疑ひをお晴しあそばせ」といふ。そこで儒者淺井順藏を呼んで讀ませれば、義興公の御身を大切に思うて命を捧げるといふ文なので、義興は之を聞いて驚く。

瀨川は苦しい息を繼ぎながら、「我が君樣を大事に思うて死ぬる妾を、未來は夫婦ぞと一言仰しやつて下され」と掌を合はせれば、義興も後悔の涙を浮べ、「おう未來は一蓮托生ぞ」との聲を聞いて、瀨川は淋しい笑を漏らして息を引取つた。義興は長夜の夢の覺めたやうに改心し、次郎左衞門は赤星運八を誅し、主君の御伴して歸國する。

(九) 小瀨川の段

登場人物の主な者

權七(夜盗)　勘太(夜盗)　深雪(岸戸の家老秋月弓之助の息女)

婆(山岡一味の淺花尼妙)　關助(秋月家の忠僕)

梗概

寒月淋しう照らす小瀨川の岸に繋いだ船の中に白髮の老婆が居る。在所の老爺が之に聲を掛けて通り過ぎる。その跡に夜盗の權七・勘太の兩人が現はれ、「紫縮緬の振袖を着た娘を見付け、一仕事しようと思つたを、見失うた馬鹿野郎め」とて、互に喧

嘩を始めたが、やがて仲直りして左右へ別れた。

深雪は夜盗の油斷した間に逃げ延びたが、母や愛人や乳母の事など思ひ出して涙に袖をしぼり、生きて恥かくよりもと覺悟を極め、柳の老樹に扱帶を懸けて、念佛の聲と共に縊れようとする途端、繋ぎ船の老婆に見付けられて抱留められた。これを見た先刻の夜盗駈付け、深雪を奪ひ去らうとして老婆に突飛ばされ、老婆が投げ與へた十兩を拾うて去る。深雪は老婆に助けられて船に乘つた。その跡に關助が息を切つて馳せ來り、「その船待つた〳〵」と聲を掛けたが、船では聞えぬ振して沖へ漕ぎ出た。夜盗二人は關助の後に立塞がり、着物を剝がうとして取付くを、關助は身をかはして夜盜を拜討ちに斬棄て、船の跡を追うて行く。

(十) 摩耶が嶽　其の一

登場人物の主な者

老婆（山岡一味の逆徒荒妙）　千里（荒妙の養女）　浮洲仁三（荒妙の部下。實は駒澤了請の子三郎春次）
猿辷り（荒妙の部下）　山蛭（荒妙の部下）　關助（秋月弓之助の忠僕）
蘆柄傳藏（山岡一味の逆徒）

梗概

白髮の老婆は雲に聳える摩耶が嶽の岩窟に住んでゐる。娘千里は雪の朝、椿・山茶花を手折つて歸り、老母に對つて「浮洲はまだ歸りませぬか。いつやら連れて戻られた女は何處へ往きましたか」と問ふ。老母は「あの女は播州へ奉公に遣りました」と答へれば、千里は氣淋しげに色々と問ひ掛けて、老母に「えゝうるさい」と叱られ、花を佛壇に供へて奥に入る。折から浮洲・猿

辻り・山蛭等は、勾引した娘や、追剝をした衣類や金を持つて歸つた。

闇助は深雪の行方を尋ね廻つて摩耶が嶽に登り、岩窟を覗き、「紫縮緬の振袖を着てゐる年頃の美しい女を御存じではございませぬか」と問へば、老婆ははつと胸にこたへたが、「そんな者は存じませぬが、どういふ譯でお尋ねなさる」と問ふ。闇助「拙者は藝州福岡の者でござるが、主人の御息女の行方を尋ねて諸國を廻り、小瀬川で船に乘つてゐられたのをちらりと見たので、其の跡を追ひ、里人に道を聞きながら、なんでも此邊と思つて尋ねて參つた」といふ。老婆は「それなら嘸この先の山奥の事でございませうに」と、あらぬ方を教へて去らせた。猿辻り・山蛭は闇助を殺して後顧の憂ひを除かうとして跡を追うた。

それと入違ひに蘆柄傳藏が來り、「山岡玄蕃之允様からこの書狀を託かつて參りました」とて、老婆に渡し、「近頃駒澤次郎左衞門とて、大内義興の放埒を改心させた猿智惠の奴がゐます。彼奴が小策を廻らして、何時藥王樹を奪ひ返さうも知れぬから、萬事油斷ないやうにとの言傳でした」と、述べて去る。

（十二）摩耶が嶽　其の二

登場人物の主な者

千里（荒妙の養女。大友宗麟の息女菊姫）　浮洲仁三（祥一郎といひ、駒澤了雲の子三郎春次）　輪抜吉兵衛（人買）

嵐　姥（白髪の老婆。山岡一味の黨徒）　深雪（井戸の家老秋月弓之助の息女）　眼太（荒妙の部下）

蘆柄傳藏（山岡一味の黨徒）　闇助（秋月弓之助の忠僕）

梗概

欝葱とした森に覆はれた、摩耶山祕密の岩窟の、日陰に咲く色盛りの千里は、浮洲仁三に懸想した。浮洲はこれを手懸りに、「其方の母樣の祕藏されてゐる藥王樹を、ちよつと見せて下さる事はなりますまいか」と賴む。折節人買の輪拔吉兵衞が深雪を連れて戻り、老婆に逢うて、「この女め勤め奉公に賣らうとしても、ほえ面かいて手に合はぬから返します」とて、他の小娘と取替へ、駕籠に押入れて去つた。老婆は「女めなぜ言ふことを聽かぬ。それでは金にならぬ」と、怒つて深雪を打擲し、泣いて止める千里に耳もかさず、無慙や顏に燒金を當てて絕息させた。折しも下人眼太が駈付けて老婆を呼出したので、千里は之を幸ひに愛人の爲に藥王樹を取出す。浮洲は深雪を介抱し、藥王樹を執つて深雪の額に載せれば、靈藥の效驗著く、深雪は忽ち蘇生する。浮洲は深雪の手を取り「さあ今の間に疾く」と、都の方を敎へて虎口を遁れさせた。

かくて浮洲は藥王樹を奪ひ、聲銳く「此處の老婆は大友の殘黨、山岡玄番之允一味の叛逆人。其方との緣もこれ限り」と、言ふを聞いた千里は泣き倒れる。荒妙は駈戾つて此の有樣に驚く間に、千里は短刀を我が腹に突立てる。浮洲は荒妙が夜叉の狂ふが如く摑みつくを突き退け、「我こそ大内の家臣駒澤了諳の子春次だ。多々良濱に寢て、汝等の祕密を知つてから今まで附狙つて居たのだ」と、名乘りを上げたので、荒妙は最早これまでと覺悟し、脇差を腹に突立て、「妾は大友家の恩顧を蒙つた荒妙である。千里はその實大友宗鎭樣の御息女菊姬君で、大友家滅亡の時守護して匿ひ申した。何とかして軍資金を蓄へ、菊姬君を守立てて大友家を再興しようと、心盡しの甲斐もなく殘念に存ずる」と、齒をくひしばつて淚に暮れる。

折から闇助は山路を迷うて跡返りし、春次から仔細を聞き、手向ふ蘆柄傳藏を斬棄てる。春次は荒妙の切な請と、菊姬のあはれな心とに同情して、痛手に苦しむ菊姬と夫婦杯をして未來を契る。荒妙も菊姬も成佛を願うて絕命する。（これから名高い「濱松の段」となる。）

（十二）濱松の段

登場人物の主な者

深雪（岸戸の家老秋月弓之助の息女）　淺香（深雪の乳母）　輪抜吉兵衛（人買）

梗概

深雪は愛人を尋ね濱松にさまよひ來て、身の不仕合に目を泣き潰し、憂き節しげき竹の杖に縋り、抱く三味の絲より細き露命を繋ぐ哀れな者に落ちぶれて、しを／＼と夜道をたどり來る途で、里の子供等に惡戯をされて泣入る。折から深雪の乳母淺香が東國順禮となつて通りかゝり、「申し／＼、この街道を年頃十六七の大振袖の美しい娘が通りはしませぬか」と問ふ。深雪ははつと驚いたが、落魄の身を恥ぢて、「あゝ其のお尋ねの人は四五日前に身投げしたと聞きました」と教へた。淺香は歎きながらも、どうやら瞽女が深雪に似てゐるので、若しやと思ひ別れた振して樣子を窺ふ。深雪は野中の小屋に入り、遙々尋ね來た乳母の恩を謝して、我が身の不幸をかこつ。淺香は耳を澄ましてこれを立聞きし、駈寄つて奇遇を喜ぶ。

折節人買の輪抜吉兵衛がこれを見付けて、深雪を拉し去らうとしたので、淺香は之と渡り合ふ。女の念力に斬込む太刀先鋭く、遂に吉兵衛を殪し自らも深傷を負つたが、甲斐々々しう深雪を連れて去る。

評

一旦思つた愛人を慕うて、どこまでも女の道を立抜き、千辛萬苦に直面し、いつも泣いて對抗した果は、盲目となりて乞食に落ちぶれても、初一念を貫く健氣さよ。又一命を恩人に捧げて、遂に惡漢の爲に深傷を負うた乳母も美しい。共に我が國女丈夫のゆかしい節操を示してゐる。

○思ふこと…憂き世　謠曲「安宅」にも「實〔げ〕にや思ふ事叶はねばこそ憂き世なれ」。
○目かい　「目界」など書いてもあれど、目價〔めかひ〕即ち目のはたらきの義であらう。眼力。（見索引）
○玉の緒　魂〔たま〕の緒であつて、命〔いのち〕の意。（見索引）
○わいかけ　「わきかけ」（脇掛）の音便。右肩から左脇に掛けるをいふ。ここの文は、三味線を紐で括つて右肩から左脇に掛けて背負ふをいうた。三味線を負ふことはこの文の終りにも見えてゐる。「義經千本櫻」第二・渡海屋の段に「風呂敷わいがけ旅の僧によき〳〵と立出づれば」。
○しほ〳〵　正しくは「しを〳〵」。悄然。しよんぼり。
○朝顏の乞食　深雪は愛人阿曾次郎を慕ひ、乞食の姿に零落しても、常に愛人の形見の唱歌「露のひぬ間の朝顏を照す日影のつれなきに、あはれ一村雨のはら〳〵と降れかし」を歌ふによつてかくいうた。
○あた　侮蔑の意を示す接頭語。
○惣々　總ての者。
○腕白　「わつぱ」（童）の訛。兒童のいたづらをいふ。

濱松の段

三下り歌※思ふこと、儘ならぬこそ憂き世とは、誰が古への託言、今は我ガ身の上に降る涙の雨の晴間なく、哀れや深雪は數々の、憂さ重りて※目かいさへ泣潰したる盲目の、力と頼む物とては、僅かに細き竹の杖あるに甲斐なき※玉の緒の切レも果ざる三味の糸、露命を繋ぐ縁にと背に※わいかけし※ほ〳〵と、心の闇路たどり來る、跡に大勢里童手ん手に竹切振廻し、詞「アレ〳〵※朝顔の乞食盲目叩け〳〵、打よ〳〵」と、取廻す。詞「アヽ、コレ〳〵目の見へぬ者を其樣にはせぬ物じやはいな、どれも〳〵よいお子樣や、今度よい物が有たら上ふぞへ」、「ヱヽいやじやはい乞食に誰が物貰ふもんで、ナア次郎坊」「ヲヽそふじや〳〵※あた穢ない乞食の物貰ふ物かい、そんな事ぬかしたら、コリヤ斯じや」と地※惣々が竹で打やら石打やら育も下種の※腕白ども、寄つてかゝつて叱責まれ、詞「アヽ、コレ〳〵モウ再び言やしませぬ、地こらへて下され誤つた」と、土に平伏し詫ければ、「ヲヽ泣て誤るなら堪忍してやろサア皆來い

○誰あらう　何者であらう即ち。
○筋目　素性。家筋。「筋目もない」は、田夫野人の素性の賤しいをいふ。
⦿笈摺　順禮の背に着る一種の衣服
○順禮　各地の靈場を巡拜すること（見索引）。ここは西國順禮をいふ。
○女中　婦人。（下女の意に用ひるは後世の轉義である）。
○音なふ　訪ふ。「俚調集」に「音なすの義なり」とある。
○[illegible]
○物ごし　[illegible]
○遠外れ　[illegible]ふうつき。
・[illegible]
○とした事が　何か[illegible]が合はず[illegible]に思[illegible]
○笑止　[illegible]

何時もの土手で芝居ごと、五郎よ次郎よ」と呼連て道草しながら走り行、跡に深雪はわつと泣「エ、淺ましや情なや、誰有ふ岸戸の家老秋月弓之助が娘とも言れし身が、如何に落ぶれたればとて、筋目も無い里の子に、乞食よ非人と打叩かれ、誤りましたは何事」と身を抱締めてどふと伏託涙ぞ、いぢらしき、「あゝ尊と導き給へ觀音寺」、遠き國より遙々と、乳人淺香は淺からぬ歎きも身にぞ笈摺の、深雪の行方尋んと思ひ立たる順禮も辛苦憂身の窶れ笠露の宿りも取かねて、杖を力に歩み寄「コレ〳〵女中卒爾ながらチトお尋ね申たい」と、音のふ聲に泣顏隱し「ヲヽ、コレハマア　どなた様かは存じませぬが私は目かいの見へぬ者、カア、何事のお尋ぞ」と、言物ごしのつまはづれどふやら尋る其人に似たとは思へど形かたち是は非人殊に盲目心の迷ひと、思ひ返し、「ホヽ、、、ハ、妾とした事が粗相な目かいの見へぬお人に問ふ事は異な物なれど若此街道を年の比は十六七、媚容人に勝れ屋敷育の大振袖、供をも連ず只一人、通られし様子をば、若聞はなされぬか」と、言ふに正しく我身の上と、胸騷ぎしが待テ暫し、世の中に似た聲の人似た事の無きにあらずと思ひ返し、「ヲヽ、それはマア笑止な事や往來も繁き此

○カ　「が」とあるべき所。
○へ　正しくは「え」で、感動の助詞。
⊙藝州福岡　[illegible]福岡といふ所はない。備前國邑久郡行幸村福岡をかくいうたのであらう。
○面伏せ　面を伏せること[illegible]。不面目。
○くろます　黒ます。ごまかす。知れぬやうに作り話をする。
○死しやんた　「死なしやんした」か。
○老少不定　[illegible]無常の境界であるから、老人が先に死に、少年者が後に死ぬとは限らない。人々の死期は定まらないこと。[illegible]「錦戸」に[illegible]
○定まり事　[illegible]
○建て掛け小屋　造りかけの小屋。掘建「ほつ[illegible]
○入相　日没時。これに小屋に入るをいひかく[illegible]
○仕樣模樣　類似音を重ねて語勢を强めた。[illegible]
○東家　[illegible]

街道女中の一人旅は幾人といふ限りなし、左樣にお尋なされては中々知れぬ樣もなし、マアカ國は何國名は何と申ますへ」「サレバイノ國は藝州福岡、名は深雪樣」といふは彌乳母淺香ヤレ懷かしやと言たさも、落ぶれ果し今の身を我と名乘るも面伏殊にそれぞと言ならば連て往なれて父母にどの顏さげてまみゆべき、罪深き事ながら僞り賺して歸さんと猶しも聲をくろまして、「詞ヲヽ成程樣かそんな噂も聞たれど其女中は國を出てより樣々の憂目に逢漸遁れ此邊迄は來られしが、どふした事か四五日前に淵川へ身を投て死しやんたと人の噂假令どの樣に尋てももふ、逢事は成ますまい」と聞て淺香は、「ヤア／＼／＼何其女中は身を投て、ハアはつ」と計に身を打伏前後正體泣居たる、深雪も共に悲しさの、淚隱して傍に寄、「詞コレ申女中樣悲しいはお道理なから、老少不定の世の習ひ、定り事と諦て早ふ國へお歸りなされ跡弔ふてお上なさるが佛の爲、海山かけし長の旅隨分怪我のないやうに」と、言つゝ建てかけ小屋へ、探り／＼て入相の鐘に哀を添にける、跡に淺香はうつとりと淚なからの一人言、「詞コレ、申、聞へませぬぞへ深雪樣、家出なされし其時も一言明して下さつたら仕樣模樣も有ふ物ア、おいとしや奧樣は

〇忌　普通中陰（七七日即ち四十九日）の間をいふ。

〇菩提　成佛（じやうぶつ）の意。（見索引）

〇札所　巡禮する觀音の靈場をいひ、巡禮者は小さい塔婆形の巡禮札を其の寺に納めて、巡禮帳を出して寶印の捺印などを乞ふによつてこの稱がある。

〇いかい　嚴（いか）い。きつい。まことに。大變。

〇胴慾　貪慾（どんよく）の事。無情。非道。

お前の事を苦に病で明ても暮ても泣て計果は重き病の床死る臨終の際迄も、どうぞ尋て連歸りせめて位牌に無事な顏を逢してくれよと私への遺言夫故忌の明をも待たず國々廻る順禮もお前に逢ふ計じやになぜ死では下さんした、妾やお位牌へ、言譯を何とせふぞ」と身をもだへ、恨る人は目の前にありとも知らぬ口說き泣聞に深雪は身も世もあられず、袖をかみしめ耳をおさへ泣聲立てじと食しばり怺へ／＼し苦しさは骨も碎くる計にて、泣よりも猶つらかりし亂るゝ心押鎭め、淺香は淚の顏を上「アヽ我ながら愚痴の至り何時迄言うても返らぬ事此上は菩提の爲打殘りたる札所を廻り、早う國へ歸りませう、そふじや／＼」と立上り小家の戸口に駈寄て「イヤ申女中樣いかゐお世話でござりました、モウおさらば」と夕月に別れを告て行過しが何か心にうなづきて木陰に忍び窺ふとも、知ぬ盲目の悲しさに思はず小屋をまろび出、乳母の行方はそなたぞと、見へぬながらに伸上り「コレ淺香今言ふたは僞り詐る深雪は妾じやわいの聲を聞た其時は飛立やうに有たれどもな、淺ましい／＼此形でマア顏が合されふ、とは言ながら妾が身をよく／＼大事と思へばこそ、海山越へて憂苦勞廻り逢は逢ながら、胴慾にもよ

○命日　忌日。
○あろかいなう　あらうかなあ、ありはせぬ。
○このあたり、哀れ深い名文である。

そ〳〵しふ、言て去なした心の内、マヽヽヽどの様に有ふぞいの只何事も是迄の約束ごとと諦てコレ堪忍してたも〳〵や取分て悲しいは是程不孝な此私をやつばり子じやと思し召身のいたづらを苦に病んでお果なされた母様の、死目に逢ぬのみならず※御命日さへ露知らずはかない事がヱ、※マあろかいのふ思へば〳〵淺ましや親々の罪計でも目が潰れいで何とせふ、赦してたべ」とばかりにて、怺へ怺へし溜涙わつと叫びて身を投げ伏前後正體泣沈む。立聞淺香も忍びかねわつと一聲泣出せば、「扨は其處に」と深雪が驚きこけつ轉びつ逃行を、縋り留て聲顫はし「詞コレマア〳〵待て下さんせいのふ、姿形は變つても、目にも見違ねども、名乗りかけても中々に明さぬ氣質と知た故、餘所事に言なして、木陰に隠れて始終の樣子、立聞したも盡せぬ縁、さりながら此年月骨身を碎き漸々尋逢た物、心強ふ去なそふとはそりや胴慾じや〳〵、ヱ、聞へませぬはいなア　ヱ、其恨は道理ながら、今も今とて言通り身のいたづらで此樣に落ぶれ果體形、どふマアそれと名乗られふ私が心の悲しさを、思ひ遣つて必らず叱つてたもるな誤つた」と縋り歎けば「ヲ、何のマア叱りませう、假令どのやうにお成なされても、廻り逢たが私や

嬉しい、とは言物の是は又、あんまりな落ぶれやう、日頃の辛苦が思ひ遣られて、私や〳〵此胸が裂るやうにござりますはいのふ、シタガコレお氣遣なされますな、私が產の親吉部三郎兵衞と云人小夜の中山の邊にながらへて居さんすとの事、肌身放さぬ守り刀それを證據に廻り逢、阿曾次郎樣の在處を尋ねきつとお逢せ申ませよ、ガ何をいふても爰は街道、宿ある方へ急がん」と泣入深雪をいたはりて、立上る折こそあれ、夜道ほか〳〵輪拔吉兵衞、よい事がなと蚤取眼一人が素振物ぐさしと傍へ立寄提燈の火影に深雪が顏打眺め、「ヨッわりや何日ぞや摩耶の婆に百兩で直を極た娘、何時の間に亂て隱れにはなり居つたぞい然し醫者にかけたら治らぬ事もあるまい何分元手入らずの勝負物ドレ拾ふてやろ」と手を取を淺香は引退氣色を變へ、ヤア女と思ひ慮外仕やると赦しはせじ」と杖押取、仕込し刀拔かくる其手を押へて、「ムハヽヽヽこりややい輪拔吉兵衞といふてな日本國を股にかける人買商賣鰹掻ひねくり廻してもびくともする男じやないはぼろその下つた亂れせふより賣れて絹のべゞ著いと、てうける詞聞かねて、「イヤ推參な勾引見事賣なら賣て見や」と拔放して切込刀さしつたりと身をかはし、「もふ百年目」と輪拔

○小夜の中山　[illegible]との間。この地[illegible]てゐる。
○ほか〳〵　[illegible]副詞
○蚤取眼　[illegible]近松作「[illegible]
[illegible]
○物臭し　何事かありげな怪しい。胡散「うさん」
[illegible]
○亂れて　[illegible]を「みだれ」[illegible]「みだれ」は大坂詞、[illegible]
○隱れ　消え失すこと。隱れ者。
○慮外　[illegible]
○股にかける　諸方を歩行して股へてゐるをいふ[illegible]女護
島はご奉公人を抱へる」。
○鰹掻　[illegible]
○ぼろそ　襤褸衣。ぼろぎもの。
○べゝ　衣服をいふ小兒語。蓋し着物はべら〳〵
なるもの故、その頭音「べ」を躍らした語であらう。
○てうける　ざれたはむれる。おどける。ふざ
ける。
○推參　[illegible]
○かどはかし　誘拐者。「かごはかす」は勾引す、
誘拐す、小兒女子などを盜んで連れ去るをいふ。
○さしつたり　心得たり。（見索引）
○百年目　運命の極まる時の意。（見索引）

も、同じく旅差拔放し、「觀念せよ」と切結ぶ、深雪はあせれど盲目の何と詮方並木原、二人は打合ふ月明り爰をせんとぞいどみあふいかゞはしけん輪拔が石に躓き眞逆樣轉ぶを得たりと起しも立ず肩背も分らぬ滅多切、さしもの惡者七轉八倒のた打廻つて死たるは心地よくこそ見へにけり。淺香はしつかと留めの刀、「サア、〳〵嬉しや深雪樣、惡者は爲留めました」と、いふ内よりも心のたるみ其儘そこに倒れ伏、深雪は怖々さぐり寄り、いたはる手先にしたふ生血「ヤア〳〵〳〵其方も手疵負やつたか、なふ悲しや」と抱かゝへ、「淺香いのふ〳〵」と、聲を限りに呼生れば息吹返し目を開き、「ヲ、深雪樣お身に怪我はなかりしが」「イヤ〳〵私は何ともせぬが其方の手疵が氣遣ひな、氣を慥に持てたも」と、取付歎けば「ア、コレ聲が高い私はほんの摩傷氣遣ふ事はござりませぬ、カもしもの事が有た時は最前申た古部三郎兵衞といふ人に此守りを證據に廻り合、今宵の譯をお話し有て何かの事をお賴みあれ必お忘れ遊ばすナヤ、誰も見ぬ内お出」と刀を納め深雪が背に、負すも涙降る三味のいつか昔に、海老尾、いとど縺るゝ心をば、轉じかへても手疵の、痛み、盲目ならぬ、我身さへ杖を力に立上り、女心も張つめし、弓張月の夜

○旅差　旅行用の刀。
○觀念　あきらめ。覺悟。
○せん　詮。極み。せときは。大切。
○起しも立てず　起き立つ餘裕もあたへず。
○のた打つ　ねがへりをうつ。輾轉反側。（見索引）
○爲留む　討ち果す。殺してしまふ。
○したふ　慕ふ義。離れにくく思ふ意より轉じて、附着する。
○い　添ひ加はつた音。
○が　「か」とあるべき所。
○手疵　鬪に負うた疵。手負、負傷。「手」は「かすりて」（摩傷）の「て」と同じく疵の意にいふ。
○カ　「が」とあるべき所。
○守り　守り刀（短刀）をいふ。この事は、（十四）宿屋の段其の二の終りの少し前に詳しく出てゐる。
○かへらうび　海老尾（かいらうび）に歸らうをいひかく。海老尾は、三味線の頭部（糸卷の上）で、海老の尾の如き形となつてゐるものの稱。
○轉じ　心を轉じ卽ち氣をかへるに、轉手（てんじゆ）をいひかく。轉手は糸卷又はねぢともいひ、三味線の頭の所に貫いて絃を卷きつける棒。

中の鐘、盡す忠義の一筋道伴ひてこそ急ぎ行

（十三）宿屋の段（島田驛宿屋）其の一

登場人物の主な者

戎屋徳右衞門（旅舍の主人）　萩野祐仙（藪醫者）　岩代多喜太（大内義興の奸臣）

駒澤次郎左衞門（大内義興の忠臣）

梗概

駒澤次郎左衞門は歸國の途次、島田驛の定宿戎屋徳右衞門方に泊るので、萩野祐仙はその前日から逗留し、岩代多喜太と相談して駒澤を毒害しようとし、毒藥を鐵瓶の中に入れた。陰で之を見てゐた徳右衞門は、駒澤の身に誤ちがあつては相濟まぬと思ひ、窃かに鐵瓶の湯をかへ笑ひ藥を入れて誤魔化し、駒澤に對つて「飮食物にお氣を付けあそばせ」と言つた。此の言葉がぎくりと胸にこたへた岩代、萩野は、之を聞き咎めて口論となる。

祐仙は「若し鐵瓶の湯に毒がなかつたら、徳右衞門め赦して置かぬ」とて、毒試する前に窃かに解毒の丸藥を嚥んで、鐵瓶の湯を飮んだところ忽ち笑ひ藥が利いて、どうしても笑ひが止まぬ。多喜太の惡巧みはすつかり外れ、不機嫌ながら座を起ち、徳右衞門に風呂場の案内をさせる。駒澤は小首を傾げて奥座敷に入つた。（これから名高い「宿屋の段」其の二となる）

（十四）宿屋の段（島田驛宿屋）其の二

登場人物の主な者

駒澤次郎左衛門（もと宮城阿曾次郎といひ、大内家の重臣）　岩代多喜太（駒澤次郎左衛門の相役。奸臣）　深雪（岸戸の家老秋月弓之助の息女）

戎屋徳右衛門（島田驛旅舍の主人。淺香の父）　關助（秋月家の忠僕）　笹久藏（岩代多喜太一味の惡漢）

お鍋（戎屋の下女）　川越大勢

梗概

駒澤次郎左衛門は、嘗て宇治に遊んで深雪と契つた時、形見に與へた朝顏の今様歌が衝立に張つてあるのを見て驚き、亭主を呼んで其の仔細を聞き、朝顏の女といふを呼ばせた。その女は紛れもない深雪で、下女のお鍋に連れられて座敷に出で、しとやかに會釋して、夫を慕ふ聲もあはれに、琴に合はせて朝顏の唱歌を謠つた。が盲目の悲しさは其の愛人が目の前に居るとも知らず、また次郎左衛門も人目を憚つて名乘らないで別れる。後、自分を殺さうとした笹久藏を斬棄て、深雪に與へる品を亭主に頼んで殘し、暇を告げて出立した。

深雪は其の後清水屋に呼ばれて往つたが、蟲の知らせか、戎屋の客は若しや我が愛人ではなかつたであらうかと、しを〳〵として跡戻りする。そして亭主に逢うて、その客は阿曾次郎樣であつたと聞いて仰天し、矢も楯もたまらず、折から降りしきる大雷雨を物ともせず、驀地に倒けつ轉びつ跡を追うて、大井川岸へ駈付けた。

大井川は次郎左衛門の一行が渡つた後、水音高く濁流と變じ、川留となつた。深雪は川に臨んで恨めしげに天を仰ぎ、不仕合を嘆いて入水しようとする　折節關助、徳右衛門の兩人が駈付けて抱留めた　徳右衛門は深雪の祖父の恩顧を蒙つた者であり、又我が娘淺香が深雪の乳母となり、身を棄てて忠節を盡したことを知つて喜び、自分も忠節を盡すはこの時と自刃する。その鮮

血に次郎左衞門が與へた目藥を混ぜて深雪に飲ませると、深雪の目は奇蹟的に忽ち開き、蟻の這ふのも見えるやうになつた。

評

深雪が昔、宇治の川遊の樂しかつた時は束の間で、引續く煩悶に變り果てた身となり、今は大井川岸で、肝を刺し腦を碎かんばかりの憂思に沈む。然も愛人を慕ふ心は終始一貫し、遂に其の眞心天に通じて、救の手が伸びつゝある。

この段は此の悲慘な運命を開拓する、純眞な愛の力が巧に描いてある。そして艱難に遭うて必らず之を克服し、轉禍爲福の成果を收める我が國民性を、深雪なる一婦人によつて如實に描寫してある。

宿屋の段（其の二）

何國にも、暫しは旅と綴りけん、昔の人の、筆の蹟徒然侘る假の宿夜の襖の隙もりて風に、瞬く燈火の影も淋しき奥の間へ、立歸る次郎左衞門、何心なく座をしめて、ふつと目に付衝立の、張交せの歌讀下し、「テ心得ぬ此張交せにある地紙の歌は、先年山城の宇治にて秋月が娘深雪が扇に某が、又逢迄の形見にと書て與へし朝顏の歌、其後計らず明石にて、船掛りせし其砌琴に合して深雪が節附、折節思はぬ互の出船、飽かぬ別れを悲しみて女の手づから我船へ、投込し、此

○宿屋　遠州志田郡大井川の東、島田驛の旅舍或屋。
○何國にも暫しは旅　[illegible]の假りの世なれば、いづくに住んでも暫しの旅の宿である。「新古今集」卷十八・雜歌下部、西行法師の歌に「いづくにも住まれずはたゞ住まであらむ柴の庵のしばしなる世に」
○昔の人　西行法師
○侘る　淋しう暮す。
○襖　襖障子の略。唐紙障子。
○テ　「[illegible]」とあるべき所。
○地紙　[illegible]、其の形に裁つた厚紙。[illegible]地紙。
○宇治　宇治で、[illegible]深雪の扇に[illegible]の歌を書いて與へたことは、宇治の段に見えてゐる。
○明石　播州明石。[illegible]、明石の[illegible]見えてゐる。
○船掛り　[illegible]。

扇、然るに今又此家にて思はずも此張交ア何者が諷ひ傳へて、計らず東の驛路に、見るも不思議」と、獨言其折柄の懷ばれて眺め入たる時しもあれ、襖押明德右衛門小腰屈めて入來れば、此方も扇押隱し、「ヲヽ亭主先刻は扨々きつい働き危き難を遁しも全くそちが志、サヽ是へ〳〵」、「ハヽ冥加に餘る御詞、ヱヽ最前此方へ參る砌何か三人ひそ〳〵咄し、合點行ずと忍び聞けば痺藥を茶に交てあなた樣へ差上んとのア、コリヤ、サア恐ろしい工みヱヽ憎さも憎し、直ぐに申上ふと存じたれどそれではどの樣な科人が出來ふも知ぬと存じ、へヽ幸先日慰に求ました笑ひ藥、ヤコレ幸と痺藥と取替へたを、知ずに呑だ先刻の仕儀此後とても旦那樣、御油斷はなりませぬぞへ」、「ホヽ其儀は某もとく承知致したマそれは格別、此衝立に有朝顏の唱歌は何人の手蹟どふいふ事からお身が手に入しぞ」、「ヱヽそれでござりますか其歌に付てア哀れな話しヱヽ、元は中國邊歷々の娘ぞふなが何やら尋る人が有とて、親許を家出しそれより方々と流浪して果はとふ〳〵目を泣潰し、跡の月迄は濱松邊に其歌を諷ふて袖乞、所に又國許から、所縁の女子が尋て來て逢ました、ガ其女子も程なう病死夫から又一人ぼし此邊迄其歌を諷

○冥加に餘る　忝かたじけなさが身に過ぎる。過分に有難い。
○仕儀　事のありさま。なりゆき。
○油斷　ぬかり。この語は「涅槃經」卷二十二に「王敕二一臣一持二一油鉢一、經由中過莫レ令二傾覆一、若棄二一渧一、當レ斷二汝命一」とあるより出た。
○格別　取分けて注意致す。
○話し　話「はなし」がござります。
○歴々　身分家柄格式などの高きこと。秋月家は藝州岸戸の家老なれはかくいうた。
○さうな　らしい。
○とふ〳〵　到頭「たうとう」であらう。遂に。
○跡の月　去月。前月。
○濱松　遠州濱松。
○袖乞　托鉢僧が袖に鉢を載せ、米錢をこふをいひ、轉じて、乞食、物貰ひ。
○女子　深雪の乳母淺香をいふ。
○一人ぼし　獨り法師「ぼふし」。ひとりぼつち。

ふて歩きましたが何が盲目でこそあれ器量は好し、聲は好し、見る程の者がいぢらしがり、朝顔〳〵と言ふて其歌を、知ぬ者はござりませぬ、私も餘りの不便さに、此宿に足を留させ、今では宿屋〳〵のお客の※伽何とマア、不仕合せな者も有物でござります」と、※涙片手の物語りも心にひし〳〵こたゆる駒澤、もし言交はせし我妻かと、轟く胸を押鎮め「ムヽ夫は扨哀れな話し、身も今宵は何とやら物淋しい、欝散の爲其女を呼寄る事はなるまいか」、「イヤモ何が扨お安い事、只今呼遣しますお慰みに琴か三味」、「ムヽ何分よきに頼み入」と、云は仔細のあるぞとも※知らぬ佛徳右衛門尻輕るにこそ立て行、跡へ相役岩代多喜太のさ〳〵と座に直り「コヤ駒澤氏嘸御退屈でござらふ」「コレハ〳〵岩代氏殊の外※お早い事でござる」と、上には解けても解けやらぬ前垂掛けの下女お鍋次の間に手を支へ「申〳〵只今朝顔殿が見へました、是へ通しましよかいな」、「ナニ朝顔とは何者」、「アイヤ此道中で琴三味を彈旅の徒然を慰さむる※瞽女とやら拙者も何か物淋しうござれば、ちと琴でも聞ふと存じ、亭主を頼呼寄ましてござる」、「アイヤそりや止になされい」、「トハ又何故な」、「サレバサ先刻身共が※知音たる萩野祐仙※同席いかゞと云はれた貴

○いぢらしがり　いたはしがり。不便〔ふびん〕がり。[illegible]
○伽　話相手となつて徒然を慰めること。
○涙片手　涙の出るを片手で拭ひながら。
○知らぬ佛徳右衛門　[illegible]
○[illegible]　[illegible]
○お早い　[illegible]
○ごぜ　[illegible]
○知音　知己。親友。知人。「列子」に「子期（鍾子期）といひ、伯牙の彈く琴の音を能く聞分けた親友）死、伯牙絶ﾚ絃、以無ﾆ知ﾚ音者ﾆ」とあるより出づ。
○同席いかゞ　不届者の萩野祐仙と同席するは賛同しかねる。

○茶箱　萱野清傳が茶に書簡を入れて、駒澤次郎左衛門に送つたことに事があるので、その當操にあてこすり。

○竹篦返し　よからぬ仕向を受けて直ちに仕返しをすること。

○無慙　慙を知らぬこと、轉じて、いたはしいこと。

○鳥　人を鳥に喩へていふことはその例が多い。

○木曾の丸木橋　「國花萬葉記」卷十一、信濃國名所の條に、「木曾の掛橋上松（あげまつ）と云宿より福島宿へ越る間也、木曾のかけぢの丸木橋ともよめり」で、ここの文は「危き」の同韻「木曾」につゞけ、又、歌枕の丸木橋を出し、「渡り苦しき」とつゞけた修飾である。

◇深雪の言葉に哀れが深い。そして何ものも讓すことのできぬ愛の力の强さを見る。

○おはもじ　「おはづかし」の文字詞。文字詞は、足利時代の末期、朝廷に微にして供御の物備はらない爲に、女官等が其の物の名をいふを忌んで或文字といふ隱語から起つた。

○せぐりくる　塞「せ」き苦しくなる義。胸塞りこみあげるをいふ。近松作、「嫗山姥年代記」に「言はんとすればせくり來る、涙に聲に先立ちて」。

○うせた　「おはせた」が「わせた」と訛り、更に「うせた」と轉じた卑語、近松作「曾根崎心中」に「德兵衞めがうせ、まついかいさまに言うても必らず誠にしやるなや」。

殿乞食をば座敷へは通されまいかい」、「ハテ高の知れた盲目女まんざら怪しいナ ソレ茶箱も持參致すまい」と、竹篦返しにぎつくりと、言句に詰れど減らず口、「左程御所望ならば兎も角も然し座敷へは叶わぬ庭へ呼出し琴なと三味なと彈し召れて早く此場を追返されよ」と、飽迄意地持つ佞者、寄らず觸らず駒澤が、指圖にお鍋が心得て「朝顏殿召ますする朝顏殿〱」と、呼立る無慙なるかな秋月の娘深雪は身に積る、歎きの數の重りて塒失ふ目無し鳥、杖柱とも賴てし、淺香は脆く朝露と消殘りたる身一つをさすがに捨も緣先の飛石探る足元も危き木曾の丸木橋渡り、苦しき風情にて漸坐して手をつかへ、「召ましたは此お座敷で御座りますか、拙い調べもお笑ひ草、おはもじ樣や」と會釋する、顏も深雪がなれの果、不便の者やとせぐり來る、涙呑込控へ居る岩代はそれとも知らず「ヤア見苦しい其樣で、我々が目通りへうせたは、聞及んだ朝顏めな、ヱゝきり〱立て失せ居らふ」、「アイヤ岩代氏そふもぎどうに仰られな、此方に呼寄たればこそ思ひがけのふ、アイヤ思ひがけ無ふ來た物を叱るは武士の情にあらず、コリヤ女、大儀ながら其朝顏とやらの歌、サゝ早く諷ふて聞かせい」と望む心は千萬無量知

○きり／＼　早速。さつさと。（見索引）
○もぎどう　邪慳。不愛想。（見索引）
○思ひがけ無ら　この句を重ねて言ふところ意味深長。
○筑紫琴　箏をいふ。宇多天皇の時筑紫の石川色子といふ人が、豐前國彥山で異國人からその技を習ひ傳へたといふので、この名がある。
○斗爲巾　箏十三絃の中で、第十一絃を斗、第十二絃を爲、第十三絃を巾といふ。[illegible]卷六、箏の條に「今案箏譜云、一二三四五六七八九十斗爲巾、[illegible]名也」
•八つ橋　[illegible]八つ橋流。ここの文は「八つ橋のやつれ」と、頭の韻を合はせた頭韻法。
○爪調べ　琴などを彈くに、まづ調子を調へ試みること。
○露の干ぬ間の　降れかし　岡山藩士[illegible]の作つた今樣歌で、あるの。朝露に匂ふ朝顔の花を日光が照らして乾かしまうすは無情であるから、嗚呼一夕立のはら／＼と降れよ、さすれば花も萎まないからといふのであつて、[illegible]の意である。
◇次郎左衛門は無量の感慨を抑へてよそ／＼しくするが、彼の心中[illegible]に流れる涙を催すのであらう。
○卯月　陰曆四月
○辰巳　[illegible]の歌に「都の辰巳しかぞ住む世をうぢ山」

らぬ岩代面脹らし「扨々駒澤氏にはイヤモきつい御執心、コリヤ／＼盲目、何なりともヱ、諷へ／＼サヽ早く／＼」「ハイ／＼／＼諷まするでござります」と、焦る夫の在るぞとも、知らぬ盲目の探り手に、戀故心盡し琴、誰かは憂を斗爲巾の、絃より細き指先に差す爪さへも八つ橋の窶れ、果たる、身を託ち、涙に曇る爪調べ、「露の干ぬ間の、朝顔を照らす日影の强顔さに、あはれ一村雨の、はら／＼と、降れかし」「ムヽ夫を慕ふ音律の我々が、身にも思ひ遣られて思はずも感涙致した、のふ岩代殿」「いか樣、琴といひ器量といひ、イヤモ中々感心仕る、イヤナニ朝顔とやら其處は定めて冷へるであらふ、身どもが傍で今一曲サア／＼所望だ／＼」、「アイヤ岩代殿もふ赦しておやりなされい」「さりとては駒澤氏身どもが望むを止さつしやるは、ソリヤ意地の惡いと申もの」「イヤそふではござらねど彼も定て勞れませふと存て」、「ハア、然らば曲は止にしてコリヤ／＼、女そちも腹からの非人でもあるまい身の上話しも又一興話して聞せ、サヽどふだ／＼」「ハイ／＼、よふ問て下さります、お詞にあまへお話し申すも恥かしながら元私は中國生れ、樣子有て上方住居過し卯月の中空に都の辰巳宇治の船焦れ寄る盡の

○澪標　澪之串の義。「みをじるし」ともいひ、河海中の淺い所で、船の通じ得る水路となつてゐる深み（即ち水脈）を示す爲に立てるしるしをいひ、「難波の澪」にかけていうた。（澪標は今大阪市の紋章となつてゐる）。
○風待　船を泊めて追風の吹くを待つこと。
○逢坂の關　近江國滋賀郡大津の南、逢坂山にあつ、所謂三關の一つ。延暦遷都以來重要の地となつた。初めの關は廢されたのは延暦十四年であるが、事ある毎に兵を關址に備へ、文德天皇の時再興し、其の後屢ゝ興廢があつた。
○文色　あやめ。けぢめ。いろかたち。
○テ扨哀れ　立歸れ　岩代の詞。
○男日照　自分の望む男の少いこと。西鶴作。「好色一代女」卷一に「この國も都の町に男日照はせまじ」。
。しゆんだ　「浸しみた」の訛。全身に浸潤するをいふ。心にしみわたつて沈みがちな。
○大儀　他人に對して骨折を慰勞するにいふ辭。御苦勞。この所は駒澤の詞。
○心は跡　ここの文は、身は前へ道を探りながら行けども、心はうしろにひかされる意。

螢狩に思ひ初たる戀人と、語らふ間さへ夏の夜の、短い契りの本意ない別れ、所尋る便さへ、思ふに任せぬ國の迎ひ親々に誘はれ難波の浦を船出して身を盡したる憂思ひ泣て明石の風待に、偶然逢は逢ながら、强顔き嵐に吹分られ、國へ歸れば父母の、思ひも寄ぬ夫定め、立る操を破らじと屋敷を拔て數々の憂目を凌ぎ都路へ上つて聞ば其人は東の旅と聞悲しさ、又も都を迷ひ出何時かは廻り逢坂の關路を跡に、近江路や、美濃尾張さへ定めなき戀し〳〵に目を泣潰し、物の文色も水鳥の、陸にさまよふ悲しさは、いつの世如何なる報ひにて重ね〳〵の歎きの數憐み給へ」と計にて聲を忍びて歎きける。「テ扨哀れな話し、併し男日照もない世界に、エヽ氣の狹い女だな、イヤもふしゆんだ話しで氣が滅入つた、寢酒でもたべ氣を晴そふ、イヤナニ女暇をくれる立歸れ」、「ハイ〳〵有難ふござります、左樣なればお客樣、もふお暇申ます」、「ヲヽ朝顏とやら大儀であつた初て聞た身の上話し、若其夫が聞ならば嘸滿足に思ふで有、ノウ岩代殿」、「左樣〳〵」、「ハハア是はマア御深切なお詞、有難ふ存じます」と、杖探り取ながら、蟲が知らすか何とやら耳に殘りし情の詞、名殘惜さに泣々も、心は跡に探り行折しも奥より

○七つ　午前四時。

○旅硯　旅行に攜へる小硯。矢立の硯など。

○曲者　わるもの。（見索引）

○不敵　大膽不敵。

○ひろげ　人を罵るとき、「せよ」「おこなへ」の意にいふ。

○取なり　刀を取るやすぐに。「なり」は「いきなり」などの「なり」と同じ語。さすがは武士の立派な覺悟。仕入問屋の身分すて了藤では無理もない。

○手の内　手腕。てなみ。（見索引）

○飛んで火に入る夏の蟲　自ら求めて禍を取る喩にいふ諺。「法苑珠林」に「如飛蛾見火投」。

若侍、「最早餘程深更に及び候、御兩所共に早お休み」、「いか樣明日は正※七つの出立、イザ駒澤氏お休みなされぬか」、「イヤ拙者は今暫し用事もござれば、お構ひなく先お先へ」、「臥せらふ御免下されふ」と、立上りしが胸に一物心を跡に奥の間へ伴れてぞ入にける、行間遲しと駒澤は手を打鳴し女を呼、「コリヤ／＼徳右衞門に急々對面したし、呼でくりやれ」と、言付やり※旅硯の墨磨流し、以前の扇押開いて、何か書付用意の金子藥の包み、取認る目の先へ、疊を貫く白刄の切先氣轉の駒澤有合微溫湯、刀に注げば血汐と心得してやつたりと緣の下、壁踏破り顯れ出る笹久藏「※曲者やらぬ」と次郎左衞門投打茶碗の目潰し辟易きながら※不敵の久藏「覺悟※ひろげ」と切付る刄を恐れぬ扇のあしらひ、廊下傳ひに來かゝる亭主、コハ何事と窺ふ内難なく刀打落し、※取なり切なり途端の拍子首は遙に飛散つたり思はず知らず徳右衞門「ヤレ天晴御※手の内シタが此奴何者でござります」、「ホヽウ某を欺し討にせんと※飛で火に入夏の蟲、ハヽヽヽ死骸はよきに賴み入」、「ハヽア お氣遣ひなされますなガ只今召ましたは何の御用でござります」、「ヲヽ徳右衞門、折入て賴み度は、先刻の朝顏といふ女今一應呼寄て給るまいか」、

○七つ　午前四時。（既出）
○緣の　緣結びの神に見放されたかと、胸にあまつて知らず〳〵口走りかけたのである。
○衣服繕ひ　衣服の折り目を正すをいふ。
○そぐはぬ　添ひ合はぬ。似合はぬ。
○意地くね　意地くねりねぢけたこと。
○座敷　深雪方の座敷。

「ハイ畏りましてはござりますが、彼は直に清水と申方へ參りました、御用事ならば呼には遣はしましよふが、エヽどふで今夜はお間には」、「ムヽハテ殘念至極身は正七つの出立、マよく〳〵緣の」「エヽ何と御意なされます」、「イヤナニ德右衞門今の女に謝禮の爲、此三品を其方にしつかりと預置間朝顏が參らば渡してくりやれ」、「ハイノ〳〵コリヤマア夥しいお金其上結構な女子扇お藥迄も」、「ヲヽサ其藥は大明國秘法の目藥、甲子の年に出生せし、男子の生血を取て服すれば、如何なる眼病も即座に平癒、朝顏に渡してくりやれ」、「コレハ〳〵何から何まで、心を籠められた下され物參り次第相渡し悅ばしましよ」と、受取折しも、時計の七つ、「ムヽアリヤそふ七つの刻限」と數ふる内に岩代多喜太、裝束改め旅出立、同勢引連立出て、「イザ駒澤氏出立仕らふか」と、勸る詞に次郎左衞門衣服繕ひ立出れば見送る亭主が暇乞、心そぐはぬ駒澤・岩代打連てこそ出て行、跡見送つて德右衞門「ハアヽ同じ侍でも黑白の違ひ意地くね惡ひ岩代に引かへ、情深い駒澤殿、アヽ天晴の侍じやなヤ、それはそふと朝顏に今夜の禮にはそぐはぬ下され物、ハア何ぞ樣子の有そな事」と、思案の折から、深雪は何か氣に懸り、座敷仕舞ふ

てう〳〵と又立返る切戸の内、徳右衛門目早に見て「ヲヽ朝顔か、遅かつた、宵のお客様がも一度呼にやつてくれいとおつしやつたれど、清水へ往たと聞た故お断申たれば今の先お立なされた、併マア悦びや大枚お金と扇、又結構な目薬迄、汝が身にやつてくれいとお預なされたはいの、「是は冥加に餘る事、お禮申さいで殘り多い、ガ申々旦那様此扇に何ぞ書てはござりませぬか、ちよつと見て下さりませ、「ヲヽドレ〳〵、ヱヽ金地に一輪朝顔露の干ぬ間が書いてある、裏に宮城阿曾次郎事、駒澤次郎左衛門と書て有ぞや、「ヱヽアノ宮城阿曾次郎事駒澤次郎左衛門と其扇に、「ヲイノ「ハヽアはつ」と計に俄の仰天、「ヱヽ知らなんだ〳〵知らなんだわいな、道理で能ふ似た聲と思ふたがそんならやつぱり阿曾次郎様で有たか、申々旦那様其お客様は何時お立なされたへ」、「ヲヽ今の先の事じやが汝が身は又お馴染か」、「ヱヽ馴染ぬ所か年月尋ぬる夫でござんすはいな、斯いふ内も心がせく、追付てたつた一言」と、行んとするを引留め「アコレ〳〵マアヽ〳〵待々待や、ヱヽ折惡ふ雨も降出し此暗いに一人はあぶない〳〵」「イヱ〳〵〳〵假令死でも厭ひはせぬ」、「サヽヽヽそれはそふでも盲目の身ではあぶない〳〵」、「イ

○切戸　一片の扉を附けた戸で、四つ目垣などある庭の小門などに用ひるもの。

○大枚　金高の多いこと。「俚言集覧」に「今の俗語にたいまいの金といふは古へ餅銀の大なるをいひたる詞の遺れるなり、後拾遺往生傳に作二大枚餅一と見えたるを證すべし、是則餅銀の事を云へるなり、云々」

○一輪　一花(ひとはな)。

○露の干ぬ間　朝顔の今様歌の句。(既出)

◇佳人朝顔の悩むいぢらしい心を思ひ遣るも亦涙ぐましい。

ヤ放して〳〵」と突退刎退杖を力に降雨も、いつかな厭はぬ女の念力跡を、慕ふて、追て行、

地名に高き街道一の大井川、篠を亂して降雨に打交たる霹靂、漲る落る水音は物凄くも又、フシすさまじく、地夫を慕ふ念力に道の難所も見へぬ目も、厭はぬ深雪が倒けつ轉びつ漸く爰に川の傍、詞「ノウ川越達駒澤次郎左衛門樣といふお侍、もふ川をお越なされたか未か聞して聞して」と、地いふ聲さへも、息切の、地聲に川越口々に、詞「ヲヽ其侍は今の先渡つた、ガ俄の大水で川が留つた、笑止〳〵」と計にて皆散り〳〵に行過る、「ヤアナニ川が留つた、地ハヽア悲しや」と張詰し、力も落て伏轉び前後不覺に、泣けるが、地又起直つて見へぬ目に、空を睨んで、詞「天道樣ヱヽ聞へませぬ〳〵わいな此年月の艱難辛苦も、どふぞも一度其人に、逢して給べと片時も祈らぬ間とても無いものを、今日に限つて此大雨川留とは〳〵、ヱヽ何事ぞいの、思へば此身は前の世で、如何なる事を罪せしぞ扨も〳〵、地味氣なきフシ焦れ焦れた其人に逢ても知らぬ盲目の、此目は如何なる惡業ぞや夫の跡を戀慕ひ、石に成たる松浦潟領巾麾山の悲しみも、身に較ぶれては數ならず三千世界を尋ても

○いつかな　いか(如何)な。どうであらうとも。

⦿大井川　駿河・遠江の國境を南に流れて駿河灣に入つてゐる大河。

○篠を亂す　篠笹を亂して散すが如き猛烈な大雨を形容した句。

○はたゝがみ　はたゝく神の義。雷鳴。

○漲る　「漲り」とあるべきところ。

○川越　人を肩又は蓮臺に乘せて川を渡す雲助をいふ。⦿「大井川」を見よ。

○川が留る　川留めとなるをいふ。「かはどめ」とは、大井川が大水の時徒渉を禁じたことをいふ。⦿「大井川」を見よ。

○笑止　氣の毒。（既出）

○川留　「川が留る」を見よ。

○惡業　惡しき業報〔ごふはう〕。前の世で惡い事をした其の報い。

○松浦潟領巾麾山　欽明天皇の朝、松浦佐用姫が大伴佐提比古〔おほともさでひこ〕と別れるを悲しみ、高嶺に登り離去の船を望んで領巾を脱いで麾〔さしまね〕き、遂にその所の石となつたといふ。領巾麾山は肥前國松浦郡濱崎村の西南、鏡村の東端をいふ。⦿「まつらさよひめの石になり」を見よ。

○較ぶれ　「較べ」の誤か。

○數ならず　ものの數ならず。論ずるに足らず。

○三千世界　あらゆる世界の意。（既出）

○流涕焦れ歎く　涙を流し思ひ焦れて歎く。
○業因（ごふいん）　身・口・意による一切の所業は、未來に善惡の果を感ぜしむる因種となるものなれば、之を業因といふ。よつて又業報の意にいふ。
⊙三途　冥途にある川。
○弘誓の船　佛菩薩が衆生を濟（すく）はうとされる弘大な誓願によつて、衆生が生死の苦海を渡つて[illegible]彼岸に達するを、[illegible]人を渡すに喩へていうた文句。
○法の道　佛法の道。
○戀し小石　同音語を重ねた文飾。「妹背山婦女庭訓」第三に「戀し、小い、小石に括り添へ」。
○けしとむ　「けしとぶ」（消飛）の訛で、魂の消[illegible]がる。（見栄引）
○こなさん　こなたさん。お前樣。
○おのれ　强く感じた時にいふ感動詞で、「おの[illegible]」の「やれ」も感動詞。[illegible]詞から轉じたもの。「おのれやれ」の「やれ」も感動詞。
事の目前に迫つて猶豫のなりがたい場合に發する聲。

こんな因果が又と世に、有べきかは」と口説き立、拳を握り身を顫はし流涕焦れ歎きしは餘所の、見る目も哀れなりや、あつて起直り「ヲヽそふじや／＼、とても添れぬ身の業因、此川水の増りしは、所詮死との事なるべし未來で添を樂しみに、爰を※三途の岸と定め、※弘誓の船に※法の道、急がんもの」と、泣々も、夫を戀し※小石の數袖や袂に拾ひ込み「なみだ彌陀佛」（南無阿彌陀佛）の聲諸共既に飛んと其所へ「ヤレお待なされ深雪樣」と、聲に喫驚※けしとむ内馳來る關助。德右衞門、慌てし儘の徒跣足、斯と見るより抱留「マア／＼お待なされませ」「イヤ／＼誰かは知らねど放して／＼」、「マア／＼待しやれ朝顔殿、ヲヽ私も※こんな樣の身が氣遣ひさに走つて來た、コレ關助殿とやらが見へたぞや」「ハヽア下郎めでごはります」と、無理に手を取抱退ればば「ム、そふいふ聲は關助か、ハヽア、エヽ遲かつた／＼わいの、此年月艱難して、尋ね焦れた阿曾次郎樣に、折角逢たに盲目の悲しさ、それとも知らず別れたれど、どふやらお聲が氣懸り戾つて聞ばやつぱり其人、※おのれやれ追付ふと、跡追ふて來たれば此川留、エヽどふせふぞいのふ／＼／＼」、「ヲヽお道理だ／＼／＼、拙者めも貴女樣の行方を尋ね廻る内、一昨日の夜の夢に、淺香殿に逢、即貴女樣は

○シヤ　感動詞であつて、ハテナと感じた時に發する聲。(これにはあざける意はない)。
○すつての事　すんでのこと。既に及ばんとした事。もすこしのこと。(見索引)
○跡の月　先月。(既出)
○惡者　輪抜吉兵衛をさす。
○中山　遠州小夜(さよ)の中山(なかやま)。
○三代相恩　祖父・父・自分と三代にわたつて恩顧を受けてゐること。

島田の宿戎屋德右衛門方にござると言しやると思へば目が覺め、シヤ何でも不思議と夜を日に繼で參つた甲斐有てすつての事に危い所を、ヤレ〳〵嬉しや下郎めがお目に懸る上はお氣遣ひなされますな、駒澤樣に添せ申、併淺香殿は阪東順禮となつて東海道へ尋て見へる筈、ガお逢なされしかな」「サレバイノ、其淺香に跡の月濱松で廻り逢たが其夜惡者に出合數ヶ所の手疵死る臨終に私を呼中山の邊には私が產の親、古部三郎兵衛といふ人あり此守り刀を證據に尋行秋月弓之助が娘と名乘つて逢と敎へ可哀や遂に死にやつたはいの」「ム、スリヤ淺香殿には最期とや」、ホイはつと計驚く內始終聞入る德右衛門「ムヽそんならお前は秋月弓之助樣の御息女樣又淺香といふは我娘であつたか、ハヽア私事は其尋なさるゝ古部三郎兵衛と申者卽貴女樣の祖父秋月兵部樣に三代相恩若氣の誤り奧女中と忍び合、お手討になる所を弓之助樣に助られ、女諸共國を立退產落せしが女子の子貧苦の中に育る內二つの年に母は病死、男の手で育もならず伯母が方へ此短刀を添て養子に遣りしが廻り〳〵て思はずも親が命を助られし、秋月樣へ御奉公死でも忠義を忘れず導居つたか、ヲヽ出かし居つたな此上は深雪樣へ、三郎兵衛がお

土産」と、地件の短刀拔放し腹にぐつと突立れば、關助驚き押留、「コレ何で此方は此最期死でお役に立事か譯を聞して下され」と、いへば苦しき聲を上、「ヤレ歎かれな方々最前駒澤樣の物語唐土傳來の目藥、甲子の年の男子の生血にて服する時は、如何なる眼病も卽座に平癒との事、某甲子の生れなれば我血汐をもつて件の藥を調合し、早く貴女へお進めなされサヽ早〳〵」實もと關助用意の水呑取出し手負の血汐受留〳〵、泣入深雪が懷の妙藥取出し差寄れば深雪受取我夫の情に餘る賜物と、押戴き〳〵、只一口に呑乾ば、不思議や忽兩眼開き蟻の這ふ迄見へ透くにぞ深雪が嬉しさ人々も、悅び合ぞ道理なり、詞「アヽ嬉しや、最早此世に望なしいづれも、地「さらば」と刀引廻し、※吭の鏈を刎切て名のみ流るゝ大井川水の泡とぞなりにけり、地跡や枕に取縋りわつと計に泣深雪、※露の干ぬ間の朝顏も、開きし此目は※盲龜の浮木※優曇華の、花に勝りし夫の賜物二つには、我故此世に亡人かと取附歎くを關助が、慰に亡骸※手舁の輿早明渡る鳥の聲、※山田の惠彌勝り、茂れる朝顏物語末の、世迄も著るし

○吭の鏈　のどぶえ。「和漢三才圖會」卷十二に、咽喉は九節あつて、「吭有二結喉一、而咽喉管正中故與レ節同レ訓。至要之器、史記所謂扼レ亢而死者是也」とある。咽喉は九節あるによつて鏈というた。
○名のみ流るゝ大井川　身死して其の名後世に流れ傳はるを、流るる大井川にいひかく。
○枕　枕頭の意で頭をいふか。
○露の干ぬ間の朝顏　朝顏の女（深雪）が涙にくれて袖の乾く間もなき意と、熊澤伯繼の朝顏の今様歌の文句とをいひかく。
◉盲龜の浮木　値ひ（あ）ひ難く得難い機會の喩にいふ。
◉優曇華　三千年に一度咲く花であるから、極めて値ひ難い機會の喩にいふ。（見案引）
○手舁の輿　棺を載せ、手で舁いて行く輿。
○山田の惠　育てくれる田畑の恩惠。「山田」は山間の田の義、以て田畑の意にいふ。ここの文は、[illegible]の厚い恩惠によつて、培養されていやましに茂つやうに、[illegible]後世に知れ渡る意、[illegible]作者山田（山田案山子）をいひかけて、この作の末の代までも弘まるを祝つたのである。

（十五）返り咲吾妻の路草

登場人物の主な者

深雪（岸戸の家老秋月弓之助の息女）　關助（秋月家の忠僕）

梗概

深雪は奴關助を連れて駿州島田を出發した。恰も大難航の後に、目的の彼岸に輝く燈明臺を認めた時のやうに、はちきれる嬉しさを胸に抱いて愛人の後を追ふ。滿目皆笑む道中の景色に興じ、鄙歌を聞きつ歌ひつ、街道の宿々を經て、愉快な旅を續け、大阪の駒澤上屋敷をさして急ぐ。

（十六）駒澤上屋敷の段

登場人物の主な者

駒澤次郎左衛門（大内義興の重臣）　大内多々良之助義興（鎮西の探題。防長豊筑の太守）　岩代多喜太（駒澤次郎左衛門の相役。奸臣）

深雪（秋月弓之助の息女。次郎左衛門の愛人）　關助（秋月弓之助の忠僕）　駒澤三郎春次（もと祥一郎といひ駒澤了諦の子）

梗概

駒澤次郎左衛門の大阪の上屋敷では、新築の邸内を掃除して主人が東國からの歸りを待つてゐる。次郎左衛門より一足遲れて主君大内義興公が岩代多喜太等を引連れて立寄られた。其の日の暮方、深雪は關助を伴つて來り、次郎左衛門に逢つて嬉し涙に

袂をしぼりながら、久しい間難儀した事を語る。次郎左衛門も盡きせぬ縁を喜び、義興公の媒妁で婚儀を擧げた。

この時岩代は意地悪い言葉を殘して立去らうとすると、後から駒澤三郎春次が「大友一味の叛逆人多喜太動くな」と、一喝して現はれた。そして春次の申立てによつて岩代の罪狀明白となり、岩代は破れかぶれとなつて、關助と渡り合つて殺される。關助は功勞によつて祿三百石の侍に取立てられ、三郎春次は丁助と改名し、駒澤兄弟相共に扶け合つて君を補佐し、君臣水魚の交はりを結ぶ。かくて悪人滅んで國治まり、豐かな世となつた。

[illegible]

[illegible]

追考

一、本文の註の中に•印を附けた語句を摘出して詳解を施し、これらを發音假名遣によつて五十音順に排列した。

一、出典には其の書名を略記した。例へば「假名手本忠臣藏」を「忠臣藏」、「妹背山婦女庭訓」を「妹背山」とした類である。

間の土山雨が降る（忠臣藏）

「松の落葉」（元祿十七年刊）卷四、馬士歸に、「坂は照る照る鈴鹿は曇る、さきはいといふてはいどうし、間の土山雨が降る」。土山は近江國甲賀郡にあつて鈴鹿山の西麓に當り、鈴鹿越の舊驛である。間とは土山が甲賀山（大岡山）と鈴鹿山との間にあるからであらう。

青葉の笛（一谷）

今も須磨寺（福祥寺）の寶物となつてゐる。傳說によると、弘法大師が在唐中青龍寺で作つた笛に青葉が生じたので、歸朝後、嵯峨天皇に獻上した。天皇は之を青葉の笛と命名された。後にこの笛平家に傳はつて敦盛が所持し、一谷の陣中に携へたが、熊谷直實に討たれ、直實は敦盛の首とこの笛とを源義經の實檢に供へ、義經は伊勢三郎に命じて、笛を須磨寺に納めさせたものであるといふ。

赤膏藥（忠臣藏）

龍血で造つた血止め膏藥のことであらう。龍血は「さんとらにいによう」（羅甸語 Sanguis Draconis の訛）の譯語であつて、その粉末は鮮紅色を呈し、棕櫚科多年生植物の省藤の果實の樹脂から精製したもので、棒狀又は球狀をなし、椰子の葉に包んで賣出し、現今は顏料や齒磨製造の色付けなどに用ひられて、麒麟竭といふ。

往時關西地方で有名であつた赤万といふ膏藥は、裂傷などを治するに用ひられた。

朝夕に見ればこそあれ住吉の、岸の向ひの淡路島山（忠臣藏）

「瑠璃天狗」卷三に、「此歌は津守國冬の歌にて、新後拾遺集の雜の上に出て、下句『浦よりをちの淡路島山』とあり、これは拾遺集に出たる人丸の、『住吉の岸に向へる淡路島、あはれと君をいはぬ日ぞなき』といふ歌の詞を一つに覺え誤りて、『岸の向ひの淡路島山』といひ傳へたる也、さて此歌の心は、朝夕に見てゐればこそ珍しうも覺えね、此住吉の浦より遙に見渡す淡路島の景色は、何ともかとも言はれたる景色にてはなき物をと、淡路島の景色はいつ見ても見飽かぬといふ心なれば、今由良ノ助の引ていふ歌にては、心裏表にてあたらず、是は作者の誤り也」。

石火矢（忠臣藏・本朝）

「和漢三才圖會」に、「中華從來雖レ有レ之未レ精、至二大明一盛行、以爲二第一兵器一、凡砲石之玉、自二四五百目一至二四五貫目一、以二機巧一放出、謂二之石火矢一也」。

一森の長者が跡（妹背山）

一森は大和國磯城郡織田村箸中にある大市の森をいひ、箸墓のある所。「大和名所圖會」卷四、城上郡箸墓の條に「土人の諺に曰、昔此里に箸中長者といふ人あり、極めて富貴に暮しける、一度貧賤にならんと願ひしに、ある人敎へて曰、箸を日每にかへて新箸を用ゆべし、其願ひ成就せんといふ、長者敎への如く每日箸を捨てここに棄きしより箸塚といふとぞ」。

忌も明く（伊賀越）

忌明は產の穢れの終る日。出產から忌明までの日數は一定してゐない。「女重寶記」（元祿十五年刊）卷之三に「產のけがれ父七日、母は三十五

日なり」と見え、近松作「松風村雨束帯鑑」に「皇子やすやすと降誕あり、産の矢事・七夜の御賀、今日百二十日の御忌明」とあり、「俗居筆記」巻十四に「産忌（黒谷上人語燈録に、産の忌（いみ）いくかにて候ぞ、又忌（いみ）もいくかにて候ぞ、答、佛教には忌（いみ）といふことなし、世間には産は七日又三十日と申すげに候、いみも五十日と申す」とある。

いも （一谷）

ここの文に「サア取れいもよ。ヲツトいちかゝどれ取りやる。西國巡つてこれ〳〵」とある。「いも」は妹背の妹。「いちかゝ」は市嗅で、市姫「[illegible]」の顔を嗅と洒落ていひ、「いも」に對する縁語。また市姫の縁から佛様を聯想して「西國巡つて」といひ、西國順禮三十三番の札所にはいづれも圖を出すにより、それをきかせて圖を廻す洒落である。見るやうな石工が妹や市嗅ては腹を抱へさす。（註云、西國三十三番は觀音の札所。又俗に吉祥天辨財天を女神にし、[illegible]擬へられ、辨財天を市姫といひ、市を守る女神として信仰されてゐる。）

妹背山（いもせやま） （千本櫻・妹背山）

「妹背山婦女庭訓」には「定香が領分大和の妹山、清澄が領地紀の國背山」とある。現今妹背山と稱する山大和と紀伊と二ケ所にある。(1)大和なるは吉野郡上市の東にある丘陵であつて、吉野川の兩岸に水を隔てて相對し、その北なるを妹山、南なるを背山といふ。(2)紀伊なるは伊都郡にあつて那賀郡との境に近く、紀ノ川（吉野川の下流）の兩岸に水を隔てて相對し、その北（笠田町）なるを背山、南なるを妹山といふ。(3)或は又大和なる山を妹山と稱へ、紀伊なる山を背山と稱へたのであつたが、後世兩方何れも妹背山といふに至つたのだともいふ。「萬葉集」巻四、笠朝臣金村の反歌に、「後れゐて戀ひつつあらずは木の國の妹背の山にあらましものを」。

いんのこ （伊賀越）

「犬の兒」の訛。小兒を眠らさうとしていふ唄の中に出るのが多い。「貞丈雜記」に「小兒を抱きて夜中他行するに、紅指を以て小兒の額に犬といふ字を書く、之をいんのこといふ、犬の子といふ事なり、此の如くすれば魔除になり、狐狸類小兒をおびやかすことなしといふ」。

優曇華（うどんげ） （忠臣藏・本朝・朝顏話）

梵語「優曇鉢羅（Udumbara）華」の略。天竺にあるといふ想像上の樹の花で、三千年毎にはじめて花を開くといふ。若しこの樹に金花ある時は佛世に出るといひ、又轉輪聖王世に出ればこの花開くといふ。かかる所傳よりして稀に逢ふせのためしにいふ。「法華文句」に「優曇華者此云靈瑞、三千年一現、現則金輪王出」。「般泥洹經」に「閻浮提内有樹王、名優曇鉢、有實無華、若金華生者、世乃有佛」。

烏羽玉の（うばたまの） （妹背山・艶容・先代萩・彦山・太功記）

「記」「紀」「萬葉集」などには「ぬばたま」と見え、「古今集」より「うばたま」とも見え、「う」は「ぬ」の轉じたものである。「ぬばたま」とは射干（ひあふぎ）の實で、その黒きより總て黒いと聯想される類の「黒」「夜」「闇」「月」「夢」「髮」などの上に、「烏羽玉の」を冠らせてその枕詞とする。

梅は飛び櫻は枯るる世の中に、何とて松のつれなかるらん （菅原傳授）

「天神本地」（慶安元年刊）にもこの歌を載せて菅公の詠まれたものとしてあり、又近松の「心中天の網島」の文中にもこの歌に據つた所があ

るから竹田出雲の作歌でないことは明かである。「楊鴫曉筆」巻十九にも、菅公が「梅は飛び櫻は枯るる世の中に松ばかりこそつれなかりけれ」と詠まれた由見えて居れども、實は菅公の詠ではなくて後人の假託したものである。「玉かつま」巻九にもこの歌を論じて、源順の歌といはれてゐる「梅はとび櫻は枯れぬ菅原や深くぞ賴む神のちかひを」の歌をつくりかへたのかとも思はれるが、さて源順の詠といふこの歌も、本末かけあはず拙い歌であるというてある。

蝦錠（えびぢやう）（忠臣藏・伊賀越）

「和漢三才圖會」巻八十一、家宅之用・鎖鑰の條に「錠鎰ニ近世製精巧有二衛鎈車錠蝦錠之數品一、可三以固二戸及櫃箱等一、有二大小一、大抵方形長三四寸幅寸餘、匾而牝名二比都一、牡名二羽根一、嵌レ之稱二於呂須一、牡羽自擴而不レ脫、以レ鎰窄二其羽一則脫、京師作レ之爲レ良。」

遠州行燈（ゑんしうあんどん）（桂川・伊賀越）

「物類稱呼」巻四・器用の部に「江戸にていふ丸行燈を加賀にてまはし行燈といふ、津國にてゑんちやんどんといふ、是は遠州行燈の誤なり、小堀遠州侯の物數寄にて、制り始め給ひしと也」。

笈摺（おひずる）（平假名・阿波鳴門・朝顏話）

順禮者の背に著る一種の服であつて、羽織に似て袖なく、兩親在る者は兩側を赤地に、中部を白地にし、兩親無き者は兩側を白地に、中部を赤地にした。笈摺とは、笈を負うて背の摺れを防ぐ爲に著るより起つた稱であるといふ。一說に負簏であつて、昔旅行の時に簏（竹細工の匣）を背に負うたから、背に負ふ簏の義であつたのが轉じたのだといふ。

大井川（おほゐがは）（朝顏話）

駿河・遠江の國境を南に流れて駿河灣に入る大河であつて、川幅の廣い所は約七百九十六間ある。下流は昔から屢流域が變つた。德川時代にはこの川は海道一の要害として架橋渡船を禁じてゐたので、往來の旅人は必らず人足の肩に乘り、或は輦臺に乘つて渡涉した。其の人足（即ち雲助）を川越と稱して、兩岸なる島田・金谷に合はせて七百名も居り、川會所があつて之を管轄し、大水の時は徒涉を許さず、之を川留といふた。川留・川明は必らず島田驛にある駿府代官所出張陣屋及び江戸道中奉行に報告して、頗る愼重に取扱うたものである。

太田道灌が連ねし一首（本朝）

太田道灌が弱年の時に金澤山に狩をなし、驟雨に會うて六浦を過り、伏屋を訪うて蓑を借らうとしたが應ずる者なく、一少女あつて山吹の一枝を差出して微笑した。道灌には其の意がわからないので不機嫌で歸り、その事を家來の者どもに話したところ、年寄つた家來の一人が判じて、蓑なしといふ事だといふ。その故を問へば對へて言ふに、「古歌に七重八重花は咲けども山吹のみの一つだに無きぞ悲しきとあります」と言つたので、道灌大いに恥ぢて、これより歌道に志し、遂に奥旨を會得したといふ。

懸烏帽子（妹背山）

打懸烏帽子のこと。「貞丈雜記」巻三に「古打かけゑぼしと云ふは、折ゑぼしを小結もて、うづかけもかけずして頭におし入れて、後の針ばかりにてとめ置くをいふなり、これ無禮の體なり云々」。

嘉肴有りといへども食せざれば其味を知らず（忠臣藏）

「禮記」學記篇に「雖レ有ニ嘉肴一弗レ食不レ知ニ其旨一也、雖レ有ニ至道一弗レ學不レ知ニ其善一也」とあるに據り、天下泰平なれば忠臣義士も顯然たる忠義を立てられないで、世人に稱揚せられずに終へるに喩へる。

笠森のお仙（矢口渡）

蜀山人撰「増訂半日閑話」卷十二に、「谷中笠森稲荷地内水茶屋女お仙（十八歳）、美なりとて皆人見に行、家名鍵屋五兵衛といふ、錦畫の一枚摺或は繪草紙・双六よみ等に出る、手拭に染る、飯田町中坂世繼稲荷開帳七日之時、人形にも作りて奉納す、明和五年五月堺町にて中島三甫藏が臺詞に云、采女が原に若紫、笠森稲荷に水茶屋お仙と云々、是よりしてます／＼評判あり」。

鹿島の事觸（妹背山）

常陸國鹿島の神の神託と稱して、其の年の吉凶などを、神職の姿で春毎に各國に觸れ歩いた一種の物貰ひである。「人倫訓蒙圖彙」卷七に「事觸　毎年鹿島の神前にして行の事あり、神必ず人に託したまひて天下の吉凶を示したまふと、それを日本にあまねく告知らせけること此神官の役なり、然れば末世にこれを以て富雀のすきはひとなして、よいかげんにあらぬ事までたくみなして愚夫愚婦をたぶらかすとかや、了簡して聞くべし」。「鹿島名勝圖會」下卷に「事觸　古は禰宜のうち卜部の家あまたありて、年中の吉凶を卜ひて朝廷に奏聞せしとなり、……かかる卜法は今は絶えてなき古き事なるを、今の世の中に事觸と稱へて年の吉凶をいひ、何くれの虚言などいふは、かの上代の風を僞りまねびたるふるまひなり、この事觸といへるもの鹿島よりはふつに出でず、皆賤しき乞食どものしわざにこそ」。鹿島事觸の口上は、何れも多少異つてゐるけれども、形式は同じである。その口上は近松巢林子作の「用明天皇職人鑑」第四、又は「心中二枚繪草紙」などにも引用されてゐるから、ここに出てゐる「當年は辛の卯の年……無上禮法新兵衛嘉兵衛、拂ひ給へ清めて給ふ」とある文言と比較すれば、内容の酷似せることが知れるであらう。

哥舒翰（千本櫻）

「唐書」本紀第五に「辛卯（天寶十五年）蕃將火拔歸仁執ニ哥舒翰一叛降ニ于安祿山一、遂陷ニ潼關上洛郡一、甲午詔親征、京兆尹崔光遠爲ニ西京留守一、招討處置使一、丙申行在ニ望賢宮一、丁酉次ニ馬嵬一、左龍武大將軍陳玄禮殺ニ楊國忠及御史大夫魏方進太常卿楊暄一、賜ニ貴妃楊氏死一」、「十八史略」卷五に「副元帥哥舒翰與レ賊戰大敗、麾下執レ翰降レ賊、賊遂入レ關、上出奔次ニ于馬嵬一、將士飢疲皆憤怒、殺ニ楊國忠等一、及逼レ上請レ殺ニ貴妃一、然後發一」。

刀を忘れて置きました（忠臣藏）

武士は佩刀を己がたしなみの魂として大切にしたものである。されば之を置忘れるなどは武士の最も恥辱とした。近松作「心中天の網島」下之卷にも、「脇指忘れたちやつと／＼、なんと傳兵衛、町人は氣が心易い、侍なれば其の儘切腹するであらう」と見えてゐる。

形見こそ今は……ありなん（下僧）

頭註に引用した謠曲「松風」にあるこの歌は、「古今集」戀歌四の部、讀

人しらずの歌、「形見こそ今は仇なれこれなくば忘るる時もあらまし物を」とあるに據つたものである。

一首の意は、戀しい人の殘し置いたその形見が、今は却つて自分の爲には仇讐である。何故といふに、若し之が無かつたなら、少しは忘れる時もあらうものを、この形見がある故に、見てはいつも思出して物思ひにくれるによつて、といふのである。「今は」と堪へ難き心を見せ、「これなくば」と假定的にいへる所、更に情の切なるを思はしめる。

門火　（菅原傳授。忠臣藏。近江源氏）

婚儀は再び生家に戻らぬやうに葬禮の儀式に倣ふ。門火を焚くもその一である。「女重寶記」（元祿十五年刊）巻二、しうげんの次第の條に、「死したる者は再び歸らぬならひなれば、嫁入しては再び父母の家に歸らぬといふ緣を取りて、輿乘物を蔀より出し門火を焚き、鹽と灰とにて打出すことの死人のまねびをする事、うへうへ方にもあることなり」。「周禮」に「喪設二門燎一」。「顔氏家訓」に「喪出之日門前燃レ火」。近松作「鑓の權三重帷子」に「可愛やおさゐが嫁入の時、まあ爰で門火を焚き」。

願以此功德平等　（一谷）

「願以二此功德一、平等施二一切一、同發二菩提心一、往二生安樂國一」の中の文であつて、唐・善導撰の「觀無量壽經註疏玄義分」の最初に歸三寶偈ありて、その結末に出でて、利他回向を表白した文である。この文は念佛宗にて總回向文として讀誦されるものである。願はくは此の（觀經・製疏の）功德を以て、怨親平等一切衆生に施し、同じやうに信心を發起し、諸共に阿彌陀佛の淨土に往生せしめ給へとの意。

京の吉田の……野暮　（阿波鳴門）

「蟬のぬけがら」（延寶六年成、山本九兵衛版、一中正本、近松の作であらう）大坂萬屋介六道行の文に、「京の吉田の神帳に入つた神かや人らぬのか、わけも情もわきまへぬやぼてん神かうつじんか」とあるに據つた。

杭とも思はぬ　（忠臣藏）

「人でも杭でもない」の諺に據つたもので、近松作「大職冠」に「人でも杭でもなし、禁中には穢らはし」、同作「女殺油地獄」に「お二人の葬禮に立派な乘物に乘せうといふ氣がなければ、男でも杭でもない」とある。蓋し狂言に「人か杭か」とあるこれから出た諺であらう。「出るままに杭とも思はぬ詞の大槌打込まれ」は、諺に「出る杭は打たれる」といふ緣によつた文である。

具足櫃の笑本　（忠臣藏）

「南畝莠言」巻上に、「青藤山人路史に曰く、ある士人藏書甚だ多し、その櫃ごとに必ず春畫一冊づつ入置けり、ある人その故を問ふに、これ火災をよくる厭勝なりと云云、此方にて具足櫃に春畫を入るるといふ事もかかる事などによれるや」。

熊谷櫻　（一谷）

「大和本草」に「熊谷櫻　高さ尺に過ぎずして花咲く、長じて四五尺に過ぎず、彼岸櫻に先立ちて八重の好花開く、櫻の先登なり、花色白くして小紅を帶びたり、按ずるに源平の合戰に熊谷次郎直實攝州一の谷の先登して名を形はすこと平家物語等に記せり、此種餘種の櫻に魁け

るを以てこれを熊谷橋と云ふ」。

蜘蛛（くも）（伊賀越）

蜘蛛に雲助をいひかけた。雲助とは、江戸時代に宿驛・渡し場などをうろついて、駕籠舁や人夫となつてゐた勞働者で、一定の住處もなく、雲のただよふやうな生活狀態であるのを、人名の如く取成した言葉であつて、東海道に殊に多く雲助が巢を食つてゐたものである。「俚言集覽」に「雲助＝〔倭訓栞〕逃亡無籍の徒、所定めず宿も無き者をクモと云は、雲の定めなき意に云也、雲水の義に同じ、一說に蜘蛛の子を散らすが如きを云」。

君子は其の罪を惡んで其の人を惡まず（忠臣藏）

「鳴鳴大狗」卷三に、「此語はこれより先に御所櫻の院本にも出て、伯夷叔齊は其罪をにくみて其人をにくまずと書けり、これは論語に伯夷叔齊は舊惡を思はずと宣ひし孔子の意を取て、其語をつくりかへたる物のよし鳴鶴以貫も書けり、四書蒙引に司馬溫公は姦邪の小人の己を害するものをにくむと雖も、また其賢きを称嘆すといへる心なるべし」。

藝州福岡（伊賀越）

藝州といふて備前の福岡をきかせたのであらう。本曲は俚謠の今樣歌新竹子となつて作られ、その歌は熊澤伯繼の作であり、熊澤伯繼は岡山藩主池田光政に仕へた人であるから、藝州といふて殊更備前の地名を用ひたのであらう。

備前には福岡といふ地が二ヶ所あつて、一は今も邑久郡行幸村の內に福岡の名を存し、他は兒島郡郷內村と改稱された。此の二つの內、行幸村福岡は、伯繼が閑居して居た備前國和氣郡伊里村蕃山と岡山市との道路の中央に當り、彼が足跡を留めた地であるから、これを用ひてかくいうたのであらう。

更衣（かうい）（忠臣藏）

昔時後宮の女官で、天子の御衣を更へることを司つたのであるが、後には御寢に侍したこともある。位は女御の下である。

庚申の代待（かうしんのだいまち）（妹背山）

庚申の日は年に六回あつて青面金剛の緣日である。「日次紀事」（延寶年間成）正月の條に、「六庚申夜亦被レ供二酒饌於青面金剛一、人、夜間不レ眠、飮食於殿中男女一、則稜レ備二御遊一、諸家亦多有二斯儀一、俗間亦設二七種菓一供二養諸酒一而祭レ之、相傳庚申青面金剛之緣日也、故知レ此、朋友會集、多喫二赤小豆粥一、宴遊到二雞鳴一而止、是謂二庚申待一、此日請二粟田口三条堂及八坂庚申堂一、庚申堂天王寺所レ有爲レ本、凡一年中六庚申日、始終兩堂特參詣多し」。

庚申の日に代人となつて神佛に參詣するを庚申の代待といふ。「代待」を見よ。

吳王を諫めて誅せられ、辱かしめを笑ひし伍子胥（忠臣藏）

「史記」伍子胥傳に、「（吳王夫差）敗二越於夫椒一、越王句踐乃以二餘兵五千人一棲二於會稽之上一、使下大夫種厚幣遺中吳太宰嚭上以請レ和、求下委國爲二臣妾一、吳王將レ許レ之、伍子胥諫曰、越王爲レ人能二辛苦一、今王不レ滅、後必悔レ之、吳王不レ聽、用二太宰嚭計一、與レ越平、……、太宰嚭

既與二子胥一有レ隙、因讒、……、吳王乃使三使賜二伍子胥屬鏤之劍一曰、子以レ此死、伍子胥乃告二其舍人一曰、必樹二吾墓上一以レ梓、令レ可二以爲一レ器。而抉二吾眼一懸二吳東門之上一、以觀二越寇之入滅一レ吳也、乃自剄死」。

塞翁が馬（彦山）

人間の禍福は定め難きをいふ故事である。「淮南子」人間訓に、「夫禍福之轉相生、其變難レ見也、近二塞上一之人有二善レ術者一、馬無レ故亡而入レ胡、人皆弔レ之、其父曰、此何知二遽不一レ爲レ福乎、居數月其馬將二胡駿馬一而歸、人皆賀レ之、其父曰、此何知二遽不一レ爲レ禍乎、家富二良馬一、其子好レ騎、墮而折二其髀一、人皆弔レ之、其父曰、此何知二遽不一レ爲レ福乎、居一年胡人大入レ塞、丁壯者引レ弦而戰、近レ塞之人死者十九、此獨以二跛之故一父子相保、故福之爲レ禍、禍之爲レ福、化不レ可レ極、深不レ可レ測也」。

逆磔（太功記）

詞にのみ存する刑であらう。近松作「生玉心中」中之巻に「一日なりと父御樣に御奉公、姑御樣を姑御と宮仕せうものと、明暮の願ひ事叶はぬのみか此のしだら、及ばぬ願ひの逆磔か、此の前さる人に三世相見てもらひしに云々」とある「逆磔」も、要するに罰を強めていふ爲に「逆」を添へたのである。實際磔刑にするのには、槍で突く前に旣に睾丸を打付けて氣絕させて置いたものである。身體を逆樣にした磔刑は繪で見たことがあるが、我が國ではさやうな刑罰は爲なかつたものと思ふ。「繪本太閤記」には、「光秀が老母を大手の門にて樹木へつりあげ、磔にかけて殺しけるこそ是非なけれ」と記してある。

さがり（忠臣藏）

「俚言集覽」に「さがり＝代料のいまだ了らざるをサガリと云ふ、〔南瓜咄〕昔さる人人參を買置ければサガリをうけ身代ならざれば云々」。

逆櫓（平假名）

「平家物語」卷十一、逆櫓の事の條に「判官、逆櫓とは何ぞ、梶原、馬は駈けんと思へば駈け、引かんと思へば引き、弓手へも馬手へも廻し易う候が、船はさやうの時、屹度押し廻すが大事で候へば、艫舳に櫓を立て違へ脇楫を入れて、どなたへも廻し易い樣にし候はばやと申しければ」とある。

逆櫓の松（平假名）

「攝津名所圖會」卷三、西成郡の條に「逆櫓松　上福島橋爪町杉本氏別莊にあり、元暦の頃廷尉義經梶原景時逆櫓の論ありし所にや、大樹にして株の形蟠蛇に似て、千載を歷ぬらん名松と見へたり」とあつて、圖が載せてある。

ささがに（忠臣藏）

小蟹の義といひ、また篠原に住む蟹の義ともいふ。其の他異說もある。衣通姬の歌句にも「ささがにの蜘蛛のふるまひかねてしるしも」とあるやうに、もと「ささがにの」は蜘蛛の枕詞であつたのが、「ささがに」を直に蜘蛛にいうたのは、既に「古今集」卷十・物名部の歌句にも「ささがにの花にも葉にも絲をみなへし」など見えてゐる。

さなきだに重きがうへの小夜衣、わがつまならぬつまな重ねそ（忠臣藏）

「新古今集」卷二十・釋教部、不邪婬戒の題でこの歌出づ。但し「さなきだに」は「さらぬだに」とある。一首の意は、人妻ならぬ我が妻を持つだに、佛法に對して女犯の罪重きに、まして人妻など犯すことは尤もあるまじきことだといふのである。さ夜衣の緣で妻と褄をかけて、「重ねな」といひなした。此歌よりして小夜衣を邪婬の意に用ひる。

サハリ（菅原傳授・千本櫻）
觸り。他流の節廻しに觸れることの意。即ち義太夫節などの中に他流の節廻しを挿入した部分である。この部分は綺麗な辭句を連ねて文飾に重きを置き、語る事をしないで美しい節廻しで謠ひ、一種陶然たる氣分を漂はすのである。

侍冥利（忠臣藏）
侍の我が申すことが違ひ、虛僞などの罪業を敢てするに於ては、神佛が冥暗の中に照覽し給うての御利益（りやく）に盡きるといふ意よりして、自誓の詞に用ひる。冥利又は冥加を其の人の身分或は職業の下に附けて、佛法冥加、侍冥加、侍冥利、商賣冥利、番屋冥利などと言うて、其の人の自誓の詞に用ひたものである。

三途「死出・三途」を見よ。

四苦八苦（忠臣藏・妹背山）
四苦は生・老・病・死をいふ。四苦に怨憎會苦・愛別離苦・求不得苦・五陰盛苦を加へて八苦といふ。これ吾人が生涯を通じて必ず受ける苦痛であつて「法華經」に說いてある。轉じて至極苦痛の意。

したらでん（忠臣藏）
震動雷電の轉訛。夕立をともなふ電光雷鳴。「增補俚言集覽」に、「カナ、ホシ」大雨大風の日をシダラデンといふは震動雷電と書侍るよし云り、「嬉遊笑覽」に梅村載筆に震動雷電とかきてしだらでんとよめりと見ゆ、「書言字考」震動雷電の註云、三河國俗謂二迅雷疾雷一爲二設樂田一といへり、「類草」に、五月雨や山鳥の尾のしだらでん、又「忠臣藏」といふ院本に、鐵砲雨のしだらでんといへるは是なり、もとどよめき喚ぐことなれば、雨の音になぞらへてもいひ、又田をうち返すさまをもいへり」。

死出・三途（菅原傳授・千本櫻・忠臣藏・矢口渡・河原達引・太功記・曾我話）
死出の山と三途の川とをいふ。死出山は死天山とも書き、冥土にある山で、人死すればこの山を越えて行くといふ。「佛說地藏菩薩發心因緣十王經」に、「閻魔王國界、死天山南門、亡人重過、兩莖相逼、破レ膚割レ肉、折レ骨漏レ髓、死而重レ死、故言二死天一」云云。
三途川は三瀨河（みつせがは）ともいふ。蓋し三惡道を河に喩へ、以て冥土にある河としたのである。「佛說地藏菩薩發心因緣十王經」卷二に、「葬頭河曲二於初江邊一、官廳相連承レ所レ渡、前大河卽是葬頭、見二渡レ亡人一名二奈河津一、所レ渡有レ三、一・山水瀨、二・江深淵、三・有橋渡、官前有二大樹一、名二衣領樹一、影住二鬼、一名二奪衣婆一、一名二懸衣翁一」、「十王讃歎鈔」に、「此河に三の渡有レ之、故に三途河と云也、上にある渡をば淺水瀨と名付く、此は淺くして水膝を不レ過、罪淺き者此を渡る也、中にある渡をば橋渡と名付く、此は金銀七寶の橋也、善人のみ此を渡る也、下にある渡をば强深瀨と名付く、此をば惡人のみ渡る也、此渡は流れ早き事

矢を射るが如く、浪の高き事大山の如し」。

信田妻（しのだづま）（忠臣藏）

古淨瑠璃「信田妻」に、陰陽博士安倍晴明の生母といふ白狐の精が、葛の葉の子別れとなり、障子に殘した一首の歌「戀しくば尋ね來て見よ和泉なる信田の森のうらみ葛の葉」は、古來名高いものであつて、其遺跡は今葛の葉の社（或云信太森神社、泉北郡信太村大字中）となり、泉州の名所として二月初午の祭日には、參詣人雜沓を極める。

忍提燈（しのびぢやうちん）（忠臣藏）

強盜提燈をいふ。銅又は鐵などで釣鐘狀の外廓を造り、その中に蠟燭立てを自在に廻轉するやうに裝置した提燈であつて、光は前面のみを照して後の自分の持つ方は照さぬやうにしたもの。「海錄」卷八に「奸盜提灯＝忍びに用ゆる提灯をガンドウ提灯といへり、世に聞道提灯と書けるは非なり、奸盜提灯と書ける正字なり、(圖あれども略す)、再按に、閑盜挑灯と書が正字なるべし、……閑は『ならふ』とよめり、盜になれると云ことにて、閑盜を『しのび』とよめり、されば閑盜挑灯はしのび挑灯と云こと必せり」。

蛇となるべき日高の川（矢口渡）

まなごの庄司の娘が道成寺（紀伊國日高郡矢田村土生にある寺院で、本尊は千手千眼大聖菩薩）の客僧を戀慕し、客僧が釣鐘の中に匿れたのを、娘は毒蛇となつて日高川を渡り、釣鐘に纏り附いて客僧を取殺したといふ話に據つた。この娘は名を清姫といひ、客僧は安珍といふ者だとの傳說である。謠曲「道成寺」に「彼女夜更け人靜まつて後、客僧の閨に行き、いつまでわらはをば斯へて置き給ふぞ、急ぎ迎へ給へと申しゝかば、客僧大きに騷ぎ、さあらぬ由にもてなし、夜に紛れ忍び出で此寺に來り、平に賴むよし申しゝかば、隱すべき所なければ、撞鐘をおろし其內に此客僧を隱し置く、扨彼女は山伏を遁すまじとて追つ掛くる、折節日高川の水以ての外に增りしかば、川の上下を彼方此方へ走り廻りしが、一念の毒蛇と爲つて、河を易々と泳ぎ越し此寺に來り、此處彼處を尋ねしが、鐘の下りたるを怪しめ、龍頭をくはへ七纏ひ纏ひ、焰を出だし尾を以て叩けば、鐘は卽ち湯となつて山伏を取りをはんぬ」。

しゆむ（忠臣藏・朝顏話）

「しむ」（浸）の訛。酒の全身に浸潤するをいひ、酒宴の酣なるをいひ、轉じて物の眞最中なるをいふ。近松作「心中萬年草」に「二階に酒のしゆんだ頃祝言の石をぶちこんで」。「傾城太太神樂」卷三に「こよひ程話のしゆんだ事もなければ」。「近代長者鑑」卷五の挿畫に、大黑舞の繪があつて「しゆんだはしゆんだは」と註記してある。眞最中だとの意。

順禮歌（阿波鳴門）

京都及その近國三十三ケ所の觀音堂を順禮するを西國三十三所順禮または西國順禮といふ。順禮歌（西國三十三所御詠歌）は俗に花山院御奉納の勅吟と言ひ傳へ、これ等三十三所觀音の靈場にその觀世音を詠まれた歌を存し、哀婉な調で之を詠吟する。

第一番　紀伊那智山青岸渡寺（那智如意輪堂）本尊如意輪觀音

　補陀落や岸打つ波は三熊野の那智のお山に響く瀧津瀨

第二番　紀伊紀三井山護國院金剛寶寺　——如意輪——

古郷をはるばるここに紀三井寺花の都も近くなるらむ
第三番　紀伊補陀落山施音寺（粉河寺）　——十一面——
父母の恵も深き粉河寺佛のちかひ頼もしきかな
第四番　和泉槇尾山仙華院施福寺（槇尾寺）　——千手——
深山路や檜原松原わけ往けば槇の尾寺に駒ぞいさめる
第五番　河内紫雲山三寶院剛琳寺（藤井寺）　——千手——
まゐるよりたのみをかくる藤井寺花のうてなに紫の雲
第六番　大和壺阪山南法華寺（壺阪寺）　——千手——
岩をたてて水をたたへて壺坂の庭のいさごも淨土なるらむ
第七番　大和東光山眞珠院龍蓋寺（岡寺）　——如意輪——
今朝みれば露岡寺の庭の苔さながら瑠璃の光なりけり
第八番　大和豐山神樂院長谷寺（初瀬寺、泊瀬寺）　——十一面——
幾度も參るこころは泊瀬寺山も誓もふかき谷川
第九番　大和興福寺南圓堂　——不空羂索——
春の日は南圓堂にかがやきてみかさの山にはるる薄雲
第十番　山城妙星山三室戸寺　——千手——
よもすがら月をみむろとわけゆけば宇治の川瀬にたつは白浪
第十一番　山城深雪山上醍醐寺　——准胝——
逆縁ももらさですくふ願なれば巡禮堂は頼もしきかな
第十二番　近江岩間山正法寺（岩間寺）　——千手——
みなかみはいづくなるらむ岩間寺岸うつ浪か松風の音
第十三番　近江石光山石山寺　——如意輪——
後の世を願ふ心はかろくともほとけのちかひ重き石山
第十四番　近江長等山園城寺（三井寺）　——如意輪——
いづいるや浪間の月は三井寺の鐘の響にあくるみづうみ
第十五番　京都觀音寺（今熊野觀音堂）　——十一面——
昔よりたつをもしらぬ今熊の佛の誓あらたなりけり
第十六番　京都音羽山淸水寺　——千手——
松風や音羽の瀧は淸水のむすぶ心はすずしかるらむ
第十七番　京都補陀落山普門院六波羅蜜寺　——十一面——
おもくとも五つの罪はよもあらじ六波羅堂に參る身なれば
第十八番　京都六角堂頂法寺　——如意輪——
わが思ふ心のうちは六つのかどただまろかれと祈るなりけり
第十九番　京都行願寺（革堂）　——千手——
花をみて今はのぞみもかうだうの庭の千草も盛りなりけり
第二十番　山城西山善峯寺（良峯寺）　——千手——
野をもすぎ山路に向ふあめのそらよし峯よりも霽るる夕立
第二十一番　丹波菩提寺（穴太寺）　——聖——
かかる世に生れあふみのあなうやと思はでたのめ十こゑ一こゑ
第二十二番　攝津補陀落山總持寺　——千手——
おしなべてたかきいやしきそうぢの佛の誓たのまぬはなし
第二十三番　攝津應頂山菩提院勝尾寺　——千手——
おもくとも罪には法の勝尾寺佛をたのむ身こそやすけれ
第二十四番　攝津紫雲山中山寺　——千手——

野をもすぎ里をも行きて中山の寺へ参るは後の世のため

第二十五番　播磨御獄山清水寺（新清水寺）　――千手――

あはれみやあまねきかどのしなじなになにをか波のここに清水

第二十六番　播磨法華山一乘寺（法華寺）　――千手――

はるは花夏は橘秋は菊いつもたへなる法の花山

第二十七番　播磨書寫山圓敎寺　――如意輪――

はるばるとのぼれば書寫の山おろし松の響もみのりなるらむ

第二十八番　丹後世野山成相寺（成合寺）　――聖――

なみのおと松の響も成相に風ふききたるあまの橋立

第二十九番　丹後青葉山松尾寺　――馬頭――

そのかみは幾代へぬらむたよりをば千とせをここに松の尾の寺

第三十番　近江竹生島巖金山寶巖寺　――千手――

月とともに波間に浮ぶ竹生島船に寶をつむここちして

第三十一番　近江姨綺耶山長命寺　――十一面――

やちとせややなぎにながきいのち寺はこぶ歩のかざしなるらむ

第三十二番　近江繖山觀音寺　――千手――

あなたふとみちびきたまへ觀音寺遠き國よりはこぶ歩みを

第三十三番　美濃谷汲山華嚴寺　――十一面――

よろづ代の誓をここにたのみおく水は苔よりいづる谷汲

今までは親とたのみしおひずるをぬぎて納むる美濃の谷汲

しやうど（阿波鳴門）

目當。當所。按ずるに「しやうど」は「せうど」で、「せんど」（先途）の音便か。そして進み行く先の意であらう。近松作「大經師昔暦」に「下を覗けばとこやみに、何のしやうどは見えねども」。同「天鼓」に「堺の濱よりしやうどもなく夜半に紛れてとぼとぼと」。

白波（忠臣藏・阿波鳴門）

盜賊の異稱。「後漢書」靈帝紀に「靈帝中平元年張角反、皇甫嵩討之、角餘賊在二西河白波谷一、時俗號二白波賊一」。同書・董卓傳に「初靈帝末、黄巾餘黨郭太等復起二西河白波谷一、轉寇二太原一、遂破二河東一、百姓流轉、三輔號爲二白波賊一、衆十餘萬」。

白鼠（忠臣藏）

白鼠が家に棲めば福があるといふ。「抱朴子」に「鼠壽三百歳、滿二百歳一則色白、善憑レ人而下、名曰レ仲。能知二一年中吉凶及千里外事一」とある。白鼠を福とすること蓋しこれ等から出たものであらう。

心中（夏祭・矢口渡。歌祭文。河原達引。彦山）

もと「心之中」の義である。轉じて(1)心に思ふこと、眞實の心の意にいひ、また(2)心ばせよくて義理を守り、意氣方よきことをいひ、(3)性愛に關する眞實の心をもいひ、その心中立てするに指を切り、或は生爪を放し、其他腕に疵を附けたり、入墨したり、燒疵、髪を切り、起請文を取交したりなどする事もある。心中を情死の意にも用ひるに至つたのは、蓋し貞享前後からであらう。詳しくは上卷に述べた。

しんど（忠臣藏・一谷・伊賀越）

「しんろ」「しんどう」「しんどい」などともいふ。蓋し「辛勞」の訛であつて、疲勞したことをいふ。越谷吾山編「物類稱呼」卷五に「クタビ

レといふことを畿内にてシンドと云。シンロの轉語にや、シンロは辛勞なり。

晉の豫讓（平假名・千本櫻）

「史記」刺客傳に、「豫讓者晉人也、……事二智伯一、智伯甚尊二寵之一、及二智伯伐二趙襄子一、趙襄子與二韓魏一合レ謀滅二智伯一、……我（豫讓）必爲報レ讎而死、以報二智伯一則吾魂魄不レ愧矣、……襄子當レ出、豫讓伏レ於二所レ當レ過之橋下一、襄子至レ橋馬驚、襄子曰此必是豫讓也、使二人問一レ之果豫讓也、……臣（豫讓）固伏レ誅、然願請二君之衣一而擊レ之焉、以致二報レ讎之意一、則雖レ死不レ恨、……於レ是襄子大義レ之、乃使三使持レ衣與二豫讓一、豫讓拔レ劍三躍而擊レ之曰、吾可三以下報二智伯一矣、遂伏レ劍自殺、死之日趙國志士聞レ之、皆爲涕泣」。

杉ばへ（關取）

ここの文に「杉ばへ米俵」とある。「ばへ」は「蕨」に「擺」をいひかけて、酒樽米俵を積上げることをいふ。

杉葉は酒林の意にいふ。昔は杉の葉を集め丸めて軒に吊し酒屋の標にした、これを酒林といふ。酒林は愁を掃ふ帚の意から酒屋の看板にしたものであつて、そのもとは帚であつた。

また擺は、俵などを積重ねるをいふ。「和漢三才圖會」卷十五、倭字大略の條に「擺　凡村木及米俵積層皆曰レ擺、从レ手从レ鼓、俗附會用レ之也」。又杉擺は杉形擺の意であつて、杉の葉える形、即ち上尖り下廣がつた形に米俵を積上げるをいふ。

裾繼櫓（矢口渡）

豐芥子撰「岡場遊廓考」（未刊隨筆百種に收む）に「〔表櫓當時繁昌寫本町鑑」に、永代寺門前山本町　里俗やぐら下、表櫓と唱ふ、場所有之」　今の深川區門前仲町二丁目の一部にあつた遊女町をいひ、裾繼の名義は裾繼の火の見櫓が今の門前仲町二丁目にあつたからの稱である。

瀨戸の染飯（忠臣藏）

「東海道名所記」に「瀨戸の染飯は此所の名物なり、その形小判ほどにして强飯に山梔子をぬりたり、うすきものなり」。「東海道名所圖會」卷四に「瀨戸　島田より一里許先（東）にあり、……、名物染飯瀨戸村の茶店に賣るなり、强飯を山梔子にて染めてそれを摺りつぶし、小判形に薄く干乾して賣るなり」。

せんま（夏祭）

ここの文に、「男仲間のはね出されこつぱの權、なまの八、獅子に霍はれ赤頭、せんまの形を其の儘に、三婦殿内にか宿にかと、つき摩り摩りにじり込む」と見え、また近松作「日本武尊吾妻鑑」第五に「提灯を軍の獅子頭、皆一樣の花笠を、着連れ打連れ荷ひ連れ、……ありや舌鼓うつつなき、せんまの役は飯炊きがいつ見覺えて取なりを、みかはの國の町小路、太太神樂珍らしと」と見えてゐる。蓋し「せんま」は背馬であつて、獅子の背になる者をいふのである。「菅原傳授手習鑑」油屋の段に「證據もないに盜人呼ばはり、けたいが惡いぞ、忌々しいぞ、アア是々聲高にいやんないの、イヤ〳〵止めやんな小助、あのせんまめ仕樣がある」とある「せんま」も背馬で、日々を舞ひ廻る獅子舞は賤民の業であり、その獅子の尻部になる役であるから、以て人を

罵るにいふた。

そぎ尼 （伊賀越）

「貞丈雜記」卷二・人物之部に「昔はよき人は尼になれども、髪を殘らず剃り落す事はなくて、髪を短く切りて禿になりし也、これをそぎ尼と云ふ也」。

そもじ （忠臣藏・妹背山・艶容・彦山）

「そなた」の文字詞。文字詞は足利時代の末頃朝廷式微にして供御の物備はらない爲に、女官等その物の名をいふを忌んで何もじといふた隱語から起つたといふ。

代待（だいまち） （妹背山）

「だいまつり」（代祭）のつまつた語。代人となつて神佛に參詣し、米錢を乞ふ物貰の一種。「日次紀事」（延寶年中成）正月の條に、「毎月毎二神社會一、其身有二故障一、則倩二山伏行人一、令レ詣二其社一、是謂二代參一、或日待月待庚申待之類亦稱二代待一、故到二其時一、則代參代待者、高聲呼二街衢一、則入二人家一而請二米錢一」。

大名慳貪（だいみやうけんどん） （矢口渡）

色漆で模樣を描いた器（うは）に盛つて客に出す蕎麥切をいふ。「嬉遊笑覽」卷十上・飲食の部に「慳貪は唯俗に覺えたるやさしみなき意にて、一椀づつ盛りたるを食ふ人の心にまかせて勸めもせざるゆゑなり、其呼聲にも一杯六文かけねなし現金かけねなしといふこと其頃のはやりなり、外に持運ぶに膳を入る箱はけんどん箱なるを、やがてけんどんとばかりいひ、其箱の蓋の如きをけんどん蓋といふ、大名けんどんといふは、「一代男」女郎ども食好みする處（卷六、寢覺の菜好の條）、生貝（なまがひ）のふくら煎（いり）を川口屋の帆懸舟（ほかけぶね）の重箱に一杯と、思ひ〳〵に好まるゝこそをかしけれ、帆かけ舟は諸大名の舟を五色の漆（うるし）にて繪にかきたるなり、西國の大名難波にて艤して出たつ故其船ども相印を見習へり 大名けんどんの名はここに起る、今も此器殘れるもの有て、好事の者茶箱に用ふ、小さく長き形の筥なり、蒔繪は帆かけ舟のみにあらず種々の模樣あり」。

タタキ （千本櫻・妹背山・河原達引・彦山）

（敲）。敲は乞食のわざであつて、室町時代には編頭巾を被り餌籠を腰に附けて、何事かしやべりながら手で胸を敲き、人から施物を乞うて歩いたものである。元祿頃の敲は正月や彼岸などに、扇子で拍子を取りながら歌を謠ひ、物を貰うて歩いた。その謠ふ唄は流行唄などを哀婉な調で謠ひ、或は鳥追唄の類や駄洒落唄などをも謠うたものである。淨瑠璃の中にも敲の調子を入れて變化を持たしたのである。

種子島（たねがしま） （忠臣藏）

後奈良天皇の天文十二年八月ポルトガル人ピント等の乘れる黑船が大隅國熊毛郡種子島に漂着した時、島主種子島時堯（ときたか）はポルトガル人より鐵砲二挺を高價で購入し、且つ家臣等と共に銃の操法、火藥及び銃の製法等を習ひ得て、これを堺港の橘屋又三郎に傳へてから、急速に我が國に廣まることとなつた。最古型の小銃を維新前後まで種子島と稱したのはこの來歷によるものである。

太夫（たいふ） （關取・伊賀越）

松ともいひ、最上位の遊女である。才色すぐれて何不足なき程の者が

この位になるので、極めて威勢のあつたものである。異本「洞房語園」上・京都遊女の名目の條に「太夫（これは藝の上の名なり、慶長年中まで遊女ども亂舞仕舞を習ひ、一年に二三度づつ四條河原に芝居を構へ、能太夫舞太夫皆傾城ども勤めしなり、尤大人歴歴の御方御見物あり、種種の餘情華麗なる事ども多かりしとなり、さるによつて今日の太夫は誰が家の何といふ太夫が勤むるなどいひしより、自らよき遊女どもの總名となりけるよし」とある。

丹後・武藏 （千本櫻）

丹後國與謝郡切戸の文珠堂（天の橋立の邊にあつて智恩寺といふ）の裏に當る能野山（吉野山とも書き今は櫻山と呼ぶ）は、昔大和の吉野山から櫻樹を移植した所と言ひ傳へ、細川幽齋の歌にも詠んである櫻の名所である。（又これと別に吉野村といふもある）。また武藏國入間郡芳野村は、「伊勢物語」にも「業平中將東國へ下りけるとき、武藏國入間郡三芳野の里に來りて」と見えてゐる。（武藏國西多摩郡吉野村は梅林の名所である）。

だんびら物 （忠臣藏）

刀身の平たくて幅廣い物をいふ。「武家名目抄」刀劍部十七に「たひらは即はたひらのはを略したるにて、刃の幅の廣きをたひらひろといひ、狹きをたひらせまといふ、後代だんびら物といふことあるは、たひらひろの略語なり」。（序云、平たく廣い臑を「だんびら臑」といふ）。

斷末魔 （忠臣藏・矢口渡・太功記）

梵語 Marmacchid であらう。Marman は支節の義、Chid は切斷する義である。Marman を訛つて末魔と音寫し、Chid の義の斷と合して斷末魔となつた語で、現世から息を引取る最期、即ち生から死に移る悶絶の眞際をいふ。

父母の惠 ：：賴もしきかな （阿波鳴門）

西國順禮第三番粉河寺の御詠歌。「順禮歌」を見よ。一首の意は、父母の子を思ふ深い惠によつて建設された粉河寺の觀音堂であるから、親が愛子を思ふ悲願を叶へてやらうとされる觀世音菩薩の御誓は、賴もしう忝ら存じまするわいといふのである。「惠も深き」は「粉」を「子」にかけていひ、また「深き」は「粉河」の「河」にもかけたのである。粉河寺は和歌山縣那賀郡粉河町にあつて施音寺と稱し、境内一萬五千餘坪あつて、現在の堂宇は享保五年の建立に成れる巨刹である。觀音堂の緣起は、中古河內國澁川郡馬馳市の佐伯長者佐太夫の女、觀音の靈驗によつて愛女の病を治し、また伊都郡澁田村の婦姉大刀自は、己が家を移して觀音堂としたのであるといふ。

千鳥香爐 （彥山）

古來有名な青磁の香爐である。その傳來は、「雍州府志」卷八、慈照院の條に「始織田信長公入洛時寓二斯院一列侯達官及輦下良賤來執レ謁、時今川氏眞亦來見、獻二千鳥青磁香爐一、是宗祇法師之珍藏、而千鳥名取二古歌之義一而號レ之者也」とあり、又「市井雜談集」下に「千鳥の香爐といへるは、駿州今川家の重器なりしが、氏眞牢落し織田信長へ讓る、信長薨後秀吉の手裏に入る、天下無双の名器也、或は傳へ云ふ、五右衞門摑めらるゝ時、板敷へ落し、小く瑕つきたりと也」とある。

また千鳥といふ名に就いては、「茶話指月集」に「利休は過分の采地拜領して家貧しからず、一とせ千鳥の香爐宗祇所持千貫に求めて、やゝ時移る程疊に置て見けるが、休が妻宗恩われにも見せ給へとて暫し見て、足が一分高て恰好惡し、截り給へと云、休われも先程よりさ思ふなり、玉屋を喚とて終に一分截たり」とあり、「遠碧軒記」下にも「千鳥手と云ふ青磁の香爐あり、これはあしもちにてはなく、足が少し紙一枚とほる程過ぎて、足があがりてある故に千鳥手と云ふ」とあるから、蓋し足の長さが揃はないで、びつこになつてゐるからの稱であらう。其の形は、「名物記」上に、「千鳥香爐＝高二寸一分、胴二寸九分、口廣差渡二寸三分、口寄の所四分、蓋象牙細きず」とある。これを自から音を啼く靈器としたのは、足が不揃ひの爲に微動でも千鳥の啼くやうに、ちり／＼と音するのに由つたものであらう。そしてそれが戯曲・小說などに作り込まれてゐることは、今更述べるまでもない。

趙高が馬と欺く小牡鹿（妹背山）

趙高が秦の二世皇帝に鹿を獻じて馬と欺いた話は有名なもので、手近には「十八史略」にも出てゐる。同書・卷二、二世皇帝の條に「中丞相趙高欲レ專二秦權一、恐二群臣不一レ聽、乃先設レ驗、持レ鹿獻二於二世一曰馬也、二世笑曰、丞相誤邪、指レ鹿爲レ馬、問二左右一、或默或言、高陰中二諸言レ鹿者一以レ法、後群臣皆畏レ高、莫三敢言二其過一」。

朝鮮長屋（矢口渡）

□芥子撰「岡場所大全」（寫本）に「朝鮮長屋（町名淺草六尺屋鋪と云、チヨンノマコロリ）朝鮮長屋と唱候者如何の譯にやと尋候處當處の老人語り候者朝鮮人來朝之節東本願寺へ旅宿被仰付候其節來り候下官共を入置假家を地内へ建らる扱朝鮮人歸國之後右の假家を引崩し此處へ建ける故朝鮮長屋と申候よしと語りぬ　安永二巳正月十七日切見勢不殘燒失」。即ち朝鮮長屋といふは、今の淺草區壽町にあつた昔の遊女町である。

ちやうど（忠臣藏）

ちやんと。しつかと。「ちやう」は丁の字を當てる。「忠臣藏」第三にあるは、近松作「平家女護島」に「檜扇も折るるばかりに、丁丁ちやうと打てば小躍し」、同作「曾根崎心中」に「下女は火打をばた／＼と打つ音に紛らかし、ちやうど打てばそつとあけ」とあると同じく、しつかと打つ音を形容した副詞。また「忠臣藏」第七にあるは、「鎌田兵衛名所盃」名所屛風の四季の條に、「鎌田もこす／＼ちやうど受け、ついと干し」とあると同じく、盃に酒をしつかと受けるを形容した副詞。

槌でお家をはく人屋（忠臣藏）

掃くに白人屋をいひかけた。近松作「長町女腹切」にも「花車も亭主も槌で庭はく人呼びに」とある。「槌でお家を掃く」とは、來客を鄭重にあしらはうとして、箒を槌と取違へて庭を掃くといふやうな狼狽する意。白人屋とは遊女屋をいひ、屋號ではなく、屋號は一文字屋とある。「白人」の條を見よ。

鶴岡八幡宮（忠臣藏）

康平六年八月源頼義東征の時、山城石清水八幡宮を鎌倉由比郷鶴岡に勸請して鶴岡八幡宮と稱し、治承四年十月源頼朝鎌倉に入るや、之を大臣山の麓に遷し、なほ鶴岡八幡宮と稱した、今の下宮これである。

建久二年の火災以後頼朝背後の山の中腹に新殿を營み、別に八幡宮を勸請す、上の宮がこれである。その後上の宮には應神天皇・神功皇后・姫(ひめ)の大神を奉祀し、傍に武內宿禰を祭り、下の宮は若宮と稱して仁德天皇を祀り、代々の將軍屢〻參拜して厚く奉祀した。現在の社は將軍家齊の時の造營で、文政十一年に落成したものである。社格は國幣中社。

劍(つるぎ)（菅原傳授）

劍の山。劍林地獄又は劍樹地獄といふ。「大智度論」卷十六に「……墮二劍林地獄中一、此地獄罪人入レ中、風吹二劍葉一、割二截手足耳鼻一、皆令二墮落一、云々」。「長阿含」第十九・地獄品に「劍樹地獄縱橫五百由旬、罪人入二彼劍樹林中一、有二大暴風一、起吹二劍樹葉一、墮二其身上一、著レ手手絕、著レ足足絕、身體頭面無レ不二傷壞一」。

手ぐすね引く（忠臣藏・伊賀越）

手に藥煉(くすね)を引く義。藥煉とは松脂と油とを煉合はせて作つたもので、物を手に取る時これをつければ、手から離れ落ちにくいからいふ。手に唾(つばき)して敵の來るを待ち受ける意。

寺入（菅原傳授）

寺院で寺院關係の者の兒童の初等教育を行つてゐた事は、鎌倉時代に旣にあつた。江戸時代になつても寺院を私塾に當てたから、寺子屋というたのであるが、中には書家・醫師の宅・百姓家・浪宅などもあつた。士分や平民の兒童を教育するを目的とし、教科書は「庭訓往來」「商賣往來」の類が廣く用ひられ、これによつて習字・讀書・作文を習得させ、更に進んでは四書の素讀・算術を教授した。教師は一人で、教場は室內に机を並べ、男女席を分ち、教師は側面に位置を占めて監視した。兒童が寺子屋に入學するを寺入といひ、生徒を寺子といふ。入學期も退學期も隨意である。幕末まで寺子屋教育は殆んど全國に普及し、兒童の大半は寺子屋で勉學したものである。

天武の軍(いくさ)有りし時乙女下(くだ)つて舞奏づ、これ反閇(へんばい)の始めなり（千本櫻）

反閇(へんばい)の呪文と五節舞姬の由來とを混同したのである。「へんばい」（反閇）を見よ。

洞庭の秋の月樣（忠臣藏）

洞庭湖は支那湖南省にあつて、湖南衆水の注入する所。華容、南縣、安鄕、漢壽、沅江、湘陰の各縣が之を環つてゐる。「方輿勝覽」岳州洞庭湖の註に、「在二巴陵西一、西吞二赤沙一、南連二青草一、橫亙七八百里、日月出二沒其中一」とある。

「洞庭の秋の月」は瀟湘八景（卽ち平沙落雁、遠浦歸帆、山市晴嵐、江天暮雪、洞庭秋月、瀟湘夜雨、煙寺晚鐘、漁村夕照）の一である。「洞庭の秋の月樣を拜み奉る」とは、近松作「百合若大臣野守鏡」「いつくしま八景の中にも、迷ひを照す洞庭の秋の月こそ詠めあれ」とあつて、お經の臂部を見上げて、煩惱の迷ひを照す美しい眺めの意に惡洒落たのである。

德若（千本櫻）

萬歲唄の中の語。「德若」は「數州府志」に「無住國師所レ作樂稱二萬歲樂一、使二小奴德若一舞レ之、以爲二賀正一、至レ今奉稱二萬歲一者、簡之

遺愛也」と見えてゐる。即ち徳若は小奴の名であつて、これを已が謠ふ萬歳唄の中に常若にきかせて唄つたのが傳はつたのである。

どつてう聲（妹背山）

この語は「伽羅先代萩」第二にも、「殿のお歸館に、たわいもない寐とぼけめらど性根付ヶずは荒灘が門打碎ひて御ヶ供せうか、ごくどうめらとどつてう聲」とあつて、吶鳴聲の意である。

鳶が孔雀（矢口渡）

諺に「鳶が孔雀を生む」といひ、子が親に勝る意。西鶴撰「胸算用」に「一番目の息子が生れつきを褒めだし、賢さうなる目ざし、此方の御子息にしては、お心にかけさしやるな、鳶が孔雀を生んだとは此の子のこと」。

虎石町（桂川）

「雍州府志」巻八、古蹟門上・愛宕郡の條に、「虎石　始在二柳馬場二條南一、此石狀似レ虎、傳言日蓮上人踞二斯石一唱レ法、故於レ今謂二虎石町一、斯石今在二淨草寶塔寺方丈庭一」。「都名所圖會」巻三、東大谷をいへる條に「親鸞聖人の廟塔は後の山腹にして、墳上に虎石あり、石の形虎に似たれば名とす、此石はじめは開山聖人往生の地柳馬場押小路虎石町にあり、秀吉公の御時伏見城中に移し給へり、其後かの地より又ここに移す云々」とあつて、以上の二書そのいふ所異同あれども、要するに虎石町の名義と其所在は明かである。

投島田　忠臣藏・歌祭文

「嬉遊笑覽」巻一下・容儀の部に「一代女草子」にも、つとなしのなげ島田と有、この風は世は皆つとを長くする頃、それにかはりて遊女踊子どもはかやうに結たり、つとを出さぬゆゑ髪先長ければ、あと先同じほどに結なり、なげ島田とは、なげ首などのなげの意にて、これは後へ倒るゝ形を云ふ、元祿八年板本の菱川師宣が「百人女」のうちなどにも見えたり」。近松作「心中天の網島」名殘の橋づくしの條に「小春も脇差取上げ、洗ひつ梳いつ撫付けし、むごや惜しげもなげ島田、はらりと切つて投げ捨つる」。

難波燒（平假名）

「攝陽奇觀」巻之六に、「難波燒　大坂高津邊にて延寶の頃より難波燒物を初て燒に、器物は無量の類ひ多し、茶碗水指水こぼし花生卓香爐藥鍋土釜、其外數寄の小道具等數品あり、土色は鼠淺黄、藥色は淺黄、藥黒きと青色と薄き緣付の繪あり、花生は牡丹葡萄等色色作り物を用ゆ、陶工のいふ、京都黒谷山の土を用ひて難波に於て燒とぞ」。

女御（忠臣藏・妹背山）

延喜式によれば、夫人の下で待遇は嬪と同様であつたが、漸次地位高まつて攝關大臣の女が女御として入內し、皇后に立たれるやうになつた。また女御でなくても君の寵愛厚きによつて女御と稱したこともあり、また上皇・皇太子の妃を女御と稱したこともある。

人參（伊賀越）

藥草。朝鮮人參で人の形せるものは最上の靈藥である。藥用人參の原種は朝鮮の山谷小篠叢中に自生し、その處は虎の出沒するが故に、採掘者は夜間火を焚いて毀損せぬやうに丁寧に採收する。

白（忠臣藏）

「はくじん」（白人）の略。次條を見よ。

白人（忠臣藏）

略して「白」ともいふ。遊女。公娼。白人はもと私娼の一種である。「五箇の津餘情男」卷之一、都は名所の條に「いつの頃より素人と名づけて、傾城にもあらず茶屋女にしもあらぬ遊女の出來ぬ。白人といふをすぐに用ひて白人と云ふ」と見え、「傾城禁短氣」に「諸方の遊び宿へ遣はし、物ごとあどなく初心に作りなしぬ、これ白人一種開闢の時節の風儀なりしが、近年は初心風をすてて、あたまから洒落たるしこなし、悲しいかなや此道末世になりて、白人といふ一種の名に負き黑人腓の風俗となれり」と見えてゐるやうに、もともと色を賣る女なれども、おぼこに仕立てたことから、しろと即ち素人を白人と書いて、之を「はくじん」と音讀した名稱であるが、公娼の稱にも用ひるやうになり、「好色敗毒散」に「嶋の内にては女郎を總稱して白人といひ、又茶立女ともいへり」と見えてゐる。近松作「心中天の網島」にも、曾根崎の色茶屋紀の國屋の小春といふ公娼を白人というてある。白人の勤銀に就いては、「好色大鑑」（元祿五年刊）第二、白人之由來の條に、「情代金壹分銀三兩乃至拾匁、しゆらいは外也」とある。詳しくは「近松語彙」を見よ。

箸折かゞみ（桂川）

「海錄」卷十八に、「はしをりかゞみの兄弟　たゞ二人の兄弟をはしをりかゞみの兄弟といふ事、古き詞と見えて、雜劇の書などによく有る也、是は古への箸は、今の鋏などのやうに曲げたる物にて、其もと一にして末二つに分れたるを、兄弟二人の親しきにとりて、箸をりかゞみの兄弟と云、かゞみとは屈折の義也、今は形の變じたるより人知らず、爪櫛の爪に似て、櫛形の穴の櫛に似たると同日の譚也」。「艶容女舞衣」長町の段に「はし折かゞみの兄弟なれば、妹が事頼むと言ひ死に死なれた」。

はしたなう（忠臣藏・一谷・歌祭文）

「はした」は半端で、物のそろはぬ義。「竹取物語」に「みこはたつもはした、ゐるもはしたにて」とあつて、きまりわるいの意である。「はしたなう」の「なう」は甚しの意の接尾語。「はしたなう」は「すげなう」「愛想なう」「無遠慮に」「輕々しい」の意にいふ。

八條流（彥山）

八條房繁を祖とする馬術の一派。「武術流祖錄」に、「八條房繁、姓は源氏、近江守と稱す、關東の人。小笠原流の馬術を學び、奧義を究め、中興以來其の右に出づる者なし、因つて之を宗とす。永正五年八月歿す」と見え、「武藝小傳」四に、「京都將軍家末、天下大亂、諸家各失二其家傳一、偶僅存者、小笠原家馬術而已、故諸士皆因レ之、大坪慶秀拔二諸士一而得二精妙一、八條江州悟二微妙緒一、各皆建二一家法一、方今之世、謂二馬藝一者、不レ外二大坪八條一、故以二大坪八條一爲二騎法中興祖一」とある。

服部（伊賀越）

服部煙草の略。「攝陽群談」卷十六に「服部相思草　島上郡服部村の田圃に作れり、莖細く葉厚く色虎斑の如くにて斑なり、香遠く薫じ香味

相共にからばしくして不レ飽、好で求レ之」。

八方行燈（はつぱうあんどん）（桂川）

多角形の笠を附け、うつばりなどに懸けて置く行燈。釣行燈。「物類稱呼」巻四・器用の部に「江戸にてハチケンといふ物あり、竹をもて丸く輪を作り、菅笠の如く、たてに骨を組みて紙にて張り、灯を點じてうつばりなどに懸くる物なり、加賀にてカサアンドン、越前にてツリアンドン、又ハツパウ、又ニツホンといふ、津國にてもハツポウ、武藏にてサントクともいふ」。

花色模樣の大紋（忠臣藏）

花色は縹色卽ち薄い藍色。

大紋は諸大夫の着用した禮服で、地は布、色は定まらず、家の紋を染め出し、裁縫は素襖に似て、異る點は紋の附けやうと、素襖の胸紐菊綴は革であるがこれは組緒である。近古以前にはなかつた服で、德川幕府になつて士分以上の等級を別ち、素襖の上に班したもので、大紋を着れば風折烏帽子を被る定めである。然るに「花色模樣の大紋に、胸に我慢の立烏帽子」といへるは、故實には違つてゐるであらう。

帚木のありとは見えて隔てられ（ははきぎ）（一谷）

「新古今集」巻十一・戀歌一の部の歌、「園原や伏屋に生ふる帚木のありとは見えて逢はぬ君かな」に據つたものである。

「帚木」は美濃・信濃兩國の界なる園原と云ふ處に生ふる樹である。遠方から見れば帚を立てたやうな形に見えるが、近寄つて見ればそれに似た樹もない。さるによつてありとは見えて逢はれぬものに喩へる。（蓋し帚木は樅の樹の秀でたのが帚草の如く見えるによつての稱であらう）。

反魂丹（忠臣藏）

霍亂などに效能ある賣藥の名である。「雍州府志」巻六・土産門藥品部に「反魂丹」一名麝香丸、足利家之良方、而畠山家亦傳レ之、一切積聚食傷霍亂等用レ之、則無レ不レ有レ驗、是又倭方之内特爲レ奇」。

半太夫（先代萩）

江戸半太夫のはじめた淨瑠璃節の一派。「聲曲類纂」巻三に、「江戸半太夫＝幼名半之丞といふ、後江戸半太夫と改む、始は説經祭文の上手なりしを、肥前太夫がすすむるにまかせ淨瑠璃にかへて、則肥前太夫に學び一家をなせり、甚左衞門町に住して境町に操芝居興行す、後（正德の頃）薙髮して坂本梁雲といふ、貞享元祿の頃より世上にもてはやされ、今に江戸節又半太夫節とて廢る事なし、淨雲以後江戸にての名人なりしとかや」とある。

久方の（ひさかた）（忠臣藏）

「ひさかた」は「ひさごがた」の義で、太陽の形を喩へた語であらう。上代の人は物に喩へていふことが多いから、これもそれであらう。（一説に日差す方の義ともいふ）。よつて「ひさかたの」が日の枕詞となり、轉じて天・月・雨・雲などの天象の物に冠らせる。

ここの文は「久方の、空も彌生の云々」とあるから、「久方の」は「空」に冠らせたのである。

一枝伐らば指一本剪るべし（ひとえだきらば）（一谷）

「南畝莠言」巻上に「下學集云、江南所無、梅一名也。但日本俗所レ呼歟、予謂、南宋范曄詩云、折レ梅逢二驛使一、寄二與隴頭人一、江南無レ所レ有、聊贈二一枝春一、蓋取二此第三句意一、而云二江南所無一歟、按ずるに須磨寺に若木の櫻制札とて紙に書しものあり、其文に云、須磨寺櫻、此華江南所無也、一枝於二折盜之輩一者、任二天永紅葉之例一、伐二一枝一者可レ剪二一指一、壽永三年二月日とあり、われ此制札の文を疑ふ事久し、江南所無は梅の名なるを櫻とせし事いかがと思ひしが、文化元年七月の頃西遊して此寺に入て、まのあたり此書を見しに、須磨寺の櫻とかける櫻の字紙の破れありて定かに見えわかず云々」とある。(序云、「南宋范曄詩云」とあれど、これは范曄の詩ではなくて、陸凱の詩であることが「説苑」奉使篇に見えてゐる」)。

須磨寺櫻の制札の文意は、此華は支那江南地方に無い所のものである。一枝でも折り盜む者には、鳥羽天皇の天永年間紅葉を折つた者に處罰された例に倣つて、一枝を伐れば一指を剪るべしといふのである。この制札は、俗に辨慶の筆蹟といひ傳へ、現今も須磨寺に保存されてある。

非人（忠臣藏・伊賀越・朝顏話）

人中に齒せざる義か。「倭訓栞」には「ひにん　俗に乞食をいふ、貧人の義也、非人の義にあらず」と見え、また一説には、「江談抄」に「隆家卿問二齊信卿一云、放免著二用綾羅錦繡服一、爲二檢非違使供人一何故乎、匡房答云、非人之故不レ憚二禁忌一也云々」とあるより起つたといふ)。非人はまた小屋の者ともいひ、乞丐の徒であつて、賤民の一種。江戸時代では、夜廻り路傍の興行などをなして生活し、公役としては捕手の配下に屬して罪人逮捕に助力し、牢番罪人引廻しの護衛などを勤め、死刑執行の時には其の雜役・跡片付等の事に從つた。職業のない者は乞食をした。男は常人の如く結髪することができず、女は藁又は黑元結で結髪し、布・木綿の外は用ひるを許されないで、常人と交際されなかつた。明治四年八月非人の稱廢されて平民となる。

表具（千本櫻・妹背山）

表具屋師をいふ。「聲曲類纂」巻一下に「大坂　表具又四郎―文彌が門人といふ井上播磨が淨瑠璃を多く語れり、貞享元祿の頃なるべし、世に表具屋節・又四郎節ともいへり。節付は上品なる風なりといへり。……又四郎が淨瑠璃外題殘れるは、木曾義仲、難波八景、草紙洗小町、忠臣兵揃」。

補陀落や　瀧津瀬（阿波鳴門）

順禮歌第一番の御詠歌である。「順禮歌」を見よ。

補陀落は普陀落などとも音寫し、梵語ポータラカ Potalaka といひ、小白花と譯し、觀音菩薩示現の海島であつて、實在の地でなく信仰上の地名である。「華嚴經」に「有レ山名二補怛洛迦一、彼有二菩薩一名二觀自在一、……海上有レ山多二賢聖一、衆寶所成、極清淨華果樹林皆遍滿、衆流池沼悉具足、勇猛丈夫觀自在、爲レ利二衆生一、住二此山一」と見え、「西域記」に「梵語寶陀洛伽山、此言二孤絕處一、觀自在菩薩所レ居之山、此在二南海中一」とある。以て紀州熊野三山の靈場にあてていうた。三熊野の三は接頭語。

一首の意は、觀音菩薩の示現される海島補陀落山の岸を打つ波といふのは、卽ち熊野那智青岸渡寺の御山にたぎる瀨をなして響きわたる瀧のことであるといふのであつて、那智山の靈場たるを瀧の音によつて表はしたものである。

降つたる雪……世帶じむといへり（忠臣藏）

「瑠璃天狗」卷三に、「この所の二くさり三くさりの文句は鉢木の謠をわざといひかへて、雪は鵝毛に似て飛で散亂し、人は鶴氅を被て立て徘徊すといふ詩をかやうにとりなしたるものなり、此詩は白氏文集に出て、鵝毛とは鵝といふ白き鳥の毛のこと、散亂は散り亂れたる事なり、鶴氅は鶴の毛にて織たる毛おりの衣の事、徘徊は立もとをるとよみて立どまる事也」。謠曲「鉢の木」に、「あゝ降つたる雪かな、如何に世にある人の面白う候らん、それ雪は鵝毛に似て飛んで散亂し、人は鶴氅を着て立つて徘徊すと云へり」。

浮木に値へる盲龜（忠臣藏）

値ひ難く得難き機會の喩にいふ。大海に龜がゐて、腹に一眼がある。浮游してゐる中に孔のある大木に値うて之に取付く。偶風が吹いてこの大木を覆す。仰向になると同時に、腹の一眼がたまに浮木の孔に當つて日月の光を見るといふ。「法華經」莊嚴王品に、「佛難レ得レ値、如二優曇波羅華一、又如三一眼之龜値二浮木孔一」。盲龜といへるは、腹に眼があつて日月の光が見えぬから云うたもので、實は一眼ある龜である。

文月七日例年の水を新井に繰返す（妹背山）

黑川道祐撰「日次紀事」七月初七日の條に「今日村民每家浚二井水一、去二井底淤泥一、汲二他家井水一合レ之、是俗謂二男水一、然後掩レ蓋供レ酒而祭レ之、如レ此則水不レ濁云、洛下家亦然」。玉田永敎撰「年中故事」卷十に「（七月）七日井浚也、秋は金也、金の數は七つ、金は水を生ず、五行相生也」。

古鄕を……近くなるらむ（阿波鳴門）

順禮歌第二番の御詠歌である。「順禮歌」を見よ。一首の意は、我が生れ里を遠く離れて遙々と此處に來て紀三井寺にお詣りする。三井寺からは花の京都も近くにあることであらうとの意。「紀三井寺」に「來て見る」をいひかけ、其の花のやうな美しい風景と常樂我淨の都（極樂世界）と京都とをいひかけて「花の都」とつづけたのである。

反閇（千本櫻）

貴人が神拜又は外出の時に異變なきやうに、邪氣を除く爲に陰陽家が行つた咒法である。陰陽家先づ咒文を唱へて千鳥足を踏めば、貴人もその後につきて同じ樣に踏むのであつて、惡しき方を踏み破るといふ。「小笠原長秀記」（一云三議一統）に「人の起居動靜に五字の閇配とてあるべく候、……五字といふは天武博亡烈なり云々」と見え、「海鏃」卷十に「輪池翁の考に、甲州流の軍法に七足の反閇と云ことあり」と見えてゐる。「義經千本櫻」のここの文に「天武の軍有りし時乙女下つて舞奏づ、これ反閇の始めなり」とあるは、反閇の咒文「天武博亡烈」の字に據り、又「本朝月令」に「五節舞者淨御原天皇（天武天皇）之所レ製也、相傳天皇幸二吉野宮一、日暮彈レ琴有レ興、俄爾之間、前岫之下、雲氣忽起、疑如二高唐神女一、髣髴應レ曲而舞、獨人二天矚一、他人無レ見、

擧レ袖五變、故謂二五節一云云」と見え、この五節舞姬の由來とを混同したのである。

ほたえる （忠臣藏）

「ほたゆ」「ほたゆる」ともいふ。あまえる。つけあがる。ざれたはむれる。「俗調集」に「ほたゆ　俗語なり、ほたえるともいへり、える反ゆなり、ざれたはむるを上方にほたえるといふ」と見えてゐる。按ずるに、「新撰字鏡」に「嘐　誇語也、保太支天云」とあると同類の語で、誇りかにいふ意より轉じて、つけあがる、あまえる意となり、更にふざける意になつたのであらう。

螢を聚め雪を積む （忠臣藏）

「晉書」車胤傳に、「胤字武子、幼恭勤博覽、貧不二常得一レ油、夏月以二練囊一盛二數十螢火一、照レ書讀レ之以レ夜繼レ日、後官至二尙書郞一」。「晉書」孫康映雪の注に、「孫氏世錄曰、康家貧無レ油、常映レ雪讀レ書、少小淸介、交遊不レ雜、後至二御史大夫一」。

法性の兜 （本朝）

第一段に「此兜は我等（武田勝賴等）が氏神諏訪明神より夢の中に賜はつて、明神の使はしめ八百八狐是を守護す、神通力加はつて是を著する度每に合戰勝利を得ざる事なし」とある。蓋し諏訪地方では、古來狐は諏訪明神のつかはしめの獸といひ傳へ、又武田信玄法性の兜といふは白毛を以て裝はれ、信玄が諏訪明神の社頭僧となつて、兜の前立に「諏訪正一位南宮大明神」と記してゐたので、それ等に據つてかくいうたのである。

ぼん （矢口渡）

「博奕仕方風聞書」（未刊隨筆百種中に收む）に「長半博奕仕方　是はぼん莚と唱、莚を敷、手合之者何人にても廻りに並び、賽弐ツ又は一つ坪皿に入れ伏置、銘々長半と分け、當分に金錢張置、坪明ケ勝負いたし申候」。

本阿彌 （忠臣藏）

始祖諱は長春、日靜上人に歸依し、薙髮して妙本阿彌佛とい。ふ後子孫その上下の二字を省いて本阿彌氏を冒した。妙本は足利尊氏に仕へて刀劍奉行となり、刀劍の鑒識に長ず。文和二年壽百餘歲で歿し、子孫に本妙・妙大・妙秀・妙壽・本光等があり、慶長頃の光悅は有名である。

松浦佐用姬の石になり （妹背山）

「萬葉集」卷五に「大伴佐提比古郞子特被二朝命一、奉二使藩國一、艤レ棹言歸、稍赴二蒼波一、妾也松浦佐用嬪面嗟二此別易一、歎二彼會難一、卽登二高山之嶺一、遙望二離去之船一、悵然斷レ肝、黯然鎖レ魂、遂脫二領巾一麾レ之、傍者莫レ不レ流レ涕、因號二此山一曰二領巾麾之嶺一也」とある。「幽明錄」に「武昌北山上有二望夫石一、狀若二人立一、古傳云、昔有二貞婦一、其夫從レ役遠赴二國難一、攜二弱子一餞送二此山一、立望レ夫而化爲二立石一、因以爲レ名焉」とある。この二つを混同して、松浦佐用姬が石となるといふに至つたものであらう。

「曾我物語」卷四に、松浦佐用姬が夫を慕うて石となつたことが見え、近松作「日本西王母」にも、「かの松浦佐用姬は夫を焦れて石となる」とある。

麥秋（忠臣藏）

舊暦四月をいふ。「禮記」月令篇に「是月（孟夏）也、聚ニ畜百藥一、靡草死麥秋至」とあつて、註に「秋は百穀成熟の期、これ時に於ては夏なりと雖も、麥に於ては卽ち秋なり、故に麥秋といふ」。「下學集」時節門に「麥秋四月」。

武藏鐙（忠臣藏）

「伊勢物語」の歌に、「武藏鐙さすがにかけて賴むには、問はぬもつらし問ふもうるさし」「問へばいふ問はねば恨む武藏鐙、かゝる折にや人は死ぬらむ」とある。

めんよう（忠臣藏・一谷・本朝・艶容）

「めいよ」（名譽）の訛である。「ほまれ」の義より轉じて、奇妙、かはつたこと、奇怪、不思議の意にいふ。近松作「大經師昔暦」に「たつた今但馬の湯入を乘せて通る駕籠舁がめいよな事を言ひました」とあつて、「めいよ」となつてゐる。西鶴撰「諸國咄」卷一、大晦日に合はぬ算用の條に「ただ今までたしか拾兩見えしにめいようの事ぞかし」とあつて、「めいよう」となつてゐる。「伊賀越道中雙六」伏見の段に、「何と晝の洗ひ藥でさつぱりとよからうがの、イヤさしてかはつた事も、ハテめんような、アノ藥でよい筈ぢやが」と見え、「ひらかな盛衰記」第三に、「觀音樣の御利生かと、打寄つては是沙汰めんよな事やと噂ぬれば」とある。この「めんよ」も「めいよ」（名譽）の訛である。「めんよう」「めんよ」「めいよう」を面夭又は面妖などと書くは當字である。

盲龜の浮木（朝顏話）

「涅槃經」卷二に「生レ世爲レ人難、猶如ニ大海中盲龜遇ニ浮孔一」。前出の「浮木に値へる盲龜」を見よ。

灸饗（歌祭文）

「松屋筆記」卷二に「灸治するとき灸より血出で迸る事あり、これ人神のめぐりにあたれる也、如何なる藥を用ゐても不レ治必ず死す、但干飯と黑豆を煎りたるを嚼みて傳くれば忽ち癒ゆ、實に奇方也、古來より灸饗に豆米煎を用ゆるはこの用意なるべし」。

矢口渡（矢口渡）

東京市蒲田區古市町の所にある、多摩川の下流六郷川の一渡場である。往時江戸から鎌倉に赴く渡津であつた。延文三年十月十日新田義興主從が足利氏の部將竹澤右京亮の詭計にかゝつて橫死した所と傳へ、後に其の靈を祀つて新田神社といひ、今府社に列す。その南三町餘の所に十騎社があつて、義興と共に橫死した從者十人の靈が祀つてある。（一說に、南多摩郡稻城村矢野口も義興橫死の地と傳へられてゐる。矢野口は府中から鎌倉に赴く渡津に當る。）

八つ橋（朝顏話）

箏曲八橋流の祖、八橋檢校（名は城談）は陸奥岩代の人。少時江戸に出で、三絃を學んで勾當となり、又箏をもと筑後善導寺の僧であつた法水に學び、後肥前に下つて玄恕の弟子となつて、筑紫箏曲の蘊奧を究め、伊勢・源氏などの麗はしい詞章を採つて新曲を作り、表裏の次第を立て稱して組といふ。今存する所の十三曲これである。後に京都に上り、六角西に住して箏曲を敎授した。以後箏曲數派に分れたが、皆いづれも八橋を受けついだものである。城談は貞享二年六月十二日に歿

し、黒谷光明寺に葬つた。年七十二。

山崎の渡場（忠臣藏）

「都名所圖會」卷之四に「山崎の橋は桓武帝卽位三年に是を造る、中頃より淀の橋をかけて絕えてなし、今は舟渡しありて狐川の渡しといふ、いにしへの人家を南にうつして今の橋本の宿是也」。

友禪（歌祭文）

友禪染は延寶末に端を發し、貞享頃より漸次流行するに至つた。友禪染模樣の特長は、山水花卉などを巧に模樣化して濃艷優雅の趣味に富み、形態の種々變つた輪郭中に草花などを配して色彩絢爛、圖樣よく消化されて技巧の妙味を發揮してゐる。

友禪染の開祖宮崎友禪は承應三年能登深江鄕に生れ、加州金澤に出で狩野守景に從つて繪事を修め、京都に上つて扇面畫を描き、更に衣裳の地の染色の上へ細密な彩畫を描くを業とし、晚年金澤に歸つて加賀染に從事したといふのが普通の說であるが、笹川臨風博士は京都に生れて京都で歿したといふ說である。

夢野の鹿（千本櫻・忠臣藏）

この話は「日本書紀」卷十一、仁德天皇三十八年秋七月の條に、「俗曰、昔有二一人一、往二菟餓一宿二于野中一、時二鹿臥レ傍、將レ及二鷄鳴一、牡鹿謂二牝鹿一曰、吾今夜夢之、白霜多降之覆二吾身一、是何祥焉、牝鹿答曰、汝之出行、必爲レ人見レ射而死、卽以二白鹽一塗二其身一、如二霜素一之應也、時宿人心裏異之、未レ及二昧爽一、有二獵人一以射二牡鹿一而殺、是以時人諺曰、鳴牡鹿矣隨相夢也」とあるより出た。

吉田（妹背山）

ここの文に「神職ならば何故吉田へ參つて受領を受けぬ」とあるは、吉田家は神道の長であつて、神職の者に對しては、この家から令を下し、又官位等を執奏したものであるから、かくいうた。「雍州府志」神社門上、齋場所の條に「吉田卜部家主二裁萬事一、凡二十二社之外所レ在二日本國一之大社小社神職皆自二此家一下レ令、幷官位等執二奏之一、中臣卜部元同氏、而天兒屋根命苗裔也、……依レ之吉田家爲二神道長一」。

吉田の兼好（忠臣藏）

卜部兼顯の第三子。後宇多上皇・後二條天皇・後醍醐天皇に仕へ、六位の藏人・左兵衞佐・北面の瀧口に歷任し、和漢の學に通じ、神道・佛道を修め、有職故實に精しかつた。正平五年二月十五日伊賀國國見山の麓田井庄の庵に歿す。年六十八。「徒然草」を著はし、又彼の詠は「續千載」「續後拾遺」「風雅」「新千載」「新拾遺」「新後拾遺」「新續古今」等の勅撰歌集に入り、別に「兼好法師集」もある。俗に兼好が高師直に賴まれて、鹽冶判官高貞の室（弘徽殿西の臺）に與へる艶書の代筆をしたといふ。これは「太平記」卷二十一に見えてゐることであるが、實際兼好はさやうな事をしたのではなく、「太平記」作者が小說的に書いたのが、後世の戲曲小說などに採用されて宣傳された。

豫讓（忠臣藏）

「晉の豫讓」を見よ。

蘭奢待（忠臣藏）

聖武天皇の御宇に唐朝から奉獻し、奈良の東大寺正倉院勅封御庫に傳

來せる名香で、御物となつて現存し本名を黃熟香といふ。末細く下太く胴部の一方は空虛である。長さ五尺一寸・重さ三貫五百目あるといふ。蘭奢待は支那にて蘭麝と記し、蘭と麝香の如き芳香ある意。これを蘭奢待と記すは東大寺の名を寓したもので、卽ち蘭の中に東の字、奢の上に大の字、待の右に寺の字を含ましめたものであるといふ。

冷泉（れいぜい）（妹背山・彥山）

淨瑠璃節の一なる冷泉節。「世事百談」に「淨瑠璃の節（ふし）に冷泉また三重などいふ名目くさぐさあり、そは皆よりどころある事にて、三河國矢矧の長が娘淨瑠璃姬に、牛若丸の戀せし事を十二段に作りし物語に、節附（ふしづけ）をして語りけるに、かの物語の忍びの段に、柴のあみ戶を押開きといふ所の、あみといふ詞の節をアミといひ、更科・冷泉諸共にといへる侍女の立ち出づるところの、冷泉といふ文句の節（ふし）を、冷泉といふ節（ふし）の名となれり」。

れこ（忠臣藏）

「これ」を「れこ」といひ、「それ」を「れそ」と、隱語的に倒さ詞を用ひる。蓋し或物について其の名を明かに言はないでも、「れこ」「れそ」といへば話相手の者に其の意通じるときに用ひる粹言葉である。ここにいへる「れこ」は手眞似で金高をいうたのである。

六齋念佛（妹背山）

「聖德太子傳曆」に「月八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、三十日、是爲二六齋一、此日梵天帝釋降見二國政一、故禁二殺生一、是仁之基也」とある。六齋日に空也念佛をすることを六齋念佛といふ。

六尺（彥山）

駕籠舁夫をいふ。駕籠舁夫は矮軀の者ではいけないで、大男なのがよい。故に古來大名などは駕籠を舁く者に、骨骼逞しく身長六尺もあるやうな大男を選んだことから、駕籠舁夫を六尺と稱するに至つたのであらう。「西鶴文反古」卷二、緣付前の娘自慢の條に、「一番男の六尺揃へて絹物着せたる腰元に祝義の目錄云々」とある。

別れの櫛（妹背山）

投げ櫛をいふ。「神代紀」上に「伊弉諾尊不レ聽、陰取二湯津爪櫛一、牽二折其雄柱一、以爲二秉炬一而見レ之者則膿沸蟲流、今世人夜忌二一片之火一、又夜忌二擲櫛一、此其緣也」とある。伊弉諾尊が伊弉册尊を慕うて黃泉（よみ）に入つて逢はれた時、伊弉册尊の制止されたのを聽かれないで、湯津爪櫛の雄柱を折り火を點じて見、驚き火を投付けて逃げ歸られ、これより黃泉に通ふ道が絕えたといふ故事によつて、投櫛を別れの櫛とて忌むことになつた。

和中散（忠臣藏）

腹痛などに效能ある賣藥の名である。元祖を津田宗左衞門藤原是齋といふ。後に代代織田彥十郎と稱した。藥は元和頃から賣始め、次第に販路ひろまり諸國に及んだ。本家は近江國草津と石部との間にある梅の木（本名六地藏村）の是齋というた。

昭和十年十二月八日印刷
昭和十年十二月十六日發行

評釋江戸文學叢書
傑作浄瑠璃集下

著者　東京市豐島區駒込五丁目九百七十三番地　樋口慶千代

發行者　東京市小石川區音羽町三丁目十九番地　野間清治

印刷者　東京市本所區廐橋一丁目二十七番地ノ二　井上源之丞

印刷所　東京市本所區廐橋一丁目二十七番地ノ二　凸版印刷株式會社本所分工場

發行所　東京市小石川區音羽町三丁目十九番地　大日本雄辯會講談社
（振替東京三九三〇番）
電話牛込(34)代表　五三〇〇番　六一〇〇番　六二〇五番

（志村製本）



